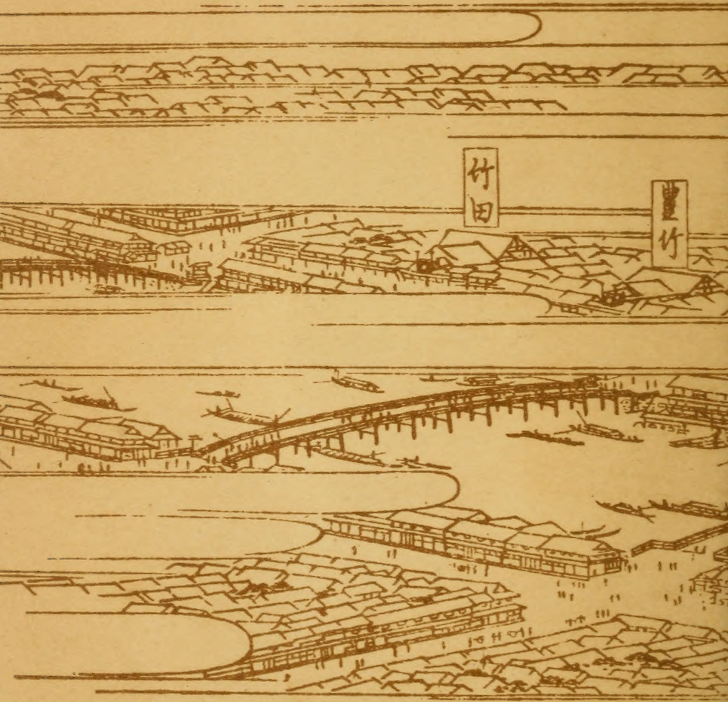


生写操浄るり
芝居を見るく
ちりさゆゑ
ひとふみえ
なさいづ
此しぞの
色川る
佛さうふ
あをうゑ
しれまうき

鯛屋
貞柳



日本名著全集
江戸文藝之部第六巻

淨瑠璃名作集 上

この巻の装幀——

背及表紙意匠　黒木勘藏氏案（番附、紋章覆刻）

見返し前附、後附　黒木勘藏氏案（原本覆刻）

背　文　字　渡邊新三郎氏筆

扉　文　字　近藤雪竹氏筆

箱に用ひた圖案　小杉未醒氏畫

浄瑠璃名作集 上巻 目録

（目錄をはり）

解題

黒木勘藏

江戸文藝壇に於て一大分野を劃する浄瑠璃諸流派中、最も國民的であつて、今尙劇界樂壇に大なる勢力を有し、且その內容の豐富にして文藝的價値に富むものは義太夫浄瑠璃であると思ふ。よつて今その正本中より代表的名作を選擇して、これを浄瑠璃名作集上下二卷として、作品の年代順に收める事とした。

尤も浄瑠璃作者の氏神と稱へられた近松門左衞門の優秀なる作品は、既に近松名作集上下二卷としてこれを刊行したので、自ら省かれた事は言ふ迄もない。又井原西鶴の作といはれる「暦」は宇治加賀掾の正本であるが、極めて珍とすべきのみならず、義太夫劇史上にも關係を有するを以て特にこれを加へる事とした。

さて本卷に收めた二十二篇はこれを年代的に見れば、元祖竹本義太夫が初めて一流を樹てて道頓堀に竹本座の櫓を擧げた時代である貞享初年から元祿の盛時を經て竹本・豐竹兩座の對立となつて、いよ〳〵義太夫劇の全盛期に達した元文年間に迄亙り、義太夫劇發展史上最も大切なる期間の代表作を含む事となつてゐる。而して又これを作者の方面から見れば、竹本座に於ては近松と同時代の錦文流の作「本海道虎石(とらがいし)」を始めとして、近松の後繼者たる文耕堂松田和吉・竹田出雲より長谷川千四・三好松洛に及び、豐竹座の作者としては近松に對峙した紀海音及び並木宗輔（千柳）の作の一部を收めた。これによつて元祿享保期の主要なる浄瑠璃作者はほゞこれを網羅した事となるが、殊に紀海音に關しては、從來世に流布して居る作品以外に、

特に未だ覆刻されなかつた稀覯書中の名作に屬するものと思ふ「富仁親王嵯峨錦」「愛護若塒箱」「傾城思升屋」等を加へて、彼の隱れたる半面を顯揚すると共に、聊か新研究資料の提供にもと努力した次第である。その他出雲以下の諸作が淨瑠璃戯曲の名篇傑作として今尙人形劇に歌舞伎劇に繰返して演ぜられて居る眞の代表作である事は更めて言ふ迄もないであらう。以下簡單に各篇について解題を加へる。

暦

貞享二年正月刊行。宇治加賀掾正本。

作者については、西澤一風の「操年代記」には西鶴であると記され、又藤井紫影博士もこれに基いて西鶴であると言つて居られる。(江戸文學研究。女性第七卷第三號)この他に西鶴の淨瑠璃が絶無である今日、その可否は比較研究のしやうもない事で、結局これに從つて置くより外は無いと思ふ。

竹本義太夫がその旗擧げに「世繼曾我」を語つて好評を博した翌年、京都の宇治加賀掾が下阪して興行したのが本曲であつて、これに就いて「操年代記」は次のやうに言つて居る。

其明寅の年、京宇治加賀掾難波にくだり、今の京四郎芝居にて西鶴作の淨瑠璃暦といふをかたられければ、義太夫方には賢女手習幷新暦として兩家はりあひ、つひに義太夫淨瑠璃よく、嘉太夫(加賀掾)がた止みぬ。

併しこゝに寅の年、即ち貞享三年とあるのは誤りであらう。何となればこの頃は正本の出板はその作の上演と殆んど時を同じうしたものであるに、「暦」も「賢女手習幷新暦」(近松名作集上卷所收)も共に貞享二年正

月の刊行であるから、興行も亦この時と見る方が至當であるやうに思はれる。

抑も加賀掾が何故態々下阪したかといふに、その理由は明かには傳へられて居ないが、以前自分の芝居でワキを語つた事もあつた天王寺村の百姓の子五郎兵衛が、人もあらうに自分と水魚の間柄であつた興行界の策士竹屋庄兵衛と結託して、遂に大阪で櫓をあげ、しかも當時賣出しの作者近松が自分のために執筆した「世繼曾我」「藍染川」「以呂波物語」等を勝手に次々と語つて好評を博したのを憤つて一泡吹かせてやらうと思つて、特に近松よりは文壇に於て先輩であつた西鶴の筆に成る作を携へて乗込んだものではなからうかと推測する。然るに作者も太夫も共に後輩であるとされてゐた義太夫の方が勝つたのは、地の利を占めて居た點もあつたかも知れぬが、「暦」の代りに加賀掾が近松の作「凱陣八島」を出して形勢を挽回した事實によつて考へれば、淨瑠璃作者としては、西鶴は近松の敵でなかつた事を暴露した皮肉な現象であつたとも言へる。

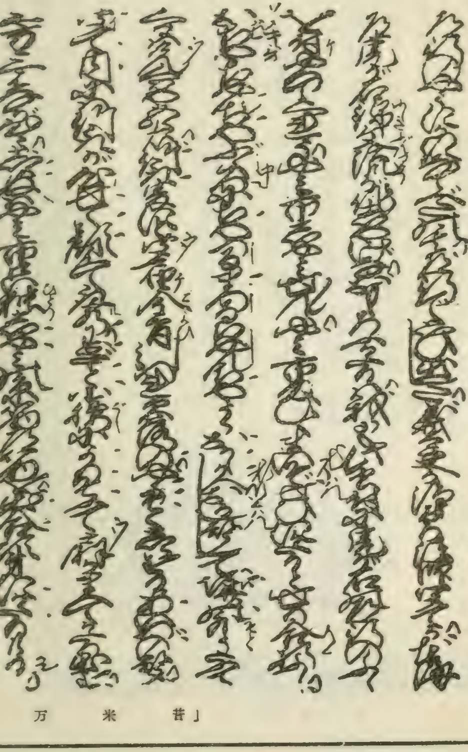


井原西鶴肖像

尤も今こゝで兩作の優劣について細説する遑はない。詳しくは兩原作について、實際に御比較あらん事を望むが、要するに當代の操芝居として實演される戯曲といふ點から見れば、場面の變化と人物の働きのある點に於て、又その文章の朗誦に適する上に、潤ひと温か味とに富む點に於て「賢女手習幷新暦」の方が勝つて居るやうに思はれる。とはいへ「暦」も亦浄瑠璃史上頗る注目すべき作である事は言ふ迄もない。

本曲については藤井紫影博士が大正十四年三月の女性誌上に詳しい紹介をされて居るので、廣く世に知られて居る事と思ふが、その全文が忠實に飜刻されたのはこれが初めてであるかと思ふ。校訂用原本は八行四十二丁本である。

作者西鶴の傳記はこれを西鶴名作集に讓る事とする。

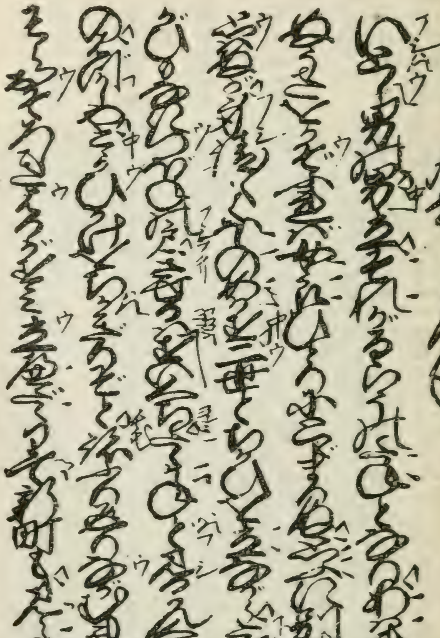


昔」　米　万

本海道虎石

元祿十二年五月六日初日竹本座興行。

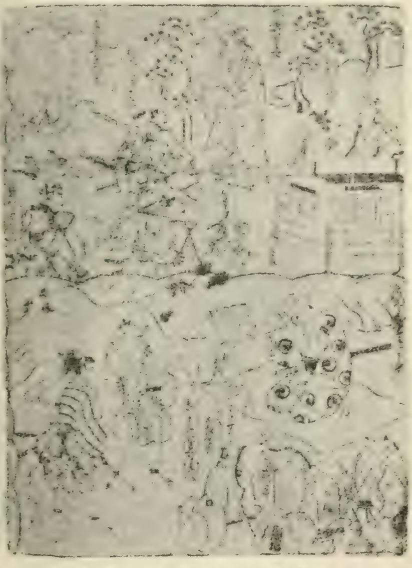
正本本文の卷頭にはたゞ「虎石」とのみあるが、表紙の題簽には「本海道虎石」と題してある。正本には作者名はないが、齋藤月岑の「聲曲類纂」には錦文流作とある。のみならず本曲の「大磯の虎道行」をもぢつて「居ながら道行」の一章とした程の特殊の關係を有する享保十年正月豐竹座興行の「昔米万石通」（西澤一風・田中千柳作）の中にも「本海道虎石錦文流が作ぢやげな」とあるのによつて見ても、作者錦文流と斷定して差支なからうと思ふ。



曾我物の傍系に屬する技巧澤山の作であつて、曾我兄弟と虎・少將との情事に平家の侍伊賀平内左衛門の

遺女豊姫の敵討を綯ひ交ぜた作である。豊姫は父の仇三浦與一を討たうとして相傳の臣栗矢三太と共に東下して自らは化粧坂に身を賣つて少將と稱へ曾我五郎と馴染の仲となり、三太は曾我十郎の家僕となつて團三郎と名のり、互に氣脈を通じて機を狙つて居たが、十郎の戀敵である三浦與一が虎を身請する事となつたので、一同牒し合せて虎が身請されて行く途上に於て討つ計畫を立てたが、闇夜の爲に打洩らしたのを、のち朝比奈三郎とその母巴との後援の下に少將は首尾よく復讐の素懷をとげるといふのが本筋で、第一段に箱王祐經對面の場を描き、これを動機として第二段に於て五郎の水垢離より荒事の場を設け、更にこゝに伏線を布いて、第五段に於てそのいはれを明かす虎が石の叙述の趣向をこらして、こゝに「本海道虎石」と題したもので、隨分荒唐無稽の作である。

猶各段について見るに、第一段の賴朝箱根より歸還の船中に於て船頭が船の起原等を座興に謡ふ條なる「還御を誘ふ……」より「龍頭鷁舟とこそ謡ひけれ」迄の詞章は、一中節によつて作曲されて「泰平舟盡し」と題して同流の語り物として今日迄傳へら

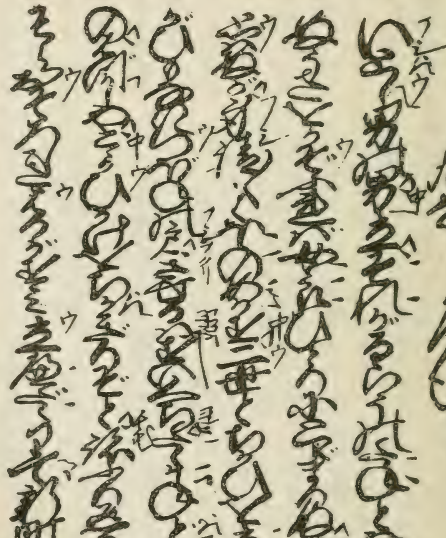


「曾我五人兄弟」より

本海道虎石

元祿十二年五月六日初日竹本座興行。

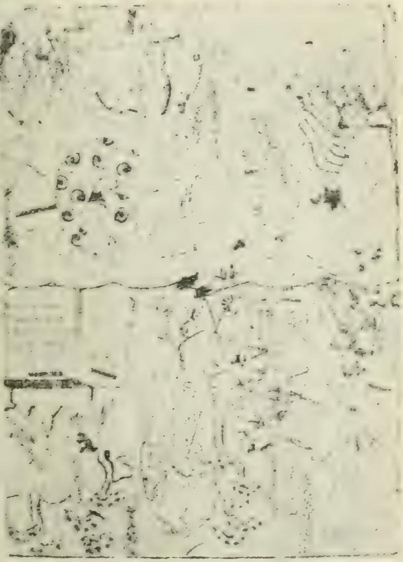
正本本文の巻頭にはたゞ「虎石」とのみあるが、表紙の題簽には「本海道虎石」と題してある。正本には作者名はないが、齋藤月岑の「聲曲類纂」には錦文流作とある。のみならず本曲の「大磯の虎道行」をもぢつて「居ながら道行」の一章とした程の特殊の關係を有する享保十年正月豐竹座興行の「昔米万石通」（西澤一風・田中千柳作）の中にも「本海道虎石錦文流が作ぢやげな」とあるのによつて見ても、作者錦文流と斷定して差支なからうと思ふ。


石「通　よ　り

曾我物の傍系に屬する技巧澤山の作であつて、曾我兄弟と虎・少將との情事に平家の侍伊賀平内左衞門の

遺女豊姫の敵討を綯ひ交ぜた作である。豊姫は父の仇三浦與一を討たうとして相傳の臣栗矢三太と共に東下して自らは化粧坂に身を賣つて少將と稱へ曾我五郎と馴染の仲となり、三太は曾我十郎の家僕となつて團三郎と名のり、互に氣脈を通じて機を狙つて居たが、十郎の戀敵である三浦與一が虎を身請する事となつたので、一同牒し合せて虎が身請されて行く途上に於て討つ計畫を立てたが、闇夜の爲に打洩らしたのを、のち朝比奈三郎とその母巴との後援の下に少將は首尾よく復讐の素懐をとげるといふのが本筋で、第一段に箱王祐經對面の場を描き、これを動機として第二段に於て五郎の水垢離より荒事の場を設け、更にこゝに伏線を布いて、第五段に於てそのいはれを明かす虎が石の敍述の趣向をこらして、こゝに「本海道虎石」と題したもので、隨分荒唐無稽の作である。

猶各段について見るに、第一段の賴朝箱根より歸還の船中に於て船頭が船の起原等を座興に謠ふ條なる「還御を謠ふ……」より「龍頭鷁舟とこそ謠ひけれ」迄の詞章は、一中節によつて作曲されて「泰平舟盡し」と題して同流の語り物として今日迄傳へら

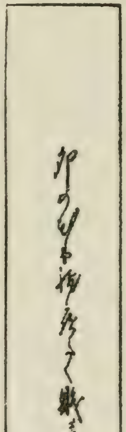


「曾我五人兄弟」より

れて居る。又第一段の切は謡曲「船辨慶」の飜案であり、第二段の切に於て五郎が酒匂川で水垢離行法の結果不動明王から怪力を授かり人馬共に取つて投げる條は、元祿十年五月江戸の中村座興行の「兵根元曾我」(初代市川團十郎作)の第二番目なる五郎荒事の條に類する趣向である。第三段で十郎が案山子に化けて三浦と虎との出會の樣子を窺ふ趣向は近松の「曾我五人兄弟」(元祿十四年十一月)の第四段目で五郎が母の目を忍ぶ爲に案山子となる場面に轉用されて居り、第四段陸上の禪師庵室の場の叙事は「方丈記」の日野山閑居から脱化したものであらう。

「棠大門屋敷」(錦文流作、寶永二年刊)に

虎が石の淨瑠璃に振子手摺といふ事を仕出し、人形のつかひやうを見せ、素語といふ事をはじめたり。あやつり芝居に舞臺を付くる事此時をはじめとす。



錦文流筆蹟

とあるのによれば、本曲興行の際舞臺の技巧にも新工夫をこらした事がわかる。文流は手づまからくり人形を以て知られた伊藤出羽掾座の作者をも兼ねて居たのによつて考へれば、舞臺技巧に於ても勝れて居つて、この際新工夫をこらしたものかも知れない。

●校訂用原本は八行五十八丁本。これも今度初めて覆刻されたものである。

●作者錦文流　大阪の人、西鶴の門人で俳名を錦頂子といふ。又浮世草子の作者としても知られ、「風流今樂

好」(寶永二)「棠大門屋敷」(同上)「熊谷女編笠」(寶永三)「當世乙女織」(同上)「好色手柄咄」(寶永五)等の著作がある。淨瑠璃作者としては櫻塚西吟・西澤一風と共に淨瑠璃文者三傑と呼ばれた。その作に係るものを左に列擧する。

本海道虎石 (元祿十二年五月 竹本座興行)
國仙野手柄日記 (元祿十三年末? 伊藤出羽掾座)
傾城八花形 (元祿十五年正月 竹本座)
高名大福帳 (寶永元年 竹本座)
男色賀茂侍 (寶永三年? 豐竹座)
仁德天皇萬年車 (正德三年七月 豐竹座)
西行法師墨染櫻 (享保二年五月 豐竹座)
熊野權現烏午王 (享保四年 豐竹喜代太夫座)

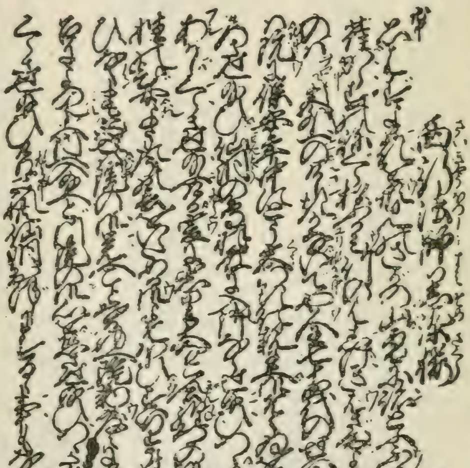
寶永初年頃の刊行と思はれる「竹本祕傳丸」に「今は出羽の作者」として錦文流を出してあるのによれば、上記の外にもまだ作があつたものであらう。詳しい事の不明なのは殘念である。

心中涙の玉井

この淨瑠璃は豐竹座の創立者豐竹若太夫(後の豐竹越前少掾)が初めて名乘りをあげて豐竹座を起した時に興行された淨瑠璃である。明和板の「外題年鑑」によれば、元祿十五年五月「末廣十二段」の切として上演

した事になつてゐる。併しこれは誤りである。今その理由を簡單に次に述べよう。

抑も豐竹若太夫は元祖竹本義太夫の門弟で、元祿八年十八歳で竹本采女と名のつて竹本座初舞臺、元祿十五年義太夫一座旅興行の跡芝居で「傾城懐子（けいせいふところご）」といふ淨瑠璃を語り、その後道具屋吉左衛門（道具屋節を開いた人）等と素淨瑠璃の出語をやつたが不成功のため地方巡業を試み、その歸りに堺で興行中、土地の糸屋の娘と手代との情死事件があつたので、これ幸ひと一夜漬の一段淨瑠璃に仕組んで興行して大成功であつた。そこで歸阪して長門九郎兵衛と相座本で道頓堀の女舞の芝居に櫓をあげ、豐竹若太夫と改名して「さかひみやげ」と外題に角（つの）をつけて「心中涙の玉井」を上場して大當りを取つた。この點に



西行法師采染樣

ついては「操年代記」の次の記事が注目すべきである。即ち、

大阪に歸り、長門九郎兵衛と語らひ、相座本にて舞の芝居にやぐら幕、豐竹若太夫と改め、はなやかなる看板、さかいみやげ心中泪の玉の井と出しける。春頃筑後がたには曾根崎心中、兩家同じやうなる仕組（下略）

とあるが、「外題年鑑」の説に從へば「曾根崎心中」（元祿十六年五月）よりは一年前の興行でなければならぬが、件の「操年代記」の文では「曾根崎心中」よりはいくらか後の興行であると解釋される。のみならず作の內面的考察も亦これを肯定せざるを得ないのである。其要點をいへば、先づ脚色の上に於て、發端の「おはつ住吉參り道行」は「曾根崎心中」の發端のおはつ觀音廻りの飜案である。續いて住吉の鳥居前の水茶屋でおはつが久兵衛に出合ふ場面は、これ亦「曾根崎心中」の生玉社頭の出茶屋の場の模倣であると思ふ。加之、おはつの詞に「そちの內でも表でも曾根崎の心中は、南へ移つて來たさうな事」とあるのなどによつて考へるに、本曲が「曾根崎心中」よりは後である



豐竹越前少掾像

事は明かであると思ふ。堺で興行した時にはどんな筋であつたものか、その正本が傳はらないので解らない、自然本曲との關係も不明であるが、本曲が「曾根崎心中」に倣つた事は兩者の比較によつて明言し得ると信ずる。

作者については紀海音であるといふ說もあるが、署名のある正本は見ない。併し文調には後の海音の世話物に似た點もあるので、或はさうかも知れないが、姑く作者未詳として置く。

板元の正本屋九左衞門は「操年代記」の著者で、豐竹座とは淺からぬ關係のあつた西澤一風その人で、豐竹座の正本はすべてこゝから出板されてゐる。

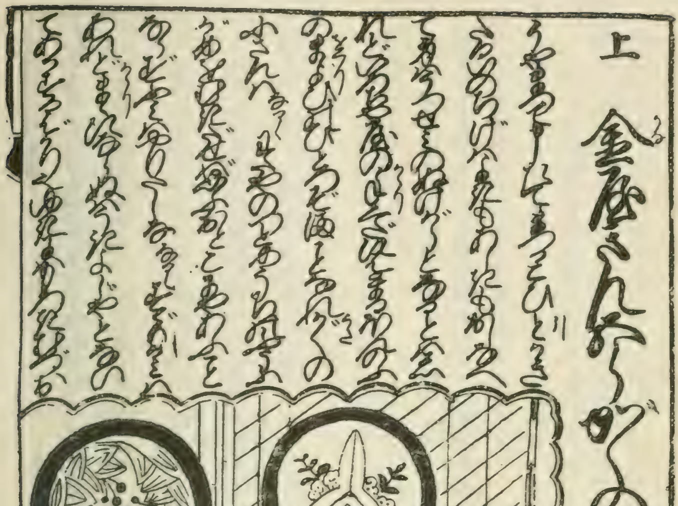
校訂用原本は十行十六丁本。

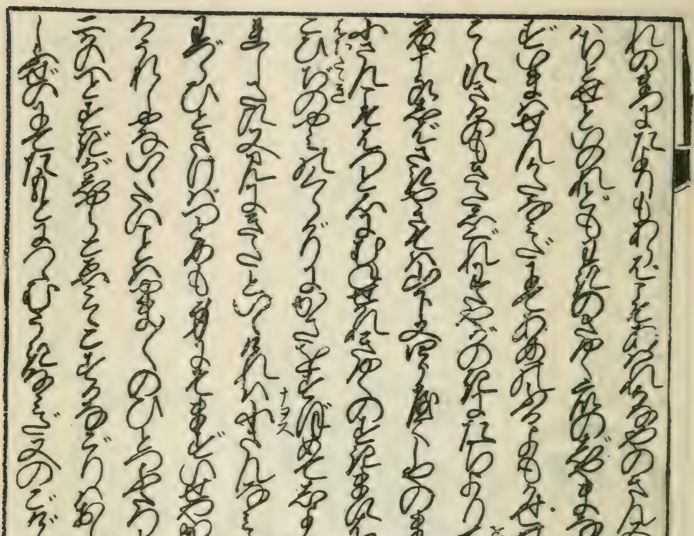
金屋金五郎浮名額（かなやきんごらううきなのがく）

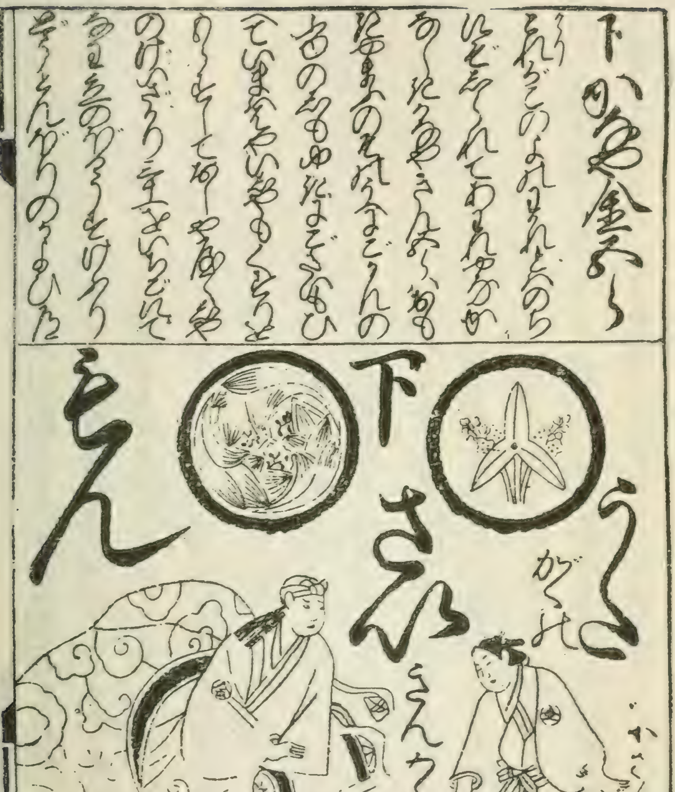
明和板の「外題年鑑」には元祿十五年八月朔日から「源氏烏帽子折」の切として興行したとあるが、これも前の「心中涙の玉井」との相關問題として、操年代記に涙の玉井の次の替りに出したとあるのによつて一年繰下げて、元祿十六年秋の興行と定むべきであらう。

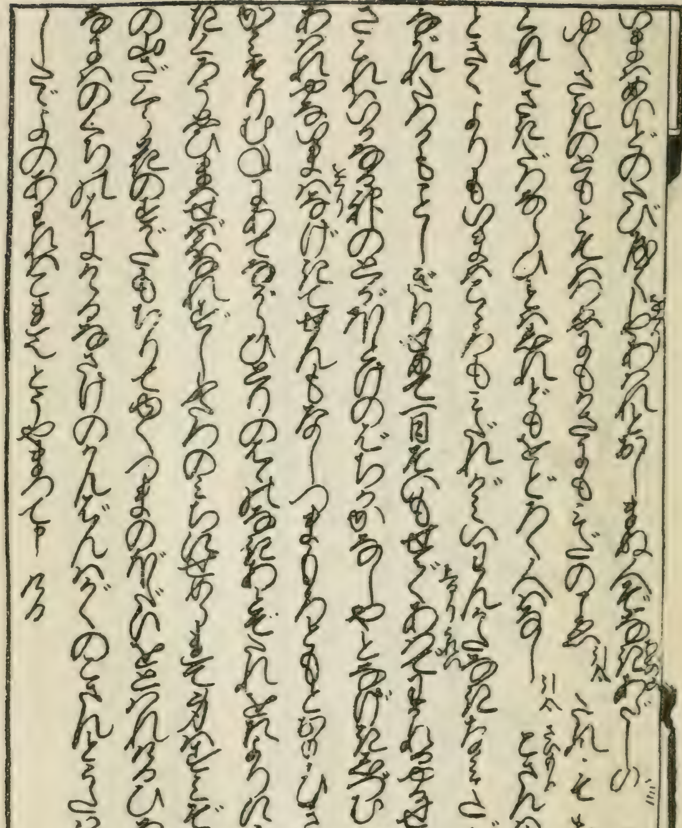
作者は紀海音との說もあるが、正本には署名は無い。

本曲については濱松歌國の南水漫遊を始めとして、水谷不倒氏の世話淨瑠璃大全下卷の解題小三金五郎の條、藤井博士の江戶文學研究等に考證や解說が發表されて居るから、今更同じ事を繰返す必要はないと思ふが、作中の主人公である金屋金五郎の傳記に關してはまだ明かにされて居ない。校訂者もこれに就いては多









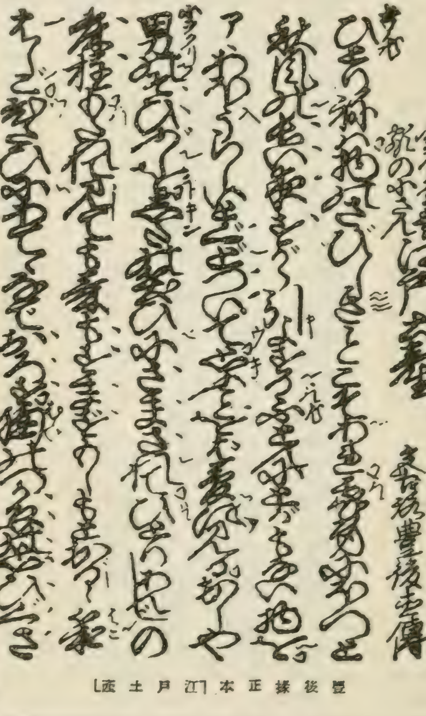
少調べて見たが、文献に乏しいので殆んど得る處はなかつたが、次の事だけは言ひ得ると思ふ。俳優としての金屋金五郎は元祿十年に大阪の荒木與次兵衞座興行の「當麻中將姫まんだらの由來」に横佩家の奥家老立田重助の役を勤め、（狂言本による）又元祿十二年岩井半四郎座興行の「龍女つやおしろい」にも出てゐるそして元祿十四年の顏見世から大阪太左衞門座の座本加茂川のしほに抱へられる事となつたが、顏見世の舞臺も踏まずに元祿十三年の十一月廿日に三十一歲で世を去つたのである。私が茲に金五郎の歿年を元祿十三年十一月とするのは、加茂川のしほが元祿年間に座本をつとめたのは十四年度である事、作中の俳優の名前は皆當時實在の人物そのまゝであるのに、金五郎の病氣見舞に來た太夫元を始めとして、瀧岡彥右衞門・山下又四郎等はこの年のしほに抱へられて一座をして居たのと、又この作の結末に「霜月廿日の朝嵐消えし、金屋がうき命」とある句とによつて推定し、年齡は歌祭文に基づいたのである。役者としては漸く賣出してこれからといふ惜しい時であつたらしく思はれる。

本曲の荒筋はかうである、大阪籠屋町（今の京町堀北通邊）の額風呂の湯女として名高かつた小さんは俳優金五郎と密かに馴染を重ねてゐたが、小さんが田舍の大盡に身請される段となつて、二人の密通が露顯した爲に大盡は約束を變改したので親方は怒つて小さんを島の內笠屋町の娼家綿屋に賣つた。金五郎は寒夜に小さんの許に通つた爲に宿痾が重つて死し、小さんは悲歎の極自殺を企てたが、人々に止められて斷髮するといふのである。當時の敵役として名高かつた小野山宇治右衞門が金五郎と小さんを爭つたといふのも事實によつて仕組んだものかも知れない。

本曲は歌祭文によつたものと思ふが、加賀掾の正本「難波役者評判」との關係については、同書未見の私

は單に「南水漫遊」所引の短かい詞章のみによつては、いづれが前であるかを斷じ得ない。順序からいへば先づ浮名額が大阪で持囃されたので、京都の加賀掾も「難波役者評判」と題して出したと見る方が自然のやうに思はれるだけである。

宮古路豐後の正本に「金屋金五郎額の小さん江戸土産」と題するものがある。書出しは浮名額の金五郎が綿屋の格子際に忍ぶ趣向を轉用して小さんを呼出す事になつて居り、そして風呂場の小陰で密會する處へ、小さんを身請するといふ客甚六が來て、金五郎が風呂の內へ隱れたのを幸ひ、風呂たき男に金を與へて蒸し殺させるといふ筋で、原作とは全く變つた作意である。



豐後掾正本「江戸土產」

又小三金五郎が江戸に移されて、淨瑠璃に作られたものでは、文政二年六月河原崎座興行の淸元の淨瑠璃「浮名の立額」、嘉永三年九月中村座興行の常磐津の「對色緣長夜（はたれぬたかえにしのたがよ）」などは名高いが、名は小さん金五郎

でも、筋も人物も全く別なものである。況して默阿彌の作である「梅雨濡仲町」(巳の吉殺し)に出る小さん金五郎などに至つては尙更で、全く江戸前の人物になつてゐる。
校訂用原本は十行十八丁本。これも覆刻されたのは此度が初めてである。

金屋金五郎後日雛形

正本卷頭に太夫直之正本とあるのみで、外題年鑑などにも載つてゐないが、正本の挿畫に若太夫出語の場があるのによつて、前の浮名額との關係上豐竹若太夫の正本であるとしてよいと思ふ。作者は紀海音かとの說もあるが、明かでない。又その著作年月も從來不明とされてゐたが、この作の終りの方に

時なるかな五月廿八日は和州橋寺の開帳四十萬日の回向、阿彌陀池にて始まれば、老若男女の別ちなく、我も〳〵と參詣し席を爭ふばかりなり。

とあるのは注目すべき箇所で、これは寶永二年五月廿八日から大和の橋寺の開帳四十萬日の回向が大阪の阿彌陀池にあつたのを當込んだものと考へられる。よつて本曲は浮名額の出た翌々年の五月末頃に作られたものと推斷を下してよいかと思ふ。

內容上浮名額の續篇と見られるもので、金五郎の死後再び勤めをしてゐた小さんは、曙屋大次郎といふ者に身請されて同棲中、ふとした事から金五郎の怨念に取憑かれて狂女となり、狂ひ廻つて人形屋で狂態を演じて居る處へ、金五郎の弟八十郎が來かゝつてこれを見て氣の毒がり、大次郎と相談して、人形屋の亭主の勸めに從ひ、相共に阿彌陀池の開帳に小さんを伴ひ行き、橋寺住持の祈禱を受けた、その爲に怨念退散して

小さんは正氣に復し、金五郎は成佛するといふ筋である。

校訂用原本は縮入細字八丁本。原本に破損の箇所があつたが、對校本が得られなかつたので殘念ながら少し缺字のまゝとして置くより致し方が無かつた。

椀久末松山

寶永五年三月三日から「新利屈物語」の切として豐竹座上場。作者紀海音。海音署名の現存正本中最古のもの、作者四十六歳の作。

椀久の事蹟を主材とした物である。椀久の實説として世に傳へられる處によれば、彼は大阪御堂前の豪商椀屋久右衛門といひ、大阪新町の遊女松山に溺れて產を傾け、監禁された爲に發狂し炮烙頭巾のまゝで家を飛出した。それ故京五條坂の別邸で療養させ、平癒の後延寶五年九月七日に歿したといふ。(傳奇作書、蓑笠雨談等による)

この巷説は先づ俗謠にうたはれ、又芝居でも演じられたらしいが、現存のものとしては貞享二年二月刊行の「椀久一世物語」が最も古く、これによれば椀屋久兵衛は貞享元年十二月發狂して水死したやうに作られ、既にその時大和屋甚兵衛が舞臺にかけた事が文中に暗示されてゐる。これについては江戶の中村勘三郎座で貞享三年正月に「椀久浮世十界」と題して、三國彥作の椀屋久兵衛、まつ山の花村きぬえ、大友民部の中村七三郎、熊原和田之介の中村傳九郎等の顏ぶれで演じたのが古く、笹に瓢簞を持つた椀久狂亂の舞臺面が見せ場であつたらしい。一方上方に於ては大和屋甚兵衛は元祿十三年正月都萬太夫座で「傾城袖の海」の

外題で椀久を演じた。「松の落葉」（寳永元年刊）卷三に載せてある椀久出端の歌はこの時にうたはれたものであらう。この中には以前から謠はれた椀久の小唄が綴り込まれて居り、そしてこれが後の淨瑠璃の椀久狂亂道行の詞章の一原據となるものである。故に左にその歌を掲げて置く。

椀久出端　　　大和屋甚兵衛

二上りたどり行く。今は心も浮かれそろ。誰かいく野を引拔きしより。いつの頃より相馴れそめて。通ふ心のいくせの思ひ。忍ぶつま戸を。ほと〳〵叩くは椀久か。さりとは〳〵請けうかの。忍ぼかの。そつこで請出せ思はくを。これ〳〵〳〵請けたもの。あのや椀久は。これさ〳〵鼓の革か。のうほんへ。しんぞ心は。これさ〳〵。打拔いた。ほんほへしんぞのうほんへ。とかく戀には身をやつす。

斯の如く古くから小唄にうたはれ歌舞伎で演じられて名高いものであつたので海音は取つて淨瑠璃に作つたものと思ふ。筋のよく通つた纏つた作である。その荒筋をハ



椀久浮世

へば、椀久が松山に溺れて貲を盡し、井筒屋で節分の豆撒きの代りに五十兩の金銀を撒いて一座の者に拾はせて居る處へ親の久右衞門が來て、椀久が爲替銀五十兩を石瓦とすり替へて置いた財布で散々打つた上髻を切つて勘當する。椀久は舅義右衞門の許に監禁されて、猶松山を忘れ兼ねて居る處へ、廓を拔けて逢ひに來た松山は、椀久の妻おさんの貞節に感動して、椀久との關係を斷念して田舍の客に請出される決心をして歸る。椀久は悲憤の極發狂して狂ひ廻る途上請出され行く松山に邂逅し、身請の客の情義によつて松山は椀久の爲に解放されるのである。全體に於て後の近松の「壽の門松(ねびきかどまつ)」を聯想させられる作柄である。

こゝで問題となるのは一中節の正本たる「椀久末の松山」との關係である。この作は外題が同一であるのみでなく、筋が同じの上に文章迄も同一又は類似の箇所が甚だ多く、大體に於て一中節の方が典麗の致に富んで居るといへる。海音の作よりはこの方が先で、しかも近松の作であるとの說もある。併しこの作中の椀

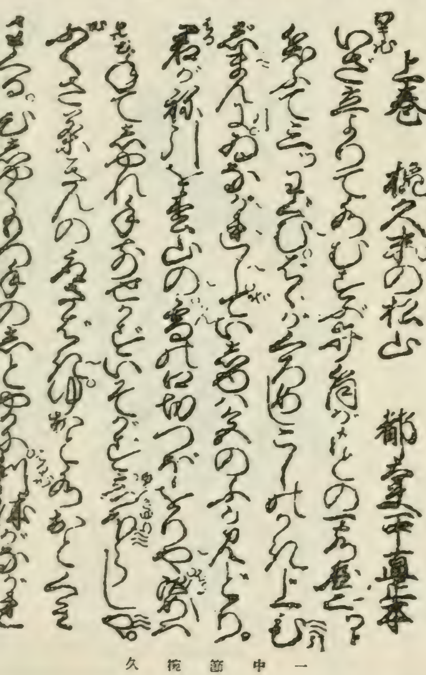


十界しより

久色里の豆撒の條の

其時椀久高聲に一中 是より義太夫節そも〳〵。地今宵節分の………

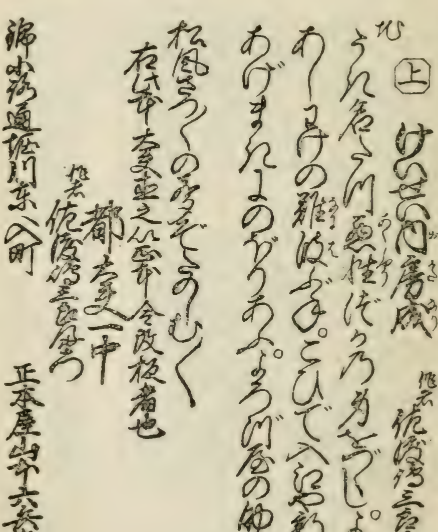
といふ箇所は注意すべきで、「是より義太夫節」とあるのは海音の作の方が先である事を暗示する一證とはならないのであらうか。又海音の作では輕く幇間風に扱はれてゐる一中が、一中節の方では相當重く扱はれてゐる上に、「得意の「山めぐり」を語らせるとか、又はその弟子の半中が淨瑠璃を語る事迄も綴込まれてゐるのによつて考へれば、どうも後のもので、正德頃の作ではあるまいかと思はれてならない。又作者についても私は遂つた一つの推測説を抱いてゐる。それは同じ一中の正本に「けいせい内房成(おかたなり)」(助六後日心中)といふのがあるが、これは近松の弟子佐渡島三郎左衛門の作である。處でこの作を一中節の正本中近松の作といはれる



一中節椀久

「助六心中」及びこの「椀久末の松山」と比較して見るに、その文格筆致に於て三者殆んど同一程度で、共に近松の圓熟時代の世話物よりは一段劣ると思ふ。尤も問題となつてゐる椀久狂亂道行の文などには多少近松の筆も加つて居り、そしてこれが「天網島」のなまいだ念佛の中に引かれるに至つた因緣ではなからうかと想像して居るのである。

兎に角海音の「椀久末松山」は椀久物としては重要な位置に立つ作で、義太夫劇の方では、この後享保十八年十一月竹本座上場の文耕堂の作「元日金年越」（ぐわんじつこがねのとしこし）は本曲の改作であつて、椀久松山の情事に番頭嘉左衞門の奸惡、椀久出入の某藩藏屋敷の出納役の公金私消事件，椀久の女房おさんと松山とは異母妹といふ因緣譚などを取合せて徒に技巧をこらした作である。後に操で演じられた「ゆかりの十德」はこの下卷「物狂ゆかりの十德」を出したものである。又一中節の方ではその「狂亂道行」は同流の語物として傳へられたのみ



「三重襲袍蝶」正本繪表紙 上

でなく、その門弟宮古路豐後を經て豐後節にも傳はり、初代常磐津文字太夫によつて先づ江戸の市村座に於て「三重襲一船」の外題で演じられ、更に又一方に於ては江戸長唄としては享保十九年に市村座に於て「二人椀久」が演じられたのが起原で今に傳へられて居る程である。その他椀久物は拾ひ上げれば澤山あるが餘り長くなるから略する。

校訂用底本、八行二十七丁本。

作者紀海音　姓は榎並、俗稱喜右衛門、後善八と改めた。父は鯛屋善右衛門といひ、大阪御堂前雛屋町に住み、菓子の老舗として知られたが、傍ら俳諧を好んで安原貞室の門に入つて貞因と號した。兄は有名な狂歌師油煙齋貞柳である。海音は寛文三年の生れで、近松よりは十歳の年少であつた。初め黄檗山悦山和尚の門に入つて高節と號して大和の柿本寺に居つたが、のち還俗して大阪に住み和歌を契沖



同　下

に學び、醫を業として契因といひ烏路觀と號し、又狂歌を兄貞柳に學んで貞峩と號した。元文元年法橋に叙せられ、寛保二年十月四日歿した。享年八十。寺町法樹寺に葬る、法名清潮院海音日法居士。海音が作者として立つた年は明かでないが、「淨瑠璃譜」所傳の如く元祿十五年に竹本采女が語つた「傾城懐子」が彼の作であるとすれば四十歳の時からであるが、現存の正本を基礎として言へば、こゝに解說した通り四十六歳からである。それより竹本座の近松と對峙して專ら豊竹座の爲に筆を執り、その署名ある現存正本四十八篇に及び、享保八年七月六十二歳の時の作「傾城無間鐘」を最後とする。その作者生活を退いた理由は明かでないが、享保九年三月大阪大火以後兄の後を襲うて鯛屋の家督を相續した事及び近松が世を去つた事などが少くとも原因の一部をなしたのではなかつたらうか。



享保十九年新版「二人椀久」

富仁親王嵯峨錦（とみひとしんわうさがにしき）

本曲の著作上場については、明和板「外題年鑑」には寶永六年六月豐竹座上場、享保五年三月更に豐竹座に二度目の上場といふ事になつて居る。

併しこれには疑問を挾む餘地があるやうに考へられる。先づ本曲第二段目に

ム、當年は丑の年、時は十月生れは辰にて金性。ハ、ア先づ辰は陽にて天子の形。丑の年の陽に應じ金性水と相生じ十月の陰を自得す。

とあるが、かういふ場合の干支は大抵著作上場の年のそれを基準として當込むのが、當時の淨瑠璃作者の常套手段であつた例から考へると「當年は丑の年」といふのは、寶永六丑年とも又は享保六丑年とも取れるのであるが、これに對して第三段目に

甚五郎めも其以前武士商賣をせし時は、不義非道には傾かねど今町人となつたれば、仁義禮智の四つ寶は拂ひ仕舞うてさつぱりと、銀賣の細工人……

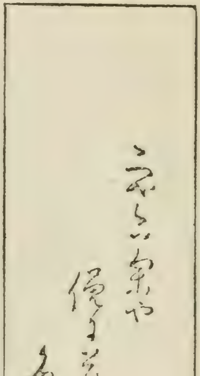
とある文は、例の四寶字銀に代へるに享保新銀が改鑄されて行はれ出した事を暗示して居ると解すべきであ



紀海音肖像

るが、享保新銀は享保四年に鑄造されて享保六年十二月迄四寳字銀と併用されて居るのであつて、この間に丑の年に當るのは享保六年である。のみならず現存の正本は豐竹若太夫が享保三年正月受領して上野少掾と稱へてからの物である上に、他の海音の諸作と比較して、文の碎け工合などから見ては正に享保六年頃のものと言ひ度いのであるが、餘り古人の所説に異議を挾むも如何かと思ひ、こゝには姑く外題年鑑の寶永六年を初演といふ事を否定せずに置いて、更に研究して見度いと考へてゐる。

　女繪師狩野雪姫と名彫工左甚五郎とが、高雄の蟠海僧都といふ惡僧に強要されて、人質に取られた夫と母との命を救はんが爲に、一念を凝らしたる結果夢想によりて弘法大師の筆といふ小野小町の像と同一のものを製作するといふのを全篇の眼目とし、富仁親王（花園帝）がその兄宮に當る蟠海僧都の野心抑壓の方便として女帝なれど男裝し給ふ爲に種々の波瀾を起す事を取合せた作で、發端に親王が嵯峨へ紅葉御覽の行幸の事あるに因んで外題としたものである。



紀海音筆蹟

　第三段甚五郎内の場は全篇の山であつて、後世の「京人形」の原據と見てよからう。又狩野雪姫の事は既に宇治加賀掾の正本「女繪師狩野雪姫」に仕組まれてゐるが、構想上彼よりはこの方が遙に勝れて居り、後

の「祇園祭禮信仰記」の雪姫の藍本となつたものであらうと思ふ。
人物の取合せに時代錯誤甚しく、荒唐無稽の嫌はあるが、全篇の結構が大がかりで、場面の變化と詩趣とに富み、力の籠つて居る點に於て海音の作中出色の物といつてよからうと考へる。今日迄殆んど世に出なかつた稀觀書である。
校訂用原本は七行八十五丁本。

おそめ久松袂の白しぼり

正德元年四月八日から豐竹座上場。作者紀海音。海音の世話物中名作の一つであると共に、後に及した影響も大きい。

大阪東堀瓦屋橋附近の油屋太郎兵衞の一人娘お染は子飼の丁稚久松と私通してゐた。然るに太郎兵衞は二人の仲を裂いてお染を親戚の山家屋へ緣付けようとし、久松の在所の父も亦久松を强制的に實家へ連戻らうとした。よつて二人は家人が山家屋へ招待された留守中に情死したとい



ふ筋である。

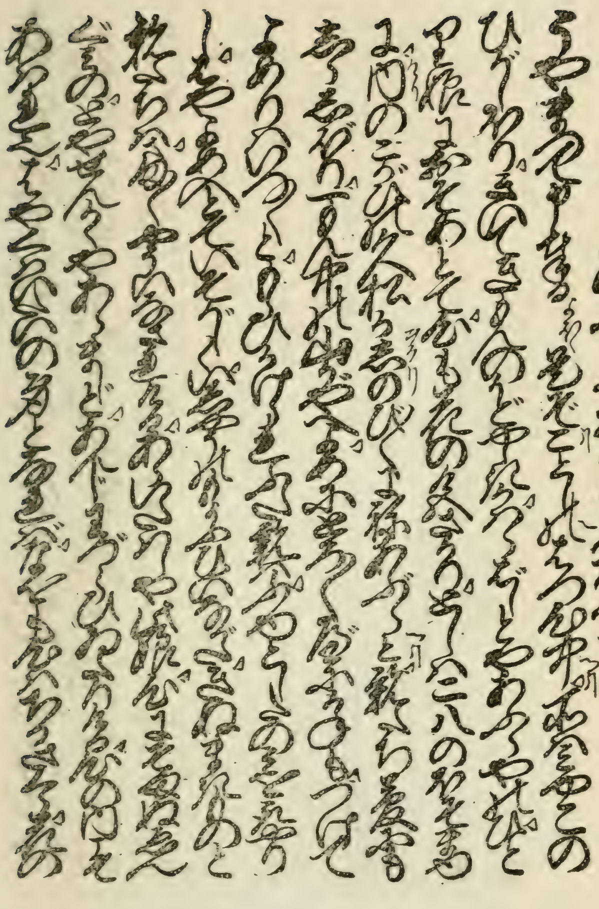
この作の實説については從來心中否定説が行はれて居た。それによれば問題のお染は二歳の小兒で丁稚の久松が守をして居る間に誤つて溺死させたので、久松は主人の折檻を受けて土藏に入れられて居る間に縊死した、それは寶永七年九月廿九日の出來事であつたと（一説に延寶七年とあるのは疑はしいといふ）。

これが海音の淨瑠璃に仕組まれた原事實であるといふが、私はさうは思はない。海音の淨瑠璃に先立つておそめ久松の心中事件は歌祭文にうたはれ歌舞伎で興行されて居る事を見遁してはならぬ。

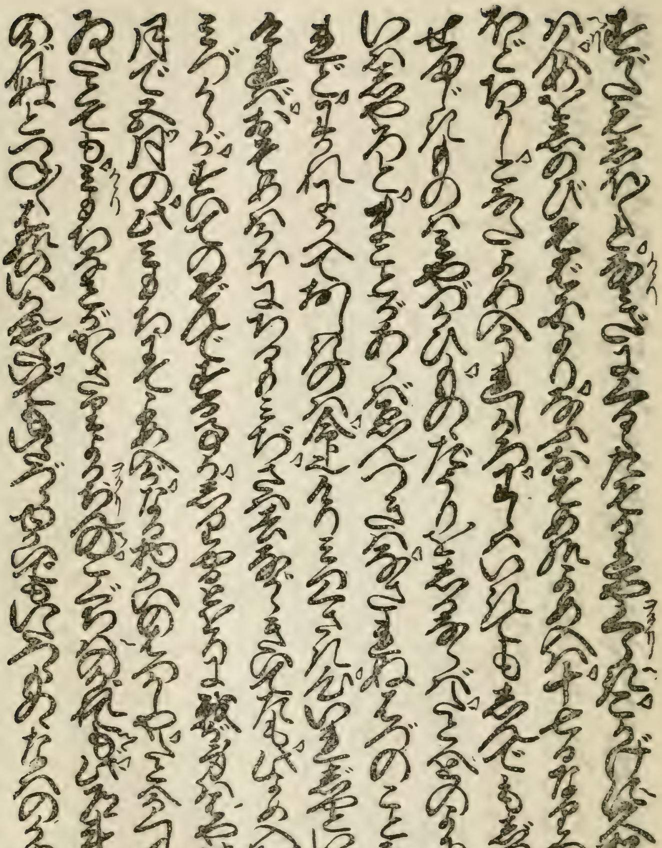
先づ歌祭文の方から述べる。お染久松の歌祭文は色々あるが、私が全文を見たものに次の五種がある。

(イ)（上）あぶらやおそめ久松心中　（下）おそめ久松思ひのたね油
(ロ)（上）おそめ心中白しぼり　（下）おそめ涙のはらおび
(ハ)（上）おそめ久松心中種油　（下）おそめ久松名殘の夕せち
(ニ)　油屋おそめ形見おくり
(ホ)（上）油屋おそめみこの口　（下）油屋お染梓弓

是等の中では(イ)が原作で(ロ)は語り出しの「是ぞことしのはつ心中」の句を「こひにうき名を流すなる」と改めてあるだけである。(ハ)は後に述べる歌舞伎劇の筋を取入れて居る。(ニ)(ホ)は外題から見ても後の物たるは明かで、本文を讀んで見ればいよ／＼さうと首肯される。然らばこの第一の作たる(イ)はいつ頃出來たものであらうか。これについて一つの傍證となるのは近松の「今宮心中」（寶永七年正月）の道行の次の一くさりである。



「おそめ久松心中」其の一



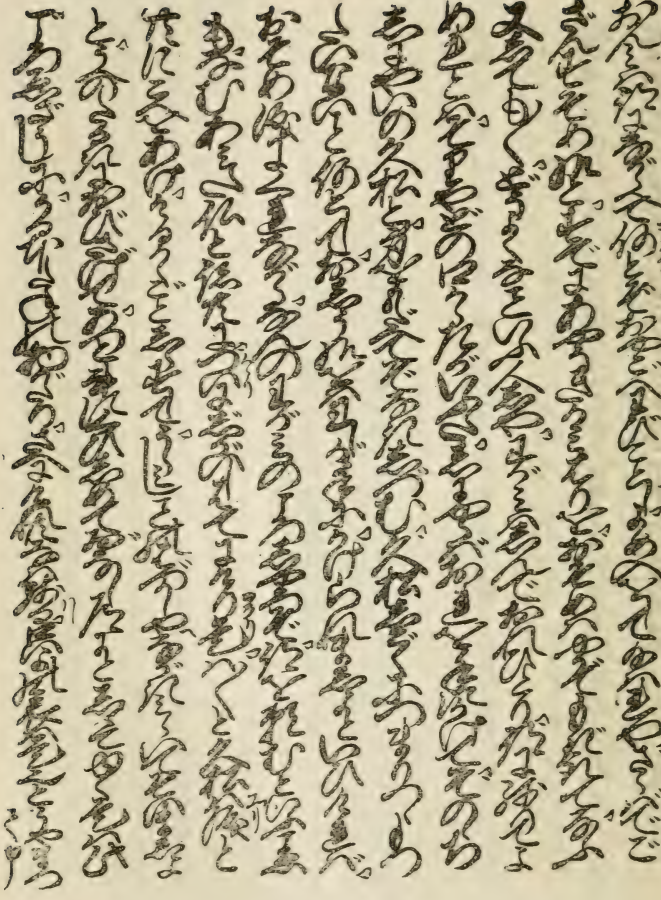
同 其二

下

おそめ 久松 [illegible]

[illegible]

同　其　二



同其四

〽瓦屋橋とや油屋の。油搾木の音に聞く。お染にそめし久松は。いつの時雨の一雫。洗へど落ちぬナヨイか戀衣。世に弘がりし仇し名を。よそに謠ひし言の葉や。其の油屋の一ふしも。師走油か。身の上にイ。かかる涙とこぼれそひ明日より同じ三味線に。のりの灯油屋のオクリ回向をなすこそフシ哀れなれ。

不用意に讀めば行文の妙に釣られて氣がつかずに滑つて行きさうであるが、作者の頭にはお染久松の歌祭文の文句があつて筆を走らせたに相違ない。のみならず、おきさが好んだといふ歌祭文も或はお染久松のなどを暗に指してゐたのかも知れない。斯の如く「今宮心中」の上演頃には既にこの歌祭文は流行して居たといへる。而してその語り出しなる「これぞ今年の初心中」の句によつて見れば、心中のあつた年直ちに出したものと思はれるが、元文五年三月六日から大阪の角座で「卅三回忌袂白絞」を上場して居るのによつて逆算すれば、寶永五年の事になり、而も「今年の初心中」の句と合せ考へれば、寶永五年正月に情死事件があつたのを歌祭文に作つたとの推定を下したくなる。前にいふやうな小兒溺死事件からこんな歌祭文を捏造しようとは思はれない。

次にはお染久松が歌舞伎で演じられた事であるが、これは寶永七年正月大阪の荻野八重桐座で「心中鬼門角」といふ外題で興行されてゐるのが始めと思ふ。この臺本は東京帝大圖書館所藏であつたが、去る震災で燒失したらしい。私は幸にしてその前に一讀して役割や梗概を手記して置いた。

その主要な役割は久松叔父岡村權左衛門音羽二郎三郎、岡村妾おつね富澤千代之助、おそめ荻野八重桐、久松松川富之丞、在所の親父中島賀十二、油屋女房玉村衛門、油屋五兵衛櫻山庄左衛門。芝居は二幕から成り、前の幕は岡村妾宅の場で、高麗橋の三井へ買物に行つた歸りに例の通りお染と久松が立寄ると、岡村とお

つねの計略の罠にかゝつて二人は縁を切るといふ誓書を書かされる。後の幕は油屋の場で、一同山家屋へ招待されて久松一人留守をして居る處へ在所の親が來て、お袋が叔父から色々話を聞いて心配して居る折柄夢見が悪いから是非連歸れといふので迎に來たといひ、久松は主人の歸る迄待てといつて親父を宿へかへす、入違ひに山家屋からお染が拔けて來た。土藏の中へ飛込んだ久松とお染はとゞ情死する。關係者一同集つて相談の結果、「主殺し」「不義の心中」の名を負はせ度くない爲にとて、久松を病氣の體にして駕籠に乘せて引取らせるといふのである。

玆に於て再び前の實說と稱へられる心中否定說を顧るに、寶永七年九月廿九日の出來事であるといふのが誤たるは明白であると共に、常識的に考へても心中否定說は否定して、歌祭文や「心中鬼門角」に作られた筋が事實に近いものであると認めざるを得ないのである。それと共に「鬼門角」に於て久松を病氣の體にして引取らせるといふ無理な脚色をした理由が、卽ち心中否定說の生れると同じ動機に胚胎するものと解釋を下すべきであらう。

如上の材料と理由とによつて私はお染久松は情死したものと判斷する。そしてその事件が歌祭文にうたはれ歌舞伎に演じられて大阪市中の大評判であつた。この人氣を利用してこの事件を淨瑠璃に仕組んだのが卽ちこの海音の「袂の白しぼり」であると私は見度いのである。自然本曲の結構脚色は海音の創意に非ずして、歌祭文と鬼門角とに負ふ處が尠くない。而して歌祭文を海音が「地藏巡り」の夢の場に取入れた趣向は頗る巧妙であると思ふ。次に鬼門角との關係を見るに、本曲上卷口の三井店頭の場の、

詞藤七は慇懃に……京大阪の菊合せ千歳の秋を八重桐が。舞臺衣裳の物好み。……コレ／＼是になされま

せ。是を任したら取成りも八重桐に生寫し……

といふ商所あたりは「鬼門角」で荻野八重桐がお染に扮した事を利かせた當り文句で、又その時の八重桐の舞臺衣裳が京大阪で流行した事を示すものである。尙兩作の結構を比較して見るに、後者は前者を巧に飜案して淨瑠璃に仕立てたもので、久松の叔父法印を武士上りとする處などは鬼門角の岡村權左衞門を知つて居た當時の見物には成程と思はせたものであらう。飜案といへば、久松が主人に下着の小袖を見つけられて笞で打たれる條は「五十年忌歌念佛」(寶永六年)の淸十郎折檻の場が聯想されるであらう。

斯樣な次第で、海音の傑作の一つと稱へられる「袂の白しぼり」も、その原據その藍本を拉し來つて比較して見れば、從來の如く小兒溺死事件に暗示を得て創作したといふ場合よりは、その眞價を割引して見なければならぬ事となるであらう。併しお染久松の戲曲としては、實に本曲は劃期的のもので、これを義太夫劇の系統に見るも、彼の革足袋の意見で名高い「染模樣妹背門松」(明和四年十二月、菅專助作)でも、野崎村の段で今尙舞臺に持囃される「新版歌祭文」(安永九年九月、近松半二作)でも、共に本曲を藍本としたのである。その他三都で演じられたお染久松の劇や淨瑠璃は非常に多いが、直接間接本曲に多少の關係を持たないものは無いといつてもよい。

校訂用原本は九行二十六丁本。

鬼鹿毛無佐志鐙

正德三年十二月一日から豐竹座興行。作者紀海音。

赤穗義士の復讐事件を材題とした所謂義士物の一で、義太夫淨瑠璃としては近松名作集上卷に收めた「碁盤太平記」に次いで出たのであつて、事件後十三年目に當る。「碁盤太平記」とは作の世界も別であり、主要人物の名のりも異り、全く違つた作意であつて、直接關係があつたとは思はれない。本曲の藍本となつたのは寶永七年六月十日から大阪の篠塚庄松座で興行された「鬼鹿毛武藏鐙」ではなからうかと思ふ。これは大當りの狂言であつて、九月十一日迄百廿日間も興行されたといふ。「古今いろは評林」に、

大阪にては寶永七寅年、篠塚庄松座に於て、吾妻三八作にて、則ち篠塚次郎右衞門大岸宮内の役、力彌には中興までつとめし佐野川万菊、若衆形の時これをつとめしが、歌舞伎狂言にての始として、此狂言大當りなるよしとて、中寺町正法寺日親堂へ繪馬に此圖をあらはし、次郎右衞門悅びの餘りに是を奉納なし、今に殘れりとぞ。

とある程で、京の夷屋座も萬太夫座も大阪、柳山座もこれに刺戟されて秋にはいづれも義士物を興行した。されば當時に於ては最も名高い義士劇であつたに相違ない。海音が義士物を作るに當つて、粉本をこれに求めて趣向をこらさうとしたのは有り得べき事と考へられる。この芝居の筋が分らないから斷言は憚るが、外題の同じである事、主要人物が共に大岸宮内である點などから見て關係があつたらうと推察される。

小栗判官兼氏が舅父横山左衞門信久の强慾我意を憤り、管領の殿中、將軍義政の弟政知饗應の場に於て刄傷に及んだので、小栗は切腹を命ぜられて領地を沒收された。遺臣大岸宮内が同志四十六士を糾合して遂に横山父子の首級をあげるといふ筋で、小栗横山の世界とした爲に、小栗の妻照天は小栗の遺骸を車に乘せて菩提所藤澤寺に運ぶといふやうな小栗判官で名高い筋が殘つて居たり、又は横山左衞門の悴三郎迄が敵役と

なつて居るといふやうな疣贅が目につく。

並木宗輔の「忠臣金短册」(享保十八年十月)は本曲と「碁盤太平記」とをこね合せて技巧をこらしたものである。又本曲中の壓卷たる第三段目片桐源吾浪宅の場は後の近松半二の「太平記忠臣講釋」の喜内浪宅の場の原據となり、第四段目の茶屋場で大岸が遊女揚卷を身請して刺殺す場は「假名手本忠臣藏」の　力の段に影響を及してゐる。斯樣な次第で、作全體としては佳作とは言ひ得ないが、義士劇の系統上に於ては大切な位置を占めて居るに拘らず、今日迄殆んど世に紹介されなかつた作品である。

序に附加へて置き度いのは、本曲にも又前の「椀久末松山」にも、その正本卷頭の外題の下に、作者紀海音と並べて「お山人形辰松八郎兵衛」とある事についてである。この外にも享保以前の豐竹若太夫の正本と思はれるものにこの形式を二三見るが、これは辰松八郎兵衛が豐竹座の創立時代に於て豐竹若太夫と相座元であつた爲と、又一つには、八郎兵衛は當代無雙のお山人形の名手であつて、元祿年間に竹本座にあつて腕を揮つて居たのを、河内屋加兵衛が豐竹座を起すに際して特に引拔いて來たので、作者の紀海音と相並べて人氣を呼ばうとしたからでもあつたかと思ふ。

底本は八行四十一丁本。

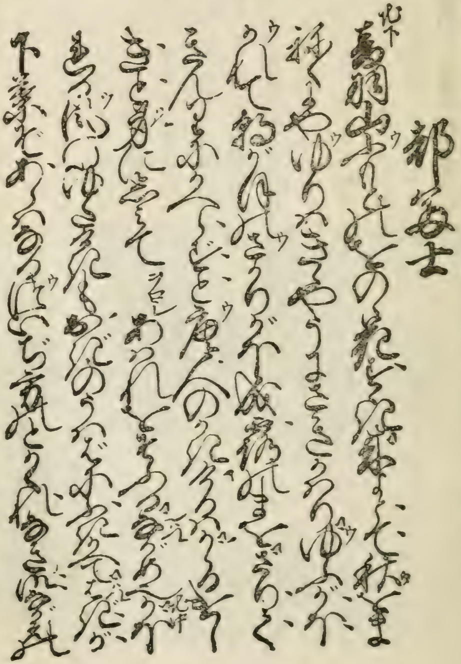
愛護若塒箱

正德四年十月朔日から豐竹座興行。作者は紀海音。

說經の語物の「あいごの若」と同じ材題の古淨瑠璃に「あいごの若」といふがある。元祿六年正月竹本座

興行の「都富士」はこの改作であり、而して本曲は又この「都富士」の改作といふ事になる。

古浄瑠璃の「あいごの若」は寛文末年頃の刊行かと思はれる六段物である。二條藏人清平の子愛護若は初瀬觀音の申し子であつたが、雲井の前といふ若い繼母に思慕されたが應じなかつたので、雲井の前は侍女月さよと共に二條家の寶物やいばの太刀と唐鞍とを盗み出して賣却し、これを愛護若の所爲であると清平に讒したので、愛護若は家を逐はれ、叡山の叔父師の阿闍梨をたよつたが怪んで入れられなかつたので遂に叡山東麓の霧生の瀧に投身した。のち惡人滅されて愛護若は山王權現に祠られるといふ筋である。

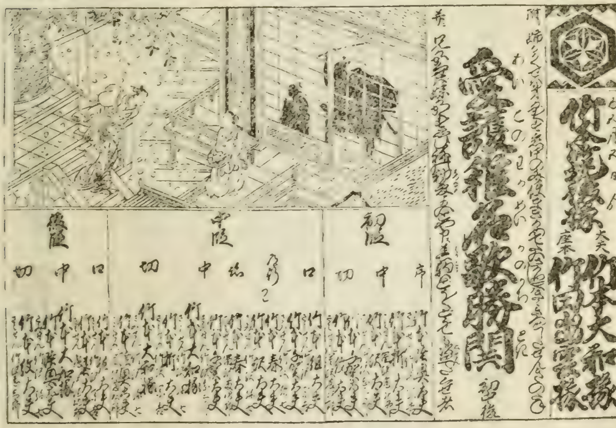


都富士正本巻頭

これに對して「都富士」は筋が稍複雜である。卽ち二條清平の子愛護若と千原爲道の女鳰照姫とが清水詣

に相契るに初まり、右大將有雄は謀叛を企てて、その目的貫徹の方便としてその女六條姬を清平の後妻として二條家の二種の寶物を盜み出させようとした。然るに六條姬は愛護若に戀慕したが戀のかなはざるを恨んで清平に讒した爲に愛護若は家を追はれて志賀浦に入水し、六條鴇照の二人も亦あとを追つて入水するといふ事に仕組まれて、愛護若と二女との三角關係と有雄の謀叛とが主想となつてゐる。この淨瑠璃は近松の作であるとも言はれてゐるがどうであらう。元祿に入つて近松が自分の作品には署名するのを常とした義太夫の正本で、その署名のない作品を近松と推定するには相當有力な理由がなければならぬと思ふ。

本曲に於ては愛護若に對する六條鴇照の戀爭を六條姬輿入以前よりの事とし、繼母となつてもその思ひ愈々切なるため清平の刄にかゝつたに拘らず愛着の一念が死後も執拗に附纏ふといふ趣向にし、鴇照と愛護は結局添遂げる事、清平を果斷正義の士とした事、忠臣早苗之介夫



「愛護若名歌勝」

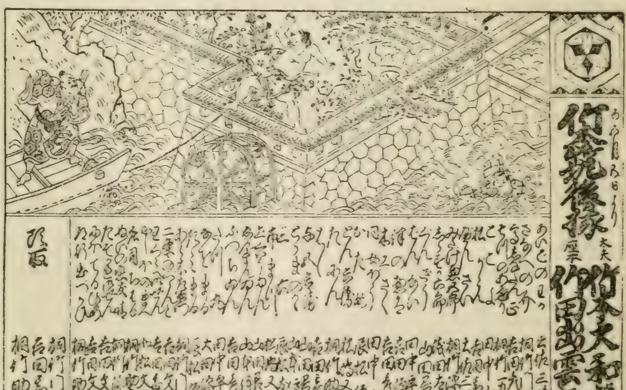
妻の働きを鮮明に描いた點などにその特徴を見る。

寶暦三年五月五日から竹本座で興行された「愛護若名歌勝鬨」（作者竹田外記・吉田冠子・中邑閏助・近松半二・三好松洛）は本曲を粉本として技巧をこらしたもので、やいばの太刀を家寶として傳へた二條藏人清平と唐鞍を傳へる古曾部庄司千晴とは父祖の代から不和の間柄であるのに、清平の女八汐の前は千晴の子縫之丞友晴と、又友晴の妹鶏照姫は八汐の前の弟愛護若と互に相思の仲であるといふ宿命的の戀愛悲劇の動機を構へて、これに高階彈正が唐鞍とやいばの太刀とを奪つて天下を傾けようとする謀叛を取合せて筋を複雜にしてある。中段鞍打の段、龍骨車の段が最も技巧的である。（詳しくは「歌舞伎研究」第一輯の拙稿淨瑠璃解題を御參照を乞ふ）

校訂用原本は七行七十九丁本。

傾城思升屋

正徳五年五月五日から「吉野忠信錦着長」の切とし



竹本座興行番附

て豐竹座に上場されたもの。校訂者の見た正本には作者名はないが、「聲曲類纂」には紀海音の作とある。
本曲の筋は頗る簡單である。大阪久寶寺町堺筋の升屋權兵衞は妻子のある身で、しかも忠實な手代市兵衞の意見があつたにも拘らず、馴染の遊女出羽を落籍して大津屋といふ瀨戸物店を營ませたが、二貫目の借金の返濟に窮して日頃の面目を失墜する苦境に立つた。權兵衞の氣質を知る出羽はそれと知らせずに以前馴染の客であつた紙屋喜右衞門から金を借りて男の急を救つた。然るにこれを知つた權兵衞は嫉妬の眼を以て二人の仲を見るに至つた際、豫て出羽に心ある義弟喜兵衞が京都から下つて權兵衞の金に窮して居るのにつけ込んで緣を切らせようといや味を述べたので、權兵衞は喜兵衞を喜左衞門の廻し者と誤解し赫怒の極、出羽と喜兵衞とを斬り、自分も亦割腹するといふのである。
この作では、男主人公權兵衞を俠客式の面目一點張りの短氣な人物としその父をもこれに劣らぬ氣丈の老人としたのに對して、出羽は遊女上りに似合はぬ實意のある女として對照させて居るのが目につく。又「伊勢參り名所道行」を發端とし、森口の一里塚で非人の幽靈を出したり、升屋の場で子供に曾我の十番斬をさせたりして場面の變化を圖つて居るが、大體に於て極めて人情味に乏しく殺風景の感じがして、海音の冷やかな理窟づくめの特長を遺憾なく發揮して居ると共に、世話物と俠客物との中間に位するやうな作柄である。
これも今日迄活字に飜刻された事は無かつた作である。

八百屋お七

八百屋お七は海音の作中でも最も名高いものの一つである。この實說は「天和笑委集」を始め、馬場文耕

の「近世江都著聞集」、「世事談」等を始めとして、「實事譚」などにその要を盡されてゐる。それによれば、お七の所刑は天和三年三月二十九日の事である。名高い事件であつたが、江戸はまだ文化が進まなかつた上にその筋の取締が嚴しくて際物は出せなかつたからでもあらうか、小說戲曲に作られたのは却つて上方の方が早かつた。卽ちその嚆矢といふべきは西鶴の「五人女」(貞享三年)の卷四戀草からげし八百屋物語である。事實が劇的である上にこの作が出たのでいよ／＼評判を高める事となり、歌祭文にもうたはれ戲曲にも仕組まれるやうになつた。歌祭文が西鶴の影響を受けて居る事は、その中に「五人女の三のふで、いろもかはりて江戸櫻」の句があるによつて明かである。元祿末年から寶永にかけては盛んに行はれたものと見え、「增補松の落葉」(寶永七年刊)「四河原涼八景」(宇治加賀掾作)の中に

祭文 紋ひきよめ奉るの。色のさかりはあづまなる八百屋の娘お七こそ。戀路の闇のくらがりに。出なきことを仕出して、罪は死罪にきはまりて、すぐに引出すあはれさよ。

とある。海音の「八百屋お七」が祭文の影響を受けて居る事は下の卷の「八百屋お七江戸櫻」によつて明かであるが、その上に巷說に基き西鶴の作意を綜案して作つたものと考へられる。

處が海音の「八百屋お七」著作の年月が實は明かでない。「外題年鑑」には寶永元年二月十五日から「八百屋お七歌祭文」を興行したとあるが、私はまだその正本も見ないし、又この時は豐竹座は一時退轉して居つたと考へて居るので、旁々直に從ふわけには行かぬ。次はずつと後れて享保十七年正月「八百屋お七戀緋櫻」を興行して居る。これは七行本と九行本とを見たが、これよりは前の出板と思はれる八九行本の「八百屋お七」と同文である。のみならず既に享保二年十月に江戸の伊賀屋勘右衛門が出板した竹本喜世太夫手づ

上

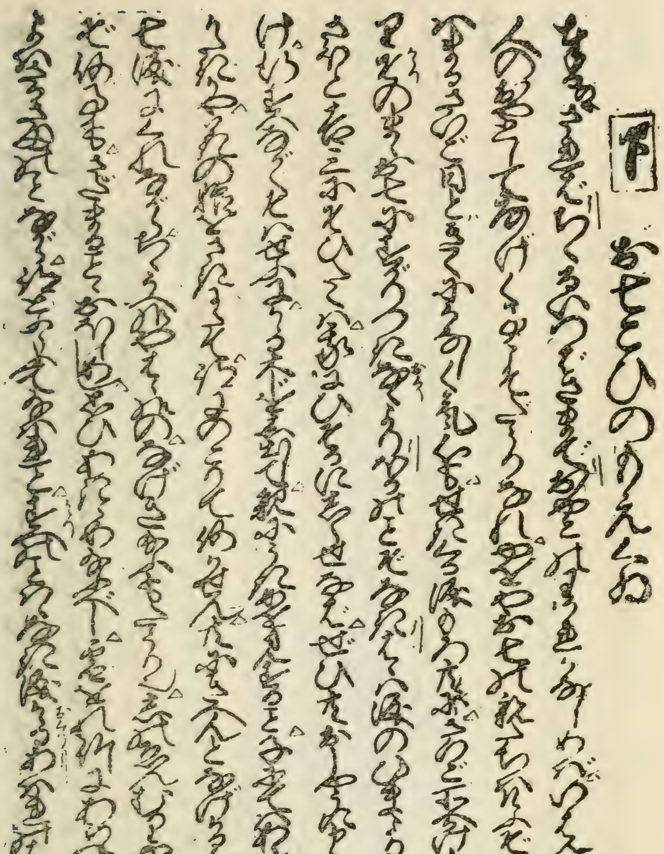
八百屋お七 [illegible]

[illegible]

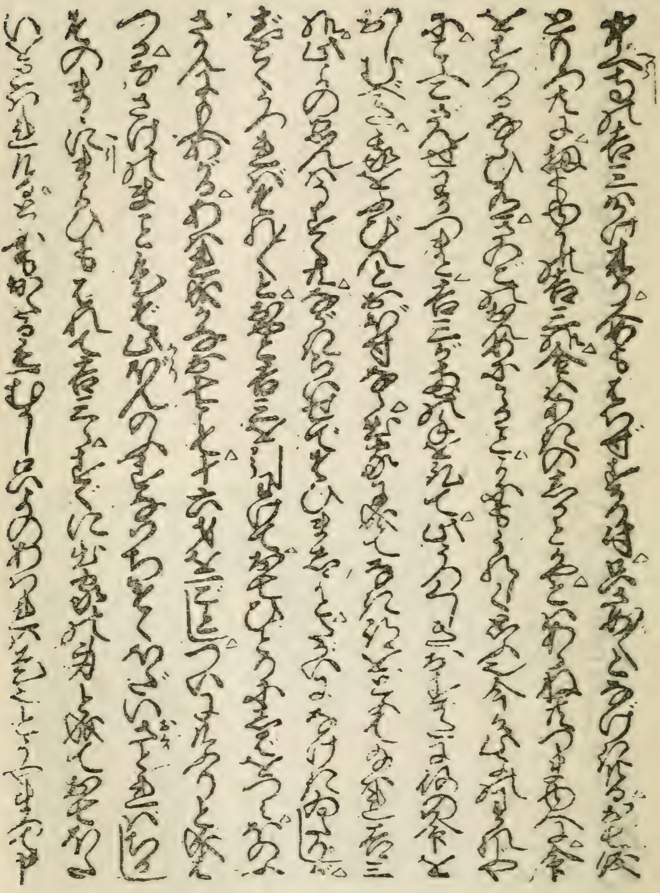
八百屋お七〔上〕歌さ

[illegible]

いもん其の一



同 其



二の

ま人形竹田次郎五郎の正本「八百屋お七戀緋櫻」には作者紀海音と明記してあり、文も殆んど同じであるから、既に上方に於てこれより以前に出て居た事は疑ふ餘地は無いが、只私は「八百屋お七歌祭文」と現存の「八百屋お七」とが同物であるかどうかには疑を存じ、又その著作年月を明確にし得ないのを遺憾とする。

本曲は上中下三卷に分れ、上卷は吉祥寺の場、中卷は八百屋の場、下卷は牢屋前から道行、鈴ケ森刑場と別れてゐる。上卷發端のお七濡れの場面は西鶴の雷鳴の夜に忍ぶ條の飜案であるが、この場面を以て始めたのは惡くはないと思ふ。次に玉子酒の場で戸倉十内が吉三を打擲して苦諫する趣向は極端な武士氣質を示してゐて、時代物の諫言の場が迷ひ込んだやうな氣がするが、大詰で吉三が自害する伏線を布いたのであらう。中卷も西鶴の宵の夜の情宿の飜案で、吉三が床下で話を聞く趣向は「曾根崎心中」の天滿屋の場で德兵衛が緣下に忍ぶ條に似て居る。簑と笠を置いてすご／＼歸



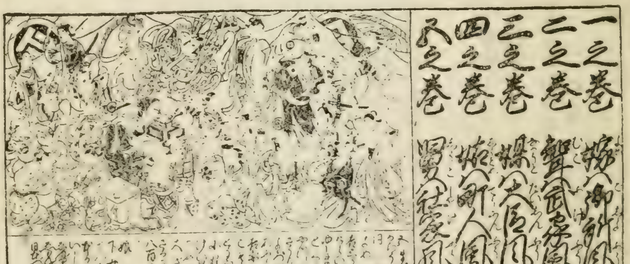
【色江戸紫】

るのは、お七の放火の動機を作る爲の技巧であらうが、こゝは西鶴の方が寧ろ徹底的で劇的である。鈴ケ森で吉三が切腹するのは「五十年忌歌念佛」の大詰を思はせるが、これは海音の好みでから脚色したものであらう。他の作ではすべて吉三は出家するに、これのみ異彩を放つてゐる。

この悲劇の原因は下卷の牢屋前に於ける久兵衞の詞によく表れてゐる。卽ち、

お七が爲に正眞の敵といふはこち夫婦。學問立つる家でもなし武士の一門持ちもせず。僅な八百屋商ひして。娘がいたづらすればとてさして恥にもならぬ事。お寺へ言うて早速に吉三を婿に貰うたら。今日のつらさはあるまいに。小家一軒建てうとて。いやがる緣を結びし故。むごい死にをばさするとて最期に親を怨めらもの。

といふのが極めて肯綮に當つてゐる。家普請の爲に武兵衞から二百兩の金を借り、その代りにお七との結婚



豐竹座興行の番附

を強要された時雨親は家の活計と借金に對する義理とだけに重きを置いて、一人娘をその犧牲として了つたのである。この點に於ては前のおその久松も亦その悲劇の根本動機は同一で、體面と義理との爲に戀愛が犧牲とされたのである。これは海音の世話物全體を貫く根本思想で、只それが主人公の自發的であるか、又は境遇上餘儀なくさせられるかの差異はあるが、要するに世間に對する體面と義理とに殉ずる事は同一で、而もその過程は非常に理想的であるといふ事が出來ると思ふ。

延享元年四月五日から豐竹座に上場された爲永太郎兵衛(千蝶)等の作「潤色江戸紫」は本曲の改作であるが、作者千蝶は江戸に下つた時小石川圓乘寺の八百屋お七の墓を一見した經驗や、江戸に於ける巷說などをも取入れた上に、原作よりは武家的背景を非常に濃厚にし、吉三郎を以て主家の重寶松竹梅の一軸を探すために苦心する事とし、お七もこれを助け度い爲に惡人の奸計にかゝつて放火の罪に處せられるといふ風の仕組にしてある。更にこれを飜案したのが安永二年四月北堀江座で興行した菅專助等の作「伊達娘戀緋鹿子」で、この作ではお七は吉三をして天國の寶劍を主君に屆けさせ度い一念で、火刑をも厭はずに夜半に火の見櫓の半鐘を打つて市中の門を開かせようとするといふ趣向を立ててある。これが歌舞伎のお七人形振の原據である。

お七に關する歌舞伎系統の劇や、豐後系の淨瑠璃や說經祭文に關する物などは非常に多く、これだけでも廣汎な研究題目であるから、今は一切この方面には觸れずに置く事とする。

校訂用原本としては八、九行廿六丁を用ひ、七行四十六丁本を對校用とした。

心中ふたつ腹帯（はらおび）

享保七年四月六日より豐竹座興行。作者紀海音。

お千代半兵衞の心中の實説については近松名作集下卷「心中宵庚申」の解題に述べて置いたからこゝには略する。

本曲の筋をいへばかうである、遠州濱松の士山脇十藏はその子半六が劍難の相がある故侍を止めさせよとの主君の情ある内命に從ひ、大阪新靱油懸町八百屋伊右衞門の養子となつて半兵衞と稱へて暮したが、一年人數改めに歸省中、女房千代が姑去りに逢つた。侍氣質の半兵衞は進退に窮し、女房と共に宵庚申の夜生玉馬場先大佛殿勸進所の門前で毛氈を布いて夫婦心中を遂げた。時に半兵衞は三十八、千代は廿四であつた。

二人の心中の動機を見るに、半兵衞の心中は彼の最期の場の言葉によく現れてゐる。卽ち

女房を去るに七つの法。去らぬに三つの教あり。中にも親の氣に入らぬ女房に添ふは不孝なり。又去所なき妻を去るは夫の義にあらず。とくに暇をやつたらば孝行の道は立つ。しかしそなたの親里は。養ふ風情もない貧家。すりや去所ない同然。去るに去られぬ教なり。此二道に差詰まり斯くなりくだる。

といつて居る。半兵衞は女房を去らなくては孝に背く、さりとて歸る親里もないやうな女房を出すのは夫の義でないといふヂレンマにかゝり、二人の切られぬ緣を腐り緣として、濱松で死ぬべき筈であつた命をこゝで義理の爲に捨てるのであると考へてゐる。お千代は既に書置にもあつた通り、離緣されても死ぬ覺悟であ

つた。されば別々にでも義理と失望との爲に死すべき二人が、夫婦の情愛を機緣に手を携へて情死といふ形式に出たのであると見られる。

心中二つ腹帶と題したのは、最期に臨んで半兵衞がお千代の白縮緬の抱帶を二つに切らせて、自分が舊主への申譯に先づ切腹したその傷口を卷かせると共に、他の一筋でお千代の腹なる四月目の兒にせめての心と腹帶をさせて心中をするのでかういつたものである。

本曲は二人の情死の一周忌を當込んで興行して大當りを取つたもので、竹本座は十六日後れて「心中宵庚申」を出したが、興行上に於ては豐竹座に及ばなかつたといふ。萬象亭の「反古籠」にいふ、

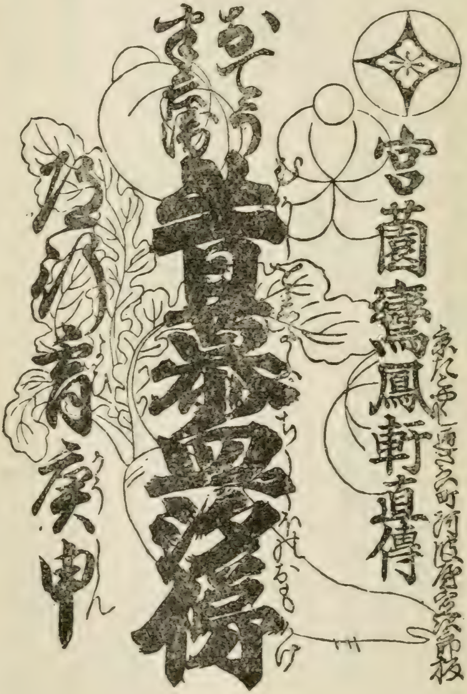
近松は西の作者、海音は東の作者なれば、敵同志の如く立別れ、新淨瑠璃の趣向など一言半句を通ずべきにあらず。然るに西の宵庚申と心中二つ腹帶とを見れば、いづれも八百屋の女房は善人なるを惡人、仁右衞門は惡人なるを後生願ひに振替へて書きたる事、孔明と周瑜が手の内に伏といふ字を書きたるが如し。

達田辨二いふ、海音勝利にて豐竹座大當なりければ、芝居より千日（法善寺のこと）へ石碑を建て供養しければ、彼の八百屋にて大に怒り、夜分石碑を芝居木戸前へ建てさせけるを、翌朝表方の者取退けんといひけるを、却つて景氣になるべき故其儘に置くべしと座本越前の指圖に依つて取退けずして建置きける。此事どつと評判になり大入なりしと。

名高い話で面白い事ではあるが、近松と海音との作は全然暗合とばかりも言へなからう。十六日の隔りがあるから、近松の作には海音の影響があると考へられない事もあるまい。兩作の優劣については、既に廣く論評しつくされて居るから蛇足を添へるにも及ぶまいと思ふ。

本曲興行より二十年を隔てた寛保元年五月廿一日から豊竹座で「後三年奥州軍記」の切として「青梅撰食(あをうめつはり)盛(さかり)」と外題を變へて繰返されたが、心中狂言の興行を禁止された時代であつた爲に改題したのみでなく、結末をも書變へてある。それが爲に作意も變つてしまつた。參考迄にその部分を次に掲げて置く。

南無三寶おくれじと氣を取直し一心に。南無阿彌陀佛と刄の先。のんどに當つれば身を悶え。手足をのべて苦しげな。中にも夫を打守り。打守りたる一念の。輪廻の心ぞ果てしなき。地イデ追付かんと半平も主のゆかりの一尺五寸。押戴き既にかうよと見えし所へ。おゝい〳〵と追手の者ども寄集まり。半平を見付けすがりつき刃物もぎ取り罰こなた



「傍　汐　血　墓　昔」

が死んでは恥の恥。ながらへるが孝行と。無理に作ひ歸る朝露に。めぐむや竹の若緑根ざしをこゝに記しける。

即ち女は死し男は助けられる事になつて居る。その他は同文で、たゞ名前がおてう半平となつてゐるだけである。このおてう半平の名は後迄も用ひられた場合がある。例へば宮薗節の「昔慕血汐俤（むかししたふちしほのおもかげ）」などもその一例である。

「二つ腹帶」はこの後舞臺にあとを絶ち「宵庚申」が繰返される事となり、又江戸劇場に於ては豐後節の地によつてこの道行の所作がしば／＼演ぜられた。但し詞章は改められ、外題もそれ／＼變つて居る。

九行二十九丁本によつて校訂した。

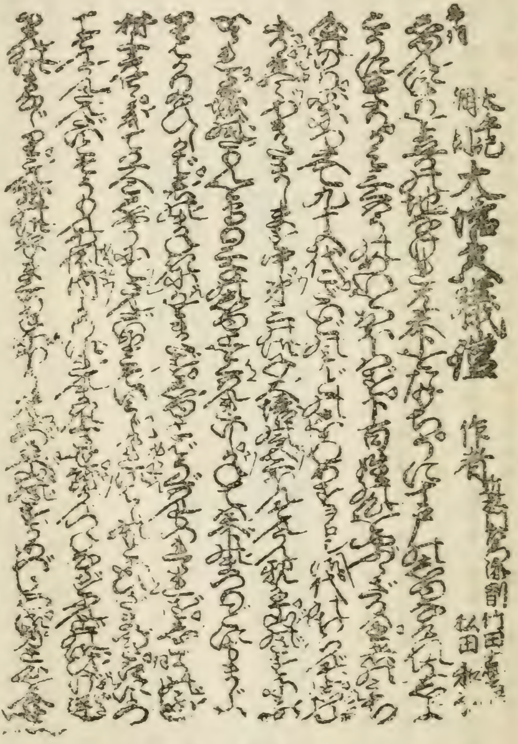
太平記綱目 大塔宮曦鎧（おほたふのみやあさひのよろひ）

享保八年二月十七日より竹本座興行。「太平記曦鎧」はこの改題。

作者については原版と思はるゝ十行本には本集に示したやうに近松門左衛門添削、作者竹田出雲掾・松田和吉とあるが、改題再版本と思はれる流布の七行本には單に近松門左衛門添削、作者竹田出雲とのみあるから、多くは竹田出雲の作と思はれて居る。併しこの時の竹田出雲掾は果して後の出雲掾淸定であるかどうかは疑はしく、或はその父に當る出雲掾（享保年中近江と改め、享保十四年歿）であつて、座本たるが故に名を列ねたのではなからうかとさへ思ふが、それは一歩讓るとしても、出雲よりはずつと先輩格であつて後に名作を澤山出して居る松田和吉が中心となつて、之に大近松が筆を加へたと見るべきである。松田和吉が後に名

を削られたのは、後に述べる筆禍事件の責を負つたのではなからうかと私は推測して居る。

本曲は太平記に材を採つた長篇の五段物であつて、大塔宮が關東を滅す盟主となられて、無禮講に托して密かに勤王の將士を召された。その有力な御方の一人として數へられた土岐頼員の妻は、夫のために實父たる六波羅の侍齋藤太郎左衛門を御方に引入れようとしたので却つて謀計が露顯して頼員は自害し、官軍は準備未だ成らざるを襲はれて敗れ、宮は一旦大和十津川の郷士戸野兵衛の許に潜まれたが、程なく勤王の士が諸方に蜂起して六波羅を滅し、齋藤は悲壯な最期



「大塔宮御鎧」

をとげるといふ筋である。その場面をいへば、初段(大序)紫宸殿の段、(中)土橋の段、(切)無禮講、つはもの萬歳、六波羅の犬高橋最期の場。二段目(口)陣太鼓、(中)勢揃へ、(切)松原合戰。三段目(口)切子の段、(中)若宮短册、(切)身替り音頭。四段目(道行)、熊野すゞかけ(口)義光錦旗奪還、(中)物狂、(次)兵衛館、(切)藤棚。五段目、齋藤最期。

この中では二段目の陣太鼓と三段目の身代り音頭の場とが最も勝れた場面であつて、齋藤は近松の「吉野都女楠」(正徳元)の小山田前司や「相模入道千疋犬」(正徳四)の安東聖秀などと同型の古老の武士で、剛骨頑強なる武士氣質を示す代表的の人物であり、胸中には慈悲心を抱きつゝも、表面には飽く迄大義親を滅すといふ態度を示す武士の理想が最も劇的に體現されてゐるので名高い。されば此作はその三段目を中心として後に操に於て繰返されたのみでなく、歌舞伎に於ても本曲初演の翌享保九年正月大阪中座に於て、又同十一年京都佐野川座に於て演じられたのを始めとして、屢々三都の劇壇に於て繰り返され「身替り音頭」として今もなほ舞臺に生命を有するのである。

本曲初段の「つはもの萬歳」の詞章を智略の萬歳といふ刷物にして時の人々が弄んだのを、同年六月其筋から禁止された。その事は月堂見聞集卷三十五、享保八年の部に出てゐる。その全文は左の通りである。

○六月十一日觸　　町代

一、町々にて大塔宮曦鎧、智略の萬歳と申繪圖用候儀、無用に可仕候旨被仰付候、此旨町内銘々へ可被申聞候已上

私に云、右之繪圖之文語、德若に御萬歳と、御代もさかえましまさず、是はきやうがる有様や、とき立歸

るあしたまで、みつ／＼はなしきしつをさぐり、たづねんと思ふはめでたうさふらひける。むかしの京はなんばの京、中頃は奈良の京、今の京と申すはよろづよこしまで、あの御天子を憚らず、我儘働くたひらの京、京のしおきは關東任せ、宮方ひづめ、公家衆たをし、百姓せたげ町人いじり、民はぎつちり／＼、まことにむねんにさふらひけると、問ひかくる　巳上。

表には北條氏が上は朝家を蔑にし奉り、下は萬民を虐げた事を述べて、當代の德川幕府のやり方を當てこすつたものであつて、これが京阪の人々に持囃されたのを止められたわけである。

校訂用原本は十行本及び七行本。

作者松田和吉　號は文耕堂、私的生涯は明かでない。享保期の竹本座の淨瑠璃作者で、當時に於て紀海音・竹田出雲・並木千柳(宗輔)と共に淨瑠璃作者の四天王と稱へられ、殊に筋立頓作の名人といはれた。その最初の作は正德三年正月竹本座上場の「河内國姥火」、次いで享保七年九月、近松添削の下に「佛御前扇車」、それから「大塔宮曦鎧」で、以上三篇には作者松田和吉の名を用ひて居る。それより享保十五年二月文耕堂の號を以て長谷川千四との合作「三浦大助紅梅靮」を出す迄の七年間は全く作がない。作者生涯の上から見てはいよ／＼活動期に入つたと思はれる時期に作のないのは怪しめば怪しめない事もない。享保十四年閏九月に世を去つた初代の竹本座の座本であつた竹田出雲(近江)との間に何か衝突でもあつたのではなからうか。享保十五年以後は年々新作を出し、寛保元年五月の「新薄雪物語」以後はその名が見えない。假りに「河内國姥火」を作つたのが三十歳であつたとすれば、この時は五十八歳である。作者として名を連ねた淨瑠璃廿四篇中、獨自のものは五篇、他はすべて合作であつて、前期のものには長谷川千四との合作多く、後

期の作には三好松洛とのそれが多いが、多くは文耕堂が中心であつたと見てよからうと思ふ。本名作集に收めたものなどがその代表作である。

須磨都源平躑躅

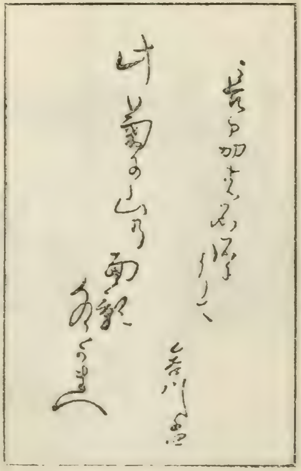
享保十五年十一月十五日より竹本座上場。作者は文耕堂・長谷川千四の二人。

平家都落の際、薩摩守忠度は藤原俊成を訪うた時、その情人たる俊成の養女裡菊の兄岡部六彌太に急を救はれ、又無官太夫敦盛は青葉笛を右大辨重虎の手から取戻す迄扇屋若狹の許に扇折となつて忍んで居た折、熊谷直實の情義と若狹の女桂子の身代りとによつて捕手の難を免れた。のち一の谷の戰に於て忠度・敦盛共にその恩人にそれ〴〵首を授けるといふのを骨子とした作である。第一段と第四段とは近松の「薩摩守忠度」の飜案であり、第三段は源平盛衰記の緒方傳説に基づいて脚色したものと思ふが、この仕組と第五段の重衡最期の條とは、頗る全篇の統一を破つて居る如く思はれる。本曲では緒方を尾形と書いてあるが、これは特に作意に關係があるので校訂の際もわざとその儘にして置いた。

第二段の切は「扇屋熊谷」の原作である。今日舞臺に生命を有する「源平魁躑躅」の扇屋の切には、本曲の脚色のあとに五條橋の場が附加されて居るが、これは天保三年二月大阪角座に於て始めて上場されたもので、三世歌右衛門の熊谷と江戸上りの七世半四郎の敦盛とで演じたのであるが、西澤一鳳が「一谷嫩軍記」の二の口組討を京都五條橋での牛若辨慶の格に當てて仕組んだもので大當りを取り、爾來行はれるやうになつたのである。（傳奇作書拾遺、下、一谷嫩軍記須磨都の話）

外題名は、一の谷の戰に義經が鵯踏谷に本陣を布く事に因んで、源平鵯踏に源平の戰を利かせたものと思ふ。

作者長谷川千四　大和の人、始め長谷寺の僧であつたが還俗して淨瑠璃作者となつた。淨瑠璃の處女作は、大阪御堂前の敵討を仕組んだ「敵討未刻太鼓」(享保十二年正月竹本座上場)で、時に三十九歲。それより竹田出雲又は文耕堂との合作の下に竹本座の爲に年年作品を提供してその數十篇に及んだ。然るに享保十七年人形遣の名手吉田文三郎及び當時四段目語りの名人と言はれた竹本大和太夫と相謀つて竹本座を脫退して別に一座を興さうと企てた。併しこれは不成功に終り、爲に千四は竹本座を退き、その翌享保十八年四月廿日に四十五歲で歿した。彼の同志大和太夫の死に後るゝ事約一ケ月であつた。千四單獨の作は「敵討未刻太鼓」と「京土產名所井筒」(享保十四年十一月)のみであるが、共にすらりとした佳作で、作者としては未來があつたやうに思はれる。油煙齋貞柳は彼の死を悼んで「寂光の都は行きて歸らねば土產に作る淨るりもなし」とよんだ。俳諧では椎本才麿の門人であつた。



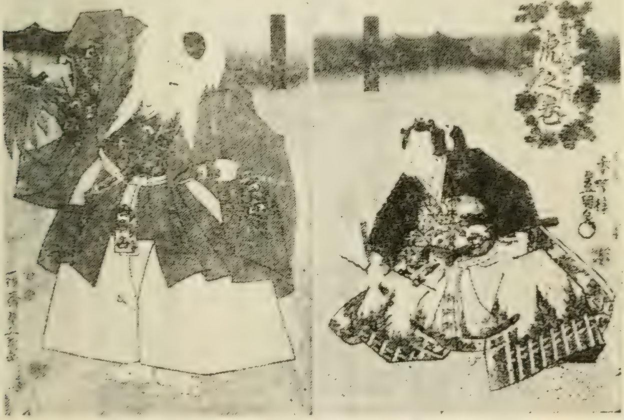
長谷川千四筆蹟

鬼一法眼三略巻（きいちほふげんさんりやくのまき）

享保十六年九月十三日より竹本座興行。作者は文耕堂・長谷川千四。

本曲の第一段・第二段は、源氏の方人であつた熊野の別當辨眞の子鬼若丸の出生から、書寫山の性慶阿闍梨の手で育てられ、のち自ら剃髪して辨慶と名のる事、その辨慶の姉楜の前と義弟の鬼三太とが楜の前の夫鬼二郎の行方を尋ねて諸國を巡る事等を主題とし、第三段は京今出川なる鬼一法眼の邸に兵法の秘書三略巻を得んとして下僕となつて入込みたる牛若丸の虎藏と鬼三太の智恵内とが、遂にその目的を達すると共に鬼一の述懐によりて、牛若が鞍馬山にて兵法を授けられし僧正坊は實は鬼一たるを知る事、第四段は一條大藏卿が僞せ阿呆となりて常盤以下の源氏の與黨庇護の事、第五段は五條橋に於て牛若丸辨慶と主從の契を結ぶといふに終る。

鬼一法眼の事は義經記の卷二にあるので世に知られて



新十八番内「虎之卷」

居るが、本曲に於てはこれに鞍馬天狗の傳説を合體させて趣向をこらしたものである。鬼一法眼の事を淨瑠璃に仕組みたるものには山本土佐掾の正本かと思はるゝ「辨慶京土産」があるが、これでは牛若が鬼一の娘千鳥と契つて一子千代若をあげたが、鬼一は平家を憚つて千代若を加茂川に沈めるといふ仕組になつてゐて、本曲とは趣を異にしてゐる。（藤井博士校註近松全集第三卷參照）

本曲の第三段が「菊畑」の原作であり、第四段の檜垣の茶屋から大藏卿耶も亦名高く、第五段は五條橋の前驅をなすものといへる。のみならず嘉永二年九月河原崎座に於て市川海老藏の鬼一法眼、岩井粂三郎の牛若丸で演じられた新十八番之内虎之卷は、本曲の「菊畑」から脱化して本行式となつたものである。

作中に多くの兄弟緣者を主要人物として働かせて居る點は「孝女五枚羽子板」を聯想させる趣向であるが、鬼一・鬼二郎・鬼三太の三人の兄弟が表面敵と味方とに分れて居りながら、内心に於ては同じく源氏に對して忠義の士であつた事は菅原の松王・梅王・櫻丸の成立に對してある暗示を與へて居るやうに思はれる。

歌舞伎で初めて興行されたのは、享保十七年三月大阪角座で、鬼一姉川新四郎、大藏卿嵐勘四郎、皆鶴姫藤井花松、牛若淺尾元五郎等の役割。次いで同年九月に中座でも興行された。

壇浦兜軍記（だんのうらかぶとぐんき）

享保十七年九月九日から竹本座興行。作者は文耕堂、長谷川千四の二人。

近松の「出世景清」の改作で、景清は頼朝を討つて平家の仇を報じようと苦心するに對して、箕尾谷四郎とその緣者たる根の井大彌太親子は景清を捕へて錣引の恥辱を雪がうとして肝膽を砕いたが、景清は終に長濱

の根の井の邪普請場に於て箕尾谷に捕へられて入牢したが、機を見て牢を破つて奸物岩永を屠り、兩眼をくり抜いて日向勾當となつて西下するといふ筋で、箕尾谷を以て景淸の年頃尋ねる弟であるとして、それに捕へられるといふ處が技巧の山である。

第三段目の口琴責の段が最も有名である。この場の岩永の詞に

阿古屋めが懷胎。もしもや此兒が女の子なら。琴ぢやくわん〳〵三味線で。ア、なんとやらと京中が諷ひしは此前表。

とあるのは、前の「一鬼一法眼三略卷」の第二段道行の中の

二上り歌もしもやツンテツトン。此子がや。みやげといはばよいそりや。えいずんどえ。琴ぢやトキキン〳〵。しやみせでツヽテツトン。うたうて聞かしよえいそりや。えいずんどえ。

といふのを利かせて居る。

又阿古屋の兄井庭十藏が景淸と瓜二つの容貌なのを利用して景淸の身代りにならうとする第二段の辻講釋小屋の場は、後の「二人景淸」の依つて生れる元となり、第四段の普請場の屋上立廻りは「八犬傳」芳流閣の屋根上の格鬪の藍本であるといはれる。

初めて歌舞伎で演じられたのは、享保十八年三月三日からの大阪角座の興行であつて、阿古屋芳澤あやめ、岩永藤川平九郎、重忠・箕尾谷嵐三右衛門であつた。江戸では元文二年河原崎座の顏見世狂言に「閏月仁景淸」といふ外題で、二人景淸の趣向を立てて原作をもぢつて興行した。その琴責の場の模樣は「歌舞伎年代記」には次のやうに見えてゐる。

梶原と重保の兩人にて、あこや人丸に景清がありか詮議。雪責のところへ、海老藏重忠羽折のなりにて、生酔にて姿あさり菊松に、傘をさしかけさせて出て、某が責めようわと、人丸姫に琴を調べさせ、阿古屋には三味線をひかせ、音色に耳をそばだて、異國本朝のためしを引いて本多平六に言ひつけ、手水鉢の陰より景清を見つけ出すを、梶原には新參の下人、七兵衞といふものなりとて此場を見のがす所大評判。

蘆屋道滿大内鑑（あしやだうまんおほうちかゞみ）

享保十九年十月十五日より竹本座興行。作者竹田出雲。

信田森の白狐と安倍保名と契つて安倍晴明を生んだといふ有名な信太妻の傳説に基づく戯曲中の代表作であつて、今猶舞臺に生命を有する名高い作である。

信太妻の傳説は古く「日本靈異記」や「水鏡」などに見えて居る狐か人の妻となつて子を産むといふ古傳説に式神を使つたといふ陰陽道の名人阿倍晴明の出生を附會して、彼の素性を神秘的にし、又その人の後世に遺した方術を超人間的の靈能あるものとしようとした結果成立つたものと思ふが、その代表的なるは正保四年刊行の「簠簋抄」の所説である、曰く、

彼ノ晴明ガ母ハ化來ノ人也。遊女往來ノ者ト成リ往行シ給フガ、猫島ニテ或人ニ被レ留、三年滯留有ル間ニ今ノ晴明誕生有リ、既ニ童子三歳ノ暮歌ヲ一首連ネ給テ曰ク、戀シクハ尋ネ來テ見ヨ和泉ナル信太ノ森ノウラミ葛ノ葉ト讀給ウテ掻消ス様ニ失セニケリ。故ニ晴明上洛ノ砌、先ヅ母ノ讀置キシ歌ヲ如何ト思ヒ、和泉國ヘ尋行キテ信太森ヲ尋入リテ見レバ、社壇在レ之、伏拜シテ母ノ様子ヲ祈誓スレバ、古老經タル

狐一疋我ガ前ニ出來リ、我コソ汝ガ母ナレト言ヒテ失セニケリ。是信太ノ明神ニテ御座スナリ。
とある。而して「簠簋抄」には晴明道滿行力爭の説話もあるが、是等によつて信太妻の戯曲は作られたものと思ふ。

さて信太妻の戯曲としては延寶六年刊行の山本角太夫の正本「信太妻」が原作であると思ふ。河内の守護職石川惡右衞門がその妻の難病平癒のために兄の蘆屋道滿の言に從ひ、若い牝狐の生膽を取つて服用させようと泉州信太の森で狐狩をした際、こゝへ參詣の攝州安倍野の城主郡司保秋の子保名が一匹の白狐を助けたのが緣となつて、危急を救はれ、その狐の化現の女と契つて阿部の童子を儲けた。童子七歲の時童子の母は籬に咲亂れた菊に見とれて狐の姿を現して童子に見られたので、「戀しくば……」の歌を障子に殘して姿を消す。のち童子は晴明と名のり、大内に召されて道滿と行力爭ひをして勝ち、重く用ひられるといふのが荒筋である。古淨瑠璃としては、結構も整ひ、場面の變化にも富み、詞章も典麗である。



「信　太　妻」

次に出た正德三年豐竹座興行と考へられる紀海音の作「信田森女占」は、この角太夫の「信太妻」の改作である。攝州の安倍の郡司安秋の子保名は繼母と惡臣との迫害を避けて信太森附近に閑居し、狐の化現たる葛の葉と契つて一子をあげて育てて居た。葛の葉は保名の妹菖蒲の前と石川惡右衛門との結婚の夜、女占ひに扮して阿倍の邸に赴いて、惡右衛門の兄蘆屋道滿と行力爭ひをして之に勝ち惡人の奸計を訐いたが、釣狐の計にかゝつて野干たる本性を顯した爲に姿を消す。その子が陰陽道の妙を得て大内に召され、父保名も世に出るといふ筋で、原作よりは技巧澤山で、且つお家騷動の色彩が濃厚になり、夢幻的の妙味が減じて居るやうに思はれる。



以上の二作及び既にこれより以前に歌舞伎でも演じられた作を總合した上に、更に結構を大がかりにし、筋を複雜にし、場面の變化を多くしたのが卽ち本曲である。第四段が全篇の山であつて、保名内の段、道行信太の二人妻、草別れの段、童子問答、二人奴の段とかうなつてゐるが、この中保名内の段が最も名高く、そ

の切なる狐葛の葉子別れの場面は、恐らくは角太夫の「信太妻」の同じ場面の影響を受けたらうと思はれる近松の「百合若大臣野守鏡」の第三段目の立花が還城丸に別れを惜しむ場面に負ふ所が尠くないと思ふ。太田南畝の「俗耳鼓吹」に「百合若大臣野守鑑」を評して、

島中ノ事妙々、鷹化爲レ女妙ニ層、母子ノ情態宛然如レ睹、俊寛島物語及道満大内鑑子別等、不レ能レ出ニ此範圍中一。

といつて居る。

本曲は人形芝居に於ても度々繰返されて居るが、四段目迄通した場合よりは、他の曲と取合せて四段目だけを出して居る場合の方が多い。

歌舞伎で演じられたのは、寛延元年八月大阪の角座興行が初めて、次いで寶暦元年閏七月には大阪中座、同十一年四月には又角座、江戸では元文二年九月中村座上演が始めてである。



「信田別二人妻」

浄瑠璃の他流の語物としては、詞章の残るものに宮古路豊後の正本「二人妻名残の信太」宮古路縫太夫の

正本「信田の別二人妻」、宮古路綱太夫の正本「葛葉狐別の段」等豊後系のものが多い。清元の名曲「保名」(文政三年七月都座初演)が本曲の第二段「小袖物狂」の改作たるは世に知られた事である。(本曲についてば、詳しくは歌舞伎研究第五輯の淨瑠璃解題の拙稿御參看を乞ふ)

作者竹田出雲　初代竹田出雲の二男千前軒と號す。享保年中父の名跡をつぎて出雲掾清定と稱へ、父の後を承けて竹本座の座本となる。興行上の手腕勝れ、人形遣の名人吉田文三郎を始めとして一代の名手をその座に集め、又人形の衣裳及び道具建を美にして操芝居の面目を一新し、歌舞伎劇を壓倒して操の黄金時代を現出せしめたるに與つて功甚だ大である。又兼ねて淨瑠璃作者として手腕を振ひ、その署名あるもの三十四篇の多きを數へる(但し「櫻町昔名花」は正本の所傳あるを聞かず)。この中十二篇の正本は出雲一人の名を署するのみなれど、他



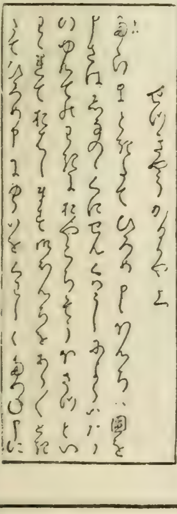
清元「保名」繪表紙

は長谷川千四・文耕堂・並木千柳等との合作である。たゞ作者生涯の上に於て疑はしきは、彼の父出雲が世を去るよりは約二ケ月前に出た「眉間尺象貢」と「蘆屋道滿大内鑑」が作られるとの間に約五年間全く出雲の作の無い事で（其他は毎年出て居るに拘らず）、或はこれより以前の作十三篇に出てゐる作者出雲の名は座本たる出雲が代表的に署したのではないかとさへ推測されないでもないが、これは姑く疑問として後の研究に俟つ事としたい。寶暦六年十一月廿日歿した。享年六十六。

苅萱桑門筑紫轢（かるかやだうしんつくしのいへづと）

享保二十年八月十五日から豐竹座上場。作者並木宗助・並木丈助。

筑前の大名加藤左衞門繁氏は酒盃に櫻花の散るを機緣に飛花落葉の無常心を起し、且その正妻と側室との假睡中に頭髪が蛇となつてもつれ合ふを見て外面如菩薩内心如夜叉の理を感じて發心し、高野山に遁れて苅萱道心といふ。一方に於ては豐後の大領大内義弘不逞の志を抱き、加藤家の重寶夜光珠を强要したが、其使者たる家臣新洞左衞門の女夕しでが守宮酒の計にかゝつて目的を達し得なかつたのを怒り、兵力に訴へようとする。繁氏の妻は一子石童丸と共に夫を尋ねて高野山に向ふ。學文路の宿の玉屋與次夫妻繁氏の舊恩を思つて母子を助けて登山した。母は女人堂で病死し、石童は辛じて父に邂逅した。折柄加藤の臣監物太郎が大



寶永版「かるかや」

内義弘に縄をかけて來る。苅萱道心は、助けるも殺すも私には計らひ難し、都へ行き奏聞し命乞をしてやれ、それを我子石童が筑紫へ送る𩊱(いへつと)ぞといふに終る。

苅萱の傳說は謠曲の「苅萱」に作られ、又早く說經に仕組まれて名高いもので、信州善光寺の親子地藏の緣起を主想とし、旣に寛永版さへもあるが、注目すべきは寛文二年版の「かるかや道心」である。これは

第一　かるかや道心の事
第二　御臺若君都へ尋ね上り給ふ事
第三　石童丸黑谷を尋ね給ふ事
第四　高野の卷幷大師の由來の事
第五　石童丸山へ尋ね登り給ふ事
第六　苅萱父子善光寺に地藏にいはれ給ふ事

といふ六段から成り、加藤繁氏は廿一歲の時花の落るを見て發心し、新黑谷にて出家した。當時十九歲の御臺は姙娠七ケ月であつたが、その子は生れて石童丸と呼ばれ、十三歲の時母と共に父を尋ねる事となり、黑谷から高野と父の跡を追つて、漸くにして尋ね會つたが、母は學文路の玉屋で病死したので、石童は獨り歸國した

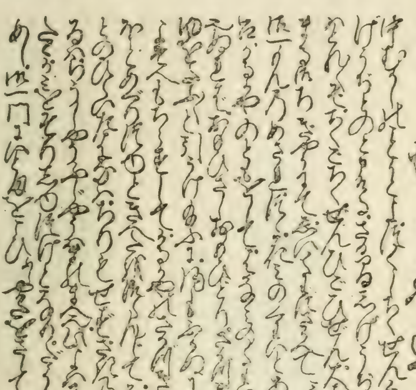


寛永版「かるかや」

が、一人の姉も世を去つてゐたので、石童は再び高野山に登り苅萱の弟子となつて道念坊と稱へ、信心堅固の道心者となり、八十三と六十三で父子共に大往生を遂げ、善光寺の側に親子地藏とまつられるといふに終る。

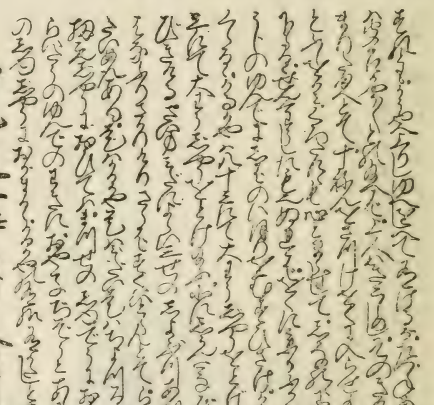
延寶二年四月刊行の「葛葉道心」もこの改作と思はれ、近松の「以呂波物語」（貞享元年）の四段目山の段などもこの影響を受けて居ると見る事が出來る。

本曲はこの說經の「かるかや」を原據とした上に、更に色々の趣向を取入れたものである。その二三の例をいへば、繁氏が妻妾の頭髮の蛇となつてもつれるを見て發心するといふのは「一遍上人繪詞傳」によつて傳へられた傳說にもとづき、又第四段の學文路の慈尊院の夢の場は近松の「百合若大臣野守鏡」第一段の山崎牛頭天王の夢の場の飜案であるといはれるが、この趣向は元祿十三年正月森田座興行の「景政雷問答」（初



寳文版「かるかや」巻頭

代團十郎作）の第四番目辻堂夢の場から脫化したものではなからうかと思はれる程似寄りの想である。次に二段目の狐川の渡の場で、二人の浪人が竹光を指して居たのを繁氏が指換の大小を惡む條は、正德二年京都布袋屋座興行の「加州櫻谷血達磨」（かしうさくらがやつちのだるま）の第二段の竹光の趣向の脫化と思はれるが、本曲に於ては、その時繁氏から指換の刀をめぐまれた二人の中の一人の浪人が後に、石童母子を助ける玉屋の與次であるといふ仕組は作者の働きといふべきである。



寛文版「かるかや」奥書

作者並木宗輔　大阪の人、通稱松屋宗助。千柳と號し、又舍柳・市中庵の別號がある。西澤一風に學んで、享保十一年、一風及び安田蛙文と共に「北條時賴記」を作つて大當りを取つたのを始めとして、爾來豐竹座の作者として元文五年に至る迄に三十篇を作つた。この中合作物二十二篇で、安田蛙文との合作が最も多い。初め並木宗助と書いたが元文元年

頃から宗輔と改めた。延享二年から並木千柳の名を以て竹本座の作者に列し、竹田出雲・三好松洛等との合作十一篇に及びこの中には傑作が多い。竹本座に止る事前後六年、寶曆元年豊竹座に歸り、「日蓮上人御法海」の添削をなし、更に「一谷嫩軍記」の三段目迄を作つて、此年の秋世を去つた。享年五十七。尤も宗輔の歿年については、寛延二年、寛延三年等の説もあるが、それでは作品との關係上年代的に矛盾が起る事となる。並木永輔・並木丈助(後に丈輔)並木正三等がこの門から出た。序に一言附加へて置き度いのは、田中千柳と並木千柳とは別人である事で、この人は豊竹座初期の作者であつたが、享保十年同座の作者たる事を辭して京都へ上つて了つたのであつて、宗輔の千柳は二代目の千柳になるわけである。

敵討襤褸錦（かたきうちつゞれのにしき）

元文元年五月十二日より「十二段長生島臺」の切として竹本座で興行されたもの。作者は文耕堂・三好松洛。

上・中・下三巻より成り、上巻は先斗町の段で、春藤助太夫のだまし討、中巻は春藤屋敷の段、若黨伊兵衛・佐兵衛の妻女身賣の段、道行に分れ、下巻は馬乘の段、非人の段、敵討の段より成り、非人に身をやつして大和大晏寺堤の三昧に起臥し



「加州櫻谷血達磨」より

て敵の行方を探索してゐる春藤次郎右衞門は返討に逢つて重傷を負つたが、高市武右衞門に助けられ、その後援によりて首尾よく本懐をとげるといふ筋で、これより後に出る敵討物戯曲の原型をなす名作といつてよいと思ふ。

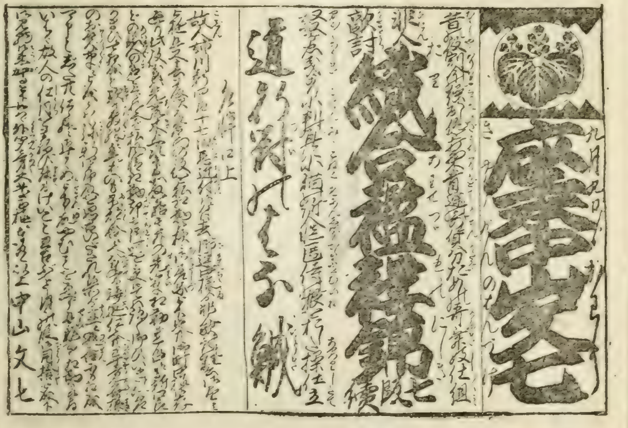
「非人敵討」は寛文四年大阪の役者福井彌五左衞門が二番續に脚色して門弟荒木與次兵衞をして之を演じさせて好評を博し、降つては享保期の名優姉川新四郎の得意の藝として屢々演じたものであつた。これについては「佐渡島日記」の次の記事は注目に値する。

非人敵討の狂言は、中古姉川新四郎此仕内を始めて、仕出せしやうに若き人は思へども、非人敵討の狂言は、むかし荒木與二兵衞といへる立役仕始めたり。其時の姿は病かづらにて、隨分くろぐ\と油を付け、顏のつくりも白粉濃くぬりうつくしくし、衣裳は白小袖の無地、大廣袖紅絹(もみ)うら、花色の丸ぐけ帶を前に結び、手足も隨分白くして出立せられし由、是予が親傳八話にて聞傳へたり。

愚按、元祖坂田藤十郎申されし、非人の心得やはり自分の考にてなし、古人申置きたる事此荒木與次兵衞のせられし非人敵討の出立にて藤十郎申されしと符合せり。これを思へば、姉川致されし非人の心得は、雪と墨ほど違ひとは此事なるべし。新四郎非人の仕打よき故、人々每度申出すなれど、心得は甚だ拙し。是姉川を譏るにはあらず、古人の說と合しての論なり。仕打も古へとは甚だ野卑なり。試し物に來りし加村宇多右衞門がせりふに、敵討といふは命惜しさにいふと散々責めかける時、竹に仕込みし刀を拔き差付け、青江下坂二つ胴に敷腕(しきうで)ずんどよう切れますへ、、と笑ふ。荒木氏始めてせられしは、靑江下坂二つ胴に敷腕といひ聞かせ、差付けたる刀を兩手に持ちながら、左の方へ引寄せ、調子を低く、ずんどよう切れますへ、、

へ、、と會釋する。此善惡は後の藝者考へ見るべし。

これは非人敵討の眼目たる大晏寺堤の場の春藤の演出法に關する荒木與次兵衞と姉川新四郎との相違について、寫實主義の是非を論じたものらしく思はれる。その論旨の當否は措くとして、今日でも「大晏寺堤」の山となつてゐる「青江下坂二つ胴……」のセリフは既に荒木與次兵衞時代からあつて、やはり山であつた事がわかる。而して姉川新四郎の非人敵討と本曲とはどちらが先かといふに、確證はないが本曲が作られてから九年後の延享元年二月刊行の役者評判記である「役者紋二色」に「姉川殿二月六日より大和國非人敵討五段續に春藤次郎右衞門の役、幾度か見物致したれども見飽かぬ上手藝」とある。姉川新四郎の藝歷から見れば、此頃は既に晩年といふべきであるから、享保年間より演じて居たものと見て差支ないと思ふ。自然この名優の演出法が本曲によつて操に取入れられたと見る事が出來よう。而して本曲は操芝居に於てこの後しば〳〵繰返されたのみでなく、逆に



「敵討襤褸錦」

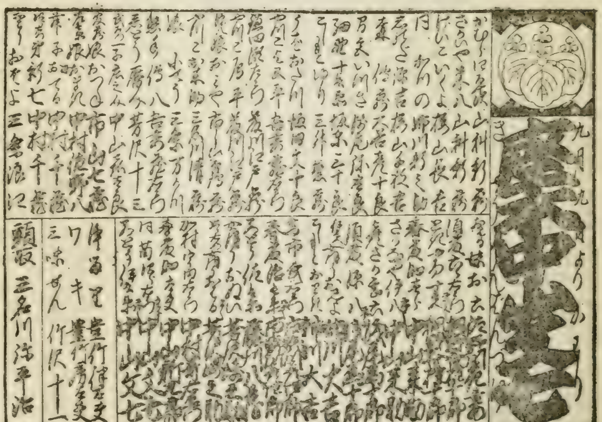
歌舞伎へも移入されて、謂ゆる「大晏寺堤」の原作となつたのである。

明和元年九月九日から大阪角座に於ては、姉川新四郎の十七回忌追善として、「織合襤褸錦」（おりあはせつづれのにしき）と題して、本曲を多少改めて中山文七の春藤次郎右衛門で興行し、之に對して中座では九月十日から「禮服襤褸錦」の外題で、嵐雛助の春藤、道行は伊兵衛嵐三五郎、佐兵衛嵐七五郎で人形仕立にして角座と競爭して、大いに非人敵討の熱をあふつたが、結局角座の方が好評で、これより後は歌舞伎の非人敵討には「織合襤褸錦」が行はれたのみでなく、文政三年九月の御靈の操芝居ではこの外題で道行と大晏寺堤の段とが操芝居でさへ興行されたのである。

釜淵雙級巴（かまがふちふたつどもゑ）

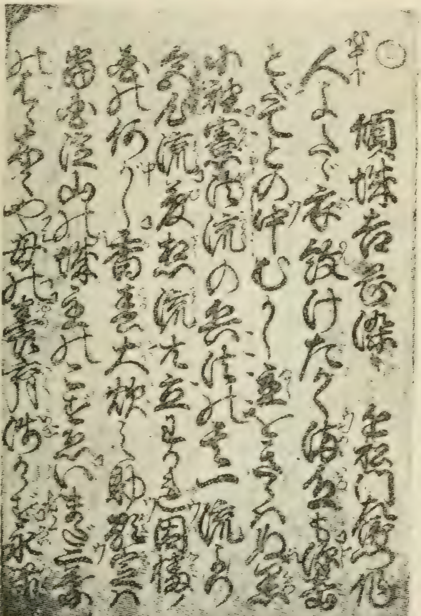
元文二年七月廿一日より豐竹座興行。作者並木宗輔。

石川五右衛門を題材とした最初の淨瑠璃は松本治太夫の「石川五右衛門」である。年代作者共に不明であるが、



初演番附

恐らくは貞享か元祿初年迄の作であらう。强盜石川五右衛門は遠州の產で、のち河內石川郡に住んだといふ傳說を遠州濱松の大名大野家のお家騷動に取合せて脚色したもので、その荒筋は次のやうである。大野師安の嗣子藤若の傳眞田藏之進幸貫は、養君を陷れようとする惡人の爲に迫害を受けて河內に遁れ、生計に窮して石川邊に於て妻に茶見世を營ませ自分は石川五右衛門と名のり譜代の家來彌之助と共に駕舁を表商賣として、內實は盜賊を働いてゐたが、橋本の宿屋で故主の姬君を殺して財物を强奪したのが運の盡きで、彌之助は切腹し、五右衛門は捕縛せられて一子小源太と共に七條河原で釜煎の刑に處せられる。こゝ迄が四段で、第五段は獨り赦されて尼となつた五右衛門の妻は京の小鹽山附近で藤若に邂逅し、奇計を用ひて惡人を滅し本領に安堵するといふに終る。古淨瑠璃式のお家騷動物であるが、五右衛門を以て再び主君を世に出させようとする心から强盜と迄成下つて遂に刑せられる處が眼目で、かゝる義賊が釜煎とは酷に過ぐるが如く思はれる



「傾城吉岡染」

が、釜煎は見せ場であつたものであらう。

此義賊といふ想を受繼いで、これを吉岡憲法の事件と結托させたのが近松の「傾城吉岡染」(正德二年作)である。此作では石川五右衛門は兵法の師匠たる憲法の爲にする生活の資に窮して、ふとした誘惑より遂に强盜となり變幻出沒の妙を極めたが、憲法親子を救はうとした爲に捕へられて、釜煎の極刑に處せられるといふ事になつて居る。五右衛門が盜賊となつたのは、彼に言はせると「巧んで是を始めず、我人盜みの始まりは、自然と先から持つて來て盜めと言はぬばかりなもの、その堪忍が佛の手引、そこを堪へず盜み取る、それこそ天魔の導きなれ」といつて居るが、その徑路が此作には巧妙に描かれて居る。そして五右衛門は盜賊となつてからも「我が盜みはもと主君のため師匠のため」と思つてゐたのであつた。

本曲は釜煎の場は前の作を大體に於て踏襲して居るが、一篇の主人公を石川五右衛門として、「傾城吉岡染」の憲法と傾城吉岡との關係を飜案して五右衛門と瀧川との關係とすると共に、憲法と吉岡との間の子を五右衛門と先妻お律との間の子に作り變へ、又五右衛門は後になつては心ならずも周圍の事情に引きずられて强盜を働いて居るが、義理も人情も辨へた、所謂人間味の多い五右衛門として描き出されて居るのが特徵であると思ふ。上卷は河内美豆野狩場騙りの段より島原澤瀉屋の瀧川盜出しの段迄、中卷は柳の馬場當馬浪宅より五右衛門住家の繼子いぢめより瀧川本心告白迄、下卷は藤の森の刀賣、五右衛門父子召捕、七條河原釜煎に終る。中卷繼子いぢめと下卷釜いりとが名高く、他流でも取つて語物とした程である。

本曲の改作に「石川五右衛門一代噺(いちだいばなし)」といふのがある。並木正三の作で明和四年十月十四日から竹本座で興行された。石川五右衛門は伊豆の大名花房家の老臣堤當馬之丞の女と當馬の甥岩木兵部との間に生れた私

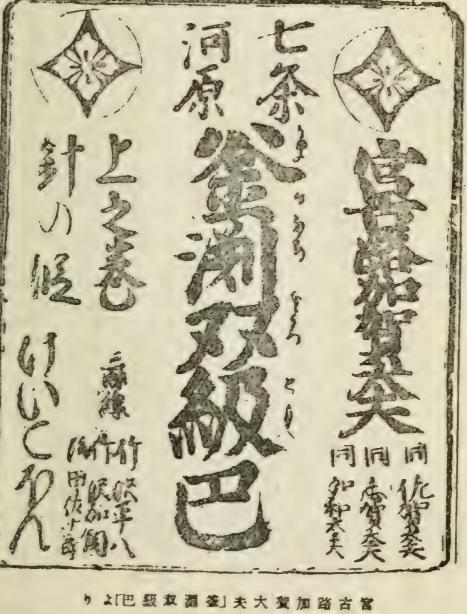
生兒で、堤家の奴伊達平の兄萬作の郷里石川村で生長し、主家沒落後、その遺孤お此を守り立てる爲に義賊となり、遂に主家の重寶遠州流の茶器七種を手に入れて主家を再興させ、自分は釜煎の刑に處せられようとする時特赦されて出家するといふ筋である。

此外に石川五右衞門の戯曲としては、淨瑠璃では犀が崖の來作仕家や壬生村の小冬殺しで名高い「木下蔭狹間合戰」(寛政元年二月)や、歌舞伎では「金紋五三桐」(安永七年)を始めとして澤山あるが、只今はその穿鑿には觸れる必要もあるまいと思ふ。

ひらかな盛衰記

元文四年四月十一日から竹本座興行。作者は文耕堂・三好松洛・淺田可啓・竹田小出雲及び千前軒の五人であるが、文耕堂が立作者である。

木曾義仲の滅亡より一谷の合戰に至る迄の間に於ける義仲の關係者と梶原源太親子の動靜とを主題とした



宮古路加賀大夫「釜淵双級巴」より

作である。而して三段目迄は木曾義仲の遺兒駒若を守立てようとする人々の苦心とそれに伴ふ波瀾葛藤とを中心にして、これに樋口の次郎の復讐計劃を取合せて想を構へたもので、第三段目の松右衛門内より逆櫓を眼目とする。四段目は梶原源太の母と遊女梅が枝との源太に對しての一人は母として、又他は情人としての眞實の愛情を中心としたもので、無間鐘(むけんのかね)の趣向が頂點をなして居る。

無間鐘の趣向は既に元祿時代より暫々劇に仕組まれて來たが、本曲によつていよ／＼著名となつたものである。今その系統を概觀しようと思ふが、それには「歌舞伎年代記」の享保十六年春「傾城福引名護屋」興行の際の次の記事が要を得て居る。曰く、

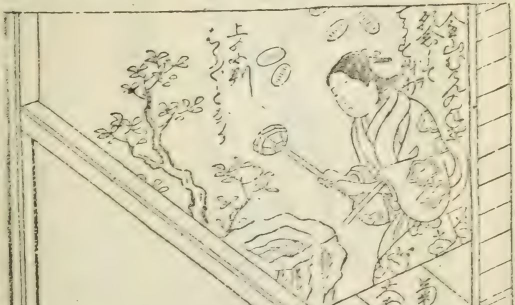
無間の鐘の事、遠江國小夜郡西山村に無間山觀音寺の釣鐘を撞けば、未來は無間地獄におつると雖も、此世にては富貴の身となるといへる事を狂言に取組み、元祿二巳年大阪荒木與次兵衛座にて、傾城小夜の中山といふ名題に、谷島主水といふ若女形、けいせい裏葉にて鐘を撞く所作始めなり。其後元祖芳澤あやめ、京都早雲座にて鐘をつく、其時の所作は水木辰之助、すなはち元祿十四年の事



「むけんの鐘」享保十八年所演

なり。又享保十三年春、京市山助五郎座にて、瀬川菊之丞、庄屋六右衛門娘おすまにて勤むる。此時趣向をかへ、手水鉢を鐘になぞらへ打ちしが始めなりといふ。同十六年亥春中村座にて葛城にて勤むる。初日舞臺にて金を包む物なき故、衣裳の袖をまことに引切りたりし其思ひ入りよかりし故、翌日より其通りにせしとかや。その後大阪竹本筑後掾座にて元文四年未四月十一日ひらかな盛衰記といふ新淨瑠璃初日なり。是福引名護屋の菊之丞の無間鐘を取組み、淨瑠璃の文句にも袖引きちぎり三百兩、包むにあまるよろこび泪とある事、瀬川の家の藝、代々の譽なり。

とある。卽ち無間の所作は歌舞伎に行はれて、それを淨瑠璃に取入れたものであるが、それは本曲が始めではなくて、旣に紀海音の作「傾城無間鐘」(享保八年七月)に仕組まれて居る。併しこれは子を思ふ一念で、親の畫いた無間鐘の畫を搗いて音を出すといふ趣向になつて居る。手水鉢を撞くのは元祖菊之丞の時からであるが、それも享保十三年春に京都市山座で「けいせい滿藏鑑」といふ外題の下に演じた場合には手水鉢を手拭掛で打つたのであるが、江戸で初演の時に柄杓を用ひ、この型が長く殘り、又その時の舞臺の仕ぐさが



「けいせい滿藏鑑」より

本曲に取入れられていよ〳〵名高くなり「梅が枝の手水鉢」とうたはれるに至つたのである。この點から見れば本曲は無間鐘の所作の上に於ては最も注目すべき作品である。これについては作者の當込みもさる事なれど、梅が枝の人形を遣つた吉田文三郎の功を見遁してはならぬ。「倒冠雜誌」(寶暦九年七月刊)に「ひらかなの松右衞門、別して梅が枝の無間の鐘は古今無雙の事、尤も菊之丞の形とは言ふものの、舞子或は年忘れの座敷狂言にもして持て囃すは世の人の知る所なり」とある。

本文の中に挿入した大序から三段目の切迄の通しの畫面は文化五年正月江戸の河原崎座で興行された時の繪草紙であるが、全場面を知る上の便宜にもと思つて、勿論さう珍らしいものではないが入れたわけである。

○

校訂の方針については近松名作集と同じである。卽ち語り物たる淨瑠璃正本を忠實に活字で飜刻する方針で、句切りは全部原本通りとし、節付の符標も近松名作集と同じ程度に之を保存して、語り本としての特殊文學の原形を尊重すると共に、一面に於ては假名遣を正し、適當な漢字を宛てて讀解の便を圖る事とした。

校訂用原本たる正本については、享保以前のものは、その依據した原本を一々各篇の解題の終りに示して置いたが、享保以後のものは七行初版本を底本として、十行本のあるものは之と對校したもので、それ等は一々斷らなかつた。

挿畫については成る可く種類樣式の異る上に參考にもなるものをと思つて出來得るだけの努力はした積りであるが、本來原本に無いものを新に入れようとするのである上に、此方面の材料はいくらもありさうに思

はれて、いざとなると實際は容易には思はしいものが得られないので、豫期した結果を得られなかつた事を諒とせられ度い。

▲追記……「金屋金五郎浮名額」解題の項に宇治加賀掾の正本「難波役者評判」未見云々と述べて置いたが、最近その全文を浪速叢書所收の「攝陽奇觀」によつて見たが、正本の卷頭には「かなや金五郎正本」とあつて、題簽に「難波役者評判」とある點や結末が增補されて居るかに思はれる點などから考へて、やはり此方が後ではなからうかと思ふ。解題前半刷上後に氣のついた事故、こゝに粗漏を謝すると共に一言書きそへて置きます。(黑木)

昭和二年十一月

校訂者しるす

[illegible]

加賀様
直傳　全

暦

きんちんもけいげんりきやうど
ぐいきやうゆきうかろと元年くふ
抑人皇四十一代の持統天皇と
申し世にはまうでもめづらしく
ぐんくわひどくとあはれことゑひ
ざんぎり御きくとせのへいきよそんの
めぐみひろきみけ太上天皇と

曆

加賀掾直傳

乾坤開け萬物生ず。形象饒かなる時津國。抑も人皇四十一代は。持統天皇と祝し世の御政正しく。鰥寡孤獨を憐み飛龍殘疾を救はせ給へば。諸天の惠みひさかたの太上天皇とオロシはじめて崇め奉る。地朝暮玉座の左右には。大納言の輔少納言の輔二百餘人の宮女まで。衣紋のかざし色映えてフシ御殿輝くばかりなり。時の關白には鷹司の公經に從ひ諸卿冠を上げざりき。扨又天下の記錄者として三條前の中納言兼政。大作の朝臣忠賴此兩家として。國土の善惡を糺され治まる時も今日は早や。白鳳二年卯月一日になりしかば。上一人より萬民まで。着替へて今朝の薄衣錦の袂翻へす。歌春過ぎて。夏來にけらし白妙の。衣ほすてふ天のかく山と。御製の風か曙も。いまだ霞の八重立ちてフシ夏の風情はなかりけり。げに去年詠みし歌のさま。此景色には本意なからんとの宣旨なり。かゝる折節天文の博士。木津良の廣信傳奏を以て奏するは。詞そのかみ欽明天皇の御宇に。新羅百濟國より曆の秘書を渡し畢んぬ。それより世々を經て例へば日月のめぐり。又は節の變る事つら〳〵これを考ふるに。一年の行事にさへ一日四分度の一刻程縮まり候。さるに依つて萬木千草の開落まで悉くたがひ。時候さんれい切ならず。地色願はくは新曆の二卷。元嘉曆儀鳳曆にして年中晝夜の呼吸まで。審かに仕うまつりなば。萬人の喜び末世の重寶フシ是に。過ぎずと言上す。君聞し召され誠に欽明の曆書程經れば。此度曆の改正すべし。則ち當國の大社なれば三輪と春日に參詣し。萬神慮に任すべしと。兼政忠賴に勅命あり御簾は下らせ三重へ給ひける。フシ古き軒端に。地色名を埋む高橋の宰相吉連とて。先帝天武に仕へ給ふ人なるが。定めなき世の定めとて廿二歲にて死し給ふ。されども筋なき腹に忘形見の姬君つい宿らせ給ひ。蘭帳の內に銀燭の光を受け。秋の夜月も明けやすく。スヱテ春さへ日影暮れ早く。地あてなる遊び品かへて。玉琴玉筆フシ玉手箱。地色悔しや昔忍ぶの草宿は。さながら野となりて梟松桂の風の外。高家の一類もましまさねば。吉連の息女ぞと申し上ぐべき便りもなく。侍人まで見捨て行きしに。やう〳〵乳人の玉水が。流れを汲みて源

を濁さず。嬰兒總角の御時より育て奉りてうつくしみ。娥皇女英の古を欺き フシ見し人。消ゆる。露なれば。朝顔の姫と御名をなかばに變へけるが。今思へばよしなやな所もしかも朝日の里。この儘萎ませ給ふかや我こそ賤しき腹を貸し奉れ。父の御名は朽ちまじとらふたけて匂やかなる顔ばせより。繋がぬ玉をはらはらとこぼし。ア、扨うたての憂身の今。さりとては恨めしや。歎かしつらし悲しやと フシ暫し。魂なかりけり。姫も思ひは諸聲の沈みは果てず袖の淵。水なき里にかなはぬは包むに洩るゝ涙川。渡りかねたる高橋の。家は絶え行く女ぞと身の上恨む明暮れの。せめてや憂きを。忘ると。地手飼の鳥の馴染み籠鳥の雲を戀はざる有様は。スヱテげにも優しう見えにけり。地されども此度一天の君の御惠み深き故。生けるを放てと觸れければ。力及ばず姫君はなれも名殘の今ぞとて。手づから籠をあけ給へば遠く遊ばず卯の花の。亂れし枝に羽を垂れて。爰を瀬に瀬にほとゝぎす樣々聲を 三重へ重ねける フシかゝる所に。地かつて目馴れぬ田夫野人とがりおふこに鎌を携へ打連れて來りしが。此鳥を見付け何の苦もなく捕へしを姫は垣間見走り出で。詞ならうそれやこちのぢやが何故捕りやる。田夫ども聞きも敢へず。何羽のあるものをこちのとはどこから許しを取られけるぞ。地扨も世界を我儘なる言分と フシ一度にどつと笑ひけり。地色げに尤なりさりながら。心ありての放ち鳥平に許せとありければ。詞小憎き男子して。心ありとはこの男の內いづれか思ひ付き給ふ。相性よくば入聟にといへば又一人進み出で。いや／＼無用の緣組いかなる賤しき女ぢやも知れず。地色兎角論をやめて今日立つ市の味酒も。今宵は是を肴にと一つなる口々に。雑言はけば姫君堪ゆるに堪へられず。守刀を抜きそばめ打つてかゝれば田夫ども。いや大膽なる小女郎め只打殺せとひしめく所へ。兼政春日の下向なりしが此由を御覧じて。詞やあ／＼こは何事ぞと宣へば。地色母はお馬に縋り始終を申し上ぐれば扨々につくき爲業かな。王城近くありながら今度の御觸れ聞かざるか。殊更人家の狼藉かれこれ以て重罪なり。一人も遁すなと宣ふ聲に驚き フシ皆ちり／＼に逃げてけり。地色母は餘りの嬉しさに扨有難やお蔭にて。姫を一人まうけしと手を合せ禮すれば。ヲ、目出度し／＼仕合せと。宣ひながら姫君に移し心の遣瀬なく。スヱテ胸ときめけどいかにとも。フシ詞をかくべきよすがなく。扨も咲きたる卯の花かな。あれ一枝賜れかし土産にせんと宣へば。あつと答へて姫君惜しげもなく手

折りつゝ。差出せしが暫らく扣へ持ちたる花を打眺め。うつゝなや自らは日陰に萎む身にし故。明暮れ心うの花と眺めをりしに縁とて。都へ貰はれ行きぬるか扨美ましあやかり物と。しを〳〵として差出す手を花共にじつと締め。いや此花は媒介よ。誠は御身の花の顔。幾重に思ふ縁の紐さはりなき時蔭に來て。姿の蕾手折らんに必す忘れな忘れじと。互に詞を殘しつゝ別れ〳〵て 三重 へ歸らるゝさる程に。地 大伴の朝臣忠頼は一家一族召集め。詞 此度記錄の兩家とて暦の改正仰付けられ。兼政は儀鳳暦某は元嘉暦を差上げしに。兼政が儀鳳暦拔群勝り。一々道理に徹し言句絶すの所なりと是に御詮議極り。則ち兼政を飛鳥の大納言に任ぜらるゝ事全く彼が學德の厚きにあらず。是皆關白公經が取持つ故なり。其上重ねて宣旨あり。富士の高嶺に五丈八尺の赤銅の柱を立て。三日三夜の晴天を見合はするよし彼是以て當家の滅亡。地色 所詮兼政と差違へ浮世の妄執はらさんと。思ひ定めて暇乞ひ フシ おの〳〵。慘乎鎭まれり。地色 爰に豐浦の虎若とて。忠頼が甥なりしが世上の人を人ともせず。公家とも武家とも片附かぬ傍若のをこの者進出でて申す樣。詞 御憤り至極せりさりながら。死して再び歸る身でなし先づ此事は思召しとまらせ給へ。某が計ひにて彼奴めを一人轉びさせ。こなたは世に榮えるてだて但し厭かといへば。やれ虎若それこそ望む所して。其手段はいかに。いや〳〵お前にては憚る事あり。地色 先づ兼政が書いたりし色紙あらば賜るべし。某先だつて駿河に下り思ひ付きたる計略それはその。がゆき所を掻く如く御本意逐げさせ申すべし。心安く思召せと扨同じ心の浪人に。戸無瀬の宇右衛門語らひて其内談を牒す内。はや兼政の富士禪定彼の赤銅の柱をば。引出すと告げければやれ遲なはりて詮もなし。兎角は路次の相談ぬかるな宇右衛門急げやヲ、。〳〵。〳〵。ヲ、おつとせくまい此智略。粹をこかする嵌まらする一人轉びぞ勇めや。〳〵いさめと打連れ。館を出でにけり。

第　二

地 通路や姿の入物三枚肩。昇夫が急げば中宿の。貸編笠の目つけ紋丸の内に二つ星。是も逢ふ夜は織姫の フシ あまの安倍川徒歩わたり。嬉しや誰やら招きゐる。手越の新七末社にて粹の出立の替衣裳。男自慢や戀知りやわけよき都の大臣と。虎若や宇右衛門はばつと出口の茶屋よりも。先へ知らせて待つ暮に揚屋町へぞ 三重 へ ナゲフシ 恨みながらも。月日を送る。さても命。はある。もの フシ 嘘でかため

し。身の勤め。是いたづらの　フシ外ぞかし。扨も我。親のためとて色里に。苦界十年と定め禿の時はすたるなり。扨水あげの初姿。髪も形も替小袖　小オクリしやなら。しやなら〳〵と歩み行く。素足素顔のなよやかに。昨日にかはり今日よりは。フシ宿屋の嚊も。様つけて呼びましや。地おうお立ちなされませはしくも。跡より遣手のせめくれば　フシ仕舞太鼓の。遣瀬なく。紋日〳〵の物思ひ。頼む方なき男あまの　冷泉節いくたび。沈む。身あがりの。鐘の別れやまだ夜深きに　小オクリ捨てゝ。行かるゝ床ばなれ。好いた男は寢ても。覺めても。夢にも更に忘られず格子。叩くを。合圖にて。戀の中戸の腰掛や。是さゝやきの橋となり　フシ忍び〳〵の間夫狂ひ。たんと氣の毒ある時は。いつそ殺して貰ひたやア、まゝならぬ世の中に。思はぬ客にも。逢はねばならぬ三

瀬川。流れの身こそ悲しけれ。それさへあるに無理口舌。言葉の山に登り詰め。書ける誓紙も聞き馴れて。神も罰をば當て給はず。例へば爪をはなつとて。誠の爪とな思しそよ諸譯知らずのお敵達。賢顔をばし給へど。こちの仲間の仕掛にてつひに身代たゝまする。ましてや親にかかりなど。死に一倍も借りたえて。所の仕居もならざると聞けば我から我が心。思ひ廻せば恐しと　フシ思ふ。ばかりぞ誠なる。扨親方の。手前より。四度の仕着の其外は。皆借錢と積り行く年の暮過ぎわつさりと。正月買の初君は　フシ神ぞいとしさかはゆさの。餘り〳〵てそれながら。更に勤めと思はれずあはれ。子の日の松ならば根引になりて淩ぎ來るく。る。わの苦患を遁れんと。嘘に誠の物語隨分洒落たる男ども。それはさうよと不便がり白けて。座敷は　三重へ見えにけり。

フシかゝる所に。地虎若宇右衛門ざゝめきて蔦屋は是かと内に入る。細道ながらお通りと亭主が輕口聞き捨てゝ。ばつと座敷に居流れ扨内儀呼び出し近附になり。詞新七が知る如く身ども等は此里嘗て不案内。地色萬事頼むとゆふ露を。重く打てば押戴き。先づお慰みに女郎様がたを借りてお目にかけうといふ。詞いやさ借り者はむつかしき。此所にて隨分張強き太夫を逗留中の約束せよ。地色畏り候と女房立てば亭主が代り。問はず語りの高笑ひ　フシ追從たら〳〵申しけり。地色時に虎若いふやうは。詞そちは通り者さうなれば。もし都へ上りし時必ず尋ねて來れ。我は三條の大納言兼政といふ者。これなるは聞きも及ばん木津良の廣信とて日本名譽の博士なり。此度勅を受け富士にて天の氣を計る。必ず爰へ來る事人に沙汰ばし　地色して呉れな。是は某が自作自筆と彼

の兼政の遊ばせし。色紙を亭主に取らすれば有難し〳〵。子孫までの寶なり。やれ先づお銚子〳〵とスクリ手をはたへはたと叩く所へ。松の位の名も高きさんかさんせき。ゆるぎ出で。フシ上座に居流れ。地色さんせきは先づ盃を改めて。虎若に差しければこは珍らしと一つ受け。乾して戻せばさんせき爰は一つさはりませう。詞虎若眼をするなに人の差す盃を突返すは慮外なり。飲むと飲ませうが飲ますともこみつけんと腕を捲つて肘を張る。地色唯は輕薄笑ひしていやこれ殿様。此所の習ひにてお一つ上げたき挨拶と。様々上手を盡くせどもいやさ。詞いまだ馴染もなきに何の一つ。所詮我を振らんたくみ八幡其手は喰はぬといふ。地色さんせきから〳〵と打笑ひ。扨々素いお客何とも知れぬ仕懸けかな。新七さらばと立ちけるを取つて押伏せ。詞なに素いとは誰が事ぞ。地白くて惡くば赤くせんとさんか諸共引寄せて。耳をそぎ髮切ればこは狼藉と騒ぎつゝ。手々に棒を引提げ遁すまじきと犇けば。いや推參なりおのれ等と當る者を幸ひにはらり。はらりと薙ぎければわつというて逃げし間に。首尾こそよけれ宇右衛門と打連れ都に逃げ歸る虎若が仕業の程。詞見る者聞く者押しなべ皆憎まぬ人こそなかりけれ。

第三

眺めなり富士は日本の蓬萊山。嶺は削りなせるが如く其高さ測られず。斯くて兼政廣信は勅命に從ひて。行屋に入る月出る日を考へ陰陽の高櫓。登りて見れば甲斐が根にスヱテ今日も白雲。立ちにけり。先づ正月の山の姿細眉つくる薄霞。春山笑ふかと思はれ聲の鶯初朝の。フシ雪まだ殘る竹取の。翁が娘のゆかりかや。誰が結び置く玉笹の。スヱテ去年の栞の戀の道。フシ覺えて。迷はぬ入もなし。二月は雲に入る鳥のスクリ別れや。歎く涅槃の空。釋迦は遺水。遠近の嶺は八葉ともいへり。喜見城の遊樂も。心の月の影二つ。フシ滿つ汐を。荷ひつるゝや。田子の浦。あづまからげの汐衣。いとま浪間のフシうき仕業。彌生は花の吹雪吉野は磯に鳴澤の。景を都にやさ女。駕立てさせて此所スヱテたゞは本意なとゆふづく日。西に傾き入間川。本家水に音あり松に聲。旅の寢覺と名付けたる。琵琶かき鳴らして謠ひける。白日青天も賴まれず。朧の夜の山見えぬは。人の心の雲。櫻に嵐。月に雨。世にやナホス哀れの。まさるらん。フシ卯月はさくや水車の。浮嶋が原行く螢。里の童の打止めて。光を埋む玉澤の。水雞や叩く川遊び。淺瀨の沼の花がつみ。笛に太鼓に風車　おのが様々。日

ぐらしや。五月の空は梅の雨。晴間の山を繪に書きて。いさ唐土の。人に見せん扇面。さかしまの美山なりと喩へて。爰に詩を作る。世々の歌人の眞砂の種。神代に蒔きて盡きせざる ハヅミ 末は興津の川社。さて六月は富士詣で。白衣の袖はさながら雲。難行難所攀ぢ登る懺悔々々六根懺悔おしめに八大金剛童子。南無淺間大菩薩。さつと消えにし罪科も 小オクリ 其夜。ふりつゝ絶えぬ氷室の フシ 谷深し。七月は七夕の。逢瀬ありとやいさ來て三保の 謡歌 松原越えてエ。松原越えてエ。淸水寺鐘の拍子がちやん。〳〵としてさて面白い。面白いぞや フシ 類ひなき。スヱテ 猶望月の今宵しも。二千里の外の故人の心言葉も。いかで及ばんと。眺めに飽かぬ中空に オクリ 初雁。がねの雲間より。フシ ちら〳〵〳〵〳〵と連れて。鳴く音をきく月は。四方の山々色どりて。今車を駐めてそゞろに愛す楓林の暮紅葉を焚けば煙の山これ。あたゝめて 謡 飲む時は。劉伯倫が樂みも。終に事足る盃。三國一ちや酒になりすまいた。フシ さて十月は。山路昨日時雨して。急ぐ足柄箱根なる。葉守の神の瑞籬も梢淋しく霜。月は ハルフシ 猶木枯の。森の下枝の白妙に。それとも知れず フシ すくみ鷺。身の色こぼす曙に。せはしき聲の枕より。旅泊の夢の覺めて行く年の暮には。野も山も雪に。風情を奪はれて枯れ。〳〵枯れ柴眠りける。それが上にも霙。霙のと絶えなく願ひの晴天あらされば。兼政廣信心中に南無大日大權現。主上の爲の御方便奇特を顯はし給へやと。天に向つて祈らるる時に風雲晴れ續き。日月和光のめぐりをつもつて喜び。勇み山下あり。大和の國へぞ 三重 へ急がるゝ。

是はさて置き。地 既に其年も除夜の暮にぞなりにける。大内の御儀式松立て飾り御垣守。衛士の焚く火の輝き南殿には。陰陽師集りて祭文を讀上ぐれば。仙華門には大舍人寮鬼の形を 三重 へ勤める。フシ 殿上人は。地 桃の弓に葦の矢をつがひつゝ フシ 邪氣を射拂ひ給ひける。抑も追儺といふ事は。年中の疫を拂へる行事なり。さて御吉例の衣配禁裡の御作法官女の給仕に。帥の輔とておはせしに。かの朝顏の姫父の御名を深く隱し。帥の輔に從ひ御名を宮内と替へさせられ。官女の業を習ひ給ふに秀れて賢くましませば。帥の輔も賴もしく我もはや寄る年の。物事うとくなりぬれば。新院様の御事どもそなたに賴み參らすべし。先づ此衣の色品も覺え給へとありければ。地 人も多き其中に。宮内は時の面目と廣蓋に千代重ね。模様さま〴〵御所染の オクリ 色は へ春とぞ。見えにける フシ げに初色の。梅重

ね。地表も裏も濃紅にオクリ入日の。鳴戸立波を白糸の貝づくし。嶋に洲崎に立つ鳥の フシちりやちりちり縮緬は。檜垣の左大臣道綱。さて松重ね青かりき。うら吹き返す。ゆるし色。鞠に柳のたよたよと。亂れて〳〵。戀風の。袖より落つる結び文。誰樣參ると見てあれば。近衛前の入道則房なり。次は地なしに唐花の。五色の下葉玉の枝。玉の忌垣のあざやかに千早振る〳〵。振つた所がどうとも。斯うとも。フシ厭といはれぬ祇の。スヱテつまり懷しやなつかしや。是はどなたと見てあれば。西門院橋の照政。フシ優しや裾に。春の野の。雉子の床の草隱れ。萠黄の袂腰がはり。菊桐並ぶは古川の權中納言正家。末に流るゝ水車くるり。くるりと纒はるゝ。藤のかけ波ぬしやたれ。大伴の忠春なり。地色師の輔聞きも敢へず不思儀や此御小袖は幾年か。三條の家に下し賜はるが若しも筆者の誤りかと。宣ひも敢へぬに本宮の中將さゝやき寄つて。詞いやなう世は知れぬものかな。大納言兼政と博士木津良の廣信は。此度駿河の國にて不儀なる樣々洩れ聞え。本坂藏人增田式部に預けられ流人と成つて配所へと。地色語りも敢へぬに姬君はつとばかりに伏沈み スヱテ人も咎むる涙なり。地色師の輔見給ひて宮内は何を歎かるゝぞ。我こそ兼政殿の母上のお取立て故により。斯く宮仕へも仕ふまつれば外の樣には存ぜぬなり。誠に日もこそ今日の暮れ明日は改む春なるに。御いとほしや哀れやと フシ深く。悔ませ給ひける。地色姬君今は前後を忘れ。御涙にくれながら。今迄は深く隱し候へども。最早名乘らん自らは。高橋吉連が娘朝顏の姬なるが。兼政殿と申交せし事ありと。あらまし宣ひ果てざるに師の輔大きに驚き。なう今迄はゆめ〳〵知らず樣々に。心ならざる慮外の身たゞ御許し給はるべし。諸事はかゝる折なれば御愼みおはしませ。此上ながらも自らに御任せあれと。よきに諫めて住馴れし局をさしてぞ 三重 へ入り給ふ斯くて增田。地本坂は佐保の川のあたりにて兼政廣信に行逢ひ。地兎角の仔細は存ぜねども。兩人ながら流罪の宣旨我々承りて候といへば。兼政の郞黨岡崎平内平七大きに怒り。宣旨とは何の科あつての流刑。ヲ、今思へば駿河にて風聞せし忠賴めが讒言よな。例へば我我づだ〳〵に刻まるゝとても此實否を糺さずば。君を都へも入れ奉らじ方々にも渡すまじ此。佐保川こそ配所なれ。斯くいふが憎しとて必ず手向ひして後悔すなと。地一王立ちに立つたるは フシ面をあはせんやうもなし。地色兼政暫しと鎭めさせ給ひ。尤も汝等が欝憤ことわりなりさり

ながら。たとひ無實の讒にもせよ勅に向ふは勿體なし。我身に曇あらざれば。つひには月の都にて晴行く空を待てやとて。涙ながらに宣へば流石勇める兄弟も。御一言にてしを〱と フシ途方を。失ふ其隙に。地色警固の武士取圍みはや遠ざかれば弟の平七。こは無念と駈出づるを平内取つて押しとめ。詞やれせくな平七。地色察するに讒人は忠賴に紛ひなし。とても死ぬべき命ならば忠賴虎若諸共に。路次に待受け斬るものか。夜討に入つて討つものか安穩にては置くまじき。暫し〱と言ひながら片時も遁し置く事の思へば。思へば無念やと血の涙をはらはら〱。はらり〱と流しつゝ打連れ一先づ歸りける兄弟が心の內。ことわりせめて尤もやと感ぜぬ。者こそなかりけれ。

第四

痛はしや兼政は罪もなみ路の物思ひ。赤松のいろは船四十八番並べたる。中にもお召大船とて竹虎落網をかけ。或は刃物を改めらる フシ流人の身こそ悲しけれ。地所はしかも難波津や。梅の濱より押出す然る所にさもけはしく。詞なう〱お船〱。地色其船待たれよお船よと。呼ばはる聲も程近く。見れば白き小袖に淺黃袴を着連れたる。小人やう〱磯邊に驅著き二腰脫ぎ捨て手をつかね。詞是は大納言殿に召使はれし右丸左丸と申す悴どもにて候。地色かゝる時の御供をこそ。御情にて賴み奉ると スヱテ涙と共に申しけり。地色定元船ばりに立出て。詞ヲヽ志は神妙なれども。これ私ならねば叶ふまじきと答ふ。なにお船へは叶ふまじきと宣ふかや。地色さても是非なき次第然らばお船暫らく待つて給はれ。詞いかに左丸。君自然の御時は殉死の契約今なり。地色死別るゝも生きて別るゝも同じ思ひ。いざ御目前にて腹切らんと支度するを兼政御覽じ。詞やれ待て汝等暫し〱。地色誠に若契の好とて。淺からざる心底 スヱテ返す返すも嬉しけれ。地色世にある時の二眺め。花に紅葉に代へて我つまなし千鳥の床の海。情に沈みし浪枕の。戲れし夜の誓ひにも三つある命行く水の。消えなば一度に泡沫と。言交せし甲斐もなく一人殘して沖津石。賴む島なき身なれども命だにあらばなれ。死ぬな右丸必ず死ぬな左丸。死なば恨みと身を悶え フシ口說き歎かせ給ふにぞ。嘗て衆道を辨へぬ。むくつけ男揖取まで フシ女の。情忘れける。地色定元見る目も痛ましく。たとへば後日の沙汰にあひ生害に及べばとて。いかに哀れを知らさらんさりながら。詞二人

はいかゞ何れにても一人乘られよとあれば。地色兩人大きに喜び我乘らん。いや我こそと押退け。押止め互に亂れ藻の蟲の。われから人からと泣く音爭ひ時節移れば定元は。詮方なくて艪櫂を早め フシ 船は遙かに別れ行く。地色二人ははつと途方にくれなう明石の殿樣今は二人と申すまじ。せめて一人と叫べども別れていつか淡路灘。しるしの煙立消えて スヱテ 物の淋しき黄昏の。フシ 星の林となりにけり。地色扨も／＼しなしたり／＼。何の詮なき爭ひはあゝ暗きより。暗きに迷ふ思ひの道 スヱテ 照らし給へや佛國。地色いざや最期を極めんさりながら。君刃をとゞめさせ給へば所詮これなる岩に座を占めて。四つの借物を返さんして數珠はあるか。詞いやはたと失念せり。地色ヲヽ、尤もなり某は持ちたりと。一連二つに引き分ち今まで結びし玉の緒の。絶えなば絶えよ右丸命々鳥の語らひも。はかなく定めし有樣は傳へ聞きつる唐土の。伯夷叔齊にも勝るべきいつの日の何時にても息絶え入らば手を擧げよ。臨終一度に舌喰ひ切らんと。夢に夢見る心地して オクリ せまるへ日數も重なりて。フシ 夕の嵐。朝の霜。地 立掛髮の面影は。解けても波の浮藻となり。磨き馴れたる向齒も。落ちて汀の晒貝に交り。芙蓉の眥鳥が取り。髑髏に蔦が嘴を爭ひ是ぞ東坡が作る詩の。九つの形の末人の限りの 三重 へ淺ましゝ。フシ 是も哀れは。地色折ふしの冬野となりし朝顏姫。兼政の遠島を悔ませ給ひ。互に忘れな忘れじと言捨てし詞の末。世にましまさば訪ふまじきが人の情はかゝる時。せめて音づれ參らすべし フシ 是非お暇と願はるゝ。師の輔涙と共にさりとは優しき志。情も義理も此時なりいかでか止め參らせん。心任せとありければ。スヱテ こは有難き仰せかな。地 さあらばお暇申すとて。乳人の玉水伴ひ人見知りてはと變へ姿。オクリ 杖あり。笠あり抱帶旅の。振袖 三重

朝顏姫道行

フシ 忍ぶ道のべ。くらぶの山の夜もあけず。八入の岡の村躑躅。濃きも薄きも戀迷ふ。オクリ 闇の錦と。詠め捨て ヲシ まだ山かづら。引くかたに。覺束なくも呼ぶ。呼子鳥の傳授は聞かず耳なし山。片輪車に積む柴の。櫻やあたら春惜しむ 小オクリ 花の。八重葎。せぬ家ぞなし 小オクリ 家もあらなくに フシ 三輪が崎。綾杉めぐむ木の間より。神のひもろぎ物さびて。古りにし事もいそのかみ。人の影さへ。埋れ井の。オクリ 井筒に。／＼ フシ 玉の。井筒に袖濡れて。わかれ比翼の羽交山。とび立つ方は飛火野や。今幾日ありて旅をさ

暦

め。スヱテ我がたらちめ故郷へ。アミトフシ歸り。三笠山さほのかり。二十五絃は夜月に彈じ。雲井のやどり生駒が嶽スヱテ松は時雨の染め殘し。衣のうらに寄せ貝の離れて。逢ふもひめ貝の。嬉しや憂きを忘れ貝フシ蛤仔しほふき。うつせ蛤すだれ貝船は。出て行く。帆立貝。歌荒い風をもようやよやよ。夜着いとはれし。三津の浦風濱風。ハア寒いぞやア、フシ哀れうき寢の旅の空。今日初島の便りかと。戀渡りぬる武庫の川。心のあさみしらずくし知らぬ道とて。はかどらず誰かつげ野の。つま鹿も人に聞けとや。夜ただ啼く。秋は悲しさまさるべし。それを思へば夢の浮橋廣田の宮。生田の小野の花がたみ。手毎に摘みし。茅花まじりの。つく。つく〴〵し。分けて末黑の海原。いつか招きて草枕それも叶はぬ世なりせば。執心のつの松原漁火の。燃えあがりては消えては燃え。間なく時なくこりずまの。寢覺に騷ぐ鈴船の。虹は空に夕雨の。身を凌ぎ行く印南野やしづく涙の小石川。君がしがらみ強くとも破れやなぎにやれさて今。あらはれ渡るほの〴〵のこ。か。の浦にぞ着き給ふ憂さもつらさも。哀れさもさもあらめ〳〵。さもこそあらめさもあらめと聞く人毎に押並べ皆絞らぬ。袖こそなかりけれ。

第五

聖賢の世のためし大和の國壺坂に。溫泉一夜に湧出づれば。俄に湯桁の數をしつらひ施藥院を建てさせ給ふ。則ち典藥頭には養じゆ院の法印玄昌。諸國の難病集めさせ給ひしは。君德古今に輝きてオクリ有難へかりける次第なり。地色某は丹後の國宮津の者なりしが。世を渡る浦の習ひ獵漁夫の暇もなく。小舟の篝影消えて波間の鱶に手を喰はれ。斯く淺ましき身の痛みフシたゞ御慈悲とぞ申しける地色我等は山城の國西嵯峨の者なるが。此子を連れて玉鉾の。祇園祭の車に轢かせスヱテいたいけ盛の足立たず。不便は親の心なりとフシ淚に。深く沈みける。地色拙者は肥後の國八代にて隱れなき。詞荒岩と名乘りし相撲取。地色四十八手は得たれども大力には是非もなく。上げて落され骨々の碎けて今は小石の。元の巖になり難く。いまだ若きにみつはぐみフシ腰拔け。業と悔みける。地色扨て自らは駿河の國と申上ぐるもお恥かし。安倍川の遊女なりしが年月の勤めに肌を冷し。それ故聲の通はぬは。スヱテ情なしとて身を恨む。地色玄昌聞き給ひそれは世になき事にもあらず。詞さりながら傾城の所作とて指を切るとは傳へしが。何とて左樣に耳は切りけるぞ。さん候是は大納言兼政地色殿とやら

ん。いつぞや富士詣での御時逢ひも馴れさる初めの日。科もなき身を此如くさりとは苛酷き御仕方といへば。ア、音高し音高し。何事も昔と思ひ其沙汰する事勿れとて。数多の看病取行ひよきに労はりへ給ひける。其頃また伊勢太神宮の御造營ありて。當秋九月廿一日遷宮に相極まり。則ち勅使として菊亭の大納言師經。神書の古例を見合せらるゝに。眞の御柱といふ事を書き記せり。諸卿詮議あるに此事正しからず。記録者忠頼に相尋ねても明かならず。都はたゞ闇の如くさるに依つて兼政廣信を召返さるゝに。いづくか天子の心の海万里の風波靜かにして。はや都にもなりしかば急ぎへ参内なされけり。時に關白公經右の次第を述べらるれば。兼政謹んで笏取直し。抑も眞の御柱といふもの是遷宮の神秘なり。三笠山の松を伐り寸尺の大事。一子相傳なれば是を整へ差上ぐべきとあれば。國土の寶は兼政と一度にはつとぞ感ぜらる。關白重ねて仰せけるは。近日御身と忠頼を召上げられ。善惡の御詮議あるべし構へて臆れ給ふなとあれば。それこそ願ふ所にて候へ。天誠を照らさせ給へば此時曇晴れなんと。勇みに勇み御前を立ち館をさしてぞへ歸らるゝ。斯くて其日になりければ是ぞ天下の檢斷所。攝家精華を始めとし公家殿上諸司百家。左右へ分つて相詰むる。忠頼方には舍弟忠春同じく甥の虎若。兼政の御方には。廣信つゞきて座を固め風さへ鳴りをぞ止めにける。時に關白忠頼に向ひ。兼政富士大願の砌。遊女弄びの證據はいかに忠頼承り。さん候なき事をよくも安倍川より申し來るべきや。それは兼政の心に覺え候べしとあざ笑つて申しけり。兼政聞召しいや某は覺えなし。かつて跡方なき事但し證據やある〳〵と宣へば。ヲ、證據こそあれ。其時御分遊女に取らせし自歌自筆是にありと。やがて御前に差上ぐるに兼政の筆跡に疑ひなし。兼政暫らく御思案あり。ム、是はいつぞや櫻井の御所の御會にて。逢うて別れの御題に詠みたりし歌なり。其日の披講はそれなる忠春が勤めしが。其時の詠草に紛ひなしと宣へば忠頼聞きも敢へず。いや〳〵いツかに罪が遁れ難きとて出來合の陳情仁體には似合ひ申さず。但し安倍川に櫻井の御所とて又ありや否や。關白暫しと宣ひ。櫻井の御會には兼政いまだ中納言の時なり。駿河下向の刻は大納言に任ぜらるゝに。何とてそれには中納言と記す是不審と宣へば。忠頼道理に責められて暫らく。返答なかりけり。弟の忠春見兼ねいや。其色紙の詮議は兎も角も。安倍

暦

川の傾城を兼政配所まで取寄せられし事。世に此沙汰専らなりといふ時に定元罷出で。なう某預りの内左様の不義は存じも寄らず。ヲ、爰に高橋宰相の息女朝顔の姫とやらん。兼政へ好ありとて遙々下り給へども。中々大納言殿には知らせ申さず其儘追返し申せしが。地色定めて此事をやと申せば各々是は高橋家。三條家の契縁さもあるべきと宣ひ是にても落ちざれば。虎若苛つてつつと出で。詞いさや確かなる證據は既に兼政安倍川にて。遊女が氣儘にならぬとて理不盡に耳を殺ぎ。剰へ所の者に手を負ふせ斬散らせし事都まで隠れなし。かく悪逆の兼政を。歴々御最屓と見ゆれば何をいうても甲斐あらじ是叔父者人。急ぎ館に歸り分別致されよといへば關白聞召し。ヲ、理には最屓あり非には最屓なり難し。若し此列座に左様の沙汰ばし聞きつる人やある。

時に養じゆ院末座にありしが罷出で。此頃安倍川の遊女とて耳を殺がれし者候が。地色是やはと申上ぐればそれ〳〵急ぎ召せとある。畏つて候とオクリ軈て御殿に召出し。地色養じゆ院に仰付け此内に其方が。耳を殺ぎし人やあるといへばかの女虎若にひしと縋り。なう大納言兼政様さても〳〵お情なや。科もなき身を此の如く恥ぢ幾度か今日も亦。死なれぬ命と歎くにぞいづれも横手を丁ど打ち。さて恐しき大件の一族人面獸心の積悪罪跡遁るゝ所なし。忠頼忠春兄弟を隠岐の嶋に捨置くべし。虎若は頭をはね公家武家の例にせよ畏つて搦捕り斷罪に行はれさて兼政には朝顔姫を賜り再び照らす都の月。日を追つての御繁昌千秋萬歳萬々歳。あらたまる年の始めと暦の始め目出度しともなか〳〵申すはかりはなかりけり。

貞享二乙丑歳正月吉日
右此本者依小子之懇望附秘蜜
音節自遂校合令開版者也
加賀掾 [宇治] [澄好]
二條通寺町西へ入町
山本九兵衛刊 [印]

かしこまりてうけとりあんざいはおとな
し摂盃殿はよろわさゞ内姫を給ひさ
あびてうちとるやまの月日とおいてしれん
ずあうせんきうちんせいぜんくぜせあうた
まなとしれるづめとてよみれとうづめ給で
あしとせ玄くやしえうろへあゐりを

貞享二乙丑歳正月吉日



虎石

竹内義安正本

漢の中興の良将強弩の名を得し李将軍にて候
営将の別当の九首にて注女集の十本とし
かくて一山に猶見えつゝさる何茂席りてうちつゝく
けうとてこそ睡る事が南ぞんぞよむ名乗
聴れぬる事せこそうちつけ業火事とぞある
是ぞ弘の名ごろいて又百乳らん信をとうて
過つゝ世の中はさ者ごにてそれ事世の虎見弘

虎石

竹本義太夫正本

源家中興の良將。鎌倉の右大將頼朝公の御時。箱根の別當の御方には往生要集の十樂を說き給へば。一山の僧兒喝食。いづれも席に連りて頭を傾け。聽聞あり。別當見臺に向はせ給へば。聽衆は書物を繰廣げ朱なる筆を動かせり。是ぞ佛の會座にして五百の羅漢法を聞き。悟をひらかせ給ひしもさながら。にこそ思ほゆれ。それ見佛聞法樂と云へるは。今此娑婆世界は佛を見法を聞く事甚だ難し。獅子吼菩薩の曰く。我無數百千劫の間無量の解脫の法を修して。今大聖釋迦牟尼佛を見奉る。これ盲龜の浮木に逢へるが如し。又儒童は全身を捨てゝ初めて半偈を得。常啼は肝臓を刻んで遠く般若を求めたり。菩薩さへ猶さなんりければいかに況や凡夫をや。釋迦尊舍衞國にまします事廿五年。其間にかの九億の家三億は佛を見三億は纔に名を聞き。又三億は見ず聞かず佛在世さへ猶然なり。まして滅後はいふに足らず。故に法花に曰く。此諸の罪の衆生は惡業の因緣を以て阿僧祇劫を過せども。三寶の御名を聞く事稀なりけり。然るにかの國に生れては常に彌陀佛を拜し奉り。信仰の法を聞く。清く飾りたる地の上に大なる菩提樹あり[illegible]葉四方に滿ち〳〵て寶の咲ける木[illegible]其上に羅網を覆ひ。風に靡ける[illegible]只妙法の響あり。暫く是を閣く[illegible]深く悟を開きつゝ不退轉に住すとなり。末世の衆生いかでか此悟を開くべけんや。只愚痴に返つて我名を修せば。刹那に至つて淨土に迎へん爲に我又希有の願を起す。無我の他力に縋りなば必ず斯くの如くなり。國を成就すべしとの金言有難し〳〵。只此念佛を信ずる者は。無量億劫の極重惡業を忽ちに滅し。命終つて後決定往生疑ひなしと既に。講談滿ちけり。別當仰せ出さるゝは。來る正月十四日講談の滿座なれども。將軍御參詣あるべき旨。兼ねて御上使下さるれば今日を闕座とす。然る間明日より寶殿の莊嚴寺中の掃除。隨分油斷あるべからずと。御座を立たせ給ひければ皆々。席をぞ下らるゝ。頃は大呂の。末方只何となき宮寺も。浮世につるゝ年の暮寺中の兒の里々より。近附く春の初小袖様々の送物。師の御坊への捧げ物父の文母の文。

二つ三つ讀む兒もあり五つ六つ讀む兒もあり。下部男の物語。御養父入を必ずとオクリわきて〽叫く方もありフシ爰に哀れを。地色止めしは河津の三郎祐重が乙若に。筥王丸と申せしも此御山にありけるが。父に遅れて其後は是非なく母に付添ひて。曾我祐信が養子となり十歳餘りも暮せしが。幾程なくて祐信も世を早うし給ひけり。元來伊東が孫なれば御にくしみの強き故。本領も召上げられあるに甲斐なき身となれば。萬に添ふる貧しさに寺傍輩のゆゝしきを。スヱテ稚心に羨みてフシ泣くより。外の事ぞなき。地色然る所へ鬼王はから〳〵の送物。母上よりと文一つしを〳〵として差出す。詞筥王涙と諸共に御文を繰返し。地色鬼王に打向ひ扨も扨も口惜しや。異兒達は父もあり兄弟とても仲能くて。折々毎に便りありいかなれば自らは。父に縁なきのみならず弟兄達も憎むにや。二の宮の姉君も又は十郎祐成も。此程はかき絶えて文の傳さへフシなかりしぞや。地色いかなる事の御腹立ちぞ語れ聞かんと責めければ。詞さん候姉君様は此頃は御勞。それ故便りもましまさず又兄上の十郎様。此程は宿通ひ中々晝夜の別なし。折々お諫め申せども止らせ給ふ氣色もなし。却つて御腹立候故何とも是非なく候と云ふ。筥王驚き手を打つて。扨しなしたり〳〵。親の敵を狙ふ身の是はあるべき事ならず。地色必定仕損じ給ふべしエ、もどかしや腹立ちや。某かゝる身ならずばやはかお手には掛けまじきに。思ふに甲斐なき世の中やとスヱテ搔き口説きて歎きしが。地色暫くありて小聲になりヤレ爰に究竟一の事こそあれ。詞近々將軍二所御詣の御沙汰あり。然る上は敵祐經御供せではあるまじきぞ。地色何卒親ひ一太刀恨み兄性惡に梟明かせ。浮世の恨みを晴すべし併しいまだ敵の面を見知らず。よき折柄ぞ汝も山に逗留し。なりなん末を見つげやと主從心を合せつゝ。賴朝公の御成を今や。今やと三重〽待ち居たり。フシ其日になれば。地色將軍家の御社參とて上下さゞめき渡りけり。扨御供の人々には和田畠山土肥岡崎。川越高里江戸豐嶋玉井小山宇津の宮。山名里見工藤の左衛門以上三百五十餘騎。花を折り紅葉を重ねし裝束綺羅一天を輝かし。陣頭に雲を覆ひ水干淨衣白直垂。布衣權勢はあたりを拂ふおよそ中間雜色迄。氣色に色を盡しつゝ後陣の警固甲冑をよろひ。弓矢を帶する隨兵は上下に集ひ左右の帶刀二行に並び。御調度掛の人々はフシ弓手馬手をぞ守護しける。地色斯くて其後筥王は奉幣の内よりも。鬼王を相具し御座所の後に隱れ。詞御供の人々彼は誰ぞ是はいかにと尋ぬれば。鬼

王さん候君の左の一のお座。あれこそ秩父の重忠よ。君御一世の先陣役。日本無双の軍慮の達人。右の上座は三浦の義盛同子息義秀。扨其次は里見の源太豊嶋の冠者梶原平藏。地色扨又少し引下つて。半裝束の珠數を持ち香の直垂着たるこそ。工藤左衛門祐經ぞ必ず見忘れ給ふなよ。縱ひ折よく候とも御前は憚り給へ。お夜詰なんどの歸るさに何卒窺ひ申すべし。某は是に候と。一間障子を隔てつゝ フシ 暫く時をぞ移しける。地色然る折節祐經お次へ罷り出けるが。箱王に目を放さず。扨も〳〵此兒は眼の見返し面魂。正しく河津によく似たり若しさにてやと尋ねければ。箱王はつと思ひながら。いかにもそなるが何の御用ばし候ぞ。祐經近々と立寄り。扨々父に似たる者かな。是は工藤左衛門祐經とて御分が父とは從兄弟にて。殿原達にも親しき者ぞ疾くにも逢はぬ本意なさよ。隨分別當にかしづき給へ。弟子達多しと申せども此。祐經程の方人持ちたる人はあらじ。便宜よくば上樣へもよき樣に言上し。寺門訴訟の事あらば取次をして得さすべし。詞又折々は出入りつゝ。某が肩の支も摩られよ。地 身の爲惡くは思ふまじ且又兄の十郎も。常々に出入りて勝手をも取持ちなば。徒歩若黨とは呼ぶまじき家の子とこそ云ふべけれ。詞いはれざる僻を出し。殊更親の敵なんどと筋なき事を申すとなり。たとへば親の敵にもせよ。當時工藤の祐經を相手に取らん狙はんなどとは蟷螂が斧なるべし。地貧しき身にて他人に交り修羅を燃して暮さんより。文の序のあるならば必ず參れと申さるべし。扨も見參の初めなるにイデ引出物得させんと。赤木の柄に胴金入りたる。刀一腰取出し フシ 箱王にこそ取らせけれ。地色只何となく詰取れども。初對面の言葉の末胸に逼つて口惜しく スヱテ おろ〳〵涙に身震ひし。地色只折よくば一刀刺さんずものをと勇めども。大の男の目も放さず忍びの柄に手をかけて。間近く居寄れば是非もなく。もぢ〳〵として扣へける フシ 心の内こそせつなけれ。地色次に扣へし鬼王は。餘りの無念にせき狂ひ障子一重に立隱れ。身をもがき齒嚙みをなし スヱテ 泣くより外の事ぞなき。地色かゝる折節御前より同胞一人立出で。還御は御船候ぞ早御立と觸れけるにぞ。そこ〳〵に暇乞ひ祐經御前に上りけり。箱王今はたまり兼ね。ずはと拔いて追掛くるを鬼王袂に縋り着き。コハ物に狂はせ給ふか御前近くの太刀三昧。若し見咎められ給ひなば何と悔むと甲斐あらじ。詞コレ九層の臺は累土より起り。千里の行は一歩より初まると。功積らでは中々敵は討たれぬものぞ。地色構ひ

て無い止まり給へと。浮を盡し洲を並べ様々嫌せば倚王も。涙ながらに止まりしが又立歸り牙を噛み。月こそ日こそ變るともおのれ討たでや置くべきか。やれ鬼王よ舎利々々佛になるとても中々出家は遂げられまじ。地師の御不興を蒙るとも佛の罰が當るとも。それはそれからそれ迄よ最早堪忍なり難し。供せよ曾我へ下りつゝ兎にも角にもなるべきと。思ひ定むる心の中優しく。も亦　へいさぎよし。

フシ還御を誘ふ。地色鐘の音も朧々と告げ渡り。夕日山に端隱れてこぼすが如く茜さす。波紅に染めしなり君の召さるゝ御船は。大船數多組合せ下白の大幕に。無双の武具を立並べ　フシ鎮まり返つて漕ぎつれたり。地色御船頭の藤平は御免を蒙り櫓に上り。やら目出度いと言祝げば艫船の水主聲を揃へ。皆同音に奏でける。そも／＼船の起りといつぱ。その上黄帝の御代に當つて蚩尤といへる逆臣あり。烏江の海を隔て立籠れば。何と攻むべきフシ様もなし。帝是に宸襟を痛ましめ。空しく數日を送らせ給ふ臣下の貨狄是を悲しみ。寢所に入つて心を結ぶ。ある時貨狄庭上の。池の面を見渡せば折節秋の末なるに。寒き風に散る柳の一葉水に浮びしに。又蜘蛛といふ蟲是も虚空に落ちけるが其一葉の上に乘移り。次第々々にささがにのいと果なくも柳の葉を。吹き來る風に誘はれ。汀に寄りし秋霧の。立ちくる蜘蛛の振舞げにもと思ひ初めしより工みて船をフシ造れり。黄帝是に召され。かの海上を漕ぎ渡り逆徒を易く打亡し。御代を治め給ふ事。フシ壹萬八千歳とかや。然れば船の。船の字を君にすゝむと書き傳ふ又。一葉と申せしも　フシ此時よりの例なり。百船千船。萬の船の遠津船。稀に見ぬ目の浦小船。いかなる風を待船や色の港の泊船。岡の遊君が呼びかくる　船歌戀しゆかしの松浦船禿。出て見よ様ぢやげなさまで　ツキないぞや。太夫我方の　ナホス寄るべは。二人フシ絶えて荒磯の。外行く船と答ふるは又押隱し恨みても。なほ浮船の憂身ぞと。うきを較ぶる。海士小舟。宿も定めぬ沖津船。洲崎の波に隔たりて。フシ相見ぬ夜半の友船を。慕ふ船とや下心通ふ船とや通へとや。戀の舟橋渡れとや渡り較べて。今ぞ知る。阿波の鳴戸も。波風の凪げばぞ出づる釣小船。櫂の雫に袖濡らす仇を。恨みて泣き戀ふる。涙の底の澪標。フシ身を盡しても逢はんとぞ。思ふ思ひの焦れ船遣瀬ないその片割や。かたゝな船に棹させば身は捨舟と思ひきや。いとゞ心の早瀬川　オクリ高瀬に。瀲む綱手縄。引く手數多の繋ければ　歌來よや／＼と。招かぬ。ヤア。

船も。縋の綱。手と。ヤア來てかゝ。ナホス るや フシ 船より船に。いつとなく。夜を重ね行く梶枕。長地 夢の浮世と繋がざる船と較ぶる身の程も末は願ひの綱解けて。御法の船の水馴棹さすやましほの。連れて行く目出度き君が御座船は フシ 龍頭鷁舟。とこそ謡ひけれ。
地色 折節十郎祐成は二所御詣を幸ひに。何卒敵を討たばやと焦れ焦るゝ釣小舟。蓑笠取つて打ちかづき。弓矢は苫に押包み フシ 波間を分けて狙ひ寄る。地色 祐經早くも見咎め船梁に突立ち上り。詞 ヤア何奴の舟なるぞ。此度の御参詣凡そ日本に隱れなく。前日より船留あり笹の葉程の舟もなし。扨は海賊なりけるなあれ打殺せ射殺せと。地色 片手矢はげて駈廻る祐成襄おびれたる風情にて。詞 全く存ぜし事ならず。是は相摸川の獵船にて候が漁炬に疲れ候故。澪標に舟を舫ひつけ暫く休

み候が。纜ほどけ候らん是迄流れ參りしなり。地色 眞平御免と詫びながら。首尾よくば一矢射て水底に飛入らんと。弓と矢探り寄せにける フシ 心の內こそ不敵なれ。
地色 祐經いよ／＼合點せず 詞 いや／＼おのれは慥か鎌倉にて折々見たる面貌ぞ。すは平家方の討洩されか。地色 但し叛逆の與黨等か二つ一つは定のもの。射捕れ／＼といふ程こそあれ既に危く見えてげり。和田も秩父も互にそれと知り給へば。詞 ヤレ待て方々漁船には極つたり。御物詣の折なれば上にも御赦免候べしと漸くに紛らはし。おのれ狼狽者の慮外奴。御目通り見苦し罷り退れと叱らるれば。祐經堪へずイヤサ。かゝる怪しき紛れ者は此左衞門が吟味の役。方々お構ひあるべからず。人々肩を持たるゝは但し叛逆海賊の同類かと座を打つて罵つたり。地色 時に朝比奈堪へぬ若者。祐經が膝にどつかと

居掛り。詞 コレサ祐經。諸侍の出合に叛逆盗人の同類とは。近頃以つて舌長しサア今一言吐出せ。地 船中より蹴落して水呑ませんと云ふ內にも。いやまだそこを逃げ去らぬか。イデ物見せてくれんとて櫂追取つて散々に打伏せ。詞 おのれ無念にあるべきな。地色 併し命が物種此場を逃れ。又ぞや魚を追ひ廻せ一度は網にかゝるものぞ。エ、淺ましの世渡りやと。わきて得云はぬ朝比奈が フシ 心遣ひぞ賴もしき。地色 十郎涙にくれながらコハ忝き御助け。何時の世にかは忘れんと。袂を顔に押當てゝ フシ いづちともなく流れ行く。
地色 所に夕波逆卷き上り風は枯木を吹き折り／＼。落つるが如き雨雲は白日俄に暗闇みて凄じかりける 三重 へ氣色なり
地 藤平艫舳を走り廻つて面舵取舵下れ下れと働けども。叶ふべきとは見えさりけりあら笑止や。詞 アノ一曇の山颪箱根足

柄の方へ吹き廻らば。此御船の陸地に着くべき樣もなし。人々心中に御祈念候へいかに秩父殿。此御船には妖怪が付きて候。重忠ア、暫く。左樣の事を船中にては申さぬものぞ。地コハリあら不思議や雲間を見れば。西國にて亡びし平家の一門雲波に乘じて出たりけり。縱ひ惡靈恨みをなすともそも何事のあるべきぞや。惡逆無道の其積り神明佛陀の冥感に背き。天命に沈みし平氏の一類主上を始め奉り。一門の月卿雲霞の如く フシ光り渡つて見えたりしが。地又空中より雷火の光波を蹴立て。魔風を吹きかけ眼も眩み 三重前後を忘ずる へばかりなり 地色時に朝比奈矢束解き捨て。重籐の眞中握つて突立ち上り。大の雁股打番ひ鏡に等しき眼を見開き。詞いやをこがましや平家の一門。生きて働く時にだに源氏の矢先にたまらぬもの。ましてや死靈の分際物の數とは思はぬぞ。地色義秀が矢先にかゝつて閻魔の廳に訴へよ。一つの罪は遁るべけんと差取り引詰め射たりけり。地さしもの惡靈朝比奈が弓勢にて次第〳〵に遠ざかれば。重忠舟子に力を合せお船を。漕ぎのけ汀に寄すれば猶怨靈の姿も薄く。消えて雲井はほの〴〵と鄰く。空とぞなりにける

第二

地善をなすこと富家は易し孝をなすこと貧家は難し。爰に平家の侍伊賀の平内左衛門が獨姫。豐とて人のいとしがる。生れながらの京育ち フシ卑しからさる姿なり。地色然るに父の左衛門は平家崩れの其後も。都に忍び居たりしが。聊の事あつて三浦の與一に討たせしより。人と成るにも從ひて女ながらも憤り。父が敵を討たばやと スヱテ思ふ心の遺瀨なく。地相傳の若侍栗矢の三太に誘はれ。奉公人と僞りて鎌倉近く入り込み。旅泊の枕明け暮れと フシ事を。窺ひ居たりしが。地色敵の與一は家富みて常打つ時も四五十騎。百騎餘りの勢なればたよるべき樣あらざりけり。詞ある時栗矢御側に立寄り密々申し上げけるは。誠に長々の旅泊心を盡し。路銀を失ふばかりにて敵に近づく事もなし。つら〳〵事を存ずるに抑も此二つの命と申すは。忠孝のために擲ち候上は少しも厭ふ所はなし。さるに依つて此家の主を頼み。君を一先づ假粧坂の遊君となし奉る。疾くにも申し上げ度く候へども。若し御歎きもしや深からんと只今申し上ぐるなり。地色追付け御供申さんにとく〳〵御用意候べし。詞はた又某儀は存ずる旨候て。曾我の十郎祐成と申す浪人方へ。下稚奉公稼ぎ候コレ御覧候へ。地色斯樣に奴と變身を窶し今日目見え仕

り。明日よりの勤にて團三郎と呼ばるゝなり。詞此主人祐成事。大磯の虎とやらんに深く馴染み。日毎に通ひ候由。地色然らば某も供仕らでは候まじ。君は流の御身なれば。關東方の大名には度々出合ひ給ふなり。何卒與一に廻りも合せ給ひなば。よき程にあしらひ御文一つ給はるべし。某共に駈入つて本望達し申すべし。必ずぬからせ給ふなと申し入るれば。姫君は御涙にくれながら。とてもかくても此命敵に擲つ事なれば。惜しむべきにはあらねども。終に一度も殿と寢ず枕一度も取らぬ身が。夜な／＼毎に閨替へて辛い勤をするならば。スヱテやはか。命のあるべきか。エ、口惜しや淺ましや。何時の月日に生れ合ひ今此憂身は何事ぞ。とても奉公するならば。水仕に代へてくれよとて フシ恨み。歎かせ給ひけり。地色栗矢も涙は浮べども心弱くて叶はじと。詞聲

を荒らげ怒りをなしエ、御卑怯なり未練なり。何と初めより御命捨てんとは宣はぬか。其御心にて何とて敵が討たるべき。貴からずして高位に変はるは是遊君のならひ。水仕奉公を勤めて大名にたよらるべきか。地色コレ口惜しとは宣へども。傾城の種ぞとて外にも蒔かぬものなるぞ。詞海道一と名に立つる大磯の虎を御覧ぜ。母は玉屋の長者父は東の流人伏見の大納言實基卿の娘ならずや。地色いづれも故あり思ひありさのみな穢なみ給ひそと。様々賺し参らせり早や御出と勧むるにも。共に涙のせきかくる袖の。柵三重へ懸けてげり フシげに去るものは。地色日日に疎しと申せども。恩愛妹背の其中は世に睦まじきものなりけり。父に遅れし年月や十三年の春を迎へ。彼岸七日の滿る日に弔ふ日當らせ給ふとて。母上の思ひ立ち宿坊にての御佛事 フシ月は取越す

心かな。地色斯くて十郎祐成も。心ばかりの手向草一枝折つて手に結ぶ。露の白玉繰り捨てゝ思ひ入つたる道のべの。末の小川に投げ渡す ヲクリ橋のへ半に行きかゝる。地色折節に豐姫も何心なく渡り合ふ。瀬に打掛くる水の音岩に堰かれて颯々と。橋轟けば眩き思はず知らず祐成の。袂にひしと取付きてア、恐やの。詞地既に落ちようとしたほんに。危い事やと塞ぐ目に フシ男見たのも戀なれや。地色十郎姫をじつと抱へ。詞扨々危き御事かな。某斯くて候はずばやはか御命あるべきや。御覧の如く一人さへ行きなづみぬる思ひ川 地深き戀路の懸橋を君諸共に行逢ひの。袖振り合すも他生の縁兎にも角にも君がため。詞所詮某川波に。落ちてなりとも憎からぬ。地色人をこなたへ來させんと。いふ言の葉にチヤクト縋りエ、譯もない。一人落ちたは仇波の。立添ふ波もあら波の

男波ばかりはかた波の。甲斐も渚の磯の波。地誰そ寄せまいかはしら波の。寄るべ定めぬ女波ばかりのこがるゝを。共にと誘ふ波あらば。連れて浮名の立つ波も。フシ厭ひはせじと夕波に。地色詞濁れば十郎も憂を忘れて寄る波の。瀬に落合ふが如くにて水も漏すな漏さじの互に影を水鏡。ア、恥かしと立つたるは。フシ命を責付く俤や。別れ兼ねつる。休らひに。地栗矢の三太追つきていざさせ給へと勸むるを。詞十郎つく〳〵打眺めヤア。汝は先程の奉公人團三郎と云ひし者な。シテ只今は何のため。又是なるはいかなる御方なりけるぞ。さん候是は某同國の人。父もなく母もなく浮世に便りなき身とて。某を頼みに奉公稼がれ候が。漸く今日相極り。卽ち假粧坂の長が許へと云ひければ十郎打頷き。扨は廓のお望みなム、聞えたり〳〵。定めて粋な男をお見立の色道修行のためならん。地最早禿の盛りは過ぐる。よき突出しの新造様と引く手數多の繁からん。詞然らばあの里旦より間暇とお隙はあるまいに。いかゞ思ふ團三郎。町の名殘も今日ばかりいづ方へぞお供して。地何と一獻汲むまいかハテ廓への御越しは。暮方からがよい筈と勸め給へば姫君も、面羞げに打笑みて。誠に粋な男とは。方樣などの事ならん若しも御緣のあるならば。廓で御目にかゝるべし先づ今日はとありければ。詞祐成重ねて袂を扣へ。地色それはつれなしさりとては暫しの憂も忘草。露の命のある内は色と酒とが樂しみよ。いざこなたへと手を取つて行くも。歸るも三重へ川岸やフシ流れを前に。地色引請けて盃すゝぐ暮の内。いづちの誰が假居ぞと足早に行き過ぐるを。詞暫し〳〵と呼びかけて。若黨四五人祐成の側に寄り。是は工藤左衛門祐經が使の者。主人申され候は御通りのやう見請け候。幸ひ色あるお連もあり暮も淋しう候へば。とう〳〵御入りありて御酒一つとぞ申しける。地色祐成ハツト驚き弓矢八幡しなしたり。折こそあらめ時こそあらめ。父が日に女を連れて敵と逢ひ。かゝる難儀に遇ふ事よ。さりながらさのみ女に緣はなし捨てゝ斬り込み差違へ。兎にも角にもなるべきかイヤマテ五郎が恨みもあらん。よし〳〵一先づ此場を逃れ。是非歸るさを討つて取らんと思ひ定め。ハルさらぬ體にてコレ〳〵お使。左衛門殿へ申されうは。御遊山の儀存じよらず一禮もなく。罷り通り候處に。却つて御懇の御使忝く存ずるなり。御覧の如く足弱を連れ罷り通り候條。得こそは參り候はめ。地色何樣重ねて參會の砌申し達し候べきと。慇懃に相述べて行かんとするを引止め。詞いや〳〵御酒もすがり

になり御座敷も事冷めたり。地色然らば御邊は兎も角も。女中は殘して御越しあれとフシいかつ。がましく云ひければ。詞祐祐成大きに氣色を損じイヤ推參なりおのれ等。主人を差置き云はれざる差配だて。サア今一言ほざいて見よ。素頭を斬り割らんと反打ち直せば地若黨ども。前後左右に詰めかけて既に事にやなりてんと。思ふ所へ朝比奈は幕の內よりつつと出で。詞イヤ出來まするよ十郎殿。先づ今日は何時の日ぞ。父河津殿の命日ならずや。それに得知れぬ女を連れ尾籠千萬見苦しゝ。其上是より川上には工藤左衛門祐經を始め。土肥新開梶原源太川狩遊びに道を塞ぐ。某爰になかりせばうかうかと行きかゝり。まつ此如く難儀に遇ひ殊更五郎は連れられず。地色本望遂げぬ事のみか所々の死をして。長き浮世の物嗤いやはや笑止千萬なり。急いで是より歸るべし此度は折よからず。生中の思ひ立ち返す〴〵もあるべからず早とく〱とありければ。詞祐成淚をはら〱と流し。地色誠に度々の御情何時の世にかは忘るべき。父存命の一言を承る心地してスヱテ世に有難く存ずなり。詞且又是なる女が事。色に溺れて召連れたるにて候はず。家來團三郎が同國の者。父母共に死して別れ便なき身と彼を賴み。明日よりは廓の勤め十年花見ぬ不便さに。地色せめては町の名殘りをも惜しませ取らせ申さんため。是迄召連れ候なり。詞全く事を忘るゝにあらず。且は亡父の命日たる故是も一つの善根と。云はれぬ心の了簡にて由なき者を同道し。地色かゝる御咎めに逢ひ候段。御心底の程近頃以つて恥かしとフシ差俯向いてぞ居たりける。地色義秀げにもと思ひながらわざと怒れる聲音を上げ。詞イヤサ祐成其言分は立たぬ〱。誠孝行の善心あらば鐵石より堅くとも。親の敵の首を討つて尊靈に手向けてこそ。善とも孝とも言ふべけれ。何ぞや女を見てはめろ〱と吠面かく侍か。なま見られぬ後生だて聽れたり〱。地色それ程血腰を拔かしては腐り落ちうはいさ知らず。敵の首はよも落ちじ扨もまだるしもどかしゝ。詞コレ面恥をかゝされて少し無念の心あらば。敵を討つて見せられよ。地それ迄の對面はふつ〱叶ひ申さぬと。大きにせいて怒らるればさしもの祐成詞なく。手持ち不沙汰に打連れてフシしほ〱として歸らるゝ。後姿を見送りて鬼を欺く義秀も。袂を顏に押當てゝさりとては賴もしや。可愛の者の心根や花の樣なる若者が。親の敵を持たずんば理非は格別聞き憎き。今の詞はよも聞かじ。初めての女の前さぞ恥かしく思ふらめ云はねど面に見えけるもの。エ、言ひ

過したる悔しさよ許してくれよ十郎殿。是皆吾殿が爲なるを腹ばし立てゝくるゝなと。延び上りては眺めやる。心ばかりをさらばにて別れ。別れに 三重 へなりて行く。フシ 其頃宮王。地 十七歳山を下りて其後は北條殿にて元服し。時政の烏帽子子とて曾我五郎平の時致と名乘りしが。山寺育ちの稚兒上り緣殘りて憎氣なき。角前髮の寢亂れは フシ 枕ゆかしき風情なり。地色 時致つく〳〵思ふやう。詞 親の敵を狙ふ身の斯く迄非力に生れ付き。晴業手詰貴合の勝負覺束なしと。地色 思ふ心を一筋に二所權現を祈らんと オクリ 浸るやへ水の酒匂川。地 一七日の力乞ひなどか納受なからんや。四方に幣帛切つて押立て。不淨を拂ふ莿高の。珠數さら〳〵と押揉んで。コハリ 慚愧懺悔六根罪障おしめの八大金剛童子南無千手千眼大菩薩。一つの驗を見せしめ給へ。さなきに於ては

時致が一命。立ち所に ナホス 取らせ給へと責掛け〳〵 三重 へ祈りけり フシ 不思議や川波。地 しきりに卷き上げ水は頭頂を打越え〳〵。石こそ流れかゝりけれ。時致驚き川上へ突退け〳〵しけれども。猶し流れは止まざりけりコハ行法の妨げよと。何心なく搔摑みエイと云うて差上げ。洲崎の岩に打付くれば二つに割れて石火の光。不動の尊像現れて フシ 虛空に。上らせ給ひけり。地色 時致餘りに有難く猶々諸願成就ぞと。御禮垢離の水淨くかゝる所に誰ともなく。詞 川上に馬乘入れすそ冷させて踏み濁す。時致興覺め顏振上げ。ヤレ狼狽へ馬鹿の生盲目。行者のあるを知らざるか。川下へ廻れ〳〵と聲かくれば侍どもせゝら笑ひ。いやはや口の過ぎたる小山伏。ほでてんがうを乾かすともコレヤ御當家一の御前よし。工藤左衞門祐經の御馬のすそ。汲んで戻りて戴かせ

よ。少々きつい癖でも影もないぞとわめきつゝ。地色 乘連れ〳〵渡りけり時致元來堪へぬ若者。馬の尾筒をしつかと取り。詞 ハテ初めての見參によき呪を相傳あり忝く存ずるなり。是は曾我の五郎院時致坊といふ山伏。我等が家の祕法なれど。只今の返禮に下馬落しと云ふ事を少し敎へて參らせんと。別足取つて跳ね倒せば。地 馬人ともに川中や水の深みに打込んだり。殘る者ども肝を消し手綱搔繰り行方は フシ いづちともなく失せてげり。地 時致逃げば逃げまゝよと取つて返せば月毛の駒。川岸に突立ち上り身震ひしてこそ立つたりけれ。五郎につこと打笑ひ是ぞ吉左右敵の馬。只一馬場とひらりと乘り逆卷く波に颯々さ。さつと駈入り駈上りしづ〳〵〳〵と步ませて。曾我の里へと歸る波みぎは勝りの力とは。此行力と今の世も語り。傳へて書きとゞむ

第三

地鼠は神社に憑りて貴し狐は城廓に入りて勢ひあり。されば工藤の祐經は君の御覺え目出度きに誇つて。威を一天に輝し フシ榮花を極め居たりけり。地色其頃又備前の國。吉備津宮の大藤内と云ふ者あり。左衛門を頼みに聊か訴訟の事あつて。在鎌倉してけるを祐經密かに招き寄せ。詞扨も某武運に叶ひ當君の御機嫌に預り。今頃天下に肩を並ぶる者もなく活計歡樂に暮すなり。併し爰に祐經が身に於いて一つの難儀出來せり。故をいかんと申すに。例へば同じ一族に河津の三郎祐重と云つし者。家督横領の恨みありて某が家來近江八幡に申し付け。狩場の歸りを窺ひ只一矢にて射殺したり。其子供成長して某を付け狙ふ。兄弟ともに智勇に長じ事六ヶ敷奴原なり。其上鎌倉に方人數多是ある由晝夜心に油斷なし。さるに依つて某見事な智慧を出し。彼奴原を亡す思案を拵へたり。何と御分も此儀に同心あるべきやと小聲になつて云ひければ。藤内もとより浮氣者コハ口惜しき仰せや候。縱ひ一命を參らせても此度の御厚恩に代へらるべきか。地色本國神祇の御罰を蒙る法もあれ。丕く違背あるべからずと請合へば。祐經打頷きヲ、近頃過分過分。詞扨其手段と云つぱ。かの兄弟この頃は錢なしの市立と。大磯の宿通ひ虎少将に譯ある由。何卒其方三浦の與一を唆し。二人の内いづれになりとも逢はされよ。地色かの與一と兄弟は常々に仲よからず。何卒競合の買論にて彼奴等を與一に討たさるべし。さすれば御分も某も拔かぬ太刀の高名ぞ。縱ひ與一を勸むるとも御身行かでは益もなし。コリヤ後詰は某ぞと。黄金數多投げ出せば大藤内きよつとして。詞コレハ〳〵忝や。地色先金取つての色狂ひ白癩唐にもあるまいと。行かぬ先より廓口はや駈け出せばア、是是。詞我物入らぬと思ひつゝ滅多に 地仕過しせらるゝな。ちと折々は手もめも大事ない事と互に。笑ひて 三重 へ行末は。フシ扨も浮世の。浮名川。色の柵かけてげり。フシオクリ流れもやらで フシ瀬に澱む。人の心の波寄せて深き思ひとなりにけり。故をゆかりて大磯と。どの色人や付けぬらん。地色いづれ戀路は多けれど是魂の捨て所。智あるも愚なりけるも オクリ心のへ外の迷ひなり。地色斯くて十郎祐成は何時しか虎に譯深く。誓ひ置きにし言の葉の末を袢と世の誹。親の諫めもわざくれて日を重ね夜を籠むる。其通ひ路や現れし廓にぱつと沙汰あつて。間夫の男と名に立つるよしやさがなしよしや只。逢ふにかへずやありなんと フシ今日もかし

こに浮れ来る。頃は彌生の中空や四方の霞は晴渡り。糸遊遊ぶ庭の面。咲きも残らず散りも初めぬ木の下に。振袖着せて笠着せてあどなや花に置く案山子。女子心の優しさと暫く眺め佇みしが。十郎つく／＼思ひけるは。誠に某大事の身を持ちながら。日毎に通ふ情の道是迷ふまいものでなし。併し人心武夫さへも變じ易し。まして勤の身にしあれば又我ならぬ外心。女は蔦浅はかにて。思ひ立ちぬる事どもの障りとならんもいさ知らず。殊更頃日は三浦の與一通ふ由某とは仲よからず。連は備前の大藤内これ祐經と親しき仲。何とも是は合點行かず。若しは祐經一座をせまいものでなし。かた／＼以つて訝しきに。扨幸ひと案山子衣。肩に打掛け笠かぶり。暫し様子を窺ひける顛智のへ程こそゆゆしけれとは知らずして。虎御前。

此程は打續いて三浦／＼と絮がれて。面白からぬ憂き日數。夜晝わかぬ身の勤め。朝込よりの附入に。今日も變らぬ戀の宿二階小座敷爰こそよ。日移よしと身仕舞ひて日に／＼櫛の挿替る模様はちゞにかはれども。是非に變らぬ物とては。庭木瓜の陰日向。一つ。鏡に。影映す。月雪花は何ならん。見度いは人の俤と鏡。取り置き手づからや。硯引寄せ筆染めて延紙の綴文あたまから。一つとしたる其下は。今日の勤の附屆。扨其次にわし事と只打付けに書きたるは。勤の外の印なり。其折節に海道を旅音繁く打つて通ろ。虎暫し筆をとめあれは誰そやと尋ぬれば。引舟の小衣は衣の香とめて居たりしが。さん候先陣は横山黨。後陣は名古屋の殿様とやらん申すと答ふれば。あはれげに此殿達の馬鞍鎧腹卷を。わらはにほんとはす

めかしならぬ事かと戯れば。ア、爰な太夫様。扨も似合ぬ願事何のためにと云ひければ。ハテ皆主様に参らせて。思ふ事をとくどからず跡は。涙にくれければ。小衣は譯知らず。間夫の男はあれ程に可愛物かとつぶやけば。たしなみやほんに文盲な。勤は勤戀は戀いから譯あるものぞいの。少し教へてやり度い迄。それはその／＼いとしさは寝ても起きても止め難し。思ひ切らうと思ふ程猶し増し来る物思ひ。夜々毎の通ひ路も逢うて戻せし別れには。其移香を其儘に。抱いて寝ねしてゐる心。逢はで去なせし其時は外へも寄りてましますか。又異戀を稼ぐかと少しは妬む心もあり。道の程内の首尾いかゞと思ふ心やら。高い上から後飛び落つる様なる夢を見て。扨も其夜の寝苦しさ。とやあらん。かくやわたらせ給ふぞと。枕

の乾く隙もなし。世には男もないやうに勧むる客を差置いて。貧な男の可愛きはフシ是も。因果の内ならん。地其外萬氣配りのせつない事を思へばや。継のないのも増ならんと。又喰ひしめす命毛のフシ末はかしくと書止め。地色筆もやらぬに藤内三浦亭主諸共入り集ひ。詞コレ／＼虎様文見たぞ。上書見たし封目は。定めて木瓜の御悧ならめと云ひければ。エ、悪戯なさうした事は氣もない事。地見度くとちつとなりますまいと押隠す。藤内も云ひかゝりコレ唐迄も見る男と。飛んでかゝればとんと捨てフシ素知らぬ。顔して居たりけり。與一大きにむつとがり。詞これ／＼藤内。何も勤の事なれば文書かるゝは道理よ。併し上書見せぬ文とあればちと心にかゝるなり。サアサアどうぞあの文を止めて見る事なるまいか。虎聞きも敢へずヲウいやオカシヤ

ンセ。地此里に住む内は千も萬も百萬も。フシ書かねばならぬと氣をもたす。地色與一も今はせき上げに八幡止めて見せ申さん。ヤイサ亭主。爰をば汝了簡せよ。何と黄金と背較べさせ虎を生捕る分別はあるまいか。亭主悦び手を打ちて。何がさて／＼お大名の仰せなれば長も否とや申されまじ。併し虎様のお心はと云ひければ。地自らとても此里の花に心の残りはせじ。それが實にて候はゞ。鎌倉の御所櫻フシ見たい事ぢやとほのめかす。地亭主夫婦は目出度がりサア御嫁入は済んだもの。お立ちは我等が屋臺より御門出の御盃。それ御乗物の御用意せよと犇けば。詞藤内三浦口を揃へ亭主は大きな素人かな。さうした姿は古めかし。つき／＼は跡や先こちとらは深編笠。虎を先に押立てて。地色千里が野邊でも平押しぞ。西は田の畔危い合點ぢやこなたへとフシ先に

進めば虎は猶。地色今更心にこたへ來て怠な事ぢやと行悩む。廊下の端にすつくりとスヱテ涙は襟に押隠す。地色亭主が入れば禿を越す禿戻せば引舟は。はや御出でと呼び立つる上する女子の洒落聲はフシ耳を擦りてかしがまし。地色風の物云ふ世なりせば。斯くと告げてもやらなんに本曾我へ。曾我へと吹く風あれど。物を云はねばフシせんもなや。地色物言はぬ役こそ案山子／＼なれ。堪へ兼ねつゝ十郎は大汗流し氣をもがき。詞扨も／＼四つ足の畜生め。數通の起請は何のためぞ。討つて捨てんと狂ひしがいや待て彼は遊びもの。もとより斯うある筈の事。地色恨むは却つてこなたの恥。さりながらとてもの事に様子を見屆け歸らんとスクヰ常の。へ如くに入りにけりフシ身は習しよ。豊姫は何時の間にやらつい馴れて。髪も身振りも物腰も廓の水に洒落て住む。憂き

ふしの身や假粧坂少將と名に呼ばれ。突出しの初戀より五郎に深く言交す。今日も逢瀨を樂しみに。待つは辛いと云はぬばかりの閨の内。折柄祐成入りければ。少將は嬉しくもよくこその御入りと世に睦ましく寄添ひて。何とやら御風情只ならず。何事ばし氣懸りや口舌かと尋ぬれば。十郎包むに暇なくありし次第を語りぬれば。何虎樣の御客は三浦の與一さふらふな。南無三寳口惜しや身請とあらば此里へ。最早ふつ〳〵見えまいがコハ何とせん淺ましや。時致樣はなど遲きぞ團三郎は來ぬ事かと。立つて見居て見泣きて見つ更に性根はあらざりき。十郎も興を覺まし。是はマア何の眞似ぞとありければ。さん候お兄弟の仲なれば明かしましても苦しからず。斯樣〳〵の仔細にて時致樣とは豫ね〳〵申し合せしなり。どうぞ討たせて給はれと涙を流し語りぬれば。十郎聞きも敢へず何三浦の與一は敵とや。扨はそなたが平家の侍。伊賀の平内左衞門の息女豐姬な。團三郎は家來栗矢の三太とや。扨も〳〵女ながらも頼もし。何がさて〳〵五郎が爲には舅の敵。某がためには差當つての女敵。殊には又意趣ある仲かた〴〵以て捨てられず。いかにも〳〵助太刀討つて參らすべし。併し五郎が思はん所もあり。今暫く待ち給へさりとては痛はしゝ。思ひも同じ思ひなり何しに見捨て申さんと互の心を較べ合ひ。思はずひしと抱き付き泣くより外の事ぞなき。虎は禿が囁きに見えしとばかりが嬉しくて。座敷の首尾を窺ひかしこへ忍び來りしが。この有樣を見るからにくわつとせき來る妬みの袂。抜きかけながら祐成の胸づくしに縋り付き。コレ男畜生惡性者。廓に女郎が切れはせじ現在弟に逢ふ人に。是がまあある事か斯うした事はつゆ知らず。うか〳〵とたらされて此年月の憂き苦勞。海とも山とも譬ふべきか。アノ心中盜人物知らず女郎の罰は當らぬものか。常々頼む愛染樣扨結構な護りやう。夏書夏花は何のため。返させ給へと掻き口說き佛を。恨み身を託つ涙は。袖に朽ちぬべし。虎は漸く顏振上げ。コレそこな人。女郎は互の事なるに男旱は行くまいし。人の戀をば寢取らずと勤ばかりをして居やゝ。ハテ入らぬお構ひの。それ程大事の男ならどうぞ仕樣もあらう事。人恨みずと身を恨みたがよい筈と。女心の一筋に敵の女と思ふにや。聲高に云ひ募れば十郎は笑止がり。コレ少將殿。入らざる詞がらかひや。又虎殿も大人氣なし。但し身請の目出度さに酒が過ぎたか扨は又。奥樣風を吹かさるゝか

張りが強いとせかすれば。詞ム、扨は身請の面當に斯うした事をし給ふな。地廓出るのは誰がためぞ。是皆御身のためならずや。逢ひた見たさは戀の科内からせいて逢はせねば。思はぬはまり身に積り。末々は方様のお世話になるが悲しさに。それ故三浦へ參るなり縱ひかしこへ行きたりとも。心地煩ひ物狂はしく僞りなば。いかな男も秋風の吹く頃迄に愛想盡き。暇くるゝは見えた事それを頼みに暫しの別れを思ひ切りしぞや。此事告げん其爲めに文は認め置きたりと。祐成の膝に置き口說き立つれば突倒し。詞イヤサ見度うもない。文の屆けは常の事是でおのれが言譯立つか。死傾城の實強請。筆と紙とに言譯させ見事に心中立てんとや。地素人はめた癖失せずいやはや餘りで可笑しいと。せゝら笑うて立つ所を髻を取つて引倒し。詞コレ餘程がよいぞいの。假にも妻と呼ばれては立たぬ所のありと思ひ。地とくより立てゝ置きしぞや是見くされとかなぐりつ。島田ながらに打付けて フシ返す袂ぞ涙なる。地色祐成も少將も扨は左樣にましますか。こなたの譯は斯うした事必ず疑ひ晴れ給へと。互に胸を懺悔ぬる フシ末も涙は止まらず。地色かゝる所へ五郎時致團三郎諸共に。何心なく入りにけりもとより差合ひくらぬ仲。斯樣〳〵と云ひければそれ何よりも易かンめれ。詞首踏み折つて捨て申さんと飛んで出るをやれ待て時致。是にて狼藉に及びなば一つは亭主が難儀なり。地色又こなたにも大事あり兎角彼奴等を遣り過し。道にて討つて取るべき間面々其旨心得べし。先づ〳〵虎は座敷へと。互に別れ行く空の定めなき身の其上に。又の難儀を重ね行く是も浮世や 三重へ世の中は

大磯の虎道行

フシ花に嵐よ。月に雲 地是を障の種として。世の憂き事を數ふれば我身一つに止まりぬ。思ふに別れ思はぬを。フシ暫しが程の暫し間も。妻と仇名を立てられて。行くかひもなき道のべの。フシオクリ草木は。人を。誹らねど フシ下の心は。恥かしや。眉なし顏の初姿。髮も衣裳も町風に。淺黃被衣の追風は。腰のかゝりぞあらはなる。縮子の黑きを前帶にしやんと小褄の脛高く。紅粉を素足に透き通り殘んの雪は。氣おされて。邊まばゆき面影や。今日の身請を限りぞと。長地跡振返り眺むれば心に染まぬ仇波の立ち隔たりて大磯も。見えずなり行く果端れ。柳縄手のこなたより。スヱテ被衣取らせて晴れらかに。霞のと絶えほのかなる 小オクリ春日の。小野の下蔭や。雪消の澤に袖濡れ

たいそれ魔仏なり

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

て。根芹摘との市女笠　フシア、よい振りの小娘や。げに爰こそよ名にし負ふ中村の里なりけり。女子育ちの華奢所。スヱテ曾我の里へも程近し。歌祐成様の人目忍ぶの通ひ路に。裙も袂も引靡かせじ。フシ妬ましと。思ふ心の戀風も末は眞東風と吹き變る。花の下行く風と呼ばるな過ぎよ只。歌妻は廓に我鎌倉へ。櫻。花かや散り。ちりに。花かや櫻。ナホス櫻花かや　フシちり〲に。なるを咎めな。關許の。明けなば君に逢ふしまのあるまいものかなどて斯く。渚の浦の沖つ雁去に殘りてや。鳴く音なるらん我も。上べは歎かね。ど。フシ心までくる憂き涙。とゞめ兼ねつゝ行末は露の松山。滴りて下は香を吸む。梅澤の水を掬びて。伏拜む神垣深き。杉の森。春時鳥若しやとて。フシ心を澄ます折柄に。落葉搔く子の聲々に。歌茅花買へとての。取付く袖は。振りの長いが目に立つものよノホ、ニホ。伊達な染色二重がた。洲崎に女波打つ所。ズント優しい形振。そなたは何處へ。躑躅の山路へ花折賣りに〲。花賣り〲花折賣りに。走り〲走り着いたはざ。フシアいたいけや。若松の原。風越えて露を拂へば起き直る。枝と枝とを引寄せ締め寄せ。道の柴折戸結び置く。解くと色ない。人に解かれな。我下紐は幾夜かも。變る枕にほどけども　冷泉底の。心は。君なら。で。解けて寢し夜はなきぞとよ。たまに逢ふ夜の夢をさへ。スヱテ金にさけられ別れには。フシ殘る言葉もありや無し。泣いて別るゝばかりかは。明日の知らせを待乳山花はなけれど。憎からぬ人の。みたちの見ゆるにぞ暫し〲と。託けて。袂に重く摘む菫誰が色濃くや。染めにけん。岨の早蕨手を上げて。人の裳裾をあれ〲いたづらな。まだ若草のしどけなく　フシいもが垣根を。越え〲てそれで名の立つ戀草や。汝が戀路はせめて扨。フシ露と寢し夜の別。れはも。朝日待つ間はあるものを。アノ怨めしや。憎てしや。歌平塚の鳥は。時知らぬ鳥で。眞夜中に歌うて。君を戻すしゆらへ。眞夜中に歌うて君を　ナホス戻せし　フシ曉は。鳥に代りて。憂き涙とゞめ兼ねたる身の辛さ。長地人に包めば誰に斯く語り慰む事もなく心一つを道連れに。程なく今日も黄昏れて一羽鳥を。追うて行く鐘の鳴る音と諸共に埴生の。渡りに着き給ふ

第四

地月は名のみの雨催一村黒き松の影。夜半の嵐と吹き狂ふ心の劒抜きつれて。少将を始め曾我主従　フシ左右に分つて待ちかけたり。地色斯くとは知らで三浦の與一前後のつき〲人數を揃へ。道よりわざ

と日を暮らし。どれにどれたる鎌倉入り フシ人も無げなる有様なり。團三郎眞先に駈出で。詞それへ通られ候は三浦の與一候な。是に待ちかけ候は平相國清盛の郎等。伊賀の平内左衛門が獨姫豐と云ひしを忘れしか。おのれを討たん其爲めに今は拙なき流れの女。假粧坂の少將同家來栗矢の三太。主の敵親の敵遁さぬ返せと呼はつたり。與一驚き振返り。ナニ平家方の斬り殘され。某に恨みありとて是迄來る優しさよ。定めて無常のやうすが吹いて扨は命が腐ると見えたり。地色手を下す迄もなしアレ蹴散らせと云ふ程こそあれ。切つてかゝれば人々は捲り立て毆り立て命を。限りと 三重 へ切り捲る 地太刀風にや襲はれけんむら〳〵ばつとぞ逃げてげる。隙を窺ひ虎御前大道を横切れに。小笹掻き分け退きければ。小衣きぬたも跡を慕ひ フシ逃げて形はなかりけり。

地與一は餘り手強く追はれ。跡を防げと云ひも敢へず大藤内が肩にかゝりて逃げのくを。詞さもし穢し返せ。戻せと氣息をもつかず斬つて廻れば。地色主從共に跡や先逃げて行方は暗き夜や。雨はそぼ降る風打ちしきる心ならずも人々は。又重ねてと引く袂直ぐに翳して袖笠に。雨を凌ぎて木の許を頼むばかりに 三重 へ見えにけり フシ爰に河津が。地色同子に禪師坊と申しつゝ。越後の陸上にありけるが。父祐重の十三回忌を心掛け。先つ頃より寺を出で今此里の片邊に。雨の晴間を待つ露の。スヱテ草折り結ぶ竹柱。葦の簾に川越えて フシ心。涼しき法の庭。地花がなければ風も厭はぬ姿かな。一壁には達磨の尊像拄杖に拂子並びに木魚。線香の燻りほのかにて。詞瑠璃燈の光影細く。手向くる花に色もなく。柳櫻の。摑み挿し是禪林の莊嚴なり。地落日を受くる窓の前には文机を構へたり。枕のかたの炭櫃をば。柴折り。くぶる緣とす。庵の外面に少地を占めあばらなる姫垣の。内に園あり フシ閼伽棚あり。筧流れて。水淸し。地谷繁けれど西は晴れたり。觀念の便りなきにしもあらず。春は藤波を見る事紫雲の如し。夏は繁みの時鳥。語らふ毎に死出の山路を契るなり。秋は茅蜩耳に滿てり フシ空蟬の。世を悲しむと思ふ迄。皆法心の仲立なり。地冬は又雪を憐れむ。積り消ゆる樣を思へば是罪障に喩へつべし。折に觸れ時に觸れ物の哀れの多ければ。信心暫しも止む事なし山居の一德是なんめり。少し心を樂しむも世の憂きふしと切竹の。音に惹かれつゝ小衣やきぬたは手々に取組みて。扨は庵ありこなたへと。鹿ならずしもこがれ寄る道の。草葉や 三重 へ咎めなん フシ柴の樞に。地色立寄りて少し頼みませう頼みません

石虎道海本

と聲々に訪づるれば。詞法師驚き出で給ひ。誰人なるぞとありければ二人の女聲を揃へ。いかにも様子を語り申さんさりながら。地色跡より追手のかゝる者殊更雨も防ぎ難し。先づ／＼頼むと歎くにぞ。是非に及ばぬ戀の宿オクリ暫しへとてこそ通さるれ。地色禪師座敷に居直り。詞さるにても方々はこゝら目馴れぬ女子ども。いかなる故のありけるぞ語れ聞かんとありければ。地さん候我々は廓の者。附き參らせし太夫様さる御方の身請にて。あの里をお出であり埴生の渡しの邊迄今日黄昏に入り給ふを。太夫様の間夫男十郎様と申せしが。待伏せをし給ひ奪ひ取らんとし給ふが。詞程なく喧嘩に取結び太夫様も行方なし。地自らとても此仕合せ。定めて敵の侍ども追付け尋ねに參るべし。影を隱して給はれとスヱテ泣くより外の事ぞなき。詞法師はつと思はれしが。

さあらぬ體にて小聲になり。十郎とは誰が事ぞ若し曾我の十郎祐成にてはなきか。ア、よくも御存じ候者かな。虎様とは仲よくて死なば一緒と云交し。又二つなき御仲廓に隱れなきぞとよ。地色扨御亭坊様もお近附きかと云ひければ。流石それとは名乘られず。詞中々懇意に語るとあれば。地扨々嬉しや此上はともかうも能き様に。ぬし様頼みさぶらふなりどうぞして我々を。十郎様へ送りてたべ太夫様に逢はせてたべコレナウ拜みまするとフシ手を合せてこそ居たりけれ。禪師心に思はるゝは。詞扨も兄の惡性者大きな事を仕出したり。併し餘所に見捨てもやられじと。思ふ心の可笑しさをじつと堪へてのたまふ様。必ず方々氣遣ひあられな。愚僧が斯くて候上は心安う思はるべし譬へば痩侍の五十や百蟻の丈とも思はぬぞ。地色若しも伸張るものならば片つ

はし張り碎いて。いづ地へなりとも立退くべしそれ／＼雨夜の淋しきに。茶を煮て飮まれよ食べ申さん。肘を枕も樂しみと。机に結ぶ夢の世をオクリ誰もへ斯くこそありたけれフシうたゝ寢たる。物語。地色きぬたはいまだ年行かず眠り倒けしを其儘に。袂の振りぞ枕なる小衣は目も合はず。小雨淋しき火の影につつくりとして居たりしが。勤めながらも色盛り禪師の寢顔になづむ目は小オクリ戀の。へ習ひや出來心。つれ／＼見惚れて居たりしが。地さながらそれとは言ひ惡し寢の惡きも作り事。そろり／＼と倒け寄りて。左右の足を禪師にもたせフシ手を打ち。掛くれば目を覺まし。エ、不便の者の有様や。詞暗き夜道を踏み迷ひ疲れ臥しける佛の。地しどけなさよと衣持つて上に覆へば小衣は。一つに寢ると心得て。寢た顔をして待ちけるは。フシ可笑しくも又

差かしゝ。地色思ひの外や主の法師佛殿に打向ひ。座禪してこそおはしけれ待てど暮せど小衣と。袖引く縁もあらざれば待つ甲斐もなき風情にて。差覗き見てげれば一心不亂と坐し給ふ。小衣いとゞ心憂くそれはつれなしさりとては。枕一つの仇夢は覺めて詮なきものなるぞや。寢させ給へと打ちつけに。粋な仕掛けの私語フシ勸する身のしるしなり。地禪師暫し觀念あり。詞そも汝淺ましゝ。僧を犯せし其科は四十九院の伽藍を燒き。佛の形を失ふより其罪多しと說かれたり。されば龍猛大士の宣はく。外面如菩薩内心如夜叉。いまはしゝ勿體なし。地縱へば色を飾りても抑も人間は淸からず。三百六十の骨を集めて人の形を取りたる。詞或ひは作れる家の如く。もろ〳〵の節支へ持ち四つの脈五百分の肉を普く廻り。六脈猶し相掛けて五百の筋を纏ひつゝ。地色七百の細脈十六の粗脈。鏈り巡つて相連らね腸胃生熱の臟を纏ひ。詞廿五の氣脈猶そうげきの如くにして。百七の開恰も破れたる器に等し。五十七竅に不淨のもの充ち滿てり。七重の皮を以つて是を包み五つの味を以つて是を養ふ。猶し一生飽く事なく貪る心絕えざるなり。地腹中に五臟ありて葉々と相覆ひ。其形蓮花の如く孔竅空疎にして内外各相通ぜり。詞大腸小腸は赤白の二色を交じへ。廻り廻りて蟠れる毒蛇に似たり。又頭より趺蹠より肌に至つて八萬の尸蟲あり。四つの頭四つの口九十九の尾先あり。此蟲人の死せんず時互に相食み食ふが故に諸の苦痛を受く。地色命終りし其後は塵に交はる土となる。西施が顏色忽ち白骨となつて郊原に朽つるが如し。此身は始終不淨なりとする所男女又隔てなし。智ある人誰が愛着をフシ殘さゞらん。地故に止觀に曰く。未だ此相を見ざる者愛染甚だ强しとかや。中々迷ふ心はなし南無阿彌陀佛フシ南無阿彌陀佛とありければ。地小衣涙にくれながらこは有難き御敎化。いつの世にかは忘るべきアヽ、南無阿彌陀佛と涙ながらに合掌す。煩惱卽菩薩とはフシかゝる事をや申すらん。地色然る所へ藤内與一何時しか虎を奪ひ取られ。方方尋ね廻りしが若し此邊にや忍びつらんと。耳を峙て居たりしが藤内三浦が側に寄り。詞確か今のは女の聲御念佛の訝しき。正しく小衣が聲ならずやかた〳〵以つて不審晴れず。ヤレ庵室を踏倒し詮義をせよと下知すれば。地元來思慮なき若黨ども我劣らじと棰を叩き。詞此内へ女三人附込うだり出せ〳〵と罵つたり禪師ハット思はれしが二人の女を傍へに忍ばせ。心靜かに帽子を被り槇の板戸を押開き。どなたかは存ぜぬが。近頃の難題左

様の事はいさ知らず。御覧の如く一人住みなる尼が庵。人かくまふべきやうはなし餘の御方を尋ねられよとありければ。イヤサ憶に聲迄聞いて附込うだり。然る上は陳じても甲斐なき事。地急いでこなたへ渡さるべしと無體に入らんとせし所を。七八人掻摑み庵の外へ投出し。小楯にとつたる小門の扉エイと云うて捥放し。八方微塵に打拉げば敵へて近附く三重へ者ぞなき地三浦内藤肝を潰し。詞ヤレ此尼は只者ならず只無二無三に斬込めと。地えいや聲して切つてかゝるを。又追返せば蜘蛛の子のフシちり〴〵にこそなりてげれ。地ツメ今は是迄心安しかゝる所の長居は由なし。又もや敵取つて返さば難儀の上の難儀なり。いざこなたへと連れて退く誠にいげなき墨衣。又戀衣重ねしは濡衣。とや名に立たん

第五

地禪師坊圓月はきぬた小衣伴ひて。目差すも知れぬ夜の道いづ地をそこと定めなく。忍び〳〵に尋ねらる晴間を忘る春の雨。笠を除いて落つ露にフシ袂絞りて王欅。かゝる折しも人々はおのが袖笠被きつれ。何心なく來られしが双方互に飛退り。詞何者なるぞと咎め合ふ時に祐成禪師と聞きつけ。圓月なるかとありければ禪師驚き振返りコハそもいかにと立ちながら。二人の女を渡しつゝありし事ども尋ねらるれば。されば候三浦の與一家來團三郎が舊主の敵。其上時致が忍び妻少将が親の敵。年來討ち度き所存にて我々を頼み候故。敵持つ身は互の事何とがなと思ふ折節。今日大磯の虎を請出し鎌倉へ入り候を。埴生の渡しに待伏せし既に双を争ふ所に。地色雨はしきる日は暮るゝ

敵討たせぬのみならず。詞へ虎が行方見失ひ斯様に方々尋ぬるなり。互に戰ふ折柄心利きたる女なれば。敵の手を掻潜り確かこなたへ参りしを。連れて立退き候がいづ方にてやはぐれけん。行末知れず候としほ〳〵と語らるれば。詞禪師打頷き。扨は今宵の暗き夜遅れて跡へ下りしを。知らで來たると覺えたり定めて遠くは行くまじきぞ。急いで尋ね申さるべし。併し此所は四つ矢近崎香取山口なんどとて。道筋多き所なれば何れも手分け致さるべし。地若し曾我大磯へなど志しなば跡へ戻りし事もあらん。何分山下宿が原十間坂にて出合ふべしと。其約束の道筋へ別れ。別れて三重へ行く空のフシ暗さは暗し。地色戀の闇路と踏み迷ふ心の外の思ひ草。わきて悲し虎御前人々を見失ひ。足に任せて行きけるが廓出てから直ぐさまや。歩み習はぬ道の末いづ地行くらん白

波の。立ちもやせめと恐しくスエテ暫し佇み居たりしが。地色餘り氣息切苦しさに少し惱みを助けんと。側に臥したる荒熊を谷の朽木と思ひきや。腰を掛くければコハイカニむつくと起きて猛り出し。食らひ付かんとせし所をア・恐しと飛違ひ命限りと三重へ逃げて行く地熊はいよ／＼怒れる氣色間なく隙なき一足飛び。既に間近くなりけれど影隱すべき便りなく。うろ／＼として立つたりしがかしこを見れば大石あり。其堀跡に身をしゞめ石を覆へば脱ぎかけの。袂ばかりが現はれてフシ憂身一つは恙なし。地色あなかしこと云ひけるはかゝる事をや申すらん。詞程なく熊は追駈け來り。地色衣の香を知るべにて堀り起さん。堀り返さんと穿てども少しばかりも動かねば。岩根を啀み巡りつゝフシ行き方もなく失せてげり。地色折節山下宿が原 唐が原の戻り馬。晴れ行く空を早めて歸りしが。詞先に進みし沓の權藏捩戻り。やら不思議や此石のある所。殊更堀跡を打覆ひ女の小袖見えけるは。押しに打たれて死にけるか但しは殺して埋めぬるか。いかにとしても不審晴れず。イデ引起して屍隱して得さすべし。汝等いかにと云ひければ殘る馬子も是に同じ。地色いかにも權藏よく云うたり若し生きたれば彼奴が得。それ助けよと不便がるフシ鬼の目にさへ涙なり。詞權藏得たりと手を差入れ。エイと云うて跳ね起せど。大盤石を押すが如くちつとも動く氣色なし。貫差の市まだるがり。ほつこしもない其處退けと。膝を屈して腰を伸す。地離れもせぬのみならず仰きにどうど伏す。して來いの八助蹴散らかし。コリヤほてつ腹。なかほこが淋しいか。常住あがる力石礫に打つて見すべいと。勢ひかゝつてむんずと抱き。地金剛力を出しエイヤ。エイヤと犇けどもフシ少し搖ぎもせざりけり。男の子ぬからぬ顏付にて。詞扨も／＼不思議なる事があるものかな。但しは宵の雨にて濕りしか。地色兎角上げぬは口惜しゝかかれ／＼と力を合せ。三人諸共エイヤ聲して働けども動くべきとは見えざりき。詞馬子ども肝を潰し是只事であるまじきぞ。地色若き者ども呼んで來い上らぬ內はにじらぬと。聲々にわめきければ老若の別ちなく我も／＼と立ちかゝり。是は不思議と呀き合ひフシ指差す者こそなかりけれ。馬借の翁立出でて。詞いか樣是は不審晴れず。但しは神の咎めなるかいざ物試しに札を立て。地色往來の人に上げさせ事の樣子を窺ふべしと。ありし次第を記し置きオクリ宿所へ宿所に歸りけりフシとある所へ。地色朝比奈は宿通ひの歸るさとて。供をも連れず只一人深編笠に高股

立。四尺八寸の玉丸十文字に横たへ。大竹を杖につき フシ鼻唄歌うて通りしが。爰に見馴れぬ高札あり。義秀不審晴れやらぬ星の光に差覗き。何々此石と申すは曾我の五郎時致と云つし人。酒匂川の水に浸り二所權現に力を請ふ。滿ずる七日に水上より大石流れかゝりしを。思はずも取つて差上げ洲崎の石に打付くれば。二つに割れし石火の光不動の尊體現はれ給ふ。其後夜な〳〵蛇來つて舐れば元の如くになる。元來此所より出たる故爰に納めて是を尊む。然るに今宵堀跡に居直りて。下には女の小袖を埋む。所の者ども立寄りて死生を見んと。力を爭ひ人數を選ふに更に動かず。若し往還に力者あらば。速かに事を糺し給ふべしとぞ書きてげる。朝比奈くつ〳〵と笑ひ出し。扨々五郎時致は大力なりと聞きつるが。是程の小石を上げんに二所權現をせがまずとも。此朝比奈を頼ますして折角水を浴びけるよな。地色印地の礫によき手頃なる石なんめり。此義秀が腕には足らじイデ蹴散らして取らせんものをと。弓手の足の親指にて跳返さん。跳返さんと焦てども中々動く氣色はなし。詞コハ口惜しと兩手を伸べ。エイヤ〳〵と大汗流して居たりけり。地色所へ十郎祐成虎が行末の知れざれば。心を置くに所なく憧れ尋ね歩きしを。詞朝比奈早くも見付け南無三寳恥かしや。義秀が力のたけ人に知られて叶はじと。地色すゝきが隈に身を隠してぞ居たりける。契り朽ちせぬ石の下衣の片袖朧けし。影に透して十郎は怪しや物のとよく〳〵見れば。色も模様もありしに違はずコハ口惜しや淺ましや。扨は討たれて死しけるな。不便の者の姿やと フシ平伏して。こそ歎かるれ。地祐成漸く涙をとゞめ。詞今は歎きて詮もなし。地せめては空しき骸を隠し兎にも角にもなるべきと。石引き起せば夢となく現ともなき面影の。物をも云はず縋りつく フシ虎は涙の雨やさめ。地色ぬれとは知らず朝比奈は餘り不審さ身を忘れ。顔差出せば十郎なりヤア祐成かと云ひも敢へず。詞吾殿は誰ぞ義秀殿。地色扨珍らしと打寄りてありし事ども語り合ふ。所へ時致禪師坊少將鬼王團三郎。一つになりて尋ぬ來り互にそれと見るよりも スヱテ是は。是はとばかりなり。詞さて禪師坊朝比奈に打向ひ。誠に舎兄祐成事相摸川の憂き難儀。貴公の御情深き故危きを遁れし忝なさ。弟の時致も千萬有難く存ずるなり。愚僧は出家の事なれば思ふにかひも候はず。地只兄弟が事どもを。宜しく頼み奉ると スヱテ涙と共に申さるれば。義秀も涙を押さへ御禮迄も候はず。詞御兄弟の事どもは父義盛を始めとし。秩父北條千葉

上總何れも懇意に存ずれば。願ひも叶ひ申すべし必ず心安かるべし。併し少將敵討の事尤も五郎に所縁あれば討たせ度きはことわりなり。さりながら兄弟共に大事の身なれば構ひて助太刀無用たるべし。此上は某が思案を以つて。登城の折柄門前にて討たすべきぞ。人々は往來に打交り緩りと見物あらるべし。地色 さるにても此石の他の人の手に重く。祐成の手に輕きはいかに。詞 斯く申せば十郎は力劣りと云ふに似たれど。必ず心に懸け給ふな。某も時致程こそ候はね。關八州にて恐らく力は自慢たるに。地 是程の石得上げで歸る口惜しさよと怒りをなし。少し不興に見えければ虎恥かしげに立出て。詞 主様の御力が全く劣るで候はず。地色 わらは嶮しく熊に追はれ。命危き折柄此石に影を隱し。二所權見に祈誓をかけ重きが下の石に臥す。袂殘りし小夜衣我

夫ならぬ人の手に。構ひて上ぐる事勿れと約束堅き石の火。命較べて消ゆるとも色よき人の手には輕かれ。厭な男に上がるなと色を好みし一念の。凝り固まりし故なるぞや少しも心に懸け給ふな。詞 女子の口から斯う云へば男自慢に似たれども。地色 わらはが爲にはよい男それで命と言ひ殘す。後の世迄も色好みの。虎が石とて旅人の口ずさみとぞ 三重 へなりける フシ 時なるかなや。地色 春過ぎて夏來にけらし更衣。祝ふや君が幾千年申し納むる日なりとて。在鎌倉の大名小名何れも登城ありけるを。朝比奈内通してげれば今日を限りと少將は。さもかひ〴〵しき姿にて フシ 先に進みて出らるゝ。地色 跡に續きし團三郎是も女に出立ちて。敵の油斷を覗ひける ヲクリ 心の へ内こそゆゝしけれ。地色 大名小路を遙かに過ぎ義秀の門前にて。詞 是は西國の女子ども。此所にて

親の敵に出合ひ只今勝負に及び候。身拵への程暫し御門前を貸し給へと。地色 帶締め直し襷かけ フシ 小太刀拔連れ待ちかけたり。地 斯くとは知らで三浦の與一四五十騎にて打つて通る。詞 二人は向ふに駈塞がり。平相國淸盛の郎等伊賀の平内左衛門が獨姫。豐と云ひしを忘れしか年來の親の敵。おのれを討たん其爲めに今は拙き流れの女。化粧坂の少將なり遁さぬやらぬと呼ばはつたり。與一から〳〵と打笑ひ。扨も〳〵野太い奴があるものかな。地 あれ打殺せと下知すれば同勢一度に追取り卷き。既に危く見えける所へ。紅の大口に鎧搖りかけ大長刀を横たへ。老女一人門を開かせつつと出で。詞 二人の者を後に圍ひ眞中に割つて入り。さもし穢し方々よ。是は朝比奈の三郎義秀が母巴と申す女なり。承り候へば敵討と候に。女子二人中に取籠め尾籠の振舞ひ奇

怪なり。義盛も義秀も皆々御前に相詰めて留守は自ら預つたり。敵討の法なれば。若黨どもを退けて尋常に勝負あれ。おのれ等びくとも動いて見よと八方に目を配り。仁王立ちに立つたりしは恐しかりける勢ひなり。與一おづ／＼側に寄りコレお袋。近頃是は無分別。彼奴は平家の餘黨なれば手々に搦め捕られてこそ。忠臣の妻とは云ふべけれ。平家方の肩持たるゝは但し義盛逆心なるかと云ひければ。イヤ狼狽へたるか與一殿。縱ひ平家の餘黨なりとも女は御免なさるゝぞ。ヤレ方々何をば待つぞ只斬込め／＼と。勇め給へば少將も互に聲をかけ合せ火を散らしてぞ　戰ひける　何とかしけん。國三郎肋四五枚斬拂はれ。かしこにどうと伏し轉び刀を杖につく氣息も。絶ゆるばかりに見えにけり少將いとゞ心憂く。おのれ刀は立たずとも食らひ付かんず勢ひにて捲り立て捲り立て。斬込み給へば眉の間を斬下げたり。與一も今は是迄と毆り立て／＼。毆り立つれば少將も馬手の高股斬拂はれ。裾は血汐に染みながら爰を最後と斬結ぶ。下紐に血傳ひ縺れてかしこへかつぱと臥す。與一も眼は見えざれども少將に乘りかゝり。差通さん。差通さんとしてげれば。巴を始め曾我兄弟禪師坊も鬼王も。諸見物に打交はり遠く見る目に氣上りて。あれや／＼と身をもがきてこそ居られけれ。側に伏したる國三郎呼ばはる聲にて心附き。眼を開きにじり寄り。與一が腋壺三刀刺し向ふへがはと突倒せば。少將むくと起き直り首討ち落せば和田の一黨。前後を圍み邊りを拂うて圍へ行く道の道たる君が御代。猶萬代を重ねつゝ皆萬。歳を稱へける

右此本者依為懇望文句音節等悉校合
加秘密令開版者也
竹本義太夫 竹本（壺印）義繼

京二條通寺町西入町北側
山本九兵衛板 印
大阪高麗橋壹町目
山本九右衛門板 印

さるほど
心中涙の玉井
豊竹若太夫 直之
正本

おはつ住吉参り道行

次第教への道も秋津國。ノ＼。ナホス神の宮居に参らんと。フシ實に世の中は。戀の秋。誰に縁の文月や十六七の女郎花。露を含みし面振りの。只繕はずぽんぢやりと。髮の結振り愚痴ならず。小オクリびらり。帽子の端れより匂やかなりし眉の色。丸めし戀は是やらん。フシ笠傾けて。遠方此方の。人にや忍ぶ姿にて。伴をも倶せず連もなく。フシオクリやうノ＼へ辿り北の端フシ並木の松に。風そよぐ。はつと裳の裏見せて。處體いぶかし如何とて抱へる帯を仕直しつ。身振り直すも艶かし。地弓手に立ちし石塔はいとも畏き人寰の。標なりける色知らぬ。野路は淋しやせめてさて戯れ胡蝶の飛びつれて。歌上りつ下りつ丸くなり。さも忙がはしく見えつるは悋氣か痴話か聞きたしと。ナホスフシ人に問はれず。唯一人。心遣ひも身の上を少し慰む縁なり。西は海原渺々と。遠き山山氣疎くも。風に任せて走り船。みちは伊豫路か讃岐路か フシ嗚呼儘ならぬ。この世界。わが魂はうかノ＼と。人目の繁き小笹原オクリ露分け。もせぬ憂き苦勞鯨寄るべの浦なりとも。思ふ人どち暮すならほんに生きたる佛様お阿彌陀様もお心の。通らせ給ふものならば。兎に角早く我々が願を。叶へたび給へと。拜む心も徒らや安立町の荒神様。地夫婦の仲をよき様にと傾く軒に夕顔の。歌餘り淋しさに軒に瓢箪釣らせたりや。折しも風が吹いてあなたの方へからころひよ。こなたへからころひよ。からころノ＼ひよつと瓢箪の釣らせたるは何より以て面白い岸の姫松 ナホスフシほの見えて。逢はぬ昔と逢ひ見て後と。思ふ思ひは思ふより思ひの外の思ひなり。まだお日様の四つ時分。見上ぐる顔のまばゆきに扇翳して。見晴らかし嗚呼よい景とほゝ笑みて。鶺鴒鳥色鳥の。差合なしに羽襖。歌鳥の中にも比翼の鳥はノ＼。己ればかりが妻持ち顔に。羽打揃へて。合手ノ＼露の時雨にナホス羽を浸し。己が儘なる其風情。ナウ鶏子鳥と眺め捨て何處知るべはなけれども フシ誓しが程も。住吉と。聞くに昔の相生に。千代に變らぬ松の色。友白髪なる壽は。誠に目出度き御神の堅き。誓ひや片削の石の鳥居の御前なる。

心涼しき水茶屋の。縁の端居に腰かけて暫く休らひへ給ひける。フシ仇にはなさじ。一筋に交す契を繰言に。分くにも餘る糸筋の亂れ心に染色や。久兵衛とて譯知りの今年既に廿三。器量盛りや戀知りの情ある身は菱屋なる。地色おはつに深くあひめでの。二世を豫ねたる仲なれど。人目の關路繁ければ。心で知らせ目で知らせオクリ顔見るへ迄を樂しみに。月日を送りて。奉公もフシうか〳〵勤め暮せしが。地頃しも盆の節季とて大阪表の商に。負箱負うてたど〳〵と誰に大江の岸なれや。松原に差しかゝり大明神を叩頭きて。脇目も振らず通りける。所に出茶屋の床よりも。ナウ久兵衛殿久兵衛殿ではないか。これ〳〵と呼び掛くる。久兵衛思ひ寄らねども立戻り詞コリヤお針の小よし殿か。ヤアおはつ様か是はマア見違へた。して何處へ行かうと思召し。御連もなく供もなく。又氣の變ること草の。地濡がな稼ぎに御心かと少し不興に見えければ。おはつはおろ〳〵涙にてヱヽあた榮耀らしいわしが此中憂き苦勞。地海山にも譬うか京からは嫁入を。今月中に急がれよと醫者宗伯殿より急いでくる。そこで御針が智慧を出し。詞痞差出て氣むづかしい眩暈があつての腹痛のと。地色色々に紛らかしとくと養生なされてより。九月時分がようござらう左樣に思召されよと。色々挨拶しけれども宗伯ちつとも合點せず。どれ脈見ようとわしが手を。詞會釋もなく取つて見て。目鼻を蹙め是は扨。おなかに物言ひありさうな。身共は何になれとて斯うした事は召されたぞ。よしそれも分別あり拙者方迄呼びまして。只一服で下して捨て。そこでこそ氣色とも。地虛言も言はるゝものにてあり猶々急いで御仕度と。仁王の樣な顏をして歸られてから父樣や。母樣ぐるみ共上に。かね〳〵共方に言ふ通り。詞手代の彌次兵衛が意趣はある。さうこそあらうと存じたれ。其男めも知つて居る。扨結構なお娘御。菱屋の家をぴしやりにして。御存分にて御座らうと惡口のありたけを。地底意地惡く言ひ散らせばあそこからも爰からも。鳥の囀る其如く言ひ立てられし時にこそ。スヱテいつそ自害もせまほしく。百度。思ひ荒磯海。深き淵瀬に身を捨てようか。心の内は早鐘をつくづく思へばお主樣に。任せて置いた身ぢやものを兎角談合あらうもの。逢ひた見たさの憂き難儀樣子を問へば此中は。大坂へ行かんしたと地聞くになか〳〵たまられず。小よしにそつと牒し合ひ北の端なる稻荷樣。願を込めたる事ありとお針が衣裳を借り求め。コレ此樣な脇詰めて。行逢ふ迄と玉鉾の道知らねども念力の強

い心や通じけん。爰で逢うたる嬉しさや。右の通りの首尾なればマアどう思うて下さんすと延紙を涙に浸しける。詞久兵衛手を拍つて。先づ／＼大い憂き難儀。地色皆私がなす業と。嬉し悲しう フシ 忝し。地扨々私はさうした事は露知らず。本町や伏見町堺筋の絹屋を廻り。三井の出店で糸など買ひ。それから天滿の天神樣北野のお不動其外に。地色妙壽寺の鬼子母神藥王寺の七面。日親樣迄立願し。地どうぞ願ひの叶ひまし此方と千代も友白髪。添ひます樣にと色々の。心の内はもだくだと取亂したる白髪糸。解くに解かれぬ深紅の糸。どうして是がよからうと差當りては分別もフシ溜息。ついで涙ぐむ。おはつ重ねて否これ延々の事でなし。これからなりと何處にぞ知るべもあらば退かんせや。そちの内でも表でも曾根崎の心中は。南へ移つて來さうな事兎角おはつぢや／＼と。當事いふも病になる。いつそ死のなら諸共に一緒に殺して下さんすかどうぞ／＼と身を寄せて涙に聲も上哽れし。久兵衛打頷き詞ヲヽ道理／＼さりながら。今爰から立退きては商の算用なく。取逃げしたると取沙汰あらば惡事の上の恥辱なり。地色立つ鳥後を濁さずとや篤と物事埒明けて。扨又若い者共にも心ばかりの暇乞。又はこなたや身共等が行末迄の身祝ひに。夷島にて船遊び一獻汲んで祝ひまし。靜かに立退き申すべし。河内の國高安に親しき者の候へば。あれにてゆるりと添ふならば田舍も住みよかるべしと。待つが賴みでござるぞやこな樣も今日は先づ早く御歸りなされませヲヽそれよ。詞まだ大事の事忘れたり。さうして船で出ましたら。小よし方迄合圖して大坂屋迄來てござれ。わやくや紛れに退きませう。それはさうぢやが田舍住居が秋風でどうで男にや持ちやさしやるまい。入らぬものぢやと思へども。如何した事の因果やら。忘られもせぬ此戀と。互につゝと打笑ひサア北の橋迄送らんと既に立たんとする所へ。手代の彌次兵衛大脇差を横たへて。汗を流して韋駄天飛びに駈來る。おはつ見付けてそれまあ隱れさんせと言へば。久兵衛心得たりと負箱の。後に隱れフシ忍び居る。彌次兵衛程なく駈來り。詞これ大膽なおはつ樣。何しに爰へござつたぞ。内では旦那や御袋の大方ならぬ御氣遣ひ。ろくな事ではござるまいサア立たしやれと手を取れば。地おはつは兎かうの答なく。煙草盆引寄せて素知らぬ。顔の煙草。吹き出し／＼他見して。久兵衛を見せまじとフシ北を眺めておはしける。地色彌次兵衛愈急いて來て。詞是なう爰なおごう樣。申しても／＼さりとは／＼胴慾な。聞

えませぬと申さうかこなたに俺が首だけ。惚れて居まする其事は三年先から口說けども。遂に嬉しい返事もなく目を見合すも嫌さうに。何時も〱苦い顏道理かな〱ねつそりとした事慥へて。久兵衛めと腐合ひ子迄孕うでヲヽ結構ななされ樣。地然し世の中に斯うした事もある習。若き故と云ひながら餘りと云へばひよんな事。詞あの久兵衛と言ふ奴は河内の穢多の伜ぢやげな。ヲヽまだそれよ總じて父は三病やみ。然らば孫を繼ぐなれば彼奴も軈て癩病が。しやつ面から熟んで來て蓪子の樣にならうもの。地其時でも抱合うて男ぢや敵ぢやと言れうか。笑止笑止と惡口を。フシするも一物思案あり。地久兵衛は箱の陰より。聞いて堪忍ならばこそ。飛出んとは思へども言交したる言の葉を。無になす事も本意なしと。齒を食ひ締めて身を顫はし我身を。抱きて泣き居たる。おはつも顏は紅葉して胸に迫りて口惜しけれど。煙管で肩をそつと突き。詞彌次兵衛は何を言やるぞいの。地山の彼方のねすりごとア、聞きともない置いてたも。何であらうと餘所の事我身が苦にもならぬ事。今日は殊更御日和樣よいにつけての氣慰み。俺は後から去の程に。そなたは先へ去んでたも賴むぞやいのと言ひければ。詞彌次兵衛ちつとも合點せずイヤ爰な徒人。こなたが主でなければの生けて置く人でなし。言葉柔かな內お歸りやと。眼にくわつと筋を立て。地それ駕々と呼びければ傍の出駕持ち來る。彌次兵衛腹も立つなれば値段もせず無理やりに。おはつを取つて押込み科人などをする樣に。脇差の切刄を廻し。駕に引添ひ追立て急げ〱と逸散にフシ埃を蹴立て歸りける。地後には久兵衛只一人溜息ほつとつく〲と後を見送り獨言。扨も〱口惜しや男たる身が今の程。あらゆる惡口言はれては死なねばならぬ首尾なれども。おはつに契約無になれば是は是非なき事どもかな。とは言へ傍の水茶屋にも。最前樣子も見て居れば。腑甲斐なしとて笑はれん。生きて居られぬ身なれども此場は堪忍するぞいやい。己れ彌次兵衛め覺えて居れと。負箱背負ひすご〱と。しほ〱歸る有樣は笑止にも亦。三重へ哀れなり。

フシされば古語にも。言ふ如く。月に雲花に風初山藍の色にでし思に染むる袖の露。地おはつは宿へ歸りても。手業仕事も手に附かず。スヱテしを〱として物思ふ涙を。襟に隱しける。地色お針の小よし立寄りて。コレ爰なお子。詞何をしく〱泣かしやるぞわしが吞込み居るからは。篤と後先よい樣に心の儘に添しましよ。地其內人が氣を附ければ何事もむつかしい。

仕事がいやならコレ浄瑠璃本でも見さんせや。又煩ひの出ぬ様に御養生こそ肝心なれ。サア昔々を語らうかとフシけらけら笑ひ居る所へ。地夫婦の人は出で來り。ヤア憂な不孝者。詞親の許さぬ小夜衣浮名の立ちし此辛さ。此年迄ついしかに覺えぬ盆をすることは皆其方がさする事。地誠に世話にも言ふ如く指穢しとて切られもせず。今より心をはらりと入れ變へ。京都へ往たらば隨分と。不作法不義のない様に今の惡名雪ぐべしナウ嗅さうではないかとあれば。地色母も共に成程〱言はしやる通り。必ず何もたしなみやと。スヱテしみ〲と意見ある親の。心ぞ有難し。地おはつ暫く俯向いて。答なくして居られしがイヤ申し父様。詞さる山伏殿にわしが懈怠を見せたれば。京や大阪は相應ひで其儘親に離れうと。地懇に言はしやつたそれで京都は好きませぬ。變更えならうことならば京は止めにして下んせと。フシ手管を言ふも愚なる。地親爺大きに急き給ひ。そこなそげめ。扨憎い奴がある。さう抜かすも合點ぢややい。どうで汝が徒て行きとむないが一倍で。何の彼のと品付けて。親の難儀を顧ず未だ根性を直さぬか。地色切も〱此年迄願うた後生も無にしくさる。サア是でも直さぬかと。柄差箒取り延べて二つ三つ打ち給ふを。母や小よしが取附いてコリヤお前様のが御道理コレはつ様。詞何故に上るまいと言はしやるぞマア旦那様奥へお入りなされませ。わしらが御合點行く様に篤と御意見致さうと。フシ様々宥め居る所へ。地色彌次兵衛は餘所より歸りしがつか〱と走り寄り。コレ旦那。折檻が甘うござる。三寸繩に括し上げ血反吐をお吐きやる首尾ならでは。地根性は直るまいと猶嗾くる心根は。フシ脇から見ても面憎し。地猶々親爺不興して。又振上げて打ちければ彌次兵衛見て。ヲヲそれでこそ〱さりながら私が心入れも候へば。先づ此方へと手を取つてオクリやう〱へ奥に入りにけり。フシ實に夕暮の。淋しきは秋ならねどもあるものを。暮るゝ思ひに彌增して。本フシ蟲の音弱る今宵しも。おはつは思ひますら男の悟る心も今はなし戀の奴に我は死ぬべしと。故事迄も身の上に倚し涙の種ならし。地かゝる折節久兵衛お針が手引に忍び入り。人の噺も身に應へわな〱顫ふ其姿スヱテいとゞ心のわくせきと。おはつは此方へと走り出で物をも言はず手を取つて。辛いやら嬉しいやら涙に。分けも知れざりし。稍氣息繼いで久兵衛。詞いとしぼや又折檻に逢ひ給ふと。小よしの傳へ聞くよりも。地色身もたまられず候へども。是非に及ばぬ仕合せなりさりなが

ら。詞内々話せし趣向の儀。明日に極めたり。愈々首尾を繕うて大阪屋迄來てござれ。地何事も〳〵必ず〳〵急くまいぞ。火水の中でも明日一日。爰さへ退いたら逢を夜。何程寝ようと儘ぢやものと。背中をとんと打ちければ。おはつは少し頬笑みて。ア、嬉しや何が扨さうさへならば身の本望。然らば此方も歸らんせ。ヲヲそんなら去なうか。ア、喧し。惡人方に見附けられ邪魔など入れば如何なり。可惜御見は惜しけれど末を樂しむばかりをと。スヱテしと〻打つ手を戴いて。詞有難し忝し先づ〳〵わしは歸らうと立ちければ。地名殘惜しげに袖扣へ。ア、明日の日が短かれ惜しいことぢやこれ斯うと。又抱き附き囁けば。ハテやくたいもなき急はしない。地黄丸で作つても。溜るまいとて打笑ふ深き。妹背は三重へ賴もしき〔此間に舞臺にて人形あれ共略す〕

おはつ久兵衛河内へ道行

ハル言の葉。を糸で結びし。心こそ。戀といふ字の姿なれ。妹背を結ぶ糸屋なる情模様や初姿。久兵衛諸共に茶屋の妓女衆に打紛れ。粹な姿にしやれ貝を。拾ふを誰に忍摺亂れ薄をフシ掻き分けて。行末祝ふ夷島。色ゆゑ沈む河内路へ 小オクリ締めつ。緩めつ手を引いて。あれは何ぞと白玉か問ひし昔の道芝も。色には胸の芥川 フシオクリ流れて。ヘ早し年浪の立つ甲斐もなき。思ひ草忍ぶ心の フシたど〳〵と。背負ふぞ戀の重荷なる。遠からねども心急き急ぐばかりの月の足。三五の影も照り添ひて。柱の眉の。薄雲も。止めばや爰ぞ平野町御幸の舍人見返りて。挿頭の櫛や。引く浦に向ふは名にし。天滿宮。地此御神の古はなき名筑紫の浪の上。我は東へ行く程に フシ羊の。冷泉歩み斯くやらん。牛の埜開く野外れを。直ぐに出づれば横雲の 小オクリ棚引く。迄は程あらん田面に早稲の秀でしも今ははかなきフシ水の音。奥手は如何に添ひ果て〻。枕並べん樂みと。ヤ〻物語重りて。詞思てござるか河内へ行たら五年十年居ようと儘ぢや。さのみしみ〴〵歎かすと。歩ましやれ。先には鬼もないものと。勇め男むりやそりやそもあろがよしや定めぬ世の中の。變るは常よ人心。賴まれじとは知りながら逢ふ夜〳〵の。睦言の。洩れて二人が。憂き涙干す暇もなき夜の道。哀れ較ぶる虫の聲深き思ひを蟋蟀たれ松虫のおとづれは。辛しや憎や妬ましと。桔梗が隈に濡れ渡る。裾も狭もしぼ〳〵と暗き心に月影は。冴え返りても木隱れの。榎の本に着きにける。

地色か〻る折しも内よりも定紋の提灯を。傍まばゆき燈し連れ。フシお初様久兵衛殿

と呼び廻り。近附く聲にあたふたと榎のぐろに立隱れ。スヱテ 氣息を詰めたる切なさは半ば。心も消え入りし。地 そこよ爰よと尋ね行く聲もこだまもやう〱と。程遠ざかり過ぎければ二人は嬉しく走り出で。扨も危し是よりは右手へ取つて道を變へ。少しにても急ぐべし目立たぬ樣に二人とも。いざ姿をも變へんとて。心用意の風呂敷に オクリ 上衣をへ脫いで押包み。地 身繕ひする其內に誰やら人のおとなひの。確にあれはとゝ樣やかゝ樣の御姿。見付けられては詮もなし逃げ隱れんと思へども。冴え返りにし月影に暫し隱るゝ隈もなく。あたりを見れば折節の亡き魂送る捨席。これ幸ひと打ち被き。オクリ 氣息をへ詰めたるばかりなり。フシ 行く道筋も。戀路より。地 猶悲しきは子を思ふ スヱテ 身の遣瀨なき世の中の フシ 何處も。同じ親心闇ならねども迷ひ行く道の知るべを憂涙。あるにあられぬ姿なり。詞 イヤナウかゝ。乳母が方へも尋ねさせ又絹屋町其外へも。定めて人は遣りつらんアヽ如何にも我等が出ぬ先から聞きましたが。あそこらへはけんによもなし何處の方に居る事ぞと。スヱテ 又繰返す涙なり。地 斯くあるべきと知るならば憂き折檻はせまじきに。言うて歸らん事ながら。憎しと思ひ色々と。辛くも當りし事どもかと思ひし故に斯く成りて。フシ 何とかすべし悲しやと。涙に道も見え分かず二人が隱れし姿をば。乞食なりと心得て 詞 ヤレそなた衆よ。只今にても先にても十七八の女房と。廿三四の男。此道筋は行かざるか。地 其聲だにも聞きしかば教へてくれよさりとては。世に賴りなき老の身の子を失ひし力草 フシ 枯果て。なんとばかりなり。地色 彼等が體を見るにつけ。嘸や二人の者どもが宵よりして宿もなく。野路に迷ひつ山に行き。あの身につゆも變らじな嗚呼さて若き心から。色故浮れ出で迷ひ斯く迄思ひをかくるぞと。むせ返り〱。泣くより。外の事はなし。地 此道筋へも來たらずばとても出でぬる上なれば。萬代の方をも尋ね見んヤレ方々よ。詞 若し跡へ來し面影の見えたらば。地 必ず止めくれよかしと。母は暫く立留り珠數袋より鳥目少し取出し。二人の行方まめやかにと。祈る心の施しを フシ 受けぬも今の身にあはず。差出す手もたよ〱と。包み兼ねたる涙をも押隱し。〱哀れと。見ゆる姿をば。地 夫婦の人はつゆ知らず。扨もやさしの有樣や。人の憂を身に請けて。歎く心かさらば。フシ さらばよと。立別れ行く後影。是ぞ親子の別れとは後にぞ思ひ知られたり。神ならぬ身のはかなさよ。今は包むに包まれず姿あらはに立出でてナウ淺ましや色故に。斯

く成り果つる我々を親の慈悲とてあの如く。尋ね迷はせ給ふ事冥加に盡きて行先も。思ひ知らるゝ悲しさよ。地此正月の御着物わしが仕立てゝ居る所へ。詞かゝ様のござりまし。桁丈袖も必ずと少しにても用捨しや。皆そなたの物ぢやとて。地末の事迄思召し。御年の寄るはのたまはでわしが事ばかりにて。暮させ給ふ御心入。如何して是が送られん。申せば今が生別れ。これならうとゝ様母様と草にひれ伏し身を叩ちせき入り。せき入り歎きしは理せめて哀れなり。ナウ久兵衛殿。詞常にこなたの言はんす如く。書いた物で現はるゝ粗末にするなと言はしやる故。皆引裂いて燒いて棄て。地わしが書きし物とては小遣帳があるばかり。定めて定めて母様の。はつが形見と見る度に。歎き給はん悲しやと。しどもなき事繰返し涙にくれて居たりける。地色男も暫し

涙ながらわざと言葉を荒らかに。詞さのみな歎き給ふまじ死し果つる身にてはなし。河内へだにも行くならば。地又御夫婦へ必ずも廻り逢ふ間は今ぞかし先づ先づ暫しも急ぐべしと猶も心は細道の。並ばれぬまを手を取つて月の影さへ跡先に。繁り大木のほの暗く色オクリ草のへ葉末も見えわかず。地先に進みし久兵衛野面の井戸にどうど落ち。はつと言ふ聲に驚きて女心の悲しさは。遣る方もなき身の行方。如何ならんと思へども聲を立てなば程行かん。追手の者や立歸らんア、悲しやといふ内に。女はせめて心つき撥釣瓶をともがけども。力に叶はぬ詮方なさ。さのみは深くもあらじをと帶を繼ぎ足す抱帶。やう〳〵に結び下げ。詞コレ久兵衛殿これ〳〵と。帶を下せば取付いて。扱いとほしや我故に幾許の物思ひ。假令取付きたればとて如何で女の力にて。

引上げられぬやうもなしと。地涙にむせぶ其聲も次第に弱る悲しさよ。地色おはつも今は氣も亂れさて情なき世の中や。人目を忍び身を忍び親はらからの氣に背き。添ひ果てん故にこそ。斯く迄心を盡せしに今の難儀は何事ぞ。神や佛はなき世かや。恨めしの我身やとひれ伏し。歎き居たりしが。地弱る思ひを取直し。南無や天滿大御神力を合せ給はれと。念力に引く縁の帶。假令千曳の石なりともとかひがひしき言葉にぞ。男も少し力を得。半ばは離れ上りしが女力の手弱さに。しかも男の身は重し帶はふつつと切れ離れ。どうど落つれば初めより猶底深く沈み果て。ばつと立ちぬる水煙フシ今は姿も見えわかず。おはつは暫し氣も消えてナウ悲しやと倒れ伏し。足摺をしつ身を悶え。焦れ歎きし涙には野邊の。千草も。枯れぬ

べし。男やう〳〵浮上り。詞扨も是非なき世の有樣。戀故にこそ主命を暫しも背き名を捨てゝ。フシ此儘果てん悲しさよ。地色さりながら御身は是より引返しお二人へも斷り遂げ。必ず京都へ嫁入し行末長くおはしませ。地思ひ出する折々は念佛申して給はれや。ア、苦しやといふ聲も弱り。果てぬる有樣に。女も今は思ひ切り。二世とかねたる身を離れ生き存らへて何かせん。とゝ樣やかゝ樣も色故親の名をくだす。不孝の科は許してたべナウ我夫よ待ち給へ。未來も一つ蓮ぞと手を合しつゝ筒井筒。昔男のいにしへに變る二人が最期ぞと。思ひ切つたる煩惱の絆を結ぶ帶の端。手に持ちながら南無阿彌陀。南無阿彌陀佛助け給へと飛入りしは フシためし少き最期なり。セメ夜明烏の聲々にかはい〳〵と告げ渡るゆかりゆかりの涙川此玉。の井にとゞめたり。

豐竹若太夫　正本

右本者依此懇望文句音節
等悉校合加秘密令開版者也

大阪上久寶寺町三丁目
正本屋九左衛門　開板

金屋金五郎浮名額

豊竹若太夫直之正本

詞地謡御酒と聞く〳〵。名も理や秋風の。吹けども〳〵。更に身には寒からじ。理や白菊の。〳〵着せ綿を温めて酒をいさや汲まうよ。太夫客人も御覧ぜよ。ナホス月星は フシ隈もなし。地所は潯陽の。江の内の酒盛。謡猩々舞を舞はうよ。蘆の葉の笛を吹き。ナホス浪の鼓どうと打ち。フシ聲澄み渡る。浦風の。秋の調べや殘るらん。可惜夜酒の附差しも更行く月を友として。誰が差しめをもしらためずあひといふ字を取違へ銚子かゆるも。憎てらし。酒の皮剝く辯として一つ受けては附差しの思ひ差しのと氣を持たす嘘言か誠かそりや眞實か。歌五智の如來の惠みもあろに。合手深き思ひを乗りかけ馬に。離れがたなき我思ひ フシ思ふが故に。そのしがを。包むに餘る言の葉を人や聞くらん羞かしの。もりて我名は命毛に食ひ締められて善惡の。戀と思ひを掛けて見る歌額の小さんは醉うたとさ。足や千鳥足。狹の上風そよ。フシそよ〳〵と。吹くにつけても彼の人に逢はんと思ふ一念は。謡よも盡きじ〳〵。萬よしなき今宵の寝酒。注げども謚きず飲めども變らぬ秋の夜の盃。影も傾く入江に枯れ立つ足元はよろ〳〵と。ナホス弱り伏したる枕の夢の。覺むるも惜しや先づ暫し夢を結ばん此方へと。亂れ盃手に持ちてとある一間に三重頃下寺町の鐘の聲。寝耳に響き目も合はず。昔語や身の上の話に連れて酒の醉。まして小さんが一曲に大盡腰を蛻殼。立つも立たれぬ羽拔鳥枕をさげよ足冷せ。鹽茶持て來いきんたいしと。何を言ふやら譯もなく オクリ寝るより へ早く高鼾 フシ更に性根は。地色無かりけり小さんは側を離れ得ず。御心は惡しからずや少しの酒にきつい醉。わし一人では介抱も空恐しや誰そおぢやナウ。ハテ夜は未だ若い筈なるに内外の衆は寝てさうな。モ何時ぢや知らぬ迄ヤア其處に寝て居る人は誰そコレ金五郎殿。こなさんは何の役目に來てぞいの。客樣酒に打ちもらされ術ながつて居さんす故わしは見る目がいとしぼい。地色總じて幇間といふ者はこんな時の差配ぢやに。爰へ來て背中でも摩らうといふ氣は無うて。同じ樣にこなさん迄醉うた振して手の惡い フシ嗜ましやんせと言ひければ。地色金五郎目を擦り〳〵。

詞ヤア旦那は酒に醉はれたかハテ氣遣ひな醉醒ます。地お藥を上げませんとつかつかと寄る所を。小さん袖をちやくと控へ。詞コリヤ何ぞきよろ〳〵と。行かいでも大事ないわしが御藥進ぜてから。たわいも無う寢さんした。地アレあの鼾は聞えぬか但し聾にならんしたか。聞えぬ男と知りながら。二日逢はねば逢ひたうて客に託け身あがりし。芝居へ行ては方様の役滿つる迄此顔を。傍目も振らず見て居るは知つてか見てか知らねども。よう見に來たといふ臺詞一度も聞かずさりとては。氣強う生れ付かんした。詞一昨日もあの客が網代屋から呼びに遣し。近日國へ下るなりそちが心の外なくば。摑んで去んで奧様にしてやらうとの豫言に。地否とは言はれずどうなりと。御心任せと言うたれど方様に馴染めて。外へは行かじ我心但し行かうか遣り度いか。

今宵の酒盛大酒とは知りながら。醉はして寢さしてその隙に積る思ひを語らんと。心に染まぬ猩々舞亂れ〳〵てあの如く。正體もなき有様も根は方様に逢ひたさの。餘り〳〵て世話に言ふ貧の盜みに戀のうたてや。客に買はして我思ふ男に逢ふは間男より。フシ尙罪深しさりながら。地色そこは許して給はれと客の方に手を合せ拜んで見たり涙含みコレ思くを言うて見て。わしが心を落着かして。下んせぬかと縋り附き忍びに。歎く哀れさよ。金五郎はつと驚き小さんが口に袖を當て。詞何ぢや見苦しい逢ふ度毎にめろ〳〵と。そちばかり世話燒いて俺は苦勞をせぬぢや迄。晝の役さへかしらくさ頭の皿が三萬程。破るゝ時にも客衆に召連れられて夜を明し。地遊ぶをよい氣と思やるか。どうぞ根引きの金の緒に取附いたらば身請して。金屋が奥に備へつゝ小さんを變へておさんよと。思ふばかりの樂しみは我身一つに留めたり。如何に幇間をすればとて二世と契りし女房を。客に逢はしてうろ〳〵と這ひ蹲踞うて指の股。廣げでわつと飮み給へ此處らは拙者が吞込んだ。不成の森の時鳥鳴くも鳴かれず頬桁の。食ひ違ふ程しやべつて後旦那がそちの手を引いて。床の内なる私語聞いて堪忍ならばこそ。死なん。死なんと思へども一人死ぬるは犬死よ。客にもそちにも恨みなし我身ながらも迷うたと。後の月から得道し床入前に酒飮んで。座敷を變へて聞かぬが佛。今宵とても其心思ひも恨みも同じ事。歌今暫しぞや又行て寢や。地身請の談合置いてたも。若しや其方に離れたら此身は如何なるべきと涙を。襟に傳はせり。小さん嬉しくア、今といふ今疑ひし。フシ胸の曇りが晴れたりぬ。地色根引の導ある時はあちらこちらへへら使

ひ。内の首尾迄繕はんもういふ事もしまひく\。ござんせ寝よと寄添へば。地如何様首尾は今宵なり爰か其處かと見る所に。大盡うんと寝返れば二人驚き周章つつ枕元に畏り。犬の子く\く\とスヱテ聲を揃へて敲き付け。又手を鼻に押當て丶フシ互に顔を見合せてゐなく\震ひ居たりける。地色小さん其儘銚子を取り金五郎が口に注ぎ。詞コレ卑怯千萬何事ぞ。假令まさかを見付けられ如何なる憂身に逢へばとて。地思ひ設けし戀ならずや前後を構はずござんせと。手を取れば振放し。詞此年月鼠にさへ知らさぬ仲を現はして。互の為になるべきか首尾なき時はいらぬもの。地又重ねて立んとすハテそんならば如何なりと。併し今宵は逢ひたさのなほし増し來る物思ひ。折さへよくば必ずと金五が耳に物言はせ。互の帯を繼ぎ合せ端を二人が腰に附け。引くを合圖に逢ふべしと。故と寝間をば遠ざかり色オクリおのが。ヘ臥所に入りにけるフシ客は寝耳に聞澄し詞扨は彼奴等は腐り合ひ不義を働く下耩ひ思へば憎し此儘に。知らぬ顔するものならば倘踏み付けて此上に。地何事をか仕出來さん身金を出して此奴等に。よい事さすも面憎し何卒恥を與へんと。暫く思案し。ヲヽ能き手段是々と。我と頷き素知らぬ顔。フシ倘高鼾轉やな。地色人は知らじな戀故に目は冴え返る床の内。小さんは寝顔空鼾そつと起きては邊りを眺め。月の影さへ嫌なるに座敷輝く蠟燭の。闇になれかしどうぞ消す。智慧は爰ぞと煙草飲む煙較べん振をして。故と打消しハアひよんなことしたわいと。言へども心は嬉しくて。暫しも更けぬ其内と合圖の帯を引きける時。大盡向うに立廻りそろりと引けばそつと寄る。小さんは金五と心得帯を手繰り手を取つて。嘸待兼ねて御座すらん來る首尾なくて今になる。客はたわいはござんせぬ心落着け寝さんせと。言へども應のあらばこそ。詞アヽ辛氣恨み口舌も時によるこんな時は言はぬが粹。あのうんつくが起きてから何にも物がないわいな地コレ如何ぞいのく\と。帯を引寄せ恨む時金五郎目を醒まし。様子を聞いて氣を廻し。詞さては小さんが惡性にて又こそ外に夫求め。正しく逢ふに極つた。地捕へて存分遂ぐべしとそろりく\と差足し寄ると見えしが大盡小さんを取つて押へ。詞ヤイこ丶な徒者の生畜生。旦那や我が目を掠め間夫の男を引入れて。ヘテ結構な土性骨男が生面見て置いて。地きつと御禮申さんにヤレ火を點せと呼ばはる聲亭主は騒ぐ下男手燭行燈手提灯。松點し連れ駈け出でよくく\見れば大盡小さん。はつと驚き飛退り。逃げんとす

れど帶の端小さん諸共繋がれて。彼方此方へよろ〳〵と フシ隅に屈んで居たりける。地大盡少しも騷がぬ態それ先づ小さんが親方呼べ。詞宿の亭主花車小女郎皆皆出て樣子を聞け。尤も我は田舍者。色里曾て不案內。先達て小さん身請の相談致せしが。今日只今止め申す。尤も勤の身なれども一日買へば其日は女房同然なり。又金五郎儀は。客をいさめ萬の捌きをさする爲。色も望みに買ひ取らせ其上にまだ。露とやら迄せぶられ。身を旦那旦那といふからは是も下人と同じ事。地さうした身を持ちながら某が目を掠め。小さんと不義を取結び度々逢うたる事どもを。殘らず聞いて堪忍ならず頭から爪先迄。刻んでも腹癒ねど。所も惡し名も羞かし彼奴が野太い所存から。過ちなどある時は先非を悔ゆると甲斐あらじ。そち達とても身に成代つて見たがよし。詞なれども前後を見る時は俗性賤しき賣物と。又露霜で世渡る人面の皮は厚くとも。地鳴らぬ太鼓の音聞けと。散々に打擲し見るも腹立ち罷り立て。それ引出せと言ひ捨てゝ フシ奥を差して入りにける。地色親方小さんを引立て。詞コリヤ金五郎。御自分の御蔭にて身請を變替せられし代り。此女めを蝦夷松前へ賣つてやる。そなたに存分山々なれど。地今宵は故と許して置く足元の明い內。とつとゝ去にやれ追ひ出せと。下女。下男取卷いて門口へ突出せど。一言返す言葉もなく道理。道理と淚ぐみ。靜に歸る其風情うたてかりける 三重 次第なり。

フシ實に戀草も。霜枯れて。地人の心も濕り行く。流れの里の人込みに誰が燃え杭を焚附けて。焰の煙曀せ返る。額の小さんは心から風呂の勤を引替て。同じ憂身も品變る。フシ茶屋の山衆の仲間入り。綿屋と言へる親方の。氣兼ねもよしや彼の人の。爲と思へば恨みなし。何れ切なき仲なれど登り詰めたる男には。外の粋もそこ〳〵に。田もやろ畔も遣り放し。たるは其れから其れ迄と思ひ オクリ へ詰めたる フシ戀男。地色彼の金五郎に馴れ染めて。浮名の立つに從ひて客も。次第に落葉吹く風の音信聞く事も。まして逢ふ事奈良阪や此手彼手を盡せども。親方下女が氣を附けて。スヱテ逢はぬつらさを語る人。地色數多傍輩ある中にとめひさ二人は戀知りの。身に覺えある粋と粋客を仕舞うて表の間。火鉢手元に三鐵輪三人鼻を突合し。詞何と思はんすおとめさん。今宵の客の其中にあの八樣は宮仕へ。大方知れた給分で。地色わしを女房に持つてから仲居腰元下女男。心の儘に使はしよと來る度每に貧張つて。節季の留めが台はうかの。わしは嫌でならねども。其

處が浮世の勤ぢやと思へば我と涙含む。とめも同じ心意氣其八様は上の客。わしに登つたよしもりは。今年七十五ぢやといの孫曾孫持つて極樂の。地道へ片足向けながら來るより早く頬摺りに。ほつと飽き果て嫌なれど。詞花車様の言はんすは節季に帳の消ゆるのは。よしもり様ばつかりぢや隨分廻りやと言はんす故。地虫を抑へて堪忍をするが勤と思はんせ。嫌な客にも逢ふ縁に引かれて思ふ男に逢ふ。妾らは勤のフシ口傳なり。地色兎角心を取直し嫌な男にも逢はんせと。様々に諫められ小さんも少し笑ひ顔。實に是はさもあらん。詞此頃わしに逢ひに來る客は役者でござんすげな。知らねば是非に及ばねど知つては逢れぬ首尾ぞかし。地わしは是程立つれどもこちの男は如何思うて呉れる事ぞと倒れ伏し聲を。擧げずに歎きける。地色かゝる所へどれ衆どうも綿屋の門に立塞り。額の小さんは爰に居る何と客になるまいか。地是は吉野といふ聲も。後や先やに入亂れ奥の座敷に三重へ入りにける。

金屋金五郎道行

半冷泉戀故に。身は陽炎のありやなし。情一つを忘れ兼ね。暫し逢はぬもつらけれど。過ぎつる首尾を思ひやり。我と抑へし心の駒。フシオクリ今はへ離れて行く足の。何長町の一宿り客屋の内も夢結ぶ。地頃しも霜月二日の夜。星に紛へる白雪の降り積む道を高足駄。フシ杖傘を只頼め。我世に在りし身なりせば。かゝる憂目はよもあらじ誠に小さんと我仲は。長地あの堀詰めの二つ井戸どちらを見ても深ければ客の障りと親方が。堰いてふつ〳〵逢はせねど。初めの程は町方の客と連れ立ち通ひつゝ。フシ折に觸れては。逢ひしかど。後は親方其手も食はず。今は詮方涙の雨やオクリ風のへ吹く夜もフシ雪降る夜半も。兜頭巾で顔隱し。逢ふ夜逢はぬ夜空定めなき今宵の首尾を祈らんと。高津の宮を伏拜み。スヱテ千日筋の橋の上。角の芝居は我住みし。流れも清き加茂川の。のしをに身をば任せつゝ。戀て額見世ある筈と語らば嘸や喜ばん。心持も是に誘はれて池田屋迄は北嶋や。例へ如何なる三原屋にならば其れから其れ迄と。スヱテ一人思ひを駿河屋と。様々心フシ倉橋や。我若し浮世を去るならば後に殘りし。彼の人は。姿仇なや墨染の。尼が崎屋で身は濡衣唄歌色が黒けりや大黒屋ちやと人が名立つりや少しはわく屋。湧くか湧かぬか筒井筒屋やの。二階座敷に。よねをばつみてフシ港屋。迄も漕ぎ寄せん。戀の相場の取遣りに。負勝のない色所。借りましよといふ聲は只耳

を擦りて呟し。爰は許せと立聞きし。京屋伏見屋薩摩屋の門を過ぎ越し見遣りつゝ小さんが住みし綿屋なる。向ひの軒に立留り暫く。様子を 三重 へ窺ひける フシ されども首尾の。地色 あらされば綿屋の門に立留り。内を覗きつ格子に立ち。スヱテ 詮方なきの涙聲。歌 坂田藤十郎杉山勘左。フシ 扨は玉川。地色 半太夫 其外役者の口眞似し。我を知らする心意氣 オクリ 哀れへなりける戀路なり。地色 小さんはそれと聞くよりも心に應へ嬉しくて。氣も魂もうか／＼と客の氣嫌を窺ひて。表の格子に走り出で。歌 見れば悲しや降る雪の フシ 其中に。地色 よにしよんぼりと立ち給ふ見るに眼も眩れ心消え。小聲になつてコレ申し金様ではないかいな。詞 マア何としてござんした聞かんす如くわしが身は。方様に逢うたと言ふ憎しみに。地 斯うした勤に下りました。二三日後の事八十郎様の便りで聞けば。御氣色悪しき御傳へマア何とした煩ひぞ。御食は常の通りかへ御薬はどの御醫者。支へには鍼がよい。ナウ其咳に冷えたらば尙悪しからんにコレ上らんせと後や先。身の勞りも打ち忘れ。思ふ思ひを語るのも フシ 元は戀路の私語。地色 金五郎も涙ぐみ誠に切なる志。辛い中にも我事を。忘れもやらで様々と心に掛けて給はるは。フシ 宿世如何なる縁ぞかし。地色 我はそなたに逢ひたさの夜晝となく夢現。面影なりと聲なりと聞いて樂しむばかりぞと。十日ばかりは此門を通らぬ夜半も無かりしが。浮名立つたる中なれば姿を變へて來にけらし。先づは無事なる顔を見て。スヱテ 嬉し涙も果しなき。某が氣色の事少しも氣遣ひ召さるなよ。詞 扨來年の在着きは加茂川のしをへ抱へられ。近日よりの顔見世なり知らせてそちに喜ばせんと。地色 思ふばかりに世話燒いて此寒いのに我は又。何の因果に來た事ぞ是ばかりは恩に着や。さて又勤を粗略せば。詞 親方立腹强からん主と病に勝つ事なし此二つを語らん爲。地 やう／＼是迄來りしぞ又其内と出ければ 小さんは襟に手を掛けて。詞 モウ去なんすか今暫し語り度い事もあり。地 先づ／＼待つて下さんせと涙を流し留めける時。奥へ借りましよ二階へ借ろと。杉が呼ぶ聲耳突き抜けば スヱテ 是非も涙を袂に包み。地 後にま一度一寸逢ひませうイヤもう去なう。歌 まめで勤めやや煩らやんな。さらば／＼の泣き別れ哀れと。言ふも 三重 へ愚なり フシ 夜は何時ぞ。地 八つの頃誰かはいさや白浪の。六尺ばかりの大男大脇差の落し差し。三人一緒に立並び大道にはぢかつて。金五郎を通さじと フシ 阿吽の如く立つたりける。地色 何心なく金五郎靜に歩み行く所

先なる男言葉をかけ。詞そちは金屋の金五郎ではないか。そと尋ね度い事のあり。暫く待てと肘を張りいかつらしく留めければ。金五郎騒がぬ態如何にもさうぢやがさう言ふは誰そ。ヲヽ不審は尤も併し聲でも聞き知らん。コリヤ小野山宇治右衛門ぢや。改め言ふは管なれど。數年我れ小さんに戀ありて年々の給銀に倍を打つて使へども。離かぬといふ仔細を聞けば。其方と腐合ひ役者仲間を堰かるゝ由。地外は格別此男は堪忍せず重ねて小さんと挨拶切らるゝかそれ迚も叶はずば。某今迄使うた金。耳を揃へ渡さるゝか。二つに一つの返答をフシ承らんと突掛かる。地色金五郎飛び退り。詞何事かと思ひしに是は興がる事を聞く。小さんは何ぞ勤の者。御自分の御慰み思ふ様に參らぬを此金五郎が知つたことか。それは此方の不調法私迚も金で逢へば。誰に怖れて糸瓜の皮退がうとも退くまいとも。地只今は申されず又使はれた銀欲しくば。小さんが親方と相對し返すならば受取られよ。詞芝居の悪が足らぬかして滅多な事を計畫まるゝ。退いて通しやと行く所を後に控へし二人の男金五郎が手を取つて。コリヤ大岩岸右衛門巣桓伴右衛門ぢやが見知つたか。小野山に頼まれ後詰を仕る。併し役者仲間といひ元是は勤の戀。氣の立たぬ内小さんと退き宇治右衛門に逢はしてやれ。さすれば互に言分なしさもなければこちとら迄。地敵役仲間の一分立たず。物は料簡するがよし。サアおつと言うて呉れ何んと。〳〵と寄る所を兩人共に突放し。詞尤も挨拶過分なれど是ばかりは許して呉れ。殊に言分氣に入らずどなたが御意でも退かぬといふ。宇治右衛門腹を立てこりや〳〵兩人。工面で埒明く事なれば今迄手延びにすることなし。地可惜口に風引かすなサア是でも退くまいかと。三人一緒にするりと拔き茅花の如く差し附くる。金五も今は是迄と。同じく拔き連れ盲目打ち危かりける三重へ次第なり地小さんはそれと聞くよりもナウ男衆は居やらぬかあれ〳〵表に喧嘩がある。出合へ〳〵と言ふ聲に家内の男近所の者。棒を揃へて馳け出でさせぬ〳〵と言ふ暇に。金五郎は行方のフシ何處ともなく逃げてげり。地色其中に宇治右衛門故と素知らぬ顔をして。詞何れも是は何事ぞ我々は立役者。冬籠りの聲遣ひ互に臺詞のいひがちも。身振りに移り氣に乘つて調子が少し高いとて。地色誠の喧嘩と思はるゝかはて眠むたかろに御大儀と。辯の持つて言廻し心靜かに歸りしを憎まぬ者こそ三重へなかりけり夜々通ふ。戀の里。地月夜烏の鳴く聲も。自ら只聞き辛く。晨朝の鐘聞いて歸れば曉の。閨は

淋しき物思ひ哀れなるかな金五郎。切なき戀に身を卿ち嵐烈しき夜もすがら。通ひし故に身を傷め今は枕も上り得ず。次第〳〵に朝顔の日影待つ間の憂き命。フシ扨も是非なき風情なり。地色かゝる所へ八十郎供に持たせる藥籠。涙洩る目を押し隱し後や枕に寄添ひて。詞今日の御氣色如何ぞや。これ御藥を申し請け只今歸り候なり。地心を强く氣も强く今一度本復あれ。思召すこと候はゞ心置かれず何事も。仰せ付けられ候へと。スエテ世に泌々と申しける。地色無慚なる哉金五郎。重き枕を漸う〳〵上げ。人々に介抱せられ世に。苦しげなる氣息をつぎ。詞今のは誰か八十郎。此處へおちやと手を取つて。地眼を開き打守り涙をはら〳〵と流し。詞今に限らぬ事ながら世にも嬉しき言葉ぞや。此態にては中々に堪るべきとも思はれず。若しも空しくなるならば搆へて

力を落さずと。變らず芝居を勤めつ金五郎が片割と。人様に言はれなば千部萬部の經よりもこれに過ぎたる供養もなし。取分きそちが身の上は。此顏見世より立役者。其狂言の思ひ付きあるが中にも病氣故。今迄語る緣もなし。搆へて座元によく仕へ傍輩衆と言分せず。町の御衆に憎まれな諸藝をなめれば人憎む。交際數多ある中に古今新左に粗略せば フシ歌の冥加も怖しゝ。地色平九郎と仲よくし一藝に譽を取り我名も絕えず世に殘さば。草の蔭にて嬉びの和歌を上げつゝ守るべし。詞假令耆婆扁鵲の藥なりとも。本復せんこと不定なり最期を待つより外なければ。地色最早藥を飲むまじと思ひ切つたる心意氣。二人の者は氣も亂れ。ナウ兄上金五郎殿。今死し給ふ今迄も御藥を參らねば。猶悲しさの優りつゝ介抱とても力なし。これ〳〵飲んで給はれと諫めつ泣い

つ樣々に フシなほし增し來る涙なり。地色其折節太夫元のしをを始め傍輩瀧岡彥右衞門。山下又四郎萬右衞門病家に見舞ひ膽を消し。面々枕に近づき寄り額を抱へ脈を取り。詞ヤア最早是では堪るまい心に掛る事あらば聞き置かれたか八十郎。地扨も是非なき浮世やと スエテ忍び涙はせきあへず。地色のしを枕に近付き寄り。詞コレ金五郎殿見舞に來た。藥を飲んで養生し顏見世から出る樣に。地賴みますとありければ。金五郎打頷きヤア太夫様か嬉しやな。詞今更御目に掛ること扨も扨も面目なし。我を人と思召し頭取迄仰付けられしに。地舞臺を一度踏みもせず空しくならん口惜しや。人に言はねど心には初めての太夫元。なんでも己れ來年は二つか三つか大當し。永く座元をさせませんと思ひし事も仇し夜の。露と消え行く黃泉の。フシ死出の旅路の役者とな

る。地色何事も〳〵定まる事と思召し。許させ給へ去りとては猶此上に弟の。八十郎を引廻し何卒役者となし給はれ。地分けて瀧岡山下殿哀れ世になき者どもを。偏に頼み奉る。何も形見は無けれども思ひ寄るべの浪枕。其品々を書置せん。然るべしとて萬右衛門 オクリ料紙へ硯を取寄せて。硯の海に磨る墨も。涙に眩れて濃き薄き。スヱテ筆の歩みぞ哀れなり。一筆書いて兎もすれば小さんがことを頼まんと。思へど先づは兄弟へ舞臺衣裳七流れ。二人の者に送るなり。亡き後迄も身に添ひて。フシ我命日を忘るまじ。地色守袋の觀世音のしを樣へ參らすなり。詞又上下岩倉殿舞臺刀二流れ。地色瀧岡山下お二人へ形見といふにあらねども。私の志せめて回向をなし給へ。鳶紗綾綸子紅絹二匹。フシさる客衆より賜りしを。綿屋に殘す思ひ草客にせかれて忍び逢ふ。

恩の仇にて報じんの。念佛申して呉れかしと。地愁に傳へて給べア、懐しと言ふ聲もスヱテ只弱々となりにける。地色誰かは斯くと知らせけん小さんは內を忍び出で。髪しどけなく振りみだし徒歩や洗足の風情にて。氣急つぎあへず驅け來り金五郎に抱き付き。ナウ嬉しやと言ふ聲もスヱテ泣くより外はなかりけり。やゝありて申すやう。詞皆樣御免なされませわしは綿屋の小さんとて金五郎樣とは人知らぬ。仲にも深い妹背川。地渡らば共と誓ひてし仲を離れて只一人。後に殘されうか〳〵と月日ばかりを數ようか。たとへ主こそ隱されうと二人が仲は知れたこと。お弟御達が聞えませぬ何故この如くない先に。知らしては下んせぬ。如何に戀なき身なればとてそれは餘り胴慾な。只今わしが表にて金五郎は死んだげな。可愛い事ぢやといふを聞きあるにあられぬ我

心。勤する身が此如く取亂したる形振も。せめてま一度逢ひたさの其一念や通じけん。互に顔を見合せてフシ嬉しくも又悲しやな。地色深いと言うた名ばかりにて逢ひ見ることも玉鉾の。捗らざりし病ふと聞き悲しい時の神たゝき。伊勢岩淸水春日野や御多賀の社扨は又。高津生玉天王寺洗足詣りの願込めて。夫の命をせめて扨私が年の明く頃迄。生かせて給べと身に代へて祈る驗もないことか是小さんぢやに物言うて。下んせぬかと取付けば早や氣息絶えてなかりける。人々わつと縋り付き空しき死骸に抱き付き。スヱテ聲を惜まず泣き給ふ。小さん涙の下よりも皆樣は羨まし。未だ無事にてまします時泌泌とした暇乞ひ。なされましたと聞くよりもなほし思ひは增鏡。映る姿を見る樣に。思ひし事も今は只仇し浮世となりしぞや。扨いとほしや我故に人には浮名を

立てられて。逢ふ言の葉もあらばこそきして最期に暇乞ひなくて離れし身の因果。如何なる人が主となり如何なるものがわしが身に。なり代りたる世の中や。地後に止り片時も長らへ果てんやうもなし。此世は暫し假の宿未來は一つ蓮にて。契らんものを待ち給へと。既に自害と見えけるを皆々騒ぎ押し止め。詞實に理やさりながら。只今自害あればとて再び歸るものでなし。殊に親方大分の金銀出し抱へ置き。年季も未だ明かぬ内若し過ちのある時は。地祟つて來るは知れた事然れば先立つ金五郎。黄泉の障り是一つ近所の騒動世の誹。かれこれ思へば爲ならず。是非〳〵思ひ詰め給はゞ親方手前埒明けて。姿をも變へ亡き人の。菩提を弔はゞ如何ばかり草の蔭にて喜ばん。平に。平にと止められ。惜からざりし身なれども。後の難儀を聞く時は死ぬも死なれず長らへて。片時も後に居られうか我身ながら我儘に。ならぬ浮世と身を喞ちせき上げ。〳〵歎きしは理。せめて哀れなり。地色やう〳〵心を取直し止り難きを止るも。これ亦夫の爲ながら最早浮世は立てられず。契り朽ちせぬ證ぞと丈なる髪をふつつと切りコレ金五郎殿我形見。せめて未來も友白髪身に添ひ給へ南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と言ふ聲も狂氣の如く見えにける。さらば〳〵の涙露霜月廿日の朝嵐消えし。金屋が浮き命哀れなりける物語。今に傳へて語りける。

金屋金五郎後日雛形

太夫直之正本

地所千代までおはしませ。我等も千秋さふらふ。鶴と龜との齢にて。フシ幸ひ心に任せたり。地千早振る神のみことの昔より久し。かれとぞ祝ひけり。そよやりいちやとんどや地凡そ千年の鶴は萬歳樂と謡うたり。又萬代の池の龜は甲に三極を戴いたり。フシ瀧の水。地色冷々と落ちて。夜の月鮮かに浮んだり。渚の砂。索々と散つて朝の日の色をあふす。天下太平國土安穩。五穀成就君民豐かに治る御代。千代に八千代に小石の。巖となりて苔のむす迄〱。皆同音に和歌をあげ。主に禮儀正しくも座敷を立てば今一つ。御酒あげ度いと縋り付く。イロモウ御免と手を合せ。さらば〱と歸る宿あらおもしろの三重へ浮世かなフシ實に色里に。靡き合ふ二葉の松の夕時雨。フシ濡れにぞ濡れし戀の山。地色情の峠踏み分けて假に逢ふ夜の私語。誰れ善し惡しも何時しかに誠と成りて今ははや。一歳餘りの身の代を身請と名附け根引草勤の隙を曙屋大次郎といふ優し男の。地手に入れ初むるお家なり。額の小さんと言はれしも昨日と暮れて今日は結ふ。髮の髱無し引替へて笄髷の一つ櫛。スヱテ引手も今は主一人。田面の雁の假初に。二世の契を結ぶ夜の五日歸りを昨日といふ。今宵の月を差向ひ二人が中に盃と。銚子なほして手づからの。酌とりどりの物語。詞何と思やる南嶋の勤心と斯う成つて。氣儘に暮す浮世風迎駕なし借りましよを。聞かずに暮す身と成るもそちが仕掛に浮れ船。地色粋だけ身だけうち込んで。小さんを替へておさんよと。言はする人の違うたを嘸本意なくも思ふらめ。詞なれども身爲惡しからねば。草葉の蔭なる金五郎。嘸滿足に思はれん。今頃なんど世帶して斯うした月を見ることは。下手な佛も知り給はじ。よその始末に氣を配り次第〱に富み榮え。老先までもこの手をば斯う取交し寺詣り。後生の庭の砂まで妹背語らふ習ぞと。縺れかゝれば何となく。地色小さんは少し羞る態尤も近所に人なけれど。空冴え渡る月の顏嘸厭らしく思されん。言はんす如く誠ある。緣に惹かれてアノ廓の苦患を逃れ方樣と一期連添ふ友千鳥。羽交重ねの幾夜かも。見捨てられぬを一筋にかね〲頼む愛染樣。さては氏神生玉の明神樣を誓に立て。地世帶姿と

成るからは其お詞は管ぞかし。地何處やら勤に逢ふ様に又してはひぞらんす。モウやめさんせと言ひければ。詞大次郎聞きかため。我を咎むるそちがいふ其ひぞるとやらいふ事は。額と綿屋で地いうたこと未だ忘れぬかと咎められ。ハツト面に紅葉してコハヤモウわしが言ひ誤り。そんなら一つ酒飲んで夢結ばんと差しければ。モ一つ飲んでと突き戻す。さしめのあひと注ぎければ。詞それ又さしめといふ詞勤の土が離れぬと。地言はれて小さんア、羞かしモウ許さんせと立ちけるをそりや手が悪い寝させじと。續いて追ひかけ抱き留め。詞これ申しお女郎。地一寸借り度い／＼といふに嬉しや借りましよは。詞色里の禁句にて客と花車とがいふ詞。地未來をかけて添ふわしに誰に恐れて借りどころア、フシ可笑しやと言ひければ 色詞是は拙者が誤りすがた。なれども酒に後を見せ。逃げては物がないといふ。地それ／＼誤り姿といひ。酒に後もさをゝ(本ノマヽ)この詞。嬉しや互の言ひ誤り差引なしに濟みました。モウお休みと夕月も。雲にかくるゝあれ／＼と顔と顔とに物言はせ。手を取り膝に打凭れ。詞今宵は少し聞くことあり。そちと金五郎挨拶の。深いがかうじて心中の。有たけ仕舞うて打止に二人が姿繪に畫かせ。地夫の方には女の繪。女の方には男の繪。取交しつゝ逢はぬ夜の樂しみなどとの噂あり。地色苦しからずば其繪をばそと見せられよとありければ。小さんおろ／＼涙聲忘れて年を經しものを。思ひも寄らぬ御尋ね尤もさうした言の葉の。フシありしは昔物語。地色今かゝる身となるからは隠すは愚痴よ打開けて。語る事なし相手なし末を樂しむ主様に。何か包まん是々と オクリ 面よりへ出し床の間に。掛けて二日と見もやらずしを。しをとして居たりけり。地色大次郎掛物の繪をつく／＼と打眺め。詞遖れ美事金五郎が姿斯く迄似るものか。面體身振眼の働き。地鼻筋の高き屋に登る女は誰やらと。少しはねする詞かや世に亡き人の繪を見てさへ。むつとするのはそちが事。思ふが故の私語。サア酒飲んで寝まいかと。搖り起されし手を取て 詞ウヨウこの口で悪謔な鼻の高いに登るとは 餘りきつい御詞重ねて言ふか言ふまいかと。散々に打擲せられ。モウふつつりと言ふまいに。拜む／＼と手を合し是を合圖に床の内。煙草引寄せ吸付けて思ひの煙吹くよと見えしが。不思議や床に掛け置きし。金五郎が面影の己れと動き消ゆると思へば。忽ち魂麗々と現れ。小さんが飲みし煙草の。地煙に紛れ入りけるは 三重凄じかりける 哀へ憂しや思ひを忘れんと思ふ心こそ忘れぬよ

りはナホス思ひあり。地色さるにても身はあだし野の露霜と。消えて返らぬ玉の緒の戀といふ字に繋がれて。是非も金屋の金五郎が。其亡き魂にてありけるなり。誠に世にある其時は役者仲間の嘲りと。又色里の騒ぎにも歌浄瑠璃に作られて。フシ浮名の額にかゝりしも。地色元より深き戀草の繁り逢ふ夜の一言を。仇になさじと思ひ詰め沍寒の冬の寒き夜も。そちを思へば徒歩跣其寒風に誘はれて遂に逝く。道とは豫て聞きしかど。昨日。今日とも今宵とも。思はざりつる。死出の道。是よりあなたの供とてはオクリ血脈。一つに數珠一連。助け給へと繰捨つる。袂の露の數取りも。暫しか程は請けしかど。歌淺き縁の。習ひとは言ひながら。また。捨て。られし葛の葉の。若葉に染むる色の黄にうつり變れる恨めしや。恨みても盡きぬは是見よ御事が爪。血文血判の誓紙

の數髮さへ三度切る小指。フシ守袋に掛けまくも。冥途の土産今は仇。起請は烏髮は劍の山に登れば。ハヤメ血文は忽ち猛火盛に燃えあがる。炎の烟むせ返るフシ此苦しみは如何ばかり。かゝる誓を餘所になし二張の弓を彎かんとは。さて淺ましや。腹立ちと。枕屏風にすつくりと立居苦しき本調子ナホス姿なり。地色小さんははつと起き直りナウ懐しの御姿。歌わしはこなんに殘されて。髮も容姿もいらばこそ。姿を墨と思へども。地一人の母に諫められ可笑からざる身の勤。此御方の情にて萬の引目借錢や。否と言はれぬ年の内。親方任せといふことは方樣も御存じよ。心は立つて居ますれど姿纏るゝ藤葛。離れ難なき仔細にて斯樣には成り候へども。在りし昔の戀草は。夢現にも見もやらじ。此世を去つて極樂の佛の會座にありながら。はかなき戀に輪廻を遺

し。未來は如何思さずやと涙を流し申すにぞ。地色ア、愚なり〳〵。とても佛の緣の綱。切れて野飼の畜生道に。墮つるを厭ふ心なら。再び此處に來らんや伏屋に殘す園原や。あるにもあらぬ我思ひ亂れ心の亂れ髮。地共に行かんと言ふ聲に。大次郎目を覺し。側なる差添へ押取つて。詞何者なれば夫ある女を捕へとやかくと。非道の振舞堪忍ならず。地色そこ離さぬかと詰掛くれど。姿はなくて聲ばかり。詞ヲ、尤もなりさりながら。戀程せつなきものはなし。御身の情も我戀も同じ憂身と知りながら。地我黄泉の旅迄も忘られぬ世の思ひもの。遺して獨り行空の。空定めなき村時雨。誘はれ磨く常世草。見るもなか〳〵腹立や。思ひ切るせを聞かまほし。如何に〳〵と罵れば。詞大次郎事ともせずム、扨は金屋の金五郎が其一念にてありけるか。尤も命なりけ

る時。小さんと深き思ひ川淵瀬に變る世の習。先立ち給ふ故にこそわれ此女を迎ひ取れ。戀慕の絆切れ果てゝ。世になき身にも愛着の。念を殘すは愚痴ぞかし。地臨終の一念にも彌陀を忘れて女が事。思ふが故に迷ひ來る。志こそ哀れなり。とく／＼去つて成佛あれ。地南無幽靈頓生菩提。浮み給へと手を合す。否とよ佛にならんにこそ。其勸めをも聞くべけれ。既に邪道にをちこちの浮む世更になき身をば地誰に厭はじ糸薄穗に現れし此上は。何といふとも連行かん。早とく來れと結髪を。手にくる／＼と纏はれて。小さんはわつと聲をあげ。ナウ情なし金五郎殿其古へはこなた故。よしなき名をも立てしかど。そこを厭はで運びたる身には如何なる恨みあり今斯く辛い御仕方つれなしつらし情なし。行かで叶はぬ道ならば行くまじきにあらねども。暫く妾を

緩めてたべ否や放さじと引立つるやらしと大次郎小さんをば。抱きとむれど妄執の其念力の強くして。引いつ引かるゝ煩惱の絆も切れよ切るまじと。あなたへ引けばこなたへ引く。□□□ば大次郎取はづし。おのれ。奈落の底迄も。追付け追かけ取返さでは置くべきかと。聲をしるべに追うて行く。フシいづれ名に立つ色所小峰に水の戀港寄る邊定めぬ浪枕。替るは客の心にて夜毎に渡る蜆川。其中町も□□が軒に並びし妓女の風。地せめて大江の橋よりもはまる堀江の岸なれや。妾もかしこも山躑躅南島の宮一とう頓堀に指し寄る川船も妾には是非に繫がれて。二階座敷の三味の音借りましよ誰さんいなんすか。地其内やいのと言ふもある妓女を弄りてひぞる客。盃なしに歸りてもフシわけは逃れぬ此里の。地習ひなりけり其中に深いは床の私語竹。こなたの

座敷は酒機嫌何れも祭文歌はれよと。山衆が錫杖帮間が三味。大盡調子を窺ひ位を取つて咳拂ひ。三勝歌思ふかひなき身は川竹の妾に流れを清竹といふ。局格子の憂きふし勤め。何時の頃より彼の文七を。思ひ初めたよナウ染衣の手業勝れし主様なれど。惡い友には。相見る茶おれと染まる黄枯茶の江戸茶と髮も薄くして拔入りたりな素海松茶の。三勝長地夜も鶸茶も此里へ通ひくるわの其取沙汰を聞くに心もナウ黑茶染。今日は意見のしゆす茶と思ひ。例の格子にすつくりと。春待ち顏の鶯茶。祭文兎角今宵は青茶ぞとオクリ思ひ樂み居たりしと。ナホス半歌へば其次ぎを所望／＼といふ聲に。フシ暫し座敷は響動みける。地色その折節勝手よりふたせの女走り出で。詞これ申し皆様額の小さんが狂氣して地あれ／＼妾へ參ります。ちやつと來て見さんせといふに客ど

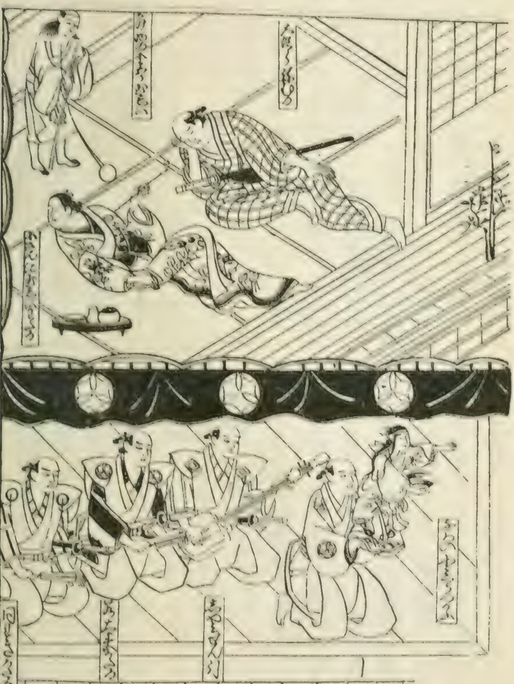
も飛び上り。名代の狂女いさ見んと夕暮か丶る頃しもに。前後を爭ひ飛んで出で爰や彼處の軒蔭に。身を寄せ顔に袖覆ひ今や。遅しと 三重 へ待ちにけり。

道行

地色 西の海あをきが原の。浪間より。大夫現はれ出でし。ナホス 氣狂よ／＼物狂ひよと笑ひけり。詞 なに白らを狂人とは。ナウ方々よ笑はゞ笑へ。ちつともそつとも大事 オクリ ないつへ笑うつ フシ 樣々の怒りに含む。眥に。涙催す春なれや殘せし夫の朝別れ。スヱテ 亡き面影に誘はれて。思はず爰に迷ひ來る。フシ 心ぞうたてかりけらし。我も昔は此里の。花に戯れし身なれども今は引きかへ情ある。殿御と二人添寢して。宵寢の枕雞の鳥諸共に床を出で。長地 身をも髮をも姿をも構はで通す身持草世を捨草にあらねども。町家住居は自ら。フシ 世間を恥づる習にて。我と我身を懲しむる爰を悟れば勤とぞ。朝な夕なに身をつくり。蘭麝の香りとめ衣の。別れを慕ひ逢ふ迄は又あるまじき樂みと。思ひ思はれ自ら共氣につるゝ淺ましさ。春は物日の遣る瀬なく彼岸櫻の。はで衣裳空色櫻。樺櫻しやんと小褄の一つ前。淺黄櫻の抱帶菅笠の紐緋櫻に。締めて寢し夜の糸櫻一重櫻の情をも。こなし品よく。付けとゞけ。廻れば鬼もなき故に八重櫻とも思ひ詰め。夜々通ふ道すがら。泣いて隠れる フシ 犬櫻。戀故身をば厭はじと。思ひ詰めたる戀中も遂には散るか薄櫻。薄きは妹背の中川を。渡り比べて今ぞ知る。戀しき夫の行末を致へて。暮れのかねごとを誓しが。内の誓し間も。忘れもやらで。うか／＼と逢ひたや見たや。戀しやと。思ふ心や通じけん爰や彼處の木蔭にて。人目を忍び相生の。松の浦風吹き亂れ木の葉散行く道柴の露か涙か諸共に同じ憂身と思ひしも何時の頃にか捨小舟。浪に搖らるゝ姿哉。歌 いとし男に思ひを。思ひをさせて。今は主ある妻な。なれば引けどなび。靡かぬ引けと引けど靡かぬ ナホス 思ひ草。切るに切られぬ色の道。夜は夜毎に物思ひ。晝は終日泣き暮し。明し兼ねたる我思ひ。言葉は確かこゝながら。姿見えぬは如何にぞや。如何につらし昔妻。恨みは人をも世をも。思ひ思はじ。我身一つの報ひの罪(缺字)□□數々の浮名に立ちし戀路の有樣。岩もる水に堰き兼ねて。狂ひ出でにし此姿。見よや／＼方々と(缺字)□□はしたなくさ迷ひて笠屋。町へぞ。へ迷ひ行く

フシ 爰も彼處も。地色 繁昌の 小オクリ 色の へ千草を植ゑ並べ軒にかけたる行燈は。客の目標それ／＼の手業異なる色商人。地 樣樣の思ひ付きとり／＼なれや其中に衣裳

人形きせくらべさも華やかに飾り立て。裸人形召しませい勤の隙の御慰み。切物縫うて抱いて寝て。菅子を設けて世□(脱字)姿。未を祝うて進ぜられ召せ〳〵召せと賣りければ。地色小さん其儘立寄つて。詞さて珍らしや面白や。ナウ美しや此人形かゝる優しき商ひを。すげなう賣るはすべならず今宵はわしが買つてやろ。地アヽ慮外ながら賣るきざし其處退かしやれと突き退くる。亭主ほうど持扱ひ。如何はせんと思ひしがマアどういうて賣る事ぞ。様子を見んと立代りこ蔭に身をぞ隱し居る。地色折節茶屋の歸り足。どれにどれたるうつ人の。我も我もと入り代り實に色里の色商人。賣物華奢で賣り手よしそれよ是よといふ所へ。悲しきかなや八十郎小さんとは露知らず。何事やらんと立寄り能く〳〵見ればこはいかに。正しくあれは小さんなり兒金五郎に別れつゝ。嫁せしとこそは聞きつるに今又かゝる手業して。世渡ることの不思議さよ詞を掛くるも人心。よしなや仇に捨て置かん。とは思へども今は今。昔の縁其儘に。捨てても置かれず問はんとするに人目を愧ち。暫し楽じ居たりしがよし〳〵人に打交り。地首尾もあらば尋ねんと編笠傾けこれ女郎。詞此人形のあり次第求め歸ら



ふさりながら、賑の姿多かりしはそれぞれの名こそあらめ。■残らず謂らば實はふといふ、小さふにつこと打笑ひ。■何自ふまま嫌と嫌がらしこそする。嫌はよつ程■鶏なれて我に離託させふとの。金ふ山なし貨物に、花を飾れと申すがふたとへないまふ付けまして。御家に入るのが鶏の身。如何にもわしが烏帽子綱すゝあふまし へ謎ふふ聞き給へ。■先づ鼓嶽の響ひには押しが内へ響きを。千代に準へ踊れ路を。ヘテ神のはづれ句やかに。逃い内にといひ残す ホテノ出産。入増數數の。ヲシ其よしあしの其中に。分けていやながら時雨。ふるを振られず姿見に。容貌をはばふ心より年の一つも若紫や。いざは心の浅くと。身振物腰しやんとしてそして。かうして。■細帽をば。■■ば見る五輪に比。際とて人の■■ふ■■數のこなしうふなくも。ヲシ通ひ車の。自



から。引かれて通ふさとやには。ふるとはのさじめの。ヲシ假就。假粧ながら書く■にたる■■しにうかめ。■■の■■■紙■■や二見のみつ潮に。おゝさ嶋の■き紅に楽器の矢■も■■につこりと。■もせつすけたる別れ■■山。いなの■■重ねの雜茶碗。すつと差し物■り物。■や八重一重。■のばや■の■■の内、■

ね重ねの下紐をオクリはやとく。田屋と堰きかねて。浅はかなりし身なりとも。思ひ掛けたる一念を。よもや通さで置くべきかと。祈る印の紙屋には。さがとて戀の立姿濡といふ字をたるにして。フシ逢ふ夜嬉しゝ逢はぬ夜つらし。如何で今宵は見えぬぞと硯の海に筆を寄せ。若し平野屋に來てもがな見て來いなどと打附けに。文も心もわくせきと。人目さがなく見ゆるをも構はで通す憂き節の。大竹やにも千代込めて口説の花を咲かせつゝ。又も佐野屋に通ふともさのみな咎め給ひそよ。世はもと忍び縁とてね篠本やに騒ぎねの。清といふ字を讀みかへて見れば情の最中ぞや。長地小はるが元の私語又の逢ふ瀬を松浦船世渡る業のたみの屋に。來て見よかしの透し文字。フシいせむらやなる神かけて。たとへ拙き戀なりと末をまつほの夕煙。薫るや胸のくら橋や。暗き闇夜に迷ひ出で。嵯峨野の原の地池田やに身を投げ死なば泡沫の　フシ鯉やつもつて。淵となる思ひ一つを千代込めて。人目羞かし戀せずば人は情のなからまし。實に富こそは情知り。深いといふが浅くして。浅きが深いものぞかし。うはの空なる客をさへ福の神ぞと夷やの花に戯れ胡蝶に遊び。浮かれ〳〵て大こく〳〵大黒屋。しゆんの過ぎた大黒舞やつ□□(缺字)故なりと北島や。勇み勇めばいつとなく。烏鳴く音に起別かる。京やのくめは手取者。座敷廻りを立派にしむりな口舌もしとやかに。工面ごかしに住吉や。小はる小辨も物しにて居ながら敵の心を察し。戰はずして勝利を得終には文で繫ぐとかや。惣じて妓女の港やに繫ぎ止めたる唄故に。此三原やもわざくれて又の御見を掻き散らす。□□(缺字)のこがれめは勤盛りや間夫盛り厄が崎やの樞にて小しゆん。袖引き目で知らせ詞京井筒屋のくめ樣が知らせてくれといふ客は地よろづきします風俗でよしや。留めなば小夜更けて。傾く迄は語らんと又高津やに染めなして初音草かる□(缺字)のおも戀の重荷に肩かゆる。木やの八重垣結びとめ。かね言の葉の締め括り。綿屋と聞くも懷かしや爰には岸の姫松やひさは浮氣の空となり雨となる由我は又。情に溺れ色故に迷ひさまよひ飛びあるき。戀の淵瀬にすつとん〳〵。とんと平伏し歎きしは哀れなりける姿かな。地色涙泣く〳〵八十郎小さんが傍に立寄つて。詞扨も變りし御姿兄金五郎身まかりし。地後は何處と白浪の寄る邊定めぬ旅役者。暫しの暇なき故に。今は主ある御身と聞く。世間の憚り存じながらの怠り御許し給はれと。しみ〴〵と尋ねけり。地色小さんはそれと見るよりも。なに八十郎樣にてましますか。主に別れて其

後は髪をも下し御跡を。問ひ奉る身なりしがちとした譯もない世帶。つい持ちまして此如く成り行く末の果しなき。思ひは一つ二品に戀はなき人情こそ。今の殿御に止めしを。何の恨みか有明の附添ひ身添ひ此如く我を忘れて泣き明し。狂人なりと人毎に目ひき袖引き笑はせて。嘸御嬉しうフシ思されんあれ〳〵地色あそこへそれ〳〵そこへ爰へ〳〵と言ふ聲もそぞろがましく散る涙。フシ哀れといふも愚かなり。ハツト驚き八十郎さて淺ましやいとほしや。物狂はしき共風情見るも中中味氣なや未だ若木の花盛り斯くて果てなば如何にせん。見ぬ先こそは増しならめ如何はせんと行惱む 地色かゝる所へ大次郎小さんが行方氣遣はしく。此處や彼處を尋ねつゝ笠屋町に差しかゝり。見ると等しく抱き止め。コリヤ大次郎が迎ひに來た。心は何とありけるぞ如何に〳〵とありければ小さんは月夜に構はぬ態けら〳〵笑ひくつ〳〵と吹き出す下よりあら涙ステヽはら〳〵と流しては。詞ナウ懐かしの我夫よ。こなんも人形買ひにかへ。あれか。是と見せければ。地大次郎興をさまし。是たゞ事にてあるまじと。途方を失ひ溜息を フシ吐ぐより外はなかりけり。地色八十郎つつと出で。詞卒爾ながら御自分は。曙屋大次郎殿にて候か私事定めて御存じもあらん。小さん殿と許嫁あるに甲斐なき金五郎が弟八十郎と申す者。不思議に今宵對面し嬉しき中にも小さん殿物狂はしき容體見捨て難く思案半ばの折節。地貴殿の御出力を得たり申さば以前所緣。外の樣にも存ぜぬ間。何とぞ養生致させたしと。心底殘さず語りしかば。詞大次郎悦びこは忝い一言身に取ての難儀御推量あれかし。此上は力を添へられ彼が狂氣本腹仕るべき相談。千萬頼み奉ると互ひの挨拶こと終り。兩人眉に皺を垂れ暫く案じ居たる所へ。人形屋の主罷り出で。詞最前より様子を承り。各の御難儀察し奉る。拙者及ばぬ智惠より究竟の事を思ひ附いたり幸ひ阿彌陀池にて和州橘寺四十萬日の回向あり。往昔聖德太子御開闢にて。世に有難き御念佛仰ぎても猶餘りあり。何卒知るべを願ひ御内陣にて一七日御通夜まし〳〵御回向に與り給はゞ。縱へば如何なる惡病生靈死靈は言ふに足らず。此念佛の功力により。遁れぬといふ事なし フシ如何があらんと申しける。地人々悦び是佛神の引合せ然らば直に參詣し共々佛力を願はん。夢現。小さんは更に性根なく。詞何參らんとは何處〳〵へ。ヲドリお伊勢參りは皆籠拔よわしも拔けたよ笠着て拔けた。拔けてござらば長谷迄ござされと。囃し立てね

ど我は行く水の流れの堀江なる阿彌陀池へとへ急がるゝ。資も永き。世々の末げに日の本の繁榮は。戸ささぬ國の中津川浪速の里に流れ寄る。水の蘆邊をおと(破字)□□江を堀り拔きて地を平し町々小路を割付けて。民屋甍を立並べ南堀江の朝別れ吉野小路の黄昏時通りの呼子鳥西は西方極樂の。臺を結ぶ法の聲御池に光る常燈明。絶えず輝く玉の宮殿□□(破字)橋。本堂には信濃の國善光寺を爰に移し。晝夜稱名怠らず世に有難き御寺とかや。時なるかな五月廿八日は和州橋寺の開帳四十萬日の回向。阿彌陀池にて始れば。老若男女の別ち無く。我も〳〵と參詣し席を爭ふばかりなり。折節なれや世の中の苦は色變る飛鳥川。思ひの淵に沈みたる小さんを連れて大次郎。八十郎も力草引くに引かれぬ縁の綱共に手を取り道草の露の命を止めんは。今此時と行く足の亂れ心

も白ら。性根泣く〳〵法の庭阿彌陀池にぞ着きにけり。とある木蔭に小さんを忍ばせ。八十郎が膝枕面影窶れ朝日影。しぼめる姿哀れさよ大次郎はこゝかしこ。知るべもあらば尋ねんと本堂の軒陰を彼方此方とさ迷ふ所に。五十路餘りの老僧同宿數多連れ給ひ。方丈より出で給ふ是幸ひと畏り。卒爾ながら私は。當地に於て曙屋大次郎と申す者。召し連れし女此頃狂氣仕り。心身の苦しめ本心を失ひ。やゝともすれば馳け出で一家の騷動止む事なし。承れば當寺にて。聖德太子四十萬日の回向御座候由。逢ひ難き開帳に逢ひ奉る嬉しさ。あはれ念佛の功力を以て彼が狂氣本腹仕るべき御示しにも預らば如何ばかりの御恩ならめと涙を流し申しける。老僧默然と打領き。扨々笑止各の難儀察したり。折よくかかる節の參詣佛の御內緣に叶ひ奉るかた

がた。如何で粗略に存ずべき。何が扨出家の役。念佛の德を以て生靈死靈を現はし。本心となすべき間信心怠る事勿れ。それ〳〵女中を倶し給へと老僧先に立ち給へば二人は小さんを介抱し。御寺にこそは入りにけり。聖德太子の善の綱小さんに持たせ數珠掛けさせ。右手の方に居直らせ二人に向つてあひ十念世にも殊勝に見えにけり。其後高座に上らせ給ひ一心歸命頂禮し。念佛の行者廣大無邊の不思議をば語り聞かさせ給ひしは有難へかりける次第也。抑も和州高市郡佛頭山橋寺と申すは。我日の本の中にして人の世既に三十二代。用明天皇の王城(ホノマヽ)聖德太子御建立の御寺なり。或る時帝の御靈夢に。三輪大明神告げ給はく。常世の國の香具果は。人の氣を助け候はゞ病を治するとかや。急ぎ彼の地に勅使を立て求めよとの靈夢に任せ。田

道問守。承り。常世の國に行く年の。十歳の春を送りつゝ。是を求めて立歸り。フシ香具を捧げ奉る。天皇叡感斜ならず。則ち此地に植ゑさせ給へば花咲き實り榮えしより。橘寺とは申すとかや。地太子三十五歳の時。清涼殿にて勝曼經を説き給ふ。時に虛空に音樂聞え花降り異香四方に薰じ。當山の頂に。千佛面貌拜まれさせ給ひ。衆生成佛の證明を現はし給ふ。天皇淺からず思し召し東西南北八丁に七堂伽藍を建立し。千佛頭山とも。又は我朝の靈鷲山とも申すなり。卿相雲客を始め下萬民に至る迄。念佛修行の外他事なし。其後太子信濃國善光寺。閻浮提金の三尊のうつし御父帝の御菩提。又は末世利益のため此御寺の境内に。僅の道場を構へ往生院と名附け。自ら開白ましまし。不斷念佛怠らず本朝念佛の始め是なり。然るに回向といひなし。此度開帳あるにより。四十萬日の回向をなし奉りぬ。誠に佛法最所。念佛の奇瑞。數ふるに暇あらず。並びに聖德太子十六歳の尊像は。沈檀香にて自ら造らせ給ふ。御丈は五尺七寸なり。三十五歳の尊容は其丈二尺二歳の御影は一尺八寸是皆太子の御作なり。かゝる時節に阿彌陀池燈明の光猶。明らけき誠の心に映り行く縱へ如何なる恨みあるとも念佛の功力に惹かれ成佛の身となるべしそれ西方十萬億土。遠く生るといひながら。フシ爰も己身の彌陀の國。日々夜々の法の庭。實に攝取不捨の誓ひには誰此土にフシ止まらん。地極樂淨土に至りぬれば輪廻の故鄉隔たりぬ。歡喜の心幾許ぞや。所は浮提命は無量壽佛と唱ふ念々さうそ(缺字)□する人は。念々每に往生す南無といつば則ち歸命。阿彌陀といつば其理面々(本ノマヽ)不同八萬四千。以滅無量過業因。利劍即是彌陀號一聲稱念罪皆除。南無阿彌陀佛と唱へ給ふぞ三重へ有難き不思議やな金五郎が佛後にすつくと立ち。地あら恐しの讀誦の聲。其方に附添ひ諸共に無間地獄の苦みを。受けなば受けんと思ひの外なる御法の庭。實に有難き佛道の示しに怒れる角も折れ。却つて佛果を受くる事。世に例なき御回向に逢ひ奉る故ぞかし。思へば〳〵嬉しやな暇申すぞ大次郎。小さんが事を賴むぞと言ふ聲ばかり忽ちに。白色の玉虛空に上り阿彌陀池に飛び去りしは不思議なりける 三重へ佛力なり小さんは夢の覺めたる心地大次郎に抱き付き是は如何にといふ聲もフシ泣くより外の事はなし。大次郎悅び佛力といひ不思議といひ。心の曇り晴渡る急ぎ舘に歸りつゝ追善心に任さるべしと。扨御僧に打向ひ。誠に故なき我々にかゝる善根なし下され。御恩如何で報じ申さん。別して妙なる念佛の

智力に依り。再び本心となり候事偏に太子の御加護と存じ。感涙袖を浸し候御覧の通りに候へば。先づ／＼御暇申すなり重ねて御禮申さんと。懇に一禮し御池に向つて合掌し。衆々十罪五逆障自他平等利益。印心成佛南無阿彌陀佛／＼」と唱ふる聲の下よりも。金五郎燈明堂にありありと。あら尊とや有難や。詞カヽリ此後又と來るまじ六字の聲を聞く時は。熱き心を和げ忍辱慈悲の姿にて。菩薩も爰に來迎し。上品蓮臺に至りつゝ成佛得脱の。身と成り行くぞ有難き／＼。

錦小路通油小路西へ入町
正本屋　山本六兵衛　新板

椀久末松山

作者　紀海音

お山人形　辰松八郎兵衛

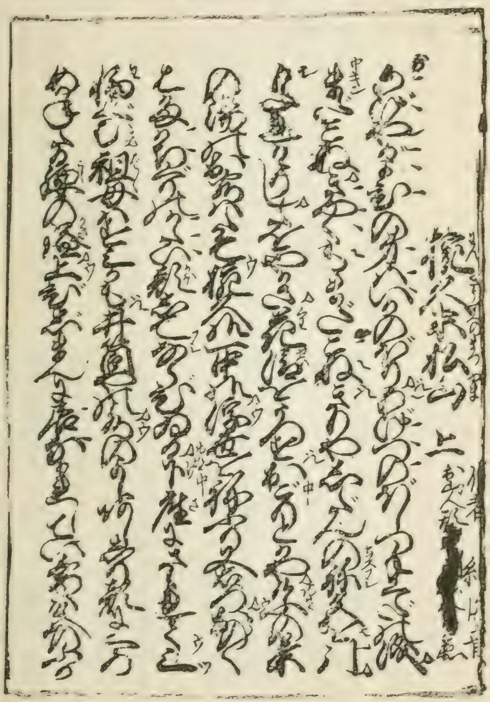
上

地揚屋通の身は。凧。あげつのぼしつ手管の浜。又來ぬ。客もまだこぬ桐屋紫檀のナホスフシ音色を彈き。もたれかゝりし合たをやかさ。華清をうつす奢とかや。地色今日の茶の湯のお客は誰ぞ椀久樣一中樣。浮世をねぶり又右衛門。各袴かちぐりの堅い顔してフシ並びゐる。地下座にさされて三つ輪ぐむ。老婆はすみかも井筒屋の。水のよしあし知顔にくろめかねたる腰の鎹。上びじまんに居ながれし亭主は色のふかみどり君が根曳を松山の。雪の口切壺折の姿はすねて氣もすねて。

酒落に酒落たるしやれ手前オクリせかずへいそがずしほらしや。地先づ掛物は情しる虎少將が眞實をスヱテ染め殘したる二幅對。表具は庵に木瓜の。素袍の昔思はるるフシ名は白拍子。祇王祇女。佛を願ふ朝夕のむすびし閼伽の水さしや。心の杉の木地ぶたのフシ氣の通りたる物好。オクリいや色好へ疊ざはりも靜御前のその昔。もらさぬ水の堀川や小オクリ御所のへ宿直の棚さがしあられ煎りたる灰焙烙。班女がふかき思はくの。思ふにかひもフシなき世なら。身をも投ぐべき井戸茶碗。山鳥の尾の羽箒の。うはきな客とフシいひかはす。中は茶入の。飛鳥川。

千壽の前が爪音に峰の。松風。たぎらする。釜は蘆屋に啼く田鶴の。友に久しき龜菊が。フシ葛葉の里の自在竹。熊野が在所の池田炭。こがれてくゆる薫物入は。越中が伊勢白粉箱。茶杓はおこと道心がハヅミ昔を泣きしフシまだら竹。中にゆかしや蓋置は。是なん消えし夕霧が。脣染めし紅猪口とフシ皆口を付けて感じける。地夜會に花は生けねども。亭主の顔は初梅に。柳あしらふ腰すゑて袱紗茶巾の取捌き湯音。水音汲みわくるハヅミフシ柄杓持つ手のしほらしさ。フシ利休が流宗旦が。妾腹なる孫姫が此世稀なる遊色と開いたる。口を閉ぢかねし。地色盗みといへばにくけれど戀とて忍ぶ緣の下。白い腕を差出して客の脇差奪はんと。もがけども手が屆かねば股引はいたる男ずね。ぬつと差出し親指に下緒引つかけ取る所を。椀久見付けナウ何れも。太夫が茶の

湯に鬼神も感ぜしめ。心なき脇差が宙を飛ぶはと言ひければ松山かしこを差覗きヤア道柴殿是は誰ぢやと頬かぶりをとれば。駕籠の作兵衛さて興がるどうぞいの様子を言へと責めかくる道柴とかう答へせず。ナウ作兵衛殿刃物が無けりや死なれぬか。舌でも喰ひ切らんと スヱテ もだえ身ぶるひ泣きゐたり。詞 椀久せかぬ顔して。様子はきかねどそちたちが命は七福神の前。巾着を開いたら助けられさうな事。地色 毘沙門にも愛染にも拙者が成つて。願をかなへてやらう長う聞くのも初心な事。高はどうしてかうしてとつまんでたつた一口に。話せといふも大様に フシ 脇目をしてぞゐたりける。地色 道柴袖にすがりつきさて有難き御一言。死なうと覚悟極めたも五十兩の借金ゆゑ。身を長崎へ賣られ行き添ひたい人に別るゝゆゑ。その仕覺さへなるならば見えぬ冥途をあてにして。何の心中したからう生けうとも殺さうとも。お前のお心一つにと涙の内に笑顔する。男も共に涙ぐみ扨面目なき次第なり。私めも腹からの駕籠舁にてもござりませぬ。短氣おこして親の内を出で此二三年肩に物を置きまする。地色 慈の歌は習はうとも貧の盗はせまいと思ひしに。死損なうて淺ましき名を流



山松末久椀

さんかとスヱテ差俯向いて泣きゐたり。椀久うなづき扨々心易いこと。一夜に捨つる豆板の露より輕き二人が命。きづかひすな請取つたそれ又右衞門。詞最前の小判をといへば又右衞不機嫌にて。お志は御尤なれど。此金は節分の御吉例借錢乞を打出す豆板。地色上はばゝ樣厭御より。下はまゝ炊花車六尺。我等が宿の鼻そげまで今宵をあてに。貫紬半疋買ひかかつて着せました。詞其心あて違うては兩人は悅ばうが。迷惑は大勢の者地色角を直して牛殺す。何とも暗き御政道とフシにがり切つてぞ申しける。地色大盡につこと打笑ひ尤も／＼。詞汝が心も背くまいと小者を呼びてやい汝は。走り歸つて手代の六兵衞に言はうは。のがれぬ事にて金五十兩入用あり。只今持參せよと云ひければ。地色其時皆々手を合せ一切衆生平等の。如來の御慈悲有難し。道柴樣勝手にて。眉取つて御内儀姿作兵衞殿は股引に。肩衣着し婿君の鬢付一兩御祝儀に。又右衞門がはづむぞよ今宵はどうやら物騷な。肌の一歩のひえぬ内。はや豆打とそやし立て奥の座敷へ三重へ入りにけり。地金にかつゑぬ禿花車物縫中居下男。座頭の久都二人連お出入の尼道心。町代夜番の子持嚊。足をつま立て走り出でヲクリ時刻へ遲しと待居たる。地色椀久其夜の裝束には肌には好む白天鵞絨。中着は黃無垢上着には太夫が仕着せの黑羽二重。淺黃の袴股立取り靜に歩み出でければ。お傍去らずの一中は箔置の絃掛に。一歩豆板山をなしさもフシうや／＼しく伺候する。詞其時大盡高聲にそも節分の祝儀といつぱ。昔日江口神崎や情揚屋の小座敷に。化物有りと云ひふらし七つ過ぐれば女郎の。往來も絕えてあらざれば一門一家是を歎き。戀の女神に五釜の湯を參らすれば有難や。神子に託宣ましまして。汝が家の妖怪は。狐狸の業にもなく。逆柱有る家にもなし。多くの者がそこに來て家を亡ぼす魂の。地色假に止る化生の業沈み果たる一念の。ほしい惜しいの豆板を年越の夜に蒔くべしと。示現に任せ行へば。妄執忽ち去りしとなり。それより年月隔たりて傳へて知る人無かりしを。我好色の冥加に叶ひ江口の君の夢想を請け。古きを追うて新しき。今宵の祝儀面々が手柄次第に拾へやと。惠方に向いて鬼や外福内へ撒き出せば地突退け押退け捩合ひてフシいさかひすべき氣色なり。地色かゝる所へ編笠深く身持姿。最前の小者を連れ座敷へずつと通りければ。詞椀久見るよりこりや慮外者。主人の前で立ちはだかり殊に笠はと引取れば。地色親久右衞門はつとばかりに飛びすさり。揉手をすれば面々も。周章狼狽

き尻込しッシ座敷の興はさめにけり。詞久右衛門詞を鎭め。ヤイ久兵衛何か金子入用のよし手代六兵衛は留守なれど。急なる事と聞きしゆゑ幸ひ昨日の爲替の金。汝が手より請取つた財布の封も其儘に。地色只今渡す請取れと機嫌は惡しく見えねども。胸に應ふる誤りの。詞も出ず腑向けば包み切れたる腹立の聲あらけなくわめき出しやれ痴呆者大盜人。騙り掠めてげしがうより親の許してやる銀を。遣はぬかやりをらぬかと。地色肩も背中も遠慮なく。財布押取さん／＼に破れよ碎けと叩くにぞ。口もほどけて石瓦はらり／＼と出づるにぞ。皆々驚き拾ひあげッシ是は。／＼と呆れゐる。詞久右衛門涙をはら／＼とこぼし。初對面の方々へ不禮の段は御免あれ。折檻の仕樣もあらうに。晴れなる中にて一分を捨てさするは。子は可愛うないかと思されんが恥かしい。世間の親とは違うて。相應の金銀を費すを厭ひは致さぬ。又阿房つくすを嬉しうはなけれども。褻にも晴にも獨子。五つの年に母親が流行風にさそはれて。死ぬる臨終の際までも彼めが顏を打守り。早う別れう故にやら人より殊に可愛うて。背丈の延びる嬉しさに。年月暮るゝを待兼ねしに。髮結ふ顏も得見ずして別るゝ事の悲しやな。乳母といふもの有るなれば乳にかつゑる事もなう。てて親のましませば牛馬にも踏まれまい。心にかゝるは繼母が抓りつ叩いつ憎まうかと。地色思へば／＼情なや。千部萬部の弔ひより我が後世のため子の爲に。詞閨の枕は淋しくとも後連持たせ給ふなと。地色言置くことを目と耳にとゞめて歎き暮す故詞一門どもが壁訴訟。商人の身に女房が。無けりや濟まぬと呟くを聞かぬ顏にて年月を。やもめの膝に甘やかした る誤と。思へば今迄の放埓をも強意見した事はなし。爰をば聞いて給はれ。昨日取りたる爲替の銀を此石瓦にすり替へて。親に一杯喰せしを當座に探り覺えしが。アヽまゝよ云はゞ纔に五十兩。地色叱り立してゆすられて家出やせんと案じられ喰うた顏して濟ませしが。思へば大事の分別所。親なればこそ子なればこそ。世間へ出せば贋金も同然たり。是に懲りず如何樣の事仕出さんと。人々に咄して恥を與ふるもきやつめが爲。假令此身も諸共に袖乞の身と成り行くとも。母が形見の撫子の故と思へば悔みはせぬ詞ヤイ物知らず義理知らずめ。せめては月に二三度は宿の妻をも詠めぬぞいとほしや舅の義右衛門。汝が痴呆を知らずして器量と皺になづみつゝ。つてにつてして繼聟の齋娘を名ばかりに。地色そぶ／＼とした女夫仲。それを苦にしてぶら／＼

と。煩ふ娘の顔を見て。さぞ後悔に思されん。おのれが憎き餘りには某までを怨まれん。舅と姨と内外の。義理の缺くるが口惜い。おのれにかゝり某が命は五年つゞまらう。惡しかれとは思はねど不孝の積もる天罰の。成り行く末が不便なと スヱテ怒りつ泣いつ口說くにぞ。地色傍に居合す者どもも思はずフシ淚を流しける。地色椀久兎角の詞なく脇差ずばと拔き放し。自害せんとする所を松山縋りとゞむれば。久右衛門立上り。詞ム、親の意見をむやくしう思うて死なうとな。やれ。とても腐つた根性からは。生きて居ても花實は咲くまい。併しおのれ獨り殺しては。冥土の母へ言譯がない。地色逆ながら某も皺腹切つて追付かん。死ねや急げと責めかくるフシ聲も淚に震ひけり。地色松山泣く／＼云ふやうは。詞ア、勿體なき御仰かな。地色世に有難きお志何しに惡しう聞し召さん。篤と御合點いたさうな如何な事明日よりは。廓通もなされまい我身も今のお詞にて。ふつ／＼思切りました。此廓を出ぬ法もあれ今から文も通はさじ。是に免じて此度の御腹立。御許し下されよと スヱテ淚ながらに掻き口說けば。椀久顏振上げなに懇切るとは擲るるも叱らるゝもおのれ故と。地色云はんとするを口に手を當てナウこれ。詞杖の下からも廻る子が可愛と言ひまする。お慈悲な親御が憎うておつしやらうか。いとしいこな樣にお爲にならぬ事を申さうか。これ常は是程の事はつい合點の行くが。いかうせかしやんしたさうなお道理ぢや。大切な人の命二つを救はしやんした。五十兩の金違うたと云うては義理が立たぬ故。死なうとの事であらうナウ。わしも太夫ぢや。こな樣に引もつけますまい。二人の者も死なしはしますまい。地色お前が刄物三昧なさるれば。面打の樣にて親御樣が。一倍お腹を立てさんすと スヱテ縋り付いてぞ泣きゐたる。詞久右衛門聞いてホ、神妙な心底。年寄めが心を感じ今の一言たがへ給ふな。家藏も埃まであれめが物。地色金故義理は缺かせまいと懷中したる金子にて。悴が命は拙者が買ふ。汝は二人が命を買へと。包ながら投出せば。どこやら粹な親御樣とフシ皆皆顏色直しける。時に久右衛門合口拔いて椀久が髻根より切落す。是はと云ふをア、騷ぐまい／＼。詞世間の聞え舅への義理。勘當せねば立たぬ首尾俗の姿で追ひやらば。地色中々浮氣は直るまい。さあらばあられぬ方便事。又は樣々惡心募りて惡名を刄に殘し。屍を野邊に晒されんを久離の子とて餘所に見て居られうか。詞姿を變ゆる此上の慈悲首を繼ぐのことぶき。地色衣に染めて里々を托鉢して世を

迯れ。それとも飢に及ぶなら指圖はせぬが從弟も有る。家來の門へ立つとても咎むる程の事あらじ。是もいふまじ他人ぢやもの。憂しや浮世と横へ振る顔は フシ 涙の置所。地色 金言耳に應へてや得心顔に椀久は。親に向つて一禮し何處ともなく出で行けば。松山やがて追付いて妻も許さぬ出家とは。はてやくたいもない何處へと扣へる袖を振放し。詞 ヤイ最前わが方より懇切つた。地色 ナウ切らうと云うたは切りともなさ。親御様のお心を宥めんばかりに胴慾な。お心とも知らいで假にも云うたが悔しい。氣遣さんすな傾城を居腐りにして成りとも。圍へましよ我身を捨てゝ行かうとは。曲もないやらぬやらぬと縋り付く。地色 一中見兼ね中に入り御勘當は當座の事。とやかうあれば却つて椀久様のお爲にならず。萬は我等呑込んでゐます追付け目出度う逢せましよ

さもあれ餘りお姿の。見すぼらしうてお笑止や。地色 垢馴れたれど一中が。心計の餞別と十德脱いで着せければ。地 嬉しや是も後世の縁。廓は西方極樂の二十五歳の夢の内。醒むれば何の變哲も無き世の中こそ 三重 〽哀れなれ

中之巻

フシ 夢路には。足も休めず通へども。現にかへす俤や スヱテ 姿の關の座敷牢。我物盗む金銀の 小オクリ 科ぞと〽思ひ諦めし フシ 候べく候に馴れた目の。地色 近付ならぬ文字よみもはしり智恵とて小器用に。古文も半空にやる名のゆかりとて西の銘。詞 乾を父とし坤を母とす。何ぢや乾坤を。父母と云うたは此唐人めも。勘當に逢うたさうな。不夜城の仕過か妓女文作が募つてか 地色 咄の合はう男ぢやと。得手に引込む註釋は壁の耳さへ フシ 耻かしき。

地色 舅の義右衛門次の間に咳拂ひして詞をかけ。詞 ホヽ、結構なお心がけ。此様子を親久右衛門が聞かれたらほろりとしられう。ナウ若い時の不屆は世にある習ひ。勘當が惨いの面目がないなどとて。必ず短氣な魂を持給ふな。つまらいで駈落した者も。心が直れば富士を見たが德になる。沙汰はない事身共も。二三年前までは。節季々々に二三十兩程の仕過。地色 塵が積りて山の神に前垂で縛られたも。さら〳〵耻とは存ぜぬ聟殿をかくまふに。座敷書院打開き。伽こしらへて朝晩の御馳走申す筈なるを。小暗き一間に押込めて置く故に。娘が怨めしさうに親の顔を打守るが。目に餘りて不便なれども。詞 かやうに致すが御身の藥。又は詫言の種にと存じての事。僅か十日か廿日の内不自由をこらへ給へ。地色 最早今宵も初夜半時所帶持の第一は。夜は早う寢て

朝起の。稽古に功を積み給へと オクリ 教へてへ奥に入りにけり。地色 かゝる折節妻のおさん同じ見舞も色含む。氣に覺ある差足や世間晴れたる妹と背の中に思はぬ川出來て寢所替る フシ 宿直臥。地色 小腹が立つて夜が寢られずあくる翌日は十六日。地獄の釜の蓋さへ開き。餓鬼も嗜む男ぶり三途の川原をぞめくとかや。如何に斯うした時なりやとてお髮も結はずばらばらと。頭の延びた故にやらお色の悪い顏が。目に スヱテ ちらばうて氣の毒な。地色 暫しの内と固めたる下紐の關解かずとも。目に正月の御祝儀に髭など剃らせ參らせんと。剃刀茶碗持ち添へて。かしこに來り佇みていから靜な。モウ御寢なつたかと フシ 内の。様子を窺ひゐる。地色 斯くとも知らず椀久は大欠伸三つ四つして。詞 世の中の親父といふ親父に。霞のかゝらぬ親父は一人もない。錢金持つても太夫に逢はずば何の樂があろ。淋しいとて宵から寢てはあつたら目が愚痴になる。新町橋はどちらの方ぞ廓は爰から見えぬ事か。地色 エ、今時分三枚肩で押す奴もあろ。一中が咄も油がのる最中。備前の野暮めがとつくりとしおとし顏に弄りをろ。張をもつ太夫なれば一倍厭な身振して。格子へ出て犬そばやしてゐるを見るやうな。其處へちよつと拙者が顏出したら忽ち笑顏をお目にかけるに。詞 損料貸しの天狗の羽はないか。揚州の鶴は下りぬか十萬貫を腰に付け。地色 太夫を引掛け立歸り千年を結ぶ松山に。逢ひたい見たい戀しいと。願の糸の二上りや八百萬代の神かけて。どうか斯うかと。行末を。思うて胸を焼かうより。いつそ此身を。捨草の露と。消えなば。恨もあらじ。只兎に角に世の中は。かの一色の儘ならば罪な作らじ。諸共に。邪淫の悪鬼は身を責めてその念力の道も戀路も高塀の上に戀しき人は見えたり嬉しやな。地色 ヤレ松山か早う爰へと招かれて。急かるるからに足震ひ。飛ぶよと見えしが縁先の石の角に胸打ちて。うんとばかりに息絶ゆる椀久はつと走り寄り。呼び生けんにも勝手は近し水も藥もあらばこそ。途方涙にうろ／＼と スヱテ 手足を抱へ居たりけり。おさん此有様を見るよりも恨み妬みも餘所になり。涙催す仁愛の袂を少しおし開けて。茶碗の水を差出せば。椀久嬉しく押戴き心と目とに禮言はせ。太夫が耳に呼きてナウ是女房か。菩薩心にて大悲の水を與へしぞ魂返して一言の禮云うてから死なば死ねと口より口に入る息のやう／＼心付きけるにぞ。抱へて座敷に上りつゝ互に目と目を見合せて スヱテ 抱き付いてぞ。泣き居たり。地色 おさんも袂の此方にて袖を絞りてゐたりしが。包む

に餘る言の葉の扨も見事な心中やな。地戀に命も捨つるとは咄には聞いたれど。目に見たは是が始め我夫のみか世界の人親の諫世の謗も構はず行くは浮れ女の。此誠より迷うての事情の道も戀路をも。今宵の今覺えたり。我はもとより フシ たらちねの。地色懐出でぬ生娘にて淨瑠璃や歌舞伎をば。此道の學問にて女心は一筋に男はどれも悪性なと思ひ諦め居たれども。詞仲居や下女が陰言に奥様はうつそりぢや。人形ぢや佛ぢやと急かす下から悋氣して。地色更けて歸らせ給ふ夜は物のたまふも不返事に。枕蹴散し頭から後向いたる寝姿の。厭らしからう憎からう。お腹が立つたであらう物と思へば今更耻かしや。詞今年は斯うした事の出來ようとてか初春祝ふ染小袖に。腰元が油をかけ秘藏の三毛は鼠にかまれ。地色何かに付けて氣掛り故天神様の裏門にて八卦見て貰うたりや。詞中酉の方の女が呪ふといふ。それには私もせき上げて。地色憎やおのれに負けうかと。貴い坊様聞出して道切の札離別の御符。精進したり垢離かくを爺様へ聞えて。男の内に居ぬは女房の馳走の足らぬ故。左様な邪な心持つ故。久兵衛殿に憎まるゝと殊の外叱られても。エヽ無理な事ばつかり日本國に我程な。地色男思は有るまいと思ひし事の愚さよ。遠き廓の關を出て幾重の門塀乘越して通ふ人さへ有るものを同じ内に住みながら。親同胞に遠慮して襖一重を越えかねて。心一つに歎きし事。愚痴とや云はん不居とやせん疎まれたるは我身の科。思へば器量も心中も。劣つた物負けた物。さうとは知らでくし〳〵と。昨日迄も今日迄も傾城とやらに騙されて斯樣な憂目見給ふといとしうも亦憎うも亦。思ひし事の勿體なや耻かしやと フシ しやくり。上げてぞ泣きにける。地色松山も共に打伏しゐたりしが。ナウおいとしらしいお心や町女房の一筋に。詞男をいとしがらしやんすに。名も浮れ女の心中が何しに及ばうぞいの。嘸や今迄私が名を聞かしやんすも憎かつたで有らう。お腹の立つたはお道理でござんす勤の身でさへかはゆい男には。悋氣するといふ樣な物ではござんせぬ。地色如何程惚れた人にても女房の有ると聞いては。どこやらがをかしからぬを椀久樣とは異な緣で。詞お前といふが有るを知りながら只滅多にいとしうて。假令大名の奥樣と呼ばるゝとも如何な事行くまい。よしや一生妾と云はれうと椀久様には離れまい。地色是程には思へども假にもお前を去らしやれとは。神かけて フシ 云ひはせぬ。地色取交したる起請にも變らじとは誓ひたれど。夫婦になろとは得書かぬも皆こな樣へ立てゝの

事。ゆめ〳〵お二人の中裂かうとは思はざりしを。詞恥かしや今参りしはいかい悪心ナウ椀久様も聞給へ。内々の井筒屋の客が請出すに極り。金も渡して明日は國元へ連れ行く筈。姉女郎や傍輩衆目出度いのあやかろのと。地色肩や脊中をつくづくと心一つに思案して。瞽へ泣いても笑うても今宵明けては歸らぬ事。こなたを誘ひ立退きて何處如何なる山の奥。葎の宿に忍びても女夫事して遊ばんと。路銀も才覺して來たと袖より袱紗投出し。斯う迄はしたれども其淺からぬ御仲の。目を盗人の振舞して通ひ参りし罰當。不慮なる怪我に自は冥途へ半参りしを。そこの情の一雫に二度いとしい顔を見て思も戀も晴れました世の中の仇を恩にて報ずれど。恩を仇では フシ報はぬとや。地色思切るは切つたれども。田舎へも下るまい廓へも歸るまじ。兎角は心一つにと フシむせ返り。てぞ泣きにける。地色おさんもあつと聲立てゝ嬉しき人の心やな。詞それに就き我身の上の悲しき事明し申さん聞き給へ。常々母様の仰には厭がる男には添せまい。暇取つて戻れとせぶられしを。地色とやかう延べてゐる内に。斯うした首尾に成つてはいよ〳〵の事。されども父様が頼もしうて。他人でさへおちめには見はなされぬ。まして露ばかりも如才しては。世間が立たぬと云うてかくまへ置き給へど。詞母様がわゝしうて子にかへての義理立は。をかしいの厭らしいのとねすられて。此二三日はどうやら父様も思案顔なる體を見て。地色我身の悲しさ主様に咄して。爰を立退きて添はうか。イヤ何もしつけぬ我なれば長らへ憂目見んよりは。いつそ諸共死なうかと。様々思ひわけれ共なま中咄したとてそなたと云ふ深い仲あれば。地よも自らとは死なうとも退かうとも御合點は参るまいと。思へば恥しうて包みしが。詞今咄しますは悋氣でも何でもない。地色そこにも主に別れてはよも生きては居られまじ。其命を私に呉れて。連れ立ち退きて添ひ給へ。二人の内に一人はとても死ぬる命。同じくは相思ふ中は残り給へ。我身は兎にも角にもならん。さは云へ夫婦は二世といふなれば。此世は松山殿と添ひ給ふとも。未來は必ず自と妹脊の契變り給ふな。言ひ置く事は是迄と持ちたる剃刀逆手に直し。自害せんとする所を椀久あわて止め兼ね。襖の下に押伏すれば死なんともがく女心。されども強き男力。恨めしげなる聲を出し諸共にとも云はゞこそ。身をば恨みて死ぬるものをそれさへ儘にし給はぬ斯くまで憎き我身かと恨み罵り泣給へば。是非に迫りて椀久は。フシ只せき上げて居たりけり。地色

松山立寄りそゝけし髪を掻撫でて。我身を立てゝ死なうとは有難や忝や。添へと許しを請けたれば最早千年萬年も。契つた心地の致しまし微塵も殘る事はなし。則ち只今返します親御の心さがなくば。何處でなりと添はしやんせ夫婦と知れた仲なれば。詞浮氣とも徒とも指差す人はござんすまい。我身は金に任す身の死なねば濟まぬ心なれど。お志のせつなさに義理に憂身を沈めつゝ。請出されて行きませうナウ椀久樣。今歸りなば翌日よりは田舍女房と思召せ。お心ばし殘されな自ら廓に無きならば。地色定めてお身も納まらん勘當も御許され。御夫婦目出度う榮え給へ。起請こそ今は仇なれ是なくば忘るゝ隙も有りなんと。引き破り嚙みしだき思切つたる顏ばせの。詞は淸く目は濁る瞼に玉を持たせつゝ。ずつと立つて出でければ椀久急いて聲を上げ。實正田舍へ下るかと走りよつて引据ゆれば。おさんはやがて起上り死なんとするに久立歸り。持ちたる剃刀もぎ取らんと捩合ふ隙に松山は。梢に帶を引き掛けて塀の上にひらりと登り。椀久樣おさん樣不心中はお爲ぞや。世間の誹はよき樣に。賴みまするといふ聲もヲクリ泣く〳〵飛び降り出で行けば。地色南無三寶しなしたり。その根性と知るならば最前に殺さうもの。よしなき水が仇となり備前の客めにうまうまと。添はせん事の口惜しやと足ずりして居たりしが。エ、腐つた心底と知らいで其方を。此年月袖に思うた面目ない。せめて彼奴めに恥をかゝせて腹愈んと。馳出る袖を引留め。女郎に科はない皆私故の事なれば。共に言譯致さんに連立ち行かんと泣出だす。椀久聞いてイヤ其方を連行きては親達へ言譯立たず。暫しが內遠ざかるとも女夫の仲は變るまい。さらばと云ひて最前の私の梢に馳けのぼる。おさんは猶も跡を慕ひ。嬉しい詞聞くからは親には生きて別るゝとも。同じ道にと這ひかゝる松の梢の蔦かづら。よれつ縺れつ離れねば。不便ながらも剃刀にて形見に殘す下紐の。中よりふつゝと切り放せばかつぱと落ちて泣叫ぶ。出で行くつらさ止る憂さ。互に心くみ帶のきれぎれ。になる　三重へ世ぞつらき。

下之卷

椀久道行

二上り唄辿り行く。今は心の。浮かれきて。末の松山。思の種よ。合手死なうかの。どうもせ。これ〳〵君ゆゑに。あのや椀久はこれさ。〳〵。鼓の皮よのほんえ。しんぞ此身はこれさ。〳〵。うち込んだ。しんぞのほんゑ。とかく戀路のナホスフシ亂髮。起きて別れし。俤の。小ヲクリ

問へど答へずしよんぼりと。去りし寝覺に締め合ひし肌と肌との其うつり。フシ昨日は今日の。昔にて。そも我ながら淺ましや。詞法師々々は木のはしと。思ふは野暮よわけしらず。心の花の薫をば。知らせたいぞやア、はち／＼。詞此十徳も其縁一中がくれをつた。フシ智惠も器量も身代も。皆淡雪消え失せて。交せし事の契るとも。變らぬやうにと先の世を。先で逢ふやら逢はぬやら。どうやら斯うやら知らねども。せめて未來は違なく。我と一所に極樂へ。それも叶はぬ物ならば。たとへ奈落の。底までも二人手に手を。取り。組みて。スヱテ離れまいぞや君琥珀。我は塵かや身に積る心の。芥。胸に滿つ。それがこうじてきよろ／＼／＼。けら／＼笑ふフシ物狂ひ。とても濡れたる。袖ながら。一村雨を厭はんと。立寄る軒の格子より色をあらせる玉琴に。過ぎし騒を思ひ出し。詞來いよ久助 地伽羅の下駄。珊瑚珠の杖と手を叩くに。あいと答ふる者もなし。無いも道理よ此なりちや。アツア思ひ切らうか切るまいか。切るに切られぬ戀路の劍。はた／＼はたはたくる／＼／＼。狂ひ廻るや。破車のフシわが姿。井筒の水に。映しては。扨も窶れた誰故に。君故にこそつらからね。長地其曉の睦言もなか／＼今はあだし野の露も淺さじ我思。亂心にちとはち／＼。フシ狂ひありくは何處／＼ぞ。祈る證を長町や。道頓堀へよこたはる。詞駕籠の簾を洩れ出づる。緋無垢黄無垢の空炷や。あれは呂州か白人か。客屋の三味の三下り三下り詞我身の斯くなるは。如何樣不思議松にあいたぞなんつかしのごい／＼。なんぼ身請で急かすと申すとも。可愛男と。見かやせまいぞいの。なんつかしのナホス俤や。フシ色で固めし。軒のつま。妾こそ女護の島の内。堀江の文の便りさへ橋が無ければ渡られぬ。戀に願は西方の玉の臺の阿彌陀橋。うき長堀もわんざくれ。濡れてぞ渡る立賣堀。法に我名を黒めても住み憂かりける此浮世たゞ渡られぬ薩摩堀。問へども君に阿波座堀雜魚場安治川福島や。迷ひ行けども其人に。似たる人さへあら情なや。こは何とせん フシ身の果てと。泣いつ笑うつ。又はち／＼。あれよ笑へと皆跡に付いて。きた濱今日も早や狂ひくたびれ足立たす。彼處の土手に坐りつゝスヱテ芝を。褥に伏しけるは目も當て。られぬ風情なり。

地土氣の取れぬ備前客。戀の素燒に松山を千代の子の日と引拔いて人目も旅は遠慮なく フシさんざめかして通りしが。地色心にかゝる玉簾の駕籠の隙よりそれと見て胸の氷も消え／＼と抱き付かんと思へ

ども。人目をふせぐ八重垣の フシ泣くね泣かれぬ共つらさ 地色早次郎駕籠立てさせ。詞あの坊主めは此頃町中を徘徊する氣狂六法よな。地色器量といひ手足の尋常さ。銀遣の抜殼ならん不便の事や。それそれ丁稚錢摑ませと云ひければ。地三介頓て立寄りてこれや寢耳へ百錢が這入るは旦那のお陰。仇に思ふな皆の衆が一日汗水になつても。かたはなに八十四文はか儲けぬに。地色福德の三年目乞食仲間の仕合者。起きよ。/\と揺られて。詞椀久ずつと立上り。何ぢや此錢を主人が呉るゝとや。ヤイ善根と云ふはな。未來の福田を蒔くとて往來の人が。地色慈悲の袖より漏るゝ一錢二錢を請け喜んで貧僧が。朝夕の煙を立つる助とはする。肌を隱す布子は着る。後世を願ふ十德あり乏しきにはなきものを。覺えなきに合力とはたわいなき偕上人。花にくるゝか露にはづむか。冠古けれど沓に穿かず。大盡は腐つても フシ太鼓は持たぬと突戻す。地色早次郎打笑ひ扨々心ある氣狂や。そも左樣な堅い事は誰が敎へけるぞ。ナウ氣狂の眞似とて狂へば直ぐに氣狂。四方に



四萬の藏有れども限有る金銀を。色の奴と遣ひ捨てし天の罰親の罰。金の罰が當つて目前の法師が有樣。見ても聞いても嗜み給へ歸らぬは昔。止らぬは浮身の末浅ましや悲しやと フシ涙を流して語るにぞ。是は尤も/\と皆々袖を絞りけり。地顔は隱して松山は雪をかづける綿帽子。涙の玉の小間金を袱紗ながらに差出し詞ナウ坊樣是はな新町橋で拾うたが。戻さうにも主が知れねば此所に捨てゝ行く。地色同じくは坊樣拾うてなりとも下さんしよば。嬉しからうと言ふ聲も スヱテむなつぼらしう聞えけり。地法師受取り押

藏き。お姿は見ぬが御器量さうな。物腰が素人ではない。お肌に添うた袱紗めにあやかつて合懐かしい人の懐に寝たい。詞殊に新町橋で拾うたとあれば辻占がよい。太夫を仕落した客めが頓病死して。二度身どもが手に入る吉相。地色目出度い目出度い祝儀の爲の一踊。中水を汲みやらばようやよやよ小川で汲みやれ小川小石川轉び合うて轉び〳〵轉びかゝるとよえようやよやよヲ。小川で汲みやれ。小川小石川轉び合うて轉び。轉び轉び轉びかゝるとよえ。褄はひくとも外へ靡かじ。地色あれ聞給へ外へ靡かぬ心底を。かはゆう無うて何とせうとスヱテ踊りつ泣いつ狂ひける。地色然る所へ作兵衛道柴驅け來りさて〳〵曲もないお仕方。女夫の者が今まで此世に長らへるは。お情故とは誰知らぬ人もござりませぬ。そのお前に袖乞させまして。我々が家の内に

居られうものか。假令水を湯にわかし我は飢ゑてもこな様を。かくまへまして行く〳〵は何ぼ父御の當分は。石で手詰めた折檻なるとも。月日の立つに從うて。親は泣き寄り片端なる子の可愛いと申せば。御歸宅は追付の事暫の内も人が見る。お草臥なら作兵衛が。負うてなりと抱いてなりとも歸りませうと。恨みつ。泣いつ搔き口說く地色思ひ餘りて松山は。駕籠の窓より顏差出し何誰かは存ぜねど。賴もしきお心や見れば物狂しき御有様。夜晝付いてなりとも外へ出して下さんすな。賴みますると云ふ聲もフシ心迄くる涙なり。地色道柴そこへは目も遣らずこれ作兵衛殿詞我身も同じ流の身。犬猫の様な傾城と同じ様に。思はしやらう所が恥かしい。あつたら金をせめて川へ捨てたらば。どんぶりとも云はうに。よしない四つ足の藥喰遊ばして。地色斯くまで

衰へ果て給ふとフシ恨の角を生しける。何我事を衰へたとは今でも歷々の手代あり。ア、慮外ながら御大盡。浮世小路に駕籠はあれど。君を思へば藁草履花につらしと詠み置きし。嵐が六法よいよさ。荒い風にもようやよほいほ當てまい様を。やろか信。濃の。詞ハア冷いなげに。雪國へサアササさん此え。川ぢや。さんさら柳のよいよさ。白根が〳〵よいてがよいてが。駒のひざふしんからが。膝栗栗毛にしんがらり。詞乘つたか乘つたぞ。地信濃へやろか。やろか信濃の〳〵。詞ハアアつめたいなげに。雪國へさあささん此え。思ひ焦れ〳〵てとつと山家の苔猿が。雨にそぼ濡れてついつくばうた。かいつくばうた取りなりは。曾我のす。すつきり祐成ぢや。詞きんにやう〳〵〳〵にやとらげ猫の〳〵情あれかし。地二人は袖に縋り付き。信濃越後の雪よりもつ

めたい心に騙されて。さて正體なき御有樣。千萬人の見るよりも。一人が見るのを恥かしう思さぬか。せめていとしやと思はずとも。人が笑へば人並に笑ふは憎や卑怯や。胴慾やと睨み付けたる鳥籠の内。松山今は堪へ兼ねて尤ぞや理ぞや。お爲に斯うはしたれどもあのお身に成り給へば。今と成つて立ちはせぬこしらへ置きし言譯は。是御覽ぜと懐にたしなみし。さすがの鞘を抜き捨てゝ。南無阿彌陀佛といふ所を 詞早次郎詞をかけ。先づ待て一言いふ事ありアノ法師を椀久とは初めから知つてゐる。傾城は賣物金が敵と云ひながら捨つる命に比ぶれば千金も塵埃。地色さりながら半錢でも掠めば命を斷つ道理。さあれば又重き物。しかし命より寶より重きは義理の二字ぞかし。我も鄙びた身ながらも太夫が色に目が見えず。切なる金は出しぬれど命庇はぬ心底の。中引き分けて行く事も物の哀を知らぬに似たり。其上親久右衛門代々御屋敷へお出入致せば。彼是以つて餘所に見られず。よしや某も愛着の根は枯れずとも。松山には暇をやると フシ至極の涙塞きあへず 地色早次郎重ねて。一先國元へ同道し。樞機を借つて親達へ。宜敷く勘當詫びなんに先づは日出度く出船と。椀久松山相輿に打乗せてさらば〳〵と立出づる。世界の事も好色も。誠を道の親とかや來し方よりも今の世々。又後世の末永く榮は色の道ならん。

右此本者依為懇望文句音節并悉挍合加秘密令開版者也

豊竹若太夫直傳

大坂上久寶寺町三丁目小刷
正本屋九右衛門板

富仁親王嵯峨錦

作者　紀海音

序詞山は高きにあらざれども。仙あれば即ち名あり。水は深きにあらざれども。龍あれば卽ち靈なり。廬山の瀧孤山の梅。李伯和淸が愛吟より。其名も高き日の本や。百世重なる天皇の。德は富仁親王のオロシへ政事こそ。やごとなき。色香も榮ふ御齡。まだ廿年の若草に。籠るてふその業平に類へる玉の御形。風雅の名さへ著き永享元年暮秋の空。千世の古道嵯峨紅葉行幸の車大井川。汀に向きて玉座を占め御遊覽とぞ聞えける。供奉の卿相雲客より菅家江家の儒士博士。連る袖の色替へて。末座に笹目の千王丸。今日の舍人を蒙り强力不敵の若男。瑤輿を守護し坐したるはフシいかめしう。こそ見えにけれ。地色中にも關白兼定公笏取直し謹んで。詞物として捨てざるは天地の公。君のめぐみの深き事八入に照れる紅葉も。景色を添へ候と壽き立てゝ奏せらる地色親王御機嫌麗しく朕太平の餘風を慕ひ。往昔仁明天皇の。芹河の行幸に準へ。詠歌の興に君と臣相和ぎて樂しみを。下に施す一節と思し入りたる和歌の題紅葉水に映るとの御製は斯うぞ聞えける。もみぢ葉の影も流れず大井川。散らぬ梢を笧にして。地忝くも御宸翰御短冊に染め給ひ。都の錦名所の褒美に何か惜しまんと。流れに添うて投げ給ひいざや面々目前の。趣向はいかにと宣へば。兼定公を初めとし我も〳〵と公卿達。長歌短歌混本歌。詩連句漢和俳諧口。千言萬句綴り添へ色紙短冊とり〴〵に。浪に浮みし有樣は陸奥山の黃金花オクリ入日へに洗ふ如くなり地色入興の餘り人々はヤア千王丸。詞日頃は無骨なりとても今日の瓊筵に。一人洩るゝは一座の恥流行歌の一句でも。覺えた事を書き出だせいかに〳〵と宣へば。地ハツト答も荒男のつさ〳〵と御前に出で。詞分相應の役目には川波に飛込んで。或は水練立游叡覽に供へんと肌に。油を乘せたるに。存じの外の御所望迷惑至極さりながら。地御恥辱とある上はたつて辭退もいかゞなり歌や連歌は氣がかはらず。わつさりとやつてくりよ。歌龍田川にはちんちり紅葉を。流すよほんをさとなとさよんよえ。ナホス君を始め奉りフシ各興に入り給ふ。地色時に尾上の方よりも紅葉につれてちら〳〵と。吹かれて來る板繪馬御前にこ

そ落ちにけれ。地親王取上げ見給へばいと細やかなる彩色に。美女の姿を畫きなし願主狩野の雪姫と。讀み終つて宣ふは。詞女の繪師と譽ある雪姫が筆ずさみ。地聞くに勝りて妙なるかなかゝる器量を蓬生に。埋もれ置くこそ本意なけれ。まだ獨居にあるならば宮仕をも勸めよかし。兼定いかにと綸言あり。詞さん候此雪姫儀は。某が家臣膳手織部が娘。折を伺ひ御階迄召連れお目見え遂ぐべき所。丹青修行に暇なく空しく打過ぎ候なり。又此繪馬は雪姫がわりなき夫婦の其仲に。子を設けたき祈願に り我姿を書寫し。松の尾の明神へ奉納せしと聞きつるが。地山颪に誘はれ君の御手に入りし事。民の子を安んずる願成就の吉相と。フシ委細にこそは奏せらる。地色親王由を聞し召し。なに此繪馬は雪姫が姿筆に寫せしとや。心にくやゆかしやな彼が風流聞くに

つけ。夫が知り度し何者と勅諚あれば兼定公。詞されば候何時頃より。馴れ馴染しは知らねども夫はあれなる千王丸。地委しき契は召出して御尋ねあれかしと。座興を交ぜて勅答ある。親王世になく打笑ませ果報いみじき千王丸。骨柄に似ぬやさ者よな汝が癖の腕立にて。雪女は仕留めうが雪姫には消え〴〵と。なだれて溶けて何時の間に子持と迄はしたゝるき。願ひごとやと冥加なき御戯れの言の葉に。もぢ〳〵として千王丸 フシ顔を赫めて居たりけり。地色爰に蟠海僧都とて親王の御兄宮。高雄にまします御許より百濟師國使者として。玉座間近く畏り。河邊の行幸先達つて　主君僧都承り幸ひ御寺も程近し。所は名に負ふ高雄の奥。春を欺く紅葉は此地の及ぶ事ならず。地旅宿の席を相構へ臨幸願ひ奉る。御迎ひに参上と　フシいかめしげにぞ申しける。

地色兼定公は豫てより僧都の惡心察する上。今師國が面魂害を含むの計略と心に込めて宣ふやう。詞ム、御連枝の因みとて思し寄つての御招待君御叡感さりながら。逸遊逸豫の樂みも過ぐれば民の煩ひたり。此地への行幸は先例を追ふ所。高雄に一宿あらん事安きに誇る誹を受け。朝政事怠らば下の訴へ滞り。君一人の御過無益の結構叶ふまじと。言葉正しく返答ある。師國頭を上げ。コハ心得ぬ御言葉差當つては御兄宮。御慈の招待に四の五のあるは無禮の沙汰 地又朝廷の行ひも天子に代る關白殿。御一宿の其間拗きに違亂あるべきか。近頃狹き胸中と　フシ嘲笑う。てぞ居たりける。地色親王つく〴〵聞し召しげに同胞の睦まじき。使がねとは言ひながら。政事には替へ難し。高雄山の風景より民の竈の賑ふこそ。朕が詠めの紅葉なれ外に求むる樂し

みなし。歸りて此旨申せよと悠々としておはします。師國溜息ほつとつぎ。天知る地知る人知るとて何處ともなしの取沙汰に。親王の御事はもとより女帝にまします故。廿歳を過ぎ給ひてもお后もなく女御もなく。華奢風流の御容顏合點が行かぬと思ひしに。關白殿を始めとし登山厭がり給ふ事。高雄は女人結界故行き詰つての言葉爭ひ。尤もかな知れた／＼。よしは女帝にあらばあれ其時こそ僧都の行力。いかなる魔障ありとても退け給ふは案の内。骨肉の御仲にさのみな包み給ひそと。さも憎さげに言放す。衆定大きに氣色を損じ。ヤア勿體なし師國。天子の御身に謂れなき難題を云ひかけるは。汝が當座の雜言か但し僧都のお指圖か。出家の御身に惡心のあるべき樣には思はねども。只今の一言にて愈遷幸なし難し兎に角還御を急ぐべし

皆々用意とありければ。師國は大音聲。忝くも蟠海僧都一の宮の命を請け。勅使に等しき某むざ／＼とは歸られず。其上行幸ならずんば女帝の噂も廣うなり。世の人口も笑止なり無禮は却つて忠義の道。否とあるなら玉體を無體に供奉し申さんと傍を睨んで立つたりけり。千王今は堪へ兼ね末座よりつゝと出で。ヤア師國とやらどろ國とやらいかつげに喧しい。僧都とは誰がこと。兄弟にもせよ親にもせよ。世を離れたる捨坊主我儘の願ひ事。却つて御遊の妨げし二歳め迄がいご／＼と。身體に過ぎたあごた骨捻ぢ歪めんと飛びかゝるを。親王は御聲を上げそれ制せよと宣へば。公卿の面々取付きて漸々へかしこに押込むる。親王玉顏穩に師國が云ふ所やぶさかなるに似たれども。女帝となき名言ひ立つる世上の噂捨て置かれず。

其上僧都へ立つる道直ぐに行幸を催すべし。今日此所へ來たる事誠は朕が下心。紅葉より猶色深き女の風儀を見そなはし。心に叶ふ者あらば貴賤に依らず召し入れて。后に立てん爲なるぞ。然れば高雄山とても。三月廿一日は女人も山へ詣づるとや。來年の例日を明日へ取越して。我參詣の作善のため女人の參りを赦すべし。近國へ相觸れべし僧都の行力頼まねど。佛法王法二つなき朕が許すと云ふ言葉。世界國土の海山も草木もなどか背かんと。虎の威あつて猛からぬ君子の。道こそ末廣き法に形は。染めながら心は貪欲一の宮幼立より御行跡邪にまします故。押して出家になし參らせ山家の住居朝夕に。無念の焰焚き添へて護摩にふすぼる顏色も。萠黄縅の腹卷に筋金入れたる樫の棒。馬手に掻い込み飛ぶ如くせきに急いたる目の内に。

天地をはつたと睨み付け。詞先帝一の王子と生れ萬乘の位に卽くべきを。胴慾な親心二の宮を寵愛し。左右の大臣媚びへつらひ親王を位に卽け。罪なき我を此如く無體に剃つて剃りこぼたれ。地欝憤遂に散ぜんと時節を待ちて待ち畢せ。今日嵯峨の行幸こそ天より我に讓る所。賺し寄せて害せんため連枝の因みを託けに。詞師國を遣はせしに待てども〳〵歸らぬは。察するところ謀計を關白めに悟られ。からめられしは必定とても露顯の上からは。地討手を待たず逆寄して一戰に勝負せん フシ方々いかにとありければ。地色岩飛の脫天坊霧間の時夜叉始めとして。前後不覺の惡僧ども異議にや及び候と。勇んで中途に駈け向ふ然る所へ師國。競ひ切つたる戾り道兩方はたと行合ひたり。詞僧都怒つて大聲上げ。ヤア臆したるか師國。事延引に及ぶと言ひ親王をも供し來らず。のめ〳〵歸る狼狽者兎角の返答聞く迄なし。直ぐに向つて片端目にもの見せんと駈出づるを。師國縋つて引留め。お急きなされなぬかりはない。拙者が辯舌武勇にて首尾よく當山行幸の。勅諚下り候と仕濟し顏に云ひければ。僧都顏色打解け。さぞあらんと思へども。一大事の競口仕損じたるかと氣遣ひたり。地サア彼奴等が命は寢腐つた天が下は一呑みと。勇み躍れば脫天時夜叉共に浮れていき〳〵と。物にも足らぬ公家ばら糠粉を斬るより易い事。手應へのある相手もがな高名をして遊ばんにと。フシ雜言たら〳〵言ひ散せば。詞師國は頭振り必ず御油斷なさるゝな。親王若くましませども天子の御位備りし。威勢を四海に振はんため結界の地を踏み破り。明日女人の參詣を許すとあるの宣旨こそ。凡慮の及ばぬ御發明。關白もとより智謀の臣舍人に笹目の千王とて勇猛無双の若者彼めを拉がぬ其內は。滅多に天下振られぬとにが〳〵しげに訴ふる。僧都からからと笑ひ。のさばり過ぎた勅諚顏智慧が却つて害となり。身の亡ぶべき前相女人の參詣許すこそ。これ此方の究竟一。地智略を以て討ち取らんに何條仕損じあるべきと。手に取る如き廣言に皆手を打ちて頷き合ひ。天晴智慧の山ばかり芋掘り坊主にあらざれば。げにさも僧都とそやされて。自慢に鼻も高雄山本坊指して三重へ歸らるゝ。フシ大君の。勅をば笠に着て。高雄の紅葉踏み分くる。女につれて男すら貴賤群集の摩合も。咎めず搖ぐ袖と袖。錦の世界ぞ賑しき。地色參詣多き其中に戀と情の色合は。こんなものかと夕顏の昔をかの雪姫は。見おろす程の顏容貌。今日は窶して出立場へ 小オクリ ひらり帽子に抱帶しやんと締めたる風俗も。

浮れて輕き瓢箪の。腰元仲居風呂敷にちよつと小提の手なぐさみ男思ひの氣配りを。フシ行幸の道を慕ひ行く。地色山の麓に御車の轅に凭れふら〳〵と。小居眠りする千王丸退屈らしい舎人役。伽欲しげなる顔付とつか〳〵と側に寄り。懐へ手を差入ればびつくりとして大欠伸。詞扨々づならほされる事。ホウ女房ども。夫の留守の氣儘歩き近頃以て無作法至極。地後生は内でも願はるゝつい拜んで早歸れと。只一口も仕人なり雪姫は打笑ひ。詞ほんにマア心を知つてゐればこそ。添寄りのない物言ひ。物詣は附けたり。女の繪師と云はるゝから屏風掛地の度々に。地櫻は吉野紅葉には高雄の秋を寫せども。目に見ぬ事は覺束なくお許あるを幸ひと。辿る〳〵も參りしが。目馴れぬ山の景色より矢張見つけてお前の顔。眺めて遊ぶが面白い。ハアいから草臥れたちと爰貸してと膝の上。凭れかゝれば突倒し。詞あた見苦しい舌たるい。七尺去つて師の影踏まず。八尺去つて男の顔拜んで居よとは古人の戒め。飛退つて畏れ。フウ仰山な。内證の魂膽は聖人でも同じ事。地こんな處で和いで人に羨りがられてこそ。打晴れての女夫なれ。色ア、ままよ。地色そんなら獨樂しむじやと立退いて小提重。仲居腰元打交り フシさいつおさへつ酌交せば。地色千王じろ〳〵打守りハレいから氣が盡きた。八尺の内二三尺間には大事もない事と。言葉の下よりそれ〳〵〳〵。詞ちつとぞうもござるまい。重ねては道なかで抱付くが合點かヲ、後は後目のまへのたつた一杯〳〵と。地互にわりなき酒機嫌凭れ合うたる袖袂。頭隱せど尾上より還幸なりと呼ばはつて。親王關白僧都迄御下山あればうろ〳〵と。廻る車の前後 オクリ 隱れへかねてぞ

フシ見えにける。地色兼定公聲をかけ御許さるゝ苦しうない。罷り出でよとありければ。ハツト答へて兩人は顔見合せてうぢ〳〵と。フシ玉顔近く畏る。地色親王御氣色麗しく千王が妻雪姫よな。詞風流と云ひ形と云ひ例稀なる繪のたくみ。幸ひ所も高雄山其外古歌に詠み置ける。名所名所の紅葉の色集めて爰に眺め度し。寫して見せよと勅諚ある。雪姫額を地に着けて。詞描き女のすさみ迄召し上げ給はん綸言は。地身に餘りたる嬉しさも。畏多く候と フシ言葉の品も優しけれ。詞兼定差寄りコレ雪姫。勅諚いかで背くべき地即ち是に畫けよと扇と硯賜びければ。ハツトばかりに押戴き。墨擦り流し筆を染め オクリ 一々へ次第に。寫しける。先づ紅葉の名所の其色品を自らが。筆の稽古は青葉なる稲荷の山の若楓木の下。闇のフシ繁みより。更け行く秋の。一入に。

八鹽の末を契りては長くもがなと命毛の。榮を祝ひ書そめける。次に寫すは鏡山オクリもみぢ。重ねの。色々の伊達を仕立つる襟付も。對の白無垢霜の綿。霧を伽羅とも。燻らせて。世に見せ顔の粧を。フシ心にこめて畫くなり。さて其次はかけまくも。かしこき。神の愛で給ふオクリ龍田の。川の波の面渡らば中やたえなんの。御製もげにや一樣にくだし掛けたる唐錦。一際目に立つフシ眺めとかや。さて又爰に。名にも似ず。笠取山の村時雨盛りて零れてさつ／＼さつと。絶間に。殘る虹よりも。朱を見せたる下紅葉オクリ戸無瀨の。瀧の折掛けてめぐり流るる粧は。雪ならねども山の帶。風にほどけて日に晒し結び。止めて。止まらぬ秋の行方ぞ惜まるゝ。分てゆかしき風景は。定家卿の住み馴れし昔を爰に小倉山。フシこれ敷島の道しあり。妻呼ぶ鹿も

紅葉散る。跡を尋ねてかいろと鳴くはしほらしや。さてしほらしき。山里の名所名木とり／＼に盡きぬ。水莖あらましを。かくとばかりに□□(缺字)て御前にこそ差上ぐる。地色親王叡感淺からず□□□(缺字)て被物。數々積る雪姫は御暇下されてオクリ家路にへこそは歸りけれ。地色然る折節時ならぬ撞鐘しきりに呻り出し。大地も砕け落つる音フシ山家崩るゝ如くなり。地色各是はと聞く所に山をくだりに百濟師國。息氣を切つて駈來り僧都の前に畏り。詞扨も不思議の事候。當寺の撞鐘故なきに火焰となつて失せ候。いかなる障碍あるやらん急いで歸山遊ばせと。事ありさうに訴ふる僧都ハツト仰天顏。地コハ一大事ござんなれ忝くも此鐘は。宇多天皇の勅願にて橘の廣相。菅原の是善卿藤原敏行。言葉と筆を殘せし故世に三絶と稱せられ末代の靈物。今退轉に及ぶ事天

下の凶事を示すのか。佛法破滅を告ぐるのかあら氣遣はしの變災と。言ひもあへぬに山上山下太鼓を鳴らし法螺を吹き。脫天時夜叉雨惡僧與力の大衆鑓長刀。得物々々をひらめかし遁さぬやらぬと聲々に。親王目がけ取卷いたり。脫天坊眞先に進み出で。怒れる眼はつたと見開き。詞ヤア／＼親王よつく聞け。當山神護寺の御事は弘法大師の開基として。眞言秘密の道場。六百餘年の掟を背き天位に任せ時ならぬ。女人の參詣許せし事中興文覺是を怒り。靈魂我に入代り邪の政正さんために來りしぞ眼前思ひ知らせんと。罵りをめく有樣はフシ恐し。なんどもおろかなり。地色衆定少しも騷ぎ給はず。詞ホホウ文覺の魂とて新しい事承る。法の掟を背くにこそ。一年一度は許されて女人の參る道場故。其當日を今日に取越せとある勅諚は。大善根の結緣佛

神感應あるべきに。物咎する文覺坊現世におはする其時も。頼朝に頼まれて平家の世をば覆し。又六代に頼まれては二度源氏を亡さんと。謀叛好きな癖あれば魂魄とても其如く。又何者にか頼まれて叛逆一味の企てと。睨んだ眼は違ふまじ。サア眞直ぐに白狀と 地理正しき一言に。返答ほつと行當る暫くしらけ居る所に。後に控へし師國俄にうんとのりかへり。悶絶したる有樣にてやがてむつくと起き上り。詞方々知らずや我はこれ。當寺建立の本願人和氣淸麿が靈魂なり。そのかみ仕へし孝謙天皇行跡無道にましまし。罪なく遠流に處せられたる欝憤今に止む時なし。根を同じうする女人の參詣。許して靈地を穢させし。遺恨は親王汝にあり。地立ち所に懲しめんと フシ氣色込うでぞ挑みける。地色千王焦つて飛んで出で進む惡僧五六人。引掴み／＼投げ散しつつと立ち。詞ヤア兩人のへろ／＼怨靈。某を見知つたか。日本無雙のわやく者金平が幽靈。娑婆の騷動聞くよりはや八萬地獄を脛にかけ。でんぐりかへりして駈付けた。鬼友達と附合ふ故人食ふ術も知つてゐる。地おのれ等動く／＼な片つぱし坊主首を引拔いて。鼈料理の生醬油。色しゆつ／＼しゆつと 地云はせんと。ふんぢがつたる有樣は フシ閻魔の從弟も斯くやらん。地色僧都は當の違うたる顏青ざめてきよろ／＼と。氣色を直し追從聲天晴れ健氣な若い者。詞手柄次第に何ぼうも首引拔いて遊ばれい。地愚僧は寺に立籠り靈魂鎭めの護摩を焚き。御代は長久親王の警固を祈り申さんと。挨拶口も跡や先 フシ山上指して逃げ歸る。地色千王可笑しさたまられず。詞ア、皤海殿手が惡い。俗は熱火を子に拂ふ。僧都は惡事を弟子坊に塗つて／＼塗り坊主。地まめな足元逃げ振りと フシ大手を打ちて笑ひける。地色時夜叉進んで下知をなし物な云はせそ打ちひしげと。切先揃へて切つてかゝる。詞ヲ、面白し／＼。歌もみぢ踏分け鳴く鹿の ナホス地胴骨肩骨膝頭。藥食ひには重疊と大手を廣げて 三重へ追ひ廻す フシ中にも猛き。脫天坊。組みにかゝるを事ともせず目より高く差上げて。詞文覺坊と名乘れども誠はそでんかく上人。地精進肴に取らせんと。敵の中へ投げ付くれば。微塵になつて失せにけり。此勢ひに恐れをなし四方へ別れて逃げてげり。地色エ、臆病なる惡僧ばら逃ぐるは科を悔ゆる道。許すは仁愛深き道道の道たる親王の。還御を急げと御車に入るさの月の都の方。輝く威勢は八洲の外。疊込んだる兼定の智慧の明玉千王が。武勇は四海を覆ひたる天を。翔りし斑足王。山を劈く龍伯公。それよりも名は高砂の松の操に

準へて忠臣の種。と榮えける。

第　二

地孫眞人が三養にも思慮寡きを第一とす。然るに富仁親王は皇統萬機の政。民を養ひ世を惠む。古賢の教文の道夜晝絶えぬ御工夫に。御心疲れましますにや。盛りの花の顏ばせも。フシ稍窶れさせ給ふ故。地色公卿の面々とり〴〵に叡慮を慰め申さんと。絲竹の遊び舞樂の興夜の大殿の添臥に。女御の入内六宮に更衣の袖を並べても。君御心傾かず鴛鴦の褥もいたづらに。病鵲の明暮とスヱテ震襟穩かならされば。地智化の老臣是を歎き。三臺五門四座七辨各御殿に出仕あり。地色かゝる所へ蟠海僧都心にあらぬ袈裟衣。苛高の數珠仰々しく殊勝つくつて參内あり。兼定公に對顏し。互に行幸の下心胸と胸とにありながら。表は慇懃やはらかに。詞遠路の御行駕御連枝の御慈愛深くまします段。千萬感じ入り候。ヲ、さればされば。親王寶祚長久と日頃に念ずる法力故。淸麿文覺兩人の靈魂をだに鎭めしもの。況や當座の邪氣なんど一祈りにてさまさんと。地はる〴〵參着致したりさは云へ當卦本番の。星の祟か氣遣はしと。天文の書を取廣げ算木を並べ忝しく。詞ム、當年は丑の年。時は十月生は辰にて金性。ハ、ア先づ辰は陽にて天子の形。丑の年の陽に應じ金性水と相生し十月の陰を自得す。陽有餘の德に位し。地男子は病難の憂なし。女は當月陰の運に辰の陽氣を閉づの大病。踏み違へたら危物。世上の噂が僞りか皇子と云ふが實正か。二つの迷ひに蟠海は殆んど當惑致せしとフシ眉を。ひそめておはします。兼定につこと打笑ひ。詞吉左右の占の面先づは安堵仕る。御惱は追付け鎭らん。地皆々悅び給へやと共に壽なし給ふ。僧都顏色せき上げて。ア、とぼけまい諍ふまい。詞忝くも易道は伏羲氏の書してより。孔子の天命佛神の。冥慮を照す鏡の面男子には病難なし。地それに違例とあるからは女帝には極りし大切の儀を僞つて必ず後悔致すなと。かさに掛けたるはね袴。フシ腰のさするぞ是非もなき。地兼定怒りを押鎭め。詞コハ心得ぬ御咎め。憚りながら占形の御傳授いまだ足らぬ故。總じて易は變易とて卽時の機轉が肝要たり。八卦の面に現はれぬ御惱は四百四病の外。地戀風といふ御惱み疑はしくば御容體。伺ひしろし召されよと寢殿に差寄りて。玉垂半ば卷き給へば。親王現なく心は餘所に空蟬の。霜待つ梢枯れ〴〵に。寄るべ涙に忍び音を。スヱテ伴ふ枕押しやりて。稍起直らせ給ひつゝ。明暮御身を離されぬ繪馬取上げて打詠め。フシあ

ら美しやしほらしや。物言はず笑はねども。其俤は生寫し天皇の身と生れても。叶はぬものは戀なるよな。楊貴妃却つて唐帝の思ひ李夫人去つて漢王の情。それは遙けき別れの道。是は間近き芦垣の。同じ都の内ながら。餘所に許せし下紐の。解けて歸らぬ春の雪。花踏み散す。鳥ならで。妹背語らぬ諸翅。憎やねたしや怨めしと。包むに堪へぬ御歎き。哀れはかなき風情なり。ハア一筋に思ふまじ。後朝に世を恨み待宵に身をかこち憂きつらい目は戀の科。心長う寢るこそは夢にも契る緣ぞと。衣引被き臥し給へば。御簾さらさらと下りにけり。蟠海案に相違して稍暫し差俯き。王子と云ふには疑ひなし。非道の戀慕に迷ふこそ。我叛逆の元手よと。獨笑して打頷き。ヤア秉定。加持行力を賴まねども是程輕き病をば。何故療治致されぬ。唐天竺にもあらばこそ都に住める女繪師。今迄油斷致されし心底いかゞと怪しめる。關白嘲笑ひ。イヤ御諚とも覺えぬ儀。彼には雀目の千王とて慥な夫ある事は。申さねど御存じ。君にもさすが儘ならぬ。浮世を佗びての御悩み不義と見ては臣として諫をこそ入るべきに。女を奪ひ勸めよとは理不盡のお指圖と。理を正して述べらるゝ。僧都頻りに打笑ひ。定木を踏まへてくど〳〵と胸を焦すは下々の業。氣儘に募るが天子の樂しみ。先例を尋ぬれば。白河の院は源の。仲宗を遠流せしめ。其妻を后に備ふ。祇園女御是なり又。永曆の帝には父天皇の女御になづみ。二代の后に立て給ふ是等さへあるものを。賤しき奴の妻なんど勅諚として召されんに。誰を憚る事あらんと傍若無人云ひ放す。秉定も笏取直し。入らざる貴坊の先例だて此方より申すべし。往昔唐の太宗は鄭仁基が娘を戀ひ。后に備へ給はんと入內の宣旨給はりしを。魏徵諫めて此女。陸氏に緣を結びしと申上ぐれば忽ちに。宮中を出されし。是ぞ賢き世の例。よい戒を敎へずして惡しきを手本に引かるるは。國を亡す御思案かと。云はせも果てず　ヤア猶以て愚かなり。日月あつての世界なり。天子あつての政道よ。元を立つるは親王の一命。纔か雪姫一人を無道なりとて勸め得ず。焦れて必死に至りなば仁義はさて置き天下は闇。太子とてもあらされば差詰め此蟠海を。還俗せよと勸むるとて。翻すべき心と思ふか。勿體なや〳〵。一度遁れし塵の浮世。望むところ更になし。天津日嗣の絶えんこと。悲しうないか秉定。但し叛逆たくむかと。雜言云へば關白も顏色變つて聲を張り。すはと云へば手を出す御坊こそ

悪心よ。地いや其方が非義者と。フシ争論次第に相募れば。地親王御枕を上げさせ給ひ暫し〳〵と押鎮め。詞四海の誹を憚るは臣下の忠義と云ひながら。地天下を庇ふ蟠海の志こそ嬉しけれ。片時も早く雪姫を禁裡へ召せよと勅諚あれば。公卿の面々顔見合せ　フシ呆れて。答ふる者もなし。地色僧都一人したり顔。汝如きの愚痴者と論ずるは無益なり。衆生済度は佛の慈悲。無體の戀路取持つは人を助くる行者の願力。元より名利を厭はねば揶揄とも太鼓坊主とも。笑はゞ笑へ云はゞ云へ。雪姫住家へ立越え縦へ夫の千王丸。孟賁夏育が勢あるとも。我また不動の縛をあざなひ。四種三密の金剛力にて引立て來るは今の事。心安かれ親王。氣遣ひするな公卿等と形は随縁眞如の有様。心は修羅の早飛脚焦つて。こそは　三重

狩野雪姫道行

大ヲ弓張る月の入る方や〳〵我が隠家と定めん。詞扨も笹目の千王は。親王非禮の機に殉じ。蟠海我が家へ來りしを。打擲の上追ひ返し。重ねて討手來るを待ち受け。腹掻き破るは易けれども。多年の忠義やみ〳〵と。泉下の土に埋んより。身を退きて日月の　ナホスフシ明けき世を。松のとや。夫婦諸共旅姿心の駒に鞭打たす。足の乗物手の奴。杖と草鞋に案内させ。住みこし都を立別れ。フシ近江路指して出でて。行身の有。オクリ様こそ。是非なけれ。名も逢坂の關ならば、追手を防ぐ辻占と女心に喜べば。夫は無念　フシ数々を。跡に見返る。山々の。縁を添へて麗しく。本フシ目馴れし我に餞と。立並びたる心地して。物に觸れても忍ぶ川アノ芦浦に。波風の立たで二人が行末も。猶守山と堅め合ひ。手に手を取りていそ〳〵と。袖振る肘振る腰を振る目狭き旅の。物憂さも。戀にはいとゞ　一中節野洲川に。群立つ千鳥友鶴の。あさる間もなく瀬を早め駒の渡りや徒歩渡り餘所にや人を　ナホスフシ三上山。峯よりおろす　スエテ榊葉は。猶萬代の數添ふる。挿頭の幣と吹き落ちて夫の鬢や我が髱を。長地打拂ひ又撫で付けてそゝけを直す鏡山曇なき世を喜びても。いとゞ思ひは果しなき。野路の篠原篠竹の　小オクリしんき。しんきのふし込めて汝も憂目を知り顔に續く茂りも長等山。打過ぎ行けば渺々と。向ふに清き月出島。歌堅田浦よりコッチへお舟がお舟が。來るとヤッシッシ。詞艪櫂を揃へて押せヤッサ。琵琶の水。海月を見しよオホンしつとん。オホンしつとん〳〵　ナホスフシ空艪の音のよさと。旅の道草。老曽森。小石交りの露霜の。裙に纏はれひ

たく〳〵。避けて急げばしと〳〵と歩み苦しき足並も。波のうね野やまくず野の。荻も薄も刈萱もおのれ〳〵が。染模様。皆脱ぎ替て木枯の ナホス 朽葉の錦装へる花の縁と。見返れば。玉のお山の村時雨さつと降り來る一しきり。つれなき松もおのづから。馴れてや近き フシ 床の山。岩がね枕苔筵。臥す猪鹿の音諸共に色を込めたる優景色影恥かしや名取川。契は深き中々に心の憂さと。較ぶれば。猶も隔つる。二面見せばやこの手柏原泊も旅の習ひとて。二人が中に面白い夢も見果てず醍井の。スヱテ 流れも清き道のべに暫く。語らひ フシ 休みける。

地 かゝる所に師國時夜叉大勢引具し駈來り。詞 ヤア天罰知らずの下郎め。勅を承る僧都に向つて惡言吐き。地 打擲したるあぶれ者いづく迄か遁すべき。命惜くば女を渡せさないと首が逐電せん。何と何とと罵つたり。詞 千王から〳〵と笑ひ。性懲もない腕ずんばいおのらが主人の梟入が。無體の頭たゝきし故拉碎かんとしたれども。出家の身を憚つて土足を上げて痃癖元。地 そつと撫でたるぶんの事慮外もせぬ落度もない心ありての我が出國迄つた貸に片端。握拳が所望かと捲り上げたる腕毛は。綱が鋏を摑んだる フシ 茨木童子も斯くやらん。さしもの同勢怖れなし互に讓り〳〵合ひ。進み兼ねてぞ守りゐる。時に途の跡よりも兩人止れと聲をかけ。雪姫が父膳手織部逸散に馳せ來り。詞 ヤア粗忽あるな師國。貴殿は僧都の仰を請け私の遺恨なり。我は天子の勅命にて是迄追手に向うたり。若し此方の手に餘らば其時加勢を賴むべし。先づそれ迄は退いて見物あれと押隔て。やれ狼狽へたり夫婦の者。名に負ふ笹目の千王とて武道を磨く身を持ちて。地 堪忍を辨へず漫に邪を立退くは。女が惜いか追手がこはいか。心底いかにと尋ねける。詞 千王丸聲荒らげ。討手といひ剰へ男の口から不挨拶。女の五疋三疋に拝打たるゝ男でない。天子に戀慕せらるゝは天晴果報の雪姫。參れと言へども頭を振り暇を吳るれば死なうとほざく。地色 勅諚背けば討手の沙汰刃向ふ時は朝敵同然。天子に非義の名も立てず夫婦が節義も立てたさに。いづくになりとも影隱し世上の鳴を靜むるなり。聟の男の遠慮はない入らざる止立致されなば。椽麪棒を掉られんと フシ 切刃を廻し怒りける。織部騷げる氣色もなく。詞 汝が申すは若氣の思案。普天の下卒土の濱落着く處皆王土。君に背いて天地の內いづくに足を止むべき。粗忽の至りと言はせも果てず。ハテ日本に住まれずば。地 足に任せて唐高麗鬼ケ島へもつつ走り。廻一つで働いても夫婦が

口は養ふとえせ笑ふ。フシてぞ居たりける。織部いらつて聲張上げ。詞事可笑しき言分三千世界を乗越して忉利天に至るとも。朝敵不義の兩人を匿ふ者のあるべきか。覺悟極めて立歸れ。イヤ朝敵とは謀叛の輩。無道の君を見限つて國を立退く例はないか。ヤレ勿體なや親王を假にも惡しく言ひ散す。舌は八つに裂けぬべし心を鎭めてよつく聞け。國の主の御身として。御惱になる程雪姬を戀ひ慕はせ給へども。地道ならぬ義を辨へて押して召さるゝ宣旨もなく。關白其外公卿達それと色には悟れども。勸めんといふ臣下もなく君臣共に素直なる。惠は夫婦が身に取りて冥加に餘る事ならずや。詞然るに蟠海謂れなく取持ち顏に立越えて。汝に對して無體の所望邪とも狼藉とも。我と我との仲ならば存分に致す筈。されども僧都何人ぞ先帝の一の御子。地色君御連枝の御身體下衆の土足に穢すといひ。勅を背いて立退くは朝敵にあらざるか。サア返答と詰掛くる。詞千王丸ぎよつとして。ハア南無三寶しなしたり。地色生れ付いたる一轍にて。思はず知らず某は朝敵の名を取つたるか。エヽ後悔や悲しやと鬼を欺く日の內に。涙はら〳〵男泣き大地にどうど身を投げて足摺したるばかりなり。親と夫の諍に。心も消ゆる雪姬は。互の胸を推量り。我身の上を思ひやりかつぱと伏して。泣き叫ぶ。織部も共に涙ぐみ。ヲヽことわりなり フシ道理なり。君も哀れと思召し關白公も兎や角と。御思案を廻らされ今改めの勅諚あり。歎を止め承れ。詞綸言の旨別ならず。親王わりなき好色を晴け難なき御餘り古へ美人の譽ある小野の小町が俤を。寫させて見るならば色品ともに雪姬が。地姿繪よりは勝るべし增す花あらば今迄の。戀は忘るゝものぞとて叡定是を承り。道の工に云付けて繪に書き又は木に刻み。數多叡覽致せども御心に止まらず。詞弘法大師の遊ばせし玉造といふ文に。小町が盛の顏ばせより老の波寄る腰付迄。少しも變らず書き記し寶藏に籠め給ふと聞く。地雪姬筆に妙なる上夫を救ふ誠をば。佛神に祈りても高野の御藏に納りし。正しき小町が姿繪に少しも變らず寫すべし。日限十日が其間人質として千王丸。獄屋に繋ぎ置き給ふ。事無う繪圖だに成就せば。親王戀慕を思し切り千王丸も御免あり。夫婦に下し給はるべし書現す事叶はずば。夫も罪し其方を召仕へとある勅諚なり。汝も世に知る繪の名人仕果せてあるならば。夫婦が仲も變りなく第一には親王の。惡名出さぬ無二の忠義。急いで勅答申すべし フシいかに〳〵と勸めける。雪姬はつく〳〵と聞くに思ひの結ぼ

れし。糸繰り出す涙の露貫き止めぬ顔を上げ。思召しても御覽あれ名高き畫工の人々さへ。小町が顔に劣らずと寫し得難きあらましを。拙き筆にいかなれば十日が内はさて置いて。我黒髪は白妙の老になる迄案じても。見ぬ俤を中々に。何とて畫き出すべき。と云うて背かば忽ちに夫は殺され此身をば。宮女の數に召されんとは無體至極の勅。十善天子は下々を惠み給ふと聞くもの を。此難題は胴慾や。頼もしげなき世の中としやくり。上げてぞ泣き居たる。見るに憂目をますらをが彌猛心の千王も。齒を喰ひしばり眼を張り。ハア力なき次第かな。樊噲項羽と戰ふとも勇氣弛まぬ勢ひも。綸言といふ兵にはほうど矢先を折られたり。無念にあらう雪姫貞節は身に逼る。其上及ばぬ難題も我に連添ふ故なりと。思へば不便の女房と打萎れたる有樣は。猛きに餘り哀れなり。詞織部言葉を正しくし未練なり千王丸。雪姫も又腑甲斐ない。地知らずや松浦小夜姫が夫を慕うて石となり。又藤原の佐國は花を愛して蝶と化し惠心僧都は肉身の胸に蓮華を生ぜしも。一心の念願力知らぬ天竺見ぬ唐。工夫の上に歴然たり是を悟つて末代迄。譽を殘す氣はないか。何と〳〵とたゝみ掛け理せめて言ひ立つる。雪姫はつと打頷き歎きに心奪はれて。淸き誠を忘れたり世界の人の子を生むにも。初めの程は其形定かに何と定めねども。辛抱よりして悉く續き備はる血筋の繪本。此理を種として小町に變らぬ美人をば。寫し出さであるべきか氣遣ひあるな我夫と。今迄萎む面差は。やがて笑顔に返り花。直ぐに小町が姿繪と フシ思ふばかりに美しき。千王大きに悦んでヲヽ出來したり頼もししお主が筆の働きで朝敵の名は殘りなく。繪の具の下に立隠れ忠義の道に歸らんと。勇み進んで立上れば師國時夜叉聲聲に。詞コレ召人めに繩を打て。地逃すなやるなと下知を受け取つた〳〵と駈寄つたり。詞千王眼に角を立て。コリヤ蛆蟲ども何をする。坊主が討手は恐くない。勅諚故に立歸れば逃げも走りもせぬ男。窮屈な目は身が嫌ひだ。へろ〳〵繩の千筋より千王が一言は。地色八重の鎖も同然跡へさがつて供せいと反打掛けてのつかのかイザ〳〵お先へ舅殿。女房どもも來い來いと手を引き袖引き引き連るゝ。一挺の弓二挺掛墨と硯の戀仲は。眞實眞書極彩色。織部が情の本繪より。唐繪に稀な日の本の昔に照らす玉造。小町が姿寫繪と普く。世上に廣まれり。

第三

地水は人に近うして而も人を溺らせ。徳

は馴れ易うして而も親み難しとかや。元より無道の蟠海僧都天位を輕しめ逆威を振ひ西嵯峨の別院を内裏造に建て並べ。身の天罰を顧ぬ冠の下の鬢鬘。法衣を解いて袞龍の袂けやけく玉扆に脊き。自ら天子と稱ずれば。從ふ所の惡僧迄。假髮頭とり〳〵に。おのれと登り官加階。護摩堂守の關白職。お札配りの左大臣 地 奉加勸めの權中將。旦那あしらひ頭の辨。お福所の 尙侍。常香守は衞士の役。伴の御奴朝淨め。鐘撞き坊が御垣守。其役役を請取りて。木地が丸さに冠を。滑らかすやら束帶の。裾を踏まへて轉ぶやら。笏で頤播磨瀉。船に醉うたる風情にて フシ 騷々しくぞ。列座する。地色 蟠海緩緩と空嘯き。げに幸ひは招くに來る。巍巍蕩々たる禁裡の體粧。地 追付け大望成就を待ち設けたる前表と。貪慾先立つ廣言は フシ をこがましくも憎てなり。地色 時夜叉席を抽んでて。詞 君には何時迄うかうかと時節を見合せ御油斷ある。衆徒野武士等を始とし數千騎擧つて合戰を。今や今やと待つ所。急いで京都へ御出陣然るべうとぞ勸めける。ホヽウそれこそ彌猛に思へども。小氣味惡きは千王丸彼奴を殺さんばつかりに。かの高雄での仕組より段々枕を割り續け。どうやら斯うやら只今で牢獄の身となしたれども 地 未だ命のある内にすはと言はゞ出しやばつて。又惨い目に出遇はんかと思ひ出すさへぞつとする。先づ〳〵彼めを殺すの計略仕上を見よと云ふ所へ。地色 師國はこと〳〵しき裝ひも顏に乘物を。桐油にしたみ細引掛け下部に舁かせ殿中の。小暗き處におろし据ゑ。詞 御大切の召の者首尾よく伴ひ候と。地 聞くより蟠海。詞 ヲヽ大儀大儀。地 早々是へ引出せ承ると立ちかゝり。駕の縛め切りほどき罷り出でよと戸を叩けば。フシ あいと答へて立出る。男の年は三十の上は二三度水淺黃。木綿袷のしよぼからげ彥惣頭巾の鬢先に。早や職人と知られける。邊を見廻しぎよつとして。あなたへ走りこなたへ行き。立騷ぎ横手を打ち。詞 面妖な處へ來た。わけも云はずに道中で乘物へ拾ひ込み。はつと思うた其後は闇路を辿ると覺えしが。悲しやおれは死んだげな。あれ〳〵あそこに閻魔樣御慈悲でござる十王樣。地 娑婆へ歸して下さりませ。老いたる母や女房がわしが手一つまぶるとは。言はずと見る目嗅ぐ鼻のお取合せもあらう筈。參らで叶はぬ道ならば衣裳の仕覺もあるべきに。頭巾を着たる罪人は。ためし稀なる我身やと フシ 震ひ佗ぶるぞ可笑しけれ。地色 師國も打笑ひ。詞 成程合點の行かぬ筈。忝くも爰は禁中。あれに御座るは富仁親王。汝を御殿へ召さるゝ事世間の聞えを憚る

故。斯く計ひて連來れり。少しも恐るゝ事はない。宣旨の趣とつくりと呑込ませいと云ひければ。ハア扨は妾が内裏様 地 結構なやら恐いやら未だ性根は落着かねど。お内裏様のお手づから煎じ茶を呑むなどとは。凡慮の外の仕合せ。とてもの事に十粒程供御でも浮し給はれと。フシ 頭巾を取つて畏る。地色 蟠海遙に聲をかけ。詞 ムヽ、人形作の名人。左の甚五郎とは汝よな。最前よりも様々と痴をつくすは作物。以前は由ある武士の由。魂を見居けで大切の所望あり。一通りを語るべし。世の噂にも聞きつらん。朕雪姫が姿繪に戀慕の思ひ遣瀬なく。后に立てんと計れども千王といふ夫が邪魔。彼奴を害せん其爲に。難題を言掛けしは。高野大師の御筆に小野の小町が姿繪を。末世の鑑に殘されしは寶藏に納りて。天下に一人も見知らぬ圖。それに變らず寫すべし十日を限りて出來ずんば。雪姫を召上げ千王を誅せんと。のつぴきさせぬ魂膽よも書くべきとは思はねども 地 一器量ある女繪師。自然に寫し得る時は我戀叶はぬのみならず。天下の人の物笑ひ細工に於いては汝また。世に知られたる者なれば七日が内に先達つて件の形を刻み出し。雪姫に鼻あかせば朕が望みも叶ふと云ひ。汝も細工の名を擧ぐる褒美は望みに任せんと。フシ 誠しやかに語らへば。地色 甚五郎思はずも二度びつくりの身の難儀。生れ付いたる正直者なか〳〵不義には傾かじ。何卒此場を言逃れ首尾よう宿に歸らんと。騒げる胸を押鎭め。詞 職人連を公へ召出さるゝ有難さ。冥加の程も辨へず勅諚違背致す段。畏れ多く候へども。甚五郎めが細工の儀は師匠も取らず教へもなし。地 美人に三十二相とは音には聞けど目には見ず。滅法界の當仕舞子供の泣くを紛らはす。慰む業に候へば。權者の筆の意氣込を。千日千夜寫すとも叶ふべき儀にあらざれば。詞 御赦免願ひ候と謹んで平伏す。蟠海大きに怒をなし。ヤア表裏ある拔け口。京童に至る迄細工は左の甚五郎。繪師には狩野の雪姫と互角に立ちし名の譽。彼めは繪圖を請合に。おのれは辭退致す事朕が詞を侮るのか。雪姫夫婦を庇ふのか。所存を聞かんと迫りつくる。甚五郎頭を上げ。御不審は御尤も。小町が誠の顔形我が知らねば雪姫も。見ぬ事ながら畫かんと領掌せしは貞女の道。十日を限る夫の命金輪際迄助けんと。思ひ込んだる一念こそ天理に通ずる工夫の柱。地 是を基に取付けば小町はおろか目に見えぬ。金命鳥でも寫すべし。甚五郎か身に於いては工夫の柱候はず。其上一人の老いたる母三日以前に何者か。勾引されて行方なく洛中洛外夜晝

と。足を空に尋ぬれば魂は早や有頂天。鉋取る手も覺えずと聞くより蟠海聲を上げ。ヲヽ面白い〳〵。地急いで召人引出せ承ると一間より。頭の雪も溶けやらぬ縄目より猶見る目憂き ヲクリ老のへ足取フシ弱々と。やれ甚五郎母人か是は〳〵と打驚き走り寄らんとする所を。師國共外惡黨ども眞中に駈け塞がり。詞推參至極の下郎め。大事の宣旨を蒙りて勅答もせずのさ〳〵と。召人に立寄らば目に物見せんと極附くる。甚五郎氣色を變へ。こは心得ぬ人々かな。老いたる母にいか程の罪科ありて其如く。縛り絡げて置き給ふ。君邪にましまさば諫を云ふべき方方が。共々跳り狂はるゝは君臣共に世は既に。地道なき國となりしよな。あはれ昔の武士ならば天子であらうがお公卿でも。片端より斬散らし母の供して歸らうに。町人の身の悲しさは小刀一本貯へす。右の腕は叶はねば心ばかりの羽抜鳥。無念の我や口惜しと。慮外も身をも顧ず。フシ罵りわめくぞ道理なる。地色蟠海はしたり顏。詞ホヽ、嘸あらん〳〵。兼々親に孝なる由先だつて召取り置く。是を汝が工夫の柱。なんと違背はなるまいが。返答いかにと迫り付けられ。地甚五郎一言の答も出ず胸輻り。道を歪めぬ墨曲尺も兎や角狂ふ有樣に。かしこへどうど居坐つて スヱテ身悶へ。したるばかりなり。母も涙にくれながら。ヲヽ、道理やなことわりや。地因幡藥師へ參詣し。その歸るさを大勢に取圍まれて今日三日。憂目に遇へる此身より夫婦の人が泣き焦れ。尋ね惑はんいとしさに命の内に今一度。顏をも見せて死に度いと願ひし神の利生にて。思はぬ對面遂げたれば。フシ此世に心は殘らぬぞや。地色只今聞けば自らが召し取られしは其方を。頼まん爲の下心世に大切の詔。輕々しくも請合うて折角作り刻んでも。お氣に合はねば身の恥辱。お役に立てば雪姫が貞女の道を妨げん。人の歎を身につみて未練を出すな甚五郎。親子の因夫婦の義理いづれも重き事ながら。他人の誹が恥しい若木の末を枯らすなよ。はや流れ行く老波の母をいとふな庇ふなと。言葉を肅くし氣を配りフシしやくり。上げてぞ泣き居たる。地色途方涙の甚五郎やう〳〵と顏振り上げ。今に始めぬ親の慈悲。憂目の中におはしても。子を思うての御教訓。あら勿體なや忝なや。左程恩愛深き程猶天罰が恐しい。詞いかに貧苦を致せばとて。夫婦が代る〳〵にもお供に添うて歩きなば。地斯樣な事はあるまいと女房どもがぐどぐどと。悔みては泣き云うては泣き。泣くを見兼ねて相借家。お町衆迄手分してわしは今日稲荷山。深草邊を尋ねしにあの

侍に出逢へばこそ。存じも寄らぬ御對面いまだ盡きざる親子の縁。差當つたる御難儀を救ふより外世の中に。義理も道理も無益ぞと。思案極めし顔色に母はいよいよ氣をせいて。詞ヤレ狼狽者卑怯者。おぬし今こそ町人なれ。先祖の武士の名を汚すは。地不孝の上の不孝ぞと。母は子故に身を捨つれば子は又母を痛りて。誠にせまる憂き涙 フシ心の玉を貫けり。地色蟠海焦つて大音上げ。詞よしなき憂に事延引母が生死はおのれ次第。孝を立つるか義を守るか。ぬかせ〳〵との〻めけば。地思ひ詰めたる甚五郎。詞ハア畏り奉る。常々親を養ふも此手に得たる細工の道。孝行のため君のため念力を以て七日が内。刻み申さで有るべきかと フシさも潔く云ひ放す。詞イヤ〳〵何とも呑込まぬ。當座の難を遁れんとは面魂に顯れたり。僞りならぬ誓を立て。コハ曲もなき御詞。甚五郎めも其以前武士商賣をせし時は。不義非道には傾かねど今町人となつたれば。仁義禮智の四つ寶は拂ひ仕舞うてさつぱりと。地新銀賣の細工人小刀冥利此方に。少しも僞り候はぬが疑はしきは御方々。詞内裡々々と宣へども來りし道を覺えねば。重ねて母を受取りに地いづくを指して參るべき。證據をたべと望みける。地色蟠海暫く思案して。地裝束一重召し出し下々なれども噂にも。天子の服は聞き及ばん。詞是を後日の證にせよ。今日より七日に相當らば勅使を母に相添へて。地汝が宿に送らんとさもありさうに欺罔れば。甚五郎立寄りて見れば袞龍天子の御衣。ハツトばかりに押戴き玉の御階の案内も。知らぬ下郎の冥加なく兎角疑ひかけまくも。忝しや勅諚を何しに背き申さんと。巧にふはと乘物を。包む桐油の神ならぬ身の行方こそ三重へ果なけれ。返せや〳〵お祖母をかやせ。甚五郎をかやせ。フシかやせ〳〵の。地色太鼓鉦。尋ぬる妻の心さへ。闇に礫の當所なき行方を照す小提灯。骨惜みなき相借家頼めばほんの杖柱棒になる迄足限り歩けどあるか白雪の。逢はで今宵も明方に。フシ打連れ我家に歸りけり。地色涙ながらに女房はマア〳〵皆樣忝ない。夜の明くる迄うと〳〵と駈廻つての御懇切。其甲斐もなき悲しさと。スヱテ袂絞れば聲々に。詞ヲ、道理々々。祖母樣といひ甚五郎。地二人ながら見えぬとは並大抵では泣き足るまい。こちとに禮は及ばぬ事。懇仲はこんな時。とても尋ねに出るからは一人も二人も同じ事。隨分探し歩くのに逢はぬはどこへ摑んで往た。大江山の鬼神でもお祖母に無心は云はぬ筈。年寄來いといふ程に鳩の峰へも飛ばれたる。甚

五郎はてつきりと源五郎狐へ入婿。大和の方を尋ねたら　フシ知れるであらうと笑ひける。地色女房は餘所事の耳へ入らねど愛想げに。お宿の店の開く迄は皆寄つてたばこでも。茶でも参つて下さんせ。詞サレバノ。亭主の留守に大勢の。頭數を押込んでお茶爭ふではなけれども。地忘ぢや参らうと皆門口に來かゝりしが。ヤア何やらあるぞ提灯と。立寄り見れば是はさて絡み付けた捨乗物。合點が行かぬと詞の下。詞こりや女房ども。湯でも水でも一口と。地聲は紛はぬ甚五郎。ヤレ戻つたはそれ〳〵と手ん手に細引ひつたくり。桐油捲ればすつと出る冠装束きらめきて。見た事もない身の有様女房初め皆の者。ためつすがめつ打ちまもり。甚五郎には極つた形が一圓呑込まぬ。様子はどうぢや昨夜から　フシどこに居たぞと咎むれば。地色さあらぬ顔にえせ笑ひ。詞ナントきついか〳〵。美しうてたまるまい。ちつと吹聴仕ろ。さる所の神主に祭道具の貸賃。壹貫五百ねぐさになり何時でも留守を使ふ故。昨日は時分考へて案内なしに臺所へ。ずつと這入れば幸ひと夫婦酒事最中の。眞中へのし上り。人には損をかけながら。こりや御榮耀でござるのと。憎體口に當付けられ。地そこらが流石長袖ぢや。赤面してそつと立ち簞笥の中から此装束。前に置いて手をつかへ。詞銀子と云うては當分ない代りに是をと聞くと早や。地變改のない内に取つて着して思ふやう。先づ此形で二三日店先へ出て雛の看板。それから跡を切り碎けば芥子人形が六七千。十層倍の利徳ぞと飛付く心をじつと鎮め弛をくれぬねだり聲。詞神職の身を以て尾籠至極のなされ方。神は非禮を受け給はずなりませぬなりませぬ。地ならぬ〳〵と一越調そこら四五軒鳴響けば。筋向の醫者坊が。藥研片手に走つて來て。どうぞ了簡遊ばせと詫びればいとゞ目垂れ見て。こなたの知つた事ぢやない醫者坊叶はぬ退いて居や。いかにも構はぬ筈なれども。扱ひかかつて身どもゝ亦。すご〳〵とは歸られぬ是非に及ばぬ古けれど。乘物一挺はずみましよそれで足らずば桐油細引。平にと云ふを機にして近頃無念に存ずれども。こなたに免じて堪忍と云ふより早く三枚肩。飛ぶが如くに立歸り　フシ斯くの通りと紛らかす。地色皆々横手を丁と打ち案じたとは格別。銀儲して送られて。身上は吹付くる左扇の甚五郎。祖母様は御輿で戻らりよと　オクリさはめきへてこそ歸りけれ。地色夫婦も今は背戸門を開けてもあけぬ胸の内。装束ながら甚五郎物をも言はず煙草盆。思ひ草とや手に觸るゝ煙管より猶廻り氣な。女房膝を突き動か

し。詞これ爰な野良間。何時の頃から目を抜いて内裏上臈とくさり合ひ。公家出立での夜泊地いかいお手柄さるにても。母御様の此頃中行方知れぬは忘れてか。わしが心の悲しさをいかばかりとか思うてぞ。姑御にも此方にもお氣に違うた事もなう。睦じう暮せしに行方の知れぬは何程の。恨み憎みのある故と身を疑へば世間には。胴慾者と謳はれん生きて詮なき身の上と。わしや覺悟して居ますぞや。それとは違ひ結構なぞべ〳〵とした形をして。相借家の人々へも苦勞の禮はそこそこに。嘘八百は何事ぞヱ、胴慾や怨めしとスヱテたくり掛けてぞ。かこちける。地色甚五郎小聲になり思ひがけなきなり形。心得難く思ふ筈我身ながら我かとも。辨へ難き身の難儀。詞藤の森の邊にて人大勢に立圍まれ。禁中へ召されしに母人は早やあの方に。人質に縛められ仔細は斯

様〳〵にて。詮ずる所見ず知らぬ小町が像を七日が内。仕果すれば其通りさもなき時は親と子の。長き別れとなる事を。地そも何とせん女房と思案顔なる目の中に。スヱテ忍び涙を浮べける。地色女房聞いて打驚きさうとも知らでつか〳〵と。フシ今の慮外は免してたべ。扨おいとしや姑御。老木の肌へ荒けなき縄目に憂きを見給ふと。傳へ聞くさへ堪へ難き。詞いまだ目に見ぬ鳥類さへ作り出せる名人の。細工を得たる御身にてなど腑甲斐なく見え給ふ。地片時も早くお命を助くる様子遊ばせと。勸め立つれば甚五郎。誠にそれよ能う云うた。油斷をするは不孝ぞと冠裝束脱ぎ置きて。木地の頭の荒ごなし左細工に工夫の妙。先づ口開に目は二つ鼻筋高う耳の穴。なしとは人の僞か。浄瑠璃本の小町でも大方格は知れてある。サア女房ども美しいか。フシ評判せ

いと差出すを。地色見るよりふつと笑ひ出し。詞どこにか小町が目を剝いて澁面作つて居やすまい。おぬしが目にもさう見ゆるか。地どりや此度は念入れて白木にあてる青木賊。磨かれ出づる玉造。小町が姿生寫し。ぞつとする程よかろがな。詞ヲ、ぞつとする〳〵。矢張初めの澁面顏。餘り立派で嘘凄い。こなたの細工何時からかどの人形も此顏癖。地色よう氣を付けて見給へと詞に付きて打守り。初めて刻む其時の。一念が晴れぬ故側から指南頼むぞと。互に心合せ砥に。小刀の刃もつく〴〵と。切れると繋ぐ親子の縁オクリ案じへ煩ふばかりなり。フシ物憂き旅も。一入に重きが上の稚子を背中に。ちつと笈摺や。胸に木札の巡禮歌。スヱテ女の聲のしなやかに巡禮歌補陀落や岸打つ。波は三熊野の。那智のお山に。響く瀧津瀬通らしやれ。歌父母の惠みも。深き詞

これ〱ナウ。こちらに大事の魂膽事。地 氣が散れば邪魔になる通つて下され通らしやれ。歌 岩を立て水を。湛へて壺坂の。詞 ヤイ物貰ひ。斷り云ふを聞かぬ顔賣物見世にへちまふは袂の下の谷汲へ人形を納めよといふ事か。地 うろついて居りや巡禮に棒喰はすと腹立つる。詞 ハア御尤もさりながら。報謝の望で先にから立ち休らふには候はず。私どもは遠國者思ふ願ひの候て。西國の志し何とも難儀は此若が。道中から蟲おこり泣き惱むを賺し兼ね。地 氣慰に人形が求めたさと聞くより早や。手鑿返す商ひ口。詞 ム、結構な巡禮様。若子は奇麗な生れつき。お顔なら手足ならいかい上手が作つた物。地色 女房どもと談合してお氣に入つたを召しませ。醫者になりたか胴人形飛脚が好きなら飛び人形。南京人形武者人形 フシ お望み次第と言ひ立つる。地 巡禮が子を下し。詞 コン金平か西行か。地 どれかこれかと宛てがへど其方へ目もやらず。今作り居る人形の顔をつれ〲守り居て。あれを〱と指差せば甚五郎可笑しがり。詞 世智賢い幼い身がきゞりし人形より。地 荒木作りが欲しいとは錢安いのを御賞翫。商ひはしたけれど大切な誂物。フシ ならぬであンすと欺けば。地色 巡禮も恥かしげに。いかさま此子も不物好。此内で見てどれなりと買やと云へども聞入れず。詞 イヤ〱あれが父様の顔にようよう似た懐かしい。地 買うて〱と泣叫ぶ。母は聞くさへ慕はしく心を付けて差覗けば。げにも夫に生寫し縱から詠め横から見て。そゞろに頭を抱き取り我子引寄せ涙にくれ。ヲ、賢い子やよう見知つた。日頃に可愛がられたる恩愛によりとゝ様の。逢ひにござつた對面しや。アラ懐かしの我夫と フシ 抱き。付いてぞ泣き居たる。

地色 夫婦は呆れきよろ〱とためらひしが立寄つて。詞 ナウ巡禮。忝くも此人形は天子のお手に觸れらるゝ。地 涙に穢すは何事ともぎ放す手をしつかと取り。アラ心なの都人。夫の形見と見るからに共に此身も朽つるとも。なか〱頭は渡さじと奪取りて走り退き。撫でつ摩つつ抱きかゝへ。懐へ入れ膝に置き。袂の內に押隱し身を震はせし氣息ざしは。海士の浮繩引上げて フシ 玉取り得たる如くなり。地色 女房は立寄りて。詞 殿御を慕ふ御歎き穂に現はれて痛はしや。此人形は手前にも命に代へる念願にて。夫が刻みかけたれども仔細に依つて自らが。貰うてなりとも參らせん樣子ありげな御有樣。地 心置かずとお咄しあれ數ならねども我々が。一遍の回向の種功德ともなるべしと。スヱテ 世に泌み〱と尋ぬれば。地色 旅の女は起き直り嬉しの今の詞やな。女心

のはかなくも。切なる愁を包み兼ね。取亂したる身の上を語り申さん聞いてたべ。詞我が生國は肥後の熊本。夫は度會源五とて。關白公に仕へしが不慮の事にて浪人し。伯母を便に國許へ下り給ふを幸ひに。從兄弟同志の夫婦となり八九年添ふ内に。子といふ者は是一人。かねがね源五心底に古主へ歸參の望みにて。此子を我に預け置き三年以前の春よりも。京都に上りゐられしが。六月廿二日の夜祇園林のほとりにて。闇討に遇はれし由。地傳へ聞いたる其時の。口惜しさ悲しさを推し量りても知ろし召せ。生死無常と云ひながら病み煩ひにもある事か。男盛をむざ／＼と旅の空なる露と消え。詞此子はやう／＼其時六つ。後立にも助太刀にも。我身の外に知るべもなくましてや顏も名も知らぬ敵を狙ふは。もろこしの吉野の山に入る人を。地尋ぬるよりも果なしと思ひながらも念力と。佛の誓ひを頼みにて形は斯樣に出で立つとも。心は矢張り煩惱の。絆も解けず寢れば夢。歩けど思ひ忘られぬ。夫の最期は三十八。目の張眉のかゝりより。面長にきつとして。只其儘の顏形斯く迄似れば似るものか。正しく是は觀音の。御手を貸して御亭主の作り給ふと思ふから。暫しも肌は離されず。買はせてたべとばかりにて フシ聲を。ばかりに泣き口說く。地色同じ涙に女房もげに定めなき世の中は。いつ何時か身の上にかゝる憂目のあるべきと。フシ思ひやるさへあぢきなや。地色夫婦連添ふ仲にさへ女はいとゞ氣の狹く。世間を耻ぢて物事を案じて暮すものなるを。殊更殿御に別れての旅は物かは大切な。敵に憂身窶さるゝ姿といひ。心といひ世界の女の鑑ぞと。フシ思ひ入つてぞ感じける。地色甚五郎は默然と始終を聞いて居たりしが。頻に催す落涙を押拭ひ／＼。又類なき志。承るも人形故亡き世の人に似たるこそ幸ひ。何かは惜み申すべき頭ばかりも見苦しき。それ／＼と云ひければ女房も嬉しげに。よくこそ心付けられしそこらはわしが細工ぞと胴串衣裳褄辻のあふ瀨に返る其人と。梅華皮取りて差さすれば。詞ア、イヤ／＼。假初ならぬ武士の姿。地長持にある本身の大小。暫くの中取つて來い。アイと答へて一間に入りオクリやがてへ二腰 フシ持ち出づる。地色甚五郎取上げ人形に橫たへさせ。旅の女中御覽あれ。詞此姿ではどうぢや／＼親子は見るよりつつと寄り。地とゝ樣物を云はしやれと又泣き出せば母親は。氣も魂も消えて行く。煙の後も面差は生けるが如くありながら。など詞を掛け給はぬ。せめては妻か我子かと。たつた一言聞かせてと天に。あこがれ地に伏して又

歎き添ふ氣色なり。詞甚五郎聲荒く。歎きに性根晤まされ未練なる女かな。大小が武士の魂其二腰より物を云ふとつくりと念入れて對面あれと辱められ。地よくよく見れば鍔は木爪靑皮の緣。目貫は金の狂ひ獅子不思議や夫の差物に。似たりや似たり花菖蒲菖蒲作りの梅華皮鞘。此二腰は何として此方の手には入りたるぞ。詞ヲ、問ふ迄もなしお主が夫。度會源五を討つたる敵。昔は勝山彦次郎サア首討てと地聞くより早や。扨は夫の敵かと。子を引抱へ走り退き杖に仕込みし刀を差し。氣色凛々しく立寄れば。甚五郎妻も人形に差させし刀追取つて。夫を圍うて立つたるはフシ危くも亦健氣なり。詞甚五郎聲をかけア、せくまい〳〵覺悟の前。地浮世に報といふものはあるかないかと疑ひしに。我身にひつしと知られたる。懺悔を兩人よつく聞け。鼠窮して猫を噛み。人貧しうして盜みすと。云ひしは手前の身の上。親の知行を棒に振り母と女房引連れて。花の都は住吉と此所に借宅し。晝夜渡世を稼ぐ內因果は老母大病受け。何れの醫者の配劑も人參目五分七分づゝ。刀脇差諸色迄賣代なしても續かばこそ。一人の親を見殺すかと悲しい時の神たゝき。佛もせぶる思案にて淸水へ詣でしに。詞八坂の茶屋より呼掛くるは正しく度會源五が聲。同じ浪人仲間にて懇意に語る仲なるに。地心浮かねど立寄れば。家內の宿女に取廻され。濳上らしう紙入より四五十兩の金子を出し。湯水の如く蒔き散らす。扨は歸參が叶うたか珍重の儀と云ひければ。詞いや〳〵是には仔細あり。話は追つてと言ひ殘す。地ア、よい物を持つてをる十兩貸してくれたらば。母の命を助くるにと。金に惚れたるなずみよりふつと付いたる無分別。所詮殺して取りたりとも孝行よりの惡心は。天道見許し給はんと勝手づくなる了簡して。とも〳〵飲んづ歌うつに夏の夜早く更け行けば。深々たる鐘の音。一つ二つと指を折る數も積つて丑三頃。いざ歸らんと打連立ち眞葛原の跡先に人通りなき間を見合せ拔打ちにちやうど斬る。南無三寶と振返るを疊掛けて斬付くれば。刀持つ手にしつかと喰ひ付き振れど捩ぢれど放さぬを。漸うとして踏倒し止を差して立歸り。金子の蔭にて早速に母の病氣は治りしが。喰付かれたる右の腕。次第に痺れ叶はねども。詞左で細工の妙を得て異名を左の甚五郎と。日本國へ廣まる故。身上不足な事もなく。地世を安樂に暮すに就け不便な事を致せしと。一念思ふ其日より。最期の顏が向ふに立ち。お山作るも源五に似る。若衆刻めど源五に似る。あら凄じやと思

思へども母にも妻にも隠せしが。詞今月今日兩人が爰に來るを待受けて。我心命を果すよな。誠に自業自得果と。己れを觀ずる覺悟の體　フシゆゝしくも。又優しけれ。地色親子は一度に聲をかけ。詞其方に討たれたる。度會源五が妻にまさご同じく一子德太郎。サア立上れと駈寄るを。地女房あはて押隔て。大事の敵を目の前に。何とて見許し給ふべき。詞さは云へ義理と恩あれば討たれぬ品もある事ぞや。地行方も知らぬ旅人が夫の顔に似たるとて。立寄り給ふは人形の恩。これ正眞の人形にも。フシ義理とは誰も申すぞや。地色様子を問ひしは我身の恩。敵と名乘るは夫の義理。恩と義理ある身の上に。詞君より難題七日が内に。小町の像作り出さぬものならば。地母が命を召されんとて内裏に止め置き給ふ。爰の所を聞き屆け。僅七日が其間。命を預け給はれとフシ手を合は。せてぞ。泣き口說く。地色まさごは急いて身を震はし御道理なりさりながら。我身になりても御覽あれ。詞敵の面は知らずとも。おのれやれ一念で尋ね逢はんと方々を。足掛三年さまよひて。地言問ふ人も嵐吹く山のあなたを故鄕の。空懷かしく折々は。父母の御身の上いかゞ渡らせ給ふぞと。思ふもよしや我夫の。敵を討たぬ其内は。二度國へは歸らじと迷ひ〳〵てやう〳〵に。今日といふ今巡り合ひ餘所に看なして謂れなき。フシ御身に義理を立つべきか。地色サア甚五郎遁さぬと刀をすらりと拔き放せば。させぬと女房縋り付く。振切れば又後より抱き付いて引戻し。しがみ付き轉び臥し互に。夫を思ひの山劒の山を登り兼ね。フシ倒れさまよふ如くなり。詞甚五郎目を怒らし。卑怯の振舞何事ぞ放して討たせと睨め付くる。女房は怨めしげに心得難き詞やな。他人へ義理を立つるのは姑御への命の仇。親孝行の爲ならば逃ぐるが恥でも引けでもない。地此場を我に振り任せ立退き給へ我夫と。尚もまさごに取付いてフシ早う〳〵とせき狂ふ。詞ヲ、尤なり某も。心付かぬにあらねども母の命を今日迄。助けし事も源五が恩。地末期の念力三年の月日と共に小刀の先を巡つて妨ぐれば。とても小町が形をば。作り得ることなり難し。親子の定命只今に逼り切つたる身を持ちて。いづくへ足を向くべきとフシ動く氣色は見えざりけり。地女房今は諫め兼ね。ア、腑甲斐なのお心や。死人に念力ありとて。親を助くる念力を。いかでか妨げ申すべき。お二人様に成り代り我こそ死なん身の上を。まさご殿にも聞いてたべ。詞元私は播磨瀉室の遊女に候ふが。あれなる人に思はれて當番非番の別なく。通ひ績

けの過りにて浪人なされ候へども。お袋様の納戸金三百兩に請けられて。地借家住居の憂き節も自ら故の事なるぞや。昔の武士にてましまさば細工の難儀もかゝるまじ。三百兩の金あらば夫の惡心起るまじ。源五を殺せし根本の。敵といふ此身なり。夫の代りに自らを。討つて思ひを晴らしてたべフシ聞分け。給へと口說き立てむせ返り。てぞ歎きける。地色まさごも共に涙にくれ。ナウ歎きも同じ歎き。憂目も變らぬ憂目ぞや。母故沈む身の懺悔。男思ひの物語一人を討てば忽ちに。三人殺す罪科は冥途の夫の身に報ひ。修羅の苦患となりやせん。七日の命預けるも謂はゞ暫しの間ぞと。我は了簡致せども。辨へもなき子心に。待遠にかは思はんと。許すもつらし許さぬも。餘りつれなき次第やとフシ差しうつ。むいて居たりける。地色女房は力を得店に飾りし馬の手綱。引きかなぐりて差出し。詞生きては閨を同じうし死しては一つ塚に入る。地身體をお預け申さんと我と後へ手を廻し。フシにつこと笑うて居たりけり。地色まさごも思案付き兼ねて。詞コレ德太郎敵を討つか此人を預り宿へ連行くか。地分別しやと聞くよりはや繩取つてかひがひしく。高手小手に引縛り。詞ヤイ甚五郎。今日の命は助けてやる。七日過ぎたら此女と。代々するぞと呼ばはれば。地見てゐる母も縛らるゝ。女も共に聲上げて。スヱテわつと。ばかりに。泣き沈む。地色甚五郎は感涙に身さへ流るゝ心地して。然らば拙者は七日が內一間所に取り籠り。一念力の鑿鉋小町が形を刻みたて。お禮はつど／＼其時と止めぬは親へ孝行者。引かれて行くは心中者。氣の通り者了簡者さらば。さらばも泣聲に。あら味氣なの世の中と。妹脊を歎き恩愛を慕ふ心の諸翼水の。鴛鴦。巢の燕搦みし姿羽拔鳥泣く／＼見送り留まりぬ。

第四

フシ月花の。形は筆に寫せども。思ひは繪にも詞にもオクリ及ばで。積る雪姬が。住居は殊に奥深な。本フシ亭の一間に取籠り。地人も通はず寄付けず。長地見もせぬ顏を兎や角と心も空に案じ佗び机に肘を寄るべなく。只つくりと燈火に照添ふわれが姿さへ憂目に細る心地して。更くるも知らぬ宵の間に。一番鳥の知らすれば。はつとばかりに打驚きスヱテつれな今の一聲や。汝も妹脊の諸摑羽交の下に溫め合ふ。玉子の數も五ツ六ツフシ十日に限る我夫の。命をせめる八つの時。明くれば消ゆる露霜の。それよりも猶あだし世に。生れて憂目を見る事は。宿世何たるフシ因果ぞや。詞世界の內に住みと住む

人は戀路を樂みに。まだかた若き始より。地八十の老の後迄も欠障なく添ふもある。手づから織れる布機や裁ち縫ふ業を習ひても。夫一人は養ふに。いかなれば自らは藝に譽は得たれども。明日の命を繋ぎとめ引止められぬ荒駒の。あら口惜しや悲しやと持つたる筆をからりと捨て スヱテ 絶え入るばかりに。歎きしが。地 稍あつて手を合せ。南無。日の本の神佛仰ぎ願ひ奉る。別しては弘法大師。フシ 御筆の奇特に。小町の佛影向なさしめ給へやと。一心に祈誓して夢にや見ると手枕に。袖を片敷くとろ〳〵と ヲクリ 暫くへ眠り入りにける。フシ 同じ思ひと。浮れ來る。地 世は人形の牛車巡る左の甚五郎。細工の外に取添へて身を削らるゝ義理と孝七日の命氣息の緒もはや切れかゝる夜半過ぎ。人手まぶりに雪姫が。舘に紛れ忍び入り。地色 あなたこなたと駈廻り砌も深き扉より。密かに内を差覗き胸を押へ打頷き。詞 ア、少し落着いた。我より先に寫繪を若し仕果せて上げんかと。地 心ならず思ひしに流石名を得し雪姫も。日限今に逼る故物憂き眠りに工夫さへ。疲れ果てたる有樣は。いにしへ小町が帝より。賜りて言の葉を。案じ入つたる風情かと思ひ出れば我も亦。人目包みに束帶の。袖を翳して佇むは。かの大友の黑主が。歌盜まんと窺ひし フシ 姿も斯くこそあるべけれ。地色 それは昔の優女是は譽れの女繪師。其數ならぬ甚五郎。二つの道は劣るとも。孝には深き奧の海 フシ 白波の名は。立たば立て念力通さで置くべきかと心を配り。身を潜めつく〴〵窺ひ居たりしが。更け行く夜半に何時となく ヲクリ ふらり。ふらりとねむの木の フシ 繁みに倒れ臥しにけり。現には。見もせぬ雲の上迄も。夢には通ふ雪姫が。魂姿を飛び出づれば。コハリ 心較べの甚五郎胸より出る思ひの火。二つの魂空中にあなた。こなたと漂うて照り輝けば ナホス 舘の内忽ち變じて百敷の。御簾の隙々几帳の陰昔を今に フシ あり〳〵と。磨き立てたる。玉造小町の榮え衰えを。只身の上に顯せしは不思議に。も。三重 また へ目覺ましゝ 地 いで其頃は天長元年彌生の空麗はしき。淳和の帝の御惠み時めく御代の歌の會。紫宸殿の額の間に和歌三神を勸請し。名香立花綺羅をやり玉座深く見え給へば。左の上座は紀の貫之右は同じく王生の忠岑 フシ 我も。我もと伺候ある。地色 中にも大伴の黑主は日頃小町に意趣ありて。自ら望む歌合せ フシ 晴がましうぞ聞えける。地 せかぬ氣色に差向ふ小野小町は花鳥の。すさみかしこき色々の。其詞さへ心さへ姿はいとゞ日の本に。男日照と輝きて フシ 御前にこそ出で給ふ。地色 貫

之は判者として一々和歌を吟じ上げ。批判の次第ある中に大伴の黒主。雁に寄する戀といふ題に趣向を取結び。詞思ひ出で丶戀しき時は初雁の。鳴きて渡ると人は知らずや。地貫之暫し打詠じ歌の程を賢ふれば。薪を負へる山人の。花の木蔭を行き歸り休らふ風情と褒められて。面目顔に黒主。肘押張つて居たりしはフシ憎體にこそ見えにけれ。地色小町は尙もしとやかに心の奥の水莖の及ばずながら口ずさみスヱテお恥かしやと差出せば。地色貫之取上げ見給ふに。詞水の邊の草といふ題に心を思ひ寄せ。地讀める歌にはまかなくに何を。種とて浮草の波のうね／＼生ひ繁るらん。繰返し／＼吟じ終つて感じ入り。歌の姿はいにしへの衣通姫の類にて。弱きは女の品形自然の德を備へたり。古今の名歌今日の詞と判じ定むれば御簾も几帳もざゝめきてフシ覺えずどつとぞ褒め給ふ地色黒主はつつと出で詞ヤアいかに小町。古歌を盜んで出すならば誰か勝負に勝たさらん。是御覽ぜよ人人と地懷中したる萬葉集御前に差上ぐれば。貫之取つて押開きよく／＼見れば同じ歌同じ題にて入れてある。君を始め公卿の面々フシ興の。醒めたる次第なり。地色小町は騷ぐ氣色なく萬葉集の古歌は。空に覺えてあるものを可笑しの人の詞やと。書物を取りて繰返し。詞墨新しく候へば洗はせてたべかしと。地思ひ入つてぞ奏すれば。兎も角もとの宣旨を請け黃金の盥にたぶ／＼と。御手洗川の澄み渡る水を湛へて小町姫。心を籠めて三神の御影に向ひ禮拜し。淸き誠の玉襷しつかと結んで肩に掛け。書物を水にざんぶと入れ押浸し／＼。君が代を汀の氷溶けぬれば。昔の髭をも洗ふよ。賤機布を玉川に晒す生平の何時しかもフシ白玉雫。緒の盃は。月の影をや洗ふらん。心を洗ふ。御手洗のほとりに立てる二柱。歌の神にてましませばなき名を洗ひ給へや。住吉の。住吉の岸に。生ふなる松なれや。波に洗はれさら／＼さつと。根は現れて浮草の。文字は殘らず消え果てゝフシ元の如くになりにけり。地色帝を始め月卿雲客。あつとばかりに感嘆あり是を傳へて世の中の。小町が草紙洗ひぞと見榮す。夢はへ消えて行く太夫フシ色は日の出よ。戀ざかり。情の晝と名に照りし。スヱテ小町は玉の實生えにて。柳の腰も。フシ弱々と。歌も上手で氣も上手。生けつ殺しつ品物に小オクリ惚れて へ思ひを深草の其主様と相惚れも。心較べの强弓は。弛みかゝりし下紐の。寢衣姿やほら／＼と。フシ外面を覗き見給へば。ワキ地色痛はしや少將は百夜の數を違へずし。月にも行き闇にも行く雨の夜も風の夜も。スヱテまして霜雪嵐

の夜も行きては車に刻(きざ)を付け。フシ通ふ給ふぞ哀れなる。太夫地色小町見る目も痛はしく。御側(そば)に立寄りて數ならぬ身を斯く迄に。慕ひ給うて夜な／＼に御通ひこそ嬉しけれ。日數の滿ちし折節は冷え返りたる御肌を。懐で溫(あたゝ)め歸さんと。フシ笑顔に玉ぞ零(こぼ)れける。ワキ地色ア、忝なやさりながら百夜を通ふ其間には。魂は早や冥途の鬼焦(こが)れし甲斐も何あらん彼の錦木の千束(ちつか)迄待ち忍ぶのは昔の事。今の浮世は氣短く。神佛への立願に百度。參りと申すにも。門前よりも行き歸り共數をだに滿てぬれば。フシ神も納受あるとかや。地色それに習うて少將もあれなる車のほとりより。扉(とぼそ)の下迄行き通ひ百夜の數に都合せば。今宵を過ぎぬ御情フシ頼み。入るとぞ掻き口說く。太夫地小町もさすが。誘(さそ)ふ水。浮れ心に打笑みて實に耳寄りな御談(ごだん)合(かふ)。誓ひし數だに合ふならば百夜も一夜も變らねど。雨雪霜の厭ひなき心の奥の知れ難し。それにも理(ことわり)候(さうら)ふか。ワキ詞成程それも心得あり。百夜重ぬる心にて姿を變へて參るべし。地今宵は空も晴れたれど君が心のまだ解けぬ。雪に降られて行かうよ。雪に取りても樣々の。薄(うす)雪淡(あは)雪春の雪。所は名に負ふ伊吹山。スヱテ佐野の渡りにあらねども。大和河內は綿の夕暮。アン／＼溫(ぬく)さうなる腰付よと。ぢつと凭れて戯(たはふ)るれば。太夫フシ小町はぴんど立退(の)いて。百夜の數を。待兼ねて人は無げなるお詞や。空に知られぬ。雪ならば。仇に散行く花の雪。誠少き人心。スヱテ只うか／＼と積られて。肌(はだへ)の雪の程もなう。とくれば元の水臭き。フシ男はいやゝと。答(いら)へける。ワキ地色コレ水臭いとは宣へども。少將程に身を窶し戀慕ふ者あるべきか。太夫詞あるとも／＼上がある。地昔用明天皇は。玉世の姫を戀ひわびて。いつしか帝位を振捨てゝ山路が草刈(かり)笛とて。世の諺になり給ふも。フシ戀故にてはあらざるや。ワキ地色げに誠過つた然らば雨夜に通はんと。車のもとへ立戾れば。太夫小町も今は濡衣。袖打翳(かざ)し物陰にフシ忍びて。樣子を眺めゐる。ワキ山城の木幡の里に馬はあれどオクリ君を。思へば徒(か)步跣(ちはだし)。さて其姿は簑(みの)に笠 フシとは云へ何も着もせずには。地雨夜の詮(せん)が立ち憎いはてどうがなと立舞ふを。太夫小町はそつと後より上衣(うはぎ)を脫いで打掛くれば。ワキ少將はぞつとして。嬉しさを何に喩へんから衣(ごろも)。下行く水の湧き返る。思ひを休め給へやと フシ袂に。縋り泣き侘ぶる。太夫地小町も色に染糸の亂れ心に手を締めて引ハ
二上り歌闇の夜に。鳴かぬ烏の。聲聞けば。恨みもないかと心にかゝる。縁がなければ縁がないに。添うて見たらば面白さうな。男ぢやと見て。わしから思ひ。結ぶ

絆につい繋がれて。通ひ車は思ひの種かいの。根から厭なら添ふ氣ぢやないに。欺さ。れた ナホスフシ好いた男と袖翳し。二人フシ春は子の日に。引連れて。菫蒲公英土筆オクリ摘むてふへ袖も數々に花見戻りの酒機嫌。あのゝものゝに千早振三井の古寺 フシ鐘はあれど。地色昔に還る聲は聞えず。ワキハア南無三寶東が白んだお百度始めよ。太夫そんならわしも連立ち行かん。ワキ詞浄衣の袴搔取りて。〳〵立烏帽子を風折。太夫歌紅裏白裏一つに搔取り。ちよこ〳〵走りナホス行きては歸り。歸りては行く一遍二遍。三遍五遍。鶏も鳴け鳴け。鐘も鳴れ〳〵嬉しや今は。九十九夜になりたり。あな苦し眩暈や胸苦しやと悲しいて。車の陰に伏すかと見れば。形も忽ち フシ消えてけり。太夫其怨念の取付いて小町は心惚れ〳〵と。是なう〳〵と歎き迷ひ西へ走り東へ行く。狂ひ車のわれかあらぬか行方知れずへ消えて行く靑黛誰か常あらん。膚に凍梨の梨を抱く。廬生が夢の戯れと。賢き人は驚かず。迷へる者は來し方を。ナホスフシ慕ひ泣くこそ愚なれ。佗びぬれば身をうき。草と浮れにし。それさへ今は。昔にて。小野とは言はじおのづから惜まぬ命長らへて。辛きを止むる關守に。幾百歳をふる姥は。小町が果の名なりとて。笑ふ人目も恥かしく。スエテ面を隠す破れ笠。後に負へる袋には フシ飢を。助くる。菱烏芋。木の實取らんと道のべの。樗の木に立休らひ。五月待つ。花橘の香を嗅げば。昔の人と。詠めしに我は。ハルフシ梢の秋待ちて。ハズミ命を繋ぐ。外なしと。地色杖を上げ拂ひし時。袖に落ち來る栗柿のかつを遅しと待顔に。地むら〳〵ぱつと落來れば小町は人に取らさじと爰に。立寄りかしこに轉び。千歳の坂と祝ひしは。老を養ふ母の杖是はまた。篠竹の。〳〵いさゝ村竹かり竹の。杖に木の實も打たれて力なみあなたへよろり。こなたへよろりよろり〳〵よろ〳〵よろと。走りさまよふ身の行方こそ。フシ悲しけれ。ナウ。物賜べの旅人。お錢たべの旅人。歌それがならずば水松樫ゐましゐの木。大小柑子金柑などでも。ナホス苦しからぬよの。狂ひ戯れかつぱと伏し フシむせ返り。てぞ泣き居たる。詞ハア餘りに苦しく候程に。是なる朽木に腰を掛け暫く休まうずるにて候。ワキ地然る所に向ふより世を雲水の定めなき。旦過の僧の一人旅通り合せて見るよりも。詞ヤアいかに老女。お事が腰掛けたるは。忝くも佛體色性の卒都婆。そこ立退けとありければ。太夫愚かの仰せ候や。スエテ古き歌にも唱ふれば。佛も我もなかりけり。南無阿彌陀佛の フシギンオクリ聲ばかりして。身佛隔てなき上に文字さ

へ見えぬこの朽木。勿體なしとの心はいかに。ワキ詞イヤ／＼汝が引歌は至り至れる智識の詞。地又中頃の俳諧句に。摺粉木よ。我も昔は櫻にて。是ぞ凡夫の見解なれ早や／＼そこを去れよとこそ。太夫ナウ我とても月花と立並んだる顔形。詞髪に蘭麝を燻らせて。舞錦の帷温かに ナホス隙間の風を厭ひしに移りに。フシけりな徒らに。道のほとりの。埋れ木と。朽ち果てし身は行交ひに。長地袖褄とても引かざればおのづからなる世捨人。佛になどか遠からん。ワキ詞ソレハ世にこそ捨てられたれ。世捨人とは可笑しの詞。地ナウ煩惱菩提は月と影戴く桶の底抜けて。フシ水溜らねば月も宿らず。迷ふが故に凡夫あり。ワキ地悟の前には佛もなし 太夫褒むるは順縁 ワキ誹るは逆縁順逆別なき法心法性。太夫詞げに本來一物なき時は。ナホス佛も衆生も隔てなしと懇に申せば。ワキ地僧は狂女を禮拜しさらば／＼。フシさらばと云ひて立退けば。太夫地小町も今は是迄なりと杖に縋りて。よろ。よろと立別れ行く。袖の涙の關寺や。鸚鵡返しのその一字。苔の衣を淸水の。物言ひ交す七小町。七つも過ぎて六つの鐘 フシ夢は。忽ち醒めにける。地色セメ雪姫むつくと起上り。[illegible]て墨すり筆を取り亭に勇めば ワキ籬にも。同じ夢見し甚五郎。二人いそ／＼我が家へ立歸る。手の舞ひ足の踏み所知らぬ業をも孝行と 太夫貞女二つの提げ較べ ワキ細工は左。太夫繪師は右 二人いづれが重き晴勝負前代未聞後々末代。小町が姿の。手本なるわと世以つて。是を賞翫す。

第　五

地地の麗はしきは稲を養ひ君の仁あるは士を養ふと云へり。されば富仁親王は御違例快氣ましまして。朝政怠り給はねば。共に賢佐の功烈しく。關白兼定其外卿相殘りなく。フシ肅然として伺候あり。地御隨身には膳手織部廰官雜仕に至る迄。威儀をあらせて相詰めしはオクリ由々しくへも亦 フシ晴れがまし。地色かゝる所へ甚五郎まさご親子を伴ひ。庭上に畏り。詞私儀は人形屋甚五郎と申す者。勅命を蒙りし日限相違仕らず。細工を調へ奉ると小町の像を御階に据ゑ。謹んでこそ言上す。織部は顔を打守り。ヤア推參至極のえせ者。小町の形は雪姫こそ勅諚を承り。夫の命を救はんと思ひを籠めし工夫にさへ。畫き能はぬ姿をば名もなき小刀細工にて。作りしなどとは胡亂なりそこ立去れとぞ罵りける。甚五郎むつとしてイヤ胡亂とは宜へども。繪に畫き又は木に刻むも工夫に二つあるべきか。雪姫夫を悲めば此方は又母の命。地助けん

ための念力故添くも弘法の。御夢想を得し傳授の形毛變違ひ候はずと フシおめず臆せず云ひ放す。地色兼定立寄り木像取上げ。げにも小町が顔形生けるが如き細工の妙。神妙々々さりながら。詞此儀に於て他の者に宣旨あるべき仔細なし。何者に頼まれし様子を語れと宣へば。甚五郎手を束ね。先月廿五日の夜密かに御殿に召し出され。勅命ありし趣は申すも餘り畏れあり。人質として老母をば内裏に縛め置き給ひ。地即ち後日の證據とて御衣をば下し賜はりぬ。御覽あれと差出す。詞ヤア野太い下郎め。天子よりお頼みとは跡かたもなき僞り。先月廿五日の夜は狛の舞樂を叡覽にて清涼殿に相詰め。終夜外の御沙汰なし。地色其上此御衣汝等が手に入る事。此頼み手は此方に心當の詮議もあり。詞ソレ搦めよと聞くより早や雑人立寄り押伏せて フシ敢なく繩をかけにけり。まさご驚き差寄りて。詞憚りながら自らは度會源五が妻。是なる者に夫を討たせ此如く附添ひて。今日本望遂げる筈。然るを召捕り給ひては誰を敵と狙ふべき。地甚五郎一命を妾に下し給はれと。スエテ涙を流し言ひければ。詞兼定は聞きも敢ず。其源五めこそ某が以前の家來。こしやく者故有職の道をより〱教へしに。地色奥儀を極むる慾心萠し代々傳はる家の秘書。並びに君より拜領の。詞コレ。此御衣を盜み取り。行方知らずなり行きしが。其後聞けば蟠海が謀叛に與し剰さへ。内裏の造營法式迄きやつめが指圖致せし由。扨は御衣をも蟠海に渡せしは必定。地色是ぞ逆心一味の證。妻子とても逃れなししつかと括れと下知あれば。承ると立ちかゝり親子も繩目に及びしは フシ思ひがけなき有様なり。地かゝる所へ雪姫あわたゞしく兼定公の前に出で。小町の繪を差上げ。詞かねて宣旨を請けし姿繪調へ参り候なり。地叡覽に入れ給ひ。片時も早く我夫の。命を助け フシ給はれと思ひ入つてぞ奏しける。地色兼定公つくづくと細工と繪圖を引較べ。詞ヤアをこがまし雪姫。元來汝が寫繪の虚實を糺さん其爲に。勅に從ひ先達て高野山に立越え。弘法大師の眞筆を再三拜し參らせてとつくと記憶してあるが。ハヤ先達て細工の像髪筋程も違はぬ名作。それに同じき形をば遲れて上ぐるは贋物同然。かかる粗忽の仕業より事延引になるくだり。地宸襟を悩まし宣旨を默す重罪安穩にて置くべきか。詞ソレ織部搦め捕れ。畏つて立上り フシ泣く〱繩をかけにける。雪姫わつと泣き出し。思ひを碎き身を凝らし夫を慕ふ冥加により。二つともなき繪像をば夢想に大師に授かりしに。誰が先達て上げけるぞ不思議さよ浅まし

や。夫婦が縁も是迄かとかつぱと伏して泣きければ。甚五郎も堪へかねて雪姫に差向ひ。ヲ、先を越されし殘念の歎きは嘸と思ひやる。何を隱さん其方の工夫を慕ひ館に忍び。窺ひまどろむ其内に夢想に受けたる此細工。然れば深き妄念の。盜人は某。非道に身命溺れしも。母を助けんためなるに。我さへ死する運なれば。恨みらるゝも恨むるも。共に果なき浮世ぞと。男泣にぞむせび入る。然る折節蟠海は。師國時夜叉隨へて悠々とこそ。出で來り兼定公に打向ひ。改めて蟠海を參内せよとは何事の。趣きなるぞとありければされば。此度僧都の加持大護摩の德に依つて。親王御惱平癒あり感悅の餘り。今日より大僧正の位階を授け給はる。綸旨目出度く領掌なさるべしと披露ある。蟠海ムウ懇志の程過分なりと。挨拶の内甚五郎目を離さず。蟠海の。顏打守りはつとばかりに聲を掛け。何時ぞや天子と僞つて細工を望むは御坊よの。ぬく〳〵と騙されて今の憂目は何事ぞや。サア母を返してたべ。エ、怨めしい腹立つと怒りの涙せき敢ず。まさご雪姫聲震はせ。あら憎や情なや。皆是御坊の惡心より。いづれも非法の最期の恨み。思ひ知らさで置かうかと。三人一度に口說き立て大聲。上げて歎きける。蟠海ちつとも騷がず。ヤア甚五郎。親王と僞りしは紛れもない某。是何故ぞ。天子として戀慕に死するを救はんため。暫く王位を學んだり。斯程に慈悲を惠む我。何しに契約違へんず。それ〳〵師國召人引けと聞くより早や。甚五郎が母と妻繩付ながら連れ來れば。親子三人顏見合せ先立つものは淚なり。蟠海二人が繩を許し。母が義は勿論。女房迄を尋ね出し供し來つて相渡す。サア請取れと詞の下。甚五郎は頭を下げ忝しと一禮す。母淚ぐみ頭振り。たとへ此身は遁るゝとも。我子死すれば生き甲斐なし。繩掛け給へと掻き口說けば。女房も物憂げに互に。義信を立つるにぞ。蟠海は打頷き。ヲ、さぞあらん〳〵。コレ兼定。召人どもが一命を我に免じて助けてたべ。甚五郎は僞りにも天子の詞を重んじて。細工を挑むは忠の道。雪姫事は親王が病になる程戀ひ慕ひ。今又罪に附せんとは照る日の曇る政道。何にもせよ慈悲は上から助くるは法のため。思ひ立つた命乞ひ是非貰うたおくりやれと。只一筋に言ひかくる。兼定公聞きもあへず。和は仁の基なれども刑罰なければ亂の端。利益の道はお僧の役。朝政は又臣等が役。其上綸言還らずと。云はせも果てず蟠海綸旨を取出し散々に引裂き捨て。ヤア綸言の

綸旨のとは王法を立つる上。濁れる祿を何かせん。否でも應でも貰ひかゝつた召人。ソレ師國時夜叉と聞くより早く駈寄りてフシ皆縛めを解きにける。詞雪姫は差寄つてコハ忝き御心やされども妾が身の上より。地悲しきは夫の命お救ひあれと手を合す。詞兼定は聲を上げ。ヤア不覺なり雪姫。汝が心怠る故最後の日限極つて。千王は今朝曉早速討つて捨てたりと。フシ聞くより雪姫あつとばかりに倒れ伏してぞ泣き居たり。地蟠海は大手を打ち。彼奴めを殺さんばつかりにえいやつと骨折りしに。世界は廣しと立上り玉座間近くどつかと坐り。詞ヤイうつそりども我こそは謀叛の骨張。かねて源五と心を合せ時の變を窺ひしに。地今蟠海が開ける運親王其座を立去れと御簾引きちぎればコハいかに。思ひも寄らぬ千王丸仁王立ちにつつ立つたり。雪姫を始め滿座の人フシ再び驚くばかりなり。地色蟠海狼狽へ逃げ廻るをどつこえやらぬと躍り出で。其儘繩をかけければ織部も續いて立掛かり。師國時夜叉兩人を捕つて伏せ働かせず。縛り上げて突据ゑたり。地かゝる所へ親王は出御まします御有様丈に餘れる下髮に十二一重の優姿始めて女帝と知られたり。兼定は悠々と蟠海に差向ひ。詞エヽ是非もなき行跡やな。天性不道にまします故天子を女帝と知らせなば必定輕しめ謀叛の種と幼少より。皇子と稱し瞞さへ。此度の無體の戀慕も。御身の疑ひ避けんとての企て地猶も惡心探らんため刑罰烈しく取行ひ。第一は千王が死したりと聞き給はゞ。虚に乘ずるの謀叛の色現れんと。計るところ案の如く此仕合せ。今此繩目に愧ぢ給へと。フシ理立てゝ制せられ。蟠海は差詰り詞も出ず赤面す。地帝御氣色穩かにいかに兄宮。詞同じ血筋の帝位をば左程迄疎み給はずとも。女のすなるまつり辛苦を憐み緣となり。地惡心止まりたべかしと。スヱテ御涙にくれ給ひ。地暫くありて。ヤア雪姫。詞我故様々の難儀は不便さりながら。たゝまぬ思ひは目の前の女姿に明けし。地色さて又汝が小町の圖。佛神擁護の筆の妙。感ずるに餘りあり。向後朕が繪所と譽を世上に知らすべし。地甚五郎も雪姫に同じ恩みの細工の像。何れも稀代の重寶たり。褒美として日の本の細工の司と銘すべし。詞次にまさごは夫に違ひ。神妙の志。甚五郎を狙ふ由度會源五は朝敵故たとへ討たでも遁れぬ命。地汝が事も夫につれ重類を絶つ罰なれども。貞節に免じて命を助け稚子を瀧口に召し出し。詞度會源五と改むべし然れば夫は蘇生の心。其上何の敵あらん。地必ず仇を殘すべからず。皆々其旨心得よと。云ふに妙

なる綸命に。フシいづれもはつと感じける。ヲ兼定は詞を正し。御同胞とは云ひながら政道は背かれず。ヲ蟠海僧都は隠岐の嶋へ遠流せしめ。さて又師國時夜叉は臣として君を諫めず。朝敵となる大罰禁外へ引出し刑戮に行へと仰せを請けて追ひ立つる。是を手本の善の綱。僧都を懲し我君を祝ふ御國は忠臣あり孝行あり貞節あり。藝能迄も滿ち〳〵て榮行く。春こそ久しけれ。

右之本遂吟覧頌句音節墨譜等不違毫釐令加筆且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也

豊竹上野少掾㊞

作者　紀海音

大坂上久寶寺町三丁目

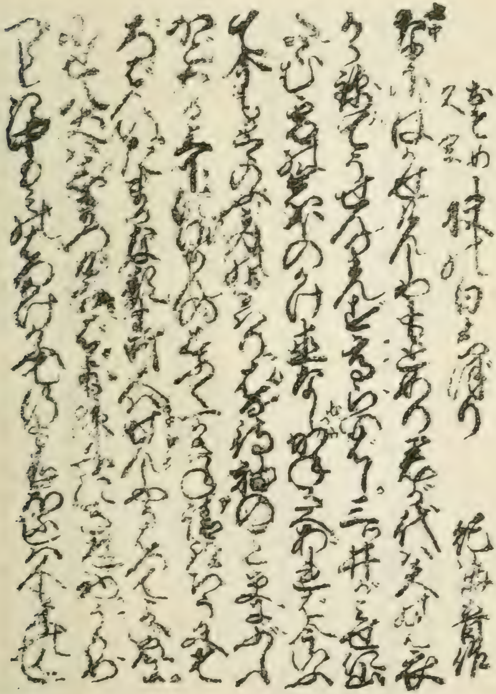
正本屋　西澤九右衛門版㊞

おそめ久松 **袂の白しぼり**

作者 紀海音

上の巻

地 難波風賢者も富めり君が代は。天の羽衣唐錦朝鮮綸子高麗橋。三井が見世に山たゝむ フシ 雪の巖の掛直なし。地 銀さへあれば今云うて今も調ふ身のまはり。春待袖の殊更に武士は角ある上下に。御紋の時服一重請取注文算盤の。倹約な顔も町人は。僣上張つてよい衆に。似せ八丈はしまつげな。婆も孫子も着衣始。うら珍しき中紅絹の八掛買うて行くも有り。法師は人も木の端と。云へば綸子の切端を。丸絎帯の末にては フシ めぐり逢うてふ主やこの。戀の日の出や。東堀。白歯も戀ておそめとて。誰に思ひの種油。締めて寝油二親の。光は有れど暗きより。暗がり娇の豫言を知らぬ仲居や乳母連れて。嫁入小袖の模様より目は久松に行道の。三井が見世に立寄れば。地色 乳母ち



よこ〳〵と走り入り。ハア藤七殿今日は。奇特とお宿にござんする。奥様からの御言傳。毎日こちへござつても模様がお氣に入らぬから。無駄足ひかす氣の毒などうで買はねばならぬ物。主をばそれへ遣りまする數々見せてあけすけに。地頼みますとの云付でアレお染様わざ〳〵と。お出なされました早に　オクリ伴ひ　へ内に入りにけり。地色若盛なる手代ども目を見合せて奕きしろひ。瓦屋橋と聞及ぶ。油壺から取出した髮の艶から地合から。あの様な繻子が有らうなら中の島のお屋敷に。祝言前ぢや百本でも忽ち金にせうものと。見る物くはう仇思。フシ是頤の下なり。お染は何の氣も付かず藤七に笑顔して。詞色品變る模様どもたび〳〵見せて貰へども。氣むつかしさに取紛れすげなう云うて戻せしが。地色今日は心も晴れやかさに慰みがてら染小袖。見ませうために参りしと。おめた所を手入らずと　フシ世上に是をたふとがる。詞藤七は慇懃に。何よりかより御氣分の良いと聞くのがお頼もし。幸ひ今朝下りたる染物多くある中に。見るから粋と白綸子に五色の綵で縫付ける。地京大坂の菊合せ千歳の秋を八重桐が。舞臺衣裳の物好み。御氣に入らぬ事あらじと自慢顔して差出す。地色乳母や仲居は立ちかゝり。詞コレ〳〵是になされませ。是を召したら取成も八重桐に生寫し。地よかろ〳〵と囃せども久松一人餘所目して。詞淫奔らしい藝振にうつつて男こま付けて。京大坂に浮名立ち身の行末を八重桐が。地狂言にして貰うたら泣くであらうと呟くを。人は何とか白菊のお染も色に現はれて。菊の一夜を千夜とも頼みし仲は變らねど。うつろふ菊のあだ名こそ。フシいまいましやと搔遣れば。詞藤七は心得て。然らば是になされませ。廓に名をば咲かせたる花紫が物好きに。我名を衣に染色のおり縫ひ織紋織節の。地花の色繪のあしらひは黒人仲間によしといふ上なき模様候ふと。詞飾れど久松は。詞いや〳〵是も心得ぬ引手あまたの傾城の。地どう根性を似せ紫。とゝろ剝けたは見苦しと顔打赧め言ひ消せば。乳母仲居は腹立てて。詞こりや其處な者何をいふ。流行模様の善惡を。お主らが辯口な。地默つて居やと叱れどもお染は暫し俯きて。詞いや久松の云やるのもさのみ無理とは思はれぬ。地色の變るも變らぬも絹には依れどさりながら。氣に懸るのは入らぬ物是も厭とて下に置く。地色藤七お染が脇顔をつく〴〵と打守り。扨むつかしい客人かな左程物好き有るならば。雛形書いて後よりも御目に掛けんさりながら。詞三井が棚に小袖は無きかと云はれんも口惜

し〻。蔵の内なる染模様。あら〳〵語り申さんと。地 側なる帳面引き寄せて スヱテ 一々にこそ讀立てけれ。文国 武藏野に一村。薄穂に出でて フシカヽリ 亂れ合うたる小袖もあり フシ 吉野初瀬の。花楓。今を盛りと見ゆるもあり。月の名所は。多けれど色は。様々信濃な。る。姨捨山や更科の フシ さやけき月は。是ぞこの。地 砥草を分けてさしもげに。磨かれ出づる體も有り。御簾の隙より唐猫の。綱を扣へし女三の宮。姿を見そめて戀慕の闇に迷ふ柏木の。ゑもん流しの蹴鞠の庭。柳櫻に松楓。梅に鶯紅葉に鹿。竹に雀や花に蝶籬の八重菊蔦かづら。桐に鳳凰獅子に牡丹扇ながし砂ながし蟲づくし草づくし。小紋唐草ちらし紋。淺黄鹿子に緋鹿子。紫鹿子に皆人の ナホス 心はけしの紅鹿子も候と。辯舌は足らうたり。言葉に花を咲かせつ〻。一時計語りしは フシ けに面。白うぞ聞えける。ナホス地 お染につこと打笑ひ色品多き其中に。一村薄打亂れ末に逢ふとは面白い。是にせうかと穂に出づる。フシ 目元が直にすゝきなり。地色 乳母や仲居は口々にこちとが目には爰ら内。丸めてみんな欲しけれど何を云うてもこれ〳〵に。縁遠なりし片端者。せめて五百か七百で四五十年も著るやうな。絲入縞か拔紬 フシ 欲しい事ぢやと打笑ふ。地色 藤七頷き合點して。成程成程それもある取なし頼む追從に。錢のあるなし知らねどもさあらばこなたへこなたへと太物見世へ行く水の オクリ 跡にはへ濡の差向ひ。地色 お染はあたり見廻して久松が手をとらへ。コレ腹立さうな顔付を。なぜにしやると凭れ寄る。膝をゆつと立退いて。詞 嫁入衣裳を見に黄八丈。しかも心はとび八丈で。口に熨斗目と云ひもぢらせど フシ らしやもない事。云はしやりんすな。つむぎ騙そと云ふ心かと。ナホスフシ 振り切る袖を引止め。地色 そんな小癪な當言を俄に誰に習やつた。詞 茶屋新町へ折々に稽古にとやら人が云ふ。地 あた鈍らしと睨めども。久松猶も傍目して。詞 純子枕に二人がつひに。ぬめ幻の世の中と。物が云はすぞ フシ 哀なる。ナホス地色 お染は暫し思案してやうやうと今合點がいた。嫁入小袖を買はんため來たとのそこの腹立よ。何樂しみに其やうな榮耀な心を持つものぞ。憂き身を泣いて夜晝と寝て居る故にかゝ様の。詞 お氣に懸けられさま〳〵の御意見の上此金を。枕元に差置いてさもしいやうな物なれど。死なで叶はぬ時節にも命を延ぶる妙藥ぞ。大事にかけて片時も肌身を放すなと。地 涙ながらのお詞に心が付いて如何様に。そなたの衣裳調へて姿の花を見るならば。氣合もとんと宜から

うと勇み勇んで來たものを。愛想盡かしなすね言葉 スヱテ 憎や。つらやと。かこつ。にぞ。地 久松はつと差俯き。詞 誤りました拜みます。地 もう御堪忍遊ばせと手を取交し面白う。フシ 成りかゝりたる眞中へ。地色 皆が戻れば久松はこれ藤七殿。詞 わしも正月小袖の加賀の諸白がより羽二重の。フシ 御召小紋が打とけて藍水松茶にも致さうか。地 氣遣なしに現銀と小判ぐわらりと投出せば。地色 乳母や仲居は聲々に何共是は呑込まぬ。詞 お主が何で此金を是程は持つてごと。地 口々に咎むれば久松打笑ひ。詞 イヤ是は江戸の兄貴が所務分。今朝程飛脚に請取つた銀は有切こなた衆も。地 目に入つた物何なりと御用にたつと大氣なる。詞も戀の口寒げ思案もなしの女子ども。夢か誠か久松殿顏もふく／＼福の神。年の内から若惠比須靨面に溜る水淺黃。巾廣帶で品やらば脇から腹を抱帶。はんなりとした紫の帽子ぴら／＼風吹に。這ひまくやうに十兩の。金もわが身も暇乞ひ束 オクリ をへ差して立歸る。地色 道二三町。過ぎけるが二人は何か呟いて。お染は跡へ振返りまだ日が高いそなた衆は。座摩の内にて淨瑠璃を十段計聞いて居や。久松連れてわしは又法印樣に來る春の。年八卦をば見てもらをこちへ／＼と立戻る。跡先知らぬ乳母仲居慾から萬領いて。フシ 合點行かねど行く袖や。地色 お染久松しよぎ／＼と扨もよい首尾上の首尾。競ひ口には叔母もよし叔父は猶よし一門は。片腕程の綱と聞く渡邊筋の へ其そこに。地色 表屋ながらトや算見通しの法印とて。失物盗人走り者扨は相場の高下迄。合ふのも不思議合はぬのも不思議／＼と云ひ囃す。旦那々々の竈祓月待日待代待手。文字ふつゝかに祈禱札春の事迄片付けて。嘉例に伊勢へ年籠り。夜舟にのりの旅脚絆供の茂吉が鋏箱。大事にかけよ女房ども本尊々々のお鏡も。三か月樣のお供も必ず／＼忘りやんな。詞 ソレ／＼おれも忘れて居た。見れば最前油屋から長長とした文が來た。若し久松めが不埒など致せしとある付屆。物參する門出故。わざと隱し居らるゝか。地色 氣遣はしやと尋ぬれば女房そ知らぬ顏付に。詞 悅ばしやんせさうぢやない。久松殿のあんまりと奉公振りがよい故に。仕着せの外に龍紋の帶遣すとの御知らせ。地色 ほんに其文見せうものつい引裂いてとあひしらふ。詞 法印悅び打頷き。褒美の帶は龍門の瀧に喩へて立身を。地 致せと有るのお壽。吉左右／＼滿足なよう留守しやれ追付けて。目出度う春の初夢は。五日の曉ぞ樂しみやと オクリ 戯れへながら立出つる。地色 女房は未だ門口に跡見送りて居る所へ。

久松お染いそ〳〵と笑顔作りて入來れば。なうお久しやと計にて フシ やがて内にぞ伴ひける。地色 二人は戀の中宿に日本一の首尾なれど。流石それとも云ひ兼ねて叔父坊樣は留守さうな。定めて參宮でござんしよと詞跡先奥口や。二階なんどへ目も遣るも フシ 晝寐の夢の場取なり。地 女房は會釋して。詞 成程主は伊勢の留守。けぶたい者も無い大事の事ぢやとつくりと。地 互に談合しめ合うて又締め合うて締め合うて。謀合せてござんせと挨拶すれば兩人は。さても粹かなめだかないや申しお内儀樣。詞 なじみもないに淫奔な娘と思うてござんしよと。地 さしうつぶけば何のいの。若い時には有る習ひ氣をはつたりと持たしやんせ。今日よりしては旅他國案じたも善し案じぬも。行く先々に鬼はない弱い心を持つまいと。力つくれば久松は。合點の行かぬ御挨拶憎う思さぬお心に。身の行末の事迄を思ひやつての事なれど。そこらは二段奥の間でちよつと話し、足早に。去なねばわしよりお染樣内のお首尾がわるいのに。通つたやうでどこやらが未だおぼこにござんすと。しらけて云へば女房はわしが詞の不思議なより。こなたの心がいぶかしい。詞 内方へとて足ぶみのならぬ首尾にて出て來たる。地 こな樣方にあらずやと語れば二人はぎよつとして。詞 何ぢや内へは去なれぬとは。地 斯うした事が知れたかと スヱテ 顫ひ出すを押鎭め。地色 女房小聲に云ふやうは。おふくろ樣より最前に。コレ此文を遣された。讀みます程に聞かしやんせ。詞 親心にはいつ迄も童々と思ひの外。いつよりしてか久松とくさり合うたる中々を。無理に放さば淺ましき浮世の夢や見るらんと。案じ過しの數々は。筆にも盡きず候なり。地 斯くとは知らで嫁入の日取を急ぐ父親の。詞 突詰めた氣につゆ程も見付けられてはそもやそも。並大抵の事あらじ同じ内には置かれじと。思ふ心の一つからそれとは云はで賺し出し。路の遣ひの事なども心を付けて遣せし。外へ行かん所もなしそこ御許へ參るべし。叔父御の手前はよきやうに取成し云うていづくにも。かくまへ置いて給へかし月日も經つて言入の。緣だに切れて候はゞ詫事たてゝ添はさうと。地 母が心を云ひ聞かせ若氣短氣の出ぬやうに。くれ〳〵頼む フシ 言の葉を。地 お染聞くより泣出しあらはづかしや面目なや。さぞやお腹の立たうのに末末迄の親の慈悲。背かぬ樣に此上はお前の情でいづくにも。立ち忍ばせて下されと。二人は左右に取付いて スヱテ 身もだえしてぞわびにける。地色 女房も涙ぐみ。ヲヽ尤や フシ ことわりや。地色 わしが思

案をして置いた。あたりほとりの目も多く爰にはどうも置きにくい。詞京大佛の煙管屋にひとりの姉が居られます。一先あれへ遣りませう一年半年ござつても。御遠慮の有る所ぢやない姉への文もさきにから。認めて置きました是をば持つて一足も。地早や日が暮れる出さしやんせ八軒屋から乗合の。船で風などひくまいぞ着いたとあるの便をば。早速見せて下されとそれより立つれば二人もまた。泪はあれど心には一所にゐるが年月に。願ふところと嬉しさに心も空に氣も空に。暇乞さへそこ〱に走り出でしが。立戻り。詞夜船も只は乗せまいが其段はどうしましよ。ハテ商人のやうにもない銀で兩換なされいの。サア其銀がござんせぬ。ヤア何と云はしやる御文には。路のつかひも遣るとぢやが。但し忘れてござつたか。イヤ其銀は絹買うて乳母や仲居に帯帽子。地買うてやつたと云ひさして二人は。下に泣き伏しぬ。興醒め果てゝ女房は恨めしげなる聲を上げ。詞いかに年端が行かぬとて戀する心も持ちながら。餘といへば愚かやな世上に銀といふ物を。仇おろそかにせぬものとは今お二人の身の上ぞや。油屋殿が長者でも女房のまゝに金銀の。ならぬは町の習はしよ。地子ゆゑの闇にどの様なせつない事で調うた。銀やら知らでうは〱と其浮ついたお心では。今日より明日が覺束ない京三界へやりまして。浮つらき名を立てられても頼まれがひも有りやせん。若い同士の思込一過は野でも山にても。辨へなしに面白い世渡悪しく物事が。儘にならねば不圖したる恨みつらみに尼となり。青道心の破衣別れ〱に成るものと。例を云ふも御意見も跡になつたる悔しさと。スヱテ叱りつ泣いつ口説きしが。中にて心を取直し上り詰めたる逸り氣に。詞麁相があらばお袋へ言譯もなしよしなしと。抱き起してコレ〱。案ずる事はちつともない外には人も知らぬから。一先内へ去なしやんせお袋様と私が心二つの才覺を文で知らせて心よう。地添はする様に成しますと騙し賺せば流石には。十九や廿に未だ足らぬ。蕾の花の梅櫻フシ盛り待つ木に立戻る。色乳母や仲居は内に入り日が暮れうかと案じたに。サアサア早うお歸りと急ぐを潮に女房も。そゝめき立つて門送りさらばゐる〱暇乞。逢ふ戀イヽヤ逢はぬ戀。時分柄とて掛乞ひも心せはしき三重へ暮の鐘。

中の巻

地思ふ事なづな〱とこたまよび。春調へて門松も物もうの聲聞き覺え。顔も覺えて見通しの。法印御禮方々でフシご

ざりまするど行過ぐる。地色油屋の内よりも少女子一人走り出で。申し〳〵法印様。詞頼みまし度い事有りとてお袋様やお染様。今朝から待つてござんした。暫くお這入りなされませ。ハア御用とは何であろ。お盃なら春永にとお斷をば云うてたも。イエ〳〵さうぢやござんすまい。地ちよつと〳〵と引連れてオクリ小座敷へにこそ通しけれ。地色母やお染は立出でて先づ以てお久しや。目出度い春の壽も。又御參宮の悦に人でも上げます筈なるを。詞店卸の何のとて。主にも寺のお禮さへ今日勤めらるやうな事。地御無沙汰のみに過ぎましたヤレ蓬萊よ銚子よと下女を散して近々と法印に差向ひ。詞お前も御存じ有る通りお染が嫁入致すのも。早や近々に成りまして。親父一人は悦べどもあの子は厭ぢや〳〵とて。地湯水も呑まず居まするを見てゐる母が心底を。御推量して下さりませ。とあつて今又變改の談合などに乘るやうな。旦那殿ではなけれども。詞護摩の牛王なが取所。お頼み申すは爰の事。音に聞えた辯舌にて滅多無性に相性が。惡い〳〵と云消して氣に懸けさせて給はらば。其尾に付いて色品のあるまいものとも思はれぬ。地色二世と豫たる夫をば騙すと云ふも子が可愛さ。お話し申すも恥しとフシ袂を顔に押し當つる。地色法印は打笑ひ何より以つてお易い事。詞左様なる儀は一日に。五十三十頼まるゝ皆此方の商賣なり。地色燃杭に迄昨晩は丁字頭が立つたのは。是であつたと請合へば。覺えず知らずにつたりと。笑ふ子よりも見る親の。フシ心ぞ春の景色なる。地色折節亭主太郎兵衞は金持氣質目に立たぬ。袴持たせて一僕の久松連れて内に入り。詞是は〳〵法印様。いまだ御慶でござります。ヤアこりやお染も起きてゐる。顔持ちなどもきつう良い。地水垢離取るが今日七日就いては先程法印様。是へ御入りありし故お染を側へ呼出して。此子が今年の吉凶を見て給はれと頼んだりや。詞算木を出し懇に半時ばかり考へて。以ての外なる顔付して御笑止な儀は御息女に。大災難が出來ました。此度の祝言が惡縁なるを無理やりに。取り繕ふが曲事とて結ぶの神の御咎め。神々達の仲間へも觸が廻つて有る故に。祈禱も藥も手が屆かぬ片時も早く此事を。止めよ〳〵と御意見有る兎や角思ひ合するに。詞法印様はやうやうと夜前伊勢から御下向。三日が内は神明の乘移つてござると聞く。立願かけた私に示し給ふと有難く。地はつとお受け申すとはや。娘が氣合良うなつて常より機嫌うき〳〵と。まだ様々の不思議な事あなたへ直に御聞きと。眞顔作るも親

心。地色 太郎兵衛つく〴〵聞届け合點の行かぬ氣色して。神の利生は知らねども元三大師の御籤には。詞 慥によいと上つたる。佛を破る罰とても當る所は只一人。疑はうなら法印殿。慮外な申分なれど違ひはせぬかま一算。地 只管頼めば懐より算木取出し置き並べ。暫し頭を打振つて。詞 フヽウ。一徳の水青陽の神木の氣を養うて共にり三の火を育つ。生家の油何時迄も盡くる事なく金銀は。子に子を産んで千年も上々吉の夫婦合。地 あら目出度やと占ふに。お染は顏の色變り母は覺えず聲を上げ。詞 コレそこな法印殿。折角人に頼まれた大事の算をぐど〳〵と。置直すとは御卑怯な。見通殿と持囃す譽が今から廢るぞや。地 お名が惜しくば何時迄も初めの通におつしやれい。是なう〳〵とあせれども法印騒ぐ氣色なく。詞 如何様酒といふものは諸事萬端を

仕損ふ。一杯機嫌でうか〳〵と初手に置いたは町内の。鍛冶屋の後家と水汲の五介が中を取違へ。地 そこで水火の大悪縁元來拙者が生れ付き。フシ 阿房印ぢやと嘲笑ふ。地色 母はいよ〳〵腹を立て。詞 イヤ〳〵さうは云はすまい。地 無理は三度ぢや置直しや。サア見よ〳〵と立寄るを太郎兵衛は押隔て。法印の側へにじり寄り。詞 驚入つた御名人。誠に八卦占形は人を助くる道なれば。曲つた氣ではならぬ筈流石以前はお侍。例へば一家一門が果報引出す事にても。地色 非道に一味致さぬと坐つたこなたの御所存と。身共が思案と比ぶれば割符より猶合ひまする。とても事に今一色。お尋ね申す事がある。詞 金銀出入の店卸し。昨日帳面しむる時十兩程の不足をば。大商賣の中なれば帳の付落掛方の。思ひ忘れもある事と其分にしてしまひしが。其盗手が今

日は大方に知れました。地 同類の義が覺束ない一算 頼むと云ひければ。地色 法印はつと算木をばそこ〳〵に置き並べ。詞 ハテあぢな事此金は。人間は取りませぬ。ムヽさうであろ〳〵。主をくらます人でなし人間ならぬ筈の事。シテ同類は見えませぬか。イヤ何とお聞き有る人間業でないからは同類のある筈はない。貴殿のけたい當年は大煩ひか大損を。なさるゝ星に當れども。年頃日頃の御信心天に通じて纔かなる。地 金子に轉じ替へ給ふ守り本尊の御方便。必ず詮議御無用と云はせも果てずイヤこれ〳〵。詞 譽め損ひが仕る。盗んだ奴は人も人取り分けて御坊の甥。地 證據を御目に掛けうかと久松を引出し。おのれ心に覺え有ろ。高津の坂をおりる時風に吹かれてちらほらと。あぢな身振りをしをる故心を付けて見て置いた。地 其下着出せ見せぬかと込付けられ

て久松は。うぢ〳〵するを無理やりに。主ならねども親も有る。アレれつきとしなる證據を取られし上なれば。盗人の名肩脱がすれば花やかかな。淺黄小袖の引かた叔父御から。して遣したとあるならは消えませぬ。久松おのれもよつく聞け。へしフシ見る目もいとゞ笑止なり。地色ば。其返答がむつかしかろ。よし盗んだ身が熱いとて狼狽て。同類呼はりなんど太郎兵衞きつと睨み付け。詞さて〳〵不にしてからが纔の金ではござらぬか。春して必ず外を損ふな。斯うなる筈と諦め敵な丁稚めかな。盗んで着るとは知らずの初めにいま〳〵しい取分けお染が顏持てお主の杖の下に死ね。親方殿も隨分として傍輩どもが云はうには。年季重ねしもたつた今迄よかつたに。騒ぎに氣をば力の限り打たつしやれ。地色さら〳〵以者どもには日野や紬の麁物して。久松づ取りのぼし又ぞや氣色惡さうな。たとへつて此方にお恨みとては申さぬとフシせれに何事を召さると主を恨み出し。不奉千兩萬兩にも娘が命は買はれまい。祈禱かぬも聲は震ひけり。地色太郎兵衞簾を公すりや身代の歪に成らうも知れぬ事。の代に遣つたとも思うて堪忍して下さからりと捨て。とつくと坐つて。詞法印地悔いと云うて上のないいたづら者と傍れ。法印殿も胴慾な盗人でない久松が。殿さりとては。嬉しいこなたの御心底。にある。簾押取りさん〴〵に肩背脈は下打擲かるゝをまぢ〳〵と見てゐる所ぢやあけて云はねど心には戴いてをります叩けども。叔父は餘所見て扱はず下女もござるまい。叔父樣がひに言譯の仕樣もる。地色子も同然の久松に盗人の名を付こはがり寄付かねば。お染は見兼ね驅寄やうも有らうこと。すべに依つたら私がけられて。さぞ口惜しうござらうが。僅るを母はうしろへ引戻し。父に色目を知同類ぢやとも云つてやろ。盗の主にもなの金に出來心さして恥にて恥ならず。詞らせじと立塞がれば押のけて。行かんとるわいの。思案を付けて給はれとフシ片世間にはまだ大それた横着者が居りますするを取り留め。競合ふ内も三ツ五ツ。地手を。上げて拜みける。詞法印言葉押鎮る。同行中に使はるゝ久松程な丁稚め倘飽足らず振上ぐる。簾に母は取付いてめ。御麁相仰せられますな。外より云うが。主の娘をそゝなかし嫁入するのをうむかつにござる旦那殿。詞小袖ひとつをて濟まうならお前の智惠を借らねども。るさがり。地うつら〳〵と煩ふに母親は着たるとて盗みしたとも云はれまい。地何の獸つて居りませう。何云はうにも慥只一概に。子の可愛に絆されて。浮名誹

も顧みず。地よしない巧事を云ひ。惡智惠付けるも父親が知らぬと思ふ愚かやな。詞とくより合點しながらも世間と義理にからまれて。見すく死ぬるを見るとても結納を取つた先樣へ。變改などはならぬ事。地色意見をすれば知るになる知りながら又嫁入すは。婿にかづける樣なもの例を以て云はうなら。詞値千兩萬兩の茶入茶碗に瑕有るを。隱して賣るは掏摸同然。知らねばこちに咎もなく買人もさのみ恨まじと。地色せめて心の取置きに思合せて久松を。打擲したも同類を知つても知らぬ意見の杖。打付くる手もわなくと苦しき老の所存をば。推量あつて久松が重ねて盗みせぬやうに。御意見頼み存ずると涙を隱す目の内に。親子の顔をつれくと。フシ守るも流石姙げなり。地色法印やがて久松を膝元へ引寄せて。天命知らず罰當りめ。詞たとへ壹錢半錢でも目を掠むるは横道者。況んや以つて是がまあ並體の盗人か。其不敵なる性根から叔父が所へのさくと。地盗物をば抱へて來て隱してくれよと頼みしな。女房はどこしも當分の義理に心が弱うして。請合ひながら兎や角とてにはの違ふ事有りしは。此法印が神明の加護に預る身の仕合。若しさもなくは今日は非道仲間に入れられて。當事苦口云はれても何と返答うつべきぞ。詞夜前其儀を聞くとはや胸に早鐘つきたれど。飾の内は面々が身祝をこそ致すなれ。五日三日遅いとてさのみ麁相も有るまいに。注連過ぎてから呼付けて折檻せんと思うたる。地所存が今で跡になりお主の杖を身に負うて。目の前叩き殺されても。言分の無い汝をば。まだ御不便が失さらずして意見を頼むなんどとの。慈悲なせつなきお詞は。犬猫にてもとつくりと耳の底へは應へる筈。長う云ふには及ばぬ事幸ひ牛王を持合す。今迄の儀を改めて何たる人が勤むるとも。ふつく盗みせまいとの血判をして見せませと。小刀を添へて差出せば。地色久松聲を打震ひ盗みは成程しますまい。血判は許して下されと拔差ならぬ中にさへ。戀の錨に繋がれて フシ離れ。難なく見えにけり。地色法印きつと氣色を變へ。詞扨々しぶとい丁稚めかな。汝は最早此坊主が。以前の武士を忘れたか。今長袖になればとて。是しきの儀を言掛りせぬとて後へ寄るものか。地是非厭ならば此小刀。喉笛に突込むと小腕うしろへ捩上げて。どうぢやくと突つかくれば。詞アイく成程致します實正するか。アイくと。地こちらは首肯きやあちらなる。お染は厭ぢやくとて。かぶり振るくふる涙。泣音を母は打掛の下に隱して押附けて。早まらしやるな

法印様。憎くば打ちも擲きもし。御意見ならば幾重にも騙し賺すが宜い筈を刄物を持つて無理やりな。それや胴慾と云ふものよ。牛王とやらは恐しい血判を捺して違ゆれば。罰が當つて死ぬるといふ假令久松心をば。持直さうと思ふとも。盗仲間が聞きやせまい。死なば一所と固めたる牛王に判も捺してある。そちらの罰が當らずばこちらの罰を被りて。若し久松が死んだらば同類も亦死ぬるであろ。跡に殘つた親叔父が老木の春を慰めの。花とて何を眺むべき死んで浮名を流すのと。生きて波風騒ぐのと思ひ比べて見たがよい。人の誹も嘲も七十五日過ぎぬれば。止むとこそ聞け珍しき顔をも活けて見るならば。目出度いなどと悦ばん死なせて後に何方で。逢うて嬉しと思ふべき。例へば指が汚いとて。切つては捨てぬと云ふものを一人の甥を殺さんとは。大賊の身もせぬ事ぞ衣着ながら無慙なる。人心やと氣息まきし フシ 覺えず。知らず。泣出す。 地色 至極に詰り法印は。さすが持つ手も弱々と。 フシ 暫ためらひ居たりけり。 地色 太郎兵衛近く立寄りて。 詞 御眞實なる意見故。得心顔を見屆けてさつばりと氣が霽れました。牛王に判を据ゑたらば盗人といふ悪名が。其身一代剝されまい。 地 さう極れば此内の家來にしては使はれぬ。暇を遣らば世間から太郎兵衞程の身代にて。僅の銀で久松を追出したとは心得ぬ。いたづら事ぢやあるまいか如何か斯うかと跡もなき。取沙汰などをせられては御苦勞頼んだ甲斐がない。 詞 元來彼奴が生付悪所狂ひをする様な。性根は曾て下げぬやつ藪入前に成りたれば。奉公ぶりがよいなどと親へ潜上云はんため。 地 孝行からの出來心奥頼もしき所有り。恥と思はで何時迄もよく奉公を勤めよと。ほや／＼云へば面々も少し落着く顔形。牛王も元の袖に入れ小刀も鞘に納まつた。 フシ 御代の春とぞ祝ひける。 地色 太郎兵衛重ねて慇懃に。まづ以つて法印様。年の始に様々の御世話ばかりを掛けました。お禮は參つて申すべし是が佳例のお初穂と。 地 懐よりも一包扇に乘せて差出せば。あつとばかりに挨拶も。出兼ね云ひ兼ね堪へ兼ねて。金の脈とる心さへ。泣く。／＼我家へ 三重 へ歸りけり。

地藏めぐり道行　下之巻

二上リ相ノ山 夢に見て現に逢うて。幻に立つ甲斐。もなき妹背鳥。 合 つがひ離れて。跡や先。しやれた。振袖加賀笠に紅絹の絎紐。抱帯若紫の ナホスフシ お染こそ。上の空なる。薄化粧。こましやくれたる取成を。君に見せばやつくり木

の。いく久松と云ひ交し。長地 忍び／＼の寢油をとけてぬる夜の數積り神に事寄せ今日は又。地藏めぐりに託けて。春の道草爰そこと。フシ 人なきへ道は。手を引きつ フシ 一人託ちて。行くの道。二人が仲の災難も。又は天滿も遠ざかり。今日は心もよしはらの。無常の煙立昇り。小オクリ 西とへ東へ國分寺。突出す鐘の三つ頭。フシ 數へながらも伏拜み。賴む誓や法の舟。淺さで濟ふ網島に。かゝる鯉鮒市立てゝ。二番に立てる フシ 大長寺信心深く行く先に。見返る人も在原の。本フシ 當世男千鳥足。ちりぬれそめてゐひもせず。はや京橋を打渡り番場を見ればへ氣も晴れて心も晴れて。廣小路。彌陀正覺寺有難や。スヱテ 庭に作れる梅が枝に。鶯來鳴くしをらしや。フシ 本尊かけたる二世かけて。變らぬ仲の羨まし。ナウあれを見や數々の。鳥も戀する色か

せぐ。梢々に。飛びつれて羽と羽とを合せては。フシ 今やあふむの床の内。ダ、キ 何うぞ鳥といふも有り。扨も聞えぬ時鳥。フシ 泣いて明せし。ツキユリ 涙には。石の枕も朽ちぬべし。此方ばかりに思へとはいつぞ死ねとの兼言か。僞多き人故に。あたら此身をつくし舟あこがれ。こがれ今日の今。人目も恥ぢず迷ひくる。それぢや。／＼。先づそれぢやいの。それ アタル すいた御心中。儘ならぬ身をかこち草。露よ。時雨よ染樣と泣いつ笑うつ取亂し ナホスフシ 思ひ直して顏と顏。色の緋櫻。燃え出でてほやけ地藏の慈悲厚く。直ぐに急げば天王寺。五番の札所 フシ 是とかや。逆緣ながら六番は。遙か戍亥の法善寺。スヱテ 是より拜し奉る。地 南無歸命頂禮地藏尊。地色歌 哀れ拙き我等かな知らずば扨もやみぬべき。既に此理を辨へて後世をば恐れぬはかなさ

よ。婆婆にて慈悲の名號を一たび唱ふる功力にて。業にひかるゝ魂魄を導き給へ地藏尊。ナホスフシ 所願を。爰に打納む。道頓堀の果て太鼓。いざ生玉の借り座敷うさを語らんこなたへと。心いそ／＼ フシ ちよこ／＼と。八幡宮の右左。爰へ爰へと招かれて入日の影と諸共に。おくそこもなし人もなし。誰もないぞと伊豫簾二人が姿木隱の床机に。夢をや結ぶらん。フシ げに大阪の。東山。千代を數へて生玉の。社は殊に春めきて。常磐に見えし萬歲も。能も放下もわつさりと フシ 聲若やかに立渡る。地色 お染は跡を振返りコレ／＼久松あれを見や。詞 アノ看板の書付に。お染久松祭文とは。地 餘所にも丁度同じ名があれば有るものさりながら不思議な事と立止る。久松は打笑ひ廣い世界に同じ名も。同じ戀路もあるべきが歌に歌ふはこちとより。切ない事があ

るであろ。ござんせちよつと聞きませう。如何にもおれもさう思ふ餘所の久松器量さへ。そなたにちつと似たならば。餘所のお染もてつきりと。フシ 惚れたであろともたすれば。地色 成程餘所の久松はわしより鼻が高いげな。餘所のお染に此様な。靨は無いと戯れて立寄り聞けば錫杖の。聲無常めく祭文に 祭文 へ所は都の東堀。聞いて鬼門の角屋敷。瓦屋橋とや油屋の。獨娘にお染とて。心も花のナ色ざかりの オクリ 年は二八の細眉に。ナホスフシ 内の子飼の久松が。大夫地 二人ははつと走り退き。木蔭に顔を突合せ此身の上を何者か。爰へ持て來て歌はすとそなたは心が付いたかや 詞 おれが思ふはとと様の昨日の様におつしやつても。思ひ切りそに見えぬ故戀が募れば此様に。地 口にかゝるといふ事を人頼して御意見の。廻者ではあるまいか 詞 イヽヤさうではござんすまい。こちとにさへも打明けぬ深い旦那の御心で。出所の沙汰には成されぬ筈。こりやお袋の才覺で。浮名が立たば緣組の先から變改するであろ。そこでは私とお前とを。地 女夫にせうといふ事ぢやと仇頼なる早合點。フシ 又も葦簀に立寄れば。祭文 へこなた嫁入嬉しかろ。わしは生きても死んでもぢや。たとへどのように云はしやろと。誠があらば緣付は。ナホスフシ なされぬ筈と云ひければ。地 アレ聞かしやんせお染様わしが心の恨をば。云はねど知つてお前をば不心中なと云ひはやす他人の口の恥しと。フシ くねり掛れる女郎花。地色 お染は顔を打赧め。そなたの心を知るからはおれが思うてゐる事も定めて知つて云ふであろ。この跡聞いて其上で悪くば詫言せうわいのと耳を寄すれば祭文は。今が哀れの最中と。スヱテ 語るも聞くも涙なり。祭文 へ勿體ない事何として。お主様をばわしが手にかけられましよと云ひければ。お染涙にくれながら。何の我身の。殺しやろぞ。跡を頼むといふ聲も。ナホス地 南無阿彌陀佛と諸共に スヱテ 終に自害し果てにけり。大夫地 二人は興も覺め果てゝ轎てかしこへ立隠れ。顔見合せてうつかりとさりとは何といふ事ぞ。此身は爰に悪災で連歩くのにまざ〱しい。嘘つくとても事による。年の始にいま〱しい人目憂目も思はれぬ。往て強請らうか喚こかと。うろ〱せしが久松は。地 心を鎭め小聲になり。詞 いや申しお染様。あの者どもが云ふ事を。嘘と思へば嘘なれど誠に聞けば皆誠。お前とわしが身の上をよう思案して見ますれば。不思議な事ぢやござんせぬ。叶はぬ事をくど〱と御苦勞かけに物詣。地色 神や佛のお心にとても死なねばならぬ身と。人に教へて行末

を知らしめ給ふと合點すりや。長くも生きぬ此命最早死んだも同然と。思ひながらもがつくりと手足もなえて悲しやと。スヱテ どうど坐つて泣出せば。地 お染もわつと聲を上げ責にもはかなき我々かな。命はいつを知らねども此大坂に幾人か。今迄心中多けれど死なぬ先から此様に。唄絵草紙に載せら、これが亡き跡をわが聞いて。泣くと云ふのは古も。フシ 又後の世もよもあらじ。地色 たとへ心中するとても跡に心は殘らねど。おいとしいのは母様のとつつおいつも苦になされ。お氣の短い父様へ此事知れぬ様にとて。蔭へなり又日向へなり。御意見あるも聲低う。涙交らぬ事はなし我はいかつな口答。詰る所は死にますと。いぶりを出せば氣遣うて夜着に卷かれて寢ずの番。憂き苦勞をばさせませし親の罰でも行末の。よからう様には思はれずよしは

死んでも添ふ事が。なればよけれどあの世をば見た人もなし言傳が届くも知らぬ片便宜。心元なき冥途やと。久松に抱付き フシ 身を寄り。伏して泣き惑ふ。詞 ヲヲ御尤先の世は。私とても知らねども。折折旦那の御供して。談義の上で聞きました成程地獄も佛も有る。大きな蓮華の其上に女夫〱は並び居て。寒い悲しい事も無う千百年も居るげなが。地 二つ取には此世にてせめて一年半年でも。主よ女房と云ひ云はれ所帯とやらがして見たい。百萬石の大坂に身の置所なき様に。心苦しい我々が憂をばせめて忘れうと。爰へ來たれば此憂目聞けばとにかく死神の。行く先々へ付廻り。催促するか責むるのか。最早宮へも參るまい スヱナ 歸りませうと手を取れど。地色 お染は更に立上らず。出にくい內をぬけ隱れ。又戻つては色々の辛い事をば聞くであろ。いつ

その事の出ついでに。日は暮れようとも明くるとも浮れ歩くかさもなくば。連れて退く氣はないかいの。詞 アヽ扨叶はぬ事ばかり。行く所ありや何時ぞやの折にどこへも退きまする。お袋様の下されし命を延ぶる妙藥の。金とてもなし知るべはなし。地 死ぬる時節を待たうより外に思案はござらぬと。互に袖を取交し。立ちては泣いつ居ては泣き フシ 泣くや涙のきぬ〲の。フシ 別れをつぐる。鳥ならで。實突く寺の鐘の音に。身はかげろふの有りやなし。胡蝶の夢と覺めはてゝ。宮居と見しは本來の。空に歸るや石の火の。光乏しき油屋の我住む內とへなりにけり。

地色 帳場に眠る久松はむく〱と起上り。胸押しさすり息をつぎあたりほとりを見廻して夢は夢ぢやが現にも俤は猶忘られず。お染様はどこにぞい悲しい事を

見ましたと。語りもしたし顔ばせも今日又見ねば懐しと。人に心をおくの間の ス ヱテ 障子を戀の八重垣に。妻や籠れる久松も。爰にいるさの月影に。横雲かゝるばかりにて フシ 立ち煩うてゐる所へ。地色 山が屋よりも呼使五郎八は走り來て。詞 旦那様お家様お染様をば連れまして。お早うお出なされませ。相伴衆は待ち兼ねて汁や煮物の加減さへ。地 違ひまするると追々に呼びにぞきその山が屋の。フシ 使は早く歸りけり。地色 太郎兵衛夫婦立出でて日がたけたものさうであろ。娘は着物着替へたかお染。お染とせはしなう呼び立てられてあい〳〵と。明くる障子の髪形取繕はず何事を。泣き腫したる目元して。詞 かゝ様わしは往きますまい。假寢の夢に忌はしい辛さにいかう泣いた故。地 今につぶりがふらついて。どうも起きて居られぬと顔差入るゝ襟の下。そつと覗けば久松も同じ夢みた顔形 フシ 云はねど。胸に應へけり。地色 母も心にかかれども。笑顔作つてホヽ〳〵。詞 をかしい事をいふ人かな。夢は逆夢どの様な悲しい事でも此母が。判じ直してよい様に目出度う解いてやりませう。今日



山が屋の振舞はこちとは假令そなたをば。呼びたいからの造作をば行かぬと云ふも愛想ない。地 ちつとの間往てつい戻りやいざやと云へば太郎兵衛は。詞 ソレ〳〵。母がいふ通りおぬし一人が正客で。れつきとしたる二親は御機嫌取りの太鼓持。地 指の股でも廣げうに兎角心をわつさりと。持つが物事目出度いの。燒物燒鳥取分けて。料理は自慢たら汁と オクリ 勇みへ賑して行く跡の。憂身は何と。地 久松は。常磐にあらぬ常磐木と。フシ 變らぬものは涙なり。フシ春の日かけは。明けき。折知り顔に梅の花。ありとや爰に鶯の鳴音は月日ほし無青。年頭歳暮の御

禮をば一荷に荷ふ藁苞は。野崎村の久作が フシ 物もうとこそ言ひ入るゝ。久松は立出でて。詞 ハア親父様ござつたか。今日は屋内が振舞にお出なされて誰もない。地 こちへ這入つて草鞋の。紐も解く解くお休みと オクリ 連れ立ち〽内に入りにけり。地色 久作 きよろ〳〵見廻して。御夫婦共に留守さうな。詞 見ればお上に錢箱や懸硯など引散し。和御寮一人に留守させて。出歩かるゝはよく〳〵に。奉公振がよいものと。嬉しい〳〵さりながら。おれも今年は六十二。何時まで田畑せゝつても切れ變つたる果報をば。掘出さうとも思はぬ故おぬしに世をば打任せ一枚敷でも取圍ひ。寢起を樂にせう爲に隣の茂四郎が狡猾者。おくめを嫁に貰うて置く。地色 おぬしが暇も貰ひに來た旦那へ禮は付けたりと。落着顏に言出す久松はぎよつとして。詞 成程さうもござらうが。わしが年季はまだ三年是から先が御奉公。留守も預り外向の御用にも立つ最中に。地 そんな事をば云はしやつたら旦那が腹立致されう。お留守の内に歸らしやれ フシ 早う〳〵とせりかくる。地色 久作は打笑ひ。詞 イヤ〳〵そこは氣遣すな。緣故や其身の浮むには。どつこの山椒太夫でも悅び暇をくれるもの。地 旦那に云ふと早速に暇は扨置き着おろしの。袴肩衣貰うて見しよ。久松は氣色を變へ。如何にこなたが文盲な土百姓でも相應の。義理と法とは立てるもの。七ツの年に内方へ連れられて來て正眞の。西も東も知らぬ内御夫婦様の世話になり。手習算盤其間に四書の素讀も習はして。今獨食する迄は親より深き御恩をば。禮奉公とも云はずして年季の内に出られうか。旦那は合點しられてもわしが去なぬと云放す。久作側へ差寄つて。詞 親方殿のお蔭にて物讀もした證やら。さつぱりとした挨拶の。道筋立つて面白い。おれは無筆の明盲何の差別も知らぬ故。主の娘を勾引して淫奔かはく學問は。地 倘かし聞きも習はぬと睨付けられて久松は。詞 ソリヤまあ何をおつしやると。地 云はせも果てずヤア諍ふまい〳〵。詞 おのれが身持の有りたけの底を叩いて法印に。皆たつた今聞いて來た。扨々汝は憎い奴。一人の親に差向ひよう惡口をぬかしたなあ。地 土百姓はするけれど子を盜人には産付けぬ。恥を思はゞ其儘に在所へ逃げてはなぜ戻らぬ。主に憎まれ傍輩に汚れた頰を押拭ひ。娘御寮やお袋の機嫌を取つて此家の。跡してやらう慾心か。詞 品に依つたら其様な首尾にも若しはなつた時。打擲した父御前は。結句諦めもよからうが。贔屓召さるゝ母殿の心の内には汝めが。地 喉のあたりへ喰ひ付こか。刃物を

持つて身の内をば。切りさいなんても棄てたかろ。詞なれ共こちらを痛めれば。あちらのわちよがあたけ出し。地死ののきよのに持餘し花香もあらぬ祝言に。隣あたりへ歴々の婿や舅の通るのを見る度毎にくし〳〵と。娘一人をむざ〳〵と棒に振つたは久松の。犬め故ぢやと果てしなく。一生睨み付けられば金の中から目見出すと。何が手柄に成る事ぞ。詞アノ法印めが事を見よ。兄弟なれどおれよりは智恵も器量も勝つたと。二親達が自慢して武士の養子にやられたが。それも仕遂げず今は又。あぢな商賣目論んで。上下小袖ひつ違へ衣の肩はいかれども。地おうた門をばひそ〳〵と肩身すぼめて通るげな。地色其内證の苦しさは思ひ遣るさへ。笑止なり。在所住ひの氣散じは腰を屈める相手もなく。悪所すゝめる友もなし榮耀喰こそ不自由なれ。乏しい月日はつひにない。人間一生安楽な親の家をば譲るのを。厭とぬかすか罰當りめ。詞其性根とは知らずして此冷たいにおれを見よ。素足で居れどおのれめに穿かさう爲に此足袋を。地持つて來たのが悔しいと振上げ〳〵七ツ八ツ。さん〴〵に叩き伏せさあ無念なか。口惜しいか。詞親の叩くは慈悲の杖。主の打つたは憎しみの。杖をしたゝか受けたげな。地親子二人と分つても木に譬へれば子は枝よ。枝を叩けば木の本の親に當つて苦しいと スエテしやくり上げたる。久作が胸の。内こそせつなけれ。地色道理に迫る久松は。親の顏をば打守り。とかう答へもあらばこそ浮世の中に我程な。不幸な者はあるまいと フシせき上げ〳〵泣き居たり。詞久作愈々腹を立て。不幸と自身知つてゐる人でなしには手がつかぬ。地色子と思はねば濟む事ぞ七生迄の勘當と。顧みもなく言捨てゝ立たんとするを久松は。裾に取付き引止め。詞我と不幸と申すこそ。地背くまいとの詫事ぢやさりとは赦して下されと。手を合すれば久作は。詞ヲヽそれで我子よ可愛子と。地引寄せ〳〵撫で摩り フシ乳も呑ませたき氣色なり。地色稍あつて立上り思へば留守へ入込んで。悪智恵などを付けたかと親方殿に思はれては。暇を願ふ邪魔になる平野町迄往て來るぞ。着類半がへ取りおかば篤と我物人の物。見分けて雪駄片足でも。さもしいなどと云はれなと急いで出でしが何とやら。心がゝりてうぢ〳〵と又立戻り。コレヤ久松。詞なんぼ悲しい事にても。三日四日の水離れ。宿のおくめが縮髪。地見てや止みなん葛城の オクリつらきへ別と フシ後ぞ知る。地色久松は只うつかりと夢と現の悲しさは。思ひ比べて思案して。見れば見る程どうしても。

死なねばならぬ身の上を。二つ取には諸共に。死んだ夢こそ増ならめ。ステテ 覺めて悔しと泣き惑ひ。地色 兎角する間に人や來ん親や戻りて此上の。憂目や見んと急がはしく。硯と紙を持ちながら オクリ 心のへ闇路暗きより。フシ 藏の窓こそ。極樂の。東門なりと伏拜み。佛樣よりお染樣娑婆のお顏を今一度。見たやと思ふ一筋に。心や行きて誘ひけん。地色 お染はひとり駈戻れば。久松窓より顏出して。詞 もう私は覺悟して只今爰で死にま。する。ヲヽ、さうであろ／＼。地色 我も假睡の夢の内心中したと思うたは。神や佛の御導それを語つて諸共に。死なうと思ひ極めて來た。なぜ藏の戸を明けやらぬぞ。詞 イエ／＼爰へござんすな。二世とは云へど親達の許さぬ内に御一所に。地 死ぬればわしは主殺しあひも變らぬ夢の內。云ふ事聞く事語る事皆蓋果てゝ魂は。連れて冥途へ往たである今の身體は空蟬の。空しき此世を恨みても。泣いても最早歸らぬ事さらば／＼といふ聲も心もさすが細引を。首にくる／＼ひん卷けば。お染も何の後れうと。剃刀出して忽に紅流すみつせ川。地 冥途の坂に久松も哀と消ゆる春の雪。白きを見れば死顏の一つ蓮の生如來。さかさま事の弔ひに死光する燈火や。お手の物なる油屋と。樽にしるして國々の。其國々の果迄も言の。葉草となりにけり。

右之本逐吟覽頌句音節墨譜等不違毫釐令加筆且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也

豊竹上野少掾 [印]

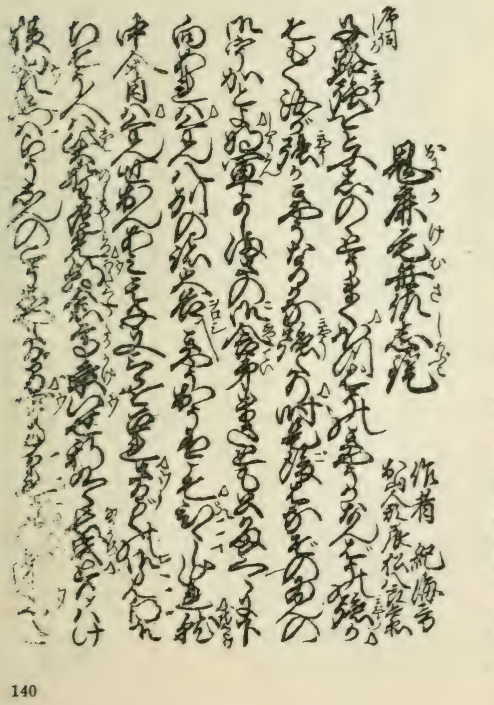
作者 紀海音

大阪上久寶寺町三丁目
正本屋 西澤九左衛門版 [印]

鬼鹿毛無佐志鐙

作者　紀海音
お山人形　辰松八郎兵衛

作詞子路強を問ふ子の曰く。北方の強か南方の強か。そもく汝が強か強たる哉強たり。時維後花園院の御宇かとよ。将軍義政の御舎弟政知公鎌倉に下向あれば。關八州の諸大名　オロシ饗應あるこそ。美々しけれ。地就中今日は観世音阿彌その子又三郎を召され。猿楽の御見物御馳走人は斯波の爲光。朝倉高景伊勢新九郎長氏。とり分け横山左衛門は老臣の功者たる間。萬事彼が指圖に從ふべしと。上の仰を鼻にかけ生得利慾にして。へつらへるを悦び直なるを嫌ひ。斯波の爲光を贔屓し小栗は婿ながら憎み。度々の悪言を聞かぬ顔して居給ひしが。御能も最早四番過ぎ中入の間に人々は　フシ廣間に。出でて休息ある。地高景小栗に打向ひ。詞誠に多藝程羨しいものはごさらぬ。貴殿の高砂の小鼓殊の外殿の御機嫌にて。我々ども迄大慶に候とあれば。横



山打笑ひ。朝倉殿とも覺えぬ御挨拶。一色に勝れるを茶臼藝と云ひ。取りまぜて習ふを石臼藝と申して嫌ふ事にて候。昨日斯波殿の的射の御上覽こそ。侍の一藝なれまさかの時に鼓にて人は切られまい。其の上自身が何程自慢にても。太夫が目からはさぞをかしからう。地正眞の面の皮の厚いとはかやうの事を申すぞと。苦苦しく云ひければ。傍に在合ふ面々は小栗は短氣な人なれば。もしや凶事の出で來んとフシ固唾を呑んで居たりけり。地小栗は何とか思はれけんずつと立つて白洲に下り。中間與四郎と召さるれば早御立かと御刀を。かたげて傍にうづくまる。詞小栗近く寄つて。汝主を大切に。思ふ所存を見屆けて侍に引上げ度う思ひしが。不具なる故今迄は延ばした。其の刀を其の方に取らする間。今よりは侍ぢやと思うて。主のために忠を勵めと宣へば。地はつとばかりに與四郎の涙は髭にたまりけり。詞ヲヽ嬉しいか嬉しい筈。扨某はかく〳〵の事ありて横山を討果す覺悟ぢや。汝はいぬゐへ歸りて。照手の姫に暇を遣はすと傳へよとあれば。地與四郎はぎよつとしてせけばせく程否應の。詞も出です腕まくり。主の御供をする顏にきつばを廻し見せければ。小栗御覽じヤレ狼狽者。詞相手向ひの口論に助太刀が要るものか。汝を侍にしたは弟の大六に奉公せよといふ事よ。立歸つて大岸宮内と心を合はせ。弟を守立てくれよ。地それこそ死に勝る忠節よと詞を盡しのたまへば。とてもお供は叶はぬよとうらめし顏に與四郎はオクリ泣く〳〵へ館へ急ぎける。地小栗座敷に立歸りさあらぬ體にもてなし。横山殿そと御意得たき仔細あり暫く是へとのたまへば地何事やらんと左衛門次の間につつと出で用事如何と尋ねける。詞小栗傍近く立寄り。イヤ餘の儀にあらず。尤も婿舅の挨拶心安き餘りとは存じながら。度々の惡口殊に只今の一言。歷々の中にて面目を失ひたる無念。骨髓に徹りて堪忍ならず。お覺悟あれと云ふより早く小刀を拔放し。疊みかけて切り給ふされども烏帽子に障へられて。切先はづれに背中に當れば。あつと云うて倒れしを今一太刀と進む所を。斯波の爲光後より。抱き留むれば諸大名。我も〳〵と立掛りまづ雙方へ分けにけるフシ無念といふも限なし。地此の由上へ訴へれば。武士の遺恨はさる事なれども所といひ折といひ。かた〴〵もつて狼藉なり小栗に腹を切らせよと。もつての外の御機嫌にて朝倉は太刀取り。新九郎は檢使の役前後左右に取圍み。いぬゐの館へ連れて行く。屠所の羊の三重へ心なり。ハルフシ鐘さえ聞に。色つけて。地い

ぬゐの窓に月ぞいる。照手の姫の玉の照る。鴛鴦の池の水。絶えず濁たり松風の。連理の枝をならさぬとや。然るに姫君この程は枕も重く氣も重く。朝夕好きの玉琴もつい投げやりて脇息に。凭れかゝつてつく〴〵と物思はしき氣色なり。局いふやう。この程は何を遊ばしても御氣むづかしさうな。閏年には槌の子も。靑梅好くと聞きましたが。もし左様のお覺はござりませぬかといへば。おはしたの梢進み出で。今朝針立の道閑様の仰しやるは。御姫様のお煩はお泉水の水の減りぢや。殿様のおつき山好きなさるゝからぢやと云はしやんしたと。お氣慰みの惡口も女奉公は氣樂なり。姫君聞召し氣合の惡い事もなう。たゞ浮か〳〵と起きもせず寢もせで夜を明かしては。春のものとや戀ならん。唯世の中が味氣なう思はぬ涙が零るるなり。殊に過ぎし夜見し夢に君の寵愛なされける。重籐の御弓を天より鷲が舞下り。三つに蹴折りて末筈は奈落へ沈み中程は。火焰と燃えて元筈は武藏野の叢に。卒塔婆となると思ふ時。自が持ちなれし十二の手箱のその内に。唐の鏡が候が一大事のある時は表が曇り見え分かず。裏には汗をかくと聞く是をも鷲が舞下り。二つに蹴割り片割は奈落へ沈む一つは又。卒塔婆鏡に打つと見し夢占などといふ事の。あるとは聞けど何故に我身に惡しき夢ならば。人のためにもつらからんと世に味氣なくのたまへば。ハテつがもない世の中の夢は仇夢なるものを。そんな時には花結び偏突などを遊ばして。紛らかしたがよい筈と。又取出す歌加留多假名に戀しとばかりなり。かゝる所へ與四郎は顔も目元も狂人の。狂ふが如く走り來て局下婢を突退けて。姫君に抱きつき。何をいふやらうめくやらしやくりあげてぞ泣きゐたる。姫君は興覺めて何事の起りたるぞ。心もとなや與四郎よ早う語れとのたまへば。とゝゝゝ殿様のけゝゝゝゝ。局聞いて早う語りやと云へば。けゝ喧嘩をなされた局おはした立寄りどうぢやと口々に問はれていよ〳〵サアけけけんくわをなされた。姫君は呆れ果てコハ何事の起りしぞとうろ〳〵涙におはします。局與四郎が傍に寄り。これ此方はせけばせく程一倍吃つて理が聞えぬ。平常の通りに土佐節で様子を語りやと云へば。打ちうなづきて畏り先立つものは涙なり。飛花落葉の風の前には。有爲轉變のさとり。電光石火の影の裡に。生死の去來を見る事よ。命は金玉よりも重く。義によつては又輕しとかや。いたはしや我君は。

弓馬の家に生れ來て文武の道を分け過ぎて。戀の山路に入る月の。照手の姫に馴れそめて フシ淺からざりし契さへ。許さぬ仲と横山の。横に行くこそ口惜しき。ふすまの小鹿仲のよい君に名殘の深緣。柳にやつて暮せども今日は如何なる惡日にや。一度の慾を押鎭め。二度の無念を凌げどもすは。三度にもなりしかば覺悟極めて某に。遺し給ひし言の葉のこの刀をば賜りて。立別れ行く道の邊の一足來ては振返り。二足三足歩みてはなそたの空を眺めつゝ。さぞ今時分一念の刄を拔いて横山が。 地首打落し其の身にも御腹召され候はんと。語りもあへず姫君はそれは誠か悲しやと。覺えずわつと泣給へば。在合ふ局おはしたも フシ皆々聲を合せける。 地やゝあつて姫君は涙の隙にのたまふは。恨めしの父上や情ない心やな。誠に人の噂にも夫を憎み給ふとは。聞けど語れど僞の世の陰言と思ひしに。如何なる者が身となり。婿となつたる因果ぞや賤しからざる御身にて。月と花とに憎まれて。世をうき雲のはかなくも。先立たせ給ふかやいつ〳〵よりも今朝は猶。笑顏もようて殿ようて。やがてと云うて締められし此の手ばかりが形見かと。袖に取付き座を打つて歎き給ふぞ哀なる。 地然る所へ乘物の左右を圍む武士の。前後四方に目を配り人々を追拂へば。姫君局與四郎も。是は如何なる事やらんと フシ傍よりも覗きゐる。 地高景腰より鍵取出し乘物の錠あくれば。長氏やがて立掛り兼氏の手を引いて オクリ座の眞へ中に直しける。 地姫君一目見給ふよりナウ我が夫か悲しやと。走り寄らんとし給へば。兩人中へ立塞り。 詞法式なれば叶はぬと苦々しくも突退くれば。 地姫君は聲をあげたとひ如何程堪忍のならぬ事のありとても我を可愛く思召さばかく短慮にはない筈と。恨み歎かせ給ひける。 詞小栗御覽じ夫ながらも父親の。仇と思はば自をさぞ恨めしう思はれん。その與四郎に云越して夫婦の緣を切つたるに。 地某が不幸にて再び詞を交す事。面目なやとありければ姫君は聞召し。ナウ胴慾なお詞や親に似ぬ子はなきといふ。その諺に我も亦さもしい心あるらんと。思召すかやはづかしの。もりて仇名のたつか弓引いて見るのか。口惜しや其の刀貸せ憂き事の憂世の暇をあけんとて。與四郎が腰に手を掛け給ふ。小栗暫しと聲をかけ。 詞今云うたのは親子の義理左程に我を大切に。 地フシ思ひ給ふか嬉しやな。今は歎いて叶はぬ事。樒赤木をさげ尼の跡懇に弔ひ給へ。武士の最期は晴なもの早々其處を退き給へ。それ〳〵とありければ。女房達諸共にあつと涙に答して。

姫君の手を引いてオクリ奥の方へぞ入りにける。地とかく時刻も過ぎぬれば三方に太刀を乗せ。小栗の前に直しける。詞兼氏につこと打笑ひ。先づ御兩所御苦勞の段。御禮申すべきやうも御座なく候。御退屈に思召さん。急ぎ御介錯頼み存ずるとあれば兩人聞いて。御懇意に御意得候て今更殘念の至り。地ゆる〳〵御用意遊ばせと。慇懃に挨拶し太刀取後に廻りければ。兼氏三方引寄せて刀を右に取りながら。詞いかに與四郎最前も云ふ通り。早く國へ立歸り大岸宮内その外の者共にも。横山を討洩らして無念なと傳へよと。地是を最期の一言にて。腹十文字に切り給へばフシ首は前にぞ落ちにける。地姫君あはて走り出で。頭を撫で身體に添ひスヱテ平伏し歎きおはします。地實に理と思ふから兩人の人々も。涙ながらに暇乞ひフシ舘を。さして歸りけり。地さてあるべきにあらされば。フシ死骸は彼處へ直しける。地與四郎はたゞ茫然と。差俯向いてゐたりしが。物をも云はずつと立ち門外さして出でければ。姫君御覽じ我をば棄てゝ與四郎よ。何國へ行くぞ諸共にお國へ連れて下れよと。呼べど答へず頭振り。いや〳〵と手でして見せる。姫君腹をたて給ひ。詞なに自を連れまいとや。只今夫に別るゝと早汝等も蔑るかと。地長刀持つて駈出で給ふ與四郎是はと押靜め。ドモリ詞扨々女儀とてお氣が短い。我々どもが主の敵と思ふはお前の親横山殿よ。然らばその國元へお供はなるまい。はた又傍輩衆の所存もあるべき事。よく〳〵御思案遊ばせと云へば。地姫君も涙ながら優しの者の詞やな。彼を云ひ是を歎くも夫のため。その敵を討てよとは心の中の問答。宮内にも云へ汝も亦。敵を討つに露程も遠慮はないと合點せよ。自も亦夫への心中立てゝその上は。又こそ逢うて語るべしそれ迄は主従の。緣は戻すぞ心底を。水に流すな急げやと。勸めたまへば與四郎も亦泣出す泣節も。後は勇みの一拍子おのれいつ迄おくべきぞ。光陰の三十羽の矢。一つ番ひて横山が老の首。三郎が若木の首雪と櫻の二つをば。無常の嵐に追拂ひこの。無念を晴らさんと飛上りはね上り互に交す約束の。石に立つ名も石の名の堅き心ぞ頼もしき。實に頼もしき男やと皆々後を見送りし。

第二　照手の姫道行

獨寢に。我が手枕の添臥も泣いて暮する床の内。しばし假睡む暫し間も。夢に夢見るフシ夢なれや。うつゝがましきたはれにも千代もと契るその人はあだし野の露消えて行く。スヱテその亡骸をあへな

くも遂はかなしやつきこめて。せめて標もあらばこそ恨は。富士に。立つ煙比べて。燃ゆる我がほむら。親といふ字に思ひかへ。詮方なみだ片思。片輪車に我夫の。なき佛を隱し乘せ　オクリ御寺にへ納め御菩提解いつ卷いつの引綱に。お側使の女の童。フシオクリ女綱男綱に手を掛けて　フシ御供申し出でにける。ハルフシ心は物に狂はねど。姿ばかりは物狂　詞風折烏帽子眉深く。直垂の袖結びあげ。ナホス笹の小笹の一枝に四手切りかけて打肩げ。先に進みて玉鉾の。捗らさりし道なれば　詞音頭を。とつて引かせうぞひけや。ひけのの。この車やれ我夫の我夫のナホスフシ姿よし野の花盛り。フシ柳櫻の。たよ／＼と流石都の御所櫻散りてへ配所の月をだに田舍櫻と眺めやり。長地いつしかあひに相惚れの。一重櫻も重なりて八重九重と契りしに今は仇なれ味氣なや　相ノ山花は散りて

も。春は咲く散りて。歸らぬ死出の道。野邊より。あなたの伴とては血脈。一つに　ナホスフシ數珠の數。地一蓮託生頓生菩提うかみ給へと木綿四手も涙にほす間なかりけり。思へば憂しや父上と兄三郎の惡逆は　スヱテ數ふるに暇なし　ハルフシ空飛ぶ翼。地を走る。畜類迄も子を思ふ。まして我子の婿がねを。何故頓しも如月に。あへなき御最期　フシ詮方なし。後に殘りし白は浪に揉まるゝ棄小舟。歌迷ふ戀路のむごや辛や。胴慾や。ようは殺せしその悲しさを。今に忘れぬ　ナホス涙川。涙の雫遠近の。たつきも知らぬ山中をたどり。たどりとみくり坂。フシ上りて君に逢初めし。姿優しや目にちら／＼と見る目恨めし。戀すてふ。わが名はまだき立ちにけり　本フシ人知れずこそ。思染めにし染羽織。繻子の下着に錦の上着。金元結の茶筌髮二つ刀の落差し。蓮葉で華奢で公[illegible]で。

どうも堪らぬ形振もなか／＼今は物云はず笑はず泣かぬ石佛。詞所髮はおどろの如くなり。足手の爪も取らされば。鷲熊鷹にさも似たり。ゆかしなつかし我夫と泣くより外の事。ぞなき。あはれ昔の戀草をキンオクリ待乳がへ原に相模川たとへ姿はさがなくと。せめてそれかと一言を互に交すものならば。何の思か有明の月日の經つに從ひて。フシ猶いやましの思草。朝な夕なのかこち草足柄箱根玉津島。貴船や三輪の明神は。夫婦妹脊の睦言を守らんとの御誓。神も佛も僞の空定めなき浮世やと。車の前後にとりついて或は。歎き或は恨み。もつれもつるゝ藤澤の御寺に　三重こそは着き給ふ。

地天は勾踐を空しうすることなし。時に范蠡なきに非ず彌猛心の一筋に。白き小袖に上下の淺黄につるゝ露の身や。ゆかりの藤野梶右衛門人忍ぶとて編笠の。日

陰者とは誰も知る　フシ藤澤寺に到りつつ。地御墓の前に跪づき樒さゝげて水を向けスヱテ暫く禮拜落涙の。數行の内に伏し倒れそゞろに時も移り行く。あれ大勢の人音と立つ手立つ足定まらず。横に着るやら笠の緒を。結び止めぬ後や先オクリ先づかたへはらに入りにけり。地是も同じく白裝束御墓詣の禮袴。大岸宮内を始として吉川中右衛門。原田長右衛門武内只八。寺井吉左衛門その外數多入り來り。各御廟に拜をなし心の玉の數々の。詞の品も事終り御寺へかくと案内す。暫くして和尚立出で。詞ハレヤレ御奇特の御參詣。誠に御主人不慮の儀につきお果てなされ。さぞ何れもには殘念に覺されんさりながら。劒に掛り水に入るも皆是。前世の宿業つたなき故なり。その業障といふものは名將勇士も遁れ難し。地さら／＼宿意あるべからず冥途の旅の土產には。念佛讀經の外は身にあづかるものなしと。フシ御敎化あるも殊勝なれ。地大岸涙を押へ有難き御敎や候。詞死の緣無量なればいづれを是。いづれを非とや申さん。殊に武士の家には太刀先にて命を果たすは。本望の死とや云はん。主人は天晴果報の者と存じ候。地とにかく御回向賴み奉る。扨我々共も。思ひ／＼に身上を稼ぎ候故面々故鄕へ立別れ候。詞何れも久々の馴染故又逢ふ事も知られねば。行末越方をゆる／＼話し申さんため御寺を暫く借り申したう候。御邪魔にもなり申さんとあれば。是は少しも苦しからず。今日は夜共にゆるりと名殘惜しまれよ。それ煙草盆お茶持てこい。酒は法度で入らねども今日の馳走が盃とフシ樣々もてなし入り給ふ。地然る所へ梶右衛門外に立寄りて。詞寺井吉左衛門殿やおはするちと御目に掛りたしと云ふ。寺井立出でヤアお出なされた。幸ひ傍輩衆も參會なれば。首尾見合せて申出さん御氣遣あられな。まづもつて忝い。意趣は先日申す通りと。地懷中の一通相渡し。宜しく御披露賴入るとぞ申しける。待遠ながら少しの内それに控へ給へとフシ寺井は内に入りにける。地四方の話も事濟みて右の一通。宮内が前に差出せばこれは何かと押開けば。詞何々願書の事私儀不慮に亡君の御勘氣を蒙り。身腑を惱し罷りあり申し。一旦は何卒愁眉を申開かんと存じ奉り候處に。思ひも寄らぬ御仕合御赦免の願も絶えはて。明暮本意なく愁歎の涙沈み罷りあり候うちに。内々思召立のやうほのかに承り及び。一眼の龜の浮木に逢へる心地仕り候。あはれ御人數に加へられ下され候はゞ。一命を輕んじ泉下に於て。御勘當をもお許し下され候やうに。御歎き申上度候と文章玉の響

あり。宮内打ちうなづきム、梶右衛門殿の願よな。近頃奇特の御心底然し内々の儀も大勢にては。却つて本望を達せん事なか〳〵叶ひ申すべしとも覺えず。結句は無用の力みを出し。萬人の嘲を受けんは雪の上に霜を受くるの恥辱たるべし。然らばとかく面々稼ぎの渡世もあらまほしけれ。その上大殿より御勘氣の御身なれば。萬一僞あるとも御勘當の仁の儀。某一分の了簡にては。なか〳〵一列の人數に思ひもよらずとあれば。吉左衛門つつと出で。段々の仰せられやう御尤千萬に存じ候。然しこのお願は某めが。身に引受け申上げねばなり申さず候。されば大殿御勘當遊ばされ候根元は。私兄吉藏五年以前病死仕り。則ち花山寺にて土葬致し取置き候その時分。あれなる梶右衛門新刀二尺八寸の刀を購め。死身試し度と日頃心掛くると雖も。似合の胴これなく寺々を探し。土葬の身體を尋廻り候處に。某が兄とも知らず嬉しき儘に墓を毀ち。かの刀にて思ふ儘に試しすて候。かやうの不屆の仕方兄の敵同然故。一討ど存じ罷りある處に。殿樣御了簡の上御勘當御追放仰付けられ候。尤も我に於ては兄の仇に候へども。武士の心掛け物の役にも立かね申すまじき健氣者と。今に至りては却つて梶右衛門心底を感じ候。是度この一列を除き候ては。私の宿意にて存念を無に致し候と。某がはづかしめ梶右衛門が心殘りの程。地思ひやられて哀に候。某めはこの御人數をおはづし候とも彼をお加へ下され候はゞ。生々世々の御恩ならめと スヱテ詞を並べ落涙す。地宮内横手を丁ど打ち頼もしき梶右衛門。諦めたりや吉左衛門。幸ひ殿の御墓の前とてもの儀に御勘氣の御願申上げ。共に力を合すべしと。御廟前に跪づき。詞梶右衛門事吉左衛門同意に愁歎仕り。御赦免の御願重々歎き申し候。御有免下され候はゞ有難く存じ候べしと。地主君まさまさゐますが如く申上げスヱテ頭を垂れて嚴なり。暫くあつて振仰向き梶右衛門を呼出し。まづ御喜あれ御勘當御免遊ばされ。先知二百石相違なく下し置かるゝ旨。仰出でられ候間御禮申上げらるべしとあれば。あつとばかりに梶右衛門こは有難き次第とて。只俯向いて詞なし。地三人一所に拜をなしせきくる涙押へかね フシ何れも袖をぞしぼりける。ハルフシかゝる折節。照手の姫足弱車弱々と。心ばかりの引綱も力車にやるせなくやう〳〵御寺につき給ひ。近づく方に見し人は大岸宮内。その外殿原立並び互にそれと見るよりも。是は〳〵とばかりにて フシ先立つものは涙なり。地やゝあつて姫君は誠に小栗樣に別れてより。餘り思のやる方

なさ父母の目を忍び。なき御骸を此の御寺に送り屆けん我願。わざと狂女に身をやつし遙々是迄參りしなり。地主從の機緣盡きざるや是にて廻り逢ふ事も。三世の緣不思議やとスヱテ又さめ〲と泣き給ふ。詞宮內頭をさげ。誠に形は產めども心を產まぬと申す如く。親御樣に變りし御貞節の御志感心仕り候。地殊に大殿の御遺骸を是迄送り下され。我々共不思議の御對顏に與る事。未だ侍の冥加にも。盡果てざるかとフシ各袖を濡らしける。地和尚立寄り御棺の蓋を取り。何れも拜し給へやと目を塞いでぞ觀念ある。宮內を始め人々は御棺に立掛り。無念の氣色面にあらはれ。拳を握り牙をかみ胸まで來る憤怒の涙。思はず知らず諸共に。わつとばかりに泣入りける思ひ。やられて道理なり。地宮內やう〲涙を押へ。口惜しや眼前に。主君の死を見て何の面目に。青天白日を見る。お果てなさるゝ時分はさぞ御無念に思召されん。仰せ置かれたき事山々あるべしさり乍ら。その段は此の宮內めが肺肝にとくと徹してござる。詞たとひ敵鐵の城に入り呂馬童が勢をなすとも。御本望は達します少しも御氣遣なさるゝな。地冥途の御供は大勢で。やがて追付く追付くと又。さめ〲と泣きにけり。地和尚重ねて。詞娑婆の涙は未來の熱湯なり。到岸衆生觀ちうぢう。十方菩薩慈圍繞。引攝安養極樂界。地頓生菩提正覺位の文を唱へ。フシ御廟へ納め給ひけり。地姫君涙にくれながら。さるにてもはかなきは世の有樣や。昨日の花は今日の夢覺めてはもとの夢人よ。うつゝに歸る物語この被りたる烏帽子こそ。父橫山の召されしを狙ひ寄りたる我夫の。遺恨の太刀先二ケ所迄跡は殘れどその人は。名ばかり殘る悲しさよ。親ながら父ながら恨めしの烏帽子やと。彼所へかつぱと捨て給ひスヱテそゞろに袖をぞしぼらるゝ。地時に竹內只八飛んで出で。なに橫山殿の烏帽子とや思へば無念晴れやらず。いで物見せんとつつと寄り土足にかけて踏まんとす。詞宮內暫しと押止め。それは若氣のなす所。不義を誅してその人を誅せず。高位の被り物いさゝか粗末にすべからずと。地うや〲しくも臺に乘せ御墓の前へ供へ置き。懷中より小合口を取出し。詞この合口と申すは小栗の家の御祕藏龍の丸と申す切物。先年某に賜り候唯今返上仕る。地御尊靈これあらば再び御手をおろさせ給ひ。御鬱憤をとげらるべしと烏帽子を三刀さし通し。まづ〲敵は討得たりさらば何れも燒香あるべしとヲクリ一々へ次第に禮拜す。地はるか下りて大岸も涙に香をひねりかけ。我々かくてありながら唯今迄打

過ぎ候儀。さぞ腑効なく思召されん。詞誠に御存生の御時の侍共。或は駈落臆病をかまへ己が悪を被はんために。志の士をそしり忠義も口先にては成るものよ。地時に臨んでは金鐵も朽つるものと己が不義を押隠し。舊恩を思ひ仇を報ふの心は露ばかりもなし。詞三百六十餘人の中僅かに四十七人倶に天を戴かざるの儀もだし難く。同じく土を踏むの分恥ぢすといふ事なし。是によつて御意趣を繼ぎ奉るべきと存じ立つよりこの方。一日三秋の思なり雨に立ち雪に佇み。地老身の者病身の輩しば〳〵死を勸め。蟷螂が斧を廻らし事に臨んで恐れ。計をなすは勇士の嘉んずる所先聖の格言に。たとへ勢盡き力きはまり身はひし〴〵になるとも。横山父子が首を此の烏帽子の如く鉾先にさし貫き。御孝養に備へん事踵を廻らすべからず。かねて認め置きたる各一味同意の起請文。懐中より取出し恭くぞ讀上げける。地敬つて起請文の旨趣左にあるか。こゝにしきりの年。横山左衛門といふ者あり。亡君の仇家臣の敵なり。然るに大岸宮内試に。義心の起し毒夫を刺さんとす。今連判の武士等いやしくも弓馬の家に生れ。僅かに箕裘の塵をつぎ白刄の踏んで。君臣の義を恥づる事なからんとす。幸ひ何ぞ是に如かんもし。約を變じ義を失ひて敵に後をあらはし。二心あるに於ては和國の宗廟伊勢兩宮。弓矢八幡大菩薩天満天神春日四所。氏神産神八千戈の神。惣じて地類八百萬神冥罰を忝うして。武名永く朽ち天運まさに盡きて。人非人の恥を留め。愛染明王の利劍に形を裂かれ。死しては三尊六道の能化地藏菩薩。諸佛の愛憐にはづれ紅蓮。大紅蓮焦熱。大焦熱阿鼻叫喚に墮罪し。先祖の靈魂に憎まれ因果。長く子孫に傳へん依つて約盟の狀如件。今月今日大岸宮内吉勝。嫡子力之助吉遠。吉川中右衛門重祐原田長右衛門信時。瀬尾九太夫正光笹井藤内秀雄。片桐源吾高祐神邊與四郎正遠。竹內只八廣次薬島十五郎信元。堀口彌五兵衛金忠。同安左衛門武虎遠松の了圓坊を始として。忠義の武士四十七人我も。我もと立掛り股を突き肱を刺し。眉間より血を出しフシ互に。勵むぞ潔し。地珍しからずと雖も各我等が命は。君のため義のために奉る。詞大行は細瑾を顧みず。事に臨み恥辱を取り喧嘩口論なすべからず。地韓信が股をくゞるの心を持ち大事の命と思ふべし。互に是より立別れ時を見合せ合圖をなしすはといはゞ油斷すな。手組手合せそれ〴〵に殘る所もなきあとの。寺の晨朝こん〳〵と。打つや。打つ音の一調子。調子もよしや氣もよしと各。勇士の別れなり。

第三　禮之部

地生ける世の今日の煙ぞまづ絶ゆる。明日の薪の身は残る昔の鉈刀も。あるにまかせて賣つて食ふそれさへなくて今日二日。女房や嫁は帶しめて堪へ忍ぶにも老武者は。風に揉まるゝうつぼ木の フシ力なきこそ道理なれ。地嫁のおまき枕許に立寄り。さぞ堪へ難うござりましよ是なと一つとばかり。桃五つ六つ枝ながら膝元近く差出せば。源左衛門打ちうなづき。詞ヲ、過分々々。然し身共は寝てばかり居れば。左程に苦しい事もない。女房や其方賞玩めされ。稚き者には毒なるに。源太郎には無用に致されよとあれば。御氣遣なされまするなかみ様や私は食べました。源太郎は今朝家主殿にて朝食を振舞はれ。機嫌よく遊びて居ります。ヲ、嬉しうおじやる。さあらば一つと食初めて。ホ、見かけより風味がよい門商人の賣りに來たか。おまき聞いてお氣に入りましたらばいか程も上げませう。隣裏から此方へ降つたる枝に澤山生つてござりますれば。何程なりとも騙れますと云へば。源左衛門氣色を變へ口なる桃を吐き出して。これ嫁御。曲もない道を思ふ者は疲れても。曲れる木の蔭に息まず。渇けども盗人の名ある水は飲まぬといふ。數ならねども小栗が家來片桐源吾高祐が親。源左衛門高秀今年七十三になる迄。地紙一枚でも掠めた事はない今日といふ今日。盗んだ物を口に觸れて腸を汚して無念な。老いて死せざれば辱を見る悔しやとスヱテ歯がみをなしつ口説くにぞ。地おまきは迷惑身に餘り扨々女心の淺はかにて。誤つた事を致しました今よりしてはふつふつと。嗜みましよ止めませう。御機嫌直し下されとフシ聲を。あげてぞ泣居たり。地姑も涙ぐみ。ナウかく迄孝行なる人を何とてすげなく仰せらるゝぞ。嫁は我子の妻なれど子の源五には去年より。何處に居るとの一言の言傳もなく文も來ず。不孝な子さへあるものを他人の身にて我我を。いたはり給ふ志嬉しと思ひ給はずやとフシ不覺の。涙せきあへず。詞源左衛門ほゝゑみ。老のひがみに由もない事を申して。嫁御の志を仇に致した。地漢王に勸むる王母が桃。千歳の命延ばはらんと笑になせど氣の浮かぬ。顔と顔とを見合せて スヱテ泣くより外の事ぞなき。地かゝる所へ由ありげなる侍の。大小衣服花やかに僕に持たせる替草履。仁體らしき風俗にて門の戸あけて入らんとす。地女房やがて立出で誰そと咎むる笠の中。ヤア源五様かなつかしやゆかしやと。覺えず知らず手を引いてヲクリ内へ誘ひ入りければ。地母は見るより泣出して恨めしの

我子や。年月戀ふる兩親の心を酌みて一筆の。文書く暇もなかつたか無事なと云うて言傳を。云越す口は持たぬかや五つや三つの嬰兒も親をば慕ふ習ぞや何程むごい者にても。妻子は可愛いものなるにかく淺ましき目を見せて。如何程其方が結構な形したとても人は褒めまい誹らうとしやくりあげてぞ歎かるゝ。詞源五承り。成程お恨みの段御尤さりながら。朝暮ゆかしくは存じながら。渡世にからまれ心ならず御無沙汰致しました。この度奉公の口あつて東國へ下ります。伴共は今朝京都より直に立ち候を。私儀は斷り申して御兩親へ御暇乞のため。この地へ罷下りました。地まづは御息災の御尊顏を拜して滿足に存じます。親父樣はどれに御座なさるゝといへば。源左衞門むつくと起上り珍しの源五や。詞なに東國へ下るとや一段々々。拙者めも心は逸れども老いさらぼいたれば。何の役にも立つまいと思うて思立たぬ。大切な契約もあらんに親の顏が見たいとて。立寄つたは不覺ではあるまいか。逢ふは別れと諦めてゐれば。名殘惜しき事も何にもない。寸時も逗留は無益夜道をかけて追付きやれ。地然し內儀は久々の對面話したい事もあるであろ。婆も此方へ〳〵とフシよろぼひ彼處へ入りにけり。地おまきは傍へ立寄りて恨みつらみを云ふならば。千日千夜語るとも盡きようやうには思はねど。逢ふ嬉しさに忘られしマアこなさんには御無事にて。御內證もよささうで何よりかよりお嬉しい。おいとしぼいはお二人に不自由な暮しさせまする。かみ樣とてもわしとても針手の利かぬ悲しさは。せめて生計と元結をひねり習へどはかゆかず。親父樣には耳搔や揚枝削りて源太郎。賣りに出してもそれはそのどこのはなへも屆かねば。地黑地なしに帶迄も質屋の藏で年とらせ。鏡臺文庫もあとの月心齋橋へ嫁入させ。はきちぎつたる貧乏に石で手詰めたやうになり。お二人樣も昨日から少しの物もえ參らず。お年寄られた上なればお命の程氣遣で。今朝から泣いてゐましたに天道人を殺さずと。今日お歸りの嬉しさよ女夫の仲も金銀の。無心といへば何とやら恥づかしけれど孝行な。お前ぢやものとフシほのめかす。詞源五聞いて。その段は云はぬとて推量した。豫て心に掛つたれども。身一つをさへ過ぎ兼ねる浪人の營み。この度東へ下るに就けても。やう〳〵と路銀の用意ばかりなれば。合力致す餘計はないありついてもあるならば。地その儘音便致さんそれを力に待たれよと。表面ばかりの挨拶す。女房につこと打笑ひ。詞なんのそれに違ひがござらうなれどもそ

れ迄は。老體のお命の程を存じませぬ。地旅遣ひは有り合せとやら聞くものを。少しの貢なされても不自由な目も見給はじ。それともならぬ事ならば是非とはいかで申すべき。三つ重ねたる御小袖のあついやらして汗が出る。一つは脱いで行き給へ平にと云ふも氣の毒や。詞源五えせ笑ひ。金の無心は最前も云ふ通り衣服の望も叶はぬ事。ヤイこの小袖はな。身上稼ぎに下るにつき。頼もしい町人衆の東の晴れとて送られたれば。我物にて我物に非ず。最早親父も七十餘花實も咲かぬ腰抜なれば。死なれてもよい時分。母人はまだ手足も確かなれば剃りこぼちて。鉢でも開き給はん其方も若役に。水仕奉公しても悴め一人は養ふ筈。何の案ずる事あると塵もつかさる挨拶に。女房は涙ぐみ。ヤレ源太郎父様に土産くれよと泣けよかし。せめてこの子に百錢の合力あれば。四人が今日一日は暮します。どうぞ〳〵とかき口説く　フシ涙は袖にあまりけり。詞源五氣色を損じ。ハテしぶとい女ぢや。百錢の事はさておき一錢も。ならぬ義理あればならぬ。かゝらうと思はぬ子なれば可愛いとも思はず。地其所へ行けと突倒せば。呆れもやらで女房は夫の顔をつれ〴〵と。見上げ見下し打守りわつとばかりに倒れ伏す。地母怺へかね走出で扨も邪險や胴慾や。汝は鬼か畜生か生さぬ仲とは云ひながら。世に大切に育てたる恩を忘れてそもやそも。つかれはてたる親の身を餓ゑて死ねとは何事ぞ。天の鏡の曇らずば當らん罰の恐ろしや。云はじ恨みじけがらはし。親とな云ひそ子と思はじ。見るもなか〳〵腹立やと。尻目に睨む血の涙　フシ袖を被ひて入り給ふ。地源五はとかう答なく後姿を伏拝み　スヱテさしうつむいてゐたりけり。

地女房覺えずすがりつき。詞ナウ源五殿こちの人。姿形は古の我夫ぢやがお心は。いかなる天魔が入替りかく。淺ましき振舞ぞや常は正直正路にて。廣い家中に又とない親御様にも女房にも。孝行者と名にうてゝ我身も自慢に思ひしぞや。この月頃の憂さ辛さ貧しき中にお二人へ。心一杯孝行に宮仕ひしも自が。冥加と思ひ一つには此方へ立つる心中を。逢うて語つて恩にきせ。禮云はれうと思うたに皆仇事になりはてし。神の咎か狂亂か今の邪險な事共を。覺えてござるかさりとては淺ましき身の上やと。ゆすり動かし絶入るばかりに泣き給ふ。地源五顔振上げ身に望ある侍に。狂亂とは忌々しや一言云へば濟む事なれど。親妻子にも見せぬやう固い誓紙を書きたれば。邪險とも云へむごいとも云へ言はぬは君が爲ぢやものと。ずつと立つて出でければ女房せ

いて走寄り。胸ぐら取つて引据ゑ。詞起請誓紙とあるからは狂人の性が知れた。島原の古狸か先斗町の白人狐か。地正體をあらはしやと髮も頭も遠慮なく。叩きむしれど取合はず。契りし人は武藏野の草葉の露の後にては。知れようとばかり云捨てゝフシ表をさして出でければ。地女房は身もだえしてヱ、無念口惜しや。色と色との爭ならば蝦夷が千島の末迄も。付き纏ひても行くべきにおいとしやお二人の。貧しき浮世渡りにも我を賴りと宣ふを。見捨つる事の悲しきぞや。子は不幸にて捨つるとも嫁の節義は背くまじ。この身一つになるならばたとひ何年後なりとも。尋ね廻りて恨せんそれ迄の約束に。この子を連れて行き給へと源太郎が手を取つて。梱の外へ押出し。怒を忍ぶ目の中のフシ涙は雨と降らせける。詞源五聲を靜めムヽ、尤々。然し幼少なる者旅を連れては行かれぬ。迎ひの人を越す迄は不承ながら介抱を。賴入るとぞ詫びにける女房聞いていや〳〵。ます花のある御方に義理も不承も何もない。下女や婢に身をなしてお二人樣を養ふに。地この子があれば妨になるならぬ。ならぬと戸を閉つる。地源五は是非もなき顏にてそろそろ手を引き出行けば。流石別れの悲しさにそつと叉戸を押開けて。詞ナウ源五殿此方には悔やみはせぬが。どうぞよい思案はないか。今一度此方向きをれつら憎やと。地恨むる中に奧からは。おかた。おかたと呼ぶ聲に。あいと答へて入る足の又立留り聲をあげ。誓文戾る氣はないかどうぞ。どうぞとひたすらに問へど答へず腹立やと。走り出づればおかた。アイ。地おかた〳〵とせはしなき老の心も破られず。男去なすも口惜しく色と義理との二筋に。結ぼほれたる心の糸フシ是非もなく〳〵入りにけり。地源五は迫る義の道に行きもやられず一方に。茫然として居たりしが。きつと思案を廻らし腰の刀をすらりと拔き。源太郎を引寄せ心元を刺通し。彼處の井戸へ投げ入れて胸押しさすり目をすりて。さあらぬ體にて行く所を源五。源五と聲かくる後振向けば父が顏。窓より外へ差出すはつとばかりに立寄れば。源左衞門涙をはら〳〵と流し。詞妻子の愛も父母の恩も忠の一字に見破つて。地さつても立てし心底や天晴武士や不便やと。聲も震ひて褒むるにぞ。問はれてもるゝ義の涙フシ頭も上げず泣居たり。詞源左衞門涙を押へ。忠臣は孝子の門より出づるといへり。汝が孝は曾參にも恥づかしからじ。二人の女の恨より爺め一人が悦は拔群に深い。死んだる孫は不便なれども。お主への奉公と思へば殘念にも思はぬ。金鐵の心をもつて

仇を報ぜんにたとへ横山。ひこう護身に固むとも。やはか仕損じはせまい。忠死の名を石に殘して。後世に謳はれんと思へば。我子ながらも羨し。地忠義の旅の門出に祝はんと袖より金子取出し。詞コリヤ。この金子はな。主君御生害と聞くより卽日彼の地へ立越え。鬱憤を散ぜんと旅の用意に貯へしが。地はからずも老病におかされ手足も自由ならず。この通りにて敵に向はゞ又もや返り討に逢はん時。一家中の恥と思ひ堪忍の胸をさすつてゐる。詞この月頃の貧苦の責たとへ四人の者は。餓ゑて死ぬるとも忠義の金は遣ふまじと思うて。女房や嫁にも隱し置いた。今汝が我に代つて行く旅の路銀にせよと投出せば。地源五三度押戴き。誠に義を重んずる武士の志は。割符を合せたる如くにて候。詞是御覽候へ拙者めも廿兩の金子は用意致した。最前御不自由の體を見受けまして。親の養妻子の爲に五兩三兩は殘し置きても苦しからず候へども。宮内殿より此度の役にとて配分致されたる金子を。私の事に遣うては孝を先にし。忠を後にするの譏を憚り。母人へも邪險な詞を聞かせました。地旅の用意は手前に有合せ候へば。御所持の金子は留め置かれ。老の助に遊ばされ候へと云へば。詞源左衞門詞をあらゝげ。某君に仕へる事三十五年。高恩を汚してむざむざと疊の上にて死ぬるが無念な。思込んだる志は仇になれども一心は。猶此の金子に付添ひ彼の地へ立越え。各の潔き働が見たい。地我が俤を見ると思ひ其方この金を懐中せよ。是生前の面目とスヱテ涙ながらに云ひければ。地源五はつと心服し有難き御仰せ。節義を包む此の金子道中拙者が御供し。宮内殿その外一味の家中へ披露致し。御老身の淺からぬ實義を申述べん。詞扨私が金子をば憚りながら殘し置きます。地形見ながら御覽ぜと窓より内へ差入るれば。源左もにつこと打笑み惜しからざりし命さへ。詞敵の首を見る迄は永くもがなと祝ふ身の。急げや源五。さらばでござる親父樣ヲ、さらば。地追付吉左右申しませう。互に顏を見合せて。未來を契る親子の緣世に。睦じき暇乞夕日傾く老武者なれど。心と忠義に片桐の朽ちずしをれず見送れば。我は若木の桐のたうとう／＼立つや手束弓。心許すな許さじと義に勇みたる不敵者。末の世迄の物語と皆人。耳を欹つる。

第四　智之部

新枕伏見と。よみし撞木町。色と菩提のフシ一つ門。乘合を待つ旅人が廻文包む風呂敷も。樒粽を取荷ふ小オクリ袖を

へ引かれて引きがてに。是も愛宕の。御利生かの フシ面白や。ハルフシ面も白し。身も白し。冠着さうな厚鬢は京の水とや名を流す。その戀草に世を宇治の フシ茶師の手代がたま〳〵に。君がこい茶に。うかれ出てくればお留守と立歸る。緣はうす茶と恨むらん三ヶの。濡の港にも。負けぬは愛の遊色と フシ榮は。日々にまさりけり。地大岸宮内吉勝は淫酒の二字に身を染めて。心の友としぐみたる顔は變らぬ四人づれ。刀もやめて一腰をさし合くらぬ親と子の。戀取持つとざゝめいて フシみすぎが方に入りにける。地亭主や女郎立ちかゝりいつ〳〵ながら御勿體。もたせぶりかやいやらしと耳つかまへて引廻す。禿はこまたとりあしの我手に轉けて詫をする。何程固い惣髮にそつた朱鞘の太刀作も。かうした廓の兵法は裏へ廻ると大笑。末社の林好座敷よりつか〳〵と走出で。詞大方今日の御出を注進あつて承りました。その上變つた御一座の由。亭主も殊の外喜悦の眉を開き。暑氣お凌ぎの御馳走に庭の植木も飛石も。地男共が請取つてむつくりと起きるから。乾かぬやうに水びたし。お客やこちは酒びたし フシヤイ御銚子と騷ぎ出す。地宮内手水使ひながら。詞ハテ此の釣舟の花は餘程心のある活けやう。亭主が手際と見えぬ何人が活けた。ア、イヤその筈でござります。山本かもん殿お客と昨夜から是にて。今朝歸るさに活けて歸られたと云へば。誠に茶なども餘程立てらるゝと聞いた。何れも御覽候へ扨々しをらしい事の。惣別子供や女郎にもかうした事は少しづゝさせたい物ぢや。力之助なども餘り頑固にて。宿に居る中は卷藁と兵法ばかり汗水になつて心掛くる。今時の武士はそれは古い。地少し色といふ事も亦この廓に名人あらば習やれ。ア、さりながら侍は文武といひ賣人は。それ〳〵に身をゆだね子供女郎はその身器量第一から。樣々藝のすき〳〵に心を移す。かく一座する各や身共等とても。今宵はみすやの座敷に遊び明日は又如何氣の變らん。地朝には紅顔あつて夕にはといへば。一座も林好もその後はどうでござります。何と。何とゝ興ずれば。詞ハテ夕には此の撞木町の木の通りたる色に遊ぶと。地騷ぐ拍子に名香の誰が焚きかけてほんのりと。扇子の風にそつと來る憎や隣の座敷から。つげといふのか空焚きかと床のあたりへねぢ向けば。地平日に變りて掛物に弘法大師の畫讃をかけ。獅子の香爐も時代めく。青海の大香箱 フシ淸らを盡し飾りたり。詞宮内手を叩いて亭主を呼び。先づ今日は常日より種々の馳走嬉しうおじやるよ。殊更此の掛物は餘り洒

落すぎたが。揚錢拂はぬ眞言坊主を穢るのか。地石臼の目切講かと悪口のある程云へば。面々手を打ち可笑がる亭主も共に打笑ひ。詞されはでござります。此の掛物に就いて哀なる物語の候。その御盃の向ふへ廻り候はん中。語つて聞かせ申候べし。一文字屋の揚巻様何時の程よりか。御子息の力様を戀ひこがれ給ひ。お連様へ頼んで文は八百萬にかさなり。指髪迄切つて遣はされても。氣の強い若衆様で御返事がございませぬ。そこで揚巻様の智恵をお出しなされ。若衆の氏神弘法様の御影を掛け。一七日が間精進潔白に朝夕三度づゝの水垢離にて。地強い戀の禱りやう唯今も湯殿に垢離とつてござります。今日の御一座は揚巻様御願の叶ふべき瑞相。何卒頼み奉ると揉手に數の舌を卷く。詞宮内聞届けヲ、成程々々。内々皆の話に此の事は聞いてゐる。地それ故同道致したり。幸ひ力之助事も近日元服させる筈前ぶりのある中に今日は拙者が取持つと云へば。亭主や女郎一同に是はしやれます〳〵と。夕影涼しき水垢離に今日や願の叶ふかと。緣を結ぶ揚巻は人の戀路を緋縮緬。脛も浴衣も裾高く駒下駄鳴らしかいやりの。戸を押開けて座敷に出。宮内様何れも様ようお出でなされました。私もこの中はちと思ふ事候て佛様へ御無心申しかけ。地固い身持で今日七日唯今も垢離を取り。この姿無禮は御免なされませと フシにつこと笑ふぞ面はゆき。地宮内盃を取上げて揚巻殿差しませう。爰は一つと強いられてお久振りで無理聞くと丁ど受けてじろ〳〵と差したい方へ目がゆけば。酌取る禿呑込んで若衆の傍へ持て行けば。生心ある力之助。初心な顔も盃も フシ共に紅葉ぞ散りにける。地式部青柳林好もさあ〳〵揚巻様の願が叶うたわ。弘法様への願ほどきは長芋午房の高盛よ。中書島の辨天様へ鰻進ぜて放生會。扨宮内様皆様はお氣を通して御社の。蚊帳の中へ宮移し揚巻様と力様の。御床は稲荷明神と オクリ笑ひてへ内に入りにけり。地戀の初陣若武者の震を隠す溜息に。疊の目讀む廓ひねるこぼれかゝれる前髪に。笑窪被ふぞねたましき。地女郎もさすが打付けに物も云はれず胸の火に。煙草吸付け差出すハテ。からい物をと顔振れば。ヱ、初心な事を。町方の子供衆は十二三から小癪にて。仲居や腰元に嬰兒産ませて父様と云はせます。なんぼうお前が無情うても女郎の一念は。生きながら幽靈になつてゆくげなが フシ恐い事ぢやともたれよる。詞力之助慇懃に。誠に數ならぬ私に千束の玉章。わけて淺からぬ志をかばかり嬉しく候。我身も岩木ならねばその御心を

無下に致すにあらねども。大願のあつて今一兩年も色に染む事はふつ／＼となりませぬ。御縁があらばそれ迄待たせ給へやと。當座遁れの挨拶に揚卷打笑ひ。扨も殊勝な御事や然し左様な長精進は。中落するのが法ぢやげな帶解かんせと取付けば。ハテ迷惑などうしやると遁げんとするを引留め。是々聲立てさんしたら親父様の叱らんしよ。平に／＼と止める手に帶くる／＼と解きければ。肌に地黑の染小袖女模様と見咎めて。揚卷くわつと赤面しさりとは憎き御仕方や。初心な顏も無情きもかうした仲のある故に。欺し給ふか曲もなや姿容は劣るとも。深き心はその人に負けじ劣らじ妬ましと。恨みかこてば力之助様子はどうも明かされず戀と思ふを幸ひに。ヲ、成程顯れたれば是非もなし。此の小袖への立分外は見ぬとて立たんとす。是非にとすがる袂をもならぬ。ならぬと振切れば揚卷今は怺へかね。傍なる脇差拔放し死なんとすれば力之助。是はとあわて飛掛り持たる刀もぎとれば。ほころび出る心の糸覺えずわつと泣出す。折節宮内目を覺し階子をそろ／＼にじり下り。屏風の外に聞居たり。かくとも知らず力之助小聲になり。命かけての志身に餘りて嬉しけれども。我身はやがて西國方へ宮仕に下れば。假の枕を交すとも長くもあらぬもの故に。あらぬ別れの悲しさは今の辛さに一倍せん。むごきは御身の爲なるぞや。又此の小袖は様子あつて別れ居る。母の形見と夢の間も肌身に付けて拜むなりと。涙ながらに語るにぞ。揚卷は振仰向き御身の上も何事も。とくより知りて候ふぞやとてもこがれて死ぬる身の。手枕だにも交しなばそれを冥途の土産にて。お前に遲れ一日も此の世に殘り居ようとは。神かけて思はぬなり。扨又そのお小袖を。母君の形見に詠め給ふとや。さ程ゆかしきお心ならばなど一筆の音便を。折にふれても遊ばさぬ御いたはしや母君は。朝夕慕ひおはしますと語りも。あへず泣居たり。

力之助きよつとして筋なき事を云ふ人かな。人達にやと云ひければ いや御遠慮なさるゝ者には非ず。自はお袋様のお側使。瀧と申す女の妹にて御座候。暮しかねたる浪人の親育みに身を賣りて。悲しき勤に沈む事兄弟にも包みしを。お袋様何としてしろし召され候にや。去りし五月の闇の紛れにおいたはしや徒歩にてお越なされ。人聞かぬ所へ自を御招き遊ばされ。御夫婦の仲絶えし事お前を戀しう覺せし段。聞くさへ涙こぼせしなりお二人ながら此の郷へ。折々通ひ給ふと聞く此の文密に届けつゝ。返事を取つて

哭れよかし女郎といふものは。頼もしいものと聞く哭々頼むと宣ひて。むつがらせ給ひしが身にしみ〴〵と哀にて。お氣遣なされますな戀に代へて御返事を。見せ参らせんと受合うてお前を待つてゐましたと。守の中より取出せばそれは誠かなつかしやと。取る手も遅しと押開きスヱテ涙の中の一筆や。地世の常の心の闇はさるものにて。二世の夫一世の子供に此の世にありながら。地目に見ぬ事さへ叶はぬは。月の桂よりフシ猶仇なる憂き身ぞや。詞昔はさしも孝行なりし人の今更變るべき心ならねど。父の叱るを悲しくてかく疏略に致すかや。地それとも母と思ふなら隠れてもなど問はさらん。須彌の高きを知るならば。大海の深きを思へかし晝の歎き夜の恨みに。詞大方は目も泣きつぶし誰ともまだ薄明り見る中に。逢ふ事とては叶はずとも。せめて一筆見せ候へ。恨めしの我子やと。恨の數はお道理と。文をば顔に押當てゝフシひれ伏し。歎き沈みけり。地やゝあつて力之助くれぐれ過分の志。いつの世にかは忘るべき。その頼もしき心からはこの身を親に不孝者と。フシ見さげ給はん恥づかしや。地天地に一人の母なれば父には隠れ忍びても。問ひ参らする筈なれども身に望ある侍は。母に心を引かれては主への。忠も朋輩の義理も缺くると宣ひ　。父の詞の重ければ今の返事もえせぬなり。重ねて目見え給ひなば我如才なき一通。地此のお小袖を添臥の夢を此の世の樂に。朝夕肌を離しませぬと傳へて給へ　さりとては。ある名ばかりを帶木の由縁と思へばなつかしと。覺えず知らず抱付けば。女郎は心消え〴〵と涙の中に締めかへす。親忍ぶ草思ひ草。それかあらぬか初枕衣引被き三重へ臥しにけり。地宮内は始終立聞にフシ諸共泣いて居たりしが。地思案顔にて二階に行き二人の伴に囁けば。打ちうなづきて兩人は急がしさうに出でて行く。亭主々々と手を叩けば。心得顔に盃をフシ持つて二階へ通りけり。詞宮内云ふやう。揚巻が心底餘り不便な。連れて歸つて力之助に添はせたい。何と請出す事はなるまいかと云へば。地それは旦那の御器量次第。糸つけて風上りになされうと。車に乗せて木乃伊にしようとも。藥代は百五十兩御勝手次第と申しける。地親の話に目が覺めて恥づかしいやらうろ〳〵と。彼所や爰に隠れ居る然る所へ兩人は。すた〳〵云うて立歸り宮内に金子差出せば。こりや亭主幸ひ爰に二百兩。宮内が嫁にするからは随分そこらを見事にせい。頼むと云ひて投出せば亭主肝をつぶし。詞より物の中から刺身にする魚が出ると。浪人の家から二百兩の小

判が出た事は。地末世末代ない事ぢや。夢ではないか夢ならばフシ覺めな〱と歎きける。地宮内打笑ひかうした事も漸上づく。揚卷は大岸宮内が請出したと。世間の人が知るやうに。萬事差配を頼むとてトクリ皆々へ連れ立ち出でにける。地花車や禿は一二町送りて歸る追分の。道を東へ行く野邊の露と答へて今消ゆる。命も知らず揚卷は後へ下るを宮内立戻り。歩みつけぬで心勞なか。手を引かうかと戯れて。立寄るふりにて刀を拔き胸のあたりを刺通せば。人々あわて立戻りコハ醉狂か狂亂かと。各不審はれやらず。地揚卷ほつと息をつぎ。いとたゆげなる聲を出しナウ宮内樣。詞白には何科あつて胴慾なと。地恨むる聲も引く息も中フシ弱り。行くこそ哀なれ。詞宮内聲を靜め。嫁舅と契るからは憎からうやうはなけれども。情なきは殺さねばならぬ仔細あり。樣子を聞いて思諦めてくれよ。さればば某を始め四人の者。身を放埒に持つ事皆敵を欺く計略。二世とかねたる妻にさへ洩らさぬ事を其方が。よも知らうとは思はねど。最前其方が何事も。夙より知つて居るといふ一言心にかゝる是一つ。扨又力之助が母より文の遣はせまじき事にあらねども。あつたら侍に未練な心を起させては忠義の妨になる。其方も侍の娘と聞いた。力之助に別れては必ず後に殘るまいと誓ひし詞に僞はあるまい。左程伜を大切に思うてくるゝ心底からは。とても長らへぬ命を今爰で死んでくるゝは。舅の疑をはらし可愛い力之助に忠を勵ますためぢや。すでに四十七人の妻や子が或は自害し。又は相對の離別をせられ。尼法師になつて跡を弔ふも皆是主君を思ひ。夫に忠を勵ますの實義なれども。今其方が某の手にかゝつて相果つるは。他の忠孝より拔群に越えて。思計れば第一主君小栗殿への忠義。地天晴果報の者よでかしたり〱。待兼ねぬ中我々は本望を遂げ追付いて。三途の川を易々と力之助諸共に。手に手を取つて渡らせん。心よく臨終せよ恨んでくれなさりとては。不便の者の有樣やとスヱテ涙をこぼし云ひければ。地なかばは消えし玉の緒の苦しき中に手を合せ。地有難のお詞やなげの情の一ふしに。二世の夫婦とあるからはフシ何か命の惜しからん。地待ち參らする宮内樣力之助樣待ちますと。是を最期の詞にて終に空しくなりにける。傍に在合ふ人々もフシ哀と袖をぬらしける。宮内涙の下よりもヤレ力之助。詞一夜の枕を交すといひ母が由縁の者なれば。地さぞや不便に思ふらん名殘惜しめとありければ。力之助につこと笑ひ。地敵の顔こそゆかしけれ外に心はなきものを。扨弱

東への御立は何時に極り候と。地とつてもつかぬ挨拶に宮内喜びヲ、それよそれよ。我子ながらも忠孝の二字備りて頼もしや。最早天運時至れり片時も早く旅立たん。同意合體の人々へも。手寄々々に居宅をしまひ急いで下られ候やうにと。地廻状を廻すべし落付く所は先達。横井勘内が居住する本能の宅にて會合せん。對陣次第は軍の體用。夜討忍びは不意の量配案内のうちは勝利の一決。范蠡が魚荷となつて。主を助けたる功を慕ひ肩は八百屋の負子に苦しみ。頭は茶人の丸きにかへども誰かは是を蔑らんと。大岸宮内が棟梁に邪曲を入れぬ墨かねにて。えりに選つたる忠義の武士死を鴻毛の輕きにたのしみ。義を泰山の重きに置くたとへ龍門原上の。土にその身は朽つるとも譽は古今未曾有の。武士の鑑は是なるわと聞く人。感を催せり。

第五　信之部

地昨日と過ぎ今日と暮れゆく年月の。横山郡司信久は一子三郎信遠を密かに招き。詞誠に某程果報ゆゝしき者はなし。不慮に小栗と口論し一命終るべかりしに。武名未だ盡きざるにや恙なく數日と送り。あまつさへこの如く別殿をしつらひ。禁裏の役義迄をゆるされ歡樂に暮す事。老後の思出是に過ぎじ。和殿輩も有難く存じ隨分忠を勵むべし。それにつけ小栗が一族浪人して。此所彼處に徘徊し某を狙ふと聞き。かねて用心嚴しく與力の勢を催し。寢る間も油斷せざりしに此の頃聞けばこの者共。地或は落失せ病死の者渡世のために商賣し。又貯ある者色里に身をゆだね。酒宴に長じ我を忘れ。詞放埒もなき輩。もうその如くの根性からは町人には劣れり。それによつて巡見遠見の者も引かせり。いよ／＼横山が運の強きを喜び。地人に語らず祝酒さりながら。油斷大敵の基この上にも夜さとく寢よ。身も休まんに三郎も。今宵はゆるりと寢られよと數獻に舌もなへまはり。千鳥足許ひよろ／＼と後姿の影もなき。今宵限りの命とは三重後にぞ思ひ知られたり。地フシすでにその夜も。更けゆけば大岸宮内親子を始め。十人の殿輩に卅七人の加勢。白裝束に黒羽織皆一様の印紋。主人といふ字を切付け。コハリ思ひ思ひの名字を書き。鎖帷子鎖小手。鎖の鉢卷革頭巾弓槍長刀掛矢槌。かけ繩はや繩繼階子得物々々を提げ。提げ出でけるはフシ花やかなりける出立なり。地頃は極月末つかたちら／＼と降る霙雪。夜は何時ぞ丑の刻時分もよしと横山が。門前にとりかけ内の樣子を窺ひける。詞時に宮内人々に向ひ。誠に亡君の仇を報ぜんた

め。唯今迄の憂き苦勞天運に叶ひ。各一所に思立ち今宵本望を達せん事。地弓馬の譽この時なり豫て言合せたる如く。未練の働致すまじ。女童に刃向ひ給ふなたとへ亂軍となるとも。相圖の笛を吹くならば一度にどつと寄り給へ。地かゝる時には太皷を打たん又合詞の定めやう。味方は山。敵は川と心得給へ。誰にもせよ横山父子を討取らば。詞その儘貝を吹立てよ。進みて同志討すべからずと。牒し合するその中に舘の内の火の廻り。御用心と呼ばはつて フシ己が部屋にぞ入りにける。地時刻移さずはや入れと相圖の詞浪といふ。心得たりと梶右衛門塀に階子を打掛けて ヲクリそろりへそろりと上りける。地番の男早くも見付けすは何者と聲かくる。所を飛下り取つて押へ フシ高手小手にいましめける。隙をあらせず表より門の扉を打碎き。一度にどつと込み入りしは 三重すさまじかりける勢なり。地横山一家度を失ひ。上を下へとかへしつゝ丸裸に提灯さげ。なう悲しやと駈出づる。切物一つを二人して奪合ひ表へ逃ぐる體。これぞ誠に曾我兄弟裾野の夜討もかくやあらん。雙方互に入亂れ火花を散らして 三重へ戰ひける。地この騷動に近所の屋敷高提灯を立並べ。小高き所に立上り。何事やらん何事さふと咎めける。詞時に宮内つつと出で。我々は小栗の判官兼氏が家來共。御存じの如く横山殿は主君の敵。年來附狙ひやう／＼今宵忍入り。本望を達し候侍は相互。あはれ御見遁し賴入ると答へければ。地とかくの答もあらばこそ御尤々々と。云はぬばかりにうなづいて。フシ皆々提灯引きにけり。地隙を窺ひ横山は三郎に介錯せられ。此所彼處と逃廻りやう／＼として柴部屋に フシ親子手を取り隱れけり。地宮内を始め一味の者。敵親子を取逃し八方に手分けをし。尋ね巡れど行方なしヱ、無念な腹立や。年頃心を盡したるその甲斐もなくやみ／＼と。地討洩らしたる口惜しやと拳を握り牙を嚙み齒嚙をなして居たりける。地中にも只八詞を掛け見ぬ所こそあれ此方へと。先に進んで柴部屋炭部屋殘りなく。隙間々々を突きければ何かは知らず炭薪。雨の如くに投掛くるすは彼奴こそは敵なれ。討取れやつと云ふ儘に只八が槍先に。三郎突留め引出す續いて重藏めつた突き。手應するに猶ゑぐり思ふ儘に突留め。詞松明振上げ見てあれば横山郡司三郎なり。地やれ嬉しやと手を合せ フシ天の拜して喜びける。時 詞重藏サア大岸殿はや首討たせ給へと云ふ。宮内聞いて御心底滿足せり。御自分の高名なれども指圖に任せ。某初太刀仕ると立寄り親子が首討落し目よりも高く差上げ。

地南無主君尊靈日頃の無念晴らさせ給へ。南無阿彌陀佛と回向をなし。詞小栗の判官兼氏が家來共。主の敵横山親子を討つて退く。我と思はん者あらば出合へ　やつと呼ばはり。力足をとう〳〵。どつとあげたる勝鬨の。聲諸共に立退きけり。上古末代今の世に又あるまじき武士の手本に。是を書殘す。

千秋萬歳樂

右之本遂吟覧頌句音節墨譜等不違毫釐令加筆且以著述之全本令校合畢尤可爲正本也

豊竹若太夫

紀海音

大坂上久宝寺町三丁目
正本屋　西澤九左衛門版

愛護若塒箱

作者 紀海音

作詞 詭言軟語皆第一義に歸し。治生産業おのづから實相に背かず。智門は高きを勝れたりとし。悲門は下れるを妙なりとす。低き人の丈較べはひききを勝ちとするが如し。無相の法身皆一智毘盧の全體なり。暫らく劣機に近づきて強剛の衆生を利す。和光同塵神津國幾萬代の末久に。豊秋津洲の御主。仁明天皇の オロシ 御聖徳へ傳へ聞くこそ。有難き。地色 眤近多き其中に二條の左大臣清平公。古今に秀でし英才なり。又六條の右大將有雄卿と聞えしは。させる學智もなけれども御外戚の威を振るひ。我より上に立つ人を嫉み妬んで色々と。讒者の唇動くこそ。道明らけき九重の フシ 月に。雲ある如くなり 地色 然るに春の末よりも天皇御不豫の事ありて。晝の御坐に垂籠めて打臥し惱ませ給ふ故。地 當時の名醫入り代り倉公華陀が手をつくし。陰陽の頭當年の星を勘へ易を繰り。諸寺の高僧壇上に孔雀明王藥師の法。丹誠無二の御祈禱もいまだ效驗見えざれば。月卿雲客堂上に額を鳩め氣を痛め。武官の輩は庭上に弓矢た挾み居流れて。縱へ變化の業なりとも目にだに懸らば射伏せんと。思ひ込んだる有様は。フシ 嚴めしうこそ見えにけれ。地 かゝる所へ比叡山師の阿闍梨參內あり。謹んで宣ふは。詞 玉體御惱の御祈り山門は申すに及ばず。諸寺諸山の僧徒ども至情を抽んで候へども。更に效驗あらぬ事不思議の思ひをなす所に。老僧夜前あらたなる瑞夢を蒙る其意趣は。此度帝の御祈願には神明和光の力を頼み。王城の未申別雷山の麓にて。流鏑馬を興行し二條の家に傳はりし。降天の唐鞍を明三歳の駒に置き。同じく刄の太刀を佩き清平公の長男。愛護の若に勤めさせ神慮をすずしめ奉らば。地 玉體長久たるべしとの神勅猶豫に渡らずと。畏れ入つて奏聞あり。地色 月卿雲客一同に是は希代の靈夢やと。フシ 冠を傾ぶけおはします。地 六條の右大將會釋もなく進み出で。詞 御坊は老にほれられて筋なき事を言はるゝな。夢は五臟のなす所善惡共に信ずるに足らず。其上山々嶽々にて行德兼備の高僧ども。肝膽を碎きてさへしか〳〵となき御勞り。何ぞや俗家の武具馬具にて年端も行かぬ愛護の若。地 流鏑馬の曲したればとて如何なる神が愛で給ひ。御惱平

安なるべきぞフシ傍痛しと嘲笑ふ。詞清平笏取直し。粗忽に候右大將。假にも瑞夢とある事を疑ひ給ふは勿體なし。古人の夢を論ずる事眞妄邪正虚實あり。菩提心經の如くんば佛天感應の四種あり。蓮華三界日月僧是を四つの善夢といふ。又裸寶藏經の中には佛在世に惡大王あり。夢中に八つの不思議を見る。是を外道に尋ぬれば八難の夢通れ難し。若し寵愛の尸婆夫人を。殺さば其身の禍ひは免がるべしと勸めたり。その時佛聞し召し止んなん〱八福輪の吉夢なり。必ず賓を得給はんと夢合せし給ふに。果して翌日隣國より玉の冠を捧げたり。地唐土の帝王も夢を信じて國を保ち。我日の本の天皇も靈夢を感じ給ふ事。書傳に先例併とフシ理正しく宣へば。詞右大將氣色を損じ。よし瑞夢にもせよむね夢にもせよ。手前の行法差置いて餘所にまします神明の。加護を頼むは何事ぞ。抑々山門昔より多くの寺領を當て行ひ。施物を費し敬ふも百王鎭護の靈場と。思うて致す所なり。但し末世に至りては佛法の威も亡び失せ。地祈るに驗なきならば山門ありても益もなし。阿闍梨を始め三千の坊主どもを還俗させ。牛飼ひ舍人に使はうかどうぢや。フシどうぢやと睨めつくる。地色阿闍梨涙を押拭ひ。詞アヽ忌はしや勿體なや。地色非修非學の愚妄人言葉交すも穢るれど。顯密弘通の大乘を誹謗めさるる不便さに。あら〱語り聞かすべし佛法不思議の靈驗は末世にいよ〱盛んなり就中我山は。詞圓頓の花止觀の月上見ぬ鷲の嶺なれば。本尊の利益他に勝り行者も外に勝れたり。地衆生の諸願無量にして佛智の悲願もまち〱なり。虚空藏の求聞持にて財寶化德を成就し。詞聖天の浴油には官祿長職速かなり。壽命を祈る閻魔王怨敵退治は大威德。不動の護摩に掲焉たり金剛般若の利劍には。三毒四魔を切拂ひ五穀成就六欲怨敵七難即滅七福即生。地色八大金剛童子の法如法に祈念する時は。枯れ木再び花開き白骨肉を生ずれども。悲しきかなや朝廷に。無道の佞人立交り政道邪曲ある故に。王法佛法衰へて本地の利益薄き故。垂迹の神明を祈るが愚僧が誤りか。地別雷山に降臨ある松の尾の明神は。我山におはします大山咋の命とは。同一體の御神にて鳴鏑の神ともいひ。流鏑馬は此神の妙體。因縁故實も知らずして佛法を破却せん。僧徒を還俗せんなどとは佛敵朝敵たるべしとフシ憚り。なくぞ申されける。詞右大將腹を立て。ヤア賣僧坊主めぬかすまい。汝は元來清平と親しき所縁ある故に。二條の家の太刀鞍にて御惱平癒なされしと。世間の者に言ひなづけ逆心を企つる。

地朝敵の與黨人彼奴引立てよとのゝめけば。瀧口に伺候する駿河の前司國則。つつと寄つて用捨なく小腕取つて引立つるを。それ制せよとの下知を受け清平公の郎等。早苗之介勝重庭上に立上り。詞君を悩ます變化の物。今といふ今見付けたり。猿にもあらず猫にもなく頭はお公家氣は狼。地第六天の魔王組。佛法護持の名僧に敵對をなす眷屬め。射て落さんと大雁股きり／＼と引絞れば。詞ア、これこれ勝重短氣なり。主人持つ身は相互ひ私の宿意なし。佛法話の有難さにお十念を授かろと。地ひよつと爰まで出ましたと手持ち無沙汰に手を合せ。南無阿彌南無阿彌／＼と狼狽へ廻りほえ廻る。泣き聲鵺に似たりやと。堂上堂下一同に。フシ覺えずどつと笑ひける。地色天皇玉の床近く清平公を召されつゝ。阿闍梨の奏聞先達て朕が感ずる所なり。地別雷山

に埒を結ひ神すゞしめの流鏑馬を。愛護の若に勤めよとの勅諚誠に有難き。家の面目末世の規模神の惠みに叶ひたる。直ぐな心の清平公。邪智貪慾は有雄卿。位倒しの諺は。此時。よりぞへ始まりける。フシ代々經てや。地君が千年を松の尾の。葉替へぬ色を流鏑馬に神すゞしめて賴むてふ。心の的の一二三埒結ひ廻す外面には。物見好きなる都人押し合ひへし合ひ伸びあがり。見るもことわり今の世の若衆の蕾香ばしき。名さへ顏さへ醫さへ愛護の若は大君の。勅に從ひ陸奥の安達の駒にあらねども。降天の唐鞍置き手綱掻繰りひらりと乗り。オクリ先づ下へ地をぞ乗り給ふ。フシ抑も馬に七箇の祕事三箇の手綱五箇の遊。陰陽の鞭朝嵐大颪小颪。運びのべ足。フシ千鳥足。霰流しと。地云ふ曲をしつゝ打つて乗り返し。乗廻しては引返す轡の。コハリ

音はちりりんりん。障泥の音はどう／＼どうくる／＼。ナホス地くるりと輪乗りして。障泥をはたと打つ程にフシ四足を宙に駈出す。地色馬上に番ふ白羽の矢かの養由が柳の的。三度の目當違ひなく當つて／＼當つてと。貴賤上下一同にフシいや／＼どつとぞ褒めにける。地色然る折節いとやごとなき上臈を。後達お婢府にかけ埒押開き駈入りて。局と見えしがはしたなく。詞コレ／＼若衆動きやんな。的のそれ矢が姫君のお腹に立つてお目が眩ふ。地憤や／＼と呼び猛る警固の者ども打笑ひ。詞推參なる言分かな。御神事の的先へのさばり出たが不調法。死なば死に損構はぬと地叱り付くれどたじろかず。詞イヤ／＼さうは云はせまい。主と賴んだ姫君の嫁入り前に乳の下へ。穴あけられて是がまあ堪忍がならうかと。地恨むもげにと白羽の矢胸苦しげなる有様

に。若君馬より下り立つてする〳〵と走り寄り。不慮な事とは云ひながら扱いとほしのお姿と。詞の花の色に香に風が持て來る懐の。内擦る手は逆鉾の雫よ物の初めぞと。スヱテ 締めつ緩めつ姫君は。流し初めたる目の内も。戀におぼこの若君は何と答も夏黄櫨の。照葉と顔を打赫め フシ 氣の毒らしき折節に。地色 是も變らぬ上臈を女房達は肩にかけ。つか〳〵と立寄つて。詞 妾がお主はおの様のお手にかゝつてお命も。地 今を限りになり給ふ様子は斯くと白羽の矢。肌くつろげて見せければ若君呆れ給ひつゝ。神の咎めか二人迄思はぬ憂目見る事と。差入れ給ふ左の手押戴いて締付けて。氣遣ひさするもお笑止なそれ矢と云うたは僞り事。戀のそめ羽の色に出て思ひ込んだる一念の。石に立つ矢の例をば。知られまほしきばかりにと フシ 縺れかゝるや。左右いづれを花と櫻とも。水淺黄なる愛護の若指咥へたき氣色なり。地色 先に來りし女房達興さめ顔に打守る。中にも局聲を上げ。詞 ナウそこな大騙。こちの趣向をなぜ盗みやる。折角工み拵へて射て落したる寢鳥をば。地 綱掛けうとは大膽なあたいやらしいとわめけども。こちらも負けぬ女口。詞 ハヽ〳〵味な事を聞く。趣向は似ても違ふとも兎角勝負は早いが勝。地 戀の矢疵の時花醫者其許迄は手が廻らぬ。杉山膏薬買はしやれとどつと笑へば右に立つ。姫君少しせき心。詞 君が心は知らねども情はこちが一の的。地 あれあれあそこな幕の内腰元どもを屛風にして。つい物陰につまこもる矢野の神山匂ひ初め。見初め寢初めて解け初めて。ちよつと〳〵と手を引いて誘ひ給へばこちらにも。むつとせられて引戻し戀は互と先にから。了簡すればまんがちな。斯うした首尾は優曇華の咄する間もあるものを。せはしないやらはしたない其處退かんせと突放す。詞 イヤ小癪なるお上臈。わしが男をわしがでにどうしようと構やんな。びろ〳〵しやるそなたは誰ぞ。アアとつくと聞いて置かしやんせ。權大納言爲道が乙の娘に鳰照姫。地 愛護様とは似合ひし女夫の中と思し召せ。詞 ムヽそなたが公家の姫なれば自らも右大將。有雄が娘に六條姫。地 氏も系圖も若君の御臺と云うて不足はない。イヤ〳〵わしが嫁入する。おれが殿御に持つて見しよ。ならぬ。させぬと兩方へ引張り合うた衣手の。もりて浮名は立たば立てこなたへ。イヽヤこちらへと互に慕る女の意地。若君は持てあぐみ早苗之介は居やらぬか。荒木の左衛門〳〵と。呼ばひ給へば兩人ははつとばかりに走り出で。フシ 先づ双方へ押分けて。詞 様子はあれにて承る大

殿へ披露して。表向より婚禮の儀式を調へ候べし。地 先づ〳〵御歸り遊ばせと宥め賺せば姫達も。流石は人目恥かしくそんなら今日は歸ります 詞 早苗之介殿頼むぞや。愛護様をば鳰照が夫に持たして下されや。地 いかにも〳〵勝重が肩持つて添はしましよ。詞 コレ荒木殿構へて六條姫が嫁入るぞや。地 成程々々左衛門が御取持ちを致すると。當座遁れの請合も空頼めしてにこ〳〵と。互にめなし男なし廣八丁に何時なると。大浦波立歸り見れども飽かぬ山梨の。花の姿も隠れ行く首尾こそよしと兩人は。若君の御供し オクリ 心へ靜かに立歸る フシ 然る折節。向ふより頭の辨成重卿勅使とあつて入り來り人々に一禮し。詞 流鏑馬首尾よく執行ひ神明擁護あるにより。御惱忽ち快然たり。地色 報賽の御爲に神田神領御寄附あり。愛護の若も今日よりは中將に任ずるとの。宣旨の趣き相述べ御宸筆の願文を。若君に差出せばはつと頂戴なされつゝ。社の方に差向ひ柏手再拜懇ろに。高らかにこそ讀みあげける

願書の巻

地 それ秋津嶋は神慮擁護の靈地たり。かるが故に上一人より下萬民に至る迄。佛神を深く尊むなり。就中當社松尾明神は帝都不變の守護神たり。豈納受なからんや。然るに天皇圖らずも。寒暑の難に恙を生じ。醫陰の兩道術盡きて諸佛の悲願空しきを。神明和光の力により。平復ならせ給ふ故。社頭造營仕る。地 先づ五十餘町に地を引かせ。宮殿樓閣鮮やかに。瑪瑙の行桁玻璃の柱。黄金の閤を延べ開き。瑠璃の高欄やり渡し。硨磲の擬寶珠磨き立て玉の蓮臺錦の御帳。渚の砂に黄金を交ぜ壁には七寶。池には玉の橋をかけ。忌垣はかうやうらんけいし。廻廊。拜殿式の文金剛薩埵を移すべし。棟梁の棟をうきやかに。無量の瓔珞結び下げ。華鬘の幢は雲を分け。常樂我淨の。詞 風吹かば胸の蓮空に開き。蘭麝の匂ひ四方に滿ち。無明の。眠り覺めぬべし。地 香の煙諸經の聲。二六時中に絶間なく。綾の幣帛白銀の獅子狛犬。階は唐木を以つて作らすべし。大塔鐘樓堂いかにも高く。雲の上に光を放つて作らせ四季の祭禮怠らず。珊瑚琥珀甍を延べ。九品の鳥居石の塔。金剛界の曼陀羅。胎藏界の曼陀羅。鎧腹卷太刀刀。唐土天竺我朝。三國の寶の數。寶殿に納むべし。仰も神と申すは眞俗たるを姿とし。正直たるを心とす和光。同塵 地 曇りなく異賊を千里に。退け早く素懐を遂げしめ給へ。南無歸命頂禮。敬つて申す寶龜三年五月十五日。一條の中將愛護の若と。高らかに讀み納め悅び。

勇み踊らるゝ。フシ 神道兩部。習合の道の。道たる奥旨をば。見る人聞く人押並べて感ぜぬ者こそなかりけれ。

第　二

地 兩雄必ず爭ふと先哲是を評論せり。地色 右大將有雄卿禁裡に於て爭論の。鬱憤更に晴れやらず家臣駿河の前司國則。其外一家の諸侍膝元近く招寄せ。詞 此度帝御惱につき典藥は醫術を盡し。諸寺の名德家々の秘密を以つて加持するに。更に驗のなき所を比叡山の阿闍梨めが。作り靈夢の滅多的まぐり當りに玉體は。地 忽ち平安なりし故二條の家は日を追うて。威を一天に輝かし我が六條家は年々に。衰へ行くは知れた事 スエテ 無念と。云ふも餘りあり。詞 取分け先帝第一の御子某が妹腹。村雲の皇子こそ天下を保たせ給ふべきを。行跡惡しゝとさみしつゝ當今第二の御子。春宮に立つる由是淸平めが業ならずや。地 彼といひ是といひ最早堪忍なり難し。天下の諸武士を相語らひ左大臣を打滅ぼし。當今春宮追ひおろし一の王子を位にそなへ。某攝政關白と尊まれんと思ひ立ち。當時諸國の大名には先づ何れをか賴むべき。面々所存を殘すなと大きにせいて怒らるれば。あり合ふ者どもロを揃へさて／＼目出度き御企て。御家の繁榮此時と。フシ 悅び合ふこそ愚かなれ。地色 國則一人最前より眉を顰め居たりしが。くつ／＼と笑ひ出し。詞 扨も扨も輕々しく淺はかなりしお心や。大事を思し立つならば天下の大名小名が日頃の行作に心を付け。彼奴は不忠に與せぬ者彼は味方につく者と。とつくと心底見屆けて仰せ合はされ候はゞ。事も成就致すべき諸武士の所存も辨へず。只軍勢の多少のみ。選ばせ給ひうか／＼と廻文を持ちかけなば。遂には此事露顯し叛逆の名を取つて。お家の滅亡近きにあり總じて軍の肝要は。詞 居ながら遠きを鑑みて戰はずして勝利を得る。是良將の成す所。此度の御大事憚りながら國則めにお任せ候べし。究竟の智略あり。此左大臣淸平公。北の方死去の後まだ緣組の沙汰もなし。扨もお家の姬君樣愛護の若の御器量に。首だけのぼつておはします。そこをば態と引違へ淸平殿を聟に取り。お輿を入れられ候はゞ。地 外に色ある御身といひ。年寄り男を嫌ふといひ新枕からそぶそぶと。地色 睦まじからぬ夫婦合そこを見付けて姬君を。瞞し賺して人知れず刄も鞍も奪取らん。詞 元來天子御預りのお寶なれば早速に。御咎めあらんは必定なり。其時節には姬君も此方へ取戾し。逆臣なりと讒奏せば仕合せようて遠嶋か。大方お首はないものよ。地 然る時には天が下只取る山の時鳥。繁れ松山御家の フシ 繁昌ならんと申しける。詞 右大將冠を

振り。汝が智謀の一通り道理無きにはあらねども。不相應なる縁組を呑込む様なうつけでなし。何故か〻る工ぞと咎められては毛を吹いて。疵を求むる道理ぞと。云はせも果てず差寄つて。それ猶易き謀。清平公と殿様と互の威勢争ひは。遂には國の亂れぞと天子も兼ねて是のみに宸襟を御悩まし候由。前非を悔いて今日より意趣を含まぬ誓約に。宣旨を請うて清平を聟に取り度く候と。地色 奏聞あらば忽ちに勅諚下るは知れた事。何程心に落ちずとも否とはよもや申さじと。フシ 手に取る様に言ひければ。地色 跡先知らぬ智慧なしども是ぞ誠に上品の。上智と云うたものならん扱申されたり申したり。文殊様よと囃すにぞ附いて乗つたる右大将。ヲヽ尤もぢや呑込んだ。直ぐに只今奏聞せん善は急げぢや今日中に。姫は送らん輿乗物介添宰領塗長物。嫁入は親の

謀帝も　杯清平も。一杯喰はすと。孫など見せてくれるなと笑ひて。御殿に 三重 へあがりける フシ 勅なれば。暦も入らず相性も。老も厭はず年若な妻迎へ舟壽に。一家一門上下を清平公の御館は。石を打つやら謡ふやら フシ ざゞめき渡るぞ賑はしき。地色 愛護の若も親と子の祝儀の衣裳改めて。やう〳〵御前に出で給ふ。荒木の左衛門近國若君のお傍に寄り。詞 あれに渡らせ給ふこそ只今よりの御母君。先御臺様御同意に御孝行ましませと。地 申す内にも涙ぐみ。哀れ變れる世の中と。スエテ 差俯いてぞ居たりける。地色 乳人は驚て心得て御土器をば持ちければ。御末の女房銚子取り オクリ 御酌にへ立つて汲みながす。フシ 手に觸れながら。若君は。物思はしき風情にて。物憂き我が身の上や母といふ名は變らねど。生さぬ仲には昔よりさがなき例あるものを。恨

めしの父上や元の母様戀しやと。受持ち給ふ御盃干しも得やらでしを〳〵と。心迄來る憂き涙止め兼ねさせ給ひける。詞 六條姫は戀草の枯る〻となしに逢ふ事を。いつか〳〵と松の尾の。神の咎めか梓弓。引違へたる嫁入も心の駒は變らぬを。スエテ 君ならずして下紐は。解かじと心誓文を。立て〻語つて知らせてと。人目の關の輕さげにうろ〳〵とした目の中を。地 左衛門ハツト氣が付いて眞中へずつと出で。詞 サア若君様お盞をば早う御戻しなされませ。此お盃濟むとはやあなたは母御お前はお子。どう剝がしても削つても。親子のお名は消えぬぞや。然るによつて親子といふ眞實ぞつこん生えぬいた。地 親子ぢや〳〵親子ぢやと心を据ゑて御座れやと。あちらを見たりこちらを見。遠いからくる意見ロ フシ 家老の役もむつかしき。地色 若君は打頷き盃飲

んで下に置き。詞悪しい事あら幾重にもお叱りあつて給はれと。地こちらはほんの母樣氣。姫の心は妹脊の中に巡れる御土器。是二世迄の約束と心一つに樂しみて。笑の内なる劍羽や鴛鴦の衾も敷き忍ぶ。奥の間深く入り給へば。若君御禮をさまりてヲクリ御館にへ歸らせ給ひけりフシか丶る折節。地色老の白髪もすべらかし祝儀に持てる島臺の。姥より年は高砂のおのれと屆む腰付も。慇懃めいてのし〳〵と。清平公の御前に献上物を差置いて。詞さて〳〵〳〵御目出度や。さぞお嬉しう思し召そ。折節忰早苗之介此頃痞がおこりまし。飯汁もろくに食べぬ故婆樣苦勞にあろけれど。名代に往て下されと頼むを厭とも申されず。聟になつて廿年閾より外へ出ぬ婆が。只今爰へ來ればこそ御無事樣なる御顔を見て。地冥途の土産に致します。ア、南無阿彌陀〳〵と念佛唱へフシ敬まひける。地色清平御機嫌麗しく。早苗之介は常の事久々にて對面し。滿足なりと宣へば。左衛門耳にロを寄せ。詞コレ大儀にようこそ參つたと。拙者へ仰せ渡された。ヤア〳〵。鯛を振舞へとこなたに仰せ渡されたか。ヲ、食べませう〳〵。七十三になりますが鯔の頭もやりますと。フシ取つてもつかぬ挨拶なり。地清平重ねて宣ふ樣詞コレヤ左衛門。聟が祝儀の嶋臺は松を赤葉に染めなして。鶴かと見れば鳩を置き尉の代りに冠を乘せ。姥にはあらで振袖の女が麻笥に打凭れ。地色熨斗の如くに信濃麻を束ねて臺に据ゑたるは。所存こそ有りつんフシ尋ねて見よと宣へば。地左衛門ぎよつとしたりしが。さあらぬ體に打笑ひ。詞取り所なきかな聟に尋ぬる迄も候はず。早苗之介が物好をつく〴〵察し候に。常磐の色は古めきて。赤松わつたなんどとは無病な人を譬へたり。冠を乘せしは殿樣の御壽命尉に等しきと。祝うての事ならん。姥の代りに御臺樣御夫婦合は塗桶の。丸い樣にと願うた物。鳩は三枝の禮儀を見せ麻の内なる蓬迄。直なる故事も候と似つかはしくも取成して。地聟が麁相や云はんかと。近付き寄つてコレ婆樣。地色お次で休息遊ばせと手を取つて引立つれば。詞ム、婆に一差舞へとか。兎も角も致さうが。心を盡くした嶋臺に篤くと御目がとまらぬやら。地お尋ねにもあづからず。長生きしたる其甲斐には。是迄世間の善惡を見渡つて來ましたが。詞此度の御祝言二條の家の御滅亡。榮えし松も枯葉して荒れたる庭の閑子鳥。年寄り來いと呼ぶなれど若い女は厭がりて。お宮仕への留守事にてつきり眞苧を績みかけん。地麻の狹衣薄くのみ染めて止むべき色かはと。フシ詞の端の

うるさゝに。左衛門そつと後から。太股抓ればアイタシコ。詞こりや年寄りに濡れるのか。但し云ふなと止めるのか。婆にいきすぢ張らせずと御家老役に先達つて。なぜ御意見はさつしやれぬ。いとしやこちの嫁御寮になんの落度もなけれども。血腰の抜けたこなたをば兄に持つたが因果にて。早苗之介は去つたぞや。地それでも合點が行きませぬか。不吉の見えた御祝言凶會日なり申の日なり。お奥の入つたも申の時。去るといふには手が付かぬ今宵の内に去らしやれと。老の唇そゝり立てゝ フシ 齒に衣着せず云ひ散らす。地色 清平呆れ給ひつゝ。なに早苗之介が女房を。去つたと云ふは實正か。詞左衛門ハツト畏り。さん候此夕仔細もいはず妹めを。去つて戻し候へども。御婚禮に取交ぜて不吉なる儀を御耳へ。入れ申す儀を憚りて隱密致し候と。地申し上ぐれば清平公御氣色大きに損ぜられ。詞短慮至極の男めかな某五十に追つかゝり。色に迷うて勅諚を有難いとも嬉しいとも。思うてうか／＼暮さうか。國家の大事身の大事深き思案のある事を。辨へなしの諫言だて。聟が聲の高ければ部屋にも聞かん附隨が。里へ歸りて告げたらば忽ち事の破れなり。詞不便には思へども右大將への言譯に。早苗之介め勘當する明日中に親子共。地屋敷の内を追出せと常は温和の清平公。フシ以ての外の御機嫌なり。地荒木は呆れ聟さへ何聞いてやらきよろ／＼と。鰻卵に地黄丸。お物入ぢやと會釋してすご／＼我家に。三重へ歸りけり。地忠臣の種は心に蒔きながら。植付けならぬ早苗之介空五月雨の時ならぬ。勘氣を受けて追立ての使三度に及べども。門戸を締めて追返し。討つて來らば潔う親子一所に死覺悟。小高き所に座を組みて スヱテ 暇の盃汲み交し。詞コレ母者人此脇差を突立てゝ。左へ廻すを合圖にて首打つて給はれと。地仕方で見すれば二三度も。頷くばかりを答にて。云はず語らずわるびれず フシ 聟もいつそ取得なり。地色かゝる所へ荒木の左衛門近國。駿河の前司國則大勢を引具して。門荒らかに打叩く。詞勝重上より聲をかけ。ヲヽ早苗之介是にゐる。問ふ迄もなく切腹の御使者なりと推量した。左衛門一人來られても早速事の濟むことを。いつぞや禁裡で出會せた變化仲間の鵺侍。地色 檢使などと云ふ事か穢らはしい汝等に。武士の切腹見すべきか罷り歸れと睨め付くる。國則大きに腹を立て。詞ヤイ宿なしの素浪人。佇む所のなきまゝに自業自滅の切腹を。檢使とあつて來りしはおのれが末期の面目なり。地四の五の云うて隙取れば踏付けて首打つが。どうぢ

やノ＼と責め付ける。勝重かツらノ＼と笑ひ。詞豆腐の食らはれぬ六條殿の御家來。國則とやら青のりとやらとろゝな事を置いてくれ。歸れといふにへちまうて失なねば例の雁股と。地弓と矢取つて打番へば。アレ死狂ひのあばれ者。門蹴破つて討取れと侍どもに下知するを。左衛門暫しと押留め。詞やあら聞えぬ前司殿。上意を請けし某が未だ手出しも致さぬ内。貴殿に先の越されては拙者が分はどこで立つ。地色貴殿の切つて立てうかと。刀の柄に手をかくればア、御免誤つた。二條殿の御家來は。どれとも御氣が地短いとフン輕薄云うて押退る。地左衛門は聲を上げ早苗之介も見苦しい。詞此場に至つてさしてなき相手取るは何事ぞ。お主が持病の短氣をば一言の妙藥で。一療治して見よう。心を鎭めてよつく聞け。例へば上手が碁を打つに。一手をおろすも大切に精悍し案ずるを。下手が側からもとかしがり助言を云ふは差當る。善惡ばかりに目が付いて一番の碁の勝負けは。地色上手に及ばん如くにて理非明らかな御主人の。遠い所を鑑みてなさるゝ事は其方や。某などが眼にはなかノ＼以つて及びなし。六條殿への言譯とてお主を勘當なさるゝも。御所存あつての事ならん。主人にすねるは身の誤り奥山家へも引込んで命全う立歸り又奉公せい勝重と。言ひ宥むれど頭を振り。詞イヤ早苗之介が一命は諫めを入れし島豪に。差出して置きたれば蟬の蛻の此身體。どんな藥を用ひても本復はなり難い。峰の上で舟を漕ぎ穴藏で。雷聞く。地用心深う養生も全うなさるゝ御自分は。武内の大臣の年になる迄長生きして。二條の家は野原となり。鹿の臥所となるを見て袖絞らろゝ有様を。伍子胥が忠義の眼を借り見て笑ふぞ左衛門殿。詞ヤレ愚かなる事云ふな。死は一心の私にて始終の功を立て難し。伯夷叔齊取るに足らず。イヤ勝重は往古の管仲が智は持たぬ。コリヤ忠義に古今の隔てはない。ハテくどい事止まらぬと。地詞戰ひする所に妻の常世は鍬の柄に。蓑と笠とを引掛けて。馬に白泡はませつゝ一文字に馳せ來り。殿樣よりの上意がある。兄樣そこをお開きと門外に立寄れば。國則聲を荒らげて。詞ヤアこれノ＼常世。上意にもせよ何にもあれ。早苗之介が女房よ去られたは緣者の證據。不遠慮千萬退きやれ。ムヽ、異な事をお咎めある。そなたは先度内裏にてとこぼえられしと來る。國則といふ侍ぢやの。地常の女と思やつたら當の樋が違ひませう。母が力を産み付けて右の腕に三人力。左の手にも二人力大雁股は持たねども。捻り殺すが合點か。詞アヽ待つた

待つた。實盛こなたへ太刀は先達つて來た。實盛誤すに及ばぬと。押止めここそ矢止なれ。瀬尾ヲヽちつと左様でござんしよと。軒端に紙を打掛けて。門の上に這ひ上るを。瀬尾見るよりコリヤノ\文め。實盛いかになんとまゝ跡に殘りて若君の。御先途を見立てよと頼んだ一言はや忘れて。去られた男の門内へ入らんとあず。は推參なり。瀬尾おのれ其噓一寸でも。おろすこそや切祈ると。太刀の鍔元遠きかくれば。實盛はわつと泣き出し。餘りと云へばむごたらしい。其言分はどうぞいの。矢も暇は取つたれども今はの際の夫の顔。いとし可愛と昨日まつはし給ふ姑の。お慈もまゝ一度聞きたさに。義理も人目も恥辱をも。打忘れたが誤りか。是が身も世もあられよかと口説き。フシ立てゝぞ泣き叫ぶ。瀬尾聲や心や通ひけん老母は顔を振上げて。ヤイナウ瀬尾ござつたか。老を養ふ孝行の何かの種も云はずして。死ぬるが心に懸かつたにようここそは來て下さつた。嫁御ノ\と手を上ぐれば。嘗言も兩手を差下し。互に手を取り撫で擦りお前は嫁と宣へども。わしは義理ある母様とも吾姉とも得云はずに。跡に殘るお悲しやと。フシ咽ぶ。聞つご道理なる。瀬尾 岩木にあらぬ早苗之介フシ共に涙にくれけるが。瀬尾 稍あつてコリャ嘗言。我君よりの御使とは何事なりと尋ぬれば。漸に歎きに取紛れはたと忘れて居りました。清盛公の仰せには。爺首をさし出せども。お味方すべと云ふはそれば かの勝見苦しうならぬ様に。瀬尾 取繕へと宣ひて。身體を渡す實と差あたのを痛むる氣遣を。フシ お心附けられ候ぞや。これ御覧せと差出せば。瀬尾 ハツト押戴き。お主の御意はまゝ忝い。斯く有難きものなればこそ。御覧あれ左衛門殿。實途の旅の主人よりも拝領したる きを拝受の晴れ切つたもの。お暇申すといふよりはや腹を切らんとする所を。左衛門押へて。ヤア死なれぬノ\早苗之介。此度の褒美に國と知行を下さるに。拝領しながら死なうとは。ムウ何と云ふ三衛門。第一我に褒美と三介に何にも拝領させぬ。ハア愚かなりノ\。國も知行も日本もひんぬのたる市の千生。瀬尾 暇行ちかぶり行く時は山河草木悉く。望み次第に我が物。まに望んで魚を釣り の山田を撫通す。第一是に萬石の知行は年々身に備はる。それでも拝領召さぬとは。瀬尾 瀬尾横手を下と打ち。最前食べたお素の賜が只今驗れた。清盛公より改めて知行出為拝領し。御 なる御所存を食の知られた年貢米。食るを待つて早苗之介。[illegible]其中入らぬと言ひ捨つれば。實盛[illegible]門よ

り飛んでおり オクリ 褒取りへ着せて笠の緒も フシ 締めて寢る夜は。なけれども死別れより生別れ。巡り逢ふ日を樂しみに暇の狀が氣に懸かる。爰でさらりと引裂いて。もうこちの人往かしやるか。詞 ム、女房ども無事で居よ。兎角命が芋種ぢや。地 軈て戻つて子種をば蒔いてやらうと差合も。聞かぬ老母の手を引いて門戸くわらりと押開けば。國則向ふに立塞がり。詞 やあ待て〳〵どこへ行く。いつぞやと云ひ今と云ひよくも矢先を向けしよな。堪忍ならぬ太刀先で勝負をせよと極付くる。詞 勝重につこと打笑ひ。土民に下つた某と見侮つての言分な。面白い面白い。地 在所喧嘩の手習ひに小鍜冶が打つた鍬がまち。いざ参らうと振上ぐれば詞には似ず飛退り。詞 こちが習うた兵法に。鍬と斬合ひ不得手なと。地 云ふをば機會に指して行く。道は一筋善惡の二つの中を踏分ける。荒木が智慧は呉子孫子。節義は專諸田横にちつとも負けぬ勝重が。心に望みある時は短氣起すな端喧嘩すな。韓信が股女房の股。拔けて潜つて逢坂の關の。そなたへ差して行く心は古今類ひなき。夫も粋兄貴も粋。女房は粋の骨頂と聞く者。感じ合ひにけり

第　三

地 遊女の袖吹き返す飛鳥風。誰が徒らに產みつけし。情の知るべ手を入れて。水の月取る鳰照姫。長地 女の意地の强弓に的持ちかくる切穴のあな卯の花の掻取に。スヱテ 羅綾の下着錦繡の。打掛小袖しどけなく馴れぬ徒路の介錯に。お婢局壺裝束。奴に振らす長刀の鞘の中山命とは。それも戀路かいとしのか愛護の若の御館を。前渡りしてあちこちと オクリ 合圖のへ言葉咳拂ひ。フシ 風が知らせて。おとづれて。裏門そろりと押開き。內より常世走り出て待兼ねて居りましたに。ようこそ御出で遊ばした扨まあ今宵の御日待。いつ〳〵よりも賑はしくお座敷から勝手迄。藝者どもが居流れて御隱し申す所がない。斯うあらうかと思うた故。御長櫃をお持たせと言ひ遣ばしたは爰の事。詞 あの中へ忍ばせまし藝者の衣裳と思ふなら。地色 誰が見咎めも致すまいよい首尾を見てずつと出し。本望を遂げさしましよ。御窮屈なは暫しの內如何あらんと伺へば。姬君は打笑みて戀さへ叶ふ事ならば。何の苦勞な事あろと恥かしさうに顏隱し。姿も隱す長櫃のふためき渡り押入れて。御供の內で鬚のない奴殿これ舁かつしやれ。お局方はお歸りと戀のすれ者手引して。契りの末は長持を オクリ 館のへ內へ舁き入るゝ日待は公家も。町方も。同じ格なるはで遊び。琵琶琴止めて三味線も胡弓に移り尺八の。戀慕流しに氣が

滅入りや。又引立てる流行歌節音曲は外面に洩れて面白き。フシ既に更け行く。地色半夜の鐘朔日頃の眞の闇。星の如くに高提灯燦爛としてお館の。廻り四五町取圍み清平御臺に引添うて。荒木の左衛門駈來り門外にて大音上げ。詞御寶藏を切抜いて若君樣へ御預けの。御鞍御太刀を盗み取る徒者の御詮議に。大殿是迄御出でなり若君の御館へ。日待に召されし藝者ども罷り出て面々が。身の言ひ晴れを仕れ出よ〳〵と呼ばはれば。地打驚いて愛護の若常世も出て共吟味。日待の興も覺め果てゝ三味線胡弓打折られ。わめく聲又詑びる聲。燭臺こけて猪口皿は オクリ我も。我もと フシ走り出て。地色杖にはぐれし座頭の坊滅多無性の家鴨飛び。殿を後に畏る。詞こりや〳〵こちら向きませい。シテ名は何といふ何處の者。ハアお差合ひかは知らねども夜晝なしの城

達。今からお目をかけ値なし三井の貸家にをりまする。地色次に躓ふ若男名乘りもさすが恥かしの。もりしと申す物眞似師。フシ誰にまがへて唐辛。辛い浮世にうま〳〵と其日暮しの歌念佛。藝者の數に召さるゝは外聞にも冥加にも。かなひかりの力持小人嶋のちよろうけん。跡から出て來る男めが後に負うたは。何箱ぢや。詞上へかづけるは中將姫曼陀羅の手拭。水は天竺恒河川の水えへんと云ふと榮螺子殼が餡になるなつこらこ。ハヽハヽ。いかさま咄に聞いた奴御詮議の筋により重ねて呼出す事もあろ。今晩は歸れ〳〵。アイ〳〵お暇申します。地日待の祝儀は相違なく フシ頼みまするとて逃げて行く。詞サア是ばつかりか門内に何物も殘らぬかと。地聲に從ひ黒漆の長櫃一合舁き出す。六條姫は見るよりもそれ訝しい立寄りて。蓋を開けと宣へば。はつ

と答へて待どもばら〳〵と駈寄るを。常世周章て立ち隔たり。詞必ず麁相なさるるな。藝者どもが衣裳櫃預り主は私ぢや。地吟味にや及ばぬ通さつしやれ急いでそこを開かしやれ。御臺腹立て聲を上げ。詞常世餘りなめけなぞ。主が開けと言付くるに兎や角いふは慮外であろ。昨日今日來た自ら故主に立てぬか開かぬかと。地いと美しき顏に妬みの交るつき聲は。花散る跡に蓮の實の フシ飛んで音なす如くなり。ハヽ〳〵。下々などの云ふ樣なさもしいお詞聞きまする。縱ひ一時半時でもお前はお主私は。家來早苗之介が妻。飽かぬ仲をば暇を取り御家に奉公致す者。麁相な事はござんすまい。少しは立てゝ下さんせ。イヤ〳〵〳〵〳〵そりやならぬ。お主が左樣に厭がる程一倍詮議がして見度い。そこ返いて明けさせぬか。それではわしが立ちませぬ。立たずとお

れを立てゝたも。ハテわしから立てゝ下さんせ。ヲヽそんならば立てゝやろ。蓋あけさすまい開かすまい。地 其代りには自らが詮議止めやんな悔むなと。側なる鎗を追取り伸べ長持突かんとし給ふを。常世はやがて取縋り。詞 奥樣何を遊ばすぞ。常世とほけた顏すまい。櫃の內なは鳰照姫。ヤア大切な儀を宣ふが。何ぞ證據がござんすか。證據は即ち此鎗先。地 突かんとするを突かせじと取付き突退け競合うて フシ 既に危く見えければ。左衛門はつつと出で。詞 憚りながら拙者めに御詮議御預け遊ばしませ。ムヽ何と言やる左衛門必ず兄妹なればとて。贔屓があれば許さぬぞや。成程某あり樣に云はせて御目にかけませう。コリヤ妹。盗んだなく〜。兄樣それは何言はしやる。ヤア諍ふまいく〜。御家の重寶太刀御鞍おのれが盗んで此櫃へ。入れ置いたに紛れがない。眞直ぐに白狀せい。ナウ左衛門殿。人にこそよれ左樣なる惡名を付けられては早苗之介が身分迄異なものになりまする。達つて無體を仰つしやれば。兄とは云はさぬ許さぬぞや。はれやれおのれは狼狽者。女なれども是程の了簡は早つく筈ぢや。大殿樣や左衛門が詮議は盗賊一通り。御臺所の御吟味は筋が違うて紛らはしい。地色 大切な儀が重なる程若君樣の難儀といひ。他門へ歎きをかける事そこをとつくと合點して。おのれが盗んだ鞍太刀が箱にあらうとあるまいと。盗賊の詮議さへ濟めば此場が無事に濟む。盗みましたと名乘つて出て若君樣の御爲に。死ぬる命は夫のため早苗之助が聞いたりとも。憎い奴とは思ふまい。地色 嬉しからうと目で敎へ心で敎へ身をもがけば。常世もやう〜合點して暫し思案し云ふ樣は。詞 兄樣何とも呑込まぬ。御臺樣の御手前は尤もそれにて濟みもせう。御太刀や鞍の御詮議が又此櫃にかゝらうと。地色 言はせも果てず清平公。詞 左衛門家老程あつて詮議の仕樣が面白い。ヲヽ出來したよく〜。某所存ある間其長持に封をせい。地 畏つたと立寄つて早繩切つて肘壺を。男結びにしつかと締め。直ぐに妹を取つて伏せ フシ 高手小手に縛むる。地色 清平公もずつと立ち家來が腰の捕繩を。御自身持つて若君を縛めんとし給へば。御臺所は走り寄りなう情なや胴慾や。許させ給へと取付いて歎き給ふを突放し。詞 間もない親子の仲でさへ左程に可愛う思ふもの。地色 誠の父が不便さは胸も五體も裂くれども。宮仕へする悲しさは。詞 第一は先づ天下の爲。第二番には先祖の爲。第三番には不義者と。他人他門に笑はせぬ。地色 慈悲が餘つてかける繩邪見な親と思ふなと。涙ながらに縛め

の。フシ縄も血筋に染めぬべし。地色サア侍ども此若を部屋の柱に釣上げい。側には人は叶はぬぞ禁裡の宿直相勤め。立歸つて詮議せん近國常世を明日迄。其方に預くるぞ連歸つて吟味せい。幸ひながら左衛門よ。愛護の若も妹も櫃の中なる御寶も。三方首尾のよい樣に。どうぞ思案をく〜と跡は。涙ぞ三重へ知らせなる。フシ露の身の。消えても消えぬ置き所。草葉の外に袖袂。かゝる浮名に愛護の若。身に覺えなき唐鞍や。スヱテ双の太刀を失ひし。科を負ふてふ杉柱。本フシ父のつらさに猶忍ぶ。過ぎ行き給ふ母上の。此世にまします其時は。鴛鴦の衾の中にさへ我を寢させて引寄せて。スヱテ掻撫でられしも何時しかに。今咲く花に色見えで。フシうつろひ易き人心。地色親しき事の例には親一人子一人と。言うて語つて慰むに。いかなる事のあればとて斯くまで強き縛めの。蜘手にかゝる玉の緒も絶えなば絶えね厭はねど。草の陰なる母上の。迷ひ給はん悲しやと。降る甲斐もなき松が根をフシ波に現はす涙なり。地小夜衣わが夫ならぬ夫さへも。宿直の留守と一人寢の。蚊帳の內は籠の鳥。下焦れなる泣き寢入り。夜着の下より一念の。魂はつと燃え出でて空行く星かへ天の河フシ渡しも果てぬ。鵲の走るともなく庭もせの。落つると見えしが忽ちに御臺の姿すつくと立ち。世に嬉しげに若君のお傍へ走り寄り給ふ。時に不思議や是も亦同じ闇路の長櫃より。地一つの魂飛び出でて。中に隔たり追戻し。慕ひ巡ると見えけるが。姿を假の鳰照姫立並んだる顏と顏。互に突退け押隔て睨み合ひ又怒り合ひスヱテ恨めしげなる。聲を上げ。なう淺ましの心やなう。江戸地緣定めて夫持ちて。伏屋に生ふる帚木の。其名をいかにせんとてか。道なき戀の柵を。命にかけてフシ仇波の。地色立返らずばいとほしき。我戀夫も世の中の人には葛の松原と。笑はす事の腹立ちや。フシふつ〜思ひ切り給へ。詞ナニ思ひ切れとは誰が事ぞ。地色我こそ先に三島江の玉江の眞菰かり初めに。定めし夫は夫ならず。子も子にあらで我が夫と。地思ひ詰めにし心の底。千代は經るとも變らじの常磐の山の岩躑躅。いはねばこそあれ戀しき物を戀ひ戀ひて。待見る甲斐もフシなよ竹の。徒らふしの。明けぬ間に。地色我故見する憂目の縄。解いてほどいて打解けて語り盡くさん睦言に。スヱテ嬉し涙も紅の。目の中瞋つて聲震ひそれなる女。フシ歸れとこそ。地色浮巣の鴛鴦の鳰照姫。妬ましの詞やとフシ齒の根を。鳴らし身震ひし。片羽思ひに夜もすがら。戀しき人は水の江の其浦島が箱ならで。あけて悔しき自らに

憂目見せんと計ひし。憎やさがなやはしたなや。いで〳〵恨みを晴らさんと髻を取ればこなたも取つて結ぼほれたる糸薄。亂れ〳〵てゆら〳〵〳〵。ゆられ〳〵て突放され左右へかつばと伏轉び。コハリ 又起上つて追懸け。追懸け追詰められて追返し。胸と胸とに富士と駿河の煙くらべや。思ひ較ぶる女の一念。負けじ。劣らじいとし可愛の俤は。ナホス地 あれ〳〵あそこに嬉しやとて。走り爪立て立ちかゝり。此縛めは結ぶの神の御注連繩。喰ひ切り引切り抱き下して背中を擦り。手足を撫でたり花の姿をつれ〴〵守れば。罪も報ひも嫉妬も仇も。忘れ果てゝ面白や。カハリニ上リ祭文 辛苦しやるか顔の痩せ。初手の悋氣は。どこへやら。今は二人が理に落ちて 合ヨゝゝヲゝヲゝイサヨヲゝ いつそ泣こより外はなし。合 待てば甘露の日傘差しかけし。身もいつしかに オクリ 沈み。果てにし ーヨゝイサヨ ナホスフシ 身の上も。君故ならば、憎からじつまし隠らば唐土の。吉野の山の。山のとろくの又其奥へも。附添ひ引添ひ離れはやらじと兩手を取つて。我こそ行かん。イヤ〳〵此身と彼方へ此方へ引合ひ捻合ひ。力車のくる〳〵〳〵。くるり〳〵と入り違へ。いづれ千引の石の身と。動く氣色も難ければ。地 妹背の仲は今宵には。限らぬものと寝に歸る コハリ 何時迄草のいつまでも。嫉妬は恨み盡くされじ。忘るな忘れじ二世に。三世と閨夜の雨の。形見に通ふ朝の雲。消えても殘る濡衣の恨みも二つ三つ五つ。七つの鐘に夢覺めて。ナホス地 さらばの聲や松の風。俤消えて愛護の若忙然として 三重 へおはします フシ かゝる所に。地色 常世は兄の計ひにて繩目許され駈來り。若君を見るよりもなう嬉しやなさりながら。詞 大殿縛め給ひしを誰が許して其上に。地 御臺所の寝間前に佇み給ふは訝しと。問詰められて若君は。隠すに詞あらばこそあらまし語り給ふにぞ。常世ははつと涙ぐみ扨々是非なき世の中や。詞 兄左衛門と言合せ急いで落し參らせて。御詮議あらば私が御爲に死ぬる覺悟にて。地色 只今來り候へども執念深い御臺様。共に屋敷を忍び出て御前のまします先々へ。附添ひ給はゞ世間から浮名も立てう親子御の。お顔も再び合はされず私とても犬死を。致さん事の口惜しき御器量勝れ給ふのが。其身ながらの身の敵胴慾なげにこじつこう。惚れ腐つたとしやくり上げ フシ 泣くも。切なる心なり。地色 御臺閨より走り出て。ヲヽ頼もしや優しやな焦れ焦るゝ魂の。浮れて空に迷ふとは。我身ながらも恥かしきとても叶はぬ戀路ぞと。今は心に諦めて。ふつ〳〵思ひ フシ 切りしぞや。地色 愛護の若を落してたも。只管

頼むと合はす手も中に情やフシ篩るらん。常世は膝を立て直し。詞嬉しい事を宣ふが御眞實にて候か。神々かけて噓はない。地ハア有難い忝ないお禮はゆる〳〵申さんと。若君の手を取つて比叡の山におはします。阿闍梨の御坊は現在の伯父上様にましませば。あれへお渡り遊ばしませ早やとく〳〵と言ひければ。愛護の若は聞し召し母上様や其方が。志は嬉しいが。詞親の不興を受けし身の縦へいづくへ行きたりとも。年端も行かでどの様な大きな科を致せしと。地色稚兒法師等に笑はれば生きたる甲斐もあるまじき。元の如くに縛めて父のお心休めうと。スヱテ思ひ入つたる有様に。常世はわざと荒かに詞こりや曲がない若君様。左衞門や私が命にかけての忠義をば。お前は水になさるゝかと。御臺も共に諫むれば若君泣く〳〵立上り。然らば仰せに任さんと

踏みも習はぬ一人旅。常世跡から來てたもう。父上お叱りあるならば。母様よきにとばかりにてヲクリ館をへ紛れ出で給ふ。フシ跡見送りて。地諸聲に。フシ泣く音を立てゝゐる内に。地色思ひがけなき清平公御太刀を提げて庭上へ。つか〳〵と出で給ひ。詞ヤア何故に兩人は爰にゐるとの御詞に。地狼狽へ惑ひうぢ〳〵ととかう答もなかりしが。地色御臺心を落し付け。詞斯く顯はるゝ上からはとても遁れぬ身の過り。地愛護の若は自らが館を落し候と。フシしを〳〵として宣へば。地色常世はずつと差出て。いえ〳〵左にては候はず。御家の寶を盗んだも私一つの心にて。御存知もなき若君に憂目見するが悲しさに。兄が手前を拔け出て斯くは計ひ候と。死ぬるを先に立てゝゐるフシ物言ひさへも涼しけれ。詞ム、其筈〳〵。汝が盗んだ太刀鞍は愛護に預け置きたれば。一旦彼

が手へ渡し館へ歸る其砌。地色持参致せと言ひ渡せコレヤヤレ長櫃持つて行けと。餘り嬉しき御上意に。答もやらず百千度打頷いて會釋して。女の入らぬ力損今といふ今間に合ふと。櫃輕々と引提げて走出るを後より。御臺所はしつかと取り。詞是は自ら預らう。これ奥様。それでは最前立て給ふ誓文が無になりまする。ヲヽ神の罰恐うない。我戀叶はぬのみならず鳰照姫にのめ〳〵と。二世の下紐解かせてはどうも生きてはゐられぬ義理。どなたの御意でも此櫃は。地爰を出さじと取縋りせき狂ひたる有様は。フシ離れつべうは見えざりける。地色清平今はたまり兼ね御太刀を拔いて胸先を。貫き給へばコレ殿様。詞何科あつて自らに惨い死目を見せ給ふ。地色惨いつれない一念に親子の業を三日が内。取殺さずに置かうかと。泣き叫びたる其聲はフシ恐しく。また哀れ

なり。地清平涙をはら〳〵と流し。詞尤もなり理よ。今言ひ聞かす一通り。篤くと心に得心あれ。お主が親の右大將惡心胸に塞がりて。娘の不便も打忘れ世に不都合なる戀聟は。二條家の寶をば奪取らんの謀計。逆意の程を奏聞して打滅すは易けれども。仇を仇にて返すれば子々孫孫迄仇になる。地色馴れ親しむを幸ひに意見の加へ善心に。立返らせん所存にて勅答申せし夫婦の緣。詞嫁入つて來る其方は帶をも解かずまどろまず。身を堅めたる心底と。親子盃交はす時物思はしき有樣と。老母が諫めの嶋臺と。三つを一つに思ひ寄せ。清平はよつく知つてゐる。いとしや惡い親持つて成るべき緣を引裂かれ。地女心の一筋に戀煩うて死なずんば。淵川に身を投ぐるであろ。詞命一つを助けるは廣大無邊の慈悲といひ。堂の珊瑚の珠。碎くより猶殘念さに。地そなたの爲に清平が心一つに樣々と。思案工夫をする內によしない寶の詮議だて。詞太刀鞍紛失致せしと世間へ沙汰を致さすは。右大將が貪慾の願ひを止めん謀計。誠は某盜み出し天子の御藏に納めたり。地愛護に越度はなけれども手段を人に知らせぬため。預り主の科を著せ縛り搦めて剩さへ。詞屋敷を迷ひ出でたれば暫し父子の緣切れたり。そなたを里へ戾すれば母といふ名も消えて行き。互に他人と他人との。內に契りも交せかし。地色跡をも慕ひ行けかしと工みし事も徒らよ。此長櫃の太刀鞍には耳もあり又口もある。母といひ子といふ名を削らぬ內に見苦しき。立ち振舞ひを致せしは二條家も六條も。末代迄の疵になる。今死ぬるのは親への孝。夫への心中ぞや恨んでくるゝな六條姬。詞清平は暇をやる。こちが夫は愛護の若。地色夫婦は二世と云ふなれば此世の緣は薄くとも。徒名の立たぬ未來にて長き妹脊を契るべし。さは云ひながら是非もなき。慘い最期を見る事と。スヱテしやくり上げてぞ。泣き給ふ。地色姬は苦しき聲を上げ。あゝさて嬉しのお詞や。つゆかゝるべきお心と。知らでやみ〳〵朽果つる。フシ身の上こそは是非なけれ。地色逢ふにしかへば鯨寄る浦の住居に褰れても。何かはつらく思ふべき飽かぬ別れをする時は。縱へ千年を過ごすとも一夜の夢の心地ぞと。聞き習ひたる事ながらせめて一日片時でも。此世で妻よ夫よといひ語らはゞ斯く迄に。人戀しとは思ふまじ何を云うても悔みても。詮方波の立騷ぎ今死んで行く自らに。恨み妬みもないものを鴉照樣はいづくにぞ。愛護樣の御事を。よく〳〵賴んで死にたいに。逢はせてたべや人々と フシさめ〴〵。泣いて搔口說く。詞ヲヽよい合點〳〵。婆

婆と冥途に二人嫁。(地色)清平も亦對面せんと白ら寄つて長樋の。盃取り給へば姫君は。闇を出でたる弓張の。眉泣き腫らし襟先も涙の常世諸共に。六條姫の御側へする〳〵と走り寄り。(詞)なういとほしの有樣や。(地)同じ戀路に踏迷ひ我やはつらき人や憂き。思ひもわかで命さへ今消えて行く人ぞとも。知られず知らぬ中々に共にすげなうはしたなう。言ひ散らしたる恥かしや。自らとても下紐の關を越えねば定めたる。夫といふ名も知れねども。言ひ置かせ度き事あらば。心を殘し給ふなと(スヱテ)共に消え入り。給ひけり。(地色)六條姫は玉の緒の切れ行く氣息をほつと纔ぎ。暫しは顏を打守り。(詞)羨しきは鳰照姫。世に恨めしきは我身の上(地)夫といふ名は變らねど遠き未來で待つよりは。近き此世に千代や千世契り重ねて嬰兒産んで。松に小松に相老の諸白髮迄添ひ給ふ。

(フシ)行末さへも。ゆかしけれ。(地色)若君の御行末尋ね渡らせ給ひなば。(詞)清平公のお許しで六條姫は未來にて。必ず女夫になる筈と云うて語つて證據には。　お前が立つて給はれや。此世はこなたへ貸しまするする。やがてアノ世で受取るぞや言ひ置く事は是ばつかり。あら堪へ難や苦しやと。悶える中に殘し置く。口ずさみとやかくばかり後の世の。賴みになして戀死なん。生きて待つべき契りならねば。南無阿彌陀佛とばかりにて。秋に先立つ朝顏の(フシ)消えてはかなくなり給ふ。(地色)げに人界の有樣は。かげろふ稻妻水の月。消えての後は親もなく子もなく妻も假りの名に。假りの契りを賴みにて鳰照姫は若君の。御跡慕ひ出で給ふ常世も共に夫の顏。見まくほしさに旅衣。あはたつ山の哀れとは。死んで行く身と止まりて。子を思ひたる老鶴と思ひ較べて見較べて。亡き魂は西の空焦るゝ我は東向く。跡には一人すつくりと名殘惜しげに手を上げてさらば。さらばの聲々に。落つる涙は百千行。ばら〳〵鳥の鳴かぬ間に別れ。別れに立出る

第四　愛護の若道行

(地)高麗錦。(フシ)たち馴らしたる。子心に。世は憂きものと白河の。はしたなき目に愛護の若今朝立出る旅衣。(フシオクリ)迷ひへ出でさせ。(フシ)給ひける。昨日は玉樓金殿に。冠の紐を結びしが。(スヱテ)今日は行路の旅草鞋。蹴上の水に影映す(オクリ)姿の。花は散り行けど色がありとや蝶々の。裾に縺れて戯れて。肩に宿りてひら〳〵ひら。ひらりと拂ふ其先へ又飛ぶ翅のちら〳〵と。關の東を敎へ行く。あゝかはゆらし。(フシ)しほらしや。汝さへ旅の。道連れと。思へど物は岩陰に。姿隱すも慕はしく梢々を打見やる(フシ)楝のもとに。す

つくりと。一人立つたる六條姫。我待たも。長地追分とのみふる天雲の立隔たれどいつしかに。人にや洩れんわれが身の志賀の。里にぞ三重へ着き給ふ

顔に立寄れば。はつとばかりに驚きて。スエテ暫し傾く笠の内。手を取られては跡へ寄り。縋るゝ袖を振放し。左へ走り右へ逃げ。覺えず帶のしやらどけを。わしが結ぶと走り寄り引繕うて腰元を。とんと叩いて戴いて三下リ歌若衆樣には。黑いが似合うたえ。染めてさへ。染めてお召しやれく。ろ茶染え。染めてさへ。染めてお召しやれく。ろ茶染えナホス櫻が。フシ枝に梅薫る。持合ふせたる女夫連。あやかり者と旅人のオクリ見返る。振りも二度三度四の宮河原十禪寺。本フシ古蹟と。聞けば恥かしく。浮名や爰にとゞめんと。跡へさがりてフシ道草の。四片八仙花をるふりも。母をまくとや忍冬。花見る振りで待合はせオクリ先立ちへ行けば追着きて道守る神に。手向けする男思ひの誓ひには。逢坂山と繰返す若君は又いづくへ

地湖の懷廣き志賀の里。住みよき宿も浪人は名字を植ゆる田を持たぬ。早苗之介勝重が貧を養ふ物とては。拜領の鍬宿月毛生れもつかぬ小盜みの。夜々荒す瓜畠たび重なれば顯はれて。ほだ足打たれ繋ぎ鳥立つも立たれず起き伏しも。ならぬ所帶の煙絶え命も絶ゆる身の行方。スエテ無念涙にくれにける。地母は見る目の悲しさに外面へ出でて林なる。晝の桃搗つ親の闇梯子入らずに割鍬。梢に棹は屆かねど屈みて伸びぬ老の腰。そこよフシこゝよとする所に。地百姓ども馳來り的證見付けた老耄め。詞扨々汝ら親子程横着者は又とない。行先もなき浪人ととこぼえたるが不便さに。地下に足をば泊めさせて慈悲を垂るればすりかはく。麥秋には首刈りする稻の穗を拔く夜綿をとる。どこ

とも畠盜人は其座で埋むが法なれど。三井寺の領分だけほだ足打が宥免ぢや。地色祖母めも今日より同罪と。足手を取つて引張れば。詞早苗之介はア、コレ待つて下されませ。段々の御腹立ち尤も至極さりながら。老母が桃を騙れしは。某斯樣の有樣を堪へ難かろと問はれし故。母に苦勞をかけまい爲いや／＼さうは存ぜぬが。坐つてばつかりゐる故に太股に實が入つて。よだるう御座ると答へしを。御存じのかな聾なま中の儀を聞きはつり。ムム桃に實が入り喰ひ度いとや。地こそ心得たと馳出て斯樣な粗忽を致されしも。某が詞の科打ちも叩きも遊ばされ。科なき母は御赦しとフシ手を摩り詫ぶるぞ道理なり。地色親に孝ある一言は田夫の身にも聞き入れて。然らば婆々めは赦してやろおのれが科は今日より。桃盜人の制法

に過怠も桃栗三年ぢや。柿なら八年かゝらうに仕合せ者めと聲々にわめき。散らして 三重 へ歸りけり。フシ 御痛はしや。若君は。習はぬ旅の物憂きに幻ぞとは露知らぬ。御臺所は跡追うて附添ひ給ふ煩さに。心を苦しめ氣を痛め。スヱテ 走り拔けたる玉鉾の。道の疲れも顧みず。急ぐ心にやう／＼と。一村里の木蔭にぞ。フシ 泣く／＼辿り着き給 地色 暫らく氣息を押鎭め。跡振返り眺めやり。いまだ程なき事なれば追着き給はん悲しさよ。何卒爰を行拔いて比叡山へ登りなば。女人は叶はぬお山と聞く。さあらば此道急がんと心ばかりは進めども。御所を出でさせ給ふより。酒飯ふつつと絶え果てゝ食べさせ給はねば。しを／＼と立つ桃林 フシ 枝も高くに見えけるを。是幸ひと杖振上げ。丁々と打ち給ふ。地 老母は見るより腹を立て。詞 憎しさもしゝ小冠者め。其桃搗つて自らを又候憂目見するかと。地色 ずかずかと走り出で側なる棹を追取つて。殿り情もなう悲しやと若君は。あなたこなたへ逃げさまよひ。旅に疲れし者なるに赦し給へと宣ふ聲。小家の內なる早苗之介顏差出し見るよりも。詞 なう若君樣愛護樣。是母じや人／＼。地色 やれ是なうと身をもがき行かんとすれど足立たず。兩手を擧げて是々と。呼べど招けど聞かばこそ跡も見向かず打つ杖を。あしらひ兼ねて若君はなう早苗之介爰へ來て 地 とゞめてたも勝重と。お主は杖の下に泣き。子は坐ながらに泣叫び。やれ勿體なや母じや人。廿年來引込んで若君こそは見知らずとも。形恰好にも面差にも。清平公の緣者とは。思し寄らぬか淺ましや。斯く成り果つる憂き苦勞皆御主人への爲なるに。武士の冥加も忠誠をも。無になす親の恨めしやと。小家を動かし足摺りし。紅潮す顏色は。地獄を巡る目蓮の母を。フシ 見付けし如くなり。地色 老母は何の辨へなく。猶振上げて打つ杖に。フシ 泣く音や空に歸りけん。麻吹き分ける風の隙。六條姫は現はれ出で。袂の下に若君の。スヱテ 身を隱す間もありやなし。老母いよいよ腹を立て。詞 小冠者め一人と思ひしに。女郎め迄が隱れ居て。桃を取るさへ腹立つに麻まで荒す憎さよと。地色 又さんざんに打つ杖を姫は愛護の楯になり。子は又母を打たせじと。互に杖の下に寄り。孝と戀との二道に我身厭はぬ有樣を。勝重見るよりきよつとして。愁の淚忽ちに眼瞋し肘を張り。胸押摩り氣息を詰め。物をも云はず打守る。此世にあらぬ繼母ぞと スヱテ 知らぬ。心は道理なり。若君は聲を上げ。やれ早苗之介胴慾な。現在主の打たるゝを守り居るのは何事と。云はせも敢へず。詞 アヽしやべるまい聞きと

むない。早苗之介はついしかに四足殿に奉公せぬ。主でない家來でない。急いでそこを立つて行こ。若君呆れ顏振上げ。ム、主でないならない迄よ。四足殿とは誰をいふ。ハヽ／＼非道の戀もする氣から。詰開き迄あがつたの。手を引合うてぞら／＼と面白からう嬉しかろ。世界國土の樂しみに。女と戲ふれ遊ぶ程面白い物はない。此勝重はこなた故獨寢をして居ますぞや。地千に一つも斯樣なる麁相な事があらうかと。常世をこなたに付け置いたが。詞アヽ盗人の隙あれど守りての隙なかりしな。地大織冠より數百年相續いたる二條家が。今日の只今滅亡した。地色御家がなければ勝重はどなたに勘當許されて。誰に奉公仕ろ腹切つて死ぬる身ぢや。詞圍まひ度うても圍まはれぬ。早苗之介は慘けれども清平公のお心には。片輪なる子が可愛いとて又御不便が殘るであろ。地世間へ廣うならぬ內惡い性根を入替えて。館へ歸つて詫びさしやれ。詞只今打擲しられたは。こなたの誠の御袋が。諫めの杖と思しなば。地色無念な事も何にもない。急いで京へ歸らしやれへちまうてなりや勝重が。兩人共に打殺すがどうぢや／＼と責むれども。言譯すれば母樣の。御身一つの浮名ぞと。答もやらずさめ／＼とフシ泣く音。ばかりにおはします。地老母はつく／＼打守り。詞今といふ今合點がいた。心中をしに出たのぢやな。爰は日陰で惡からうあの辛崎の一つ松。地首縊るのによい場所と小家の戶。フシさいて入りにける。地色若君涙にくれながらエヽ胴慾な早苗之介。たとへ鳥類畜類でも。親子の禮は知るものを年端もいかぬ愛護とて。道ならぬ義のあるべきか今かゝる身になつたれば。扨は汝も見捨てしな。神代此方主として家來の者の杖を受け。手を合はしたる例はなし。地打叩かるゝは厭はねど後代人の笑ひ草。なりなん末の悲しやと又むせ。返り泣き給ふ。地色稍御涙の下心。怒らせ給ふ故やらん松の燼拾ひ取り。小家の片壁墨黑に。細工の姥が惜しみつゝ。我を打つたる其仇に。花は咲くとも桃なるな。麻を蒔くとも苧になるな。穴生の里の。あるらん限りは。二條の若とフシ筆捨つる。末の世迄も桃ならず。麻は繁れど苧にならぬ。里をば過ぎて行先も。婆娑と冥途の中々に二人が。仲こそ三重へ浮名なれ小波や。志賀の山風吹き荒み。釣する海士の舟ならで焦れ焦るゝ胸の火に。鹽こそ燒かぬ鳰照姬。常世一人を力草小松若松搔分けて。戀する人に大比叡や。フシ坂本にこそ着き給ふ。地色習はぬ旅に兩人は。杖を力に弱々とフシ手を引き山に差しかゝる。地色牛町ばかり登りしが不思

議や僕に足痛み。胸騒して向ふより突くとはなしにかつぱと倒け。先々と進む爪先は劒を渡る如くにて。震ひわなゝき慟かず姫君はつと心附き。詞誠に爰は唐土の四明の洞を移されて。女人結界なりけるを破らんとせし勿體なや。地色是に付けても世の中に。罪の深きは女の身の女の中にも自らは。迷ふが上の戀の闇いつかは晴るゝ憂身ぞと。雲入る嶺を打見やり二人はどうと座を占めて。スヱテ呆れ。果てゝぞおはします。地色かゝる折節山上より山賤一人下り來る。常世嬉しく立寄りて。詞申し〳〵柴刈殿。比叡山の南谷阿闍梨のお寺を尋ねる稚兒。地先達つて參られしがいかゞ便りを致さうぞ。教へてたべと宣へば。詞柴刈り橫手をちやうど打ち。身どもも夜前その坊の臺所に居ましたが。夜半の過ぎでもござらうが。門荒けなく打叩き愛護とやら舞子とやら。都の壻とて來りしを。詞上不審に思し召し。夜陰に至つて何故に尋ね來らん樣はなし。扨は谷々の天狗ども。阿闍梨が行力引き見んため愛護と僞り來りしな。地これ追出せと宣へば逸男の若法師。我劣らじと走り出て。詞こりや〳〵丁稚。師の阿闍梨の御一家と騙事言ふ賣僧者。さあ失せぬかと言ひさまに是非をも聞かず打ちければ。地あつとばかりに平伏して。杖を赦して給はれと。手を合はせども聞入れず。まだ頰桁を叩くかとさんざんに叩き伏せ。門戸を締めて寄せ付けず死んだであらうと存じたが。人の命はつれないものあれ〳〵あれなる杉の木の。そこ迄は來て行き倒れまだうご〳〵として居た故。地色若し近邊に其方が知るべの者のあるならば。傳へてやらんと尋ねしに早苗之介といふ者が。穴生の里に居ますれど是が方へも行かれぬと。我身を恨み世を恨み伯父坊恨み親恨み。泣いつ口説いつ今頃は大方命もないであろ。お連と聞けば痛はしや。貰ひ涙がこぼると フシ 教へてこそは。通りけれ。二人ははつと氣も消えて。こは何とせん淺ましや。現在お主や我夫の。死ぬる生きるといふ事を聞いても側へ行く事の。ならぬは何の因果ぞと。膝と膝とに凭れ合ひ スヱテ 聲をばかりに。泣き給ふ。地色常世は淚押拭ひまだ佛神の御加護にて。夫の在家を承る穴生とやらへ尋ね行き。勝重殿を同道しお山へ登せ申すべし。暫し御待ち候へと オクリ そのまゝへ里へ急ぎける。フシ 跡には姫君。只一人。深山の鳥の聲のみぞ。我に言問ふばかりにて道行く人も見えざれば。ようすが尋ねんやうもなし。さしもに高き山が嶺を。見上げ見下し立ちつ居つ。姿も亂れ氣も亂れ。裙に取付き伸上り岸に凭れて飛上り。匐登り搔登

り。縛び落ちては這上り。茨伏柴身を裂きて腸を断つ猿よりも。勝るは我が戀ひしさぞ。なう愛護様〳〵。なう若君と張り上げて歎き。叫ばせ給ひける。地色無慚やな愛護の若。杉の木の間に打臥して。はや消えかゝる玉の緒を結びとめたる山彦の。愛護〳〵と答ゆるもやう〳〵として起上り。杖に縋りて。フシよろ〳〵と。一足行きては氣息を繼ぎ。二足來てはひよろ〳〵とオクリよろほひへ給ふフシ有様を。地姫君見るに堪へかねて南無や山王大權現。塵に交る神心穢れを許し給はれと。そなたに向ひ手を合せする〳〵と駈登り。若君の御手を引きオクリやう〳〵へ麓に下り立ちて。地色互に顔を打ち守り。變り果てたる俤を。御見忘れなされしが鳰照姫にて候ぞや。御いとほしの有様やとスヱテ抱き付いてぞ。泣き給ふ。地色暫らくあつて若君は稍御心鎮まりて。詞なう嬉しの人の情やな。まだ解き初めぬ下紐の行巡りたる二世の緣。地今より末は變らじと。綻びそむる花の笑。うつろふ菊に白露をフシ十分持てる氣色なり。地色鳰照姫も今の間に憂ひの色の面變り。手を取組んで膝寄せて憂さとつらさを取交へ。六條姫の御最期を御物語りありければ。若君はつとばかりにて覺えず御手を打ち給ひ。詞こは何といふ身の上ぞ夢か現か幻か。地色今は此世に亡き人の附添ふ影とも知らずして。道なき事と思ふから跡へ下りつ先へなり。すげなう見せし問ひ答へ。厭ひもやらで是迄は跡を慕うておはせしが。女とゞめるお山には魂とても叶はぬか。爰に待つぞと立止まり別れて過ぎしは昨日の夜。今日又同じ麓にて御身に巡り逢ふ事も。定めなき世の定めとは。思ひ出るも恥かしや。何れを戀の淵瀬とも。知らぬ此身に浮名立ち。親の不興を蒙りて命生きても何かせん。思ひ極めて候と。しやくり上げ〳〵。涙の音は聞えねど。流れは。瀧に較べ合ふ。地色姫君世にも悲しくてよしなき事を宣ふな。詞父上様の仰せには六條姫は冥途の妻。此世の妻は鳰照姫二人の嫁とあるからは。地色浮名不孝も侍らず心に懸けさせ給ふなと。諫め給へば愛護の若。思かの事な宣ひそ。地父の慈悲なるお詞が。フシ今は我身の仇なるぞや。地未來の妻が待ち兼ねて。冥途へ我を招く故。家來の母の杖も受け早苗之介にも見限られ。辛かるまじき伯父上に慘うつれなうしられしも。死ねと草葉に守るらん縱へ都へ歸つても。親子の緣も氣遣はし妹脊の仲は猶しかに。妨げられて添ひ果てぬ歎きに袖を濡さんより。詞自ら不便に候はゞ冥途の道へ伴はん。いざさせ給へと宣へば。地鳰照姫は打頷き。ヲヽよくこそ誘ひ給はり

し。年月沈む戀の海。龜の浮木は得たれども此世の夫と結び置く。帶さへ未だ解かぬ間に。未來の妻へ戻すのは。思へば淺き緣なり昨日は人に羨まれ。今日は人をば羨むも同じ戀路と三つ瀬川。とても思ひ詰め給はゞ。常世が戻らぬ其内とフシ勸め給ふぞわりなけれ。地若君世にも嬉しげによくこそ思ひ切り給ふ。詞煩惱も是もと菩提。地色假りの浮世に假りの夢せめては跡の詠めとて。弓手の片袖引きほどき小指の血汐染め衣に。殘し置きぬる泡沫の泡と消えぬる御形見。霧生が瀧の杉の枝に結びとゞめて手に手を取り。南無阿彌陀佛と諸共に。涙の瀧津水底に。入りて形はなき跡も。袖掛けの神杉とて今の。世迄も三重へありとかやフシ然る所へ。勝重常世は馳來り姫君いづくにましますと。そこよ爰よと尋ねしが袂掛けたる杉の枝。怪しやと見る菊の紋淺黃が

裏の紅に。詞長らへば又憂目をも水底の。深き心を入りて知らせん。愛護の若と。地讀みも終らずこは南無三寳遲かりしと。泣くも泣かれず齒を喰ひ詰めフシ足摺りしてこそ居たりける。地色早苗之介は聲を上げ。なう愛護樣若君樣。御短慮な事なされたなう。詞御臺此世に亡き人と某知らう樣はなし。不義と一途に存せし故物柔に申しては。地色お心は直るまいお前が思し切られても。女は離れにくいものあた胴慾に云うたらば。館へお歸りなされうかと勿體なくも家來の身で。言ひ散らしたる惡口が。お腹が立つての御最期か。母が杖を當てたのが無念でお果てなされたか。追着きまする若君樣。お供に召連れ給はれとフシ既に自害と見えにけり。地常世周章て〻取付けば。詞ヤア狼狽へたる女房。死ないで武士が立たうかと振放す手をしつかと取り。成程死に

たか死なせましよ。併し落度の詮議ならこなたより先づ伯父坊樣。人國まふは出家の役他人なりとて捨て給ふは。いづれの法にある事ぞ。地色誠不審に思すなら虛實を糺し給ひてこそ。沙門の法も立つべけれ對面をだにし給はず。叩き出せとは何事ぞ。一禮言うて其上に差違へても死なしやれと。ことわり立つれば早苗之介。詞誠にさうぢや坊主首。いで打落して腹癒んと。地色馳行かんとする所へ阿闍梨も周章てふためきて。氣息をばかりに御出であり只今人の風聞に。詞愛護が身をば投げしとは誠ならずと思ひしに。兩人是に居るからは扨は若にてありけるか。地それとも知らで情なく寺へ寄せざる殘念とスヱテ涙を流し宣へば。詞早苗之介ずつと寄り。ヤイ胴慾者の伯父坊主。叡山法師はどれともに人を殺すが法なるか。若君へのお手向に坊主首をば賜らんと。反

打つて突つかゝる。阿闍梨騒げる氣色もなくヲ、尤も〳〵。愛護が命の終つたは定業なれば是非もなし。愚僧に恨みを殘したる非業にてあるならば。加持の力で蘇生せん先づ鎭まれと宣ひて。地御衣の袂を結び上げ水晶の數珠押揉んで。天を仰いで三禮あり。地を指差して再禮し。瀧に向うて秘印を結び振鈴雲に響かして。發願をこそ述べられけれ。フシおほけなく浮世の。民におほふかな。我立つ杣に。墨染の袖。志學の春の始めより。經藝の花香ばしく耳順の秋の夕には。玉泉の水底清し。瀬田の螢は孫康が窓に古今を照らし見て。無明の眠り醒め易し。比良の高根に。雪降れば。車胤が眼鏡を忘れしなり。妄執の雲打拂ふ。嵐につれてあれ。あれ〳〵苦海を渡る船なんめり。彌勒慈尊の曉をいつと契りて撞出す。コハリ圓城寺の鐘の音。悉有佛生有明の石山寺の秋の月。三諦即是目前に止觀の胸を觀念す。浸染妙有の文字を捨て。法界東流の聲を離れて一實相の。眼の前には死にもせず又生れもせず。況や非業の童男童女。ナホスフシ愛護並びに鳰照姫が。蘇生の效驗ならしめ給へ。歸命。頂禮金仙氏。佛眼金輪五壇の法。一字金輪孔雀經。七佛藥師熾盛光。烏芻沙摩隨求大佛頂。五大明王六觀音。六字河臨訶梨諦母。八字文珠普賢の法。那膜。所願虚空藏天には。三諦七曜九曜廿八宿別して山王廿一社の大權現。頓法成就ならしめ給へと責掛け責掛け。ヘ祈らるゝフシ時に山鳴り。地色瀧波は渦を巻き上げ巻きおろして。六條姫は忽然と波の上に現はれ出で。地過去拘留尊佛の昔より愛護と我とは生々世々。怨敵の餘執故只今命を取つたれども。大聖の法味を受け成佛得脱致したり。猶此末を守らんと云ふかと思へば波の底。形は消えて愛護の若姫君諸共瀧壺より。手を引合うて出で給へば夫婦は奇異の思ひをなし。阿闍梨を三拜百拜し二人を二人が肩にかけ。喜び勇んで立歸る佛力神力擁護力三つの要に末廣の扇の風や家の風。松は素直に竹素直く。齡は千龜萬鶴も。變らぬ常磐堅岩やと傳へて。今も興じけり

第五

地身體髪膚はたらちねの枝葉まつたき孝の道。愛護の若君鳰照姫蘇生の喜び祝言の。祝ひは二つ山王の惠み尊き神祭。七社の御輿御船に飾り三千の衆徒悉く。甲冑弓箭帶しつゝ惡魔を拂ふ氣を顯はし。漫々たる湖水の面フシ錦を流す如くなり。地色陸には二條の左大臣清平公を始めとし。權大納言爲道卿若君御夫婦御伴ひ。時に葵の風薫る水干淨衣みやびこに。舍人牛飼雜色まで。あたりを拂ふ行裝は目

を驚かすばかりなり。詞左大臣淸平公參詣の諸人に向ひ。笏取延べて宣ふやう。抑も此比叡山と申せしは。王城の鬼門を護り惡魔を拂ふのみならず。地一佛乘の嶺と申し。鷲の御山を象れり。地色又天台と號するは四明の洞を移すなり。實相無我の春の花時ならずして香ばしく。大乘戒會の時鳥フシ待たぬ先より聲淸く。平等利益の新月は。二千里の外明らかに。生滅滅已の雪の色都の。富士の名も著き。我が立つ杣の杣木挽く。伐木とう〳〵りん〳〵と。根本中堂文殊樓麓にあたつて波止土濃は。智水の波も濃かに和光の。塵に交はりて。衆生を導き。給ふなり。有難や一切衆生。悉有佛性如來と聞く時は。女人の身迄も賴もしや。嶺には。遮那の桁を並べ。麓に止觀の海を湛へ又。戒定慧の三學を見せ。三塔と名付く人は又。一念三千の。機を顯はして三千人の衆徒を置き。圓融の法も曇なき月の橫河も見えたり。扨又麓は小波や志賀辛崎の一つ松。國家安全長久の齡を見する地しるしの松。あら有難やと演說あり御手を合はさせ三重給ひけり地色然る所へ軍勢一度に合圖の聲を立て合はせ鬨をどつとぞ上げたりける。詞荒木の左衞門駈塞がりこは何者の狼籍ぞ。名乘れ聞かんとありければ。駿河の前司國則一陣に駈出し。問ふにや及ぶ近國折角巧んだ企てが。無になるといひ剩へ姬君迄失はれ。地鬱憤を散ぜんため右大將有雄卿。御出陣なされしぞ。淸平が首打つて降參せよと罵つたり。詞早苗之介飛んで出でいや推參なりおのれ等。姬は御臺に送るから斬らうが突かうがこち次第。時もこそあれ日もこそあれか〻る神事を妨げて。地御輿を穢す無道者いで物見せんと云ふよりはや。兩陣互に群つて火花を散らし三重戰ひけるフシ味方は無勢。地色殊には又思ひ寄らざる一戰故。軍勢心奪はれてフシ殘り少なに討ちなさる。寄せ手はいよ〳〵勝つに乘り揉み立て〳〵攻寄せたり。詞荒木の左衞門早苗之介すは御大事と駈塞がり。地兩人一所に押並び多勢を前に引受けて。はらり〳〵と薙ぎ倒すさしもに勇む寄せ手の勢。早苗之介荒木に切り立てられフシ暫し弛んで見えにけり。地色然る所へ駿河の前司無二無三に追駈け。近國が後樣肩先かけに斬込うだり。詞早苗之介勝重取つて返しむづと抱き。地足踏み直し釣上げて大地にどうど取つて伏せ。首を掻かんとしたりしを左衞門暫しと押止め。詞敵は一人味方は二人あつたら物を無下にはならじ。地色それこなたへと引起し左右の腕を引拔きて。寄せ手の陣へ追返すはフシ心地ようこそ見えにけれ。地色大將有雄肝を消し馬引返し逃げ引くを。船中の衆徒太刀長刀觸らば冷せと追取り卷き。神罰冥罰思ひ知れ思ひ知らず

や山王の。神勅なるわと首打落しサア
サア還御を急げや。御輿を渡せや囃せや
觸らば冷せと打つ太鼓。神すゞしめの囃
し言目出度き。國の御守り。

傾城思升屋

豊竹若太夫直傳

上之巻　伊勢參り名所道行

相の山 行く川の流れも。絶えぬ色里へ身賣の。花の蕾より。合 願を。懸けし神詣天津。御國の二柱 ナホス 女神男神の。間の山二見朝熊も殘なく拜みめぐればおのづから。スエテ 天の岩戸の開け初めし。心なりけり形振は。ハリマ本フシ 憂きふし樂き竹の杖。眞菅草鞋に抱帶。りんと小褄の高からげ。フシ しやんとする程物々しく。長の旅路も揚屋人。向ふをきつと歩むにぞ。長地 昔の出端の癖やまず參り下向も振返り見れば思ひの升屋なる。男も跡につく〳〵と。二人が中に供二人 フシオクリ 手づからへ持てる席火繩 歌カヽリ 煙比べんあだし野やアレ御覽ぜよアノ山の畔にも ナホスフシ 人家二つ三つ。立並びたる。軒の。爰此處も彼處も色故に朝に霧を拂ひつゝ。夕に星を戴きて 詞 歸る山人。待つは誰そ待つ言種の戯れ言。世界の人の樂みよ フシ わしは如何なる片思ひ。添ひ臥しばかり妻と云ふ名のみ殘して行末は。賴みない身と知りながら可惜月日をうか〳〵と。暮しまするに胴慾な。いつまで草のいつか扨ア、嬉しやと 小オクリ 思ふ事現に。問へど口なしの口說の花のいぶり草どちらに張が强いぞと フシ 心の底を。惹いて見る相撲取草も男子の。かたに平伏す習かや。又芽を出す春の空陽氣の花に誘はれて。京街道の賑と名所古跡教へんと。駕にも乘らず馬借らず心の儘に假寢する妹背は堅い國かして フシ 泊りどまりに。帶解かず。夢を結べどまどろめど濡と云ふ字は見も聞かじ 地 ナウそち達はさもなきやア、氣の詰る道中と。戯れ行けば足輕く皆口ごりや目塞笠。五色の網も目に餘る。フシ 思ひ一つを引締めて。見せばや誰に近江鮒。堅田の浦に引く網の フシ 目にも溜らぬ。涙ぞと連ねし人は誰そや誰そ。文彌フシ 秀俊夫婦の人々は。天とも地とも思ひ子の彌生の前の。行末を。尋ね出でにし言の葉や。我は目出度き共白髮。變らぬ仲を神賴み ナホスフシ 奥樣子達のある仲を オクリ 思はれ思ふ此因果どちらがほんの戀ぢややら。悋氣するにはあらねども。女心のくひ〳〵と。戀慕の絆 フシ 止め難く。逢はぬよすがの多ければ胸の焰がくら〳〵と。スエテ 思ふも悲し思はじと。我と我身に耻らひて。今は此身

も生如來殿御一人を二人して。情の帶の結目を心の儘に解く事の。ならぬも浮世フシなりけらし。粟津と聞くも。恨めしや。思ふ海津の浦もはや。跡に見殘し何時かさて儘に大津の。追分を。左へ取つて行く道は フシ萬代迄も 狼の。谷の細道えい〳〵えさつさ。さつても旅は物憂しと フシ云へどもそれは道連れの。善し惡しにこそ依るべけれ十日餘りは身の上を。忘れしとのをア、うたて七つの鐘の撞木町見て行かんとは我に又。アノ氣になれと云ふ事か急いで行かば淀よりの出舟に乘らんと夕日影。伏見堤に氈敷かせ各々。休らひ 三重給ひける

フシかゝる折しも。地色升屋の手代市兵衛。江戸店の勘定や又盆節季の金工面。彼是心の遣瀨なく旅立によき日取。今日吉日と只一人立出でて行く道の程。伏見堤に差しかゝり權兵衛を見るよりも。菅笠脱いで畏る。地權兵衛ハツト思ひしがさあらぬ體にて。ム、そちは何處へ行く事ぞ。市兵衛眼に涙を浮めコレ何處へとは情なし何と心得うか〳〵と月日の立つも御存じなく。餘り興がる御仕方モウよつ程がよござらう。コレお前の留守の内あそこからも爰からも。惡性金の催促し今日は訴訟に出る筈ぢや。明日は町へ斷る



と云ふに就けてはおいとしや。お年寄られて大旦那うろ〳〵として人頼み。先づ一口は濟みました。今一口は當月の晦日切に證文し。波風先づは納りしが商賣の拂方。爲替の遣繰請取物餘日なければ私が。一先下り銀集め首尾繕はん其爲に。俄に今朝思ひ立ち八日を切つて參るなり。親父様の御立腹なか〳〵言葉に盡されず。それ故鍵まで取返し江戸通用の判も變り。粒一文儘にならず我人若い其内は。一度や二度はある習ひ。お前の惡性幾度と云ふ事なしされども親の子を思ふ。中にも臍の附いた子はこなたばかりと思召し。御用捨あるが仇となる。親に孝なく御參宮あればとて如何で神明納受あらん。見れば女中のお連もある。是は内々承りし出羽殿にて候はん。惣じて君傾城と云ふ物は世にある時は兎や角と。日文血文の付け屆け思ひとり〳〵と。筆と口ではぬつぺりと元手入らずに云ふことは。これ商賣の習ひなりそこを誠に思ひ詰め。親親方に損却し程を知らずに通ふ者。餘程足らぬうつじんと陰で笑ふも御存じなく。大事の家業を振捨てどう思召して此身持コレ出羽殿。斯様に申すを定めし不審に思召さん。私はお家久しい御家來升屋の家を杖柱と。思



ひ詰めたる所存から入らぬ悔言申します。コレ此殿には奥様にお子達二人ござるぞや。地如何に賢女なればとて女は相身互なり。權兵衞樣が大切ならなぜ暇取つて似合はしい緣付でもなされぬぞ升屋の奥になる事は。是程も成りませぬ此方とこちが胸算用。往て來る程違ふべし思ふ樣にならぬとは。頭から知れた事まだ色艶のある內に。緣を切つて嫁入の。ロ聞き給ふが上分別何であらうぞ見苦しい。女を連れて伊勢參り。地斯うした噂人聞かば愈世間の沙汰惡しく。年久しき升屋の家フシ今に滅亡疑なし。地色奥樣親御の御手前少しは恥ぢて御覽うじませ。お前の事は思はねど只いとしいは子達なり。其身持とは知らずして遲い時には待ち兼ねてつい御寢なるを見る時は人に言はねど男泣き。家來の身とし斯樣に申すが奇怪なら。お手討なりとどうなりと心任せに遊ばせよ。詞若し御合點のまゐりつゝ御心を直されなば。老後の思ひ出是に過ぎず。一生譜代に召使はれお家を枕死出の土產と存ずるなり。地色サア返答を遊ばせとスヱテ淚を。流し敎訓す。地色かるを初め供の者。げに尤と尻込し草をひねりて跡退り。フシ赤面してぞ居たりける。

地色權兵衞淚をはら〱と流し詞コリヤ市兵衞。最前よりの一言如何でか惡う思ふべし皆某が過ぞ許してくれよ地さりとては。今迄我儘なりけるも由なき者と交際て。世間の義理を大切に。賴むと云へば替なき命も惜まぬ所存から。一旦退いた出羽なれど引くに引かれぬわけありて。二度斯うした事なりしが全く子のある仲を裂き。是をと思ふ志弓矢神も照覽あれ。更々さうした事はなし。地色似合はしい事あれば今でも緣に付く合點某氣を張る事はなし。詞又此度の御參宮幸ひ我より願ほどき。神詣と思ひつゝ召連れたるも過なり。地今よりして心を變へ親達へも孝を盡くし。女どもにも氣を休ませ子供が生先見る樣に。又そち達が忠節何とぞ報ずる事あらん。此上ながら江戸表首尾よく捌き商の。手筈萬事を賴むぞと。スヱテ世にしを〱と云ひければ。地色市兵衞三度禮拜し淚を流し申すやう。詞さて有難や忝なや。斯樣に申すも大切に思ふあまりの悔言。此晦日の銀子の儀張合と云ひ意地なれば。身賣りてなりと濟まさねば御隱居樣の一分立たず。地一刻もはや御下り御相談遊ばせよ私伏見に一宿し。隨分道中急ぎつゝ江戸より吉左右知らせ申さん。コレ出羽殿。權兵衞樣への心中は。善くと惡しくと嫁入し世帶姿を見ぬ內は地コレ此の男は呑込まぬ必ず言葉を違へまい先づ〱さらばと暇乞ひオクリ心靜に。步み行く。地色權兵衞

跡を見送り〳〵スヱテ差俯向いて居たりしが。地暫くありて押肌脱ぎ既に自害と見えけるを。かるは驚き縋り着きナウ氣が違うたか何事ぞ。市兵衛殿の御意見が心にばし障つたか。一つも腹の立つ事なし但しは外に思はくのありて斯うした御事か様子を聞かぬ其内は中々儘にはさせませぬどうぞ〳〵と。縋り着きスヱテ聲も惜ます。歎きける。地色権兵衛力なく〳〵もヲ、不審は尤なり。詞手代が一言親よりも猶重し。つく〴〵事を案ずるに此晦日の切金は。もと某が悪性にて兄弟同事の友達に。借り貰ひたる事なればよくよくの事なくては。親父の耳へは入れまじき如何に親子なればとて。此金立てゝ貰うては二度對面なり難し地色自分に埒明く分別先立て致せしが。地聞かるゝ通り鍵印判迄取られし故才覺の種盡きたれば。親朋友の義理立たず人に指差し笑はれんより。此淀川の水屑となり今の苦患を逃れたし。爰を退いて死なしてくれ死なずに是が居られうかと。大地を叩き歯噛をなし。せき上げ〳〵歎きしは哀れせつなき次第なり。地色かるも涙にくれながら日頃の氣質で其義理は。死んでなりとも立て度い筈併し参宮の下向といひ。こなんばかり死なんして私は死なずに居ようかえ。若しも二人が死んだらばよしなき悪名取るのみか。御隠居様や奥様へ言譯何と立つべきぞ。爰は思案もあらう事マア何程の銀ぞいの。イヤ大分の事でなし。地二貫目なれど世の中の儘にならぬは金ぞかし地色ハテ輕忽なそれ程の金で買はるゝ命なら。先づ〳〵死んで下んすな何卒金を才覺し。命を買うて取りませうおぬくい金の出る思案。是も御神の御惠晦日にわし方より。持たせて送らん構へて短氣をやめて給はれとフシ涙を流し止めける。地色権兵衛悦び流石好みのしるしとて。叶はぬ迄も力草付けて給はる志。地嬉しゝ悲しフシ恥かしゝ。地色さりながら此金をそちが手から調へんとは如何にしても呑込ます。潜上も時に依る阿房らしいと不興顔。ハテ如何しようと斯うしようと盗んでさへ來ぬ金ならば。わし次第にして置かんせ。ム、それは誠か眞實か。此金濟ませば内證の。魂膽さらりと埒明いて此處彼處の首尾もよし。地確と才覺なる事かア、くどいこと方様の命に替ゆる金なれば。覺えのない事云ふものかヲ、嬉しさもあらばそち達は舟にて下れ。某一人陸行かば夜半の頃は歸るべし。早とく急げとありければ。ハテ兎も角も云ひながら。夜道一人は氣遣はし武兵衛ばかりは連れ給へ。いや〳〵人は邪魔になるこち構はずとはや往きやと。身拵する折からに乗合舟の見

えければ是幸ひと呼ぶ聲に舟を堤に　フシへ寄せければ。地色皆々乘つて出で舟を遠く成るまで見送り〳〵。靜に行かんせ明日の晩。必ずやいのと云ふ聲も見えず。なり行く　三重へ夜の道。地色元來權兵衛不敵者常に手馴れし大鮫の。二尺二寸に反打ちて事がなうえと腕まくり暗さは。地暗し雨雲の星の光もあらばこそ。一人行く身の跡先に心を配り氣を付けて金と堤の片岸を故意と通れば橋本の。宿の出はづれ葛葉なる。森の下風そよ〳〵と　オクリ吹く夜嵐は身にぞしむ　フシ今や賤の男。賤の女が晝の辛苦の休み時。現に戀の夢や見ん。ア、世なりけり浮世ぞと。問はず語るか森口の一里塚にぞ着きにける。地色時に不思議や人魂と覺しき猛火くるくると。足元近く飛來りはつと燃えてははつと消え。スヱテ更に別は見えざりき。地色權兵衛少しも騒がぬ體樣子を見居け

歸らんと。鍔元寛げ身を潜め　フシ寄らばつかんず勢なり。地色暫くありて怪したる者。髪逆樣に經帷子。杖に縋りて　フシよろ〳〵と。堪え難き聲を上げあゝら閻浮戀し人戀し。そも我はこれ主を殺せし十惡の。罪に沈みて修羅道に。落ちて浮かまぬ忠藏が　スヱテ亡き佛にてありけるなり。地色夜々迷ひ此道に出でて行きかふ旅人の。回向にも預からば浮む事もやあるべしと。姿あらはに出でし身を殺けて得させたびの人。思へば憂しや怖ろしや。氷の如き大身鑓。左右に別つて腋壺を。差通し差通さるれば氣も　魂もへ消え消えとなる身の果を。思へば〳〵悲しやと。フシ齒切をしてぞ伏したりぬ　地色流石の權兵衛氣味惡く世に幽靈と云ふ物は。操歌舞伎で見たばかり正しく有るに極つた。樣子も見度し恐うもあり。逃げてや去なんと歩みしが。イヤマテ我も所では

男一分磨く者。一つは心試と云ひ閻魔の廳の訴に此幽靈を手籠にし大坂への土産物。是に上越す物あらんとそろり。そろりと立寄りて扨て痛はしき物語。今日は人の身。明日は又我身の上にも惡業の　スヱテあるまいものにあらざれば。如何にも回向仕らん南無幽靈頓證菩提。浮み給へといふ聲の透を窺ひ取つて伏せ。散々に踏付けしは　フシ不敵にも又いさぎよし。地色其時幽靈聲を上げ苦しやせつなや命を助けたびの人。詞全く誠の幽靈ならず耻かしながら私は。此街道の非人なるが仲間四人が片輪にて　地露命かつ〴〵なるに依りふと幽靈に思ひ付き。或時旅人を嚇せしに錢金有る程置いて行く。何でも是はしてやつた只取る山の時鳥。齒に血を付けて此仕合。許させ給へ目がまひます。太郎作のら藏ぬらり坊ちやつと來てお詫言。申してくれと云ふ聲にヤレじや

がたらが仕損じた。我行人と一緒にと堤の下より上るを見れば目無に跛躄をはじめ三人頭を地に付けて。只御助け給はれと フシ手を合せてぞ詫びにける。地色擧句の果に權兵衞も腹筋絓つてかつら〳〵と笑ひ。詞おのれ等片端踏み殺すは易けれど。參宮の下向故命を救け取らすなり。重ねて旅人を惱さば踏みひしやぐぞ嗜み居れ命の代りに幽靈の仕掛事。身が前でして見せをれイヤモウそれは御免といふサアせまいかと反打てばヤア致しませう致しませう先づ一番は人魂の心持にてお子達の。盆に點する酸漿の。中にも小さい提灯を。竹の先に附けまして堤の上をころ〳〵と。こかして廻れば其次が。亡者笛とて斯樣に吹く。三番には太鼓にてどろ〳〵〳〵と打ちしまへば四つ目が斯うした幽靈にてア、悲しやと云ふ齒切。笊の中へ茶碗の割。入れて搖れば遠音にはかり〳〵〳〵と聞えます。地ナウ恥かしと打明けて フシ語るも可笑しかりけらし 地色權兵衞どつと打笑ひ。いで〳〵賜つて遊ばんと。故意と言葉を荒らかに。詞とても五體不具な奴生け置いて益なしと脇差するりと拔きければ非人ども仰天し。むら〳〵はつと逃げて行くヲ、さもあらんと思ひの外の。足達者な幽靈の ギンセメ底叩きとは是ならんと聞く人。喜び勇みける。

中之段　并傾城の瀬戸物見世

地移れば變る飛鳥川。昨日は勤今日は又。町家住なる新世帶。瀬戸物店をにつこりと笑ふ布袋の水入に。清水燒の天目や浪速入江のあし燒は。スヱテ所がらなる名物と。棚の向ふに飾らせて。角の暖簾大津屋と氣の變りたる書付に店の。出入は伊豫簾。掛直なしとの看板は。勤した身の フシ筆づらや。買手が寄れば。内よりの。返事あだなや顔見んと。夜は男の習かや。長地戀と思ひを堺筋道頓堀から北濱まで又あるまじき商を 地老舗にせよと彼の人の。世話になる夜は通ひ來て。轉た寢覺めの フシ樂しみも。儘にならざる。山。吹の色や。憎みて内方の首尾散々と聞き兼ねて。女心にとつ措いつ胸算用の遣繰に。スヱテ心の隙もあらばこそ。少し手掛ある故。男の首尾を繕ふは フシ元が勤の利發なり。地此二三日程ふつ御出でとてもあらされば。人に語らず物案じ疊算やら何やかや。亂れ心の遣瀬なさ一人の母によしあしを。隱すも孝の道ぞとて フシ我と我身を責めにける。地色然る所へ乳兄弟京の喜兵衞下りつゝ内に通ればかるは誰ぞ。マア何として下らんした。詞とゝ様はまめなかえ先づはこなたも息災なお顔見ましてかゝ様も。地色嘸お喜しう

思されんサア上らんせと云ひければ。喜兵衞も挨拶こと終り。詞シテ母者人はと尋ぬればされば。今日は上町のお寺に法事ありとやら隣の迎の連れ立ちて。地朝飯過ぎから参らんした何ぞ用かと問ひければ詞イヤ餘の儀でも下らぬが京の暮も左前。何を賣りても思ひばかゆかぬは物がさすことよ。こなたが京に居た時は晝寢も戀の當の槌。外れて今は片思ひ。尤も世間は兄弟なれど。地根は持ち寄りの子故の闇親父はそもじと娶合して。生先見んと言はるれど。母者人が呑込ます。其上そなたがいとしがる男が世話でよい身となり。京迄みつぎを上さるれば。云ふべき事はなけれども。詞そなたの事は束の間も忘るゝ隙もあらばこそ。何卒下り心底を語らんと思ふ頃。母者人から下る由これ幸ひと晝舟に。地乗りて下るも色の道折節母も留守なれば。せめて情の

一言を。これ拜みます頼むぞと フシ縺れ寄添ふうたてやなかるは。地色興覺めア、うるさ何ぢやいの近所の人も聞くぞかし地何所の國にか兄弟同士さうした事をするならば。犬鶏と人云はん阿呆らしいと云ひければ。地色それはつれなし曲もなや眞實の同胞こそ。夫婦にこそはなるまじき元より他人の事なれば。此戀なんど差合ぢや。イヤ兄弟とのたまふは。餘程素人な挨拶ぢや。斯うしたとより差合を。さらば爰らで咄して聞かしよ。京音頭 カヽリ自然居士の淨瑠璃に。娘の方へ忍ぶとて。取違へつゝはゝきぎに。縺れ縺るる蔦葛是を來て見よかしのと。ナホス杓子定規な口說言。フシ可笑しくも亦いやらしう 地色心はむつとしけれども道を知らざる人でなし。荒立てゝは如何ぞと故意と言葉に艶を付け。詞尤もそれはさうなれど兄弟不義を取結べば。所をさらず神罰

にて鳩胸跛佝僂など。地或は盲目の垣覗き缺口聾に鼻そげと。なるは見て來た如くなり其酬ひをば聞く時は。身の毛よだちて恐しゝさもなくば何のその。若いが二度はあるまいし夫婦にならいで何とせう。詞先づ兄弟の縁を切り他人と成りて其上は。談合づくになりませう地マア此度は上らんせと。誠しやかに僞れど 詞イヤ／＼其手は喰ひませぬ。それは廓の燒言葉情だに預からば。只今死んでも本望ぢや 地サア埒明けてと抱き付くハテ難さしやれあれ／＼と逃げて廻れば追廻す フシうたてかりける次第なり。地色其折節店先より物買はん／＼云ふ聲に。喜兵衞驚き狼狽て出でアレ物買が來たさうなおれは母に會ひがてら。迎に往て來う 其内に。今のを頼むと言ひ捨てゝ ハヤイオクリ 足早に。へこそは逃げて行く。地色かるは嬉しく表に出で。地見れば紙屋の喜右衞門

なり。ようござんした這入らんせと。煙草の火を入れお茶一つ。上げませんと云ふ手を取りて詞コレ出羽殿。其後は會ひませぬ。先づは斯うして暮さるれば拙者も滿足仕る。それにつけ此程銀子入用とて。兩度の文にあづかれど。手前の用事こと繁く昨日手代半六に銀子二貫目越したれば慥か返事に請取る樣。何やら書いて來れども。某方より遣したる證文返らぬ不思議さに。わざ〳〵取りに參つたぞ。地元此金は廓にてそちを見捨てぬやうとの爲。書いて遣りたる金手形今は引かへ某と。挨拶よからぬ權兵衞の。手に渡りたる事なれば。詞あんまり可愛う思はねど男たる身が一言。金鐵より猶堅く先づはお役に立ちまして。言交したる差引出入なしに濟ましたが。地色人の心は定めなきものとは念を入れたがよし。斯うして居る内に權兵衞殿がわせたらば。痛うもない腹探られん。早とく手形戻されと實なる中に當言を　フシ云ふも昔の所緣なり。地かるは疊の塵捻り。顏に焚く火の氣上し前垂の褄捻つたり。手そぼりの内尻目にて　フシ見るも馴染のしるしかや。地色暫くありて申す樣。詞誠に好と云ふものはどう廻つても可愛いもの。今權兵衞樣の世話となり斯うしては居りますれど。知らんす如く添ひ果つる身ではなけれど世の中の　地色義理程せつなきものはなし。斯う申せば方樣の恩を知らぬに似たれども。全くさうした事でなし。店の勤の初冠　權兵衞樣の情にて。天神迄になりました。其折からの氣扱ひ。烏の鳴かぬ日はあれど主のござらぬ夜半もなし。詞わし故親御の勘當受け丹波の奥にまします内。こなさんに會ひまして廓の勤め遁れつゝ。さる方の仲人で揚屋の花車となりしかど。地色薄い緣やら口舌して三行半を取りて退き。それから京へ上りつゝ親達に會ひまして。身の上の談合色色として見れど。とゝ樣は後連。母樣一人がほんの親何所やら油に水交る。其上兄と名を付けし。地喜兵衞殿とめあはせんと聞くもうたてやアノ男。厭なり列に兄弟と云ひ契した事なれば。根は他人にもせよ何にもせよ。フシ惡名取らん悲しさに。地右の樣子を審に書き權兵衞樣へ頼みしに。もと頼もしい人なれば何時でも下れとある返事。見るより取敢ず母と連立ち參りつゝ。御厄介になりました扨此中の銀の事。詞さる方の挨拶で嫁入致す身拵へ。それ故申してやりましたこなさんも權樣も。地兩手とは云ひながら權兵衞樣には義理多し。地色義理を立つるは傾城の。譽と思ひ諸事のこと。許させ給へさりとては色にも香にも迷はぬを。竹ならばさて我胸を割つて見せ度や一人ある。

地母さへ無くば世を逃れ姿を墨と思へども。杖柱にもわし一人。頼む親をば捨て置かば不孝の罪も フシ怖しく。地色今は情と思し召し哀を問うて給はれと前後も フシ知らず歎きしは理。せめて哀なり。地色喜右衛門も共に涙を流しつゝ。あつぱれそちは云ひ憎い。事を云うたり出來したり。地思ふ心を打開けて語るを聞けば何がさて。恨むは愚痴の至りなり。此頃迄立つた腹今さつぱりと埒明いた縱へ何處へ往かるゝとも心たよりになり申さんそれ先づ手形と責付かれて。詞さん候其手形も。權兵衛樣の方にあり急に戻して給はれと。云ふ程陰事も有る樣に。地つい戻しては下んせぬもそつと待つて給はれと。云はせも果てず睨み付け。詞ヤアラ聞えぬ仕方なり。尤も少しのことなれどそちを目當に遣つた銀權兵衛にはやらぬぞえ。總じての取やり手形と銀を引替に。するものなれど女の事。地色忘れたこともあるべしと何心なく銀ばかり渡したは。此方の過とは云ひながら。權兵衛ばかりへ義理立てゝ身は如何ならうと構はぬか。地否でも應でも此手形取らぬ間は歸らぬぞ。さなくば銀子を戻すべし早やとく〱と詰掛くる。地色かるは詮方涙にくゝれ皆私が過ぞ。許させ給へと手を合せ スエテ暫し案じ居たりしが。地色稍ありて申す樣手形を取つて戻す内。銀の請取扱は又手形の預り致しては。後日の出入あるまいこと。地斯うして腹が癒るならば堪忍をして下んせと フシ涙を流し詫びければ。地色喜右衛門聞いて打頷き。詞本紙の樣にはなけれども重ねて出入なき樣に。地然らば書いてこされよと文を好めば書き付けぬ。女心にかる〱と筆喰ひ締めて假名交り。書いて仕舞うて印判を出して捺す手のなよやかさ。喜右衛門一通懐中し。最早歸るぞまめで居や。此手形あるからは本紙は入らねど權兵衛が。手にある内は此鼻が一分立たず近い内。取りて戻されそれ迄はさらば〱と云ふ所へ。何時の間にかは來りけん權兵衛表に立塞がり。なんと久しい喜右衛門殿。詞私に用あらば久寶寺町堺筋。所が違うた爰はこれ。木屋の出羽を拙者めが取つて置いた所ぢやを。知つてのお出ではよからぬ事。　樣子を聞かぬ其内はいかな事にじらせぬ。そこ動きやるなと云ふよりはや。かるを引寄せサア拔かせ。少しにても僞らば生けては置かじと打擲す。喜右衛門驚き中に入り是々聊爾を召さるなよ。詞其女にも某にも若し誤のあるならば。御存分になり申さんそなたが聞いても某が地仔細を聞かねば歸らぬと フシ氣色變つて罵れば。ハテ聞えねば語るべし。詞最前見れば此女に何やら

書かせて取らるゝは。凡そ云はねど知れたもの。それを見て此男堪忍がなるべきか。知らるゝ如くきやつ故に。一家に疎まれ所帶向右と變れば秋風の。地吹くにつけては御自分に又乘りかへる分別を。殘らず明せば了簡する隱せば爲に惡からん。何と〳〵と詰掛くる喜右衛門今は堪られず。詞コリヤ權兵衛。おぬしも人に知られた身又某も同じ事。様子も聞かず頭から不義の惡名附けられて。世間へ面が出されうかコリヤ今日是へ來りし地通り云はんとするをかる抑へ涙を流し手を合せコレ申し喜右衛門様。お前の一分私が立つやうに致しませう。たとへ主はどう云はれうと。此場に於て今の事。構へて云うて下んすな。お前に惡名附けたらば。一人の母を見ずに果て此儘死する法もあれ。御難儀とては掛けませぬナウ權兵衛様。詞短氣も悋氣も時に依る言譯あれど後の事。地云はで立たずば如何様とも心任せにしたがよい。女を捕へ見苦しいと。云へども放さずぬかし居れいやいや今は云はぬといふ。喜右衛門は存分を。云はん〳〵と駈出づる。かるは拜むと泣き叫ぶ。放せと云へば退けと云ひ。既に危く見えにける所を二人の下人ども己れ己れが主人を圍ひ。させぬ〳〵と挑み合ふ。所へ母親喜兵衛を連れ。此體を見るよりもハツト驚き中に入り。様子は何か存ぜねど只御堪忍遊ばせと。差別構はず引分くる兩人今は詮方なく。老母の挨拶默されず只今は歸るなり。後日の詮議忘るなと互に言葉を殘しつゝ。脇差の反直すれば腕捲をも下しつゝ。サア引けサアと聲をかけ。さらば〳〵と立別れ。兩人尻目に血筋を張り睨め付け〳〵歸りける恩あり仇あり情あり。人は迷の淵ぞかし。

下之巻　井傾城からくれなゐ

地世や人の心なりけり誰が身にも。疑ひ探る習あり。過ぎし遺恨をくひ〳〵と。思ひ升屋の權兵衛はかるが心を探り足。誰止めねども通路に我と心はとめしかど。起き臥しの間も忘れ兼ね。不便と思ふ志今は引替えフシ憎しみの。地色増さりはすれど算盤の。桁はしらぬを觀じつゝ明暮家業油斷なく。スヱテ暫しも店を離れ得ず。水上帳を繰り廣げヤ、勘定をする所へ。地二人の子供駈來りあれ〳〵と。様兄上が。世繼曾我の十番斬して遊ばんと言はしやる故。わしは愛甲の三郎となり兄様が曾我兄弟。紫燕は柳樹の枝に戯れ。白鷺は菱花の蔭に遊ぶと。笑ひながら打ち給ふ。其先肩へ當りつゝ殊の外痛む故最早せまいと言ひますれば是非にせよとてあの如く。追かけてござんしたチ

ツト叱つて下んせと。言へども兄は事ともせず。詞あじやらにした事仰山な今度はそなたに負けてやろ　地サア今一度とのゝしれば權兵衞片頰に笑をなし。詞兄が詫言する上は最早堪忍したがよい其代りには吾殿又曾我兄弟と成り代り。とゝが前でして見せよ惡い所を直さんと。地言はれてそんならいざござれと兄は聲かけ此次は。安西の彌七郎十郎目掛け渡し合ふ。サア爰なりと聲合せ二打ち三打ち打つ太刀の音も高紐のはづれより草摺三間斬込まれ犬居にどうと轉びしは　フシ不便なりけり淺ましゝ淺間の嶽か信濃なる　下舞コレ臼杵の八郎景信時致に打つてかかる。得たりやかしこしあまさしと。南無阿彌陀佛の拜打。鬢先を打ちければ兄は額を抱へつ。目に洩る涙押し隠し最早せまいと奥座敷。逃げて這入れば弟は。兄樣堪忍々々と。跡より詫て入りけるは　オクリ優しかりける次第なり。フシかゝる所へ。かるは只。一人來る身の逢はでのみ焦るゝ身よりせつなきは。義理の手形ぞ身を責むる主さへ見えなば取返し戻せば胸も明け渡る　ハルフシ夜明けの。鳥の。鳴く音だにどうやら氣には懸れども餘所の哀れを知らすかと　スヱテ歩めど跡へ引戻す身の上知らぬ哀れさよ。地堺筋の門際に



て喜兵衛にはたと行逢うた。詞シテマヅこなたは何所いと云ふ。喜兵衛聞いてされば母の言はるゝは。かる一人では此手形あたゝかに戻さうぞ。そち附いて行き取つて來い。早や往けと言はるゝなり。御身は是より歸られよ某參り　地埒明けん。早とく〳〵と言ひければハテ譯もない知りもせで。主は短氣な生れつき若し言分など召されては手形を。取らぬのみならず跡の首尾迄惡うなる。こなたは去んでよい樣にかゝ樣に云うてたも。今日は是非に埒明けて追付け歸らうも去なしやれ。然らば歸る有無の埒。明けてござれと暇乞ひ。近所の店に立隱れ　フシ事の樣子を窺ひける。地色かるは升屋に案内し奥に通れば内儀出で。詞ようござんした其後は。何故に便宜も無かつたぞ。お袋樣はまめなかと現在夫の姿をば。我妹より大切に云ふは貞女の誉かや。地色かるは袖より玩具お子達へお土産とて。兄弟へ進せて。詞此程御目にかゝらぬ内ナウナウいかい御成人御隱居樣にもお前にも御息災でお目出度やなぜ兄樣はとゝ樣と小母が所へござんせぬコレとゝ樣はと云ふ所へ。地權兵衛裏より歸りつゝ物をも言はず中の間にどうど居坐り髭拔いて　フシ素知らぬ顔して居たりける。地色女房子供



の手を引いて。皆おぢや隱居へ往て遊ぼ。かる女郎そこで遊ばんせ後程ゆるりと話しましよと フシ氣を通しつゝ入りければ。地色かるはつく〴〵打守り扨耻かしのお心や。如何なる賢女なればとてあの如くにはならぬもの。云うても我は忍妻猜む氣色は露なくて。便なければ折に觸れお見舞などに預りし。フシ冥加の程も怖しし。地色何卒御恩を報ぜんと思ふに甲斐も儘にはならねども。アノ奥樣の御仕方見て離れぬは未練なり。爰にも大事の義理一つ。せつなき事を重ねしは此身一つで止めたり。それはさうぢやが此程は 詞鼬鼠の道を切つた樣になぜ訪れもない事ぞ。地餘り不思議に思ひましお顏見にやら内方へ御禮がてらに來ましたが何を見付けて其樣に。滅多に腹を立てさんす。こなさんの御腹立合點しては居ますれど。先度の場では言はれぬ事根を聞かんしたら腹の立つ事は扨て置き拜まんしよ。詞付いては何時ぞや預けたる紙屋の手形を戻さねば。方樣の疑も又私が志。彼れ此れ心の隙あかず。地何を云ふのもこなさんの爲惡しかれと思はねば。一人焔を燃すだけほんの損氣と思はんせさうぢやないかと寄り添へば。詞權兵衛突退け。あた見苦しい置いてくれ。最前からぬかす事廓で云うた臺詞にて。一つも誠を聞き取らず。扨て又紙屋の銀手形宛名はおのれにしてあれど。まさかの時は喜右衛門に異議云はせまい其爲に 地某方に預つた欲しくば取つて去にくされと。手形をかるに打付け。奥に入らんとする所を後より抱き止め。詞コレ男如何に女なればとて惡口は云はぬもの。成程手形は取りました言ひ度いことは多けれど。地重ねて言譯する迄よ。ほんに飽の片思ひ フシ窘ましやんせと云ふ所へ。地喜兵衛店より案内す。權兵衛立出で御用如何にと尋ぬれば 詞ヤアコレハ權兵衛樣か。先日一寸御意得たるかるが兄弟喜兵衛とは私こと。京都に住宅仕る只今御目にかゝること。近頃不調法の至り。併し貧乏隙なし其段は御了簡にあづかります。殊にかるが身の上迄だん〳〵御世話になさるゝ事。親父も滿足致さるゝ就いては去年十月より。今月迄の養ひ料かるが方よりくれませぬ。それ故下り聞きますれば御自分も御身代今はすつきり祐成にて宛行は扨て置きかるが世話になり給ふと。聞いては臼から杵ぢや迄。それに就き姉じや人顏に艶ある其内に。何方へも緣につけ親どもが入前。樂しみ度いと申すにつけ嫁入の口きけば。幸ひの所あり是に極め談合すれば。着替が一つもないと云ふ。あんまり興がる事故に樣子を問へば曲げた

とやら流しとやら申します。拙者今日參る事かると挨拶切つて貰ひ。又内證の遣繰をすめて貰はん其爲に。地わざ〳〵推參仕るサア埒明けて下されと仔細らしく伸し上るかるは驚き走り出で詞コレ喜兵衛殿何しに爰へござつたぞ。其上入らざる差配立て殊には表人も聞く。早う去なしやれ早去にやと手を取りて引立つる詞ハテ異な事を云ふ人ぢや。そなたばかりが呑込んでも此鼻が呑込まず其上なくとくおふといふ。年寄つた親がある。盗人の晝寢さへ當がなければしませぬぞ。地否でも應でも隙狀と紙屋の手形貸した物。今日迄の扶持方と束ねて埒を明け給へ。さうした人にうか〳〵と鼻毛讀まれて行末は。如何なる果ての思案なく一つ云うては義理々々とひだるい義理が立つものか。餘程白痴をつくされよ歸つてよくばこなた去にや。此埒明けねばにじらぬと猶いかつげに云ひければ。かるは取付き手を合せ拜みます云はしやるなと止めんとすれば權兵衛突き退け。喜兵衛。成る程埒を明けてやろ。先づ〳〵這入りやと内へ呼び。詞ヤイ女思へば〳〵憎い奴。尤も兄弟有りと云ふ咄は豫ねて聞いたれど。何のこいつが弟であらう言はねど知れた作物。此度の仕掛はな。今某は左前其折節に喜右衛門が。かつて取持つ嬉しさに又乘替へる下繕び。地色ぬかさねど知れた事。おのれが樣な不所存者憾を云うて入らぬもの地望みに任せ暇を遣る。此隙狀を額に當て大坂中へ嫁入せよ。老耄傾城畜生めと。言へどもかるは答なく差俯向いてしやくり泣き。ほんに暇を下んすかさすればわしが爲なれど。何處やら根葉も有る樣に誠を明して下んせと。云ふに權兵衛猶怒り望みの如く金手形隙狀迄をくるゝ上。おのれが言分あるべきか其上喜兵衛が望みには。飽迄金の催促し白晝にてちめんを隱し人に知られた權兵衛が一分を捨てた上。成程銀子も渡すべしサア請取れと言ひ樣に。刀掛なる脇差を取ると見えしが拔打ちに右の頬先を斬付けられ。はかなやかるは緣先の フシ いぬゐに斃れ伏しにける喜兵衛驚き狼狽つゝ裹の干場へ逃げ廻り。あなたこなたと隱れける權兵衛續いて。追掛け。おのれ生けては返さじと。追廻しては追戻す 三重 危かりける へ次第なり。喜兵衛詮方泣く泣くも井筒の陰に身を縮め。皆私が過りなり命を助け給はれと。言はせも果てず後より大袈裟に斬付けられ。よろ〳〵よろとする所を飛び掛り取つて抑へ。尤もおのれが心底に一物ありと云ふ事は。先立つて見て置いた最前よりぬかした事地思へば憎し腹立ちと拳を握り齒嚙をなし打ちたる所を幸ひよ束も通れと滅多突き

あつとばかりを最期にて　フシ遂に空しく成りにける　地色此聲に親女房あわてふためき走り出で　詞コリヤ權兵衛は氣が違うたか。何故人をあやめたぞ樣子はともあれ町人の。一人ならず二人迄殺して遁れはあるまいに。人知らぬ内速に何故自害をば致さぬぞ。時移りなば繩目の恥縛首を打たるゝぞ。ヤイうろたへたる權兵衛と　地色親の身として子に死ねと。勸めながらも死してはと思ふ色目の内よりも　スエテ涙を流し居たりけり。地色ハツト權兵衛差俯向き。詞全く所存は變らねど。一つはお前にお暇乞只今迄の不孝の段。御赦免をも蒙り又は悴が行末も。何卒頼み上げん爲め暫く時を移したり。先づ以つて今迄は心に叶はぬ私故。地樣々の御苦勞せめて一日御心を。休め申せし事もなく斯樣の死を遂げ申すこと。死しての冥加先の世の暗き闇路も尙暗く　フシ迷はん事も親の罰。願はくは只御一言許すとあるを承り。死出の土産と存ずるなり。彼奴等を手にかけ申す事斯樣々々の仔細故。差詰め男の意地なれば。卽座に存分遂げ候　詞コリヤ女ども子供を是へ連れ來れと。二人の左右に置きながらヤレ兄弟。とゝは只今死するぞえ吾殿ばらが最前の十番斬は我身の上。是目前の辻占よ。今よりして祖父樣。我と思ひよく仕へ。某不孝にありし程成り代りつゝ孝行を偏に頼む何事も　スエテ仰せを背く事勿れ。地色成人の後家を立て母にもよく〳〵かしづかへ言ふ事聞けよわやくすな。詞取分けて女どもお事が手前の恥かしさ男ながらも如何ばかり。地かるめが事は此前に思ひ切るべき所をば。そちが賢女を立つる程猶々不便に思ひしこと。よつく前世の業人ども。寄り集りし事なりと身は了簡をしながらも。御兩親の御手前殊には御身今迄は。內外ともに首尾つくり萬端心を付けられし。スエテ嬉しさ死しても。忘れまじ。地色子供が行末安穩に草葉の蔭より護るべし名殘は何時も同じ事時刻移らば惡からん。それ佛前へ火をあげと押肌脫げば人々はナウ悲しやと取付くを父親手代を密に呼び。婆嫁子供を連れ退けと。色々諫め給へども現在我子や妻や子の。親の最期を見逃しに如何でか離れ行くべきぞ。せめて御最期見屆け度し。是非々々此處にとのたまひて縋り付きて歎きしは理せめて哀れなり　詞親爺眼に角を立て故意と言葉を荒らかに未だ死にもせぬ先からしてめろ〳〵ほえるは何事ぞ　地色ヤレ腰拔ども連行けと言はれて下々心付き。無體に伴ひ入りけるにぞナウ今暫し云ふことあり。先づ〳〵待つてと云ふ聲は　フシ是ぞ此世の別れかや。地色又兵衞うろ〳〵涙含み裏の戸ひしと差寄せ。

れ惜しき人かなと今に譽を殘しける。

立歸つて見てあれば權兵衛腹を半切り。うんとばかりの肩息に父親はつと氣を上げしが。我と心を取直しヤイ狼狽者詞手が廻らぬ。ま一つ引けと勇むるは世に譽ある武夫もフシ是には如何で增さるべしき地色權兵衛ちつとも騷がぬ體。詞全く未練は候はねど脇差に血傳ひ手の內心の儘ならず。とても慈悲に差換を給はれかしといふを聞き。地心得たりと取出だしサア潔よく死を遂げと。口には勇め心には扨も是非なき事かなと。フシ忍びに涙を流さるゝ權兵衛差換押戴き最早此世の御名殘隨分御無事に候へと。南無阿彌陀佛を暇乞ひ腹一文字に搔き切り。返す刀を喉笛にぐつと通せば親心。死骸にひしと抱き付きわつと叫びて泣き給へば一家一門近所より駈付け〳〵樣子を聞き。前代未聞の男かな又例なき親心と。各々涙を流しける。父父たれば子も子たり。哺



八百やお七　上巻　　作者紀海音

[illegible]

八百屋お七

上巻

作者　紀海音

下リカ木の端と誰が片意地な筆すさみ。ナホスそれは浮世を捨て坊主。是は煩惱。フシ菩提所の。寺は華麗の。大書院。唐戸蔀子戸違棚。掃きちぎつたる鳥箒塵に交れど法性の。水は濁らぬ瀧川の戀に小性の吉三郎。遊びがてらに挽く茶臼。眠たからうと人目には。スヱテ見えて寢もせぬ憂き事に。フシ花の姿も萎れ行く。君をこい茶に口切の。主は誰様お七様　長地立つ名はげにも本郷の八百屋の花柚松茸の蕾も何れ初物の。緣はをかしや假初の。過し火難に此寺へ。親子主從厄介の内のもやく／＼氣も付かず。普請も出來て鴛鴦のつがひつれなき水離れ。スヱテ立つても居てもあられねば。せめてお顏を拜みにと。親の跡追ふ寺詣り。釋迦も見許し玉鉾の。道の搔取押下し。襟繕うて體やつて。座敷へ出づれば君が顏。見るよりはつと氣上りし。詞ナウ杉や。もうおじや何と去ぬまいかと。地色髮を弄ひつ手を撫でつ。フシもぢ／＼するももどかしく。詞ハテまあ初心な何ぞいの。親御は後生願がひにお前は小性ねらがひに。地あたふたと取急ぎこんな聳い首尾へ來て。あかりの戀が初めでも何が羞かしござんすと。背中をついと押遣られ倒け掛るのを機にして。とんと後へ凭れ寄り。フシ手傳をかへと手を取れば。地色吉三郎振返り。ハアハお七様お久しや。道も忘れず今日の御參詣は奇特なり。然し御親父久兵衞様お袋様は二時も。先から參つてござるのに跡へ下つて何ぞ又。味な趣向があつたもの。聞けば毎日堺町木挽町への御遊山に。歌舞伎若衆の美しい姿でうまい狂言を。地御覽じた目でわしなどが抹香ばかりとめ袖に。飽きの來たのは御尤も。戀のいろはを敎へても。手が惡ければお師匠を變へて嫁入遊ばすげな。目出度い事じやと　フシ氣を持たす。地色お七は流石正直の顏を赤めて涙ぐみ。誓文くされ何時からか芝居へ足も向けませず。心に立てゝ牡猫さへ膝に抱いたる事もない。こな樣こそは方々から女子の弟子が附いたやら。詞ちつとの内に大人びて。小面の憎い此口がわしは因果で可愛いもの。地何處へ嫁入をするものぞお前はやがて坊様に。ならしやんすとの取沙汰が氣掛り

でならぬ故。互の固めしよう爲に。コレ起請をと差出す。吉三郎はやがて戴いて忝い〳〵。兎や角言うたは皆僞り誠を見する誓紙をば。只今致して進ぜうと棚より料紙硯箱。筆押取つて書く所へ。新發意常香盛りさして。後の方に立覗き。詞コレ吉三様何さしやる。上人様の曼陀羅を遊ばす筆で勿體ない。地穢はしいと咎められ。はつと下に差置いて。詞ハア辨長。そなたは先から其處に居て様子は何も聞きやらぬか。お七様の仰るは。曼陀羅が欲しけれどお師匠様へは憚りな。身どもにとのお望み故書かうとしたが何とした。エ、如何にもそんな事さうなが。お七様から遣らしやつたは。浄土の一枚起請とやら。有難さうに戴いてこなたは宗旨替へる氣か。地色曼陀羅書くとおしやれども フシそりやあんだらと笑ひける。地色お七はやがて手を取つて何時見ても〳〵。可愛らしい坊様じや巾着でも紙入でも。欲しくば縫うて進じよぞや。一寸見たこと聞いたこと言はぬものぢやと賺せども。なか〳〵頭打叩き。詞愚僧今年十二歳出家の道を相守つて女の手から物取れば。五百生が其間手の無い者に生れます。又嘘つけば獄卒が鐵の鋏で舌を拔く。それでは日頃好物な琉球芋が食はれぬと。地こま付けられ立去らず。取付く虫の辨長や花の嵐と持餘す。地色杉は捕へ出來ました。詞目に入る様なお前でも出家侍佛の使者。位の高いお人ぢやが。それでも此處へたつた今幽靈が出ましたら。怖しがつて泣かしやろがの。ハアねつな事をば言やるなう。其幽靈を浮めてやる。地胸に納めた法華經の。八官町の比丘尼のちと棺桶の詰つたが。迷ひとなつて幽靈がそこな丸太の間から。出たを深達罪福相浮めてやつたと意氣過ぎた。地色習はぬ經の談義口悉皆富樓那の辨長様。詞是からわしが咄さうと膝に抱寄せ聞かしやんせ。こちの隣に分限者の造り倒れがあつたげな。男は去年の正月に初の子産んで死なれたげな。跡で後家御が驕られて傾城狂ひをしられたげな。揚錢の魅入りにて節季と言ふ鬼になり。地慾に眼が光るやら身代に尾が見ゆるやら。額に江口倉橋の大根程な角生えたを。くき桶に入れ其家のはしりの脇に埋んだげな。其執心で夜々は屋鳴震動雷電し。天井板がむち〳〵〳〵。コハリ梯子がぐわた〳〵〳〵。四方の壁がどろ〳〵どろ。詞モウ此話置いてたも。どうやら面白なささうな。ハテまあ跡を聞かしやんせ。又膳棚がぐわら〳〵〳〵。庭の薄がざわ〳〵〳〵。明障子がぼうつと燃え。其中から幽靈が白佛程化粧うての。お齒黑は烏羽色髮打捌き逆に。屏風の陰に

にょつこりと。顔差出してけら〳〵けら。ハ、、、ハツト笑うたげな。家内の者が一時にワ、〳〵〳〵ワツト目を廻せば。小坊主は狼狽へて彼方へ向けば向ふから。又其顔がによつと出る此方へ寄れば後から。毛の生えた手で撫で廻す仰ぬけば二階から。俯けば簀子から　フシ是はならぬと逃げ廻り。地吉三が袖に顔差入れ法蓮華經も本道も。付けう藥のない首尾を杉が氣轉の手療治に。ひん抱へ來て風呂敷の小袖を取つて辨長が。顔に起請を早々と。先づよい事を書院先。硯を取つてくれ緣より　フシ濡緣あるこそ嬉しけれ。地色互に向ふ顔と顔あちらに抱けばこちらにも。恐しがりて抱き付いてお題目よりお經より。如是本末や屈竟の子供を騙す方便品。膝の間より坊主首によつと出して見た〳〵。おりや見付けたと駈寄るを杉も續いて走寄り。其處を彼の幽靈が後より引摑み。なう怨めしやそち故に。多くの屋内が世話を焼く。小意氣過ぎたる小坊主めと。まつこの樣に抱帶くる〳〵と目を卷きて。執念き聲でやい其處な。詞二人の者はうつかりと何狼狽へて立つて居る。そちらではないこちらへぢや。地ハアテあちらへ目離りのない帶解く事も時による。ついちよこちよことねるものと。氣を付けられて頷いて。飛石傳ひやう〳〵と圍の中に入りければ。さあ爲濟した幽靈も最早冥途へ歸るとて。掻消す樣に方丈へ　フシ逃げて。形はなかりけり。地辨長一人うろ〳〵と。ヲ杉こりや何とする事ぞ。地めんないちどりか合點ぢやと。座敷一間を舞ひ歩き吉三殿お七樣。杉々々と呼ばへども。返事なければ鉢卷を。そつと外してこりや如何ぢやと。あたりを見廻し打頷き起請を出して押戴き。詞一杯陥めたと思やろが其裏食はせこちらには。吉三の袖の内にあるこれしてやつたよい氣味ぢやと。地打笑うたる後には。萬屋武兵衛太左衛門先より樣子を聞き濟し。新發意此處に何してぢや。詞エ、お二人樣御詣りか。久兵衛樣も先にから客殿にござります。地お出でと言うて駈行くを。ア、これ辨長殿。詞こなたが只今戴いた文を身どもに下されい。ハテつがもない事ばかり。忝くも是はな。お七樣と吉三郎戀慕れ〻つの起請とやら。お前が貰うて何さしやるサア其お七と吉三めが起請ぢや故に貰ひ度い。其代りには常々に欲しい〳〵と言はれたる。木佛の大黒と布袋や歌留多一面ぢやが。地何と〻背中を叩かれてこりや談合が面白いが。詞騙食はすのぢやござらぬかや。ハテ何の噓をばつくものぞ則ち太左が請合ぢや。ム、歷々の證據人そんなら遣ろと差出せば。地武兵衛悅

び請取つて是さへあれば此方の。戀は叶うた手に入つたと兩人呟き入りにけり。辨長は只一筋に武兵衞様必ずや。明日とも言はず晩からは六介が部屋へ行て。二文四文の博奕打つて釋迦に契を結ぶの神。お七が戀のにくずしと知らぬ。事こそ三重へ悲しけれ。地主從の因は流石深編笠用ありげなる侍の。玄關に佇みて頼みませうと言ひ入るゝ。折節住持は方丈へ吉三件ひ出で給ひ。何人なるぞ用あらば此方へとありけるに。ハツト答へて編笠をフシ取つて彼處に入りければ。ヤア詞十内殿お久しい。先づ申さう御主人には。不慮なる事の御浪人。殘心推量仕つた吉三は親子の仲なれば嘸歎かうと存じたに。流石は學文精に入れ出家に染まる程あつて。地世界は無常と諦めて頓着も致さぬ段さりとは奇特に存ずると取なしあれば十内は。詞滿悦至極の御言葉それと申すも上人の。日頃お示しあるいはれ就いては主人源次兵衞。浪人せしは何故とお耳へ入りしは知らねども。自分に於て一合も非道の沙汰は致さねども。若殿の御難儀を救ひ申さん爲ばかり。私欲の科を身に被り不時の虚名を受けたる事。更々悔み候はず。地色それにつけても吉三郎出家の願ひを只管に。貴僧様へ申上げ剃髪染衣の姿をば。篤と見屆け立歸れと。拙者を差越し候とフシ慇懃に相述ぶる。地色上人暫し頷いて。苦勞の中にもそれ程に子は大切な物ぢやよなう成程々々今日にも。出家致させ申さうと悦ばしげなる返答を。胸に手を置く吉三郎。兎や角思ひ廻して眞中へずつと出で。詞ム、珍しや十内扨某が出家の事御師匠仰せある通り。心に待兼ね居つたるが今其方が話を聞き。忽ち心底飜り二度武士になる思案。先づ一通り承れ。父源次兵衞若殿への。忠義に浪人致せしを若殿御滿足に思召し。御身持直れば浪人せし甲斐あらん。然れども此趣大殿御存じなき時は。親たる人徒奉公をした道理。地某國へ立歸り隱れし忠義を顯す事。今日遁世致すより拔群の孝行と。言葉飾るも好色のフシ噓に馴れたる證なれ。十内涙を袖に受け多くの書物を見廣げて。深き道理を思召す御所存感じ入つたるが。詞武士の作法は外の事。主の善惡顧ず討死するも世の習ひ。そこは差別はない所。お前が奉公お望でも不居者の悴とて親殿御抱へなされまい。申し開きもならぬ筈。すご〱歸り給ふのは恥に上塗する同然。地色よく〱思し直されよと理を正せどもイヤ〱〱。詞身どもが勘當受けたのは大殿も御存じある。さあれば親とは他人なり。其他人の某が奉公望むが誤りか。地何の遠慮あるべきと云はせも果て

すこれ吉三様。（詞）勘當を言立に御奉公あることなたなら。孝行顔も入らぬもの。アア如何やらお前の御胸中紛はしうて呑込まれぬ。是も非も入らぬ發心をさあ。（地）成さるゝか成されぬか返答次第拙者めが。分別ありとにじり寄る。上人は聲を上げア、氣が短い十内殿。（詞）武道の仕儀は其許に如何様とも捌かれい。法師の道は此方へ預け置かるゝ筈の事。數ならねども師と頼む愚僧が差圖致す儀を。吉三も否とは申すまい。（地）世話を燒かずとゆるりつと。心鎭めて語らしやれ。こりやこりや辨長茶持て來い。非時も拵へ煙草盆酒よ銚子よさん／＼の。中に立つたる御師匠の心へ遣ひぞ殊勝なる。（地）然る折節方丈より八百屋久兵衛親子連。續いて武兵衛太左衛門住持の前に會釋して。お暇申すと立出づる。ヱ、こりや各お歸りか。最前より此處に居て御挨拶もせなんだ故。武兵衛殿や太左殿は定めて酒が足りますまい。お客も心安い仁。ようござるわい遊ばしやれ。平に／＼と止むれば兩人は立止り。（詞）久兵衛殿聞かしやつたか。御遠慮の無いお方とある然らば序に今の事。お寺へお話し致しませう。ハテ武兵衛殿それはまあ今日に限らぬ事。（地）嚊や娘も連れたれば暮れぬ内に去に度いが。ござれと云ふも聞かぬ顔（フシ）是非なく共に立戻る。（地）兩人は上人の膝許に畏り。御酒は望みに候はぬが急にお知らせ申し度き。いはくは是なる吉三郎。親御は名ある武士とやら。承れば大それた事仕出して。此頃追放せられたとも。縛首を討たれたとも口々の取沙汰故。親の子なれば如何様の儀がござらうも知れませぬ。片時も早く暇をば遣されたら好からうと憚りながら存じます。ハア心遣ひは忝し先達其事は愚僧も聞いて居まするが。世間の沙汰とは裏表様子は分けて言はれぬ儀。苦勞に思うて下さるな。ハ、ハ、、いやそれはお寺へ遠慮して取合せ云ふ贔屓口。其横着さ非道さは聞くも身の毛のよ立つ事。吉三は不便に思へどもお寺には替へませぬ。云うても御合點ないならば無理に吉三を引出すぞと。太左と身ども兩人が牒し合せて置きました。サア吉三立つて行けと傍若無人に罵れば。（地）住持顔色損じつゝ兩人存外千萬な。（詞）出家の弟子は子も同然。其吉三郎を我儘な雑言は何事ぞ。難儀が懸りや師弟共此寺を開く分。そなたの世話にやしますまい。お手前ばかりが旦方か不出來な差配と叱られて。ヱ、何にも御存じない故に御贔屓が一概な。お前は弟子と思さうが。（地）お七と言うてあれに居る。娘が吉三のお内儀様（フシ）坊主の女房と嘲笑ふ。（地）久兵衛夫婦腹を立てそりや武兵衛

殿何いやる。大事の娘を吉三には誰が仲人で嫁つたぞ。麁相な事は仰るまい證據を見よと立ちかゝる。はて喧しう云はいでもこちからお目に掛けるとて。件の起請取出し。コレ讀みまする聞かつしやれ。詞其方様に御出家を。止めさすからは此方にも。嫁入致し候まじ。次に色々神おろしよし様参るお七より。地何んと云ふを聞くよりも吉三は袂打振ひ。はつとばかりの風情なり。お七はおろ〳〵涙ぐむ フシ氣色もいづれ笑止なり。地久兵衛目鼻をしかめつく〴〵と打守り。疊を叩き身を震はし。詞やいそこな徒者。何時の間にまあ此様な大膽な儀を仕出して。大勢の眞中で親に面恥かゝせ居る。すつぱのかはな若衆が。此久兵衛が僅なる家一軒を見込にて。仕掛けた戀に乘せられたな。地大痴め盗人めと彼方を睨み此方をば。引摺り寄せて散々に打たるゝ

杖の下よりも。お七は吉三を打見遣り。吉三は爰に居ながらに スヱテ消えも失せたき心なり。地色住持は暫し默然と涙を隱し居られしが。やゝあつてこれ御夫婦。詞全くお七に科もなく。吉三が徒したでもなし科人は此坊主。お七が爰に居られし節。はれいたいけな發明な。娘の子ぢやと思ふから戯れ事を二三度も申した事の候が。サア女は何處やら愚かにてまん誠かと某へ迯らうとがな思うたを。地しどけなうして拾はれて。無き名負うたる不便やと。衣に落つる涙こそ フシ二人が。袖にわかるらじ。地武兵衛はせいて大胡坐これお寺様。詞御贔屓が餘り過ぎてむつとする。烏を鷺になされうが起請の文字は剝がされまい。これ御覽ぜと投出す。いや見る迄もないお手前が。最前讀んだ文言に。其方様に御出家を止めさすからとはなかつたか。吉三は出家ぢや

おじやらぬぞ。宛名に書きしよし様は愚僧勿論吉祥寺。地何と紛ひはあるまいと。眞顔作つた詞に。何れ誠と分き兼ねて フシ皆々。興をぞ醒しける。地武兵衛住持を睨付けて。詞これ御坊。女房狂ひをなさるなら魚も定めて参るであらう。幸ひ道で求めたる卵を是に持合す。地お饗應を申さうと袖の内より取出し盃に打入れてサア。詞お寺様卵酒一つ参れと突付くる。何ぢや身どもに是飲めか。如何にもお七同然の八百屋の卵。参る氣か参らぬ氣かで眞實の。底を洗うて見る合點。ハテ疑深い男ぢやなう。佛祖をかけてお七への戀は僞りなけれども。邪淫は思案の外の事殺生戒は得破るまい。イヤ〳〵イヤ〳〵。何程佛祖をかけられても是を飲みやらにや何時迄も。吉三が垢は脱けられまい。ム、すりや是非ともに飲めぢや迄。おんでもない事聞召せ。ハテ扨々是

非もない。ハアげに昔も例有り鳩の秤に身を代へし佛の慈悲の古も。愚僧が今も菩薩の行此酒則ち清淨池。吉三が垢さへ脱けるなら飲んで見せうと引受けて。地手に持ち初むる盃の朱を注いだる血眼にスヱテ涙は霰の如くにて。詞武兵衛餘りむごいぞや。久兵衛夫婦は大切な娘に浮名立てられし。其腹立に如何様な無理無體も言ふ筈ぢやが。地寺旦の誼によしなにも取合せある筈を。難題言はるゝお手前が胸の中に物がある。詞捜して見度いものなれども。法師の身なりや是非がない。拙僧既に父母の家を離れて七歳より。佛の前に受戒して雑行苦行師の苛責。誠に出家の文字の様。住家と定む宿もなく。雨露霜雪に身を痛め此處に馴るれば彼處へ行き。或時は飢に疲れ。玄義文句に眼を暴し四十有餘の此頃は。色衣を着し敬ひも一宇の寺を司り。聖人とも云はるゝ身に卵酒を飲まさうとは。身どもが無間へ落つるならお手前は叫喚の。苦を受けうのが不便なわい。と云うて飲まずば聞かれまい。伊蘭の林に交れども赤栴檀の香は失せず。泥より出でて泥ならぬ胸の蓮は宗門の。七字の首題只今の妙法蓮華と一息に。ずつと干さんとし給ふを十内手を上げ待つた〳〵待ちませうぞや。待たう地待たうと盃取つて彼處へ投げ。吉三郎を取つて伏せ。拳振上げ遠慮なくフシ散々に打ちければ。ヤア家來の身にて推參なと一腰抜かんとする所を。透間あらせず二つ三つ足の下に踏み付けて。詞何が推參緩怠な。親の安森源次兵衛。地見忘れたかと懐中より骨桶出して差上ぐる。踏まれながらに吉三郎振仰向いてこは如何に。親仁様は死なしやつたか。ヲ、サ〳〵ヱ、詞問ふも語るも怨めしや。先月廿九日の夜御切腹遊ばされた。忠義とは申しながら御無念な御最期の。其中にても仰るは。言ひ置く事は外に無い何卒悴吉三郎が。出家相續する様に地くれ〳〵十内頼むぞとて。家來に御手を合されしお志のフシいとほしさが。地骨に徹つてある故にお主を叩いた天罰も。踏んで奈落へ沈むのも身どもは何とも思はぬと。其儘其處に倒け伏してフシ男泣きこそ。切なけれ。吉三郎は骨桶を手に載せて見つ膝に置き。ヱ、變り果てたるお姿とスヱテむせ入り〳〵消えかへる。地色十内やがて起直り。地骨桶を弓手に持ち怒れる顔も其様も。別れし親の物言ひにて。詞ヤイ悴の吉三郎。源次兵衛が冥途から汝に尋ぬる事どもを。言譯あらば返答せい。形は人に生れても恩を知らぬは畜生よ。恩にも三つの品がある。差當つては親の恩。身を立て子孫を養育するお主の恩は猶重く。文字を習ひ

目を開く師匠の恩は取分けて。大海よりも亦深し喩を以て言ふ時は。親は子を憐めどお主には見替へぬ事。主は家來を養へど身に替へて贔屓はせぬ。師匠の恩は目前に汝が不義に代らんと。四十餘年戒行の譽も名をも顧ず。卵酒を参るのをのめ〳〵として見て居る事。畜生と云はうか。腰抜者と云はうか。八逆罪の科人めよ。次に此源次兵衛。假に勘當せし事某豫て若殿の。御爲に死ぬる覺悟故流浪させんも不便なり。亡からん後も弔はれ度く。少しの事を言立てに出家にならぬ其内は對面せじと此寺へ。追遣はせしは慈悲ならずや。其甲斐もなく今日明日と遁世を延ばす由。内々人の知らせし故未頼みなき悴めと。眞實の心になつて勘當はしたれども。自然法師に成るならば十内我に成り代り勘當も免して遣れ。骨になるとも懐しき顏に對面致させよと。頼みし手前も恥かしき非義非道なる性根にて。親の爲に奉公せう武士に成るのが孝行とは。ようも汝はぬかしたと。一度は怒り一度は又打萎れたる物腰に。それはと答ふ言葉なく。身を知る。雨やさめ〳〵と泣いて。俯向き居たりけり。十内涙押拭ひ。親旦那の御意見が篤とお耳に止つたか。是からは又十内め推参を顧ず。一言申し上げますと飛退り手を突いて。申し吉三様善と惡とは北南足振變ゆる迄の事。それ程の義は言はいでも辨へのある御發明。殊に短慮なお生れつき。家來の者に人中で踏まれた事の無念なと。定めて遺恨に思すであろ町人づれの口先に家一軒を見込ぢやの。いや盗人のすつぱのと言ひ散されてきよろりつとうぢついて居る人ぢやない。コレ徒といふ大病に勇も武略も抜けましたの。昨日迄も今日迄もの。千石取の御一子と崇め育てし此方をば。雜言せられし其時は。舌切り裂いて棄てうかと刀の柄に二三度も。忍びに手をば掛けたれど。いやいや。自分相應に大事の娘を犯されて腹の立つが道理ぢやと。のめ〳〵おきて十内も腰抜けになつたぞや。家來の恥は此方の恥。お前の恥は親御の恥此世で不孝し足らいで。又未來迄なさるゝか。慾心でない言分にさつぱりと暇遣らしやれ。どうぢや〳〵。サア。〳〵サアとせはしなく。問ひ詰められてうろ〳〵と覺えず其處へ流す目に。お七は顏を振袖の下から手にて物言はす。否にもあらず稻舟のおうとも得こそ言はれざる。十内二人が口無しの色にぞいでの堪り兼ね。つか〳〵と駈寄りてコレ吉三様。とてもこなたの性根魂曇りを磨く此刀。某が手に掛けて我も冥途のお供して。父御の前で拙者めが一分立つる御覺悟と。血相變へ

て見えければ上人中へ押隔り。詞主に諫は家來の役最前よりも宥免す。腑甲斐ない此法師と末頼みなう侮りて。近頃過言聞きにくし。出家にも佛にもなすべき我が親切は。地先にから目に見えぬかと氣色變れば十内も。吉三もはつと感涙のフシ頭を。下げて渇仰す。地色武兵衛や太左は何とやら小むつかしさにこつそりと。立つて行くを十内は後さまに襟髪を。引摑み引戻し汝等最前親旦那を。横着者の非道のと何者にか聞きたるぞ。眞直に白状せよ。改めては言はねども若殿樣の御難儀を。身にかぶりたる忠義とは一國に隱れない。出放題なる嚾言をようもようも吐き出したナ。討つて棄て度い奴なれど御出家なさるゝ悅びに。地命ばかりは助くると右左へ取つて投げ。起きんとすれば踏倒し逃ぐる所を又蹴倒し。二十三十五六十腰も脊骨も立ち兼ねて。はふばふ逃げて歸りしは フシ心地よく亦をかしけれ。地久兵衛夫婦も氣味惡くそろそろ出づる玄關口。戀に泣く子を引立てゝ母が繰言ねすり言。はて何とせうも言やんな。なり物類なら何にても。たばうて虫は入るまいに魚屋ならねば蛤の。口の開いたは是非ないと呟き。てこそへ立歸る。

中之卷

歌やよ柳。もとの梢の雪ならで。餅搗く宿の梅とのみ。冬籠する大根も蕪も。ナホスフシ千代の諸かづら。フシ常磐堅磐の。交讓木や。橙柑子榧搗栗。昆布串柿商ひの店を其儘蓬萊の。八百や萬の神の餅御藏のかゞみお雜煮の。かちんあたゝけ心見を爰へ取子のひつちぎり。ちぎり解れて戀病の。地娘お七は奥の間に。春をも待たず逝年を惜むでもなし世の中は。スヱテ無常と外へ見せかけを。色とは誰も水晶の願ひの玉を手にかけて。フシ題目繰つて居たりけり。地色仲居の杉は差寄りて。詞一年一度の餅搗に小忌々しい何ぞいの。親御樣への意地張りは却つて御身のひしはなびら。地移ろひ易き人心先には忘れてござるやら。最早坊樣に成つてやら。知れぬ相手に義理立は。フシ損な事やと諫むれば。地色聞えぬ事を言ふ人かな心の變る變らぬは。色品數多見盡して濡れの巧者の仇比べ。吉三樣にも我が身にも戀の手習血に染めし。起請の罪もあるぞかし。何しに仇になるべきと。しやくり上げたる顏容貌愛らしく亦優しくも。重ねて返す言葉なく有樣云へばお道理と。贔屓目にさへ持つ涙 フシ漏れて袂を濡しけり。地色臺所より親方は杉よ〳〵と尖り聲。詞おのれは其處に何して居る。泣く子も目開いて泣くものぞ。殊には今日の餅搗

が。年寄つた久兵衛や婆が正月祝ふのか。類火に遇うて諸道具も足らぬ中から毎年の。嘉例の通り搗く餅に小米一升減じぬは。生先のあるお七ぢやと子に袢さるゝ親の慈悲。近所隣へ聞えては悋な事と譏るであろ。一門どもも笑ふであろ。其上に娘に迄すねて貰ふは是非がない。構はずと捨てゝ置け。やがて飯もしまひぢやげな男どもは隙がない。兩替町の蝶和殿針立の玄伯殿。地色お出でなされと云うて來い。フシあた面倒なと喚かれて。地笠も足駄も取敢へず髪さへ今日は結ふ隙の中戸口より呟いて。吹雪を凌ぐ前垂に走り出でたる軒の下。蕗も根芹も埋れて。雪重げなる簑笠に臥せる里の子哀れやと。言捨て過ぐる裾を引き。顏差出すは吉三郎ハツトばかりに立戻り。こは淺ましき御有様如何なる事と抱き付きスヱテ人目も分かず泣出だす。詞吉三郎は押靜め。何故ぞとは怨めしや色故身をば窶す事。如何なる高位高官の古今も同じ事。地色百夜通ひし少將の雨夜の憂さは知らねども。雪に身内は冷え抜きて顏見ぬ内に消ゆる身と。フシ泣音もいづれ弱げなり。詞ヲヽ、御尤〳〵。こちらも同じ憂き思ひたつた今迄言出して。二人が泣いて居りました。地色幸ひ表に誰もないそろりと其處を這ひ入りて。潛を左へ五六間行けばお部屋の縁の下。暫し屈んで居やしやんせお使に行て戻つたら。首尾見合せて雪よりも積る事どもどちからも。云ひつ言はれつさせませう必ずさうと囁きてオクリ駈行くへ戀の道橋や。地色渡りに舟の心地して教へしまゝに這ひ入りて。土に此身を打任せ釘になりたる手足をば。君が膚に打付けて寢もせぬ内に睦言の。フシ心工ぞはかなけれ。地色かゝる折節町の年寄彌左衛門誘ひ入り來る。久兵衛夫婦悦びて。詞コレハ〳〵何れも樣。珍らしからぬ饗應に却つて御苦勞掛けまする。地さあ〳〵奥へと手を取れば彌左衛門打笑ひ。詞如何にも參る上からは奥へも屋根へも通らうが。序ながら御夫婦へ願ひと云ふは武兵衛の事。組中と云ひ平生に兄弟よりも懇志仲。俄に不仲な樣子をば聞いてさりとは氣の毒故、どうぞ挨拶致さうと最前武兵衛に云うたれば。ハテ久兵衛さへ合點なら。身どもに別儀ござらぬと結構な返答に。今宵の祝儀を幸ひに跡から是へ見ゆる筈。地押付けがましいやうなれど萬事は我等が貰ひます。御夫婦頼むと云ひければ久兵衛居直りて。詞お心遣ひと申さうか御宿老殿のお言葉を。背くは慮外に候へども畏つたと申されぬ。樣子は定めし何れものお耳へも早入つた筈。私類火の砌には半櫃一つ得退けずに。やうやう寺に隠はれ二度お町へ立歸る。始末

しがくもない時節彼の武兵衛が尋ね來て。金二百兩膝に置き預けるでもない遣るでもない。普請の用に立てゝやる手廻し自由になる迄は。二百年でも待つ金子手形取るにも及ばぬと。投げ出されたる嬉しさに思慮分別も入らばこそ。忝いと戴いて初の如くそこ〳〵迄。斯樣に普請致せし事一門よりも大切な友達仲と悅びしに。十四五日も以前の事それなる太左殿挨拶にて。娘お七を所望とある。夫婦の者は猶以て滿足に存ずれど。如何なる事か娘めがふつ〳〵否と云放すに。親子ながらも此事は曲げて曲がらぬ道理故。其段返事致したる明けの日よりも金子をば。戾せ〳〵と五度三度每日々々立てせがみ。金子が無くばお七をば。吳れるか有無の返事をと無體至極の使立て。如何に貧なる久兵衛とて賣買にする娘ぢやと。見立てられたる無念さがどう堪忍がなるものと。聲打震ひ腹立つる。彌左衛門頷きて。段々至極仕つた。武兵衛のが不屆ぢや。そりや身どもでも堪忍せぬ。しかし斯うした事もある。沙汰に及んだしはん坊親の病氣に人參を。盛らぬやうなる慾者が二百兩と云ふ金をば。手形もなしに預けたは心から底から息女をば。欲しいと思ふ餘りの事。賣買にせぬ證據には其節わけも云出さねば。侮ると言ふものでもない。それに兎や角意地張れば證文のない金子故。待つてとも言はれぬ義理。とあつて折角普請した家を賣らすも笑止なり。此入譯を篤くりと言ひ聞かせたらお七にも。合點が無うて何とせう。平に〳〵と物馴れに言ひ廻されて夫婦の者。兎角の答言ひかねて。さし俯向いて居る所へ。武兵衛はじろりとした顏でつか〳〵とのし上り。何れもお待ち久しかろ。橫山殿會ひませぬ。小栗が今宵の參會に毒など盛つて給はるなと。かさにかゝつた言分をむつとはすれど是非もなき。金に捲かるゝ苦笑ひ乾の隅へいざ〳〵と伴ひ。奥へ入りにける。お七は炬燵に假寢の夢何とやら襲はれて。ふつと起くれば勝手には三方土器束熨斗。母は銚子に蝶々の折据付けて忙しげに。持ち行く奥の高笑ひ。合點の行かぬと見る内に丁稚の彌作取肴。手に持ちながら差覗き。コレお七樣嬉しいか。否の應のとあるとても親と銀には肩骨が。おれもちつくりあやかり度い。吉三樣の聞かしやつたら胸の火が燃ゆるであろ。燃ゆる序にお前程火に緣のあるお方はない。火事故寺で徒し火事故今度の嫁入し。脾の臟强い男持ち雲雀の樣にならんしよと笑ひてへ走り行きにけり。お七は覺えず聲を上げ。ナウとゝ樣かゝ樣怨めしい。わし

が心にどの様な行かれぬ義理がある事やら。親子の中で問はれずば人傳にても聞きもせず。死ぬるといやと云ひ放す。事を好みしなされ方娘を一人捨てるのか餘りに惨い心やと。スヱテかつぱと轉び。泣く聲が。地色洩れて誘ふ縁の下吉三は顔を差出せど。姿は流石隱れ蓑隱れ笠なら抱付いて。聲をも立てゝ泣き度やと フシ足摺してこそ居たりけれ。母は奥より。走り寄り。地色暫く泣いて云ふ樣は。合點の惡い娘やな。詞此身も一度は若盛自分に花もやつて來て。惚れた惚れぬの術も知り。器量の好いと惡しいのは老の目にさへ見ゆるもの。地そなたのが皆尤も故いやと言やるを無理にとは。今日迄言はぬ兩親が惨いとは言はれまい。詞世が世の時であるならば。假令そなたが合點でもあんな男を持たさうか。器量發明揃うたる婿と並べて見ようため。分に過ぎたる二十荷の簞笥長持襟數を。地恥かしからず取揃へ蚊帳は手織と急がしき。中にみづから機上げて織り調へし物迄も。類火にあだとなりたるは因果な男に焦げ付いた。先生よりの奇緣ぢやと。フシ思ひ諦めくれよかし。地ならぬとならば此家を銀の代りに突出して。出て行く分は構はぬが親の難儀を顧ず。思ふ人には添はれまいよし添ふとても出家をば。詞引落したる罪科は閻魔の廳に就けられて。火の車にて迎へられ等活地獄の火の中へ。生きながら嵌められて煙の下に其人を。地戀し床しと叫ぶとも甲斐なきのみか夫迄。奈落の底へ落すのが何心中になるものと。スヱテ威しつ。又は賺すにぞ。地お七はあどなき心から涙の顔を振上げて。暫しも君に添ふならば此身は縱へ生きながら。火に入るとても厭はぬがいとしい人が永沈へ。沈むとあるは悲しやとおろおろするに力を得。母はなほ〳〵口說立てそなたの返事次第にて。忽ち夫婦は袖乞ひの果は野の末山の奥。飢ゑ凍えて此世から餓鬼道の苦を見するのも。たつた一つの胸の内孝行な子は佛神の。詞憐みありて後々は願ひの樣になるものぞ。世間の掟は夫をば大事々々と教ゆれど。顔も心も憎體なる武兵衛に添ふは世界の義理。飽かるゝ樣に身を持ちなしや。何時去つて遣すとも忝しと請取つて。其時こそは打晴れて好いたお人に添はせて遣ろ。親の難儀に暫しの勤をすると思ふなら。吉三殿の目の前で帶紐解いて寢るとても。淫奔とは思やるまい。地合點がいたらあいと言やあいと言やとて撫で摩り。初心な心一つにて胸の内が捌けまい。追付け杉が戻つたら母が無理か道理か。談合して返事しや。我が身は奥へと立ちながら心許なき親心。鋏剃刀櫛笥の。フシ中

を探して持ち出づる。お七は更に夢現何か定めんなか〳〵に。消えなば消えね玉の緒のかゝりとだにも共人に。知らせて後に死にたやと。障子一重を閾の戸の。明くればやがて逢坂の道とも。知らず泣き盡くす。吉三郎は羽抜鳥手も足も無き心地して。やう〳〵そつとにじり出で。涙を簔に押拭ひつく〴〵と。思案して。母のつど〳〵言はれしに一つとして無理はない。嫌とも應とも返答のないは道理ぢやことわりぢや。必ず必ず怨みはせぬ嫁入するも我々が。薄き契りも過去よりの定り事と知らずして。うか〳〵何しに來た事ぞ親の命又師の目をば。晤まかしたる天罰の忽ち當ると言ふ事を。今といふ今身に覺えた。あら勿體なや怖しや。立歸つて明日は發心するぞふつ〳〵と。おれが事をば思やんな。こちには忘れ果てたるぞや。さはいへ今宵來たと云ふ。事ばつかりは知らせ度い納めに顔がにし〳〵と。見度い事やと這ひ寄りて障子覗けば我が影の。若しや勝手に見えんかとそつと退いては又立寄り。杉は何とて戻らぬと又さめざめと歎きしが。ハア是も亦誤つた。お七には早や武兵衞とて親の許した男あり。目を盜むのは正眞の間男も同然よ。叶はぬ事をくど〳〵とよしない浮名濡衣の。重きが上の小夜衣何の簔笠入らぬとて。左や右に脱ぎ捨てゝ。涙のつらら玉霰袖をへ翳して出でゝ行く。斯くとは如何で。白雪の。道踏み分ける高足駄。杉は心のわくせきと行違ひたる取形も。緣の薄さに見紛ひて內を覗けば夫婦共。勝手に見えずよい首尾とやがて立寄る緣の下。簔笠取つて是はさて。仲人は宵の程。最早祭が渡つたと障子明くればやれお杉。悲しい事が出來たはと袂に縋りて。泣き出せば。イカニモ〳〵さうであろ。もう何ぼ程むつかつた。お脈見ようとじやれかゝる。エ、面白さうに何ぞいの。戀しき人に逢ふ事の叶はぬ首尾になつたもの。脈が良うてもおりや死ぬる。死なせてたもと塞き上ぐる。ハアどうやら拍子が違うたが。まあかの人に逢うてかえ。ナニかの人とは誰ぞいの。すりや未だ御存じないさうな。吉三樣に逢ひまして爰にごされと教へたる。所に簔笠ありながらお姿は見えませぬ。人が見付けて去なしたか但しわしを待ち兼ねて。歸り給ふか氣遣ひなと其處よ此處よと尋ぬれば。お七も共にうろ〳〵と。彼方此方と見廻せど。其甲斐もなき簔笠に。ひし〳〵と抱き付き暫し消え入り歎きしが。稍あつて云ふやうは。いや〳〵人が咎めたでもそなたが遲い故でもない。奥には今宵婿

入の早や盃の取結び。かゝ樣最前爰へ來て樣々の御意見を。否とも應とも得云はずに泣いてばつかり居た故に。地それが心に障つてがなお歸りあつたものであろ。間のない事ぢや追ひ付いて呼びまして來てたもらぬか。これなら賴むと手を合す杉は聞くよりえせ笑ひ。詞何がさうした事ぢや物歸らしやれいで何とせう。親御であらうが王樣の勅諚にても否なれば。否と云ふのが戀の意氣。朝晩泣いてござつたは人目威しの僞りよ。地さうとは知らで此事を取持つ日からお二人の。如何なる御苦勞遊ばすとも何處迄も引添うて。奉公せうと思うたはよしなき案じ過しをした。わしも一所に水臭い者と恨みであらうもの。其中へは行かれまいもう今頃はお頭が。丸うがななつてあろ。お前は明日から笄に結うて嫁入の御稽古あれ。男は持たず迫めてまあ寢て花やろと立つて行く。冥途の坂の腰を押すオクリ言葉とへ後は悔しけれ。地色お七は內の者に迄恥しめられてしを〳〵と。如何樣わしが惡かつたつい否々と云うたらば。お嬉しさうな顏を見て今頃は寢て語らうに。どう狼狽て泣いては居た側からさへもあの樣に。愛想盡かせば其身には嘸やお腹が立つたであろ。言譯せうも詫びやうにも最早お出ではあるまいし。文も屆けてくれまいし賴みも綱も切れ果てた。あら懷しや戀しやと。立つて見居て見眺めやり移り香殘る簑を着て。笠も被つて此樣に。しよんぼりとした形をして爰につま待つ水鳥の。翼にあらぬ簑笠は仇の形見よ取るも憂し。脫ぎも遣られぬ袖の雨。着て見ては泣き捨てゝは泣き。爰に歎けば座敷には フシ三國一と言ひ囃す。地婿とは憎や穢はしやそれ故にこそ相思ふ。仲をおのれに引裂かれた我が夫戻せ呼び戻せ。さなくば寺へ連れて行け出家落して生きながら。火へ嵌つても大事ない。逢ひ度い見度い行き度いと。詞形も亂れ氣も亂れ オホスフシ亂れ心の。あどなくも家が燒けたら寺へ行き。又逢ふ事のあらうかと。ふつと付いたる出來心オクリそろりへそろりと フシ這ひ寄りて。炬燵の燠を四つ五つ簑に包み小袖にて。上を引卷きうろ〳〵と震ひ上るや箱梯子。三惡道の通ひ道。二階は地獄の入り口。鬼が責め來る身の因果廻り。くるくるくる〳〵車長持戶棚の上。此處か其處かと見廻して。ほいと投ぐれば戀風に我より。先へ 三重 へ烟るらん

下之卷

フシ罪科の。ごもく所を牢といふ文字は戀路の穴冠。地色繫ぐや牛のお七こそ今日火刑と町々の。役人夜番柴薪歎きを爰に

持ち運ぶ。煙はいづれ變らねど。フシ哀れはいとゞ増りけり。地色母は今日さへ牢の飯持つ手もたゆく足弱く。道も涙に見えねども我が手づからに煮炊きせし。物と思はゞ暫くも添ふ心地して嬉しかろ。自らとても此椀を手に觸れたりと聞くならば。それをお七と抱きかゝへ逢うた心と樂しみに。漸く牢屋に辿り着き門ほとほとと音づれて。フシお七が飯と云ひ入るる。地番の者の聲として。詞今日のお上の書付にお七が養ひ入らぬ筈。持つて歸れと云ふ聲も。地色權威をかうに木で鼻を。こくる下部も フシ所がらぞつと身の毛も立戻る。地色向ふの方より久兵衛は歎きに輕いおもひとも。いづれあやなし暫くも宿に一人は居られずと。よろぼひ來たる老の杖。詞ヤア嚊戻りやるか。ナントお七は機嫌よう。物も食うたか進んだか。どうちや〳〵と尋ぬれば。サレバイノ聞かつしやれ。あの内でさへ義理じゆんぎ振舞でもあつたやら。今日は御飯が戻つたと。地云ひも果てぬに久兵衛は我を忘れて大聲も スヱテわつと叫びて。伏し轉ぶ。地女房は取付いてけたゝましや何事ぞ。樣子が早う聞き度いと フシ縋り責むるぞ遣瀨なき。詞ハテ泣くとて別の事ぢやない。可愛い奴と思ふから思はず知らずの落涙ぞ。地さあ去にましよと包めども。イヤ〳〵こなたの言葉の端。如何にとしても氣遣ひな。地隱すも事による物と手を取つて引留むれば。久兵衛包むに力なく。流石はそちは女の身。樣子を知らぬは尤ぢや。詞總て牢舍と云ふ物は。殺さるゝ日は大法であなたよりも扶持が出る。地お七が命も今日限り。あれ見やそこな柴薪。若木の花を生きながら煙と成すは胴慾と。立ち寄つて杖振り上げ。敲いつ泣いつ現なき。母はあまりに興覺めて泣くも泣かれずうろ〳〵と。頑是も無しに爲た事を何故お町衆は只管に。詫事をして給はらぬ。代官樣も了簡のないは餘り胴慾や。頼みを掛けし日親樣法華經の功力にて。燒けたる鍋は空に飛びお命恙無かりしとや。夫婦の者が年月に袂の下で敎へたる。お題目の力にて若しや燒けずに戻らうか。さもなか母はどうせうぞ八歲の龍女樣。雨車軸してたび給へ國土の内に何時迄も。火と云ふ物の無かれかし世界の人の恨みにも。母には罰が當るとも娘一人が助からば。スヱナ情なしとは思ふまじ。地三年四年前よりも仲人が來てあちこちと。似合ひの緣もあつたれど。人手に置くが氣遣ひさに入婿取りて何時迄も。石に根繼ぎの寵愛が過ぎての今の苦しみを。よく見覺えて世の中の娘持つたる親御達。縱へ如何なるいたづらをも見逃しにして置き給へ。我身は懲り

て悔みても。帰らぬ事が浅ましやと。大地にどうど打伏して フシ消ゆる。ばかりに。見えにける。詞久兵衛は差寄りて。ヲヲ道理ぢやさりながら。假初ならぬ科なれば。代官様のお慈悲にも。町衆の詫び事も叶はぬ事と初めより。諦めながらぐどく／＼と我も迷うて朝晩に。法華の数珠を掛けながら愛宕様の方へ向き。地色娘が沈む火の難をどうぞ救うて給はれと。謗法とは知りながら。フシ頼みし事の恥かしや。地子は三界の首枷とて。現世未來を取外す。悲しき老のしまひやと。同じく側に伏轉び聲を。立てゝぞ泣きにける。地色かゝる所へ人夫ども柱を擔げて口々に。詞何と不便に思はぬか。まこと譬に云ふ通り花ならば初櫻。月ならば二夕どり。饅頭の様な手足をば。在所で團子焼く様に火にくべるのは惜しい事。それに相手の若衆めは何をしてけつかつて。地色今日が日迄に尋ね來ぬ因果はお七一人ぢやと。心無き身も哀れ知る。フシ目を擦りてこそ通りけれ。地色夫婦は見上げ見下して世に尪弱な娘をば。あの柱へくゝり付け四方から焼き立てゝ。阿鼻焦熱の苦しみをまじ／＼と見て居られうか。共に灰ともなり度やな可愛の者やさりとては。火をつけずともどうぞ又。外に思案は出なんだか。駈落するといふすべを。杉は心も付けずして。フシ我から。身をや焦すらん。地年寄りたりし我々が。身は去年にも相果てばかゝる憂目は見まいもの。今は死なうも生けうにも。有るにあられぬ世界やと。足手顫はし目くるめき スヱテ性根なきこそ。道理なれ。地色所へ年寄彌左衛門涙片手に駈け來り。詞ヲ、悲しうござろ尤ぢや。心一杯訴訟もするお上にもどうぞして。助け度う思召し言譯の仕様をば。くゝめる様にのたまへども年の行かぬ悲しさは。吉三様に逢ひたさに火をつけましたと有様に。云ひ放せば是非もなく。法の如くにお仕置を悔みても返らぬ事。それに就いて武兵衛めが斯うした中に取交ぜて。二百兩の金子の儀たつて御訴訟申せし故。委細御詮議遊ばされ此事故に此度の。科人も出來たりと殊の外の御憎しみ。只今牢へ打込まれ右の金子は久兵衛へ下さるゝとの御上意ぢや。地色せめてはそれを力にして歸らしやれいと引立つれば。地久兵衛は手を合せ金子に念はなけれども。娘を憂目に沈めたる元の起りの武兵衛めが。牢へ入つたと聞いたればいづれ力が付いたやら。ちつと眼が見えますと悦ぶも又哀れなり。地色女房は聲を上げ此吉三めは如何なればお七が最期我々が。歎きを餘所に見ず知らず尋ね來ぬこそ怨めしけれ。行方も知らぬ者迄も。口々云うて誹るのが。耳

へ入らぬか聞えぬか。娘の敵胴慾者。情知らずと フシ泣き惑ふ。詞久兵衛は押し鎮め。愚の事を云ふ人かな。お七が爲に正眞の敵といふはこち夫婦。學問立つる家でもなし武士の一門持ちもせず。僅な八百屋商ひして。娘が徒らすればとてさして恥にもならぬ事。お寺へ云うて早速に吉三を婿に貰うたら。地色今日のつらさはあるまいに。小家一軒建てうとて。厭がる緣を結びし故。惨い死にをばさすると て。最期に親を怨めうもの。千部萬部を讀んだりと此方夫婦が弔ひは。露程も受けまいが。詞戀しと思ふ吉三殿一遍の題目も。フシ草の蔭にて悦ばん。地色扨又此場へ見えぬのは猶以ての情ぞや。お七が吉三の顔を見ば心亂れてなまなかに。臨終の迷ひとなり未來の程も不便なり。願うた後生はなけれども見物群集の人々の。御回向の功德にて佛にもなれかしと。思ふもせめて親の闇。あじき涙の諸聲に フシ餘所の。袂も濡れにけり。地色早や刻限と相見えて拔身の鑓のひら〳〵と。朝日まばゆく輝けば夫婦は共に叫び出し人目も恥も警護をも厭はず構はず駈け出すを。彌左衛跡より取付いて諫め賺してやうやうと。歸るや夢の浮橋を娑婆と冥途の二道に盡きぬ名殘の袖の露跡へ戻れば先へとて。引かれぬ足の一夜だに泣く音や。三重是を

八百屋お七江戸櫻

かわり歌祭文呼子鳥の。オクリ哀れ〻なるかな。合お七こそ。戀路の闇の暗がりに。よしなき事を。仕出して。戀の罪科 ナホスフシわれ一人。かき集めたる。玉箒。あこがれ焦れ行末は。かゝる憂き身をこゝかしこ。見付。見付に。曝されて。日本橋より引かれ行く。見る人袖を絞る人。見返る人も皆人も。柳原野の。つく〴〵し餘所目に餘る涙川。渡り兼ねたる丙午富士の。江戸冷泉煙と。諸共に消ゆる命ぞ。果敢なけれ。首にかけたる玉の緒の。絶えなば絶えね箒木の。長地形見の念珠繰返す守は父の賜はりし一部一卷後の世を。助け給へや南無妙。法蓮華經南無妙法蓮華經。歌何時しか君と馴れなじみ。變るまいぞや變らじと起請を。書いて取交し。小指を切りて。ナホスフシ血を絞り。互に語る睦言に。二上り祭文さりし御見の夜の雨。殿御待つ間の疊算。逢ふ夜逢はぬのよ。いさよ恨みても。外に惡所は。誓文と。オクリ仇し。男の。ナホスフシ仇事や。地色貧の盗みに戀の歌三十字一文字書き習ひ。湯島に懸けし松竹梅本郷お七と記し置く。十一歳の筆の跡見し人あらば私の。形見と思ひ一遍の御回向賴み奉ると。顔差入る る懐の。内より洩るゝ振袖に溜る。涙

ぞ哀れなる。フシ身は人くづと。言はゞ云へ。笑はゞ笑へ一筋に。思ひ初めたる戀なれば。たとへ此身を貫かれ。骨は粉となれ灰となれ。スエテ魂は此世に留りて。影に附添ひ身に移り 小オクリ 二世もへ三世も我夫と手に手を取りて蓮華乘。詞カヽリ 法の纜切れ果てゝ。我と火に入る夏の虫。焦死とは。此事か。竹の子故に迷ふ親。冥加も知らず恩知らず。如何に若めといへばとて。氣儘に心持ちなして オクリ あられ。少きしめじとは神も佛も。しらまゆみ ナホスフシ 二つ葉四つ葉の。嫁が萩。脛も現はに三田の郷。スエテ亂れし髮と諸共に。隨喜の涙をちこちの。二上リ祭文 眺めは。爰も鳰の海。小浪寄する。品川や。いよ。いよ。いよ。濱。に。合 入江の海人小舟。見えつ隱れつ。一霞の。あれ、から。先を。見渡せば。吉原雀口々に。科のよしあし夕時雨。戀の邪魔する。男こそ。色の命をせたしゞみ。我は佛になりもよし。オクリ 振りもよしなやよ。いさよ戀故に。命の峠。フシ 今暫し。暫しと留むる人もなく。心も駒も忙しげに行く道柴も露ぞうく。引く足なみの數盡きて。爰ぞ名にふる鈴の森最期場にこそ。着きにけれ。



地色 かゝる所へ吉三郎思ひ切つたる白裝束。群集の中を押分け〳〵人目も恥ぢずつか〳〵と。立寄らんとしけれども警護の武士に隔てられ。泣く音ばかりの問ひ交し我故かゝる罪科は。淺ましの有樣や スエテ 此身も共にと焦れける。地色 お七は顏を振上げて愚にござる吉三樣。我が心から爲す業を少しも悔む事ならず。フシ 心にかゝる事はなし。地色 お前は命目出度うし。御出家なされ亡き跡をよく〳〵弔うて下さんせ。言ふ事とては是ばかりはや〳〵お歸り遊ばせと。名殘りに心亂るれど。人目を恥ぢて潔き。言葉の中に曇り行く目許に。哀れ殘すらん。吉三も涙押し隱し我身をかばふ心さし。喜ばしやと振返り役人に手を突いて。詞 科の起りの本人は私にて御座候。地色 急いで彼をお助けなされ我等をお仕置下されよと。たつて申せど役人は。詞 愚や一度代官所で詮議極まる科人

を。我が計ひに叶はぬぞ。死なんず命を掻き切つて露と消に行く露の世や。お七あの者が望みの如く出家して。跡弔ひて得させよや急ぎ立ち去れそれ科人。時刻移ると下知すれば。吉三も今は力なく生てゐられぬ我が命。いで〳〵冥途の道連れに我先立つて待つべしと。腹一文字に

は今年十六歳吉三郎は十八の花や。月雪郭公なれも冥途の友となる。戀に果して武藏野の草の緣と色深き。浮名諸國に擴ごりて。語り傳へる末の世に哀れは。盡きぬ物語。

右此本者以太夫直傳寫之頌句音節墨譜等不殘毫厘令校合候畢尤加秘密夲令開版者也

上野事

豐竹越前少掾

京二條通寺町角

正本屋　喜右衛門板

心中ふたつ腹帯

作者　紀海音

地 草に木にたとへて見れば若衆梅。女は櫻坊様の山吹衣ま袖より。牡丹のさかりりんとした フシ 武士の姿はおのづから。地色 うぶにそみたる紅の園生のたねや末葉まで。わきて遠州濱松は御家中廣き其中に。小身なれど手を置いておもき山脇十藏の。屋敷造のお物數奇其折ふしの月花に。かへて嗜む武藝の道砌も深き藪垣の。向ふに目あての垜を構へ本弓の稽古的。戸田卜齋を師範に立て門弟沼津杢之進。南條定七桑源八いづれも弓矢引きつがひ。拳を固め肘を張り鏃を揃へ聲をかけ。我劣らじと爭ひしは フシ いかめしう。こそ見えにけれ。地色 卜齋はつく／＼と稽古に氣を付け目を配り。詞 ホウおの／＼見事見事。射法力の入れ所村の肉置矢の輕重。羽の吟味に至る迄殘る所はなけれども。地 どうでも體が固まらぬあながち人に射勝たうと。思ふばかりは勵みでない一ぶんに油斷なく。工夫の心坐りなば自然と的中致すもの。詞 既に孔子の曰ふにも射る事は君子に喩へ。あたらされば其身に求む。手前を直し隨分と功を積むこそ第一と。フシ さも細やかに云ふ所へ。地色 主山脇十藏は同苗半兵衛諸共に。かしこに歸れば卜齋。詞 ハア、十藏殿お歸りか。豫てお心安さのまゝお留守をも顧みず。地 射場を借用仕りゆる／＼稽古致す段。無禮の至りと相述ぶる。詞 十藏會釋して是は扨痛み入る。よい場を持てば品により物干にさへ貸すならひ。地 ましてや御念比といひ殊には豫て極の稽古日。在宿致す筈なれども。同苗半六只今は名も半兵衛と改め大阪の住居。町人に罷りなり候へども當所の人數改めにて年に一度は極まつて判形に罷り越す。其儀によつて今朝より御役所へ召連れ出で。それより一家のはし／＼へ暫しの對面則ち今夜八ツ立に大阪へ立歸る。用意何かに取紛れ無亭主の段御免あれ。コリヤ半兵衛。以前のお師匠友達衆對面致せと詞の下。半兵衛慇懃に。詞 先づ以て卜齋様。御息災に御凌ぎ。ひとへに滿足仕る。師弟のちなみ折々は御恩の御見舞申す筈。何をいうても只今は商人の身の忙がしく。地 年に一度の參着さへ昨晩參りて明朝は。罷り上る故。おのづからの如才者御免し下さるべし。詞 杢之進殿定七殿。源八殿を始めとして御無沙汰ばかり。

地顔見れば昔を思ひ懐かしい。先づは御無事で珍重と身は町人を卑下しても。どこやら武士の花靱フシ八百尾さするぞ惜しかりし。地色卜齋は手を打つて扨も扨も久し振り。山脇半六時分より殊の外肥滿にて。究意な若者其骨柄を見るにつけ。思ひ出すはこなたの藝。今迄鍛錬せられなば。恐らくはつかうせんものと。常々皆とも此噂町人とても隱し藝。折節射ても見らるゝか。いかに〳〵と問ひかくる。詞半兵衞は打笑ひ。仰せの如く私めも折角習ひ受けたる弓。何しに捨ては致さねども。町屋に道具散らばはねばもとより學ぶ人もなく。地宮地を心懸くれども。流行るは稽古淨瑠璃で。半弓も見あたらず。たま〳〵事に瓜時分東寺駒野へ行く足を。祇園の方へ駈廻り稽古を見ればぞく〳〵と。遠慮も忘れ肌押脱ぎ。よつぴきひやうどやる風情。詞座中擧つて舌ぶるひ。尫弱な男ぢやが。地さつても怖い弓力と。手を置かれて歸りしも偏に師匠の御蔭ぞと。あだ粗略には存ぜねども靑物賣りの風情ゆゑ。殘念ながら何時となう。消えて仕舞はん是非なさとフシへり下つてぞ語りける。詞ム、さこそ〳〵推量した。五年十年射ぬとても心を捨てねば下らぬもの。地辛ひ垜も構へてあり久しぶりぢやに只一手。其上是なる杢之進前かど互角の藝なりしが。詞荒むと勵む違ひにて及びはせまいさりながら。地互に挑みし所縁ありいざ立合つて勝負あれフシはや〳〵見んとぞ勸めける。地色半兵衞押退り左様の論は武家の沙汰。我々しきが何ともはや。御免御免と辭退する十藏は聲をかけ。詞未練に見ゆる半兵衞。差當てゝお師匠の仰せを背くは無禮なり。手練達者の沼津殿町人の身が射負けしとて。少しも恥にならぬ事。地罷り出でよと弓と矢を取添へて與ふれば。答に及ばず立上り。詞杢之進殿さりとては。久しうぶりのお相手と。地云へどもをさめし不承顔。かぶりを振れば半兵衞相手の不足は兎も角も。不興に見ゆる御出でと詞をかくれど返事もなく。苦り切つたる其風情定七見かねつつと立ち。詞時によつては氣不精に進まぬ事も得てあるもの。地某相手と云はせも果てず杢之進聲を上げ。詞ア、是々入らぬもの。師匠の御意を承る我等さへ動かぬに。外の媒介心得ず控へられよと詞の下。然らば拙者參らんと源内やがて立つ所を。鐺を取つて引留め。ハレヤレ世話をやく衆かな。相手になればいづれもの名が廢るが合點か。地且はお爲を存ずるゆび（ゑトアルベシ）是非〳〵お控へなされよと。物ありげなる有樣にフシ座はしらけ。てぞ見えにける。地色半兵衞もな

まじひに無念に及べどさらぬ顔。杢之進殿手が惡い貴殿の藝を仕上げしとてさのみ高うは吹かぬもの。地今は格別其以前互に勝負を較べし時。五社明神の後堂百本が一本も。徒矢なしに見せつけ叉。掛川の大會にも二日續けてゐもぎに勝ち。其外幾により折にふれ餘程手ごりの覺えがある。その意趣ならば猶以て。わつさりと立合はんッシいざ御出でといひければ。地杢之進えせ笑ひ。珍しい事いふ男。シテ先づそちが某と弓のこぶしに勝つたとな。ハテ先立つて知れた事シャ存外千萬な。其時相手に立つたるは慥か山脇半六とて。御家中の武家友達。大阪の八百屋づれ半兵衛とやらん素町人相手に取つた覺えがない。地いはれぬ弓を引かうより分相應に算盤の。利合を引くが近道と。さも憎體に言ひこなす。地半兵衛今は堪忍の胸に迫りし顔色を。卜齋早く見て取つて眞中につつと出で。詞よしない所望仕出して半兵衛手前某が何とも迷惑致せども武士の權威を立てらるゝをたつてとも申されず。と云うて是で果してはどうも一座が濟みにくい。中立てゝ了簡せん。弓の稽古は取置いてこれから柔術の勝負を見よ。地さあ〳〵急いで立合へとあせれば半兵衛力を得。いざお相手と差向ふ。杢之進尖り聲。詞武士町人の辨へなく再三のお望みは。お師匠にも曲なしと云はせも果てずヤア無法なり詞杢之進。もとより弓馬は武士の藝。取手柔術は町人も身の要害に嗜みて。すはや取るぞと立向ふに。武士は相手にならぬとて懷手してゐらるゝか。是非立合はさなるまいがの。地然らば有無に及ばぬ事。さあ〳〵勝負とせり立つれば。義に詰められて杢之進不承不承に身拵へ。厳つがましくいざ來いとかさにかゝつてつつと寄る。心得たりと身をかはし互にあてつけ跳ね合ひしが。半兵衛は手利の達者。ほぐれて蹴返す腰の骨。仰向にどうと倒れしはッシ心地よくこそ見えにける。地色塵打拂ひ杢之進はふ〳〵起きて大聲上げ。詞表裏者の賣人め。重荷に草鞋締めはいて。平生荒氣に働く故。地畢竟相撲同前の暴れ業は間にあはぬ。いで眞劍の切先に命の取手を見すべしと。既に刀に手をかくれば。詞ム、町人の刃にて侍首の柔術を見んと。地飛んでかゝるを定七源八杢之進に取りつけば。十藏は半兵衛を引止めて叱りつけ。詞お師匠の御差配にて一旦の無念を晴れ。喧嘩は互に五歩の持ち。事相濟んだ其上に縦へ先から募るとも。地最早見ぬ顔聞かぬ顔穩便にをさまる筈。此上ながら卜齋老杢之進殿心底に。憤りなき樣に偏に賴み存ずると。さも神妙に云ひければ。卜齋は打領きいかにも某受取つて。

重ねて盃させ申さんとかう云ふ間に日も暮るゝ。最早お暇申さんと皆打連れて立ちければ。杢之進振返り。詞たま〳〵腕が利いたとて。いきり立つは商人故。武道は格別劍術が。知りたくば此方へ習ひに來い其時は。さつぱりと首と胴との別れの指南。地ぎやつと云はせて見すべしと。肘押張つて睨みつけ。さも憎さげに立歸れば。十藏親子は送り出で。慇懃に一禮しフシ次の一間に立歸り。地色互に今の無念さを胸に持てども持たぬ顔。十藏は何となく。詞コレ半兵衛。夜の短いに八つ立ち。草臥も續いたくつろいでお寢やれ。ハア是は勿體ない。若い時の辛勞は買うてもせいと申します。地御老體の養ひが大事先づお休みなされませ。ホウ老いては子に從へとは得手勝手の諺。然らば行つて寢る程に。追付けまどろみ召されいとオクリ言ひ捨てゝ奥にぞフシ入りにける。

地色半兵衛は差俯向きとつおいつの胸の内溜息ほつとつき出し最前の惡言を無念と思ふ私より。詞百千層倍口惜しうお腹が立つてなりますまい。天晴山脇十藏と。誰に劣らぬ武士の身を。地半兵衛といふ町人を子に持ち給ふ故により。いかい恥辱を見せまして面目なうてなりませぬ。詞姿形こそ町人なれ。もと侍の悴ぢやもの。駈入つて死んでくりよ。イヤ〳〵それでは仁右衛門殿。よしない武士の子を貰ひ。憂目を見ると悔い恨み。地歎き給はんおいとしや。武士と町人二人の親。中に立つたる半兵衛は。いづれへ孝を立つべしとスエテ拳を。握り居たりしが。地短氣の虫のせき上げて。兎角堪忍なり難く。討果さんと覺悟を極めそつと立つて目を配り。奥を窺ひ床にある。硯引寄せ行燈の。火もかき立つる筆の跡死ぬる仔細は書かねども。是迄の御恩の書置一通り。

さら〳〵と認めて。卷き納めたる箱の蓋。詞新靱油懸町八百屋仁右衛門殿。生所遠州濱松。地山脇氏と書く所に奥よりけはしき足音。南無三寶と懐へ隱すとはいざ白無垢に。尻ひつからげ鉢卷しめ。手鎗かい込み十藏は。逸散に駈出づるを半兵衛やがて駈塞がり。互に顔を見合せ。フシハツト驚くばかりなり。地色半兵衛は取縋り。詞死出立にてあわたゞしく。逸興千萬何事と。地問はれて猶も氣を苛ち。詞ヤイ云はずとも知れた事。元來今日の口論も。もとを糺せば此十藏。娘が事を先立つて。きやつめが妻に貰はんと。ひたすら申越したれども。無骨者を知つたる故。再應使を受附けず。地山名郡の代官。豐田新之丞と内縁を取結び。家督を立つる欝憤にて。思ひも寄らぬ汝に迄。恥を與へし其段は許してくれよ半兵衛。詞エヽさぞ無念口惜しかろ。見てゐる親を推

量せい。卽座に討つは知つたれども。地汝に怪我のある時は養ひ親への言譯ない。それ故事を鎭めたり。半兵衛が一分を十藏立てゝやるべしと。又飛出るを押しとゞめ。詞おせきなされな待つてたべ。私が名を下さじと。命に換への親の慈悲。忝くは候へども心を靜め御思案あれ。出合の詞爭ひにも恥を研くは武家の事。地町人の半兵衛が恥といふは駈落か。身上仕失うたるか。是より外は叱られても。ぶたれても踏まれても。此境涯の今の身に。一分立は候はず。然るに何の御生害思しとゞまり給はれと フシ事をわけてぞ詫びにける。地色十藏は聞入れず。詞其方ばかりへ義理でない。大阪の養ひ親仁右衛門方へ聞えても。たま〳〵國へ立歸り恥辱を取るにきよろりと。實父が脇見してゐるはよく〳〵半兵衛惡事ぞと。地疑はせては猶立たぬ妥を放せと詞の下。詞ハアさりとては聞分けない。其仁右衛門も町人。國元へ行き手を廣げ。榮耀をしたと噂せば。悔み腹立ちあるべきが。喧嘩の場を穩便に濟ましたと聞かれたら。地いか程か喜ばれん少しも氣遣ひ遊ばされな。詞御身の武士引當てゝ世間の氣々も量られず。地輕々しき生害はお年に似合はぬ御短慮。殊に追付妹が家督定め候由。子孫のためと思召しとゞまり給へと樣々に。スヱテ心を籠めてぞ諫めける。地色十藏つく〴〵聞入つてやう〳〵と打頷き。詞ムウ思ひ廻せば一理あり。地然れば生害とゞまらんと持つたる鐺を下に置き。フシいう〳〵とこそ坐しにける。地色半兵衛は喜びて御聞入れ忝し。とても事に御誓言承らんと根を推せば。侍冥利大小かけ神以て僞りない。扨其方はいふ如く。町人の氣になりぬいて。武士の恥は用ひぬな。ハテ扨あまり御念が入る。毛頭虛言仕らぬ。ム、然らば慥かな誓言誓言。ハア何が扨町人冥利乞食になる法もあれ武士道は立てますまい。イヤ町人の誓言は利慾に迷へば不斷も立てる。汝に望む誓言は最前書いた狀箱。只一目見て安堵せん。地其誓言が望みぞとせり立てられて半兵衛。ハツトばかりにうろつくを。十藏飜て立寄りて懷中したる狀箱を。引つたくれば詮方なく差しうつ。フシむいてぞ居たりける。地色十藏涙をはら〳〵と流し。詞汝が短氣を知りし故。襖の間より差覗き。最前よりの有樣を一々殘らず見屆けし。地二人の親の恩ばかり思ひ出して大殿の。御恩の程は忘れしよな。詞十二の年より御前へ出で小姓數多ある中にも。勝れて御不便加へられ其餘慶にて十藏も。武士の御加增頂戴し。喜悦の眉を開きしに。長崎よりの客僧。賢藏主といふ相人。汝に刃の難ありと密かに殿へ

傳へし由。殊なう驚き思し召し。御前に人なき折節某を招き寄せ。しか〱の御咄天命とは云ひながら。陣中の討死か忠義の爲に相果てば高名ともなるべきが。短慮の生れ出頭の。當言咎め口論に討果さんは無慚なり。町人にして一命を繋げとあるの重き御意。地もとより迷ふ親心何が扨我子の爲。畏り奉るとお受け申してそこ爰と。尋ぬる内に縁あつて仁右衞門方へ契約し。お暇乞ひに汝をば召連れ出でし其時の。亡君の御喜び今見る樣に忝し。詞即ち只今差してゐる。藍鮫の脇差をお膝元より取出し。長く武道の絆を切り。町家に住めば一腰は。命の親とも主君とも。敬うても飽き足らず。刃は命を亡せども。助かるも又刃なり。地輕々しく用ひなと御手づから賜りしは。汝を守る寶劍なり。愛の深きは親なれども我子を君に差上ぐれば。忠義の爲に一命を惜しむなと敎ゆるに。町人にして其方が安穩なれとの御憐み。親十倍の主君の恩それを忘れて短慮にも。討果さんとは何事ぞ。天命知らずの不忠者とスヱテ口說き立てゝぞ。泣きにける。地色稍あつて淚を押へ。狀箱をしつかと封じ。我印判を取出しとぢめにひしと押認め。半兵衞が前に据ゑ。心を靜めてよつく聞け。詞其脇差は君の魂。此印判は身が魂。書置開くは死後のこと。それをとぢるは大切な命の門を固むる封印。地色堪忍の締口を開くまじとの誓文にも。起請文にも此文箱。肌身を離さず懷中し是神明のお祓とも。守りとも印文とも誓ひを立てゝ忠孝を。思はゞ身をば顧みて。死んでくれるな半兵衞と。心詞も瀧津瀨に袖は。筏と浮きにける。半兵衞前後淚にくれ物をも云はず居たりしが。押直り聲を上げ。詞ハア淺ましや勿體なや。主君の御恩親の慈悲養父へ孝の三つの海。地渡り較べて數ふればたとへ我身を百千に。碎きても飽き足らず生あればこそ骨に泌み。胸に通りし御意見を何しに餘所になし申さんふつゝと心を取直し武道は口にも出すまじ。過り入つて候とスヱテ手をつかへてぞ詫びにける。地色十藏につこと打笑みて出來したり滿足せり。いよ〱相違あるまいな。詞ハア何が扨飜へさぬ。ヲ、嬉しや落着いた。地是もおぬしが可愛さと。フシ又打解けし淚なり。地色はや丑三つの鐘の音に續くしやん〱馬の鈴。門外に聲高く。詞サア旦那殿八つが鳴る。あぶつけ跡付蒲團ばり。地早う〱と呼び立つれば。半兵衞ハツト立上り時刻に及ぶ御暇ヲ、ヲヲまめで。御堅固で。是程目出度い別れはない。さらりと笑うて〱と。顏見合するにつこりも後の。名殘りと三重へなりにける

第二

難波津や。賑ふ門も小夜更けて。鼾較ぶる鐘の聲。數は幾つぞ八軒屋。海士の漁とかゝげたる。宿の行燈しん〳〵と。濱風あをつ上り場に。遠近人の下り舟。押並んでぞ擧り寄る。船頭眠りを呼覺まし。サア〳〵着いたぞ上らしやれ。諸事改めてといふ置忘れのない樣に。泊り宿の亭主。三笠屋與次兵衞出で來り。待つた〳〵船頭衆。改める事がある。宵の内から我方に上の衆ちやが二三人。駈落者のお尋ね。嶋原の色ちやげな。殘らず船を吟味して頼む〳〵と犇けば。船頭ども聲々に。類船の内やうやうと女中は二人ばつかり。一人は内儀樣一人は若いぼつとり樣。それ〳〵そこへあがらるゝ。勝手次第に穿鑿とざわめく内にしと〳〵と。苫もる露も情知る。ゆかりに麗くなぎ袖や。小褄に色を抱帶はでな姿の女房に。婆の連立つ共風情。荒れし軒端に三日月の。光こぼるゝ如くなり。與次兵衞立寄り提灯の。影に見るより打頷き。マア大方これくさい者。ぬく〳〵と駈落ちやの。追手の衆が此方にちやいざござれいとせる所へ。次の舟より半兵衞は遠州よりの歸り足。何心なくあがり場に男女のわめく聲。立寄りて小提灯ヤア女房か。半兵衞殿。これ伯母樣扨々と。互に餘儀なく見えければ。與次兵衞は猶うさんげに。扣へて樣子を窺ひける。半兵衞はしとやかにどなたかは存ぜねども。誰も心のせく時は人達はあるもの。まさしく是は身が女房外をお尋ねなされいと。云へども與次兵衞喰はぬ顏。扨は左樣かいか樣にも。町方のお内儀にはばつとかうとな御風俗。御亭樣なら一連かと。思へばさうでもありそむないはれやれ御麁相申したと。詞をへ殘し歸りける。半兵衞打笑ひ麁相者と惡銀は。いかさま世間に多いもの。して先づお千代伯母樣と。何故の上のぼり。お袋樣は御無事なかどうぢや樣子が聞きたいと。詞の内よりせき立つてお千代は縋て取付くを。伯母は駈寄り引放し。エ、未練な。なんにも云やる事はない。こつちへおぢやと手を取るを。半兵衞とゞめて興醒め顏。伯母御はいかう不機嫌なが。女房に恨みが身にあたりか。何とも合點の行かぬ事お千代どうぢやと尋ぬれば。伯母はいよいよ氣を悶え。扨しら〴〵しい空とぼけ。それに嵌つてお千代はの。とぼけ倒れになりました。はあこれも云ふまいさあ來いと。急ぎ立つれば半兵衞は。なほも向ふに立隔て、それは餘りに頑固な疑ひまがひもある習ひ。善惡共にい

つまでも様子を聞かんと訝ちける。地おちよ千代涙の下よりも。問はぬもつらし問ふも亦。武藏鐙のかけてだに。知ろし召されぬ事ならば。聞いて憐をフシかけてたべ。地色お留守の内に思はずも。姑去の力なく。しよう事なさにすご〳〵と里へ戻りて母様の。朝な夕なの煙さへ立兼ね給ふ其中に。詞四五日かゝつてゐる内に。此伯母様が京參り。立寄り給ふを幸ひに行くへ定めぬ下り舟。地淀まぬ水の緣にて。相見る顔は變らねど。變るは今の我身の上。男の心は川の瀬に譬へてあれど自らは。飽かれた仲とは思はねど。母樣や此伯母様は。お前も一つ辛さぞと恨みて今のすね詞。言譯をして給はれと口說き。フシ歎くぞ道理なる。地色半兵衛ハツト怪顔して。騒ぐ心を押鎭め歎くは道理さりながら。不慮に爰にて出逢ふが夫婦の縁の切れぬ故。思案しがくもあるべきぞ氣遣ひすなと言ひ宥め。詞これ伯母御。お腹立ちは聞えたが身どもへあたりは不了簡。當月初めつかたよりも參宮致し直ぐさまに國元へ罷り越し逗留は只三日。其外は皆旅の空狀通致さん様もなし。地留守の間の言事を半兵衛も一所とは。



廻り過ぎたるお疑ひ。機嫌直して此上の相談あれと詫びければ。詞ナウあてどのない事恨めうか。こなたと豫て相談の慥かなしるし是見やしやれ。姑御の直筆。お千代をば去狀。夫婦の仲の退き去りは誠の親でも我儘に。さつぱりとはならぬもの。地腹貸さぬお袋が心一つで書かれうか。是でも物が云はるゝかと。半兵衛に投付くれば。不審ながら取上げてつくつく見れば暇の狀。是はとばかり差俯向き二度。フシ呆れて見えにける。地色伯母は恨みの詞さへ胸に餘りて目に涙。聞えぬぞや半兵衛殿。こなたは元が由ある身仁右衛門殿も歷々。千代が一家は吹けば散る。こちと風情は疎まれてももとより緣はきたないもの。女房さへかはゆくばそこに隔てはあらぬ筈。姑御のさがなうて取りにくい御機嫌に。辛抱するは何故ぞ男の顏を樂しみに。暮す女房に口出して最屓こそなるまいけれ。陰日向になる程の氣骨は折つてやられても。さのみ人は叱るまい。云ふではないが可愛そに



物も見事縫ひまする。書出し一つする程の目は親達があけて置く。紡績なら人あひなら。器量はこなたの覺えてなり。ち

つとの落目は華美なれど若い時が二度はないさのみ無理にもあらぬ筈。花の盛りを狼狽へて京の親元三界へ。行てもゐられぬ貧しさを睨み合うても濟まぬ故。身の片付きを奉公と思ひ定めて連れて來た。さぞ本望でござらうと。たくりかけ〳〵フシ口説き。喞つぞ道理なる。地色半兵衛始終を聞入つて成程〳〵一通り。かう見た所は私に恨みはことわりさりながら。神以て存ぜぬ段。地いか樣の義も致さんと。立寄る拍子に懐中より。狀箱の落ちけるを伯母は取上げつく〴〵見て。詞宛名は八百屋仁右衛門樣山脇氏半兵衛とはこなたの事ではござらぬか。狀通は致さぬとぬけ〳〵とよう云はしやるなう。地定めしお千代が事であろどのよな慘い談合ぞ。封切つて見ましよわい。詞いや〳〵さうした物でない。此方へ遣はされい。ハテ紛れない隱すまい。地讀んでなりとも腹愈んと既に封印切りかゝれば。半兵衛周章てもぎ放し箱を開くれば忽ちに。疑ひは晴るれども親の意見の命の封。切るに切られぬ恩愛の深きに代へてさがなくも。養ひ母の胴慾さ思ひ廻せどさすが又。隔てし中と義を立てゝ口には出さぬ品々の。恨みはせめて目にもるゝフシ涙に晴らすばかりなり。地色お千代はくわつとせき上げて。詞欺しやつたの拔きやつたの。地其心とは知らずして母樣や伯母樣の。恨み誹りを言ひ宥め半兵衛殿はいとしげに。さもしい心はござらぬと發言放つて今更に。面目ない恥かしい恨めしの男やと。肩に喰ひ付き膝に寄り身を悶ゆれば袂より一通の文落散つたり。半兵衛ちやくと取上ぐれば其手に取付き噛付いて。大事の物ぢや戻してたべ見せては惡いと周章てしを。取つて突退け睨みつけ。詞去られた樣子が知れかゝる。勿體なくも母人を邪險な心と恨みしが。却つて慈悲であつたよな。暇を取りは取つたれども不慮に遇うての間に合ひ口。間男の出合ひ宿。伯母御のいかつい返禮に。痴話文讀んで聞かさんと。封押切つて繰開けば。コハいかに最期の一通。地ハツト思へど心を鎭めて讀上ぐる。形見ながらに書置の事。一つ我身拙うして半兵衛殿と夫婦になり申す上は。お二人樣をば誠の親より大切に思ひまゐらせ。されども足らはぬ心からお氣に入らぬのみならんに。今迄の御憐み。天山忝く思ひまゐらせ。一つ夫婦となり申してより。つひに一度の詞も荒らし申さぬ中に。思ひも寄らぬ別れを致し候事よく〳〵の緣の切目と悲しさ此事に候。一つ高麗橋の伯母樣へ。歸り候事も恥かしく石町の伯母樣。京の母樣いづれも貧しき暮らしに候へば。身を寄せ候事も痛はしく候。かれこれ思ひに

せまり命の際になり申し候。殘り多きは盡きせぬ仲。取合けかはゆきは宿りし我子。共に消失せ候事わく方もなきこの身の因果。夢の世の中とは申しながら。又改めて夢のやうに。かへす〲もはかなく思ひまゐらせ候かしく。地色ハツトばかりに讀み終り。三人共に差俯向き スヱテ 聲も立てずに泣き沈む。お千代やう〲顔を上げ。とやかう思ひ直しても。夫に離れ長らへてあられぬ命と覺悟して。此世の名殘り母樣にお目にかゝつて其後は。身を淵川に沈めんと思ひ詰めしに伯母樣に。逢うての後は折もなく。今迄長らへさぶらふぞや此世の緣は薄くとも。未來で長く添ふべしと。樂しみにした我身をば。慘いとばかり半兵衛を。じつと見やりし目の内に。恨みと戀の二瀨川 フシ 滿ちくる汐ぞ涙なる。地色伯母は思はず聲を上げ。ア、しほらしの心やな。世には去られた

夫への。面當のまた意地のとて。つい嫁くもあるに扨。命を捨てゝ先の世を賴むと迄はいにしへの。嫁鑑にも勝るべし。さりながらとつくりと合點をして見てたも。そなた一人を親伯母が。賴み切つたる杖柱男へばかり道立てゝ。二人に孝はないものか嫁入さうとも云ふまいし。奉公さしよとも申すまいいかなる貧苦を凌いでも。まめな顔見りや嬉しいぞや。必ず死んでたもるなと フシ 歎き。侘ぶるぞせつなけれ。詞半兵衛淚押拭ひ。思ひ詰めたる志滿足せり過分なり。何を隱さん某も國元で口論し。打果さんと思ひ詰めはや書置まで認めしを。親十藏の御意見にて命を繫ぐ封印を此状箱に捺されし故。深き疑ひ受けながら開く事なりがたし。半兵衛が書置は父が見付けて命を延ぶ。今又そなたの書置を半兵衛が見て助くるも。地行末目出度い吉左右なり。町衆又

は同行中たゝき廻して近日に。再び内へ呼戾さん伯母御お千代を暫しの内。こなたへお預け申したい。詞ム、口では見事さばけれど。いつまで草のつり詞。地色合點がゆかぬとかぶり振る。半兵衛は思案して。詞然らば今より日を切つて五日が内にさつぱりと。地お千代を內へ呼入れん。それ迄のお情を了簡あれと手を摩れば。伯母もやう〲聞入れてさうさへなれば互のため。もしも五日が過ぎたらばこなたの内へ持込むぞや。詞それ迄何しにせつぱして。手廣う迎ひにやりまする。違ひはないの。地誓文と。互に堅めゐる折ふし。駕やりませう駕やろい。フシ やりましよいとぞ云ひかける。地色幸ひ東お白んだり人目を忍ぶ夫婦づれ。千代をば乘せて駕のとに。付けしねうちも坂東聲。フシ 實盛なりと人や見ん。地かゝる所へ與次兵衛が。噂に寄りし亡八の者はた〲

と駈來り。詞此駕なは紛れ者ソレ引出せと罵れば。半兵衛駈隔て。近頃無體千萬。此内は身が女房。荒氣を出さずと通られと地ことわり云へば聞き入れず。お内儀様拜みたい〳〵フシとばれかゝれば。詞ヲヲ女房の開帳なら。先づ三百目持つて來い。ヤア僞るまいぬかすまい。それ見よと駈寄るを。地ならぬと支へて入り亂れあなたへ押合ひ。こなたへくづれ。暫し捻ち合ふ其隙に。一人はづして駕をあけ。提灯かゝげびつくりと。詞こりや違うたと飛退けば。地皆一同に首尾惡く揉手をして腰かゞめ。詞ハハ〳〵〳〵。結構なお内儀様。是をついでにお近付き。笠の地御用に立ちましよとフシ云ひ捨てゝこそ逃げにけれ。地色半兵衛怒り押鎭め。本意なけれども親よりの意見の狀箱押戴き。堪忍するが町人風。女房は又當世の風世間の人が誹らうが。母者人がくすべうが。此ぱつとした佛を。我等が宿のお千代ぢやと打連れ。てこそ三重歸りける

第　三

フシ世の中はしんき〳〵の新うつぼ。地水火風を借住居。光陰早き八百屋見世内證ともに吉野葛。練れた親父は結構者ふきの姑にが口に。嫁菜の袖をひたし物千代とはあだの女松茸。二世の縁さへ瀬にかはる。淺草海苔と身は焦れ。何としやうがも松露にも。心ばかりをつく〳〵し。筆には盡きぬ憂きふしや。宵庚申を精進のだしに使うて半兵衛は。晝より出でし留守まもり仁右衛門甥に嘉兵衛とて。地戀の物馴れ譯知りが首尾をくろめる墨硯。手代利介が算盤も。フシ氣のとく〳〵と彈くなり。地色後世のもとでの念佛講閣路を照らす小提灯。仁右衛門夫婦奥より出で。詞ホヽウ嘉兵衛。奇特に精が出る。若い間は銀ずき。年寄つての談義ずき。是人間の一大事同行結の掛錢も。ない袖振つてはつきあはれぬ今宵の當屋はいつとても。法度を背いて夜食が出る。酒もしゆんだら夜が更けう。半兵衛が追付け戻る迄見世をばあけな寢まいぞと。老の繰言こまやかに。詞のあとも針を持つ姑はつこど聲。詞半兵衛は今夜戻りやせぬ。表も裏も締めて寢や。地夫婦が聲で叩かずば必ず戸をばあけまいぞ。合點がいたかと云ひければ。詞コレかゝ。さがなう物をおいやるな。養子に來てから今日迄。夜泊りをせぬ半兵衛が。庚申參りすればとて戻るまいとはなぜおしやる。サア半兵衛の參りやつた庚申様は石町。伯母の所へ先度から嫁の千代めが來てゐるげな。顏突合せ夜もすがら庚申待をしをらうと。地女の性は嫁や子の中も法界悋氣口。内外の者の聞く前も迷惑さう

に仁右衛門は。はて扨それもまゝにしや。見ざる聞かざる云はざるが。庚申様の御誓願。知らぬが佛南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と繰る數珠の。呟きながら打連れて表へ〳〵こそは出でにけれ。接木の。枝は。雨露の。惠みも薄き桃櫻。半兵衛夫婦が身の上に今こそ。思ひ知られたれ。五日と限る約束の今日さへ暮れて初夜の鐘。覺悟は胸に極まれど同行中の扱ひを。もしやとばかり頼みにて。知死期待つ間の二人連親の目盗む夜歩きは。我宿ながら忍ばしくそつと潛に耳寄せて。内の樣子を窺へば。嘉兵衛は筆を持ちながらつく〴〵物を思ひ顏。ナント利介。お婆が先の氣相でも。寺同行の御意見で。邪險の角が折れうかい。イエ〳〵存じも寄らぬこと。生れ付いたる態手性。今度の起りも根が慾から。按摩取の印可めが。跡先なしの饒舌口さる浪人の娘とやら。年は十八敷銀は大金で七十兩氏系圖より確かなる商人へやりたいと。頼まれますと聞くとはやわゝしいわろが小鹽になり。どうやらそれは耳よりな。かね〴〵お主も知る通り役に立たずの嫁御寮。さらりと去つて其跡へどうぞ世話して貰うてたも。媚をして來い一杯と天目酒に呑込んで。先へ言込むこちらへも。返事聞かせてひつそ〳〵。領き合ひの最中と。聞くさへ胸もひいやりとお千代はそこを立退けど。半兵衛はまだまい〳〵と。還入りたさうに覗きゐる。袖口取つて引戻し扱衆の返事迄。待つこともない我々が。最期の衣裳も守り迄。小宿へ出してある上にうろ〳〵そこに居給ふは。今の咄にお心が殘りや。すると恨むれば。ア、よしない事をいふ人かな。おれは心が殘らねど。去られたそちを此内へ。呼戻したる心にて中戸口から手を引かば。それぞ誠の夫婦づれ恨み悔みも晴れぬべし。思案こそあれ暫らくと立忍ばせて半兵衛は。潛押しあけずつと入り。兩人共に待つたであろ。日暮れぬ先に戻らうと思ひの外に當月は。いつにかはつて大參り仔細を聞けば去ぬる夜。音樂響き花降りて雲中に御聲を上げ。庚申の御神體青面金剛童子とは。文字も青き面と書き青きを好み給ふ故。青物賣りを守らんとあらたに御告げありしよし。言傳へ聞傳へ市の側から打ちあけて。參る程にける程に御門前から押合うて。鰐口の緒へ取付く迄ゆつくりと三時半。かゝる尊き物語聞いて内にはゐられまい。嘉兵衛も利介も參つて來い。參れ〳〵とそやされて。常も利介はとび介で。帶もそこ〳〵駈出づれど。嘉兵衛はじろりくわんとした。顏付さへも氣味惡く。やゝ暫したためらうて。親父

や母は同行衆兎や角とある挨拶に。夜明けでなくば歸られまい。隱れて嘉兵衛も參つておぢや。いやまあ止に致しましよ。相場の惡い折節ひよつと知れたらあの婆が。地並大抵ぢやあるまいと。取つてもつかぬ挨拶に重ねて返す詞なく。成程それはよい嗜み其心から此頃は。商賣に精がいる旦那衆から青物の。御用はいうて來なんだか。詞誠に忘れて居りまする。平野屋殿から明日は振舞をする半兵衛に。ちよつと參れとお使が二三度も立ちました。ム、さうであろ〳〵。行かずばなるまいさりながら。殊の外なる草臥やう名代に往て聞いておぢや。イエ〳〵先より念入れて。獻立も相談する。直きにとあるの御使。地御太儀ながらと動かねば。半兵衛はわざと腹立て聲。詞仔細をこねる男がある。獻立一つ書く程の器量を持たぬ其方なら。明日が日にても半兵衛が死んだら八百屋仕舞ふかと。地きめ付けられて是非もなくフシ不審顏して出て行く。地色影見送りて表へ出で千代が手取つて引入るゝ。跡は鎖しに詮方もスヱテ涙先立つばかりなり。千代は覺えず聲を上げ移れば變る世の中や。二人添寢の諸白髮千年と賴む我家を。今日は冥途の旅やどり手馴れし襖押入も。名殘惜しげにあそこ爰。見世の先なる小板敷撫でつ擦つつ戴いて。仁右衛門樣の折節に爰に坐つておはせしと。フシ思ひ出すも懷かしや。地不調法なる自らが惡い所を陰になり。日向になつて明暮に。姑御へのお取成し。數限りなき御恩をば死してもいかで忘るべき。去らるゝ朝も膾して手づから御膳据ゑたれば。物をもいはずほろりつと。泣いてお箸を取られたる。其面ざしが見納めとなり行く身こそ悲しやとフシむせかへ。るこそ。道理なれ。地色ともに泣音の半兵衛。詞尤なり。フシさりながら。地そなたの事は數ならず國を離れて十五年。誠の親より大切に介抱ありし甲斐もなく。長地先立つ我は不孝とも物知らずとも思されん御心底こそ恥かしとしやくり。上げてぞ居たりける。フシ餘所にも嘸な。袖の雨。風呂敷包み手に提げて。嘉兵衛すた〳〵立歸り。しやくれど開かぬ表口わるゝばかりに打叩く。地色二人ははつと立上りよろつく内に外よりは。あけよ〳〵と喚く聲。ヲ、〳〵〳〵とばかりにて。あなたこなたと這ひ廻り。やうやうと身を押込に。千代を忍ばせ半兵衛は。戸をあくれども打開けぬ。胸塞がりてきよろ〳〵と。フシ物をも言はず立ちまへば。地色嘉兵衛も共に隅々を覗き廻りて押込を。あけんとするを立隔たり。詞嘉兵衛慮外な何故あくる。ハテ珍らしい御咎め。此押込は道具入れ。用があつてあ

けまするイヤ〳〵用があるにもせよ。宿へ戻つて直ぐ樣に。其上包んで手に提げしは。いづかたで取つて來た。ム、風呂敷包みの疑ひなら。是御覧あれ赤毛氈。ハテ似合はぬ物を持つてゐる、イヤ樣子は追つて申すべし。夫婦の衆の留守の内。地櫃のとろくへ納めんと。明けにかゝれば手を取つて。詞近頃小氣な男かな。見付けられたら半兵衞が遠州土産と言うておけ。地先づ下に居よ商賣の返事が聞きたい獻立は。フシどうぢや〳〵と紛らかす。地色詞のはづれ顔の色心は附けど附かぬ振。押鎭まりて畏り。詞明日のお振舞お客の方から獻立が。謎に致して參りしをあらましばかり覺え書き。地聞し召せとぞ讀上げける。先づ本汁に大寺やほとりに遊ぶ童は。フシちしや白魚と知られたり。有情非情の乘合に棹なき舟の行方とは貝燒などの事ならん。木の葉折り敷く

其上に。からくれなゐの心中とは。哀れとぞ見る子持鮒。添ふに添はれぬ中々にいつそ刃に刺身とは。包めど我が吸物に幾度肝を冷し物。思ひ直してたび給へ。折が變れば氣も變り。又面白い獻立の出來まいものにも候はず。定めなき世は人の常何をか恨み葛餅が。後段の筈に候と。心に餘る意見狀押當てゝ。こそ讀みにける。地色半兵衞はさあらぬ顔。詞扨面白き獻立や。併し魚類の振舞をなぜ肴屋は請取らぬ。さればそれにも咄あり。お出入致す肴賣りに。堀江彌兵衞と申せしは。地器量はさのみよからねど戀路の手だれ上手者。惚れたお山が三百人。忍んで逢ふが四五十人。中に取つても若松屋なをと互に腐り合ひ。女房に持つぞ持たれんと。契りをかはす間々に市とやらいふ生娘と。ちえ〳〵くり事が嵩じて來て。はや五月の腹に帶。隱されもせず親も知り。

つい呼入れて嫁びろめ祝儀の樽を贈るやら。三國一を謡ふやらそこらあたりがざざめけばなをが燃え立つ胸の火に妓女傍輩が焚付けて。彌兵衞が往てゐる先々へ附いて廻つて恨み泣き。喰付き噛付きしがみ付き。去るか死ぬるか死ぬるか去るか。二つ一つとせたげられ孕んだ女房は去なされず。なをはいよ〳〵堪忍せず。是非に及ばず心中し難波の野邊の草の露。名は繪草紙にとゞまりぬ色と義理とに迫つては。日頃の智慧も出でぬもの。そこが膝とも談合でこちとが樣な者にても。明かして言はゞどうぞ又死なさぬ首尾もあるべきに。聞えぬ堀江の彌兵衞やと。フシむしりかけたる口占に。地色半兵衞ぎよつと行詰り物をも言はず押込の。内にお千代はわくせきと身を悶えたる胴震ひ。襖に響き敷居までぴりゝ〳〵と鳴り渡れば。女はうちらで鼠泣き。男は外か

ら猫の眞似。フシ憂きが中にもをかしけれ。地色嘉兵衛そろりと立上り。美濃吊しなど引かれては。元が息になる穿鑿とつか〳〵と立寄るを。半兵衛周章て突倒し。詞嘉兵衛お主も相應の惡所遊びもする男。ひよつと出合ひの初戀を見現はしては興がない。地そこらは粹め氣を通せフシ通せ〳〵と詫びにける。地色嘉兵衛疊打叩き。詞あんまりそれは曲がない。なぜ有樣におつしやれぬ。私ことは二三度も追出されたる身なれども。伯父仁右衛門に色々と詫言立てゝ給はりし。お前の情で立つてゐる。嘉兵衛に何の遠慮があるいか程隱し給うても。地聞かねど知れた御心底同行衆の扱ひが。叶へば重疊さもなくば刺違へんとの言合せ。見付けた所は違ふまい切なうも悲しうも。思し召さるゝ筈なれども死なんと迄は短慮の沙汰。世に心中も多けれど銀に詰まるか逢ふ事の。ならぬ切迫の時にこそ。八百屋といへば輕けれど勝手乏しい事はなし。上町邊に借屋を借り行通うても逢ひ給へ。たとへ五貫目三貫目帳面合はぬ事あらば。嘉兵衛一人が引負うてお二人の名は出すまい。命の代りに立てたいと。思ひ込んだる私が詰らぬ。意見は仕らぬ。思案を變へて下さりませ。縋り付いても取付いても。中々死なせはしませぬと。誠を立つる男泣きフシやさしく。も亦わりなけれ。地色半兵衛も稍涙ぐみ。慈悲なる親の血筋とて。頼もしい氣を持つものかな。其心とも汲み知らで隱せし所が面目ない。お千代〳〵と呼びかくれば。おもはゆげにも立出づる目は泣腫れて顏痩せて。見交すばかり打守り。ナウおいとしやとスヱテいふより外は。なかりけり。地色半兵衛心に思ふ樣死ぬると言はゞ此者が。附纒うて離れまじ。賺して此場を遁れんと世に嬉しげに打笑みて。詞げに負うた子に教へられ。淺瀬を渡るといふ如く其方が意見にて。兎や角思ひくづ折れしも洗うた樣に打晴れた。地借屋の事も内證も万端お主を頼み入る。當分は先づ親里へ戻して置くがよい道理。女房嘉兵衛に禮言やと僞り知らす目くばせに。お千代もやがて合點してお志の數々は。どうも詞に盡くされず。夫婦が命の親樣と手を合はすればこちらにも。若輩者の言ふ事を得心あつて嬉しやと誠と嘘の笑ひ聲フシ夢に夢見る如くなり。地色仕濟ましたりと半兵衛はお千代と共に立上り。伯母の方まで宵の内送り屆けて明朝は。駕で故郷へ送るべし。親父や母の歸られたらまだ庚申から戻らぬと。どき〳〵と首尾を合はせてと言捨て行くを引きとゞめ。件の毛氈差出し。詞お駕の内の敷物に進上致すと申す儀は。慮外がましく候

へども嘉兵衛がための寶物。追出されたる其砌友達どもが指差して。疊の上では死ぬまいと蔭言いふが無念さに。心直して去んで見しよ。地それとも願ひ叶はずし辻垣下で死ぬるとも。毛氈敷いてゐるならば疊の上も同然と。意地を立てたが身の幸ひ。再び此家へ立戻る嘉兵衛にあやかり給へとの。フシ御祝儀なりと言ひければ。地色お千代はちつと笑顔して何より嬉しいお心づけ。此毛氈で夫婦づれ夜の花見に參らんと。詞のはづれ氣も付かぬフシさすが若氣の不覺なり。地色然る折ふし仁右衛門夫婦同行衆と高咄はや門近く立歸れば嘉兵衛騷がずお千代をば。小櫃の先に屈ませて半兵衛共に椎茸の。フシ苔を選つて居たりけり。仁右衛門戸口に立休らひ。太郎兵衛殿五右衛門殿七兵衛殿には取分けて。遠方といひ夜も更ける。平にお歸り遊ばされい。ハレヤレいはれぬ御遠慮。お膝を抱きに三人が申し合はせて參るから。七兵衛一人は歸られぬ。地夜食は食べる引つかける煙草一服御亭主のお氣扱ひにはなるまいと。明くる潜戸我一とオクリせり合ひへ内に入りにけり。地色五右衛門先へ進み出で。詞早速ながら申しましよ。御夫婦共によう聞かしやれ。是の嫁御が去られても手前に損も仕らず。呼戻されても此方に別に利得もなけれども。よく〳〵懇意に思ふ故宵から今迄三人が。取付け引付け頤の。かいだるい程詫びれども。あへんども打たれぬは悔つての儀か但し又。大切な事餘所外で言づてわざな仕方ぢやと。ふくればしあつてかと是まで附いては來たれども。言ふべき程は最前に底を叩いて仕舞うた故。地急に才覺なりませぬフシ兩人出やれと押し退さる。地色太郎兵衛髭籠に腰をかけ。夫婦合ひには別儀なし不義放埓だにあらざれば。何を仕落何を非難に去なすべき。姑去りに極まつたりたとへ五日が十日でも。お千代の顔を見ぬ内は。太郎兵衛が朝夕を。此内で養はれんフシかたがた。いかにと詫びにける。地姑はつゝと出で。詞ア、太郎兵衛様よい推量。仁右衛門殿は佛様。女夫の仲はちん〳〵。去なしたは此母。お前の様なよい衆の嫁御にしては似合はうが。此方づれの内にて飯をも炊かにやならぬ身で。肌には小袖鼻紙は。延べでなければ手に觸れず。地わしらはお寺の奉加さへ百目の銀は太儀なに。五兩とやらの櫛を挿し鳥甲程髱出して。太夫の道中する様に狹い所を八文字。そこらあたりの青物は。踏み潰されて芥になる。其費でも積つたら此身代はひづみましよ。是が八百屋のお内儀にフシ成り遂げうかとえせ笑ふ。地七兵衛にじり寄り。詞こなたの様に言ひ立つれば。詫言

の手はあがれども。どこを聞いても其様によい事ばかりは揃はぬもの。身どもが嫁は随分と。世帯はようする歩くにも。八文字は踏まねども一文字を得引かいで。是も又氣の毒。仁右衛門殿そなたもちつと物言はしやれ。地嗅がこはさに黙つてか。結構者ぢやと囃されて。あんまり自慢遊ばすな。詞結構とは冥加の事。とうなんとは野老なり。せいなんとは芹の事。半兵衛連添ふお千代なら。小殿原ではござらぬか。もし闇の夜のつれをのこ心中などを召されたら。地取返しはならぬぞやちと相談もして見給へ。詞いかにもおしやれば其通り。若い奴等の事なれば短氣を出すまいものでもなし。腹に物言ひありとも聞く。孫を愛して遊ぶなら嫁の憎さも忘られん。ナウ嗅。地何と思やるとやはらを入れてうら問へば。いか様こなたは如来様。詞二三十年身の油絞り溜めたる金銀が。地忽ち水になる事を見ながら孫がかはゆくば。はてどうなりとなされませ。詞したがわしには暇下され。短い浮世に氣に入らぬ顔見て修羅を燃そより。地頭こそげて未来をば。助かる様に致さうとフシ緩む氣色はなかりけり。地色仁右衛門今は詮方なく半兵衛嘉兵衛爰へ来い。詞様子は今聞く通りの事。いかにお千代に添ひ度うても母を坊主にやしられまい。叶はぬ事と思ひ切れ。扨又嘉兵衛もよつく聞け。今では心持直し身を持ちさうに見ゆる故。幸ひ舅御の事なれば家督にせんと思ひ付き。嫁を追出し半兵衛も出て行く様にしかけると。世間の人に謠はれては仁右衛門が名が汚れる。地一夜も足はとめさゝれぬ今出て行けといひ渡す。嘉兵衛驚く氣色もなく。お前の詞を請けずとも此方から出て行こと。思案極めてをる故に恨みには思はぬが。胴慾なは姑御。詞嫁一人が憎いとて大勢に憂身を見せ。嘉兵衛は爰を出て行くと明日から路頭に立ちますぞや。地お寺参りの行戻り菰をかぶつて付け廻らば。餘りみめでもあるまいが。それでも嫁が去りたいか堪忍がならぬかと恨みても喞ちても。心つれなく返事せず見向きもせねば詮方なく。ずつと立つて行く所を半兵衛は引きとゞめ。詞ヤレ狼狽者どこへ行く。お暇が出たで去にまする。先づ待て。地イ、ヤ暫しとて押合ひへし合ひ引据ゑて。詞コレ親父様。早まり過ぎた御了簡。母の言分一々に尤至極と思ふ故。千代めは身どもが去りました。誰に恨みもないからは家出を致さう様がない。それに此者追出せば結句にお名が出づる事。同行衆にも今迄の千代が扱ひ捨て置いて。地親父様へ嘉兵衛をば。詫言頼み存ずると。聞くより三人頷き合ひ。詞

婆はこちとが手に合はぬ。仁右衛門殿は結構者。地嘉兵衛事を詫びまする。詞ハテどうなりと御意次第。地あんまり早うて本意ないとオクリ笑うてへこそは歸りけれ。地色母は兎角の詞なく奥へはいれば仁右衛門も。入らんとせしが立戻り。詞半兵衛一つ飲んで寢や。地酒は憂ひを掃ふとは。醫書にも書いてあるげなと。フシしをしをとして入りにけり。親の惠みは深けれど。御縁は今が限りぞと。お千代もそつと這出でて。スヱテ共に見送る後影。嘉兵衛は何の氣も付かず締めあけにする潛の戸。早う／＼と招けども猶も名殘はをし鳥の。なかじとすれどせき兼ねて。わつと叫べば洩らさじと。打ちかぶせたる。毛氈の闇より。闇に三重へ出でて行く

道行星の數

歌我が戀路は糸なき三味よ。／＼。なんのねもせで泣きあかす。合見れば思ひの雲の帶／＼。合扱も。短夜。心のせくにござんせ。合いやと。おしやろとこちやもう。さうさんせ。二人が仲に。名取川。おゝそれ。二人と二人と名取川。ナホスフシ濡れて涙の血に染むる。フシ田簑の島と。詠み置きし。難波のことも是ならん。よしあしのや變る世の。それも思へば夢うつゝ。フシ靱を出でて二人連。色の外なる色毛氈ひじき物よと肩にかけ。フシオクリつらきへ名殘も。今宵ぎりフシ生れかはりて。先の世は。とても殿御の古里の。オクリ濱松へ風に誘はれて。本フシ離れぬ仲の睦言を。仇になさじと思ひ詰め。夜の玉鉾道急ぐ。長地知死期くる／＼數珠のかず煩惱菩提と聞く時はあの世ばかりの樂しみに。行かんとすれば卯月闇。涙にくれて道見えず思ひ。廻せばへはかなしや交せし。ことの淺からぬ。隔ての雲の重なりて。二世と契りし仲を裂く。月に水まさ花に風。津村の土手をあだし野の。スヱテ其佛と草深き。アミドブシ螢かすかに。飛びつるゝ。身より思ひの餘ればや。フシ虫さへ胸をや。こがすらん。夜も早いたく更けぬらん。わけとなき行く郭公。半太夫フシまこと冥途の鳥ならば地獄の有樣語れ聞こ。フシ聞くともいかで。變らめや。今宵限りのうき命。止めて止まらぬ。三瀬川。ナホス岸に繫ぎし綱手こそ。弘誓の舟と　フシ觀念し。スヱテ歎く心は曇れども曇らぬ。空の星月夜。あらまほしやといふ星も。年に一夜の契りぞや。たとへば雲の上とても。天の河を隔てなば。人のつらさに變らじな。糸かけ星の。ほそほそと。附添星や。妬むらん思ひ星とは七夕の。縁と聞けどまゝならぬ。フシ浮世に似たる類ぞや。○地光もうすく丑寅にあれあれ見ゆる星樣は。△詞ヲ、假のうつゝの

ほし佛。地やどり星とはいつ迄も。二人妹脊變らぬ夫婦間。フシ我身の果はすばる星。ウ地ア丶思ふまい心からたとへ奈落に落つるとも。祭文跡に歸らじさりながら。女はいとゞ罪深く。從ふ道も忘れ水。哀れ都のひぼのほし。結び目とけて濁江にうかれし事を思ふには。あまねき門に立寄るもナホスフシ爰ぞ一念重願寺。フシ念彼觀音の。力ぼし助け給へと諸共に。心をこめて願ひぼし亂れ心の亂るゝとも。利劍卽是の誓ひにて。心やすく〳〵極樂に至り至らんこなたへと。スヱテ互に勇め進む身のフシ勸進所。にぞ着きにけり

捨つるに極めし。身の上も。そゞろに心細げにて三途の川は目の前の。麥吹く風の小波や。空淋しくも名乘るてふ。死出の田長を友がねに。さいたら畠の案山子かと。見るにつけ聞くにふれあの世に。たゞふぞあぢきなき。地色半兵衛お千代に差向ひ。詞此勸進所のお寺には談義の絶ゆる時もなう。千萬人の參詣に一遍づつの御回向も。地つひに罪障卽滅の法の緣こそ。賴もしき。爰ぞ最後の場所とやがて用意を敷きかくる。朱の褥の毛氈や嘉兵衛が。くれし其時は。詞長く身上持ち堅め町屋住宅据ゑよとの。地心には今引替へて死出の門出の相莚未來は蓮の臺とも。變じて浮むよすがぞと二人しづかに座を占めて。詞人間一生あざなへる繩の如くと傳へしは。今日の身の上。八軒屋で出合ひし時互に書置明かし合ひ。危き命を夫婦とも遁るゝ上は老先も。諸白髮まで添ひ果てん。思へば愁ひの文ではなく。結ぶの神の守札。地末賴もしや目出度やと祝ひし事も夢現。醒むれば元の書置よな。とてもかくても死神に引かるゝ緣は辻占の。時のぎえんもなきものとフシ身を觀じてぞゐたりける。地色お千代はいとゞ打萎れ心中といふ二文字は。流れの女に限りしと昨日は餘所に思ひしに。今日は夫婦が身の上に飽きも飽かれもせぬ仲を。由ない障りに隔てられ仇に朽ち行く是非なさとフシ平伏し。てこそ泣きにける。地色半兵衛涙にくれながら。詞ア丶おろかなる悔みごと。兎角二人が腐り合ひ。切られぬ緣を恨むがよい。女房去るに七つの法。去らぬに三つの教へあり。中にも親の氣に入らぬ女房に添ふは不孝なり。又去所なき妻を去るは夫の義にあらず。とくに暇をやつたらば孝行の道は立つ。しかしそなたの親里は。養ふ風情もない貧家。すりや去所ない同然。去るに去られぬ教へなり。地此二道に差詰まり斯くなり下る有樣は。もとより覺悟と詞にはいへども洩るゝ露涙。詞痛はしや十藏殿。常さへ武士の突詰めた。氣質ながらも半兵衛は。武士を捨てよと御意見は。我が行

末を安穩に。[地]あらせん爲の教へをば今やみ〳〵と死したらば。さぞやお悔み歎きの程。思ひやるさへ。[フシ]勿體なや。[地色]養親の仁右衛門殿。お氣の弱い生れつき。此譯を聞き給はゞ老後の憂ひ持病の種。彼といひ是といひ一方ならぬ不孝の罪。空恐しき身の上と[スヱテ]口說き。立つればお千代も亦。穗にあらはれて叫び入り。ア、我とても道ならぬ。歎きをかくるは同じ事。老いたる母の手一つに。育て上げられ人と成り丁度今年が廿四の。年重なれど今日が日まで。是ぞと思ふ孝もなく。つひには刄に身を果たし。愁ひを見するばかりかは。入まへの程世渡る業。老の湯水は誰が取つて御心を休むべき。不孝ともつたなしとも。我からわかぬ身の上を。許してたべや母樣と。ほとりも知らず手を合はせわつと。ばかりに泣きまどふ。[詞]半兵衛は顏を上げ。ハアいつまでいうても同じ事。夜明けぬ先に最期をば心靜かに遂ぐべしと。[地]西に向ひて手を合はせ。利劍卽是彌陀號。南無阿彌陀佛と回向する。お千代は沈む涙さへ落ちて乾かぬ小硯を。懷より取出し。[詞]斯うならうとは知らずして西の宮參りして。[地]須磨や明石の名所をも。記し置かんと求めしが。今引替へて書置の。御用意もやと差出せば。[詞]ナウよい合點さりながら。我一代の書置は懷中の狀箱。心にも文言にも死する時節に二つはなし。[地]そちこそ早う書置しや。[詞]イヤわしとても先達つて去られた時の書置が。小母樣の手にあるからは。是ぞ末期のとゞめ筆。[地]あだの思ひの數々はとてもに書きは盡くされず。しかし辭世の言の葉を殘し給へと勸むれば。半兵衛頷き筆を取り。[詞]げに世の常に死したらば。野べの送りの引導に一句一偈も受くべきに。この儘行かんはかなさよそなたも一首口ずさみ。自ら是を引導とも經帷子の梵偈とも。[地]回向の種と案じつゝ硯引寄せ書付くる。文字もちら〳〵星月夜。詠み續けたる其歌に。はる〴〵と濱松風にもまれ來て。涙に沈むさゞんさの聲。お千代同じくかくばかりいにしへを。捨てばや義理も思ふまじ。朽ちても消えぬ名こそ惜しけれと。兩首一所に卷納め。半兵衛は懷中より件の狀箱取出し。辭世に相添へ前に据ゑ。思入つたる體なりしが。胸押しくつろげ脇差を。すらりと拔いて脇腹より。前へなかば引廻す。お千代は取付き聲を上げ。こは情なの御事や。女は心おろかにて覺悟してさへ狼狽ゆるに。ひとり先立ち給ふのは。扨は我が身を捨つるのか。恨めしや胴慾と[フシ]悶え震ひて歎きける。[地色]半兵衛ちつともわるびれず。[詞]女心の淺はかさよ。是程の傷で死なん

とはおろかなり〳〵。様子あつての切腹。地抱帯を二つに切り其一筋にて切口を。急いで巻けと聞くよりはや周章てゝほどく抱帯。心は何と白縮緬用意の剃刀取出し。せき狂ふ手も震ひながら。やう〳〵中より押切つて夫の肌を引廻し。しつかと締めてうろ〳〵と顔をながめて涙ぐむ。詞半兵衛詞おだやかに。そなたが最期の顔も見ず。何しに先立ち行くべきぞ。此脇差は某が此地へ養子に來る砌。主君よりの拝領。武士の刀は忠義を胸とし。町人は又禮儀に差す。大切の一腰を武道にも用ひず。禮儀にもかゝはらず。穢らはしき兩人が最期にばかり使はん事。勿體なし冥加なし。武士の眞似して引廻すは主君への追腹。山脇氏に立戻れば親十藏が封印も。破つて破らぬ道理なり。是からそちと死ぬるのが。地今の八百屋の半兵衛ぞと。歯を喰ひしめて息をつき。これお千代。その半分の抱帯。そなたが腹にしつかと締め。四月になるかならぬ子に。せめて末期の祝ひ納め。世にあるならば來月は。帯の祝ひよお乳母よと。さも勇ましくあるべきに。明日をも待たぬ今の身は。五月とも産月とも。つゞめて名殘を惜しむぞとフシそゞろ涙にくれにける。地色お千代は帯を取上げて。しやくり上げ〳〵スヱテ前後涙に。沈みしが。地生れぬ先に行末を頭堅かれといはた帯。長地それは世にある人の事是はそれとは引替へて長き別れの親子の縁。斯くなる身とは知らずして嬉しや子をば産んだらば。二人が仲の樂しみに。明暮れ抱いつすかしつの。愛らしい事見る度に憂きが中をも打忘れ。夫婦は猶も親しみの媒介となり一つには。世に子を持てば世帯じみ。なり形をも窶すとや。然らば我が思はずの伊達も自然とやむであろ。姑御にも氣に入らうあら嬉しやな産宮様。平産させて給はれと。願ひし事はいたづらに。身持ながらに消えて行く。名殘は我が身一つにて。別れは二つ人間の種を斷つのも同じ事。何の咎なき腹な子を。共に死なする不便さよ。許してくれよと詞さへ。泣く〳〵帯を取上げて。肌に廻し引締めて。顔見ぬ母が形見ぞとスヱテかつぱと。伏して泣きにける。地はや引渡す山かつら寺の晨朝告げ渡れば。いざや最期の時こそと座を打拂ひ身構へす。お千代は覺悟の面ざしも名殘の花のあてやかに。露持ち餘る風情にてフシ手を合はせてぞ坐しにける。地色半兵衛につこと打笑ひ。詞ヲ、出來したりいさぎよし。地未來は一所ぞ迷ふまじ。今ぞ限りと脇差を。取直せしがさすが又。長き別れの顔ばせに。心も騒ぎ腕たゆく。差付けてはためらひ突かんとしては堪へかねて。暫し時

刻を。うつせしが。地色南無三寳おくれしと氣を取直し一心に。南無阿彌陀佛と刃の先。喉にぐつと突通せば。あつとばかりに身を悶え。手足を伸べて苦しげな中にも夫を打守り。打守りたる一念の。輪廻の心ぞ。果てしなき。されども四つの借り物を返ししまへば油なき。燈火消ゆる如くにて。がつくりと伏す有様はフシ哀れにも亦惜しかりし。地色いで追付かんと半兵衛は。主のゆかりの一尺五寸最期の際と押戴き。只一刀に喉笛をフシ貫かれて死したりけり。地色生年既に三十八。花過ぎ頃の若緑木の下闇は青物や。町人なれどいにしへの。武道の燈かゝげたる末に。名をこそ照らしける

右此本者以太夫直傳寫之頌句音節墨譜等不殘毫厘令校合候畢尤加秘密全令開版者也

豊竹上野少掾

大坂 御堂筋 北久寳寺町 正本屋 仁兵衛

太平記綱目 大塔宮曦鎧

近松門左衛門添削
作者 竹田出雲掾
松田和吉

（序詞）舜に錐を立つるの地なけれども天下を保ち。禹に十戸の聚なけれども諸侯に王たり。上三光の明を覆はず。下百姓の心を破らざるは。王者の術心の法。國に傳へて九十五代。後醍醐の帝のしろしめす（オロシ）へ御代の治亂ぞ。參差たる。（地）宮宮數多まします内。第三の御子大塔の宮二品尊雲法親王。山の座主に補せられ。王城の鬼門を守り三千の衆徒を管領し。兼ねては天下の政にも參はり議り給ひしかば。君の招きに鴐を待たず。衆徒坊官も連れられず。伺候の武士村上彦四郎。義光一人扈從にて（フシ）參内あるこそいみじけれ。（地色）御階の下に跪き。（詞）召しに依つて尊雲參内と奏聞あれば。（地色）内より御簾卷き上げさせ。龍眼常ならず忿怒の御髭。逆鱗の御眥。袞龍の御衣まくり手に寶劍携へ。（詞）山の座主か珍らしや。御身と心を合せ計るべき旨ありて。（地色）召し寄せつると宣ふ御氣息炎と燃え。右少辨俊基中納言資朝卿。御座の左右に近侍し。火を吐く眼は赤酸漿只事ならぬ相好。暫し呆れおはせしが。大塔の宮大音上げ。（詞）君の御有様は必定。天魔の邪法を行はせ給ふ不審さよ。（地）儒佛の二法を補佐とし天神地祇の教へを本とし。四海万民を統御し給ふ御身の上。何を足らずとしてか魔界に陷らんとの叡慮淺ましし〳〵。資朝俊基などか諫めを獻らず。魔道に誘引し奉り。大日本を魔國にせんとは神敵佛敵。はや〳〵叡慮を改めらるべしと（フシ）憚り。なくぞ奏せらる。（地色）天皇怒りの龍顔に御涙。（詞）朕みだりに魔術を貴むにあらず。今鎌倉の權威天下を呑み。朝廷日々に衰へ。禁中の事皆六波羅の下知に任す。口惜しさよ無念さよ。（地色）此度位を朕が寵愛今年八歳の乙の宮に。讓らんと思ひし所。（詞）六波羅より是を抑へ。兎角鎌倉の下知に任すべしと讓位延引す。此心を案ずるに彼等に緣ある。先帝の末の宮逆仁親王を。位に卽けんとの所存鏡にかけて顯れたり。（地）所詮第六天の魔王に與し鎌倉六波羅を亡し。今の恨みを晴らさん爲の行ひぞや。魔道は此世の地獄なれば。未來の苦しみ思ひやると熇

に交る御涙。夕日の前の玉霰。御痛はしくも恐しゝ。大塔の宮伸び上り。アヽ御心狭き勅諚かな。六波羅鎌倉を亡さんに天魔の手を借る迄も候はず。我諸佛方便の教をまなび。無禮講と名付け在京の武士を集め。酒と色とを以て打解け馴染み相語らはゞ。近國の侍に誰か勅命を背く者候べき。其時菩薩の折伏門に入り解脱幢相の衣を脱いで。堅甲利兵の甲冑を帶し還俗の形となり。一味の大軍どつと押寄せ。一時に踏破り大將駿河守が首取つて。獄門に切りかけ宸襟を安め奉らんは。尊雲が方寸に候と。詞涼しく奏聞あれば。怒りの龍顏引替へて。忍辱柔和の御粧 掌を返す如くにて。兩卿兩座を下りける。かゝる所へ武家の傳奏坊門の清忠罷り出で。鎌倉の御敎書到來。則ち今日御位定め。常盤駿河守逆仁親王を供奉し。參内致し候と奏聞あれば。すはや兩宮の御運定めと禁中さゝめき。八歳の若宮も御褥に着き給へば。百寮百官左右に。別れ着座ある。駿河守範貞卿相雲客に禮儀もなく。さながら攝政關白の内參りの如くに。鎌倉の文箱を御前の案に据ゑさせ。御即位の事此御敎書の文言次第。何れに御位定まるとも兩方異論あるべからず。サア〳〵御文箱開かるべしと邊を見れども威に恐れ。披見と言ふ者もなかりしに。大塔の宮是を讀むに何事かと。封捩切つて箱投げやりさつと開いて。ム、さこそあらんと思ひつれ。外の文章は讀むに及ばず。先帝の王子逆仁親王を御位に即け申せとの事なるぞと。仰せもあへぬに駿河守一人喜び。帝は瞋恚の御涙。伺候の諸卿詞なく眉を。顰むるばかりなり。大塔の宮の御供物に堪へぬ村上彦四郎義光。憚らずつつと出で。ハ、ア事新しき御即位。逆仁親王とは。元は先帝の末の宮なれども。一度六波羅殿の養子となり。相模太郎時行と名乘り。角前髪ののんこ髷。糺河原の相撲芝居の棧敷で。冷麥を掻込んだは諸人の見る所。それを俄に月代のばし逆仁親王。神武以來當今九十五代迄。一度武家の養子やう〳〵五位の諸大夫に。成るか成らずの身を以つて。十善の位に即きたる例終に聞かず。我等が主人大塔の宮の上に即く事先づ慮外。つつと下れ相模太郎但しお手を引き申さうかと。立たんすれば大塔の宮。ヤア宮中なるぞ荒氣をするな鎮まれ〳〵と。制し給へば進みもやらず。駿河守範貞エ、我が威勢を恐れぬ憎い奴。極てくれんと太刀に手をかけ睨め付くれば。彦四郎も太刀捻つて何ぞ云うたら返答せんと。云はぬばかりの眼ざし。彼奴が面付唯者ならず

毛を吹いて疵を求めんよりと。柄にかけたる手を打拂ひ。えへん〳〵と空嘯き。フシ見ぬ顔してぞ居たりける。地時に春日の社人藤原の仲業。あわたゞしく参内し。詞今朝神前神木の松の藤。斯くの如き花咲き候故。不思議に存じ時を移さず。地色叡覽に供へ候と紫ならぬ紅の。藤のしなへ三尺ばかりなる。今を盛りの一房を御前に捧ぐれば。人々是はと手を打ちて フシ奇異の。思ひをなし給ふ 地色駿河守笑壺に入り。詞ハヽア神慮は疑はれず。何と方々見られたるか。春日山に時ならぬ白藤咲きし例はあれど。紅の藤咲きしとは古今例を聞かず。總じて白きは源赤きは平家。逆仁親王は我々平家御取立て申す所。折しも赤き藤の咲く事。此親王を万乗の御位に卽け申せとの神勅。地色花物言はねど疑ひなし。吉日を選み三種の神器。内侍所の璽の箱を授けられ。御國讓りあるべしと申しも敢へぬに逆仁親王。若宮の褥近くつか〳〵と寄つて。詞今日よりは麿は東宮。無品無官の幼稚の身として。麿が上座は緩怠至極と。地色まだ幼き御手を取つて引下し。ありし御座にどつかと坐すれば駿河守はしたり顔。若宮は面なげに御涙ぐませ給ひければ。大塔の宮を始めとし堂上堂下村上彦四郎。叡慮を憚り詞は控へ睨み詰めたるばかりにて。スエテ皆々拳を握りける。地色天皇日の御座の御劍を取つて高御座につつ立ち給ひ。宮中も響く御聲にて。詞我國の三つの寶は智仁勇の三德にて。縦へ讓り受けても此三つの理に背けば。却つて神罰を蒙る。就中此寶劍の威德。帝道に背き私ある時は。寶劍鞘袋を離れ給はねども。難病災難となつて玉體を惱し。忽ち國王の命を断つ事干將莫邪よりも鋭し。地見よ〳〵今云ふ詞に驗なくば。天照大神の託宣は皆僞りなるべきぞと。日月の如き御眼にて四方をきつと睨め廻し。フシ御簾さつと下りければ。地横紙裂きの駿河守範貞も。打つが如く切るが如き勅諚に氣を奪はれ。東宮の御所は六波羅故諸卿の面々六波羅へ出仕あれと。逆仁親王誘ひ詞もなく退出す。一言事を破り。一人定む國津風のべふす。民こそ 三重 へ豐かなれ。地大塔の宮の候人赤松律師則祐。春日より捧げし赤藤の花にて。逆仁親王御位に極まりしは。駿河守と社人が中に物こそあれ。春日山に立ち越え化の根元見顯はさんと。宇治を流れの小倉堤淀繩手は川風に。柳の髮を亂せども。其氣遣ひない坊主頭。振廻す樫丸太に鐵の疣仕込杖。息杖入らぬ足の乘物。踏出す一足五尺六尺かんはんも。フシ木津川にこそ着きにけれ。地色向ふを見れば六波羅の撿斷高橋九郎。彼奴南都

にあると聞きしが。今歸るか逢うては喧まし。陰せん物と引返せば。駒野の方より逆仁親王。馬上ゆゝしく隨身白丁。フシ前後を圍み乘りかけたり。地色是も逢うては猶喧まし。ハテ何とせん木蔭はなし家はなし。いづくに隱れんそれよ〳〵。詞宮の御秘藏鍾馗の繪に。橋の下に踊んだ鬼思ひ出した。地色これ究竟その眞似せんと傳ひ下り。渡して仕舞ふ橋柱。貫を踏まへて身を縮め小さうなつて踞みゐる。心の鬼の赤松は フシいかな鍾馗も手に合はじ。地色程なく兩方行逢ひの橋の上。高橋九郎頭を下げ。詞これは存じよらず。いづくへの行幸候と伺へば。されば今度の位爭ひ。春日山に赤藤の咲きたる故。麿が利運となつて位に卽く。これ明神の御加護。御禮のため社參するはと宣へば。高橋えせ笑ひ。赤藤の咲きたるを。明神の力と思召しての御社參ならば。明神もさぞ迷惑。遠い春日より近い六波羅殿を日本國中の神佛とも思召せ。赤藤の咲きし事御存じなさらうな。六波羅殿を御大切になさるゝ爲なれば。ちよと申上げん。總じて冬の日に藤の花を咲かする事。其木の根の土二三尺避け。廻りを掘りごもく土と云ふ物と入れ替へ。地色折々其上にて柴を焚き。毎日酒を根にかくれば時分に變らず花を咲かす。詞又赤う咲かせ樣は。藤の花房一二寸伸びたる時。器物に紅を溶き入れ。其花房を浸けて置けば。伸びるに連れて花の色。眞赤に咲く事大秘傳。地色今度春日山に咲きし赤藤も。六波羅殿社人に敎へ給ひ其仕掛にて咲きたる藤。天下の萬民肝潰せば。物識と云ふは六波羅殿一人。あなかしこ人に洩らし給ふなと。語れば親王是はとばかり。聞いて悅ぶ橋の下。大事の底を打明ける扱もいかい大だはけ。フシ猶々謐くせと聞き居たる。詞して〳〵高橋は南都より。何故只今立歸る。さん候此頃大塔の宮。無禮講といふ事を初め。足助次郎重成多治見赤松村上など。日毎に寄合ひ酒宴亂舞と。六波羅殿聞し召しいかさま仔細ぞあるらん。某に立越え無禮講に入交つて。事を窺へとの御書に依つて罷り歸る。地色君もやがて還幸あれはや御暇と聞く赤松。憎さも憎しよい氣味して腹癒んと。橋桁に兩手を突張り。腰からうんと持ち上ぐれば。めり〳〵ぐつと柱を離れ橋板ぐるめ馬人とも。宙に浮橋虹の橋。なう〳〵悲しやこりや何事と。騷ぐも川へ落ちんかと恐れわなゝく橋の上。飛ばんとするを逃がしも立てず橋板どうど投げ付くれば。殘らず水に投げ込まれ。淵瀬も知らぬ早川に押し流されては泳ぎ上り。フシ浮きぬ沈みぬ漂うたり。地赤松陸に駈上り。扇を開き大音上げ。ア、〳〵花を

流すは吉野川。紅葉を流す フシ立田川。詞出家を流す衣川比丘尼を流すは天の川。地若衆流す尻無川おのれ等流すは赤松川。氣味よし〳〵一首の狂歌よつく聞け。木津川の水いかばかり早ければ。高橋落ちて流れ逝仁と笑うて。御所へ 三重歸りけり。地酒は詩を釣り。歌を釣り フシ招かぬ人も。栗栖野小野。萬里小路中納言藤房卿の遊亭。無禮館と額を打ち。貴賤を分かぬ酒宴の會合。公家は素頭茶筅髪武士は丸腰法師は白衣。歌舞遊君に酌とらせ琴三味線の空遊び。實は六波羅討亡す。計略他事はなかりけり。地色はや暮渡る遠寺の鐘。訪なふ衣の空炷もそれとしるけき御粧ひ。八歳の宮の御母后民部卿三位のお局。ホフシ御所を離れて栗栖野の。館に告ぐる女中の聲。中納言藤房卿出迎ひ。詞見苦しき山荘不思議の御入り。君にもかね〳〵御存じの通り。武家朝廷

を借び。我儘なる御位定め叡慮安からず。地色臣等が遺恨止むことなく候へども。當時六波羅の勢ひ容易くは亡されず。詞味方に心を通はす武士ども少々は候へども。大切なる御企て左右なくは明かされず。一つは武家の聞えを憚り。無禮講と名付けあだ口雜談に事寄せ。在京の武士の底意を計り候へば。地色およそ徒黨の人數も調ひ計略大半成就せり。今宵は某當屋にて。詞二心なき客人達の饗應。今宵諸方の手筈を定め六波羅を討亡し。地色御愛しみ深き若宮位に立て。公家一統の世となさん。御心安かれと頼もしく申さるれば。詞さればとよ。大塔の宮を始め奉り各の心遣ひ。天皇様にも御喜び。それにつき自らわざ〳〵來りし事。かの右近府の侍所。土岐藏人頼員此會合に洩れしとや。彼には妾が恩もあり何卒一味させよとの。叡慮に任せ道より使を

立てぬれば。地色頼員やがて尋ね來ん。待つ間も憂しや奥の間の。人々の氏名乘連判狀には聞きたれども。どれがどれやら知らぬ顏。敎へ給へと宣へば。藤房卿案内して。手荒き武士の無禮の遊び。お笑ひあるなと次の襖を明けかけて。地あれあれ御覽ぜ上段に形崩さすましますこそ。名指すに及ばず此連中の御大將。大塔の宮護良親王。銀燭臺に身を背け夜食べら〳〵食ふ人は。大原の住職殿の法印良忠殿。こなたに立てる フシ明障子。白拍子と連三味線は馴染み多治見の四郎二郎國長。酌する禿を嫌がらす。無禮も無禮濡れ緣先。立ちはだかりしは右少辨俊基と。聞けば局も可笑しさの。袖打覆はせ給ひける。白髪交りがまく骨牌。かはは川越播磨守。六々八の引張り牌。先づ六波羅の頭をちよつる。次ぎの骨牌は八九三。是も日出度し鎌倉牌。根こぎに

ナホスしやんと掻き込みし親は。一二三四フシのぼり九寸。錦織の判官代。江戸相撲の手合ひの力瘤。赤松律師と知しめせ。四つ手に組みし痩男下り。合下りとよついに挾む下帯は。日野の中納言資朝。大納言の大盃押へて師賢。手元の相は平賀の三郎。フシ酒は一座の。出來不出來。村上義光下戸やらん。菓子盆抱へ飛び退きて。玄恵の講釋きくりんこんへい洞院の左衛門實世。足助の二郎重成が。謡ひさゝめく舞扇。其外南都北嶺の衆徒。つど〱名乗るに及ばずと語るも。見るせ目覺しし。詞三位の君輿に乘じ。聞きしに勝る殿原達。頼みある中の酒宴の興。地色妾も共にと入らんとし給ふ御袖控へ。詞計略とは申しながら。無行儀のあの中へ三位様と聞くならば。袴よ烏帽子よと興覺し御出で無用と。云はせも敢へずこれ藤房卿。無禮講を合點してお使がねの自ら。それをぬかるものかいの是見給へと。地裲襠ふはと脱ぎ給ふ下には賤の赤前垂。誰が教へけん縁先の手拭ちよつと。額に假の飯炊風。詞なんと。三位の局ぢやあるまいがえ。お清所の供御炊しぐ。地おさんであんすと御戯れオクリ打連れへ奥に入り給ふ。地色召しに應じ土岐右近藏人頼員。上童に誘はれ直ぐに通る大書院。無禮館と打つたる額きつと見上げ。詞ム、是ぞ聞き及ぶ無禮の間。折目高なる袴肩衣。地色心さばけぬ侍と。若公家ばらに笑はれんもいぶかしと猶豫ふ後の。唐紙押明け三位の局。瓶子土器三方に顔隱し。詞夜中といひ御苦勞の御出で。お氣晴らしに酒一つと立ち地頼員が膝元へ。三方押しやり悟られじとフシ差術。向いておはします。地色好みの藏人尻目にかけ。見れば前垂襷掛妾に似せぬ褄外れ。首筋元のくつきりさ彼奴一切れはよき肴。仕掛けて見んとにじり寄り。詞これは〱。取込みの中お心遣ひ千倍〱。併し酒は無調法。下戸の證據はきさまの様な。饅頭肌が我等の好物。地色どれ御面相拜せんと。しなだれ縺れ差覗けば三位の君。はつと飛退く後の襖。當つてぐわつたり恟くり敗亡。勿體なやと疊に頭。スヱテハ、アはつと跪まる。地衣紋改め三位の君。詞コレ無禮講へ呼ぶからは憚りも慮外もないわいの。其慇懃で思ひ出す。舅齋藤太郎左衛門は今に變らず堅い顏か。妻の早咲血の道も起らぬか。夫婦が仲の力若も嘸おとなしう成りつらん。御所で仕へし昔の所縁早咲が噂も聞きたし。外に頼む事もあるさりながら自らが。大切な望みなれば假初には咄されず。地色爰へ〱と宣ふ聲に頼員やう〱人心地。詞冥加に餘る妻子どものお噂。畏れながら我妻も明暮れ君の御事のみ。今更申すに及ば

ねども。早咲御所にありし時忍び契りし不義の科。御情けに命を繼ぎ。お指圖を以つて夫婦になし下されし御恩。地色身不背の藏人めにお頼みとあるに違背はなし。御心置き給ふなと裏なき武士の一言。ヲヲ好を忘れぬ嬉しい心底。頼まれうなり頼むなり先づ固めの盃して。其上で語らんと三方に向ひ給へば。藏人頼員お酌にと立寄る袂瓶子にかゝり。からりと轉けて打ちかへる南無三寶も土器も。碎けてはつと物思ふ三位の君の氣の毒顔。頼員はさあらぬ體。詞此土器の六つに割れしは六波羅殿。六波羅は平氏。平は平氏これ御覧ぜ。瓶子ころりと轉けたれば御氣に懸かる事あらじと。地色聞かぬ先より頼みの筋早く推せし藏人が心中。敵か味方を量り兼ね。どうか フシかうかと心おくには鼓の音。地萬歳出立の懸烏帽子村上彦四郎義光。二人が中へ走り出で萬歳に事を寄せ。藏人が心を調べる鼓ぽん／＼打鳴らし。

つはもの萬歳

徳若に御萬歳と御代も榮えましまさず。是は興がる有様や。土岐立歸るなあした迄密々話。氣質を探り尋ねんと。思ふは目出度うさふらひける。昔の京は難波の京。中頃は奈良の京。今の京と申すは。萬邪であの御天子を憚らず。我儘働く平の京々。京の仕置は關東任せ宮方ひづめ公家衆倒し。百姓虐げ。町人いちり。地民は又ぎつちり／＼。誠に無念にさふらひけると フシ問ひかくる サイ詞藏人微笑み。ホヽ無禮講の御作意。村上殿の萬歳聞き所。併し一人打つたり舞うたり無勢では事ゆくまじ。數ならねども頼員が心を顯はす。幸ひの才若よく囃されよ。地よく聞かれよと袴のそば取り扇を開き萬歳と。二人有難かりける天皇の。叡慮も安くおはしますさつても無禮の初まりは。昔二品親王の 太赤松 サイ村上 二人二人の郎等天臺山より召し連れ下らせ給ひて。後醍醐天皇たッてについて。初めて謀叛を企て給ふ。誠に由々敷くさふらひける其後に。六波羅の大將の首はころりと。飛ばせ給ひて治まる御世は大内の。紫宸殿の柱の數が四十八本に極りて。合一本の柱が一味の人々二本の柱が二心なく サイ三本の柱は三位のお局 太詞コリヤ才若。三位様のお頼み京の町の賣物づくし。六波羅へ賣つて行くが合點か。サイヲヲ合點ぢや 太合點か サイ合點ぢや 太うん／＼ サイうん 二人ウヽうん／＼。やしよめ／＼。京の町のやしよめ。賣つたる物は何々。サイ所味方かち栗喜ぶ昆布。蜜柑柑子橘こそあれ六波羅を討たんとは辛い胡椒 太イヤ。甘い胡椒 サイ辛い胡椒 太摘んで見

や辛いか サイイヤ甘いは。甘い／＼／＼は。二人やしよめ／＼。京の町のやしよめ。側の棚見たれば。目出鯛海鰻鯒鱸赤貝太ふか／＼術に嵌まるな蛤子サイ蛤嵌まるな二人はまぐり子。蛤子。サイ詞コレ太夫殿。お望みの京の町。一番に賣つて通る才若は仕合せ者太イヤ此太夫も仕合せ者サイ仕合せ太仕合せ二人四本の柱に。始終仕濟し五本の柱に御運を開き。六本の柱は太六波羅サイ滅亡太七本の柱が。サイ七轉太八倒サイ悔めど太詫びてもサイ泣いても。太叶はず二人八本の柱は。八歳の若宮に。御國讓りて九本の柱に九重治め。十本の柱は。サイ十善のさつさ。地位治まる國治まる千秋萬歳のフシ萬歳。樂と舞ひ納む。

地色なう／＼嬉しや心底見えた。自らが願ひ成就サア此上は固めの神文。料紙是にと差寄する筆おつ取り。御謀叛一味の忠誠。僞りあるに於いては梵天帝釋。四大天王日本六十餘州の神祇。冥罰を受くべき者なり。土岐右近の藏人頼員と書付け。差添への小刀小指劈きしつかと据ゑたる血判。詞ヲ、神妙候頼員殿。地色大塔の宮の御披見に供へん。お目見えは後刻後刻と村上。フシ奥に入りにける。地六波羅の忍びの犬高橋九郎諸門。案内もなくずつと通り。詞ヤア土岐殿是にか。無禮講と聞き付け直ぐに參つた。是は／＼三位のお局。はれやれ地願うてもない仕合せと御側にどうど坐し。詞八歳の宮のお袋なれども。子持ち嗅い氣微塵もない。ぼんじやりと甘さうなお肉合。其艶々としたお顔に。主人六波羅殿およがるゝも道理／＼。折々の參内。天皇尊敬と思はるゝははまり。君がお姿見たいばつかり。結構な惚れ手福德の三位様。よいお返事を承り拙者も御褒美。是。申し。申し。胸見してござつては濟まぬ。否か。地色應か聞き切らねば聞かぬ男と。主の威をかりぞんざい過言。聞き兼ねて藏人コリヤ高橋。詞酒に醉うたか寢惚けたか。萬乘の君御秘藏の三位様。無官の身として慮外千萬退れ。退れ。と極付くれば。ヤアさいふ和主が寢とぼけ。あの額が目に懸からぬか。無禮と看板打ちたる座敷。何の慮外無禮咎め。但し今宵は慇懃講か。ぐつとでも地云うてお見やれと遣込め／＼。兎角情のお返事三位殿。フシどうぢや／＼となだるゝ。詞エ、耳が穢るゝ喧ましい面倒なと。地色突退け入らんとし給ふ腰に縋り引き留むれば。詞エイ推參な厭らしい。引退けてたもなう藏人。是頼員あれ。地色放しをらぬと抓つゝ叩いつし給ふ程引寄せ締付け動かせず。頼員立寄り拳を握り高橋が小鬢先。碎けて退けとくわしと打つ。詞ヤイ藏人。侍

の生面なぜくらはした。言分あらば刀でせよと反を打つて詰めかくる。ヤア寢とぼけ。あの額が目に懸からぬか。くらはしたが無禮講。ム、誤まつた。無禮講面白い。無禮序に三位殿。地色六波羅へ連れ行かんと引立て出づる襟元摑み。引きかづきどうど投げる。音は高橋投げられながら減らず口。詞是も無禮か誤まつた。地色餘程痛い無禮講と。起上る腰骨蹴据ゑ。斯う踏むも無禮講。序に無禮まだ無禮。無禮々々と五つ六つ踏付け〱。三位の君奥へ〱と目で忿り。高橋が腰骨摑み引起し。詞無禮講の馳走こたへたか。長居せば頼員が帶せし細身作りの冷し物。ひいやりと所望かと睨め付くれば。踏まれても打たれても。堪忍するが無禮講。冷物所望になし。地色三位殿が所望々々と。頼員が隙ずつと摺抜け。駈込む奥の明り障子フシさつと開けば。コハリ赤松村上平賀の三郎。籠手腹巻に身を固め中央の床几には。大塔の宮護良親王金龍の大口。赤地の錦の鎧直垂。緋縅の萌え立つばかりに金物繁き御着長。龍頭の兜を召され御手に采配寛然と。堅甲利兵の御勢ひ曦の。フシ輝く如くなり。地色高橋あんごり脛据らず。膝節がた〱立歸れば土岐藏人。鍔元寛ろげ扣へたり。遁れぬ命と大音上げ。詞推量に違はず。無禮講に事寄せ六波羅を亡すたくみ。ヤア高橋が家來ども。六波羅へ注進せよと呼ばはる聲。地色頼員透かさず氣息の根止めんと斬つてかゝれば心得たりと抜き合はせオクリ請けつ。ほどいつフシ切り結ぶ。地色大塔の宮悠々と瞬きもせず御覽あれば。左右の勇士土岐藏人が奉公始め。手見せの勝負とフシ片唾を。呑んで守りゐる藏人は手練の若者。附け入り〱。九郎が胸腹くわらりと薙ぎ返す刀に首打落し。靜々と御前に向ひ。詞怨敵の族仕留めては候へども味方の計略いまだ全からず。高橋討たれし事六波羅へ聞えなば大望の妨げ。某是にて切腹し。當分の口論に取成し事を鎭め申すべし。お暇たべと押肌脱ぐを詞ヤア無益〱と制し給ひ。高橋が家來の外。敵に洩るゝ氣遣ひなし。地色平賀赤松義光等。よく計らへと宣へば。三人諸共廣間に立出で。詞高橋九郎殿の家來衆。用事あるぞお庭へ廻れ。參れ〱と呼ぶ聲に。地すは旦那のお立ち。草履よ鐙よと若黨仲間ない。ない〱〱命がないともフシしら洲の切戸。ばら〱と立出づる跡へ廻つて。戸口をはたと袋の鼠。一定づゝ仕舞うてくれんと三人拔連れ挾み立ち。弓手馬手へ斬伏せ討捨てサア仕果せたあぶなげなし。御運強き我君の軍は勝利。無禮講も是限りと額を丁ど切り落せば。日月打ちたる錦の御旗明け立つ。空

に翩翻たり。地此御旗を眞先立て。分捕高名手柄は仕勝ちと。どつと勇めば大塔の宮ア、音高し／＼。地天に口あり地に耳あり隱密／＼シイ。シイ。四海波風治め給へる御雄德。御頓智備り勇備り。仁義備り德備り。御運も備り威を備へ。敵の鐵城鐵壁砕く。時は今此。持國增長廣目多聞。揃ひに揃ひし四人の勇者君は。梵天釋提桓因。修羅に打勝つ御勢ひ誠に。征夷將軍と仰がぬ。人もなかりけり

第二

地臣として不忠なるは子として不孝なるに同じと。田氏が母の確言誠なるをや。兩六波羅の下司齋藤太郎左衛門の尉利行。決斷日の外も休みなく六波羅の北殿。常盤駿河守の館に相詰め退出は何時も暮れ過ぐる。拍子木合圖に門を締め出入の札も初夜限り。法度强きも役柄の フシ外の屋敷にかはりけり。地色稍更くる夜の表門七つばかりに賤しげなき。育ち刀の差しこなし只ならぬ男兒の。手を引く女の帽子眞深に。氣息繼ぎ敢へず馳來り。誰そ賴みたい／＼としきりに叩く。門番出格子に髭面ぬつと差出し。詞何奴だ慮外至極な何所だと思ふ。京洛中の御支配齋藤太郎左衛門樣のお屋敷。願ひ事訴訟ならば定まりの日に參れ。殊に今夜は六波羅殿へお詰めなされ殿はお留守。地色御門先退け／＼狼狽へて棒戴くなと。目玉光らし引込む面付。詞ム、さいふは門番どもか。太郎左衛門樣のお屋敷成程合點。斯う云ふ女は卽ち太郎左衛門樣の娘。土岐右近の藏人賴員が女房早咲といふ者。是は我子太郎左衛門樣の爲には孫。そち達が爲にも主筋。地色父上のお目にかゝる大事の急用。忍びにそつと逢ひましたいと通じてくれ。賴む／＼の詞の內。北の方より家の提灯先走りの徒歩の者。お歸りと呼ばはる聲に門番飛び出で。貫の木扉ぐわつたりびつしり八文字に開く地に鼻。手燭捧げて小性近習。式臺に折目高なる玄關前。月に閃く鎗印父齋藤太郎左衛門利行。お歸りかいのと乘物に取付けば。驚き是は／＼。娘か孫の力若かと飛び下るゝ親子の親しみ。家來も呆れ門番もぶち叩いたらよいものかと。剃下げ頭逆さまに フシ土に摺付け平伏せり。地色夜中に親子徒歩跣供も連れず參りしは。密にお耳へ入れたい事。詞若しも夫賴員殿は見えまいか。必ず／＼夫始めて此事沙汰なし。地色ア、心せかれやと聞く親は猶心ならず。是何も云ふな仔細は知らねど。立ちながらの沙汰ではあるまじ。家中の上下此事口外に出さば屹度曲事。いざ先づ奥へと孫の手を引き入りければ。留守居供人それとも言はず互

の心に望月の。駒も厩に門々締め家中静まり更けにけり。心を配る時も土岐右近の藏人頼員が。閨に妻子の行方なし。未練の女め天皇の御謀叛に與せし事。舅齋藤に内通の拔駈け。心を許し大事を女に打明けしは我が不覺。踏込んで仕儀により舅ぐるめに生けては置かじと。矢を射る如く一文字に駈付け。舅齋藤が館の高塀ホヽウ高しとて五丈七丈はよもあらじと。腕を伸ばして一躍すれば。土手の垣に手はかゝつつひらりと上り内を見やれば。利行が居間の小庭仕濟したりと松が枝を。取るより早く飛鳥の如く白洲にへそつと折こそよけれ。雨戸洩れくる女房が聲舅の聲扨こそ扨こそ。彼等が命は詞の安否二つの内と。腰刀捻ぢくつろげ。雨戸に手を寄せ耳を付け氣息差しもせず聞き居たる。物越しに囁くも聞きは違へぬ女房が聲。我等體が口に掛け申すも提れ多けれども。鎌倉の惡逆いや增し。兩六波羅の無理非道の政道奢り。天の憎しみ神の怒り。鎌倉一家の滅亡三年は過ぎまじと。立つ子這ふ子の取沙汰。其被官たる我が夫父上。身の果いかゞと案じ暮せば夜の目も合はず。遣る方なさの御物語第一不便は此力若。子孫長久の御思案はあるまいか。頼み少なき世の中やと打萎るれば父の齋藤溜息つき。ヲヽ女心に悔むは尤も。神國の大日本朝敵となつたる者子孫續きし其例なし。近くは平相國清盛入道。唐土天竺が攻め來つても傾くまじき勢ひも。頼朝義經の仁義の武勇に切立てられ。一門の大勢西海の波に沈みし是ぞよき證據。今鎌倉の惡逆驕り。神明佛陀の怒りの矢先憎みの鋒先。日にこそ見えね八方に迫ると思ひ給はぬ淺ましさよ。其被官たる聟舅。六條河原獄門にかからんは案の內。今更何と詮方なき。弓矢取る身の淺ましさ。只忘るまじきは後生菩提。ア、南無阿彌陀佛といふ聲を外に立聞く頼員。ム、扨は女房が内通にてはなかりしなさもあれ何をか口走ると。鼻息もせず聞き居たる。斯くとは知らず女房扨は父上も。左程鎌倉六波羅を疎み果て給ふか。其お心を聞いて胸が落着いた。大内にも數年鎌倉を御恨み。今度宮樣お位に卽き。六波羅殿失禮非道の我儘。逆鱗以て外の無禮講に事寄せ。六波羅追討の御謀叛極り大塔の宮御還俗。征夷將軍護良と名乘り。官軍の總大將夫の頼員殿は元より。右近府の侍所一方の物頭。舅は敵の侍大將。すは軍に臨んで先づ一番に望むは舅殿の首。恨みとばし思ふな弓馬の家に生れし役。力なしとの悔み言。夫と親との敵味方どちらへ勝負がつくとても。悲しき

者は自ら一人。天命に盡き果てし六波羅に與するは。毒と知つて毒を呑み淵と知つて淵に沈む無分別。夫諸共天皇の御味方に參り。六波羅さへ亡ぶれば聟も舅も手柄は一つ。天下のため家の爲たつた一人の此力若。子孫の爲と思召しお心を翻へし下されかし。詞是を申す爲ばかり。氣の堅い頼員殿に酒を強ひて寢入らせ。家來どもにも隱し忍び。徒歩跣の私が心御推量遊ばせと。地色語る詞の內より齋藤大きに驚く面色。眉を顰めつ目を見出し膝押し捲り澁面作り。返答胸にあぐみし體。外には頼員奴は女房が舅を味方に引入れん心ざし神妙〳〵。サア舅の詞が勝負の初め。返答によつて雨戸一重。蹴破るは安かりけりと フシ五音に。氣を附け聞き居たる。地父思案を極め座を打つて。詞ヤイおのれ幼きより歌學を好み。古歌數多覺えしが。かの春の野にあさる雉子のつま戀に。おのが在所を人に知れつゝと云ふ歌覺えつらん。雉の雌鳥が雛を育てん其爲に。番はなれて春の草に隱れ伏す。雄鳥は雌鳥を慕ひほろゝを打つて焦れ啼く。其聲を知るべに獵人の罠箭先に罹り。焦るゝ妻には逢はずして。其身を失ふ。是を畜類の愚かなるに譬へて。あさる雉子の妻戀におのが在所を人に知れつゝとは詠じたり。地色まづ其如く夫を思ひ過ごして。却つて天皇の御謀叛を觸れ歩く。詞鎌倉譜代の勇士六波羅重恩の齋藤太郎左衛門。地孫の娘の聟のなんどに惹かされて。返り忠の惡名を長き世に殘すべきか。天皇に與するせぬは返答に及ばず。詞コレ是に釣りたる太鼓を見よ。すは六波羅の御大事とあらん時。人數を集むる合圖の太鼓。預り置きたる七百餘騎を引率し。短兵を取り挫ぐは我が役。其爲に過分の所領を賜はり妻子を養育む榮耀。地おのれを育て土岐が方へ緣に付けしも。皆鎌倉殿より賜はつたる所領の力。其恩を振捨てゝ今更天皇の御味方に與せよとは。此齋藤が武士道を捨てさするか。詞土岐右近の藏人といふ雉の妻戀によつて。天皇の御謀叛を知つたる我は獵人。地今宵の內大內へ逆寄せにして忠義を顯はすは此時。恨むな女但し汝も我が娘土岐が妻ならば。今此親が首打つて叡覽に供へ。夫の忠節を勵ますか但し太鼓を打つて人數を集め。此方より攻め掛けうか。サア返答いかに思案はいかにと。桴追取つて立上れば。なう情なや父の武士の廢る事。たつてとは申すまじ草木にも心置く帝の御謀叛。我が口から顯はれては夫も面目失ふ。何事も聞かず知らず顏穩密になされ下されと。持ちたる桴を挽放さんと腕に縋り。太鼓の面に立塞がり。泣き叫び口說く聲 フシ聞くと等

しく。地頼員腰の刀すらりと抜き。弓手の小脇にぐつと突立て大音上げ。詞天皇御謀叛一味の武士右近府の侍所。土岐の頼員生害に及ぶ。騒がれそ齋藤殿地舅殿と呼ばはれば。親子驚き雨戸障子を引退け引開け。駈出づる縁先突込む鍔元血は瀧つ瀬。女房是はと取付けば幼けれども力若が。詞父様なぜに切腹なさるゝ。侍の立たぬ事で切つてよくばわしも腹を切りましよかと。地目には涙を持ちながらフシ詞に見えたる氏素性。地舅齋藤からからと笑ひ。詞ヤアラ事可笑しや。天皇の御謀叛に與したる土岐頼員といふ一方の物頭。矢の一本も射出さず。此齋藤が武勇を雨戸越しに聞き怖ぢして。腹切る程の臆病者。兩六波羅を敵に持ち鎌倉殿を亡さんなどとは。螢火を以て滿月の光を消さんとするに同じ。ならぬ事及ばぬ事。地孫も娘も此手負ひ連れ歸れと。云ひ捨て入らんとすコレ〳〵齋藤殿。詞武邊も忠義も誰に劣る頼員にはあらねども。天皇の御方には御謀叛の企てばかり。いまだ人數の手配りも定まらぬ其先に。御謀叛顯はれ逆寄せに寄せられては。味方の敗軍目の前。地色將の謀計洩るる時は其軍利あらずとは此事。味方の爲を思ひ過ごせし女房に恨みもなく。忠を守り義を勵む舅殿。武士の習ひ是以て尤も至極。詞所詮かゝる大事を。ふかふかと女房に打明かせし我が粗忽。一生の不覺武門の瑕。地弓矢神正八幡。摩利支天の御憎しみを晴らさん爲の生害。三十年來夢空々。須彌山碎けて磐石に花開く一喝と。叫んで突込んだる刀一刳り。刳つて抜くより早く俯伏しに。フシかつぱと伏して息絶えたり。地色女房わつと泣く泣くも許して下され頼員殿。味方の勢の一人も増す爲に。なまなか女の忠信だて親の心を見損なひ。御大事を語りし故大事の武士をむざ〳〵と。殺したる誤りはもと自ら。詞エ、曲もない父様。侍が侍の道を守るに珍しい事かいの。物の哀れ情を知るを誠の勇士と云ひまする。地色一人の娘一人の聟一人の孫を見殺し。お前一人が義を立てぬき。さのみ仁義とも忠節とも言はれまい。かたくなゝ父様のお心とは夢にも知らず。此女が舌三寸の誤りで。大事の〳〵いとしい男大事の武士を殺した。科人は此女酷いつらい胴慾心な父様と。スヱテ恨み亂れ歎きしが。地いざ來い力若死出の山へ追付き。父様への言譯と刀追取り引寄するを。飛びかゝり孫を抱き上げ娘をかつはと跡退け。詞エ、淺ましい。徒死したる夫の憤りを。散ぜんと思ふ心はなく。一子を殺し我も自害し。親子三人犬死して。天皇の御味方に頼まれし證は何と。地色よし〳〵無分別の

父母は兎も角も。此悴は我孫養育して人となし。誠の武士の子を育つる手本を見せん。此齋藤を情も哀れも知らぬ。かたくなゝ親とおのれが目には見ゆるか可愛いやなあ。詞昔保元の軍に。源氏左馬頭義朝は内裏方。父六條の判官爲義は院の御所方。親子敵味方と立分れ。鉾を爭ひ鏃を磨き。終に院方敗北し。地義朝の手にかけ父爲義の首を打たれし。恩愛親子の合戰に涙一滴零さねども。鯨波矢叫びの音迄も天道誠の御耳には。親子愁歎の悲しみの聲と聞し召す。詞我は主君のため六條の判官爲義の心を以て。現在の聟に敵對す。おのれ等も君の御爲。左馬頭義朝の氣を以て。親の首をも打たんと思ふ心はなく。地色恨めしい父樣胴慾心な父樣とは。聟や娘を憐みて。此齋藤が泣く聲は汝等が耳へは入るまいぞと。はたと睨む フシ目の内の涙ぞ。聲に先立てり。

地力若賢く祖父の目の色見て取り。詞是母樣なぜ泣かしやる。今日からはわしも六波羅方。地色わしが首斬つて父樣の名を上げて下されと。涙を見せぬ フシ詞つき。詞エ、未練至極子供に劣つた女め。戰場に臨んでは親とても遁さぬと。一言いうて歸らぬか何と〳〵。あい〳〵申しまする。これ敵味方となるからは。父上とて用捨はない。齋藤太郎左衛門の首は。土岐頼員が女房早咲が取つて見せう。地色アア天道赦して下さんせとわつと叫べば父は猶。親子名殘りと泣く聲を。紛らす合圖の陣太鼓哀別。離苦こそ 三重へ世の習ひ。地齋藤太郎左衛門利行が注進によつて。御謀叛の事隱れなく天皇を捕り奉れと。六波羅の軍奉行隅田彈正少弼に。四十八ケ所の篝在京の勢をつけ。七條河原に軍立て齋藤太郎左衛門利行。床几を並べ軍勢を點檢す ヲクリ 思ひ。思ひの家の旗眞先に押立つる。青黄赤白紫や五色あやどる紋の綾。小旗吹貫樣々に映り心や染色は。柳櫻に 地あらねども。都の錦と疑はる彌猛心や武士ども。手を盡くしたる馬皆具。物の具晴れに出立ちしは フシ 花やかなりける風情なり。地齋藤太郎左衛門采配おつ取り。諸軍勢の假名實名一々。ヲクリ 次第に尋ねけり

着到馬ぞろへ

コハリ 先づ一番に小櫻縅の胴丸に。五枚兜を猪首に着なし紅の母衣を掛け。兵庫鎖の丸鞘太刀雲雀毛の駿足に。夕日いざよふ唐紅の鞦を。芝打長に掛けなし。足取り輕く歩ませしは。天晴れ出立ちや誰候。ツレ 是は大相國淸盛の苗裔。八條入道淸玄が孫。八條右金吾平の淸澄。郁芳門の寄手候。シテ地 二番に唐綾縅の鎧。鍬形打つたる柿形兜。澁染め手綱に萠黄の

母衣。霞に嘶ふ青の駒。オクリ土踏みへ立てゝ花薫るこぼれ櫻の蒔繪の鞍。五色の厚總かけさせしは。いかに〳〵と尋ねける フレさん候某は。清の黨の旗頭。地葛西の忠太。フシ春國とぞ名乗りける。シテ地三番に白黒威。胡麻幹小札の大鎧。眞紅の鉢巻むずと緊め。黄母衣に木地の鞍置かせ淺黄手綱に黒の駒。乗つたる武者は フシ誰やらん ツレコハリされば候某は。濃洲方縣の城主明石播磨之介貞朝。談天門の ナホス地攻め口は フシ我手なりとぞ答へける。シテ地四番に名にし逢坂の關の。岩角踏鳴らし オクリ山立ち。出づる桐原駒。沃懸地の鞍置かせ。萠黄威に フシ紅裾濃。桃形兜に白の母衣。問ふに及ばずよく知つたり。名古屋の前司候な。ツレげによく知し召されたり。此度の我が攻め口。美福門を受取つたりと。しんづ〳〵と打つて過ぐる。シテ次に鋭き駈武者二騎。宿月毛白の駒。紫手綱紅手綱。燃え立つ火焔鍋尻兜。地折咲く花の山吹威。卯の花威の腹巻に淺黄鬱金の母衣かけし。ゆゝしき出立ちは フシ誰ぞや誰ぞ。二人地誰ぞとは人がまし。陶山時秀河野治國。安嘉達智の二門を受取り。前後の爭ひ事急なり。馬上御免と乗り過ぐれば。ツレ地彈正二人を呼び返し。互に拔駈け御禁制。高名ありとも手柄にならず。備へを立てゝ向はれよと。フシ屹度戒め通しける。シテ地續いて蹄に雲を踏む。月毛の駒に丸額年は。三五の上もなく髮に蘭麝の。合風薫る。花橘の梨子地の鞍。金糸銀糸を小波打ち。より糸の厚總掛け。母衣は紅 フシ水淺黄。二色革の小札。の鎧。足利樣の染手綱かつし〳〵と。歩ませたり。ツレ地負けまじものと乗り續く。同じ齢の勝色威獅子に。牡丹の裾金物 コハリ打つたる鎧。鍬形打つて龍頭。綾の母衣掛け錦の鞦。金覆輪の鞍置かせ。黒栗毛の毛もおさずいかな。野飼ひの ナホス荒駒も君が手綱は逢ふ夜の床よ。撫ぜ〳〵。引寄せて。フシゆらりと乗つて出でたるは。誰人の子なるらん聞かまほしと尋ぬれば。シテコハリさん候我々は。陶山が一子太郎英平。河野が三男三郎國經。今を初めの軍の供と手綱。靜かに歩ませて。大樣にぞ ナホス通りける 二人扨其外伊勢平氏美濃侍。近江に山本木村姉川。伊賀に服部三河に。足助矢矧武者。色々の物章萠。黄緋威白檀磨。啄木花革藤威。片白。片取。染革澤潟柑子革黄糸白糸紫威。さて又馬は連錢葦毛虎月毛。四つ白足白額白。柑子栗毛鴾栗毛心々の鞍置かせ。思ひ〳〵の コハリ手綱をかけ。照る日に輝く物の具は一入色ぞまさりける五色の母衣が入り亂れ。乗出したる武者の數以上三百七十騎。雑兵二萬七千人。河原狭しと乗り連れた

り。小波や〳〵。濱の。眞砂は ナホス 盡くるとも。平氏の威勢はよも盡きじ。萬歳楽と喜びの鯨波を作りて。三重 へ押寄する。

地 朝恩を忘れ武威に誇る六波羅勢。内裏の四門を打破り。喚き叫び戰ふ有樣。濕雲の雨を帶び暮山を出づるに異ならず。君の大事を徒らに死したる夫の名字の穢れ。我一戰に洗ひ革鎧輕げの女武者。心も名に負ふ早咲が花に染めたる母衣打掛け。六波羅勢の裏切りし我強き父に鼻明かせんと。近衛通りの松蔭に オクリ 身を引き。そばめ窺ひ居る フシ 敵は多勢。軍に馴れて陽明門を攻破り。官軍數多討死し。大將大塔の宮護良親王。赤松律師則祐平賀村上主從四人。虎口を切り拔け一先づ南都の方へ忍ばんと。笠印かなぐり捨て欺く敵の袖印。詞 是は當手の使ひ番。味方の利運を六波羅殿へ注進。各の高名も一々に言上と。地色 高らかに呼ばはり〳〵 フシ 靜かに。落ちさせ給ひける。地 早咲きつと見すは。是こそよき敵と並木の蔭より躍り出で。詞 右近府の侍所。土岐藏人賴員是にありと。地色 名乘りかけて斬りかゝる平賀の三郎駈け隔て。詞 ヤア土岐賴員とや。事々しい大將呼ばり。萬乘の君に賴まれ奉りし一大事敵に洩らし。宮に向つて太刀三昧。面は侍心は畜類。地色 刀の穢れ捻ぢ殺してくれんずと。怒りかゝればはつと驚き スエテ 飛退り地に平伏し。詞 扨は大塔の宮にて渡らせ給ふか。勿體なや畏れあり。我こそ土岐が女房早咲と申す者。恥かしや情なや。數ならぬ我が夫の魂を侍と御覽じつけての御賴みは。名の譽れ身の大慶。殊に自らは若宮の御母后。三位樣の御慈悲にて命を助かり。御媒介にて夫婦となりし賴員。骨を粉にはたかれ屍を溝に曝せばとて。地色 そもやそも二心のあるべきか。君の御爲夫の爲只管に思ひ過ごし。詞 片意地の親を語らひしより御大事敵に洩れ。地色 夫は不覺の最期といひ。さもしい侍卑怯者。土岐賴員が返り忠と瑕なき玉に瑕付けて。人に疎まれ笑はれ一人の親は敵と成り。世に便りなき フシ 女の身。詞 名ある敵の首取つて。せめて夫の修羅道の迷ひ晴らさんと。一途にはやる心より。地色 御印を見違へ宮に向ひ奉り。只今の尾籠眞平御免ある樣に。取成してたべ侍達と。大地にかつぱと打伏して口說き涙草葉の露 フシ 鎧の。袖を絞りけり。彦四郎あざ笑ひ。詞 ヤア古狐の骨張。ぬつぺりとは化かされず。左程義を知る賴員が女房。など味方へは參らず。母衣袖印に至る迄六波羅に從ふ赤印。口は官軍形は六波羅。思ひがけなく我々に出つくはせ。口先で塗り付ける內股膏藥。其手は食は

ぬと睨付くれば。共御咎めは尤もながら。日本無双の方々さへ。手に餘る大軍に女の腕立て。犬死の端と思案し出立ちを六波羅勢に。地色窶し似せたる一つの功を御覧ぜと。母衣引きほどけば宮の御連枝八歳の親王。濁りに染まぬ蓮葉の汚泥を出づる御粧。村上呆れて大聲上げ。詞扨も嫋衆出來された手柄。地色手柄と御手を取り フシ御前に移し奉れば。地色宮も不思議の御對面。兄弟再び相逢ふ事。女房が忠節。此上の フシあるべきか。味方の勢を催し敵を一時に挫かん爲。親を語らひ時によつて變化する。味方の天運は名將名士も免れぬ所。聊も不忠にあらず。頼員が敢へなき最期。思へばあつたら武士を。失ひし殘念さよと忝くも御大將。御着長の袖を絞らせ給へば。天魔を挫ぐ赤松平賀村上も。共に涙にむせびける。地女房額を地に摺付け。詞物數ならぬ御奉公身に餘る御感の詞。末代の譽れ此上や候べき。とてもの事に夫諸共聞くならば。此嬉しさはいかばかりと スエテ盡きせぬ涙。繰返し。悔む心を取直しずんど立つて身繕ひ。サア此世に思ひ置く事なし。敵陣に駈入り討死し冥途の夫に喜ばせん。お暇申すと駈出づるあれ止めよとの御聲に人々縋り押留むる。大將甚だ御感あり。勇みあり頼もしゝさりながら。詞斯く討ちなされし無勢の味方一騎當千の女。暫らく存へ我に仕へ。幼き弟の若宮おほし立て得させよと。地様々制し給ふにぞ死するも生きるも君が爲。冥加に餘る御詞と フシ猶々感涙せき敢へず。地時刻移れば赤松則祐。宮を諫め早御開きさりながら。御連枝一所に落ち給はゞ行先怪しみ奉らん。詞コレ村上平賀。御邊達は大將の御供し南都の衆徒を語らはれよ。某は早咲諸共此若宮を守り奉り。御父天皇の御安否を聞き合はせ。跡より追付き參らせん。地ヲヽ尤も〳〵四方の御敵いまだ散ぜず。いざさせ給へと義光。大塔の宮を供奉し參らせ フシ足早に。別れ急ぎける。地勝ち誇つたる六波羅勢。網絡の張輿舁かせ聲々に。詞叛逆の棟梁後醍醐の天皇を擒にし。地色六波羅へ成し奉ると先を拂つて進み來る。赤松遙かに見るより早く先に立ちたる軍勢ばら。張りのけ蹴倒し立塞がり。詞播磨の國の住人。赤松入道圓心が三男律師則祐。天皇の御迎ひ御心安かれと。轅の端を片手に摑み。こりや〳〵〳〵と押戻す。地色輿添の帶刀五郎聲をかけ。詞なんの赤松意地張らば打碎き。割松坊主にしてくれん急げ〳〵と數十人。輿に取付き押せども押せども動かばこそえいや。えいやの聲ばかり フシ手足は萎えてうぞ震ふ。則祐につこと打笑ひ。ハヽヽヽ詞赤松肥しの莚

弱めら。地色堪へて見よやと一引き二引き撞木につかせ。大地へどうど引据ゆれば。それ餘すなと打つてかゝる。掻潜り引きはづし。手に合ふ者を引抓み投げ越し〳〵。残る奴ばら フシ餘さじやらじと追ひかくる。地色早咲嬉しく若宮諸共御輿に走り寄り。なう勿體ない是こそ御父天皇様。畏れ多や淺ましや。假初の行幸にも。網代糸毛の御輿車に召されし玉體。詞山賊夜盗の囚人同然。此繩網は何事ぞ。地サア御對面遊ばせと網切り開く輿の中。天皇はましまさずとはいかに。隅田彈正ぬつと出で若宮奪ひ取り駈行くを。腕搦みにしつかと組留め。詞エ、腹の立つ謀られた。地汝にむざ〳〵と渡さうかと引戻せばはつたと睨め。詞官軍に與する殘黨輩。片端に生捕らんと彈正が智慧の網。赤松めに一杯喰らはせ。小鳥網で鶴をせしめた。運強き六波羅殿。のじ張らば一刀放せ〳〵と怒り聲。ヲ、斬らば斬れ大體の女と思ふか心は鐵石。汝が首の千や二千に代へる様な若宮ならず。地色もぢつつ引きつ捻ぢ合ふ後に。隅田が郎等帯刀五郎眞二つと斬りかくれば。ひらり外す早業早咲抜き合はせ斬り合ふ隙。隅田彈正若宮掻込み落ち失せたり。詞南無三寶宮様を奪はれては。もう命も何も入らぬ。せめておのれを地冥途の供の小丁稚と。無念の切先瞋恚の刃金。薙ぎ立て斬込む死物狂ひ。さしもの五郎堪へ兼ね。ひるめば透かさず取つて捻ぢ伏せ フシ首打ち落し立つ所に。地色いづくよりとも白箆に染羽の矢一つ來つて。胸板にはつしと忽ち眩む心を取直し取直し。詞エ、是程のへろ〳〵矢に。何のそのと地踏直す足はよろ〳〵〳〵。踏立つればどうど伏し。又起上り太刀を杖。無念〳〵と四方を睨む眼力も。次第に弱る深手の矢疵。詞ナウ赤松殿。則祐殿はいづくにぞ若宮を取返してたべなうと。地魂ばかりは亂れぬ烈女。形はほつきと折れて若木の早咲が。フシ閻浮の花は散りてげり。地色敵を左右へ斬靡け。立歸る赤松則祐あますなやらじと隅田彈正。駒を進め大音上げ。詞討洩らせし大塔の宮。赤松入道が知つつらん。駿馬の蹄にかけ惱まし生捕つて拷問せん。ヤア騎馬の武者ども。掛かれや〳〵と詐勢を勵まし乘廻せば。地色馬強なる若武者ども我組捕らんと腹帯締め。鐙蹴そらし諸手綱。馬を競はせかくを入れ。尺寸の地も余さず フシ銜並べ取卷いたり。詞律師則祐えせ笑ひ。生捕るとは事をかしや。譬へば周の八疋項羽が騅。呂布が赤兎馬我朝の鬼鹿毛なりとも。地シヤ物々しと大手を擴げ。駈來る馬を弓手へ背け馬手に外し。躍る馬を掻潜り。轡を取つて引廻せば。詞

鐙に懸けんとはたと打つ。打てば沈みひらりと飛び。尾筒を取つて跳ね返せば。落ちじと堪ゆる腰手綱。もちつてかゝれば太腹潜つて蹄を避け。爰に現はれかしこに潜み。五騎も十騎も跳超え飛越し。人馬を惱ます神通力。逆輪に懸けて組みとめんとひた〳〵〳〵と打寄する。駒の足並鞭丁々。障泥の音はぽんはかしつたんさら〳〵。地さら〳〵さつと寄手は引かぬ片手綱渦巻立てる波の紋。左巴右巴くるり〳〵くる〳〵〳〵。くるり。くるくる 三重 へ駈立つる。地子房に劣らぬ赤松則祐身は山雀の摩耶育ち。くるみ返りの飛鳥の術。あらぬ方にすつくと立つて小躍りし。フシ あら面白の牧狩や。三津の御牧か鳥飼牧か。信濃に望月桐原牧。甲斐に黒駒立野の牧。武藏に穗坂小野の牧。生國播磨の家島駒の牧狩かや。詞 此赤松が望む馬は彈正少弼。地瘦馬どもに目は懸けじと。太刀拔き翳し平首前歷薙ぎ廻れば。そりや馬崩し叶はぬと フシ 辟易してぞさつと引く。地大將景任度を失ひ畔道指して逃げて行く。詞 ヤア逃がしはやらじと走り着き。地上帶摑みどうど打付け乘掛り。詞 大塔の宮の御在所責め問はんとは。口のこはいじや〳〵馬め。天皇御父子の御行方。おのれを今拷問する。赤松といふ名馬の駿足。地肋骨踏碎かんと續けさまに踏付けられ。詞 ア、申し申し。天皇樣も若宮樣も六波羅に御座なさるゝ。連れまして來て手渡ししましよ。地馬ぢや。馬ぢやと泣き叫べばから〳〵と打笑ひ。詞 君を苦しめ奉る天罰應へたか。數多討たれし味方の弔ひ。早咲が追善供養。律師が布施には取り足らぬ。汝が首は精進料理の間引菜と。地フシ ちよいと引拔き捨てゝげり。地大將討たれ餘さじと又むら〳〵と寄來る騎馬。轡の下を潜ると見えしが。四足を兩手にしつかと握り。馬も人も一ぐるめ。目より高く差上げ馬礫食らはせんと。群がる中へ投付くれば。フシ 右往左往に逃げ散つたり。地相手なければ是迄なり。六波羅彌天の暴逆なりとも。神の御末の天皇御親子恙はあらじ。無念を忍ぶは暫時の內。大塔の宮の令旨を賜はり。父圓心を始めとし。河內の國には楠正成。備後に小島櫻山。四國に得能土居の一族。東に足利新田の小太郎。諸國の官軍牒じ合せ。六波羅鎌倉踏潰し。公家一統の世となさんは。決定一條大宮通り。九重過ぎて宇治山越え。大和路指して。おゝ〳〵〳〵〳〵。大塔の宮の御跡慕ひ行く脛は赤松。律師力士が那羅延力。三千世界を一跨げ。飛ぶ火の野邊の名に高き般若寺へ。とぞ急ぎけり。

第三

地みやびやかなる女あり車を同じうす。顔舜の花の如しと謡ふ。鄭衛の二風道を蕩し國を賊ふの淫聲といへども。よく讀みよく用ふる時は。却つて國を治むるの誡めなりと註せり。常盤駿河守範貞は齋藤太郎左衛門利行が忠烈にて。大内の御謀叛顯はれ官軍の多勢に討ち勝ち。後醍醐の天皇を隱岐の國へ流し遷し奉り。大塔の宮御行方なく落人と成り給ひ。八歳の若宮並びに御母君三位のお局諸共に擒とし。永井右馬頭宣明に預け嚴しく守らせ。其外宮々公卿大臣に至る迄。武家に背きし輩を死罪流罪に苦しめ。氣焰鷹の如く揚り。威勢雷の如く響き渡れる六十餘州。フシ頭を上ぐる人もなし。地はや初秋の風の色白書院の敷居越し。齋藤太郎左衛門利行。召しによつて參上と手をつけば。詞駿州見給ひヤ太郎左。早速の出仕太儀〳〵。地色サア〳〵直ぐに是へ〳〵と招けども。ハツ〳〵とばかり色代す。詞ハテ入らぬ辭儀手を取りに立ち申さうか。是は〳〵御意を背くは結局慮外と。地色與詰め御譜代お側衆歷々を乘越えて。大將と膝組にフシ媚なくぞ座しにける。詞なう太郎左。此間も云ふ通り今度一戰に切勝つ事。此範貞が武略にもあらず。諸軍勢の働きにもあらず。御邊獨りの娘聟を見殺し。逆寄せにせし忠勤一人の高名。地色則ち鎌倉へ言上追付け恩賞大國の主。何れも列座の面々。侍たる身は太郎左を手本。あやかれ〳〵と譽められてにつこともせず。詞忠を磨き義を鐵石に比するは勇者の守る所。地色御加增を貪らず譽められ度くも是なしと。人のそやしにふは〳〵と。乘らず乘らせぬ人喰ひ馬フシあひ口。挨拶もぎどうなり。詞ヲ其繕ひなき眞直ぐを見込み。賴む事ありて召し寄せたり。語り出すも恥しながら。範貞は此頃戀といふ大病を受け。お見やる通り顏も瘦せ身も窶るゝ。此病の起りは。永井右馬頭に預けし若宮の母君三位のお局。地色思ひ直し氣を變へても心の療治匕廻らず。玉章にて口說かんも俗筆の假名文。手風卑し文章不束なんど。内裏上臈なま上達部に嘲弄せられては。常盤駿河守とも呼ばれ鎌倉の御名代。關西三十三ケ國大將たる身の無念大恥。いかがと思ふになう思案もあるもの。幸ひ若宮。時分柄町々の踊を好き給ふと聞く。盆の間は京童の踊子ども。右馬頭が屋敷へ入れ宮の御心を慰め。煩らはせ參らすなと言付けし詞の情。詞子に迷ふ母お局の心を先づ和らげ。其上に我戀の思ひを形取り。燈籠の作り物に模し。媒介は右馬頭女中ながらさすが雲の上人。文の

代り燈籠に物を言はせし趣向に絆され靡くといふ返事を又燈籠にて送られし。嬉しい心底見せ申さん。扈從ども君が方より返事の燈籠是へ〳〵。あいと答へて奥扈從是も他生の振合せ。誰が袖なりや色深く。染めて千種の。花車。祭る未來のなき魂より。生きて此世の戀路の闇。照らすばかりの風流なり。是お見やれ。最初に此方より根笹の燈籠に水晶の玉を飾り。上には鳶が羽を伸し鯉を掴む作り物。戀に心は鳶立つばかり根笹に霰。觸らば落ちよの心を悟り。袖をかたしき二人寢んとの返事のたが袖。又此方より松に紅葉の燈籠。焦れ待つとの心を受け。色に惹かれて巡り寄るとの此花車。辱けない。太郎左。太郎左聞いてかく〳〵と。言へども更に見向きもせず。聾ではござらぬ。頼み度き事ありとのお召し。取敢へず參りしにどれ何を頼む

事。當分軍鎭まれども。大塔の宮行方知れず。近國の武士過半心は天皇方。味方の鎧兜ゆるりと脱がれぬ此時節。まだまだと戀話。弦をせき矢の根を磨くに隙ござらぬ。燈籠より兵糧の用意罷り歸ると立たんとす。ヲ、親爺氣短な。始めを云はねば末聞えず。斯く戀は叶ひながら迎ひの車乘物にて。幾夜待てども今に來ず。女の迎ひに若き侍も氣遣ひ。老足の太儀ながら今宵かの君を迎ひに。親爺。頼むといふ顏をじろりと見て。罷りならぬ。齋藤太郎左衛門利行。一生に出合女の取持ち致さず。始めより媒介の右馬頭に仰せ付けられい。夜に入り辻に立つ夜發の遊女の支配する。妓夫とやらもうとやらの業。侍のせぬ事。若し三位の局。首引き拔いて參れなどゝの御用は。何時にても仰せ付けられと。重ねて取付く詞なし。お次の間より。薫物

のさつと薫りて御取次ぎ。永井右馬頭宣明が女房花園。三位のお局樣よりお使として參上と。聞きも敢へずヤア其便り待ちがね山の時鳥。早う聞きたい〳〵と。招くにおめぬ侍の奥方の威は生れつき。三十路餘りに老暮れながら疊觸り詞つき。色香殘りてうづ高く。夫右馬頭お預りのお局樣へお文代りの燈籠。優しい御趣向感じ入らせられ。あなたも燈籠のお返事。其上に此お浴衣模樣はお主のお好み。磯打つ波に帆掛け船。殿樣の戀風を開きに受け。思ふ港へ焦れ寄らんとのお物數寄。殘暑のお汗取りにとの御口狀と。肩に掛けしを取る間遲しとしがみ附き。やれ〳〵。夢か現か嘘か誠か。我が戀風を帆に受けるは。あつちからもほの字ぢやの。おれにほの字の帆が見ゆる。是忝ない天の羽衣と額に當て。ムウ〳〵ウ伽羅〳〵。君が移

り香抱き寄せ。締付け舐り付き。大將の甘い顔齋藤が澁い顔。澁いに甘い柿の本。ほの〴〵ほの字。阿房のほの字フシつもると知らぬ愚かさよ。やう〳〵心落し着けヤイ花園。詞是程のお情に。迎ひをやれども雨が降る風が吹くとて。地色つひに枕を並べぬは底意が解けぬか氣が苛れる。心が揉めるどうぢや〳〵とありければ。詞ア、お氣のせくはお道理。又あなたにも尤も。私夫婦がたつて申せば。涙を零してなう花園。貞女兩夫に見えず忠臣二君に仕へず。武士と女の義理は一つ。天皇樣のお目をかすめては末代迄女の惡名。六波羅殿へ申し。天皇樣かねてお願ひの通り。隱岐の國より還幸なしまし。鳥羽の藥家の古御所に置き參らせて下されば。若宮樣を手渡しゝ此身はお暇申し受け。地色いづくに障り支へもなう六波羅殿と添ひ度い。さも無うては下々の女の間男。同然とのお話。詞厭と云はれぬ尤もな御心底。地色兎角天皇樣さへ還幸なればお前の戀はする〳〵。一天の君のお願ひ叶ひ。ア、嬉しやと思し召さば。皆殿樣の冥加お身のため國土の爲。女の及ばぬ智慧ながら。天下太平の瑞相とフシ存じますとぞ申しける。詞ム、ウ尤も〳〵。天皇の目を盗みては女の道立たず。我も男の義が立たぬ。地色願ひの通り天皇を呼返しても何事かあらん。膝とも談合太郎左衛門。分別何と〳〵と云ふを打消す尖り聲。詞余程に盡くさつしやれ。膝とも談合とは似たか〳〵の事。此度敵味方手負ひ討死何千人。京鎌倉の騷動は。天皇を流すか六波羅殿の切腹か。二つ一つの埒をやう〳〵討ち勝ち半年立たず。太刀刀の血も干ぬ内。天皇を還幸なし。打洩らされの宮方隱れ住む眞中。王城より一里に足らぬ鳥羽の御所に天皇を置くとは。火燧箱に煙硝入れて晝寢するより危い事。斯く申す太郎左衛門。聟娘は忠戰の刄に死し我は六十に手が屆く。命を塵とも灰とも存ぜねば追從云はず。齒に衣着せぬ談合はお氣に入るまい。地色永壽命長久子孫繁昌後の榮花を樂しむ。井右馬頭に御相談と。膠もフシしや〳〵りもなかりけり。地色花園くわつと色を赧め。膝に膝を突掛け。これ。詞齋藤太郎左衛門殿。口上が過ぎる聞き憎い。又しては忠戰に死せし娘とは。娘の討死が左程自慢か。ヲウそなたの氣では珍しかろ。縱へ女でも其家に生れては。人を斬るも討死もこちや珍しうないわいの。したがそなたの娘の樣に夫に無駄腹切らせ犬死さする樣な事は此花園は得させまい。是ばつかりはならぬわいの。イヤお手柄ぢや自慢が道理。何ぢやの。命を塵とも思はぬとは云やるが管。侍たる身の本

心。壽命長久後の榮花を樂しむ右馬頭とは何故の戯言。云ひかゝつては言ひじらけに濟まさぬ女サア 地聞かうと。夫を庇ふ男勝り。太刀刀持たせなば。フシ斬りかねまじき氣色なり。詞ハレヤレ女中は根強い。申したり饒舌たり。これ其證據は。殿に靡かぬお局の心燈籠浴衣に見えたるを。却つて戀の叶ふ返事と當分御意に入らん爲。地色上ずんべりの輕薄一寸遁れの身用心。命惜しむ證據〳〵と疊叩けば。ア、置いて貫を埃が立つ。詞是忝なくもこちの男は。腰折れ歌の一首も連らね。連歌俳諧の文字數も覺えた人。何が戀やら無常やら田夫不束なそなたが。あんまり口が過ぎるがの。三人寄れば公界。年寄りの言ひ損ひは見苦しい。サア聞き度い。ヲ、聞かせう。早う云や。ヲヲ云はいでは。あの誰が袖の模樣は立つ波。なみはうらに立つと見るが心の付け所。子供も覺えた百人一首の。恨みわび乾さぬ袖だにあるものを。戀に朽ちなん名こそ惜しけれとの歌の心。天皇を流し。若宮を生捕り苦しむる恨みの涙。乾かぬ人に靡きては。戀に朽ちなん名こそ惜しけれ。口惜しけれと判じたが叶はぬ戀の第一。色に惹かるゝ車とて。櫨紅葉も指さず薄刈萱萩桔梗。草花繁きはこれ深草。かの少將が百夜の車小野の小町に誑され。九十九夜めに焦れ死す。叶はぬ戀の是二つ。浴衣は波に帆掛け船。思ふ港へこがれ入るには揚げたる帆をもおろす習ひ。此浦船に帆を揚げて沖のかたへ走り舟。海の沖を象どるお局の魂は。隱岐の國へ通ふとの 地下心文盲不束な太郎左衛門見立て。非言あらば打つて見よ何と。何とゝ責掛けられ。ハア、さうであつたもの。名歌名句も聞く人の氣々によつて變ると云ふ。まそつとの所へ心附かず。殿の御前諸人の中で言ひ籠められ。夫も不勘の誹りを得。エ、口惜しい無念なとスヱテ忍び歎けば伺候の人々。見懸けによらぬ齋藤が風雅。蟇目に歌詠みも フシあらう事とぞ囁きける。地色大將範貞面色變り。乾達婆王の怒れる聲。靡かずば靡かぬ迄。範貞程の者をぬけ〳〵と誑らかす狸女。よし〳〵此返報せんそれ〳〵精靈燈籠持て來いと。外方にとぼす盂蘭盆の。切籠燈籠取寄せ是見たか。詞局に戀を思ひ切る名殘りの音物。地色右馬頭が名代は花園。齋藤太郎左衛門兩人立合ひ工夫し。此心を悟りし者直ぐに使。口狀は此燈籠にありサア寄つて判じて見よ。畏まつたと花園額を傾け暫らく思案し。ハツア、聞えた。詞總じて此切籠には四方に四つの角ある物。帝のお願ひ叶はず。地年に一度の精靈となつて還幸なれとの御口上と。引提げて立たんとすヤイ〳〵

待て／＼。其様に鈍げな廻り遠い事でなし。太郎左衛門智慧に及ばぬか。詞ハ、ア何の是しき知れた事。切籠とは子を切る。お局の子は若宮。戀の叶はぬ憎しみ若宮を切子のお使。地色齋藤太郎左衛門承る。詞ヲ、頓智發明黑星／＼。地今宵子の刻知死期迄に若宮の首斬つて見せよと。詞座を立ち給へば花園駈寄り裾に縋り。若宮の御首を餘人に打たせては。預りの規模もなし太刀取りを右馬頭ヤア皆まで云ふなならぬ／＼。然らば檢使を仰せ付けられい。猶ならぬ。地檢使太刀取り共に齋藤太郎左衛門はや急げ。妾放せ女めと蹴散らし奥に入り給へば。左右の諸士もばら／＼と。フシ皆々座をぞ立ちにけり。地齋藤も切籠ひつ提げ。續いて立つを走りかゝり長袴の裾しかと踏止め。詞太郎左衛門殿無心がある。大事の預りの生捕り肝心要の落着に。太刀取りも餘人言渡しの使も餘人。地色檢使も餘人に取られ。うつかりと見物する右馬頭何を面目。年寄りに役過ぎた一色渡せ。さもない内は動かせぬと　フシ膝節堅め踏留むる。詞こざかしい女郎め。脛骨の折れぬ先退かいでな。イヤ立ちすくみになつても返答聞かねば動かぬ。地色ヲ、返答はまつ斯と。引く力踏む力袴の裾はふつつと切れ。躍り出るを飛びかゝり。烏帽子の頭をづかと掴んで引く程に。烏帽子は脱げて頭に。纓緒かゝつて結び目解けず。錣を取られし三保の谷はえいやつと云うて前へ引く。是はのつけにしいともやつとも喉吭締つてぎちかはばかり。脊骨を打たせて仰向けに。どうど引据ゑ燈籠もぎ取り。切籠のお役永井右馬頭宣明と。呼ばはれば起上り。氣の永井ぬるまの頭。武士の眞似仕損ずなと。睨む眼は樟腦玉。燈さぬ先に燈籠の影を。照らして　三重

若宮紅梅の短冊

地天照らす。フシ月日の種の。御身にも。地世の浮雲に覆はれて。まだ八歳の若宮御母君。楚の捕はれと傷はしくも永井右馬頭。宣明に預けられ圍嚴しき二重垣。荻吹く風の音ならで。スヱテ哀れこと問ふ者もなし。地色今日の御機嫌伺ひと御前に出づれば。宮は机に何となき御手習ひの藻鹽草。詞ヤア右馬頭あの鐘は入相か。地色扨秋の日の短かさよと。御いたいけにらふたげに。フシ打侘び給ふ御目元。詞是は／＼何事の御述懐。此頃夜な／＼町人の子供を庭へ入れ踊らせ申すも。私の計ひならず。隨分宮様を慰め大事にかけよと。六波羅よりの下知。是も母君御物好きの燈籠にてなだめられし故。荒氣の大將心和ぎてのいたはり。此上にお氣結

ぼれ御藥などと候ては。母御樣への御不孝。盆の間は御手習ひも御休みと。地押しやる机に紅梅の短冊。御詠歌と思しくて。つく〴〵と思ひ暮して入相の。鐘を聞くにも君ぞ戀しき。詞アツア斯程迄御父帝を慕はせ給ふ。平人の子は父母を慕ふにも。只めろ〳〵と泣くばかり。地色俗を離れし天性の。御痛はしさよとばかりにてフシ顔を傾ぶけ泣く聲に。地色御母局走り出で。詞なう〳〵叶はぬ事にお心を傷めずとも。時節次第と思し召せ。隱岐の國より還幸の訴訟に花園頼み。六波羅へ遣はせし。歸りの遲いはお願ひも叶ふと。頼もしう思し召せ。此踊帽子踊帷子花園の心付け。我子の鶴千代と一樣に染めさせて献上。地色是を召して鶴千代と仕組踊のしゆらい遊ばせ。サア召させかへんと御手を取り袙長絹引きかへて。浮世模樣の染め浴衣かざしの花の染め帽子。花鬘の御腰付き育ち氣高き雲の上。鶴千代參れと父が呼ぶ同じ出立ち同年。姿ばかりは見かはせど詞及ばぬ人相を。譬へば空に澄む月と。フシ水の月との如くなり。サア〳〵踊ろ右馬頭音頭〳〵と宣へば。詞エ、イ私に音頭是は迷惑千萬。踊りも音頭も見るが上手口で申すは赤下手。地色女房花園歸る迄御待ち。私はお詫び〳〵と云ふ程母君打笑ひ。詞是は宮樣よいお好み。花園は毎夜の事。地色是非に所望と責められ。顔を赧めて近頃御無理なんとせう。然らば忘れし所は先へ飛び節のいかぬはどぢくぢや。拍子違ひ間違ひは御免〳〵と。扇を翳し音頭松竹千代とさ。地面白の花の盛りや祇園清水。地主の櫻が咲いたか〳〵眞盛り。行かうかのハテ行きもせい。天も花に醉うたとさ醉うたとさ。醉うたる色は赤面。山王の櫻の木に猿が三萬三千三百三十三匹下つた。猿子抱いてぶら下れ父と嬶と打連れ。歌西國順禮胸に木札の絕ゆる間もさんやれ〳〵。いとしけりやこそしとゝ打て。憎か打たりよかおてんと天と手がそれて。それで戀路に迷うたえ。詞是は〳〵隱し藝音頭がよければ手拍子も揃ふ。地六波羅の物頭永井右馬頭と云ふ歷々が。若宮の踊なればこそ眞實の御馳走と御喜びの所に。花園切籠携へしを〳〵として立歸れば。詞なうよい所へ戻りやつた。珍らしい右馬頭の音頭。宮樣鶴千代揃への踊賑はふ折柄。六波羅殿の返事も嘸吉左右。目出度い事早う聞きたし〳〵と。地勇み給へば猶言はれず襟を浸せる涙の體。詞ヤア女房。必ず吉左右申すにも極まらず。地善とも惡とも泣いて居て濟むことか。無調法なと叱られて顔を上げ。詞なうおいとし樣や御運が直らぬ。折しも惡う慳貪邪見の。齋藤太郎左衛門が御

前に居合はせ。此頃やう〳〵殿のお心を和らげし。燈籠浴衣の模樣迄さん〴〵惡樣の評を付け。右馬頭は何も見分けぬ盲目の樣に言ひ破り。地色以ての外御腹立ち此切籠がちなたの口上。お使は卽ち太郎左衞門追付け來る筈。エ、〳〵〳〵腹の立つ。せめて小刀一本あるならば齋藤めが橫腹刳つて。御前で美事に死なんもの。面押拭ひおめ〳〵と立歸り。何と申す詞がない。口惜しい宣明殿とスヱテ齒切りして無念泣き。宮御親子怪しみ氣遣ひ給ふ御氣色。右馬頭聰き男子。詞エ、此切籠合點〳〵。此頃洛中の風說。右馬頭が油斷にて宮は行方なく落ち給ふと。誰が云ふともなき取沙汰。六波羅殿の耳に達し。切籠の四方の隅々火を燈し照らすが如く。日本の果の隅々迄。尋ね探さんとのお使。齋藤承りしな。さうであらうがな。なさうか地さうかと目まぜて問へば目まぜで受け。詞アア、アア、いかにもいかにも其通り。地齋藤が來るに間もあるまじ宮樣に逢はせずばなるまいか。詞いつかな思ひも寄らず。我を召して直に仰せ付からば。諫言の仕樣もあるべし。預りの我を踏付け人も無げの振舞。のめのめと宮の御對面罷りならぬ。地色彼奴諸人の交際なく誰彼を見知らず。鶴千代を若宮にしなし對面させ。利口達する齋藤。一本擔げさせて腹愈せ本望。詞これ鶴千代。太郎左衞門に逢ふ時立居物腰。宮樣をよう似せよ。地色兩御所は築山の涼み所に竊かに〳〵。鶴千代も先づお供せよ。何事ありとも宣明が。惡しくは計らひ申すまじと申し上ぐれば。夫婦の親切何時の世にフシ忘るべき。地色萬事そこに任すると。若宮の御手を引き。鶴もこちへと打連れ奧に入り給へばフシ霧に埋るゝ。地遠寺の初夜オクリこう〳〵と。こそ聞えけれ。地色門前に轡の音齋藤太郎左衞門利行。上使なりと案内す南無三寶。冥途の使近附いた。詞なう今の目まぜは切籠の心を判じ。鶴千代を身替りに斬る合點か。おんでもない事狼狽ゆるな。ハア、地悲しや人は情と云ひながら。宮樣が相傳の主君でもなし。科もない我子を殺さずとも。まちつと思案はあるまいか。詞此瀬戸際に思案どころか。尤も若宮にさせる由緒はなけれども。我は顏する齋藤めに。人違させ不覺を取らせねば。武士と武士との義もなく勇みなし。地色弓馬の家に生れし身は一旦の譽れより。畢竟の締りに後指さゝれては。一代の手柄も水の泡。鶴千代が首打ち彼奴が門を出るや否や我は切腹。お事は兩御所お供して裏門より大和路。大塔の宮へ渡し參らせ周章た體見するな。淚零すな座敷の塵取り。神妙に是へ通せと俄かに思ひがけも

なき。乗りかけた壁に右馬頭。フシ騒がぬ覺悟ぞ勇士なる。地色程なく齋藤廣間に入り上使なれば罷り通ると上座につき。詞太刀取りお使下拙に仰せ付けられしを。御内室遮つて望み。切籠の御口上委細申すに及ばず。地色用意よくばとく〳〵宮を出されよと。につこともせぬいがみ面。詞ハテ預り人の首打つに何の用意。さりながら上の御許しにて。若宮毎夜の踊今夜も何心なく踊帷子。式法の袙に召させ替ゆべきか。何さ〳〵。首さへ打てば身體は裸でも構ひなし。地更けぬ先早く〳〵とせがまれて心を碎く。父母の教へ忘れずフシ鶴千代立出で。ヤイ右馬頭。詞六波羅の使齋藤太郎左衛門とはあれか。地麿一人に誰々も太儀〳〵と大人しやか。はつと手を突き敬ひて。涙に重き夫婦が額。スヱテ上げかぬるこそ不便なれ。地齋藤かつら〳〵と笑ひ。詞ナウ右馬頭。鷺は眞白烏は眞黒。どれがどうとも人目には見分かねども。汝どちはよく見分くる。況や人間若宮の顔ついに見ねども。平人の子と天子の子威光でも違ふ筈。推量が此餓鬼御邊が一子鶴千代な。サ誠の若宮見たい〳〵。イヤ見度うても聞き度うても預りの宮是ならで外にない。ム、確とないか。ヲ、ない。地色よし〳〵あるか無いか家探しと。立上ればイヤどこへどこへ。詞永井右馬頭宣明が住宅。命に若生あらば踏込んで探して見よ。地兩枝斬つて斬下げんと反を打つて睨めつくる。詞ヲ、此年迄言ひ出す詞變ぜぬ齋藤太郎左衛門。地反打つた兩腕薙ぎ落して通らんと同じく柄に手を掛くる。詞ム、ならば斬り落して通つて見よ。サア斬つて見よ　地通つて見よと眉間と眉間摺り合ふばかり。詰寄せ〳〵　フシ既に危く見えたる所に。地色御母局走り出で。齋藤が直垂摑んで引退け引据ゑ。詞これ若宮奥へ往て鶴千代と踊の用意なされ。ヤイ太郎左衛門。ついに逢はぬ三位局よう見て置け。エ、まぢ〳〵とした此顔わいの。皆聞いてたも是が娘早咲は。始め禁中お末の宮仕へ。土岐頼員と忍び合ひに。度々晴の奉公を缺く不義の科。兩人死罪に極まりしを人は情と思ひ　地色自らが身に代へ御前を申しなし。命を助けしばかりか世間廣う夫婦と成し。其妹人も自ら。情の恩を忘れず六波羅を捨て味方に與し。恩に命を捨てたわいの。其親男岩の峽間の草か木か。恨めしい物知らずと。人の辛さ身の憂さを數へ立て　フシ口說き立て聲も。惜しまぬ御歎き。餘所には知らぬ。地踊子ども揃ふ手拍子揃へ歌。そよ〳〵風に誘はれて　ナクリ門外へ近く聞えけり。地花園涙にくれたがらたら齋藤殿。詞幼い宮様事を分けて申さねば。お命取ると

は御存じなし。いつもの如く踊らせまし。御機嫌よい所をだまし討ちに打つてたべ。地 せめての憐み是一つは。御了簡と手を合はすれば鬼にも涙。詞 ヲヽ逃げ廻るを掻首にせんより。踊りの中でずつはりとだまし討ちは我等も勝手と。地詞 たるめば右馬頭。詞 以前の如く胡亂な眼に。人違へして斬り損はゞ直ぐに御邊が首が飛ぶ。性根をつけよと鍔打ち叩きし眼ざし。ヲヽ齋藤が刀の斬れ味。見て吠えるなと股立からげ突立つたり。サアサア 地 宮樣鶴千代踊り〳〵と。子を呼ぶ善知鳥安方の安き間もなき親心。庭に入り來る踊子に立交りても此二人 フシ 砂子の中の黄金かや。

身替り音頭

フシ 母は今宵ぞ。名殘りの音頭是やこの。七月の十六日は佛の慈悲。奈落の底の罪人の呵責の炎休ませて。充滿御願如淸涼池と謠ひ踊りて遊べども。長地 十七日の曙は元の奈落に苦しむと盂蘭盆經に說かれたり。我子は罪人ならねども。踊は宵の夢の內此曙は死出の山。さぞ父戀し母戀し。戀し〳〵と鳴くは冥途の鳥かエ。三重 冥途の旅に行く鳥と。娑婆に殘れる親鳥の。涙に絞る袖の露。消えし昔の物語。踊子衆も父上も。聞いて諦らめ フシ 給へとて。タヽキ 語るも同じ涙ぞや。いにしへ多田の滿仲の。夢幻の世を觀じ。乙の若君美女御前。三重 墨の衣に染めて染めまらぬ御怒り。美女が首打て仲光と。主命遁るゝ フシ 方もなし。無慚なるかな仲光は。斬れとあるもお主なり。斬り奉るもお主なり。兎角我子の幸壽丸御身。替りと思ひ込む親の。心を子は知らず。フシ 手振り袖振り踊振り。見るに消え消え弱る心を取直し。斬つて替へたる末世の手本。武士の鑑の露塵程も。心殘すな我も殘らぬ今が思ひの切り所。思ひのな切り所さ。地 サア切り所それ斬つていの〳〵。切り所サと我子の廻りに泣く泣くも。斬れサ。斬れサと敎へても。脇目して宮を〳〵と心を付くる熊鷹眼。宮を打たば遁さじと腕を固めし一世の鍔際。何れが打たれ斬られても悲しみは母君一人。共に死脈の現か夢か。是は因果の踊の輪。廻り〳〵て宮の廻りは音頭が圍ひ。我子の廻りに爰で斬れサ。是を斬れサ。敎へても又やり過し。猶も輪回の幾廻り。長き思ひをかけんより。只一思ひに爰で斬れサ。地 心得たりとひらりと見えしは刀の電光。踊の廻りか手の廻りか。二人は外れて次ぎの子の。此奴の〳〵奴の奴づゝみの幼な首。水もたまらずつぱと落ち。太刀押拭ひ立上れば。そりや斬つたわ斬つた〳〵と フシ 踊は破れ皆

ちり〳〵。地花園若宮鶴千代引退け。見ればば命に恙なし。三人ハア、〳〵はつとばかり眩み切つたる心の闇に。火を揚げたるが如くにてスヱテ初めて。氣息を繼ぎにける。地右馬頭心を治めこれ齋藤。詞宮を助け奉りし志は神妙ながら。數ならぬ町人の子を斬らんより。なぜ鶴千代が首打つて。宣明が志を立てさせぬは。但し所存ばしあつての事かと咎むれば。數ならぬ町人の子とは恨めしい。此首は土岐右近の藏人。額員といふ弓取の忘れ形見。娘早咲が體内に宿りし我孫の力若丸。地數ならぬ町人の子と踊振りにも見るならばさぞ若宮とは雪と墨。何の詮なき身替りと首投げ出し。親子共にむざ〳〵と無駄死させし可愛やと。一生我强き齋藤が初めて涙の萎れ顏。黒鐵の丸かせのスヱテ踏鞴に湯となる如くなり。地人々手を打ち扱は孫かと帽子ほどけば。鬢結うたる太子髮。額氣高き引白粉眠れる花の死顏。打ちも打つたり打たれも打たれたり。子によつて親々の名を擧ぐる栴檀の二葉とは此事。宮の御爲鶴千代が爲にも身替りと。あなたこなたへ戴かせ〳〵。



左程天皇に忠心とは存ぜず。情知らずの齋藤物知らず人でなしの太郎左衛門と。過言は御免下されスヱテお詫び申すと手をつけば。詞ヤア天皇へ忠心とは紛らはしい言分。元より六波羅方の某。舍利が甲

になるとても二心ある太郎左衛門でなし。皆これ聟の頼員が忠節。なまじひ官軍に與せしその甲斐なく。地 雑兵の首一つも取らず無駄死したる不便さ。此子を守り立て天皇の御用に立て。父めが修羅の鬱憤を。散じてくれんと思ふ折柄。詞 若宮の首切籠のお使。すは聟が名の揚げ所。人手には渡さじと思ひ。嚴めしき先陣を望む如く。大人氣なくも内室花園と。面を赤め爭ひし故にこそ。地 一天四海の主となる宮を助けし聟が高名出來いたな。今生にては漢の紀信が忠義に超え。未來閻魔の廳にては。黄金の札の フシ 一筆とや。詞 ヤイ人死しての魂魄も。知死期迄は身體を去らずよつく聞け力若。侍たる身の果報の死とは蒲團の上の病死にあらず。地 戰場に向つてよき敵に出合ひ。につこと笑ひ尋常に討死は。文武に富める果報の武士。詞 コリヤおのれを打ちしはな。六波羅の侍大將齋藤太郎左衛門利行。敵に取つて不足なく。地 踊の庭は軍の場音頭は鯨波の聲。晴業の討死果報者武士のあやかり者。現在望み違すれば未來は九品蓮台。今の音頭を引導にて魂冥途の鳥となり。父よ母よと呼ぶついで。祖父をも呼んでくれよとて。堪へに堪へし齋藤が泣きかゝつては留めどなく。天に仰ぎ フシ 地に轉び涙。千條の縄簾亂れ。叫びて歎きしが。詞 ヤ忘れたり是よりは檢使の役。地 お暇申すと首を捧げて立上れば。御母局泣く泣くも。詞 位ある生捕は引渡すさへ輿車。後醍醐の天皇第九の宮の御首。あからさまには畏れあり。地 此御柏を八葉の御車と渡し給へば御首を。包むに餘る忝なさ涙に老の足弱車。暫らくなうと右馬頭差添拔いて我子の髻。秋の薄と切り拂ひ取直して我髻。ふつと切つたる輪回の絆。死すべき悴は助かりし。力若が爲の子道心。我は武士を捨て坊主。侍ならねば忠も入らず義も入らず。二心と人も笑ふまじ兩御所の御供し。御出世迄の諸國修行巡ぐる月日は返れども。歸ら



ぬ死出の御幸の車。魂は天子の御所車。魄は乳人が肩車。父には別れ母には別れ。一人の祖父も捨てゝ行く。亡き精靈も來る盆に何とて娑婆を秋の風。恨み喜び悲しみ妬み。情よ仇よ敵味方。人間有爲の喜怒哀樂は無常の。庭のひと踊り敎へて歸る子は佛と悟りて。別れ別れけり

第四　大塔の宮熊野篠懸

諸共。　に哀れと思へ。山櫻。花に心を蘇民書札の。姿に變へて大塔の。宮も草鞋の旅衣。スヱテ今ぞ初めてみ熊野の。先に落着く當もなく。忍び落ちさせ。フシ給ひける。天照神の御末にて。龍樓鳳闕の内に人と成り。華軒香車の外とては。いつしか君が稀れにだに踏みも馴れさせ給はねど。螺鈿の笈を肩にかけ。フシオクリ先にへ歩みの弱氣なく　フシ心も。堅き金剛杖。附添ふ赤松律師則祐。又四郎フシ平賀の三郎國綱。村上彦四郎義光ならで　フシ外に御身に。添ふ者は。人にうそふく法螺の貝。兜巾錫杖篠懸の。いかにふり行く世なるらん長汀。曲浦の旅の道心を碎かせ給ひける。御有樣ぞ痛はしき。スヱテ由良の港を見渡せば。おのが樣々入る舟や又出づる。舟の舵を絕え浦の濱ゆふ幾重とも小オクリ知らぬ。波路に漕ぎ別れ跡なき。風に鳴く鷗。沖の浮洲の浮きながら底の。心の深緣。松に懸からで藤代の。峠は空に這ひま



とひ。フシ雲も散り居ぬ天の原こや天。上の。塵泥を爰に捨てゝの高峰かやいや。吹上の浦風に。積り〳〵て。君が代の今も道ある和歌の浦。千代の齢は知らねども。雲井を戀ひて。鳴く事は蘆邊の田鶴も我が身も。セフユリ一つ流れの水。上はフシ幾谷川の。落ち合ひて。渡るも難き岩田川。昨日は詩作り歌に詠み。長地じきにかくとは思ひきや今日見る賤が營みの。辛くも汐の。身にぞ泌む。切目の王子に着き給ひ。スヱテ各法施を奉り。丹精無二の御祈りオクリ誦經の。聲に打紛れ。胸に木札の歌普陀落や。岸打つ波は三熊野のフシ那智のお山を。順禮の歌唄ひ連れ下りしが。ワキ地御前に畏まり。詞いまだ知ろし召されずや。當山の別當六波羅の武命を含み。地色君を待ち受け奉れば大義の計略なり難し。十津川の方へ渡らせ給ひ。時の至るを待ち給へ御道指南は我々

ぞ。いざこなたへといふしでのフシ神がく。れして失せにける。シテ地色宮御喜び斜めならず。これ權現の告ぐる所我が武運神慮に叶へり。勇めや勇め方々と。二人フシ又十津川と尋ね入る其道巖。峙ちて。去年の寒さの降積る。峰には殘んのフシ雪解けて。地千尋の谷水藍を流し見おろせば目眩めき。又萬仞の高嶺は。本フシ星も手に取るばかりにて。見上ぐるに氣も消えつべし山路に五穀無うして。木の實に朝夕の飢を凌ぎ。東西分かず夜晝は木の葉まばらの梢より。洩れ來る影を力にて御腰を押し御手を引き。切れし草鞋の替へもなく御足も缺け損じ。流るゝ御血の肝に泌み。フシ御草臥を勞はれば。地いやとよ山伏は山に伏す。草には伏さじと御戯れフシ笑ひに道も捗取りて。猪が瀬湯淺。蕪坂小原芋が瀬打過ぎて。熊野高野の中津川。孤村の辻に佇みて疲れを。晴

らさせ三重へ給ひける
フシ霞につれて。地櫻散る春の山路を行手の難所。菱垣高垣兵具ひつしと立並べ。風も通さぬ關所の圍ひ。平賀の三郎國綱宮の御前に畏まり。詞樵夫が申せし詞に違はず。是こそ芋が瀬の庄司忠宗が。君をとゞむる新關打破つて通らんは大事の前の小事。地色頼んで御通りあるべうもやと關所の前に突立ち。詞後醍醐の天皇第三の宮征夷大將軍護良親王。逆臣に襲はれ此道を御通りなるぞ。庄司を頼み思召さるゝ木戸を開き逆茂木を拂ひ。路次の警固仕れと高らかに呼ばはつたり。地色關所俄かに騒ぎ立ち待設けたる大塔の宮。生捕つて功名せよと警固の軍兵鑓長刀。フシ矢先を揃へてひしめきける。地色大將芋が瀬木戸開かせ躍り出で。詞六波羅の御諚もだし難く新關を搆え待設けて候へども。王土に住みながら宮に敵對もなる

まじ。又左右なく通さんも六波羅の聞え。御供の内一兩人繩をかけて引かるゝか但しは錦の御旗を渡さるゝか。地色二つに一つなるまじくば力なし。一矢參らせんと フシ片手矢矧げて罵つたり。地色堪へぜいなき律師則祐眼をくわつと怒らし。詞ヤア芋喰らひの屁つぴり親爺め。熊野山家のとろくに住んで京家の武士の心は知るまい。コリヤ此首はころりと落ちても繩かけらるゝ白痴はない。まして錦の御旗をおのれ等づれに渡さうか。地色望み吐く顋た骨蹴裂いてくれんと駈出づる。詞平賀縋つて待て／＼則祐。危きを見て命を捨つるは臣下の習ひ。兎ても角ても宮を通し參らすこそ大望成就の基とは思はぬか。地色芋が瀬の庄司が望みに任せ某彼が手に渡らん。繩かけよ則祐と後手になつて駈塞がる。いや／＼存じも寄らぬ事。我に任せと駈出で／＼止めてもとまらず動かせず。フシ止まれ放せと競合うたり。地宮兩人を制し給ひ。詞則祐が勇は北宮黝が勢ひを凌ぎ。地色平賀が忠は孟施舍が義を守る。ヲ頼もしゝ フシさりながら。地義兵を思ひ立ちしより命を戰場の的に立て。心を險阻の南山に碎き今迄附添ふ方々は。臕だ手足も同じ事旗を渡して庄司を宥めん。逸つて事を仕損ずるなと宣へば。詞赤松平賀詞を揃へこは言ひ甲斐なき御諚や候。朝敵追伐の御門出旗を渡すは不吉の相。是非御無用とゝどむれば。地色いやとよ戰場に物具を捨て旗を敵に取らるゝ事。恥に似て恥ならず縱へ恥辱になるとても。地汝等が命に フシ替ゆべきか。地色生きるとも死ぬるとも必ず一所とばかりにて。スヱテ御目に餘るはら／＼涙。地こは勿體なき御詞と二人は平伏し冥加涙。芋が瀬の庄司返答いかゞ遲し／＼と責めかけたり。宮御笈を押開き。金銀にて日光月光を打つたる錦の御旗取出し旗竿にかけさせ給ひ。汝必ず天恩を戴き フシ榮花を期せよと賜びければ。地色庄司御旗押戴き此上は仔細なし。それ／＼と木戸開かせ オクリ 色代へしてこそ通しけれ。地色庄司軍兵を近く招き。詞サア手も下さず上々の仕合せ。六波羅の御前は宮に出合ひ。手痛き戰ひ御旗を切り取つたりと。僞りは出放題。何と御褒美は金であらうか。但し米か。若し國郡を賜らば福德の三年目一刻も早く上京せん。馬よ鞍よと用意の最中。地色村上彦四郎義光宮に後れて駈付けしが御旗を見てびつくり。詞これ／＼方々其旗は。斯樣／＼と庄司が答へ。地聞くや聞かずに飛びかゝり。大地にどうど踏み付け。詞忝くも天子の御子朝敵追伐の御門出に參り合はせ。大凡下の奴輩が御旗を手にかけし。地色天罰思ひ知れと胴骨ぎやつと踏みに

じれば。旦那を救へと軍兵ども。フシ一つになつて斬りかゝる。地ならしほらしや汝等も主の先途見屆くるが。サア來い來いと當るを幸ひ。取つては引寄せ人礫はらり／＼と　三重へ投打つは。地色童が礫の印地打。庄司を初め逃散つてあたりに近附く影もなし。逃ぐるに途方失ひ／＼御旗大事と引擔げ。逃げ蹈む芋が瀨が下人。ヤアいづく迄御旗返せと追掛け。ぼつかけ御旗捩取り。大の男を取つて投げ足下に踏まへ睨めつくる。續いてかゝる雜兵の鐵の綿纏摑んでぐつと上げたる其有樣は。末世に神社の繪馬にも。名高き山峰谷を越え宮の。御跡　三重ハ詞地氣違ひよ／＼。氣違ひよ泡齋よ。氣違ひよ／＼と。名乘る人こそ氣違ひなれ。次第姿。老木。の。色もなき。吉野初瀨の。師走の空。高雄の山の春の暮。散りて。亂れん。花もなく。風もいとはぬ。セツルリ秋。の葉の。ナホス何故狂ひ。フシそめけるぞ。かざしの藤の花葛。是や亂れて狂ふらん。地嫁の蔓生娘の呉服纏き跡を慕ひ出で。情なや叉爰に現なき御有樣。詞熊野十八郷の其中にも。芋が瀨十津川孫在。三郡の主にて。仁義者と人も怖ぢるお身。地色何故かゝる亂心。スヱテ悲しさよと泣き口說けば。詞ならう和御前等は何を歎くぞ。何戶野の兵衞が氣の違ひしが悲しいとや。ヲよう泣く／＼。歌泣け／＼來なけ。梅の鶯時鳥。親に似ぬ子は鬼梅蛇梅。角の生えた小梅取つて嚙まう。ナホス地構うてくれなと。フシ押退け突退け。ヤ。ヤ。地そなたはどこへ。躑躅の山へ花折賣りにか。歌花折賣りに。花折賣りに。花賣り／＼花折賣りに。ナホス地走り／＼走りつき急げ。我も行かんと駈出づる。人々周章て縋りとめ。氣を取直してたべならうと焦れスヱテ歎けど。其甲斐も。七十年近き老の波立居も荒く面色變じ。ハ、ハ、、可笑しの人の言ひごとや。汝知らずや我は是。熊野三所の大權現年を重ねて二葉より。三つのお山に咲き添ゆる。我神木の藤の花美麗を好む心より。爰に植ゑたる驕慢の非禮をくゝる花葛。スヱテ斯樣に亂れ狂はするも。我がなす業とは白藤の。フシ思ひ知らずや思ひ知れ。驕は却つて身を責むる。我が念願の枝葉榮えて熊野の山の。上に望みの藤は見えたり嬉しやと。行き。登れば葛は身を搦み。花房は骨をとほす。こは何とせん恐しや。藤の。若葉の。尺になる迄今此報いは遁れ難なや。由なかりける我が驕やとフシ慮ひ。わなゝき白髮も亂れ逆髮の。大地に逆立ち虛空を攫めば。とゞなる甲斐なき女の力。敵ふは神力神罰の。狂ひ亂れてかつはと轉び。神の怒り給ふと見えてフシ正體。もなき其有樣。地詮方涙にく

れながら。抱き起して嫁娘色オクリ寝所へ引立て入りにける。地其折節に婢の女。なう叢生様吳服様。お山伏達はや是へと。案内に從ひ大塔の宮。付上赤松平賀の三郎引連れ病家に入らせ給ひ。詞我々は熊野山に千日籠り。一萬座の護摩を修し三十三所順禮の山伏。頃日麓の辻堂に疲れを晴らす所。病人あり加持せよとの御頼み。生靈か死靈か佛神の祟りか。或ひは非業の病氣なりとも。祈念して参らせんとありければ。地色ア、有難い病人と申すは自らが孫。去年の暮より俄かに奇麗好が病の起り。見え渡りたる座敷々々も立て直させ。詞御覽遊ばせ此襖の欄許は權現のお山にありしを移し植ゑ。花の盛りを待つも程なく。昔の花含む頃より心亂れ。藤を元の山に返せと譫言。權現の御祟りか藥療治も詮なく。地色自らが夫は上京の留守と言ひ。何を賴うとの力もなく各々様の御事。耳に入りしは天の告げと押して迎ひを参らせし。御祈念頼み奉る病人是にと押開く。障子の内に狂ひ臥す。スヱテ老の姿の便りなし。詞ヲ安い事身に相應。祈り治して参らせん平賀坊。用意あれと宣へば。地色宮の御寢枕に立て。獨鈷三鈷鈴錫杖。五十串にフシ神や勝くらん。地いでく加持に参らんと。もとより塞嶺の法水を湛へ。智行兼備の大塔の宮。珠數押揉んで千早振る。ハル神は本有の都を出で分段同居の塵に交はり。斷惡修善は濟度の始め。哀愍擁護は利物の終り。就中熊野三所の權現は。日本第一大驗の。靈神ハル伊弉諾尊の神靈。新宮本宮は事解男速玉男。本妻の那に宮居して。直なる道を守りの威德。色四海波靜かに。ハル八大藥治まつて大社。擁護の春霞は利生を三つの。山にたなびき。萬歲が菜の。松風も。花の盛りは鄕の藥の一藥。守りのフシ神心。コハリ仰ぎ願はくは從類眷屬の誠心を憐み。拔苦與樂の眉を垂れ。速かに立去り給へスヱテ病即消滅不老不死と。せめかけ。責めかけ。祈り祈られ戸野の兵衛むつくと起き。震ひわなゝき立つつ居つ神風の。一もみ揉んで面には白汗を流し。袂に露のしげ玉の時ならぬ霰玉散る。足踏はどうくとう。狂ひ出づれば客僧達。皆同音に聲を上げ。ハルフシ摩訶般若波羅蜜多。十六善神哀愍覆護。滅罪生善經々部。明王部天童部。七曜九曜十二宮。二十八宿三十番神。地修行者猶如薄伽梵と。祈り伏せられ五體を縮め。神は立去り給ふと見えて。臥したる夢の覺むるが如くハル息ち。本氣人心地。地なう有難やと嫁娘。拜みつ父に取付きつ悦び。今ふこそ道理なれ。戸野の兵衛頭をさげ。詞山伏達の効驗にて。治すまじき我が狂氣本復。何を

以つて恩を報ぜん。五三が月も御逗留。地色誰かある御笈直せ嫁御娘よ御馳走申せ。過分至極と無二の喜び。宮御力を得させ給ひ。あつと言はんとし給ひしが。附添ふ人の心を兼ね。行く先の道遙かなり只御暇と立ち給へば。呉服差出で押しとゞめ。詞父も御留め申さるゝこそ幸ひなれ。所は山家の事寂びて御慰みはなけれども。地色旅の疲れの晴るゝ迄御不承ながらとばかりにて。じつと見る目は戀知りの生れついたるおもて道具。田舎細工の手際には。フシ京恥かしき風情なり。兵衛座を立ち出來いた娘よう留めた。客僧達。サアこなたへと手を取れば。村上義光いや〳〵。詞先達は貴殿に預け何時迄も御逗留。我々は初參の修行。一日も安閑と暮らす事罷りならず。靈佛靈社心のまゝ參詣致すが結句御馳走。地色平賀坊は河内の國金剛山に立越え。多門院楠坊に對談あれ。我は吉野に參詣し庵室になるべき地形を見立て。同行の山伏かり集めん。詞赤松坊は何と〳〵。されば愚僧は播磨の國。苔縄の山一見。先達より許しの袈裟狀聞心坊に相渡し。都にて出逢ふ手筈を取りて立歸らん。道具屋尤も尤もいざ打立てと六波羅追伐諸軍の相圖。山伏詞に牒し合はせはや御暇と立出づれば。ナホス不思議の緣に大塔の。宮も兵衛に誘なはれ。打連れ。奥にフシ入り給ふ。地色既に傾く日脚早く。若旦那お歸りと騒ぐ聲々。妻の蓬生走り出でほうお歸りか大彌太殿。先づ御達者でと半分言はせず。詞父兵衛殿狂氣なされしと道すがらの噂。夜を日に繼いで歸りしが女房誠か。さればいの幾瀨の案じ事。さりながら都方の山伏とて。此頃此地へ參りしを賴み。地色其祈禱にてすつきりと御本復。氣遣ひあるなと云ひければ。詞ヤア都山伏。して其山伏同行何人。形恰好はどうぢや聞きたい。されば先達は十六七か。八でもあらうか。色白に位のある風俗。跡は三人何れも賤しからざる器量。三人は方々の神參り。先達一人あの座敷に御逗留。何ぢや三人は爰に居ぬか。こりや旨い。地色サア親爺殿に逢はう。急に御話し申し度いと。爰へちよとお供せい早う早う。ほんに疾から知らする筈。待つてござんせお供して來うぞやと。いそ〳〵フシ走り行く跡に。大彌太獨り笑みを含み。詞取つて投げて繩かけうか。いやいや搦めだて危ない。細首ころりと。地色してやつたりと善ぶ後に父の聲。やれ〳〵大彌太歸りしかと嫁に縋りて立出る。詞聞きしよりお顔も寠れず。早速御本復。此上の珍重なし。扨密々にお咄し申す事ありと。摺り寄りしが是女房。用あらば呼ばう勝手へお立ちやれ。ハテ女房に何

の御遠慮。あればこそ立てと云へ。地色立つてうせぬか女めと。俄にむき出す眼球。あいと廊下へ駈出でしが隠すは仔細ぞあるらんと。障子にひつ添ひ立聞くとも。知らず大彌太聲をひそめ。詞此度の上京六波羅殿に御目見え。首尾殘る方なく其上の御諚。大塔の宮熊野路へ落失せ在所知れず。召捕つて出さば御恩賞に。泉州一國を賜はり大名になされんとの御事。家繁昌の基と存じ畏つて罷り歸る。四人連れの山伏が父の御病氣祈り治せしとや。其山伏お尋ねの大塔の宮。招かずして手に入るは天の授くる我々が果報。今宵の內に打取り。明日首を都へ登さば六波羅の御感。拙者は大名。地色喜んでたべ親父樣と言へども何の返答なし。申し申し大名の親になる事。お氣に入らぬか親父樣と問へどもうんともすんとも云はず。いやさ兎角の返答なされ。親父樣親父殿とせりかける程猶うつとり。きよろきよろ目なる顔振上げ。ハヽヽヽヘヽへヽヽ。歌おれが死んだら。新田煙草で撓いてたも。煙管卒堵婆に。立てゝたもとは何のこつちや。何のこつちやえ。地大彌太興さめこりやどうぢや。又氣違ひがおこつたかと抱きすくむれば振放し。詞わりや誰ぢや〳〵。ムウ竹生嶋の辨才天か。地べんづる〳〵辨才天。南無地藏かの。ワハヽヽヽ。宮樣殺そ。宮樣殺そと駈出れば。取つて引伏せ首捻捥め。詞それを齒節へ出す事か。だまらぬか親父。地顋骨立てると一刀とりやフシこりやこりやと閃かす。地女房驚き障子押明け飛んで出で。詞エヽ勿體ない。時の拍子怪我にも刄が觸つたら何とせうと思うてぞ。地色危ない〳〵ともぎ取るに放さばこそ。詞おのれ女め立聞きしたな。サ立聞いた心ぬかせ。大塔の宮に知らする氣か。但しは共に殺す心か。地色返答次第一討ちと。振上ぐる刀も恐れず。其廻り氣は誰が付けた。立聞きするも舅夫の大切さ。そもや他人の贔屓して。三年馴染の男の大事。打明けさうな女ぢやと。思うてかいの情なや。疑ひ晴らして下されと縋り。付いてぞ泣き詫ぶる。ムウ聞分けた頼もし〳〵。氣違ひ親父にかまけ。大事を氣取られ討洩らしては一生の殘念。芋が瀨の庄司も某に一味。立越えとつくと談合極はめ今宵の內に討つて取らん。其親父座敷へ追込み。徒口きかすな動かすな連れて行け〳〵。詞なう〳〵世話や大名にも大體ではなられぬ。是を思へば山の芋が地色鰻にはようなるぞと。オクリ呟き。呟き出て行く。フシ其日もやがて。くれは姬。戀慕の暗き宵闇は。更けぬも更けし心にて。長地胸もときつく鐘の聲今こんこんと行先の。人は待たねど我獨り。焦

る丶手燭携へて。竊かに閨を浮れ出で。せめて一夜は大塔の。フシ宮とは知らず。御寢所に。忍ぶも間の長廊下耻かし見たし逢ひたしの。心ばかりが。歩み行く。跡に隱れて蓬生が人に知られじ見られじと。包むも響く板敷の音。あはや人ごそ。呉服は手燭ふつと吹き消す烏羽玉の。闇はあやなし探り足。跡には先に人ありとも思はず嫂小姑。はたと行逢ひア悲しと飛び退き。震ひ居たりしが。蓬生こは〳〵透し見て。詞どなたぢや。誰ぢや物云はぬか。なう其聲は蓬生樣か。さう云ふ聲は呉服樣か。アイ。エあの子はいの。あつたら肝を冷した。地色大膽な一人こりやどこへと。問ひかけられて行詰りいやついそこへ。詞いやついそことはどこの事。若い娘のあるまじない。いや〳〵氣遣うて下さんすな。ちとの間そこへつい物しに。サア物しにの其譯聞かう。地色どうぢや〳〵と根を押され。詞人を咎むる蓬生樣はどこへのお出で。若い嫁のあるまじない。地色そちから先へ言はしやんせと。竹篦返し鸚鵡返し。詞ハテ隱す事はない。先達のお山伏と寢に行くはいのエヽ。兄樣と云ふ男持ちながら。ア蓬生樣嘘ばかり。誓文くされ嘘でない。沙汰なしに頼むぞや。いや〳〵そんなら留かしやんせ。何を隱さう先達には自らが首だけ。ヤアそなたも惚れてか。それなら物を順道にしませう。嫂がひに今夜は蓬生。明日の夜は呉服樣。今宵一夜は辛抱して。去んで寢て下されと言捨てて地駈出づる。是々まあ先づ待たしやんせ。先に來たは自ら。こな樣は事かゝぬお身。私を先づやつてと駈出す。どつこいやらぬ。詞これ小賢しい呉服殿男狂ひまだ早い。蓬生が戀の邪魔しやるか。地色歸りや戻りやと引戻し。跡へ押遣り駈行けば引戻し。互の差合ひ暗紛れ。あなたが進めばこなたが止めこなたが行けばあなたが止め。競合ひ廻つて御寢所の。障子にぐわつたり行當れば外れる障子のあをち風。燈火消えて闇こそよけれ臥所はいづく。是爰にと フシ夜着に二人が抱き付き。裾からすつぽり父の兵衞。拔出る蟬の殼衣。蓬生が襟搔い摑み取つて引据ゑ。宮樣〳〵。畏れながら燈火是へと呼ばはる聲。手燭かゝげて出で給へば。二人の女はつとばかり スヱテ赤面。詞はなかりけり。詞兵衞怒りの眉を顰め。エヽ憎つくい女め。今宵宮を寄せんと云ふ。夫に一味の身を以つて何ぢや。宮樣につゝ惚れた。戀慕に事寄せ忍び入り。宮樣を殺さうや。大彌太めが言付けか但し汝が貞節だてか。地色ぬかせ女郎サア返答。兵衞が刄喰ふかと小刀も忠には太き。肝先に差付け〳〵齒莖を嚙み。スヱテ

怒りの涙にくれければ。呉服見兼ねて引分け押退け。何のさうではあるまいに。堪へて進ぜて下さんせと後に。圍ひ身を隔つ。蓬生涙の顔振上げ。詞いや〳〵詫びする術がない。呉服殿頼まぬ。これ親父様。夫に一味と。我を疑ふ舅殿が猶疑はしい。一つ〳〵言ひ立てうか。ヲ聞く迄ないこりや尤も。一人の悴を捨て宮に身命を擲つ兵衛。女の身では疑ふ筈。其疑ひ此方からほどいて聞かせう。去年都の騒動聞くと等しく。芋が瀬十津川蕪坂。三郷の勢を引具し都に上り。天皇の御味方せんと悴大彌太に牒し合はせば。却つて六波羅に加勢せんと。地色既に親子の心はだ〳〵。一先づ宥め大彌太は都へ上せ。河内の國金剛山の城主。楠多門兵衛正成に與力し。打つて出んとせし所に天皇軍に打負け給ひ。大塔の宮作り山伏となり。熊野の方へ落ちさせ給ふと。楠が方より飛札を以つて告げ來る。詞熊野の別當は無二の武家方。御足たまらず此地へ來り給はんと推量し。地色圍まひ御世に立てん計略。奇麗好きを病と欺き。建て直す館の結構。宮を入れ奉らん支度今ならでよも聞かじ。詞猶々作り氣違ひとなり。山伏ならば呼び入れて祈らせ。地色宮を見出さんと碎く心の今月今日。嬉しくも巡り大塔の宮。萬乘の宮の御祈り。縱へ誠の狂氣なりともそもや治らであるべきか。兵衛が氣違ひ心の煩ひ。立ち所に平癒し。日頃の望みフシ足りぬるぞや。詞折節立歸る無道の悴。斬つて棄てんと思ひしかど。思へば一人の男子。ま一度こち直して見んものと。宥免は親の因果。地色宮の御首賜らんと忍び來るを引捕らへ。生死の意見せんと思ひ爰に忍んで悴を待つ。詞サア此外に疑ひあるか。兵衛を疑ふ念は晴れて。汝が身の上ひつしと詰つて言譯あるまい。寢物語の折々に意見せば。地色女に靡くは男の心直る品もあるべきに。夫百倍邪見の女。似寄つた者が女夫になると。例に引かれん淺ましやと。スエテ恨み喞ちて泣く涙。蓬生が胸にせきかけ〳〵フシ共に。むせび入りけるが。勿體なや親の慈悲心にて。爰に忍びますを。夫と一所の合圖。宮を害せん謀計と。疑ひし冥加なや。親御の手に餘る我夫。鼬になり貂になり。詞意見する程ひがみ根性。宮を害せんとの物語。よしにと云はゞ即座に斬られ。地色死ぬる命は惜しまねども。長らへて宮を落し奉らば。取逃がしたる其分にて御世になるとも後々迄。宮の御祟りもあるまいと。間に合せの空一味忍び入る廊下にて。詞呉服様に出合ひ。宮様に戀慕と僞りしは差合ひ云うて返さんため。地色事難儀に及びなば我命を夫に與へ。宮を落さ

ん下心。夫と一所でない證據。見て疑ひを晴れてたべと。襟押しくつろげ諸肌脱げば首に掛けたる不動袈裟。ヤア宮の姿に似せ。死ぬる心の用意か。さは知らず雜言申した。嫁御赦しておくりやれ。扨は我故苦を見する。過分と宮も御感の涙。兵衛は御運の拙なさと。任せざる世を悔み泣き戀と忠義に嫁娘。浮む涙は一時にわつと泣き入る。ばかりにて四つの。フシ袂を絞りけり。晴れ行く互の心と共に。夜半の空の雲も散り。月もほのぼの出でにけり。地色兵衛心附き。兎角云ふ間に夜更けたり。悴が來ぬ內蓬生與服。詞惡智慧の走つた兄様。所々に遠見を置き一町も逃げられまい。それも分別して置いた。此藤遙々と熊野山より取寄せ。慰み一遍に植ゆべきか。地色まさかの時の逃げ道。棚を傳へば館を離れ小原街道。はや

落ち給へと申し上ぐれば。宮御笈を押開き錦の御旗。一聲吹けば山三重を突貫く法螺の貝。御腰に提げ給へば。尤も〱こなたへとオクリ御落ち。支度取急ぐ。宮の御首賜らんと芋が瀬の庄司は座敷傳ひ。戸野の大彌太詰り〲に下部を殘し。廣庭より宮の御寢所一度に斬込む手筈の時刻。內を見込めば臥具取重ね寢入りばな。二人領き囁き合ひ。駈入つて夜着引きむくれば。思ひも寄らぬ父の兵衛。正體もなき高鼾。詞是々親父性根つきやせしが搖り起し。地色寢所教れ。宮はどこに臥せつて居る。やと搖れどもたわいなし。狸寢入り起きや〱。起きよ〱と引立つれば欠伸たら〲きよろ〱目。詞おれが死んだら。煙管卒堵婆に立てゝたもとは。何のこつちや〱〱え。地色折も折どう氣違ひすつ込んでゐよ。邪魔になると突放

し。そこか爰かと探す內。三人藤の棚傳ひ心せく程身は重く。めつきり〱めきつく音にきつと見付け。そりや〱棚を傳うて逃げる。庄司殿槍よ熊手よ。まつかせ〱心得ても手元になく。狼狽へ廻れば大彌太せき上げあれ〱逃げるは。待て〱おのれ等引下さんと駈出れば。三下り歌阿波の鳴戸に。身はずんぶり沈むとも。君のおむしやる事をば何でも〱。わしや背きやしますまい。しますまい何のこつちや。何のこつちやえ。ナホス地止むるとなく邪魔すれば。ヤア氣違ひ殿足手纒ひ。退つて居やれと引退け突退けおのれ遣らじと身を揉めばちよつきと飛んで。歌抑我等は都の白河吉田の某悴に梅若丸とて今此吾妻のな。土となる。土となる。合鼠兎絡に何でも〱犬わん猫にやん。合狐こん牛もう。猿きやツ〱。

きやッ〳〵〳〵〳〵〳〵。地色きやつとも言はせず取つて投付け。ほたえ過ぎたる親父めと二つ三つ踏付け〳〵。汝等逃ぐると逃がさうかと。又駈出づれば起直り。ひよつくり飛び出でて。二上り抑我等は。桓武天皇九代の後胤平の知盛。幽靈是迄現はれ出たるなんどと言ふちや。そこらをぬめくり廻る。河原撫子いよの石竹。其根は〳〵引抜きにくの木。合宮のお首は取りにくにくの木。ナホスおのれが其首我等取持ち是見よと斬りかくれば。大彌太つゝと身をかはし。取つて捻ぢ伏せ挫ぎ付け。詞天命知らぬ似せ氣違ひ。親の身で子の立身を妨ぐる人間の法か。こりや〳〵妹女房。一寸でも逃ぐれば親父をたつた一刀。宮を渡すか何と何とと聲かけられ。地色逃げもやらず下りもやらず。我を庇ふなやれ落ちよ。宮を渡さば勘當ぞと。忠と娘に身を捨てゝ。惜しまぬ道は親の道。落ちぬも子の道孝の道。宮を薬蔭に隱し參らせ。蓬生突立ち聲を上げ。詞ヤア〳〵大彌太。遁るゝだけはと思へども。我が命生きんとて情ある兵衛は殺されず。助けよ大彌太。天照大神の御子孫後醍醐の皇子。地二品兵部卿護良親王が腹切るやうを見て。汝等が天命に盡き腹切る時の手本にせよと。肌に刀ぐつと突立て引廻し眞逆さまにどうと落ち。君と舅に一命を。フシ分けて最期ぞ哀れなる。ヲ、よい分別と親を捨て御首取らんと走り寄り。南無三寶こりや女房。エロ惜しや誑されたと。怒る後に父の兵衛這ひ寄つて。弓手の耳の根。ずつはと斬るも老の力。事ともせず抜合せ父が肩先六寸ばかり斬下げたり。妹上に身をあせり親の助太刀打ちたいな。南無神様佛様と念願高き藤の棚より。しらりと飛んで下り立つたり。ム、親と一所に死にたいか。仕舞うてくれん親子兄弟此世の緣。斬つゝ斬られつ渡り合ふ。芋が瀨の庄司駈來り。肝心肝もんは大塔の宮。受取つたと棚の下からぐつ〳〵と。突込む刀を除けつ開いつ上からも突く宮の利劍。芋が瀨の庄司が頭の鉢。二三寸突裂かれうんと背向に踏反つたる。宮は法螺貝追取つて。兼ねて合圖の印の高音。吹立て斬立て追ひつ卷つゝ。血汐は飛んで白藤赤藤。互の心うら紫の。花を散。らして三重へ挑みしが。地父は老人女の力斬立てられて半死半生。疵負ひながら庄司大彌太。ひるまず宮を討取らんと差添へを矢と投げ掛くる。宮は飛鳥の御身輕くひらりと飛下り抜き翳し。二人を相手に御手を碎き。右を拂へば左がかゝり。庄司を防げば大彌太進み。透をあらせず斬りかくれば。金石ならぬ宮の御身。疲れ果てさせ給ふ所へ。村上義光赤松則祐。

緊那羅摩睺羅の荒れたる如く。宙を驅けつて歸るや否や。二人を取つて大地にぶち付け足下に踏まへ。詞今日我々立出る道にて。合圖の法螺貝頻りに聞ゆ。すはやと駈付けハテよい所。地軍神の血祭御旗に供へ申さんと。二人一度に二人が首。えいやつと捻ぢ切り捨て。伏したる親子を引立つれば。まだ片息の眩む目に。宮と村上赤松を見て喜びの笑ひ顔。これ疵淺い所もよし。療治加へばやがてよし。子ながら朝敵殺すもよし。宮の運よし心地よし。氣味よし。日よし時節よし。彼よし是よし萬よし方角もよし要害よし。かけ引きもよしみ吉野に。御陣を。召さるゝ護良親王。龍の御威光。虎の勢ひ千里。萬里に輝けり

第五

地日西天に沒する事三百七十余ケ日。大凶變じて一元に歸すといふ。聖者の未來記當れるかな。西國の官軍等天皇を奪ひ返し。播磨の國迄還幸と告げ來れば。大塔の宮護良親王急ぎ六波羅を攻め亡し。君を迎ひ奉れと五畿内の勢熊野勢。八庄司の勢駈せ加はり六波羅の館。十重廿重に追取り巻き錦の御旗比叡の嶺颪に吹き反らさせ。互に合はする鯨波フシ勝負を龍虎と爭うたり。地色時に城中より大山の如く鎧うたる武者三人。得物ひつ提げ躍り出で音にも聞くらん我々は。詞六波羅殿の御内にさる者ありと知られたる。御器所七郎怒借屋軍次每田太郎といふ者なり。宮の御内に村上赤松平賀と云ふ。一騎當千の侍ありと聞く。出よ〳〵晴業の太刀打ちせんと呼ばはつたり。平賀の三郎つゝと出で。先づ武者振りより口上美事赤松村上が手迄なく。三人ながら平賀が片腕サア來い〳〵と歎むけば。地色詞にも似ず三人一所拔き連れ〳〵打つてかゝる。平賀事ともせり立て薙ぎ立てフシ暫し支へて戰ひける。なんの苦もなく三人ながら。袈裟斬り立割り腰車斬り伏せ斬り伏せ大音上げ。事初めよしヤレかゝれと。一度にどつと備へを亂し火水に。なれと三重へ攻め崩すフシ運に乘つたる。地宮の御勢一騎が十騎に渡り合ひ。百術千慮の手を碎けば。城中殘らず切靡くされ有るは甲斐なき借武者ども。降參〳〵と呼ばはつて。城中を乘拔け〳〵官軍に馳せ加はれば。味方はいよ〳〵勝に乘る範貞飛鳥の翼を失ひ。親王も只泣顏にスヱテ涙零さぬばかりなり。地色齋藤太郎左衛門利行。櫨匂ひの鎧爽やかに出立ち一陣に進み大音聲。詞六波羅殿の御勢悉く命を落し。殘るは親王主君範貞。斯くいふ利行三人ばかり。多年の高恩此一戰に報ぜん願ひ。心ある人々下り合ひ恥ある打物

して目を覺せよ。地色サア來い〳〵とフシ力士の如く突立つたり。地色是こそ望む太郎左衞門我討取らんと寄手の勢。一二を爭ひ打つてかゝる。村上赤松ヤア暫らくと陣頭に駈塞がり。詞珍らしゝ太郎左衞門。八歲の宮の御身替り孫を殺せし忠義の心底。大塔の宮御感の餘り。所望あらば望みを叶へ味方に招け。大國を與へ其恩に報ぜんとの御諚。我々迎ひに向うたりと慇懃に相述ぶる。利行から〳〵と笑ひ。扨々賴もしう思ひし大塔の宮愛想つきた。天下に人らしい人はないな身不肖ながら六波羅殿。無二の忠臣と賴まれし、齋藤太郎左衞門利行官軍に降參する程ならば。聟や娘をやみ〳〵と殺さうか。否とも應とも返答ない立去れ〳〵。但し首に飽いたらばさらへ落して取らせうか。いや〳〵太郎左立派過ぎる。六波羅の先途見屆けて。朝敵の方人末代貴殿が惡名は剝げず。唐土の管仲が古主を捨て桓公を助けし事。唐日本にも誰か笑ふと。云はせも立てずア、毛唐人の眞似なんの事。物數いふな聞く耳ないと。地色立てぬく忠義に楯衞かん詞なく〳〵ためらふ所へ。駿河守範貞逆仁親王を高手小手に縛め。自身繩取り引立て出でア、太郎左衞門惡い合點。詞そなたの望みならば叶へて味方にせんとの。宮樣の口上皆聞いた。コレ駿河守が命助けて下さらば。味方に參らうとなぜ云うてたもらぬ。此戰の元は此親王があるからの事。繩かけたは土產にする心ちよつと一口駿河守が。命助けて下されと云うてたもいの。それが今生後生の忠義賴み上げます太郎左衞門。地樣々々ちやと平伏してフシ拜まぬばかりの風情なり。地太郎左衞門牙を嚙みヱ、腑甲斐ないこれ。詞蠅取り蜘蛛はな。小さけれども羽ある蠅を取らんとする勇氣あり。蚍蜉に劣つた範貞殿。村上赤松が聞く前恥かしうはないか。サア物言はずと切腹〳〵。ヤア腹切れか。くどい〳〵。なう此腹が切られうかと。地俯むく所を拔打ちに首打落し。冥途の案內者利行待ち給へ我君と。太刀取直し我れと我が首えい。〳〵と搔落し。フシ立ちすくばつて死してげり。地無念〳〵と逆仁親王。自らかゝる縛は。明王諸天の縛の繩。神と君との道明らかに。朝敵滅亡御代萬歲。二度照らす日の本の。續いて天下太平記。四海に覆ふ網の目に。洩るる民なき君子の德百萬。歲とぞ祝ひける

右之本頌句音節墨譜等令加筆候
師若鑁弟子如纏回吾儕所傳泝先
師之源幸甚

竹本筑後掾相傳

竹本大和掾宗貫

予以著述之原本校合一過可爲正
本者也

竹田出雲掾清定

京二條通寺町西へ入丁

山本九兵衛版

大坂堺筋通日本橋北へ三丁目

山本九右衛門版

江戸大傳馬三丁目

鱗形屋孫兵衛版

須磨都源平躑躅

作者　文耕堂
　　　長谷川千四

詞風に順つて呼べば聲高からずして聞く者多し。丘に登つて招けば臂長からずして見る者多し。珠簾深く謀をめぐらせば。威光千里に耀くとは今此時や秋津君。後白河の法皇と申せしは。人皇七十七代の代をしろし召し。往んじ嘉應年中に位を安く遁れ給ひ。一院と申し奉りしが。詞今や壽永の秋の葉の。平家散々になりしかば。詞暫く元の位山。花の帽子の返り咲きオロシへ春の色香に。劣らめや。地平家と木曾の兩敵を鎭めん爲。流人兵衛佐頼朝。院宣を戴き舍弟蒲冠者範頼。九郎義經を代官として上洛せしめ。宇治勢田の間に戰ふと雖も。未だ勝負も聞し召さず就中安德天皇。平家に誘はれ神璽寶劒内侍所。三種の神寶を御身に添へ。西海の波に漂ひ給へば。天地と共に限りなからんとの神約も。今を限りの御歎き乾す隙もなき衣手の。フシ叡慮を。苦しめ給ひける。地武藏の國の住人岡部六彌太忠澄參内し。蜀錦を以て上襲ひしたる琵琶一面。御前に捧げ庭上に畏り。詞抑も木曾義仲が賊軍大津勢田に充滿し。手强く防ぎ候へども。九郎義經軍慮をめぐらし戰ひ勝ち。則ち義仲を粟津が原にて討取り。御敵亡び候へども未だ殘黨全たからず。是を鎭めん爲義經都へは入り申さず。いよ／＼六彌太御所を守護し奉れと。夜前申越し候と相述ぶれば。地法皇叡感斜ならず堂上堂下に至る迄。安堵の思ひ色に見えフシ悅びざゝめき給ひける。地色皇太后宮の大夫俊成卿。勅諚を承り欄干近く。詞早速義仲を切鎭むる義經が軍功。淺からず思召す次に此琵琶。地何故叡覽に供へしと尋ね給へば。詞さん候木曾が都の宿所を。改めさせ候へば此琵琶あり。人に尋ね候へば春日野と申す名弦にて。元は東大寺の寺中に候ひしを。三位の中將重衡。琵琶の上手たるによつて求め取り。都落ちの折ふし取忘れ置かれしを。又義仲奪ひ取り上へも差上げず。掠め置きたるとの物語早速叡覽に供へ候。地是のみならず平家の一門詩歌管弦に長じ給へば。其道々の師匠たる堂上方都に多く。師弟のよしみを忘れず野心ある方も多かるべし。詞院の御側近く召寄せらるゝ公卿も心を正し。粗忽なきやうの叡慮心を付け奉れと。義經申越し候へば恐れある事ながら。地平家に緣よしみある

方々は御前を遠ざけ給ひ。然るべく存じ奉ると憚りなく申し上ぐれば。俊成卿打笑ませ給ひ。尤もに似て心狹き義經の奏聞かな。人迄もなく斯くいふ俊成は。薩摩守忠度に和歌を傳へし師匠なれども。平家の肩を持ち君を恨み奉る心は和歌三神の御罰も受けん更々なし。總じて物を指南する師匠の心も。品によつてあるべし。弓矢打物は武士の表藝。弟子の身に恥あらば師匠迄の名折れと思ひ。肩を持つ品もあるべきが。平家は朝敵の科ありて都を開けば。教へし和歌の恥辱にはちつともならず。俊成君の仰せを受け千載集を撰むにつけ。痛はしや忠度一首の歌を入れよかしと望みしかど。勅勘の身の恐れを思ひ忠度の歌を除きし事。妄執の中の第一と歎きしぞや。それとても人心伺ひ見るは君の爲。俊成が事は氣遣ひなく心安かれ忠澄と。事を分けて宣へば東夷の六彌太も。道理に伏して見えにける。四塚右大辨重虎卿懐中より。袋に入れし物取出し御前に捧げ。上にも知ろし召さるゝ如く下官が妹品照と申す者。無官の大太敦盛に娶はせんと契約し。結納の證に送つたる青葉と申すこの笛。御前へ差上げ候仔細は。今勅勘の平家に縁を組んでは共に朝敵の餘類となり。あれこそ敦盛の兄舅よ。平家の縁類よと人々に嘲弄せらるゝも苦しければ。此笛を差上げ此方に置かぬからは。敦盛と縁を切つたるも同じ事。妹は則ち庭上まで召連れし。是なる阿根輪平次光景に娶はせ。都に落ちとゞまつたる平家の族あらば搦め捕らせ。平家に與せぬ重虎が。さつぱりとした心底を人々に見せ度く存じ奉る。あはれ阿根輪平次に洛中洛外の夜廻り。吟味を仰せ付けられ下されかしと奏聞すれば。六彌太進み出でなう重虎公。敦盛と縁を切らう切るまいそりや此方の存ぜぬ所。大内の守護はいふに及ばず。洛中洛外の夜廻り平家の殘黨を搦め捕る事は人を頼む迄もなく。此六彌太が勤むる役目。阿根輪とやらん鎌倉殿も御存じなく。聞及ばねば名もなき下臈同然。夜廻り仰せ付けられとは御贔屓の取持ち。總じて武家の勤むる事は。貴卿の御役筋にあらずと聞きも敢へず阿根輪平次。ヤア舌長し六彌太。下臈とは誰が事。忝くも我兄は院の北面。其弟の阿根輪の平次。重虎公の妹聟にもなる筋目。小さい時より弓馬を嗜み生れ付いたる强力。靜謐の時世にあはず。部屋住なれば名は高からず。由緒器量を以て夜廻りを望むが誤りか。此頃東よりふつと來て京の案内竪横も辨へず。二つ三つは役過ぎる夜廻りは阿根輪殿頼み存ずると。言直せ出直せと目に角立つれば。

詞歌人は居ながら名所を知り。勇者は居ながら日本の地理を考へ知る。人を頼む事をりない罷り立て。ヤア地汝に言はれて立つべきか其頤斬下げ。京家の武士の手並を見せんと反打ちかくれば。庭上に刀をびこつかす狼藉者。搦め捕ること六彌太が役目と立向ひ。すは事こそと見えければ。あれ鎭めよと御詔勅諚なりと制せられ。フシ恐れてはつとうづくまる。地一院仰せ出さるゝは。六彌太が申し條ことわりながら。詞汝一人いか程に思ふとも京中の目は覆ひがたし。重虎が奏する上は阿根輪も粗忽の者にはあるまじ。汝が加勢として夜廻り警固怠るな。地色就いては此琵琶平家に渡り木曾に渡り。何れも其主全からず是を止めん事よしなし。兎も角も義經が計ひたるべし。此笛とてもさの如し重虎が所存に任すべし。詞第一平家の餘類未だ都を立去らずとも。必ず辛くあしらふべからず其仔細は。神より傳はる三種の寶平家の手にあり。地事故なく都へ歸り移らせ給ふ迄は。或は賺し或は宥め。手だてを以て取返すべし。萬一心を一致にし海底にも沈むるか。唐高麗の寶ともなり給へば此日の本は暗闇ぞ。罷り立てと御殿籠らせ給ひける雲井は同じ雲井にて。三種の神寶ましまさねば。月なき夜半といひつべし。晴れよと。祈る三重へ錦なすフシ柳櫻と。地名にふれし平家の花も秋のはや。枯々となる壽永の空まだ騷がしき世の中を。守り鎭むる身の役目人の心の暗きをも照らす提灯夜廻りの。備へを岡部の六彌太は。武勇に兼ねし仁義の道。五條の三位俊成の。フシ館の御門に立寄りて。詞御内へ物申さん。岡部の六彌太忠澄參上と言入るれば。暫らくそれに御待ちあるべし。お上へ其段傳へんと地答ふる聲の。程もなく。門の貫木ぐわつたひし明けて十九か廿より。たんとは老けぬフシ物腰に。地色兄様お出でなされしか。何用あつて夜夜中と。つい一口に挨拶も心隔てぬ兄妹仲。詞ム、妹か太儀々々。某が參りし段お上へ申しておくりやれさ。さればいな。御門の衆がお前のお出でと知らせた故。心得て私が出たはたんと叱らにやならぬ事。妹をお館に御奉公させながら。聞けば此頃院の御所で。大事の〱俊成樣を。平家方に親しむの。イヤ薩摩守忠度は歌の弟子での何でのと。あてことたら〱であつたけな。妹のお主なればお前の爲にもマアお主。これ申し。音にも聞いてゞあろ菊の前樣というてな。大切なお姫樣が。此春おかくれなされてより。勿體なや此わしを。娘の樣に思ふぞと名も裡菊と付代へ。それは〱目をかけて可愛がつて下さります。御恩の深き俊成樣。さすが長

袖それぞとは地口なし山でござれども。お腹立ちは花薄穗にあらはれて裡菊が。疎ましさを御推量。それも知らずにうかうかと夜廻り序のお見舞は。無沙汰の上塗り笑止さに。中で計ふわしが思案。直ぐに去んで下さんせと。恨みを並べて立板に水際の立つ御所育ち強請り樣さへフシ風雅なる。詞ム、ウ尤もの言分。全く俊成卿に對し申した事ではなけれども。阿根輪が肩持つ右大辯重虎。彼奴が憎さに當てたる事。詞のはし〴〵俊成卿のお心に。障りし事もあるべきが爰をよう思うて見よ。我妹を仕へさす緣を思ひ。六彌太が最屓偏頗の言分と。言はるゝも無念の一つ。又俊成卿は古今の歌人。六彌太づれが胸の內は。居ながら知らるゝ名所の如く。申さずとも知ろし召しさのみはよもお怒りもあるまじ。地さりながら敬ふ者に隨ふは君臣の禮と聞く。それ故右の

あらましを申し上げん其爲に。夜陰ながらも來りしが。詞其方に此旨を語れば手前の心が濟む。折を見て宜しう取成し。はや立歸るぞさらば〳〵。地色扨はさうしたお心か今の樣に申したも。たつた一人の兄樣京生れとはいひながら。東に育つた心無しと言はせともないばつかり。詞いやほんにそれに就き。西國への出陣も近々と承る。身の入割を語つて頼まにやならぬ謂くもあり。ム、ウ。頼むとは氣遣ひな事ではないか。いゑ〳〵。氣遣ひな事でもないが。あのな。申し。薩摩守忠度樣は俊成樣のお歌の弟子。地色人丸赤人の生れ代りと。いうても恥かしうないお上手。まあ第一にお手が見事。平假名の美しさ共癖早書。枕詞の千早振る神かけてと言交はし。今では深い女夫の仲と語る內からア、これ〳〵。夜の更けるに問はず語り聞いてゐる隙がない。何事も重

ねて〳〵家來ども往け。地往けと差合ひくる〳〵夜廻り役。心も堅い拍子木の音に別るゝ內外や。跡は御門もしめやかにオクリ更け行くへ小夜の鐘ならで。フシ思ひを告ぐる。雁の聲。雲井の道も程遠き八重の汐風こゝに來て。ホフシ身に憂き事をつげ櫛の。地薩摩守忠度は一門の人々と。共に都をおちかたの狐川より引つ返し。餘所目をばかす簑と笠。フシ辻を隔てゝ窺へば。地障りも馴れし館の門折こそよしと立寄りて。忍びやかに訪なひし。詞薩摩守忠度。俊成卿の見參に入り。地申さで叶はぬ旨あるぞよ此處開け給へと宣ふにぞ。靑侍と思しき聲にて。詞忠度卿とあるからは御門開き度く候へども。かゝる亂世の折から。朝敵と呼ばれ給ふ平家の方々。誰によらず門內に通すこと恐れあり。地疾く〳〵お歸り〳〵と言捨てゝ。フシ音もせず。詞いやならうそれはさる事ながら。全く忠度粗忽はあらじ。方々が心

得にて鎖を許し得させよと繰返しての御頼み。地答へもせんフシ呆れはて。地口惜しや浅ましや。入道の不善一門の積悪。詞天道の地冥罰一時に逼り。罪あるも罪なきも。朝敵の名は遁れず。さしもさばかり俊成の和歌の友とて浅からぬ。仲になか〳〵フシ心の隔て。地忠度が勇力にて。詞此門一つ破らんは絹を裂くより易しといへど。地許しなき勅勘は大盤石より重くして。手も力もなき身となる。此身の果の無念さとスヱテ涙に。くれさせ給ひしが。地催す雨も吹晴れて立つ雲隙に築地の上。見れば木傳ふ柳越し。女模様の袖壁に。足もたよ〳〵寄せ柱スクリひらりとへ飛んでア、こは。詞さういふは裡菊か。忠度様かと地取付いて涙にフシ萬を籠らせり。詞珍しや裡菊。地此世では其方が顔見る事もあるまじと。思ひの外の對面先づ息災ながら何より〳〵。詞エイ何が何よりで。お前のお聲を聞くやいな。心はやたけ御門はあかず。危ない所を乗越えて。地色お顔見たさに來た者を胴慾なお詞。此世で見られぬ顔ならば未來では猶かしと。思ひやるお心が露程もあるならば。都を落ちさせ給ふ時暇乞ひこそなるまいずれ。詞ついちよこ〳〵と一筆は。残して置いて下んしても御卑怯にはよも地なるまじ。よう書くお手を持ちながら文さへ一つ下されぬ。詞ほんにお前の右の腕は。誰ぞが切つてのけたかと地ついいふ恨みも忠度の。御身の果を天然とフシ物が知らせるうたてさよ。詞ヲ、尤もの言分至極せりさりながら。某も深く心にかかりしが世を憚りの薩摩守。地妻に引かるゝ後髪いひ甲斐なしと人々の。傳へ語らん悲しさに思はぬ所在となりたりしが。つく〴〵事を案ずるに。スヱテ運拙くて都を開き。身は天さかる鄙の旅。歸らん事は白波のフシ底に。沈まん藻塩草。書きとゞめ置く詠歌の拙き詞といひながら。忠度が形見とも浮世に残さば敷嶋の。道を求めし甲斐なれと思ふ心の一筋より。詞再び都に忍び入り俊成卿に願ひを遂げ。撰集の歌人の其數にも加りなば。たとへ敵の手にかゝり。屍は野山に曝すとも。此世の本望なるものと。地思ふ心も腰折れの疑ひかゝる身となりて。願ひも仇にすご〳〵と。歸る天爾波のいかにせん。あぢきなさよと御聲も曇りがちなる忍び音を。共に歎きて裡菊がフシ恨みも今は晴渡る。地霧の絶え間に築地の陰主は誰とも白鷺の。身さへ姿さへ忍び足姿は同じ蓑笠も。かなぐり捨てゝ腰刀抜くかと見えしが後より。忠度やらぬと斬付くる。詞ノル心得たりと身をかはし。弱腰どうど蹴飛ばせば。向ふへころりと冬瓜投げつる〳〵と起上り。又打ちかくる刄

の音ぱつちやう笠に受止められ。引く手をすかさず付け入つて蓑にひん巻く刄の刄。捻上げてもぎ放され。敵はじものと駈出づるをひつ掴んで打付くる。地響きは高き長築地フシつい〳〵ついと逃げて行く。地裡菊は危なさ怖さ忠度跡を透し見て。詞必定野伏の盗賊めら。落人と侮りて衣服を奪はん嚇しの刄。そなたは怪我ばしせなんだか。地色お前に凶事はと氣を付合ひ。囁き語る向ふより紋に覺えの高提灯。詞あれは私が兄の六彌太殿。兄妹とはいひながら心は知らぬ源氏方。お前のお姿見せましては。成程々々。某とても女に心引かされて。立歸りし不覺者と嘲り受くるも本意ならず。地と言うていづくに隱れ笠みの置き所とやかくに。せん方つきたる打掛の裾へ〳〵といふ間もはや。次第に近付く鐵棒の。音はちりゝん心もちりゝんフシりんと素知らぬ立姿。

地六彌太裡菊を見咎め。詞夜の更けたるに若い女の爰には先づ何してお居やる。ハア。兄樣でござんすか。二度三度御苦勞なお役目。一夜などは苦しうもあるまいに。地色早うお仕舞ひあつたがよいと紛らかせば。詞いやさ是妹。世上騷がしき折といひ。何の爲に爰にはと問詰められ。イエそれはな。アノそれ〳〵。宵にお前と二つ三つ物言ふ内に。マア麁相な門番衆ではないかいな。わしをちやんと立出して何ぼ叩いても明けてくれぬは。よう寢てゐるに極つた起すも殺生。夜明け迄待つてやらうと思うて。ムヽウそれで立つてゐるのか。はれやれそなたは氣の長いと　地長い裳裾に目を遣へば。見じと振向く氣配りに。猶打覆ふ上の衣裡菊が胸思ひやり。それとは知れど知らぬ顏。詞夜明け迄は程久し。地遠慮も事によるものと門打叩いて。詞岡部六彌太參り

たり。地はや明け給へといふ聲にフシ何事やらんと戸を開けば。詞ヲヽ、奇特々々。門番の方々。もし眠つてもゐられうかと心を引いて見たばかり。サア此内に。地此内にと提灯避くれば眞暗がり。詞イヤ此内に一人も。臥つた者はござりませぬと地門番どもが返答に。詞ヲヽ、さう見え申した神妙々々。神妙に行くがよいぞ。いやさこれ。其着物のさ。つまのかみを。外の者に見せぬ樣にしたがよい。ふはさはすると風引いて。寢れば大熱たゞのり出る。たゞのり出ると大事になる。合點かやと地言ひくゝめる端折りかゞみの兄妹が。フシ思ひを遁れて内に入る。門番どもは氣も付かず心の付いた六彌太樣。風引くなとは有難いと。いふを別れの機會にして差固めたる。地門の前雑兵引連れ駈來る。阿根輪の平次光景六彌太を遠目に見

付け。詞これ〳〵忠澄。平家の落武者薩摩守忠度が。此所へ來る由搦捕らんと來る所に。其方がうろついてゐるからは。平家に心を通はし隱したには極つた。サア忠度を是へ出せ。返答によつて汝にも。繩喰せんと呼ばはつたり。六彌太ちつとも騒かず。忠度を出せ〳〵とはこいつこりや寢惚れたか。日が覺めずば。眼玉へ唐辛でも塗くりて性根を付けて夜廻りせよ 地笑止。フシ笑止と嘲笑ふ。地跡に扣へし阿根輪が弟平藏國景つゝと出で。詞ヤアぬかすまい六彌太。最前某忠度を付出し。只一討と思ふ所。暗さは暗し。討洩らして歸りしが物半時と間のないこと。汝が隱すか但しは。俊成が圍うたか二つに一つ。遁れぬ證據はコリヤ脱ぎ捨てし蓑笠。否とも應とも返答あるまい。地門打破つて俊成が家探しせよと下知するにぞ。雜兵中間一同に御門にどつと寄り來るを。六彌太堪へず駈寄つて門の柱に打付くる。此勢に氣を呑まれ兄弟しどろに逃行けば。臆病やつばら遁さじとオクリ跡もへ遙かに追うて行く。地薩摩守忠度卿六彌太が情により。師弟の對面敷島の道に寄りくる身の望み。晴行く空も明近し。はやお暇と出で給へば。俊成卿も今更に。名殘はつらき後朝の裡菊が物思ひ フシ胸は。涙に遣瀬なき。地忠度俊成に向はせ給ひ。誠に三世のよしみにより。身の果て拙き忠度が歌詠む數に連なりて。スヱテ眞拆の葛永き世に。其名を殘す御惠み。數へ〳〵て我爲の。千載集と フシ有難し。死しても忘れぬ君の御恩。いつかは報じ申さんと涙を。流し仰せある。誠に深き志五條の三位俊成が。未來迄の和歌の友と。心底粗略はあらねとも。世を憚りて對面も心に任せぬ折しもあれ。詞誠ある六彌太が仁義の情に嬉しくも。思ひを述ぶる詠歌の數。中にも秀逸と覺えたる其歌。さゞ波や志賀の都は荒れにしを昔ながらの山櫻かな。地此歌の心の如く。何とぞ源平和睦を結び。再び都に立歸り故郷の花を詠め給へ。暫しの内は勅勘の御身を憚る一首の和歌。詠み人知らずと記すとも。其名は隱れ。よもあらじと フシ宣へば。地忠度も御悦びは淺からぬ。裡菊が情の程また六彌太が志。彼是盡きぬ名殘とていとゞ別れを惜しむ夜に。オクリ鐘のへ響きぞ心なき フシ岡部の六彌太。地忠澄は阿根輪兄弟追拂ひ。俊成卿の御館彼是以て氣遣はしく。また立歸る提灯の光見付けて裡菊が。申し〳〵兄樣。詞段々のお心遣ひ。情深き武士と俊成樣の御褒美。忠度樣のお悦び。とてもの事に御對面。さあ〳〵 地是へといふ下より腰刀拔放し。下部が持つたる提灯ばつたり。闇と消行く蠟燭の薩摩守も人々も。こは何

事と六彌太がフシ心底探るばかりなり。詞ア、騒ぐまい妹。忠度に對面とはそりやどこの忠度。よもや平家の忠度が。一門に後れ只一人都に殘らう樣もなし。よしまた誠の忠度ならば。此六彌太に對面とは猶以て心得ず。源平と引分かる敵が敵に因み合ひ。互の心打解けては。戰場に及んで鎬をけづるに見知つた顏は劍の毒。切先がなまつて打合はるゝものでなし。地互に知らず知らぬこそ。世話のたとへの知らぬが佛。白みかゝるは夜明けの雲。朝間にならぬ其内にコリヤ。詞妹合點かと。裡菊が手を捕へ去なせ。去なせの兄が仕方。地呑込みながらも別れてはいつ逢ふ事も定めなきフシ夫を思ひの。隱し泣き。地薩摩守は六彌太が詞の六義和歌の望み。心に叶ふ此上はと思ひ殘さぬ暇乞ひ。俊成卿に禮儀をなし立出で給へば裡菊が。是なう申しと留むるも。兄を憚る心の闇。物はいはれず御腰に縋りフシ付いてぞ。泣沈む。六彌太も心底を察する涙押しとゞめ。詞ヤア／＼妹。是こゝに見苦しき蓑笠。何者が捨て置きし。エ、誠に最前ちらりと見たるは高瀬の船人。朝出の船の乘り急ぎ。忘れて往たに違ひはない。可愛や是が無うてはな。雨は勿論夜明けなば。顏が見えて。まばゆかろと地餘所に言ひなし取捨つる。情を戴く笠の端の深き思ひを菅蓑や。詞にいはぬ別路の振切る涙。合とゞむる涙。合果てし涙に忠度はフシ心を殘し出で給ふ。六彌太も俊成にはや御暇と立つ所へ。また引返す阿根輪兄弟六彌太を討取れと。喚き叫んで來る音に。驚く裡菊俊成も門内に入り給ふ。地はやむら／＼と拔き刀遁さじ遣らじと取卷いたり。詞六彌太をかしくハ、、、。さて性も懲もない奴かな。丁度これで兄が二度弟は三度。三度目が大事。お首の用心よう召されと地いふ下より。薙り立てたる段平物追立て追立て駈廻り。豆腐を切るよりいと易き岡部の六彌太やたら斬り。兄の平次が逃足に弟の平藏造作もなく。首と胴との別路や。朝の露のばら／＼とフシ殘る家來は逃散つたり。詞ヲ、。心地よし面白し。まだ西國の合戰に向はぬ先から平次が一刀。首を取るとは源氏の幸先。地六彌太が身の祝ひ。嬉しくも亦有難き仁義の甲勇氣の鎧。六具締めたる武士に。祿を賜はる弓矢の德。詠歌の德は六つの品。譽は五文字七文字に和らぐ。國の數々や。六十六に六彌太が其名は。隱れなかりけり

第二

地月と日を鏡にすれば曇りけり。戀しき人の俤は映らで移る世の中や。平家都を開き給ひ無官大夫敦盛も。須磨の浦にと

聞きしより。いたはしや右大辨重虎の妹君。姿形は名にあらはるゝ品照姫。千鳥ならねど泣明かし。幾夜寢ざめを須磨の浦。心を通はぬ夜半もなし。父母も世を早うし給へば母方の伯父君。三位俊成の卿いとほしみ。裡菊を御見舞に参らせ給へば是も亦。同じ思ひを須磨の浦。忠度卿の御事を語りつ問ふつ年端も。似たるを友の類かや。憂きが餘りの手ずさみに。腰元の玉笹が見物にて碁をうつ蝉の盤の面。黒いは平家白石は源氏の旗の勝負を心の。へ内に目算し。總じて此碁といふ物は。僅か二目か三目に習禮十九の道ありと。父のお話かねて聞く。軍の道も同じ事五騎か十騎の小勢にて。數多の敵を討つことも是。此石を敵と見て。四面を圍み。ある時は。敵を攻め又。攻められて助かり難き生死の。心を碎く石の數。凡そ三百六十目。

白と黒とは。夜晝に思ひ忘れぬ彼の人の誰と。寢ばまやしつらんと心の休む隙もなし。お乳や乳人の助言にもよしや歎くな叶はぬとても。縁と時節のあるならば浮木の。龜の如くぞや。たとへ一目劫なりと立てゝ縁を待つ迄は。生死の川を渡り手に是から是へ斯う打てばそれで此石生田川。斯う出る石に打連れて。やがての内にア、生田の森。戀しき夫に。大手の木戸。押へて跳る味方の黒。入らんと覗く敵のしろ。四丁に亂れて濱邊を指し逃ぐるを。碁勢弓勢の矢先に。かけて射て落し。こゝで源氏を皆殺し目出度い。目出度い夫の勝。えい／＼おうと石掻きまぜ御機嫌。すぐれて見えにける。裡菊碁盤おしやりて今お連らねの詞の内。出る石に打連れ生田の森。戀しき夫に大手の木戸とは耳よりな。お館を脱け出で須磨へお出での心ならば。

自らも御一所に。ア、高い／＼。御縁か敦盛様と自ら夫婦の縁は結びながら。兄様の惡性根が邪魔になり。何のかのとて遲なはる其内に。君は落人となり給ひ切るとなしに遠ざかる。雲井を捨てゝ鄙の住居思ひやるさへ痛はしや。何とぞ館を忍び出でんと思へども縁の證に下されし。青葉の笛まで兄様に取り隠され。何を印にいつを斯うとの力もなし。世に便りない身の上を。憐れと思うて下さんせと歎けば。共に歎かれて。忠度様と我が仲の歎きも謂はゞ同じ事。どうぞ共笛盜み出す仕様手段はあるまいか。これ玉笹膝とも談合三人寄れば文殊の智慧。とうか斯うかと取々にいふ程埒もあかざりし。玉笹思案してこれ申しお二人様。よい分別が出來た／＼。兄御様のあのお面で。いやらしい私に御執心。袖褄引かるゝうるさいと思ひしが。そこを堪へ

てお心に隨ひ。一夜二夜添伏して心ゆるさせ。彼のお笛をそつとしてやる此思案は。極上とも〳〵地そもじに其氣があるなれば。笛はおろか田も畦も取つて往け〳〵。詞なら品照様。是でさつぱり濟んだでないか。地ヲヽ嬉しやフシさりながら。誰しも好かぬ男には詞交はすも厭なもの。さぞ迷惑にあらう玉笹。詞ハテ何と致しましよ。お姫様のお爲ぢやもの。地目の疎い雷に摑み損ひに逢うたと思うて。辛抱致しましよとフシ果ては笑ひの折からに。地色扇屋若狹お見舞と地紙箱携へ。常に通る奥座敷。詞是はお姫様。いつ〳〵より御機嫌のよいお顏目出度し。さてお誂への扇出來と。地箱を開き取出せば心祝ひの折ふしに。扇とは先づ嬉しいと取上げ開き見給へば。詞お好みの通りに繪は書かせしが。書人も折人の私も。判じ物とばかり氣が付いて解くに解かれず。先づ其女が小褄取り。斯う。斯う振出した風俗。男が日傘差しかけしは極つた朱雀の女郎。禿と遣手が戸板の上に。さまと假名で書いた字と。鼠が生餌に喰付いたを。載せて舁いてゐる進上物は何でござります。ムウ是が合點いかぬか。解いて聞かすよう聞きや。朱雀の大夫は官位せぬ。無官の大夫様と寢たいと解くわいの。ハヽア出來た。そんな事存じたらまそつと心安い。地無官の伊勢の大夫があつたものと。是も機嫌をとり〳〵にフシ奥方。やさし艶めかし。詞いや申し無官の大夫の序に。又申上げる彼の敦盛公の笛の事。私娘桂子と申す者。御父經盛公へ宮仕へに參らせし由緒を以て。密に須磨より御文を下され。笛を此方へ遣はさるゝ樣に。姫君へ申し上げよと再三の御頼みと。地聞きも敢へず御色變り若狹いふな知つてゐる。詞其娘桂子。敦盛様に心をかけ互に淺からぬ仲と聞く。地夫を寢取り其上に證の笛まで取返し。此品照が緣を切り娘に持たせて須磨へやり。思ふ事なく添はせんといふ心。包めど色に見ゆるものなんの遣らう。聞くも腹立ち胸苦し立つて歸れはや歸れと。フシ以ての外に見え給へば。詞是は怪しからぬ御惡推。聊か左様の譯にあらず。地いや〳〵いふな聞く事ない。是非御聞分け下さるべしと爭ふ後に右大辨重虎。立つて仔細をとつくと聞き。詞こりや妹が尤も至極。兄が耳へ入る上は。心に納得するやうにして得させん。地先づ〳〵奥へとありければ。裡菊玉笹介抱しオクリ簾中へ深く入りにける。地コリヤ扇屋近う寄れとむずと坐し。詞此方にあつて益なき笛。所望の仕様によつて取らすまじきものにもあらず。重虎が留守を考へ。女を誑してやらんとは騙同然。して汝此笛を取つて何

とする。金に化りまする。ム、金にするとは。されば敦盛殿須磨より申越されしは。品照姫君と敦盛縁を結べども。今落人の我なれば。重虎公はなふに御成りなされ縁を切り。外へ御縁に付けらるゝ由。地色然れば縁の證として遣はし置きたる青葉の笛。そなたにあつて益なく此方には秘蔵の道具。詞汝日頃お出入の方なれば譯を申し。此方へ返し給はる様に働かば黄金を取らすべし。地重虎公へ直に申し入れる事勅勘の身なれば。却つて御難儀を察し汝を頼むとの御状。詞黄金とあるからは少なうて五枚か十枚。地世上物騒がしく商ひはなし。何でもよい儲けと存ずるからと言はせも立てず言ふな〳〵。詞敦盛はおのれが宅に隠し置き。もとより奉公に出だし馴染ある娘を當てがひ。法皇の御所を窺ひ奉るといふ事知るまいと思ふか。勅勘の平家肩持つは謀叛人も同然。地是にも返答フシあるや如何にと睨付くれば。詞ハ、、、ござりますとも。隠し置かぬと申すが返答。その隠し置かぬといふ證據は。豫てお前が惚れてござる。私娘の桂子を上げませう。是が敦盛を隠し置かず。平家の肩を持たぬ證據。經盛公へ娘を御奉公に差上げる時分にも。兎や角仰せ下され しかども。地四五日遅さにあちらへ遣し今に殘念。娘を上げうと申すより外の證據は是なしと。聞いてそぞろに笑みを含み。詞さつぱり とそれで疑ひ晴れた。地色何を隠さん娘に我等首だけ。それを得させば何あらんと懐中より一包を取出し。詞是がかの青葉の笛。妹ながら底意の知れぬ女。留守の内探し取らんかと。他出の時は肌を離さず。地色是を汝に得さするは畢竟娘を貰ふといふ。結納の祝儀も同じ事いよ〳〵娘を得さするな。詞くどい御念。右大辨から直ぐに太政大臣にお成りなさるゝ法もあれ。地色微塵も虚言は申さずと何をいふやら得手勝手。嬉しとばかり聞く耳も。うはの空そらフシ飛立つばかり。地近々良辰を選み娘が迎ひは此方から。これ。約束の笛やつた。あなたもこなたも貰うて大慶。悦びに千代を籠めたる篠竹の。本の響動き中は笛。末扇屋が骨折りも願ひのまゝに笛取持ち。肝心要しめ括りお暇。申し三重頭忍ぶ夜に。つれなくかゝる浮雲は。拂ふ嵐の。風の間に。あふぎへ君と。寢て月を樂しむ閨の戸にオクリ晴れよと。空を仰ぐにも。あふぎへ。夏なき。フシ里と夕顔の。地色五條通りの一構へ光る源氏のたそがれに。逢ひにあふぎを手に觸れてフシ情おきける。言の葉の末をあはれと尋ね見し。閨の扇のゆかりより。本フシ爰にいとなむ。扇店。フシ多かる中に。取分けて軒に暖簾の風そよぐ。扇屋若狭大掾と記し。表に

折人の梅櫻色を持つたる手品には。涼風價千金もをしげ夏たけ秋冬も風を。商なふ身がらとて雲の上人。天乙女。挿頭の扇舞扇。旅の誂へ地の持用買ひに城殿の扇より。商賣夜日に末廣がり家名を世上に鳴らしける。地色家をしるべき娘一人桂子と名を呼びて。年も三五の月の姿おぼろげならぬ父母のいつくしみ。物買ふ人間の隙を見てつか〳〵と。折人の小萩が側へ寄り。是申し敦盛樣といはんとせしが心付き。外の女の聞くを包みて詞をかへ。詞いつぞは〳〵折がなと首尾を見合せ今いふぞや。皆の衆も笑はずと聞いてたも。言出すもア、恥かし。なんのまゝよ言うてのけ。わしは此小萩のありつきやつた時見初めてから。それは〳〵惚れたといふは大抵の事でない。又惚れまいものか。無官大夫敦盛樣に生の寫しぢやもの。御緣か御父經盛樣へ宮仕へ。明暮れ御姿を拜むにつけ。地色此君ならで世の中に枕交すべき殿御はなし。たつた一夜で死ぬるともせめて一度の情を受け。末代女の果報者にならんもの。いつぞは〳〵と思ふに任せぬ世の有樣。詞源氏に世を狹められ。御一門に打連れ西海の波に漂ひ給ふとも。未だ都の内のどこやらに忍びましますとも。取々の風説。折角思ひ初めても色のない我が戀とは思へども。地色せめて生寫しの小萩女郎。我が目には正眞の敦盛樣と思ふもの。なんと惚れいでゐられうか。皆の衆取持つて父樣母樣に知らせませず。たつた一夜抱いて寢て下さるやうに賴むぞや。ほん〳〵にあられもない女が女に惚れるとは。事缺いた如く嗜んでも此心が儘ならぬ。サア約束に小萩女郎人の來ぬ間にちよつとつい。抱付かせて下されと手を取れば。姿を替へて忍ぶとは共に人目の包まれて。敦盛わざと恥かしげに。詞これ譯もない女が女に惚れて。肝心の時何とせうと思うて。花香もない退かしやんせ退かしやんせ。地色細工の邪魔なさるゝか。アレ上の見てござるといへばフシ暖簾を押上げて。地ヲ聞いてゐる見てゐるとしづ〳〵と立出でなう桂子。詞年端もいかねば道理かと思へば。又大それた濡を稼ぐ心から。其樣になぜあどない。假令小萩が小萩で。女なればこそ事にもならず。萬一正眞の敦盛樣であつて見や。都へは鎌倉勢が入込み。一條より九條の所狹く醍醐小栗栖宇治八幡。小原賤原芹生の里武士の居ぬ所もなく。どの耳に洩れ聞えいかなる大難にもなる時は。悔んで甲斐のあるべきか。深山木の其梢とは見えざりし。櫻は花に現れにけりと詠じ給ひし。賴政の歌の心の如く。地色たとへば敦盛公にもせよ姿を窶し。隱れ忍び給へば其梢とは

見えねども。敦盛様の櫻はそなたの色に現れにけりとは知らざるか。痛はしや昨日まで烏帽子の折りやう衣紋の付け様。起伏し立居に至る迄平家を手本に寫しあやかりし。榮華も夜の間の一睡の夢。我が夫は取分け御一門のお目を下され。御情厚き餘りにそなたを宮仕へに奉り。主従と申すは恐れながら。詞都落の御供と願ひしかど。女なれば御暇下され。重なる御恩を八重の潮路の餘所に見て。いつ報じ奉る事もなく。地平家々々と口にいふさへ若しや人の咎むるかと。心置かるる様に世を忍ぶ。情なや口惜しやと心に思へど口先には。詞敦盛様に似た折人の小萩長居させ。一人の娘を棒に振らうも知れまい。これ桂子重ねて小萩が側へ寄ると。爪々する合點か。地よう覺やと脇の下から兩手を入れ。痛いか〳〵といふ母の詞遣ひに氣を付けて。娘も顔を打覆へば痛くば是に懲りたがよいと。口にはいへど手を合せ拜む心も西は西。十萬億土遠からぬ。須磨にまします御家門の フシ御恩を思ふばかりなり。地折ふし父の若狹大掾いそ〳〵と立歸り。詞是は〳〵女房。娘が袖の下から手を入れて又痞でも起りしか。風の端にちつとの間もなぜおきやる。灸据やれとせがめども。我嫌ひとて娘に迄据ゑもせず。地煩はしやると聞く事でないと。大事にかくれば氣遣ひなさるな。詞煩ひでも何でもない。小萩が顔が敦盛様によう似たと。いふに付けての強意見。ムウそれなれば意見に及ばず。今日右大辨重虎殿へ參上し。豫ての願ひ首尾仕果せて立歸る。地然れば須磨へ御出足も今夜か明朝か。召使の女童まで汝一人には知らすぞよ。外の者には沙汰すなと。一人々々に謀を以て。詞互に取沙汰せぬ様に知らせ置きたれば。家内にちつとも恐れなし。地忍ぶ内は折人の小萩かく顯す上からは。太政大臣清盛入道の御弟。參議經盛公の御子無官太夫敦盛君。我々は下衆恐れありと上座に移し。夫婦も娘も飛退去れば心なき女の童まで。崇め敬ひ奉れば。女姿を其儘におめずおくせず悠々と。育ち見えたる公達の フシ御粧ひぞ常ならぬ。地色差上ぐる笛を取上げ押戴き〳〵。詞そも此笛と申すは。父經盛この道の達人にて宋朝へ黄金を渡し。よき漢竹を取寄せ殊にすぐれし兩節を一節取り。天臺の座主前の明雲僧正に仰せて。秘密瑜伽の壇に立て七日加持し秘藏して。得られたりし笛ぞかし。地縱へば平家運命に盡きはて馬蹄に骸をさらすとも。この笛竹と諸共に浮世の音をとゞめんと思ひしに。詞不慮に右大辨重虎が妹。品照姫に縁を結ぶ證とて送りしに。汝が働きにて再び我が手に戻り入る

悦び。又と類ひのあるべきか。地此上暫らくも都に足をとゞめては。君の叡慮一門の思はく只今打立ち須磨の浦へ赴くべし。年頃日頃恩を蒙り祿を貪りし者迄も。空目遣ひ見ぬ顔して。憐みをかくる者もなきに。いかなれば汝等親子我を勞はる志。生を隔つともフシ忘るまじ。地ヤア桂子思ひ出せし折々は。跡弔へと涙にくれ笛おつ取つて立出で給へば。娘は前後泣沈み夫婦驚き押しとゞめ。詞世上は事を窺ふ人でなしども滿ち〳〵て候に白晝に御下向恐れあり。殊更出陣の御餞に奉らんと。地折りかけさせし陰陽の陣扇。日暮までには出來すべし歸りあふぎ又扇と。夫婦が寸志を奉らんエ、娘泣きをるな。人音近しいざ奥へ女どもゝ御供せよ。日本國中が敵になつて攻むるとも。君は御運を開き扇つひには元の御身柄と。世擧つて仰ぎ申す樣に扇は我が手に清めをかけんと。折臺にさしかゝれば。なんにも禮はいはぬぞや。宿世いかなる緣かある。知らまほしやとばかりにてオクリ打連れ。奥に入り給ふ。地深編笠に世を忍ぶ浪人めけども男盛り。尾羽も枯らさぬ田舍侍若狹が店に誰ぞ賴まん。扇所望と腰掛くれば。主心得仕事押しやり煙草盆提げ立向ひ。詞扇は何が御所望骨をお好みなさるれば。先づ常の骨丸骨角骨或は煮骨炫骨と申すもあり。紙は金地銀地蒔砂粉。墨繪彩色小紋形。地蒔繪糸縫ひ機械扇舞扇。お土產か持用かお望みあれば時の間に。折立てゝも上げまする先づお上り遊ばせ。フシ誰そお茶持てとあひしらふ。詞扇の品々承る何も所望に是なし。拙者が望みはあれあの。折りかけしは陣扇よの。上京致さば調へくれよと。國許の古傍輩に賴まれし。地どれお見しやれと手に取上げ。詞八本十六本陰陽の骨數よし。朱の丸金の丸銀の丸是もよし。心覺えの圖に合ひ申す。先づ此樣な陰陽の陣扇必ずと賴まれし。地歸國もはや明々日。幸ひ見かけたる此扇。御亭主是を所望申すと取納むればア、申し〳〵。詞其扇はさる方より御誂へ。今日の暮までに渡す筈。寸分も違はず明日中に折立て。地明々日御歸國の間に合はすべし。其扇はこなたへたべ。詞いや左樣おぢやる是非に所望。それは迷惑。地どうあつても其扇。こなたへと辭退所望の折こそあれオクリ奥より。洩れくる笛の聲。地敦盛の音色疑ひなく若狹驚き。餘所の聞えもつゝましや止め給へと思へども。留めにも立たれず心を冷せば一入に。餘音嫋々として或は亂れずオクリ或は。亂るゝ青柳の靡く。が如く慕ふ如く。感に堪ゆるとは是やらん。買手は小首打傾きフシ神意を澄ますばかりなり。地京極通りの方より究竟の

捕手數十人。土砂踏み蹴立て馳來り若狹が門をおつ取圍み。詞平家の落人無官大夫敦盛。此家に忍びあるよし。阿根輪の平次召捕りに向うたりと呼ばはれば。地家内は笛のひいとも言はず色を失ひ見えければ。買手も立つに立端なく。氣の毒ながら身にかゝる程にはなく。次第を見るも後學事。落居の內此所に置かせてたばせ煙草盆。フシ提げて店へぞ片附きける。地若狹とつくと思案を極め。詞さてさて是は思ひ寄らぬ御難題。御覽の通り間所もなき茅屋同然の住居。左樣の貴人を隱し置くべき所もなく。職人なれば賴もしづくとやら猶存ぜず。地定めてそれは人の言ひなしか家違ひか。こつちよりそつちを詮議なされと。言はせも立てず。默れぬかすまい。詞おのれ最前重虎公へ參上し。敦盛が笛を申し賜はり歸りし事。御知らせあると其儘組子組下を手分けさせ。此家の四方をおつ取卷いて事を窺ふに。今吹いた笛の音は。敦盛を除けて今の京に誰あらう。是でも爭ふか。重虎公の仰せは鎌倉殿の御諚同然。ヤア捕手ども彼奴踏飛ばして家內を探せ。地畏つて捕つた〳〵。隙間を窺へ根太こぢ放せ。長持戶棚ぶつ開け衣裳櫃簞笥へは這入らぬか。土藏湯殿天井二階の隅々隈々。阿根輪も自身手をおろし。殘る方なく探せどもフシ更に在所はなかりけり。地阿根輪大きにむくりを起し。詞やい若狹め。面の剝げた女め四人ある見て置いた。敦盛は公家上﨟女に化けて居ようも知れず。地一々爰へ呼出せ吟味すると氣をいらてば。詞ムウ敦盛を詮議なさるゝ阿根輪殿。敦盛を見知らずか。ヲ、サ知らぬ〳〵。ハ、、、平家の公達數多ある中にも。名高き敦盛を知らぬ阿根輪殿今迄のお役目は。イヤ小癪な事を問ふ。兄は權左衛門といふ上北面。身は部屋住みそれでどいつが面も見知らぬ。追付け重虎公の御取立てにて大名になるわい。地小言を吐かすと女ばら是へ引けと引出させ。詞やい汝等。誠の女か敦盛が似せてはゐぬか。詮議するまで怖い事微塵もなし。つゝと寄れ〳〵。コリヤ頤をぐつと上げよと。地仔細らしく咽に目を付け撫でゝ見て。詞ムウおのれ敦盛でない。誠の女のしるしには咽笛に佛樣がござらぬ。地よいは〳〵休息せよとおつ立てさせ。詞次の女是へ出せ。なんぢや女に是へ出せ。ヲ恥かし自身に持つて參らねばどうもお座へは出されぬと。地小褄かい取りびらしやらと。出るを引寄せ顏打詠め。詞此面が何の敦盛の贋者。釜の前にへちまふ地飯盛ぢやと突放せば。したり扱つても杓子ごふのいたお目利と。フシひんしやんとして入りにける。地其次の女おめる色

なく。私が親は兩替町に住みながら。貧を苦に病み相果てられおかねと申す母親一人。私が名はお銀と申すに贋(にせ)はない。疑はしくば親元を付けて御覽なされませ。げに噓あらん顔に極印(ごくいん)の跡もあり。正眞の女たるべしさりながら。餘程すれた奴かなとフシ笑うて是も仔細なし。地次は差詰め敦盛の小萩とやつせし女姿。若狹身をあせり逃がす道なく。詮議は猶させられず平家の御運は斯く迄も。盡果てたるか淺ましや。君も我も一代一度の身の大難。心に立てぬ願ひもなくフシとかく猶豫(いうよ)し見えければ。地扨てこそ〳〵若狹めが心得ぬ面付(つらつき)と。突きのけ〳〵小萩が手を取り。詞ヤア者ども此女が面を見よ。銀漿(かね)黑(ぐろ)に薄化粧。折人(をりて)に似合はぬ手足の尋常。地いで懷(ふところ)を吟味せんと用捨もあらく取つて引立て。袖口より手を差込めども相手にならんも力が足らず。今顯(あらは)しては若狹が難儀身の恥辱と。いよ〳〵女に身をなして。なう悲しや連添ふ夫(つま)ならで。外の男に此肌はいらはせぬと。身を捻ぢもがき焦(あせ)れども詮方盡きて見えたる所に。以前の物買ひ阿根輪が側に立寄つて。差込む腕(かひな)の骨も拉(ひし)げと摑み拉いで突飛ばし。女を圍ひ立ちたるは心は知らず扇屋の。フシ嬉しさ喩へん方もなし。地阿根輪の平次むつくと起き。詞こいつ慮外千萬詮議ある女を圍ひ。名ある侍をひどい目になぜ遭(あ)はせた。地憎(にっく)いやつめと睨んで見てもびくともせず。詞されば名ある侍の道に背き給はん笑止さ。お爲を存じて引分けたり。なぜ〳〵道に背くとは何の道それぬかせ。ハテ下(げ)さげに物をいふ人。御存じなくばとつくと聞かれよ。そも今日の詮議無官大夫敦盛の事ならずや。それは差置きよしなき女の改め。あれ御覽ぜ。あの女一人(ひとり)身(み)にあらぬ證(しるし)。眞黑に鐵漿(かね)つけたる主(ぬし)ある女。きやつ敦盛の贋者に極れば手柄ともいふべきが。萬一さうでない時は。夫ある女の肌に手を入れ腕をけがし。不義者なりと呼ばるゝ惡名は何となさるゝ。承れば追付け大名に御成りなさるゝ。然れば取分け大事の身。侍の廢(すた)ることは心を付けるがよい筈と。引分けしは其許(そこもと)の御爲。一禮もあるべきに却つてお咎めは。いやはや迷惑千萬と嘲笑ふ。いふまい〳〵。そりや咎められ言譯といふもの。人の非義を糺す程の武士道を磨くからは。地被(かぶ)つた笠も取りかつ躓(つくば)つて假名(けみやう)も名乘り。其譯をなぜ言はぬ。詞いや〳〵それは了簡違ひ。此男が腰を屈(かゞ)むるは日本に只四人。一に神明(しんめい)二に佛。三に天子四に主君御兄弟。其外は蠅虫(はひむし)とも思はねば。腰かゞめうやうがない。笠取らず名を明かさぬも。畢竟(ひつきやう)そちの爲なれども。地所望ならば何より易

しと笠ひん脱ぎ。坂東にさる者ありとは豫て音にも聞きつらん。我こそ武藏の國の住人私の黨の旗頭。熊谷の次郎直實と。聞くに阿根輪もびつくりし家内も扱はと氣遣ひに。又氣遣ひを重ねしは産月近き嫁達の。フシ麻疹に病みつく如くなり。地負けてゐぬ阿根輪が氣質。詞然らば熊谷殿渡し申す。敦盛が詮議なされ。但し一門の在所知るとも。見ゆるせと鎌倉殿御諚ばし候か。地手ぬるし／＼と聞きも敢へず。詞いや／＼見ゆるせとの仰せもなく。又扇屋まで詮議せよとの御諚も聞かず。言はれざる事なれども。京家の武士に手ぬるしと言はるゝも恥かし。地いで敦盛が忍びゐるか居ぬか。實否を糺し見せ申さん。詞やい若狭とやら。平家繁昌の折ふしは幾ばくの恩も著つらん。其冥加を思ひ扇の折人などゝ僞り隱し置くとも。此熊谷が一目睨まば安穩に助け置くべきか。其女に用はなし外に隱し置いた敦盛があらう是へ出せ。コリヤこりややい。町人とてうろたゆるな。居ば居る地居ずば居ぬと眞直に言うたがよいと。フシ餘所に知らせて言ひければ。詞ハア、是非もなし。遁るゝ迄はと隱し忍ばせ參らせしが。地色此上は力なしいで敦盛を見せ申さん。暫らく御待ち下さるべし。小萩こちへと手を取つて オクリ泣く／＼奥へ走り入る。詞なう阿根輪殿最前承る。右大辨重虎とやらんの仰せは。鎌倉殿御諚も同然とは珍說。つぶさに鎌倉殿御耳へ入れ置くべし。地其仔細とつくと仰せ聞けられと。言はれて大きに敗亡し。詞是は／＼東國の武家方は物覺えの强い事。それはかの今の扇屋めを嚇しの爲。ふと口へ出放題に申した事。御上聞に達しては大分迷惑。地御沙汰なしに賴み奉る眞平々々と手を摺る所へ。遁るゝ方なく敦盛の御首賜はりしと。いふ聲も涙持つたる目結の衣に包みし首。フシ二人が中に差出す。詞手柄々々熊若殿いざ御覽なされ。先づこなたより。地然らばと押開き首取上げ。詞出來いた。此褒美に隱し置いた科は許す。地熊谷さらばと駈出す刀の鐺しつかと取り。どつこへ其手を喰ふべいかと引戾し首もぎ取り。二三間投飛ばされ死に入るばかりの痛みをこらへ。詞むく／＼と起上り敦盛が首見屆けた。侍どもサア來い地身も歸ると フシ跡をも見ずして逃失せける。地色奥に若狭が妻の聲。なう悲しや娘が死骸を見て。小萩の自害せうと遊ばすわいの。留めて下されと聞ゆれば驚きながら。詞これ／＼麁相いふまい。熊谷様が聞いてござる。それは敦盛の死骸ぢや何々の誓文。地娘ではないものと言紛らし。あちらを案じこちらを繕ひ フシうろ／＼すれば。地見る目にたへかね

コリヤ若狭。詞此首は汝が妹。小萩を敦盛といふ事は。一目見るよりはや知つたり。最前阿根輪が聞く前其向にも済まされず。分けては言はれず隠し置かば出せといひし我が詞。遁れぬ所と心得代りに娘を斬つたるな。近付きでもなく縁もなき汝と熊谷。殊に平家の公達たる敦盛が事に。用捨せう筈はなけれども。熊谷と平家の出逢ひは戦場の事。それはそれ是は是と思ふ故。隅々迄眼は配らず。町人も弓取も人の恩を蒙り。地色情を受くる程悲しきものゝ上はなし。かねての恩を思ひやる平家の落目。娘に替へて敦盛を痛り隠す。汝が心の不便さに。何事も見ず知らず聞かぬ顔。母もさぞや娘が顔の見たかるべし。苦しからず呼出せとそなたへくるりと捻向いて。餘所目を遣ふ武士のフシ情は顔によらざりし。地なう有難や神か佛か熊谷様。何事も御存じの上お許しあるぞ女房と。呼ばはれば小萩諸共こけつ轉びつ走り出で。敢へなき首に抱き付き悶え歎けば父親も。こらへし涙一時にスエテ泣叫ぶこそ。道理なれ。地色女房泣く〳〵夫に向ひ。詞こなた一人の子でもなく。夢程も知らせて下さつたら暇乞ひもせうものと。今迄は恨みしが思へば悔んでも返らぬ。せめて最期は大人しかりしか。地色母戀しとも言はざりしか。殘す詞のあるならば。語つて聞かせてフシ下されと又さめ。ざめと泣きければ。地父は涙にうだばれて開くに苦しき目をしばたゝき。最前よりの仔細は知るまじ。詞熊谷様のお詞。身替り立てよとの御情と心得違へ。お受けを申し立つたれども誰を斬うとの當もなし。娘に斯くと語りしに。首差しのべ我が手を持つて首筋を撫で。こゝを斬れよと教へし悲しさ。目もくらみ骨身も砕けしが。地女なれども涙一滴流さず。命を捨つる健氣さに恥入つて。鬼ならぬ氣を鬼になし。詞サア最期只今。思ひ置く事あらば語り殘せと尋ねしに。母様の事は父上のましませば苦にならず。地色昨日にも斯くと知らば敦盛様。一夜のお情に預り假にも妻よ夫よと。言うての上に死ぬるならば賽の河原へはよも往くまい。浮世の殘念是一つというたばかり。首差しのべしいぢらしさ。敦盛様のお髪に似せんものと解亂し。髪も心も思ひ切り首迄切つてのけた女房。なう可愛やさつきにもこれ母様。詞今宵須磨へお出でなされては。再び逢はうやら逢ふまいやら。敦盛様のお身の上。もしもの事あれば私は尼になる。此世の思ひ出差合ひで言ひにくいが。見ぬ顔して下さんせと。地恥かしがつた面差がまだ此顔にあるわいのと。夫婦手を取り泣叫べば敦盛も聲を上げ。一日の情に百年の命を

捨つるとは悶きしが。それは枕を交しての上の事。穂にあらはれて口説きしかど明日をも知らぬ我が命。なまなか情あり顔せば跡で歎かん不便さに。わざとつれなくもてなせし。今別るゝと知るならば了簡もありしもの。果無き最期を見る事よと。御身にせまる御涙とゞめ。兼ねて見えけるが。側なる硯引寄せ給ひなう夫婦の衆。聞及ぶ人の妻に定まる時は。お鐵漿にて齒を染むるとや。尤も品照に緣はあれども。それは此世の假の妻未來々々の後迄も。眞實敦盛が御堂に定むる此桂子。是が夫婦の證ぞと。泣く〳〵首を掻抱き。墨すり流し筆を染め涙に墨は薄くとも。我とそなたは戀中と思ひ。白齒を。染筆や。二人が中は。ふしかねも。歎きの中の妻定め。染めては染むるまどしさも。つひにしみじみこつてりと褪色も。こい〳〵。烏羽の。汝も冥途の鳥と聞くやがて跡より追付かん。半座を分けて待ち給へと。亡き魂にくれ〴〵と傳へてくれよとばかりにて。かつぱと伏して泣き給へば。夫婦は歎きの中の悦び數ならぬ我々が娘。命を捨てずんば忽體なや。平家の公達の御臺所と呼ばれうかと。二人の中に首取上げ。親には生れ勝つたな出來しをつたと言ひつゝも。生きて此世で聞いたらば嘸嬉しがるでござらうの。悦び顔を見る樣におぢやるわと。又繰返す世迷言夫婦が涙の飛沫に。不慮に出逢ひし熊谷も。共に袂を絞りける。敦盛衣紋引繕ひ。熊谷の次郎直實見參せんとありければ。思ひよりなや見參とは誰やらんと立向へば。仔細はくどく言ふに及ばず。經盛が末子無官大夫敦盛。首取つて高名にせられよと首差しのべて見え給へば。是は〳〵迷惑。我等平家追討のため判官殿の幕下に屬し。近々一の谷須磨の浦へ出陣仕る。其折からは平家に名ある大將と見るならば。武藏の國の住人熊谷の次郎直實是にあり。返せ戻せと扇を以つて打招き〳〵。組んでは討ち押さへては掻首。甲首をいか程も取つて高名せん爲。陣扇を調へにこそ參りつれ。小萩とやらん女の首取つて高名せよとは。熊谷を侮るか。憎い女めコリヤ亭主。此女内に置くな。町方へなりとも須磨へなりとも商ひに追ひやれ。馬鹿者めと睨み付けて取合はず。若狹悦びア、どこ迄もお氣の付いた。これ小萩最早日足も傾く好い商ひの出時分と。地紙の箱を手に渡し是を持てば人は咎めぬ。いやまだ忘れた是がかの陣扇。誂への所へ怪我せぬ樣に。お届けなされて下さりませと伏沈めば。共に涙にくれながら押戴き〳〵。なう熊谷殿。御所望と

候へば此二本の陣扇子。分けて一本進上申す。重ねて巡りあふぎを以て互ひの勝負は胸にあり。お暇申す夫婦の衆必ず未來を頼むぞや。お氣遣ひなさるゝな後世は我々請取つたりと。いふより早く七首引拔き。妻諸共に髻を押切り〳〵。淺ましや今日迄一人の娘を。世にあらせん其爲に佞り媚ひ。平家は御代のふくらなり莫大の御恩を請け。其恩のため娘は殺し是で恩を報じたかと思へば。其報じたは熊谷樣の又大恩。方をつらへ直したばかり。所詮男は立てられず手馴れし扇屋を營み。今日の生路を送るとも。心姿は蓮阿彌といふ出家となり。娘が姿も御影に寫し。其前にて御跡は懇ろに弔ひ奉らん。ヲヽ嬉しや未來は夫婦聟舅。一蓮托生南無阿彌陀と互に涙にくれ六つの。餘所にも告ぐる無常の鐘。いつも聞くより哀れなり。熊谷も哀れをいや増しげに我とても今日あつて。明日ははかなき弓矢の道互に討つとも討たるゝとも。同じ蓮の蓮生ぞやさらば〳〵。いざさらばと別れ出づれば是なう〳〵。其取成りは女とも見えず下葉の木隱れて。忘るな元のはぎ小萩心を付くる秋の風うなづく薄女郎花。花を佛に奉り娘が爲に堂立てゝ。姿を殘す御影堂妻諸共に敦盛の。名も長き世の今迄も。何阿彌かあみと僧ながら商ふ業も此時に。淨土の緣にあふぎ屋の動かぬ要の名物と。手毎に開く折折に隨喜の。風をぞ出しける

第　三

豐前の國宇佐の宮と申し奉るは。欽明天皇三十一年。肥後の國菱形の池のほとりなる。民家の嬰兒に神託あり譽田八幡麿の垂跡。當國に鎭座ましまして人の敬ひ日々に。威を增す神の宮柱太しき立て動きなき。誓ひを頼むなか〳〵に騷がしき世の有樣や。大風頻りに吹起つて一夜に高き梢を折り。庭の樹を切り地を穿ち石の燈籠こけ崩れ。玉垣鳥居打歪み笠木は彼處に遠近の。人は驚く天の災身の愼みと祈るなる。神の御前の參詣は引きもへちぎらぬ其中に。豐後の國に名を得たる尾形の郡領惟秀が二人の嫁。二郎惟光が女房岳谷。三郎惟義が妻の糸竹。相嫁同士の仲よくも。徒路拾うて。神祈り。腰元仲居取々に。敬ひかしづく社の陰。なう糸竹樣アレ御覽なされ。今朝明け方の大風。雨戸障子も吹飛ばし怖い事とは思ひしが。是程までにはあるまいと思ひの外に此宮の有樣。あの嚴い石や木の折れる事思へば。わたし等が身體を吹飛ばされぬがいかい幸福。是に就けても氣遣ひなは他國なされた殿御達。もし船などに召したらばと案

じるが一つ。詞二つには國の女房の事忘れて。どこぞにぬつくり惡性地やつてゞもあるまいかと。思ふを祈る八幡樣信を取つて頼ましやんせ。詞成程々々さうでござんす。大切に思ふ互の殿御。とかく神樣にお預け申し惡事災難別しては。地いたづら仕懸ける女子があらば拂ひ除けて其上に。今迄より百倍可愛がつて下さる樣に。利生を頼むと伏拜めば。仲居が聞いて皆の衆聞きやつたか。詞お二人樣の立願。悋氣交りの息災延命何やらかやらの取交ぜ。八幡樣もどぎ〳〵なされ。地色結局利生があるまいと打笑へば。詞あれ申し岳谷樣あんな事いひをる。やんがてわいらも殿御を持つて。地其時に思ひ知れと叱りながらも下々に。氣を立てさせぬ人遣ひフシ神も惠みや深からん。地祈念も終る折ふしに拜殿の幕打上げ。嚴らしく出る侍。用ありげに目を配れば。面を覆ふ袖屏風小オクリ顔を。隱してフシ身を忍ぶ。詞是は此邊に見馴れぬ女ばら。所の者か他國者か。仔細あつて吟味する名をぬかせいと咎むれば。仲居の松世が心得て。いや苦しうも候はず。地色豐後の尾形の嫁達と。フシ仄めかして行過ぎる。詞こりやこりや待て〳〵。ム、ウそれは郡領惟秀が二人の子。二郎惟光三郎惟義が女房な。斯くいふを誰とか思ふ。平家の公達三位中將重衡卿の御傅人。後藤兵衛盛廣といふ者。主君重衡薩摩守忠度卿を同道にて。須磨の內裏より此宇佐の宮へ勅使の參詣。七日七夜の御參籠幸ひの折なれば。幕の內へ連行きお目見得させう。サア地色兩人ながらこちへ來よと岳谷が手を取れば。むつとせしが押鎭め。詞重衡樣忠度樣とは聞及ぶ雲の上人。お目見得とは忝けながら。身御連合にも伺はず我儘には恐れあり。其上主ある女の手を。斯うお取りなされても苦しからぬ都方の習ひかな。地國育ちはかたくなにこんな無作法は默つて居ぬ。わたしは尾形の二郎惟光といふ武士の妻。詞斯う取られた此手を何とせうと思はしやんす。ヤア仔細らしい女がある。不義不埒を仕懸ける樣な盛廣と思ふか。重衡卿の膝元去らず。平家の一門立てうと伏せうと某が心任せ。其方どもを幕の內へ同道といふ仔細はな。重衡卿を始め御一門の仰せには。尾形親子さへ味方に付くれば西國の大小名。殘らず平家に隨ふは案の內と御望み。幸ひの折なれば先づ女房から目見得させ。味方に頼まれたといふ契約の盃載かす了簡有難いと思へさ。なんぼお身達が此國で。尾形々々とびこついても。平家の官位に逢うては蠅虫というても大事ない者を。此盛廣が口一つで。御家來になさるゝは寢耳へ水の果報といふもの。地色サア〳〵

來いと引立つればいよ〳〵心せき立てども。虫を押さへてア、これ〳〵。詞此二人が連合ひは尾形といふ弓取。女房等が口に乘つて粗忽に頼まるゝ人でない。但し此方は女房がいへば源氏方へも裏返り。又はお主の重衡様のお首でも斬る氣かや。ちつとでも侍の性根があらば。女房に言負され應とはよもや言はれまいがの。サアそれは。それはとは。地いやてやそれはと跡ぐち〳〵。いや先づ大事のお供先。御用を缺いてはならぬぞと。フシ言紛らして奥に入る。地二人はふつと吹出してほんにをかしい侍。詞ありやまあ氣違ひではなかつたか。岳谷様とした事が。氣違ひとは結構な言ひやう。あれが正眞のあんごう侍。世界の阿呆の上盛。いや〳〵あんな者に出逢うては。地色共々こつちも阿呆になるいざ歸らうではあるまいか。さらでござんすはや下向と連立ち戻る松原より。踊り狂うて來るのは何ぢやな。詞ほんに小さい男の子が。何やらいうて走つて來ると。

正神宜童部

シテ地言ふ間程なく近付く菅笠片手に笙の笛。腰に柄杓の笑顔もよい。よい伊勢參宮のフシ染浴衣。二上リ唄お伊勢參りは皆駕籠抜けよコノナ。あうと言はずにようか抜けまする。しかも笠被てナ。ア身もかろ〴〵と。ナホス合出立ち凛々しく。フシ可愛らし。ツレ詞申し岳谷様御覽うじませ。まだ年もいかぬ身で。お伊勢様を拜み參宮せしは奇特な事。シテされぱいな。神詣の御利生とて。山坂海川怪我もなく無事に下向はほんに目出度い。ツレコレヤイこな子。そちが國は何といふ小母に言うて聞かせい。坂迎の心ばせ。地扇でも袱紗でも祝儀祝ほと尋ぬれば。シテヲ、よくこそは尋ねたれ。詞我が國は日本。ツレヲ、それは知れてあるが。其日本の内でも何といふ所で。父様母様持つてゐるか。シテはて懇ろに根問ひ葉問ひ。おれが父様の名は仲哀天皇。ツレヤアそれはマアなんの事ぢや。母様の名は。シテ神功皇后。其母様が此坊ちを。お腹に持つて三韓退治。其時の舟唄に。唄嬉し目出たの若松様よ。ヨイ〳〵ヨイ〳〵ヨイ。枝も榮えるエイエイ。葉も繁るはさりとは目出たいえんやらえいアリヤリヤ。コリヤリヤ。なんでもせい。ツレ詞糸竹様聞いてかえ。變つた事いふをかしい子。そうして國はどこの者ぞ。シテヲ、日本は君子國。詞唄地何れにをろかの里もなけれど。我が宮所と聞えしは先づ當國宇佐の郡。又王城の南に當つて。ナホス嶺も高々フシよい男山。男の子とて潔よい。此童子が頭に宿る。心は正直張合ひ人形。瓢簞に宿る山がら。胡桃

に吼ける友鳥。虎斑の狗兒。起上り小法師振皷。張子の皮や塗り稚兒。夙者結びにさゝ結び山しな。結び風車。手毬やとぐろばち小弓。弓矢の神の乘移る。我名を知れやてんと八幡大名の行列は。臺傘立傘大鳥毛。對のお道具やつしつつし。清め給ひ祓ひ給ひやつしつつし。じつと鎭まる其氣色。ツレ地二人の女心付き神の正しく乘り給ふ御告げはいかなる事やらんと。スヱテ敬ひ恐るゝばかりなり。シテ詞いで〳〵神の心を語らん〳〵。人の願ひの地茶直に宿りて。子供時分のようさやちやうさや。ちやんぎりしきりの樂車囃す。フシ裸姿のおもて白や。二人フシ高天がはらあて神はとんぼの秋津嶋。せんまが皷も苔むして。ひよ〳〵鳥も驚かぬ御代を守りの。シテ我なるぞよ。ツレげに有難しといふ花の幣を散らして再拜すれば。シテ和光同塵は結縁の其始め。ツレ八相成道利物のコハ、終り。シテ神といひ。ツレ佛といひシテ只これ水波の隔てにて。二人國民和らぐなか〳〵に驕る平家の惡心。惡行。上にあつては。下を惱まし富んでは奢りを知らざる故。王法を輕んじ佛法に仇をなす神の。怒りを思ひ知れと。ナホス地かしこに落ちたる鳥居の笠木。さも輕々とおつ取上げ四方を拂ひきり〳〵〳〵。廻る報ひのくる〳〵くる。狂ひわなゝき飛翔りフシかつぱと。伏して見えけるが。シテ江戸又立上つて斯くとなん。世の中のうさには神もなきものを。何祈るらん心づくしに〳〵ナホス二人地我も又々うさにぞ歸る元の社。フシ神はあがらせ給ひぬと。蓬々と狂ひ覺め氣もうつとりと拔け參り。汗を絞りの旅浴衣袖を枕に伏したるは身の毛。よだちて恐しき。地幕の内に聞き居たる後藤兵衞盛廣。女を突きのけ押しのけて。伏したる童が襟かい摑み引起せば。スヱテ前後は知らず只うろ〳〵。詞エ、おのれ憎い奴。主君重衡卿忠度卿勅使の參詣をよく存じ。神託に事よせ平家をさんざんに言散らし。味方に心ある西國の大小名にも。疎ませんと謀りしは大膽の手段でなし。地九州の奴ばらが頼んだか源氏の仕業か。ぬかせ〳〵ぬかさずば骨を拉いで言はせんものと。胸ぐら取つてせこめるにぞ岳谷見かね押隔て。詞いやいやこれお侍。御神託に疑ひのない證。年は八つか九つか。十にならぬ此子が力で。此笠木を振廻すは爭はれぬ神力。ハアテ近い例には氏子を憐れみましまして。井戸にも川にも毒ありと一夜に國中いひ流し。地色めい〳〵の家々に水汲み込んだも神の不思議。それでもあの子に疑ひ晴れずば現の證據は此笠木。詞こなたが持つて見たがよいと。言はれてげにもと思ひながら。なんの是しき木の折れも同然と

立ちかゝり。地うんと上げるに動かばこそ身内の力を入れる程。金輪際へ釘付けにフシ打つて付けたる如くにて。いつかな動かぬ手持無沙汰いや只餓鬼め紛れ者。責めはたいて言はせんと引立つる。いや科ない子を可愛げに放ちはせじと取付けば。詞エ、聞えた。扨はおのれ等が親夫源氏の奴ばらに頼まれたな。地一人も遁さじと二人を手籠に押伏すれば。幕の内より三位中将重衡。薩摩守忠度暫し〱と立出で給ひ。ヤアさなせそ盛廣鎮まれと制し給ひ。詞我こそ薩摩守忠度。お事等は尾形の郡領が嫁どもとな。重衡某この宮居に參籠し。地色怨敵を平げ再び歸洛をなさしめ給へと。祈念せし折から思はざる大風天の知らせは目のあたり。詞其上に童子が口走りしも神の告。源氏方の巧みとは盛廣が粗忽の一言。疑ひもなき神託。構へて〱立歸り此事を郡領にも語るな。地國人にも沙汰なせそ忠度程の武士が。卑怯の詞と思はんが。詞三種の神器を守り奉りまだ八歳の安德天皇。齡老け給ひし二位の尼。地色女院のかくてまします内は一人の雜兵も語らひ。及ばぬ迄も一戰ひせずんば叶ふまじ。其時神託の沙汰あらば誰か味方に參るべき。幼き君老いたる二位殿憂き事知らぬ女院に。辛き目を見せ奉る我々が悲しさ思ひやれ。女なれども由ある者の妻なれば。恥を捨てゝ頼み入る。詞又その童子は伊勢參宮と相見え。笠に戴く千度の祓ひ。地天照御神の頭にとゞまり給ふといひ。八幡の神慮にも叶うたる幼き者。詞汝等が領分に迷ひをれば。民を惠み子を惠むも同じ理。勞り取らせ本國に送り屆くべし。地いざや重衡我々も報賽と立寄りて。互に社を。遙拜あり。名殘の法施奉り又參るべき別れかは。今日を此世の暇乞ひと。思へばいよ〱味きなく。胸に涙は滿つれども。目には零さぬ武士の。袖に隱して人知らず拳を握り喰ひしばる。齒莖に血を吐く憂き悲しみ。同じ思ひを重衡も身を掻抓りむせび入る。心の涙フシいたはしく餘所の。袂も濡れにけり。七日以前の詣でには。神を頼まばさりともと。スヱテ思ふ心も虫の音も。弱り果てぬる御下向。此身の宇佐を立別れ。須磨の都に行く水のあはれ。果敢なや 三重 へ果てしなき。

地色年古りし軒端の松にこと問へば。我より先に住み馴れて。豐後の國崎一郡の蟠る尾形の郡領惟秀とて。齡に白髮の雪を積らせ腰に梓の弓取あり。何の祈りか奧の座敷を淨めさせ。帳臺に竈俎板とりどりに。夫は木綿かけ魚鳥なんど土器に尾羽をあらせ。女は懸帶して飯匙取り夫婦手づからまさなごと。フシ神祭とは知ら

れける。地郡領が二人の子二郎惟光が女房岳谷。三郎惟義が妻の糸竹夫の留守は取分けて。舅姑に宮仕へ連れてお側に畏り。嫂だけに岳谷。詞是は〳〵糸竹殿も私も。髪梳く隙とついお側を離るれば。秋の朝風身にしみてお毒になるに。お料理よお臺よとさもしい業をあられもない。地色下々がお厭ならなぜ私どもを召しませぬ。サア糸竹殿いざお代りにと立寄れば。ア嫁女達寄るまいと寄せつけねば糸竹。詞其お寄せなされぬ程お腹立たせますが勿體ない。連合ひの留守の内御機嫌に背いては。地かねて申し付けられし戒めを忘れたやうで猶悲しい。只御慈悲にと立寄れば。詞これさ〳〵腹立つ事も何もおぢやらぬ。是は姥が嶽の明神へ供ふる御膳。年若な女は不淨を恐れ寄せ付けずと。地聞くに二人は飛退去り　フシはつと愼しみ敬ひける。詞四季の御祭月々には。身淸淨なる家の子供に言付け供ゆれども。けふ爺婆が自身調ずる仔細は。親に知らせず家出せし。和御前達が夫の爲にする事よ。かねていふ通り家出せし兄弟が心を察するに。地色西國の邊土に生れ一郡を守つて。一生を朽果つる親と共に埋もれんより。東國北國を武者修行し。よき主取つて一城一國も主づき。先祖の家名を耀さんと兄弟頷き。此親を見限つて家出せしに極まり。我が手を以つて我が膝を打つには外るゝとも。此推量は違ふまじ。エ、殘念や露ばかりも知つたらば。詞兄の二郎には源平藤橘の其内に。取らせぬ主のある事を知らせんものをなう婆と。二人明け暮悔む内はや平家は西國へ落下り。頼朝は坂東八箇國を從へ靡け。身は鎌倉に在りながら代官として。範頼義經上洛すとも取々の風說。武士の分捕高名して出世すべき此時節。地今に主取つたりといふ便りも聞かず沙汰もなし。不常轉變の世の中なれば萬一旅の露霜にいたみ。兄が病むか弟が煩ふとも捨てゝ奉公も得稼ぐまじ。但しは都は色所。酒色に弓馬の道を忘れしかと。思ひ初めし其夜より一夜を百年の日數と案じ。一日を千年の年月と待つに遣瀬はなきぞとよ。思ひに思ひが餘り〳〵。叶はぬ時の神たゝきとは思へども。詞我先祖たる姥が嶽の大明神。兄弟健固によき主取らせ。三日が内に便り聞かさせ給へと祈願を籠むる此御膳それ故外の手はかけさせぬ。地色つい一筆か一口か音づるれば此案じはなけれども。なう婆親が思ふ樣に子供等はおぢやらぬと。聲をフシ涙に曇らせば。詞是はさていとゞさへ案じ氣遣ひ。神詣でよ立願よと心ならぬ嫁達に。都は色所のいや煩ふかの病むかのと。いよ〳〵案じさす樣に言はいでもよい事を。妻の夫を思ふ

事子を思ふ親心に劣るか優るか其身にならねば知らぬ事。コレ必ず／＼今の樣に聞いたとて苦に持ちやんな。地色明神樣の利生にて恙ないと氣を落着け。共にお頼み申しやいのと力を付くれば嫁々は。忝け涙フシ持ちながら。地色二郎樣も三郎樣も寄り寄つた年ではなし。末でならぬ出世でもあるまいに。先づお側を離れず御孝行になさるゝがよい筈を。お年寄られた親々樣を振捨て。家出なさるゝさへあるに跡々まで苦に苦をやませまし。後の冥加が恐しい赦して進ぜて下さりませと。御恩に重き二人の頭フシ疊を離れ兼ねにける。詞子の無い者は案じたうても叶はぬ。是も親の樂しみでおちやる。嫁達悔むな褻いざ御膳供へまいか。地誓させ給へ此衣を縫合せて上の事。誰ぞ來いよ女どもと召さるれば母樣申し。詞我々お館へ嫁入りしてこの方。堅う糸針を手にお取らせなされぬ。定めて針手を御吟味の故ならん。申さば是は僅かの衣。地色糸竹殿になりともお縫はせなされて下さりませ。詞いや／＼縫うてよければそなた衆迄もなし。母がつい縫へども此家の主に連添ふ身は。糸針を手に取る事堅うならぬ戒めあり。序に語つて聞けうよう聞きやや。地色元來この尾形の家の御先祖は。鹽田大太夫と申せしが家富み萬暗からず。一人の娘まします名を。花の本といふ。此娘二十に及ぶ迄。獨居の秋の夜長うして。フシ明かし兼ね。地尾上の鹿の妻戀ふ聲野面にすだく蟋蟀。汝も物をや思ふかと。スエテ心細き折こそあれ。地立烏帽子に水色の狩衣著たる二十餘りの男。花の本の側に寄伏して。樣々に。フシ問ひ語らへば。岩木ならずつひに枕を交はし給ひ。年頃通ひ逢ふ程に父母の耳に入り。詞烏帽子に狩衣著たらんは下臈にはよもあらじ。聟がねに定むべし斯くして歸りを見よやとて。賤の苧環に針を差し。曉夫の歸るさに。地狩衣の盤領に針を差し糸を控へて慕ひ行く。日向と豐後の境なる姥が嶽といふ山の。麓の岩窟に引入れたり花の本岩窟に向ひ。詞自ら是まで參りたり目見え給へとありければ。地姿はさすが恥かしゝ歸り給へ歸るまじ。是非にとあれば詮方なく立出づる其形。眼は酸漿角生ひたる大蛇の姿現れ給ふ。フシ恐しなんども愚かなり。地狩衣の盤領と思ひしは鰓の下。針に苦しみ給ふ故立寄りこれを取捨つれば。大蛇悦ぶ氣色にて。汝我が子を懷胎せり。子孫の末迄守らんと雲路に上り失せ給ふ。されば所の名に寄せて姥が嶽の明神とも。また高千穗の明神とも此大蛇をば申すなり。詞其子程なく出生あり脊中に大蛇の尾の形あり。それ故鹽田を尾形と改め。

大弱太と申せしは今の郡領殿までは。五代の神の御先祖ぞや。地然れば代々の戒めにて尼形の家の妻たる者。糸針を手に取れば必ず夫婦の中に祟り。卽座に死すると傳へしもかの盤領に針差して。夫の命を取り給ひし花の本の昔語。よう聞いてか嫁達必ず／＼忘れ糸針を取るまいぞ。フシヤイ誰ぞ來いとありければ。地お物縫ひが立出づるコリヤ此衣をかう返し縫ひに縫うて置け持つて往け。詞サア親父様お供へ遊ばせお身は其御酒持つておぢや。地色嫁達わざと神前へは連れ申さぬ。こゝで共に立願召さ。三云三行三妙加持無上靈寶神道の。掟正しく打連れて　オクリ神前。へこそ入りにけれ。地申し／＼岳谷様有難い父様母様お心入れ糸針取らぬ因縁を聞いて。わしが様な手筒は落着いた。詞サア　お手水召せ共々に神様頼まうであるまいか。いや／＼神様所ぢやない。父様のお咄聞いて俄に痞がぐつとのぼつた。都は色所ぢやげな。こ徒らな我殿御渡りに船得手に帆。都女に喰付いて置去りにもならうかと。氣が氣ではないわいな。ア、言はしやんすりやさうぢや／＼。岳谷様都へ詮議に往く氣はないか。地私は一走りに往て來うぞえと立上る是待たしやんせつがもない。詞一走りに往かるる所なりや斯う案じては居ぬわいの。氣遣ひさしやんすな。三郎様は見かけから屹として。こな様より外の女には。目も遣りそむないお生れ付き羨しい。いや／＼見かけと違うてな。あの大きな目が女どもを見る時は。ほんに絹糸ぢやと思はしやんせ。寢た間も心が許さるゝ事ぢやない。あのお顔でかいのされば いなこりやならぬぞ。御兄弟とてそれ程似ずば。そちのもこちのもお歸りなされたら。地何か差置き先づこの詮議が肝心かんもん。久しぶりで顔見たとて必ずこちから負けて寢たがる振りせまいぞ。ヲ、をかしわしや隨分と堪へうが。さういふお前が氣遣ひなと差合ひくらぬじやれ笑ひ。フシいふ間や心休むらん。地折から表賑やかに若旦那のお歸りと。三郎惟義旅の姿を其まゝに。白旗を腰差し直ぐに通り。詞ヤア嫂御女房息災にあつたな。親人の御機嫌はよかつしか罷り歸りしと申し上げよ。地早うお目にかゝり度しとありければ岳谷。詞お健でお歸り何より目出度い。お二人様ながらお留守の內くつさめ一つ遊ばさず。地色只今は神前に御拜の最中。お氣遣ひなさるゝな。詞先づお尋ね申さう。二郎様も御一所にお歸りか。いや／＼去年爰許は一所に連れ。都まで同道致せしが仔細あつて別々になる。其後は逢ひも致さず。とは何故にお別れなされた地其仔細はと氣遣ひがれば。詞元來兄弟都

へ上りしは立身の志。親人に斯くと申さば止め給はんかと。隠さいでもよい事をと道すがら悔みしが。兄弟主君を選むに就き引別れ。拙者は東國へ赴き二郎殿は都に止まり。互に境を隔てし故音信も絶えたるが。扨はまだ歸らずかやがてゞあらうお待ちなされ。やい女房早う親人に逢ひたしお仕舞ひか見て參れ。いえ〳〵親御様に逢はせませぬ共内に。きつと詮議する事がある。是このお顏はなんとして細つた。ヲヽ苦勞とは思はざりしが。げにとは旅の空何かに付けて細りもせう。サア共何かはなんの何かぞ。それ眞直ぐにナア岳谷様。こゝが閑所であらうがなハテ地聞くなと言ふなとお心次第。わしや其機嫌はござんせぬ。此二郎様何となされたと一所に連れぬ憂き恨み。さすが當てゝも言ひ憎くゝ心も心ならざる風情それに構はず糸竹が。詞都は色所サア誰が細うした言はしやんせ〳〵と。地ふつつり抓る袖の內あいたよあいたよとは誰に逢ひたい名が聞きたいと。急な所へ悋氣を持ちかけいぢられて。顏で嚇せどいつかないかな詮方なく。こりや耳おこせ斯うしてな斯うぢやはやいと何ぢややら。囁く頷く萩薄。縺れ合うたる妹脊の中フシ側で羨むばかりなり。地日こそ多けれ時も移さず二郎惟光。赤旗提げ息を切つて立歸れば岳谷。なう〳〵嬉しや健でお戻りなされしかと。いへども兎角の答もなく。詞ヤ三郎歸りしな。見れば白旗を持參せしは。望みの如く源氏方の主を取りしか。先づ以て健固の體珍重珍重。仰せの如く賴朝の御舍弟義經公に御目見え。某親子に西國の事一向御賴みの證として。白旗を頂戴したつた今罷り歸り。未だ親人に對面も申さず。見申せば赤旗を持つて歸國なされしは。都にて申せし詞御承引なく。今出づる日の源氏を捨て平家に主取りなされしな。エヽ聞えぬ〳〵。平家は神明にも離たれ君にも捨てられ。日本國廣しと雖も膝を入るゝ所なく。詞船に浮き波に臥し滅亡日を數へて間もなきに。何を賴みの御奉公兄は平家弟は源氏。敵になれとの御仕方あまり譽めた事でなし。父のお耳へ入らぬ内分別なされ兄ぢや人とフシつかうどに言ひければ。詞ヲヽ敵になる仕方とは兄に逆らふ汝が事。忝くも平家は三種の神器御身を離れず。安德天皇といふ君あれば船は愚か。車に住居なされても共車が直ぐに都よ。それに敵たふ賴朝は朝敵の張本。殊更そのかみ斬らるべきを池の禪尼の情にて。地色首をついだる恩知らず二郎が主には得取るまじ。平家急難の折なればこそ痛はしや宗盛公。某を近く召され。詞西國の成敗汝父子が任意たるべしと。お家

の旗の其外に是見よ。日月を打つたる錦の御旗を賜り立歸る。地家の面目身の譽此上のあるべきか。父のお耳へ入らぬ内そつちの分別仕直せと。言返せば岳谷も糸竹も扱はと面々夫の側。共に氣を持つ氣遣ひは フシしをらしくも亦にが〳〵し。地三郎惟義聲を上げ。詞これ兄貴。分別せいとは源氏を捨て平家に與せよといふ事な。ヲヽサよい聞分け。平家に與すれば三つの道あり。一つには勅命に應ずれば。即ち天に隨ふ理。二つには西國の司となり家名を興す先祖の孝行。地三つには兄弟睦じく親兄の禮至し。聞分けたるか弟。詞いやさ何はともあれ義經公に一旦の契約金石の如し。すり首になつてもいかな〳〵。然れば兄弟敵味方になるか。おんでもない事。平家の方人兄とても用捨はならず。おのれ見事この二郎を討つべきか。くどい〳〵。地首の廻りの御用心と フシ鍔打叩いて笑ひける。地色岳谷堪へかね是三郎殿。詞萬々こなたが理にもせよ。現在兄の首取らうとは罰當り。生畜生人でなしの相手に二郎樣は得せまい。此岳谷がなつてやる。地色サア其刀抜かれば抜いて見やと赫らむ顔は口紅に。負けじと糸竹つゝと出で。詞畜生の人でなしのとは嫂顔で口が過ぎる。糸竹は聞いて居ぬ。女の相手に大事の男をなんのせう。其方の相手にはおれがなる。しやらなそなたが何の相手。地息の根止めん劣らじ負けじと我を募り互に肘を春風に柳。櫻の亂るゝ風情。ヤアいはれざる女め止めん〳〵に引分け押退け。兄弟睨け合ふ所へ母は奥より走り出で。二郎が鬠かい掴み。老の皺腕用捨なく打叩き。詞何も殘さず皆聞いた。利運さうに何競合ふ。弟を子の如く憐めとこそ教へつれ。地慈悲知らずめとてはたと打ち非道者めと丁ど打つ。嫂悲しく取付くを突きのくる折こそあれ。父の郡領續いて駈出で三郎が襟かい掴み。詞兄を親と敬へ假にも爭ふな。仲よくせよとは言はざるか。地不孝者め道知らずめと喰らはせ〳〵。縋る嫁子の別ちなく。面も拳も共に折れよと フシ厭はぬ氣色。地色母は驚き兄を突きのけ手に縋り。なう情ない弟に何の過あつて。打擲はなさるゝ堪へてやつて下され。憎いやつは此兄めと又取付くをこれこれ婆。詞兄に又何の科あつてぶち叩き。二郎に拳三つあちやれば弟めはぶつてぶち殺すと。地言はれて母は氣もどまくれ。思はずわつと聲を上げ。いかに此方の血を分けぬ兄ぢやとて親の敵の平家をば。主と頼む馬鹿者に義理過ぎたなされ方。冥加ないが高じて曲がない郡領殿と。聲に先立つ涙は顔に スヱテ露置くばかり。見えければ。地二郎びつくり仰天し

扨は平家は親の敵か。郡領殿の血を分けぬ我ぞとは養子か但し拾ひ子かと。思へば俄に肩身もすぼり物悲しさは聲立て。泣かぬばかりの其氣色聞いて驚く誰誰も。フシ呆れ果てたるばかりなり。母は兎角に目も明かれず昔を知らぬ子どもや嫁達。不審は理やい二郎よつく聞け。母が腹は貸したれども郡領殿は眞實の親でなく。誠の父は九州の何某。菊地二郎太夫といふ弓取そのかみ平治の亂の時。左馬頭義朝公に與せし科ぞとて。清盛が計ひ。都にて父は失はれ相傳の領地も取上げらる。其時お事は當歳子お乳傳人もちり〴〵に。此母が懷に立寄る方もなかりしを。神佛の惠みか郡領殿。武士の氏を絶やし子孫の根を斷つ事は。仁者のせざる所と平家を疎み。自ら諸共迎へ取り幸ひ子も無ければ我子と秘藏し。御寵愛深き袂の下に人と成りしも。二十五年の二昔。二郎も二人が中の子と世上には言ひなせども。郡領殿眞實の子といふは三郎只一人。僞りならぬ印には郡領殿の惣領になるからは。太郎とも付くべきを二郎と名付け給ひしは。本の親の名を形取つての事と知れ。斯程の證跡ある菊地の子。親の敵の平家とも知らず主に取りしは。家出を親に隱せし故。敏き父御は推量なされ露ばかり知つたらば。平家を敵と知らせんものと。お心を痛め給ひし其天罰思ひやれ。よしない主を取つた故母が身の懺悔を。若い嫁達に漏らす恥かしやとスヱテ面を覆ひ伏しければ。二郎途方にかきくれて。今更悔むにフシ詮方も涙に。むせび居たりしが。初めて承つて驚く。母諸共に御養育實父に百倍千倍の大恩。餘りの事に夢見し如く。何と報ずる道を知らず。つら〳〵我身を思ふに平家の契約を變じ。弟一所に源氏の味方平家を攻むる程ならば。實父の敵を討つには似たれども。いたはしや宗盛公我を弓取と思召し。これ此錦の御旗を賜り一向の御頼み。心魂に徹し忘られず。所詮命を平家に擲ち腹搔きさばき。冥途に一人此世に二人三人の親々へ大恩の報じやう。閻魔大王にとつくと習ひ未來より報じ奉らん。ヤア弟。汝は源氏我は平家。兄弟なりとも一太刀討たずんば一分は立つまじ。此刀つゝ込まば直ぐに首打て皆々さらばと。手ばしかく差添すはと引拔けば。嫁々あわて縋り付きフシ止むるばかり詞なし。郡領ちつとも騷がず。ヤア二郎血迷ひしかむだ腹切るかとありければ。こは父上の詞とも存ぜず錦の御旗と申すは。勿體なくも日月の押形をうつし天子より賜り大將軍ならずして。匹夫の身の假にも飜へす事叶はず。此御旗に代へ〴〵の我が切

腹。徒腹とは恐れながら御誤りと手を突けば。地ずんど立つて錦の旗おつ取上げ。是が何の天子の錦の旗。雑巾も同然とか弱き老の腕先も。子を思ふ親の一念力ずんく〜に引裂き捻切りがはと投散らせば。呆れて互に顔見合せフシ息を。呑んだるばかりなり。詞是見よ引裂いても踏んでも何の罰。平家の僞り表裏この旗に顯はれ。人を哆す作り物に。あつたら命替へんとはおろかく〜。地いで誠の二色の旗といふ物拜ませんと。兄弟が持歸りし白旗赤旗一つに集め。これ婆此旗を縫合せておくりやれと。投出せばぎよつとして。何婆に針取れこの旗縫へか。縫合せて尤もな事があるにもせよ。大事の夫の命には得代へぬ。嫁達必ず縫ふまいぞ。めいく〜互に大事の夫の命お縫ひなされな母様と。フシ共に力を添へにける。詞縫はずばよしとて濟まさうか。ヤア女子ども

針に糸して持つて來い。地早うく〜とけしからぬ　フシ聲に從ひ。持出づる。地色男手業のはかいきに一寸三所五分一針。手間隙入らずきりく〜しやんと縫合せ。兎角しつらひ旗棹に結び付け取つて押立て。詞抑も旗の濫觴異國を問へば。黃帝蚩尤と戰ふ時。始めて五方の旌旗を作らる。北は黑東は青く南赤。西白妙に中央は黃色の五色を別たれし。我が日の本に天照す神の御代より傳りて。天子は錦の御旗に金銀を以て。日光月光を付くると言ひならはせしは。知らぬ人の由なし言。誠錦の御旗陰陽の御旗とも申すは是この旗の形ぞかし。上の赤きは陽にして日天子。下の白は陰なり月天子。この二色に月光日光も備はり。白と赤との二色を二色と讀む地とはフシ知らざるか。それ辨へぬ平家にはあらねども。金扁に帛といふ字を書きし錦の事に紛らし。二郎に與へ

し宗盛の僞り。齋藤別當實盛に賜りし。錦の直垂同然にこの郡領は得思ふまじ。淺ましの平家の衰へやいつか二色の御旗を。都の空に飜へし會稽の恥を雪ぐべき。いたはしさよと淚ぐみスエテ暫し。詞もなかりしが。詞子供悅べ平家にも隨はず。源氏にも方人せず本意を達すべき分別あり。いかにといふに。往昔桓武天皇二色の御旗の赤きを切つて。葛原の親王に賜り。今に平家は赤旗を用ひ。清和天皇六孫王經基に白きを賜り。源氏は代々白旗を用ゆ。二郎三郎が持歸りし赤旗白旗を一つに寄せ。郡領が手業に縫うたれば。地元の二色の御旗に立歸る。今より兄弟心を合はせ此旗を押立て。一院後白河の法皇の御味方に参るべし。源氏かくと傳へ聞くとも非難打つべき所なく。却つて範頼義經と傍輩になる家の譽。詞三郎は緒方の家名を繼ぎ。二郎は實父の菊地に歸り

絶えたる家を引起せ。元來郡領が養ひ育てしも其心。地さすれば返忠の譏もなく。平家を討たば父の仇を討つ武士も立ち家も立つ。此分別はと一筋の糸に兩家を縫合せ。旗も縫うたる郡領はフシ女子まさりの手利なり。地色兄弟勇んで頭を下げハヽア有難き御了簡。此上のあるべきかと嫁々取分け二郎が悦び。母上もさぞ御滿足。詞ヲヽ、言やる迄もなし嬉しがらいで何とせう。重ね〴〵の御高恩骨になつても忘るゝな。地郡領殿三郎嫁御達さらばやと。覺悟はいつの間にか夫の匕首抜き隱し。取直す手も見せばこそ咽の鎖をかき切つたり。是はと人々仰天しフシ驚きいたはり介抱す。地二郎涙にくれながら。父上の御蔭にて絶えたる實父の家を興し。三郎にも睦まじくなつたる此上に何不足の御生害。但しは狂氣なされしかと力を付くれば。愚の事をいふ者よ義理と恩とに絡まれて。命を果す此母を狂氣とは恨めしや。詞勿體なや郡領殿和御前が武士を立てさせんと。糸針を取れば忽ち身に祟ると知りつゝも。手づから旗を縫ひ給ひし。地色アヽ、冥加なや是で二郎が弓矢の道は立ちながら。悲しや郡領殿の災は何として除かんと。樣々心を碎きしがまだ天道にも捨てられぬか。夫婦に祟るといふ所へ氣が付いて。詞やれ嬉しや連合ひに祟らぬ間に。祟りを我が身に引受け。死なうものと取急いだ此生害。ハテ祟りで女房が死ぬるからは祟りは是まで。地連合ひのお命は千年も萬年も。目出度う榮え給はんものと。思ひ極めてのフシ自害ぞや。地是につけても迷ひの第一。今日といふ今日菊地の家を立てゝ下さるれば。和御前は郡領殿の子ではなく元の夫。二郎太夫殿の子我は妻。嬉しや家が立つたれば。我は貞女を背きし道知らず。生きて人々に顏の合はされぬ樣に成り果てしは。因果の了簡違ひぞや。今この疵で死んだらば倶生神の帳面には。どちらの女房と記されて。いかなる責めを受くべきぞ悲しいわいのと掻き口説き。身を悶ゆれば疵の口ほどはしる血に氣もつれて。スヱテ次第々々に身も弱り。詞子供衆嫁御われ死なば。さぞ父御前の頼りなからう。地力を付け孝行盡くしや。もうさらば南無阿彌陀佛彌陀佛と。唱ふる一稱罪皆除。作りし罪も諸共に惠日の霜と消えければ。嫁は正體泣き叫び今はの詞に堪へかねて。二郎は心も目もくらみ父も貞女を背かせし。悔みは穂に出で三郎が。涙にきはづくフシ兩袖は絞る。より猶あはれなり。地暫らく時を移せしがいざなう三郎。母上の御尊骸人手にはかけまじ尤もと立上る。ヤア〳〵詞よしなき事に隙を取り一院の御味方。菊地尾形

が家引起す出陣は忘れしかと。地授くる旗をとり〳〵に踏出す足の跡へ引く。母の別れに父上の老後の御徒然いかにせん。それも構ふな此父に二人の嫁がある上は。何に不足のあるべきぞと悄れぬ父は又逢ふ別れ。母には又と逢ふ世なき。袖よ袂の露時雨降りくる涙嫁々は。泣く〳〵死骸を掻上ぐれば。軍の門出の此旗も假に冥途の門出の旗。二色五濫や八識の。迷はぬ道を知るべにて心を。殘して別れけり

第四　道行雙途笠

フシ花をも憂しと。捨つる身は。浮世にすねる戀の癖。月にも雲は厭はじと。いふも思ひのかこち草是を痴話ともひぞりとも。樂しむ中のしなれど。今は憂身の品照姫殿御持ちしも名ばかりや。長地つひに寢々せぬ笛竹の主を慕ひ行く旅は道連れ裡菊が。心も同じ世の情。フシオクリ誘ひへ出でたる御所塗笠の。姿がようて着ようてとフシ持てはやす。都も跡に山崎や關戸の宿は名のみして。スヱテとまらぬ涙人問はゞ。露と答へん芥川。猪名の小笹を分け過ぎて 小オクリ昆陽野の。里に來て見れば心も。暫しフシ浮れ女の。今様朗詠しをり萩これも難波の嬥歌會かと。思ふ名をだに笛の縁。唄二上リしんき〳〵と。謳ふ小唄の。調子さへ。憂身にしみて憂いぞ辛いぞえ。春行く。空は名にめ。でゝ。心の曇り ナホスフシ晴れやらぬ。身にも晴む。旅くしげお髮の筋も立て通す。心の操有馬山かた割れ。冷泉月の。相の山幾夜かも夢さへ。ナホス仇になるを瀉。沖波遠き海士小舟。フシ須磨の浦とはおのづから。しら旗赤旗。ひるがへり山と海との源平の。盛りを見する躑躅が谷爰にこだまの鯨波の聲。地すはや軍と汀より ナホス駈けくる駒の。危なさを避けて忍べば逸散に。敵に後見知つた顏。シャほんにそれ〳〵意地わるの。二人後藤兵衛といふ間もはや。逃げて行くへは白波の。フシ跡に呼ばはる高名は。三位中將重衡様を生捕りしとは誠かほんか。是に付けても氣遣ひな殿御殿御のお身の上。聞きたや見たや夫戀ひの雉子に。たぐへて春の野を。あちや東風かぜ糸遊の晴れてあれ〳〵あの海面に。シテ錦の幔幕平家の御船。ツレ陸は寄手の源氏ぐも。シテ洲崎に並ぶ駒の足なみ。二人亂れ。戰ふ其中にツレ汀に打寄る馬上の扮裝。シテ紅の母衣小櫻縅。二人年も若木のフシ花やかさ敦盛様ではあるまいかと。爰でいうても屆かじと。スヱテ天にこがるるコハリ雲雀毛の馬引返す陸の方。追ひくる武者はナホス誰ぞともフシ見るにまばゆき日の丸の。扇に招き寄る波の。打物拔いて二打三打。合ひらめく影は蝶の翼あれ〳〵馬上に引組んで。とんと落ちたは

どちらが下。どちらが上とも。八重霞いく瀬の案じ思ひ草。のぼる痞をおして行く道は。さま〴〵へ世渡りに柴といふ物刈り持ちて。花折り添へしは此須磨人か。あら心なとつぶやけば。シテ詞これ〳〵旅のお上﨟。さのみな笑はせ給ふなよ。柴に折りたる花よりも世界の花と聞えつる。無官大夫敦盛殿討ちとめたりし熊谷こそ。地心なしとは言ふべきと。ツレ語るに心亂るゝばかり。シテ夢か。ツレ現か。シテフシ現なく暫し。二人消え入る涙の露。いさめ〳〵て君がため手向となすは深山木の。シテヲ、熊谷檪恨めしき。二人思ひをいざや晴らさんと深き歎きを山おろし。はげしき女の足取りは一二の谷を奚かしこ尋ね。迷ふぞ三重へあはれなる浪こゝもとや。須磨の浦人音稀と讀みけんも。詞今は軍に磯馴松。海士の呼び聲引きかへて。鯨波つくり添ふ。修羅の巷フシ

源の。地九郎判官義經公。躑躅が谷の名にめでて花に屯の鎧の袖。色も香もある名将のフシ下知に靡かぬ草もなし。地軍勢多き中々に豐後の國に名を得たる。菊地の二郎惟光尾形の三郎惟義御前に畏り。詞扨も今日の合戰味方十分に勝ち誇り。分捕高名その數を知らず。中にも庄野の四郎家長。三位の中將重衡卿を生捕り申し。御見參の披露願ひによつて則ち我々。かの御方を倶し奉り候と。地言上すれば九郎判官。重衡卿に向はせ給ひ。詞御運拙く候て思ひ設けぬ義經が對面。心外の御胸中察し入りて候なり。地此上の御沙汰は都にてあるべけれ。萬心の隔てなく何事も某仰せ言承らん。詞就中御秘藏ありし春日野の琵琶一面。地不思議に某預り申せば。御身に與へ申すべしとスヱテいと懇に宣へば。詞淺からぬ義經の詞。地重衡が悦び是に過ぎじ我思はずも父命により。佛像を亡し人壽を斷つ。現當の罪のがれ難く。庄野の四郎とやらんにやみやみと捕れしも。偏に佛の御怒り御手の綱には引替へて。報ひを見する縛め繩。なんぞ人をフシ恨みんや。重衡が念願にはとく〳〵頭を刎られ。詞此世の業苦まぬかるゝに如くはなし。地此旨を都に訴へよきに。スヱテ計らひ給はれと御身を下し願ひの詞。實に道理と義經も涙催し給ふにぞ。菊地尾形も諸共に。フシ目を打叩くばかりなり。地判官重ねて尾形を召され。

詞重衡を生捕つたる庄野の四郎家長は。何とて是へ出でざるぞ訝しさよと仰せある。さん候それに付き申し上ぐる仔細あり。生田の森の軍破れ今は斯うよと見えし所。是にまします重衡卿討死とや思しけん。丈なる馬にゆらりと召され敵陣に打つて出で給ふ。御供に召されしは後藤兵衛盛廣とて。日本一の臆病者人並々に

物具し。をこがましくも續きしが。庄野の四郎家長がよつ引いて放せる矢。重衡卿の召されたる馬の太腹にはつしと立つ。此矢叫びに驚きて主人の難儀も顧ず御乘換を盜み取り鞭を上げて逃げ行きしを。重衡卿は地フシ知し召さず詞乘換引け。後藤兵衞盛廣〳〵と召さるゝ内。軍に馴れたる庄野の四郎途に生捕り申せしが。思へば憎い後藤兵衞。逃ぐるとも程は行かじ。搦め捕つて諸軍勢の見せしめにせんものと。重衡卿を我に預け。庄野の四郎は其場より罷り越し候と地フシ次第つぶさに相述ぶれば。重衡卿二人を招き。不忠不義の後藤兵衞召使ひたる重衡は。人を知らぬ愚將よと我一人の恥のみか。詞平家に仕ふる侍は形の如くと後代まで。嘲りを受けん事數かはしく忍びがたし。願はくば重衡が一命のある内盛廣を搦め捕り。首斬つて棄つるならば地未來の迷ひ

もなかるまじ。庄野の四郎と心を合せ方方も頼むぞと。御憤りの目の内に涙を浮べ宣へば。菊地尾形も御心底察し入りて候と。フシ詞を揃へ領掌する。地爰に武藏の國の住人熊谷の次郎直實。身の高名と打見えて錦の袖に包みたる。御首を御前に据ゑ下に折敷く笹の葉も。故實を守る臨時の實檢威儀を。フシ正して扣へゐる。地義經御機嫌すぐれ給ひ。詞直實が高名先達て隱れなし。龜井片岡伊勢駿河。辨慶などが噂に聞く。無官太夫敦盛の御首よな。天晴高名頼もしゝ。地恩賞の望みあらば何事にはよるまじと。仰せも果てぬに次郎直實。詞ハア有難き御言御諚にすがり一つの願ひ。是より直ぐに御暇賜り。地都に返し下されなば莫大の御恩賞。生前の本望たるべしとフシ恐れ。入りてぞ願ひける。詞ム、ウ心得ぬ直實が心底。味方勝利と見えながら合戰は未だ半ばな

るに。都に歸り上らんとは義經が軍配御邊が心に叶はずや。將を諫むるは臣下の道遠慮ばし必ず無用。こは勿體なき御詞些か左樣の事ならず。弓矢取る身と是非もなく。敦盛卿は我手にかけ討ち奉り候へども。地思へば深き法の種。剃髮染衣の姿となり。念佛修行の身の願ひ御聞屆け下されよと。ことわり深き一言に感じ入りたる御風情ヲ、殊勝なり直實。左程に思ひ立つ上はとゞむるとも聞入れじ。遁世修行心に任せよ。詞熊谷といふ弓取の。名字は絶やさぬ一子直家。地なほ〳〵家もたつか弓源氏の武士と取立てんと。殘る方なき御惠み。熊谷あつと平伏に スエ テ忝け涙せき敢へず。判官猶も仰せには。詞勝利の軍に誇らぬは是第一の掟とかや。地いかにも平家をゆるく攻め三種の神器を恙なく。都に移し參らすこそ。畢竟の勳功なれ。菊地尾形この旨を諸軍勢

に促すべし。熊谷は身の望み都歸りも勝手次第。それ先づ三位の中將を。宜しく勞り奉り。敦盛の首諸共京。鎌倉に送るべしと御諚あつて立ち給へば。仰せを菊地兄弟も。重衡卿にひつ添ひてオクリ陣所にへ伴ひ立歸るフシ熊谷は。地浮世の暇さらりと明けたる身は氣散じ。直ぐに都へ歸らうか。一先づ陣所へ戻らうか。詞いや〳〵。うたての合戰の場。地心殘さじ迷はじとフシ迷はぬ道の。後の方尋ね戻りし二人づれ。直實と聞くよりも共に力と裡菊が。囁く聲にかひ〴〵しく用意健氣に品照姬。守り刀を拔連て熊谷やらぬ。詞ノル夫の敵と打つてかゝる右左。ひらりと潛る用捨のあしらひ。叉斬りかくる二人の刄。かはして外し拔けては拂ひ。危ない〳〵せくまい〳〵怪我なされなお上﨟。暫し〳〵と兩の手に地取つて伏すればフシ身を悶え。詞エ、口惜しい裡菊。無念にあらう地お姬樣と顏の白妙色照りて。是も躑躅の咲分けやフシ淚は露に爭へり。地熊谷二人を引起し。詞必ず早まり給ふな。全く某手向ひ致さぬ。地心底是ぞと打物投出し。詞夫の敵とあるからは敦盛の御臺よな。または緣の女中の助太刀。天晴武士にも劣らぬ健氣ア、出來されたり〳〵。この熊谷も方々にめぐり逢はんと心にかけしは。地敦盛の御最期まで御身に添へし青葉の笛。また此扇は陰陽の二本を分けて敵味方。一本立の討死せんといひ交はしたる形見の二種。姬君にフシ參らせたく。御大將に暇を乞ひ只今都へ上る所。詞また熊谷が心底は。不思議の緣に扇屋の娘が最期も出離の種。地敦盛卿にあかし合ひ未來の友と契りたる。樣子を語るも事くどし。すは出陣の其日より心は法の門出と。濁りに染まぬ蓮生ぞや法師ぶり見て給へと。鎧の上帶とく〳〵と今は誰にか忍びの緒。引きちぎつて甲を取ればオクリ娑婆の。繼をはらひ髻フシ世を麻衣に。單衣袈裟姬君あつと飛退去り。恨みを何といひ甲斐なき。女の淺はか免してたべ。敵にてはなかりけり。亡き御跡を弔ひの便りを得たる嬉しさは。歎く道ではなけれども。逢はう〳〵を賴みにて。尋ねこがれし我夫の。敦盛樣は名のみにて。薄き契りの青葉の笛。いつか扇の形見とは。昨日までも今日までも思ひがけざる身の上を。憐み給へと伏轉び歎きぬ。歎きに裡菊も身につまされし思ひ泣き。蓮生法師も今更に。過ぎしを悔む淚の色共に袂を絞りしが。あゝらよしなき御繰言此上は都に歸り。スヱテ菩提の種を植ゑ給へ。詞さて最前より事に紛れ。此方は誰そとも問はざりしが。さればいな私は。岡部の六彌太が妹にムム聞及んだ裡菊殿か。薩摩守忠度卿とは

どうやら譯のある仲とは。地かねて聞いたる奇特の心底。姫君はこの蓮生請取るからは氣遣ひなし。此方は跡に止まりて忠度卿にも巡り逢ひ。兄六彌太にも逢はれよと。フシこま〴〵語る折しもあれ。地二人の女を尋ねよときよろ〳〵眼の雜兵引連れ。どつと寄せくる阿根輪の平次。詞ヤア〳〵それなるは熊谷の次郎でないか。ム、ウ聞えた。武士を立てゝは打出して。平家の肩が持たれぬ故坊主になつての返忠。阿根輪の平次が情にて見遁しにしてこます。地それ〳〵者ども。彼奴には構はず品照姫を引立ていと。頭ごなしに罵るにぞ。蓮生二人を押圍ひ。詞こりや可笑い我がへげる。身が預つた姫君を引立ていとは。エ、誠氣が付いた。敦盛のお果てなされ。まだ生々しい若後家。犬めが抱いて寢ようてな。いやはや去りとは太いやつ。自體うぬは扇屋で疊んで了ふ奴なれども。助け置いたる慈悲が仇。地手並は知つたる熊谷笠ふか〴〵とうせたるは。素頭の宿替へ時親念せろと睨め付くれば。詞ヤア存外なる長談義。賣僧坊主め引摺りのけよ。意地張らばぶち殺せと地いふに隨ふ雜兵ども。無二無三に駈寄るを。こりやまかせなと投付くれば。臑に取付くしがみ付く。振放せばばらばら〳〵。隙間を窺ふ阿根輪の平次。品照姫をひん抱かへ駈出す首筋ひつ掴み。えいと投ぐればさかとんぼり。起しも立てず踏付くれば。刃向ふ事もなみ侍フシ皆ちり〴〵に逃失せける。地蓮生ほく〳〵打頷き。詞なんぼの惡者も見たりしが汝が樣なは終に見ず。生けて置いては國土の費。殺して除けるが世界の爲。というて一度蓮生が投出したる太刀かたな。再び手にも取られまじ。踏殺さうか。地首拔こかといふに阿根輪が手を合せ。出家の役にお助けとフシ泣きわめくこそ心地よき。地とかくの内に裡菊が申し〳〵蓮生樣。詞柴刈人の落せしか。地こんな物がと拾ひ上げ差出せば。詞幸ひ〳〵。是は鉈といふ物にて。柴薪を切る道具。太刀刀には事かはり。我等が爲にはすつて付けた鉈廻し。此坊主は釋迦の十。青二才の阿根輪め。合せて三光地百づゝと。物いひなしに打切ればフシ首はころりと落ちてげれ。地蓮生につこと打笑ひ。ホ、、方便の殺生は。佛もゆるしあるとかや。おのれが罪おのれを責む。此世の業を果しなば未來は。輕き悟りの道。行きたい所へつゝと往けこれ。蓮生が引導ぞと戯れながら法の緣。不思議に求むる此鉈は。我が爲には彌陀の利劍この世の煩惱切捨つるた。寶物なれば身に添へて。一生捨つる事あらじヲクリいざ〳〵。都に御供と。誘ふ御名も品照姫。片岡山にあらねども。

あはれ親なし夫もなき身のいたはりをよき様に。お頼み申す蓮生様と別れを須磨のうら菊が見送る。思ひ行く思ひ。随分健にといひ残す袖に。涙や 三重 へ年は壽永の春の頃。須磨の都の戰に。さも忙はしかりし身も。さし忙はしかりし身も。心の花か櫻木に。暫しと頼む假枕。結ぶや春の夢。覺めての後はしら雪と散積る花ぞ果敢なき。地 平家の一門多き中。薩摩守忠度は文武二道を受け給ひ。世上に眼高浪や烈しき武將の指折りに。二つと下らぬ一の谷こゝかしこの戰に。數多の敵を切拔け給ひ。舎人も倶せず只一騎 フシ 暫し疲れを春の日も。須磨の浦風。吹きしきて咲いた櫻の散るものと。花に厭ひし驛馬の高嘶も恨みなる。地 忠度御目を覺まし給ひ。詞 あら面白の春の景色や。源平互に鎬をけづり刄を爭ふ時しもあれ。暫し浮世の憂きことを眠りに忘れし花の徳。地 實に誠世の常の。スヱテ 櫻は櫻是はまた。須磨の都の雲井の花。無下にやみなんもいと本意なく斯くこそあらめと胡簶に。道を嗜む御筆墨。鎧の引合せより疊紙取出でて。折も折よき短冊に。旅行の花と題をする。行き暮れて水の下陰を。宿とせば花や今宵の主ならまし。フシ 花や今宵の。あるじならましと再吟せさせ給ひつゝ。げにや心を種として。思ひを述ぶると言ひけんも今身の上に知られたり。是につけても味きなき妹脊の縁はうつろふ花。長地 今宵の主と詠みたれど是は櫻木我が妻の。名は裡菊のうら枯れし。壽永の秋も去年の夢。契りをあだに。須磨の浦問ふ人も。なき藻鹽草。フシ 侘びしき旅の。轉寢も歌の種なる戀衣。不便や可愛や忠度をさぞなゆかしと慕ふらめ。今は契りのあれにしを昔ながらと咲きもせで。色も散行く山櫻。この身のしがの淺ましやと。涙の雨の故郷を思ひ。わびさせ給ひしが。詞 ハツア我ながら正體なや。さしも名高き忠度が女を思ふ不覺の涙。花もさこそは笑ふらめ 地 迷うたり〱。よく〱思へば是ぞこの娑婆の紲を行き暮れて。木の下蔭の涼しき宿御法の花の主とならん。あつぱれ辭世の三十一文字詠み得たり〱。薩摩守が此世の本望これに過ぎじ。亡き跡まで譽を箙の短冊と。彌猛心の一筋に身の討死を磯際や。思ひを流す白波に。フシ つれて寄せくる鯨波の聲。すはや敵の近付くと御馬引寄せゆらり召し。鞍味心に鐙のはな向ふ汀の方よりも。地ノリ 武藏の國の住人岡部の六彌太忠澄が郎黨に。鞠子の源太同じく源藏。宇津の谷七郎なんどといふ。東育ちの荒武者ども六七騎にてどつと寄せ。薩摩守とも知らばこそよき敵ござんなれ。遁さじやらじと馬上を目がけおつ取卷いてむ

らく\。村重藤の本筈にしつかと縋つて引戻せば。しや物々し雑兵ばらと打ちなぐりく\。櫻の枝に弓打ちかけ。左に廻る七郎が綿噛つかんで引上げ給へば。振放さんと悶ゆる間に目より高く諸手に差上げ。きりゝく\くるく\く\大の男子を人礫。打付けられて宇津の谷が。心は苦しき蔦かづらフシはふく\命を遁れ行く。續いて左右にどつと寄る鞠子の源太。同じく源藏これにありく\遁さじと。むしやぶり付いたる轡面コハリ馬も怒りの高嘶き。鞠子を蹴たつる四本の足駈出せば引戻し。堪へもこたゆるナホス二人が力。よしなき妨げ手並を見よと兄は左弟は右。順逆二つを一摑み。差上げく\荒馬に打立てく\。へ人の鞭あり合ふ端武者を追ひめぐれば。敵じものと夕波の。岩に碎くる其風情ちりぐ\ばつとフシ逃失せける。地色岡部の六彌太忠澄は遥かの陣に扣へしが。此體を見るよりも駒を早めて大音上げ。目覺ましき御働き驚き入つて候よ。いで郎黨が當の敵。得こそは遁さじ暫給へオウイく\と追つかくる。詞忠度からく\と打笑ひ。端武者には優しき一言。遁さじとはをこがまし何とて後を見すべきぞと。地色宣ふ聲も尖り矢つがひきりく\と引絞り。ヒイふつと切放せば六彌太が乘つたりける。夜目なし月毛の浪分に羽ぶくらこめてはつしと立つ。何かは以てたまるべき躍りあがつて高嘶き。馬上の早速は名に負ふ六彌太陸地にひらりと下り立つて。目がくる敵の馬の尾筒しつかと取つて江戸こりやく\こりや。えいく\おうと引きとむる。猶とまらじと逆鞭に打立てらるゝ駒の勇み。血汐の泡を吹き嵐風にむら立つ土煙。大地に黒雲起るが如く。龍虎と爭ふ徒歩武者騎馬武者。鎧の縅も紅梅に竹の緑の色添ひて。ナホス花やかにフシ叉いさぎよし。地馬上もさすがに堪へ兼ね只一打ちと閃めく太刀。さしつたりとかい潜り前足取つて差上ぐれば。梯子と反つたる鞍あぢも只乘り得たる薩摩守。下には猶も落さんものと。差添拔いて鐙摺ぐつとさしもの駿足も。深手に苦しみ跳上ればひらりと飛んで櫻木の梢に縋る早速の振舞。身もさゝがにのいと輕く撓める枝にすつくと立ち劣らじものと夕映の。花の足代馬の鞍續いて登る櫻が枝。心も空にしられぬ雪。吹雪を傳ふ丸木橋。踏返さじと渡り合ひ組んづ轉んづ蝶鳥の。翼もかくやと白妙の花を散。らして三重へ採合ひしがフシ踏所も定めぬ。かよわき枝双方一度にどうど落ち。忠度下になり給へば上に組敷く六彌太が。詞眼に遮る箙の短冊。詠歌も花の水莖に忠度と書かれたり。扨は正しく妹が夫。地薩摩守にてましますよ

とッシ驚き。あぐむ氣のたゆみ。下にはそれとも知らばこそえいやつと刎返せば。覺悟を極め伏轉ぶかの六彌太を取つて押さへ。既に討たんとし給ひしが。詞斯程健氣の武士を討取るはあつぱれ高名。いかなる者ぞ名を名乘れと。仰せも果てぬにア、愚かなり御大將。運も力も君には劣り。組敷かれては候へども弓矢の習ひは忘れぬ某。何面目に名を語らん疾く疾く首を掻き給へ。ムヽウ尤もの一言なれども。其名を誰とも辨へねば。我高名の其甲斐も並々ならぬ御邊の武勇。埋木となす五の殘念たゞ〳〵名乘れと責め給へど。地色いや〳〵名乘らじいや名乘れ。いゝや〳〵と爭ひも果てし並木の松蔭より。走り寄つたる女の聲忠度樣ではないかいの。お前に逢はうばつかりに裡菊が來たわいのと。聞くに驚く六彌太は面を見せじと差俯く。忠度は組伏せたる敵の思はん恥かしと。思する心に聲荒らげ。詞妹脊の契りを慕ひくる志は切なれども。戰場まで女を連るゝ薩摩守といはれては。イヤ見苦しい地はや歸れと。詞のにべさへ荒武者に名乘れ〳〵名乘らずば。搦め捕つて憂目を見せんと又責め給へば。詞いや〳〵いつ迄も名は名乘らぬ。武士の情にはや〳〵首をと。地色いふ聲聞いてヤア是は兄樣かいのと。顏見合はす妹はびつくり。六彌太は頭を振つて睨めつけ〳〵。我が名をいふなと知らする風情。忠度はつと驚き給ひ。詞裡菊が兄といふからは。扨は御邊は岡部の六彌太忠澄にてありけるな。名は知りながら面を見知らず。地由なき戰ひ恩知らず道に背きし忠度と。思さん事のうたてさよと。膝をゆるめて立たんとし給ふ御草摺を下より引留め。詞其お心と知つたる故。名乘らで討たるゝ覺悟の命。組敷かれたる此儘に我が存念を立てゝたべ。さもなくば起上り地此六彌太は生害ぞと。聞くに悲しき妹が心ア、申し忠度樣。いつ迄も押さへて居てそこ退いて下さんすな。起きると其儘腹切らうと。突詰めたお心は日頃に私が知つてゐる。兄樣の命助けるはお前の腕の力ぞやと。あどなき詞に打頷き。詞其方が頼まいでも。六彌太を殺しては此忠度が道立たず。去年の秋都にて預り置いたる某が此首。地色六彌太に逢ふ迄は大事の命と思ふより。此處彼處の手詰めの合戰に秘術を盡くし身を遁れ。又ある時はさもなき武士にも後を見せて忠度が。一門の討死に。今日まで殘り止りしはナウ裡菊六彌太も聞かれよ。詞御邊に首を討たれん爲今日只今の戰も。六彌太とは露知らずこゝを大事と鎬をけづり。組んで落ちたる木の下蔭運強くも跳返し。取つて押さへし我が大力。我ながら

忠度は熊野育ちの甲斐ありて。剛なる者と心の自慢ハア恥かしや。地フシ面目なや。今よく思ひ合はすれば箙に付けし短冊にて。薩摩守と知られたる六彌太の志。名乗りもやらず討たれんとは一度ならず二度ならず。詞に盡きぬ情の恩とても傾く平家の運。宇佐八幡の御告まさに知つたる憂き身の果。物數ならぬ我ながら首取つて高名の。品にも入れて給はらば此上の情といひ。忠度が念願晴れ未來の迷ひもあるまじき。こゝの道理を思ひ分け我が首を討つてたべ。賴み入る六彌太殿と詞を。盡くし宣へば。詞有難き御心。仰せは尤も去ることながら御覽候へあの山山。並居るは源氏の勢海の面は平家の軍船。源平互に押並び數萬騎の見る所。岡部の六彌太忠澄は。平家の武將に組敷かれ其上に助けられ。恩を仇なる首取りしと嘲り笑はんは必定。地色御家門多き其

中にも鬼神と呼ばるゝは。能登守教經か薩摩守忠度かと。敵味方にも知られ給ふ其一人に出逢うて。討死遂ぐる岡部の六彌太。詞末代迄の譽ならずや。地妹が緣を思召さば死後の高名得させ給へ。但し助かつて六彌太に。面汚せとの御事かと スヱテ恨みの詞も理に せまれば 地げにも武士の心は同じ名の譽。助かつても助けても表はすまぬ敵味方。詞ヤアこれ裡菊。妹側に在りながら。現在兄を手にかくる忠度は遁されまじ。サア我を斬つて兄を助けよエ、イ。えゝいとは狼狽へたか。女でこそあれ六彌太が妹。其一腰は何の爲さあ／＼拔いて打ちかけよ。地早く／＼とせり立てられ。なう情ない仰せ言。わたしはお前を斬らうとて。跡を慕うて來たかいな。無理もわやくも事による詞を背くが悲しいとて。女房の身でいとしい殿御を。そもやそもわしやいや

いや。是ばつかりは何ぼでも。詞ヲ、さうぢや／＼妹。この六彌太が命庇ふな。連添ふ夫は親兄にも見代へぬが操々。地心得たかと聲かくれば いやさ是裡菊。詞兄が詞を守つて夫が言ふこと背くか。背けば直ぐに妹脊の緣切り。夫婦でないがそれでも討たぬか。地色それまだそんな悲しい事。夫婦の緣を切るまいとてお首を斬つて仕舞うては。どのお命で女夫の結び。詞ヤア愚痴々々。夫婦は二世。未來の永き契りはなんと 地サアそれは。詞サア討て／＼討たねば去る。ヤアコリヤ討つたらば兄が勘當。未來永々妹でないぞ。地色サア斬らうとは言ひませぬ。詞いや斬らねば夫が去る。いや斬つたらば兄が勘當。必ず斬るな 地いや斬れと夫が責むれば止むる兄悲しさ。つらさ身一つにわつと フシ叫びて歎きしが。地涙の内に胸を極め。ア、狼狽へたりさうぢやもの

と。掴かい取つてさも凛々しく腰の刀拔放せば。詞やい〳〵妹そりや何する。兄が勘當悲しうないかと地猛り悶ゆる六彌太を。起さじものと押さへ付け。詞出來た〳〵。それでこそ忠度が女房なれ。地色サア討て〳〵と首差しのべ刃を待つたる我が夫の。御後より立廻り右の腕を打落すと。見えし刃は刀の背。フシ何の恙もあらされば。地六彌太は安堵の思ひ。裡菊刀をからりと捨て。現在の妹が兄に背いて夫を討つ。天道の咎めにて刃金が背へ廻つたなと。了簡付けて堪忍して。もとの通りの女夫ぢやとたつた一言おつしやつて。兄樣諸共此場の命ながらへて下さりませ。一人の兄樣大事の殿御どちらをどちらと裡菊が。心に別たぬ悲しさを思ひやつてと掻き口說く。涙の玉も亂れ燒刀の背に納めし思案。二人に背かぬ發明はフシようがしこうて哀れなり。地薩摩守

打頷きヲヽ出來したり裡菊。詞あつぱれ汝は六彌太が妹ぞや。忠度に刃を當つれば心も剛なる武士の妻。背で打たうが刃で打たうが右の腕は打たれたり。地色腕こそ斬らるゝとも女夫の仲の手は切らじ。元の如くの夫婦の緣兄弟とても仲よくせよと。詞左の御手にて六彌太をナホス取つて引起し。今は叶はぬ右の腕御邊を討つべき手もなければ。我助けしといふにはあらず運强き岡部の六彌太。忠度が首サア取れよとフシどうど。坐してましますにぞ。詞東夷の我々に斯程までの御情。恐れ多き事ながら差當る妹聟。小姑の手にかけ。地手柄せしとて何の益いや只とかく某がと。刀拔持ち自害の體。やれ早まられなそれ留めよと。指圖にすがる裡菊が。心はせつなき涙の下。兄樣とても助けたく。心を碎きし甲斐もなう自害とは何事ぞや。忠度樣も忠度樣六彌太殿の身にも

なり。少しは心を思ひやり。此場を遁れフシ給はれと。掻きくど。きたる恨み泣き。ヲヽさすがは女よな。詞淺はかなる心より恨むるも道理。今忠度が一つの願ひ聞いてたべ六彌太。俊成卿に深く歎き。地色何なか〳〵の千載集の歌の品には入りぬれども。勅勘の身の悲しさは詠人知らずと書かれん事。此世の殘念迷ひの一つ。未來の妄執フシ思ひやる。地御身は源氏の武士なれば御咎めよもあるまじ。忠度に成り代り然るべくは作者を付けて給はれと。詞裡菊とても共々に只管に願うてたべ。都に上り此譯を俊成卿にいひ傳へ。我が妄執を晴らさん者兄弟ならではなきぞとよ。地色心餘りて詞には。足らぬ思ひを知れやとて喞ち給へる御淚。さしもに猛き六彌太も心を和らぐ和歌の道。夫婦の情裡菊も。スヱテ恨みを何といふ波のフシ打悄れてぞ泣居たる。時刻も暫し

移り行く日影も西の海面より。こゝに一筋流れ矢の來たると見えしが忠度の。馬手の肩先はつしと立つ箆もふか〲と痛手の血汐。六彌太裡菊こはいかにとフシ流石に。呆るゝばかりなり。詞薩摩守につこと笑ひ。我が念願を憐みて天より與ふる流れ矢ぞや。此上に論議は無益サア我が首を討つてたべ。斯程に申すを承引なきは忠度に犬死せよか。エ、腑甲斐なし頼みなし。地色裡菊とても聞えぬぞと。怒らせ給ふ御目の內見るに悲しき女心。フシとかく歎きに伏沈めば。六彌太もせん方涙思ひ切つたる其風情。詞ヲ、嬉しし〳〵安堵の最期。地西。拜まんと左の御手を差上げ給へば。六彌太が氣を取直し。振上ぐる劍の光も明らけき。光明遍照十方世界と。ナホス勸むる聲に妹も。共に唱ふる十方世界の悲しい事を身の上に。とゞめたる淺ましさとスヱテわけも涙の

繰言に。忠度は御目を閉ぢ。念佛衆生攝取不捨と宣ふ御聲の下よりも。閃めく劍に御首はあへなく落つる若木の櫻。フシ散行く御身ぞ痛はしき。裡菊はわつとばかり。目もくれ心消え〳〵と。涙にむせて言の葉も亡き御身體御首を。一つに寄せて泣沈む。思ひの數々六彌太も暫し。歎きにくれけるが。ア、我ながら由なき涙身の高名を顯はすは。御遺言の其一つと曇れる聲を取直し。詞遠からん者は音にも聞け近からん者は目にも見よ。鬼神と聞えつる薩摩守忠度を。岡部の六彌太討取つたりと。地色呼ばはりながらしを〳〵と御首衣に押包みスヱテ涙と共に身に添へて。詞これ〳〵妹。あへなき身體は妻の役。地よきに葬り奉り跡懇に弔ひ申せ。凱陣せば都にて對面せんと別れ行く。なう兄樣待つてたべ。此御身體を葬りても肝心のお首がないと。思へばどうやら心の

迷ひ。弔ひも追善も屆かぬ未來の片便宜。五體揃はぬ其人は。佛にはならぬとかや。此上の御慈悲に。其お首をもフシ賜はれよと又泣き。沈むこそ道理なる。地六彌太げにもと思ひしが。詞ハツア大事を忘れたり。首實檢の期に及んで。妹が不便さに。首は與へて候と言譯もなるまじ。また二心と人々に疑ひ受けんも弓矢の恥。というて眼前妹が歎くを見捨てゝ行かれもせず。地色兎やせん角やヲ、それそれ。望みに任せ忠度の御首裡菊に與ゆるぞと。箙の短冊差出せば兄樣是はどうぞいの。この短冊をお首とは。ヲ、それこそは忠度の連らね給ひし歌一首。一首と書いては一つの首と讀まざるや。この御身體に此短冊連續したる三十一文字。五倫五體の手爾葉よく題に叶へば御佛の。心に叶ふ詠歌の德。未來は將に極樂淨土何か疑ひ嵐の音に聞えたる薩摩守たゞ。

法の聲法の道。手向の香花忘るゝなと。兄諫め嫌せば妹もあつと感じて有難き。兄の惠みを嬉し泣き夫に別れの涙の時雨。降りみ降らずみ定めなき海士の鹽木も亡き人の。身には無常の夕煙立別れ行く裡菊が。歎きの種を分け殘す。木の下蔭の思ひの宿涙を袖の主とは。かゝる憂身を夕暮の月を都の伴ひに。須磨の浦風吹殘す花も。名殘や惜むらん

第五

地國家の勢ひは身より臂を動かし。臂より手の指を使ふ如くとかや。されば兵衞佐頼朝卿平家追討の院宣蒙り。君を重んじ民を惠むの陽德一天に輝き渡り。終には平家を西國に追下し。日々の軍の勝鬨を居ながらこゝに白旗や。靡く草木の鎌倉御所。大名小名袖をつらね。フシ群參あるこそいみじけれ。地中にも狩野介宗茂御前に罷り出で。詞平家の生捕り三位の中將重衡卿。今日御對面あるべき段先達ての嚴命。それにつき彼の卿の秘藏し給ふ。春日野と申す名絃の琵琶。御覽ありたきとの御事則ち某預り申す。地上覽に入れ奉ると御前に差置けば。詞ヲヽ、聞及ぶ希代の琵琶。地手に觸るゝ珍らしさと稍暫らく御覽あり。詞天晴名にし負ふ絃上。獅子丸にも劣るまじ。三位の中將敵とはいひながら。地恐れあるは官加階。未だ四品を越えざる頼朝上座に立たん事難し。とはいひながら正しき朝敵。囚れ人の下に立たん事も難し。間を隔て對面せん爲かねて席を設け置く。互の詞も武士の取次は武骨もあらん。一つは花の都人もてなしの爲なれば。今鎌倉の切人と名に呼ばれたる千壽の前。ゆふしで榊葉なんどといふ女の童打交り。重衡を伴へよと先達て言渡せば。入り來るに程あるまじとフシ宣ふ折ふし。千壽の前。ゆふしで榊葉とり〴〵に。重衡卿を誘ひ參らせ著座まします御有樣。牡丹に譬へし粧ひも廿日餘りの旅痩せに。いとゞ思ひの深み草。餘所の見る目もいたはしき。頼朝千壽を近く召され。地御挨拶と思しくて忍事は恐れながら私が取繕ひ。よろしう申し地上げませうと詞も艶めく奏者役。重衡の御前に出で。詞我が君様の仰せには。遙々の御下向思ひ寄らぬお目もじ。氣の毒なと申さうかお笑止様と申さうか。どうも御挨拶もなけれども。先づは長の道すがら。お煩ひも遊ばさず御息もじの鎌倉入り。いかばかりお嬉しう思召す。其上のお咄に。此頼朝はな。小松殿のお情。池の禪尼様の御恩を受けし身なれば。御一門の人々様つゆ如才には思はねども。朝敵といふ名のあれば。私ならぬ是非な

さ必ず恨みに思さぬ様にと。くれ〴〵の御口上お取次申し地上げますと。女言葉のやは〳〵と尾鰭をつけて重衡に力を付くるもフシ優しけれ。地三位の中將聞し召し。詞運盡きたる平家の一門。西國にて兎も角も成果つべき身の程と。御蔑みも面羞ながら。地事の心を案ずるに。殷の紂は夏臺に捕はれ。文王は羑里に捕はる。況や末代凡夫の重衡。弓矢取る身の生捕りとなること。その例なきにあらず。偏に前世の宿業と思へば。世にも人にもフシ恨みはなし。詞此上の芳恩には急ぎ頭を刎られ。地物憂き婆婆の暇をたべと詞涼しき御答。漏れて聞ゆる御座の間に佐殿感じ入り給へば。宗茂を始め列座の面々。千壽の前も御心を。察しやつたる涙の色とゞめ兼ねたる風情なり。千壽重ねて手をつかへ。詞我が君樣の仰せには。長旅のお疲れさぞあらん。あの御殿へ誘ひ申し。

是なるゆふしで榊葉に御酌取らせ九獻を差上げ。就いては關東まで隱れなき重衡様の琵琶の秘曲。似合はぬ時の所望ながら一つは末世の語り句にも。聞かまほしとの深きお望み。定めて御辭退遊ばさうが。そこを千壽が姫御前だけ。どうあらうと斯うあらうとお望み申せとの御事。お相手にはほんにをかしい私が琴。掻きさがす様な峯の松風。重衡様の四つの緒に。合はせまするも他生の緣と。有難うお受け申したは。野太いやつともお心にお叱りもましまさうが。そこが長袖のお情。千壽が一分立てゝやると思召し。是非一曲は遊ばさゞ地なりますまいと打ちつけに。フシ望むも女の徳なれや。地重衡卿も打笑み給ひ。詞拙者が一曲を左程の懇望。却つて恥かしさりながら。地是は又三位中將重衡が。浮世を名殘る四つの緒の。調べと思へば身の滿足。何しに辭退に及

ぶべき。兎も角も詞に任せん。さもあれ甲斐なき重衡が。心も亂るゝ琵琶の橋。鎌倉山の笑ひぐさ。餘所の聞えもつゝましながらと御座を立たせ給ひければ。案内を千壽が打連れて。いざ御供とゆふしで榊葉ヲクリかしこの御殿に伴ひ入る。フシ所は東の。武者所稀に入りくる都人。すはや一曲始まるぞと君をはじめ近習の面々。耳を欹つ折からや。スヱテ妙なる調べ琵琶琴の。唄御簾の追風匂ひくる。其情こそ都なれ。花の春紅葉の秋。誰が思ひ出と。なりぬらん。地秘曲も暫し重なる所に。南都東大寺の大衆等廣庭に參上し。詞恐れながら申し上ぐる。三位中將重衡は重罪の大惡人。大伽藍を燒拂ひ。多くの衆徒を滅亡させし佛敵法敵。我々に下し給らば有難からんと申し上ぐれば。頼朝聞し召し。願ひに任せ重衡是より南都に送るべきが。いかゞ計ふ衆徒の了簡い

ぶかしさよと尋ねある。さん候我々に下し置かれば。南都の大路を引渡し。三日が間面を晒し。擧句は火刑鋸引き。評議次第に仕らんとしたり顔に相述ぶる。頼朝御氣色損じ給ひ。ヤア心得ぬ汝等が一言。科ある者の刑罰はこれ政道の第一。なんぞ私の恨みに擅なる今の訴へ。まして重衡の心よりなす科にもあらず。戰場に及んで火を放つはその例數を知らず。時節惡しく風起り。伽藍燒失に及びしはこれ天災のなす所。重衡の誤りともいひ難し。よしそれは兎にも角にもせよ。法師に似合はぬ刑罰の評定。釋門の大意を聞くに。慈悲を以て衆生を救ふは佛菩薩の誓願ならずや。但し。汝等が修學の内には火刑といふ教へがあるか。鋸引きといふ經文ばしあつての事か語れ聞かん惡僧ばらと席を。地フシ打つて宣ふにぞ。地返す詞もあら氣の大衆面を赫めて尻込みする。跡に扣へしいかつの法師。詞重衡が惡逆は伽藍滅亡に限らず。非道の望みに人を害し寳を奪ふ。其仔細は先年治承の頃東大寺に隱れなき。惡四郎坊永覺といふ者。春日野といふ名譽の琵琶。先祖代々所持する所。重衡一向に是を望み。後藤兵衛盛廣といふ郎黨を遣し。琵琶を奪取り剰へ。永覺を討つて棄てたる權威の非道。大罪人と申するも恐れながら僻事ならずと。地詞も引かぬ其内に騷ぎ立つ御殿の内。何事ならんと狩野介御簾引きちぎつて内を見れば。千壽の前は重衡卿おし圍ひたる弓手馬手。守り刀を携へて怒る氣色のゆふしで榊葉。詞ヤア卑怯なり重衡。琵琶を奪取り手にかけたる永覺が孫娘。祖父の敵遁れはあるまい地勝負。フシ勝負と詰めかくる。重衡顔を差上げ給ひ。詞全く某卑怯にあらず。身に覺えなき琵琶の由緒。價を出し求めしが。さては盛廣めが惡心にて。汝等が祖火を殺し盗み取つて來りしな。地よしそれは兎もあれ年端もいかぬ姉妹が。志に免じ首差伸べて討たれんなれども。我が任意ならぬ身の捕らはれ世の有様の是非なさと。仰せあるをも聞入れぬ女童の一筋に。祖父の敵討たせてたべ。我が君様のお情にとフシ涙を。流し願ふにぞ。地心も南都の荒法師。詞いや敵討は内證ごと。表立つたる大罪の重衡。此方へ下さるべし。いや我々が狙ふ敵。地無念を晴らさせ給はれと面々爭ふ身の願ひ。法師が高聲娘が聲。鳴音を附子の鶯にフシ鳥の邪魔する如くなり。地頼朝双方を鎭め給ひ。詞汝等が爭ふ所。その一理なきにあらねど。この重衡の御事は私ならぬ朝敵なれば。頼朝が手にかけ御首は賜はるべし。其後は衆徒が願ひ。娘が望みも叶へてくれんと地御詞の内よりも。かねて覺悟は重衡

卿烏帽子装束脱ぎ捨てゝ。につこと笑みて坐し給へば。千壽は暫しの内ながら。なま中なじむ憂き思ひ フシ 涙にくるゝ其風情。地 頼朝御聲荒らかに。詞 ヤア忌はしき。千壽が歎き。地 罷り立てと押しのけ給ひ。重衡の後に廻り。詞 朝敵の科遁れがたく。勅命を以て兵衛佐頼朝。地 只今御首を賜はるぞといひも敢へず御帶刀に。手をかけ給ふと見えつるが。懐中より一連の珊瑚の念珠取出し。重衡卿の御首にさつと掛け。詞 あれ見よ方々頼朝が手の内に。ずつぱと切れて流るゝ血は 地 紅つなぐ珠數の玉。數は百八煩惱の眠りを覺ます菩提の刑罰。詞 死骸は直ぐに都の黒谷。法然坊に送るべしと 地 仁愛深き名將の。心はすぐに引導稱名 フシ あつと。服するばかりなり。南都の大衆二人の娘。威光に恐れて詞もなく スヱテ いかゞと。伺ふ其氣色。詞 ヲヽ大衆等に頼朝が。言葉を違へんやうもなしと。件の装束烏帽子に取添へ。三位中將重衡なるぞ 地 受取り歸れと仰せあれば。詞 恐れながら此分では詫意に違ふ。重衡の御首。ヲヽ尤も尤も。それも望みに任せてくれん。まつた娘が敵討本望も遂げさせん。地 それ〳〵と宣ふにぞ菊地の二郎尾形の三郎。兩人が高手小手に縛めて。引出すは後藤兵衛盛廣なり。詞 サア此土産は二人の娘に我君より下さるゝ。料理せよと刀投出し。地 二人が前に引据ゆれば。ゆふしで榊葉有難しと後に廻ると見えけるが。一二の刀に盛廣が フシ 首は前にぞ落ちたりける。地 狩野介さし心得ヤア〳〵大衆等。詞 我君の御約諾。重衡卿の御首ぞと。地 盛廣が首抛り出せば理に服し。あつと悦び立歸る。程もあらせず都より範頼義經兩大將。目出度く凱陣まし〳〵て。三種の神寶ことゆゑなく内裏に納め參らせしと。勇將勇士の高名手柄生捕り分捕りかず〳〵の。御悦びをゆふしでや神の榊葉姉妹が。和歌をあげたる千壽の袖。智慧の弓矢に治まりて。二色の旗の動きなき我日の本の國津民。千を重ねて萬々年。文武に富める源氏の御代直なる。道こそ久しけれ

右之本頌句音節墨譜等令加筆候
師若針弟子如縷回吾脩所傳泝
先師之源幸甚

竹本義太夫博教

予以著述原本校合一過可爲正本者也

大阪土佐堀裏町
加嶋清助版

鬼一法眼三略卷

作者　文耕堂
　　　長谷川千四

第一

（詞）道は根無うして永く蔓り。名は翼無うして古今に飛ぶ。福は危き事無からんより大いなるはなく。利は害無きより大いなるはなし百花を採得て蜜となして後。知らず辛苦して誰が爲甜からんと。蜂を詛せる詩の今此時をさす棹の歌。平の朝臣淸盛公熊野詣の沖津船。風に音なき四の海（オロシ）へ浪靜なる。時とかや。（地）折節播州書寫山の靑松院性慶御坊。是も熊野參詣の好き同船と召具せられ。昵近は播磨の大掾平の廣盛。其外家の子郎等ども都に目馴れぬ海山を。今ぞ初めて三熊野の（フシ）浦路間近く漕寄する。（地）淸盛仰出さるゝは。（詞）是は御僧に似合ひし權現の利生咄。過ぎつる保元元年宇治の左府世を亂り給ひし時。我官軍にて先を驅け忽ち逆臣を鎭めしかば。（地）勸賞行はれ今都督大卿に任ぜられ。我が身の榮華を極むるのみならず。一門共に繁昌する事君の惠とはいへども。多年信じ奉る熊野權現の御利生と覺えたり。（詞）今とても帝の守護怠るべきにはあらねども。嫡子小松の重盛に一門附添ひ。左馬頭義朝といふ親を手に懸けし不幸者ながら。源氏の門を絶さず都に殘りある上は。些とも朝家に氣遣なし。（地）祈るべきは熊野權現樂むべきは此船の上。見え渡りたる絶景我數度の參詣に見覺えあり。（詞）性慶坊馳走に語つて聞かせん。（地）廣盛もよつく聞けと御扇を差し給ひ。（地）あれ〳〵向に小高く眞黑に聳えしは。いとが山より來る人のなき時は心細くも呼子鳥。こちこせ山と鳴くなれど君も來まさで待乳山。ふき上の小野檜原が峰皆此山の續きなり。其方に棚引く赤い雲の。絶間よりによつと頭の見えたるは。（フシ）藤代峠都より。徒歩路を來れば。五つも六つも七越の嶺百重山。此方の寺は粉川寺げに。誠都にて祇王祇女等が謠ひしも。（フシ）和歌の浦には名所がござる。一に權現二に玉津島（オクリ）三に。さがり藤四に鹽釜よ。かたをなみこそこれ（フシ）この名所。（地）もう是切りで覺えぬと御物語の沒義道さ。げに大將の氣質ぞと性慶はそれを感じ入り。よう覺えてと褒めければ廣盛を初め下々まで。

恐ろしくも珍しくも　フシ船中どよむばかりなり。詞ヤア阿濃の津の方より此船を目かけ押來る船。地網釣の船ならずよつく見よと大將御目を放し給はず。人々如何にと訝るうち近附くをよく見れば。浮線蝶の御船印御座船に漕付け。使と思しく舷に手を支へ。詞恐れながら是より御注進申上げ候。君熊野御參詣お留守を窺ひ。源の義朝衛門督信賴に與し。上皇の御所三條殿を燒拂ひ。帝諸共大內の黑戶に取つて押籠め。地御大事只今と相見え候。急ぎ御上洛あるべしと宗盛公の仰候と大息ついで申上ぐれば。船中是はとばかりにて　フシ皆々。色を失へり。地清盛些とも動じ給はず。詞扨こそ〳〵我が思案源氏の黑星に當つたり。ヤイ廣盛何を驚く。これは豫て思ひ設けし事。義朝信賴が風情謀叛すべき器なれども。淸盛都に在る內は頭を得上げず。時節を待つ

と見付けし故。地我此度の熊野參りは彼等に旗を揚げさせん爲。動いて疑はしきを見るといふ兵法の大事此事なり。我が謀りしに違はず謀叛人になり固まつたる。目出度し〳〵と勇み給ふ程猶心得ず。一刻も早く御上洛なされずば。地帝の御上御一門の御身も心許なし。ヤアヤア船頭御船を阿濃の津へ戾せ〳〵と言はせも立てず。詞戾せとはどの船の事。斯程未然を鑑る淸盛が。左程の用心脫るべきか。主上上皇の御片付軍の手配り。地重盛が智謀を以てとつく沙汰し置いたれば。見よ〳〵三日を過さず太平の左右を聞くべし。いざ悅びの酒酌まん何にても珍しき肴もがなとの給ふ所に。不思議や風の吹くならで海の面浪をあげ。何とは知らず御座船へ　フシざんぶと躍り込むものあり。地人々驚き取つて押へよく見れば。巨口細鱗の鱸なり急ぎ御前に

差上ぐる。淸盛公ほや〳〵笑顏。詞ハアア權現より好き肴賜つたり。地調味せよとの給へば性慶坊暫しと止め。詞熊野三所の權現は。伊弉冊尊事解男速玉の命などと申せども。正しく本地は彌陀藥師觀世音にてまします。さればこそ御參詣も五戒を保ち。精進潔齋し給はずや。地生ある物の命を召され殺生戒を破り。御口を甘んぜられんは勿體なし。窮鳥懷に入る時は獵師も是を赦すと言へり。急ぎ元の海へ放ち命を助け給はゞ。權現の照覽却つて御身の守りとなるべしいで愚僧賜つて放さんと。立寄る頭を扇にて丁々とくらはし睨付け。詞汝古今の道理にも通じ。好き咄の伽と同船せしが。拔群の芋掘坊主よな。五戒はかいはいさ知らず。唐土周の武王兵を起し。孟津といふ河を渡る時白魚船に躍り入る。武王取つて調味させ。天地を祭つて是を食ひ。而して紂を討ち

周家八百年の基業を開く。是見よ魚の形。鱗鰭あるは源の義朝が鎧兜を着たるに似たり。色の白きは源氏の白旗清盛が船に入りしは。味方へ是を取つたる印。骨も鱗も腸も食盡し根を絶さで置くべきか。誰かある料理せよとの給ふ所へ。又追々の注進船大兵の征矢を射る如く一文字に押付け。是は重盛公より御注進の早船にて候。信頼義朝上皇主上を御所の黒戸に押籠め。恣に逆意を振ひ候處。院の別當惟方大納言經宗卿。兩御所を盗出し六波羅へ入らせ給ひ候。又重盛公は軍勢を引具し。御所を圍み給ひ信頼を生捕り。義朝は一方を切抜け東國の方へ落行き。殘黨悉く誅せられ都は太平に治り候。御心安く御宿願を果され。緩々御上洛あるべしとの御事なりと高らかに呼ばはれば。清盛ぞく〳〵躍り上り。ヤア廣盛あれを聞いたか。惟方經宗の兩卿には豫て諜し合せし故。兩御所を盗み出し思ひの儘に勝つたよ〳〵。勝つて兜の緒を緊むるといふ諺あり。熊野八庄司は源氏譜代の者どもなれば。かくと聞かば野心を含む者もあるべし。汝は熊野に逗留し鈴木龜井が一黨。芋が瀬中津無坂の者どもまで心を付けよ。就中別當辨眞源の爲義に方人せし科。四年以前都へ呼上せ。詰腹切らせし時其妻懷胎と聞きし故。下司の平太諸賢に。平產の子男子ならば討つて棄てよと言付け置きしが。其後何の沙汰も聞かず。何にもせよ生置いて詮なき奴輩。此度母も娘も一緒に切つて了へ。何と性慶白魚の奇瑞今思ひ當りしか。ヤア廣盛。其坊主め此船に置くな。端舟に乘せ熊野浦へ追上げ心任せにぼつ拂へ。急げ〳〵と移し乘せさせ。そも今年改元の年號は平治元年。我も平氏秋津洲は早手に握つたり。悦び勇んで船をやれ船仕れと呼傳へ。櫓拍子揃へて棹の唄 四海。浪風靜にて靡き。治る八島のえい〳〵よほんほゝんほゝほんほほほん外まで。日の本の惠みに。洩れぬへ名に高き。不思議を爰に。三熊野や音なしの里の其さき村に。枝は榮えし權現松。四百四病は扱留きぬ八百や萬の病をば。祈る驗のあるぞとは 四方に蔓る下蔭や。床几直して。賣物は。朝出烏の土細工。女子賣人の是召せと參りの衆を呼懸けて。聲打添ふる。磯の波沖を見晴す氣の藥。針も按摩も打廢めて。只一筋の細道を。押すまい〳〵。互ひちん〳〵ちんばやお手打違へ腰痛め。杖をついてもとぼつくは。俄潰れの見ず聞かぬ。遠い聾も聞傳へ。參りを見ては是買はんせ。權現の使しめ。土で燒いても心は同じ。誓ひの數は幾つでも。上げねば願ひが叶ふべからず買はしやん

せ。かはい〳〵と賣る聲の。烏賣には似つこらし。參詣の衆立止り。是は尤もな賣物。我も爰へも此方へもと思ひ思ひに買取りて。松が枝に打ちかけ〳〵。思ひなしか此腰が延びまする。我等が足も立ちまする。愈諸願成就と。伏拜み伏拜み我が家〳〵に歸りける。青松院性慶は泰地の浦より船を上り。三所の法施奉り故郷へ歸る濱傳ひ。參りの人に礒馴松。立寄り停みなう〳〵女中物問はう。道行人に言問へば權現松とばかり敎へしが。何故參詣のあるやらん國許への土産。仔細を語つて聞かせ給へと仰せける。扨は他國のお僧樣よな。元來此松は伏拜の松と申し。此所より三所權現へは道も隔たり。耕す農人釣する蜑の暇なき身は。折々の參詣も叶はねば。此處を三所權現の伏拜み。伏拜みの松と名付け折折の幣を奉りしが。誰が言ふとなく過ぎつる頃より。此松に詣で諸病平癒を祈れば。忽ち本腹仕ると言傳へ日毎の參詣引きも切らず。參り合せ給ふも法の緣。拜んでお通りなされませ。ハアお茶上げう用意もなし。むさくとも此莚の上。お疲れをはらさせ給へと愛敬ある。戀の物語り過分千萬。今一つ尋ねたき事あり。所の人ならば聞及びもあるべし。本宮の別當辨眞と申せし人。四年以前都にて切腹し相果てられし。其人の妻子の行方御存じなきか知らせてたべとありければ。女驚く顔色ながらハ思ひがけなきお僧樣。夫は何故のお尋ねぞ。されば〳〵愚僧は書寫山の青松院性慶と申す者。沙彌の時分辨眞とは心安く殊ない介抱に預り。其後播州へ參り四年以前の生害も傳へ聞き。飛立つ如く存ぜしかど。參ること心に任せず朝夕の廻向申すばかり。此度平の淸盛と同船し當國へ參りしも。權現の參詣二つには辨眞妻子の行方を尋ね。せめて昔の恩を報ぜん志。御存じならば敎へてたべなう懷しき御物語り。則ち私は辨眞樣の娘御椰の前と申すお方へ乳を上げ傅育てし。飛鳥と申す乳母候。親は坂上文藤次といふ浪人者。私の緣によつて。娘御お袋樣諸共に。我が親の方に在しまし。七年以來の御大病。其病と申すは。辨眞樣男子のなき事を悲しみ。權現へ立願なされ。夢中に長刀を賜ると見て御懷胎。十月滿つれど御産も無く。一年ならず二年ならず。三年まで平産無し。其内に父君は御生害。御家督は沒收せられ剩へ。懷胎の子が男子ならば殺害せよと。每日々々郡代が入込み。平産を待てども〳〵又四年。今に御産のけづきもなく。前後七年のお煩ひ。貧しき浪人の朝夕の助けにもと。仕馴れぬ業の此物賣も。養君の

縁に引るゝ我が身の上。恥かしき物語り。憐み給へ フシお僧様と不覺の。涙を浮べける。詞是は〳〵好き人に尋ね逢ひ痛はしき話を承り落涙致し候よ。地誠諺に憎まれ子世にはびこると。平家は日々に繁昌し。源氏は日々に衰ゆる。未だ聞かずや都には。詞左馬頭義朝謀叛を起し。待賢門の軍に打負け。地義朝は東國へ落給ひ。公達附々の人々も。或は生捕れ殺害せられ。都は騒動眞最中と。聞きも敢ずはつと驚き。詞なう申し夫は治定か一定か。イヤサ出家の僞り言ふべきか。淸盛同道の船中にて追々の注進承る。地はつと女は力を落し。詞若し其附々の人の中。吉岡鬼次郎幸胤といふ人は。如何なり給ひしぞ知ろし召し給はぬか。いや〳〵さ言ふ名字は聞及ばず。其鬼次郎は由縁の人か何故に問はるゝぞ。地されはとよ其人は。詞辨眞様の娘御挪の前に許嫁。妾が大事の養君の婿といひ。父文藤治とは母方の叔父甥。地重縁の誼に依り。吉岡鬼三太清悦とて。角前髪の弟御。我親の許に介抱。兄鬼次郎様は左馬頭義朝公に附隨ひ。此度の軍に生死の程。心許なや氣遣はしと スヱテおろ〳〵涙に暮れければホウ尤も〳〵さりながら。夫は爰から案じて濟ます。差當る難儀は辨眞の後室。懷胎とも病とも分明ならぬ此年月。詞便々と捨置く事然るべからず。切つて了へと淸盛の下知に依つて。播磨の大掾廣盛向ふと聞く。然れば只今の命も知れず。是氣遣ひの第一なり。地早く歸つて親に知らせ仕覺あるべし。但しかく言ふ事性慶が口より聞きたりと。沙汰あつては兩舌の科。心ばかりの物語り構へて穩便々々との給へば。飛鳥立寄り賣物の。鴉を取つて石に打付け。一つならず二つ三つ打碎けば。こは何故と興醒め顔。詞いやとよお僧様のお情にて知らせ給ふ一大事。人に漏さぬ妾が誓ひ。熊野の牛王の裏に書く起請度毎お山にて。地烏が三羽死ぬるといふ。此烏をかう碎けば。實の烏も死ぬる道理。取も直さず直に是が牛王の誓紙。疑ひ霽したび給へ。ホウ頓智の誓紙尤も〳〵。馴染ある辨眞の妻子見捨て難し。事難儀に及ばゝ。力ともなるべきぞと。フシ出家侍頼もしき。お志を伏拜みの。松は昔の友烏。店取納め御供し我家を。指して 三重へ立歸る。

フシ音なしの。里にし住めば便りなき。痛はしや別當辨眞の北の方。長地昔は本宮の上下にかしづかれ花を尋ね。月に賞でし身なれども。夫に離れし其後は。平家の沙汰として娘が乳母の親たりし。坂上文藤次に養育せられ。本フシ四年の月日身に重き。懷胎の子の祈り フシ亡き夫の爲。二つの願ひを一石に一字づつ書付くる。

スヱテ妙法蓮華經机。今四十五字書きたればお經も願も成就の。足らずの石を拾はんと鬼次郎が弟。吉岡鬼三太梛の前諸共に。庭の小石を取々に　ホオクリ拾ひ。淨むる阿伽の水。流れと人の行末は。フシ知れぬぞ人の浮世なる。梛の前立寄りて。詞申し母様。鬼三太様の溜邊で拾うてお出でなされた石のやうに。美しうはなけれども。地是で御堪忍と紙に包みて差出せば。詞ヲヽ能う拾うてたもつた。鬼三太様もいかいお世話。此法華經の文に。聚沙爲佛塔如是諸人等。皆已成佛道とお說きなされ。地沙を聚め佛の塔を爲す。是の如き諸の人等皆。已に佛道を成すとあるなれば。お經を書く者の功德ばかりでない。詞石を拾うて下さる鬼三太様も。そもじも結構な功德ぢやつたの。此御利生にて都へ上り給ひし。吉岡鬼次郎幸胤様義朝公へ宮仕へ好い身になり。そもじを迎ひに聽てお出でなされう。爰で祝言取結び。地久し振にてさゝんさの聲聞こわいのと。言へば娘はイエノヽ。詞石を拾ひ拾ひも。此石にお書きなさるゝお經のお蔭。母様健康に身。二つにおなりなさるゝやうとこそ思うたれ。祝言とは恥かしい。地私が事は苦に病んで下さりますなとおとなしさ。母上わつと泣出し。親なればこそ子なればこそ。しをらしい事態う言やつた。詞世上の人の懷胎は一月二月延びるはあれど。七年が間え產まぬとは唐天竺にはある事か。地是もない子を告子の神の咎か佛の罰か。よも人間ではあるまい。どんな者產まうかと案じらるる是一つ。殊に淸盛の言付け嚴しく。產落して男子なれば殺さるゝに極り。若し男子でもあらうかと。產まぬ先の苦しみより。產んでの後が案じらるゝ是二つ。共爲に書くお經の力。產まずとも此儘で死にたいわいのと泣き給へば。辨へある程子は悲しく。母の膝に俯伏して　フシ共に。涙にくれにける。地鬼三太はきがさ者。詞エヽ氣の弱い。悔み言はずとも。究竟な男の子を天下晴れて產み給へ。地淸盛が下知で候殺さうなどとうせる奴。十人あらば十人百人あらば百人ながら鬼三太が受取り。指もさゝせる事ではないと聲高に　フシ力を付くれば。文藤次勝手より立出でこれノヽ鬼三太。詞如何に若輩なればとて。壁に耳石の物言ふ世の中に。出る儘の過言禍を招くか。以來剛氣をふつつと止め。地柳の枝に雪折はなしといふ事工夫せよ。いつもより飛鳥が戻り大分遲し。詞大儀ながら權現松へ迎ひに往ておくりやれ。賴み申す早う早う地とありければ。甥は猶子のごとし母方に連る叔父の命。遁れ刀をぼつ込んでフシ乳母が迎ひに出でて行く。地文藤次

母君の傍近く。詞お袋様もお袋様。罰も祟りも道を背く人にこそ。神に依怙贔屓。佛法に偏りあらば。代々の天子そもやそも。安穏に宮寺を建て置き給ふべきか。地毎日書寫のお經の利益。何事も思ふ儘と何故信心を堅め給はぬ。法華經一部八巻二十八品。六萬九千三百八十四字を。今四十五字にて成就とや目出度し目出度し。心清淨に愁を拂ひ。一字も早く大願を滿て給へ。詞椰殿同じやうに泣くまい墨でもお磨りなされ。扨々々フシ心弱しと諫むれば。詞ア、言やればさうぢや。此悔みも自らが。信心の未決定なる故ならん。椰よ墨磨れ。いでさらば。地御經書寫し了はんと。又經机に打ち傾き。書付く石の數々やギン濱の眞砂は讀み盡くし。つくすとも盡きぬ。歎きの身の程を。フシ思ひ遣るさへ痛はしゝ。地所の郡代下司の平太諸賢案内もなくつゝと入り。詞ヤア文藤次。今日も病人改め。地罷通ると奥に入り。こりや石に何のてんごう書くと机はね退け母君の。衿かい摑んでぐつ／＼と懐を引明け。押して見つ摑んで見つ。合點のいかぬどん腹と突轉し座に着けば。親子はとかうの詞さへフシ泣くより外の事ぞなき。文藤次無念の心を鎭め。詞ア、毎日々々の御改め御苦勞千萬とあしらへば。こりや何時まで足を運ばせる。佛の面も三年四年此女めに飽果てたり。今も腹を摑んで見るに。左の方に一塊。病であるまい。極つて男子の懐胎。便々と產むまで待たれまい。地分別せい文藤次とフシ苦り。切つていひければ。詞ハア是は存じ寄らざる仰せ。毎日々々同じ事申すに似たれども。正しく應聲虫と申す病にて。時々腹の内からおう／＼と申す。幾度仰せられても。地病にまがひ御座なしと。言はせも立てず言ふな／＼。詞應聲虫の煩ひ。物識にとつくと尋ねたれば。應聲虫とは聲に應ずる虫と書く。唐土淮西といふ所の。楊緬といふ者此病をやむ。外にて物を言へば。其詞を腹の内から言ふ。鸚鵡の鳥の人の詞を言ふに同じ。或醫者本草を開いて。一つ／＼藥の名を言立つる。悉く腹の内より口うつせしが。雷丸といふ藥の名を言ふに答へず。扨は雷丸を嫌ふと心得。是を用ひて平癒したりと文昌雜錄といふ書にあり。此女が病應聲虫に極らば。外にて言ふ事を口うつすべし。地目前に實否を正して見せんと立上り。歎き伏したる母君を情なく。我が傍に取つて引付け。詞ヤイ腹の内の病よ。應聲虫か。應聲虫かやいと。地言うては耳を傾け文藤次。詞何とも言はぬぞよ。但し是はむつかしさに言はぬか。いろはにほへと。言はぬぞよ。ちりぬるをわか。言はぬぞ

よ〳〵。なんと。聲に應ぜいでも應聲虫か。懐胎に極つたわやい。妙な事御意なさるゝ。懐胎と申すは十月を限り。一月二月延びるもあれど。假初ながら是は七年。懐胎でござらぬ。言ふな。夫も聞いて置いた。唐土の老子といふ聖人は。八十年母の腹に居て。白髪になつて生れたわやい。七年が十年も居まいものか。地よし〳〵汝と論は無益清盛公熊野御參詣。此所に御座なさるれば申上げ。是非は御諚を受けての事。又來るまでを大事にせよと フシ睨み散らして歸りける。地母君胸騒ぎなう文藤次聞きやつたか。詞清盛が來て居るといの。されば〳〵。いつにない事邪代が。理窟張つて歸りしも夫故と覺えたり。地如何樣に言上げ如何下知せんも測られず。鬼三太乳母も歸り次第一思案と言ふ所へ。下司の平太大勢誘ひ取つて返し。中にも廣盛大音上げ。我を誰とか思ふ。播磨の大掾廣盛といふ者。主君清盛公熊野權現へ御社參の序。辨眞が後家の病氣。應聲虫といふ病とも。懐胎とも今に分明ならぬ由。何れにしても生け置きて。詮なき源氏のがらくたども。討つて來れと御諚に依つて向うたり。後家娘共に此方へ渡せやつと呼ばはつたり。地文藤次刀掻込みつゝと出で。詞イヤ〳〵さうは言はれまい。辨眞源氏に方人せし科は四年以前腹切つて相濟み女には構ひなし。懐胎の子男子ならば切害せよと先達下知せられし。今又女も殺せとはよもや言はれまじ。今一度立歸りとつくと聞定め。重ねてお出でなされ廣盛樣と。地取合はぬ所へ鬼三太清悦息を切つて駈戻り。下司の平太を引摑んで二三間取つて投げ。詞叔父御出來た渡さぬ渡さぬ。清盛はおろか天輪王の勅命でも。地ならば手柄に取つて見よと踏んばたかる。詞ヤア清盛公の御諚を背く蝿虫めら。地二人共に討つて取れ。承つて拔連れ〳〵切つてかゝる。叔父は老人御親子を介抱あれ。こちらは我等が受取つたりと拔き合せ。大勢に切結び廣野を指して 三重へ追うて行く。地如何して忍びけん廣盛取つて返し。文藤次が後より肩先を切下ぐる。切られながら拔合せ心は鬼神と逸れども。深疵に目眩暈きあしらひかぬる共隙に。母君を取つて引寄するなう母上を助けてと。取着き縋る梛の前蹴退けはね退け肋骨三刀四刀刺通し フシ返す刀に吭掻切る。地文藤次よろぼひながら立上り。切付くるを引つぱづし疊み懸けんとする所へ。表にけはしき人音は南無三寶。若い奴めが歸りしと奥の戸障子蹴破つで。後の山路を廣盛は フシはふ〳〵逃げて遁れける。地立歸るは鬼三太に道で逢ひし乳母の飛鳥青松院を御供し此有

様を見も分かず。ヤアお袋様。父様。二人ながら誰が切つたと。狂氣の如く見えければ。コレ乳母母様を廣盛が手に懸けし。悲しやなうと梛の前縋り着いて。泣き給へば。性慶御涙にくれながら。女中手負を介抱あれ。痛はしき母御の最期やと。立寄り御覽じあら心得ず。死骸の呼吸は切れながら。動くは如何にとの給ふ内。疵の口を誕生門母の血汐に身を染めて。赤きが上の赤子の像。大きさは八つ九つの子の如く。産髪垂れて目をぱつちり。出るより早く駈歩く。理なるかな成人して。西塔の武藏坊辨慶と。世に名も高き此赤子不思議なりける誕生なり。人々大きに驚けば文藤次感歎し。扨は母君の法華經書寫の御功德。子は些とも疵付かず生れしな。只今娘に承る。御僧は性慶御坊とや。七年胎内に在りし此子なれば。かく

あらいで叶はぬ筈。母君は御最期愚老は深手。此所の養育叶ひ難し。あはれ御山に影を隱し弟子となし。育て養ひ下されば生々世々の高恩と餘儀なく賴み奉る。尤も〳〵至極せり。我此所へ來る事。辨眞の恩を報はん爲。如才に存ぜずさりながら出家の身。産養ひも心に任せず。如何と思案し給へば文藤次。誰彼と申さんより。幸ひ梛様に含めし乳の殘り。我娘を添へ申さん。ヲヲそれこそ究竟一。此上は片時も早く立忍ぶに如くはなしと。赤子の側に立寄つて御袈裟を打覆ひ。掻抱きて出給へば飛鳥はあの子の守りぞと夢想に得たる長刀の。箱脇挾み目は涙。梛様さらば。乳母さらば。やがて便りと其跡は涙に聲も。音なしの里をへ別れて出でて行く。サア此跡は梛様一人。泣くまい〳〵手を負うても此爺が。憂目は見せぬといさ

むる所へ鬼三太は。下司の平太が首提げ立歸り。エ、無念千萬。廣盛めを見失ひしと見廻し〳〵。ヤア。叔父は手を負ひ給ひしか。お袋様は最期か。是は。是はと。餘りの事に涙も出でず狼狽へ騒ぐぞ道理なる。驚きは尤も。汝追駈け出でたる其跡へ。廣盛一人取つて返し此仕合。悔んで返らず。扨言付くる事あり。死骸の口より誕生の男子は。書寫山の性慶といふ御僧に預け。飛鳥を添へて落したり汝は此梛の前を同道し。鬼次郎に手渡しせよ。いとほしやお袋が臨終まで。祝言させて疾く見たやと。苦に病まれし大事の兄嫁。伴れてサア行け。成程々々同道はや行けとありければ。致すべきが。叔父御は何となさるゝ。ホ、言ふにや及ぶ跡に殘り。追駈くる敵あらば防いで討死するばかり。いやいや然らば御免あれ。幼少にて父に離れ

此年まで御介抱。親に劣らぬ叔父の御恩。蒼海浅く須彌山低し。地殊に深手の臨終を見捨て。我々ばかり落ちん事存じも寄らず。一緒に御供申さんと聞きも敢ず臂を張つてぐつと睨付け。詞手負の老人足弱の女を伴れ。追手懸らば何とする。雜兵の手に懸けさせ。名を埋め耻晒せか。地我を庇はゞ腹切らうかと差添に手を懸くる。詞ア、捨置いて參ります。確と行くか。腹切らうか。叔父甥の緣切らうかと地せり懸けられ。スヱ暇乞さへそこ〳〵に。多年の高恩臨終の名殘跡に。見捨てゝ行方もフシ知らぬ山路を忍びける。地かくと聞きてや清盛公廣盛が案内にて。大勢引具しどつと駈寄せ。詞ヤアヤア文藤次といふは汝よな。碌々たる下郎めに。手を下す筈はなけれども。平家に背く奴輩はかくの通りと。八庄司の者どもに聞怯させん爲來つたり。シヤ冥加知らぬ愚人めと飛かゝり。肩先摑んでどうど打付ける。ヤア棘掻き程なりとも。血を見いで死なうかと。地起上る所を息の根をしつかと踏付け。一捻捻ぢて白髪首えい。やつと引抜き捨て。詞ヲ、心地好し廣盛。義朝は詰腹切る。悴どもは都へ上り。心の儘に成敗せん。此後源氏の末葉とて面を差出す覺えなし。浦々。島々に隱れ住む與黨の爲。權威を振ひ嚇しをくれよ。弱みを見するな後れを取るな。日本六十六ケ國。地江河の鱗山野の獸空飛ぶ鳥に至るまで。今日よりは皆清盛が羽翼の下。四海一統平家の世と踏固めふ。み。轟かし響き渡れる山彥や。草木も靡く赤旗の風を起して上洛ある。國土の惡鬼天の邪鬼。六欲天の四魔天魔。阿修羅の。荒れたる勢もかくやと。恐れぬ方もなし

第二　道行故郷の順禮歌

地たゞ賴め ハルフシ しめぢが原のさしも草さしも畏き御誓ひ。枯れたる木にも花ぞ咲くまして若木の男松。スヱテ連る枝のみどり兒に。などかはめぐりあはざらん。フシそれを力に二人連。肩にかけたる笈摺も。親のなき身はだてもなく。昔の袖を梛の前。今はお京と名も變へて。田舍めかざるフシ島田髷 ハルフシ 都のつとは。水鳥の陸に迷へる兄思ひ。故主に何時か鬼三太が氣散じならぬ氣扱ひ。長地心遣ひを休めんと兄嫁振らぬ嗜みや浮世の水に溺れねば。手を執るまじき戒も。法の道連許しある。フシオクリ順禮へ修行の。フシ德とかや。順禮一番に紀の國。那智山。岸打つ。浪とナホスフシ歌ひける ハルフシ 我が古里の。御山を。爰に移して昔より ホオクリ 立つとも。知らぬ今熊野札打ち。そめて フシ

清水に。結ぶ心は。涼し。かるらん。重くとも。五つの罪は遁るべき六波羅密寺六角堂。はや革堂に九重の町を。離れて。野をも過ぎ。山路に。向ふ善峯を越えて丹波に。栗の道旅の疲れをあな憂やと思はで。急げ我もげに。夫戀ふ鹿の。津の國や此御寺に來て見れば。心の塵も打拂ひ。扨も奇麗な總持寺と。行く道すがらうさはらし松の林の群鴉かあい〳〵の聲聞けば。熊野の山の夕月夜。父母の事思ひ出す。野邊に飛交ふ蝶の翅に。和歌吹上の娘髪結うて貰ひし乳母が事。今にくし〳〵思ひ出すそれよ。それ〳〵其時は。まだ振袖のうら若み。我も柳の前髪姿。何時の間にやら生男の。戀もなき身と。暮し。こし月さへ日さへ。十三年夢か現か現か夢か。知らぬ人目の惡口に。扨も好い中好い女夫あやかりものと指さゝれ。恥かしいやら可笑いやらで。辛氣氣の毒。ア、ままよ。耳吹く風の在鄕馬。戻り安うて乘せうと言へど。法の爲には勝尾寺。箕尾の辨天伏拜み。十五とうじを愛し給ふ此御惠みぞ頼もしき猶も幼き弟が。身の行末を祈りなん もしもやツンテツトン。此子がや。土産と言はゞよいぞりや。えいずんどえ。箏でやトヰキン〳〵。しやみせでツツテツトン。歌うて聞かしよえいそりや。えイずんどえ。是も小唄の中山寺や。ふしのしをりの曲り道。越えて其方に。西の宮兵庫に續く須磨明石。かの石山の紫や硯に。照す月は一つ。影は二つ。三つが一つの望の空。我も源氏に由緣ある。其名つゝまし同じ。名の。爰に清水播磨潟 あまねきかどに。品々の。春は花。夏は橘秋は菊冬は雪見の。曾根の松枝も。杖つく旅姿。書寫の御寺も程近き。道と思へば急がれて。暮行く空も厭ひなく目當に辿る里の名は。女の身にし緣も好き姫路の。町へと

へ行く水の。流れと人の。行末は。定めなき世と。いひながら誓し心を播磨潟。福井の宿の野端に世を離家の井の字窓。立つる煙も絶え〳〵に月日を送る老女あり。そも此老女の古へは熊野の別當辨眞の獨姫。梛の前を育てたる飛鳥といひし身なれども。今は浮世におちの人。昔にも似ぬ姥櫻。いとゞ老木の身の上にさいつ頃より中風の。病も重き桑の杖縋りよろぼふ片手業。起居も自由ならねども自在の鑵子友として。かや茶の端香高砂や。尾上の鐘も身一つの 頭の霜に冴えぬらん。さえぬはつらき夕の雲。星さへ見えぬ旅の空夜道とぼ〳〵鬼三太が。お京に力つく杖の節もしどろ

の顧禮歌。是より心草臥れて。なう申しお京女郎。曾根から姫路へは僅た二里半。一息にやつてくりよと思ひの外の砂道。扨退屈や煙草の喫みたさ。幸ひの此離家火を一つ所望なされと。指圖にお京が戸口に寄り。行暮したる順禮ども御報謝と思召し。煙草一服吸付けさして下さりませ。御無心ながらと言入るゝ。老女は耳を欹てゝいとしぼや姫御前の。夜道をかけし修業の旅。煙草の火とはお易い御用。軒下の卿へ煙管は政道正しき所の法度。此方へ這入つて參れやと圍爐裡の傍に居ながらも。竹に括りし戸の明立てつきつしくならぬ挨拶に。それはまあ／＼嬉しやと言ふ物腰も聞いた聲。主人の顏も見たやうなと互に忘れぬ覺えの目角。其方は乳母ではないかいの。さう仰しやるのは桐の前樣。我等は鬼三太見知つてか。ほんにさうぢや是はマア

夢ではないかと悦びて。扨も／＼有難や是といふも佛のお蔭。お果てなされた母御樣のお引合せと思ふにぞ。いとど昔のゆかしさよ。熊野でお別れ申したは昨日や今日のやうなりしが。月日の立つにはようがなく此まあお脊の延びた事。ヲヽよい所體やのいとしらしい女房振。お袋樣の讓りの笑顏髮際なら目元なら。全然に瓜を二つ。鬼三太樣も老くろしう變れば變るお顏の窶れ。心に御苦勞遊ばす故と思ひやられておいとしや。ほんに何から尋ねうやら。先づ／＼兄御の鬼次郎樣如何渡らせ給ふぞや。されば／＼兄鬼次郎。討死したる噂もなく。又落延びたる沙汰もなければ。都に殘りあらんものと。桐の前を知邊に預け。年を重ね尋ねしが。見しと言ふ人もなければ關東へと志し。東山道北陸道尋ね廻つて伊豆の國。蛭か小島に在します頼朝公にも對面し。坂東八ヶ國捜し求めて逢はざれば。爲方盡きて都に歸り。談し合せて西國巡禮。思はず其方に邂逅ひしは。兄鬼次郎にも尋ね逢はん吉左右なりと語るにぞ。鬼三太樣の仰せの通り熊野を出でし其日より。いかいお世話に預りて知邊の人に介抱せられ。名をもお京と改めて身の上隱す渡り奉公。彼所の御所こゝの屋敷。半季一季と勤める内にも。心に忘れぬ鬼次郎樣。又懐しう戀しきは。産れし儘にて別れたる。孤の弟を預け別れし其方の行方。播磨の書寫の御寺に在りとばかりはほの聞いて。文の便もせざりしは。世を忍ぶ身の淺ましさ。心で思ふばかりにてあだに暮せし十三年。鬼次郎樣に逢ふまでは せめて女の操ぞと。顏も直さず齒も染めず。心の底には振袖着て。待つに効なき殿御の行方。餘り心の遣る方なさ。殊

に今年は母様の當る年忌も弔ひたく。地鬼三太様をお頼み申し尋ね下りしかひあつて。年頃ゆかしい其方の顔。見る嬉しさは嬉しいが昔に變る姿形。元の姿は何處へやら是も何故我々が。拙い運に成果て苦勞を懸けし故ぞかし。何事も〳〵赦してたもやとフシばかりにて跡は。涙となりにけり。詞なう勿體ない事ばかり。何しに左様に思ふべきさりながら。地人の身の心の辛苦は悲しいものと。枕許なる箱取出し。詞是は定めて覺えてござらう。小鍛冶が作の御長刀。産れたお子の身に添へて。熊野の山を逃退きしが。名を鬼若と付け申し。書寫の御寺に預け置き性慶阿闍利の御弟子となし。地出家相續ましまさば沙門の身の表道具。此長刀を渡さんと思ふに違ふ學問嫌ひ。詞明けても暮れても惡あがき。腕白者と憎まれて。人の疎むを見聞くにつけ。心を痛むるしるしにやめき〳〵と年も寄り。地五十そこらの身なれども何時の間にやら此白髪。淩雲の額を書き。暫時の内に白髪となりし例も身に知られ。詞我身ながらも疎ましき此頭。剃りこぼつて尼ともなり。衣を墨にと思ひしが。地養君の許嫁御祝言も濟まぬ内。髪を剃し世を捨つるはお主へ對して忌はしく。先をからすが氣に懸りフシ惜まぬ。白髪の惜まれて。五節句又は月々のお朔日十五日。祝儀を祝ふ櫛梳り老の化粧の凄じと。笑はゞ笑へ身の祈禱。鏡に向ひて姫君の御出世願ふ其内にも。只苦になるは鬼若様。殊に姿が身の上まで。寺から里の御育み。氣の毒や疎ましやと思ふが積りて此中風。地つれなき命と恨みしに存へて居たればこそ。お二人様のお目にも懸り。積り積りし憂さ辛さ語り明かす身の本望。天道様のお蔭ぞと。嬉し涙に年月の。思ひ涙も取混ぜて。一つに流す圍爐裡の内フシ柴の濕りて消えぬべし。地鬼三太お京も鬼若が噂を呆れ居たりしが。最前より話に紛れ何の氣も付かざりし。中風とは氣の毒千萬さりながら。詞養生次第全快もあるものぞと力を付け。イヤなうお乳母。今宵は爰に一宿し。明日は早々書寫に登り。鬼若にも對面せんが先づお京様もひもじかろ。地我等もどうやら腹が跡へ寄つて來た。詞ヲヽお道理〳〵。先刻にから頓と心が付かなんだが。うたてや今夜に限つてなう。ム、ウ米が無いと見えたの。夫ならば更けぬ内福井の宿へ一走り。地餅なりと買うて來う其内にお京様は。マアとろ〳〵とお休み。序に酒も買うて來うとそこら尋ねて提げて出る二合半入のとつくりとフシ跡しめさしやれと出でて行く。老女はお京に氣を付けて障子の彼方に枕もあり。洗濯蒲團も

後處にと樣々心付くるにぞ。氣世話かけるも誠ましやそんなら暫く氣休めと反古張なる一間の奥オクリ長のへ疲れやはらすらん。播磨の國の街道を己が家居と巣を張りて。世渡る業の撰鋒はいとも危き雲助と。下り果てたる身ながらも腰に放さぬ一本刀。仲間外れの働きは。誰白波の夜の道。向ふの土手の片陰よりのさのさ上る二人連。跡先に立ちはたかり。ヤイこゝな新米め。數年こちとが仕にせて置いた。此街道の夜働き。うぬがふつとうせてから上つたりやのかん〳〵坊。好い所で出くわした。して溜があるべい。五六百置いて往けとつゝかさから懸ける一强請。イヤ旨い事をほざく奴等。うぬが樣な背張さへ働きのない時節。五六百とはえらい事。ころりづつはこましてくれうとずつと寄つて引擔き。これころり受取つたか。うぬにもくれん是ころりと。道端へ投付くればころりや如何ぢや。手酷いころり是がほんの衛こかし。光棍めに出逢うたと呟き〳〵逃げて行く。エ、埒もない奴等に骨折。ひだるい上の腹減し。イヤ幸ひの小屋の内。粽でも麥飯でも引攫へてこまさうと。門口蹴放しずつと入る。老女はうたた目を覺し案内もなく誰ぞいの。イヤ苦しうない盜人だが。先づ急にひだるい。飯があらば出して食はしや。ム、ウ誰ぞと思うたりやお盜樣か。飯の事は扨措き。米が一粒もないわいの。そんなら酒は。けもない事。それ其處な銚子に茶が沸いてあるばかり。飲みたか汲んで飲んだが可いと寐ながらつゝ答へる氣の丈夫。ム、ウ恰好より落付いた老耄。外から見たと違うてにつとりとした内のざまさ。得てこんな所に臍繰銀が溜つてあるもの。かう這入るからは覺悟して。有りたけこたけ出しやれ〳〵。ハ、、、ハ、、惡い目利。此樣な野繰れに獨住の此婆。何金銀が有るもので。見えた通りの此家内。欲しい物があるなら勝手次第に取つて往にや。幸ひ今夜は忘のお逮夜。報謝したと思はうまで。ヲ、好い合點家搜しすると。うそ〳〵搜す枕許。以前の箱を見付出しこりや何ぢや。扨こそ扨こそしつかりと重たいは。臍繰に極つたと引抱へて出でんとする。裾引執へてア、これ〳〵。それは大事の預り物。外の物は何なりと欲しい物取つて往きや。いや其大事の物が此方に欲しい。エ、面倒なと振放せば又取付くも片手業。突捨られても放さぬ腕振切れてはばつと倒け。又起上つてしがみ付く機みに箱を取落す。拍子に倒ける角行燈燈火消えて眞の闇。お京はふつと驚く寐耳。勝手は覺えぬ暗紛れ。迂濶に聲も立てかね

てフシ怖さも増る探り足。地かくとも知らぬ鬼三太は火縄片手に餅と酒。調へ歸る裏屋の内物騒がしきに心を付け。透し見れば必定盗賊。イヤ詞ノヽまつかせと尻引褰げ。刀の下緒引解きたぐるも時の捕手縄。つたひ寄り／＼てりや。捕つたわと摑んで投げるを飛違へ。すつくと立てば又立寄る腕をもぢりに打ちかへされ。蜻蛉返りの身を直に沈んでかづく餘りの受身。心得たりと横に飛ぶ。爪先取つてやまがら投げ。地來る身をかはし行く身をはづす。暗がり紛れの摑み合ひ。互の聲を力草フシ暫く息をつぐ内に。地物に馴れたるお京が氣轉心附木に薗煙硝の紫。ぱつと燃せる篝の光に。雙方見合す顔と顔。ヤア詞此方は兄貴でないか。ヤア其方は弟。鬼次郎様か。鬼三太か。ヤアなんと鬼次郎様ぢや。地これは／＼これはこれはとお京も老女も兄弟も。嬉しい悄り

呆れ入りフシ暫し詞もなかりしが。詞鬼三太胸を押鎭め。詞最初に別れしより十ケ年に餘る此年月。何處に忍び在せしや。今月今夜不慮の對面。兄弟の縁といひ殊に盡きせぬ妹脊の結び。許嫁ある君の前よも見忘れはなさるまじ。是なるは乳母の飛鳥。地かた／″＼を手渡し致す身の大慶。是に過ぎじとフシ相述ぶれば。地兄を思ふ親切祝着々々。詞扨も某侍賢門の夜戰に。身を討死と極めし所。義朝公の御諚には。佐々木源三纐纈源五某三人心を合せ。都にまします公達を守立てよとの御頼み。其人數に加へられし。武士の本望有難く隱れ忍びて折を待ち。地鞍馬山にまします牛若君に對面申し。西國表の源家の浪人。語らはん其爲に盗賊と姿を變へ。詞野山を家としさまよひ暮せば間違ひしは理。かく邂逅ふ此上は都の前とも夫婦になり。地時節を窺ひ平家を亡し。

舅辨眞の仇をも報はん。御邊は是より都に歸り。詞我々が大兄鬼一法眼。今平家の祿を受け歡楽に暮す由。弟ながらも其方は面體知られぬ一つの幸ひ。何卒彼に近寄りて心を探り。計略の奉公か但しは。利慾に源氏を捨て。眞實平家に仕へるか。善惡次第に兄とは言はせず討つて捨てよ。某は又御身に代り順禮となり。丹後路より密に都へ登るべし。地牛若君にも逢奉り件の次第を申上げよ。必ず必ず兄ながら鬼一法眼は烏滸の者。心をゆるす事勿れと僞た今逢ふ弟に。地恵みを見せぬ忠義の指圖。詞誠に兄は兄程なり。地鬼三太大きに悦びて仰に任せ某は。是より直に立歸らんこれなう老女。幸ひと餅も酒も買うて來た。祝ひの雜煮獻々の盃事。地萬事は好きに頼む／＼。最早明けるに間もなければお暇申すおさらばと。笈摺脱棄て兄親に頼む此身の谷汲や。互

の土産は無事な顔。待ち申すぞと立ち出づる跡はお京と鬼次郎が。深き妹脊の盃に。積る心の物語。老女が白髪雪の松蘿きぬ。契りや三重へたえしなき。地硯の海に法の船深きに至る筆の跡。書寫のお山と申せしは。播州一の靈場にて。甍並ぶる寺院の數。中にも青松院性慶阿闍梨當山の一臈にて。人の敬ひ重々しく貴き寺は門からや。庭の盛砂箒目も清淨の地を顯せり。地今日は殊更賑々しく庫裡客殿の拭き掃除。臺子仕懸ける花生ける心も花のお稚兒達。一つ所に寄集り。詞なう申し梅千代様竹丸様今日入學は此國の領主。播磨の大掾廣盛様の御子息。岩千代様と申すお方都に育つて學問の下地も餘程あると聞けば。手習ひ物讀み經陀羅尼追抜かぬが兄弟子の嗜み。地夫につけても笑止なはあの鬼若。身體ばつかり大きうて手習學問は精に入れず。力持の捧捻のと稚兒の行儀は一つもない。阿房羅刹の鬼若ぢやとオクリ笑ひ誹るに程も無く。地廣盛が一子岩千代丸今日入學の年配より。大人くろしくすねこびて父が讓りの憎て風。顔もしかまの徒士若黨附添ふ中にも市原團平。身を高ぶりののさばり聲。詞やあ〳〵稚兒達案內賴まう。大掾の子息岩千代様御供申し參りしと。地言ふ聲に性慶阿闍梨客殿に立出給ひ。好くぞ〳〵岩千代丸今日の入學。神妙に存ずるさあ〳〵是へと手を執りて。もてなしあればずつと通り。詞實にお師匠は針の如し。弟子は糸の如しと申せば。今よりは國の守の悴とも思召さず。遠慮なしに御教訓地賴上ぐるといき過ぎて。可愛氣もなき詞の品それよ是よと稚兒達も。互の挨拶事終れば。祝儀をいはふ持たせの樽フシ折櫃こもの取々に。地はや盃を師弟の結び市原團平座席を見廻し。詞豫て當院の稚兒達は大勢と聞きつるに。はや是ばかりに候か。成程貴方の仰せの通り多くの弟子に候へども。其身の器用次第にて得度致させ出家となせば。只今では三四人誠にそれよ。竹丸梅千代何故に鬼若は座敷へ出ぬ。鬼若々々と呼び給ふ師の坊の御聲に。あいと返事のあどなくて姿は實にも鬼若丸。遣戸押明けのさ〳〵と疊觸りも足音も。あら木造りの仁王の片方フシ突据ゑたるが如くなり。地團平鬼若に打向ひ。詞いやなうお稚兒。是に居らるるは身が主人。此播磨の國の守大掾様の御一子岩千代丸。今よりは學問の朋友。地隨分仲好くせられよいざ若旦那其盃此稚兒に御差しと指圖に任せ持ちたる土器。鬼若が前に差出せば。詞此樣な小い物で飲む事はおりや嫌ひ。おれが好きは地是が好きと彼處に並べた樽提げ。かゝみ打抜きがぶ〳〵〳〵。ア、好い氣味や

と舌打し何面倒な此盃。其方へ戻すと投付ける土器よりも座敷の興。フシ微塵粉灰となりにけり。地師の御坊座興に取做し。詞御馳走のお持たせ客ぶり思ふ鬼若。土器を砕きしも心を砕いて學問を。勵み給へと言ふ事ならめ。詞いざ入學の讀書始め我が寺の作法にて。淺きより深きを知る心を示す實語敎。サア一句づつ鬼若から讀んで廻せと師匠の命。アノ〳〵詞いやまあ竹様梅様。二人の衆から始めさつしやれ。地然らば是から讀みまする。詞山高きが故に貴からず。樹有るを以て貴しとす。人肥えたるが故に貴からず。サア鬼若様。ムウおれかの。アノ〳〵それ〳〵肥えたるが故に土佛といふ。いやさうではなかつた今のはぢやらぢや。ほん〳〵のはアレ何とやら。おつと思ひ出したぞ。智有るを以て貴し。ヲ、出來た〳〵。其次は。其次言うて廻さう。地富は是一が百貫二が九十貫八十貫と。取つても付かぬ間に合口流石童の岩千代丸。フシ耐へかねて打笑へば。地たつた今うせた新べの弟子め。兄弟子が物讀み忘れたが可笑いか。笑ふ面を泣面にし變へてくれうとつつと寄り。此鬼若が握拳餓鬼めが頭を播磨の大掾。國の守何とも思はぬ兄弟子の威勢を見て置けと。言つてはこつつり又こつつり。是はと留むる稚兒達もフシ持餘したる力强。地園平見かね腕捻上げ。地ヤアこゝなあばれ奴。ム、ウ喰ひ付けぬ酒に醉うたな仕返しは三層倍。うぬは主人をかう打つたか。地いやかう打つたと刎返し頬框を續け打ち。握拳の相伴フシ旨いものかと嘲笑ふ。地性慶阿闍梨二人に向ひ。詞何事も愚僧に免じ眞平御免。形は大きう生れてもまだ年は十三歳。頑是なき慮外の段屹度折檻加へ申さう。地先づ〳〵あれへ御出であつて庭木の花を眺め給へ。心の怒りを鎮むるが則ち法の入學ぞと。示しの詞に隨ひてオクリ皆々打連れ奥に入る、フシ廻り逢ふ。地妹脊の道も菩提の種。主從三世の緣深き誠を今ぞ白髮の乳母。鬼次郎夫婦が介抱にて法の道連順禮歌。お京が肩に笈摺の親と賴みし。身のいたはり。地寺の御內に案內して御出家衆賴上げましよ。福井の乳母が參りしと鬼若様に仰しやつてと。言ふを聞付け乳母おぢやつたか好うおぢやつた。爰へ〳〵と招くにぞ。詞オ、ウ嬉しやそれに御座るか。コレ和子爰へ御座れ。お前に逢す人がある。なうお二人様此お子がお咄し申した鬼若様と。地語る内より姉のお京年月積る懷しさ。母の形見と思ふにぞ淚はら〳〵先立ちて。スエテ言ふべき詞も辨へず。地鬼若は不審顔此女中は何處のお人。何の爲に泣かしやるぞ。どうやら俺も泣きたいやうでフシ惡い〳〵

と差俯向く。詞ヲ、泣きたいは道理よの。何ぼわやくな心にも自然と知らるゝ親身の血筋。常々此方に語つて置いた姉様でござるわいの。ヤア地是が姉様か能う今迄に便りせず。憎いお人と思うたが今逢うて顔見れば。フシいとしうござると悦ぶにぞ。地世に持つべきは兄弟ぞや。他人が何とて其様な優しい詞聞かさうぞ。國の亂れに世を忍び弟ありと知りながら。逢はで暮せし十三年母様の命日に。兄弟對面する事も偏に佛の御利生。南無觀世音菩薩とフシ唱ふるも亦涙なり。地鬼次郎鬼若に打向ひ。詞我は其方の姉婿にて外ならぬ一門。是なる乳母が語るを聞けば。學問手習を疎略にし。惡あがきに心を寄せ師の御坊の教訓も。乳母が意見も用ひぬ由。不屆散々の行跡今までとは違ひ。某があるからは言ふ事聞かぬのら者は。手に懸けて討つて捨つるぞ。是は近頃迷惑。惡あがきした覺えもなし。地學問も手習もと言ふを打消す乳母の老女。詞これ〳〵まざ〳〵しい其嘘は何ぞ。今年は母御の十三年則ち今日が御命日。此方の爲には誕生日。彼や是やを幸ひにお髪剃して出家となし。自らも此白髪頭共に圓めて法の友と。地思ひし心を無下にして學問厭がり手習嫌ひ。日本一の不器用者と阿闍梨様の物語。聞く度毎に此婆が詞ア、氣の毒やうたてやと思ふが積つて此病。六つ七つの子供でさへ物も書けば物も讀む。こなたの年は十三なれどお袋様のお腹にて七年の春秋を重ねて生れし鬼若様。節分の祝ひの豆數ふれば十九歳。年に似合はぬ不器用は誰に似た因果ぞや。地經陀羅尼は愚の沙汰いろはにほへとも讀覺えず。紙費しの手習に鳥の足形釘の折。のたくり廻る蚯蚓にも劣りたる生れ付き。草の葉を食む虫だにも文字の形を殘すぞや。木々に囀る鳥だにもほう法華經と唱ふるが此方の耳には入らぬか。スヱテエ、淺ましさよと辱しむる。詞エツエ言ふまいと思へども始めて逢うた二人の衆。侮蔑が耻かしさに誠の心明して聞かす。如何なる過去の因縁やら兎角出家になりとむなく。所詮學問手習に不器用者といはれなば。出家にはよもせじと覺えた事も覺えぬふり。地知つたる事も知らぬ顔と詞も引かぬにまだぬけ〳〵と其拔口。詞學問も手習も不精な證據を見せるぞやと。懷中の守より一卷を取出し。詞サア此お經は何のお經ぞ。ヲ、普門品第二十五。觀音經ではあらざるや。そんなら見事此お經を讀む事が成りますか。ホホ、、、そんな事は朝はら〳〵。望みなら讀んで聞かさう。卽從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩。アこれ〳〵もう可ござる。常々耳に聞觸れ

て口眞似の空覺え。地お經はいからが此書付は讀めまいと。菅笠取つて差出せば。詞迷故三界城悟故十方空。サア其心は何と〳〵。ホヽ迷ふが故に三界悟りの心開くれば。十方共に空ならずやもとより西も東も一たい。地南北いづくにあらさらんと衆生に示す觀音力。頭に戴く此笠の深き心は福聚海。無量の罪も慈眼視衆生の。佛の惠みに消失せて。心の垢に汚れざる此笈摺は則ち三衣。胸にたへざる普陀落山淨土の臺も其身にある。廣大無邊の大慈大悲信ずべし〳〵と。掛に任せる順禮功德フシさも爽かに語るにぞ。地鬼次郎夫婦ははつと感心乳母は膝を丁ど打ち。有難や忝や其發明なお心では。物の嚙分聞入れも人には勝れましまさん。阿闍梨樣にも口止し今まで語らぬ物語。先づ〳〵是を御覽ぜと風呂敷包の箱取出し。詞是は是名を三日月と申して三條小鍛冶が鍛つたる薙刀。地此劍の因緣を語るが直に鬼若樣。御身の上の噺しぞや。詞扨も御父別當辨眞。男子一人なき事を深く歎きまし〳〵て。三所權現に立願あり。ふかき祈の驗にや或曉の夢の告げ。男子を授け與ふるぞと神託正にまざまざしく。枕に殘る此劍あら有難やと奇異の思ひ。神の御告に違ひなくお袋樣は御懷胎。ナウ姉御樣。お前は其時まだお四つの乳まされ。妾を乳母に附けられて育て參らす其内に。地お腹にまします告子の當る十月も持越して。一月二月三月四月半年經ち一年經ち。重る年月御產なく。詞不思議〳〵といふ内に御運拙き辨眞樣。源氏に由緣ましませば淸盛公の咎めを受け。平家の爲に御腹召され其身も家も亡び果て。地賴む方なきお袋樣妾が父を力にて。浮世に狭き御暮し數ふればはや七年。病氣の業かと取々の噂も辛き平家の無體。播磨の大掾廣盛が邪の政道にて。御痛はしや母君を刄に懸けたる其悲しみ。歎きの中の悦びと。御死骸の疵口より誕生。ありし御身ぞや。地腹に七年ましませば生れ立ちより猛々しく。妾も詞も恐ろしさに直に御名を鬼若と。付け參らせて此寺に隱し育てし十三年。扨こそ母御の命日が取りも直さず誕生日と。細細語るを半分聞き。何母人を刄に懸けしは廣盛が業なるとや。任せて置けと裾かい褰げ。奥を指して入らんとす鬼次郎抱留めやれ待て鬼若。詞今の話を聞くや否。駈出す怒りの面色仔細を聞かねばやらぬやらぬ。いやさ仔細も五さいもなし。奥に居る童めは廣盛が悴岩千代丸。地首引抜いて母上の追善供養と又駈出すを引留め。詞廣盛が母を討ちしは十三年以前にて。岩千代とやらが知らぬ事。其上に今爰で彼を討てば父廣盛が。風を喰ひ用心

せんは必定。父辨眞の生害かた〴〵誠の敵と言ふはな。平の清盛此鬼次郎も男の敵。殊更三代相恩の主君と頼む源氏の仇。地無念さは幾許ながら時節を窺ふ此順禮。御邊は又父母の跡弔ふが出家の役。先づ靜まれと制するにぞ。なう忌々しの出家呼ばはり今の話を聞く上は。愈坊主は嫌ひ〳〵。エ、殘り多い岩千代め命冥加な小悴と。奥を睨んで齒ぎしみにフシ無念涙ぞ道理なる。地老女はほつと溜息吐き。よしなき昔物語却つて出家の妨げと。なつたるは何事ぞやこれ鬼若様よう聞かしやれ。詞世の常の懷胎にて十月の苦み懸くるさへ。莫大の母の恩ましてや是は七年の。長き月日をお腹に持ち起居にも寢臥にも。心休まぬ身養生撵食に其身を苦しむる。辛さを何といはた帶。地結び初めたる親と子の緣は果敢なき身の最期。母は我子の顔知らず子は又二人の親知らぬ。不幸の罪は如何計りさりとては心を直し出家を遂げて下さりませコレけないお子ぢや賢いお人。おつと言うてフシ給はれとすかし。宥めて掻口說く。ヲ、地夫程坊主にしたがるからは。頭こぼたぬ其内に眼前敵の岩千代め。踏殺して腹癒えると立上るを何處へ〳〵。疎ましの氣違ひ様と半身叶はぬ腕にも。誠を盡す心の力流石にも振切らず。フシ放せ〳〵と留まらぬにぞ。詞久し振で捻り餅進ぜずば成るまいと。地太腿ふつつりあいた〳〵。詞是でもか。あいた〳〵。痛いなら聞入れて坊様にならしやるか。エ、無理な胴慾な。いかに言ふ事逆らふとて主を抓つて大事ないか。地主であらうが親であらうがお身のお爲になる事なら。抓るは愚か杖捧でも當てるを則ち忠義といふ。まだ此上にも腕白おしやればかうして置くぞと又ふつつり。理窟に詰められ身を抓められあいた〳〵と言ふより外。餘の返答は泣寢入身を打ち。伏したるいぢらしさ。主從誠の折檻を身にしみ〴〵と覺え込み。此鬼若が成長以後判官殿に附添ひて。安宅の關の謀主人を打つたる金剛杖。げに辨慶が忠心と譽れを殘すも此乳母が。育て方とぞ知られける。地性慶阿闍梨奥より立出で珍しや梛の前。詞聞及びたる鬼次郎殿。鬼若が成人嘸滿足に思そなう。仰の如く貴院の御慈悲惠みを以て人と成り。地兄弟一家の對面致す偏に御恩は忘れじと。フシ夫婦敬ひ悅べり。地老女は差寄り小聲になり。詞豫ての願ひ今日は鬼若様にも髮剃させ。妾も共にお剃刀戴かんと存ぜしに。例のわやくの髮惜み今すや〳〵と寢入りばな。地此間にごそ〳〵と頭髮剃すは師匠のお慈悲。御苦勞ながらと頼むにぞ。詞いやいやそれは無體の業。假令髮を剃つたりと

も心に納得あらざれば。發心とは言ひ難し。地折を見合せ教訓せばさのみ出家も嫌ふまじ。獨り目を覺すまでは寢させて置かれよ。先づ今日は老女の望み剃髪遂げさせ三衣を與へん。いざ佛間へ同道あれ鬼次郎殿。詞こは段々の御懇情御禮は詞に盡きず。それ女房仰せに任せ乳母を佛間へ介抱せよ。地某は此間に登山し觀音の寶前へ。札を納め歸るべしと禮儀を述べて立出づれば。二人の案内性慶阿闍梨フシ佛間に伴ひ入り給ふ。地時刻移れば岩千代丸人々誘ひ立出でて。ヤア詞是は鬼若正體もなき高鼾。實の鬼がうめくとも是程にはあるまいと。地笑ふを團平押鎮め。詞憎さも憎し臥さつた間に最前の意趣ばらしと。地積重ねたる机の上より硯取出し墨こつちり。握拳の返報に顔を草紙の握筆。額頬べらべつた〳〵當り次第に書汚し。是がほんの黒鬼ぢやと フシ思はずどつと打笑ふ夢に目覺す鬼若丸墨に汚れし寢惚顔眺めて吹出す稚兒もあり呀き笑ふに心付き。枕に置きたる件の箱蓋押明けて薙刀に。影を映して扨こそ〳〵。詞うぬめ等がほでてんがう力業では叶はぬと。大事の顔で手習ひ面白い〳〵。地兄弟子がひに教へてくれんと言ふ間もあらせず積置きたる。机文庫をぐわた〳〵ぐわた引摑んで打付くれは。ぱつと逃散る稚兒櫻嵐の庭の烈しきに。雪を飛せるおしまづき文庫は霰を降せる如く。姿は風神雷神のフシ出現あるかと凄じし。地さしもの團平支へかね。詞家來ども參れ參れ鬼若が暴るゝぞ。地あれ打据ゑよ縄懸けよと。呼ばはる聲に徒士若黨フシしどろになつて驅付くる。地騷ぎの音に驚きて性慶阿闍梨も出給へば。お京が肩に助けられよろぼひ出でたる尼衣。いづれも暫しと押留め。詞これ其處な腕白様。其形は何事ぞ。力業惡あがきが母御の供養になるかいの。地お稚兒達も御堪忍お侍も御了簡。賴上ぐるは此婆が袈裟衣に免じてたべ。お詫申すと姉諸共詞を盡せば團平怒つて。詞ヤア堪忍も了簡も法に過ぎた慮外奴。サア其處が御了簡言はゞ童の前途なし。取上げては大人氣ない。地大人の喧嘩になるものと言ふを打消し大人氣ないとは某へ當付けての一言か。エエ地面倒な梅干婆すつ込んでけつかれと。荒けなく踏飛せばあつと伏したる老の身體。お京ははつと驚きて抱きかゝへ撫摩り。心地如何といたはれどもはや言舌にあやもなくフシ息も次第に弱り行く。地鬼若見るより堪らばこそくわつと怒りの大音上げ。詞サア汝等が百年めから並んだ奴輩。一人も生けては歸さぬ手本は先に見せ置きたる。地机にかゝつてくたばれよと振上げて打ちなぐれば。それ遁

すなと團平が下知に群る雑人ども。向うて蒐るを事ともせずはひ打ちもどきの拜み打ち。めぐりあへば薙拂ふ机のすね骨。腕限り。打捲り〳〵追行く内も乳母これなう。心地は如何と立戻り心を付ける呼生ける。透間を窺ひ切付くる團平がそつ首捕へ。引擔いで打ちつくれば庭の井筒の立石に。身體は砕け死してげり。先づ一匹は片付けし小びつちよめは何處にと尋ぬる内に彷徨く岩千代。ヤアませ者めござんなれと引摑んで立つたる所へ。鬼次郎駈付けこれ〳〵鬼若。敵の悴といひながら御恩を受けし阿闍梨の御弟子。命を取つて益もなし最前の詞忘れしかと。めまぜに知らせば打頷き。姉婿の一言背くが厭さに助けてこます。赦免状は汝が面と筆押取り。助け歸す小悴一人。鬼若判鬼次郎判と戯れ書に岩千代は。顔を汚され突飛され命からがら逃げて行く。鬼若やがて老女に縋り。これなう姉様。乳母はもう死んで仕舞うたか。ハ、アツ南無三寶。父親にも母親にも僅た一人の大事の人。澤山さうに乳母々々と言うたが今では悔しい。なう最一度和子かと言うてたも。今から誰に抓られう甘える相手がないわいのと。さしもに荒き荒者が大聲上げておい〳〵泣き。足摺したるいぢらしさお京は我が身の悲しさと。鬼若が心の内思ひ遣つて正體なき。歎きに弱る鬼次郎も。心に攻來る涙の玉止め。兼ねたるばかりなり。やゝ泣入つたる鬼若丸ア、さうぢや〳〵。よしなき悔み愚痴の歎き。返らぬ昔の父母より重きは老女が末期の願ひ。法師の姿となるならば未來の迷ひも霽れなんと。廣庭の傍なる閼伽井の釣瓶汲上げ〳〵。もみにもんだる稚兒髷の。柳の。髪も我が顔の汚れも濟く曇りなき。母の形見の此薙刀父辨眞の剃刀を。戴く心の自剃ぞと一剃そつては棄恩入無爲。二剃三剃眞實報恩しやんと剃つたる法師振。うつすは末世に名を留めし播磨の寺の鏡井戸。ハ、ア我ながら荒くれ坊主。形を變ゆるは老女の手向心を變へぬは親の爲。法師と見せて武をかくす文字を直に武藏坊。父辨眞の辨の字と性慶阿闍梨の慶の字を。一つに寄せて辨慶々々。辨へよろこぶ法の友三衣も直に烏羽玉の。墨の法衣は形見ぞと押戴き〳〵。身に著したる玉襷是も恩へば最後まで。老女が突きたる桑の杖中風の藥引替へて。忠義武道の藥となる此薙刀の假の柄と。手巾を以つて括り付け。振擔げたる法師武者三塔の勇僧と世に歌ひしも理なり。性慶阿闍梨歡喜あり法の道にも武の道にも。叶ふは忠義孝行心げに賴母しき初發心。急げや急げ都

の門出。ハア有難き師匠の恩循此上にも頼み置く。老女が亡き跡弔ひの御法は爰に書寫の山。順禮修業の鬼次郎が是より直に行く先は。丹後の成相女夫連都に歸り尋ね逢はんが。先づそれ迄はさらば〱。さらばと別れ行く足も。跡に引かるゝ老女の名殘お京が袖に涙の瀧。岸打つ浪は三熊野の那智のお山の馴染をも。爰に捨置く生死の道悟りを得たる辨慶が。心は清き薙刀も義心も放さぬ荒法師。げにも誠に源氏の礎。十六武藏辨慶と筆にも。傳へ興じけり

第三

足は下にあつて賤しけれども不淨の役に與る事少く。手は上に位して尊けれども不淨の役を請くる事多しとかや。武臣平の淸盛公保元に惡左府殿の亂を鎭め。平治に信頼義朝を討ち自然と宇宙を掌に握り。左右を經ずして太政大臣におし成り。輦に乘つて宮中を出入す。人の恐るゝ事惡鬼厄難の如く。花族も英才も面を向へ肩を双ぶる人もなく。威權一天に出づる日の。今巳の時と輝けり。播磨大掾廣盛召に依つて參上と手をつけばぐつと睨付け。呼ばずとも未明より出仕すべき身を以て。呼ばれながら遲なはる不屆千萬。豫々汝に言付けし。武藏坊辨慶めが所在まだ知れずや。次に鬼一法眼が。家に傳へし虎の卷今に於て差上げず。彼奴が返答如何に〱と嚙着く如く。フシ以ての外の不機嫌なり。さん候鬼一法眼は病中。先達て申上ぐる通り病氣本復次第お望みの虎の卷。古例の如く式法を以て御目に懸くべし。さなくては罷成らずと取つても付かれずと。聞きも敢ず短氣の大將ヤア手溫し〱。其鬼一めは元來源氏の侍。義朝滅亡の後首打放す奴なれども。代々虎の卷を預りしばかりに命を助け。重盛と宗盛を初め。一門の若者どもが師範に附け莫大の祿を與へ。平家重恩の身を以て何の古例格式所。病氣で脚腰が立たずば。膝行つてなりとも持つて來いと何故言はぬ。イヤ其段はぬかり申さず。左様の返答廣盛は得言ふまじ。直に申上ぐるか。虎の卷を御目に懸くるか二つ一つの返答。今日中と申渡し候故。皆鶴といふ娘を以て。ともかうも御返事仕らんと申せしかば。何れの道にも追付參上仕るべし。扨君は辨慶ばかりお尋ねなされ候へども。外に鬼次郎鬼三太と申す兄弟の曲者あり。兄鬼次郎は辨慶が姉。樒と申す女に緣を組み熊野に育ち。源氏に心を傾け當家を狙ふと承る。此兄弟鬼一法眼が弟と申す故。詮議の好き手掛りをお次まで召連れ候。此者は笠原湛海と申す。鬼一が兵法の高弟にて

抜群の強力不敵者なり。地彼を召出され詮議仰付けられば。鬼次郎鬼三太は申すに及ばず辨慶が在所も。委細相知れ申すべしと言上すれば。それ呼出せと召に随ひ湛海は。やがて御前に立出づる。詞仔細は廣盛に聞きつらん。地鬼次郎兄弟辨慶が在所知るべき。分別あらば語れ恩賞せんと仰せける。詞ハア分別と申して。御前歴々の御智惠に及ぶべくも候はず。我等鬼一法眼一の弟子にて候へば毎々入込み申せども。深く包み隱し候か是まで鬼次郎鬼三太と申す弟ありとも承り候はず。地君豫て聞し召さん。鬼一法眼皆鶴と申す娘ばかりにて家を知るべき男子なし。弟子は子も同然殊に某は一の弟子。詞家督を讓りさうなものなれども左様の氣振もなし。折々皆鶴が方へ戀慕に事寄せ玉章を以て言入るれども。地一度の返事も致さずと言はせも立てず廣盛。詞これこれ湛海。其跡式の事は御前の聞召す事でなし。地鬼次郎鬼三太辨慶を。搦捕る分別あらば申上げよ。詞いやおせきなさるゝな。是を申上ぐるが則ち分別の手懸り。御權威を以て皆鶴を某に娶せ。鬼一が跡式仰付けられなば彼の家に入込み。智謀計略を以て。早速鬼次郎鬼三太辨慶を召捕り。地差上ぐべしと忠節に我意を差混ぜ申上ぐる折節。鬼一法眼が名代として。娘の皆鶴參上と。披露の跡より。さと薫る。フシ衣の追風。天津風姿は乙女にかはらねど。初めてといひ女の身。君の御前へ出る事は流石に面耻かしく。薄氷を踏む思ひにて。心空飛ぶ皆鶴姫フシ遙か。末座に畏る。思ひ懸なく湛海恂りせしが立寄つて小聲になり。詞今も御前へそもじが噂申上げたり。何事の出仕氣遣ひ千萬。心得ぬ事あらば後楯は某。女夫連で來たとじつと心を落付け給へ。斯様の所で出逢ふも縁の深さ。地心が届いたと思ひ給へとフシほのめけば。むつとせしが御前といひ。人目うるさく摺退けば猶摺寄る。廣盛見かねこれ〳〵湛海。御前といひ御用あつて參る女に。不作法至極罷立てときめ付くる。淸盛公奥歯門歯一つに噛出す高笑ひ。ハ、、、。ア、我前とも憚らず。うい奴能く濡れた。詞口說き畢せたらば淸盛が媒人鬼一が跡取。地又口說き畢せずば鼻を殺ぐと御戲れ。湛海は順風に帆。戀の追風便り好しとコレ皆鶴。詞度々の文に言ふ通り。夫婦になつて給はれば詞要らずに師匠の跡もしてやる。けれどもそもじが應と言はぬ故。地跡も取られず然れば身上の敵戀の敵。君は如何なる敵の末ぞ。思ひ忘るゝ隙もなや。エ、因果めとフシ抱き着く。ヲうるさやと突退け押退けずんと立つ。どつこへと裾を扣へ。ぴんしやんなさるゝ程。

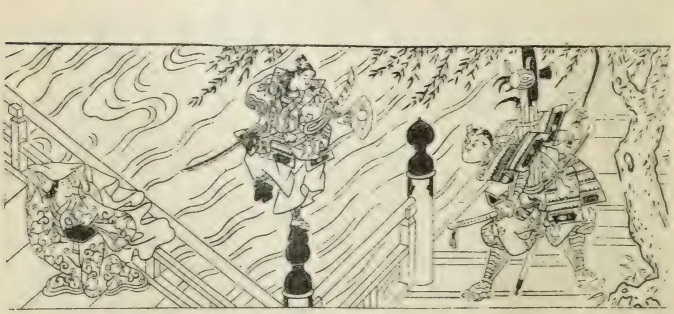
猶戀風が身に沁んでぞつとする。つい一口のお返事〳〵。詞そんなら長うは言はぬぞえ。つい一口に厭でござんす思ひ切らしやんせ。又父上の家督の事も外に男の子とてはなし。假令厭と言はしやんしよが御器量次第で此方から頼んでも讓らいでは。申すも愚かながら。我が父の傳へ及びし虎の卷と申すは。家を齊へ國を治め天下を平にする基。其器量にあらざれば。此書を傳ふる事難しと豫々父の物語。地まだ打太刀の顫ひも止まぬ身を以て。鬼一法眼が家督には。些と慮外でござんフシせうと遣込むる。詞ムウ聞えたそもじが其心故戀も叶へず。鬼一殿が聟にもせられぬな。地サア御前にて太刀打し。湛海負くれば聟にもならず戀も叶はず。又打勝てば否でも應でも我が女房。いざ立上つて勝負々々。ハテつがもない女子對手に何の勝負。御無用になされませ。いや〳〵御前に於て勝負次第。聟になるかならぬか緣定め。慮外ながらお小性衆。長刀竹刀をお貸下されと乞出し。サアサア勝負と フシ氣を急いたり。此上に辭退せば父の名までも汚さんか。力なしお對手にと。怯めず臆せず立寄りて。御端戸の引手の懸緒かなぐり取り。上着靜々脫置いて女手業のしやん〳〵と。結んで肩にふはと懸け振袖絞る玉襷。長刀搔込み突立上り心を配る身構へは。フシ凛々しくも亦しをらしゝ。地物に動ぜぬ淸盛公そぞろいで見え給へば。伺候の人々堅唾を呑む。湛海苛つて聲を懸けはつしと打つを双向けて受け。引かば入らんと位を取り互にためらふ虛々實々。開いて解けばさつと引き。又打懸ける獅子奮迅沈んで拂ふ虎亂入。透をあらせず飛違へ込む手。薙ぐ手十文字雙方祕術を盡すと見えし。とにかく長刀湛海が。眉間のかねを些とも去らず。詞コレ〳〵是が眞劍なれば。首か袈裟か立割か。地覺えてかと。押取直し鐵にて。疊懸けて打立てられ初めの詞の耻知らずヤア〳〵今のは疊に辷つて。思はぬ負と口減らず倒つ轉びつ逃出づれば。人々思はず聲を上げ。褒めつ笑うつ取々に フシ暫しは鳴も鎭まらず。地淸盛興に入らせ給ひ。詞女なれども流石鬼一が子程あり出來いた〳〵。して所望せし虎の卷持參せしかとありければ。地はつと答へて持たせし箱を取出し。恐れながら祕密の書。密に御上覽と差上ぐれば。詞手にも取らずから〳〵と嘲り笑ひ。神道には神祕と言ひ。眞言宗には密法などと馬鹿盡して。人に包み隱すは何の痴事。祕密する程の大事ならば猶普く人に知らせ。面々に心得るこそ世の寶。密に見よとは狹し〳〵。聲一ぱいに高う讀め聞かうするはとの給へば。ハア尤な御意なが

ら。地隠すには仔細ありこそせめ。是非密にと言はせも立てず播磨の大掾。コレコレ女。詞御諚を返す恐れと言ひ斯く言ふ廣盛を始め。此座の人々誰か君の爲命を惜む者なければ。聞いて些とも苦しからず一越調をかすり上げて高う讀め〳〵。地げに此上は辭するも結句慮外かと。眞紅の紐をとく〳〵も。卷押披き聲を上げそれ。兵法は。國の大事生死の境。存へ亡ぶる基なり。さるに依つて唐土の明主。月の夜雪の美景にも御心を樂ます。仕臣を集め問答し。兵書の奥義を極め給ふ。されば其書は。文武龍虎豹犬の六韜。六十一の。太公望の答を初め。所謂孫子呉子。司馬法大宗問答蔚繚子三略の書を宗として。フシ七ツの文の。ことわざも上を崇め コハリ下を撫で。惡と知つて爲す事なく。善として捨てされば自然と。天下 ナホス太平なる 地これ三。略の敎なり。詞クセ

然るに平相國淸盛公此敎を守り給はず一院を鳥羽に苦め奉り。民を虐げ惱亂し色に耽り酒に長じ當家を亡さんと企てし。左馬頭義朝が妻。常盤を深く地寵愛と讀立てさせず廣盛。これ〳〵女そりや何を讀む。詞義朝が後家常盤が事何憚りの有るべきぞ。君にも十年餘りの御寵愛ちと古臭う思召し。一條大藏卿長成といふぬるま公家へ突付賣の嫁入近日祝言がある筈。地猪口才を吐し酷い目に逢ひをらうと肱を張つてきめ付くれば。はて是は自らが作つて讀むには候はず。此卷物にある事を高う讀むが自らが役皆樣は聞くが役。謹んでお聞きなされませ。詞常盤を深く寵愛し貞女の道を失はせ。其身も不義の名を得給ふ。恐るべし〳〵。平家は彼が夫の敵。折がな仇を報ぜんと心に劍を含まさらんや。子として是を歎かざらんや。諫めんとすれば親子面を合すに忍びず一つの卷物に記して是を捧ぐ。地孝子小松の中納言平の朝臣重盛。父の爲に敎訓狀



件の如しと讀終れど。初め高うとどよみしも後は呼く人もなく鎭り返つて居たりける。讀出す半ばより清盛公の面色。黒うなり赤うなり澁面鼻に息つがせ。フシせき上げ〲見えければ。地廣盛機嫌を察し遣り進出で。詞是はけうがる惡口。お腹立御尤も千萬ヤイ女。賢人と呼ばるゝ小松殿。他人の汝を賴み。斯る落書を差上げ給ふ筈はなし。ム、ウ聞えた。必定雑人輩が。小松殿と名を借つてお目に懸くるに擬ひなし汝も同類。女なりとて赦されず何としてくれんと。掴み着かんず其勢ひ案の外なる巻物に。皆鶴も讀みは讀みながらだくつく胸を押下げ〲。詞是は思ひも寄らぬお咎め。最前お出の砌。病氣本腹致さずば。是非虎の巻は御目に懸くまじと申切つて候へども。其返答直に申上げよとの御難題。家内の行歩さへ叶はぬ鬼一なれば。私を以てお斷りの爲出仕致す次の間にて小松様。是は日本の虎の巻御目に懸けよとお渡しなされた。外の人には頼まれも致さず。委しき事は小松様に。地お尋ねなされと言分くれば頭を掻き。エ、子の身として親をひづめ。したい事させぬも小松殿の生れ付き。清盛公の女好もお生れ付き。常盤が甕死りもせず。貞女を背いたは常盤が助平と言ふもの。小松殿を日本の賢人と人は言へども。此廣盛が目からは。日本一の不孝人ぢやと存ずる。恐れながら御前にも必ず是に懲りさせ給ふな。此後も御目にさへ入らば。天子宮方のとつておきでも只置給ふな。大將がしたい事せいでは地此日本が治らぬと。機嫌に入る事掻集め。持つて参れば面色和らぎ言ふにや及ぶ。詞子の言ふ事を聞入れるは親馬鹿と言ふもの。言はゞ言へ用ひぬ〲。兎角廣盛でなければ夜が明けず。地鬼次郎鬼三太



辨慶めが事は湛海に言付け。兄なれば先づ鬼一めから今日中に詮議せよ。詞ヤア女。古例も格式もへちまも要らず。虎の卷は明日中に差出せと親に言へ。萬一辭退せば屹度計ふべき旨あり。地歸れやつと御座を立つて入給へば。皆々 フシ御前をばらりと立ち。ハルフシ皆鶴一人は一生の。阿波の鳴門を越ゆるとも。よも此上は嵐吹く。肌には。汗の立つ波や。袖を絞りて 三重 歌井戸と釣瓶はヨヤヨヤヨぬれようた中を。人が水汲みや音に立つトヨへ。水と柄杓はナヨヤヨヤ〳〵。洩らさぬ中を。人が ナホスフシ滴して濡と知る。地今出川に名にし負ふ。吉岡鬼一法眼が一構へ。非番の下部がはき掃除。奥の花壇に色榮え勝る菊の品々花盛り。打水玉を置く露に フシ擬へて虫やすだくらん。ハルフシ中居の木幡。走り出で。詞これ智惠内殿。お姫樣お歸りの遲いをお待兼ね。

氣が盡きた花御覽なされうと。お居間の庭から殿樣が爰へ御出でなさるゝ。地花壇の傍へ床几を直し。此褥敷いて置かしやれと フシ言散して駈入れば。地何殿が御出でなさるゝ好い時の掃除仕當てたと。勝手へ走り引抱へて持つて出で。何處に置かうぞ此處らに床几 詞押直し。ア、結構な蒲團ぢやな。不斷此上に坐つて冷えぬやうになされても。發る病は是非がない。寧そ我等がやうに寒晒しの臀が勝しかいと。地ぶつゝく内に駒下駄の音聞ゆれば。ソリヤ御出でなされたと逃出づる。切戸の内より女中の聲。これ〳〵智惠内何の御用のあらうも知れず其處に居や。ナイ〳〵〳〵と フシ小蔭に隱れ畏る。地吉岡鬼一法眼は病苦忘るゝ氣晴しと。女小姓に介抱せられ心勇みの駒下駄に。石踏分けて花畑見廻し〳〵。詞ホ、ウ咲いた咲いた。此花開いて後更に花なしと思へ

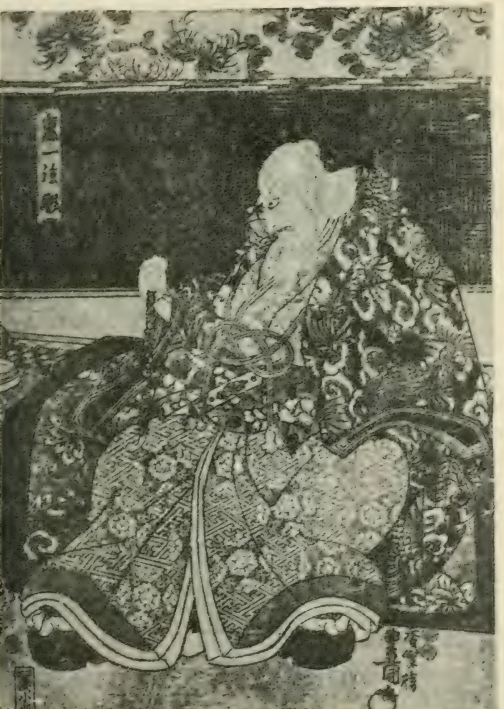
ば。取分け色香の身にぞ沁む。これ此菊は打水に露を含みて濡鷺や。斯程優しき花の名を誰が石わりと名付けけん。地主殿司と御垣守二つ一つの大内山。天が下には隱れなき花の笑顏に打着せて。フシ名はけおされぬ。京小袖。地例へば花の物狂ひ羅生門に住む鬼なりとも。紐解き初むる大般若御法の菊を見る時は。心和ぐ敷島や。されば彭祖が七百歳。姿を變へぬ若やかも。此德なりと菊の露我も齡を延えんと。フシ暫く眺め佇めり。地機嫌好く床几に腰打掛け。詞ヤイ女ども。庭の掃除は智惠内めか呼べ逢はう。地ソレ智惠内殿召しまするはつと應へて立出づる。詞花壇には塵一本も置かず。目の前の掃除は丁寧なれども。松楓白膠木などの邊は。落葉も掻かず捨置きしは心あつてか。但し又日通りでないと思ふ不精か。陰日向あつては後暗し。地以來を嗜み奉公せ

よとありければ。詞是は殿の御意とも存ぜず。熊野の奥山家に無骨には育ち候へども。御奉公に陰日向は仕らず。總じて塵埃と申す物も。一つ二つ落散ろばへば其座を汚し。見苦しく候へども。又塵塚に山の如く集る時は。多くても見苦しからず。それ故花壇の塵は取捨て申せども楓白膠木などは。落葉を御覧なさるゝが一興と存じ。地態と箒は入れ申さずと申上ぐれば。流石の鬼一こりや尤も。詞花壇の。位に依つて奇麗に掃除し。落葉の庭は落葉を愛して落葉を拂はず。ム、ウ名將は士卒の賢愚。得失をよく辨へ其器に應じて使ふといふ。地軍法の奥義も其理に同じ。尤も／＼近う寄れ小分別も有る奴を。何故智惠ないとは名付けたな。殊更熊野育ちとあれば懐しゝ／＼。詞我も熊野の山家に鬼次郎鬼三太といふ二人の弟あり。扨は殿のお生れも熊野の山家か。

イヤ／＼弟も我も出生は都なれどもな。兄弟引別れ。弟が熊野に育ちし其起りは。我親もかくいふ鬼一も。本は源氏譜代の侍なれども。六條の判官爲義左馬頭義朝。御親子の中好からず弓矢の道に背き給へば。地源氏の滅亡遠かるまじと見つけし故。末の奉公せさせんと。三歳五歳の子を母に預け誡めを殘し。熊野の山深く忍ばせし其子は今の鬼次郎。鬼三太といふ我が弟。又某を近く召され。汝はともかくも世に存へ源氏の成行く末を見屆け。大將の器に備り給ふ人あらば。傳來の虎の卷を傳へよと。地其身は御親子の御身持を憤り　フシ病の床に。みまかり給ふ。詞ヤ思はぬ昔語に涙が零るゝ。地病の障もう語るまい。あなかしこ人に洩すなとフシありければ。地我等其鬼三太清悦と言はんとせしが心を鎭め手を支へ。詞お家に在りながら初めて承つたる。御兄

弟のお別れさこそ思召すらん。扨只今にも彼の鬼次郎殿鬼三太殿。それと名乘つて來り給はゞ如何し給はん。恐れながらと伺へば。夫は鬼次郎鬼三太が心にあるべし。父の遺言で候などと源氏に心を傾け。平家に敵たふ心なれば縛り括つて淸盛公へ差上ぐる。何故と言へ。鬼一が今の主君は淸盛公。平家に身を任する我なれば弟とて用捨は成らず。言はぬとても知れた事。地もう根問ひ葉問ひせずとも汝も花を見よ。女ども久しく煙管に對面せず。一服喫んで見ようか。ソレお煙草と御意遊ばす早う／＼と取傳へ。煙に欝を吹混ぜて　フシ花に餘念はなかりけり。地爰に源氏左馬頭義朝の八男牛若丸。御母常盤の懐を離れ鞍馬山。東光坊の御許に忍びて成長り給ひ。十六年の春も過ぎ蔦の錦は着つれども。何時會稽に飜さん袂も狹き下司奉公。心は天下を取拉ぐ鬼一

を主に田面の雁。翅に懸けし文ならで直に申上げたき御用。虎藏罷歸りしと　フシ切戸の口に蹲へば。地娘は未だ歸らずか何の用事氣遣はし。近う寄れ言へ聞かんと氣をせけば。詞さん候姫君樣。清盛公の御前をお立ちなされ私を召され。是より直に重盛樣へ往かねば成らず。父上の嘸お待兼ね先へ歸り。清盛公の仰には。病氣を構はず虎の卷は明日中に差上げよと。以ての外の不機嫌にて。鬼次郎鬼三太と申すお尋ね者。是は殿に御縁ある御方故湛海を追付け遣され。嚴しく御詮議ある筈と。地直に申上げよとの御事と聞きも敢ず。なに鬼次郎鬼三太が御詮議。ハはつと驚く面色にてと胸ついて見えければ。智恵内は我身の上悔りせしがこれ虎藏。詞其鬼次郎鬼三太と申すは殿の御兄弟。何故の御詮議。都には金賣橘次橘内といふ者あり。地若しそれが名を聞き違へ。鬼次郎鬼三太と申し誤りではないかと。念を入るれば法眼。詞いや／＼虎藏が誤りにあらず思ひ當る事あり。彼の兄弟豫て源氏に心を寄すると聞きしが。必定其詮議ならん。それはそれで知らぬで済む。ヤイ智恵内。それ虎藏めを是で打て。エいやさあ打つて／＼打据ゑよと。地ついたる杖を投出す。とは何故と



仰天すれば。詞ヤア何故とは是程の不奉公氣が付かぬか。高きも賤しきも奉公する身は。それノ\に勤むる役あつて其一色に疎からねば。不調法者とは呵られず。先づ虎藏めが今日の役目は。娘が初めての出仕。草履摑むが役ならずや。此お使は先拂の衆か押への衆に仰付けらるべし。重盛公へ御參あらば。猶以て御草履仕らんと何故言はぬ。六波羅の玄關前一門の御所の案內。とつくと見覺えすはと言はゞ晴の草履。引摑まんと思ふ性根はなく。役目を捨てゝ歸りし不忠者。打てと言ふが誤りか。ア、イヤ皆御尤も。其氣の付かぬは年端のいかぬ故御堪忍これ虎藏罷出でお詫び申せ。言ふなノ\詫言聞かぬ。誤りでなくば智惠內打て。地ハアはつと杖は取りながら打ちかねて立ちかねる。詞ヤレ打て。ハアヤ何故打たぬ。ハア。地汝も主の詞を背くか。詞いや背きは仕らず。仕らずば打ちのめせ。地ないノ\とばかり立つつ居つ兎角フシえ打たず身を跪く。詞其杖よこせ。主の詞に背くは虎藏が不忠の百倍。地汝から叩きのめらしてくれんと杖振上げ給ふ所へ。皆鶴姫立歸り是はと縋り留め給へば。ヤア放せノ\打殺すとあせり給ふを抱留め。虎藏を先へ戻せし無調法の起りは私。お



呵りなさるゝ程身も世もあられぬ御堪忍。イヤ湛忍せぬ是非御堪忍と詫ぶる所へ表使罷出で。詞御直談ありたきとて湛海様御出なりと。地案内につれて座敷に出で。詞是は先生承りたるより御病氣軽さうで先づ大慶。庭に下りて何事のお世話なさるゝ。さればノ\家來めが不屆故地折檻を加ゆると。聞きも敢ずそれ御覧なされ。詞先生は御病氣皆鶴は女儀の事。確りと致した跡取がない故に。家來どもがのさばる。弟子は子なり某を皆鶴姫に娶せ。名跡を譲り給へとかねノ\申すは爰の事。後日の見せしめ其家來め一々首をお並べなされ。ヤ是は内證。清盛公より急御用仰付けられ參つたり。詞潜に御意得たしと述べければ頭を下げ。師弟の義は内證御用とあれば上使同然。爰は端近奥にて承らん。女ども御案内申せ娘來よと手を引かれ。二足三足歩みしが振返り。詞ヤイ汝等都の内は奉公構ひの暇をくれる出てうせいと。地主命重き飛石をフシ送り傳ひて。奥に入りにける。フシ跡見送りて。牛若君ヤイ鬼三太。詞汝も我も此姿に身を窶し。あらぬ名を付き此家に入込みしは何の爲。六韜三略の虎の卷を傳へ受け。亡父の敵の平家を亡し。再び源氏の代に飜さん爲ならずや。鬼一が打て叩けと怒りし時。何故我を打据ゑざりしぞ。地打たれても踏まれても爰に足を留めてこそ。此虎の卷を手に入るゝ期もあるべけれ。此家を追出され立寄る事も叶はずば。何時本懐を遂すべきスヱテ無念。至極と拳を握り心をフシ苛つて見え給へば。地鬼三太大きに恐れ入り御尤もの御悔み。詞其時其心の付かぬにては候はねども。勿體なや譜代相傳の主君を打つは天を打つ。何處に杖を當參らすべき。打叩かぬを科とて御刃には懸るとも僻事とは存ずまじ。地え打ち叩かぬ無調法は眞平御免下さるべしと。スヱテ土にくひ着き詫びければ。地夫も尤も君も尤も兎に角に。主も家來も斯程まで源氏の運の拙さはと。主從目と目をフシ見合せて忍び。歎かせ給ひしが。地鬼三太はつと心付き。詞申しノ\今日清盛が館の仔細。虎の卷を明日中に差上げよ。鬼次郎鬼三太が詮議に湛海を遣らんとな。アレ奥に湛海が密談は極つて我等の身の上。地うかノ\泣いて居る所でなし。我等も分別君も御思案なさるべし。詞いやさ此期に及び思案とは手緩しノ\。地虎の卷を納めたる寶藏の案内我よく知つたり。忍び入つて盗み取らん汝は八方に眼を配り。咎むる者あらば一々に切伏せ湛海ぐるめ。鬼一とて用捨すな心得たるかとの給へば。詞いやノ\鬼一を討つ事は御免なれ。御免とは怯れたか。いつかな怯れは致さねども。地鬼一は我等の兄な

れば御免と申すと言はせも立てず。ヤア義に因つては親兄の首を取るも勇者の習ひ。それ知らぬ和主でなし。但しは鬼一と心を合せ牛若を追出さん術よな。詞こは勿體なき御仰せ。名乘合ひし兄弟ならば討つに心も怯れまじ。此鬼三太を弟と知らぬ兄を。手に懸けんは兄弟の道にあらず。地恐れながら鬼一は君に振向け吾等寳藏に忍び入り。虎の卷を奪ひ取つて奉らん如何に／＼。ヲ、尤もと頷き呼き身を堅め。心を定むる何時の間に。後に立つて細々を。聞いて驚く皆鶴姫何心なく二人の衆。詞まだ爰にかやとありければ二人は大きに敗亡し。いやもう爰にと返答も フシ詞しどろに膽騷ぐ。地皆鶴するすると立寄りて若君の手をぢつと執り。詞父様が暇遣らしやんしても。此皆鶴が命に替へて詫言し外へは遣らぬ。是程に思うて居るに難面いぞや。地あの人を頼んで雨の降る程やる文に。よう返事しやらぬの。但しは女に惚れらるゝが嫌ひか。嫌ひなら此様に何處も彼も。惚れられるやうに可愛らしう何故生まりやつた。其方を退けて殿御とて。外には持たぬと心で心括り枕の假寐にも。忘るゝ隙は フシないわいの。地父様は湛海殿と密々の物語り。女どもにも合點させ奥には些とも氣遣ひなし是智惠内。仲人は宵の程コレ其方向いて居や。サア今の内つい寢たい フシ來てたもいのと引立つる。地あれ惡い事ばつかりと手を捩放し。お前はお主拙者は家來。數ならぬ身を夫程に。可愛がつて下さるはなう智惠内。忝い事なれど冥加ない御赦されませ。詞イヤ／＼數ならぬとはいかい僞り。智惠内といふは叔父の鬼三太様。お前は源の牛若君と。地言ふ口を鬼三太駈寄りちやくと押へ動かせず。詞扨は最前より立聞し夫と知つたるな。外へ洩れては大望のお妨げ。叔父姪初めての見參。地不便には思へども君の大事には代へられず我手に懸くる。戀慕ひし君の爲捨つる命惜かるまじ。未來の契りを觀念せよ南無阿彌陀佛と取つて引寄せ。刺殺さんとせし所へ湛海透さず飛んで出で鬼三太を引退け突退け皆鶴を後におし圍ひどこへ／＼。詞湛海が身にも代へぬ大事の此姫を殺さうやさうは成るまい。牛若鬼三太と己と名乘る業曝し。清盛公へ注進申し御褒美には此娘を抱いて寢る。地者ども館の四方を圍み取逃すなと皆鶴を引立て駈出づる遣過して牛若君後より拔打に。ばらりずんと切付け給へば大袈裟斬といふ物に フシ二つになつてのたれ伏す。詞ヤア／＼鬼三太。皆鶴を殺害するに及ばず。牛若直々鬼一に逢うて仔細を語り。虎の卷を渡せばよし。否と言はゞ百年目。地鬼一兵衛の秘密を揮

ふとも。我亦鞍馬山の僧正坊に習ひ受けし。奥儀を盡さば手の下に討取るは案の内。鬼一法眼は何處に在る源の牛若對面せんと呼ばはつて。詞間毎の戸障子蹴放し蹴放し踏込み給ふ一間の内。奥は鞍馬の僧正坊飛行の翼天狗の像。忽然と現れ給へば。ハハハアツと飛退り思ひ懸なや師の御坊。何故來臨し給ふぞと謹み頭を垂給へば。皆鶴姫も鬼三太も渇仰希代の思ひをなし フシ恐れ入つてぞ敬ひける。地僧正團扇を上げ給ひ善哉々々牛若丸。姿も心も荒天狗を師匠と賞翫し給ふも。平家を討たんず志ヲ、殊勝しや健氣なり。詞いかにも兵法の大事を傳へ。亡父義朝の仇を討ち。會稽を雪がん御身となり給ふべし。地是までなりや僧正坊が通力自在を見給へと。面鬘をかなぐり捨つれば誠は鬼一法眼なり。人々ぎよつと膽を消し是も天狗の障碍かと フシ呆れ果てたるばかりなり。地鬼一靜々と立出で。平懐に申すも憚りある昔語りなれども。詞君は未生以前の事なれば知し召すまじ。元來鬼一が家と申すは。君の御先祖八幡太郎義家公に宮仕へし。天野の何某。八幡殿鎭守府の將軍となつて。奥州を知し召されし時。本吉長岡の二郡を領地に賜り。本吉長岡の下の文字を取つて吉岡と改め。大江の匡房卿より傳へ給ひし。六韜三略の兵書を預り。代々公達の軍術の師範となり。御父義朝公まで奉公し源氏を離れず。今鬼一が傳へし虎の卷と申すも。彼の六韜三略の書の御事なり。地されば平治の戰は君も聞召し及び給はん。御父義朝公淸盛に打負け給ひ。野間の内海にて御腹召され御公達も散り〴〵に。或は討たれ或は流され。是ぞ源氏の太將軍と。面を出す フシ人もなく。地最前鬼三太には物語りし。父が遺言恰も符契を合せたる如し。夫に引替へ平家は日本半國を領じ。高位高官におしなり勅命と號し。一門兵法の師範たるべしと我を招く。詞多病なり參るまじと申切つて候へども。違勅の科を蒙る詮方なさ。



従ふとなく平家に身を寄せし。十年餘りの年月虎の巻を傳へよと。權威を以てはたれども兎角揩拔け。あはれ源氏の公達に器量ある人もがな。父が遺言違へじと窺ふに。右兵衛佐頼朝は蛭が小島にましまして思ふに叶はず。君鞍馬山東光坊の許にて生長し給ひ。毘沙門堂の邊の岩窟にて。兵法修行し給ふと聞き飛立つ如く登山し。（地）密に人相を窺へば天性大将軍の相まします。嬉しや秘密を殘らず傳へ。冥途の父が魂魄を悦ばせ。我が本意を遂せんと思へば。既に一門の師匠と仰がれ。平家の恩を蒙る身となる恥かしや。（詞）平家の祿を食む鬼一が。源氏に大事を傳へんは俗に言ふ内股膏藥。（地）彼方へも附き此方へも附く二心と笑はれんか。よし身の誹りは厭はねども勿體なや。六韜三略の此道まで。瑕を付けん悲しさ。八萬四千の軍神天地の照覽も恐ろしく。（詞）何卒

鬼一といふ名を包み。敎へんものと肺肝を碎き。娘にも宿願ありと僞り。毎夜々々鞍馬山に分入る。其頃君はまだ十歳に足る足らずの。稚き御目を晴ます鞍馬山の大天狗。僧正坊と名乘つて對手になり。兵術を授け敎へしを。眞實の天狗と（フシ）思ひ給ひしか。（地）是この面を被りし僧正坊。誠は鬼一法眼が假に似せたる形なり。必ず／＼かく言ふ咄は此座限り。君天下を知召しての記錄にも。牛若が兵法は僧正坊といふ天狗



に。習ひしと書認させ。末世末代鬼一といふ名を深う包み隱してたべ。くれ〳〵賴み存ずると初めて明す物語。驚く心に先立ちて若君淚止めかね。有難しとも忝しとも禮に對する詞はなし。鬼一殿と大地に額をフシ摺付け給へば。地鬼三太心は飛立てども兄の心を量りかねて出もやらず娘はさかしく。詞夫程のお心ならばとても事に虎の卷を。地牛若樣へ進ぜて下され父樣と。フシ背撫摩り機嫌取る。詞いや〳〵平家の糧を食ふ鬼一が。今とても源氏へ地虎の卷は讓られずと。懷中より取出し。詞ヤイ娘是は汝に讓るぞ。若い奴の事なれば心を懸ける方もある筈。地是を土產に思ふ方へ嫁入せよとて手に渡せば。嬉しさ親の前とも恥ぢず豫て心を繋ぎ置く。牛若君に奉り合點かやいのと目で知す。若君押戴き懷中し。此年月僧正坊となつて劍術を敎へ。今又息女に虎の卷を與へ給ふ。牛若娶り夫婦となり。奧義を授かる上は平家を亡し。世を源に復す事掌に握つたり。此身を百千に碎いても此大恩。何時の世に報ずべき鬼一殿と。スヱテ淚と共にの給へば。詞ヤア紛らはしい鬼一は平家。源氏方の禮を受けて立つべきか。地只今何時までも天狗々々と言うてたべ花聟殿。世に便なき天狗が娘。本フシわけて御不便賴み入る。やい鬼三太。虎藏を牛若君とは疾く知つたれども智惠内を鬼三太とは最前見付け猶も試し見んと思ひ。ぶて叩けと無理を募り呵りしは。眞實を知らん爲。都の內奉公構ひの暇をくれると云ひし心。今思ひ知つたるか。地別れしはおこと三歲面相を見違へたり。母の御事も傳へ聞く。深山の奧に育てども心の花の色香は失せず。父の庭訓を守り日陰の主君に心を盡し。忠勤を勵む健氣さは兄に生れ勝つたな。二君に仕ふる者の身の果は此鬼一を手本。火にも入れ水にも入れ身は醢になるとても。卑怯な心持つなよと鬼次郎にもよく傳へよと。世に睦じく言ひければ。兄とは心に存じながらお心を疑ひ此月日。餘處になしたる無禮の段。眞平御免下さるべしお詫。申すと泣きければ。地それも主君の御爲なり何故無禮と思ふべき。君も汝も草履摑となつたる故。思ひ出せし事こそあれ。詞唐土の張良。黃石公が沓を取つて兵法の大事を傳へ。高祖に仕へ漢家四百年の基を開きし。夫は張良是は牛若草履取になり給ひしも。虎の卷を傳へん爲共に出世の吉左右目出たし。地言ふべき事も是限り娘鬼三太若君の御供し早落ちよと。言ふより早く差添ひん拔き太腹にがばと突立つる。娘は驚きわつと詞も泣出す二人も左右に抱き付き。刀を奪ひ取らんとすれどもちつとも放さ

す。詞とても切掛つた腹を留めて何とする。イヤ我々落行かば共に御供申さん爲。ア愚か〳〵。命ある内は平家の鬼一法眼。汝は源氏の牛若丸介抱に預るべきか。地穢はし爰放せと突退け〳〵。えいやつと引廻し苦しき息をほつと吐き。詞ハヽア返すわ〳〵。木は木火は火水は水只今返す斷末魔。地平家の祿を食込んだ此腹も。切つて返せば五臓六腑に思も殘らず。魂は元の源氏又立歸る。今生の忠義の納め。詞検使を乞受け湛海を切つたるは鬼一なり。切腹致せしと欺き。心安く方々を落さん爲の切腹。サア早く落ちてたべ。落ちぬ内は何ぼうでも息引取らぬ。苦痛さするが面白いか。一足も早く影を隠しておくりやるが親兄師匠への孝行ぞや。地情知らず早落ちぬかと言ふ聲顫ひ咽返れば。娘は正體歎き伏し若君も鬼三太も。親に離れしは當歳三歳悲みは覺えねども。恩も慈悲も哀しさも此上のあるべきかと。天に悶え地に憧れ。猛き心も掻暮れて歎き。沈ませ給ひける。詞ヤア遅なはるか恩知らず。思ひ思うて切つたる腹をむだ腹にするか。地犬死さすかと呵られて。いふべき詞も涙ながら三人打連れ悄々と。行きては歸り歸りても遣る方分かぬ足弱車廻り。逢ふべき時節も泣いてみ見ては泣き。一つ所に佇めば心は鬼と勇めども。流石親子の フシ此世の限り。詞なう言殘せし事のあり。一度天狗になつたる鬼一。地魂は冥途に赴くとも魄は魔道に分入つて。再び誠の天狗となり西海四海の合戰といふとも。影身を離れず弓矢の力を添へ守るべしさらば〳〵。ハツア返す〳〵も情ある程身の冥加。辨へ知らぬにあらねども義理に引かるゝ牛若君。跡を見捨てゝ出で給へば足もしどろに皆鶴姫。翼しをるゝ別の露。鬼三太一人が心を鬼。鬼の目にさへ涙の雨の。ふる手を引立て介抱し泣く〳〵出づる出世の門。文字に二つはなけれども。我は出世父は又此世を出づる菩提門。門々不同八萬四爲滅無明果業因利劍郎是彌陀號と。三人一所に立並んで。なむあみ陀佛。〳〵〳〵。南無阿彌陀佛願以此功德往生は。安樂國にて此四人。必ず一蓮托生と心を。殘して出でて行く

第四

地千早振神のひこさの昔より。傳へそめにし舞歌の道能きといふ字を能と呼ぶ。此日の本の翫絶えぬ例も長月の。菊の壽打囃す花の色香の院の御所。築地遙に洩聞ゆる鼓の音色横笛の。ひしぎはひいや檜垣の茶屋與市が。フシ床ぞ賑はしき。ハルフシ廣き都も。心から。狭しとばかり世を忍ぶ吉岡鬼次郎幸胤は。源氏の種

の埋木に心を盡す忠義の花。菊のお能の折柄を。スヱテ心懸けたる夫婦連。地聞及んだ檜垣の茶屋とは此方か。御免なれと腰掛くれば。詞成程是が檜垣の茶屋。又拙者めが名を直に與市が茶屋とも申します。常に店は出さねとお能さへ御座れば私の承り。住宅の白川より水を汲んで運ぶ故。檜垣と御名を付けられし由緒ある茶の入端。先づ一服と差出す。いかさま花の都とて何から何まで華奢風流。詞手前は遙か遠國者此度初めて罷上り何事も不案内。京築の咄を聞くが國元への土產。先づ此御所のお能といふは。一年に二度とやら聞及びしが左樣かな。いかにも春は櫻のお能秋は菊のお能とて。兩御所の御叡覽。我々風情が詞に懸申するも勿體ない。詞さりながら只今では。お痛はしや王樣を鳥羽の里へ押籠めて。平家の大將清盛殿が我儘の榮耀榮華。菊の能に限らず。イヤ紅葉の能で候の。イヤ松茸の能で候のと色々の名を付けて。月の內には五度七度。檜垣の茶屋もほつと秋風。店を出さねば何故出さぬ。せんじ茶を背くかと煮え返るには。地困りますと。商賣柄のちやは／＼口。詞ヲいかさま平家の繁昌は國元までも隱なし。夫について彼の常盤御前といふ女性。一條大藏卿とやらへ送られしと承るが。下々の雜說か。但しは又誠の噂か。誠も誠きつい誠。何ぼ氣强い清盛でも。小松殿の御意見にはぼしと鉢卷我子の手前の口塞に。一條大藏の卿長成といふお公卿へ進上の奧樣。此十日計り以前に御祝言も相濟み。しかも今日のお能が。その。大藏殿常盤御前御夫婦をおもうしの馳走。イヤ又此大藏卿殿といふ人が。京一番の見事仁付けう藥のない。いかに平家の權威ぢやとて。十年餘りも清盛の箸にかけた上り膳を。應と言うて坐らるゝ。是が則ち旨い正銘。ヱ、今朝ならば見せましよもの。能見物にわせられた其勿體。衣紋付なら仁體なら天晴の公卿なれど。十日蛭子のさゝに付ける五百目包で見かけ計。此大藏殿に智惠のないと。狐が誂へた茶碗に。総底のない事が隱れがないと語るにぞ聞いて。地お京も打笑ひ。其まあ常盤御前とやらも御一緒にお出とや。音に聞いたる御器量。どんなお顏ぢや拜みたいと知らぬ顏に裏問へば。詞いや／＼。常盤御前は俄の御病氣でお出なされず。其名代に。御家老八劔勘解由左衞門のお內儀。鳴瀨といふ發明な女中が。彼のぬるま殿の介添にわせられました。イヤぬるま殿の咄に懸つて。あつたら茶まで溫ま殿。汲直して上げませう。イヤ／＼最早所望にござらぬ。些と此方に地咄す事。暫しの間

御遠慮頼むとほのめけば。コリヤ旨い。時分柄紗の針。よと〻釣申す釣られ申す。しつぽり樣と呑込み顏。茶釜の陰に氣を通す。鬼次郎小聲にお京を近附け。大藏卿の院參亭主が噂に落付いたり。お能も追付け滿てぬらん御歸るさに心を付け。隨分首尾好う目見えを濟し。直に館へ入込むが肝要。言ふまではなけれども。辨慶が兄弟鬼次郎に緣ある者と。人に知られぬ是第一。二つには常盤御前の御身持に心を付け。源氏を忘れぬ志と見るならば。折を見合せ仔細を語り。主從の名乘をせよ。其上の便次第某が迎に參り。館をすいとつれ立退く跡の分別胸にあり。首尾の善惡。一寸一筆知らせの便を。待つて居ると語る間に築地の內お能は滿てゝ養老の。祝言歌ふ瀧つの水。萬歲の道に歸りなん。地下の見物押合ひへし合ひ。袴の町人醫者禪門。樂屋の人數は一群に戴き申す。へ道々立臺粽同氣同性相求め己が歸る。暫く跡より。さも溫々と立出で給ふ一條大藏の卿長成と。名に負ふ勿體物々しく。八劒勘解由が女房にかしづかれたるうづ高さ。其身の位は備はれども心はうつとり空蟬や。猶人柄に寄らざりし生れ付こそ是非なけれ。鬼次郎夫と見るよりもお京に衣紋繕はせ。其身は彼處に立忍べば。かねて手筈を極め置く勘解由が女房立止り。お京殿か。上にも御機嫌好い折柄是へ是へと招き寄せ。殿樣へ申上げます。是はお京と申しまして女藝者の狂言師。先達つて夫勘解由召抱へます約束は致せども。表向より御奉公と申しては。禁裡表の聞えもあれば。今日の御歸るさ直にお供に召連れられ。然るべう存じますと夫が指圖承り。待たせ置いたる途中の御目見えお詞を下されなば。有難う存じましよと取繕へば大藏卿。ム內々聞いた女藝者はそな者か。はてな。いや何鳴瀨あれが狂言を勸めるか。あの今日も御所で見たやうな八まん大名。太郎冠者をやるぢやまで。フン。どれ顏見よう顏上げい。ヲ、顏も好いわ。今から鼻が抱へる程にさう心得。是は〱有難い無調法な女の藝。勘解由樣鳴瀨樣御夫婦樣のお見出しに預り。御奉公に參るやうにとのお詞。辭退も申さず只今のお目見え。ほんに冥加に叶ひし仕合。此上ながら幾久しうお目懸けられて下さりませと。會釋作れば何ぢや。目を懸けてくれ。ハレ變つた事を願ふな。屋敷へ歸つたらば下下に言ひ付け。鎭斤を取寄せてかけてくれう。むつちりと肥えて居る程に十二三貫は慥にあろ。まあ年恰好が氣に入つた。廿四五は女房の油乘る最中と。何やらの

よ。薄よ女郎花。媚き立てる。乘物の跡に。隨ひ三重へ行く秋の。地蝶や我フシ我や蝶かと。夢の世を。悟り極めし人ならで。うつら／＼と世の中を夢に暮して現なき。一條大藏の卿の館には。今宵も始る狂言舞臺は常の御居間先。廊下を直に橋懸書院を樂屋鏡の間。輝く錦の揚幕に衛燈臺も照添ひて。奥にはどつと褒むる聲。狂言滿てゝ幕げさせずつと樂屋へ入間川。大名烏帽子に補襠の姿なまめくお京が役。詞ほんに狂言なればこそ。誰あらうぞ八劍勘解由樣の奥方鳴瀨樣ともいはるゝ御方を。私風情が太郎冠者に使ふと思へば。どうやら氣の毒。地是がほんの逆樣事取も直さぬ入間川。御赦されて下さりませ。詞是は改つた御挨拶。私がやうな鈍な者が。對手になつて間を合すもこなさんの皆お蔭。御師匠樣にさう言はれるが矢張是も入間詞。

屋の床机に坐し給へば。途中ながらも主命は。厭とも言はれず立上り。詞宇治のさらし。島に洲崎に立つ波を付けて。はんま千鳥の友呼ふ聲は。ちり／＼やちり／＼。ちり／＼やちり／＼と散り飛ぶ所に。島陰よりも。櫓の音が。からり。ころり。からり。ころりと。漕出して釣する所に。釣つた所が。面白いとの。詞ヲヲ面白い／＼。一段と氣に入つた。扶持をくわつと地與れうぞとはやお心も狂言に。乘物召さるゝお京を召す詞も直に。詞太郎冠者のお京あるかやい。ハア。お前に。次郎冠者の鳴瀨あるかやい。ハア。お前に。／＼／＼。ハツハ、、、、、、。こりや好い慰み如何も言へぬ。兩人共に出來した／＼目出たいなあ。ハアツ地と答へる地狂言大藏卿にかしづきて。奉公初めの供先や首尾を窺ふ鬼次郎が。心も落付く心のさらば。一寸囁き頷き合ひ萩

書物にあつたか。なんと鳴瀨。女房の油といふ物を此大藏は終に見ぬが。どの樣な油ぢや嗅好い香であらうなあ。又殿樣のあやない事。いやなうお京女郎。あの樣な事仰ある愚かしいお生れ付。地夫故そもじをお傍に置いて。狂言をお目に懸ける心はの。詞萩大名の栗田口のと。すべて上々のお心の。足らはぬ事を作つたもの。夫を御覽に入れたらば自然と心にお耻ぢなされ。物の辨もある道理。地よそながらの御意見になるまいものでもないものと。夫勘解由にも言聞せ自が思ひ付。詞憚りながら御前にも。隨分狂言を御覽なされお心をお付遊ばせ。地何ぼお位樣でも。のつとりでは濟まぬ世の中御合點遊しませとフシ益に觸らぬ諫の挨拶。詞フウのつとりには狂言見るが療治か。はれ好い物が藥ぢやなあ。さあ／＼お京何なりと目見えに一曲。地所望々々と茶

稽古をさせて下されもなされねば。狂言を覚えもせいで。御前で勤も致さねば御褒美にも預らいで帰らうもござりませぬ。いえな申しさう仰しやつても下されねば。却つて迷惑にも。地存じませぬと。狂言臺詞に會釋して。フシ互に笑ふ折柄や。播磨の大掾廣盛公御出でなりと知らせるにぞ。奥へ取次ぐ女中の厳嶋瀬お京は四番目の。役儀を急ぐ二千石ナクリ揚幕へ切らしてフシ奥へ行く。跡へ入來る播磨の大掾。八剱勘解由出迎ひこれは〳〵珍らしき御入來。幸ひ只今狂言最中。直にあれへ御越しなされ御見物と。先に立てばイヤナウこれ勘解由左衛門。夜陰に及んで大藏へ見舞といふは付けたり。誠は貴殿に逢はん爲先づ下にお居やれと聲を潜め。かねて申し通ずる如く。呑込まぬは常盤が心底何故とお言やれ。いかに清盛の御意なればとて。三國一の大白痴と。名にうてた大藏を夫と頼むは深い計略。義朝が悴を招き源氏の討洩されを語らひ。平家に對して恨を爲す工がなくては叶はぬ筈さ。此間にも常盤が素振に不審がましい事はなきか。仰までも候はず。常盤が身の上萬事に心を付けれども。さして變りし品もなし。併し爰に一つの不審と言つぱ夜々の楊弓。宵は物事騒がしとて夜半過より弓三昧。是を屹度推量申すに。主人大藏が白痴を嫌ひ枕を交すまい其爲。夜を更しての楊弓ならめと。地語れば廣盛眉を顰め。いや〳〵左様の事ではあるまじいかさま夫には仔細あらん。心を配り氣を付けて何に寄らず注進あれと。互の心膸し合ふ詞の内に奥の間は。フシ早くも納る二千石。地二人の女にかしづかれ大藏の卿立出で給ひ。詞ヤア廣盛殿お出で〳〵。此間は打絶え六波羅へも参らぬが。變つた事もをりないか。折節には参りたけれど。小松殿がマアむづかしい。難波瀬尾が顔見ると。めいよう其儘痳痺が切れる。いつちまだ外見と違ひ附合の成るは能登殿。某さへ見ると目出たい人。旨い仁と嬉しがつて。機嫌が好いと。地眞顔の挨拶。廣盛鷄道へ辷らせて。ア、〳〵〳〵。承れば此頃は狂言をお好み稽古の由一段のお慰み。いつぞは拙者も所望申し拝見が致したい。エツエ。もそつと早うお出であらば。此二人の者どもが二千石をやりをつたにハレ残念。何が此お京めが床几にちやんと腰を掛けて。ハアそれ。今の謡の所は何とやら。ヲウそれ〳〵左言詞天下一統の御代となすも。偏に謡の徳なりとて。乾の角に壇をつき。石の唐櫃切つて据ゑ。一つ謳うてはどうど。納め二つ謳うてはどうど納め。唐櫃の蓋の。ふうわりふわり〳〵。ハツくさめ。地廣盛ぢやくと心

を利しいさお暇。勘解由の内室宜しう執成頼むぞと。言捨て座席を立歸れば フシ 勘解由も引添ひ立出づる。詞 ヤア廣盛は去なれたか。ハテ氣の短い。此樣な面白い事を見ずに。エ阿呆ではあるわいの。ヤイもう何時ぢや。大方九ツにもなるであらう。然らば例も女共が楊弓をやらるる時分。身どもは寢間へすと這入らう。果報は寢て待て旨い物は宵に食へ。言ひたい事は明日言へと立つにも居るにも狂言に。魂奪はれ心の闇。大藏卿にかしづきて皆々奥にへ行く空の フシ やゝ更け渡る。鐘の聲。人も子の刻はや過ぎて。本フシ 次第に昇る月代も。足元遲き丑三つ頃常盤御前の在します。一間の内は燈火を 小オクリ 螢かと。照す的の星。影は フシ 此方に腰障子。地 うつるくり矢の君しらず。人はしらずにこたまして。當りのかつちりぶらはちりゝん フシ 松蟲の。聲かあらぬか秋草に。露も置き添ふ弓の弦。フシ 百手に心やはりぬらん。地 霽間も見えぬ霧空に舘の外面を窺ひ足。腰にぼつ込む黑鞘の色も名に負ふ吉岡鬼次郎。常盤御前の居間先とは目覺え強き高塀に。手を伸しても屆かばこそ礫は忍びの案内者と。拾ひ集めて一握打込む小石ばら〳〵ばら。寢られぬ儘にお京が耳へ戀しと入つたる知らせの小石。庭の飛石差足に。切戸の フシ 透間差覗けば。詞 是お京ぢやないか。さう言はしやるは鬼次郎殿か。俺ぢや〳〵こゝ 地 明けてと。外から急げば急かるゝ程錆付く鑚外れかね。きり〳〵きしる戸の工合。やう〳〵開いて前栽の。茂みに夫婦が忍ぶ竹 フシ 細き息をぞつぎにける。地 鬼次郎心押鎭め。詞 常盤御前の心底。一向大藏に身を任せ。源氏の事は思ひも出さずと知らせの文。愈々夫に違ひはないかされぱいな。此間起居擧動に心を付けるに。いつかな微塵悲しさうな氣色もなく。髮形繕うて大藏卿に猫撫聲。何が又大藏卿は音に聞えたぬく太郎。涎流して甘やかしたせんさく。夫にほとびてあの如く夜すがらの楊弓。源氏の事を思ひ出す色目なければ。此お京は鬼次郎が女房と名乘らうにも折もなし。地 いやいや迂濶に名乘りだて。却つて鞍馬の若君の。お爲にも如何ぞと思うた故に知らせの文。ヲヽ出來た氣が付いた。詞 むやくしや口惜しや。鬼次郎が一生の目利違ひ結構人と呼ばるゝ大藏卿の舘へ。入込み給ふは天晴發明。地 源氏の味方を驅集め運の開くるときは御前と。頼もしく思ひしにあごくひ違へし淫奔女。其性根と知るからは其方をうか〳〵此屋敷に。詞 よい〳〵直に連歸らう。とても性根の亂れた常盤。主でない家來でないと。思へば穢れし此屋敷。地 心も殘らぬいさ行かん

と思ひ餘りの憎て口。切戸の口に立戻れば障子に映る楊弓の。矢は眞直でもあれあれ〳〵。歪んだ性根の影法師憎さも憎し面恥かゝせ。存分言うて立歸るが義朝公へせめての追善。サア來い女房心得ましたいざ御座れと。續いて上る廣縁の。障子蹴たつる破れかぶれ。フシ射前の先に突立ちたり。地常盤御前は一心不亂脇目も振らず固める手前。いと悠々と引詰めて狙ひ程好く放せる矢は。かつしと響きて錐穴に羽ぶくら込めて止るにぞ。嬉しや願は通矢とフシしたり顔なる御氣色。地鬼次郎さしも耐へかねつゝと寄つて弓引奪り。詞ヤアをさめ過ぎた耻知らず。吉岡鬼次郎幸胤よも見忘れはあるまい。お京といふも則ち女房。夫婦の者が心を碎く。地其効もなき人でなしと怒れる聲に顔振上げ。ヤア珍しい鬼次郎。楊弓に心移し居て何時の間に見えたやらと。言はせも果てず堪へぬお京。詞コレ仰しやるな常盤樣。あまちこい滅ず口開いて居る主でないぞえ。エツエほんにお前はなあ。此楊弓をなさるゝ手間で何故に誠の弓を張り。心の鋒矢引詰めて。源氏の恨を霽さうと思ふ心は何故付かぬ。地大事の〳〵義朝樣のお情を忘れて。二度三度嫁入なさるゝ。其氣では其筈ながら天道は怖うないか。恐ろしうは思さずか人の報は遠からぬ。七間半の楊弓より當りは近い天の罰。神や佛に憎まれてもお前は何ともないかいのと。涙交にフシ言並べる。心の直矢ぞ誠なる。常盤御前は打頷き。詞尤の恨事悪うは聞かぬさりながら。世の中の人の心の竹ならば。割りてや見せましと云ひけんも外ならず。主を大事と思ひ詰めし。誠の道は道ながら家來は家來の程々にて。深きに至らぬ小笹の茂り。主人は主人の心にて。地千尋の竹の大藪は。外から知らぬ理と氣を持たせたる詞の下。詞ム、ウ面白い心の竹。此鬼次郎が今こゝで打つて〳〵打碎き。歪んだ竹の節を見せう。いや慮外者推參者。家來の身として見ん事其方は。ヲ、主人でも。地打ちかねぬ鬼次郎。と言ふ間もあらせず持つたる弓。振上げて丁々。其むさい心の竹灰吹竹にしてくれんと叠みかけて打つ腕。もうよいわいのと女房が留むるを突退け又丁々。腹立つ息をつぎ弓の弭も。フシ碎け飛散つたり。地常盤御前は起上り。髪掻撫でて襟繕ひ。詞ヲ、出來されたり頼もしゝ。時代に伴るゝ人心裏の裏なる恐ろしさ。木にも萱にも心置かれ深き疑ひ赦してたべ。地我を憎しと思ふよりなぐり情もあら弓に。たゝき伏せたる主思ひ。誠が顯れ嬉しいぞや。今まで秘む常盤が胸。語り明す。フシ耻かしさ。地取分きて悲しきは二度三度の嫁入と。

姫御前が姫御前に侮蔑まるゝ面目なさ。詞武士の 身の上に。臆病者よ。腰抜よと指さゝるゝによも劣らじ。地辛きは忘れぬ昔語り義朝公に別れしより。長地忘れ形見の三人の若見は六ツ中は四ツ。弟はまだ乳呑子の。泣音を忍ぶ伏見の里雲の下折消えやらで。つれなき命を足曳の大和の宇田まで逃退きしを。終には捜し出されて スヱ疎ましや清盛が。我に無體の戀慕の闇。我は子故の闇々と口説落され女の道。捨てゝ拾ひし子供の命。ア、歎くまじ思はじと思ひ流せど憂や辛や。夫の敵の清盛に枕並ぶる私語。虎狼の叫ぶより耳に徹へて物凄く。錦の褥も。悪魚毒蛇の鱗に寝臥する心。君傾城の。勤めさへ。厭なと思ふ男には振るとやら逢はぬとやら。夫には劣りし我が身の因果よし是も我子の命。助かりし代りぞと心で心取直し。辛きながらも添寝の床。泣きたい涙笑うて見せる。胸の苦しさ フシ遣瀬なさ。如何なる地獄の責なりとも此辛さには勝らじと。思ひ暮せし年月も。隠し秘む心の底夫さへ切なかりつるに。今といふ今夫婦の衆に悲しい有りだけ打明けて。今まで胸に湛へたる。思も涙も打流し。嬉しいわいのと フシ憂さ辛さ語るにも猶涙なる。地鬼次郎も哀に服し。悄るる心取直し。詞御物語さる事ながら。清盛の手を遁れ此館にましますは。時節の到ると申すもの。それに何ぞやうか／＼と明し暮して遊興業。地朱に交れば赤うとやら長袖の家に馴れ。武家の育を忘れ給ふ スヱテ浅ましさよと怨むにぞ。詞ヤレ女でこそあれ。義朝公の御胤をも産落したる自ら。地平家に恨の一念は心に込めし此楊弓。慰みに事寄せて誠は平家を。調伏の。弓矢ぞや。詞弭を白き絹に巻きしは。源家の白旗押立てゝ。本弭末弭鳩頭。正八幡を頭に戴き。敵に向ふ 地フシ心ばせ。弓矢の尺は二尺八寸。二十八宿の星と敬ひ。九曜を象る九寸の矢尺。やたけ心を張詰めて。一矢は今若乙矢は乙若。牛若が名に寄せて丑の常盤が時詣。フシ三つの鐵輪は。あらねども瞋恚の燈火照せる夜弓。念力透つて我が願ひ思のまゝに金貝の。矢數は一百五十一。女に二挺の弓を引かせし名は清盛の。清からで身體を汚せる泥書の。百四十九の骨々も ハズミ碎けよ。折れよと怒の炎。赤き朱書の九十くげんを見せしめ給へと祈つたる。狙ひの矢先は錐穴に。丁ど射付けし調伏ぞと。的の釣糸かなぐり棄て堋のくろかは取給へば。生けるが如き清盛の。姿を畫きし胸板に。矢疵は通りし女の一念。フシ健氣にも亦勇まし。地鬼次郎夫婦はつと伏し。此お心と知らずして。出る儘の悪口のみか勿體なくも打擲せし。某が此

面お足にかけられ踏み。にじつて給はるが此上の。スヱテお主の。慈悲と詫びるにぞ。詞なう鬼次郎忠義を思ふ諫の杖。打たれたる此弓は正八幡の御手を出し。地我に心を勵まし フシ給ふと思へば。猶更有難し。とは言ひながら淺ましや敵にもせよ仇にもせよ。後の夫の名は遁れず夫は天に譬へしもの。敬ひまつる心もなく女の際に恐ろしき。人を呪ひの楊弓は積る此身の未來の罪。奈落の底におちの矢の苛責の結界幾百千我が身は覺悟の上ながら。子供の身にや報はんと。思ひ案ずる悲しさを。推量あれとかき口說き。聲も涙も忍泣き鬼次郎夫婦もお道理と。涙のまき矢ばら〳〵と的に。亂るゝばかりなり。地歎の聲の洩れけるにや。覘ひ窺ふ八釰勘解由つか〳〵と走り出で。件の繪姿引抱へ。此證據を取るからは常盤主從遁さぬ〳〵。六波羅へ訴へたつた今一つ縄と言捨てゝ駈出す。此方の一間さらりと明け。何處へ遣らぬと立塞り フシ枷に鳴瀬がかひ〴〵しく。詞これ勘解由殿狼狽へてか。常盤様が科人なれば大藏様も同じ科。善にもせよ惡にもせよ。主人の難儀を訴人とは。地武士の道は何處で立つと。言はせも果てずヤア默らう。詞あの大だくらが何の主人。豫て廣盛に心を合せ。常盤を初め大藏共に搦取り。一條の家は此勘解由が治める。妨げひろがば女房とて。地赦しはせぬと突退け〳〵。又駈出すをこれ待つた。放さじ。遣らじと捻合ふ内。後の方の障子越勘解由が髻しつかと執り。ぐつと貫く刀の光うんと仰向に反りひづむ。障子の紙も紅に鳴瀬は驚く夫が苦み。常盤主從呆るゝばかり勘解由は無念に悶ゆる手足。骨組あらき障子を摑みばつたばたつく効もなく。己が名字の八釰に フシ身を果すこそ淺ましき。地鳴瀬は泣くにも泣かれぬ思ひ。惡の報ひを忽に見するは誰そといひつゝも。鬼次郎諸共立寄りて。間の障子を取退くればさも悠々と大藏卿。日頃に變る御氣色に目の內涼しく刀提げ。突立ち給ふ御裝げにも威のつて猛からぬ仁義の勇士名將と。初めて知らるゝ人々は フシあつと敬ひ恐入る。大藏卿靜々と。御佩刀を鞘に納め。詞心足はぬ長成が。辨へもあらずして勘解由を討つて捨てたるかと。鳴瀬が悔みもうたてさに語り聞かすよつく聞け。元來某源家の累葉。仔細あつて長袖に交り。一條大藏長成と呼ばれ。人並々の身なれども文武の道も表に出さず。若年よりの作り阿呆痴人となつて世を暮せば。源氏にも愛せられず又平家にも睨まれず。世を諂はぬ我儘暮し。夫を知らざる八釰勘解由。主人を白痴と見限りて。廣盛に心を合せ。非道の工疾くより

も睨み付け。憎くい奴と思へども是しきにア、世話と知らぬ顔に捨置きしが。見通しならぬ今夜の仕儀。三十年來長成が作り込んだる拵へ馬鹿。顯したるは。フシ源氏の爲。ヤア鬼次郎夫婦我が詞を能く守り。牛若とやらんに傳へてたべ。人間の盛衰は只天運の爲す所。六條の判官爲義は己が智謀にからまされ老の一圖の片意地に其身を終に亡しぬ。同じく左馬頭義朝武勇に誇り時節を知らず。待賢門の夜軍より野間の内海に落行きて。詰腹切つたる無念さは如何ばかり。詞親といひ子といひ孰れも／＼智惠自慢武勇自慢に可惜身を今更惜むに効ぞなき。此人々には事異り出來されたるは常盤御前。唐土を尋ぬるに操を立てゝ名を殘す女は類多けれども。夫の爲子の爲に不義者の名を取つて。女の道に背きしは則ち背かぬ貞女の鑑。異國の人も傳へ聞かばなどかは是を賞せざらん。斯る希代の女房を宿の妻とは身が果報。阿呆に繪のつく長成が命に懸けて預つたり。心安かれ鬼次郎夫婦猶牛若に心を合せ。再び源氏の耻を雪げ。何事も大藏は知らぬ顔なり白旗の。榮えを見せよ方々と。殘る方なき御詞。フシ世に頼もしく有難き。地詞の内に勘解由が妻。夫が死骸の差添押取り。咽喉にがばと突立つれば。人々是はと取付けどもはや貫いたる刄の柄に。手は懸けながら目を開き。詞淺ましや勿體なや。心愚な御主人と。年月侮り暮せしさへ大方の罪なるに。地惡事に與せし我が夫お手討に逢ひたるは。まだも冥加に叶ひし最期御手に懸り死したればこそ。一大事の御物語。聞いて嬉しき此鳴瀨。心は夫に與せねども。詞此御大事を聞く上に。一日でも存へては。外へや洩れんと人々の御疑ひの悲しさと。地一つは二世と契りたる夫の跡追ふ死出の旅。冥途にて廻り逢ひ。意見を加へ善心に飜させ。せめては草葉の陰よりも。御恩を報ずる御奉公。させたい爲に此自害。只何事も御赦されて。下さりませいを此世の名殘。夫の死骸を枕にて眠れる如く息絶たり。詞大藏卿感じ給ひ。天晴健氣の鳴瀨が最期惜いかな／＼。地と言うて今更歸らぬ道。猶此上も大藏は元の阿呆に立歸り。源氏の旗を揚ぐる迄は時めく平家の無理我儘。避けて通す結構者。鼻の下の長成と笑はゞ笑へ言はゞ言へ。命長成氣も長成引。詞只樂みの狂言舞狂言舞ヤマウ曉の明星が。西へちろり。東へちろり。ちろり／＼とする時は。詞あれ／＼夜明に間もあるまじ。鬼次郎夫婦イケイノイヤア。地去のとも戻ろとも。何とも其方の御計ひと。言うては小腰に抱着いた。名殘はきりゝんない。きりゝん／＼。限りないとナホス小舞

に事寄せ暇の詞。ア、有難き御心。お禮は如何も盡されずとスヱテ頭を下ぐれば。詞禮に及ばぬとつとゝ往かしませ。地如何なる奇縁かかく迄も御情深き御恩の程。嬉し涙にお京が名殘。又廻り逢ふ常盤様。必ず歸り鬼次郎も。さらば〳〵と立出づれば。詞コレ〳〵お待ちやれ餞別申さう。コレ此太刀は重代のわざ物。汝に與れるぞ。地ハツと戴き別の袖。急げ急げに氣もいそ〳〵悦ぶ中にも不便さは。未來を何と鳴瀬が爲。狂言綺語も法の聲。讃佛乘の因緣にて蓮の臺に今參り。我は元より鈍太郎と浮世を化す釣狐。大藏が家の藝。鷺の白旗泉の源。常盤の松の榮えを見んと言葉の花子末廣り。實にもさうよのやよげにもさうよの。さうよ〳〵と囃し立て。心拍子に勇み行く誠の。道こそゆゝしけれ

第五

地生きて功名をなさずんば馬皮に包まれて。古里に歸らんとは勇士の心なるをや。吉岡鬼次郎幸胤は嵐烈しき夕の空。雨の玉散る横しぶき傘片手に小提灯。忠義の草鞋脛高く引紮げたる身の仁義フシ五條の橋に差かゝれば。向ふへ來るも同じ扮裝。提灯さし上げ透し見て。詞ヤア鬼三太か何處へ行く。されば〳〵牛若君父義朝公孝養の御爲とて。此橋にて千人斬を始め給ひ。今夜も暮前より忍び出でさせ給ふ所。承れば平家より隱し討手を出だす由。地萬一過ちあつては大望の妨げ。御供申し歸らんと是迄參上仕る。詞ム、これは〳〵我とても其通り。地一條大藏卿の仰越されし仔細もあり。かた〴〵もつて若君の御目に懸りたく是までは來りしが。詞汝が來る道東では見當らずか。いや此方にも尋ね逢はずか。扨は未だ此所へ見え給はぬな。地待受けて連歸らんと。橋の傍の柳蔭フシ心を配つて待居たる。フシ五條あたりの。黄昏に。それかあらぬか夕顏の小オクリ花を。欺く衣打被き。雨に照添ふかさの名も紅葉の皐緒塗木履。足音竊に忍び來る是こそと兩人立寄り詞申し〳〵牛若君。今宵は折も宜しからず。直にお歸り然るべしと地言ふに薄衣取給へば。ヤア詞是は皆鶴姫。思ひ懸もない事。此雨風の烈しきに何故と尋ぬれば。今の詞も聞くからは御兄弟も若君を。地連れましに御出でか自らとても此通り。今宵は無用と留めしに振切つて出給へば。跡を慕うて參りしと語れば鬼三太打頷き。詞御尤も〳〵。まだ御目には懸らぬが今宵は是非に留め申す分別。地併し我々兩人が何程に申しても雀の千聲。皆鶴姫の一聲は利が強いと打笑ひ

フシ暫く見合す折柄に。地六波羅の方より数十本の高提灯。播磨の大掾廣盛手勢の雑兵引具して。皆鶴姫の姿を見付け件の童め遁さじと。言ひも敢ず群り寄るさしつたりと鬼次郎兄弟。傘投捨て抜く太刀の光に亂るゝ雑兵ども。二打三打は支へしが堪りかね大將諸共。河原表へ逃行けばきほひにきほふ鬼次郎鬼三太。皆鶴姫を彼處に忍ばせ跡を慕うて 三重 一セイ扨も源の牛若丸。父の修羅の魂魄を慰めんと。川風添ゆる夜嵐の。夕程なき。秋の空。ナホス面白や。心浮立つ御扮裝。肌にはねりの御袷。紅裾濃の御着背長 ハズミ 糸算織の大口に。コハリ 薄緑といふ御佩刀。五條の橋を指して來る。かさのしぶきも高足駄。板橋とゞろと踏鳴し。行交ふ人を待給ふ御有。樣ぞ フシ 不敵なる。地夫と見るより皆鶴姫する〳〵と走り寄り。詞何處に何うして今ござんした。又同じ事言ふかと呵られうか知らねども。地今宵は是非にお歸りと袖に縋れば。ア、これ〳〵。詞女の身のはしたない。こゝまで跡を慕ひ來るとは人の見る目も如何なり。地如何程にの給ふとも思ひ立つたる事なれば。此儘では歸らぬ〳〵ヲ、情強。詞ほんに〳〵心ざして爲さるゝ事を。惡う言ふではなけれども。父御樣の孝養ならば善根はさま〴〵。地仕やうもやうも多いのに科もない往來を。千人斬つて功德になるとは何といふ經にある事ぞ。末に大事を抱へながら大膽なお身持。殊に今宵は平家より討手の大勢。鬼次郎兄弟の衆が出逢ひ。あれあの騒ぎはお耳へ入らぬか。大事の前の小事なれば拜みます〳〵。今宵は戻つて下さんせと スヱテ しみ〴〵縋りくどかるゝ。詞これ今ならで有りやうは言はぬ。千人斬とは僞り何の科もない人を斬らうぞ。毎夜々々此橋へ來るは往來の人の中にも。武士たる者に當つて見。器量なき奴は逃げ次第。狼狽へて斬らるる奴は斬れ損手に立つ者は從へ靡けし其中にも。熊野の龜井鈴木兄弟を始め。伊勢の三郎江田の源藏。熊井太郎なんどいふ源氏の運を開くべき。時節を待ちし誼の者其外彼是昨夜まで。九百九十九人まで大刀の下に。從へ懐く。地今一人手に付ければ千人の家來を持つ諄う言やんな今一人手に付けぬ其内はいつかな歸らぬ。殊に鬼次郎兄弟が平家の討手に出逢ふと聞きながら。見捨てゝは本意ならず力を添へんとの給ふ所に。物こそ見ゆれ此方へと皆鶴姫を引連れて フシ イみ休ひ給ひける。江戸地西塔の武藏坊辨慶は。其頃都に在りけるが。五條の橋には人を惱す曲者ありと聞きしかば。それを從へ召使はんと。心も空も晴るゝ夜の月も音羽の山の端に。出立つ鎧は黑革威好む所の道具に

は熊手。ない鎖鎌の棒。さい槌鉞鐵刺股さす儘に。權現より賜つたる大薙刀。眞中取つて打振りゆらり／＼と出でたる有様。如何なる天魔鬼神なりとも。面を向くべきやうあらじと。我が身ながらも物頼もしく手にたつ者のア、欲しやと獨り言して打渡り向ふを。フシきつと見てあれば。地橋のほとりの青柳の糸より細き腰付にて。すつくと立つたる女姿かさ傾けて面はゆぶり。詞辨慶元より法師の身女に何と言寄けん。詞も細く氣色に耻ぢ。橋の傍を通行けば。江戸地若君彼を離つて見んと右へ避くれば右に立つ。左へ行けば左に行く。違ひさまに薙刀の。柄をはつしと蹴上ぐれば地カハリすはしれ者よ物見せんと。薙刀柄長く押取延べ。切つてかゝれば若君は。薄衣取退け打寄する。劔を撫く傘の。六十間の橋の上。ひらりひらりくる／＼／＼車に操まるゝ牛若丸。詞辨慶荷つてさゝくをふみ。通さじものと切込むを。丁ど受けたる勢は。雨を起せる蛇の目の傘。下ツハリ風吹き拂へば飛びかはし。ひらりと拔いたる小太刀の影。星の光と水車。所は名に負ふ加茂川の。流れに立つ浪どう／＼／＼。どうど寄すれば白鷺の。地葦邊にあさる片足立姿はつくばね羽子板の。拍子は砧の音。むさうがへしうつゝの太刀。二つの鍔音からり／＼／＼。詞欄干傳ふさゝがにの。蜘蛛の振舞木傳ふ猿。水の月かや手に溜らぬ。姿を慕ふ薙刀の得たりや應と蹴と執り。十六地えいやと引けばえいと引く。橋の擬寶珠玉の汗鎬を削りて三重戰ひける。地辨慶秘術を盡せども終に薙刀打落され。組まんとすれば切拂ふ組らんとするも便なく。詮方なくて橋桁を二三間飛退りフシ呆れ。果てゝ立ちたる所へ。地鬼次郎鬼三太取つて歸しヤアそれなるは辨慶ならずや。詞書寫の寺にて別れしより忍び／＼に尋ねしが。今までは何處に在りしぞ。ヤア是は鬼次郎殿。播磨の書寫を出でしより方々うろたへやう／＼と。叡山の西塔に籠り時節を窺ふ武者修業。地今宵あの童めに出逢ひ此仕合。サア來い童と大手を擴げ。掴みかゝらん其勢。ア、これ／＼。詞此御方は我々が御主人。源の牛若丸と地言ひも敢ぬにはつと退りハツア道理々々。詞此辨慶に大汗かゝすは大抵の人でないと見た。地今より後は御家來可愛がつて下はんせとフシ頭を橋にぞ付けにける。地扨は聞及ぶ辨慶な。我も汝を慕ひしに嬉しゝ／＼。緣は重る武藏坊今より三世の主從ぞと。約束長き五條の橋。橋辨慶と末の世に語り傳へて繪にも書き。祇園祭の山鉾にもフシ祝ひ飾るは是とかや。地皆鶴姫も立出でて互の悦び若君も。御機嫌斜ならさる所

へ。廣盛を初め軍兵ども取つて歸しをめいて蒐れば。鬼次郎兄弟心得たりと拔連れ〳〵勇みかゝる。辨慶押留めこれ〳〵兄弟。其廣盛は存じの通り此坊主が親の敵。貴樣達が手に懸けんとは情なし我にくれよ。サア廣盛お尋ねの辨慶是に在り。追付け汝を冥土へやる。死脈が打つか取つて見よと腹打叩いて笑ひける。地廣盛怒つて家來どもアレ遁すな討つて取れよと下知するにぞ。群りかゝる數萬の兵。詞ヲ、面白い辨慶が七つ何事ないやうに七つ道具をくれんずと。地手んでに得物を鬼次郎鬼三太。押取り〳〵打ちなぐれば木の葉を時雨に誘ふが如く。フシ一騎も殘らず逃散つたり。地殘るは廣盛只一人。今更逃ぐるに行方なく顫ひ縮むを引出し。汝は己が親殺し。仕置を見よと橋詰へ高手小手に縛り付け。一つ殘りし鋸びきもろ手をかけて一引き二引き。えいやえいやの懸聲にフシ頭は前に落ちてげり。地人々どつと打笑ひ若君の御供し。勇みに勇む奥州下り終には平家を打亡し。源氏の御代と榮えるも牛若君の劒の德。さやの尾にある虎の卷。鬼一が讓に鬼次郎鬼三太一騎が千騎の武藏坊。辨慶が勇力に大藏卿の智惠の德。常磐の松もあひにあふ千人斬の千の字を。千に重ねし國津民。萬々歳の悅を謳ふも。目出たきためしなり。

壇浦兜軍記

作者　文耕堂
長谷川千四

宵に起き旰けて食し。夜半に念ひ朝に行ふ故に。虞舜の居は三年にして都をなし。仲尼の政は暮月おのづから理るとは。今この時よ武將の中興。源の朝臣頼朝卿順はざるを禁め。賞罰を糺し絕えたるを繼ぎ癈れるを起し。民を安んじ衆を和す七德八敎谷七鄕。賑はふ民の鎌倉御所 オロシ へ大藏の鄕に。營居ある。地 さしもさばかり手強かつし木會の冠者義仲は。江州粟津の泡と消ゆ平家は亡き名を文字が關に殘し。治國平天下の功古今に秀で。未だ家に先蹤なき大納言の大將。六十餘州の總追捕使。日本弓馬の棟梁となり給ふ事。併し佛神の擁護なりと。神祇を禮し百靈を懷け給ふ餘り。秩父の庄司重忠を以てさいつ頃より。南都東大寺大佛殿を再興あり。オクリ 旣に伽藍。フシ 成就せりと。地 本多の次郎近經を以て訴ふれば。根井の太夫希義岩永左衛門尉致連。其外當日の諸役人 フシ 膝を。屈し相詰めらる。地 又者なれども本多の近經。召しによつて百分一に寫せし伽藍の繪圖。御座近くしつらひ掛け佛閣の高廣。莊嚴の次第外に記し捧ぐれば。逐一に上覽あり。詞 重忠は佛智にも叶ひしか。わが思ふ如く造進せし條。嬉しや解脫の善根を植ゑたりと。地 御嬉しげに見え給へば近經はつと恐れ入り。詞 こは冥加にあまる御詞。主人重忠造營の功を得たること。偏に君の洪福によつてなり。太政入道淸盛は。伽藍を燒いて衆類を族滅す。君は伽藍を再興ある天地懸隔の違ひ。地 恐れながら御子孫の繁榮極りあるべからず。鎭護國家の御基この上や候べきと。祝し申せば一同に フシ 皆萬。歲と壽きける。地 大奥の間の廊下口鈴の綱おとなひて。重忠の奥方玉房御前 フシ 御座の間近く。手をつかへ。地 誰そお取次と伺へば頼朝御覽じ。詞 珍らしや秩父の妻女。苦しからず直に申せ何事ざふと御諚ある。いやお願ひは私ならず御臺樣の御使。只今奥にて承れば。此度の大佛供養かねて君御上洛との御事。御臺樣も御參詣あるべき御立願。地 苦しからずば御一所に御上洛遊ばしたく思召し候へば。伺ひ奉れとの フシ 御事なりと述べにける。地 頼朝打頷かせ給ひ。詞 いま四海一統すと雖も。木曾が餘類平家の殘黨。義經錦戸が討洩らされ。隙を窺ふ此時節うかつに鎌倉はあけがた

し。我は皆成就の後上洛すべし。この度は政子ばかり上洛し供養をとげ給へと申せ。地さあらば玉房附添ひ用意せよと御返答ありければ。玉房悦び是は〳〵お嬉しや。御臺様もさぞ御機嫌。お悦び申す爲とフシ勇みて奥へ入りにける。地頼朝重ねて。詞いかに根井の太夫岩永左衛門。兩人共に政子が供し上洛し。萬粗忽なきやうに心を合せ計ふべしと宣へば。地根井ははつと當惑顔岩永左衛門進み出で頭を下げ。詞聊か御諚を背くには候はねども。かゝる目出度き御上洛に。臆病の飛沫かゝつたる老人と相役仰付けられ。心を協せ供奉仕らんこと身に取つて不承の至り。地此儀は餘人に仰付けられ下されかしと。根井の太夫を尻目にかけ憚りなく言上す。詞根井の太夫氣色を損じ。ヤアロ荒涼なり岩永殿。あつと申さうや否と申さうや未だお請けもせざる内。臆病の飛沫かゝつたる老人と相役。不承なりとの言上ヲ、推したり。我が娘白梅を婦妻に所望ありしかども。愛甲の前司太郎が子を養子聟の契約せし故。承引せざるを憤つてのわんざん。卑怯至極とはつたと睨めば。ヤア左様の私の宿意を以つて御用を妨ぐる岩永には非ず。地何となりとも言はゞいへ。臆病者の相役には得ならぬ〳〵。詞ヲ、それも推したり。かの悴相州箕尾谷村の谷陰深く生立ち。熊猪は猫の鼠と持て扱ひ。形の如くかけ鳥などはすれども。未だ兵法の奥義を知らず。弓矢鍛錬の後家を知るべしと武者修行に出で。地過ぎつる源平の戰義經公の御手に屬し。實父愛甲の名字は勿論我が方へも未だ來らねば。根井とも得名乘らず。育ちし箕尾谷村の在名を取つて。箕尾谷四郎國時と名乘り。詞平家の侍上總の七兵衛景清に出逢ひ。少し汀へ引退きしを。弓矢不鍛錬の者どもが地臆病なりと取沙汰を。聞誤つての思ひ違ひ。をかしゝ〳〵と言はせも立てず。詞ヲその戰ひは壇の浦船と陸との詞戰ひ。俗にいふ川向ひの喧嘩に等しく。箕尾谷四郎廣言放つて居たりしが。兵船一艘漕寄せ上總の七兵衛景清と喚いて駈く。地始めの詞には似ざりけり掻い伏つて逃げて行く。景清長刀おつ取りのべて討つならば眞二つになるべきを。詞よく〳〵の臆病者刃物汚しなぶり物にせんとや思ひけん。地長刀小脇にかい込んで箕尾谷が被たりける。兜の錣を取り外してんがうまじくらむんづと摑んでうんと引く。身を遁れんと前へ行く互にえいやと引く力に。鉢付の板より引きちぎつてこけつ。轉びつロへらず。さるにても汝恐しや腕の強きと言ひければ。景清は又箕尾谷が首の骨こそ強けれとフシ敵も味方も物笑

ひ。なんと臆病者であるまいかと嘲笑へば膝立て直し。其時の軍奉行は土肥の眞平。箕尾谷は大太刀景清は長刀。手を碎いて戰ひしが何とかしたりけん箕尾谷。太刀打折れて力なく少し汀へ引退く。臆したるにはあらざる故御帳面にも其通り。記したりとの物語御帳面が證據よ。但し貴殿は左樣の時太刀打折つた軍は是まで。サア首斬れとて斬らするか。隱るも引くも軍の習ひ畢竟の勝を勝といふ。殊に景清世に存へ君を狙ひ奉る風聞あり。我が悴また景清をつけ狙ひ恥辱を雪ぐまじきものならねども。それは後の沙汰必ず〳〵今の詞。忘るゝな岩永と包む。無念の目に洩れて。零るゝ涙を袖に隱し御前に向ひ。先年系圖に書き載せ上覽に入れたる悴行方知れず。不奉公者の親として歷々に立交り。座並を穢すも恥かしきに。況て御臺所の御供恐れ少なからず。御掟違背仕るには候はねども。この儀は餘人に仰付けられ某は本國に浪人の願ひ。所領を差上ぐると申すは冥加なし。悴が安否を承り屆くる迄。暫く預け奉り度く存じ候と恐れ。入つてぞ述べにける。賴朝始終を聞し召し。子によつて親々の名をも上ぐるに。老人の心遣ひ不便なり。上洛の供を赦し望みの如く所領を預り置く上は。返す事も又望みによるべし。浪人の住所は心の儘勝手次第逼塞すべし。本多は後備へ岩永は上洛の先手に進み。直ぐに都に止まり重忠に加はり。萬事沙汰せしむとも指圖に背き。我意の仕方あるべからず。就中上總の景清は平家無二の忠臣國士無雙と聞く。敢へなく討たんも殘り多し兎もかうも重忠と計らひ。穩便の沙汰あらまほしけれ。心得たるか岩永本多罷り立てと。臺中深く入御なり給ふ佛法王法この君より。再び榮ゆる秋津國盡きぬ。惠みぞ

へ月日立つ。春も漸くをはりの國夏になるみや熱田の宮。聞えは人の國迄も隱れ名高き御神にて。萬の願ひ取分けて惡氣厄難災難を。祈れば奇特をみやつこの散敷く花をかき寄せて。神の御庭の朝淸め散殘りたる其梢より。土に春ある風情なり。春の旅。暖かならず寒からで思ひある身も折々は。心を開く白梅は。父に誘はれ故鄕を出で先は近江の長濱へ長道中を是ぞこの。尾張の熱田と聞くからに。わざとも參らまほしかりし。いざと附々お供にて乘物吊らせ參詣ある。やい皆の者。この御社こそ楊貴妃の在所を尋ね。唐土の方士が渡りし常世の島。蓬來山とは爰ぞかし奇瑞尊き御神樣。皆信取つてよう拜みや。それにつき此お社の禰宜の娘は景淸が妻なれば。こゝに隱れ忍び居まいものでなし。

我が夫の箕尾谷殿行方しれず。親子夫婦の名はありながら地得逢はぬもまた父様の。知行差上げ住み馴れし鎌倉を立ちのいて此如く。旅他國なさるゝも彼れがわざ。詞景淸と見るならば掻きむしつても恨みいふ心。地色其時は誰々も力を付けて頼むぞやいのとの給へば。乳人の澤田が御尤も〳〵。詞此人數が一口づゝ喰付いても。景淸の一人や二人お氣遣ひ遊ばすなと。地力を添ゆればヲ、嬉しい〳〵。大宮司と問へば隱れないとや住家はいづく誰に尋ねうぞあれ〳〵あそこに人こそあれ。大儀ながら乳母問うて見や何の大儀と立寄つて。詞これ物問ひましよ。禰宜殿なれば知つてゞあらう。大宮司殿はいづくぞ敎へて下されムウ扨は旅のお人か。大宮司と申すは我々がお頭殿。今では二人あり御子息は夏茂樣とて今の世取。社の後な大門造りがそでござる。親御は通夏樣地近年隱居なされ。海山を見晴らして濱面に館を建て。衣笠樣といふ娘御と一所にあれ〳〵あそこへ。白髮交りの惣髮大小差いて。女中が一人附いて見える。あれが通夏樣衣笠樣。社々拜なされてやがてフシ爰へと敎ゆれば。詞お姫樣聞いてか。聞いた〳〵。地願うてもない首尾待受けて詰開かう。ヤイ下下も乘物も鳥居の外に待つてゐよ。父樣お見えなされたら爰にと申せ。まだ見えるには間もあらうが其間に自らも。いざ神前へと引連れて。オクリ一禮。言はせ詣でらる。地春色花漠々たり鶯の百囀り。擯俗の地無何の鄕心自得すれば。壽彊無しとフシ口吟んじ。地色娘を伴ひ花に誘はれ浮れくる前の大宮司。詞掃除は誰ぢや福太夫か。此頃逢はぬ變る事もおりないか。アいや別に變る事もそれよ。たつた今旅の女中がお二人樣を尋ねて參られ。

追付け此所へお出でなさるゝと申したれば。其間にお宮へ。ム、參つて來うというて往たか。ハテ誰ぢやな見えたらば逢ふ迄よ休め〳〵。地色身は折ふしの他國歩き近附きもあり尋ね來まいものならず。娘を尋ねてくる女中は。詞ハテ誰ぢやな。いや私でござんすと地立出づる白梅。イヤこなたなれば猶見知りが無いとフシ親子。訝るばかりなり。詞其方に御存じなされいでも。此方は景淸殿と譯ある仲。お前の方に忍びありと折々の文玉章に。お二人の事よう知つてゐる。地色久々顏も見ぬ故にはる〴〵尋ね參りたり。早う逢はせて下さんせと心せかせて裏問へば。父は驚く衣笠は惡う呑込む早合點。其景淸殿連れてござんせ逢はせうと。フシ愛想なけれど言ひがかり。詞衣笠樣そりや卑怯な。慥かに爰にゐる人を連れてこいとはこりや悋氣でござんすの。地ヲ、よい

合點さつきにから此胸の内くら〳〵と煮えかへる。本妻ぢやもの悋氣せいでは。とても悋氣と見らるゝからは逢はせます事ふつつりならぬ。詮ない事に隙入れずと去なしやんせ〳〵。詞ムウそんなれば景清殿は實正かくまうて置かしやんしたの。ハテ入らぬ念を入れる人。夫が女房と一所にゐるが珍らしいか。いや珍らしうはない其一言を聞から爲。地サア女子ども合點か心得ましたと一樣に。隱し差いたる一腰の鍔を鳴して聲々に。フシ通しはやらじと詰めかくる。大宮司娘を押圍ひ。詞ヤレ誰なれば女のざいに此體は與がつたり。地逃げ走りする我々ならず仔細を語れ名を名乘れ。詞ヤア小癪な事いはずとも景清を爰へ出しや。其上では言やらいでも名を名乘る。地それは無體景清は三年このかた在所を知らず。いや知らぬとは言はせぬと。爭ふ半へ根井の太夫走著き娘を制し附々を押鎭め。詞大宮司通夏といふは御邊よな。我等は根井の太夫希義といふ者是は我が娘。この度鎌倉をお暇申し。江州に蟄居する其儀はいふに及ばず。過ぎつる源平屋島の戰ひ和主が聟上總の景清。箕尾谷四郞と合戰の勝負それも聞及ばん。その箕尾谷と申すは某が養子聟是が夫。その場の恥辱面恥かしくや思ひけん。今以て行方知れず。夫を思ふ女心景清に遺恨を含み。今日此所通り合はせしを幸ひ。景清は和主が聟なれば隱し置かんと我にも知らせず此仕儀に及ぶ。殊更景清我が君賴朝公を狙ひ奉る御敵。かた〳〵見逭しては通られず。地色隱して館を捜されば。大宮司の浮沈たるべしサア景清を出されよと。フシ退引きさせず詰めかけたり。ム、扨は聞及ぶ根井の太夫殿よな。最前御息女景清が妾なりと僞りも問ひ落さん爲。とは知らず娘は悋氣に取込み。拙者は却つて御息女に景清が在所を尋ねんと存ずる所。いやはやこちらあちらの仕合せ。地長々返答申すも旅行の妨げ手短かに申さう。平家の一門滅亡の後景清はかた切つて參りもせず便りもせず。此方の娘も懷かしがり。もし在所聞出されればお知らせに預りたしと返答す。詞ヲ、一旦の陳じは尤も。よく分別して見られよ。地色一樹の蔭の雨やどり一河の流れを汲んでさへ人の情は捨てられず。況んや多年の聟舅女房を預ける程の景清。便りもせず參らずといふとも誰かさあらんと思ふべき。鎌倉殿御不審のかゝらん時も其言譯で濟むべきか。よい仕合せで歷代の神職沒收せられ。子供の流浪笑止々々。詞この理を辨へず隱し通すか根井の太夫惡い癖あり。かやうの事詮議しかゝり。言はずばよしとて搔いやりには捨て置かず。地色館を捜さうか

但しは隱し置かず存ぜぬといふ證據。當社明神はいふに及ばず天神地祇を驚かし。誓言立つるか二つ一つ返答あれ大宮司と。ちつとも心赦さぬ面色大宮司横手をはたと打ち。詞ハア、御疑ひ御尤も誤り入つたり根井殿。聟の不便も娘の可愛さ。子供等が流浪に換へ所領に換へ地何しに包み申すべき。エ、淺ましや神に仕へても凡夫心今日の事を知らざりし。平家の一門都落ちの時此娘。景淸と一所に落行かんと言ひしを。船に浮き波に臥し憂目に逢はん不便さに。預けんといふを悦びて預かりし其時。夫婦の緣切らせて預かるか取戻さば。今の疑ひは受けまじきに。よい年をして智慧なしと根井殿笑ひ給はん。恥かしや面目なやとはら〳〵と。フシこぼるゝ涙を押さゆれば。なう私も西國へお供せば一思ひ。なま中に預けられ夫は生きてありながら。二年三年便りもなく捨てられし我が命。惜しいではなけれども若しやと卑怯な心から。段々御苦勞させまする。赦して下され父様とスヱテかつぱと伏して。泣き居たる。詞娘泣くな分別ある。なう根井殿。我が先祖は尾張の國のみやづこ。明神を戴き祭りて千百年。かりにも曲らず僞らぬ。誠を以て仕へし身の大凡俗と等しく。誓言立てん口惜しとは思へども。地恥も人目も子供等には替へられず。只今誓言立て申す疑惑の念を祓ひ給へ。淸め給へとつい立上れば。ア、暫らくと根井の太夫走り寄つて抱きとめ。よしなき所望誤つたりもう誓言に及ばず〳〵。今の悔みの御一言わが心魂を貫いて。貴殿を疑ふは神を疑ふ勿體なし。とかく長居も神慮の恐れ早速ながらお暇申す。詞疑ひ晴れてござらうか。參る〳〵大宮司殿。地再會必ず期あらんと娘々も笑顏をつくり。隨分御無事で御達者でおさらば。さらばと三重へ立隔つ。フシ唐土人も。仲麿の歌を知るべにふりさけて。今や見るらん春日なる。スヱテ三笠の山に出づる月ホオクリ空も。五つになる鐘の世上に響く東大寺。大佛供養も今日明日と諸國の人の參詣を。まつや町筋せばしとて山門の片邊り。取葺屋根に置く露に月の光も素海松茶の。暖簾の紋は釜敷に。土竈のフシ煙絕え間なく。買うて行く人。賣る人は。女主の顏貌むつくりとして味さうな。蒸立て饅頭買はしやんせ世間に類は多けれど。歌には靑丹よしと詠み奈良饅頭の。餡もよし。殊更神の御誓ひ慈悲饅頭のむし〳〵は三笠の山に咽が鳴り。五重甑に立つ湯氣に春日の。里は賑へり。地こゝに平家譜代の忠臣上總七兵衛景淸。薩摩五郎信忠といふ者あり。一門御落命の折柄ともかうもなるべき身の。生は難く死は易し。長

生して主君の仇を報ぜんものと山林に身を窶れ。時節を窺ひ居たりしが今度大佛供養のため。頼朝上洛とほのかに聞いて。心を合はせ隱家をゐでの玉水日は暮れて。急げど初夜に奈良坂や。饅頭賣る家の床几の端暫く。フシ御免と佇めば。詞是は何處より御參詣なされしぞ。夜に入りて御苦勞や。ゆるりとお休み地遊ばせと挨拶片手に煙草盆。お二人ながら酒のなりそな御風俗。お厭かは知らねども所の名物お慰みにと差出す。饅頭より先づ女房の。フシ笑顔ぞ一口喰はまほし。地景淸は只一心に術を工夫し返答せず。五郎店借る追從に。詞尊い寺は門からと申すが。そもじの風俗で饅頭の味も思ひやられた。見れば暖簾にも行燈にも書いてある。家名は十一屋か。この心推量致した。饅頭を十買へば一つ添ゆるといふ心で十一屋と付いたのさうか〱。ほんに是もよい御推量。成程左樣と申したいがこつちの心はさうでない。朝七つから店出して夜の四つに店仕舞ひ。七つと四つの時を合はせて十一屋と申します。是も尤も。朝々上洛召されしと聞く付々もさぞあらん。其外の參詣諸國の入込み。左程精出さいでは賣り届くまい。なんと斯程結構に。諸堂廻廊以下再興し。肝心の此山門ばかり殘したは心あつてか。但しは節約か。音に聞いた程にもない。頼朝は地吝いやつだとフシ打笑へば。詞いや〱此山門は往昔。聖武皇帝樣といふ王樣の御建立なされたなり。平家の惡坊主淸盛入道が。この大佛を燒いた時殘つたは此山門ばかり。能登守教經といふ大惡人が。大佛樣へ射かけた矢が反れて此山門の垂木に當つた。矢の根矢幹が今にある畫よう見さしやんせ。如何に怖い者がない惡い事がしたいとて。日本第一の佛樣を燒き崩すといふ樣な惡人がま一人とあらうか。佛ばかりかあの堂では五百人八百人。此堂では千人二千人。人ばかりも四千人程燒殺した其報い。火付けの大將頭。中將重衡。京鎌倉を引渡され。はては衆徒の手にかかつて七日晒され首斬られた。其跡が山門の脇にある是も明日見さしやんせ。左樣に段々と惡行の積り積つた果は平家の今の樣。主にも家來にも頭を差出す者一人もない。此山門に手もかけず其儘殘し置かるゝは。末代平家の惡逆を。人に知らせて嗜ません世の見せしめぢやとの物語。私が樣な何も知らぬ者でさへ。尤もさうに存じますと。地それと知らねば女の口フシ齒に衣きせぬ長咄。地餘所に聞きなす景淸が本意なさ悲しさ口惜しさ。胸もフシ碎くるばかりにて忍び。涙にくれければ。地生中のこと問ひ出して五郎も返答あぐみはて。詞あつて過ぎた事には

必ず付けつ添へつがあるもの。なんの平家ばかりがさう惡うもあるまいと言消せば。いえ／＼こんな事ではない。まだ大反れた惡事がある咄しましよ。いやもう承るに及ばぬと。聞かぬ先から耳驚かす四つの鐘。響き。渡れば あれ四つが鳴る店仕舞ひ時。各樣も宿取つてお休みなされそこ退いて下さんせと。いふを幸ひ過分。過分と立退けば。竈に水打ち行燈消し道具一つも取直さず。片方の葭簀さら／＼と引廻せば。五郎見かねてこれ女中。藏へ入れた物も盜み取る世の中。それは近頃不用心。まそつと念を入れて置かれよと氣を付ければ。いえ／＼。盜人の徘徊したは平家の代の時。今の源氏の慈悲深い。靜謐な世にそんな氣遣ひちつともない事。戸さゝぬ御代とは今の時代でござんすと。口も手許もしやん／＼と仕舞うて別れ立歸れば。よしない事を又いうて。一度の恥に二度の口。塞ぎ兼ねてぞ見えにける。景淸五郎をかたへに招き。聞かれたるか五郎殿。賤しき女の口すら斯くの通りなれば。御一門の身の上を世上の嘲弄思ひやる。主君の仇を報ぜんと死すべき命を存ゆれば。死にまさる恥を聞く。この山門に鏃矢幹を其儘置いては。末代平家の譏を殘す。賴朝を討つは是を取捨てゝ後の事とは思はずかと囁けば。げにもげにも口づから傳はる事は中絶する折もあり。直に見するは情なし。というて夜の手業には取捨てもなるまじ。人間を窺ひ晝の事といはせも立てずヤアまだるし／＼。一心の眼力を以つて探さば眞の闇も晝同然。幸ひ人も靜まつたり。御邊の足首を摑んで差上げば門の冠木に手は屆かん。それを傳うて二階へ上り垂木を一々探して見られよ。なう其段は御免あれ。御存じの我等眩暈病み。高い所へ上れば忽ち發る。土の上の働きは何なりと指圖には背くまじ。ア、聞いてさへふら／＼と目が眩ふやうなと。頭を抱へ胸押撫づれば。よし／＼人は賴まじと草鞋ぬぎ捨て身を固め。柱を傳ひ上らんと立寄る所に。上り大路の松蔭より。人聲足音高提灯見え來れば。折惡しゝなう五郎殿。やり過し後又こそと打連れ木蔭に忍びける。山門の内より只一人長刀を杖につき。のつさ／＼と來る大衆雙方行逢ひそれと見るより。ハア、岩永左衛門殿候な。御家來にも仰付けられず御大身の輕々しく。御自身の御勤め御苦勞なりと挨拶す。ヲ大日坊か。身は御臺所の旅館へ參上し只今退出申す。夜中に只一人いづかたへ參らるゝ。元來和僧は平家の譜代上總の忠淸が弟。景淸が叔父なれば我君のさす敵。疾く誅せらるゝ

筈の所を身が取持ち。兄弟とも不通致し只今は平家の縁なし。御疑ひ晴るゝ程の御奉公申上げさせんと請合つて接いだる首。何か打捨て平家の餘類を尋ね。一手柄なうては此左衛門まで虚言者になる。随分心がけ召さ。ヤ。それに付き和僧が甥の。景清。存らへて此世にあり。及ばぬ仇を報ぜんなどと斯様の時節心がけ。和僧を頼み来まいものでなし。さあらば快よく頼まれ密に知らされよ。討つてなりとも搦めてなりとも岩永が。高名にせねば武士道立ち難し其意趣は。景清に遺恨はなけれども。箕尾谷の四郎といふ者景清を付狙ふと聞く。その箕尾谷に討たせては根井の太夫が娘を我が手に入れる事叶はず。景清を我が手で仕舞ひ箕尾谷にも鼻あかせ。根井が娘を我が手に入れたさ。事を分けて頼み申す合點か。是は何より易い御用。ちつともお心苦しめ給ふな。斯様な御用あらうとは存ぜず。我等が高名に仕らんと工面致し置いたれども。其許へ奉る　安堵なされと懐中の。一通取出し手に渡せば。提灯持てと火影に照らし。見ては悦び読んでは頷き。戴いて懐中し出来た〳〵御坊過分。委細は其時さらば〳〵。提灯参れと夕露の フシ 草踏散らし通りける。後に立つて景清は始終とつくと聞きすまし立出で。貴僧は大日坊にて渡らせ給ふな。我こそ只今岩永に頼まれ給ひし。上総の七兵衛景清と聞いて俄に仰天顔。イヤ驚き給ふな悉く承る。岩永に御返答は間に合ひの僞りか。眞實の御所存なれば手は見せぬ。御出家と申し叔父甥の誼を存じ。下手くろしう念に念を入れ申すといはせも立てずさて〳〵面目ない。佛祖冥利今の返答が眞實でたまるものか。いやと言へば即座に命を取らるゝ。それ悲しいではなけれども。存へて善果を積まんため間に合ひとも〳〵。御一門の滅亡聞くと等しく案ぜしは和殿が事。健固の對面満足せり。今宵こゝへ来りしは深い願ひあつての事。打明けて語られよ何れの道にも疎略なしと。無二の詞に心解け手をつかへ。貴僧の爲にも平家は主君。たとへ出家の御身なりとも。あへなく頼朝に亡され給ひし鬱憤は残る筈。あはれ景清に力を添へ頼朝が假屋へ忍び入る。手引をなされ下されと スヱ 思ひ。込うでぞ頼みける。ヲヽ易いこと〳〵。手引せんと抜打ちにはつしと打つをひらりとかはし。其手を取つて引かづき大地へどうど打付け乗かゝり。ムウ叔父ながら實の入つた悪人ぢやの。掛替もない甥の汝を勘當なされ。追拂はれし我が親の忠清殿は目水晶。ヤイ親程こそあらずとも景清が底の根性見抜くまいか。最前かく

と知つたる故眞二つにとは思ひしが。叔父は親の孝もあり禮儀もある。兎角いふ内心を翻へせば。互に主君の御爲と堪忍せしももう是まで。觀念せよと挫ぎ付くるヤア待て景淸。ちつと緩めて言ふ事いはせい。おのれ叔父を殺したらば從來がようあるまいぞ。近い證據は左馬頭義朝が子の源太義平。叔父帶刀前生義賢を殺した故。惡源太と異名を付けられ。六條河原で首斬られしを知らぬか。おのれも我を殺したら。惡七兵衞と笑はれんよう分別せよと減らず口。ヲ惡七兵衞は愚かの事。鬼七兵衞蛇七兵衞とも言はゞいへ。何ともないと腮に手をかけ首捻ぢ切らんとする所を。薩摩五郎飛んで出で利腕取つて引退くれば。透をあらせず大日坊弓手の腕しつかと取り。うんと擊かけ景淸が兩手を二人が土に捻伏せ。やい景淸。いかに二相を悟るとも薩摩五郎が此體は合點が行くまい。大日坊と某つひに對面はせねども書狀を以て牒し合ひ。此度の大佛供養を幸ひ頼朝を討たう。いざ往かう／＼と某が勸めたは。頼朝を討つでない汝を眞斯うせん言合せ。深い工思ひ知つたか。なう大日坊。我が出るを待兼ねたであらうの。待兼ねた段ではない。景淸が名を聞き貴殿も御出でとは知つたれども。顏見ぬ内は幾瀨の案じ。書狀も岩永の御目にかけ見え次第同道申す筈。幸ひの土產サア繩打つて連行かん尤もと。腕捻廻すにちつとも動かず。景淸くつ／＼と吹出し。もうぬかす事それ迄か。死人になつて物はいはれぬ。言うて置け／＼。ヤア死人とは誰が事。言ふ事もうないと汗水になつて身をもがく。言ふ事なくば是見よと左右を一度に腕がへし。ころ／＼轉び打ちながら生捕には叶ふまじ。首にして連行かんと拔合はせ。挾み立てゝ斬りかくる得たりやおうと渡り合ひ。互に磨きし刄の光。月に嘯く春日野の飛火を散らして〽斬結ぶ大日坊が頰框。頤かけて斬付くる其太刀風に薩摩五郎。一人立では叶はじと跡をも見ずして逃失せける。エヽ大腰拔けの討漏せし腹立ちと。大日坊に乘つかゝり吭のくさりをぐつぐつと。突きならす鐘の聲。一つ。二つ。三つ。四つ五つ早七つ〳〵か。八つ九つも我が耳へは入らざりし。やがて店出す饅頭屋が葭簀の陰に忍びゐて。とくより窺ひ見るとも知らず衣引剝ぎ袈裟もぎ取り。ずんぼろ坊主に剃ぎむくり一色殘さず搔抱き。死骸を蹴散らし忍び行く叔父の首斬る其代り。名字の上總も言切つて。惡七兵衞景淸とは此時よりぞ申しける。女房葭簀を蹴出で扨こそ／＼。景淸と見た目は違はぬ君を狙ふに疑

ひない。斯ういふ内も御臺様の御前が氣遣ひ。假屋へ行かうか但し夫に知らせうか。いや。景清が落先を見付けて置くが肝心かんもん饅頭屋が。蒸立て見よと慕ひ行く。餡もよし又思案よし健氣。なりける春日山。鹿立つ峰の朝風に。敵の榮華や。散りぬらん。上總の七兵衛景清は。今度の供養に頼朝を討つて濛霧を散ぜんと。扮裝つ衆徒の似せ姿素肌に。きたの伏縄目。滋金物の大鎧。草摺長にさつくと著上に。衣の玉襷。袈裟を結んで鉢卷し。敵を冥途へ送りやる。十王頭の脚當に我身を守護の毘沙門小手。重代の痣丸。脚緒長に結びさげ。跡に續きし女房の。心しめたる高からげ油斷せぬ氣は一腰の。鯉口早く抜きかけて附從ふともしら柄の長刀。小脇にかい込み見渡せば。廻廊諸堂悉く。家々の幕兵具を飾り警固。嚴く見えたりける。

音せで通らば惡しからんと所々に大音上げ。警固怠り給ふなと呼ばはつて駈通る。こゝぞ頼朝の假居と思しく。雙白の大幕風に靡いて悠々たり。サア仕果せし嬉しやとのつさ〳〵と歩みしが。いや〳〵。内も用心さぞあらん。千里の馬も蹶き。侮つて不覺を取らば一期の瑕瑾。不敵だては無益ぞと汀の鷺の小鮎を。狙ふ忍び足。待てと一聲かければ。さしもの景清びつくりし振返る。なう肝の太い景清我が君を討たうとは。あたゝか饅頭屋の女房と思やつたらあんの外の食ひ違ひ。誠は本多の近經が妻の唐綾。昨夕逢うた覺えてか。一寸も奥へはやらぬ返せ〳〵。ヤア小癪なり。女相手にする景清ならず。すつ込んでゐよと取合はず。いや〳〵。そつちにせいでもこつちになると。すはと抜いて打ちかける詮方長刀取直し。石突にて受

流し結んづほどいつあしらへども。女に奇特の太刀捌きヤア隙入る面倒なりと。石突取りのべぐつと當身に本多が妻。目くるめいてたぢ〳〵〳〵。打捨て歩み行く先の幕をひらりと押上げて。打掛もるゝ追取り刀。秩父の奥方玉房御前すつくと立つ。思ひがけなく景清は又びつくりして立ちとゞまる。ヤア〳〵唐綾。誰を見て景清呼ばはり。其景清どれどこに。ハア それこそと敎ゆればいや〳〵。是は所の衆徒。あの扮裝が唐綾目にかゝらぬか。景清ならば平家にとつても仁義を兼ねし勇者と聞く。我が君を狙ふとも尋常に名乘りかけ。神妙の働きこそあるべけれ。卑怯なさもしい姿を替へ。女ばかりの此假屋へ大人氣なう何と來られう。必ず粗忽いやんな。これ坊様。今度の供養に頼朝様は上洛なされず。こゝは御臺所政子様の

お假屋。坊主の來る所でない歸らしやれ〳〵。但しは方角に迷うてか。ヤア〳〵大衆の馳走人。地本多の次郎近經道しるべせよとありければ。はつと答へするすると立出で。詞斯樣の御用もあるべきかと地とくより木蔭に待受けたり。詞我等本多の次郎近經。賴朝公の御諚を請け。大佛供養の內大衆方の御馳走。また猥なる仕方あれば戒めも我等の役。地方角に迷うての推參ならば道の案內せん。狼藉ならば計ふ旨あり。サア返答を承らんとフシ空知らずしてにちかゝれば。詞ヤアいまく〳〵しい何の坊主。形を替ゆるは一旦の計略賴朝を討つに二つはない。上總の七兵衛景淸見て置けと。地頭を包みし袈裟かなぐつて捨てければ。扨はと二人の女も詰めかけ〳〵眼に氣をつけ油斷なし。近經暫しと與を諫め女房を制し。詞ヤア景淸。我が君を平家の仇主人の敵と。狙ひ奉るは以ての外の僻事なり。太政入道朝恩を忘れ。動もすれば天子を惱し民を苦めし其積惡。地後白河の法皇院宣を賜はり。平家を亡せよとの勅諚なれば。平家の敵は身の驕り。我が身を我が身の敵とは知らざるか。詞良禽は木を見て棲み忠臣は君を選んで仕ふ。心を改め只今より。賴朝公に奉公せよと呼ばはれば。ヤア賴朝に奉公せよとは何の囈言。二言と吐かば捻り殺して地くれんずと齒がみをなし。エヽ口惜しや今度の供養。賴朝上洛したれども。かくいふ景淸を始め平家の餘類を恐れ。御臺と世上へ思はせん爲。わざと女ばらを召連れたりと薩摩五郎が注進を。彼が我を誘ひ出す計略とは心付かず。嬉しや本意を遂せんと。忠を一途に形をやつし忍び入り。よしなき骨を折つたよなフシ景淸が。地心ざす敵は賴朝一人臆病風引込んで鎌倉に隱れかゞめば力なし。詞女ばら本多風情五萬十萬斬つて罪造り。本望のほの字にも屆かず。先づ此度は歸る〳〵。地時節を待つて賴朝が頭は景淸が手裡にあり。かねて名殘りを惜しんで置けと傳へよとしんづ。しんづと立出づる所へ手の者引具し。岩永左衛門どつと押寄せ。詞ヤア腑甲斐なし近經景淸をなぜ返す。手に餘らば左衛門が受取つた。薩摩五郎はなきかあれ討ちとめと呼ばはれば。地本多は左衛門に打任せ皆々制して假屋に入る。身輕に扮裝つ薩摩五郎飛んで出で。詞なんと景淸。五郎が計略段々とこたへるか。我等岩永殿の御蔭にて知行にも主付く筈。羨しくば降參せよ。傍輩のよしみ取次いで得させんと罵つたり。景淸眼をくわつと見開き。逢ひたかつたにようせた。汝ばかりには殺生も佛も入らぬ。地手並はかねて知つつらんと大白黑鬼の其勢ひ。長刀柄長

くおつ取りのべ微塵になさんと渡り合ふ。百獸の洞の内獅子の荒れたる如くにてォクリはらり。はらりと薙立つるフシ其勢に。地岩永左衛門人一番に逃失せたり。主人が逃ぐれば手の者ども影さへ見せぬ其中に。五郎一人が勝手は知らず度に迷ひ。うろたへ廻るを引捕へ。詞せず様もなき人非人と大地にぶち付け。しつかと踏まへ地一捻ぢ捻ぢてぐつすりと。首引抜いて突立ち上り。見れども假屋鎮まつてフシ手さす敵もなかりけり。地よし〳〵今度は遁すとも我が見込んだる一念力。岩にも入り。雲にも乗れ。鎌倉山にも篭らば篭れ。山を劈き岩を割り。つひには本意を達せんものと長刀。小脇に掻込んでしんづ。しんづとフシ出で行く道。狭からぬ天が下。敵を助くる仁者の道。古主を忘れぬ義者の道。歩むも道の道ながら誠の。道は世々にひく弓矢の。道をしるべにて行方。定めずなりにける。

第　二

地清水や大慈大悲の深如海。誓を結ぶ御縁日その佛閣の下河原。菊水の邊の辻講釋漢楚軍談三國志。講師關原甚内と紙に記し柱にかけ。紙衣の長もいき詰まりし浪人らしく一腰ぼつ込み。聽衆を引受け見臺にかゝりフシ本引開き素讀みする。詞此時漢王自ら丞相府に至つて迎へ給ふ大將軍を見れば韓信なり。樊噲色を失うて御車の前に拜伏して申しけるは。韓信は漂母に食を乞ひ市に胯をくゞりし者なり。今大將軍に拜し給はゞ項羽聞いて大きに笑ひ天下の諸侯も漢中に人なしと嘲らん。必ず止め給へと申しければ蕭何走り出で樊噲無用の舌を動かす事勿れ。我不才なれども丞相の職にゐて大將軍を薦め。事既に定つたり。樊噲を縛づて獄に下し給はずんば。諸大將皆無禮に倣はんと申しければ。漢王武士に命じて樊噲を縛らせ給ふと。さて昨日の講釋は漢楚軍談五卷目。張良が割符を以て蕭何曹參兩人が。韓信を大將軍になされと勸め申した所でござります。今日はその次漢王壇を築いて韓信を拜すと言ふ條。扨只今素讀致いた樊噲が人柄は。各々方の思召すは定めて色眞赤に頬髭荒れ。我儘氣隨の大力日本で申さば。ア坂田の公時か公平などが様にあらうと思召しましよ。なかなか強いばかりでござりませぬ。智慧第一といふ張良陳平にも劣らぬ大分別者と聞えました。時に。分別といふは。此本文の如く樊噲が韓信を大將軍に拜なさるる事は。無用なりと止めたる科。それ縛れといふや否やがらり後手三寸繩。牢屋へついと引いて參つた。そこで供先がもやつき出した。あそこではちよびくさ爰

ではぶつくさ。何ぞと聞けば樊噲殿さへあの通り。況や我等韓信を大將軍になさるゝ事御無用なりといふたら最後。だまれ／＼と幾千萬の大將士卒皆韓信が手下に附いた。なんと我が身一人縛られて大勢の口をとめ韓信が下知を聞かせた樊噲は。力ばかりでない大分別者ではござりませぬか。地色尤もと聽衆も聞取り餘念なく。心上なる空かき暮れ俄に一村降りくれば。やれ大降と夕雨の足もとまらず聞く人の。皆ちり／＼に逃歸り殘るは甚内只一人。邪魔な雨やと夕立の跡晴れ渡る講釋小屋フシ又人寄りを待居たる。降る雨は。とても角ても凌ぎなん。涙の雨は晴間なく凌ぎかねにし衣笠は。長地父大官司に誘はれ親子密かに故郷を出で志す方そんじよそこと。音に聞きつゝ音羽山フシ清水を尋ね來りしが。地色片方を見れば講釋小屋に人待つ風情。幸ひと立寄りて。詞これ物問はう五條坂はいづくぞや阿古屋といふ遊君の。所を知らば教へてたべ。ハア是はお連れも女中がた。遊興なさるるでもあるまいハテ面妖な人をお尋ねなさるゝな。されば阿古屋といふ女に逢はいで叶はぬ我々故。尾張から遥々尋ね參つたり。はてそれは遠方から御大儀千萬。これ此道を南へ行當り左へ上る道がある。それを一丁半程いて花扇屋の戸平次と尋ね。阿古屋と問へば隱れがない。是は／＼忝ないさりながら。名も家名も覺えにくい筆があらば貸してたべ。いや筆は有合せず。其お持ちなされた扇子を鼻へ斯うお當てなさるれば。花扇地つい思ひ出さるゝと座興も老の律儀に受け。此扇を鼻へ當てればはな扇コリヤ出來た。講釋なさるゝ程あつて頓智發明覺えた覺えた。御禮は重ねて／＼とフシ娘を誘ひ尋ね行く。地かゝる所へ捕つた／＼と聲高く。檢斷所の捕手の役人ばら／＼と馳來り。講釋小屋をおつ取り卷く思ひがけねど豫ての覺悟。甚内床几をひらりと飛び後の高塀小褄に取り。小屋の柱の節間近き陣竹取つて押し撓め身構へし。詞ヤア人違ひか名の誤りか。講釋は致せども召捕らるゝ覺えなし。上を恐れ奉れば刃物に手はかけねども。仔細を聞かぬ其内は繩もかゝらずサア。譯をいへ聞かんと八方睨んで扣へたり。ヤア小賢しき咎め上意を背くか。仔細は御前で直に聞け。地色物な言はせそ打ちすゑて引括れと一番手。十手振上げつつかくるさしつたりと飛違へ。ゆがめし竹の片手を放せば眞甲より片鼻かけ。はつしと彈かれ眼くらんでたぢ／＼／＼。よろぼひ迴り引返す。二番手は刺股を捕つたと突出す狙ひをはづし。沈んで裾を跳ねさすれば向脛をあいたしこ。眞逆樣にでんぐり返り除をあ

らせず三番手。詞梶棒取りのべ巻いて捕らんと突出す。心得たりと身をかはしつつと入つてすてつぺい。微塵になれとしつぺい彈き梶棒からりと投捨てゝべつたり土につくばうたり。地色一人がかりは敵じと大勢四方を取廻し。亂れかゝるを事ともせず脛骨肩骨當る所を幸ひに。力ありたけ人ありたけ箆節を碎き手を碎き。心を碎いて凌ぎけるされども防ぐは只一人。終に大勢折り重なりフシ押さへて繩をぞかけにける。地色物頭半澤六郎成清駈付くれば組の小頭罷出で。雙方の働き具に相述べ目通り近く引据ゆる。六郎立寄り面體より形恰好。とつくと見屆けびつくりし。詞扨こそ〳〵早まつたる事したりな。似は似たれども御尋ねの者には非ず人違ひ。それ繩とけとありければ。地色捕手どもぎよつと互ひに顔見合せ。解き兼ねて立兼ぬれば繩付きもフシ共に。驚く

ばかりなり。詞ヤア關原甚内とやらん繩かけし間もなく解けといふさぞ不審立つべし。我が主人の相役岩永左衛門殿。夜前對顔の節和殿が噂。下河原にて辻講釋する甚内といふ者こそ。平家の侍惡七兵衛景清に極まつたり。月番なれば重忠の手より召捕り給へとありし故。某を召され召捕り來れさりながら。世には似たる人もあり粗忽の仕方すべからずと仰せを受け。實否を聞き繕ふ其内に組の者ども手柄を爭ひ此仕合せ。彼等が麁相は六郎が誤り手を摺り申す宥免せられよ。さるにても一腰を帶しながら。上を恐れ刃向はさる神妙さホウ働きの健氣さ奥ゆかし。地色甚内といふが實名か名乘られよ。披露して爲惡しくは計はじと。立寄つて繩解きほどけば氣もほどけフシ扨はと。安堵してげるが。地色飛退つて手を突かへ。詞是は却つて恐れ入りたる御詫言。日本

一の剛の者と聞き及ぶ景清に似たる故。御疑ひに預りしは身に取つて恥辱に非ず。重忠の御内に誰あらん半澤六郎成清殿。地色繩解いて下さる上何を不足に。一言の御恨み申すべき殊更身の上御尋ね。申さねば結句憚りあるに似たり。詞關原甚内と申すは今日渡世の假の名にて。誠は井場の十藏一幸と申す浪人者。一人の老母養育の爲。面をさらす辻講釋物賜べなうと乞はさるばかり。地色世に住む甲斐もなき身の上。お尋ねによつて物語御恥かしと差俯向き。スヱテ涙ぐみて見えにける。地色六郎下部に持たせたる鳥目十藏が前に置かせ。詞和殿古き文にも見つらん。龍も池中にある時は蚯蚓に類を同じうすれども。上天の氣を得る時は勢ひ宇宙に溢ると見えたり。地色今浪人の世渡りは何をしても恥ならず。立身出世はやがての事隨分老母に仕へられよ。輕少ながら此鳥

目老母の方へ進上申す。詞必ず〳〵人違ひに渡世の邪魔せし心付けなどと思はれそと。聞きも敢へずいや〳〵〳〵。只今一錢でも申受けては人違ひの堪忍代となり。詫言の料などと雜人の口にかけられては。貴公も我も一分立たず無用なりと。戻さんとせしが待て暫し地老母に下さるる志。突返しては無禮の至り申受けては快よからず。ハテ何とせんかとせんと邊を見廻し。それよ〳〵是奉る觀世音。老母の二世を加護し給へと片方に立てたる清水のフシ賽錢箱へ投込んだり。地なう其義心を見るにつけいよ〳〵粗忽面目なや。此旨主人に言上すべし又對面せんいざさらばと。一禮述べて立歸る權威に募らず誤を。誤り入りたる六郎が。素直も秩父の家柄とフシ却つて譽めざる人はなし。地十藏跡を見送りて。詞エヽ花も實もある武士や。萬一外の役人ならば己が粗

忽を包まんと。何のわけも聞入れず今時分は後手にヲ好かぬ事〳〵。こんな時は早く歸つて母者人の地お顏を見るが身の祈禱と。一人呟き是はさて。小屋を粉灰に打ちめいだと散り散ろばひし木や竹をフシ拾ひ集むる折こそあれ。地色深編笠に世を忍ぶ浪人めけども鰭ある男。菊水の邊に立休らひなう講釋殿〳〵と小手招き。ヤ誰ならんと立寄つて差覗き。詞是は御浪人樣此頃は見えもなされず。今日は觀音の御緣日定めてお參りなされうと。今朝から心待ち致した今御參詣かお下向か。お聞きなされて下さりませ。私を惡七兵衛景淸ぢやと申して。重忠の家來半澤と申す者。たつた今參つて召捕らるゝ處人違ひに極り歸りしが。御覽なされ小屋も打碎かれ。地色お腰掛けられと申す所がないと氣の毒がればそれ餘所ながら見申した。詞なう其惡七兵衛景淸とは身ど

もが事さ。エ是は思ひがけもない其景淸樣が何故に。去秋お目にかゝりしより御不便を加へられ。今頃拂底な金銀を。毎度々々なぜ下されたと肝潰せばいやまだ跡に段々ある。一時に肝潰すまい。今日半澤六郎が召捕りに來りしも。御身が形恰好この景淸によく似たる故。其似たる故某豫て思ふやう。天下の武將賴朝を狙ふ我なれば。却つて我を詮議も嚴く用心もまた隙あらん。賴朝に心ゆるさせ油斷を窺ひ討たんには。此講釋師をこまづけのつ引きさせず腹切らせ。景淸運拙く切腹せしむる者なりと。書置を添へ置かば。すは景淸こそ腹切つたんなれと。京鎌倉心ゆるし油斷は必定。其虛を窺ひ討たんものと分別し。折々與へし金銀は。和殿を殺さん命の價とは知らさるかと。地聞いてぎよつとし驚き顏の色違へば。詞いやぎよつとせらるゝな。まだ驚く事がある

花扇屋の阿古屋が兄の井場の十藏殿と。詞いへば大きに仰天し。詞して〳〵私の本名阿古屋と兄弟といふ事。なんとして御存じなされたと興さませば。面體恰好の似たる貴殿さへ。景清かと詮議ある我なれば贔屓を推量せられよ。都に足は止め難し一先づ立退かんと思ふにつけ。五條坂へ立越え阿古屋に出逢ひ。右の段々を語れば涙を流し。其講釋師甚内と申すは井場の十藏といふ。我が兄なりとの物語。地色我も聞いて興さめしが假初ながら馴染み深く。子まで懐胎せし其中に。今迄それとは何故知らせざりし。其心では我が事も兄には咄すまじと尋ぬれば。詞大望ある御身の上兄にも心置かれ。露ばかりも知らせずと我を庇ふ阿古屋が貞心を聞くにつけ。地色我が禍を貴殿に塗らんとその時まで思ひ詰め物語りし。我が惡念空はづかしく一生赫めぬ此面を燃え立つ樣に覺えしぞや。詞知らぬ内はそれも是非なし。知つては片時も捨て置かれず。地色今宵立ちのくを明日へ延ばし我が心底を打明け。緣者の因を結ばんとわざ〳〵是まで參りたり十藏殿と。スヱテ思ひ侘びたる面色に。餘りの事に呆れもせず。詞扨は阿古屋を不便に思召す方よりと。老母が方へ度々のお心附も貴公よな。地色ハアはつとばかりに差俯向き暫く。フシ詞もなかりしが。地色エ、悔しや此事を昨夕にも今朝にも存じたら。半澤が來りし時我こそ上總の景清になり濟して。仕樣模樣もあつたもの遲かりし殘念やと。拳を握り身を震はし フシ目をすり。擦るばかりなり。詞なう其心底聞いたる故。逢はで行かんも本意なさに是迄は來たつたり。構へて〳〵我が事は心の端にも懸けらるゝな。骨柄といひ器量といひ。奉公すとも易かるべき身なれども。地色老母の末期を見屆けんと諸人に面をさらし辻講釋。三錢五錢の志に命を繫ぎ。恥を忍ぶ親孝行感じても猶餘りあり。阿古屋が緣に連なる我なれば。貴殿の老母は我が母なり七十に餘り給ふと聞く。此世の逗留末近し起き臥し心を付けられよ。詞著古したれども此羽織これを貴殿へ參らする。今迄送りし合力は塵塚に捨つる塵埃。地泥に投ぐる石瓦に劣つて。恩にあらず情にあらず。是ばかりこそ景清が誠の心を染め羽織。朝夕肩に打掛け一所に孝行フシ頼み入る。地心せかずば立寄つて老母のお目にもかゝるべきが。世をも人をも忍ぶ身の無禮御免と傳へてたべ。隨分健固に又對面お暇申すと立出づる袖に縋つてなう暫らく。詞心は千萬止めたけれども。忍ぶも且は智略の一つ。して〳〵落行く先はいづく言ひ殘されよ。さればく〳〵今宵は上總の醍醐に一宿し。其行先は又そこにての

思案次第と思はれよ。ヲ尤も／＼何をいふも爰は途中恐れあり。詳しき事は跡より追付き物語。地我が行くまでは必ず必ず逗留あれ。これ斯う／＼と耳に口外には誰も菊水の。井戸を隔てゝ囁き合ひ先づそれ迄はさらば／＼。ヲヽさらばと互ひの目禮思はずもフシ映る姿の。水鏡。詞それ十藏殿その顔が此面と。なう景清殿その面體が我面と似たではないか。似た段か。思へば半澤六郎が見違へたるはハヽヽハヽ笑うて別れ別れける。勇者は離別に歎かずとはかゝる。事をや三重へゆふ閒ぐれ。フシ物の文目も。見ぬあたり。地小家がちにとすさみぬる筆の跡には引きかへて。町の模様も風俗も。えならず見えし五條坂黄昏。時を戀のひる懸行燈の灯影さへ。本フシ白く咲きたる軒の端。地色花扇屋と隠れなし。家名ばかりは人めきて主人を問へば戸平次とて。こゝら名うての横着者色と慾とを二道に。フシ稼ぎ歩きて歸り足。地表の口よりわめき聲。詞こりやどいつも店にけつからぬ。たつた今日が暮れたにどこへすつ込み臥つてをるぞ。竹め林めと地呼立つる下女も小女郎も所ずれ。詞ヲウヲ結構な旦那様。内はお客でてん／＼舞ひお料理よ吸物よと。上を下へと返してゐるに。今頃戻つて内外の者は何になれ。アレお手が鳴るアアイ地お林ちやつと往てたもと。忙がしがれば何ぢや客が取れた。詞町人が二本か喰ひたい物喰うてずいぢやないかよ。いえ／＼歴とした旅のお方。お供の衆に問うたれば尾張の國のさるお方。今度京へ忍びの御遊山。内方の阿古屋様を聞及んでのお望み。隨分御馳走申せと現銀の支拂ひ。地昨日の晩の丁字頭がこんな小判になりやしたと。一包み差出せばこりや出來しをつた。天晴忠義と金に逢うてはほや／＼顔。障子の隙より奥差覗き。詞さうして阿古屋は座敷に見えぬが。こりやどこに何してゐる。いえ／＼阿古屋様は晝過ぎから。祇園の佐野屋へ送つて。それから直ぐにいつもの清水参り。地ほんに奇特なお様でと言ふを打消し何が奇特。詞嬉しがりもしられぬ觀音殿へ參らうより。此おれに靡きをつたら何ぼ程利生があらうぞ。地イヤよい事を思ひ出した清水へ逆寄せして。戻る所ひつ捕らへ日頃の思ひ晴らしてくりよと。言捨てゝ出づる門口へ町の歩きが申し／＼。詞何事が起つたやらお代官のお使が。名主様を會所へ呼付け目の拔ける程叱つた上。花扇屋の戸平次を連れて來いと苛立の口上。サアちやつとござりませ。ハテきよと／＼しいあの面わいの。高が何ぞの言渡し。ちよぼいち張るな畏つた第一の宿ならぬ心得たと。地判さへ押せば濟む事

留守ぢやとは吐かさいで。詞因果な猿松め。サア失せをろと先に立ちフシ膨れ面して出でて行く。白波の。寄する渚にあらねども。スヱテ愛も流れの假枕。歌跡なき夢は。つい覺めて。送り迎ひの。袖の露ナホス伊達にふつ〱。阿古屋とは。浮世にすねし戀の闇。照らす廻しが提灯に小オクリそれと。印の花扇。主人がもとにフシ立歸る。奥の座敷に。待つも久しき宵の月。あやしの簾かけ造り障子半締おし明けて。隔てぬ中の親子連れ。地前の大宮司通夏は娘相手の氣晴らし酒。人の氣を汲む小女郎が酌。お待ちなされた阿古屋様今お歸りと知らせるにぞ。國許までも隠れなき花の都のお女郎。さあ〱是へと老人のフシ不束ならぬ挨拶に。地様子ありげの一座とは見て取る阿古屋が胸の中。上面は伊達の勤めぶり。詞ほんに浮世は味なものこんな侘びた所さへ。色里の數に入り遠い國まで隠れなく。阿古屋を見ようの呼ばうのと。心づくしに預るは苦界する身の身に取つては。忝ないとも本望とも萬の事は差置き。飛んでも戻る筈なれど。地色心に任せぬ憂きふしとて立破られぬ先の座敷。斷りたら〲やう〱今遅いは赦しなさんせと。フシ煙草吸付け差出せば。地女中は煙管戴きて花も實もある御仰せ。先づ盃とも申さうが。父様とても自らも尋ね聞きたい譯あつて。心がせけばと差寄りて。詞平家の侍七兵衛景清殿。過ぎつる壽永の秋の頃御一門の御供し。西國に下り給ひしが御身の上に恙もなく。都に歸りますと慥な便り聞きながら。終に一度の便もなし。そもじの事は豫てより聞いて知つたる深い中。七兵衛殿のお身の上。地御座り所も御存じならめ姫御前は相互。語つて聞かせて給はれと打付けに問ひかけられ。扨はといよいよ心にをさめ。詞其お尋ねは何の事。七兵衛さんやら八兵衛さんやら一座流れのお客の名。當座は覺えてゐもせうが跡が跡迄それがまあ。地色寺方かなんぞの様に過去帳に付けては置くまいし。わしや知らぬわいな。殊に深いの淺いのと微塵こつちに覺えのないに。そんな事聞きや遣瀬がないとフシ流行詞で紛らかす。地父の老人そばより引取りいや是は御尤も。詞世間存ぜぬ田舎女。我が胸ばかり合點して藪から棒の尋ねやう。なんの有様を答へ召されう。斯く申す拙者は尾張の國。熱田明神に仕へ申す前の大宮司通夏。是なる娘は衣笠とてかの七兵衛が連添ふ女。露程も隔心ない中。前の大宮司通夏とは豫て沙汰にも御聞きあるべし。ナアニそんなむつかしい歌がるたにある様な。長い名は今が聞初め。地衣笠さまでも塗笠様でも。知らぬ事はしよ事がないと

フシけんもほろゝに言放せば。地色そんならどうでも我が夫の景淸樣は知らぬぢや迄。エ、さもしいぞや汚いぞや。詞さすがは娼婦一夜妻少心に引較べて本妻の衣笠が。悋氣嫉妬の氣もあろかと疑うての事ぢやの。慮外ながら熱田の大宮司長袖とばかり思うてか。二腰差いて武士の行儀。地其娘の衣笠がなんの卑怯な妬みがあらう。夫の噂の樣にもない見ると聞くとのお女郎と。心の蔑しみ穂に出づれば猶も勤めの氣質を見せ。詞妬みがあらうが鼠があらうが。知らぬから構ひはせねど素人女子の癖として。流れを立つる身とさへ言へばさもしいとのみ心の嘲り。地口へは出ねど顔へ出てはしたない本妻呼ばはり。本妻ぢや妾ぢやとて夫を思ふに二つはない。詞ヲ、其思やる夫の行方否でも應でも知らさにや置かぬ。こりや新しい可笑いわいの。面々の夫の行方を此阿古屋に無理に知れか。アレまだしらじらしいあの顔わい。地エイつべこべとあの口わいと互に募る女の意地。煙草の愛想も引換へて二人が燃やすしゆ羅宇の煙管。かつちかち〱灰吹の フシ口も小裂るばかりなり。地折しも丼場の十藏は講釋の場の人違へ。不慮の難儀を遁れし上景淸が情の程。妹阿古屋に語らんと志したる宵の間の。人目にかざす扇屋の内に通れば下女小女郎。是はマア久しぶり珍らしい御出でと。いふに阿古屋が氣の配り。尻目遣ひの瀬越し見馴れし羽織の紋所。兄十藏とはつゆ知らず顔は背けし燈火の。景淸と見るよりも惡い所へ疎ましと。思ふ心に思はず知らず。まあ〱今宵は去んで〱と頭振る。詞いや此兩人罷り歸らぬ。夜が明けうが日が出ようが。尋ぬる事を聞かぬ間はいつかな事にじらぬ。地ヤアえいとこなと床の間の フシ木枕取つて寢ころぶにぞ。詞ヲ、何時迄なりと氣根次第勝手次第。勝手に〱地座敷へは差合ひぢやと。心を碎く言廻し十藏何の氣も付かねば。次の座敷に人待顔。詞アレまだ去なずぢやエ、辛氣。氣に喰はぬ座敷べら〱とは勤めぬと。地ずつと立つて間の障子ばつたりさすがに衣笠は。おぼこ育ちの氣も弱く何と詞をかけ造り。下の座敷と隔てして オクリ心を。明かさぬうたてさよ。地阿古屋は次へ立つや否。時も時折も折ひよんな所へ景淸樣と。縋り寄つてヤア兄樣十藏樣。詞さつても似たり横顔なら形振なら。地瓜を二つ其上にこの羽織。どうして召してと不審顔フシ胸撫でさするばかりなり。詞されば〱似たに就いて。今日は既に危ない事と。地耳に口寄せこま〲と暫らく語る其内に。垣間見したる前の大宮司娘引連れ。詞やあ〱聟殿見付け申した。地お隱れ

あるたと傍かくれば衣笠も後に寄り。是なう聞えぬ景清様いか程忍び給ふとも。手づから仕立てし此羽織見違へてよいものかと。身を引廻し顔を見てヤアこなたは今日の講釋師殿か。ハツ恥かしと差俯向き。スエテ暫し詞もなかりしが。地此羽織召すからは景清様のお行方。此方が知つてに極まりし。わしに聞かせてフシ給はれと頼むに。も亦涙なる。地十藏も重ねゝゝ取違へられ無とまくれ。挨拶しどろに呆るれば。詞いやゝゝ兄様合點がいくまいあなたはな。尾張の熱田の大宮司様お娘御の衣笠様。誠あるお方とは常々噂に知つたれども。地今の身柄の景清様お為いかゞと心を隔て。時の拍子の言ひかゝり深うお隠し申せしが。衣笠様聞いてたべ。景清様の御事は今兄様の御話。鎌倉よりの詮議強く。都の住居も折悪しければ。暫らく他國に身を隠すと。暇乞ひさへ

言御叢。日陰のお身のおいとしさとフシ語るも聞くも涙なる。地父の老人十藏に打向ひ。詞景清は早京地を立退き。行方も定かに知らぬとな。べんゝゝと尋ね歩くも正眞の闇に礫。幸ひかな其許の形恰好景清に似たる上。定紋のすわりたる其羽織を著されしは。我が神道の一體分身取りも直さぬ七兵衛景清。此前の大宮司が逢ひたい用事外ならず。娘衣笠に暇をくれ夫婦の緣を切つてたべ。地頼み申すと差付けに思ひ込んだる一通り。聞いて驚く衣笠様父様それは何おつしやる。お心の亂るゝ程御酒は上らずそもやそも。俄に狂氣もなされまいが。詞夫婦の緣を切らさうとは國許でおつしやつた。お詞とは天地の違ひ。わしやつんと合點がいかぬ。ヲ、合點はいかぬ筈。都に上り夫を尋ね連れ歸らんと言うたはな。此父が嘘ぢやはやい。世になき平家の討洩らされ

に。緣を繋ぐは身の滅亡。切腹か遠島は鏡にかけていやゝのゝゝ。地義理も情も脊中に腹といふに悲しさやる方なく。日頃は義理も恵みもある父上と思ひ暮せしに。いつの間に其様な卑怯なお氣になり給ふ。スエテ淺ましさよとかき口說く。ヤア地ぐどゝゝと叶はぬ事是でも非でも景清に。緣切らさうと極めた胸變せぬが神道の第一。詞サア景清の一體分身。娘衣笠に暇をくれ召さ。地一家の因が切りたいとフシ詞鋭に捏ねかくる。地十藏もぎよつとせしが。エ、につくい心底恥かゝせて腹癒んと。詞ヲ、神道の一體分身面白し。我が世渡りは軍書の講釋。樊噲を語れば樊噲が魂。張良を說けば張良が心ばせ。地其理を以て七兵衛景清が。性根になつて返答すると老人が頤先。顏突付けてはつたと睨み。神は非禮を受けずといふに穢れ不淨の魂にて。面の皮の熱田の

楷幡宜。そつちから望まいでも。こつちに添はぬ女房去つた〳〵と詞も引かぬに衣笠姫。詞イヤ推参な十藏。澤山さうに人の女房。地去つた〳〵としこなし顔しやほに可笑しい。寄るも〳〵氣違ひのある條この衣笠は相手にならぬぞ。詞相手にならうがなるまいが舅が心見下げし上は。男のこうけ離別々々。ヲ、此父が呑込むからは如何にもさつぱり縁は切れた。地色いえ〳〵何ぼおつしやつても。景清殿は金輪際わが夫。斯う言うたらてつきりと勘當。親子の縁を切らうであらうが。詞親子の縁を切らうより此首切つて下さんせ。地色夫ゆゑに死ぬる命塵とも灰とも思はぬ。是程に思ふのに景清樣の返答は。どうであらう講釋殿と理に責められて十藏も。感ずる心に面を和らめ。詞ヲ、出來したり女房ども。其心底を聞いてはどうも去られぬ。やつぱり元の女夫々々。いや此な男はぐれり〳〵と心の揃はぬ景清。一旦舅が貰うた暇。いやさういうても約束變改。ヲ、さうでござんす何時迄も縁は切らぬ。地いや此親が是非去らすいや去らさぬと三方論議フン更に果てしもなき所へ。地會所を戻る主人の戸平次。いつに變りてぐんにやり首途方にくれし其風情。思案中戸に差しかゝれば。奧には三人せり合ふ聲大宮司の景清のと。呼ちらりと聞耳立てフシ鼻息もせず窺ひゐる。地内には斯くとも白髪の父何時迄かくと爭うても。せんなき事と詞を知らげ。詞十藏殿阿古屋殿。我が一通りを聞いてたべコリヤ衣笠もよつく聞け。總じて世界の女の子は生れし親の家を離れ。夫に任す身の上なれば子とても親の儘ならず。さるによつて親の科を娘にかくる法もなく。娘の科は勿論。親の身にかゝらぬ事。天下一統の式目。景清を聟に持つたるとて鎌倉殿の御咎め。あるべき筈はなけれども爰に一つの誤りは。景清西國に赴く時節。戰場まで女を具せんも如何なり。預け置かんと頼みし故。地今の難儀は氣も付かず。うか〳〵と預り置き疑ひかかる聟の縁。エ、一生の不調法悔しい事をしたなあと。割つたる茶碗を接いで見るに等しき愚痴に立返り。そゞろに子供の可愛さ不便さ。鎌倉殿の祟に逢はゞ如何なる憂目に逢はんも知らず。詞ア、恐しやと思ふより所詮我が身の義心を捨て。地衣笠に縁を切らさば三方四方の爲よしと。思ひ詰めたる老の思案臆病者の義理知らずと。笑はゞ笑へ子供の爲。弓矢取る身にも非ず長袖の身ぢやものと。得手勝手に分別極め。生れ付きの片意地ごかしに是程までは遣り付けしに。娘が誠の心底に感じ入つたる今日の景清殿。尤もとは思ひながら父が心も思ひ分けて

衣笠を去つて下されい。恥を捨てゝお頼み申すと神に仕ゆる身ながらも。子故の道は踏迷ひ胸の岩戸を引立てゝ。フシ常闇つ夜と知られける。地衣笠は猶悲しくお年はさても寄せまいもの。それ程迄にお心の愚にもなるものか。親を人に笑はせて子の身として嬉しからうか。思ひやつても下さんせ。ヲヽそれ程の事辨へぬ某ではなけれどな。汝等がため世話いるに親にも違ふ胴張者と。氣を揉み苛つ老泣きにたぐり上げたる持病の痰火。せき上げ〳〵せき入れば。それ〳〵それがお世話から疎ましの片意地やと。脊撫でおろしまああれへと元の一間へ勞れば。十藏兄妹あいたロ フシ塞ぎ兼ねてぞ呆れゐる。地今迄萎れし戸平次が様子を聞いて氣はいそ〳〵。詞是は阿古屋の兄貴よい所へようわせた。二人ながら近う寄りや一大事の談合がある。まづ高が斯うちやは。代官所の侍が會所へおれを呼付け。抱への阿古屋を此方へ渡せ。景清が在所を責めさいなんで言はすといふた。談合とは爰の事。阿古屋よう聞いてたも。兄貴の前で言ひにくけれど。疾うから其方に惚れてゐるは。其人をいとしなげに責めうと言ふ所へおつというてどう遣られう。其上にたつた一人の奉公人。花代なしに屋敷へやつては。口を天井へ釣つて置屋の商賣がならねば。呼屋の衆も迷惑。そこで味をやつたの。いえ〳〵此方の阿古屋にそんな客はござりませぬ。其上疾うから私が女房に引上げ。今で勤めはさせませぬとぬつぺりとやつたが。代官も賢い。兎角阿古屋を連れ参れ直に尋ねると手詰の詮議。こゝが談合の要所よう聞きや。是を幸ひにおつと言うて女房になつてたもれば。景清が詮議マアそもじにはかゝらぬの。兄貴さうちやないか。それでも代官が呑込まぬか。そこに一つの上分別こゝが又談合の要所。あれ今奥へ往た大宮司が娘。阿古屋が代りにこいつを捕らへて御穿鑿なされませと。地訴人したら褒美は少た〳〵錢十貫。それを資本に女夫連で。金粉して遊んだら面白かろではあるまいか。十藏殿は小姑妹聟の戸平次が。講釋さしても置くまいぞや。サア此談合いやか應か。應なら極樂いやなら地獄フシどうちや〳〵と氣を苛つ。地二人は目まぜに領き合ひ。是は段々尤もの御分別。詞なんの是が談合どころあつと申せ妹。

花扇屋のお内儀様とは。氏なうて玉の輿と競うて見すれば。詞ム、ウ兄貴よい合點。いや見かけに似合はぬ埒明ちやわいの。サア阿古屋どうしやる。地色さればいなわしぢやとて木でも石でも作らぬ身。まんざら憎うも思はねど兄様や母様の。心を今迄氣兼ねの遠慮。おつと讀めた皆

泣いふまい。そんなら女夫になる氣ぢやの。詞はて扨兄の十藏が水入らずの仲人。ほんにさうぢや祝うて三人打つて置け。しやん〳〵。地シ、イ奧のお客を逃がさぬ樣に。御馳走申しや女房ども。たつた今會所へ往て褒美の十貫擔げて戻ろと。己一人が胸算用はき違へたる足元は。草履下駄やら雪駄やらフシ心も付かず走行く。地十藏跡を見送つて。詞これ〳〵妹。一寸伸ぶれば尋伸ぶると僞りは僞つたが。高の仕舞ひは思案があるか。ア、兄樣には似合はぬ案じ。地此間に衣笠樣いづくへなりとも落しまし。代官所へは潔よう此こもの景清樣へ志。わしもお前の妹ぢやもの。ヲ、出來したり神妙なり其心底を聞けば安堵。某は今宵の內景清に追着き件を語り。一時も早く都を退かさん。落着く所は知るべあつてと。語ればちやくと兩の耳に手を押當てゝア、これ〳〵。詞景清樣の落着く所わしに聞かせて下さんすな。聞くまいと言ふ其心は。いかなる火水の責に遭ふとも性根亂れぬ其內は。隱し拔かうと思へども。心の底に覺えあらば身の苦しさに氣も弱り。口走るまいものでもなし。地色わしやそれが悲しさに。乞ひ求めても聞きたい知りたい夫の行方上の空。世界の女房の風上にも置かれぬわしは因果人。お腹に宿した此嬰兒もよく〳〵の業人。哀れと思うてフシ下さんせと忍び。涙ぞ果てしなき。地十藏も心根を不便としをるゝフシ氣を取直し。地ヤア最前の詞に似ぬ未練の歎きに隙取りて。衣笠殿に過ちあらば心の操皆むだごと。ぬかるな妹十藏ははや往くぞと。跡にも心殘れども先も恩ある義理の道。フシ立別れてぞ出でて行く。阿古屋は思ひの。胸押下げア、我ながら愚痴涙。何として泣いたぞと心に心恥しめて。奧の一間を窺へば。はや表には提灯の光も權威のはい〳〵〳〵。戸平次は先に立ち鬼の首を取つたる心地。女房ども〳〵阿古屋はどこにぞ。代官樣がお出でぢや奧のお客は何としたと。問へど返事もうろつく內〻庭に入込み代官がさも橫柄にいかつ聲。詞熱田の神職前の大宮司通夏はいづくにある。斯くいふは岩永左衞門が家の子荒木源五といふ者。御邊の娘衣笠惡七兵衞景清に。緣を組めばお尋ね者の一類。尋ね問ふ仔細あり急ぎ此方へ渡さるべし。違背あらば理不盡に踏ん込み繩打つて連歸る。返答如何と呼ばはつたり。地前の大宮司通夏少しも驚く氣色なく。刀提げ娘を圍ひしづ〳〵と立出で。詞岩永左衞門殿の下知として。我が娘衣笠を召連れて歸らんとは。景清が在所尋ねん爲な。それならば無用になされ。西國落ちに別

れてより景清が行方ずんど存ぜぬ。地隙費えを言はんより立歸つて此通り。岩永殿に聞かされいハレ御大儀であつたなと。嘲り詞に荒木もむつとし。詞イヤ知らぬとて知らせずに置かうか。地それ戸平次ひつ立ていといふに阿古屋がいや〳〵いや。詞彼方が御存じないといふ證據にはわしが立つ。かんまへて聊爾せまいぞ。地親方の戸平次殿と言ふにびつくりけうと顔。こりやどうぢや女房ども親方とは何の事。うろたへたか女房ども〳〵。詞エイいやらしい女房とは誰が事。五條坂の阿古屋は景清が妾と。地世間に隠れない中を人聞きの悪い女房呼ばはり置いて貰らを。イヤ其筈ぢやあるまいがな花扇屋のお内儀様。打つて置けしやん〳〵を忘れたか。仲人の兄はどこへ往た兄貴々々とうろたへ眼。源五にばつたり行當るをはつたと睨めつけ。詞阿古屋を女房とは大きな僞り。地おのれとても通さぬ奴。此上は二人の女連歸つて拷問する。サアサア大宮司娘を渡され。詞忝なくも鎌倉殿の御代官。岩永左衛門が下知を受け向うたる某。身不肖の侍と侮つて頤くひ違へ。地後悔ばしせらるゝなと權威に任す理窟詰め。返答もせず默然とフシ暫し思案にくれ居たる。詞ヤア人にばかり物言はせうんともすんとも答へぬは。地上意を嘲る科人其方とても通しはせじと。詞荒らに責めかくる老人ほつと息をつぎ。膝を打つてホヽウさうぢや。愚痴に返つた老耄今目が覺めたと持つたる刀。娘の前に投出し。詞汝も前の大宮司通夏が娘ぞよ。父が今まで立拔いた片意地むだ事にせぬ様に。今點したか狼狽へなと。地以前の未練に引替へて詞も涼しき目の色に。衣笠刀押戴き親の讓りの片意地。受け繼ぐは娘の役その片意地を見て置けと。すらりと拔いて戸平次が肩先すつぱと斬下ぐれば。うんと仰向に伏しながら撓まぬ剛氣にむしやぶり付く。源五もさすが武士の役。刀に手をかけ支へん風情父はすかさず押隔たり。詞ヤア騒がれなお侍。其許の相手には此皺腕と鍔元くつろげ。地拔かば斬らんず勢に氣を呑まれてぞ控へゐる。戸平次は深手ながらしがみ付かんと身をもがく。起しも立てず乘つかゝり。ぐつと刺いたる止めの刀フシ女業には甲斐々々し。地大宮司聲をかけ。詞父が讓りの片意地是までは見居けたり。して其跡は何と〳〵。地アイ此跡はかやうにと持つたる刀の切先を咽にがばと突立つる。ヲヽさなくては叶はぬ筈。コリヤ死に損ふな立派にせよと。瞬もせず守りゐる。衣笠顔を振上げてア、有難や父上の。未練のお心翻へり健氣のお顔見て死ぬればo親子の縁も切れぬといひ。大宮司が

娘こそ景淸が妻なりと。末世末代言はるるは我が身の上の諸願成就。神の敎への高天が原。佛の道の極樂淨土に今ぞ赴く嬉しさと。苦しみ包む笑ひ顏阿古屋は詮方うろ〳〵淚。手負は次第に息弱り今こそ婆娑の黃昏時。つひには萎む夕顏や。五條あたりの白露とフシ消行く身こそ果敢けれ。地父は歎きの色目もなく。詞口論によつて戸平次を討つて棄てたる娘の衣笠。自害したれば算用濟んだり。此上にも言分あらばと苦り切つたる面色に。地ハテ相手同士死ぬる上は此方に構はぬ事と。歎きに沈む阿古屋を捕へフシ物をも言はせず引立て行く。地大宮司は本意なげに跡見送つて死骸に寄り。詞ヤレ娘出來してくれたさりとてはよう死んだ。エうぬ〳〵戸平次め。よう訴人しをつたな。よい氣味な目に遭ひをつた。さりとてはようは斬つたぞ殺したぞ。此親が老に耄れ子に迷ひ。埒もない分別違ひ恥のありたけ吐き出したに。お事が死んでくれたので魂がさつぱり。地色景淸殿のお聞きやつたら嘸嬉しかろ褒美であろ。今の立派な最期の體を見せぬが殘り多いわい。健娘を持つたと思へば心がいそ〳〵するわやいと。死骸を暫し押動かし。詞ほんにそなたは死んだもの。生きてゐる者の樣にくよ〳〵と世迷言。まだ愚痴未練が直らぬと叱つてくれな笑うてくれな。もうどうも堪へられぬ。一生の未練納め心のたけを泣かせてくれと。湛へ〳〵し淚の溜り。わつと叫びてフシどうど坐し前後。不覺に見えけるが。詞ハツアさうぢや誠にさうぢや。娘が最期の一言に我身の納めを知らせしな。地浮世の塵に交りて神に仕ゆる詮もなし。神道より佛道に赴く手本は聖德太子。今より法の修行に出で四天王寺に參詣し。諸人に勸化を勸むるこそ娘が菩提我が身の爲。有難し〳〵と差添拔いて髻打切り末打斷ちて立出づる。斯程涼しき佛の道何とて熱田の神垣と。隔てはあらじ此世の迷ひ。祓ひ給ひ淨めで給ふも利益は。同じ南無阿彌陀佛の六字は。六根淸淨と悟り。行く身ぞ頼もしき。

第三

地鳧の脛短しと雖も之を續がば憂へなん。鶴の脛長しと雖も之を斷たば悲しみなん。民を制する事此理に等し。されば治る九重に猶も非常を警戒の。水上淸き堀川御所當時鎌倉の嚴命に從ひ。秩父の庄司次郎重忠禁裡守護の代官として。兼ねては民の公事裁判私の計ひなく。道に曇らぬ十寸鏡。智仁のフシ勇士と耀けり。地同席に相並ぶ岩永左衛門致連。南都東大寺の建立より直ぐ樣都に押止まり。重忠

の助役と號し惡七兵衛景清が。在所を捜す邪智佞奸表は忠義に見せかけて。おのが遺恨を差挾む心の底の二股竹。虎の威を借る狐とは。きよろつく顔に現れたり。當日の取次役兩人の御前に出で。清水の轟御坊。御出でなりと披露につれば。はや〳〵是へと請ぜらる。法印重忠に向ひ給ひ。平家の侍七兵衛景清。轟坊に入り來らば搦め取つて出せよと先達ての御使者。尤も平家盛んの時節は彼の景清。觀音を信じ七十五里の境を隔てし。尾張の國より日參せしは世の人の知る所。然るに壽永の戰に西國へ赴きそれよりは音信不通。よしんば忍びて觀音へ參詣を致すにもせよ。出家法印の手に及ぶ彼にもあらず。搦捕らるゝ仔細あらばそれこそは武家の役。出家には不相應。此儀を辭退申さんと爲の參上と。憚る色なくの給ふにぞ。重忠不審の氣色ばみ岩永左衛門詞をすゝみ。いや是は秩父殿の御存じなき事某が存じ付き。元より御坊は景清が檀那寺。心を許し參詣せまいものでなし。所を瞞すに手なしとやら搦捕つて出されなば。褒美は一廉お寺の爲と存ずるから。と。言はせも果てずこは怪しからぬ致連の御仰せ。我が眞言の密法は。五輪種子周遍法界鬼畜人天。皆是大日と說かれて。廣大無邊の大慈大悲。景清來つて我を賴まば一命にかけて匿ひは申すとも。搦捕つて出すなどとは耳に觸るゝも穢らはし。よしそれが曲事とて沒收せられば傘一本。沙門の身に厭はぬ事と詞を放つて申さるれば。岩永も言いがかりヤアねちくさい老僧。大日やら大熱やらそれは存ぜず。景清が肩持ちだて後日にきつと沙汰に及ばん。既に以て近い手本は五條坂の遊君。阿古屋といふ女を六波羅に引出し。景清が在所を尋ぬる毎日の拷問。昨日は拙者が承り今日は是なる重忠の當番。家來どもに言付け憂目を見するといふ事京中に隱れなく。則ち其松を阿古屋の松と。異名まで付ける程の大詮議知られぬといふ事あるまい。事によらば法師の身とて拷問せまいものでなし。轟坊を引きかへ驚き坊にしてくれん。ヤア由ないお坊にかゝつて御用どもを怠るとさしたる事もなけれども。仕舞ひ付かねば座を立つて次の一間に入りにける。重忠法印を近く招き。景清が詮議の事。重忠が胸中口外に出さぬ事ながら。貴僧は格別明かし申さん。平家の方にも誰彼と名ある弓取は多き中に。かの景清は一人當千をつたらしき武士。縱ひ搦捕ればとて無下に一命を斷つべきや。何とぞ彼が心を和らめ源氏の幕下に付け置かば。勇者の胤を日本に永く殘さん國の寶。臥龍

先生が孟獲を七度まで助け返し。終には蜀の味方となしつる。地色例をまねぶ寸志の忠義景淸稀に入り來らば。この道理を演說あつて源氏に仕へ存命せよと。諫めの敎へはお偖の役必ず賴み存ずると。歡ひ深くの給ふにぞ轟御坊はつと感じ。今に初めぬ秩父殿の仁愛。一見阿字の佛敎も外ならず覺え候と。歡喜の領掌なし給ひ。はや御暇と沒義道に。出家氣質の濁りなきオクリ淸水。さして歸らるゝ。秩父の郎黨榛澤六郎成淸。遊君阿古屋を拷問の時刻も限る未の刻。六波羅より立歸り御門におろす囚人駕籠。簾を上げて引出す。姿は伊達の襠や。縛の繩引き替へて縫ひの模樣の糸結び。長地小褄取る手も儘なれど胸はほどけぬ思ひの色形は派手に。氣はしをれ。筒に生けたる牡丹花の。フシ水上げ兼ぬる風情なり。榛澤六郎御前に出で。詞仰せに任せ繩を赦し。さまざま宥め不便を加へ尋ね問ひ候へども。何分景淸が行方存ぜぬとばかり。地色外に申し口も是なき故召連れて候と。披露半に岩永左衛門つか〳〵と立出で。詞ヤア無念なり榛澤。科人に繩もかけず。其上見れば拷問に疲れたる氣色も見えぬがニエ聞えた。扨は御邊が今日の拷問生溫くやられしな。よい〳〵明日は拙者が受取り。さう〳〵家來任せにもなるまじ。自身の手並見せつけ。景淸が在所ほざかして見せう。侍どもやいあの女め地岩永が屋敷へ引けと。例の粗忽を重忠押しとめいや先づ待たれ ト岩永。詞繩を赦し拷問をゆるめしも。榛澤が私ならず某が了簡。其上に今日の暮迄は此方の計ひ其許のお構ひない苦。入らぬ世話御無用〳〵。こりややい阿古屋。今日もまだ白狀せぬ由はて扨しぶとい何故言はぬ。さりながらそれもなあ無理とは思はぬ。義理と情を表に立つるが遊君の習ひ。いかに責めらるゝが辛いとて。馴染を重ねた夫の行方ついおうとも明かされまいさ。さなきだに流れを立つる女は。誠なき者と一向に心得し輩もあれば。それらが譏もうたてく思ひ。又は



同じ憂きふしを勤める。女傾輩の顏汚しなどゝ思うての事ならんが。爰をとくと合點せよ。景清が行方。存ずべき者なればこそ搦捕つて詮議もする。有樣に白狀すれば。忝くも鎌倉殿の御意を安んじ奉り天晴の御奉公。萬人の義を受けても君一人の心に叶はゞ。其身の冥加悪しからまじ爰をよく辨へて。サアさつぱりと景清が在所。（地色）此重忠に聞かせいと物和らかに理を責めて。然も應ゆる詮議の詞。阿古屋は聞いてさつても嚴しい殿樣の（詞）四相を悟る御方とは常々噂に聞いたれど。なんの仔細らしい四相の五相の。小袖にとめる伽羅おや迄と仇口に言ひ流せしが。今日の仰せに我が折れた。勤めの身の心を汲んで忝いおつしやり樣何々の誓文で。景清殿の行方知つてさへゐるならお心に絆され。ついぽんと言うて退けうが何をいうても知らぬが眞實。それとても疑ひ晴れずばハテいつ迄も責められうわいな。（地色）責めらるゝが勤めの代り。お前方も精出してお責めなさるが身のお勤め。勤めといふ字に二つはないアア浮世ではあるぞいなと。言ふに側から堪へぬ岩永。ヤアべり〳〵とはつしやいだ頤骨。（詞）是非白狀をせぬに於ては。此間の拷問に品をかへて憂目を見する。聞けば汝は懐胎とな。よい〳〵きつと思ひついた。（地色）腹に子のあるかざみの格鹽煎責にしてくれうと。威しかくれば。ハヽヽヽ。（詞）そんな事怖がつて苦界が片時なら



うかいな。同じ様に座に並んで。殿様頭してござれども意氣方は雪と墨。重忠様の計ひとて榛澤様の今日の詮議。縄もかけず責めもなく六波羅の松蔭にて。物ひそやかに義理づくめ様々と勞りて。サア景淸が行方はと問はれし時の其苦しさ。地色水責火責は堪へうが情と義理とに拉がれては。此骨々も砕くる思ひそれ程切ない事ながら。知らぬ事は是非もなし此上のお情には。いつそ殺して下さんせとスヱテとんと投出す身の覺悟。フシ持餘してぞ見えにける。重忠榛澤を近く召され。詞斯程心を盡せども。誠を明かさぬ上からは目通りで拷問せん。地色それ〳〵と仰せある詞の尾につく岩永左衛門。詞やあ〳〵者ども。阿古屋めに水喰らはす用意々々と呼ばはるにぞ。地あつと答へて白洲の内直す梯子を見るにさへ。心は上る枕の横槌。庭の傍の井戸屋形深くもきしる綆車の。胸にひゞきて氣を冷す。阿古屋が心の濁り水スヱテ今しも呑むやと覺悟の體。重忠庭に下立ちて。詞ア、仰々し鎮まれ〳〵。阿古屋を拷問の責め道具は。某かねて拵へ置いたり。地色誰かある持參せとよ仰せに随ひ持出づるは。いとも優しき玉琴に三味線胡弓取添へて。音締もさぞと白洲なる。フシ阿古屋が前に並べ置く。岩永もぎよつとせしが様子如何と打守れば。詞これさ女。其琴彈け。重忠が地これにて聞くと刀を杖に頤もたせ。岩永殿もお聞きあれと。打解けてフシ見えければ。詞こりや何ちや興がるは。責め道具責め道具と何ぞ厳しい事かと思へば。エ、聞えた。拷問に事寄せ自分の慰み氣晴しをやらるゝな。天下の政道を取捌く決斷所での琴三味線。神武以來無い圖なほたへ。實に誠世界の有様。天に口無し人を以て言はしむとは今思ひ當つた。阿古屋めが懐胎。若しもや此子が女の子なら。琴でやぐわん〳〵三味線で。ア、何とやらと京中が謡ひしは此前表。地此上のばれついで。ちよ〳〵げ。なんどもよござんしよがの。フシハ、ハ、、と嘲弄す。地重忠耳にも入れ給は



す。詞ヤレ阿古屋なぜ始めぬ。琴を弾かねば景清が在所を。地色言ひ明かす所存かと詞もしげき重忠の。底の心は知らねども是非なく向ふ爪琴の。行方を何と岩越すに絃も心も亂るゝばかり。聲も枯野の船ならでオクリかひなき。調べかき鳴らし。影といふも。月の縁。合清しと。いふも。月の縁。合かげ。清き。合名のみにて。映せど。袖にッ宿らず。詞重忠耳を欹て給ひ。今彈ぜしは蕗組の唱歌を我が身の上に取り。景清が行方知らぬとな。まあ知らずんば知らぬにせよ。して景清と其方が馴れ初めしは何時の頃。如何なる事の縁により深い契りの仲とはなりしぞ。是は又思ひ寄らぬ變つた事のお尋ね。何事も昔となる恥かしい物語。地色平家の御代と時めく春馴れにし人は山鳥の。尾張の國よりながゝゝしき。野山を越て清水へ日毎々々の徒歩詣下向にも參りにも道は變らぬ五條坂。互に顏を見知り合ひいつ近附きになるともなく。羽織の袖の綻びちよつと。時雨の傘お易い御用。雪の朝の煙草の火寒いにせめてお茶一服。地色それがかうじて酒一つ。こつちに思へばあちからもくどくは深い觀音經。普門品第二十五日の夜さ必ずと戲れの。詞を結ぶ名古屋帶をはりなければ初めもない。味な戀路と樂しみしに壽永の秋の風立ちて。須磨や明石の浦舟に漕ぎ放れ行く縁の切れ目。思ひ出すも痞の毒。ア、フシ疎ましと語りける。詞ヲ、さもあ



りなん情の道。聞居けしが詮議は濟まぬ。此上は三味線彈けいエ、イ。いやさ此方の尋ぬる仔細を。聞かぬ内はいつ迄もと。猶望まるる三味線のどうなる事か知らねども。思ひ込んだる操の糸今更なんと鐵刀木。心の天柱引締めて。翠帳紅閨に。枕ならぶる。床の内。馴れし。衾の。夜すがらも。四つ門の。跡夢もなし。さるにても我が夫の。秋より先にかなら。ずと。あだし。詞の。人心。そなたの空よと眺むれど。それぞと問ひし。人もなし。ヲウもうよいは三味線やめい。班女が閨のかこちぐさ絶えし契りの一節。時に取つての一興ながら言譯は暗い／＼。西海の合戰に命を遁れ都に折々紛れ入る景淸。そちは度々逢はうがな。平家御盛んの時だにも人に知られた景淸が。五條坂の娼婦に。心を寄すると言はれては弓矢の恥と遠慮がち。殊更今は日蔭の身。私は元より河竹のあるが中にもつれない親方。目顔を忍ぶ格子の先。編笠越しに健にあつたかアイお前も無事にとたつた一口いふが互の。比翼連理。さらばといふ間もない程にせはしない別路は。昔のきぬ／＼引替へて木綿木綿と零落し。身の果哀れな物語。ア、おはもじと差俯く。いか様是は斯くもあらん。景淸程の勇士なれども實に色は思案の外。思案の外。どう思案仕直しても此通りでは濟まされぬ。それ胡弓すれすれ。あいと答へて氣は張弓歌は哀れを催せる。時の調子も相の山。吉野龍田の。花紅葉更科。越路の月雪も。夢と。覺めては跡もなし。あだし野の露鳥邊野の。煙は絶ゆる。時しなき是が。浮世の誠なる。誠を顯す一曲に重忠ほとんど感に堪へ。阿古屋が拷問只今限り。景淸が行方知らぬといふに僞り無き事見屆けたり。此上には構ひなしと。仰せに阿古屋は忝け涙盡きぬお禮を伏拜めば。ヤア／＼重忠。白いとも黒いとも片付かぬ詮議を。阿古屋めに僞りなしとは何を以て申さるゝ。この岩永は呑込まぬ不埒々々と言ひほぐす。ヲ、其仔細言うて聞けん。鼓は五聲に通ぜずと雖も。糸竹の調は五音四聲によく通じ直を以て調子とす。曲り僞る心を以て。此曲をなせる時は其音色亂れ狂ふ。就中此琴。音ある物の司として人の心を正しうし。邪を禁むると白虎通にも賞じ置きたり。爰を以て重忠が。女の心を引見る術問。十三の絃筋に縛り搦めて琴柱にくゞめ。科の品々一より十まで斗爲吟するを僻事とは申されまじ。琴の形を竪に見れば漲り落つる瀧の水。其水をくれる心の水責。三味線の二上りに氣を釣上ぐる天秤責。胡弓の弓の矢幹責。品をかへ

責むれどもいつかな亂るゝ音締もなく。調子も時も合の手の。秘曲を盡くす一節に地彼が誠は現れて。知らぬ事は知らぬに立つ。調べを糺して聞取つたる詮議の落着。此上にも不審ありやと道理に叶ひし詞の調べ。ぴんともしやんとも岩永は。撥鬢頭かくばかりフシ眞面目になるぞ心地よき。詞重忠重ねて。阿古屋が詮議落着と雖も。猶この上に某が尋ね聞ふ仔細あり。随分労り屋敷へ引けと。地仰せを蒙むる榛澤六郎いざ阿古屋立ちませいと。伴ふ情數々の惠みを思ふ女心。有難う存じますと。詞につきぬフシ悦び涙。岩永は拍子もなく調子に乗らぬむつと面。秩父は宮商角徴羽の五つに叶ふ琴三味線。賢き例引いたりちよつかい。撥利生ある糸捌き直なる道の。三重へ言の葉や。佗びぬれば。フシ覗慕ふ子の。片膝行。地身を立て兼ぬる音をぞ泣く。スヱテ憂身を

こゝに岡崎の。フシ片邊。地井場の十藏一幸が老母を育む藁屋の軒母は何をか思ひ寝のかの唐土の顔回に。樂しみは似ぬ臂枕。世に交際ぬ氣散じは。引立つる戸の隙間より風のみ通ふばかりにて。フシ稀に言問ふ人もなし。憂きふしを。地身に添へ持ちし釣竿の。フシ暇ありげに。見ゆれども母の一人居氣遣ひと。心は急ぐ井場の十藏腰には畚の重たきを。足許輕く立歸り。詞ハア是は母人。いつにない晝寢なされしな。定めて妹が身の上を案じ寝の。夢程もお心休めは珍重々々。地此間に釣つた此鯉を調味して。御膳上げんと取出す。棚からぐわつたり落ちたは何ぞ。其響きに目覺めて母は起上り。詞ヤア十藏戻つてか何として遅かしりぞ。阿古屋があの身になりしより講釋も打止め。一寸内を出ぬ人のたま〳〵の留守なれど。心細う待兼

ねる今日は先づいづくへぞ。さればふと存じ付き釣に參りコレ御覧なされ。此鯉を二喉まで終に覺えぬ獵の利きやう。地是も母人御息災延命の徴と思へば。大分嬉しう存じますと聞いて不興し。詞何釣にいて其鯉取つたか。それが母が息災延命の徴か。是はまた十藏とも覺えぬ常さへ母が嫌ひの殺生。殊に阿古屋が今の苦しみ。人並に世を經る我ならば其處の祈り彼處の祈禱。生ある物の命を助け。慈悲善根の果でなりとも助けたい此時節。面白さうに釣どころぢやおぢやるまい。地色可愛や其鯉が和御前に釣られ俎板に乗る苦しみも。阿古屋は六波羅で責めらるゝ苦しみも。人と魚との名は違へど苦しむ所に二つない。詞鯉のお蔭で息災延命おりや厭でおぢやる。地年頃日頃の孝行も愛想もこそも盡き果てしと。身を捻ぢ背けて恨み顔。詞左様に思召さばお叱

り御尤も千萬。全く慰みの釣殺生に候はす。阿古屋が事に頓著あり御忘れなされしか。今月今日は御誕生日。浪人の後も形の如く貧しき中に。尾頭のある鹽物なりとも調へ。地目出度うお盃頂戴致さぬ年もなし。殊に今年ははや七十二祝ひは申し納め。來年の今日は不定の世の中相變らず祝ひ奉らんと。此間心掛けれども遠慮で講釋は仕らず。詞雜魚一匹調へん價に盡き果て殺生とは存じながら。小鯛でも釣つて御肴にと存じたれば。御覽の如く三年物の鯉二喉。鯉の鱗は三十六枚あると申す。二喉合はせて七十二枚の鱗。母の御年も七十二。都合目出度う是で母の誕生日を祝せよと。地八大龍王の賜物と嬉しく持つて歸りし。十藏も木石ならず詞には出さねども。たつた一人の妹が苦しみ。母の歎き悲しみが悲しかるまいか思ひやつてたべ母人と。歎かば母の歎きぞと。フシ泣かでこま〳〵語りける。詞なう恥かしやサア十藏。早うその鯉料理して。母が誕生祝うてたべ地悔しや叱つた詫言に。悲しい中でにこ〳〵と笑うて膳が戴きたい。雪の中の筍氷の魚。唐土人の孝行にも劣りはせぬぞやれ十藏。とは言ふものゝいぢらしげに鱗の數と我年と同い年。詞いかにしても殺されまい御身が出世も此鯉の。地龍門の瀧を登る如くあやかつて命助けてやりや。コレ此盃を斯う坐れば幸ひ蒔繪の鶴の料理。心ぞ祝ふ千代八千代親子目出たう盃せん。フシア、酒がなとありければ。詞ハア、詫言とは勿體ない。お心解くれば此上の大慶なし。地酒も則ち用意せりと畚の内より取出す。德利に餘る悅び顏兒にも角にも御心に。背かぬを今日の御馳走。ヤ亭主方ま一人あると下屋に駈入り。羽織片手にあたふたばかりの食籠も。土盞にことの缺盃侘びしき中に假初めも。禮儀亂さぬ親と子のフシ昔の育ち奥ゆかし。詞ハア是はなつかしや。景清の御身にもらかせし羽織ならずや。されば其時申せしは。是を打掛け景清が孝行も一所と賴み置きたれば。此座に置けば是は景清。今日の壽亭主二人と思召し。先づ盃お取上げいざお酌仕らん。地日頃は聞し召されねど今日は半盞ハア、忝ない〳〵。酒は愁の箒と申せば暫らくもお氣晴らし。其お盃サア景清數いて。直ぐに返進申さしめせといふも注ぐも形ばかり。さらば盃お取次肴は無くとも聟殿の盃。まあ錢の廻り程是は〳〵注ぐまいと。存じながら又半盞したり靜かには上らいで。誠に下戸の無意氣吞み直ぐに私御頂戴。手酌は恥のもの是御覽ぜと。さらりと汲んでついと乾し憚りながら又返進。御酒は御氣根每年諸ふお肴。今年缺かんも心がかり世上の聞

えも候へば。随分と聲低に。母は千代ませ〳〵と繰言を祝ひ謡の。面白の時代や。嘉例の肴めでたい〳〵。取りちやに母も一つ受け呑むことはならず是づけさし。ハア、是は有難いと戴き戴きすつと乾し。然らば御意に任せ盃は是まで。餘り御機嫌よいに付け近頃不孝な願ひなれども。申し上げて見ませうが。御聞分け下されと飛退つて手をつかへ。阿古屋が今度の苦しみは景清に縁を結んだる故。というて重々の大恩ある景清が行方知つてもいふまじ。まして存ぜねば責殺さるゝは案の内。私つく〴〵存するに阿古屋が腹はな是々と承る。いかな〳〵殺させては母も我も景清に。何と面を合はすべき。然れども力業には動かしも助けもならぬ。所を何の苦もなく助ける極上々の分別を極めしは。某阿古屋が責められしかの。阿古屋の松と京童の異名を付けし。六波羅の松の下にて腹十文文字にかつさばき。上總の七兵衛景清運命拙く。とても頼朝を討つこと叶はぬ故。腹切つて相果つるものなり如件などと。似つこらしく書置を殘し相果てば。ヤレ景清切腹する上は阿古屋に用なしと。命助かるのみならず京都鎌倉心をゆるせば。油斷を窺ひ景清殿易々と本懐を。遂せられんは掌を見るが如し。一日切腹を急げば一日妹が苦患を助ける。疾つく申上げんと存ぜしかども親子一世の此世の別れ。せめて快よう御誕生日を祝ひ納めて後の事と。今日迄色にも出さず思ひ初めし其日より。一日を千日萬日とのつつそつつ待兼ねし。今日只今より誰か我に代つて労り育み奉らん。尤も妹はありながら女の事。かた〳〵の手の落ちた様に思召し。歎きが積つて御身のくづをれそれが高じて又妹が。悲しい目を見ようかと案じ續くれば身も世もあられず。悲しけれども始めから無い十藏ぢやと。思召し諦め不孝の罪を赦され。命のお暇下されば有難からんと跡いひさし。胸までぐつぐと突つかくる。涙知らせじ泣顔見せじと差俯向き疊に。喰ひつき願ひける。母は萎るる氣色もなく。ヤレ其詞遅かつた十藏。今朝はいふか晩にはいふかと。毎日々々待兼ねて思ふには。心が付かぬかいや拔かる者でもないと心の内でとつおいつ。親子の中も侍に死ねと教ゆるは恥もあり遠慮もあり。いつ言うてくれる事ぞやと。今まで和御前が立身出世を待つた様に待兼ねし。母は誰がなうても飢ゑもせず凍えもせぬ。まして妹がゐるからは跡案じる事微塵もない。未練な心を殘さすとも潔よう腹切つて。景清の恩も報じ妹が命も助けてくれ。と言ふとて妹が助

けたさに死ねといふでは更々ない。箸折かゞみの眞實の我子兄弟。月日と力に暮せしもの。夜ばかりがよからうか晝ばかりでよからうか。夜晝があればこそ立つ世の中に老の身の可愛さに隔ては フシ なけれども。詞妹が腹には男孫か女孫か。御身が爲には甥か姪か胤は景清の預り物。それ殺すまいばつかりに死ねといふ合點か。幸ひと其盃また歸る旅ならば母が飲んで差すべきが。再び戻らぬ死出の盃。地一つ飲んで母に差せ肴せんと立上り。胸と一所に踊る鯉を鉢に入れ。十藏が前にする。詞今死ぬる身に入らぬ話なれども物は聞いて置から事。和御前が祖父樣姿を緣につけ給ふ時。切腹人の今際には鯉の濱燒をする。飯櫃の蓋で給仕すること故實なり。聞いて置けと物語。地人の上でもある事か我が子の役に今立つた。この鯉の今日釣にかゝりしも思へば

天の與へぞや。祝うて坐つて早う往て寄騷に死ね。さらば〱と目を閉ぢて フシ 重ねて詞もなかりけり。詞ハア有難や望み叶ひし我が大慶。地死後の見苦しからぬ樣とてもの年にさつぱりと。自剃に月代仕らん。剃刀砥石はいづくにと尋ぬれば。詞ヲこれよからう。今生未來の晴の月代。母が剃つておませうぞサア髮揉みやれ。アこは冥加なや生々世々の御形見御辭退は仕らぬと。地盥取る間もありやなし走の水にさしかゝれば。長地母は末世の手本となれ武士の鑑と鏡立。砥石剃刀携へ出で。アミト磨ぐも。みがくも弓取を。地子に持つ親は皆これと思ひ流しの合せ水。スヱテ今日別れては逢ふ事の。鐵より堅き合せ砥や。力なみだを押包む。袖よ袂よ手合せし。フシサア十藏とありければ。地思ひ亂るゝ黑髮をもんで鏡に打向ふ。母は後に立廻り。詞何と十藏。親が

子供の髮剃はほんの月代。逆剃にせうかいの。アいや若いが先立つも老いたるが殘るも。此方こそ逆樣と存ずれども。地皆前生から定つた直剃になされ下されかし。ヲ、心得しと老の手の震ふを見せじ。震はじと二剃三剃顏と顏。フシ互に映る。鏡の内いやなう十藏。詞幾つになつても面影の殘るは昔の幼顏。あてにならぬは額の黑子。見通しの法印が六十八迄請合ひし其命。まだ半分も經たずこんな事があらうとは。神佛のなされた八卦にも間に嘘があるかいの。ハ、、、可笑い事ではあるわいの。いや私は八卦の合はぬをいから嬉しう存じます。先年國許で御大病お煩ひなされた時。百人の醫者は本腹と申す者は一人もなかりしが。御快氣に間もなく七十二迄御息災。此樣な目出度いことはござりませぬ。ヲ、言やれ

ばそれもさう。其時參つたら今日廣い國へ主づいて往きやる。嬉しい月代は剃るまいもの。長生してこんな目に遭ふ。日出度いぞや。ヤ何かいふ間に時移る月代剃つて了はうと。ホヽこりや何時の間に揉み直しやつた。いや揉み直しは致しませぬ。でもひつたりと濡れてある。それはお前のあの嘘わいのおれが何の。微塵も泣きやせぬ／＼といふ聲曇る鏡の内。互に顏を見合せて笑ひを作る氣は立つる。老の手業のかよわきも剃刀早に剃りなせり。是からは聟の景清殿大國の所知入。まさかの用を嗜みし晴れ小袖召させんと取出す。心の闇の眞黑々縞隠れ行く伊達羽織。行長合ひてのつしりと。大小さすが浪人の昔かゞやく金作。十藏忽ち景清と。見かはすばかり見えにける。物數いはゞ老人の若しや心も亂れんと門に出で。これ迄養育の御恩海に較ぶれば蒼海淺く。山に譬ふれば須彌山低しと申せども。命は又義によつて輕しといへり。妹が事は申すに及ばず申上げ度き數々は來世の事。日の内は清水に暮し切腹は暮六つの。鐘を限つて逆樣な事ながら。御回向賴み奉ると言捨てつゝと走り行く。母は續いて走り出で。ヤレ暫し待て物言はう。おうい／＼呼べど答へず彿も。涙と年の疎き目に其行方は見えざりけり。あつと大地に伏轉び。鬼にもせよ蛇にもせよ死にに行く子を往て死ねと。歎かぬ親のあるべきか。女なれども侍の親に生れた身の因果。泣きたいを得泣かず理窟いうたり笑うたを。誠の心と思ひしか狂氣半分半分は死んで居たわやい。扮裝つた姿いつ忘れう。千騎二千騎の大將と仰いでも。不足ない子を可愛いや一生貧苦に埋らせ。鎧甲著せなんだが悲しい。いつそ不孝にあつたらば是程には思ふまい。孝行にしてくれたが今では結句恨めしいと。涙の限り聲限り。泣いては口說き立つては轉び遣方。涙に伏沈む。かゝる所へ榛澤六郎成清。阿古屋を駕籠に勞り來り。ヤア／＼老母。阿古屋が身の上詮議落着致すによつて送り返さるゝ。併し胎内に子を宿せば平産迄は他國叶はず。男子出生ならば決斷所へ訴ふべし。女子に於ては構ひなしとの。上意なるぞと阿古屋を引いて渡さるれば。なう懷しや母樣と縋り付いたる嬉し泣き。母は仰天氣をうろたへヤア健で戻つたか。嬉しやの悲しやのこんな事知つたら遣るまいもの。六波羅はどつちぞまだ十藏が日は暮れまいか。よう戻つてくれたな入相が死んだら何とせう。兄が鐘は鳴るまいかと何をいふやら氣もそゞろに。餘所にはならぬ暮六つを

フシ胸にごん／＼／＼つくばかり。地母様それは何おつしやる。いかいお世話六郎様へお禮／＼と氣を付くれば。ほんにほんにと手を合せフシ伏拜むより外ぞなき。詞ヲヽ久々にての對面狼狽ゆる程嬉しい筈。地阿古屋を渡せば他に用なしと六郎は。オクリ下部を。引具し立歸る。地母様悦びは道理ながら其様に。なぜうろ／＼なされます。詞うろ／＼せいでは兄は腹切りに往たわやい。エイそりやまあどこへ地何としてと驚けば。詞そなたの命助けう方便。景清に成代つて六波羅の松の下。日の内は清水で暮し。入相の鐘と一時に腹切る筈。地ヤ斯ういうてはゐられぬと駈出してはどうど倒け。歎きに弱る足弱車阿古屋悲しさ遣方なく。詞戻ると其儘なぜ言うて下さんせぬ。地女の足でもつい一走りわしが往て暮れぬ内。兄様連れまして立歸ると。はや駈出すおのが名の阿古屋の。松へと三重へ急ぎ行く。地色こゝに過ぎつる元暦元年源平の戰壇の浦にて。上總七兵衛景清に出逢ひ不覺を取りし源氏の侍。箕尾谷の四郎國時その身の恥辱を顧みて。陣所に歸らず直ぐに逐電してげるが。景清世に存らへ都にさまよふと聞きしより。欝憤を遂げ弓矢の恥を雪がんと。在所を探す京巡り今日しも爰を尋ね來り。扇の端に書付けたる心覺え開き見て。詞ムウ岡崎の村外れ北を受けたる一軒屋。西に藪垣入口に井の字の印。地あるぞ／＼と打頷きフシ内の様子を窺へば。地主の老女が年恰好是こそとつつと入り。上り口に踞げ詞ヤア老女。阿古屋が母は汝よな。聟の景清屋島の浦にて。箕尾谷と軍物語聞及ばん。我こそ其箕尾谷四郎國時。景清が在所を探す。又鎌倉よりも詮議嚴しく。秩父岩永が承り。阿古屋に在所を責問はるゝ所。白状せしともせぬとも取々の風說。それはともあれ汝が知らぬ事よもあるまじ。眞直に吐かせ。知らぬなどゝ地僞らば皺首捻ぢて言はせんと。威しかゝればきよつとして。いや知らぬとも存じたとも。兎角の返答呆れはてフシ顔を。詠めるばかりなり。地彼奴知つてとぼけるか。荒氣では行くまじと分別し面色を和らげ。詞老女こゝを合點せよ。此箕尾谷惨い心持つたれば。無體に連歸り人質に取り。景清が心を惱らせ聞出す仕様もあり。又すつぱりと斬殺し。景清が姑の敵と名乘つて出る仕様もあれど。科ない人を殺し卑怯を働く我ならず。地手近う言へば阿古屋殿と緣が切れ。退けば他人の景清身はくづをれうと隱し遂げうと。思ふは五十年先の氣質當世は川流れさらり／＼。合點かお袋とフシ氣をゆるさせて哆しける。地ムウ、合せ物は離れ物言はしやればそこ

もある。當代は昔と違ひ。弟子の器量のあるなしも構はず。弓矢打物の大事さへ金次第で傳授するげな。〔詞〕氣のさばけた世ぢやござらぬか。水心あれば魚心あり。問ひやうに心あれば教へやうにも心がありさうなもの丶様に〔地〕思はる丶ぢやござらぬかと。詞の謎をとく呑込み路銀の財布取出す。じつと尻目にかけながら〔フシ〕猶見ぬ顔の空とぼけ。〔詞〕いやなうお袋知らぬ所へ初めて參り。踏荒し煙草を荒し忝いと。〔地〕一包み膝元にそつと置く。苦もなく取つて指先に捻つて見。誠に是は茶の金さうな戯く程の重みでもなし。コレ人の在所を訴人すれば。〔詞〕屬托の大法さへ判金七枚に極つた世の中。茶の錢ばかりなぜ極らぬでござるぞいの。〔地〕おつと茶の金呑込んだ。コレ判金七枚と財布の包み取出し。前に並ぶる折こそあれ。阿古屋十藏に尋ね逢ひ互の悦びいそ〱と。立歸る庵の内見馴れぬ武士に見馴れぬ小判。こはいかにと迂濶に兄妹得はいらず〔フシ〕内の様子を窺ひける。〔地〕箕尾谷悦びサア望みの如く此金を渡す上は。〔詞〕景清が在所を知らせ我に討たせ。此箕尾谷が願ひ叶へてくれ。ヲ、神佛より貰い金を。大分取るからは教へませいで何とせう。上總の七兵衛景清が在所は。〔地〕爰にありと十藏大音聲に呼ばはつて駈入り。〔詞〕ヤア珍らし丶箕尾谷。見忘れしか壇の浦にて見參せし景清。汝弓矢の恥を思ひ付狙ふとは疾く聞いたり。今巡り逢ふは優曇華。欝憤を晴らせ相手になつて得さすべし。サア抜け勝負と詰寄つたり。〔地〕敵に詞をかけられて箕尾谷なじかは臆すべき。抜放さんとはしつれども壇の浦の戰は。互の甲冑の昔に變る姿形。それかあらぬか訝しとためらふ氣色十藏苛つて。〔詞〕ヤア臆れしか箕尾谷。又臆病が起りしな。〔地〕性根を付けてくれんずとひらりと抜いて打ちかくる。母も阿古屋も心くれ〔スヱテ〕わつと叫び泣くばかり。〔地〕兩方互に秘術を盡し打つぞと見えし十藏が。刀の金や冴えたりけん。鍔元より〔フシ〕ぽつきと折れて飛散つたり。〔地〕十藏柄をからりと捨て景清が運命これ迄なり。サア首打てと差しのぶれば。ヲヲ神妙なり景清と振上ぐる刀の下。眼を閉ぢたる面魂つく〲と打守り。〔詞〕ムウウ主君の仇を報ぜんと。鎌倉殿を狙ふ景清。刀が折れたらば差添へもあり。命の懸換もある様に首差しのべしは。ムウムウいや〱いや。箕尾谷が一腰は。正眞の景清が首を打たでは叶はぬ刀。紛れ者には得汚すまいと鞘に納め。〔地〕おのれ景清もう取置けと一分別あるその有様。〔フシ〕一器量ある男子なり。〔地〕母は手を打ちヲヲよい分別や眼力や。〔詞〕其男は十藏とい

ふ我が息子。誠の七兵衛景清が隠れ住む所は。清水の後堂より本堂へこれ斯う廻る。地左の方と折つたる刀おつ取つてぐつと突込む乳の下かけて引廻す。悲しや是はと驚き騒ぎそも何故の御自害と。兄妹縋り取付けばこは〳〵いかにと箕尾谷もフシ呆れ果てたるばかりなり。地母は苦しき息ながらやれ兄妹よ。詞其金を路銀にして。景清の在所を尋ねに母が命のある内にちやつと往け〳〵。ア、嬉しやまんまと仕果せた。地斯ういうたら箕尾谷殿さぞやさぞ憎からう。身を切り刻み砕かれても。もとより知らぬ景清の在所教へうと僞りしは。兄妹を尋ねにやる路銀に金取らう大騙大盗人。あの婆々めすたすたにもと思召さうが。かはいうて〳〵どうもならぬ。子供の爲聟の爲騙になつて死ぬる母が心。子を持つて後思ひやり其時恨みを晴れてたべ。詞ヤア兄妹よ。千日千夜言うても名殘は盡きねど皆仇言。地構へて〳〵て心を合せ景清を見立てゝくれ。是をいうて仕舞へば心にかゝる事浮世にないと。詞は涼しく心は弱る息も切れ。フシ此世の別れと消え果つる。地色阿古屋は更に夢現。辨へ知らず取亂しスヱテわつとばかりに伏沈む。地十藏は箕尾谷に泣顔包むはぢ紅葉。胸は時雨よ雨やさめ岩木ならねど箕尾谷も。敵は敵金は金死なすとも是しきに。了簡もあるべきを不便の母が最期やとフシ餘所目遣ひぞ頼もしき。地やゝあつて十藏金おつ取り。物をもいはず箕尾谷が前に置く。詞ヲ、返辨の心尤もなり。此上はやるといふとも地よも受けまじと立つて死骸の前に置き。詞七日々々の弔ひ金七々四十九兩の香典。死人に手向ける上からは禮を受けうやうもなし。地恩にもきせぬ來世金受け悦んで成佛あれ。さて某は參り申すと立出づるヤア〳〵箕尾谷。詞母に手向けの情はあれども景清を狙ふ御邊なれば。此十藏いつまでも妨げ入れる合點か。ヲヲ言ふにや及ぶ老母が愛心に免じ狙ふまじ討つまじと言ひたけれども。我も根井の太夫といふ親あり。我故江州に蟄居の身。景清を討つて會稽の恥を雪がずんば。地孝行も武道も立ち難し。汝等兄妹景清に巡り逢はゞ。斯く付狙ふと言聞かせ必ず用心怠るな。詞ヲ、サ十藏が面をとつくと見置き人違へして悔むなよ。何さ何さ千體佛程あるとても。一念の眼力誠の景清討つて見せうぞ。見事討つかおのれ見事妨げるかと。地思はず兩方反打つて詰めかくる。阿古屋立出で互に宥め宥められフシ別れ出づるも。止まるも共に甲斐なき帚木の。ありとは見えて亡き骸を古い葛籠に法の道。心は網代の葬禮輿と兄が歎けば妹は。まそつと貧しい野送りでも

燈籠なりともあるものをと。くらむ心の燈火を法の光にかき立てゝ。泣く／＼荷ひ諸聲に爾時無盡意菩薩。卽從座起偏袒右肩合掌向佛而作是言世尊觀世音菩薩大慈大悲を引導に。此世を離れ行く旅と人を尋ねに行く旅と道は。二筋變れども。涙は一つ一筋の誠の。道こそ知るべなれ。

第四　道行旅寢の添乳歌

地 帚木のありとは見えて。逢はぬとは フシ 代々の詠の。種なれど。我が身一つはつれなきと。思ふ心の松の名や世にも阿古屋が夫思ひ。勤めの中の誠より。スヱテ まうけし胤の稚櫻。初の子持の甲斐性なき。姿を人の フシ 譏り草。さがなき口もおのづから七十五日はや立ちて。今日忌明の詣や。産神詣にかこつけて。フシオクリ そよその へ人を。尋ね行く フシ 日當は長の。旅なれど。つい菅笠に草履がけ。案じるよりもやす／＼と。長地 思へば輕き三條の橋も後に遠ざかり京の名殘と見返れば。跡に追着く十歳が。日傘片手に振鼓。ハル まだ玩び。知らぬ子に甘やかしたる叔父樣とたが。ひに笑ひ粟田山。フシ 越えてぞ爰に。追分や大津繪召せと旅人の。心を暫し繋ぐにぞ 小オクリ さして。惜しまぬ膳所の町瀨田の長橋。かゝる身の重き思ひを。祈れとや。其方に立てる石山寺。南無觀世音菩薩。大慈大悲の惠みにて。又に沈む母上の。詞 未來の闇も晴渡り。眞如の月の彼の岸に ナホス 向はせ。フシ 給へと伏拜む フシ 袖も露けき。春の野におのが在所を知れよとて。妻戀ふ聲はけん／＼ほろろ。子を思ふ身はねん／＼ころゝ。泣くなな泣いそ我が懷に。遲々たる春の日。影を受けて。育て上げなん乳母が餠。草津を早く出離れて。右と左へ二筋の 冷泉 道は。別れし。我が夫も。近江とばかりしら眞弓。いづくを指して行きなんと。案じ迷ふも フシ 道理なる。十歳ふつと思ひつきまだ幼なき嬰兒の。心は正直正路にて。神や佛の惠みにも。本フシ 叶ふ御籤の草結び。辻占問はんと立寄りて。心に右を尋ぬれば。顏を自然と背けたる。冠たいこのよしなしと。又問うて見る左の道。につと笑顏の鏡の山。セゾユリ 映る心にまか。せんと フシ 行く道もせは。初花の吹雪も深くもり山の。梢殘らず色めきていとしをらしき。里の若嫁。小娘たちが。春の物とて流行唄。三下り ハル 唐も大和も。鄙も都も濡れの沙汰サヨエ。合 えゝ優し。ちんないろ／＼ヲ、ヲ、粹や／＼。合 宿は鏡の。男の子和女郎が口よすだんからサヨエ ナホス 地 愛知川。越えて フシ 高宮の。町に鳥居の二柱。お多賀石神の杜繁み。逢かそなたと額づきて夫の命長かれと。守袋をかけまくも。忝なしと木綿着の。鳥

本の宿。櫓橋渡り〳〵て見上ぐれば。雲を縫ひ行く磨針の峠。はるかに夕霞。旅の心の忙がしさ一人打つたり舞うたりの。合川を過ぎ行く長繩手。立つ辻堂を目當にて迦り。行く身の三重へ便りなき地上り住吉の橋の反つたは大工からかや木からか。木を削り鉋かくれば鉋からかも知らぬえ。フシ知らぬ田舍も。住めば又。地色我身一つの都ぞと心の急ぎ延ばし置く。惡七兵衞景清が人に不審を打たれじと。普請通ひに身を窶す。在所大工の仲間に入り。背高々々と異名を呼ばれ。流れ渡りの手間仕事今日も傍輩打連れだち。普請場をはや申の刻暮るゝに遲き春の日の。フシぶら〳〵かしこに立歸る。詞ヤアたつた今迄くわん〳〵した空であつたが。エ・聞えた。狐の嫁入のそばえ雨。地晴らして往かうと辻堂に立寄る内の高話。中に頭と思しきが張肱構へ分別顏。詞おらが出入の仕事旦那。根井の太夫大彌太樣。お名が大彌太といふに依つて滅多やたの大屋敷。此度の御普請は鎌倉の賴朝樣がお腰掛けうとおつしやる故。物入り構はぬ結構づくめ正眞の大名普請。皆も隨分精出しやれ。手間賃は儲け次第。ナウ背高さうぢやないか。いかも此方の言はしやる通りだや扨あの根井の太夫殿はどう見ても阿呆ぢや。それをなぜと言ふに。鎌倉の賴朝樣がお腰掛けうとおつしやるなら。つい上り口を一間程普請して濟む事。地それも喧しいに床几一脚當てがうたら。ゆつくり腰は掛けらるゝに。いかに金が澤山なとてあた費な大普請。詞但し賴朝樣のござるといふは世間への言觸らしで。あの内にござる娘御に聟殿取つて御祝言。地その晴れの普請ぢやないかと餘所ながらうら問へば。詞ハテ文盲な。お腰掛けらるゝと言うて常體の人間とは違うて。頭さへ大きい賴朝樣。腰の廻りは思ひやらるゝでつかちない物であらう。地此樣なことで普請がなけりやこちとが仲間も立たぬてや。詞したがまあ悅びやれ。奈良の大佛は建立なる。是から段々興福寺の元興寺のと。大工の秋が入つて來る近年にない摑み取り。是といふも番匠の始り太子樣のお蔭。この度七堂伽藍修復につき。大工仲間一統に手間を御寄進申すが。めいめいの冥加の爲。一年に六日づつ頭役に廻つてくる。地おら等が番に當つたら戾る土產は名物の。フシ干蕪買うて來うと地笑ひもどつと晴れ渡る。雨の足もと。弱々と旅に阿古屋が兄妹づれ。濡れみ乾きみ菅笠の辻堂にさしかゝれば。互に見合す顏と顏。景清ちやくとエヘン〳〵。詞はあ旅のお衆さうなが地雨に逢うてさぞ御難儀。まあ爰でゆるりつと日の暮る

る迄休んでござれ。お連もせかずと〳〵と目で知らすれば呑込む十藏。詞お詞に甘へて中食ねた事なれども。火打があらばお貸し下され一服吸付け申したし。いやいや。火打は持ちませぬがよい事を存じ付いた。地幸ひ有合ふ檜の切。錐揉みにして進ぜうとフシ道具箱あぜかへせば。地傍輩どもロ々に。詞いや背高めが煙草の火で旅の女中こまづける。あの抱いた子が目に見えぬか。歴とした男を鼻の先に置きながら、ふづくりかける大膽。地猫の御器へお見舞申す鼠ぢや迄。それ〳〵猫で思ひ出した口あいてゐる蚋へ。ほでぼしを突込んで迷惑するを見るやうな。構はずと置いて來いとオクリ笑うて。皆々立歸る。地跡は三人詞も口々。ヤア是は無事で健固でよう健でゐて下さんしたと。阿古屋は夫にフシ縋り付き暫し。涙にくれけるが。詞なう此樣に巡り合ひ。御無事なお顔いつか見ようとたつた今迄案ぜしに。地是といふも年頃日頃觀音樣を念じた驗。一つはいかい兄樣のお世話の甲斐で嬰兒まで產み。親子兄妹一所へ寄るに付けても母樣のと。詞を殘すフシ曇り聲。地景清外は耳にも入らず。年寄られたる母人。同道なきは第一の氣懸り。詞して〳〵仔細は十藏殿。されば〳〵。我が母女には稀なる最期。いやもう是は順の道。地仔細は阿古屋にゆる〳〵と御聞きあれと。フシ愁ひを餘所にくろむれば。地景清ははあハツト膝を打つて。詞エヽ殘念。某日陰の身ならずば。都にある內對面とげ。地聟姑の御盃せめて戴くものならば。是程には思ふまじとスヱテ男。涙の繰言に。阿古屋も今更十藏も盡きぬ歎きを押隱し。詞扨まあ何から申さうやら。難儀の內の悅びと阿古屋が平產。あたり近所の介抱にて漸とすくだゝせ。產神詣と僞り京はずいと脫けたれど。地貴方の行方近江とばかりどこを前途と思ひしに。不思議にも邂逅ふ天道の御惠み。此上の珍重は愛らしう生れた此子。手渡し申すが我等の土產。指似を置いて來たは其許の細工の業。アレあの樣にこ〳〵と。笑ふ程に育て上げたは伯父が自慢。是ばかりは恩にきて貰はにやならぬとフシ笑うて見すれば。地其許への御禮景清が口では申さぬ斯くの通りと。スヱテ頭を下げ手をつかへ。詞さて出來したは阿古屋が心底。六波羅へ引出され拷問に逢ふぞとは。人の噂に聞きつれども心に悔むばかりにて。憂目を救ふ仕覺もなく。無念の月日を暮せしが。地色今日只今めぐり逢ふは操の德。天晴貞節過分々々。なう其お詞たつた一つ聞かうばかりの辛抱。連添ふ女房に過分とは勿體なや忝なや。此子も心に悅ぶやら乳うまさうに呑んでゐる。

顏見てやつて下さんせとフシいふぞ妹脊の誠なる。地景清重ねて是なら聞かれよ。詞某が日頃の願望追つ付け成就の幸ひあり。この長濱の片邊。根井の太夫大彌太が隱居屋敷へ。源賴朝上洛の次手に立寄らんとの風說。聞くと等しく飛立つばかり。何とぞ根井が普請に入込み。事の樣子を窺はんと思ひ付く、より俄か大工。地すうきを以て此程より每日普請に雇はるゝは。身の幸ひと悅ぶ矢先。方々にめぐり逢ふも不思議の吉相。思ひ込んだる念を以て根井が館の案內覺え。易々狙ひ賴朝が首取つて平家に手向けん。コレ七兵衛が積り普請疊み込んだる胸の一圖フシ氣遣ひあるなと語るにぞ。地ヲ、潔よし賴もしゝそれに付けて十藏が。一つの計畧思ひ付きたり。詞是より某東國へ赴き。賴朝が上洛の道中へ出會し。惡七兵衛景清と名乘つて狼藉に及びなば。供先守護

の大小名我。討取らんは必定。景清亡びしと賴朝も心をゆるし。根井が館に入り來らん所を狙ふ誠の景清。地色本望を遂げ給はゞ繋がる緣の某まで。共に高名の數に入り武士の大慶是に過ぎじ。阿古屋を御身に渡す上は。兎角の暇隙費え是より直ぐに罷り立つ。妹さらば景清おさらば。詞ア、天晴れの志身を捨てゝの親切。地色此上は止むるとも留まらぬ氣質の十藏殿。旅立の餞せんと道具箱の底よりも。隱し置きたる一腰取出し。詞田舍大工の七兵衛が嗜み道具の段平物。地鎌倉表の普請の晴れ差いてござれと差出せば。詞忝なしと押戴き。腰にぼつ込む讓りの道具。細工は流々侍の名を。地萬天に上げ普請勇む。心の內普請フシ追付け手柄を立揃へ。家渡粥の豆の數喰ひ當て。嚙み當て。高名せんと心も似れば形も似る。二人が姿緣の蔓。瓜を二つの景清十

藏立別れ。てぞ三重へ行水の。地小波の國とも詠みし近津海。所の名さへ長濱と御代を祝ひし家造。主の心廣庭に。移し植ゑたる糸櫻フシ今を盛りと蔓りし。地根井の太夫大彌太が隱居といへど古の。氣質は殘る大名普請。數々多き作事の內圍ひは主の物數奇とて。物に念者の根井の太夫腰元婢に手傳はせ。手づから結ぶ壁下地。詞ヲ、ヲ、是で葭簀。こゝへ一本青靑と此竹。節の付きやうが至極々々。地こりや出來た面白いと。機嫌にこ〳〵蕨繩。しやんと結んでふつつり鎌。旣に指をやらうとしたと差置けば口々に。詞遊ばしつけぬ下々の手業。お慰みとはいひながらお怪我があつては。お姬樣のお氣もじゝう是でお仕舞ひ遊ばせ。ムウわいらが事の道理を知らぬに依つてさ。此度の普請はな。忝くも鎌倉殿御上洛の御序。此爺が隱居へお腰掛けらる有難さ。壁下

地でも自身にするが。せめてもの饗應地もちつとぢや手傳へと。また言付ける主命に。否とも伊豫簾携へて。フシ辛氣篠竹。斑竹。纏ふ葛の永き日も。はや九つか普請場の。拍子木かち〳〵晝休み槌も。手斧も靜まれば。詞ム、ウ普請小屋の晝食時分な。晩迄もかゝらうと思うた此窓。半日には捗いき〳〵。さて此壁はどの左官めに言付けうぞ。地色數寄屋の上塗晴れの物と獨り呟く目通りへ。小腰かゞめて慮外ながら。此壁を塗らんず者拙者ならで外になしと。鏝閃し透見口フシ壁訴訟とぞ見えにける。在合ふ女中笑止がりこれ〳〵壁塗り。詞殿樣のお側近う。頭巾も取らず憚り千萬下りや〳〵。ハ、アさすが女中とて物の作法知らずぢやな。若衆の紫帽子嫁御寮の綿帽子虚無僧の編笠。左官の頭巾は脫ぐが不躾脫がぬが禮儀でござりますと。いふに大彌太打頷き是は

さもあらん事。して其方は此間に見馴れぬ者ぢやが。今日初めての左官か。得て汝樣なひやうげ者は口ばつかりで細工はあか下手。凧の上塗合點がいかぬ。是はお情ない御一言。正眞の口も口手も手と申すは拙者が事。先づ御細工の助枝窓。見た所が地黃丸屋の看板形水のへりによござりましよ。葭簀の模樣は崩れ格子。この取合ひにはあつさりと淺黃か桔梗か丁字茶か。地栗梅花色濃鼠と。いひ並ぶれば默りをろ姦しい。普請もいまだ滿てぬ内崩れ格子とは忌々しい。あいつ明日から寄せなといへと。以ての外の不機嫌に。言はれぬ數寄屋の壁塗ろより。晝飯の白壁こぼつたが百貫增しと。フシ左官は不首尾に内に入る。大彌太元より昔人只管氣にやかゝりけん。詞ヤイ女郎めら。此窓打毀つてしまへ。地早く〳〵と叱りの聲フシ奥へ洩れてや。娘の白梅する〳〵と

立出で。詞何事をお氣に違ひ父樣にお腹立てさせます。是といふも自らがお側にゐなんだ第一の誤り。地樣子は知らねど御機嫌直され。お食の御膳氣を變へて私が部屋の庭の躑躅。咲いたもあれば咲かぬのもあるが一種の御肴。酒事初めてお遊びとフシ物和らかに詫ぶるにぞ。子に絆さるゝ親心。顏色直してヲ、そりや氣が變つてよろしからう。詞總じて心にかかる事は祝ひ直しが大事のもの。いやそれに就いて思ひ出した。數多入り來る大工の中。人に勝れて脊の高い男め。つくづく見るに細工の手早さ。萬事物馴れた奴と見た其奴呼べ。此窓の祝儀祝ひ直させ。快よう酒飲まう其大工呼んで來よ。地色はつと答へる返事の内お召しなさるゝ脊高めは。私でござりますと出合ひ頭の拍子ようフシ鉢卷取つて蹲へば。詞あれ見たか白梅。先づおつ取つて機轉利きこり

や脊高。近う寄れ。其方が育ちから都の生れと目利きしたが。此近江へはなぜに來た。是は有難いお尋ね。もと私は飛騨の國の出生。幼少の時分より五畿內を經回りて。去年より此お國へ引越して參りしが。此度の御普請は。賴朝樣のお成りとやらお出でとやら。其御造作に雇はるるは大工冥加に叶うた有難い事と存じて。微塵のらを仕らず一服喫む煙草を半服に減じて一無盡に精出しますれば。地其御褒美に作料は。五人前づつ御拜領フシ賴み上ぐると願ひける。詞成程々々其方がいふ通り。忝くも鎌倉殿。御光臨あるべきと仰せ下さる有難さ。過ぎし頃鶴ケ岡の八幡宮。御造營の御時忝くも賴朝公。氏神への御馳走とて。御手づから石を運び砂を持ち壇かづらを築き給ふ。其例を思つてな。身も手づからの下地窓を差別も知らぬ左官めがむだ口。いかにしても心にかゝる祝ひ直してくれまいか。是は是はお易い御用。鶴ケ岡の緣につれて。此窓は龜の形萬年の齡にて。內の葭簀は吹寄せ格子富貴を寄せるといふ心。地色お庭の花は糸櫻結びを長う頭をうなだれ下下が。靡き隨ふ眞盛。お目出度う存じますと祝儀を述ぶれば出來た／＼こりや嬉しい。ヤレ女子ども此大工。勝手へ伴ひ料理喰はせ酒飲ませい。身も晝寢酒過ごさう。白梅來よと打連れてフシほた／＼悅び奧に入る。サア御意の出た大事のお客殿樣の御機嫌の。歪を直す大工殿つゞくり普請の名人と。女中のおどけ賑々しき オクリ臺所。へぞ通りける フシ憂しと見し。昔を今は慕ひ草。世を忍ぶ草しげる身の 小オクリ憂きが。中にも妻や子を心一つの寶の玉。長地阿古屋が名のみ甲斐もなく辛き世帶を鹽鱈と子持姿に古への。派手をくろめるお方振り。晝間の辨當夫の爲。フシ運ぶ心ぞ誠なる。普請小屋差覗き細工場をまだ仕舞はずかと。奧を見入つて窺ふ內。お臺所の御馳走に顏の日和もよい機嫌。いそ／＼と出て來るはコレこちの人ぢやないかいの。ム、女房どもか。地坊かよう來たなあと手を取りて。詞是は是はきつい熱丸子でも呑ましたか。此樣な事なら晝飯持つて來るには及ばぬ。地色子の育て樣が大凡な。以來をきつと嗜め嗜め。詞ならうひよんな事いふお人。どの樣な寶にも替へまいと思うて。育て上げる女夫が樂しみ粗末にするとはなけれども。地色廣い世界を狹う暮し大事を抱へた主のお身。大工の稼業は是非もなく朝內を出しましても。どうか斯うかと案じられ晝の日脚を待兼ねて。辨當急ぐも フシ顏見たさ。サア機嫌よう參つてと風呂敷包み取出せば。詞いや／＼今日は晝飯入らぬ。思ひがけもない事が殿樣の御意に

入り。お臺所へお召しなされ結構なお振舞ひ。諸白を引受け〳〵近年の榮耀。地こちとが内のたんぽ酒賣場の塵とは違うたものと。いふ顔つれ〳〵打守り。いとしぼや時世とて心も詞も品下り。昔には似ても似付かぬ姿形。思ひ出せば フシ味きなや。人々多い其中に御一門の用ひも強く。酒宴亂舞の座敷にも肩を並べ膝を組み。さも羨まれたりし身の。ほんに麒麟も老いぬれば駑馬に劣るといふ譬へ。人に手を下げ機嫌を取り僅かの酒を貴がり。諸白の賣場のと昔は夢にも言はぬ詞。覺えさしやつたフシ悲しさと思はず。かこつ憂き涙。詞ヤイこりや何を馬鹿つくす。人に以前を芳しがらそと。男の外聞繕ひの潜上置いてくれ。假令誰も聞かねばこそ。地色むだ口やめて早う去ね道でお尻を抓られなと。おどけに紛らし目遣ひの。去ねよ〳〵に女房は フシ娘を抱いて立歸る。地色奥より主の聲として。最前の大工それにゐるか。脊富。脊高と呼びかけて庭に出づればハツ是は殿樣。御用如何と畏る。詞最前女子どもへ言付けた。御殿へ見越す倉の窓の目塞ぎ。いかにしても鬱陶しい。成程その儀は御意の趣お臺所で承る。申さば僅かのはした仕事明朝でも致しましよ。いや〳〵。年寄りは氣がいらつ今日中にしまつてくれい。地色其儀なら只今と形に似合はぬ尻輕き。かしこに置いたる道具箱しやんと擔げて脚代の。ナニの梯子大またげ。のぼる大工はさもなくて見上ぐる老の危ながり。心ぐれつく丸太の上。板は幾重の架橋をオクリはるか。奥へとフシ歩み行く。大彌太ほく〳〵打頷き。上の小袖脱捨つれば下に腹卷軍場の扮裝。袂より呼子の笛取出し吹立つれば。コハリ合圖に隨ふ日雇大工上張かなぐり立出づる。姿はゆゝしき武士の。腰に捕繩十手携へ大彌太が前に居並んだり。ナホス續いて内より娘の白梅。取成しやんと玉襷。長刀おつ取りすうわりのフシ腰も裳裾も引締めて。心を配る二皮眼。凛々しく。も又なまめかし。地大彌太勇む顔ばせにて。詞ヲ、潔よし方々。本國信濃の誼を忘れず。愚老が指圖に姿を窶し。力となつて給はる段祝著せりと禮儀を述べ。さて此間心を付け試し見るかの大工。最前かれが妻女とて用ありげに來りしが。昔を慕ふ詞のはし。疑ひもなき惡七兵衛景淸と立聞きに知つたる故。普請に事寄せ脚代へ上げ置いたり。地色年頃日頃親子が願ひ。夫の仇聟の意趣晴らさん時節到來せり。不便や聟の箕尾の谷がいまだ此世に存へ居て。斯くと傳へ聞くならば嘸本意なくも口惜しからめ。とは思へども手に入る敵やみ〳〵と逃がしなば。月夜に釜の拔かり武士と世

上の譏り恥かし〳〵。番手はかねて定め置くはや踏込めと下知するにぞ。心は一致の信濃育ち。木曾の棧道それならで上る梯の子村鳥の。羽音もかくや脚代の。踏所もしどろに寄せかくる。惡七兵衛景清は。心に豫て設けの敵土藏を小楯につゝ立つて。ヤア物々しや事をかしや。景清を搦めんとは大黒柱を蟻の髭と。嘲笑ふ隙間を見て。捕つたとかゝる一番手。はつしと蹴られころ〳〵ころ。勾配するどき瓦屋根巴に並んで三方より。駈寄ればまつかせと。手斧にちよんと首飛んで。こけらを風の吹きしく如く遙かに投げて鑓鉋。遁さじ者とひよつと出の。頭はつしとさい槌に。目を白黒と三つ目ぎり。此世の息をはなし鑿。手並に鐵鎚鋸の目に立つ相手もあらばこそ。一度にどつと群がるを。當り任せにひつ掴みばらり〳〵と投げ拋るは。大工の業とて棟上げの餅撒き散らすへ如くなり。大彌太今はたまり兼ねヤア娘我に續け。惡七兵衛景清が鬼神にてもあらばこそ。ヲウヲ父樣さうでごさんす。人と人との勝負づく命を捨てば易かりなんと。親子領き梯の子に駈上らんとする所。暫し〳〵根井殿御待ちあれと聲をかけ。躍り出づるは以前の左官。大彌太いらつてヤア緩怠なる妨げ奴。おのらが出る場所にあらず退去れやつと怒るにぞ。ヲ、名乘らねば實に尤も。斯く申す某こそ。聟舅の契りをなし置く箕尾谷四郎國時と。詞も引かぬにはつたと睨めつけ。白々しき紛れ者。汝誠の箕尾谷ならば疾くよりも名乘つて出で。惡七兵衛景清を搦めんと思ふ氣はなくて。三里下つて箕尾谷とはム、ウ聞えた〳〵。扨は景清が一族な。我々に心をゆるさせ此場を遁さん計畧。娘構ふな捨て置けと又駈出すを抱きとめ 御尤もの御詞。付狙ふ景清と名を聞きながらためらひしは。知し召さずや日本に惡七兵衛二人あり。内一人は贋者にて井場の十藏といふ男子。樣子を語れば事長し其實否を糺さん爲。最前より差控へ事の樣子を窺ふに。毫氣の働き手並の程。正眞の惡七兵衛に極つたり。然る上は箕尾谷が武運を開くは爰ぞと思ひ。罷り出でたる某が誠の扮裝御覽あれと。かなぐり捨つる袂着の菖蒲革には引替へて。勝負に益ある肌著の小具足。家職にあらぬ小手脚當。兜頭巾を覆ひたる下は誠の星甲。錣は切れてと謳はれし。名は源平に隱れなき箕尾谷とこそ知られけれ。白梅嬉しさ飛立つばかり。扨はお前が箕尾谷樣。縦ひ御身の恥辱はありとも連添ふ女房に何遠慮。疾くに在所もお知らせあり。健でゐる氣遣ひすなとつい一筆の便りし

て。落付かせうといふ氣もなくあんまりな氣强さ(スヱテ)聞えませぬと搔口說く。(詞)尤もの恨みながら。惡七兵衞景淸に巡り逢はさる其内は。(地色)面目もなき箕尾谷と忍び暮せし甲斐ありて。今日只今景淸に參り逢ひしが結ぶの神。運盡きて討たるるとも未來の契り違へじと。いふに悅ぶ父の大彌太賴もし〳〵。(詞)其詞が取りも直さず婚禮の盃。我が手に入つた景淸を御邊に任すが聟引出。舅が寸志受取り給へ。(地色)ハア忝き御賜物。祝ひ納める緣の綱と。捕繩たぐり大音上げ。(詞)上總の七兵衞景淸はいづくにある。去んぬる元暦の戰に見參したる源氏の武士。箕尾谷の四郎國時。汝にめぐり逢はん爲假に窶しの左官が鏝先。勇氣の荒壁打ちこぼち。三寸繩にくゝり上げん(地)覺悟。覺悟と呼ばはつたり。(詞)景淸こらへず進み出で。珍らしや箕尾谷。昔の弓矢引替へて汝も我も職人わざ。(地色)倉の鉢卷引締めて首の骨こそ强くとも。此七兵衞が腕先に受取り普請の力業。手並の手間賃覺えあらん猶も恥辱の上塗せよと。互に付け寄る身の構へ。眼を配り氣を配り。踏む脚代の壇の浦。屋島の戰今こゝに見るやとばかり(三重)へ挑み合ひ(フシ)暫し勝負も。(地)付かざりしが互にひつ組む脚代の。板踏み碎き廣庭へどうど落ちたるはづみの拍子。景淸上に重なりしをえいやと返す箕尾谷が。一念力の一筋に搦むる繩は勇士の意地(フシ)時の運命是非ぞなき。(地)誰かは斯くと告げたりけん妻の阿古屋かひ〴〵しく。幼子脊にしつかと負ひ。上帶しめて腰刀息をばかりに馳付けしが。夫の繩目に目もくれて胸は淚の闇ながら。そも何者の所爲ぞとあたりを見廻し。(詞)ヤアこなたは箕尾谷殿。京から下り先々へ付いて廻つて聞えぬ人。又ぬつぺりの口上手にこちの夫をたばかりしか。サア千も萬も入らぬ。(地)あの繩解いて主返しや。否か應か返事次第女子が差いても刀は刀。覺悟の魂違ひはないと反打つて詰めかくる。(詞)箕尾谷騷がずさすがは女血迷うたな。都にて逢ひし時景淸に巡り逢はゞ。必ず本望遂ぐるぞよと番ひし詞忘れしな。何事も定まる運と思ひ諦めはや歸れ。いや〳〵いや〳〵諦めまい。(地)恩も情も義理も法も。夫には替へられぬとすらりと拔いて打ちかくる。どつこいさせぬと白梅が。中に隔つる長刀の鎬をけづる女どち。惡七兵衞立上り。戰ふ阿古屋に押隔たり。後手ながら引きすゆれば。なう情なや景淸殿。此期に及んで妻子の命庇うての所爲か。せめて女の念晴し針で突いた程なりとも箕尾谷に手を負ふせ。死にたいわいのと(フシ)齒嚙みをなし身を悶えたる叫び泣き。(地)さすがの景淸もてあつ

かひスヱテ暫しあぐみて居たりしが。ヘツエ是非もなや面目なや。詞某息の通ふ内詞には出さじと。思ひ極めし事ながら是なる女が方々を。敵よ仇よと付狙ひ。道に背かん不便さに仔細を語る聞いてたべ。何なう箕尾谷。地御邊は弟。こりや我は兄。一腹一生の兄弟なるはといふに人人顔見合せフシ是はと。驚くばかりなり。箕尾谷更に信用せず。詞我父母に離れしは八歳。はや東西も辨へたれば。地對面はあらずとも兄ありといふ事噂にも聞くべき筈。いか様仔細もあらんが。先づ父母の住所名字系圖はいかに〱。詞ヲウ父の名は愛甲の太郎國久とて源氏武士の浪人。母の氏は平家の侍上總の一統。住所は相州箕尾が谷。地其時我は十一歳御邊は二歳。母の緣の上總の家より。某を養子にせんと只管の懇望。詞父國久の仰せには。誼ある上總の家。筋なき事といふにもあらず養子となつて平家に仕へよ。さりながら。今より後は親子兄弟音信不通。それを如何にといふに。二歳の弟が人と成り父が名字を受継がば。兄弟源平と引分かり。一戰に及ばん時平家の方に兄ありと知るならば。恩愛に迫り義理に迷ひ。思はぬ不覺を取りもやせんと。地行末思ふ親の慈悲弟が爲と思ひ。一生不通にしてくれるが。却つて親への孝行と。理に當りたる父の詞我はそれより平家となる。御身はいまだ二歳にて何辨へもあらぬ上。父母深く隱せしなれば兄弟ありとも知られぬ筈。詞我も御身の面體は覺えず。愛甲の家の名字。改めしとは元より知らぬ。箕尾谷四郎を弟と知つたる證據はこりやい女房。地我が懷の一包み人々に見せてくれよと取出させ。壇の浦の戰に引きちぎつたる兜の錣。我が高名の證ぞと取つて歸りよく見れば。詞裏書に記せしは弓矢神の御託宣。八幡座より錣まで書下したる父が筆。即ち愛甲の名字の因緣。愛する甲は家の重寶是を著せし箕尾谷は。地色我が弟にてありけるものをあゝら由なき手柄だてと。悔むにかへらぬ浦波の泡と消行く平家の果。我一人殘りしは運強き景清。詞賴朝を討つべしと不敵にも思ひ立ち。根氣を碎くに甲斐もなく無念の月日を暮す内。箕尾谷四郎國時が我を狙うて尋ぬると是なる阿古屋が物語。つく〲思ひめぐらせば。地色誠の父が形見といひ廣い天地の其中に。たつた獨の弟憐みをかくるは兄の道。所詮賴朝を討ちたるとて。昔の平家と取立つる公達とてもあらばこそ。詞此上は我身を捨て弟に高名させ。弓矢の家を起させんと。思ふに幸ひ緣を引いたる此屋敷。御邊に尋ね逢ふものか二つには又運に叶ひ。賴朝に出會さば。本望遂げんと入込

みし。地鎹思案の拔目なく巡り逢うたる我が弟。命を惜しまぬ働きを感ぜし故に景清が。褒美の縄目にフシ及びしぞや。地只今返す其錣兜に繼いで家も繼ぎ。手柄は輝く星兜と武士の名を照らしてたべ。此上に兄なりとて縄を解かば直ぐに勘當。他人となる景清取逃がしては恥辱に恥辱。重ぬるが合點かと裏釘かへす詞詰めフシ心にこたへて頼もしき。地箕尾谷はつと飛退去り頭を地に着け涙を流し。親の御慈悲兄上の御情スヱテ何と報ぜん詞もなし。知らぬ上とは言ひながら匆體なくも組伏せて。昔の武士に歸らんと笑を含みし淺ましさ。六度契りて兄となり惠みもあるに弟は七度の結びなしもせで。結び搦むる縛繩。天の照覽そら恐ろしよし御勘當あらばあれ。いで縛めをと立寄れば振放つて恐々。詞弟と知らず兄と知らず。知らぬ昔は歸らぬ道。互の因果はあざなへる縄目と思へば悔みもなし。女房ももう吠えな。豫て斯くと語りなば。心落さん不便さに是迄は隱し居たり。地色鎌倉へ引かれなば大方長い別れならん。何言ひ殘す事もないが娘を無事にとばかりにて。餘所目遣ひに紛らす涙阿古屋はとかうの返答も。フシ泣沈みたる憂き思ひ。地察しやりて白梅が私が縄を解きますれば。どつこへも障りはなしと又景清に取付けば。詞ヤア小ざかしき弟嫁。此縄解いて侍捨てさせ。地誠の左官と成下らせ士に夫の顏汚せか。サア一時も早く鎌倉へ伴へやつと立上れば。情ない兄人。某が身にもなりスヱテ思ひやつてと搔口說く。ヤア聞分けもなき男子。イヤ御身こそ聞分けなしと。爭ひ果てしも歎きに沈むは二人の女房。根井太夫横手を打ち。詞仁なる哉義なる哉。先刻より感涙に目を泣きはらし候よ。箕尾谷が心底の切なさ推量はしつれども。景清の志深き辭退は却つて不孝。地色せめての恩を報ぜんは阿古屋殿を身に引受け。幼き娘を養子とせよ此大彌太が初の孫。時しも三月十八日。今日の祭の神堅く人丸姫と名を呼びて。育てる老の樂しみと歎きの中の悦び顏。景清あつと頭を下げ。頼もしき御詞望みは足りて一門一家。めぐり逢うたる月も日も其元曆の屋島の戰。取りも直さず三月の十八日信ずる佛の御緣日。臨刑欲壽終念彼觀音の。力を得ん事疑ひなし急げや急げと先に立ち。勇むは縄付縄取りは。心萎れてフシ行きかぬる。阿古屋は夫に恥ぢらひて涙。呑込む。曇り聲幼き娘を。抱き上げ是なう今の父様が。詞鎌倉へござらしやる地目出度うやがてお歸りと。さゝう〳〵してたもう。其次手に元の父樣顏の見納め見せ納め。永いさらばのさうをしやと。我が身の心かこつけの。

詞も涙にフシむせび入り身を打ち。伏して歎くにぞ。かゝる哀れに大彌太も涙湛ゆるしば／＼目。詞浮世の中に武士程義理の悲しきものはなし。言ひたさ泣きたさ堪ゆる辛さ。なぜに二人は腹からの左官や大工に生れなんだ。地職人の身ならばなあ斯うした事はあるまいものと。さすがは老の繰言に。白梅阿古屋も顔見合せ。包み兼ねたる歎きの色わつと涙の。フシ糸櫻庭の。立木に紛ふらん。地景清わさと怒りをなしヤア未練なり愚かなり。源氏育ちの侍は會者定離をも辨へず。妻子を忘れ親を忘るゝ弓矢の義心も知らざるか。恥を恥とも思はずやと聲荒らかに言放せば。大彌太歎き押しとゞめげに誤つたりそれよ／＼。音に聞えし景清を。搦め捕つたる箕尾谷が譽は朽ちせぬ石礎。根井の太夫か家名を繼げと門出壽ぶく言の葉に。深き涙を忍びの緒兜も昔に立ちかへる。鍛の星の花の兄。勝つ色見する御惠みと勇み立つたる匂ひ鳥。連なる枝に若木の花嫁老木の松に嬰兒の。いたいけ盛り見殘して惜しむや。春の星月夜鎌倉。差してぞ急ぎける。

第五

地百戰百勝勇士の名を定め難し。死を易くして名を顯はすといへり。上總の景清自ら賴朝の手に渡れば。扇が谷に詰牢をしつらひ取つて押入れ。警固は在鎌倉の諸大名。一日一夜宛番代りに預りてフシ嚴く非常を警める。地根井の太夫希義當番にて未明に相詰め。見れば門々番所の幕 蛸の紋所。詞昨朝より今朝までは岩永左衛門當番よな。根井の太夫番代りに參つたりと。地言入るれども役所を渡す體もなく。走つて出る人息を切つて戻る人。足を飛ばせ櫛の齒を引く如くなれば何事やらんと根井の太夫。不審ながらも立休らひ返答フシ遲しと待居たる。地暫らくあつて御通りあるべしと案内させ。岩永左衛門しを／＼と立出で。詞ヤア根井殿。早速の御番代り御大儀千萬。お目にかゝつて詞もない。先づ以て箕尾谷殿景清を生捕り高名比類なく。貴殿も昔に立返り御親子並んでの御勤め。目出度いと申さうか御大悦推量致いた。さて其景清に就いてちと。御了簡に預らねばならぬ譯あり。お聞きなされ。牢を脫けついと致した。とは入口の錠おろさずか。但しは水道厠などより脫け出でしか。いづれの道にも地無念なりと肝潰せば頭を搔き。詞それなれば下々の無念と申譯もあろが聞いてたべ。櫟白橿栂の木の長さ一丈ある物を大地へ七尺堀入れ。上三尺の詰牢。欅で蜘蛛手格子を切り組み。一尺二寸の大釘裏を返さずひつしと打ち。足

を牢より外へ引出し入違へ。七十五人して引いたる楠にて上げ繋を打たせ。十挺詰鐵たう〳〵樞。大盤石を積重ね。首には根堀りの大竹筒に切つて被かせ身動きもならぬ。これ御覽なされ此牢を。破りましたと幕引き退くれば立寄り見てびつくりし。是程丈夫に拵へたを。破る音が御邊の耳へ入らざるか。サテ面目もない側に居て微塵も耳へは入らず。くつつりと寢た間の夢程も存ぜなんだ。只今より明朝迄は貴殿の御番。此通り言上なさるれば此岩永。よい仕合せで遠嶋は見ゑてある。御了簡と申すは餘の儀でない。方々へ追手をかけたれば召捕つて歸るは早うて五つ遲うて四つ迄。沙汰なしになされ下さるれば大名一人お取立て。ハテ目に見えぬ事に。堂塔建立さへなさるゝぢやござらぬか。根井殿。ナ申しと甘へかゝれば何さ〳〵。箕尾谷といふ臆病者の子を持ち。飛法のかゝつた此太夫に頼む事はない筈。ハ、、、と苦笑ひ。是は術ない。それを爰で仰せられては消えたい〳〵。白梅殿御婚禮何やかやのお悦びに免じ。是非お頼みと手を摺る所へ。荒木源五息を切つて驅付け。惡七兵衛景清を三个村と申す所にて生捕り。只今是へ引いて參ると訴ふれば。岩永生々いきり出しヤア根井。頼む事何もない。追付け景清渡し申すと。手の裏返す舌も引かぬに前後を顧み警固きびしく連來る。根井の太夫きつと見ムウ。是が逃げた景清かハ、、、、。箕尾谷が生捕つて差上げし景清に似は似たれどもさうでない。察するに是はかの井場の十藏。景清にして此根井受取る事罷りならず。刻限移る此通り言上せんと立出づるア、親爺樣せはしない。まあ半時待つてたべ追付け誠のが來ますわいの。やい者ども。追々に又往け往けと追ひかけさせ。扨はおのれ講釋師めか下河原でも取違へ。一度ならず二度ならぬ妨げ奴。何として腹癒んと立蹴にどうど踏倒し。足に任せてさいなむ所へ。誰が訴へしか頼朝公重忠に口取らせ。蹄を飛ばせ驅付け給へば岩永大きに敗亡し。頭に天の落ちかゝるかと土に。平伏し恐れ入り。只今言上仕らんと存ずる所御駕を苦しめ奉る。夜前景清牢を破り脫け出で候。言語道斷の憎い奴と。言はせも立てず馬上ながら御聲高く。牢に入れたるばかりにて逃失せぬものならば警固を付けるに及ぶべきか。長く一人に番させては怠り油斷もあるべきかと。一日一夜を限つて代る〳〵警固せよと言付けしは何の爲。牢を破つたる景清に科はなし。番を怠り牢を破られ。取逃がしたる汝こそ憎い奴。諸士の見せしめ急度刑

罰に行へ重忠と。地御立腹大方ならず見えたる所へ。箕尾谷四郎汗を浸し馳來り。詞牢を破り落失せたる景清。是へ参上仕ると地申す詞の下よりも。長地妻の阿古屋に手を引かれ片手は杖をつく／＼と見れば兩眼抉出しフシ東西。わかぬ其風情。地十藏驚き走り寄り。御身が事を聞いたる故何とぞ奪ひ返さんと來る所。詞景清牢を破り落失せたりと尋ね廻る。嬉しやよい所へ出會せし。兼ねて命に代らんと念願は爰ぞと悦び。景清是にありと名乘つて易々と生捕られしは。其間に落延びさせん爲是まで來る十藏が。地志は無になつたか直ぐにいづくへも落ちてくれぬ。側からもなぜ氣を付けぬ妹。エ、十藏が思ふ程にない。曲がない景清と地團駄フシ踏んで。泣きければ。なう其氣も付いたれど。汝が知つた事ぢやないと叱られて。泣いてばかりと縋り付き重ねて袖を絞りける。地重忠御覽じ珍らしや景清 詞牢を破り遁れ出でたる身のいかなれば立歸り。殊に兩眼を抉つて盲目となりたるは訝しゝ。地頼朝公も聞し召す。心底を明かされよ承らんと宣へば。詞アさ宣ふは秩父殿候な。お尋ねなくとも申上げんと存ずる所存餘の儀にあらず。斯く御敵となつて付狙ふ我なれども。地とかく命を助け御味方に。召されん爲の御情申すに及ばず。海はあせて山となるとも二君に仕ゆる我ならねば。詞所詮この牢踏み碎き。關破りの科を拵へ害せられんと心付きしが。思へば其日の警固の侍。牢を破られ取逃がし。我故咎めに預らんも罪造りと。一日々々延ばせし所。昨朝よりは岩永が。番に代つて面を見るよりあら嬉しや遺恨ある左衛門。咎めに遭うが殺されうが。去にがけの駄賃とやらん今宵ぞ牢の破り時と。何の苦もなく脱出でしは。外に科を拵へて誅せられんとのフシ我が念力。地もう助けては政道立つまじ。急いで我を誅せられよ。又兩眼を抉つたる事。今鎌倉の繁昌。頼朝の威勢を見るにつけ再び仇をなすまじと。思ひ捨てゝも凡夫心。見ずば恨みも起るまじと頼朝を再び見ぬ分別。未來永々仇をなすまじ。恨みを殘さぬ心の誓ひ。抉り捨てたる兩眼は。頼朝殿へ景清が。今生未來のフシ寸志ぞや。サア首打つて安堵あれと首差しのぶれば頼朝公。天晴れ武士よ武夫よ。平家の恩を忘れぬ如く。又頼朝が恩をも忘れず。月日に象る兩眼を我故抉つたる健氣やと。勿體なくも御大將御落涙ぞ。有難き。地左衛門一人むくりを起し。詞ヲ左程飽いた首ならば左衛門がさらへ落し。牢を破られ取逃がした地申譯にすると呼ばはれば。餘りの事に御大將。兎角の御詫もましまさず阿古屋堪へず。詞

あの言うた面わいの。目の見えぬ人の首取つて。言譯になるか。手柄になるか。地阿呆臭いと フシ恥かゝすれば。詞女房だまれ。岩永が手にあふ者は盲か。躄か。子供ならで外にはなし。尤も〳〵。ならばサア首取つて見よ。梟は土を丸めて我が子とし。海月は蝦を以て眼とすること楞嚴經にありと聞く。地我その如く阿古屋を以て眼とせん。後より我を介抱し刄の向ふ其方へ。引廻して敎へよと杖打振つて立上れば。詞源五手傳へ。盲目とてぬかるなと 地フシ左右に別れ斬りかくる。地根井親子は景淸に緣ある顏を憚りて。餘所には知らぬ氣を揉上げ心を冷して拒ゆれば。十藏は又景淸が詞の意地を立てさせんと。留めず差出す縛られながら眼を配り。すはと言はゞ飛びかゝらんと打つ太刀先に氣を付けてそりや。そりや。右よそれ左よ。拂へなぐれと詞をかけ。我が手を以つて戰はぬ心の刄の鎬をけづり。頭に上る息烟は火花を散らす如くにて フシ瞬きもせぬ。程もなく岩永主從太刀打落され。二人一度にしがみ付き取つて伏せんと身をもがく。景淸ちつともたぢろかず。詞二人が首筋兩手に掴み。ぐつと締むれば眼を見詰め。地弱る所を取つて伏せ膝にひつ敷き。一息ついたる心の内 フシ嬉しさ例へん方もなし。地其隙に阿古屋立寄つて十藏が縛め切りほどけば。詞なう〳〵景淸。一人に二人は手柄過ぎる。岩永は 地我にくれと取つて引立て。科はおのれが心に問へと首。えいやつと捻切れば景淸悅び。おのれも主の供せよと源五が首も一時に。ちよいと引拔き捨てたるは手習ひ子供の書捨てし フシ筆の首拔く如くなり。地十藏片方の太刀おつ取つて大音上げ。詞助けんといふ君には君の情あり。討たれんといふ景淸は二君に仕へぬ忠義あり。中を取つて此七兵衛景淸が腹切る上は。情も忠も是迄なりと 地太刀を逆手に取直す。詞重忠御覽じヤアヤア十藏。詞景淸が事は此曉。洛陽淸水寺の觀世音君の御枕に立たせ給ひ。命を助け得させよと。御臺所も目のあたり靈夢を蒙り給ふ。地それ故是まで御馬を出されたるとはよも知らじ。假にも景淸と名乘つて生害せば。大慈の加護に背く道理。名代の切腹尤もながら無益なりととどめ給へば。詞然らば御家人岩永を手にかけ討つたる其誤。地井場の十藏に立返つて切腹せんと。肌押脱いで身繕ふ頼朝扇を上げ給ひ。詞やをれ十藏。左衛門を討ちたる其科を糺明せば安穩に腹切らすべきか。我この曉。景淸を助けよと觀世音の靈夢を蒙る。さればこそ左衛門が。盲目の景淸に刄向ひしを制せんとは思ひしが。大慈大悲の擁護ある景淸やはか過ち

はあるまじと。地思ふに違はず却つて主從手にかゝりしは。景清十藏が殺すにあらず。二人に千手が手を貸して惡人を殺させ給ふ。是こそ還著於本人經文あらたに誤りなき。フシ大悲の誓ひと覺えたり。地然るを汝切腹せば菩薩の勸善懲惡の。心に違ふ大惡逆恐るべし／＼。詞今より我に奉公し譽を末世に殘すべし。又景清は扶持すべき平家もなく。賴朝が祿も受けまじければ。飢に疲れん不便なり。地兩眼は暗くとも志は日に向ふ。日向勾當の官を蒙り。馴染みの平家を琵琶に語つて片時も昔を忘るべからず。萬事は根井親子の者宜しく計ひ得さすべし斯樣に上下和すること念彼觀音の御力。我が大慶これに過ぎずいざ歸らんと立ち給へば夫婦兄弟箕尾谷父子。頭を大地に平伏し平伏し。詞は無くて有難涙伏拜み／＼。君をかしづき立歸る佛道武道の助けとして。治まり靡く源氏の政道。萬々歳の末かけて盡きせず。盡きぬ八千代の松變らぬ色呉竹の。節を重ねて葉も榮る五穀。成就民安全治まる。國こそ目出たけれ。

蘆屋道滿大內鑑

作者　竹田出雲

序詞 風に噪ぶ青嶂の外。雨に嘯く古林の中尖れる鼻先靡る尾。小前大後色中和を兼ね。死すれば丘を首にす是此妙獸。百歳誰か知らん女と化し。苔の褥に草枕契を人に同うす。葉末の露や末の世に日月星度の光を掲ぐ。昔を問へば天地の。惠に育つ蘭菊や ヲロシ 〳〵花ぞ都の。香に匂ふ。地 朱雀帝の皇子 櫻木の親王東宮に立たせ給ひ。御息所は左大將橘の朝臣元方の御娘。又參議小野の好古の御息女六の君と申せしも。錦帳に冊かれ二人の君は兩翅。比翼連理の御語らひ フシ 淺からざりし御仲なり 地 されば朱雀帝賢王と申せども。天地の氣候陰陽の狂ひにや此頃出づる月影の。白虹に貫かれ甚だ光を失へば。東宮の御方に於いて此事評議有るべしと勅を請け。左大將元方小野の好古諸寮の司末々の官掌まで次第を亂さず參列し。晝迄殘る月影の空を眺めてとりどりに。愚意を述ぶるも及びなき フシ 雲を摑むが如くなり。地 左大將笏取直し。詞 つら〳〵思ふに三千世界月一つ日一つ。天竺で見るも唐で見るも月日の光に二つはなし。然れば白虹月を貫く此天災。強ち日本の祟とも一國には定めがたし。萬一唐天竺の禍なれば心を惱す程が失墜。地 なんぞ是といふ形の見ゆる時。評議なさるるとも遲かるまじ。此儀は此儘捨置かれ フシ 然るべしと相述べらる。地 小野の好古正笏し。詞 イヤ〳〵それは理窟一遍。聖主天下をしろしめす民を惠の御心に外れたり。間近く喩を取つて言はゞ。日月の蝕の如く。此日本の內でさへ東國で見えぬ時も有り。西國で見えぬ折も有り。地 況や境を隔てたる唐天竺。日蝕とも月蝕とも知らずに濟す事も有るべし。詞 此度の天變も共通。唐天竺はいさ知らず。眼前明かに見付けたる日本の禍ならずとは言ひ難し。かく言へばとて其家に有らざる 地 此好古。是非を申すも 下ナシ 恐多く。過し頃身まかりつる天文の博士。詞 加茂の保憲が娘榊の前と申す者。女なれども其家に育ち父が傳の片端を。存ぜぬ事は有るまじと召連れたり。地 女なれば恐も有るまじ。召されて仔細を御尋有るべうもやと。御免を受けて呼びつたふ フシ 聲をしるべに。立出づる。始めて上る雲の上 ヲクリ さすが女の氣も弱く。長地 薄氷を踏む如くにて胸はうつせの襠姿おめず場うてぬ顏

してもフンそゞろ顫うて畏る。地左大將きつと見。詞加茂の保憲が娘御とは汝よな。男子なれば親が遺跡勤る年ばい。傳へ知つたる事有らば此度の天變きつと考へ。地善惡を包まず眞直に申上げよと仰せける。詞是は恐れ有るお詞。女の事なれば傳へし事は地なけれども豫々父上の門弟衆に。教へ給ひしを餘所ながら承り置きしが。詞一つの眞丸な物を宙に釣つて置けば。其丸い物に自然と東西南北上下も定る。是を月日にたとへて。西は天竺東は唐。南は日本北は何處と分野といふ物をわかつて。諸事考ゆるが先づ天文の手習。伊奘諾伊奘冊の尊天照太神を生み給ひ。此子光花明彩六合の内に照徹る。天に送つて天上の事を授けんと。天に送りやり給ふ是今日の日天子。當今朱雀の帝樣も同じこと。又次に月讀の尊を生み給ひ。是も明彩き日の神に劣らず。日にならべて天上の事をしらせんと。共に天に送りまつる是れが今日のフシ月天子。地日の神にならず給へば恐ながら東宮。櫻木の親王樣も同じこと。詞此度の天災。白虹日を貫けば天子のお身の祟りなれども。月の躰を貫きしは東宮樣の御愼み。下として上を冐すといふ天道のお知らせなれども爰に一つの助けがござんす。二十八宿の星の中。女と。鬼と申す二つの星月の傍を離れず。女はをんな。鬼はおにといふ字にて。女の鬼は悋氣の妬み。上を冐す禍とは申せど。國を亂し民を損ふ迄はなし。女中方の愼で此禍は。科戸の風の天の八重雲を吹き拂ふ樣に。さらり〳〵と消えて行くと知つたがましう申上ぐるも聞き傳法。易は變易なりとやらん申せば。女の地及ぶ事でなし。私の父天文の名を揚げしも。唐土の伯道仙人より。金烏玉兎集といふ書を傳へ。近き君の守護と成り惡事を善事に轉じかへし。豫々其書を保名殿に讓らんとは申されしが。急病故に何の遺言もなく。館の内に勸請せし大元尊神の社に其書を納め。箱の鍵はみづから扉の鍵は母に預け果てられし。あはれ道滿保名の兩弟子の中。いづれになりとも書を讓らばかゝる大事の御時の。御用は缺かじと憚なくいふ事いうてしまひしはフシさすがに親の娘なり。地六の君御褥を轉び出給ひ。詞榊とやらんの詞の端。此禍は女の妬みと聞くも恐ろし身が縮む。和歌三神を誓にかけ。地自らが心に妬み嫉みはなけれども。御息所のましませば。もしはさもしい氣も有るかと。人のさげしみ恥かしゝ。お情は忘れがたけれどもお暇を賜りて。尼法師ともなしてたべ。父上なうと好古の袖にスエテ縋りて泣給へば。御息所も御涙。なう其言譯は君よりも自らが心が猶恥かしい。其許に

お暇賜らば自らも身をすべり。同じ庵の伴ひぞやとフシ同じく褥を出給へば。地東宮暫しと止め給ひ。詞日頃仲よき程有りて互に貞女の道を守る。地しほらしや頼もしや。何事も丸が心に有り無狀き所爲ばしし給ふなと。奥にすゝめ勞らせ。詞女ながら榊が訴へ謂れ有り。其道滿保名とは誰やらんと問はせ給へば。左大將さん候。道滿と申すは蘆屋の兵衞と申す某が召使。保憲が門弟の第一番。保名と申すは好古の家來。天文の稽古遂に聞かず。委細好古に御尋ねと。申上ぐれば取り敢へず。安倍の保名と申すは某が家來希名と名のりし者。年來天文に心を委ね保憲が門人と成り。師匠の保の一字を赦され保名と改め候ふと。地二人の訴へ詳に聞召し。保名道滿。其業に甲乙なければこそ保憲が存生に。いづれへも書を讓らず身まかりけん。此上は左大將の執權岩倉治部。好古の執權左近太郎二人立合ひ。大元尊神の神慮に任せ。いづれなりとも神の心に叶はん方へ。金烏玉兎の書を與へよと宣へば。地御供に候せし岩倉治部左近太郎。階下に平伏し畏る。詞治部大輔左近太郎とは汝よな。地四海の悅びは丸が悅び。丸が歎きは四海の歎き。是おぼろけの業ならず必ず互の贔屓を拒み。神慮に違ふ事勿れと入御なら せ給ひける。仰げば高き久かたの空に限はなけれども。それさへ爰に曇りしる君が。御代こそ三重へ打榮えて。フシ世は春ならし。靑柳の。いと媚めける乘物は。加茂の保憲の息女榊の前。禁裡を下り歸るさや。附附女中の取りなりも。公家とフシ武家との間の町。地急ぐ跡よりホヲイヲイ。暫しと呼ぶに何用か誰人かはと傍に乘物を立てさすれば。安倍の保名が草履取。與勘平息を切つて走りつき。詞一二町跡からちらりと目印。幸ひと頰桁の裂ける程聲かけたも。御所の首尾知らぬ故無禮は御免。此狀箱女中方お賴み申すとさし出す。地文と聞くより飛立てど人目の有ればしと〳〵と。ホヲ、いつもながら與勘平太儀とばかり解く紐も。長地眞紅辛氣の思ひ川濡れ逢ふ中の玉章は。たまさかならで逢ふ事は。まれな所が戀の味。文繰返へし讀終り。誰そ墨すれ。ハイアイと乘物より硯取出しさし寄すれば。思ひを籠むる返し事お認めの。間がな隙がな笑ひ盛りが取卷いて。詞ほんに〳〵今日はマア好い所へ與勘平殿。それはさうといつぞは問はう聞かうと思うた。好い折から世間に變つた名はいくらも。地有るが中で此方の名は與勘平とは誰が付けた。旦那樣の物好か但しは此方の望みでか。わけの有りさうな名ぢやなうと。點頭合うて問ひかくれば與勘平居直つて。詞成程々々。

拙者が名には因緣由來故事來歷。輕々しうは申されぬ事なれど。問人が問人ぢやお咄し申さう。元來拙者が名は勘平。且那のお傍近く參る者幾人も有る中に。天道三寶の冥加にも叶つたか。此通り無骨の身共兎角保名樣のお氣に入り。身におつしやる事はお詞付が格別。如何してくれいよ勘平斯うしてくれいよ勘平。肩打てよ勘平。足さすれよ勘平などと。よ勘平よ勘平と仰がついにいつとなく。與勘平與勘平と人も呼ぶ。我も亦惡勘平と言ふよりまし。忝くも尊くも。拙者が與の字は主君よりの拜領。勘平に與の字の取付いた始り。あら〳〵かくの如くぞと フシ 語れば皆々打笑ひ。詞 何咄さしても。口輕氣さくお主の氣に入る與勘平殿。奉公する身のあやかり者。アレ 地 お乘物から召しまする。詞 ナイない〳〵とさし寄れば。榊の前面羞げに。コレ保名樣への御返し委しき事は此文箱。隨分早う御出を。頼む頼むと此方も歸り取急ぐ コハリ 折からどつと一しきり。ナホス 土砂ぐるめ吹く風に。保名の文も卷込んで。空に飄ひひら〳〵ひら。比良や横川の方より吹く フシ 天狗風とは知られたり。地 榊の前も氣の毒がり。なう與勘平。アレ〳〵文は西へ〳〵と行く程に。歸りがけに落ちつく所。見屆けて取つてたも。人手に渡れば互の大事其方に頼んだ預けた。兎や角と隙が入る。ア、心せかれや乘物急げと仰より。六尺七尺一またげ飛ぶが如くに行き過ぐる。地 跡につゝぽり與勘平 狀箱持つて呆れ顏。エ、滅法な當途もない闇の夜に烏追ふやうな預り物。ヤアしたが風もしづまる。そろ〳〵と狀殿が下らるゝ。エ、ま些とぢやと。子供が蜻蛉つる同然。飛上り〳〵。ひよいと返りや高上りはつと。ひよう〳〵。ひよんな役目ぢやと文を慕うて 三重 尋ね フシ 行く。

水上淸き片淵や加茂の氏人保憲の館。保憲死去の其後は。姫の養育髮切りて後室殿と内外の人の敬ひ持てはやしに フシ ほこる 惡事ぞうたてけれ。地 中の間に立出で腰元々々と呼びわめき。詞 エ、何奴を見ても居眠りたさうな顏付。榊は部屋にか上樣へ上つたを。大きな顏で晝寐して居ぬか。地 皆手々に棒でも持つてさすり起せ 撫起せと フシ 眞綿に針を包む折から 地 當家の執權人の皮きた乾平馬。お傍近く手をつかへ。詞 御舍兄治部大輔樣。密々の御用とて御出でなされ候と。地 いふ程もなく 岩倉治部大輔國行。のつさのさばり上座につき。詞 後室今朝の御所の首尾。姫が話聞き召さつたで有らうの。それにつき密々言ひたき事有つて。左近太郎と言合せの刻限を待たず此通り。地 先づ是をお見やれ と 懷中の一通取出し。平馬も見よと投げやれ

ば後室取上げ押開き。詞ハア是は正しう保名が筆蹟が方へ來た文是が何うして手には入つた。さればノ＼菜も何となく。不圖眺むる庭の松が枝に何やらびらつく。又町の子供め等が紙鳶落せしかと氣をつくれば此文。今日櫻木の親王樣如何御出され候や。心許なく後程密かに參り承り度存まゐらせ候と。地文に仔細はなけれども元來御鬮といふ物が。ふり物の危な物萬一保名に鬮が上つては。此方は童の手を切つたるも同然。どうぞ左近太郎と立合はぬ内此方へせしめる思案は有るまいか妹。平馬も智慧を出せノ＼とフシ氣を焦立のせはしなし。地後室騷ぐ色もなく。詞かねノ＼お知りなされた通り。此金烏玉兎集の事は。夫保憲殿存生の内日を選み。地安倍の保名に讓り娘に娶合せ名跡を繼がせんと。吉日を待つ内に煩ひつきお果てなされた。まそつとの所を運の弱い。不仕合な安倍の保名。詞此方や私は蘆屋の兵衛に讓受けさせたいと思うた樣に。大事の所を遁れた上々の强い運。富でも御鬮でも當るに氣遣はなけれども。廻らうよりは近道と兵馬と内證牒し合せ。明けにくい寶殿の扉や箱。地明けたが思案落ちついて下されと。箒木内傳の玉兎集治部に渡せば喫驚し。詞是はどうして取出した。尤も扉の鍵は其方が預りなれども。箱の鍵は娘が預り豫て聞く。大事にかけ肌身を放さぬサア其放さぬを智略にて。地盜人の隙は有れど守袋も寐る内は枕元へ忍び。鍵の寸法うつし取り拵へし此合鍵ハ、ア詞したりノ＼。さすが治部が妹程有る。地出來たノ＼有難し忝しと押戴き。此書を道滿にやればあれも出世此方も出世。出世だらけ好い事だらけ此狀こそ幸ひ。保名めを盜人にする仕樣も有らう甘いノ＼と悦べば。詞其甘いを肴に御酒一つ參らぬか。それは耳寄兎も角もと地馬の合うたる平馬が案內。人喰ひ馬に間の戸をフシ引立てゝこそ入りにけれ。地榊は我が使ふ腰元を誘ひサアよい隙と部屋を出で。詞もう刻限は何時ぞ。言はずとも氣をつけて小鳥ども此處へなぜ出さぬ。イヤ申し御姫樣。今日はお前のお心は小鳥どころぢやござんすまいがな。今朝の御所樣のお詞。千に一つ御鬮が道滿殿へ上つたら。如何せうと思召します。サア夫れ故早うお出でなされと文をやつたれば。もう見えるに間は有るまい。お出でを知らせのお鷹の爲。直せといふ小鳥籠。地小言いはずと早う並べい。あいと手々に持運ぶ飼うて心の慰みと。人に見するはフシ鶯よ。フシ二人が仲の。語らひは。末長かれと尾長鳥。長地朝夕爰に置きまして見つ見せたさの顏佳鳥それ其鶲は伯父樣の。秘藏せよとて賜はりし。若

し保名様氣が外れたら。胸のひたきと氣がついて見るもいや／＼捨てはならず。遠のけてそちらに置けと得手勝手フシヘズミ笑ふ口々囀る鳥。地聲高塀の外面には忍び來る安倍の保名參議好古にみやづかへ餘勢有る身に有らねども。先祖は遣唐使に選ばれ唐土にて日本の名を揚げし。昔思ふも身の恥と編笠深く顔隱しフシ忍びて爰に立寄れば。地御供の與勘平鈴付けし小鷹を手にする走着き。詞お旦那あれあれ小鳥どもが囀る。榊様お出でを待兼と聞えた。此方もお鷹を使に知らせんと。地拳を放せば飛上り戻り羽もぢり羽毛を振ひ。鳥の音に眼を付け籠をむんずと摑んだり。ヤレ詞お出でなされた知らせの鳥嬉しや／＼腰元ども。地鷹を與勘平に渡し小鳥ども片付きやと。庭にかけおり裏門口明けて招けば首肯いて。入ると締合ふ手の内にフシ色と思を含ませり。地與勘平鷹をするコレ腰元中。詞拙者は人目有り歸れと旦那の仰せ罷り歸る。コリヤ鷹よ今日も亦虚口空腹でかへるな。世間の譬とは違うて何時來ても／＼。地鷹骨折つて旦那の餌食。堪へ情の好い鷹めでは有るわいとフシ小踊してぞ歸りける。地榊さゝやき御所の首尾は最前文で申す通り。詞御閨といふ物は天道次第運次第。心に任せぬ神の掟。言出せば愚痴なと叱らしやんすれど。父様まあ一年生きてござれば夫婦にもなり。書物もお讓りなさるる所を御往生。地運の弱いお前なれば。今日の御閨も私が心には上る迄も氣遣で。胸の躍をコレ見さしやんせ。賴むて禱り祈念もさせませたく。詞左近太郎は大元尊神吒枳尼天。早う呼寄せまし樣はまだ見えぬに。伯父御は疾うから來て奥に酒宴。一倍と心がせき早うお顔が見たかつた。地サア一心に祈誓をかけおまへに御閨の上るやうに。共に祈念は怠らぬとフシ力をつくるぞわりなけれ。詞ヲ、馴染なればこそ忝い。我も文を見るより御閨の善惡。直に生死と定めしが言やるを聞けばさうでもない。地信有れば德有り神は正直の頭にやどる。力を添へてたべ隨分神慮を仰ぐべし。といふものゝ烏帽子禪もかけずして。此平服恐れ有り何とせう。詞幸ひ父上の素袍烏帽子。私が部屋に有る取つてこい。地あいと急げば急ぐたけ行くより早く持つてくる。詞ヲ、實に／＼目馴し師匠の素袍烏帽子。今日着するといふは吉左右々々々。地冥加あれ保憲公と押戴き／＼。着せんとする所へあたふた奥へ行く女。詞何ぞと問へば左近太郎のお出故。地知らせましにと走り行く御傍輩の中ながら。見付けられては事やかまし小枝が部屋が好い所。いざ此方へと打連れてオクリ裝束へ取持ち入りに

ける。地好古の執權左近太郎照綱案内させて座敷に通れば。治部大輔後室榊乾平馬恭しく。八くらの机に御鬮を乘せ兩人の中に据ゑ置きてフシ遙にしさつて畏る。詞是は〳〵照綱殿御同道と存じたれども老足のはか行かず。却つて御面倒とそろそろお先へ參つた。親王の仰とは申しながら遠所の所御苦勞千萬。是は保憲が後家御存じの通り拙者が妹。次は榊お見知りなされて下されう。いかさま御母子共に名は承り及んだれどもお目にかゝるは始めて。申さば今日は保憲殿遺跡の定りさぞお悦びなされう。ヤ何治部殿。御鬮の次第を日の中に親王へ申上ぐる爲なれば。御支度能くばいさ御鬮をお取りなされまいか。イヤ先づお待ちなされ。仰の如く今日は名跡の相續。未來の保憲もさぞ大悦。とてもの事に彼の金烏玉兎集を取出し。神前に供へ置き其前にて御鬮を

取らば。保憲直に讓る心。先づ書を先へ取出しては如何ござらう。それは兎も角御勝手次第。アレ後室。左近太郎殿も御同心。扉を開くはそなたの役早う〳〵と有りければ。地母は淸めのから手水注連繩ほどき立寄つて。海老錠ぴんと扉を開きコレ榊。詞扉は開いた中の箱は和女の預り。錠明けて書を取出し御神前にお供へ申しや。地あいと答へてしと〳〵と歩むとすれど氣は空に。口は經やら祓やら只一時に一生の。年を寄せたる浦島が明けて悔しき箱とも知らず。畏れみ愼み取出し二人の中に据置き。鑰にて開く箱の内。見るよりはつと驚けり。後室素知らぬ風情にて。コレ詞何をうじ〳〵してゐやる。御兩所のお待兼ね早う爰へ持つておぢや。アレまだいの俺にばかり物言はせ默つて居るどころぢや有まい。地合點が行かぬと立寄つてヤアこりやどうぢ

や。大切な家の秘書此内にござらぬと。聞いて驚く左近太郎ほつとフシ溜息吐くばかり。地治部大輔聲あらゝげ。詞ヤア後室無いと言うて事が濟むか。兩人は鍵預り外に知らう者がない。詮議して身の垢脱け。左近も是にお居やれば兄弟とて容赦はならぬ。地一巻の在り所いはねば骨を拉いで言はす。何と〳〵と仕組の詞後室榊が膝引き寄せ。詞コレ今のを聞きやつたか。現在おれが兄弟でも容赦のならぬお上沙汰。其方とても其通り娘の遠慮成りませぬ。サア誰に盜んでやりやつたぞ。是は母樣のお詞とも覺えぬ。わしが盜んで誰にやろ。イヤ遣りたがる其相手も此母が睨んで置いた。たけ〴〵しう言やつても盜んだは慥か〳〵いやとはいはさぬ。肝心締りの中の鍵は其方の役。假令外におろした錠の合鍵はいつでも仕易い。大膽な合鍵して能うも目を拔いた

なア。地あり様に言はぬと骨をぽき／＼折つて言はす。サア吐かせ出しをれと腕まくりする氣相に。榊はとかう泣くばかりスヱテ差俯向いて答なし。詞ヤア後室手ぬるし／＼。引括つて鴨居へ吊り上げ。白状さするは治部が得物。地其處退かれよとひしめく所へ。榊が部屋より平馬が高聲同類を捕へしと。保名が胸ぐら引立る是は難題狼藉たり。放せ／＼も放さばこそ烏帽子素袍も引きしやなぐり。座敷へどうど打据れば榊ははつと胸塞がり。左近太郎も一座の手前顏色變つて。詞コレ保名。變つた所で對面致す。今日を何時と心得て此所へは如何して來た。忝くも櫻木の親王。保憲が跡目相續の御差圖。蘆屋兵衛安倍の保名。伽藍籤の鬮に任せ秘書相傳は時の運。弟子と弟子との立合は後日の心よからじと。御賢慮をめぐらされ治部殿と某二人が名代。左近太郎が鬮取氣遣ひで和殿は來たか。地親王の御下知背くといひ主人小野の好古卿。顏まで汚す不屆者サア言譯せねば左近が立たぬ。性根定めて返答あれと理の當然に差付けて。言譯ならぬ身の誤りフシ戀に心をくるしめり。地治部大輔せゝら笑ひ。詞保名のどろめと道滿と同日にいふも勿體ない。さすが治部が挈程有つて。潔白に身を守り。こんな所へ出しやばらねば盜人といはるゝ恥もかゝず。自然と極る師匠の後繼鬮取も絲瓜も入らない。ヤコレ後室誰に遠慮してお居やる。どれやい女郎を詮議して卷物を渡されよと。地己が盜み取りながら人を虐げる慾面兄弟。後室保名が襟首摑み引伏せれば榊の前。これなう暫しと寄る所をエヽ面倒な邪魔女郎と。髻を片手に二人を捻付け。詞ヤイ恩知らずの罪人めら。師匠といひ親といひ目を拔いて腐り合ふ罰の報は早い物。エおれが産んだら斯うは有るまい。元をいへば和泉の國信太の庄司に貰うた娘。生さぬ中と分け隔て繼子根性親くらひ。日頃可愛がる此母を能う皮にしをつたなア。汝は又過行かれた師匠の名乘の一字を貰ひ。ホヽ結構なお弟子殿。死なれた夫を誹るぢやないが。娘に甘い阿房故。修羅の種を造らする。エヽ地憎くい奴腹癒せにと。名殘情もあら拳。目鼻も分かず打伏せしは。地獄の呵責目前。閻魔王に親有らばフシお袋なんどと謂ひつべし。地榊は涙せきあへず恥かしき御疑ひ。小い時より御世話になり實の親より百倍の。御恩をあだに思はねど圖らぬ今の憂き難儀。保名樣に科はない盜まぬ知らぬ言譯には。此身一つを兎も角もお心晴らして給はれとハルフシ泣きわぶ。るこそ切なけれ。詞アヽコレ御身の言譯には及ばぬ。來るまじき此所へ參りたる保名が不運。

覺えなき身の打擲も師匠の違合手向ひならず。好古卿への面晴保名が家名は汚るるとも。地五臟六腑は汚れぬ腸引出して申譯。介錯頼む左近殿と。指添ずはと拔き放す。其手にすがつて榊の前刃物もぎ取り南無阿彌陀と。喉にがはと突立つるコハ早まつた生害やと。保名は仰天照綱もフシ呆れ。果てたるばかりなり。ハルフシ手負は苦しき氣を取直し早まりしとは愚かの仰。よしなき戀につながれて言譯たゝぬ御切腹。そもや、おくれてフシあられうか。詞母樣も伯父樣も御不承ながら聞いてたべ。弟子の中にも保名樣。氏といひ器用といひ。そちと娶合し末々はと。の給ひし事もあつた故。地父のお詞に甘えてお二人の。目顔盗みし母の罰。天罰といふ物にや御所を歸りの道すがら。お前から賜ひし文俄風に取られしも。今別れんとの知らせかや玉兎集の行方も。推量はしつれどもどうも。/\言はれぬ相手。清き心は天道や神佛を證據にして。死んで行く身が言譯名殘惜しの保名樣。左近樣頼み上げますと聲も涙もせり詰めし。此世の苦患四苦八苦刃の氷名殘の霜フシ消えてはかなくなりにけり。地保名は死骸に縋りつきスヱテ前後不覺歎きしが。元來正直つきつめたる胸に思の氣も散亂。むつくと起きてホ、ホ、ホ、ハ、、、、こりや目出度いどうも言へぬ。ハ、、、、、ア、地面白いと正氣失ふ高笑ひ。左近興覺めコレ保名。詞照綱ぢやが覺えて居るか心を定め取直せと。地制すれば猶きよろきよろ聲。詞よしや世の中死んだがましかいの。生きて思をコリヤよい/\。へへ、、ハ、、、地げら/\笑ひに一座もうろ/\。治部大輔底氣味惡く立つしほなければ佛頂面。詞エ、一人はくたばる一人は違ふ。狂氣の守は左近太郎詮議して歸られよと。地行くを引きとめヤアこれ詮議が殘り申した。詞事相濟む迄先づ待たれよ。イヤ其許は若役老人が儀は御容赦。はれやれ今日はびつくりの仕續け。それ故か腹もがつくり。地年寄と紙袋は入れにや立てらぬ。内へ往んで入れませうと盗み取つたる卷物をフシ腹にかこつけ立歸る。ハ、ア詞往ぬるは/\。おれも往の。ヤ何ぢや。一人は往なさぬ。何のいとしい和女を置いて一人は行かぬ。地サア地おやぢや立たしよと榊が袿襴花摺衣。菊のしげ縫亂菊の亂心やフシ亂髪。地肩に打ちかけくる/\/\。狂ひ出づるをコリヤやらぬと。留むる平馬を蹈み飛ばし縋る後室取つて投げ。擲り退け打ち退け。戀に苦しむ戀の仇。戀しき人は殺されても。戀々妻のこい仲は何の離りよぞシヤ。ほんにエ天は非々相。非相比翼の鳥のくち/\。地は又奈落の底も離れ

ぬ連理の榊。榊々と逆上る。狂人狂へば不狂人。左近太郎が止むる袖振り切り振り切り狂ひ行きフシ戀路に迷ふぞはかなけれ。地乾平馬仕濟し顔。詞佛もない堂にござらずと左近殿もお歸りと。詞いはせも果てず飛びかゝり。素首捕へ筋斗打たす。後室猛つてこりや狼藉どう仕やる。ヤア詞狼藉とはおのればら。盜人の化顯はれた是を見をれと差しつくる。ム、それは榊が預つた箱の鍵。ホ、榊が鍵はも一つこゝに有る。盜人婆めが立廻ふ内落しをつた此合鍵。よう榊を殺したなア。地主從共に猿繋ぎ御所へ引く腕廻せと。睨めつけられて二人はわな／＼。逃支度する所へ息を切つて與勘平。ヤア詞奴來たか／＼。ない／＼内證臺所で女中に鬪いた憎くい婆め。保名樣の御名代彼奴は拙者に下さりませ。ヲ、地兎も角もと拔放せば平馬も遁れぬ死物狂。二打三打かなはじと奥を指して逃げて行く。婆が首筋奴が片手ぎやつと言はずとにやんとなけ。猫股婆めが成敗はこれよ／＼此注連繩。明けた扉の上にかた／＼引つぽどき。首に纏へば跳廻る。のら猫古猫する／＼畏。繩先左の手にからまき。ちよいと引けば七顚八倒ぐつと引けば目玉もぐつと。拔いて取つたる一卷の報は目の前悶き死フシ心地よかりし有樣なり。地左近太郎は平馬を追つつめちやうど打つたる太刀影に。首は飛んで骸は乾猫と並んで死してげり。詞コリヤ／＼奴。保名に早く追付いて仔細を語らば正氣に成るべし急げ急げ。ない／＼と地別るゝ跡へばら／＼ばら。取まく下郎うんざいめら。薙立て切伏せ殘黨どもフシむら／＼はつと追散し。地心しづかに刀を納め。出で行く武士に仁義有り。奴に過ぎた忠義あり。歸りし伯父に詮義有り。死したる娘に不義あれど戀にはゆるし有明の月の都に照綱が武勇の。譽ぞ世に高き

第二

大いなる者の己を立つるは奢の基。此字を分くれば一人の者と訓ず。岩倉治部大輔主君左大將の仰を蒙り。保憲が秘書を首尾よく奪ひ。己が館に預りおきフシ邪智を廻す折こそあれ。地豫て密事の相談には河内の國の郷侍。石川惡右衞門角前髮の部屋住なれども。惡に馴れたる强氣の若者招きに應じ入り來たる。跡に續いて蘆屋の兵衞道滿。舅の館案内に及ばず。一間へ通れば治部大輔出で迎ひ。詞よくぞ／＼兩人。今日は左大將殿諸共密々の相談なれども。主人は大内の御用によつて御不參。某が諸事承つて申談ずる仔細有り。サア／＼地是へお通りやれと。挨拶すれば惡右衞門。遠慮もなく上座に直

り。詞コレ／＼道満殿堅い／＼。聟舅の禮義は常斯様の時の相談は。額と額すり合さねば談合がをへかぬる。但しお手を取申さうか。地如何にも御意に任さん御免あれと三人鐵輪に膝組合せ治部大輔小聲に成り。詞扨かね／″＼もいふ通り。保憲が家の秘書。金烏玉兎集。道満保名兩人の弟子の中へ。神慮に任せ彼書を譲り。天文陰陽の兩道を繼がせよとの御事。地萬一保名に彼書が渡らば。好古はよからうが此方の旦那は大望叶はず。聟道満の残念も推量せしにサア智惠も有れば有る物。詞妹後室が合鍵の働で首尾能く奪ひ。榊が淫奔の文を拾ひ保名に悪事をぐわらりと塗りしが。地不便は妹の後室人手にかゝり相果て。妊榊の前も其夜に。自害と聞いて道満もフシはつと驚くばかりなり。地悪右衛門しやらりいで。詞エ、知れた保名が所爲。治部殿詮議なされぬか。

ヲ、身どもも左様は思へども。彼奴もそれより行方知れず。此詮議も打捨置く。捨置かれぬは奪ひ取つたる玉兎集。早速主従打寄り内證で讀んで見ても。地ちんぷんかんにて合點行かず。其方とくと此書をそらんじ天が下の大卜師となり主君の望叶へよと件の秘書を取出し。渡せば道満飛びしさり恭々しく手に捧げ。日頃の願今日成就是も偏に主君の厚恩。忝しと紐をとく／＼押開き。一々に拜見し横手を打ち。詞ハ、ハ保憲の惜まれたるも道理々々。荊山の伯道が傳へし。天地陰陽の數。暦算推歩の術迄も掌を指すが如しと。地押戴き押戴けば悪右衛門肝を潰し。扨も妙かな見人に見せれば又格別。あかりをはしる蘆屋殿とフシしたり顔に悦ぶにぞ。地治部大輔笑壺に入り。詞早速ながら尋ねうは。主君の御息女御息所櫻木の親王の御胤を。御懐胎の様子もなし。

地何と其術も有るならば。一行聽きたしときほひかゝれば。詞ヲ、積善の術は行ひやすし。毛色白き女狐の生血を取り。御息所の寢所の下陽に向うて土中に埋み。咤枳尼の法を行へば。地若宮懐胎疑ひなしと。聞くに悦ぶ治部大輔出來た／＼。詞イヤ出來は出來たがなんと悪右。狐の才覺如何せうぞ。地それは氣遣ひなさるるな主君の領分石川郡。其外五畿内狩廻さば白狐の五疋や十疋は。手の中に覺えが有る。それならば御懐胎は案の中爰に一つの難義は。詞六の君親王の御寵愛他に越えたれば。自然彼奴が先へ孕むと。外戚の權威好古に取られ主人は有つてなかし物。所詮邪魔は彼の女郎さい奪ひ取らうと思へども。大内の守り嚴しく盗み出すに時節なし。彼の俗説に蛙の背に思ふ人の名を書いて。地敷居の内へ投り込めば必ず出るといふ事。古き書物で見た

る故。其法を行へども蠆程も利かず。日頃流行る呼び出し病も六の君には取りつかず。たそやたその歌の德にて。疫病の神も祟らぬは是がほんの臆病神。なんと彼の書に呼出す法はない事か フシいかにいかにと問ひかくる。ヲ、有るとも〱。六の君をおびき出し其上の御思案聞きたし。されば奪ひおほせなば長う邪魔をひろがぬやうに。ぶち殺して了ふ合點。其術頼む聟殿と人の譏もしら髮の親父。共に腰押す惡右衞門さても妙計。殺すとは手短かな上分別と フシそゝりかゝれど。地返答もせず膝立直し。詞これは又舅殿の詞とも覺えず。主君は子故の闇に惡行を募らるゝとも。其處を鎭めるが執權の役。御息所御懷胎の祈禱ならば。非常の大赦か生けるを放つ善根こそ。地御願成就なるべきに是は正しく六の君に。非業の死をさせ罪に罪を重ぬる上は。七鬼神の責をうけ御懷胎存じも寄らず。天に口有り地に耳有り好古などへ聞えなば。安穩で置くべきか時には却つて不忠の至り。此謀計は フシ無用々々と言ひほぐせば。ヲ、詞汝が一言能く推せり。イヤ拙者はお爲を存じての諫言。イヤサ諫言だて措け〱。察する所好古が家來左近太郎に。お事が妹花町を嫁にやつたる故。一家の主と敬ひ六の君をかばふのか。ハテそれは舅殿の廻り氣。イヤサ疑ひ受くるも胸一つ骨折つて奪ひたろ。地玉兎集も娘築羽根も取返し聟舅の緣を切る。お家の大事を妹に見換ゆる不所存左大將殿へ申上げ。今日に物見せると立つを引留めア、これ〱妹などが緣に引かれ不忠を存ずる道滿ならず。サアそれならば地只今術をおこなふか。フシなんと〱ときめ付くれば。地人の命を斷つ事は陰陽道の禁なれども。舅の疑念を晴らす爲と フシ硯引きよせ。呪咀の文を認め。詞此神符を六の君の住み給ふ北の門の礎より。三尺六寸四分去つて貼付くる。則ち三百六十四爻の占方此寸尺にとゞまる。北は坤の卦向うて貼るは乾の卦。これ陰陽交體天地未分の一つ。地迷ひ出づるに疑ひなし刻限は西。奪ひ取るに利有りさりながら惡事千里。愼みが肝要々々何國で殺す御思案ぞ。ヲ、それはぬからぬ都放れし菩薩池は。究竟のはめ所底も知れぬ池水へ。石を括つてずぶ〱は何と〱。したり〱面白し其役は此惡右衞門。奪ひ取つて沈めにかけん。首尾よう仕果せなば。治部殿かね〴〵頼み置く。詞伯父信太の庄司が所領某拜領仕り。彼が娘葛の葉を拙者が女房にくれる樣に。元方卿の權威にて仰付けられ下さるゝお執成頼むぞや。地成程治部が呑込んだ必ずぬかるな仕損ずなと。神符を渡せば受取り急な

所へ取交ぜて。媒人やら所領やら摑み頬張る鷲鷗。烏丸通櫻木の御所をさしてぞ三重 三下り歌今日來ずは。明日は散り行く。餘所の風。仇なる花のナホス名にしおふ。地櫻木の親王御所の築地を洩れ出づる。フシ琴の音色も媚かし。地彼の櫻木の仇花を散らして除けんと入相の鐘を相圖に石川惡右衛門。刀ぼつ込み絡をきりゝと填。夜に。急けば急く程絶間もなき人通り。見咎められじと或は現れ或は隱るゝ星明。ちらり〳〵とちらめくにぞフシ戀とや人も咎むらん。地上の町より小提燈ぶらぶら來る二人連。こりや叶はぬとかたへに忍べば立留り。詞何と出ぬぞや。出ぬともも〳〵。此方の目の出ぬのに彼方のよい目の多いので。フシ不斷一六するゐられいつのおりはか勝利を得ん。地今夜は往んで悄々と双六より寢たが勝ちと。呟き通ればエ、さいさき惡き奴輩と。行き過ぐる迄見送り〳〵。用意の神符取り出し立寄る後に又人聲。はつと驚き立退けば聲高。京名譽不思議な咳出し。寸白や腫物に此膏薬を貼付くればフシ奇妙々々と賣つて行く。辻占よしと縱横見廻し。人跡絶ゆれば。六の君の住み給ふ北の小門に彳み。道滿が教に任せ懷中の曲尺取出し。詞一尺二尺三尺六寸地こゝらが四分と。目分量に神符を貼付け。築地の陰に身を潛めフシ今や出づると待居たる。三下り上歌かこつ恨は侍まこと。絶えし。逢瀬の憂き中を。いつそ言はぬも。身一つのナホス物に誘はれ出づるとは。思ひがけなく六の君。裏の小門をそつと明け氣も空蟬の藻脱の殼。お傍の女中はそれぞとも知らず調べる琴の糸。三下り文を忍ぶのヤ甃や大江山。いまだ合ナホス慣はぬ地徒歩跣足。フシ立ちやすらひておはします。地時分はよしと惡右衛門。築地の陰よりぬつと出づれば六の君。なう悲しやと騒立て給ふを引捕へ。おとぼね立てなと提灯を袱紗してやつたりと引つかたげ菩薩が池へと三重急ぎ地行く石川や瀨見の小川を横ぎれに。息つぎあへず惡右衛門六の君を肩にかけ。目ざすもしれぬ鞍馬口戀ならぬ欲の深見草。廿日田舍の月代も。東の山に茜さすフシそれを力の。目當に。よく〳〵すかして菩薩池此處なんめりと。どつかと下せば氣も消え〴〵。こはそも誰なれば情なや。身に覺えもなき事に斯る憂目を見するぞや。スヱテ赦してたべと泣給ふ。詞ハテめろ〳〵とやかましい。とち女郎にかゝつて此侍の形を見よ。都から此池へちゆつくりと一里半。徒歩荷持同然で肩も足も草臥れ果てた。暫く息をする間合掌して待つてをれ。地これ究竟の床几ござめりと。道しるべの立石に腰をかくれば。なう武士ならば物の哀は知る筈。假

令如何様に成るとても厭はぬ。かう〳〵した入譯と滿足さして殺してたべ。詞ヲ汝が此世に長居をすれば。御息所の邪魔に成る故。此池へ沈めにかけて殺すのぢや。ヤア扨は御息所のいひつけでか。地妬み嫉妬は女の習ひ。とはいひながら殺さうと迄は思はぬに。エヽ胴欲な惨いつれない人心とかつぱと伏して泣給ふを取つて引つぷせ。詞あまければつき上り面倒な悔言と。地あたりの石を拾ひあげ裾に括り袖捻込み押込むにぞ。なう悲しやと取りつき給ふ。糸より細き弱腕へし曲げ。やつとまかせと摑んで差上げ。池の深みを窺ふ折から。汀に茂る蘆原より。によつと非人の大男とんで出で。惡右衛門が弱腰さしつたりと蹴返せば。うんと反氣に反り返るを。又引つかづきどうどのめらせ。續け踏にぼん〳〵と。踏付けられても強氣者。よろほひながら立上り。詞推參成る乞食めとしがみ付くを身をかはし。ずつと沈みさまたにかけ。地かる〴〵と引つかづき其處よ此處よと持廻り。青み切たる池水へフシざんぶとこそは打込んだり。地水を喰うてあぷ〳〵と浮きぬ沈みぬ漂ふ間に。六の君の御手を引き塵打拂ひいざ。召し給へと脊中さし向け負ひ奉り。足に任せて逸散に行方。知らず三重へなりにけり。ハルフシ昔より爰に和泉の神籬や。信太の里に年經りて塵に交る宮柱。和光の影も明らけき是も神の誓とて。附々迄も當世の。地加賀菅笠を一様の鄙に見馴れぬ取形の。葛の葉姫と聞えしは。スヱテ信太の庄司が深窓に。人と成りたる秘藏娘。心に深き立願の徒歩路拾うて神詣千早振袖襠も。都に稀な品形。フシ花も色にや耻ぢぬらん。地外珍しき女子ども。詞申し〳〵姫君様俄事のお供にて我々迄も氣晴し。地そもマア今日の産宮詣は何のお爲とほのめけば。詞ヲヲ語らねば知らぬも尤も。此頃は毎夜毎夜血筋に離るゝといふ心懸な夢見る故。都にまします姉榊の前様の身の上に。悲しい事は有るまいかとそれ故の神參り。皆も共々願籠してたも。地頼む〳〵と同胞をフシ思ふ心ぞ優しけれ。詞お前の其姉妹思ひ神も納受遊ばさいでは。それはてつきり逆夢庄司様の甥の殿。石川惡右衛門様といふひとり角力見る様な。憎てらしい前髪がお前にきつい惚れやう。お嫌ひなさるゝ程しこりかゝつて女房呼ばはり。地其惡右衛門様に放るゝと云ふ夢の告げ。お悦びなされませ。詞ヲヽ能うこそ祝ひ直してたもつて嬉しい。あの人に思ひ切らるゝは此上もなき悦び。おつつけ父様母様もお出での筈。地それならば待合せ。御一所に御參詣。此間に散殘る花を御覽もお慰みと。手々に敷くや毛氈

の朱は都の唐錦。打混じたる女中の遊び皆々幕にぞ 三重 入りにける

小袖物ぐるひ

唄・小唄 戀よ戀。我中空になすな戀。戀風が。來ては 引。袂にかい縺れ。ナホス詞 思ふ中をば吹きわくるあら。心なの嵐につれて。裏吹き返す形見の小袖。見るに思の増す故にこそ 二人フシ 狂はすれ。し 狂ふは誰ぞや。我はそも。安倍の保名が安からぬ。胸に逼りし數々より。何國をさして ヒロヒ 和泉路に寄る邊の水も 下キン 泡沫の ハヅミ 漂ふ姿亂れ髪素袍袴。踏みしだき浮かれ歩くぞ。フシ たゞならね ○詞 これ／＼物問はう。若し其邊へ十八九の娘の裲襠褄で。しやなら／＼と行かぬか。ヤア／＼知らん。ヲヲ共尋ぬる人こそ。地 一人 紫蘭芙蓉の花の容顔姿は物か。フシ 及びなき。ハルフシ 吉野初瀬の。雲珠櫻。更科越路の月雪も。ながめははるか下照衣通。神の縁の神とは。我が戀人のあだし名か。あだな契りに言ひ交したる言の葉を フシ 思ひ やるさへ悲しけれ。小唄 更け行く鐘別の鳥も。獨り寝る夜は。さはらぬ。物を。柳の糸の亂心いつ。いつ忘れうぞ。何時の春か思ひそめけり。ナホス詞 ア、去年の何月幾日やらヲヲ 小唄 それよ。花の宴や。花の縁。寺々



の。鐘撞く奴めは。憎やな。戀ひ〳〵て。まれに逢ふ夜は日の出る迄も。寐ようとすれど。まだ夜深きにごん〳〵〳〵。こん〳〵〳〵と。撞くにまた寐られず。二人ナホス地寐ぬ夜恨みのフシ旅の空。二上り唄夜さの泊は何處が泊ぞ。草を敷寢の肱枕肱枕。獨り明かすぞ悲しけれ。〳〵。合葉越の〳〵幕のうち。昔戀しき面影や移香や。其面影に露ほども。○地似た人有らば教へてたべ。遠近人に物問はんヲウイ。△ヲウイ地とまねけば招く與勘平やうやうに走り着き。詞是は〳〵正體なき旦那の有樣。人の見る目も耻ち給ひ。地サアお歸りと諫め賺して引く手を拂ひ。○彼處に茂る榊の枝に。形見の小袖うちかけて。あれ〳〵〳〵。枝にゆかしき人は見えたり嬉れしやとて。攀上れば。榊の枝は身をとほし。愛着は胸を焦す。こはそも如何に淺ましやとフシせんかた涙に伏し沈む。△地こは情なき御有樣。心なき草木を焦れ給ふも迷の空目。○詞なに空目とは事をかしや。心あればこそ時をがたへずそれ其處に。二どれ。何處に。二下リ二人唄眞實君に逢ひたくば。信太なる社に歩を運びて。合七日なん〳〵七夜さ。籠らば御利生まさしくあらたに。合戀しき人にはナホス地逢ひも見もせめ中に殊更榊の枝に。君が小袖をフシ打被せ被せて。○地まがふ方なき榊の前非情とは與勘平。△ナイ。〳〵。汝こそ草よ木よと。二人形見の小袖身に添へて。泣いつ笑ひつ種々にフシ狂ひ。亂るゝばかりなり。

地始終幕の物見より。覗きみとれて葛の葉は賤しからざる都人。何故かゝる亂心と幕しぼらせて立出づれば。姫を見るより狂人はなうなつかしの榊の前と。抱き付かんと立ち寄るを附々の女押隔て。詞是是麁相せまいぞ。あなたに覺も無い事を滅相な氣違殿。地それ留めさつしやれ奴殿。詞いや留めてをりまするお氣遣ひなされますな。地語るも主人の耻なれども一通り聞いて下さりませ。詞手前の旦那が思人におくれ給ひ。それより正氣を取亂し御覽の如く物狂ひ。其戀人にあなたがとんと生寫し。直な目にさへ見違へるに亂心では尤もと御了簡。重々甘えたお願なれども焦るゝ人に似た姫君。地優しきお詞かけ給ひ樂み易きは人心。自然狂合氣も鎮まれば此上もなき慈悲心。お傍の女中お執成とスヱテ餘儀なく賴めば葛の葉は。まだうら若き心より應へなければ腰元ども。詞姫君のお詞で。あの氣違ひが直るならばそれはきつい善根。地見れば見る程よい男戀故と聞きや女子の氣は。傾きやすき稚州の いなにはあらず葛の葉も。それがまあああられもない。如何言うて好からうやらと耻かしながら立寄つ

て。詞戀しう思召す方がお果てなされて。狂氣とはおいとしぼや お笑止や。地世には又忘草も有る習ひ。お心を取直し最早お歸り遊ばせと。言へば保名も心を鎭め。能く〳〵見れば榊ならず似たりと思ふ執着に。つれて心も正氣となり面目なげに差俯向き。スヱテしばし答もなかりしが。地やう〳〵に顏を上げ。詞ヤイ與勘平。おれは正氣に成つたるぞ。ヤア 地扨々嬉しや忝や。是も偏に彼方のお蔭。お禮〳〵と主從手を下げ。ハン悅ぶにぞ。地葛の葉も面はゆげに田舍育の自らが。ちよつとお詞かけたとてお心の治るとは。ホ、、、、ホ、ヲ、恥しと顏を赤め。詞早速ながらちとお尋ね申したいは其お小袖。自らが確に覺の有る模樣。今又仰やる榊とは。もし加茂の保憲樣のヲ、其娘の榊の前。詞ヤア そんなりや私が姉樣と聞くに保名も聞き及ぶ。信太の御息女葛の葉殿かこれは〳〵と驚きしが。拙者は榊の前と深う契りし安倍の保名と。地聞くに今更餘所ならぬ姉の噂に驚かれ。此頃惡しき夢の告は。榊樣の身の上か。お果てなされし入り譯を。スヱテ聞かせてたべと取付けは。ヲ、聞きたきは尤もながら。爰は往還人目も有り。地幸ひの幕の內。委細あれにて咄し致さん。此上は妹御を榊と思ひ神かけてと。目許で知らせば詞さへ岩木ならねば葛の葉も。綻びやすき幕のかげ。フシ伴ひてこそ入りにける。地女子ども口口に。詞猫に鰹の幕ばひり。假令姉聟なればこそ。手放してやられもする。先刻の樣に狂氣ならば。かんまへて油斷がならぬ。是れにつけても兎角手柄は奴殿。地當座の氣轉で戀の亂心しづめるとは。家原の文殊も及ばぬ智惠。殊に名迄才覺らしい。可愛らしい男やと。背中をとんと與勘平。旦那の狂氣このかたは可愛らしいに懲り果てた。なう嫌や勿體なやと。ハル幕のへ小蔭へ フシ逃込む折から。地信太の庄司夫婦連私領の內は氣散に。供人輕く娘を慕ひ是も社へ詣で來る。附々の女さし心得。地親旦那お二方御參詣と知らするにぞ。幕絞らせて葛の葉姫の小袖を打ちかけて。只其儘の榊の前と紛ふばかりの詰袖にて フシ思ひ有りげに立出る。地娘の目馴れぬ取形に心をつくれば申し母樣。詞此小袖見覺えて ござりますか。どれどれと 地能く〳〵見て是を知らいで好い物か。詞此母が若盛りに。物好みに縫はせた小袖形見に見よとて姉の榊に送りしが。地和女はどうして着て居ると 父諸共に不審顏。詞されば此小袖につき。地悲しい咄を聞きましたとわつと叫べば父母も。心ならずとはいかに。樣子はいかにと問へど答も泣いて居て濟む事かと。夫婦苛てば保名見兼ねて幕の內よりずつと出で。

ヲ、御兩親の御不審尤も。拙者は加茂の保憲が末弟安倍の保名。御息女榊とはかねて夫婦の約束。御室の惡心にて家の秘書を餘人に奪ひ取られ。加茂の家斷絶といひ夫婦の義理に榊の前は其夜に自害某も無念骨髓に徹し夫より物狂はしく成り思はず當所をへめぐり。各々に御目にかゝるも不思議の緣と。語れば母は聲を上げなう葛の葉。此頃の夢話。かほどにも合ふ物か。是も夢ともなれかしと身を投げ伏して泣き沈む。父はさすがにえ泣きもせず胸迄せぐる涙をとゞめ。扨は聞き及ぶ保名殿か。姉が此世に存へ居ばいかめしく聟舅の名乘合も致すべきに。悲しき今日の對面老いて子に別るゝ程至つて悲しき物はなしと老の涙に咽び入る。ヲ、御歎は尤もなれども。葛の葉殿がましませば。姉とおぼして慰み給へ。只今申すは異な物なれども。榊におくれ世に便なき某。何卒御赦しを蒙り妹御を。婦妻に申請けたき願と聞きもあへず。成程世間に有る習ひ。なれども一つの難儀は身どもが甥石川惡右衛門。葛の葉を望めども娘も嫌ひ殊に又。禮義知らずの惡黨者故返答もせず捨置けば。慾にあつとも申されず老の返事もするどげに。にべもしやらりも嵐に響き貝鐘の音列卒鼓間近き。森の方よりも年經る白狐の駈け來り。葛の葉保名が眞中へ。助けてくれと言はぬばかりに隱れ入る。フウよめた。今聞えし貝鐘は狐狩。飛鳥懷に入る時は獵人も是を取らず。殊に白狐は妖物にて唐土にては阿紫と名づけ。我が朝にては專女御前。宇迦之御魂の神使にて恩を知り怨を報ふ畜類。助けてやらんと傍なる祠の扉押開き。抱き入るれば嬉しげに四足を潜め屈み居る。時に向ふの堤傳ひ眞黑になつて駈け來るは。紛ひもなき惡右衛門逢うては邪魔と幕へ保名は。忍びゐる。程なく石川惡右衛門人夫引連れ件の白狐を見失ひ。きよろ／＼眼になつて馳せつき。是は／＼伯父者人。一家さらへて花見か遊山か羨しい。拙者は左大將の仰を受け近國を狐狩。同じ御領を預つても此方は仕合せ。妻子を引連れ味をやらるゝさりながら。葛の葉を嫁に貰へば聟なり甥なり。舅の代りに二人前の働き氣遣ひ召るな。見つけた狐も取逃しぎえん惡う思ひしに。願ふ所の女房狩。今日一日は休みにして。連歸つて腰膝擦らせ。此間の草臥休め。葛の葉おぢやと立寄れば庄司中に立塞がり。下々の婚禮でも吉日を選むが身祝ひ。いかに一家なればとて娘も得心せぬ事を踏付けた仕かた。彼にもとくと合點させ。其上の事と言ひもあへぬにア、措かれい。今度

に誤らず嫁入の催促は度々なれども。詞んだ物が潰れたとも一言の返答せず。又ぬつくりと魅まうでや。もう左様々々は誑されぬ。地逢うた時に笠脱げぢやそれ家來ども娘を引立て。畏つて列卒の者ばらく\と立ちかゝる。無躰はさせぬと支へる庄司夫婦をば。首筋摑んで尻居に捻ぢする。滅法やたらに荒れ出すにぞ保名主從たまりかね。幕の内より飛んで出で葛の葉親子をフシ後にかこへば。詞ヤア汝は安倍の安名。フウ出來た。姉が死ばつた故妹をせゝりに來たか。地躰汝には詮議の有る奴好い所で出くはした。加茂の後室を殺したも慥に彼奴。それを引込む伯父は同罪。地信太の家を斷絶さして此惡右衛門が横領するサア。毛二才奴媲を渡せと押取りまく。詞いや身に覺えもない事をさまぐ\とほざいたり。コリヤコリヤ奴妛は保名が請取つた汝は各御供せよ。隨分ぬかるな急げ\。地畏つて親子を伴ひ立出づる遁さじ遣らじと惡右衛門。家來引連れ驅け出すをどこへ\と立塞がり。詞伯父に手向ふ無道人惡右衛門とは能うつけた。サアならば通つて見よ。地いや面倒な蚊蜻蛉め。先づ彼奴からぶちのめせと一度にどつと寄る奴輩。取つては投げ\對ふ奴を顚蹴上げ。雙方へかゝるを飛びちがへ刀の鍔にて素頭碎き。手をつくして働けども遂に大勢をりかさなり。手取り足取り四方へ引張り。上げつ下しつ子供遊の亥の子餅。二三度四五度もんどり打たせ。サア邪魔は拂うたり。葛の葉を奪ひ取れとフシ跡を慕うて追つかくる。地保名は五躰も碎くるばかり。手足も拉がれ目くるめき。苦しき息をほつと吐き。詞エ、汝惡右衛門。生けて歸さじ卑怯者。地返せ\と立上つてはどうど轉び。よろぼひ立つてはかつばと伏し。無念々々とはがみをなしフシ男泣きに。泣きけるが。地必定葛の葉も奪はれつらん。最早生きてかひなしと指添逆手に拔き放し。既に最期と見えける折から。何として遁れ來りけん葛の葉それと見るよりも走りつき。これ待つた早まるまいと聲かけられて振返り。詞此方は如何して來た事ぞ。兩親は怪我はないか。はて地親達は如何ならうともお前に心ひかされて。鎬の中を來た者を。見捨てゝ置いて死なうとは聞えませぬと喞つにぞ。地保名も始終を具に語り危き事かなと。互に抱き縋りあひフシわりなき妹脊となりにける。地かゝる所へ與勘平息を切つて馳歸り。詞各を御供して府中の邊迄送り屆け。主人の身の上心許なく。取つて返す道にて惡右衛門に出くはし。地暫く戰ふ其間にようも慕うて葛の葉様。御心底届きしと悦び勇む向ふより。

又むら／＼と悪右衛門大勢引連れどつと返し。葛の葉を見るよりも拘こそ／＼。推量にたがはぬ女が不所存。保名主従討つて取り娘を奪へと下知すれば與勘平。最前手並は見せ置いたに性懲もなき有財餓鬼。此奴が引導にて冥で信太の土となれと。わつと喚いて切つてかゝれば只一人に切立られ。皆來い／＼と跡をも見ずして逃げて行く。保名夫婦は大きに悦び。あつぱれ手柄奴殿長追は無用なり。彼奴等が逃ぐるも與勘平拙者が追はぬも與勘平。御夫婦仲も與勘平是も偏に信太の神の御惠と。旦那を祝し御出世を松の葉の。ヲヽ住吉に隣つたる。津の國安倍野は我が本國。暫くかしこに引籠り。時節を待たんと勇めども。立つ足さへもよろ／＼／＼と。風に揉るゝ柳の枝を。杖よ柱と葛の葉が。夫の手を引きいたはりて畦道縄道まがひ道。石津川を打渡り。是より先は道もよし。西へ／＼と入日に連れて行くもよし。人目忍ぶは夕暮よし彼よし是よし與勘平。夫婦を誘ひ津の國や安倍野を。さして急ぎける

第三

鴻飛んで冥々弋者なんぞ慕はんや。左大將橘の元方は櫻木の親王の御契り淺からぬ。六の君を失はんと菩薩が池の底深きに。たくみも案に相違して御行方の知れざれば。我が身にかゝる後難を恐れて心安からず。家の雜掌早船主税。野袴に草鞋がけ庭上に畏り。菩薩が池の非人めが奪ひ取りし六の君。草をわけても尋ね出し御褒美に預らんと。洛中洛外は言ふに及ばず在々所々の非人小屋。野風の乞食迄片端に責め問へども。それかと疑ふ手がかりも候はず。察する所風をくらひ當地を去りしに疑なし。此上は京近き隣國を一吟味御所存如何と伺ひける。左大將默然と打首肯き。ホヽウ拔目ない詮議の仕方さりながら。腕におぼえの悪右衛門池へぼつぱめ泥水を呑ませしは。非人ながらをこの奴。都に居ずは近江路か若狹丹波路五畿内殘らず。捜し出してよき一左右。早船と呼ぶ苗字も時に取つて幸先よし。頼むは汝わが主税よ。ハヽア お氣づかひ遊ばすなと。御意に乘出す早船主税御前を立つて勇み行く。小廣間の杉戸押開き。執權岩倉治部大輔聲をかけてこれ／＼主税。當もない他國の詮議遠道より近道に。此治部が老眼で睨みつけた詮議が有る此。筋道を糺す迄旅用意入らぬ物と。主税は次へ岩倉が座敷へ通れば左大將。ヤア治部大輔只今の詞の端。何かは知らず近道とは聞かぬ先から心地好い。サア近う寄つ

て其入譯。近う／＼と主從が膝と膝とを突き合せ。〽此年迄組ひ付けた心の的。百に一つも外さぬ眼力。六の君の隱れ家嗅ぎ出した近道。あんまり近さに聞いてびつくり遊ばすな。外でもない御家來內擔者には現在の聟蘆屋兵衛道滿といふ鼻の先の近道。いや／＼蘆屋親子は無二の忠臣。何を以て二心とはア、殿甘い／＼。忠臣顏に得てはまる。夜前四つ過ぎ門を敲くは娘の筑羽根。夜中といひ徒歩跣何故に歸りしと。樣子を聞けば女のおしきせ悋氣からの夫婦喧嘩。其悋氣の根元が某の見つけ所。蘆屋兵衛が屋敷には陰陽の守護神吒枳尼天を勸請。不淨穢を忌むといひ立て。家內の上下は勿論連添ふ女房も寄せつけぬ彼の吒枳尼天の圍の內。世を忍ぶ女の泣聲。それから起つた娘が悋氣詮議といふは爰の事。世を忍ぶ女とは疑ひもない六の君。地主の仇を助け置く不所存者に娘は添はさぬ。他人となつて此治部が急度詮議仕ると。語るもよしや蘆屋が難儀。蟻の穴から堤の崩れフシ轉てかりける評議なり。地左大將やゝ分別し。詞ホ、さすが老功尤もな目の着け所。殊に兵衛が妹は左近太郎照綱が女房。妹聟の主の命ムウ／＼其處を思ひ助けなば。直に先へ渡す筈。我が屋敷に隱すとはムウいやこれ治部。誤つて疑へば人も我も共に亡ぶ。地今一應根を押してと聞きも果てず。ホ、疑はしくば娘が噺。御前にて申させんとお次迄同道。詞なに筑羽根を同道とやそれは幸ひ。左大將が眼識をもつて糺言さした筑羽根。悋氣の肩を持つ顏で底叩かせて聞く胸と。地主從うなづき呼びに立つフシ親の指圖に筑羽根が思の數やみなの川。戀ぞつもりて淵と讀むうたて悋氣の廻り緣フシ過ぎて御前へ出でにける。詞コリヤ筑羽根。そちが身の上元方卿お聞きなされ。親が案ずる苦も助け仲直してくれんとな。有難く存じお禮申せ。いや／＼禮に及ばぬ。主といふ名はあれど畢竟元方は媒妁役。夫婦間のもや／＼是に限らず幾度も聞きうち。悋氣の起りをとつくりと聞き拔いて。地探める氣を休めてやらう何と嬉しいか。サア底意殘さず打明けてフシ語れ聞かんと有りければ。詞是は／＼有難いと申さうかおはもじと申さうか冥加ないお詞。高いも卑いも夫婦諍ひ。みす／＼男が惡うても女房ならでは非に落ちぬ。其處を思ひやり給ふも御息所樣といふ。お獨の姬君を親王樣へ上げなされ。お仲の好いが好い上に若宮を出かしたい。どうか斯うかと思し召すお心から。私が事迄捨置かれず忝い御挨拶。地お詞につきあがり續鞁もなう喋ると。お笑草も顧ず。一から十迄申上げましよ。詞まあ あの 兵衛道滿殿は嫁入せ

ぬ其先の。つつと前から日利して私が男に椒札文玉章は數知れず。附けまい物か惚れまい物か。先づ第一器量が好うて痩もせずふとりもせず。男一疋武藝に勝れ奉公に私せず。歌を詠んで詩を作つて手も見事學はよし。地茶の湯立花扇の手打囃子は抜け物。詞また肝心の藝を落した。陰陽道は見通しの卜筮。地ほんに主の藝揃へ數へ立つれば讀骨牌七坊にあさつき。事の多い生粋男焦れ死のとした所を呼びいけた御媒人。それからは又嫁入を待つ程に〱小さい時正月を。待つたはいそ〱急ぐ月日に追付いて。嫁入したは一昨年の。詞ア、一昨年の。あんまりの嬉しさに忘れにくい月日をば。ヲ、此親が覺えてゐる。三月六日アイ其彌生〱。コリヤヤイ共彌生も好い程に取置け。前置が長過ぎて殿も親も退屈な。イヤ長うても退屈でも言はねば聞えぬ。あの草双紙の物語も。序文を聞かねば末の段が捌けぬ。御退屈にござんしよが。祝言の口開お聞なされて下さんせ。三月は花の縁散りやすいといふ心で。取結びもせぬ月と人の思ふは誤り。地詩經といふ唐土の書に。桃の夭々たるその葉蓁々。この子爰に歸ぐと。堅い樣に聞ゆれど假名でいへばつい嫁入。其夜しん〱しつぽりと寐てからが猶好い男。こんな果報な目に逢ふも殿樣の皆お蔭と。閨へ入る度毎に御所の方を三度禮拜。有難いに氣がついて。詞此有難い鹽梅を。腰元共がそびかうて配分さしてはなるまいと。地主の行かしやる所々跡から筑羽根鯨に鯱。行かれぬは勧請どころ女子は不淨近寄るなと。七里けんばい嫁はるゝ天女樣が氣ぶさゝに。或夜そつとさし足で立聞すれば呀く聲。詞扨はとくわつと氣が上つて。踏ん込んで穿鑿しよか。イヤ〱憚に見届けてと。其夜はわざと色目に出さず。明の夜も亦明の夜もな。ムウ二度も三度も試してとは。辛抱づよい能う抜へた。此左大將なら堪忍えせまい。シテしてどうぢや。サア痲痺きらした代りには。神佛にかこつけて隱しくろめる妾のこそ部屋。しかも生若い女子のいたづらさうな舌つきで。地泣いつ口說いつ仕くさつたが堪へ袋の破れかぶれ。男の胸ぐら斯う摑んで。詞コリヤ娘俺ぢやわやい。イヤ俺とは言はさぬ。コリヤ手ひどい八月の風でそばが堪らぬ。ホ、ちつと堪るまい。能いぬけ〱と瞞しやつたの。サア此方の有難がりやる。箱入の妾爰へ出しや。地遲いとおれがまくし出すフシ如何ぢや〱と振り廻され。詞これは親を如何するぞ。昨夕のを持越して惜氣の二日醉ぢやな。地性根も眼も覺して見よ御前ぢやが馬鹿者と。突き放されてサアそれ〱。

まつ黒に睨みつけ。妾とは勿體ない。咤枳尼天を守護の爲八百八狐宿直の御番。疑ふな人ではない狐々と嘘八百。男のむごい氣になつたも妾めが爲する業。憎い無念な口惜しいと聲も心もせきのぼす。顏は上氣に目も血走り悋氣逆立つ悋氣の咄。咄からうじてあら涙。人目遠慮もないじやくり疊叩いつ身悶えし恨み歎くぞいぢらしゝ。左大將治部に目配し。ホヽ、そちがのが皆道理。胸の屈託晴してやらう。ヤア誰か有る。蘆屋兵衞に急用有り只今參れと申して來い。早う〳〵と使を立て。コリヤ筑羽根。兵衞が來次第意見して裝束の間で盃さしよ。機嫌なほして奥へ行けと。詞に上げて落さるゝ夫の難儀と露知らず。はつと嬉し疊に額。筑羽根が身の一期忘れまい御情。父様悦んで下さんせ外の挨拶千聲より。お上のたつた一聲が連合へ釘が

利く。ほんに〳〵お主の光は嚴しい物。親の光は七十の頭の禿た光ちやとほほゑみ立つて奥へ行く。サア邪魔も片付いた蘆屋が來るに間も有るまい。此治部が存ずるは。組手の者を隱し置き引括つて御穿鑿。アヽ老人だけ息短かい。栲問は奥の手大閤不敵の蘆屋兵衞。麁忽の手向ひあぶな物。何事なげに氣をゆるさせ身が前へ引付け置き。留主へ廻つて岩倉はかれが屋敷の勸請所。ぶち毀つて詮議々々。ハア、あつぱれ〳〵御分別。出來た〳〵と頷く所へ。兵衞殿御出仕と呼ばはる聲に左大將。治部ぬかるなと言捨て。席を立ちにけり。急御用氣づかはしと蘆屋兵衞道滿する〳〵と打通り。ヤア舅殿是に御入りかあわたゞしき御使御用筋氣づかはし。貴所には御存じ候はぬか。イヤ何事も承らず。そこの出仕召されなば裝束の間へ通せと有る。

御用の筋は衣紋の儀かさたくばお好きの鞠の儀か。まあお目にかゝられよ。然らば左樣と立ちけるがイヤ何者でござる。夜前女房筑羽根が何やら無性に腹を立て。イヤ是は內證先づ御前へ。御用しまうて御意得たし後刻々々と入りにける。しすましたりと治部大輔玄關へつつと出で。是々下稅。暫時も急ぎの大切御用御召換への馬引かれよ。承るといふ間もなく逸早騅に鞍置いて。引立て來るを引寄せて馬上御免と乘移れば。つくばね奥より走り出で父様やらぬと立塞がる。ヤア小ざかしい何故とめる。何故とは愚か様子殘らず聞きました。お前を詮議にやつてはな。女房の口から訴人も同然夫へ立たぬ義が立たぬ。娘の身にもなつて見て待つて下され待ち給へと。手を合すればから〳〵と笑ひ。夫とは誰を夫。戻つたれば緣は切れた。他

人の詮議に何吠え面。其處立ち去らずは蹄にかけんと乗出す馬の平首に。ひたと兩手をかけ聲もかよわき女の足踏みしめ。引きとゞむればまた駈出す馬の三頭も子の身には。冥途の呵責と恐ろしき。父が邪見のうなり聲放せ。放さじ退け退かじと。命惜しまぬ筑羽根が。身は捨小船荒磯の波に揉まるゝ如くに。引いつ。引かれつはずみを取つて鐙の端。はたと當つれば反りかへり。あつと叫んで悶ゆる娘父は。勇みの鞭泥障打立てゝこそ別れ行く。隔つる中の。蘆垣や。蘆屋が屋敷一構陀枳尼天を勸請所。庭の新樹の蔭漏れて。入日眩き軒の端中居茶の間が とり〳〵に 掃除は常と夕清め。しやんと仕舞うて ア、しんど。奥様がお留守なりや何處もむさいと言はれまいで。御奉公に氣が張る。それは左様よ此奥様。お里へふいとお歸りぢやが此仕舞は何うつくの。イヤ深う案じやんな。日頃お仲の好い御夫婦。一日二日は立つ腹もひとりと直るお一人寢。淋しさに呼びにやつた。戻りましたで濟もぞいなう。家になうてならぬ物は上り框と女房と世話にもいふぢやないかいなう。ほんにさうぢや。こちらも首尾よう奉公勤め。相應な好い男の。上り框になりたいと口々。娵めく 折こそ有れ。供被衣の介添も梨子地蒔きたる鋲乘物式臺へ昇入るゝ。それ何といはぬかのはや奥様のお歸りぢやと。さはめき寄つて戸を開けば。筑羽根ならで兵衛が妹。左近太郎照綱が妻の花町。身すぼらしげに立出づる。ヤアこりや奥様が違うたわと。開いたる口の乘物舁は つとつかは急ぎ歸りける。女子ども袖引合ひいつものお里歸りとは違うて。附々もない裸乘物つつと持ちかけそして又。往にしなのひつしよなさ花町様のお顔持も。どうやら濟まぬ譯らしうてひよんな事ぢやと呟く聲。聞きはつつてお茶の間が。此方の奥様お歸りで 淋しうて惡いに。代りに去られさんしたりや賑かになつて嬉しい。エ、こゝなはつさい つか〳〵物をいやんなと叱るを聞くも身の辛さ花町が目は涙。ヲ、、皆の推量に違はず。厭かぬ仲にも添はれぬ義理。夫左近太郎殿暇やるとの悲しい詞。我が身の上の歎より切なきは今の噂。兄嫁の筑羽根様お里へとは氣の毒や。兄兵衛様はお屋敷にか。アイ旦那様 は御前から呼びに來て。先程出仕なされました。父上も御一所にか。イ、エ。將監様は御隱居所にお休みなされてござります。どれお知らせにと立つを引とめ是れなう。お氣休めの假寢起しませずとわしが往こ。したが常とは違ひ一人はどうやら。皆の衆力

に来てたもやとフシしを/\として入りにける。地門前に轡の音嘶く聲も高々と。左大將の仰を蒙り岩倉治部大輔國行。詮議有つて向ひしと股立ながらつつと通り。詞ヤア/\將監は何處に在る。罷出でよと權柄なり。地物に騒がぬ蘆屋將監しづ/\と立出で。ヤア詞治部殿何か詮議候とな。地近頃御大儀千萬といはせも果てずヤア落ちつき自慢笑止々々。詞詮議の筋は言ふに及ばず覺えがある。咤枳尼天の勸請所。地ぶち碎いて落ち着かせうと奥を目がけ驅け行けば。これ/\待たれよ暫し/\と引きとゞめ。詞ムウ此内を詮議とはエ、聞えた。加茂の保憲が家の秘書。金烏玉兎と名づけし奇の一卷。左大將の御下知にて悴兵衛が手に渡り。陰陽道を傳へつぐ家の重寶。さるによつて斯くの如く別殿を構へ納め置く。若しは他見も致さすか疎略にもして置くかと。お疑ひの吟味ならば御無用に遊ばせ。イヤサ治部が詮議は格別此内に女が在ると。筑羽根めが悋氣から腮たゝいて顯れた。其女とは六の君諍はずとも爰へ出せ。是は存じも寄らぬ事。嫁が言はうが誰が言はうが此方に覺えない。殊に咤枳尼は天部の荒神。穢れ不淨を忌み給へば悴が外は親をも入れず。地況して女性を此内にとは治部殿の氣のまはり。可愛げに何嫁が嘘をつくばね置かれい/\。ヤア覺えなくば戸を開け内を見せぬは臭い/\。詞イヤ明けてお目にかけたうても見らるゝ通り錠をおろし。鑰を悴が懐中致せば御苦勞ながら歸宅迄。ヲ、地其鑰治部が持參せしとずつと寄つて大の錠。老の拳の古力ヤアえいうんと一捻にさしも手強き錏鐵物。ほつきと劈けて飛びちつたり。地將監見るより岩倉が肩骨つかんで撥返し。尾籠なり治部大輔詞鑰で明くれば言分ないなぜ捻切つた。地年こそ寄つたれ蘆屋將監留主を預けし悴へ立たぬ。サア此内へ爪先でも入れて見よと反うつて睨めつくる。詞ハ、、化の皮が剥げかゝるでやけと出てぴこつくか。捻切らうがぶち割らうが岩倉が私ならず。地左大將の御指圖使者を切る氣で反うつたか。詞主を切るかサア拔けと威光をかさにきめつけられ。主といふ字に打つ反の刃も鈍り手も撓みフシ息をつめて扣へ居る。ホホ地些と左様も有まいと閫の扉蹈み開き。駈入れば女性の聲わつと叫ぶを提げ出で。フシ大騙の生盗人コリヤ六の君を見て置けと。差付けられてハアはつと呆れしばかり詞なし。花町かくと見るよりも父が差換脇ばさみ走り寄つて是治部殿。詞六の君の御家來左近太郎照綱が女房捺へて居る厄病の神で敵とやら。そなたの詮義で姫君樣。思ひがけなう爰で逢ふは優

曇華の花町。サア尋常に渡しやノ\。ヤアほざいたり引つさかれめ。うぬに渡してよい物か。地其處立ち去らずは眞二つと刀の柄に手をかくれば。花町も抜きかけて互にぎしむ眞中へ將監わけ入り押止め。詞花町は請取る氣治部殿は渡さぬ氣。爭ふ果は互の鋒先其姫に過有つては。お使者の越度妾が一つの了簡所。六の君是に御入りとは神もつて存ぜぬ某。見屆けられし上なれば我に預け置かるゝとも。越度にならず事にもならず。武士の義は他人より親子の仲が猶晴業。親にも隱す忰が心底尋ぬる迄預けられい。地コレ手を下る治部殿と詫ぶるも聞かずせゝら笑ひ。詞義のしやばるのと人らしい盜人の同類ならぬノ\。イヤ事を分けて言ひ聞かすに預けずは預けぬ迄。舌の根が伸び過ぎる奉公引いた隱居の身。地使者砕ばはりも二度とは赦さぬ言ひがかりなれば是非預かる。地ホ、成らば預かれと姫を弓手に脇挾み。馬手に刀抜放せば親も娘も抜合せ。切合ふ中に絶えノ\の息も苦しき六の君。見る目はあノ\花町が打てば開き將監が。切つてかゝれば振りかへり戰ふ強氣劣らぬ勇氣。氣も夕陽の影薄く胸はときつく暮六つの。鐘の聲々六の君渡せノ\と追つつめノ\。切込む太刀筋人顏もフシおぼろノ\に見えわかず。地蘆屋兵衞道滿御所を下の歸り足。つつと寄つて岩倉が首筋摑んで狗投げフシころノ\ころび打つたりけり。地起きあがつてコリヤ道滿。詞何として今戻つた此治部が歸る迄。御前は立さぬ約束ぢやが。ムウ扨はぬつぺり言ひ抜けたな。サア其抜け様言へ聞かん。ホ、人を出し抜き。跡へ廻るぬつぺりは和主が事。御前をはやく退出せしは女房が嫉妬の間違ひ。事あらはれしと推量し心底包まず申上げ。地主人の手前さつぱりと埒明けたり。埒の明やう聞きたくば立歸つて主人に聞け。往にやうが遲ければ棺桶で送らすぞ。ホ、棺桶とは能う視うたはかいきがして面白い。立歸つて又來る迄六の君預けたぞ。コリヤ詞つがうた覺えて居よとフシ跡をも見ずして逃げ歸る。地道滿は姫君のフシ塵打拂ひ。御手を取り座敷へ移し奉る。地將監道滿に打向ひ。詞櫻木の親王樣御寵愛の六の君。此頃見えさせ給はぬとて。御父好古卿の御愁傷。尋ぬる姫を隱し置き剰へ今のしだら。親にも知らさぬ汝が心底訝しと有りければ。地ハア御不審の段御尤も姫君をかくまひしは。左大將殿へ御忠節道滿が今日迄。胸にをさめし忠義の紐解。妹もそれにてフシ承れ。地淺ましや左大將殿官祿不足無きお身が。下々に劣つたる娘をあてに出世の望み。御息所御懷妊おそなはるも。六の君が有る故

殺してしまふに御思案一決。談合相手は次部大輔某を密に招き。陰陽鑑卜の奇々妙々人を呼出す秘文を書かせ。築地の裏門北向の柱に貼り。六の君をそびき出し石川惡右衛門にいひつけ。菩薩が池にて失はんとの御企。地止めても承引なき主從凝つたる非道の惡念。六の君を殺したとて御懷妊あるべきにや。却つて人の恨の報ひ終には惡逆顯はれ。御身の滅亡遠かるまじ如何はせんと肺肝を苦しめ。詞所詮主人の望の如く御所はそびき出すとも。お命を失はずは後日の難儀は有るまじと。先へ廻つて菩薩が淵惡右衛門を池へ取つて投込み。六の君を助けたる其濃被は此道滿。地念なう助けフシ參らせしが。地父御の方へ戻しては主人の惡事顯はす道理。とやせん覺悟は陀枳尼の御殿。供物を以て今日迄養ひ申す我心は。詞主人を大事と思ふ故心體髮膚を分けられし。父にも知らさずか程迄忠義を盡す道滿が。心を無下になし給ふ曲もなき御主人やと忠義に熱き涙の色。父も感ずるばかりなり。地六の君涙ながら道滿の心づかひ。今日迄命ながらへしは情の上の罪科ぞや。たま／＼女の道に叶ひ親王様のお添臥。厭かぬ契りを慘らしやおなじ都に在りながら。父母の御顏をも見る事かなはぬ世の中に。生けて思をさせんより殺してやいのと伏し沈み。歎き給へば花町も。御理やとフシばかりにて共に。袂をしぼりしが。地道滿重ねてヤア／＼腰元ども。詞六の君様奥の亭へ伴ひ申し。御湯をひかせ奉りお髮もあげよ。地今宵は世間打晴れて御憂さ晴しに舞ひ謠ひ。夜とともに慰め參らせよあいと一度にうは調子。お發しが出た流行唄一上り唄をぞや姫君様よりこちらが慰み。いざ御立ちとさゝめきにオクリ誘はれ。奥に入給ふ。地花町は跡見送りさつても嬉しい頼もしい。兄様のお心入れ。聞いてさらりと私が胸も打明けて申しませう。詞先程は父上にふつつり去られ戻りしと言うたには譯が有る。地照綱殿の暇の印是見給へと懷中より。取出し差寄すれば。詞ムウ是は只今言ひ聞かした。人を釣り出す秘文の神符。是を暇の印とは。サアそれを印といふ譯は。姫君の此間見えさせ給はぬ館の騷動。方々へ尋ねに行くやら神佛へ願立てやら地咀の祈禱のと狼狽へた上にまだ狼狽へ。猫のまじなひと取りちがへ。ほのぼのの歌を逆様に迄張つたれど。其秘文に氣のつかず。詞遙か後に見付出した照綱殿はさすが日高。是は噂に聞及ぶ陰陽の妙術。今此術を行はん者道滿より外にない。主人を失ふ敵の妹添ふ事ならぬ暇やる。とはいふ物の添ひたくば此印の詮議して來い。兄が首切つて來い。ア、畏つた切つて來

うと請合うた私が此口。罰が當つて惡さまの御下知畏つたと請合うたか。成程々々ぬが不思議ぢや。地何もかも兄がひに了顯はれし上は詮かたなく。先刻確に御前簡して下さんして。六の君様お供すりや何にてア、麁忽々々。六の君を失へば左大處も彼所も納ります。父上も好い様にお將のお身の大事と。忠節の九つ梯子八つ詞添へて給はれとフシ思ひあまりし願ひ迄上り詰め。今一つをやり兼ねて御首をなる。詞ヤアうつけ者六の君戻してよけ賜らんとはムウム聞えた。意見しても聞入れば道滿が疾う戻す。主人の悪名露顯をれない主人にほつと愛相つかし。後日の憚り心を碎くに氣がつかぬか。地ア、申罪科に遭ひ給ふを見物する分別な。コハし其處の所も知らぬでない。ハテ左大將仰とも存ぜず。伍子胥は諫めて誅せられ。様の悪事ぢやといひミへせねば。詞ヤア眼軍門にかけられしが。呉王の恥辱を見済むと思ふな済まぬ／＼。汝も將監殿のて笑ひしとや。地其唐人の了簡と道滿が心子でないか。武士の祿をくひながら道滿は格別。主の恥辱見物する望なし。首討つが詞なんと聞く。六の君に御湯をひかせて御前へ差上げ其場を去らず切腹致す。お髮をあげよというたはな。此曉に御首詞ム、腹を切つて相果つれば主人の科がをエイあなたをや。ヲ近ごろ痛はしく遁るゝぢやな。其方が腸鳶烏の爲にはなは存ずれど主命是非に及ばずと。地胸はらうが。主の爲には些とも成らず。愛を涙に塞り聲。花町はつと氣も落ちてスヱテ能う分別せよ。主命も背かず姫も殺さずとかう。答も泣居たる。地將監は兄弟の事を治める仕様が有る。將監が思案には。心を酌んで扣へしが。詞ヤア道滿。左大將六の君の首討つてお命が助けたい。ヤこ

れ親人。首討つて助けとはお詞が紛らはし。イヤサ紛らはしい事はない。六の君の首うつて。地助けよといふ事と。聞くより花町差寄つて。ア、願ふ所の御了簡御首うつて助けとは。此花町が恐れながら六の君の御名を借り。兄様の手にかゝれば兩家のお主へ忠義も立ち。死んだ後で連合に出かしをつたと譽らるれば。それを未來で夫婦の樂。ヤイ道滿此六の君を見違へなと地詞姿もはや改めフシ思ひ切つたる覺悟の體。將監涙をはら／＼と流し。花の中の黄鳥花ならずして香しとは。おことが事よ誠有る左近太郎に連添へば。心も倶に忠義を立てお命に代らんとは。出かしたりさりながら。詞おことも十人並なれど姫君には似もつかず。殊に口賢い左大將殿。請取られねば破れの本そちが望は叶はぬぞ。地そんなら外に誰人ぞ能う似た顔がござりますか。詞有る

とも〳〵。外迄もない斯う並んだ中に有る。道滿とがめて此中とはさし詰め妹花町より外にはなし。イヤある〳〵。億兆の人同じからずと雖も。似た顏も有れば有るもの。六の君の面容に寸分違はぬ其顏が。天地の間にたつた一つ。ムウ。どれ其一つは。ヲヽ六の君に能う似たは。地将監が此首とフシいふに驚く計なり。エヽ地父上よつぽどな事おつしやれ。玉の様に透き通るお顏と。六十に餘つた皺だらけの白髮頭と。まだ其上に姫御前と男と若干と言はうか。お月様と泥龜ほど違うたお氣は上りはしませぬかえ。詞ホヽ違はぬ所をとくと聞け。兄は主命討たねばならず討たしては妹が立たず。中を取つて某六の君を連れて退く。すりや親とても見遁されず追つかけて道滿が。將監を討つ間姫は遁れ落給はん。申譯には白髮の此首。右の様子申しなば忠義に代へて親を討つ。二心なき道滿左大將殿ぐつともいはれず。それなりけりに事は濟む。とゝろ兀た此首でも身代りになれば成り様が有る物と。地一つの命を兄弟に。分けて忠義を立てさするフシ親の慈悲こそ有難き。地道滿はつと恐れ入り我〻を御不便のあまり。お命を捨てんとは勿躰なや畏ろしゝ。詞道を守るは忠孝の只二つ妹が心底問ふに及ばず。不孝と呼ばれ忠義は立つまじ。地アイ兄様さうでござんす。父上の仰でも此事ばかりは反かにやならぬ。ハテ兄弟は他人の始り他人に連添ふ花町。心々に忠義を立てる。ヲヽ出かした某とても其通 幾たび仰有るとても。いつかな承引仕らぬと詞を放つて申しける。詞ムウ親の心を無下にして兄妹共に承引せぬな。ハアヽ殘念是非がない。道滿が討たねば御前は濟まず。自害しては犬死はて何とせう役に立たぬ事いふ手間で。地經陀羅尼の一遍でも彼方のお爲と立つて行く。口に隨求陀羅尼の文。ハラ〳〵サンバラインチリヤ。親子の心もばら〳〵〳〵につれて三重其夜も。更け渡る。フシ月影暗き。植込の。裏の高塀枝さしてスエテ茂りし松の音するは。キン風か。有らぬか忍び込む女心の逞しき。ハズミフシ枝をたよりに傳ひ來る。地花町は待つ人のそれかと思ふ窺ひ足。ひらりと飛ぶは女の姿。何者なるぞと走寄り顏を見れば兄嫁の筑羽根。ヤア詞花町様か。何ぢや花町かとは。エヽほんに此所はなう。人の女房の風上にも置かれぬどう畜生。能うも〳〵大切な夫の訴人。厚皮顏火に懲りずと忍び入つたも親が指圖か。六の君様助けうかと氣づかひで吟味に來たか。地何とさうで有らうがなと。腹立つまゝのあくて口聞くにあやまる身のせつなさ。女のさがなき悋氣より夫の難儀。姫君様失

うては道立たず忍び入つた心はな。お身に代つて死ぬる合點連合の妹御のお手にかゝれば筑羽根が本望サア切つて下さんせと。後髪かき撫で淸げなる首差伸ぶれば。詞ホヽ得切るまいと思やろがほんに切るぞや。親と一つでない言譯サア切つて。エエ何の切ろぞいの心は知れた疑ひ晴れました。地私が今日戻つたは兄様を夫の疑ひ。其方ばかりでは心もとない今宵八つを合圖にして忍び入らう。詞ヲヽござれと約束左近殿が後楯。地お前と私が心を合せ姫君様を助けると。二人が談合フシ物かげより。地窺ふ蘆屋道滿が。耳にこたへる八つの鐘すはやと松の枝押分け。忍ぶ出立は夜廻の裝束凛々しき兜頭巾。詞ヤアござんしたか待兼ねたといふ地聲高しだまれ〳〵と仕方で止め。ふはと飛んだる足輕ろ〳〵。うなづき合うて三人一所。勝手覺えし廊下の脇道鼻息もせずフシ忍び込む。地時も違へず又高塀の屋根にすつくとたちつけコハリ羽織。同じ出立の兜頭巾塀ををりふし人はなし。心安しと門口の貫の木そつとナホス明けかけて。退足の勝手迄フシ仕濟したりと忍び込む。地先へ入つたる忍の者六の君を奪ひ取り。廊下を傳ひ立出づる。道滿手鎗押取つてヤア何處へ〳〵。詞顏は隱せど左近太郎尋常にお供はせで。盜賊同然の振舞叉物汚しに命は取らぬ。姫を置いて立歸れと地聲かけられて返事もせず。姫を奥へ押やり〳〵無二無三に切りかゝる。さしつたりと鎗取伸べ突けば開いて打つ刀。はつしと反ねて隙間なく弓手の脇腹馬手へすはと突通せば。うんと叫んでどうと伏す。花町見るより夫の敵遁さぬと切付くるを引つぱづし。片手につかんで捻伏すれば。詞ア、其娘過ちすなと頭巾をぬげば父將監。ハツハア地南無三寶早まりしと。驚く道滿花町もスヱテ共にうろつくばかりなり。地將監深手にちつとも怯まず。詞年寄れば腕の働き汝には劣りしが劣らぬは謀。兄弟を不便に思ふ親の。了簡を聞かぬ故。裏門よりそつと拔け出で又我が内へ忍び込む。親の心を天道も憐み給ひしか。地左近太郎が來るともしらず忍び込む某を。左近太郎と心得て妹といひ兄といひ。我が子をだますも我が子の可愛さ。突きとめられしは本望ぞや。詞先達て言ふ如く六の君を落せし將監。親ながら討ちとめしと白髮首差上くれば。道滿が忠も立ち花町が夫婦の仲。地兄弟仲も違ふなと心を碎きし我が最期。フシ悲しとばし思ふなよ。地亡き跡の弔ひとて僧も呼ぶな供養もすな。兄弟仲よくしてたもるが冥途の土産でおぢやるわと。聲も淚にむせかへれば花町悲しさ遣る方

なく。二人で父上と知らぬ不孝の五逆罪。詫ぶるに甲斐なき御最期やと。わつと叫び フシ伏し轉び歎き。悔むぞ哀れなる。地道滿 涙押拭ひ エ、しなしたり／＼。某武藝の餘力にて陰陽龜卜の道を明らめ。詞天地の變化人間の禍福指す所を違はさず。又は箱に入れて隱せし物も算木を以て占へば。柑子なれば柑子と知り鼠なれば鼠と知る。地妙術を得たる身が。僅か一重の兜頭巾父とも知らず早まりしは。陰陽師 フシ身の上知らず。地子の身として親を討ち忠節顏は不孝の不孝。天の照罰待たんより道滿これにて生害と。指添に手をかくればやれ待てとめよ花町と。父が詞も妹が縋るもいや／＼ フシ放せ／＼とせり合うたり。詞これ／＼道滿早まるまいと聲をかけて左近太郎。姬君筑羽根伴ひ出で。地樣子は奥にて承る。親と知らず手にかけしは。天道が能く御存じ落命有つては不孝の上塗り。自害をとゞまり臨終の迷を晴すが孝行ぞと フシさま／＼に押留め 地老躰の命に代へ六の君の御介抱。彼と申し是といひ有難き御厚恩せめて一つは報ずるため。詞恨みある左大將なれども御親子の忠義を感じ親王の御前へは沙汰なしに仕らん。地御安堵有つて往生遊ばせ。コレ姬君樣筑羽根殿いづれも寄つて御暇乞ひ。近う／＼と取廻せば苦しき中にも莞爾と笑ひ。ヲヲ添い聟殿。主人の名も出す悴も存命。今こそ嬉しい隱居の宿替へ安樂世界でたのしまんと。鑓引抜けば老の身の フシ脆くも息は絶えにける。地人々叶はぬ道なれど今更慕ふ別の涙。惜しみ悲しむ聲々に八聲も告げて明けわたる。地治部大輔は刻限ぞと。門内へつゝと入り。詞ヤア六の君まだ討たぬな。サア此檢使が見る前ですつぱりいはしはや渡せ。早う／＼と罵つたり。地折惡しければ躊躇ふ間鑓押取つて後より南無阿彌陀佛と筑羽根が念力脊骨へぐつと通り。ぎやつと一聲岩倉治部日來の我武者も急所の痛手。只一鑓に死してげり。つくばね死骸に立並び鑓の穗先を逆手に取り。咽吭に押當つる道滿寄つて鑓もぎとり。詞某への言譯斯う無うてはかなはぬ筈。左大將の惡逆皆此治部が入れ性根。早いか遲いか遁れぬ最期。地所も變らず日も變らず其方が親我が父。互の子供が手にかゝる例は末代よもあらじ。不孝の姿改めんと指添拔いて髻拂ひ。蘆屋兵衛道滿今日より武士をやめ。陰陽の博士となつて形も變ゆれば名も更め。詞道滿と書く二字の訓を音にて蘆屋の道滿刀入らぬと投捨つれば筑羽根も我が黑髮。切つて捨つる身存へて。男と親の菩提の發心。照綱大きに感じ入り。ア、尤もの了簡。詞名も姿も改むれば不

孝の人口遁る﹅道理。元より陰陽龜卜の達人存命有るは國家の寳。父尊靈も滿足ならん。地 扨此治部は檢使の役討れし死骸の言譯有りや。ホ、ウ其儀は心やすかるべし。將監樣の手にか﹅つて。斯くの通りと申しなばさして咎も有るまじき。何から何迄親の慈悲遺言守つて御首を。主人の方へ持參せん照綱には六の君。館へ急ぎ御供と別る﹅袂濡る﹅は袖。引かるる心離れぬ恩愛聟よ。我が子よ嫁娘と夕は呼ばれ曉は。露と消え行く魂よばひ輪廻流轉の空晴れて。淸き最期は一念不生迷はぬ道は則身則佛。菩提の道に入る夫婦。姫を誘ひ行く夫婦。孝行忠義二筋を キン 一つ血筋にむすぼれし親子の。別れぞ哀れなる

第　四

唄 隣柿の 木を。十六七かと。思うて。覗きやしほらしや。色づいた。十六七かと。思うて。覗きやしほらしや色づいたかけて織る ナホス 賤が麻機あさはかに。何の織ろぞいの。生先祝ふいとし子に。千筋萬筋よみ入れて。大名縞織りて着せうの所も フシ 安倍野の蘆垣の。地 間近き住吉天王寺。靈佛靈社に歩みを運び。父は我が子の出世の祈り母は心を染機の。辛氣辛苦を竪横に。梭を投ぐる間の手ずさびも。子に世話おるとぞ フシ 見えにける。地 母は機屋を立出でて。詞 コレ／＼坊ち昨日も父樣此奴には惡い癖が有る。只虫螻蛄を殺したがる。今から殺生好んで碌な人には成るまい。必ず蜻蛉釣るなよ。ねぎや釜を殺すなとお呵りなされたを忘れてか。たつた一人の與勘平は京へ行く。地 留守の間に池へもはまるか疵でもついたら母は言譯なんとせう。詞 必ず／＼庭より外で惡あがきしてたもんなや。サア爰へおぢや／＼。先にから間も有る乳飲んで晝寐しや。そんなら母樣晩には。松虫塚へ虫をたんと取りに行くぞや。ヲ、安い事それも父樣連れござらう。地 小言いはずと 歌 ねんねこせ／＼。いとしい者を誰がいよ。ねんねこせ／＼。ねんねが守は何處へ往た。山を越えて里へ往た。里の土産に何もろた。ナホス でん／＼太鼓にふり鼓。地 樂も囃子も入らばこそ。手間隙取らずすや／＼と。母に添寐の稚子は フシ いかなるよい夢見るやらん。詞 おか樣內にかい。ホ添乳なされてぢや。此頃の雨つゞきでめつきりと木綿の直がよいが。織だめがあらば一疋でも半疋でも賣らしやんせんかい。ヤア 地 えいとおちがひおろして腰打かけ次に火を貰うてさらば一服致さうか。詞 ア致してもらふまい子供の寢入口。かさ高に物言うて下さんな。今日は又けしからぬついに見馴れぬ木綿買

達が。無いといふに立かはり入かはり此方で三人。そして家の内や人の顔を。きよろ〳〵と合點の行かぬ木綿買達では有るわいの。ハテ左樣言はしやりますな。合點が行かいでからが高が天下の町の借屋に住む木綿買。氣づかひな事はござりませぬ。斯うろ〳〵と見廻すも。ア、何うやら機に器用さうなおか樣の顔ぢや。定めて織貯が有らう賣つてほしやと思ふからなんと賣つて下さりませぬかい。地サア次第々々に寒うは成る。夫の肌着よ表換へよ。子にもさつぱり着せたけれど。繰るも績ぐも織るも染めるも手一つで。内の肌さへ塞ぎかねる。詞賣る木綿はいかな〳〵切一尺ござらぬ。無い所に長居せずとつと〻往んで下されと。地愛相なければ立上り。詞ハテおか樣さう沒道道に言はずとも。仕事は心につれる物ぢや。氣だけを長う心の幅ひろう。詞詞に繩も有る樣に其内織つて下さりませ。又御無心に參らうと。我が挨拶をしほにしてフシすご〳〵出でて歸りけり。地ア、やかましやよしない事に隙取りしが。嬉しや日脚も八つがしら。夫の歸は間もあらう。七つの墨へは屆く手の片付けて饗せん。ねんねこね〻ことた〻きつけ。又機前にさしか〻り。唄隣柿の木を。十六七かと。思うて覗きやしほらしやナホスフシげしうはあらぬ。棲外れ。老人夫婦の旅姿二十歳餘りに大人びて。娘めく人介抱し旅とてもまだ泊經ぬ。足も輕げにそんじよそこと人の敎への門の口。詞コリヤ〳〵爰よと父の老人二人を近付け。保名の在所聞くと等しく。是迄同道はしたれども。よく〳〵思へば別れて早六年。長の年月生死の問ひ音信もせず。此方こそ變らねども。地保名の心底量り難し。先づ某一人對面し。所存を聞いて其上で。母も娘も呼出さん。暫く爰に影隱せいで案内せん賴みませう。物申さんと内に入り。見れども〳〵人はなし。詞扨は保名は他出召され。あの機音は召使か。御免あれ地それへ參ると窓に立寄り顔見合せ。扨も似たりと喫驚し興覺め門へ駈出づれば。女も窓の戸引立て〻織る手拍手の音すめり。詞ヤレ〳〵か〻よ娘よ奇妙々々。娘の葛の葉が彼處に機織つてゐるわいと呆れ顔。ア、つがもないこれ爰に居る葛の葉が。何の彼處に機織つてゐる物ぞ。廣い世界に同じ人間似た人も有らいでは。ア、仰山な事ばかり。いやなう大概物の似たといふは。烏と烏雪と雪。其段ではない正銘正眞の娘の葛の葉よ。地疑はしくば覗いてお見やれ。それは興がる似た人や。娘もおぢやとさし足し忍ぶ間近き窓障子。破れに二人が息を詰め。覗けば見かはす顔ばかり。何方

ちや誰ぢやといふ聲迄。似はせぬやつぱり本々の。葛の葉も肝潰れ　母の手を引き逃出づる。ならう／＼親父殿物が言はれぬ。あちらが誠の葛の葉かこれがほんの葛の葉か。親の目にさへ今となり子にどまぐれて氣が迷ふと。投首すれば葛の葉も。母様お道理私が心にさへ。おれがあの人かあの人がおれかと思はれて。俄に胸が遣る瀬ない。父様どちらを何うといふ。分別なされて下されと。袖に縋れば引寄せて三人顔を眺め合ひ溜息へついたる。折からに。立歸る安倍の保名それと見るより。ヤア庄司殿御夫婦か。お身は保名かなう懐かしや／＼。それは此方も御同然。先づ奥へいざ御案內と立つ袂をひかへ。先づ／＼急に渡す者あり。コレ預りの葛の葉連れて參つた。渡し申す聟殿と引合されて葛の葉は。流石二人の親の前言はで心を知れかしの。顔に會釋ぞこぼれける。保名大きに痛み入り。是は／＼。拙者が留守の內早葛の葉に御對面なされ。衣服を着せかへ今連れて來た様に見せ。此保名を困らせてお笑ひなされう爲か。女房も女房今始めて來たやうに。所躰をつくつて何ぢやの。ハ、、、此申譯こそ段々。御息女葛の葉と夫婦になり是に有る事。先年信太の宮にて惡右衛門狼藉の時。既に事難儀に及び生害仕らうと存ずる所へ。早速此人が駈付けさま／＼の介抱。それより一緒に立退き所々漂泊し。此所の住居はや五年。安倍の童子と申す五歳の男子をまうけ。おとなしく生立ち申すにつけ是を力にお詫申さば。孫に免じ我が不行跡御免も有らうか。今日は參らう明日はお詫に參らんと。口では申せども何か所存に任せず。一日々々と相延び今更お詫申さう詞もない。重々の不調法孫に免じ御勘忍有るやうに。母様お執成しなされ下されと。身を投げ伏して詫びにける。イヤサ言譯所でない。來て見たれば不思議たら／＼。先づあの機織る人を密かに覗いて見ておぢやれ。げにも／＼女房は爰に居る誰か機を織らんと。呟きながら立寄つてそつと覗いてびつくりし。色を違へ立歸りあそこにも葛の葉爰にも葛の葉。コリヤ如何ぢやこは／＼如何にと顚倒し。奥を見ては呆れ顔此方を見ては興覺め顔。物をも言はず立つゝ居つ思ひがけなき驚に　只茫然たるばかりなり。ヲ、當惑の躰至極せり。我も信太にて別れし後惡右衛門が讒言にて。重代の所領沒收せられ。吉野の山の片里に世を忍び住む其內に。貴殿の事を戀慕ひ焦れ煩らふ此娘。五年の年月色々看病肝を焦す所。不慮に此頃貴殿の在所聞くとひとしく。忽ち病氣平癒し夫

婦が召連れ來て見れば。（詞）思ひも寄らぬ二人の葛の葉けふもあすも覺め果てしが。退いて分別するに離魂病といふ病有り。俗には影の煩ひといひ形を二つに分るといへども。それも一つ軒をば離れず。（地）時々形を合すといへばそれでもなし。正しく是は變化の所爲か又は天狗のわざなるべし。我が娘に引合せ誠をもつて理を押さば。忽ち姿を顯すべし性根を忘ずる所でなし。保名心をつけられよ氣をつけ給へ聟殿と。夫婦力をつけ給へば仰せ迄も候はず。我も加茂の保憲に隨ひ是しきの邪正を糺す事。一句一指の手段に有り。きつと證を見せ申さん。各は暫しの内。見苦しくとも此物置に密かにお忍び下さるべしと。餘儀なき詞に人々も構へて仕損じ給ふなと。危ぶ心の物置の（フシ）簾を上げて忍ばるゝ。（地）保名異なき風情にて内に入り。（詞）是は〳〵坊主めがあがき草臥れ。此蹈反つて寢た姿わいの。童子が母はおはせぬか今歸りしと呼ばはれば。（フシ）前垂襷取りあへず。（地）いつより今日のお歸りはおそかりし。お肌寒にはなかりしか。（詞）いや〳〵空も暖かに住吉へ參詣し。歸りは例の天王寺。なう思ひも寄らず六時堂の前。お身の父庄司殿御夫婦にはたと行逢ひ。日頃の不屈胸につまつて挨拶をしかねたれば。あちには一向恨みの氣もなく。在所を聞いた故娘に逢はうため。尋ね來れども見る通り連衆も有り。（地）此衆を片付け日暮にはそれへ參らう。食物の用意は無用洗足の湯を賴むとなかなか心解けたる挨拶一つ二つ物言ふと思ひしが。かいつまんでも五年の話思はず時を移いた。お身も久々の對面さぞ悦び。身も大慶と物語れば。それは何よりお嬉しや日暮とて間もなし。用意無用との給ふとも何ぞせずはなるまいか。（詞）いやいや孫をつき出しお目にかけるが馳走の一番。お身も髮に櫛でも入れ衣服も着かへ。（地）しほたらとした躰を見せませぬそれが馳走の第二番。早う〳〵身は夜と共の物語。此草臥れでは續くまい日暮迄一睡せんと。言ひつゝ女房の形風情見れども驚く躰もなく。髮とり上ぐる其姿何處に一つの言分なし。但しは娘を連れて來た庄司夫婦が何ぞではあるまいかと。迷ふ心の奥の間に（フシ）忍びて事を窺ひける。（ハル）（フシ）妻は衣服を更めてしほ〳〵と奥より出で。臥したる童子を抱きあげ。乳房を含め抱きしめて言はんとすれどせぐり來る。涙は聲に先だちて暫く咽び入りけるが。（地）恥かしや淺ましや年月包みし甲斐もなく。おのれと本性をあらはして妻子の縁を是限に。別れねばならぬ品になる。父御に斯くと言ひたいが互に顏を合せては。身の上語るも面ぶせ。御身寐耳によく

覺え父御に斯くと傳へてたべ。我は實は人間ならず。六年以前信太にて惡右衛門に狩出され。死ぬる命を保名殿にたすけられ。再び花咲く蘭菊の。千年近き狐ぞや。剰へ我故に數ケ所の疵を受け給ひ。生害せんとし給ひし命の恩を報ぜんと。葛の葉姫の姿と變じ。疵を介抱自害をとどめいたはり附き添ふ其内に。結ぶ妹脊の愛着心夫婦のかたらひなせしより。夫の大事さ大切さ愚痴なる畜生三界は。人間よりは百倍ぞや。殊におことを儲けしより右と。左に夫と子と。抱いて寐る夜の睦言も昨夜の床を限りぞと。しらず野干の通力もいとし可愛に失せけるか。今別るゝとて父御前の業でもなく。元より名を借り姿を借りし葛の葉殿。恩は有れども怨はなし。庄司殿御夫婦を實の祖父樣祖母樣。葛の葉殿を眞實の母と思うて親しまば。さのみ悄うもおぼすま

じ。惡あがきをふつつと止め。手習學問精出してさすがは父の子ほどあり。器用者と譽められよ。何をさせても埒あかぬ道理よ狐の子ぢやものと。人に笑はれ誹られて。母が名迄も呼出すな。常々父御前の虫螻蛄の命を取る。碌な者には成るまいと只假初のお呵りも。母が狐の本性を受繼いだるか淺ましやと胸に釘針刺す如く。何ぼう悲しかりつるに。成人の後迄も小鳥一つ虫一つ。無益の殺生ばしすなえ必ず〳〵別るゝとも。母はそなたの影身に添ひ。行末長く守るべしとはいふ物の振り捨てゝ。是が何と歸られう名殘をしやいとほしや。放れがたなや此方寄れと抱上げ。抱付き抱きし。めて思はずわつと泣く聲に。保名一間を走りいで仔細は聞いたり何故に。童子を捨てゝやるべきと呼ばはる聲に庄司夫婦。葛の葉も轉び出で放ちは遣らじと取付けば。

抱きし童子をはたと捨て形は消えて失せにける。エ庄司目をしばたゝき。エエ扨夢ばかり斯と知つたらば。ふか〳〵尋ね來ずとも仕やうもやう有るべきに。無慚の次第を見る事やと。夫婦が悔めば葛の葉も手持無沙汰に見えけるが。アヽさうぢや何は兎もあれ斯くもあれ。自らが姿と成り自らが名をなのり。産んで貰ひし此坊はとりもなほさぬ我が子なり。父樣母樣お前方の爲にも。眞實の孫ぢやと思うて下さんせ。コレ坊ち今から此母が身に代へていとしがる。今迄の母樣の樣に。母樣々々としなつこしう賴むぞや。ヲヽ好い子やと抱き給へば乳を探していや〳〵〳〵。此母樣はそでないと膝を這下り見廻して。母樣。々々と呼び叫べば。保名堪へかね大聲上げ假令野干の身なりとも。物の哀れを知ればこそ五年六年付纒ひ。命の恩を報ぜずや況

や子迄まうけし仲。狐を妻に持つたりと笑ふ人は笑ひもせよ。我はちつとも恥かしからず。別るゝとも相對にて互に合點の共上は。失せもせよ消えもせよ此儘には何時迄も。放ちはやらじヤア葛の葉。童子が母よ女房よと間の襖を引明くれば。向ふの障子に一首の歌。戀しくは。尋ね來て見よ和泉なる。信太の森の フシ うらみくずのは。ハア 地 扨は一首の記念を殘し。つれなうも歸りしな我に名殘は殘らずとも。童子は不便に思はずかと。奥に驅け入り表に出で狂氣の如く驅けめぐれば。童子も父の跡につき母樣何處へいかしやつた。母樣なうとかつぱと伏し聲をばかりに足擦し身を悶え歎くにぞ。庄司夫婦葛の葉も。共に哀に フシ 取亂し前後不覺に歎かるゝ。地 庄司歎を止めんと思ひヤア保名不覺なり。詞 狐ばかりが葛の葉で我が娘は葛の葉ならずや。殊に殘せし一首の歌。地 戀しくは尋ね來て見よと詠んだれば。いつでも信太へさへ行けば出合ふに疑なし。エ、未練 散々 フシ 卑怯至極といさむる所へ。地 今朝より立まふ木綿買一つになつてつゝと入り。詞 ヤア安倍の保名葛の葉。信太の庄司見付けた〳〵。斯くいふは石川惡右衞門殿家來。荏柄の段八信樂雲藏落合藤次。主人の御心をかけらるゝ葛の葉を隱し置く。保名は密夫同然討殺して姫を連來れと此頃委に徘徊し今日出くはせたは百年目。女房が有つても首がなうては濟むまい。畏つたと葛の葉を渡せ〳〵と呼ばはつたり。老人夫婦足弱の殊に歎に氣も後れ。途方にくれて立騷ぐ保名はつと心付き 詞 申し申し騷ぐまい。葛の葉は童子を抱き御夫婦を介抱し。裏口を出て影隱した遠いへ逃ぐるに及ばずと。地 裾引つからげ突立ちあがり。愚者に向つて返答なし。葛の葉がほしくば此保名を首にして連れて行けサア來いと。形見こそ今はあだなれ幸ひと。織りかけし布機の フシ 招き掛板。卷竹よ縢梭筬よ籰なんど。はづみを打つて投げかけ〳〵。ためらふ所をまつかせと。親捩えいとこぢ放し。科有る者を成敗の礫といふはた物の。鹽梅見よと振廻し日來には似ぬ強勢も。狐や力添へぬらん フシ はげしかりける働なり。地 落合は逃仕度段八雲藏生兵法。肋と眉間に大疵請け フシ のたり廻つて死してげり。地 人々馳け出で手柄々々と勇めども。葛の葉は勇みなく何をいうても私に。乳が無うては何時迄も此子が馴染う樣がない。あつちに有つても入らぬ乳貰うてほしいと泣きければ。ヲ、道理々々それ迄もなく一度は尋ね逢はではかなはぬ義理。夜道を行くもたど〳〵し明けなば夫婦童子をつれ。尋ねて來ませ和泉なる信太の森へ

と 三重

道行しのだの二人妻

二上り 詞拍 爰に。哀を。とゞめしは。安倍の童子が母上なり。元より其身は畜生の苦み深き。身の上を語り明かして夫にさへ。添ふに添はれず住み馴れし我がふるさとへ。歸ろやれ ナホス 我が住みすてし。一村の。假の宿は秋霧に立ち紛れたる。フシ いろ〳〵菊も。サハリ 此身知るかとはづかしく。足爪立てゝちよこ〳〵〳〵。ちよこ〳〵〳〵と爪立てゝ。所體亂るゝ ナホス フシ 萩薄。はつと思ひてとりなりを 小オクリ 作り。繕ふ笠の內。スエ 傾く日影まばゆくて。三下り 忍ぶ身のさはりは。此處の人里彼處の往來 合 それに嫌なは。犬の聲ぞつとした。ナホス ぞつとそげだつ フシ 露時雨。降りみ降らずみ。照降に。我は古巣へ歸る身を嫁入々々と里の子の。長地 あのいたいけを見るにつけ跡にまします父母に預け置いたる稚子の。乳房尋ねてさこそ歎かん不便やと。フシ 涙に道も見えわかず。こゝはいづくとしら露も オクリ 千草に。すだく虫の聲猶悲みの十寸鏡。ギン 水に映して。我が姿かいしよあり氣に行く野路を。そよ〳〵戰ぐ野分につれて。栗や奥稲に。フシ から〳〵〳〵からり。曳かぬ鳴子の



音すれば。もし獵人(かりうど)の有るやらんと。周(あた)り草驚き振返る。小鳥追ふ家は戸鎖してそれと。咎むる人だにも フシ ないて身をもや悔むらん。今は悔やまじ ヒロヒ 歎かじと。いへど亂るゝ蘭菊(らんぎく)を分けつゝ行けば。程もなく我が住む森の。下陰に立休らふと。見えけるが 草がく。れして 三重へ文彌 ハルフシ こゝに哀を。とゞめしは。安倍の童子が母上の。一人は跡にとゞまれど。尋ぬる生(うみ)のかたぐの。一人は人の胤(たね)ならぬ。其憂き事に。ナホス 身を耻ぢて。戀しくは尋ね。來いとの言の葉に。書捨てたるをかたみとも。それをしるべに葛の葉は。保名諸共諸袖(もろそで)に 唄サハリ ほだしの種の。いとし子を。フシオクリ 賺(すか)し誘ひ和泉なる。信太の へ森へと。こゝろざし。ニルフシ 振返り見る弓手も馬手も。里遠く。遠里小野(とほさとをの)や淺香潟(あさかがた)。安倍野も跡に難波津の。三津(みつ)の浦風烈しきに スヱ 風ばし引くな引かさじと。脊(せた)に負ふてふきりぐす。フシ きりはたりてふ。織る賤が家の。筬の音 フシ 堺の町も出はなれて。心細道分け迷ひ。江戸冷泉 行けば。微かにゆふづく日。合 人顔



鳥居清信筆 (村) 板元村田屋

さへもちらぐと。キン 暮れぬさきより灯(とも)す火は。神の御燈(みとう)かいや白菊の。本フシ 花に露ちる秋の野か。あれこそ佐野に灯す火の。スヱテ 入江々々に網引(あびき)の聲。文彌 風にさそはれ行く道の。梢まばらに末枯(うらが)れて。たゞ何となく淋しきに。セツユリ 尾花優しく。招くにぞ。それを頼みの力草。茂る百草(もゝくさ)道草を。引く手にすがり ナホスフシ 愛らしく。指(ゆび)さす方に。又ちらぐと物がしらすぞ哀なり。唄二上り 思にや。焦れて燃ゆる。合 野邊の狐火小夜更けて ナホス地 それかあらぬか帚木(はゝきぎ)か。まがふ方なく子故の闇に母も憧がれ灯す火と。走りつくぐ見渡せば影も姿も泣き焦れゆく大鳥の。

羽翅重ねて雛鳥を抱きかゝへて玉鉾の。よるかたわかぬ旅なれどいそぐ心に道ばかも。スエテゆくての森を目當にてしばし。疲れを晴しける

地誰に問ひ誰に問はましいはくずの。千枝にわかれて物思ふ我も思に木蔭れて。保名夫婦稚子をスヱテさま〴〵いたはり介抱し。ア、しんどやと葛の葉が薄折敷足休め。詞ヲ、習はぬ旅路草臥も尤も向がお事が生れ故郷。こちらに見ゆるが往昔夫婦の契を結びし信太の社ふと馴れそめし故にこそ。地互にかゝる憂目にあふも覺悟のまへ。詞とかく只。世の中に歎きはなきに悦びを。求むればこそ歎きとはなると詠みしも今身の上。地ヲ、さうでござんすとも味な縁から苦勞あそばし。お前に添ひたい〳〵と私が輪廻の深き故。惡右衛門に支へられ兩親迄も思はぬ流浪。昔の花の住家へ立寄るも人目恥かしく。詞どうかかうかと案ぜしに。丁度薄暮好い時分何とぞ尋ね彼の中の母御にめぐり合ひ。此子の思も晴してやりたし。

地一つには又私もいひたい事は山々。成程片時も急がんと親子夫婦手を引合ひ。彼の隱栖は何國とも知れず知らぬ亂咲。菊のうね〳〵其處よ爰よと押分け掻分け。詞童子が母やい。童子の母御いなうと地呼べど叫べど答さへ。事とふ物は秋の風。野邊にしをるゝ葛の葉の。恨のたねや殘すらん。詞扨はふつゝと思ひきり。最早逢ひも見もせぬか。地エ、胴欲な心やな暫なりとも形をあらはし。此世の思をはらさせよと。泣きくどけば葛の葉も聲を上げ。詞神通とやら得た身にて是程慕ふが聞えぬか。たつた一言地童子に詞をかはして下され。此子は可愛うない事かと。草場にどうど伏轉べば。辨へ知らぬ稚子も。フシ共に泣くこそ哀れなり。ヘルフシそよと吹く風。身にしみて。地心細き折こそあれ。我が子の絆にからまれて顯れ出し童子が母。顔も姿も葛の葉に。又葛の葉の二面二面の鏡に一人の影フシ映し見たるが如くなり。地保名見るより走り寄り。やれなつかしやゆかしやな。いとし可愛の子を振捨て。何處の浦何處の里に住まれうぞ。詞如何なる怪しき形なりとも厭ふまじ。地せめて此子が智惠づく迄スヱテ育てゝくれよとかこつにぞ。ほんに實に今迄は此葛の葉に成りかはり。夫への心遣ひ殊に身腹も痛めずに。好い子を儲けし悦は。餘所の歎きとフシなりたるかや。地人に限らず虫螻蛄迄親子の別れ。悲しうなうて何とせう。詞況してや是は心好う添遂げて居る仲へ。思ひがけなきみづからがぼか〳〵と往た故に。當惑しての家出かや。今日も今日とて此子がの。生みの母は無きともしらず。

やつぱり此葛の葉を。實の親と思うて心能う遊べども。地乳を探つて母様なうと。泣くか悲しい〳〵とスヱテわつとばかりに伏沈む。地母は咽び絶え入りしがやうやうに涙を抑へ。詞實の形を顯してお目にかゝるも恥しく。以前の如く葛の葉様の姿にて申わけ。お二人共に聞いてたべ。此母が野干の身でさら〳〵夫の色香に迷はず。御恩を送る爲ばかり。年月を重ねしに去りがたき因果の胤を身にやどし。古栖へも戻られず。地我が子に繋がれ暮す内思はず此身の懺悔をば。言はねばならぬ義理と成る。人にしられて一日も人界の交りかなはず。扨こそ故郷へ歸りたり。地猶此上にも保名様恨みをはれて此子の行末葛の葉様頼み入ると童子を膝に抱きかゝへ。スヱテ乳房を含め脊を撫で。文彌げにや實に此子程。果報拙き者はなし。詞有るが中にも畜生の腹をかりしも前世の業。おとなしうなり末々は宮仕するとても野干の子とて侮られ。心苦しう思ふらめ。地それも誰故此母が人ならぬ身の悲しさよと。或は歎き恨みわび。スヱテ身悶えしてぞ伏し沈む。ナホス地保名もせきくる涙をとゞめ。詞汝が詞尤もなれども淫婦と變じ數多の人を誑さば。咜枳尼天の咎めも有るべし。是は正しく佛躰に等しき人間を助くるに。天の咎めもなどか有らん。地サア〳〵安倍野へ同道せん。いや〳〵いや。詞それは思も寄らぬ事。色に溺れ我が子に迷ひ。此身を知られた其上に。再び人間に交る時は。五萬五千の眷屬に疎まれ剰へ。盡未來際畜生界を出でやらぬ。地其苦しみには代へ難し。名殘は盡きじさらば〳〵いとほしの此子やと。顔にあて身にそへてスヱ泣き沈み〳〵。地今は泣いても悔みても返らぬ事と立上るを。こは情なし今暫しと取付くを振拂ひ。縋りつくをもぎ放し。詞此姿ゆゑとゞめ給ふ。地いで〳〵愛着の絆を切らん。實の形これ御覧ぜといふかと思へば忽に。年ふる白狐と身を變じ我が子の身の上守らんと。見返り〳〵懐しげにフシ草の茂みへ隠れける。地なう心づよき別れやな。其形をも厭ひはせじ。今しばし暫しといへど其甲斐は。嵐につるゝ谺の響。二上リ唄草茫々たる信太の原の。草茫茫たる信太の原に。面影計や残るらん。俤ばかりや三重へ殘るらん。フシ折から爰に。地旅乗物石津の方より來りしが。若黨立寄り小腰を屈め。詞保名様にて候ふな。御行方を尋ねん爲主人蘆屋の道滿遙遙下り候ふと。地聞くより夫婦目を見合せ。願ふ所の御尋ねそれへ參つて對面と。女房に指副渡せば凛ゝしげに脇ばさみ。乗物間近くつゝと寄り。詞姉様の敵覺えがあろ。サア地蘆屋殿是へ出てフシ勝負

勝負と聲かくる。地こは狼藉と下部ども立騒げば。ヤア〳〵騒がし鎭まれとゆたかに出づる蘆屋の道滿。斬髪に僧衣の姿保名見るよりハア聞えた〳〵。詞身に覺え有る敵持ゆつくりと夜が寐られず。樣を變へて助かる氣か衣は着ても敵は敵。是なるは身が女房葛の葉姉榊が相果てしは加茂の家に傳はる秘書。汝が奪ひし故ならずや。地陰陽の奧義の望を失ふ保名が鬱憤晴れやらず。丸腰を相手は死人も同然サア元の武士に立歸り。尋常の太刀打と詰めかくればちつとも騒がず。詞お身達が恐ろしとて樣を變ゆる道滿ならず。據なき主命父將監の忠死につき。斯くの如く薙髪せり。又榊の前の生害は後室井に岩倉が爲す所。彼家の一卷某が手に入りし疑はさる事なれど。奪ひ取しなんどとは保名とも覺えぬ一言。某が心はさにあらず。互に他事なき弟子兄弟不慮の難儀に世をせばめ。地此和泉路に漂泊と聞きつるばかり仕官の身。心に任せず年月を過せしが。此度櫻木の親王の御賢慮に叶ひ奉り。大内小博士に任ぜられ。生國津の國蘆屋の庄を賜つて。彼の地へ赴く折に幸ひ尋來りし其仔細は。先師加茂の保憲一字を讓りし秘藏の弟子。保名の繼ぐべき家の重寶我が方に置くは道にあらず。返し與へん心底にて是迄持參致せしと。地乘物の内より恭しく取出し。此書を考へ道を開き再び歸洛致されよ。此上にも我が心底疑はしくはともかくもと。詞涼しき有樣保名はつと平伏し。スヱテしばし詞もなかりしが。詞浪人の心の僻情有る蘆屋殿に。粗忽の雜言今更悔む甲斐もなき。地色に迷ひし身の越度大内の聞えといひ。主人小野の好古卿御憤り憚りあれば。保名が出世の望はなし。何とぞ悴を守立てゝ家名をつがせ申したし。御芳志の賜童子に讓り給はれと。先非を悔る夫婦が願ひ。詞ハテ親子の間はいづれにても其方の心任せ。童子爰へと招かれて。地葛の葉嬉しく抱き寄せ。アレ餘所の伯父樣が結構な卷物そなたにやろとおつしやる。行儀に其處へ畏まりや。詞ヲヲさうぢやさうぢや辭宜申しや。是は是はおとなしい成人して學問精出し。地親の名を上げられよと渡せばいたいけ兩手に受け父樣めんたしします ると戴き戴き。卷の表紙を打守り。詞コレ餘所の伯父樣此書付は金烏玉兎金烏といふはお日樣の中に有る三足の金の烏。玉兎とは又お月樣の中で餅を搗く玉の兎。月日を記せし此卷物。地天地の間にあらゆる事是を見れば知れるのと。舌も廻らぬ五つ子のぎよつとした事言ひ出すにぞ。夫婦も驚き道滿も。あまりの事にこはげ立ちフシ顏をながめて居たりしが。詞驚き入つ

たる童子の發明。尤も世上の子供にも四つ五つで大字を書き。繪馬などに上げるも有り是は格別。月日の異名の理を辨へ。地天地のことを記せし書とは。さすがに保名の教へ方生先が思はれて。夫婦にもさぞ御滿悦。詞イヤ御中言に候へども。父教へざれば子愚なりと本文は存じながら。地日蔭者の艱苦の渡世何を教ゆる事もならず。やりばなしに育てし悴。只今の一言親ながら不思議晴れず。詞かれを產みし母親は當所に年ふる白狐なるが。先年助けし恩を思ひ葛の葉が姿と化し我を育む此年來狐と知らず相馴れて。地出生したる此童子。白狐の才を享けつるやらん。恥しき身の懺悔と。地聞くより道滿手を打つて。詞扨こそ〳〵。尋常ならぬ人相かやうの例は唐土にも。美仙娘といふ狐。南京城外の民黃琢が孝心を感じ。妻と化して一子をうむ。其子の名は黃繼聰明叡智かくれなく。朝に仕へて高官たり。詞此童子もまつその如く一を聞いて十を知る。秀才いかで黃繼には劣るまじ白狐通を備へし才智試に物問はんと。膝の上に抱き乘せ。詞コレ童子。此日本の始め覺えずやと尋れば。ハテ知れた事問はしやる。天神七代地神五代。人皇の始りは神武天皇と皆言へど。瓊々杵の尊を始めとする。ヲ、詳に聞えたり。サテ佛法は。大聖世尊釋迦牟尼佛。遍く日本に弘りしは忝くも聖德太子。ム、儒道はいかに大聖人孔子なり。三十一字の言の葉は。八雲たつ出雲の御社素盞鳴の御神。八重垣つくる詠歌のはじめ。地詩はからうたと是を訓み。樂の章を元として舜の作り始め給ふと。平仄あはせし請答へ。管絃樂器もそれ〴〵に。わけて尋ぬる琴の緒の數を調べて伏犧の作。琴のことは三尺六寸和琴の始めは弓六張。彈くや鈿女の神樂歌。笛は龍の吟ずる調子こちらが持遊びぴい〳〵鳴る。一文笛や笙の笛鳳凰の鳥の形。鵜殿の蘆は篳篥の舌鼓うつ。波の聲琵琶の形は近江の湖。一夜のうちに駿河の富士山孝靈五年に始まるとは。今辻々で女夫の讀賣年代記に書いて有る。ちんぷん漢字の始めは蒼頡いろはにほへとは弘法大師。墨は薛稷筆は蒙恬つくりしいはれ有馬筆。人形がひよつこり口から出次第問ひ次第。雛祭は嫁入の手ならひ兜は武藝稽古の始り。詞サ、天か前かの穴一は天下の法度の賭博の始り。地紙鳶は養生の始め終りにけしとみなく。神道王法一々に問ふに隨ひ言ひ分くる。童子が口をかりそめに腹をかしたる母狐。側に在りとはしら菊の花のまにまに見えつ。隱れつ消えて。フシ形はなかりけり。詞ハアげにも〳〵疑ひなき狐の守護する希代の童子。簠簋內傳の書を明

らめ保名の虚名を晴らされよ。地其義を祝して道滿が身不肖ながら烏帽子親。晴れ明らむるの字を以て晴明と名乘られよと。扇を開き煽ぎ立てあふぎ立つれば夫婦が悦び。元より先祖は安倍の仲麿名字を繼いで安倍野の出生。童子を安倍の晴明とはフシ此時よりも名づけたり。地道滿重ねていづれもに對面し。詞日頃の願ひ達する上は早歸國と存ずれど。ついでながら信太の社是よりはいか程有る。イヤ僅か半道餘り保名案内仕らん。地月の夜すがら道すがら咄も且は慰みがてら。乘物やめていざ同道葛の葉は親達の。尋ね見えんも量られず。爰にて待てと夕月夜いそがぬ蘆屋に打連れてオクリ信太の森へと別れ行く。フシ時もこそ有れ。地惡右衛門葛の葉を奪ひ取らんと。手の者引具し追蒐け來り。詞コリヤ〳〵藤次。足弱を同道すれば遠くは行かじと思ひの外。保

名めは逃るとも鼻がおてきを手に入れよと。地きよろつく眼に乘物見付け。ヤア物くさしと立ちかゝり戶を押明くれば葛の葉親子。はつと驚き迯出づるどつこいさせぬと捻込み押入れ。おか樣に子添迄保名を生捕る好き人質。急げ〳〵と乘物舁かせ引つ返す向ふより。詞コリヤ待て待てやらぬ奴がやらない乘物待てと棒端つかみ。こりや〳〵よい〳〵よい所へ丁度參つて與勘平。髭が手なみ忘れたか性懲もなき惡右衛門。サア乘物置いてつつぱしれ。命助けてこますのがそつちの爲にも與勘平。地但し首に代へる氣でフシごはりますかと睨付ける。地ヤア推參なる蕃椒めうぬが命は天井守り。奴豆腐に切碎けと主從拔連れ打つてかゝるを。かいくゞり〳〵切るより早い手づかみ料理。取つてはなげ〳〵さつてもあんばい與勘平フシヘズミ逃ぐるをやらじと追うて行

く。地道引つちがへ又此處に。京より歸る與勘平。刀の鞘に狀箱結付けナホスフシひよこ〳〵來るを。地葛の葉悅び。詞ヲ、手柄仕やつた出かしやつた。惡右衛門は迯げをつたか大勢と只一人。其方に怪我はなかつたかや。エヤア是は何仰しやる。奴めは旦那の御用一昨日の朝京都へ上り。左近太郎樣に御目にかゝりお返事は此狀箱。安倍野迄戾つて見れば地思ひがけない庄司樣御夫婦。お前のお噂かの樣子びつくり直樣參つたは只た今。詞手柄の手の字白癡覺えごはりませぬ。又あの人の卑下をいやる。惡右衛門が大勢追ばらやつた氣味のよさ。此葛の葉が能う見て居る。なんぼ見てござらうが覺えない與勘平。褻にも晴にも髭一人。葛の葉樣なら二人も有る筈。但しお前が彼のではないか。滅多に傍へ寄らしやますなと睫濡らせば。詞エ、何いやる。其方こそど

きく／＼と紛らはしい與勘平。イヤお前がイヤわがみと。地争ふ後へむら／＼と取つて返す悪右衛門。アレ逃がすなと下知をなす。詞ヤアようこそ／＼石川殿。手柄の覚え無かつたにさしに來た心中者め。とてもさしてくだんすなら前髪がよかろ物。剃りこくつた生男首。ア好い儘よ。高野六十那智八十取つてくれんと抜き放し。地切つてかゝればさしもの大勢。フシ立つ足もなく逃げて行く。地葛の葉は童子を抱き。これ／＼あぶない長追無用戻りや／＼と身をあせる。弓手の畝より落合藤次。詞サア仕てやつたと引んだかへ宙に引つさげかけり行く。地尾花萱原蘭菊の茂みに有り／＼與勘平。こりやさせぬわと投退くれば。ひるまず抜いて打ちかゝるを。まかせておけろが早速の早業トル三番切立て／＼。追ひまくる。地親子は前後敵の中遁れん方なく乗物の。戸を引立て入る所へ。二人の奴は敵をはらひ東西より立歸り。爰は危し／＼と乗物片手に差上げしは。肩も揃ひの六尺豊手柄も對の大はだぬぎ。一息つきしは阿吽の二王元服したる如くなり。地童子は物見に顔さし出し。詞母様あれを見さつしやれおれが兵衛が二人になつた。奴がぶんじた地與勘平と。手を打ちたゝけばげにげにさうだ／＼。和子の詞で奴の詮議。コリヤそやつ。ソレ／＼乗物おろして其處へ出をろさ。何さく／＼詮議とは與勘平。うぬが五體もサア持出せろ



寛延元年竹本座番附

ヲ、サ出るわ。〳〵〳〵。サア出たわ。おれも出るわ。地サア出たわと奴と奴が顔見合せ。詞おれがわれか。われがおれか鼻の穴の不掃除迄っ地微塵もかはらぬ奴服大紋。でつかり据ゑた三里の灸すりむけた迄違はぬ〳〵。つくね奴の同作ぢやとっ互に。呆れしばかりなり。地葛の葉立出でこの詮議は仕やうが有る。詞是こちらの與勘平。そなたは幾年で奉公して。何處の生れぢやそれ聞かう。此髭めは丹波の生れ爺打栗が折檻強く。十一でお家へ参り足手かいさまに精出しても。高が下郎の精一ばい。二合半の物相あたま。地すりこぼつたは十四の春一兩二歩の切米に。違ひない〳〵お前様もお聞きなされてっフシごはりましよ。地成程々々主の咄にちがひない。詞サア此奴が身分は濟んだ其奴は又何處から出たどこから出たとは天から降らず地からも湧かず木の股か

らはなほ出られずお定まりの穴から出た。なんぢや穴から。はれ能う出たなあシテ切米はなんぼとりや。身が切米は十二文ひんねぢ紙の燈明代本社拜殿玄關前賽錢箱の皮覆。金紋大總隠れあらない受領神にぶつ仕へる。鳥居の馬場前踵しつかと踏んづけた合地二合半の小豆飯色こそかはれ品こそかはれ。其お子産んだ白狐女郎はおらが中間の寄親殿だ。詞頼むに引かれずぬつと出た。合奴が出生地穴かしこ人に語るな。女郎女桔梗刈萱吾木香。身は蘭菊に遊べども咄の尾花はいつかな出さない。詞悪右衛門主従は此與勘平に打任せ。地親子の衆のお供して連れて退いたが與勘平フシ心得たるかと言ひければ。詞さつてもさつぱり。申したり。地中間中の尻持とは頼もしい野干平。差圖にまかせお供せう。悪右衛門の若鼠あなづつて良にかゝるな。餘所なが

ら一曲見物と童子を背におひしげる。葛の葉がくれ草がくれオクリ忍びてへ事を窺ひゐる。地石川が手足と頼む藤次藤内市八源太。腕に覺えの早繩十手狐としらぬ捕手の不覺。だまし寄つてはつしと打つ。ひらりと飛んで乗物の上にかる〳〵ちよこ〳〵足。仕損じたりと追取巻き。四人四隅に手をかけてぐつと上ぐれば莞爾と笑ひ。祭過ぎてのお御輿臺輿ちやうさやようさ。あれ〳〵信太の神いさめフシ爰に聞えて。笛太鼓天罰神罰挫いでくれんと身は稲妻の通力自在。はた〳〵はつしと蹴倒す拍子。太鼓の拍子も面白や。小唄節にて唄かへろやれ我が古。塚へ戻ろやれ。我が古塚へ歸ろやれ。ナホス返せ返せと茅花の穂先亂るゝ薄秋の野の花をちらして三重へ爭ひけり。フシ狐の所爲に。地魂奪はれ五體ふぬけてよろぼふ奴ばら。引寄せ〳〵捻付け蹈み付け命がはり

の早剃刀。新刀のお髪剃いたゞけと耳鼻かけてごそ／＼／＼。すんぼろ坊主にすりこぼち弱腰ぽん／＼續け踏み。四人は命から／＼に頭かゝへて逃走れば。こんこんくわいけい悅びの。鳴く音も野路の夜嵐に　フシ立ち紛れてぞ失せにける。

地道滿保名は下向道葛の葉親子與勘平。右のあらまし語るにぞ是も偏に信太の明神。擁護の驗有難しと報賽の遙拜三拜猶行く先は草深き敵の伏兵氣づかひなり。詞挑燈ともせ與勘平。地ないと返事は以前の奴。向ふに忽ち　フシ顯はれ出で。詞道の明りは我等の得物野山も一目に照耀く千燈敷の大燭臺。地それは蠟燭十二挺是は狐の千丁立呂千町里千町千年劫經る友呼聲。姿は消えて灯す火の千燈萬燈滿々月。光も滿る晴明親子出世の門を和泉路や信太の。森の故事を。あらたに寫す筆の跡語り。傳へて知るとかや

第五

地愼を知つて愼まざれば。禍遠きにあらずとかや。陰陽師安部の保名浪々の身の年月も。早八歳の晴明に自然と妙術備れるを。古主へ言ひ立て再び歸參を願はんと。西の京の旅宿より妻子引連れ行く道も。往來途絶えし一條の　フシ橋詰にさしかかり。地あれ／＼向ふへ見ゆるは左近太郞。是幸ひといふ間程なく互に行逢ふ橋の上。詞ヤア照綱殿何方へ。エ保名殿御親子御揃ひ。ハテ好い所でお目にかゝつた貴殿歸參の儀。御聞屆け有つて御赦免。其上御子息。才智勝れし段殊ない御賞美。地何卒天下の博士にもなるべき間。明朝は參内せさせ其趣を奏聞せん。詞先づ今日召寄せ。對面なされんとの仰せ。それ故御子息迎ひの爲。今御宿所へ參る所。先づは吉左右拙者も滿足仕る。ハア、是は是は冥加に餘る仕合。好古卿の御憐愍は申すに及ばず。地偏に貴殿の御執成といふに葛の葉共に悅び。おなじみとて捨置かれず。段々の御世話お禮は詞に盡されず。此上ながら御前の首尾宜しう賴上げまする。詞ア、何の／＼懇意の仲にお禮は無益いざ同道仕らう。ハアいや／＼。先年當所を立退きて。主君の御用を缺きたる某。いかに御赦免なればとて。お伴も無きに押付けて參るは憚り。地悴さへ出世致せば。拙者が儀は苦しからず。罷歸つて明日の吉左右を待ち申さん。コリヤ女房。悴に付添ひ早く參れ。御苦勞ながら賴み入る。スリヤ是非共お歸りか。然らば御兩所作ひ歸らん。フシさらば／＼と立歸れば。地保名も跡へ引返す遙か向ふへ惡右衞門。數多の家來に長棒舁かせ先に進んで歩み來る。シヤ曲者仔細ぞ有らんと保名は忍んで窺ふ所へ。程なく來る惡右衞門。

件の櫃を橋の中にどつかとおろさせ。主從あたふた押開き取出すは藁人形。詞家來ども口々に。見た所が風の神流行病の沙汰もないに。旦那こりや何なさるゝ。されば〳〵仔細言はねば合點が行くまい。是ぞ日頃くい〳〵思ふ六の君を。呪咀の爲以前も術にて呼出し。地肝心要でしくじつた。それ故今度は丈夫に仕かけ。居ながらころりとやるつもり。彼の道滿の内股膏藥。頼んでは却つて妨げ。詞不斷はし〴〵聞き覺えた術を行ひ。是を見よこの如く。四十四本の釘を打ち呪咀の文を書付け。此川へ打込む思案。コリヤコリヤ家來どもみぞろが池に懲り果てた。地そこらに非人は居らぬかと。穿鑿させてよいわ〳〵をらぬは重疊サア用意と聞くより保名飛んで出で。前後の家來を取つて投退け踏飛し。人形もぎ取り聞いた〳〵殘らず聞いた惡事の根組。殊に

段々意趣有る仲。遁れは有らじ覺悟せよ。ヲ、是を露顯せられては。主君の大望後日の仇。此方の覺悟よりうぬが身躰に暇乞ひ。それ家來ども遁すなと打つてかゝれば心得たりと拔合せ。かゝれば拂ひ裾を攩れば飛び違ひ。付入れば打開き秘術を盡し働きしが。運の極か橋板に。けしとむ所を付入り付込み。ばつた〳〵大勢寄つて連枷切り フシ敢なく息は絶えにけり。詞ハ、ア氣味能う死ばつた。ヤ跡の難儀は如何なさるゝ。ヲ、サ合點此櫃に死骸人形相住させ。地深みへづぶ〳〵氣づかひするなと。主從櫃へ押込み捻込み秘封をつけ。サア〳〵かゝれと手々に舁上げ。さんぶと打込む川流れ。サア仕すました〳〵。者ども來れと引連れて。我が家をさしてぞ 三重へ行く空の。雲井長閑き大内山内宴を行はれ。群臣諸卿參列し フシ君を壽き奉る。櫻木の親王御褥に着き

給へば。續いて左大將橘元方。參議小野好古御座近く伺候して。葛の葉親子を御階に召連れ謹んで奏せらるゝは。詞愚臣が家來安倍保名が悴晴明。今年八歳いまだ幼稚と申せども。陰陽道に妙術を得れば。則ち帝都に居住させ蘆屋の道滿兩家として。天下の安危を密奏せば。地御代長久の基ともなり候はんと言上あれば。右大將聞きもあへず。詞コレ〳〵好古其保名とは加茂の保憲が末弟。陰陽未熟のうつけ者。先年都を逐電し。賣卜者辻八卦に身命を繫ぐと聞く。其中に儲けたる晴明とやら。あくちもきれぬ小悴。陰陽道の妙術こは事をかしき奏聞。地今一天下にならびなき蘆屋の道滿有るからは。占も御祈禱も一人で有りあまろ。詞コリヤコリヤ悴願は叶はぬ。退參せよと無法の詞。地聞兼ねて葛の葉こは心得ぬ御仰せ。詞稚き者とて侮らば。唐土の陸雲は六歳にて。

文をよくし書を諳んじたる例もあれば。一概には言はれぬ物。それに何ぞや雲突く様な形をして。小い者をやりこめ〱。エ何ぢやの。地あたどんくさいと詞もずつかり顔も色立ちせき上ぐれば。詞ヤア鈴振のべり〱め。元方に向つて緩怠至極。アレ引立てよと下知すれば。地親王しばしと鎮め給ひ。詞元方の詞一理有りと雖も。好古の心無下にも成るまじ。所詮論は無益。稚き者が妙術を目前に見るならば。地彼等が願に任すべしと下を惠みの御詞。末世に村上天皇と フシ仰がれ給ふも理なり。地折こそ有れ左近太郎照綱。長櫃御前に舁きすゑさせ。詞貢を納むる近郷の百姓ども。一條の邊にて此櫃を拾ひし所。下にて開き見ん事上を憚り上覧に供へ奉ると訴ふれば。地諸卿も怪み元方は胸に覺の有る長櫃。詞コリヤコリヤ左近見苦しい雜物大内の穢持つて立てと。地苛てば親王とゞめ給ひ。詞中の知れざる長櫃是ぞ幸ひ。道滿晴明立並び中を未然に考へさせよと。地仰に元方力及ばず。詞コリヤ〱小悴。若し汝仕損ぜば遠島さすが合點かと。地勝手だらけな詞詰。それ〱と有りければ非藏人の申次。司天臺に控へたる陰陽の頭蘆屋の道滿。裝束更め召に應じてしづ〱と フシ御階間近く座に着けば。地元方打笑み。ヤレ待兼ねた見通し殿。詞是れ此櫃の中を考へあの小童奴を挫いでたも。地はつと答へて道滿。詞コレ〱晴明。先づ其方から考へられよ。イヤ其許から言上有れ。地然らば拙者申上げんと眼を閉ぢ。方角を繰り時刻を合せ謹んで。詞ハヽア是は正しく二人の體。一人は假に形を設けし物。今一人は三十有餘の男刃にかゝりし死骸にて候と。地言上すれば元方點頭き。ヲヽ今に始めぬ汝が考へさうで有らう。サア〱悴は何と〱。はつといふより袂の内。指繰返せば道滿が。察所寸分たがはず。南無三寶。先を越されし口惜しやと轟く胸を押ししづめ。暫く思案し。成程道滿申さるゝ通り。一人は假の形今一人は三十有餘の男刃にかゝり候へども。未だ落命とは見えず魂魄五體を去らざれば。地恙なしといふに喫驚。コレコレ晴明。詞此道滿が申す所汝が胸に徹しなば有様に申されよ。元占は一體の氣を考ゆれば互に合ふまい物でなし。少しにても相違せば汝が身の一大事。今一應工夫有れと氣の毒顔に占問へば。葛の葉は猶氣遣ひ。詞コレ〱晴明。兩方の考一致したとて耻にはならず。なまなか其方が我を張つて品かへんとばし思やんな。微塵でも違うては地大事の所ぢやとつくりと氣をしづめて申上ぎや。盞を明けぬ其内は言直しても仕直しても。隙が

入つても大事ないと。側からあぶ〳〵井戸の端子を思ふ身ぞ道理なる。瀧口に差控へ始終を聞居る惡右衞門。折よしとつつと出で。陰陽道に妙術を得し者が言ひ直しは成らぬ〳〵。もし盞あけて死骸が出でばゆるさぬが合點かと。己が覺えしたり顏元方に目と目を見合せ。嘲る詞を耳にもかけず。母樣氣遣ひなさるゝな。とてもの事に刀疵立ち所に平癒させ。御覽に入れんと直垂の袖を結んで肩にかけ。幣帛取つて禮拜し。南無大聖文殊薩埵。一度結びし奇緣を違へず。力を添へてたび給へと傳へ請けたる大山玉の。密法生活續命の秘文を唱へ。諸神諸佛を勸請有る。

晴明蘇生の祈

謹上。再拜。〳〵。敬つて申し奉る。神は元來正直の頭を照す日の本の。いとも尊き宮所。五十鈴の流清らかに。影をうつして。三熊野は。事解男速玉男飛瀧權現王子權現九十九所。納受有つて給れと鈴押取つてちりん〳〵。一字金輪金峰山藏王權現立像權現。葛城七體金剛童子。我も童子の。共一つ。歸命々々と名にも。立田の。紅葉ばや。錦織るてふ糸筋の。三曲殘りて三輪の山。三笠の山にほの〴〵と月。住吉の神神樂巫女が小鼓。打つたり舞うたり幣帛。取換へひら〳〵ひらり。ひらり開くる梅の宮。花は散りても根にかへる歸れや。かへれと呼子鳥。錫杖取つて振立て振立て。高き御山は愛宕山。鞍馬山には多門天。持國增長廣目の。四天王にも先立つて。神道如意の駒に鞭を。打ちかけ〳〵。雲に乘り三千。世界を廻る韋駄天王。孔雀明王大威德。見せしめ給へと又振立てから〳〵から矜迦羅制多加不動愛染。扨王城には加茂八幡。ま猿めでたき山王權現多賀の神。假へ定業限命なりとも。拔苦與樂の肩を垂れ。一度蘇生させてたべと肝臍碎き直垂を汗に浸して祈りける。

行力修法の證にや東西より數多の鳥。むら〳〵さつと飛來り櫃の上に寄集り。暫く啼く聲憂ひを呼び又立上つてくる〳〵くる。くるり〳〵と飛廻り。悦びの聲喧く四方に別れて飛去りけり。晴明虛空を禮拜し疑もなき蘇生のしるし。サア〳〵盞を開かれよと聞きもあへず惡右衞門。ヤア小童奴がほでてんがう。明けて恥をかゝせんと櫃の蓋に手をかくれば。めり〳〵はつしと打碎きによつと出でたる安倍の保名惡右衞門が髮束摑んでどうど打付け足下に踏へ。左大將と心を合せ六の君調伏の此人形。遁れぬ所

と踏みつけ〳〵剣難不思議に蘇生の保名。娑婆に再び戻橋 フシ此時よりぞ名づけける。地始終を聞いて左近太郎。ヲヽ、一度に懲りぬ天命しらずと高欄に手をのばし左大將をかい摑み引つかづいて投付くれば。道滿しばしと押しとゞめ御前に向ひ。詞罪人とは申しながら御息所の御父。命の儀は御赦免と恐れ。入つて願ひける。ヲヽ、地神妙なり道滿。汝が願にまかせ遠島流罪。惡右衞門は保名親子が心任せに計らふべしと。仰を聞くより勇をなし。詞おのれに討たれし保名が敵本望遂げるも。此保名と。地寸断々々に切放せば。親王御感浅からず晴明に官位を授け。道滿諸共天下の博士末の代迄も晴明と。云傳へ書傳へ。家の波風動きなき御代に羽をのす雛鶴の。龜卜の八數大八洲君萬歳の壽に。民千歳の五穀成就富みさ。かふるこそ目出たけれ

苅萱桑門筑紫𨏍

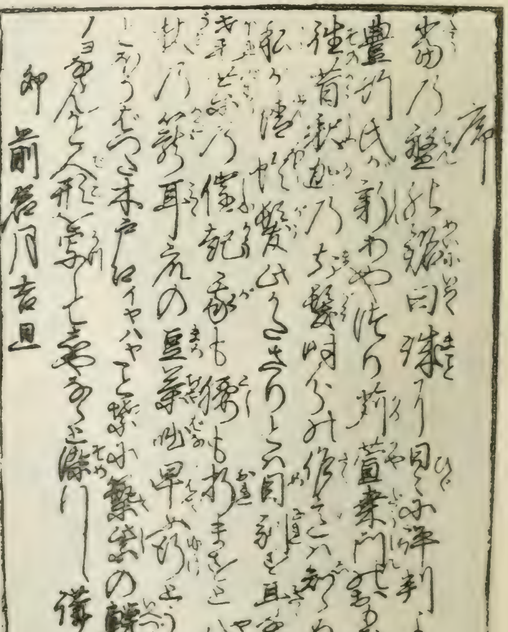
作者　並木宗輔
　　　並木丈輔

序詞大道廢れて仁義起り。國家亂れて忠臣を顯す。此語を以て鑑みれば。道にも亦誠の本あり。其誠の源を尋ぬれば。戀慕愛執に如くはなしと。豐葦原の陰神陽神。探り給ひし天の逆鉾。種擴りし世々の祚。御小松の院の御治世。從ひ靡く君子國オロシへ時めく春の。榮なり。地當今未だ御幼稚なれば。御母通陽門院殿。暫く寶祚を預り給ひ。踏歌の節會を御行事。禁庭守護の武士は。筑前の國の住人。加藤左衞門尉繁氏。宵より詰めて宿直守。假に授かる官職に。在京の其間右大將の烏帽子狩衣。華やかなりし出立も衞士が焚く火に光添へフシ威あつて。猛く見えにけり。地色夜半も次第に更過ぎて。明方近き星の影衞士は篝を焚きさして。郁芳門に立出づればオクリ代るへ時刻と入替り。フシ出で來る衞士は。奧女中。御國母の召使千鳥といへる品者が。長地すつきりとした下げ髮に似合はぬ烏帽子裝束も。派手な風俗柳腰。男欲しがる曲者とはフシ目許の。愛に知られたり。地繁氏卿の後に立ちどうやら何ぞ言ひたげに。うぢ〳〵すれば振返り。詞是はしたり千鳥御前風流なお姿。扨は今宵の篝火は其許がお勤めか。ハテしやれた衞士。地焚いて貰ふ篝めは果報なやつと挨拶の。中にちつくり色持たす。フシじやれは物師のしるしなり。地色千鳥の前は先取られ何と答も恥かしく。顏を赫めて居たりしが。てんぽの皮と御手を取り。詞七歳餘りの御在京御參内の度毎に翠簾の隙より垣間見て。ひよつと燃えつく戀の篝火。思ひの煙絶えぬ故露程なりと此心を。地中上げ度き願ひにて形を窶す衞士の役。胸の焚く火に焦がれ死ぬ。命を助け給はれと御弱腰に。フシ抱きつく。地色もとより好む色男子。否にはあらぬいな船の。漂ふ心を押鎭め。詞志は過分ながら。禁中在番の某。御所の女中に不義ありなどと。風聞あつては後日の難儀。地折もあらんと言捨てゝ。振切り給ふをそりやならぬ。詞はもじい事のありたけを。言はして置いて胴慾な。地色お上の事は公なれば。こんな詮議はござんせぬ。よしお咎めがあるならば。罪を私が一人して請けませう。其段には氣遣ひなくどうなとせうと

ついー口。嬉しいお詞聞かせてたべ。さうなければ何ぼでも。フシ放しやせぬと取付くを。詞イヤ〳〵それは勝手了簡。高呑込みで請合はれぬ。地色赦し給へと振放し。あなたこなたへ外しても。猶も放れず附纏ふ折もこそあれ御簾を巻上げ。御母通陽門院。關白良基公を始とし公卿を伴ひ出で給へば。二人は庭に敗亡の。逃げもやられず平伏は フシあやまり。入りし風情なり。地色國母御聲麗しく。苦しからず遠慮なせそ。深くも思ひ染めたりし色をば如何でさますべき。詞コレ〳〵繁氏。國に妻子を殘し置き枕の伽も七歳餘り。地懈怠なき勤番の褒美に千鳥を取らすべし。淋しき閨の友とせよ。詞その往昔近衛の院。源三位賴政に下されしは。池の眞菰に水増して引きぞ煩ふ菖蒲の前。地それには引替へ戀風に。吹立てられし浪の上鳴き騒いだる千鳥ぞや。永く比翼の友羽交打交せよと宣旨あれば。コハ有難しと繁氏卿。千鳥は猶も悅びの。胸落着けど心はせき。詞又もや御意の變らぬ内。私はお屋敷へお先へ參つて待ちませう。地色お前は跡から御歸館と。早しこなせし妻氣質。フシいそ〳〵立つて入りにけり。地色折から知らす朝嵐。人の面も白々とオクリ明渡りたる フシ四方の空。地色



御番の代りと聲かけて。豐前の大領大內之助義弘が舊臣。多々羅新洞左衛門秀貫。白髮まじりの曲者階下間近く額を下げ。詞今日守護の勤番は。主人大內義弘が役目の所。此間より所勞に依つて某が名代。地御赦免仰ぎ奉ると奏すれば繁氏立寄り。詞病氣とあれば餘儀なき仕合せ。天子にも勅許あるべし。地色イザ役目を讓り代らんと立出でんと フシし給ふ所へ。地色執權監物太郎信俊。奏聞の事ありと訴へ出でて庭上に畏り。詞扨も高雄の御山は觀音薩埵の靈驗あつく。諸人の信心日々にいや增し。歩みを運ぶ靈地なるに。十日許り以前より身に香染の袈裟をかけ。荊棘の髮ふり亂し。高足駄にて異形の行人。夜は洞穴に取籠り。晝は山を徘徊して。往來を惱ます由昨夜陰に及びての注進。地如何計ひ申さんやと申上ぐれば。關白良基公笏取直し。詞出家ならば佛意を慕ひ。難行苦行に身を凝らし。道を試す敎もあり。有髮の行者は心得ず。殊に往來を惱ます由。何にもせよ聞捨てになり難し。地帝都の騷ぎにならざる樣。汝密かに行向ひ。都の內を追拂ふか。異議に及ばは召捕つて糺明せよと。仰せの內より承ると立つ所を。新洞左衛門暫しと呼びとめ御前に向ひ。詞夜前迄は彼



が主繁氏の勤番。今朝よりは手前の主人。大内義弘が役目。地此討手某めに仰せ付けられ下されと。願へばやがて監物太郎イヤこれ新洞殿。詞高雄山は北嵯峨に相續き。主君繁氏が預り場所。其上拙者が承つた役目。橫間より手前へとは。我儘至極と。言はせも立てずヤア武の道から武を望むを我儘とは舌長し。地色是非この討手は某にと。いひ捨て立つをどこへどこへ。詞人の役目をよい年して。かち落さうとは大人氣なし。地似合うたやうに圓座の上。髭を數へて居召されと。詞あらして駈行くを走りかゝつてしつかと捉へ。詞年は寄つても此親爺。まだ腕先には覺えがある。地行かれうならば往て見よと。引止めたる力瘤。エ、面倒なる老耄めと。捥放せば摑付く。待てよ〳〵と關白の仰せも聞かず繁氏の。詞も餘所に監物太郎一ふり振つて振放し。飛ぶが如くに駈出すを。奈落までもと新洞左衛門。辭儀も作法も白砂を。フシ踏散らしてぞ追うて行く。地色通陽門院叡感あり。大内には歌爭ひ武士は武を爭ふ。其家々の習ひとて勇ましき有樣かな。勇む心に迎ひを待たず。嫁入急ぎし千鳥の前さぞ館にて待兼ねん。宿の塒を緩めて友鳴きにせよ繁氏と。御褥を立ち給ふ御戯れは常



陸帯(たちおび)。結ぶ契りは。千代八千代。かはらぬ。國の。三重へ春風も。フシ匂ひを含む。一霞(ひとかすみ)。都は辰巳(たつみ)高雄山峯は斜(たゝめ)の白雲に。巖峩々(いはほそび)て茫茫(ばうく)たる。雲もとけ行く谷川の。スエ苔滑(なめら)かに松の聲。げに物凄き フシ 景色なり。地色被衣(かつぎ)に靡く若草の素足で拾ふ御所女中。本フシ男交(まじ)りにさゝめくは。地千鳥御前のお乗物築氏卿のお館へ。押付けて行く嫁入(よめり)分(ぶん)道を廻つて観音詣で。結ぶ誓ひの鐘の緒に縁(えにし)も長き山坂を。息休めにとお乗物フシ松の。木陰に立てければ。地色けふぞ雲井の眉とけて立出で給ふ千鳥の前。花を隈取(くまど)る御姿。褄(つま)吹返す戀風もフシ憂きとや人は羨まし。地色腰元どもはさわ〳〵と鶺鴒を放れし里雀(さとすゞめ)。中にも梢が囀(さへづ)りて。詞何と皆の衆。小面(こつら)の憎い此松に。抱付いた藤わいの。丁度あの様に千鳥様も。築氏様にしがみ付いてござらうの。地あんな器量のよい殿御御果報なあやかり者と。なぶりかゝれば礁(きぬた)が差出で。詞そりや知れた事云やるがくだ。したがどうも呑込まぬは彼方(あなた)のお心。今迄は御所住居(すまひ)やもめ鳥の千鳥様。



飛立つ程に思召し。一寸(すん)でも早うお屋敷へござる筈。地それに氣疎(けうと)い廻りして。観音参りが心得ぬ。お持たせ振(ぶり)の道草かと尋ねれば打笑み給ひ。詞様子知らねば

さう思ふも道理。言ひ出すも恥かしい。事ながら。繁氏様に惚れたのは今更の事ならず。とうから惚れて居るわいの。お國には石動君とて。若殿まである御臺様。歴乎としてござるとは知りながら。思ひためては忘られず焚付けて見る衛士の篝火。姿をくろむ濡衣つい門院様に見付けられ。はつと心に思ひの外。お氣の通つた粋な勅諚。是といふも自らが年月念ずる心の誠。偏に觀音様の御利生と思ふから。道寄りしてのお禮參り。ヲ、恥かしとばかりにて御乘物に召し給へば。それならば御尤もいよ／＼大悲のお力で。いぢむぢのない様に暁からは念彼のだん。段々によい戀枕うん／＼雲雷鼓掣電。雷に臍取られぬ内。急ぎや／＼と我一に。行きかゝりたる向ふより。悪者作の深編笠。供先押割り。のつさのさ。ちと乘物へ御訴訟と。のさばりながら立寄れば家來の者ども聲々に。願ひ訴訟の事ならばなぜ記錄所へ往てぬかさぬ。ハレ狼狽た素浪人と。嘲笑へどちつとも怯まず。汝等が知つた事でなしと。押除けて乘物の傍近く。コリヤ妹。見ぬ顔するは手が悪い。兄黒塚の鬼藏人見忘れはしよまいがな。最前から様子を聞けば。そちは今日繁氏殿へ嫁入をするとの話。それなれば無心がある。某をお館へ連行き。私が兄でござる。お取立て頼みますとたつた一口詞を添へなば。義理にでも繁氏殿世話しやらねばならぬ事。さすれば兄が身上にありつく。兎角いへば思案があると。妹に向ひ居合腰刀ひねくり嚇せしは。大人氣なくも面憎し。當惑ながら千鳥の前乘物の戸を押明けて。珍らしや藏人殿。まだ息災で此世にござるか。へエ、こなたはの。いふに及ばぬ事なれども。父上黒塚群寮様は。代々續く禁裡の博士。君の覺えも目出度き家柄。男の子とては其許お一人。跡目も相續する身を以て。十年以前清涼殿のお能の時。醉狂の上人を過ち。直ぐにそれよりお前は駈落。其お咎めにて父上は浪人し給ひ貧しき世渡り。悴故に家を潰し。先祖へ對して言譯なし。必ず何處で出逢うても。兄と思はゞ共に勘當と。御遺言にて貧家の死をば。なされたぞや。それに今更妹よ千鳥よとは。どの顔下げて對面ぞと。恥しめられてさしもの悪者。押俯向いて詞なく。砂にのゝ字を書きゐたり。千鳥の前は涙を押へ。ア、恨むまじ返らぬ事。皆の衆の手前も思はず。よしなき昔の長話。日もたけて嘸やさぞ繁氏様にもお待兼ね。心せかれと宣へば。そりやお急ぎよと六尺ども腰を振出す五枚肩。行く乘物の棒しつかと捉

へ。詞イヤ妹さうらまうは抜けさせぬ。いづく迄も同道と。地ねけけかゝれば家來の者どもも目をむき出し。詞聞いた様子が大泥坊。兄貴めでも大事ない。性根の直る意見の爲。目に物見せんと立ちかゝり。遠慮會釋もなま木の息杖。地色足腰かけて用捨なく連枷投げに打ちのめし。厄介な繩くらひ。棒をくらふとよい氣味かとどつと フシ笑うて行過ぎる。地色藏人やうノ＼起上り脊骨を擦り齒がみをなし。ヘエ、罰當りの妹め。此分で濟まさうかと駈出す後の方。暫しノ＼と止むる行相。紅の衣を身に纒ひ亂髪逆に生ひ茂り。一丈餘りの桂の杖。高足駄踏みならし悠々と立出づる。さしもの藏人肝を消し フシ暫し。詞もなかりけり。詞ホ、目馴れぬ姿不審顏は尤もノ＼。我この程より大願の仔細あつて。當山に分け入り身を凝らせど。胎金兩部の峯も慕はず。赤木の珠數を押揉んでは。四海を胸に畳む妙術。汝妹が縁を頼みに。繁氏に仕へんとは廻り遠き分別。地某が幕下に付かば高祿を得せしめ。先途を見屆け取らすべしと。さも横柄なる詞つき。地色何がな搔き付く猿智慧の押直つて頭を下げ。詞何がさてノ＼。落着く鴫もない某。いか樣ともお眼識に預りたしと手をつけば。地ヲヲ頼もしゝノ＼。いでノ＼汝が高祿出世の手がゝりとなる判じ物。よく判じよと歩み寄り。松にからみし藤かづら。若葉は爰ぞと杖取りのべて。ちやうノ＼ノ＼と二枝三枝。薙落して是見よや。元來加藤は藤原氏。其藤をまつ此如く切放す。早く此心を察せよと。いふに角ぐむ鬼藏人。額の皺に智慧かき寄せ。詞ム、ム、ム、近年の謎したりノ＼。其藤原の藤の枝を切捨て給ふは此藏人に。繁氏が首アア聲高し密かにノ＼。すりや判じたる心底は。成程討つ氣でござれども。未だ君の御名をも明かされねば。地色あつとは得こそ申すまじ先づ姓名をお聞かせと。いふに頷きホ、うい奴出來いたノ＼。かく胸中を見据ゑし上は何か包まん。詞もと某當山に住む者ならず。九州に隠れなき大内之助義弘といふ者。そも此山に艱苦する事。我多年天下を望み。日夜朝暮大玄谷神の呪を唱へ。又は諸國の安否を窺ひ。國家を握る企なれども。合點の行かぬは繁氏一人助け置いては大望の妨げと。地語る半ばへ轡の音程近く聞ゆれば。奇異の思ひを大内之助眼をくばりヤアラ心許なしっ詞暫しが内我は窟に身を隠さん。地汝も暫し忍べよと言含めつゝ。引別れ オクリ 茂りの內へ入りにける。江戸フシ 夕日に背けて向ふ高雄山勇みの鈴も華やかに馬上ゆゝしく乗りたるは。ナホス地 監物太郎信俊身は腹巻に小手臑當。暫時に

駈ける沛艾馬。鞍に引添ふ譜代の郎黨。大佛新藏諸侍。息をはかりに。フシ駈來る所へ。地色遙かに下つてオ、イ。オイと呼びかける。心せけども監物太郎何事やらんと手綱かいくり。駒を返せば新洞左衞門頭に星霜降り積れど。身體は忠義の韋駄天走り徒立ちになつて駈着け。詞ヤア曲もなや監物太郎。朝廷にても爭ひし今日の討手。是非某にふり代り。其方竊に歸つてくれ。地頼む〳〵といふ間を待兼ね。ヤア心得ぬ御邊が胸中。詞さまでの討手にもあらざるに息筋張つての所望。但し其曲者に由緣あるや。心底明かさば品により了簡もあるべきが。無體の望み訝し〳〵。ホ、ウそれも尤も。何を隱さう閑居して。異相に見ゆる行人は。我主君大内之助義弘殿。ヲ、驚きはさこそさこそ。地かく打明ける上からは爰が互の了簡づくと。いふを打消し聲荒らげ。詞さう聞いては猶許されぬ。禁裡表は所勞と僞り。此山に隱れ住んで。何の爲の難行苦行。それを明かさば兎も角も。地サア其樣子は仔細はと。問詰められてイヤ其儀は。其事はと。差詰つたる返答にヤア狼狽へたる一言。詞家來として主の心推察せずに仕へるか。善ならば善。惡ならばなぜ諫言は加へぬぞ。地不覺者と言捨



てに引直す轡面。押取つて引きとゞめヲヲ尤もなり監物太郎。汝が主の繁氏殿とは事かはり。主君大内は古今の猛將。思ひ込んだる初一念中々家來の諫めも聞かず。存じ付いたる大願ありと。仔細言はずの山籠り。地禁廷へは所勢の言立て。萬一此事顯れては上を掠むる大罪。大内の家の滅亡。詞さるに依つて某が無體に討手の役目を願ふ。地主持つた身は相互。一生覺えぬ此親爺が。手をさげる聞分けよと。いへども聞かずいや〳〵〳〵。詞洞穴に壇を築き不及の望なす者多し。假初ならぬ勅命を請け。善とも惡とも仔細を聞かず。私に了簡する事ならぬ〳〵。コリヤ大佛。無益に時刻も押移る。構はずとも皆引連れ山の手をおつ取卷き。地大内之助を逃がすなと下知に從ひ供廻り。ツシ一度に勇み入りにける。地己兀より短慮の新洞左衛門。無念とや思ひけん。詞ヤア奇怪なり監物太郎。六十に餘る某に。様々の口叩かせ。其上主君と名を明かさせ。無得心なる人畜生。地いつ迄も動かせじと。乘つたる馬の尾筒をおつ取り引戻せば。又馬上には障泥を打ち。ハイ〳〵〳〵と乘出す。コハリ互の忠義に精氣をもみ。心は逸れど老の腕。次第にゆるむ疲れを見込み。ナホス地爰ぞと監物は



ずみにあふり。丁ど當つれば跳上ぐる。馬の蹴上げに新洞左衞門跳倒されて反る所を。障泥と鞭を打重ね〳〵。馬を飛ばして一散に。フシ奥山指して駈り行く。地色新洞怒りの齒を嚙みしめ。忠義に固まる老の兩足。踏固め踏みしめて追つかけ行く一筋道。通りかゝりし鋲乘物。向ふ見ずの新洞左衞門。供先おし割り駈行くをつき〴〵の侍立塞がり。詞不作法なる老耄。此乘物に召したるは忝くも禁中より。繁氏卿へ御入りある千鳥の前。片寄れ。フシ下れと罵つたり。地色新洞左衞門心附き是こそ監物めに。ほ手合させる質物と。乘物の棒しつかと捉へ。詞ハレよい所へ千鳥の前。乘物を踏碎き駈通るは易けれども。こつちに少し入用な。元の所へ舁き戻せ。宰領は此親爺と力に任せこりや〳〵〳〵。エイ〳〵〳〵と突戻せば。地色眞青に腰元ども足もよろ〳〵六尺も。降つて湧いたる災難もすべきやうなく理不盡に。フシ深山をさして押しのぼす。地色暫らくあつて山の頂。義弘が籠りたる洞の邊をうそ〳〵と。尋ね廻りし若侍頰冠にて顏隱し。空乘物をこなたに吊らせ巖の前に禮儀正しく。詞イカニ我が君義弘卿。今日禁庭の風聞。當山に於て隱住の族。急ぎ誅せよとの勅諚にて。則ち討手向ふの評定。此儀密かに達せよと。主人新洞左衞門が注進によつて。則ち家來岩淵平馬御迎ひに參上と。フシ似つこらしげに呼ばはれば。地色洞の扉を押開き。義弘は寛々とさあらぬ體にて歩出で。詞なに新洞が家來迎ひに來りしとな。大義を起す某。地小事の害を待たんより一先づ此場を遁れんと。乘物引寄せ飛移れば。仕濟ましたりと銕の大網。フシ双方より打着すれば。地監物太郎駈來り大聲上げ。詞ヤア〳〵大內。武士の山籠り不審を晴らせの勅命にて。加藤左衞門繁氏が家來監物太郎向うたり。地言譯あらば天奏にて申開かれよといふ聲を。聞くよりも大內之助五體を搖る唸り聲。詞ヤアヤア黑塚は居り合はぬか。藏人は出合はぬかと。地乘物兩手にめり〳〵ぐわたぐわた。一人前の大地震うめく谺に鬼藏人。尻引つからげ飛來り。有無をいはずに無二無三斬つてかゝれば大佛新藏。丁ど受けてフシ受流し。地色眞向微塵と斬りかくれば。コハ叶はじと鬼藏人　フシはふはふ逃げて失せにけり。地色かゝる折しも岩蔭より。新洞左衞門秀貫が追立て來る鋲乘物。詞コリヤ〳〵監物。推量が其乘物某が主君大內殿よな。さこそと知つてこつちもぬからぬ。此奪取りし乘物は汝が主人繁氏へ。禁中より下されし千鳥の前。奪取つたは汝へ面當。主君大內を戻せばよし。さもなくば恨みの刄此乘物へ

突通すいかに〱と聲かけたり。地南無三寶と監物太郎。詞コリヤ新洞。勅命下りし千鳥の前殺さば汝朝敵同然。ヤア主を擒になすからは破れかぶれ。地サア返答はと双の影ヤレ待てせくな〱。詞左程忠義を立てる根性。無下にするも本意ならず。殊に主君の寵愛殺さるゝも殘念。地理を非に曲げて乘物ぐるめ打換へて得させんさりながら。詞勅命請けて生捕つたる曲者。私に助けては朝家の聞えも恐れあり。此儀にあぐむと言はせも立てず。ヤレそれは一途。高雄山の異行人おつ拂へとは最初の勅。生捕れとは異議に及ぶ時の事と。地いふに頷きそれよそれよ。詞いざ乘物を表立ち渡してくれう安堵せよと。地家來に言付け舁上げさせ。詞こりや〱新洞確に聞け。洛中洛外。追放の行人網きせて渡すぞと。地いふに喜び尤も〱また。幾千代の友白髮祝ふ嫁御の色直し。雲井の薫。蘭麝の乘物。双方一度に取換し。損徳なしの山道を分けて信僕。秀貫が肩も揃うてエイサッサ。誘ふ嵐の入相は。かねて思ひの羽を伸し。フシ濡るゝ鴛鴦。妹脊鳥これは遁れぬ網鳥や。網代のうきに大内之助。伴ひ歸る忠臣義士。例は少き君が代にあぐる。譽は高雄山。勇み。勇むる夕間暮別れ別れになりにけり。

第二

唄カヽリ九折坂には繼傳馬。川瀬は船の。自由する八幡山崎二山のオクリ間を。棹さす船渡し。黄昏よりも火を點し。夜もすがら渡す故。フシ狐川とはいふやらん。地色筑前の國の城主加藤左衛門繁氏卿。勤番の暇詣八幡をかけて山崎や。渡場近くなりければ暫く此方に立休らひ。詞ヤ家來ども。都は洛中洛外とも。何れをいづれと言はれぬ風景。地わけて男山の昔を尋ぬるに。豐前の國宇佐の郡より勸請ありし正八幡宮。御鎭座もことわり。紀州伽羅山ともいつつべき御山。入日に輝く風景。いやはやどうも〱。斯樣に方々の眺めに心浮れ思はずも日が闌け。詞はや暮に及ぶ提灯の用意はよいか。地色見れば渡し船も向ふへ漕行き戻るを待つも退屈。堤傳ひに行くべきぞ。フシ案内せよとありければ。地色御供の若黨横口戸平。家老顏する緩怠者つつと出でて。詞ハレヤレ殿には御存知ないか。此道は登船の引場。道のだくぼく中々歩まるゝ所ならず。旦那は乘物にもお召しなされうが。家來は何になるもの。地渡しをお待ちなされよと。出過ぎた慮外も仁者の優美。詞いか樣三里廻つて本海道といへば。惡所を行くは不行作。地所の名さへ狐川ばかされてはなるまいと。御戯れも時の

輿。挟箱に腰打掛け フシ暫し。休らひ給ひける。日暮を急ぐ旅人の。五人七人一連れに乗り後れじと岸蔭に。立集れば向ふより。漕來る船も人の鮨着くと。乗人は乗ろとする。上ろとすると兩方が。揉合ふ中に浪人と思しき武士が上りがけ。又こちらより乗る人も同じ風なる侍が。せり合ふ中を揩合うて何とかしけん互の大小。もぢり合ひしを急ぎ業ほどく拍子に一方の。脇差ぽつきと。折れにける。地色はつとばかりに折られし侍。面目なさに笠傾け。佇む内に相人の浪人。行過ぐるを堪へ兼ね。詞侍暫しと呼びかける。地急ぐ身なれど是非なくも立ちとゞまりし互の氣相。スハ事こそと船は逃げ。繁氏卿も乗後れさながら逃げても退かれねば。詮方煙草くゆらして フシ打眺めてぞおはします。地色件の侍折れたる脇差拾ひ持ち。相手に向つて詞も荒さず。詞誠に



恥を申さねば理が聞えず。拙者めは遠州者。永々の浪人故尾羽打枯し。餓死せんよりはと存じ。武士のあるまじき一腰を賣代なし。奉公稼ぎに西國へ罷下る。時の過ちとは申しながら、此方と揩合ひに此如く差添をこぢ折りあれに歴々も見てござれば。面目のすゝぎ様なく難儀に及ぶ。地色何とぞ了簡の付くべき儀ならば了

箇付けてお通り下され。詞それとも。御思案に及はずば地御不肖ながら相手になり。討果して下されうやフシお返事。次第と相述ぶる。地色相手の侍ちつとも臆せず御尤も至極〳〵。詞手前麁相者故思はずも不調法。ガ討果す儀をお詫びは申さぬ。しかし差添が竹光故。面目ないとは御胸中が小さい〳〵。ア、これ〳〵差添でも武士の魂 竹光でも苦しうないとはな。ホ、一筋なお心故。是しきを恥辱と思召す。地イデ某が大恥かいてお目にかけんと。刀抜出し両手に握り。遠慮會釋も鞘口に。ぽつきと折つて目先へつき付け。詞これ御覧候へ手前も此通り。拙者めは播州浪人。都方へ奉公稼ぎの路銀なにかに詰りまだ其許は差添拙者は刀。地色恥辱は倍増す武士の魂。折つて見せたは外聞を共に現はすお腹癒せ。詞それとも打果す儀に違背は致さぬ。お相手にならうか。と申して好みも致さず。又逃げも難なされたの。地色よしなき儀を申しかけ仕らぬ。地色いか様とも御勝手次第。サアお刀を折らし。お腰があいて氣の毒。詞お返事はと膝立直せば。ヤレおせきなさイヤ拙者めが麁相で其許のお腰が。ハテれな言分ない。詞ハレ其許にもいかい艱それは此方も麁相。是は〳〵。夜中故し



かとお顔も見えず。地御縁あらば重ねてお近附きに罷りならう。詞左様致さう。ハレヤレお暇を取りましたと。地互の禮儀フシ砂打拂ひ。立別るゝを横口戸平。大口あいて高笑ひ。詞ヤレ〳〵。いかに浪人すればとて。折れる物を腰に挟み。奉公稼ぎとは野太い和郎たち。地色イデ武士の見せしめに面見ておこと立上るを。繁氏はつたと睨付け給ひ。御帯刀に手をかけて怒りを含む御顔ばせ。惡者づくりも主の威にフシ恐れてかしこに。うづくまる。地色行過ぎたる二人の侍立ち止まつて一思案。心ならずも双方が引返して暫くは。互に詞もなかりしが。脇差折られし侍小腰をかゞめ。詞誠に其許には刀を折り。我が心を宥め下されたれども。今お聞きの通りあれなる御家來。何かと惡口せられ。何とも此場が濟み難し。地色御思案極め下されと横口戸平を尻目にかけ怒りを含む物腰に。詞いか様。あの通りに沙汰あつては。お互に身上仕官の妨げ。地色一旦濟んだる事なるによしなき匹夫の口先故。討果す事近頃殘念。詞と言うてあれしきを相手にも大人氣なし。また其主人へ兎や角いはゞ浪人の糧に盡き。物取りなどとさみせられん。エヽ是非もなき次第。地色此上は潔う刺違へ。最期を共に致すまいか。詞成程拙者もその覺悟。ハテ命冥加な下郎めと。地色繰返し〳〵殘り多げに戸平を睨付け。詞イザ此所で。地尤もと双方最期の身拵へ。繁氏外の家來を招き何か囁き給ふにぞ。相心得て乘物より。御差替の大小をフシやがて取出し差上ぐる。地色其間に兩人座を占めて。既にかうよと見えければ。ヤレ暫らくと立寄り給ひ。詞最前より御兩所の心底尤もさこそあるべき儀。併し。大功は細瑾を顧みずと申す。僅かの恥に命を捨て。いづくの誰と知らざれば犬死も同然。またお腰のあいたるは。地色差錆びたれども某が差替にて塞ぎたし。異議なく貰ひ給はらば喜悦ならんと一腰宛。差出し給へば兩人とも。はつとばかりに平伏し。有難き御裁配。違背申すは憚りながら。詞いづくいかなる御方とも存ぜず。まして御恩受ける筋なし。地此儀は御免と辭退の詞。ホヽ一理あり至極せり。詞某儀は。筑前の國加藤左衞門繁氏と申す者。即ち當所は。禁庭より馬の飼領に下し置かれ拙者が領分。其場にて兩人とも横死あつては跡の難儀其難儀を遁れん爲。進上申す此兩腰快く受け給はゞ。いかばかり大慶と。地退引ならぬ仁者の詞。ハヽハヽ。はつと押戴き〳〵。冥加に餘る御情いつの世にかは忘るべき。元我々は何某と。いはんとするをアヽこれ〳〵。詞お名承つては。恩にかけると申すもの

志が無足致す。顔も知らず名も知らず。重ねてお目にかゝつてもお近附でござらぬぞ。急ぎの道お出であれ。お立ちあれと。地慈悲に慈悲ます御詞。兩人餘りの有難さに返す詞もなき中に。猶も手をつき頭を下げ。詞斯くまで深き御情申すは恐れ多けれども。とても事に此場の仕儀。御家來も沙汰なき様地仰せ付けられ下されと。願へば纂氏返答なく。最前笑ひし若黨の横口戸平を呼出し詞汝に別して用事あり。是へ來れと仰せに任せ。地色何心なく來る所を飛びかゝつて首打落し。詞手前の政道は斯くの通り外に他言は致すまい。地お別れ申すと細道を。わけて情の御裁き。有難しとも兩人は御後影。伏拜み。伏拜み。爰は所も男山フシ正八。幡の化身かと。思ふ迷ひも狐川。渡しを急ぐ旅人と。陸を早める浪人の。心は一つ。行く道は。二つに隔つ。淀堤左右へ。こそは。三重へ別れ行く。地色梅を諸木の兄とせばフシ櫻は花の。振袖や。姉が小路に美を盡くし華麗を飾る殿造り。加藤左衛門纂氏の館には。庭を野山と櫻狩上下。フシざゝめき賑へり。地色奥方近き坪の内下部の出入叶はねば。腰元衆が掃除役。中にも小りうが竹箒塵取りさらへと搔きまぜて。問はず語りに何と皆の衆。詞此廣庭へ出臍の様にあの社は何といふ神様ぞ。あた邪魔な掃除がならぬ。箒ついでに掃出そぢやあるまいか。コレあの人とした事が。あれはお國から勸請なされた殿様の氏神様。麁末になどしやつたら。逆罸が當ろぞやム、お國から取寄せるのをば勸請といふかや。そんなら今度お國から。勸請なされた御臺様。千鳥様と殿様のしつぽりを御覽じたら。ふんすんでたまるまいと地案じたはあての槌。お妾女郎と奥様の中のよいのはどうした事。あんまりで拍子が無い。序に悋氣もお國から。勸請したらよからうと。フシ苦もしどもなき高咄。地色折から塀の外面には。萬よしなを取交ぜて。賣る商人の聲高くほの聞ゆれば腰元ども。詞そりやこそいつもの百物賣。地小面の憎い商人め裏門から呼込んで。嬲つて遊ぼぢやあるまいか。こりやよからうと騷ぎ立ち何がな見たがる聞きたがる。浮氣盛りの女の童門の戸明けて呼込めば。詞ハイ粉類たら何なりと。蕃椒でも胡椒でも。イヤそんなもな入りませぬ。いつもの様に賣立てゝ聞かさつしやれ。それが厭なら何にも買はぬ。地色早う〳〵と口々に。せがみ立てられまつかせと。頰杖ついて聲張上げ。三下り唄のこ〳〵や豆の粉や。まめな手くせに尻こぶた。ふつつりひゝりと山椒の粉。奴様には蕃椒。坊主の好きな胡椒の粉。若い嫁御のはなはじく。姑御には

辛子の粉。おてきに盃さしもぐさ。合身柱。直違。すゑて心もちや。吉野葛ナホスフシ召しませいとぞ賣りにける。地色腰元どもは目を引き袖引き。詞マア當分何にも入らぬ。大儀によう喋りやつた。地のこ〳〵去にやと打笑ひフシ一度に奥へ走り入る。地商人は荷を下し。詞エ、今日も亦取りくさつた。テモなめ過ぎた女郎さいどもと。地呟きうそ〳〵差覗き。うろつく内に監物太郎。ひよつと來かゝり小蔭にて。窺ひ居るとも知らぬが天命。荷箱の内より大小取出し。身拵へしてのつさ〳〵。忍び入るを曲者待てと呼びかけられ。南無三寶と振返る。隙をあらせず庭に飛び下り摑んで大地へぎやつとのめらせ足下に踏まへ。詞ヤアラ心得ぬ賣人め。荷箱の内より大小取出し。奥を目がける氣相いか樣仔細ぞあらん。眞直に白狀せよ。骨を斷つても言はせにや置かぬと。地挫付くれば吠面ながら。詞ヤア下郎とは舌長し。汝等が崇まへかしづく。千鳥の前が兄黒塚鬼藏人。繁氏が爲には小舅。主同然の某を。土足にかける罰當りめと。地いふに驚く色目を隱し。詞シテ其兄が何故に。斬込んで誰に敵對。目指す相手の名は何と。ヲ、その目當は加藤左衞門。繁氏が首取つて。地知行にすると刎返すを。起しも立てず扨こそと。刀の提緒手ばしかく後手に括り上げ。定めて一味の族もあるべし。密に詮議と引立つれば。奥より來る女中の足音。見付けられては詮議の妨げ。如何はせんと取つ措いつ思案の扉開いて幸ひ暫しの獄屋。神は見通し許させ給へと社の內へ。無體に押込み鰕錠しつかとおろし置きオクリさあらぬ體にて入りにけり。フシ妹脊の中に。固りし石動丸の御母君。長地牧の方とは申せども子持ちと見えぬ御形。花見座敷へ出で給へば。跡に續いて千鳥の前。大内山の木隱れより移し植ゑたる花なれど。さすが妾と本妻の。フシ禮儀は戀の品定め。詞ナウ千鳥樣。連合ひ左衞門繁氏樣。七年あまり禁裡の勤番首尾よう勤めておしまひなれば。是から御國で御休息。永々の在京に。夜のお殿の伽もなく。お淋しからんと案ぜしに。地色自らになり代り殿の心を慰むる。そもじ樣があるとの噂。國許で聞く其嬉しさ。とんと心が落着いてゆる〳〵上りし今度のお迎ひ。けふは歸國のお願ひに。禁裡樣へお上りなれば。お暇が出るや否や。詞こなた樣を國へ伴ひ。たアんとお禮を申さにやならぬと。地色奥底もなき御挨拶詞是はまあ有難いお詞。今更申せば何とやら。言譯がましく惡けれども。地色數ならぬ身の殿樣に添伏し。御臺樣のお目にかゝらばお叱りもあらんかと。思ひの外な御憐

み。さう結構におつしやつてはお返事もなりにくし。詞千鳥よどうせい斯うせいと腰元衆同然に。地御意なされて下さりませ。詞ハアテわつけもない。大事の殿御を半分づつ。いとしぼがつて貰ふもの。如才にしてよいものか。其代りに此上外で殿様の。惡性があるならば。二人して言はうぞえ。そりやお氣遣ひ遊ばすな。お前にお世話はかけませぬ。地御名代と二人前私が番を致しませう。ヲ、それ〳〵と領き合ふ フシ仲よき魚と水入らず。地色腰元どもは手をさをにお氣慰みと持運ぶ。雙六盤や歌がるた野風爐提重茶辨當。取散せしはお座敷を野山に移す花見酒。フシ數々めぐる。盃に御臺所興じ給ひ。詞おつ付け殿様お歸りあらん。お目にかけるも二人が御馳走。アノ櫻を題にして腰折れなりと一首宛。地色短册をつけまいかこりやようお氣が付きました及ばずながら私もと。雙六盤を眞中へ。脇息に押直させ二人が肘をかけまくも。かしこき國の和歌の道 フシ案じ入つたる御酒機嫌。地色心隔てぬ中々は。何に遠慮もなぎさ漕ぐ海士の小舟や。とろ〳〵目。すや〳〵寢入り給ひければ。腰元どもは囁き合ひ仲のよい同士打解けて。詞テモ快う御寢なつた。お目のあくまでこちらも暢氣と。地座敷の障子そつとさし。フシ皆皆一間に入りにける。地色程なく左衞門繁氏卿歸館を告げる奧使。跡よりしづ〳〵入り給へば。監物太郎出で迎ひ是はしたり。詞殿様のお歸りを。奧方には御存じないかと。地一間にかゝればさなせそさなせそ。詞餘念なく寢入りし體。互に妬む色もなく。睦まじきこそ滿足なれと。地悦び給へば頭を下げ。詞何樣御意の如く嫉妬のあるは婦人の常。その氣遣ひなき御二方。斯くまで御仲よろしき事我々までの大慶と。地申し上ぐれば繁氏卿。傍なる盃取上げ給ひ。詞禁裡表の首尾もよく。歸國の暇を賜りし悦び。地色我も彼等が花見の相伴二人が風情を肴にて。花の本の一獻。酌せよと宣へば。ハ、ツト銚子を押取り。注ぎかけたりし不老不死。藥の水の滴りと一つ受けさせ給ふ折ふし。雲心なく吹く風の盛りを散らす一嵐。受持ち給ふ フシ盃へ蕾一房落ちにける。地色繁氏つく〴〵うち詠め。詞散ればこそ。いとゞ櫻は目出たけれとは詠みたれども。雨に萎み風にもまれ。盛りの散るは科ならず。いまだ時にも逢はぬ此蕾。盃の中へ散つたる事。地色是こそは人界の儚なき教への老少不定。老いたるが先立つとも。フシ若きが跡に殘るとも。地色定め難きは人の命。忘るまじきは後生の道と。文武に猛き繁氏の無常を觀ずる悟道の一言打ちしをれたる。御有樣。監物太

郎も尤もと共に悟りは開けども。わざと詞に勵みを付け。詞コハいひ甲斐なき御迷ひ。釋迦といふ賣僧頭。さま〴〵の僞りを書散らし。一文不知の姥嬶をたらさん爲の一切經。譬へて申さば盜賊を捕へ。殺生なりとて助け歸さば國家の憂となる道理。地アタ忌はしき後生の道と。心に思はぬ雜言に佛法誹るも諫めの忠言。心を感じて打頷き。誠に汝がいふ通り弓馬の家に生れながら。假にも無常に引かされては武の道は立ち難し。詞この後ふつつと思ふまじさりながら。よしなき事に心も滅入り何とやら物淋しゝ。地次の間にて檢校に琴を彈かせよ。御臺や千鳥に目を覺させ我は是にて慰まん。フシ早とく〳〵と宣へば。地色只當然の御戲れ強ひて諫めに及ばずと。ナクリ御前を。ヘ立つてフシ入りにけり。詞ホヽいつになき我佛法歸依。武邊に弛もつかんかと案ずるは尤も〳〵。地色イデわつさりと酒宴を催し結ぼれし氣を晴らさんと。立寄り給ふ障子の内。コハリ不思議や俄かに物騒がしく。あたりに響き。庭の木草もさわ〳〵と。ナホスフシ風も身に沁むばかりなり。地コハ心得ずと一間の障子。さつと開いて見給へば。餘念なく臥し給ふ二人の黒髮。眞逆樣に蛇の如く。鎌首ぼつ立て喰



合ふ有様。さしもの棠氏怖氣立ち　フシ呆れて。詞もなかりしが。地色ハツア恐るべし〱。詞外面似菩薩内心如夜叉と說かれたる。佛の戒め目のあたり。地顏に白粉丹花の唇。粧ひ飾りて菩薩の如く。互に妬む顏もせず。打見には仲よき體。心の底に邪鬼執念。絕えせぬ證據をおのれと顯はし。かく淺ましき體たらく。忌はしや穢らはしや。詞妻子は地獄の家土產と。說き示されしに。フシ疑ひなし。地色花の蕾の散つたるに思ひ較べて觀ずれば。是ぞよき菩提の種。家國榮華も望みなし。迷ふが故に三界の。火宅に　フシ心を苦しめり。地色悟れば十方空ならずやと。今迄心の滅入し上。いや增さりたる發起心オクリ烏帽子へ狩衣脫ぎ捨て給ひ。差添拔いて髻を。ふつつと切つたる輪廻の絆。硯引寄せ書置を。スヱテ認め給ふ其内に。奥座敷には檢校が。琴の音色もしをらしく。詞歌の唱歌は聞えねど。彈く爪音は薄雪か。薄き契りも過去の因緣。地必ず心殘すなとこま〲筆に書盡くし。御髻に烏帽子裝束。書置添へて彼處に置き。裏門より悄々と立出では出でながら。さすが恩愛捨て難く。振返つて涙にくれ。二人が夢覺め斯くと知らば。さぞ歎くらん不便やと。見やり給へば蛇形の



黒髪。コハリ猜も盛んに挑合ふ執着心にナホス愛想もつき。身顫ひ立て〻足早に。フシ行方知れずになり給ふ。地色斯くとも知らず監物太郎。立出づれば一間の騒動。見れば件の怪しき姿。驚きながら走り寄り。用捨もなく喰合ふ黒髪。差添抜いて斬放せば。二人もびつくり起上り。顔を見合はせ一時にフシ吐息を。ほつとつき給ふ。地色監物太郎あたりを見廻し。我が君はましまさず。御烏帽子狩衣の。脱捨てあるこそ心得ねと。立寄り見れば御髻に。一通添へて残されしは。はや御遁世か情なやと。驚き騒ぐに二人も立寄り。詞ヤア殿様は遁世とや。地何故の御出家ぞと。あまりの事に興さめて。泣くも泣かれずうろ／＼と。フシ共にうろたへおはします。地監物やう／＼心を鎮め。詞ヲヲ驚き給ふは道理。先程禁裡より御歸館の節。いつに勝れし御機嫌。あれなる櫻の本にて御酒宴の折から。御盃へ花の蕾散つたるとて。無明の悟りを開き給ひ。地色さも心細く御意なされしを。打消しては置いたれども。詞御兩人の髪逆立ち。蛇の如くになつて喰合ひしを。御覧あつての發心かと。地歎くに御臺千鳥の前。亂れし髪に心付き。現ともなく夢ともなく。咬つつ咬はれつ爭ひし。互ひの覺え一時にスヱテどうど。轉びて泣沈みフシ前後。不覺に見えけるが。地ア、恥かしきは人の心。此度都見物がてら御迎ひに上りしが。千鳥殿と殿様との睦まじさ。見るよりも妬ましく。胸もかき裂く腹立を。じつと堪へて上面には。美しうつき合へども。寝た間に本心顯はして。浅ましき有様を。お目にかけしか悲しやなせめては國に殘りたる。石動が大人しく生立つ迄。思ひとまりて給はれかし。呼び止めてくれぬかと歎き給へば。フシ千鳥も涙。地けはひ化粧紅鉄漿より。髪形ぞと艶付けて。かた笄よ吹上よと。結ひ揃へしは殿様に。見限られまい爲ばかり。其髪が蛇とならば。身體は鬼にもなりかねまい。見捨て給ふも道理ぞや。御出家も皆私が業。イヤ遁世をさせませし。科人は自らよ。イ、エ私が。ハテわしがと。涙みなぎる繰言に。思案半ばの監物も。フシ袴の襠に淵をなす。地御臺所は涙を押さへ。イヤ／＼泣いては濟まぬ事。まだ程遠くはござるまい。追つかけて止めんと。千鳥諸共立上るを。詞ヤレ待ち給へと押止め。とくより某左様は存ずれども。いか程お止め申すとも最早止まり給ふまじ。地色先づは殘し置かれたる御書置を見給へと。一通を差出せば。是非もなくなく取上げる。涙に聲も震はれてしどろもどろの讀みくせを。千鳥も共に差覗けば。文詞涙ながら書殘す一通。一つ。われ

弓箭の家に生れ。なに暗からぬ身なれども。家國を捨て妻子を捨て。世も捨人の沙門となるは。前世未生の佛縁ならん。思ひ測らず降つて湧いたる遁世を。胸狭き女心に。浅ましき姿を見せける故と。嘸かし歎きの餘り。共に姿も變へまく思ふらん。フシさにあらず。地色妻子珍寳不随者とあれば。死出の旅路は別れ別れ。伴へる人もなく。随ふ者もなく候。詞とは言ひながら。只忘れがたきは石動丸。やう〳〵二歳の時國に殘し。それより又七年餘り。顔も見ず候へば。さぞ成人も致し。大人しくもなりつらんと。思へばいとゞ懐かしく。忘るゝ事は是なく候。石動丸を傳立て。加藤の跡目を繼がせてたべ。父が此身になり候へば。若しや流浪も致さんかと。是のみいかう案じ候。必ず〳〵歎きにくれ。地悴が事を忘れぬやう。返す〴〵も頼入り候。千鳥へも一通を。殘さんと思ひしかど。詞心せかれて候まゝ。此文を一所に詠め。牧の方に力を付けてくれよかし。言ひたき事は山々なれども。涙に筆も廻りかねまゐらせ候。地読みも終らず三人は。スヱテわつとばかりに。泣沈む。地色監物太郎涙をおさへ。殿の事は歎きても詮なき事。一大事はお家の跡目。若君の御身の上。詞殊更隣國には。大内之助義弘といふ佞人あれば。君御遁世なされし事を押包み。幸ひ歸國を許されし砌。いつもの如く繁氏卿御歸國と世上へ見せかけ。御臺様に我君の装束を召させ。一刻も早く國許へ御供して下るべし。地跡目の願ひはお國から。急いで御用意遊ばせと。せき立つ詞に歎きを止め。兎角よきにと烏帽子狩衣。取上げて立ち給へば。千鳥の前袖を扣へ。詞私もお國迄お供は致す身なれども。お前は石動丸様といふ若君あれば。是に越したる形見はなし。地色せめて朝夕御身に添ひし。此烏帽子狩衣を。妾に下し給はれと。取付くを監物太郎。詞御尤もには存ずれども。たつた今お聞きの通り。御跡目相續の力と致す烏帽子狩衣。此方には進ぜにくし。ハテ何をがな。ヲそれよ〳〵。地究竟一の形見ありと。社の鍵を取出し。詞是はあれなる祠の鍵。社の内には其許の。大切になさる形見あり。扉を開いて取り給へ。併し委をよく得心あれ其形見の成行にて。地お國へお供は叶はずと。鍵投出し謎をかけ。御臺所を誘ひてオクリ奥深へくこそ入りにけれ。地色千鳥は一句の判じ物御形見の成行にて。お國へ行く事ならぬとは。どうやら物のある言ひ方。譯こそあらんと庭に下り。社の傍へ立寄つて何かは知らず開いて見んと。錠前あくれば待兼ねしと。飛んで出でたる虫藏人。ヤレ怖や

と逃退きしが。顔を詠めてヤア兄様か何故爰に。縛られたはどうした科と。驚きながら親は泣寄り。縛め解けば身構へし物をもいはず駈出すを。コレ待つた藏人殿。詞監物太郎が一言に。思ひ合はして思案をすれば。どうでも様子があるわいの。ヲヽいうて聞かさう某は。大内之助義弘殿に頼まれ。加藤左衛門繁氏が首を取り。出世の種にするわやい。地こゝ放せと振切るを。駈塞がつて待つた待つた。詞それで何にも様子が知れた。それなら矢張り縛つて置こもの。地こなたの様な惡人と。一所でないといふ證據。御臺様や監物殿への言譯と。走寄つて藏人が差添抜取り。手早く眞向斬下ぐれば。南無三寶と抜合せ。爰を最後と戰ふ太刀音。地色監物太郎は小蔭に隱れ。それと見ながら詞もかけず。庭には兄妹修羅の巷火花を散らして。三重へ斬結ぶ。地鬼藏人は油斷にて。初太刀に受けし眉間の深疵。眼も眩み滅多斬り。こなたも手弱き女の手業。數ケ所の疵によろぼひながら。難なくおつ伏せフシ乘つかゝり。地色念力通す止めの刀。監物太郎庭に飛びおり。詞ヲヲ健氣なり千鳥様。御心の操顯はれ。疑ひは晴れたれども。地此深手ではもう叶はぬ。心はいかにと勞はれば。苦しげに起直り。詞自らとても殿様の。お情受けし者なるに。様子によつてお國へは。叶はぬとありし時。酷い仕方と恨みしが。地此しだらでは疑ひの。かゝるは道理わしが因果と。諦めて居ますれども。兄妹の惡心故。おのづと殿様に御縁が切れる。是ばかりが黄泉の障りと。血汐に染みし五體を投げスヱテ泣く聲。奥へ聞えてやフシ一間の障子。押開き。御臺は烏帽子狩衣を召され。悠々と立出で給ひ。詞我こそ假の加藤繁氏。千鳥の前が誠を感じ。二世も三世も變らぬ契りと。地の給へば手を合はせ。嬉しき今のお詞は。我が君のお詞より。忝さは百倍と。につと笑ふが置土産。フシ此世の縁は切れにけり。地色いとしやなうと御臺の歎き。泣いて歸らぬ愛別離苦オクリいさゝせ。給へと引立てゝ。頃は薄暮よき時分とて。せけばせかるゝ牧の方。力なく〳〵フシ立ち給ふ形見は跡に心を殘す。着せし人は代るとも變らぬ烏帽子狩衣。假の浮世に迷はじと。悟り〳〵て出でたる主は。直ぐに金色菩薩の位。歎き給ふな歎かじと。悟れば果敢なき花の宴散。りにし姿を殘し置き本國。にこそ立歸る

第三

地富んで奢らず貧しうして貪らぬは未可なり。富貴にして禮を知り貧しうして樂しめとは。弟子に示せし孔子の詞。大内

之助義弘威勢九州に蔓り。自ら武運を朝日にたくらべ横雲將軍と僭號し。人も許さぬ高胡床浮べる雲の上見ぬ鷲。明日は我が身も知らぬ日のフシ筑紫の御殿と時めきける。地色伺候の諸武士も自から伸上つたる大名氣質。中にも近習の關口隼人御前に進出で。詞豫て仰せ渡されし通り。近國の大名より家々に傳はりし重寶。今日獻上致す筈。則ち寶見分の役は多々羅新洞左衞門と承る。それにつき彼が娘。お國に稀なる美人なれども。いかなる事か終に男の肌觸れず。生れのまゝなる生娘と諸家中の風聞故。御手廻りの召使にと存じ。上意と申してお次まで。地呼寄せ置き候らひしが御慰みに御覽もやと。何がな御意に入らざる追從。フシお髭の塵を取りかける。地色義弘寛々と打頷き。詞勅諚と僞り諸國の寶を集むるは某が謀叛一味の證。連判狀も古めかしく。氣をかへて人質の代りにする。家々の寶。まだ請取るには時刻も早し。其間にかの娘ちよと面を見んそれ〳〵と。地仰せに斯くといひ次げばオクリやがてヘ御前に立出づる。地色世に拗ねてフシ男選みに。年長けし。地色新洞左衞門が娘ゆふしでは。長地つひに殿御の肌知らぬおぼこと見えぬ洒落姿。髮の結目に挿したるは。梅花にあらぬフシ白羽の鏑矢。地色笄ならで簪か何の御用でお召しぞと。案じる内も面はゆく。お書院近くフシ坐しにけり。地色横雲將軍遙に見やりゆふしでとはお事よな。詞ハレ見事。よい器量〳〵。汝が親の新洞左衞門忠と義とに固まりし心より。頑固に育てられ。麻につるゝ蓬とてそち迄が身持ちも堅く。一度も男に肌觸れぬと聞き及ぶ。器量といひ風俗まであつたらしき日陰の花。地色殊更男選みとあれば疑ひもなき手入らずの大無垢。水揚はこの義弘今宵から抱いて寢ると。ほやりと笑ふしほの目は。フシ仁王の戀する如くなり。地色ハツト思へどゆふしではわざと額を疊に付け。詞私風情の賤しき女お寢間のお伽致せよとは有難い事なれども。御臺樣の思召し一家中へ聞えても女旱は行くまいし。家來の娘をわつけもないと。我が君を笑はせますも如何此儀は御免なされませ。地ほんに誓文殿樣を微塵も嫌ひは致しませぬ。慮外も厭はずつべこべとお詞背くも君が爲と。辭儀する詞の扣へ綱。フシ切れもやせんと案じ居る。詞ホヽウ此義弘が言出すこと二言と詞を返す者恐らくは覺えず。女に稀なる大膽者出來したりさりながら。一天下の主となる某十二人迄は女房持つても苦しからず。否でも應でも妾にすると。地深く魅入れし鰐の口。遁れるだけと手をつかへ。詞冥加に餘る御意なれども。私はちと譯あつて

一生男に肌觸れて。身を穢す事ならぬといふ。申譯は頭にさしたる白羽の鏑矢。細かな樣子は父上に。地お尋ねあれば知る事と。いふに差出る關口隼人。詞ハアゆふしで殿惡い合點。殿樣に惚れられるは此方の爲に福德の三年目忝いとお請け申すが上分別。親御も浮み上る事。其頭に挿いてゐる白羽の矢が邪魔になり。地仰向に寢る勝手が惡くばデヱ拔いて進ぜんと。立寄るをむつとせき上げこりや何しやると突飛ばし。詞親新洞左衛門が御前に居ねば高なしの我儘。男持たぬはどういふ譯やら仔細も知らず。親迄が浮み上るイヤ果報ぢやの福德のと慾に穢れた土根性。そんなむさい女子ぢやと思やつたら當が違ふア、慮外ながら。サア手は愚そなたの伸びた鼻毛の先でも障へて見や。地赦しはせぬと膝立直し睨み詰めたる理窟詰め。言込められてしがなの隼人。手持フシ無沙汰に尻込みす。地義弘居丈高になり小ざかしき女めと。肩先摑んで引摺り寄せ。詞女郎の餓鬼は十二三から男を見ればびろ〳〵と前後を見る當代。地察する所內證に隱し男を拵へ置き。其男への心中立。詞外の矢先は通さぬといふ心で。起請の代りに此鏑矢挿して居るに違ひはせまいと。地矢を搔拋つて引起し。サア不義者めが名をぬかせと。責問はれてもゆふしではもとより覺え涙聲。詞コハ無體なる御尋ね私も木竹の身ではなし。地惚れてくれる殿御があれば欲しうならで何とせう。持つに持たれぬ譯あつて脊丈伸びた此年まで。人の數にも入らぬ身を不便なともおつしやれず。酷いお主の心やなさら〳〵不義の男はなし。疑ひ晴れて給はれと。身を悔みたる恨み泣きフシ涙。片手に詫びければ。詞ヤアまだ男めを庇ひをる。よし〳〵言はせ樣ありと。地口には言へどさすがは戀。目顏で嚇し立つたり居たり。身悶えすればお次より。ヤレ待ち給へと聲かけて。立出づるは新洞左衛門顰返りし天の邪鬼。隼人はお座に堪り兼ね。詞老人の御苦勞に惡い所へよう御出で。地それにゆるりとお遊びと言捨てこそ〳〵フシ逃げて入る。地娘を引退けどつかと坐し。詞不義の相手が聞きたくば某が申上げん。娘が隱し男は忝くも我朝の神の司。天照皇太神宮。何と肝が潰れますか。したが斯うばかりでは合點行くまい。コレ殿耳を浚へてよう聞かしやれ。此お家大內の御先祖伊勢兩宮を當國へ御勸請なされ。其社より一人づつお座子を取り給ふ。印には家の棟へ不思議に白羽の鏑矢立つ。其役を勤めた我が娘。一旦神に仕へし女一生男を持たすまいと。誓ひの爲に神明の鏑矢を頭にさゝせて不淨を拂はす。地それを無

體に拔取つて妾にするの足かけのと。罸をかぶる御合點か。詞其上これ迄頤のかいだるい程諫めても。聞入れのない謀叛の企。今となつて意見せぬは。所詮いうても得心は召さるまい。ハテ毒食はゞ皿ねぶれと諦めてする奉公。地ろくだまに望みも達せず榮耀らしい妾狂ひ。まだ早い。置き召されと。病犬の嚙み附く如く。只一口にわんとばかり。フシ膠もしやしやりもなかりけり。地色性急なる大内之助。堪へ兼ねてすつくと立ち。ゆふしでを宙に引提げ元の所へどうと投据ゑ。詞扨はいよ〳〵推量の通り。親め共に吞込んで内證に男があるな。我が心に從はぬ腹癒。眞二つにぶち放し。其男めに鼻明かせんと。地大太刀するりと拔き放せば。わる怯れもせず押直り。父まで深き御疑ひ。曇りなき身は大道が正直。お手にかゝるが申譯と合掌したる健氣さを。見やりもせぬ片意地親爺。サア今こそと義弘は。父が顏を差覗けばびつくともせぬいがみ面。サア〳〵〳〵と二度三度。嚇しの刄を振上げ〳〵。閃かしてもきよろりが味噌。詞テモ扨もしぶとい奴等。エヽ是非もなし是迄と。地既に危き太刀の下ナウ待つてたべ暫くと。大内の御臺走り出で。詞重々のお腹立ち御尤もとは言ひながら。地戀ばつかりは嵩押しにいふ程埒の明かぬもの。自らにお任せあらば何とぞ勸めて今日の内。お前の心に靡きやる樣私が世話を致しませうと。すかし宥める物腰に。フシ貞女のしるし顯はせり。地戀は曲者鬼にも涙。詞情强きどち女郎ぶち殺してしまはんとは思へども。なれば又拾ひ物。少しの間お身に預ける返事が遲いと赦さぬと。地詞の弛みに御臺は心得たつた今よいお返事を。お氣遣ひ遊ばすなとゆふしでを引立てゝ。尾を踏む心地虎の間へ。フシ伴ひ入らせ給ひけり。地色跡には主從物をもいはず。あなたは澁面こなたは工面。睨み合うて居る所へ。國々の諸侯より貢を持參と呼ばはる聲。俄かに繕ふ大將の衣紋美々しく座を占めて。待つ間程なく入り來る。靑貝の卓恭しく。目八分に差上げて二つ並べし珊瑚の枕。是は菊地の陶全姜が寢た間も放さぬ重寶なれども。勅諚とあれば力なく。持參致し候とフシ廣庇に押直す。地次は豐後の友方大學。水晶簾を臺に据ゑ。この簾は其昔。晉の國より渡りし寶。庭に掛くればコハリ風を生じ。自然と雨を降らしつゝ。暑氣の時分はナホス冷やりと西瓜もどき夕立もどきとフシ差上ぐる。フシさて其次は肥前の國。海月式部が重寶に。白龍石といふ硯。墨する度に硯より。おのれと水を湧き出す。不性者には第一の。寶なりとぞ言ひ上ぐる。その外松浦五島の

一族。筑紫表の國主城主へ皆家々に傳はりし。名物寶を臺に据ゑフシ廣緣。狹しと並ぶれば。地色見分の役人は新洞左衛門。腹は立てども其日の役目不承無性に見改め。いづれも寶に相違なし。詞誰かある此品々御藏の內へ納めよと。地呼ばはれば伺候の武士てんでに捧げ入る體に。先づは首尾よう納まりしと。諸國の城主も安堵の胸オクリ皆々へ旅宿にフシ立歸る。地色遙かにさがつて筑前の城主繁氏の執權。物に騷がぬ監物太郎寶も持たで悠々と。フシ白洲の庭に入り來るを。地義弘つく／＼打守り。詞九州の大名より殘らず寶を差上げしに。加藤の家より何として寶は送らぬ。宣旨を背くか但しは氣儘か。返答せいときめ付くれば。ちつとも動ぜず御尤もの御不審。勅諚とある上いかで違背の候べき。併し筑前は小國故差上ぐる寶はなしと。地言ひも切らせずさうは言はせぬ。詞大名の家に寶なくて家督の繼目は何を以て規模とする。イヤ我が國は仁義禮智。地五常を寶として國家を治むる。但し此お國には器財を以て寶とし。君子の敎へを寶とはなされぬかと。理窟を詰めて言込むれば。もとより不才の大內之助フシ返す詞もなき所を。地色堪へ兼ねて新洞左衛門目玉を剝出しコリヤ／＼監物。詞それは唐土臨潼の會に善を以て寶とすと。伍子胥がいひし口眞似食はぬ／＼。加藤の家には齊國より渡りたる。夜明珠といふ名玉ある筈。地いま玉女神と神に仰ぎ尊敬する事紛れなし。是非玉を渡さずば大軍を以て押寄せ。家國共に奪ひ取ると退引させぬ手詰めの難題。此場を遁れて分別と無事を繕ふ當座の請合ひ。詞玉女神を夜明珠と御存じなれば力なし。成程寶珠を渡し申さんさりながら。地年を數へて二十と限り。遂に男と肌觸れず。交合の道を知らぬ女あらば。玉を迎ひに越さるべし。詞若しも年に過不足あるか。一度でも男に肌觸れ。身の穢れたる女の手に携へ持てば。忽ち玉の光を失ひ石瓦の如くとなる。その割符の合ふ女があらば何時でも玉を渡すに相違はなし。地某は先づお暇と立歸るを待つた／＼。使の女これにありと。走出でたるゆふしでが。御前に向ひ頭を下げ。詞不義の男がある故御心に從はぬとのお腹立ち。地其お疑ひ晴らす爲遂にこのお使を私に。仰付けられ下されと妹脊の道知らず。身を穢さぬといふ申譯スヱテ思ひ入つてぞ願ひけり。地色監物太郎もぎよつとせしがコリヤ女。詞身の穢れぬが定ならばいかにも玉は渡さうが見事寶の檢分するかと。地何がないうて困らす思案。詞ヲヽ氣遣ひすな其檢分は此新洞左衛門。地娘に連立ち行くからは贋物

は掴まぬ〳〵。詞シタガヤいゆふしで。そちには惚れた人があるこちの身體は清浄でも餘所から穢れを添ゆるといふもの。ソレ。其和郎が思ひ切るとおいやらねば使には行かれまいと。地戀慕の絆を切らせん爲。大内が耳に打て響けを。聞き流して不興顔。返答もなく座を立つて。駈込む向ふへ御臺所立塞がつて申し殿様。詞女一人に繋がれて大切なる夜光の珠。此度請取り給はずば禁裡表の首尾も如何。地ゆふしでをさつぱりと思ひ切つたる證據を見せ。使を仰付けられよと。彼方此方でせこめられ。當惑したる大内之助何思ひけん フシ振返り。地色後にかけたる弓押取り件の鏑矢引番ひ。詞命に替へて某が思ひ込んだる戀なれども。大望成就の妨げなれば此戀ふつ〳〵思ひ切る。證據の鏑矢受取れと。地切つて放せば松の木に。フシはつしと立つたる有様を。地色ゆふしで悦び走寄り。矢を抜取つて押戴きこの。お使を仕果せなば。合枕一つで二十迄寢々した事を世上へ言譯け。君の心も晴々とくも。合らぬ女の鑑にせんと。合帯引締める親子の勇み。監物太郎を先に立て。白羽の鏑矢髻にさしかざしてこそ。三重へ定めなき。フシ世を憂き事に。見限りて。遁世ありし繁氏卿歸國と僞り石動を。跡目に立てゝ監物太郎國家を治むる智仁勇。三國名譽の夜光の珠。玉女神と勸請し秋の最中の祭日に。館賑ふばかりなり。地御臺牧の方石動君を伴ひ廣書院に出で給へば。執權監物が女房橋立神事の祝儀申し上げ。詞夫監物太郎大内義弘の招きによつて參られ。御寶の御神事に外れし段お赦しと。地斷り申せば御臺所。詞心よからぬ大内の呼寄せ。我が夫の行方は知れず。石動は幼少なり。何言ひ越さんも測られず。地色只なつかしきは繁氏卿と スヱテ喞ち給へば石動君。詞母様氣遣ひ遊ばすな。追付け父様の有所を尋ね。私が迎ひに參りますと。地大人しやかには。フシ涙もとまる折からに。地色國一番の濡男その名自然と女之助。兄監物が勘當請け詫びを頼みの奥書院。フシうぢ〳〵として入り來る。地色御臺は何のお心なく珍しや女之助。此程若も尋ねしが何故登城召されぬと。仰せにはつと頭を下げ。詞私儀不行跡ゆゑ兄監物太郎が勘當請け。それなる橋立殿を頼み樣々詫ぶれど聞入れなく。是非に及ばず今日は若君樣や御前様の。お詞を借る所存。地色恐れながら然るべう賴上げ奉ると。願ひを聞いて御驚き。テモ扨も。堅いそなたが何越度。軍法秘密の論議でもしやつた上の諍かと。尋ね給ふを傍に聞く。橋立は吹出し。詞御臺樣のあの人を堅いとはお目違ひ。其柔かさ自

墮落さ。軍法論議はさておき。女中論議で家中は大もめ。お上にも御存知の前の内儀お埒殿は。夫監物太郎都より貰ひ歸り。夫婦に致され退引ならぬ女房を。地子持ちになると乳臭いとて離別して。お物師のお縫殿とちん〱。それも續かず弓頭の娘おつるを娶り。持つと去なしてお腰元の長門殿。それから仲居お茶の間の。白髪交りも色めいて。そこでは悋氣こゝでは喧嘩。何から起れば女之助。わしが夫ぢや殿御ぢやと。言募つて大騒動。堅い夫が面汚しと勘當せしも無理ならずと。語れば御臺も興さめ顏。若君何の差別なく。詞女之助はいかい苦勞。それから其喧嘩の仕舞。地どうなつたぞと根問ひにほつと行詰り。詞其ソノ跡の儀は地面目もなき仕合せとフシ謝り。入りし風情なり。地色御臺もをかしく若氣の至りもあんまり興がる。以後を嗜む心なら



共に詫びして得さすべし。幸ひ今日は御玉の祭。玉女神の御前にて金打させん此方へと。立入り給へば有難しと。石動君を御供し。フシ奥をさしてぞ入りにける。

地色程なく歸る監物太郎。大内が難題胸に釘打つて變りし思案もなく。廣間へ通れば妻の橋立。義弘よりの呼寄せ。いかなる事ぞ心もとなし。及ばずながらお聞

かせと。尋ねればされぱの事。詞大内義弘は都の勅と僞り。近國他國の寶を集むる。これ正しく謀叛の下拵へと見抜きし故。我が國には寶なし。仁義禮智信の五字を以て寶とすと。伍子胥が辯を借つてまんまと言伏せしに。多々羅新洞左衛門といふ奴。夜光の珠の來由を知つて。汝が家に玉女神と崇むるは。齊國より渡りし夜明珠。寶なしとは言はせじと明白の一言。爭ふにも爭はれず。成程その寶あり。併し尋常の者携はる事叶はず。地二十と限つて交合せざる女あらば。受取りに越されよ。男女の別ち知つたる者が手に觸るれば。忽ち玉の光失ふと言傳へを難題に。當惑させんと思ひの外。詞かの新洞めが娘當年二十。まだ是まで不犯にて此役目を乞ひ受け。親子連れにて受取りに來る筈。代々加藤の家の重寶。渡さば家滅亡。賦といはゞ大軍を以て攻來



らん。地さすれば御臺若君のお命も危し。鬼やせん角やと胸はどうづき。思案があらば言うて見やれと。語るを聞いて女房はほつと溜息つきながら。只此上は贋物を急に拵へ渡さうより。外の事はといふを打消し。詞イヤ／＼其儀も思ひ付けども。うつかりと受取る新洞左衛門にあらす。地ハテどうがなと大髄の。骨も砕く

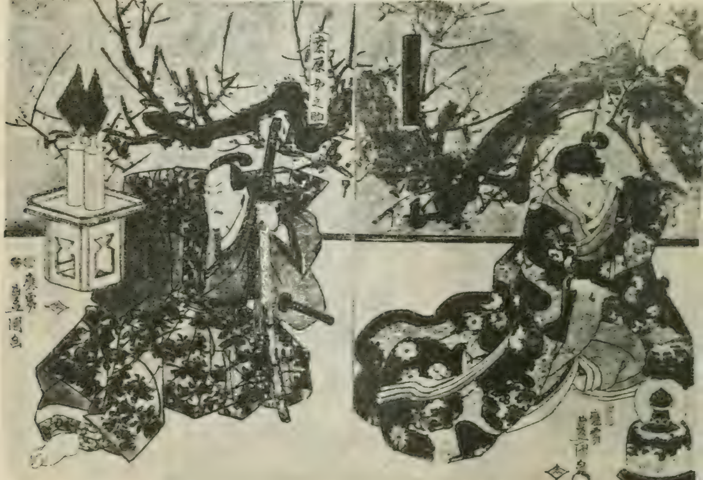
る一思案。及ばずながら橋立も智慧の袋の棚さがし。暗がり探す如くにて。フシ暫し途方にくれけるが。詞イヤ申し斯様な時は膝とも談合と申します。幸ひ弟御女之助様勘當の詫にお出で。地機嫌直され共々に。御相談はといふに暫らく工夫をめぐらし。詞ム何弟の放埒者。奥へ參つてゐるとな。ホヽウよき相談相手。思付きあり女ども。地汝も來れと立上がる。心知らねど橋立も夫の詞を力草。フシ伴ひ一間に入りにける。地色暫らくあつて大内よりお使者と呼ばはる聲につれ。月と雪との眞中に花と眺める後帶。本フシ男選みのゆふしでが。片笄の濡髪にさいた白羽の鏑矢は。伊達か潛上か風俗もしとやかに立休らひ。誰ぞ頼まんといひ入るる。かゝる相手に相應の。女房選みの女之助。いざお通りといふ内も。思ひ含ます目遣に可愛らしさが身にこたへ。互に顔を見交して。フシ上座へ通れば。地色橋立がやがて出迎ひ頭から。しつぽりむきの挨拶にて。詞是は〳〵女中の御苦勞にようこそお出で。自らは監物太郎が女房。橋立と申す者。また是なるは主の弟御。女之助と申して武道は勿論歌の道戀の道。地並ぶ方なき優男子則ち今日の御馳走役。御用あらばあの人へと。猫に鰹の引合せ。いかな釋迦でも精進を。フシ落しても見たき心なり。地色女同士こそ此方もにこやか。詞テモいかいお心遣ひ。私はゆふしでと申して。まだ人數にも入らぬ女。斯様な役に參る筈はなけれども。人好みあるお寶物。親新洞左衞門はお次に扣へ。マアそちが受取つて來いと不相應な役目を請け。案じ〳〵參りしなり。地事ならうお渡し下されと。詞の内より何がさて。詞お渡し申さいで何とせう。夫も只今罷歸り御藏の掃除。暫くお暇が入りませう。ヤ幸ひ今日は御玉の祭。神前へ供へしお御酒頂戴遊ばし。地不淨を清めお受取り。それ〳〵神酒といふに任せ。對の德利を三寶に。フシ下女が携へ差出す。地色女之助近く差寄り。詞敵を招いて毒酒を盛り。約を變ぜし例もあれば。地毒味致して進上と。御酒を兩方つぎ合はせ土器にたつぷと受け。つゝと乾してゆふしでに。頂戴あれとさしければ。是は御念の入りし事。緣につれたる神の酒。何お疑ひ申さんと一つ受けて呑む酒の。忽ち五臓に泌み渡り。フシ亂れかゝりし。顔の色行儀もくづれ土器を。女之助へ差戻す。サアしてやつたと橋立が。わざと咄も打解けて。詞近頃卒爾な事ながら。頭に挿されし白羽の矢は。地いかなる故ぞと尋ぬれば。是こそ私が殿御を持たぬ申譯。幼き時この白羽家の棟に立ちしより。詞神のお伽のお座子となりしは

幸ひ。よい男好いた殿御のある迄は。人目の關の此白羽。片時も放し侍らはず。あはれ此矢を貰ふ氣な。お人があらば遣りたしと。女之助が傍近く。にじり寄りたる亂れ咲き。花ならば折れ。折る人は。フシぬし様ならでと縋り寄る。地色爰ぞと共に摺寄りて抱付く程に思へども。傍に見て居る兄嫁の。手前を恥ぢて薄紅葉。高をしめたる橋立が傍から焦つてそれそこを。じつと引寄せ引締めて。二世の堅めが是迄の。不儀淫奔の返り花。あだ花ならば御無用と。そやしかくればゆふしでは。詞テモ粋な兄嫁御。惡性男をわしが手で。こなして見せうが下さんすか。仰せに及ばず互の緣づく。したが口先ばかりにて。どうの斯うのは皆浮氣。地誠をいはゞあの一間。其氣がなくば置かんせと。張掛けられてイヤ申し。詞戀は親にもお主にも。見代へてするが女の意地。跡へは寄らぬコレごんせと。地女之助を引立てる是ぞ工の臍落と。思へどどうやら恥かしく尻込みするを橋立が。鬼も頼めば人食はぬ。入らざるお辭儀と無理やりに手早く跡より押遣つて。一間をぴつしやり閉すとはや。内陣ひつそと鎮まれば。繻子の帯なるばかりにてオクリ物靜へかにぞなりにける。地色橋立あたり見廻して。女之助の放埒も禍 三年時の用。仕果せたりと思ふ所へ。多々羅新洞左衛門。生れ付いたる氣は苛ち。待ち久しくて次の間より歩み出で。コレ女中。詞娘は寶珠を受取つたか。まだかどうぢやぞ聞いておくりやれ。地べら〳〵何してをる事ぞと。膨れ返つた髭面を。引延ばさんと橋立が。やがて床几を參らせて。誰そ莨盆お茶持て來いと馳走ぶり。詞イヤ茶はたべぬ莨は嫌ひ。滅多に馳走召されても。受取る物に遠慮はないぞ。地床几は役目恩には着ぬと。腰打ちかくる其内にも。橋立は一間の首尾。いかゞと思ひ立つつ居つ狼狽へ廻るをコレサ女中。詞きよろ〳〵と何しめさる。待兼ねて烏帽子首。強ばり申すと言うてくれめせ。但しは直に行かうかと。地立上れば ア、是申し。詞今が祭の最中。ナニ祭とは。イエイナ。地かの夜光の珠のお祭と紛らかし。隙取る方便に傍へ寄り。詞お家の祭は先づ最初が鼻高。地其鼻の長さが三間半。男にしたら廢者。次が御輿と提灯。その提灯が餅搗いて。事の埓があかぬかと。いかう私は案じます。詞ア、これ。神事の咄聞きには參らぬ。御玉ばかりを受取るに。斯様の隙入り合點行かずと。地睨み廻せばヲけうと。詞輕はずみに何ぞいな。玉といふに愚はなく。唐土には卞和が璧。我朝にては驪龍の玉。伊勢の國にはお杉とお玉。飛んだは人魂怖

いは目の玉。地下女の玉でも輕々しう。受取らるゝものかいな。マ、お前はお幾つで。お名は何と申します。詞ハテ面倒な事を訪ねる。名は新洞左衛門年は六十。したり。ナンチヤ。テモ扨も〳〵扨も。さつても若いお顏の。ア若うござる。お耳も聞えお目もよいかえ。耳も目もよござるてや。お齒はえ。それもよいてや。サア共よい内から人は養生。折々疝氣も出ようがな。ハテ出ようとまゝさ。イエ〳〵さう氣を苛つがいかいお毒。地それ〳〵頭によつぽど白髮デエ。拔いて上げましよと。立寄れば突飛ばし。詞エ七面倒な女めと。地片方に立つて大聲上げ。詞ヤア〳〵娘。夜光の珠を受取りしか。何してをるぞとつかうどに。地呼ばはる聲の響きてや。心靜かに寶塔を。携へ出づるゆふしでが。跡に續いて女之助。出づるや否や尊敬し。詞忝くも寶塔の。内に籠めたる御玉は。闇を照らす事。日輪よりも明かなる故。地夜光の珠とフシ名付けたり。詞斯程貴き御寶を。輕々しく受取られし。地ゆふしで殿は仕合せと挨拶すれば。皆是お前のお世話故と。表向なる互の辭儀。新洞左衛門笑壺に入り。詞ホヲ、娘。寶を異議なく受取つたか。出來した〳〵。しかし某檢分の役。改める爲拜禮せん。地何れも共に拜まれよと。いふに隨ひ女之助。橋立共に頭を下げて。フシはつとばかりに敬ひ居る。地色ゆふしで心に信を取り。どなたも玉の御威徳。拜み給へと寶塔を。開き見すればコハいかに。眞黑くろと黒玉の。墨をつくねし如くにて。是はとばかりゆふしで親子。女之助も橋立も。共に呆れし顏付きにてフシ暫し。詞もなかりしが。詞新洞怒つて。ヤア大盜人の監物太郎。改めずんば寶物を拔たして歸す工よな。地イデ寶藏へ踏込み摑んで來んと。駈行く向ふをさつと明け。内より飛出る監物太郎。贋をくろめの白々しく。詞コリヤコリヤ新洞。先達ていふ如く不淨の女が受取らば。玉の光を失ふといひしは爰



ぞ。其女に詮議がかゝつたそこ退けと。地打つて變りし詮議の裏釘。いがみかゝつて橋立が。詞コレゆふしで殿。身に覺えあるならば。有樣に白狀あれ。地色一間の内で不義がましい。みだりな事はなかりしかと。まさ／＼しげに問掛けられ。何と言譯ゆふしでが。すべきやうなく髮にさす。白羽の矢をば拔くとはや。矢の根を咽に突立つる。是はと驚く人々より半狂亂の新洞左衞門。抱きかゝへてコリヤ娘。詞わりや何故に自害する。言譯なくばない樣の。思案もあらうに情ない。地大事の娘を殺すかと。さしもに猛き武士の。子故の闇に目も眩み（ステ）どうど。坐りて泣居たり。地今を限りのゆふしでが。涙片手にナウ恥かしや。詞自らは此館へ來るよりも。さるお人をば思ひ初め。情の道に迷へども。大事の役目と心の駒。地繋ぎ留めしを情なや。御內室の饗應酒。詞あれなる御酒を飲むよりも。不思議や五臟に泌み渡り。大事を忘れ何のその。地儘よの上にはり持たされ。つい下紐を解きそめて。是非なく身をば。フシ穢せしぞや。地色言譯ならぬ淫奔を。詮議に逢うて恥かいて。斯くなり行くは神の罰。神明怒りの鏑矢に。射殺さるゝと覺悟して。死ぬる心の悲しさを。推量してと泣く涙。袖に餘れば血に染みて（フシ）見る目も。いとゞ哀れなり。地色樣子を聞いて新洞左衞門。すつくと立つて走寄り。娘が言ひし御酒徳利兩手に摑ん



で。詞ヤアラ心得ず。尤も若氣と言ひながら。左程亂るゝ娘にあらず。仔細は此中顯さんと。地緣の框に打付け／＼。打割る中より守宮のつがひ。現れ出づればしつかと捕へ。扨こそ／＼。詞唐土張華が博物志に。交合の守宮を引分け。酒に浸して其氣を飲ませば。忽ち女の心亂すと書き現はす。其理を知つて娘に飲ませ。性根を亂しいたづらさせ。身が穢れた故光失せしと。科をこつちへ塗付けて。寶物渡す下拵へ。地さて巧んだり拵へたり。憎さも憎し不義の相手。是へ出せずだ／＼に。試して胸を晴らさんと。フシ詰寄する。地色ちつとも臆せず女之助。其不義の相手は某。御存分と押直る。ヲヲよき覺悟觀念と。振上ぐる劒の陰。ナウ是待つてとゆしでふが。苦しむ體に氣も弱り。心も折れて詮方も スヱ泣くより



外の事ぞなき。苦しき中にも親の顔。じろ／＼と見ておいとしや。親一人子一人の。私に別るゝお前の心。悲しい上にお腹も立たう。フシさりながら。地色たとへ守宮の業ならずと。ちよつと見るから思ひそめ。心が先へ穢れたもの。詞帯紐解かずと御寳の。光失せいで何とせう。地假の契りも二世の緣。枕交はせば我が殿

御。聟は子といふ世の習慣。私が死んだ跡にても。形見と思ひ懇に。おいとしがつて下さんせ。おぬし様も父上を。親と思うて折ふしの。訪ひ音信を頼みます。親に先立つ我が心。推量して可愛やと。思うて一言未來まで。夫婦と言うて下されとッシしやくり。上げたる哀れさを。地色見るに身に泌む橘立が。せめての事と介抱し。萬事を胸で諦めて。詞に出ねど心には。さぞ自らが憎からう。言譯するにもしられぬ品。皆これ前世の約束と。思ひ諦め給はれと。歎けば共に女之助。詞是迄盡くせし惡性の。止めとなつた今の悲しみ。未來は扨おき後々万劫。契りは變らじ夫婦ぞと。地いふ聲耳に經陀羅尼。物も得いはず嬉しげに。合はす兩手が暇乞ひあへなく息は絶えにけり。わつと泣き出す新洞左衛門地鞴踏んで。ヘエ、しなしたり情なや。詞わが片意地



な心から。一生夫は持たさぬと。言うたを誠と思ひ詰め。あへない最期を遂げけるよ。未來で夫婦と悦べども。悲しむ親が此世からそれが見えるかたはけ者。思ひ出す事ばつかりを。言うて死なずと便りなき。地此身を早う迎うてくれ。六十越して子に離れ。何を頼みの娑婆世界。情なの我が身や。不便な娘の最期やと。

しやくり上げたる一徹涙。堤も切れて大川に。フシ泥の淵なす如くなり。地色共に哀れと人々の歎きの内に監物太郎。かの寶塔を目通りに据ゑ。女之助を引直し。詞汝この如く。光を失ひし不義の相手。地討つて渡す覺悟せよ。サア新洞受取られよといふ聲に。涙拂うてすつくと立ち。詞ヤア人そばへすな其手は喰はぬ。義理立てせば助けうと思ふかいつかな〳〵。眼前娘の敵人手は頼ます。我が手にかけて眞二つ。地恨みを晴らすそこ退けと。飛びかゝつて拔打ちに。はつしと斬つたは件の名玉。是はとばかり人々は呆れて。フシ詞もなかりしが。地色女之助聲をかけ。手が廻りしか新洞左衞門。せかれずともサア首と。差付くれども目に懸けず。切割りし玉引摑み。詞おのれ陰陽和合を嫌ひ。よう光失うて。娘に自害させたなあ。我が子の敵思ひ知つたか。加藤の家の名玉は。目利の目からは悉皆藍玉。持つて歸り主君に見せ。地恥顯はして腹癒てくれん。必ず跡で其玉は贋物などと爭ふな。詞誠の贋があるならば。石動や御臺に持たせ。早く此家を捨てさせよと。地いひ敎へたる詞の裏。表は忿り心には。せめて娘が手向ともなれよとかける情をば。フシ袖に隱して立歸る。地色折よしと御臺若君。駈出で給へば女之助。詞新洞が詞のはし御兩所の身の上氣遣ひ。幸ひ我が君高野に御座あるとの風聞。それを力にお供せん。地いざさせ給へと勸め立て。伴ひ出づれば監物太郎ヤア待て弟。詞汝生れついて好色者。いまだお若き御臺所。預けやる事覺束なしと。地いふよりやがて守宮を引裂き滴る血を。腕へ塗付け是見給へ兄者人。詞守宮は不義を勸むれども。其血は却つて不義顯はす。唐土秦の始皇三千人の宮女に。不義あらんかと疑ひ深く殘らず臂に是を塗る。不義ある者は忽ちに落ちて跡なくなる例。さるによつて守宮といふ字を。宮女を守るといふ心で。みやもりと書傳ふ。地我が朝にては萬葉集。脫ぐ沓の重なる事のかさならば。守宮のしるし甲斐やなからん。詞沓重なりてさへ印は落ちると詠みし歌。地まして三代相恩の。お主に對して不忠不義。天命いかでと言はせも立てずヲ、出來した行けと一言が。兄の情のフシ餞や。地色御臺若君立別れ高野の。山の峯にある。我が夫諸共歸り來んと。連ね給ひし。フシ言の葉も。それはまつとし待つ迄は。お名殘り惜しやと橋立が。駈寄るを押隔て。互にさらば。おさらばの。聲を力に忘れ草伴ひ。館を出で給ふ國に。思ひや殘るらん

第四　道行越後獅子

三下リ島踊踊り來て。是の大門。眺むればヱイソレ七里。大もん花でかゞやく。ナホス花を見捨てゝ。憂き事に フシ憂きを重ぬる。玉鉾や。繁氏の御臺所。石動丸の御手を引き女之助がお供にて。君は高野にましますと。ホフシそれを力の忍草。笠にはあらぬ越後獅子オクリ習はぬ。わざに太鼓笛吹くや追風に帆を上げて。國を出船の日和もよく。フシオクリはる／＼紀の路。加太の浦。あがる朝日に。揺れ違ひ。爰より徒歩の草鞋がけ。沖の鴎におき別れ小オクリ誰か。松江と聞くからに。辻占よしといそ／＼傳ひ。長地跡に心は殘らねど引戻さるゝ砂道は歩めどはかの フシ行惱む。げにや世にある身なりせば。名所古跡も訪ふべきに今は耳にも目にも見ぬ。小家がちなる軒の端。煙賑ふ峯々に霧立ちのぼる。絶間よりほころび出づる山々は。野飼の牛の口を執る草刈り童の月代に。似たぢやないかと高笑ひ似たは化けたか合狐島。フシ睫毛濡らせる袖の露。松に殘りし。嵐と共にオクリ野邊の。草葉も枯れ／＼にいつも變らぬ冬景色。落葉も霜に埋。合もれて木の下蔭の淋しきは。在所離れて北嶋の。渡り急ぎし舟呼ばひ川の流れに水鳥の。羽を伸す音に驚きて。人目防ぎと舞ひ奏で。スヱ櫻木踊の拍子とり 合越後獅子二上リ唄櫻木を。枝にふき分け門に立て。門の。光で。庭も輝くさ。くら木。北山の櫻の樣なる。殿がな女郎がなと。ナホス歌ふ聲さへへ和歌の浦。フシ爰は寡婦の。かたをなみ。お茶は摘まねど都に紛ふ。所の名さへフシ宇治と呼ぶ。月を慕ふか雨を招くか露盤にあらで懸造。お宿／＼と招かれて。まだ日は高い先が急ぐと言捨てゝハズミ逃げて。のかはの觀世音歩みながらに遙拜し。齢を祈る松島や。千代に八千代に。さゞれ岩出を跡になし振返。浮異カヽリ見る。フシ故里は。あれかあそこかあの邊かと。空にしるしの甲斐もなく亂れ。亂れ亂るゝ白雲の。風に誘はれ。半冷鐘の聲。フシはや入相に。程は長田の里續き。誓ひを頼む紛川寺惠みも深き法の友。胸に木札の順禮も。願ふは二世の道知るべ。我々とてもあの世まで。伴ふ主の御在所。尋ね三谷を過ぎ行けば。高野も近し我君に。二上リ唄やがておほつと聞くや嬉しさに。道を急いでしやなら。ナホスと紀の川。上にぞ。三重

へ月影に。地光を添ふる法の道高野山の繁昌に。つれて蔓る麓の里學文路の宿の賑はしさ。都方より參詣に鄙の道者も打交り。泊りせりあふ旅籠屋の。フシ内騷がしき黄昏過ぎ。同じ浮世に。人忍ぶ。地色身はならはしよ旅の空筑前の三人も。宵より爰にかりの宿笠も草鞋もとく／＼と。寢られぬまゝに御臺所。石動丸の御手を

引き障子開いて次の間へ。フシ立出で給へば。地色女之助跡に引添ひ歩み出で。詞誠や人の盛衰は定め難しと申せども。繁氏卿御在國ましまさば。錦の褥に御身を添へ。地隙間の風も防がんに斬く淺ましき旅泊の轉寢。いたはしさよと頭を下ぐれば。共に萎るゝ涙を隱し。我々親子が苦勞より若い其方が心遣ひ。永の旅路を主なればこそ添いぞや嬉しいぞや。死んでも忘れはしませぬと。フシの給ふ顔の艶やかさ。地色旅疲れでさへアノ御器量。さて美しやと思ふよりふつと目の付く煩惱心。例の特病の好色が穗に現はれて是はしたり。詞改まつたおつしやり樣。忠義といふは付けたり。永々の道中をお前樣のお供して。何の苦勞に存じましよ。我が君のござると風聞する。高野山へはもう四五里。地明日は慥かにお逢ひなさるる。さぞ明晩はしつぽりと。久々の溜り水人目堤の切れ口を。フシ御用心遊ばせと仕懸けて見たる問藥。おのが病に配劑の加減は常の如くなり。詞マアあの人のつがもない。たとへ夫に逢うたりとも。御出家の御身なれば其樂しみは切れてある。只歎くのは國の騷動。地大内を亡し此若を世に立てる御相談。一先づ國へお供して立歸りたい心の願ひ。もし其上の御得心還俗でもなされたら。ハテ其時はとばかりにて袂こぼるゝ靨には。フシいとど思ひや增さるらん。地色媚く詞を付け込むしれ者。じり／＼と傍に寄り。詞成程おつしやればそんなもの。しかし一旦浮世を捨て。御出家なされた御主人。何程におつしやるともよもや還俗はなされまい。が又殿樣にも無分別。是程奇麗な美しい。うまい盛りの御臺樣を捨置き。坊主になるとはどうした御思案。第一きつい不心中。地此間から道中でつく／＼と存ずるに。ほんにわし等がお前の樣な女房を持つたなら戴いてゐる合點。何と談合なされぬかと。言ひしなづつと立寄つて後より抱き締め。何と／＼と頬摺を。フシ髱でするこそうたてけれ。地色御臺は呆れて詞なく振放し飛退きて。詞コリヤ女之助。そちは氣ばし違うたか。あんまりで物が言はれぬ。石動丸も聞いてゐるぞよ。國許を出づる時。監物太郎が念に念。誓ひを立てゝ守宮の血。臂にまで塗つたぢやないか。地まだ廿日にもなるならず。それ程の大事を忘れ。人でなしめ畜生めと。やり込め給へば思案して。詞コリヤ色とりでは行くまいと氣相變へてけらけら笑ひ。詞いかにも國を出づる時はさう思うて出たれども。一月足らず夜も晝も。テモよい器量又あるまいと見る度に思ひの種。增さりこそすれ忘られず。もの言ほか／＼と堪へ／＼て言出す今夜。地

命がけで惚れた戀。厭とあればお二人を手にかけて拙者も自害。詞オツトあればいつ迄もこつてりのちん／＼サア。地手短かにお返事と差添を拔放し。大悪無道に一心が坐り切つたる眼つき。フシ天魔の魅入と知られたり。地色石動君は幼氣に何の頑是も涙聲。死ないで叶はぬ事ならば父様に巡り逢ひ。其後死なうそれ迄は母様もお詫言。女之助も堪忍しやと。あどなき詫びも武士氣質。御臺は泣くにも泣かれぬ仕儀燃え立つ胸を押鎭め。詞命にかけて自らをそれ程思ふが誠なら。兎や角もなるべきが。地せめて殿様に巡り逢ふまで。了簡して待つてたもと。の給へばならぬ／＼。詞是まで騙すが皆其手。そんなあまちやく／＼には嵌らぬ我等。ハテ厭なれば息子殿から殺してのける。子がかはゆくば合點して夜の更けぬ内ほめいてしまを。イヤそれでも。それでもとは厭な氣か。サア／＼／＼と地座敷の内をあなた。こなたと付け廻せば。御臺は足の踏所なく若君をかき抱き。コレ麁相しやんなア、危ない／＼と。悸ひ／＼奥の間へ。フシ引外して逃入り給ふを。地どうでも遁さじ返事はと。續いて一間に駈入りしが。ごんと一聲釣鐘の音凄まじく鳴響き。驚かされて見し夢は跡なく。覺めて。三重へ旅姿。地色慈尊院の緣ばなに主従三人笠傾け。前後も知らず臥し給ふ猶も續いて寺々の。鐘鳴る音に女之助。むつくと起きて月影に。四邊を見廻し詞爰は何處ぢや慈尊院。扨は今のは夢であつたか。ハツア有難や嬉しや／＼。ホンニ夢ぢや忝しと。地天を拜し地を拜し。悦び片方に座を占めて。エ、我ながら情なき根性かな。明暮御臺を見る度にさりとは惜しいお姿。お主ならずば口說き落し我が妻にせんものと。思ひ初むるは日に幾度。詞我が身で我が身に意見を加へ。勿體ない恐しいと。又思ひ替へて心を改め。忠義を盡くすと思へども生れ付いての色好み。地淫犯の病ひを顯はし夢の內とはいひながら。主君に對して不義を言ひかけ。剰へ討ち奉らんとしたりしは。よつく武運に盡きたるかとスヱテ暫し涙にくれけるが。地色飛退さつて頭を下げ。詞御臺様若君様。夢の間の不義不届。地眞平御免下されと。恐れ入つてのフシ三拜九拜。地色親子の人は正體なく寢入りし額に汗たら／＼。魘はれ給ふに走寄り。申し。申しと揺り起せば。二人ながら起上がり。顔を詠めてヤア詞其方はまだ寢ずかと。地齒の根も合はず面色變り。若君を押圍ひ立退き給へば南無三寶。夢とはいへど通ぜしよと。胸に磐石押込む如く。切なき心を押鎭め。詞お疲れも出でしにや。魘はれ給ふに驚きて目を覺まし

候と。地言ひくろめても氣は濟まず。フシ案じ煩ひ居る所へ。地色群り來る人音に何事やらんと女之助。立上つて眼を配り。たとへ道行く旅人たりとも見咎められては御爲惡しゝ。御兩所は笠深々田舍道者の臥したる體。拙者も暫し隱れんと。兎角しつらひ片陰へ。フシ忍びて。樣子を窺ひゐる。地色程なく來る大勢は學文路の宿の百姓ども。中にも庄屋が智慧あり顏。詞コレ皆の衆。此所の殿樣。大内之助義弘樣がノヨ。遙々の海山を越え直に登つて繪圖をみんなに一枚づつ渡してノヨ。此繪圖に合うた者を。縛つて來いとの言付けでござらよ。三十許りなよい女性とノヨ。十ばかりは美しいちつぺいとノヨ。また三十餘りな色とり男と。どうやら人の女房を。息子共に盜んでかけおなどと見えるぞや。どうでもむつかしい尋ね者。見付けたら金になりますらよ。共

吟味に精出しやれ。誰が縛つても庄屋だけ。褒美はおれと半分わけノヨ。地斷つて置いたぞと。いふを聞兼ねしやばり出る。所でちつと理窟者。男を磨く玉屋の與次。朱鞘の大だら落差。立ちまたがつてコレ爰な庄屋殿。詞拔け作でも身内が慾ぢやの。近年は代官によい人がわせた故。所も騷がず物靜かでよかつたに。何やら又いひ出して代官所へ呼付け廻り。ちつとばかりの褒美であろが。澤山さうに三人まで縛つて來いとはうまい殿樣。騙されておぬく殿が。括たら褒美を取り。ハ、ハ、どこへ褒美。和御寮の樣なうまい和郎に。括られる人間があるものかいの。役に立たぬ口叩かずとサア。地早う去にませうと。先に立つをコリヤ待て玉屋。詞われが今の言分を。この智慧者が勘辨するに。褒美が少なけりや。見付けても取逃がす思案ぢやな。さつきの言付

けをどう聞いたぞ。庇ひ立はならぬぞよ。お尋ね者を助けたら。助けた者の首ころりノヨ。是も斷つて置いたぞよ。ナア〳〵いづれも去にがけに慈尊院の境内を探して去のらぢやあるまいか。もしも屈んで居よつたらノヨ。よつ程な拾ひ物と。地大勢引連れうぞ〳〵と。二人の寢姿見付け出し。詞コリヤ〳〵爰に何やら居るぞ。地くゝれ〳〵と立ちかゝるを。女之助飛んで出で。詞何奴なれば旅人を脅やかす。地近寄つたら撫斬りときつぱ廻せど事ともせず。爰に居る大金を。摑んで去ぬると取卷くを。詞ヤ汝等は人賣りか盜賊か。地目に物見せんと刀の電光。フシ風に蜘蛛の子散らすが如く。地色逃散りながら口々に。詞ヤイ〳〵玉屋。算用の合うた三人。見ぬ顏して助けるかと。地庄屋の一言聞捨て難く拔合はせて支へたり。詞さては

おのは盗賊の張本か。地一人も餘さじと女之助は根限り。火水になつて斬結ぶ。死物狂ひにさしもの大勢。與次はもとより構はぬ氣の。人が逃ぐれば共逃げに。フシ逃げて跡なくなりにけり。地色長追ひせば惡しかりなんと。刀を納めて二人を呼出し。かく行先を盗賊に圍まれては叶ひ難し。此間に御供していづくへなりとも立忍び。夜明けてお山へ登らんと諫め申せば尤もと。御臺若君かひ〴〵しく。帶引締めて草鞋の紐。結ぶ間遲しと三人は。跡をも見ずして。三重へ雲隱れ。星の逢夜と結び合ふ。地學文路の宿の玉屋の與次内には水が月影の。ませども宿へ歸らぬは心許なの日暮れ過ぎ。妻のお埒は埒明の夜なべを捨てゝ圍爐裏焚く。自由自在な我が世帶鑵子に沸る一煎じ。女夫の仲のこつちりの出端も妹脊の。フシ花香かや。地色娘かどたは門の戸をさすと居眠る宵まどひ。詞コリヤそこなお船頭。モウ船を漕出すか。ほんにやれ〳〵嗜めよ。連合ひ與次殿は。遂にお代官の顏も見ぬ人。地それに今日呼びに來て今に戻られず。おれよりマア其方が案じる筈何故と言や。詞アノ與次殿とは生さぬ親子。今にでも戻られ。眠たさうな顏見せて心の義理が立つものか。寢所でもして置けと。地叱るも親身聞くもおろ〳〵。詞母樣こらへて下さんせ。昨夜の大師講の持越でとろ〳〵が來ました。地デヱ寢所をしておこと。小廻りすればヲ、それそれ。詞もう初夜過ぎ。地追付けであらう寢間掃いて寢所しや。枕はおれが直すぞと二つ並びやを言兼ねて。娘頼まぬ心意氣。フシいらぬ遠慮と見えにける。地色此家を力に女之助御臺若君後に圍ひ。息をばかりに駈來り門の戸忙しく打叩く。お埒は驚き駈出でしが。待てよ夫の足音ならずと。詞何者なれば夜に入つてけたゝましやと咎むれば。いや苦しからず。我々は旅の者。足弱二人召連れ盗賊に出逢ひ。やう〳〵切拔け。是まで參りしなり。地色三人の命助けると思召し御圍ひ下されなば。世に有難く候はんと。餘儀なくいふに厭ともいはれず。詞主の夫は留守なれども。左程の難儀見捨てるもお笑止。地暫し此方へお入りあれと門の戸あくれば三人とも。命の御恩と追従し。フシ内へ通れば。地色女房が心をつけて表を締め。イザ先づあれへと圍爐裏の陰。互に見合す顏と顏。詞ヤお前は。繁氏卿の御臺所。牧の御方樣ではないか。さう言ふそなたはお埒ぢやないか。ナニ以前の女房かと。地女之助も吃驚のてもと。さてもが一時に手を打ち。フシ共に呆れしが。詞さるにても此お姿。地何故これ迄遙々とお越しありやと尋ぬれば御臺は涙を浮

めながら。詞連合樂氏卿御遁世遊ばし。國は大内に惱まされ。命危く逃げのび。わが夫高野にましますと。地色人の噂を力にて此所まで來りしと。語り給へば共に目を摩り。詞いかい御苦勞遊ばすの。地色若君樣の御成人何か思へば。一昔。變る浮世の有樣と。フシ憂きを涙に語り合ふ。地色女之助あたりを見。詞其方と離別せし折から。かどたと言ひし水兒を添へしが。地見事育て上げたるか無事で居るかと尋ねの詞。齒に衣きせず。詞コレいはれぬ昔をお尋ね。過りなき身に暇の狀。是非なく故鄕へ歸り年よつた母樣。地色乳呑子抱へどうして暮す當もなく。途方に暮れし折から。詞此家の主も以前は武士。尾羽打枯らした互の落目。共過ぎにするならば。母樣ぐるめ養うてやろとある。地色二度の夫と思へども親の爲子の爲に。此家へ嫁入つた其年に母樣を見送り。

娘も成人したけれど何の此方に逢はさうぞ。地言出しても下さるなとけんと言はれて女之助。むつとはすれど宿を借る。フシ無心に詞も無かりける。地若君は大人しく只何事も堪忍し。今夜爰に泊めてたもと涙ぐんだる御仰せ。詞コハ勿體なきお詞。地見苦しけれど一間もありいざあれへ往てお休みと。申し上ぐれば御臺所。主が戾り給ふならよきに賴むと打萎れ。石動君の御手を取り。フシしを／＼立つて入り給ふ。地色女之助はつきほなく共に奧へと立上るを。お垰はやがて押しとどめ。詞御兩所はお主筋好んでもお宿を申す。其許には宿叶はず。地何處へなりともお越しあれと。差止められて重なる業腹。詞ヤなめ過ぎた女め。御大切なる二方を預け某いづくへ行くべきぞ。お主ばかりの誼を思ひ。地夫の誼は思はぬかと嵩にかゝれば。詞サア其誼ぢやに依つ

て猶ならぬ。ソリヤなぜに。さればいの。今自らには玉屋の與次とて夫あり。其留守の間へ以前の連合。泊めてくれとあつた故。泊めましたとはどの口で。どう言はれうぞ無遠慮人まだ其許は昔の道樂直らぬの。お二方は此お垰が命にかけて預つた。地氣遣ひせずと宿なくば軒の下でも一宿あれ。あた自墮落なと引立てて。有無を言はせず門の戶を。明けて表へ突出し。理窟で締める鐉は押すに。押されぬ心の錠。幼馴染の合鍵も工合違うて海老の腰屈めながらに軒の下。暫しと宿る。フシばかりなり。地色程なく歸る玉屋與次道のどまくれ夜を更かし。闇を照らする禿頭門の柱でこつつりこ。あ痛し爰ぢやと打叩く。お垰は待兼ね走寄り。あけるや否やテモけうとい。今迄どこに何してと。おきまりたる フシ悋氣口。詞置け／＼。今夜はお上の御用筋。夜が更

けても權柄。しやつとも言ふなと圍爐裏の火を。地差しくべる内表より女之助が聲として。詞一旦の理に逼り軒に一宿致せども。寒風烈しく身も冷え渡る。地御亭主もお歸りと見受けたり。一夜の宿と乞ひにける。與次は聞き耳。詞ありや何ちや。何いふのちや。イヤあれは最前旅人が盗賊に出逢ひ。難儀に及ぶとありし故。引くに引かれず足弱二人は泊めたれども。地お前が留守故男子御は遠慮して。外に寢さして置きましたと。語ればハアテそれは大事ない事。詞これ旅の人。外に寢てなら寒からう。こち入られい。圍爐裏にあたつて寢られいと。地だうらく詞も情は嬉しく。フシ門の戸あけて小腰を屈め。地御免なれとてもの事。少し焚火の御報謝と。何心なく圍爐裏の端。燃える明りで顔見合せ。詞ヤア。わりや最前の侍かと。地俄かに變る與次が氣相。女

之助も拔放し。詞さういふ汝は件の盗賊。地斬りかくれば出逢うた所が百年目と。拔合せ。フシ爰を最後と斬合ふ有樣。地お𡚴は夢か現にも樣子は知らずヤレ待つて。暫しといへど聞入れず。詮方つきて茶の水を引すくうて燃える火に。ざんぶとかくればぱつたりと。消えて闇の夜二人はハツト。猶豫しながら。フシ聲かけ合ひ。詞おのれ盗賊そこ引くな。地侍逃げなと鵜の目鷹の目。とめるお𡚴も暗がりで。フシすべき樣なき折からにコハリ又も圍爐裏がくわつと燃え。そこにをるかと互の切先。ナホス南無三寶と杓の水ぱつとかくればふつと消え。目先手先も知ればこそ。詞盗賊め。侍めと。地聲を力の滅多討ち。フシ燃えると斬合ひ。消えると探り千變。萬化の戰に暫し時をぞ三重へ移しける。地色隙取る内に圍爐裏の明り。七轉八倒お𡚴はあわて。一間の障子引きは

づし斬合ふ中へ打ちかぶせ。身を捨て錘と乘りかゝれば。互の太刀先抑へられ。思はずどつかと居坐つて。フシほつと息つぐばかりなり。地色音に驚き御臺石動手燭携へ駈出で給へば。お𡚴はせき上げ是待つてたべお二人。詞わけて我が夫與次殿。此方の事は所でも。人も恐るゝ男一匹。盗賊よ追剝よと。名を立てられて切先勝負。地若しもの事があつた時。妻子までの面汚し。何故さもしい名は取り給ふ。樣子を聞かねば爰放さぬ。サア仔細はとせく詞を。詞尤もちや女ども。全く某盜みはせず。其侍が同道の足弱二人はお尋ね者。則ち此國の領主。筑紫より大内義弘殿到著あつて。此繪圖に合ひし者當國へ來りし由。搦取つて渡せとの仰せ。地證據は爰にと懷より。出して見せたは紛ひもなき。御臺所と若君の。お姿書きし寫繪に。人々ハツト胸つかへ肝を。フシ冷

するばかりなり。地色お坍は常から頼もしき夫の心をよく見拔き。コレ其繪のお二人。いづくいかなる御方と。知つて此方は捕へるのか。イヤそりや知らぬ。人違ひでも大事なし。捕へて來いとの仰せ。身にかゝらねば念押して。問ふ間もなく歸りがけ。慈尊院で出くはし見遁しならぬ庄屋の一言。其意地持つて此場の出逢ひ。地構ふな退け〳〵そこ放せと。刎退けるをイヽヤ放さぬ。詞斯うなるからは何を隱さう。これなるお侍は自らが前の夫桑原女之助。お供しられた二方は。其繪に違はず筑紫大名。加藤左衛門繁氏様の御臺若君。地わしが以前のお主ぢやと。聞くより與次ははつと飛退き。左様と存ぜず無禮の段。眞平御免と氣折の平伏。心許さぬ女之助反打ちかけ。詞ヤア俄かの三拜喰はぬ〳〵。我等も昔は家來筋などと。古手を以つて油斷させ。大内が方へ注進する下心か卑怯者。地立上つて勝負せよと勢ひかゝれば。詞ヤレ早まり給ふな。其言譯見する物あり。暫くと押宥め。地色箪笥より刀一腰取出し目通りに据ゑ。いづれもお見知りある刀。立寄つて見給へといふに人々氣を付けて。見れば目貫は菊流し牡丹に獅子の國鍔は。紛ひもなき夫の差替。げに〳〵繁氏卿の



お刀。詞こりやどうして其方が所持したる仔細はと。地不思議立つれば詞ヲ、不審は尤も。もと某は播州浪人。尾羽打枯し都方へ。奉公稼ぎに上る折から。八幡山崎の間狐川の渡しにて。さる浪人と口論仕出し。刺違へんと致せし所。其場へ繁氏卿通り合はされ。雙方一分立てよと。御差替一腰宛下し置かれ。地色命助かるのみか外聞の腰を塞ぎ。それより武士奉公のあり付きなく。此國の土民となつては候へども。詞御恩は忘れぬ昔氣質。命の親の繁氏卿。その御臺若君と聞き。地何と手向ひ申すべき。御疑ひを晴らされ御譜代同然に。思召し下されよと。餘儀なくいふに御臺は嬉しく。げに其事は御物語ありし事。扨は其時お刀を貰うたは其方よの。遣つたる人は御遁世。御跡慕ふ我々が。力となつて今一度。繁氏様に逢はせてたも。頼み少なき世の中やと。フシ卿ち給へば。詞お氣遣ひ遊ばすな。天地の間に御座あるなら尋ね逢はせ参らせんと。地奥底もなき心底を見込んで猶も女之助。詞ホ、、お頼もしき御一言。



とてもの事に御誓言で承りたし。其上頼む事ありと。地いふに居直り金打し。詞諸天善神は愚か。佛意をかけ二言なしと。地色聞いて安堵の胸を据ゑ。何思ひけん

どつかと坐し。差添抜いて我とわが。腹にぐつと突立つる。人々是は狂氣かと驚き騒げばア、。詞騒ぎ給ふな方々。思ひがけなき最期故。御驚きは尤も。何を隠さう某は。生れ付いて好色深く。兄監物太郎が疑ひを晴らさん爲。守宮の血を腕に塗り。地誓ひを立てゝ國を出で。心を心で嗜めども。情なや宵の夢。わりなくも御臺へ戀慕。聞入れなきを手にかけて殺さうと迄したりしが。詞慈悲院の時知らす。鐘の響きに夢さめて。いつにない御臺には。我姿を見て御恐れ南無三寶。地夢とはいへど通ぜしか。はや切腹とは思へども。我なくなりては御兩所を。守り奉る人なきと。さあらぬ體にて是迄來り。今與次殿の心底見込み。頼み置いて相果つる。詞申し若君樣。是なる與次殿を力となされ。父樣のお行方尋ね。目出度う御對面遊ばせや。地何の因果で此樣に。不所存には生れしぞと。我と我身の悔み泣き フシ見る目も。共に哀れなり。地色與次はわざと涙を隠し。詞夢は五臟の煩ひ。なぜ本心を改め御先途を見屆けぬ。地切腹とは腑甲斐なしと恥しむればイヤナウ。詞本心を改めても。夢となぐるになぐられぬ。仔細は腕に塗つた證。心の迷ひで守宮の血が。地これ此如く消えたるは。罰か報いか天命か。兄監物へ言譯の。種を失ひ是非なくも。斯くは計ひ。フシ申せしぞや。地色よし證が落ちぬとて。最早御臺は虎の子を。供に連るゝと思召し。片時も心安かるまじ。せめての冥加に御主人の。お心休めにする切腹。これ迄盡くせし忠節を。無にして死ぬる跡の儀を。頼む／＼といふ聲も。フシ弱り果てたる息づかひ。地色與次は哀れの袂を絞り。せめて最期の思ひ出に。娘かどたに逢はさんと。呼びに立つを女房が涙ながらに引きとゞめ。詞定めて樣子を聞いても居ませう。駈出る筈が駈出ぬは。前の親を羞ふかと。思はれまいと思ふから。其氣な娘を呼出して。泣くも泣かれぬ苦をさそより。やつぱり小陰で存分に。地泣かしてやつて下されと。子に擬へたる我涙。保ちかねて思はずも スヱテわつと。フシばかりに泣叫ぶ。地色御臺も共に御涙。惚れる身よりも惚れらるゝ此身のつらさ悲しさを。推量しやとしやくり上げ。歎かせ給ふ御聲が。冥途の形見南無阿彌陀。南無阿彌陀佛と差添を。抜くが此世の暇乞ひ。フシ消えて果敢なくなりにけり。地色ハツトばかりに人々の縋り泣入る折こそあれ。遥かに聞ゆる人馬の聲。すは事こそと與次は突立ち。ノリ詞コリヤコリヤ女房。泣いて居る所でなし。察する所討手の輩と覺えたり。思ふ存分働いて隙間を見てお供せん。地先づそれ迄は

一間へ入れ。聲すな音すな油斷すな。行け〳〵急げと フシ追ひやり〳〵 地七の鬮まで尻引からげ。好む所の段平を拔翳して待つ所へ。松明提灯星の如く。手の者引具しどつと駈寄せ。詞ヤナ〳〵此家に箙氏が御臺悴石動。圍ひ置いたる條遠見の注進。急いで繩かけ渡せばよし。地異議に及ぶとあばら家を乘潰してくれんずと。くわつと睨めたる兩眼は。海に入り日の射す如く。フシあたり眩く見えにけり。地色內にはわざと音もせず。詞すは風くらつて逃げたるか。踏込めやつと呼ばはる聲。地捕つた〳〵と捕手の役人。われ劣らじと込み入るを。得たりと與次は。眞向梨割車斬り。さしもの大勢たまり得ず。一引きさつと引いたりける。地色大內は馬上に齒がみをなし。詞所の代官駒形一學。あれ蹴散らせと下知すれば。地承ると駈來る侍早繩たぐつて大聲上げ。詞やあ〳〵與次。いか程に働くとも。斯く十重廿重に取卷いては叶はぬ〳〵。異議に及ぶと飛道具。いかに〳〵と罵つたり。地色流石の與次も飛道具に心おかれし折からに。一間の內よりコレナウ御亭主。とても遁れぬ我々。急ぎ繩かけ身の難儀。遁れてたもと障子を明け。出づるを見れば妻のお埒。娘かどたを石動に仕立てゝ出づる主思ひ。それと悟れど恩愛に。心後れて手を仕へ。詞ホヲ、其御覺悟はさる事なれども。一旦圍ひし某が。むさ〳〵渡す無念さを。地御推量下されよと夫婦別れの涙をば。目に浮ぶればお埒も萎れ。詞自らは覺悟の前。只いとほしきは此石動。地あらぬ形の男髮。不便にござると共泣きに。泣きしをれしが。與次はつつ立ち是々役人。詞お尋ねの兩人。繩かけてお渡し申す。地受取られよといふ聲に。駒形一學內に入り隙間あらせぬ氣配り目配り。是非なく繩をかける內御臺は駈出で。ナウ悲しや妾こそと言ふ口押さへて立身で隱し。親子を引立て引渡す。表に扣へし大內は大聲。詞コリヤ〳〵一學。渡し置いたる繪圖あるべし。引合せて受取れと。地遁れがたなき鶴の一聲。鷺を烏と爭うても。爭ひにくき姿繪を。明りへ出して引擴げ。見るも一生懸命。遁れぬ所と與次は身構へ。つく〴〵詠めて駒形一學。詞箙氏が御臺悴繪圖の通りに違ひなしと。地表へ答へる僅かの訴へ。與次は夢かと念に念。其詞に相違ないか。地色跡で違變召されなと。打つたる釘の詞を返し。詞ヤア入らざる馬鹿念。駒形一學春秀が受取つたに相違はない。よく繩かけて渡したよ。當座の褒美に一腰くれると。地差添拔いて提灯の明りへ出したは箙氏の狐川にて情の一腰。詞ヤこり

や我夫のお差替。扨は拙者と一時に。御恩を受けた侍かと。地いふ聲高いをシイしつと。押さへて消して引立つる。昔忘れぬ武士や見送る夫も妻子をば。恩に替へたる涙の雫。身に降りかゝる御臺の歎き。餘所に見捨てるお埒は忠義。かどたは實の父に迄。おくれの髪の男髷。今日は石動明日よりは。賽の川原の石の塔。十づつ十は百歳と。祝ひ飾りし命をば。捨てに行身と捨てにやる。思ひは同じ思ひぞと。泣いては送り送られて。屠所の歩みと歩み兼ね。行きては戻り戻りては泣く音もつらき明烏。かはい〳〵の。聲名残り引かれて。こそは別れ行く

第五

地陰徳あれば陽報あり賢き教へ眼前。地色御臺所石動丸玉屋の與次が介抱にて。繁氏卿の御在所尋ね求める高野山。小石交りの細道を爪先上りたど〳〵と。辿り給ふぞ フシせつなけれ。御痛はしや。母君は。習はぬ旅の疲れにて御心地例ならず。歩み悩みて休らひ給ひ。詞ナウ與次殿。誠や人の習ひにて榮え衰へ。浮き沈みありとは豫て知りながら。餘所の事よと思ひしに今身の上に思ひ知る。地色是につけてもいとほしきは内方お埒と娘のかどた。我々が身に代り敵の中に憂き苦勞。定めて憂目に逢ふやらんと案じ過しの御涙。共に萎るゝ詞を嗜み。詞ハア、譯もない御歎き。彼等が御身に代りしは。お主大事と一途の忠義。さは言へ駒形一學は。情を知つたる侍命には氣遣ひなし。地斯樣な小事に御心を痛め給ふが御病氣の障り。必ずお案じなさるゝなと。口にはいへど心には。胸迄のぼす涙を抑へ。詞申し若君樣。親子御一所にお供して尋ね廻り。殿樣に逢はせませんと存ぜしに。この御病氣では道捗も参らず。殊に女人禁制の御山。寺中へは行かれぬ御身。お前ばかり先へ駈拔け。地色繁氏卿を尋ね給へ。私はそろ〳〵と御臺樣の御供し。女人堂にて待ち申さん。フシはや疾く〳〵と勸むれば。地色今日ぞ戀しき父上に尋ね逢ふよと嬉しくて。御心はせかるれどやう〳〵二歳の時別れ。それから逢ひ見ぬ父樣なればお顔さへ知らぬもの。何を便りに尋ね逢はん殊には母樣の御病氣見捨てゝ一人わしはいや。三人ながら一所にと。フシ離れ難なき御風情。地御臺所は目を開き。詞ヲヽ道理〳〵さりながら。其方が側を離れぬとて此病が治るにあらず。片時も早く父樣を尋ね女人堂迄お供しや。地殿樣の顔見るならば耆婆扁鵲が藥にも。百倍ましたる藥となり本復するに。フシ疑ひなし。地色お顔は知らずとお名を名乗り。加藤左衞門繁氏の今

道心は何處にと。出家に逢はゞ尋ねよや。詞湯水を取つての介抱より是に增したる孝行なしと。地息もたよわき御仰せ。幼心に聞分けて。詞父樣のお顏を見て。御本復さへある事なら成程私が先へ參り。お在所を尋ねましよ。地跡からそろそろ與次を伴ひ。女人堂迄。お出であれと。しを〳〵濡るゝ笠と。杖。取上げて立ち給ふを。顏つく〴〵と打守り。詞そんなら其方はもう行きやるか。地西も東も知らぬ身を。手放してやる氣遣ひさ。跡で案じはいかならん父樣に巡り逢うたらば。隨分早う便りをしや。暫しの別れといひながら人の命は電光石火。打つ石の火より果敢なき譬。詞母が顏もよう見ておきや。そなたの顏も詠めんと地物が知らせし暇乞ひ。傍で聞く身の胸苦しく。與次は詞も泣く涙。フシ目をしばたたき。あちら向く。地若君何の頑是もなく。然らば母樣後程と立出で給ふ。詞コレ山道を餘所見して躓くな。地怪我ばしすなと氣を付けて見交はし〳〵別れたる。是が此世の名殘とは後にぞ思ひ フシ知られたり。地色與次は御跡見送りて涙を拭ひ。詞サア是から御臺樣。坂の間を負ひ參らせん。地いざさせ給へといふ所へ。女房お埒娘のかどた。息をばかりに駈來るを見るより喫驚。詞ヤア女房か。ナウ娘のかどたかと。地御臺も共に御驚き浮木の龜の對面と。悦び給へば溜息つぎ。詞不思議に命助かりしが御運の末。折角親子が心を碎きし。お身替りも贋者と。新洞左衞門に言ひさがされ。いとほしや駒形一學殿。直ぐに其場で御切腹。我々も危き所をやう〳〵切拔け逃げたれども。地追手の來るは知れた事。早う立退く御思案と。いふに驚く與次が面色。詞出來した〳〵しかし。此如く御大病たやすく遁れ逃げ難し。地色若君は早や御山へ我も娘を引連れて。御臺樣を肩にかけ女人堂に預け置き。立歸つて防ぐべし。詞其間を汝踏みとゞまり。地暫らく追手を支へよと。差したる一腰投出せば。詞ヲ、それ〳〵よい合點。爰は妾に御任せ。地此所より一寸も追來る敵を山へは登さぬ フシ氣遣ひあるなと。男勝り。地脇差取つて脇挾めば。よくせよ拔かるな女房と。御臺所を負ひ參らせ。娘が手を引き逸散に オクリ 山深。〳〵こそ フシ急ぎける。地色ザアあなた方さへ落したら心にかゝる事なしと。獨言する折こそあれ。麓より來る大勢は大內之助が雜人ばら。おつ取卷いて聲々に。詞ヤア贋御臺の喰はせ者逃ぐるとて逃がさうか。誠の御臺石動はいづくへ落した。有樣にほざき出せ。僞ると肝先へ太刀魚がお見舞と。地犇き騷げどちつとも臆せず。詞ム、親子御の行方が

聞きたいか。それは天竺の四日市。大儀ながら上つてござれ。テモ咽のえらい女め。地叩き殺せと抜連れ〳〵斬つてかゝればまつかせと。同じく此方も拔放し。詞どれ御自慢の太刀魚を。箔摺剝す縄だら料理。切味を賞翫と。地多數を相手に縦横微塵火花を散らして。三重へ戰ひけりフシ女なれども。地忠義の一念飛鳥の如く駈廻り。なぐり立てたる太刀先に。コハ敵じと雜人ども。はふ〳〵逃げて失せにけり。詞ヤレ此隙がよい引き時。地長居は恐れと迯ぐるも追はず。御臺所と夫の跡。ナホス慕ひてこそは。三重へ行く空の。フシ雲間に近き。八葉の。峯に紫雲の靉靆し。高野山と聞えしは三面に山連なり。源一水にして萬水東に流れ。大師二犬に道を習ひ。開き フシ始めし靈地とかや。地色詞いたはしや石動丸。かゝる難所をたど〳〵と。心も空に浮草の。根さしの父は顏知らず。名のみ知るべに。尋ね行く。オトス袖の涙ぞ。フシ哀れなる思ひ高野の。谷川や弓手は岩間。馬手は天野の山颪。峯に煙の。一結び。見上げて通る。不動坂。踏みも通はぬ。丸木橋ナホスフシ名殘り情も横吹きの。嵐に木の葉。散果てゝ。スエ心細道つく杖は。アトドおりつ登りつ。行先を。問へど岩根の松かげに



皆し。休らひ給ひける。百年の榮耀は風の前の燈火。悟れば我も佛なり。煩惱菩提と。諦めて。加藤左衛門尉繁氏入道。苅萱道心と名を改め。佛法修行の山坂を。辿るも後世の便りかや。石動親子の機縁にや思はず傍に走寄り。申し御出家様。この御山に今道心のましまさば。教へてたべとありければ。コハ興がる少人かな。九百九十の寺々。毎日入り來る初發心。昨日剃つたも今道心。一昨日剃つたも今道心左樣に尋ね給ひては知れ難し。俗の時の名を言うて。尋ねられよと身の上の事とも。知らず。仰せある。さればとよ尋ぬるは自らが父上。二つの年別れし故お顔も見知らず。元は筑紫松浦黨。加藤左衛門繁氏様と。言ふより扨は我が子かと。取縋らんとしたりしが待て暫し。佛前にて誓ひを立てたる恩愛妹脊。



愛ぞと思ひよそ〳〵しく。ムウ年も行かぬに遙々と。慕ひ來る志。誠の父が聞かれなば嬉しくも懷かしく。飛付く程に思されんさりながら。此山の掟にて。縱へめぐり逢うたりとて。名乘り合ふ事かつふつ叶はず。はや〳〵國へ歸り。母御を大事にかしづくが。又一つの孝行と。いひ敎ゆれど。イヤナウ我

が國は大内といふ者攻惱し。母様諸共この山の麓まで參りしが。地悲しき事は母様が道の疲れに煩うて。命の内に只一目父に逢はせてくれよとのお歎き。情と思うて御在所。御存知ならば敎へてと。目に持つ涙はら〳〵と。抑へ兼ねたる有様に。詞我こそと名乘つて聞かそか。いや勿體ない師の御坊の戒め。と言うてはるばる來たものを。知らず顏見ぬ顏が。地どうなるものぞ不便やと。胸にせきくる血の涙。こたへ兼ねて思はずも スヱわつと。ばかりに泣き給ふ。地色石動丸は目覺く左程に歎き給ふのは。もし父上ではあらざるや。早く名乘りて給はれと。縋り歎かせ フシ給ふにぞ。地色亂れ心の折ふしに。後の方の岩陰より。師の阿闍梨の聲として。詞ヤア〳〵苅萱。棄恩入無爲。地棄恩入無爲の。誓ひを忘れ給ふなと。制せられて苅萱は。起上つて振返り。ハア、さうぢや。迷うたり誤つたり。今此三界悉是吾子。いづれを我が子と思ふべき。師の手前も面目なしと。衣の袖を打拂ひ〳〵。詞ハレ小さかしき少人かな。地哀れを共に見捨てねば我を父よと縋る事。穢らはしや忌はしや。詞お事が尋ねる繁氏入道。此山におはせしかども。諸國修行に出で給ひ今は行方も知れざるぞ。地色急ぎ下山し母親の。病氣の介抱召されよと。スヱつれなく言へどどこやらに。フシ殘る詞の彌勝り。地色なに父上は行方も知れず。此山におはせぬとや。ナウ情なや淺ましや。我はともあれ母様が。焦れ死をなされうかと。それぱつかりが悲しうて。跡へ戻るも戻られず。似た人にてもあるならば。逢はせてたべと掻口說く心ぞ。フシ思ひやられたり。共に張裂く。思ひをば押隱して 懷より。包みし藥取出し。詞コレ是は師の御坊一萬座の護摩を焚き。調合ありし妙藥。母御に用ひ看病あれ。來た道筋は難所にて草臥足では叶ふまじ。こちらへ行けば花坂とて平地も同じ事。地色馬もあり駕籠もありいさ〳〵立つて行かれよと。心强くも引立てられ。長地石動丸は泣く〳〵も藥とあるを力にて押戴き〳〵是非もなみだの泣別れ。フシ迷ひ道をば。そこ爰と敎へながらも苅萱は。心許なさ思はずも。引かるゝ緣の友綱や見えつ。隱れつ。三重へ慕ひ行く。地息をばかりに玉屋の與次御臺所を負ひ奉り。娘を引連れ女人堂迄來りしが。跡先眺め片陰におろし參らせ。お心持は如何ぞと申し上ぐれば御臺所。苦しき體を押隱し。自ら事は思はずとも。お埒を救うてたもるのが。我が爲の良藥と。宣ふ詞に跡先を。思ひ廻して猶豫せしが。詞いかさま女の手業に追手を防がせ。地見捨てゝ置くも心許なし。仰せに

任せ引返し申すべし。詞コリヤ〳〵かどた。大事の〳〵御臺様ぢやぞ。お傍を離れず御介抱申せ。地お腰でも撫らしてござりませ。つい往て參ろと口輕く。フシ飛ぶが如くに引返す。地色御臺は重る病ひの床。涙ながらにナウかどた。詞向ふの道より石動が。歸る姿は見えざるか。地戀しの我が子や。なつかしの我が夫やと。彼方を見ては打倒れ。此方を見ては。伏轉び最期も近き御有樣。かどたは悲しくコレ御臺樣。詞父様や母様の。歸らしやる迄どうぞマア。地死なずに居て下さりませとスヱテあどなき詞かいしよなき。フシ娘の肩に。介抱せられ。詞自らも石動が便り聞く迄〳〵と。氣の張弓も弦切れて。地死ぬる今端にフシなりしぞや。地色與次夫婦が歸られなば。石動事をくれ〴〵も。頼んで死んだと言うてたべ。せめて最期に夫や子の。顔見る事が叶はずば。聲なと聞いて死にたいと。御山の方を打眺め。眺めても口說いても。逢はれぬ事かとしやくり上げ。泣く音も辛やい。き切れの露の命の果敢なくも。フシ消えて跡なくなり給ふ。地色かどたはあわてナウ是申し。申しといへど其甲斐も。なくも泣かれず立つたり居たり。母様呼びに走らうか。父様はなぜ遅いと。坂を駈けおり聲を上げ。詞父様なう母様なう。御臺様が死なしやつた。地コレなう戻つて下されと。聲をばかりの叫び泣きフシことわり。せめて哀れなり。コハリ頃は臘月雪空に。餌食乏しき山鴉ナホスかはい。可愛を引替へて。フシ死骸にたかれば。地ナウ悲しやと駈寄つて。あなたを追へば。こなたから集りかゝれば詮方も。小石を拾ひ打つ礫そこよ。爰よと駈廻り身體も息も絶える程。父を呼び鳥を追ひ。追ひめぐれども小娘の。フシ泣く音もつらき折からに。地色石動丸は徒歩跣かくを見るより走付き。群る鴉を切拂ひ。あへなき死骸を搖起し。ナウ情ない母樣。斯くなり給ふ事ならば何しにお傍を離るべき。父上には得逢はず。お前に別れて私は。何とならうと思召す。詞これ結講なお薬を。御出家樣に貰ひました。是をあがつて健になり。たつた一言石動かと。地物いうてたべ起きてたべと。薬取出し噛みこなし。甲斐なき母に吹込んで。ナウ母様母様と。起立て抱きかゝへスヱテ前後。不覺に泣き給ふ。地色かゝる哀れを遠目から。見るより思はず苅萱道心。走寄りしが是迄さへ。立てし誓ひを今更に。無下にはせじと目を押拭ひ。詞コレ〳〵少人。悲しきは道理ながら。いたく歎くは佛の迷ひ。地いで〳〵回向し參らせんと。口に唱名心には我を慕うて遙々と。海山越えて來りしに。妻子かともえ言はずに。

餘所に扱ふ我が心。草葉の蔭からさぞ恨みん。赦してくれよ我が妻と。念誦に交る胸の内。とゞめ兼ねさせ給ひけり。然る所へ與次夫婦駈戻り。ヤア御臺様は御最期かと驚き騒げば。女房が苅萱を一目見て。なうお久しや。繁氏様といふに石動。なに此お方が父様か。なつかしや戀しやと縋り給へば衣の袖。打拂ひ／＼。逃げんとし給ふ後より。ヤレ待ち給へ我が君と聲をかけて監物太郎。大内之助に大綱かけ息をばかりに駈來り。勅命受けて一戰に討ち勝ち生捕つて參つたり。如何計ひ申さんと。言ふより與次が躍り出で。何かはなし急いで首と。既に斬らうと見えたる所へ。暫し／＼と新洞左衛門。飛鳥の如く飛來り。謀叛人とはいひながら。未だ旗を上げたにあらず。一家中の歎きを思召し。一命助け給はれと平伏すれば苅萱道心。助けるとも殺すとも私には計ひ難し。都へ行きて奏聞遂げ。命乞ひして得さすべし。それを我が子石動が。筑紫へ送る轢と。仰せによつて引立つる大惡無道の强敵も。我が神國の御注連繩。治まる御代の例とて。惡人亡び國安全。民も豐に萬々歳。千代を祝ひし筆の跡長くも。語り傳へたり

敵討襤褸錦

作者　文耕堂　三好松洛

上巻

二上り面白の秋の都や。筆に書くとも及ばじ。東には祇園清水。合落ちくる瀧の。合音羽の嵐に地主の。梢もちり〴〵。西は法輪嵯峨の御寺。廻らば廻れとナホスフシ舞ひ謠ふ。地先斗町の貸座敷備後の國の一城主。入江殿へ抱へらる藝妓舞子の下稽古。河原面の小座敷を樂屋にしつらひ。音締の絃も御手洗川の波の皷のどうどうと。太皷の音も笛の音も。比叡の嶺颪吹荒み心。フシ浮立つ風情なり。地旅宿の主春藤助太夫今日は舞子の下見とて。若黨佐兵衛が花生に輕うあしらふ投入の。菊の一輪尻輕に。書院座敷のはき掃除心利して立振舞ふ。舞の稽古に性根奪はれ口三味線を高々と。立出づるは助太夫が次男助太郎。顔も心も面長に。百の口をば卅ばかり　フシ年に不足はなかりけり。ヤア　詞若旦那親旦那は最前御持病が發つて。腰が痛むと仰しやつたが。些お快うござりますか。親父の佛師快氣〳〵。また仇口を仰しやるか。佐兵衛が聞いては大事なけれど。障子一重彼方には。舞子に附いてゐる目口かはきの者どもが聞いたらば。親旦那は勿論國許にござる兄御。治郎右衛門様までお顔が汚れる。重ねて屹度お嗜みなされ。こりや佐兵衛滅相な事云ふなやい。故事來歴の無い事を云ふものか。此助太郎を槃特々々と呼ぶ故に。俺作られた親父を。佛師と云ふが誤りではおぢやるまい。ヲヽ皆お前のが御尤も。對手になる程白痴の再發。ヤア此泡盛は最前室町の呉服所より。御持病のお見舞とて參つたが。掃除にかゝつてはたと失念。口上の趣はまつかく〳〵。コリヤ佐兵衛皆まで云ふな覺えぬぞ。覺えぬ事は書留めよと親旦那の言ひ付。地おつと合點違はぬやうに違棚。料紙硯を取り下し筆押執つてにじり書。鳥の足形釘の折　フシ甘い和郎には奇特なり。詞先づ覺。室町の呉服所より疝氣の見舞にあは島殿。ハテやくたいもない泡盛。さう云ふな佐兵衛腰より下の病には泡盛より淡島殿と。地口合たら〴〵減らず口。詞サアもう可うござる。此泡盛の口切つて。親旦那の氣齊しに。イヤ〳〵親旦那酒嫌

ひ。起きると寐るまで仕事は煙草。萬一今度の疝氣が重り往生の素懐遂げられたらば遺言がある聞いて置け。歌親父死んだら新田煙草で燒きやれのうさア、詞コレ〳〵。左樣な不吉は云はぬものエ、忌忌しいと叱られて地おつと云ふまい。跡の所が肝心要。煙管そとはに立ておきやれとフシ謠ひ散らして走り行く。地佐兵衛跡を見送つて。詞其白痴が親旦那の病の原と。地呟き〳〵又取上ぐる椶櫚箒。竹の節々岩乘に昔作りの助太夫。刀提げ何と佐兵衛。掃除はよいかと立出づれば。詞是はしたり。旦那御病氣すんどお快ささうな。先程室町の呉服所よりヲ、聞いた〳〵。早速に知らせなば禮狀を遣はすに思はざる失禮。斯樣に所々方々より音物に預るも。是皆殿のお蔭。一ツには又惣領の次郎右衛門が御奉公を大切に勤むる故。隱居同然の助太夫も尊敬せらるる。地いで返狀を認めんと硯引寄せつぶつぶと。文字も心も堅親父。詞何と言ひ付け置いたる舞子どもは。殘らず揃うて居りまする。肝煎の傳八呼べ。傳八々々旦那殿の召しまする。地あつと答へて立出づる舞子妾の肝煎て。慾に目の無い熊手の傳八。詞旦那お召しなされますか。ヲ、つゝと寄れ。扨此中の舞子どもは縹緻も藝も見られぬ〳〵。先達ても云ふ通り。國許の大奥方より。若殿のお慰みに遣さるゝ舞子。念に念を入れねばならず。眉目形にもお好みあり。繪圖に合はゞ召抱へん。殊に晩程は身どもが朋輩須藤六郎右衛門組下彦坂甚六など。殿の御用に就いて當夏より京都に逗留。拙者が舞子の下見致さば。共に見物致したいとあつて暮前より來られん。萬事無調法のないやうに屹度言ひつけ。成程々々。今日はおてるかつのいく世とて。今都にて名取の舞子をお目に懸けます。川東の色里でもづし中。相中半中八百屋と。樣々の奉公人をひつさらへて。手に懸ける熊手の傳八お氣遣ひ遊ばすな。則ち後に廻しますは深草の少將。御所望あらば放下僧と地辯舌流るゝ川柳。膨雀も暮六ツの。時計合圖に須藤六郎右衛門彦坂甚六。家來引連れフシ案內乞うて入來れば。地硯押遣り助太夫是は〳〵御兩人。詞約束違へず早速の御出忝しいざ先づ是へ。イヤ〳〵夫は痛み入る。お禮は却つて此方より。扨扨今宵は日頃の積鬱晴し申さん。地かののものゝと挨拶を互に飾る詞の綺羅。星の如くに燈火の。影にめくれる盃にフシヤ、時移るばかりなり。地お客お揃ひ遊ばさば追付け始め申さんかと。伺ひ出づるは熊手の傳八。六郎右衛門ははつと仰天。彼奴が此座にゐるからは執心懸けたるおてるが目見え。憎い仕方と顏見合す

れば彼奴もしれもの素知らぬ振。座席繕ふ其中にはや彈出す三味線の。いとも興ある風流舞オクリ華やかなりける次第なり

百夜の計歌

二人半中フシいたはしや少將は。百夜通へと夕闇の。笠に降る雪積る雪。戀の重荷と打擔げ。涙の氷柱ナホスフシ解けしなき。暮る月日は。小車の榻のはしがきもゝはがき。よみ盡したる數へ歌。歌一ツとさのや。人目の關に堰かれつゝ焦るゝ此身が知らせたや〳〵。二ツとさのや。二人寢る夜もあるならば其嬉しさは如何ばかり〳〵。ナオスフシ其かず〳〵は。如何ばかり。十はだ三十と數へ〳〵て九十九夜。嬉しの今宵や待てば久しき明日の夜と。急ぐ心も身も疲れスヱテ暫し休らふ軒の戸を。たゝく水雞か夫にはあらで小オクリたたく。匏の音も冴えてフシ二人連たる鉢叩き。鉢タゝキ歌佛も元はおもはくの。戀路の關結んでは。抱いて涅槃の長枕。交さんしたと聞くものを。どうした事の因果やら。なまうだ〳〵南無阿彌陀に。遣はれ廻つて此樣に寒きさんやも厭はずに。修行の爲の寒晒しといふたりや引込んだナホスフシと瓢を。鳴らし通りける。地少將は通ひ路の疲れを晴す好き慰みとコレコレ修行者。詞身には三衣を懸けながら戀を勸むる功德は如何に。△さればとよ御佛も。衒賣女色と說き給へば。取分け情商ふを誠の戀とは云ふぞかし。二人地雨の夜雪の朝にも。格子の先のさゝめ言。ねまきながらの寒晒しと云ふたりや引込んだ。ギンハル客は雨夜の。月なれやフシ雲霽れねども西へ行く。○地夜な〳〵變る枕の中に誠ありとは逆緣ならずや二人鉢叩きそれはやちよらう。安き女郞の事なりとよ諸國をてつるで。〳〵と打巡つて見ようならば。色と情の里多し。なもだ〳〵も濡文も落つる所は谷川の。流れに誠もあるなれば順緣にてはあらざるや。煩惱といふもナホスフシ菩提なり。地げに本來一物無き時は。佛も。△衆生も隔てはあらじ。爰でうてうて。飲めや謡へや一寸先は闇の夜の道も厭はず少將は。彼の修行者を知るべにて語り。慰み半中フシ行く程に。小町御前の住み給ふ車の。フシ許にぞ着きにけり

地舞も終れば助太夫眼鏡を取つてコリヤコリヤ傳八。此間見た舞子より縹緻も藝も拔群好し。地彼の少將になつたおてるとやらを今一應篤と見たしと。繪圖取出し控ゆれば。□はつと驚く六郞右衞門。詞ア、夫は老人の夜目遠目の見損ひ。彼奴は手足不束にてお大名へは出されまい。なう甚六さうでないかと脇道よりふきさませば。△いかにも〳〵コリヤ〳〵傳八とやら。おてるは最早見るに及ばず

宿元へ追歸し。兩人を爰へ連來れと。◯地聞きも敢ず助太夫。詞イヤ／＼何は兎もあれ角もあれ。お國からのお指圖に。眉目恰好似るからは。てるより外に見る者なし。地二人の舞子は追歸してるを早うと老人の。氣の苛たてに只今是へと フシ 云ふ間程なく立出づる。□ハルフシ吹上髮に。大振袖。長崎衣裳に江戸の張。京女房の其中で オクリ 一際。目立つ舞子のてる。年もいざよふ月の顔。皆様御免なりませと。下に居しなに六郎右衛門を。フシじろりと見たる面ざしの。□地燈火に耀けば現を抜かし物云ひたげに見廻せば。堅い親父が眼鏡の淨玻璃。◯助太夫は一心不亂。ためつすがめつとつくと見合せ。詞コリヤ／＼佐兵衛と呼出し。其方は室町の呉服所へ參つて。此割符にて爲替金二百兩。地今夜中に受取り 歸れ早う／＼と追立遣り。詞扨御兩所へ無作法ながら。今朝より持病發り殊には老人の儀御用捨に預りたし。代りに愚鈍な奴なれど助太郎をお對手。到來の泡盛一ツ上つて下され。△成程成程御遠慮は御無用。勝手次第に御休息。夜長の時分我々も御子息と咄しませう。◯それは過分然らば御免。ヤアえいえい 地咄したい事もある。てるは此方へ傳八は。跡より來れと打つれて フシ奥の一間に入りにける。◯地跡見送つて六郎右衛門甚六に目胸し。兩人一度に傳八が胸づくしを碇と取る。□詞こりや何となされます。◯何とするとは大騙の手練者。あのおてる事は六郎右衛門が執心懸け。行く行くは本妻にもと儕に橋をかけさせ。盃するばかりに祇園丸山での出會は度々。どうぞ女房に持ちたいと武士に似合はぬ石山の開帳へ跣足參りの願込にも。叶はぬものはてるが身の代二百兩一兩缺けても成らぬと云ふ。まあ二三ケ月の其中には心當の金もある。外へ目見えはさせぬ契約。今日是へ連來るは六郎右衛門を侮つてか。是見よ身が刀は備前長光。是を今代なせば二百兩には事缺かぬ。サアてるを取戻す分別せよ。出樣が悪いと赦さぬと鍔打叩けば。□されば夫には段々の言譯。御存じの如くてるが親も強い手詰り。僅た一人の娘に舞を敎へ仕立てしも。急に金にしたいと云ふ。◯默れやい。□そこで我等が呑込んで先づお前のお目に懸けたは。□默れやい。□所が金が調はぬ。◯默らぬか。□ハテ默れなら默ります。△自體儕が内股膏藥。六郎右衛門殿とてるが出會の度々。酢につけ粉につけ思ふ樣に骨折賃。取つて／＼取剝きながら今になつてぬつぺりこつぺり。何處も圓うなるやうに思案をしろときめ付くれば。□成程々々六郎右衛門樣は強いおせき。お前此樣子聞分けて下さりませ。只

今も申す如く貧から娘を賣る思案。買人がな賣らうに。賣人がな買はうにのお前方に金はなし。△默れやい。□幸ひに助太夫樣舞子見たいと仰しやる。△默れやい。□早速お目に懸けたも彼の金が欲しさから。△默らぬか。同じ事をくど〳〵と。おてるを六郎右衞門殿の手に入れる分別せい。□サア跡をお聞き遊ばせ。何處も彼處も好いやうに上分別を申上げう。△サア夫を疾うから云へば可い。地二人如何ぢや〳〵と兩人は　フシそゞろになつて聞居たる。□詞先づてるを助太夫樣に請出さすは。親も金受取るは。我等も十歩一藏くは。何ときついか。サア是からが分別の免し事。□ヲツト心得豆板一粒。□忝南京のさらばお咄し申しましよ。今宵は御兩所樣ながら爰に一宿遊ばされ。夜半過ぎなば助太夫も寢らるゝ所を。お前方の家來衆に言ひつけてるを盜んで立退くは。何と强いか。サア爰が肝心肝文の大事の傳授。□二言と云ふなと黃な物一角。□ハア是は小坊主から角前髮餘程の成人。偖お聞き遊ばせ。時に家內騷ぎ立ち。てるが豫ての忍び男奪うて退いたと風聞させなば。此座にござる御兩所に是程も難儀は懸らず。約まる所は助太夫お國への言譯に皺腹。何ときついか。□出來た〳〵上分別。地聲が高い密にと。諫し合する時しもあれ。助太夫の聲傳八々々と呼立つれば。□南無三寶一寸參つてまだ云殘した上分別。今度のお禮は角前髮を元服させて下さりませと。摑み面はる態手の傳八　フシきほひかゝつて入りにける。□地兩人頷き呀き六郎右衞門甚六が家來參れ。△アツと答へて雁助鬮內何の御用と蹲へば。□詞今夜は是に一宿し。夜と共にお咄し申す明朝參れと云渡し。地近う〳〵と仕方で敎へ兩人が耳に口。こりや惡う〳〵と呼けば。△ない〳〵〳〵と頭にて　フシお請を申し立出づる。□地傳八はいそ〳〵とサア〳〵しやんと談合が固つて。詞今夜お金も受取る筈。夫故おてるが親許へ一寸知らして參ります。かの女もお前に强い惚れやう。今の相談ぬかるまいぞ。地必ず首尾好う〳〵と　フシちよびかは云うて歸りける。□地燈の影も更くる夜や親の指圖に助太郞。泡盛携へ立出づれば。△詞是は〳〵助太郞殿お手づからの御持參。御家來に仰付けはなされいで。□手前が持つて來るも。家來が持つて來るも手づから。足で持つては來られませぬ。△いかさま是は御尤も。何と御親父もてると一緒にお臥みか。□コレ滅相なお臥みかとはいかい差合。親父は舞子のねきに屹度張番。さもしい事云ふまいぞと。二人地眞顏になれば兩人も。今が旨い花盛りとフシどつと笑へば。□詞ア、

滅多に旨がるまい。持つて來しなに舐つて見たが。それは辛い泡盛。△其胸をこくやうなが甚六が好物。お辭儀なしにと引受け〳〵是は近頃びいどろ猪口。丁と受けて下に置き。ちと助太郎殿に御內證が申したい。別儀でない彼の舞子のてるが事。彼は外に言交した男があると承る。彼の夫婗妬深く。てるを抱へに來る人あれば。或は生靈となつて取付き。武士町人の別ちなく取殺し〳〵なう六郎右衛門殿にも豫て御存じ。□成程々々京中の噂。それ知りながら內證云はぬは不親切。一ツには又若殿に過ちもある時は是以て不忠。生靈の出ぬ內に助太郎殿了簡で。てるをちやつとお歸しあれ。時には親父も御自分も命に氣遣ひけもない事。なんと甚六此思案は。△是は〳〵上分別と。甘い和郎には相應な フシ甘い工ぞ可笑しけれ。○ア、二人ながら侍でゐてから臆病な。幽靈殿でござらうが狐殿でござらうが。此助太郎何ともないぞ。アノそしてから滅相な夜の夜中に其樣な咄はせぬものぢや。怖うはないが隅々が見らるゝと前へ〳〵と膝行寄る。△ハテ其方さへ生靈の對手にならるれば。此方は知らぬ神祟らぬ〳〵。最早時刻も丑の時生靈の出る時分と。甚六が當座の機轉飲みさしたる泡盛へ。蠟燭の火を差向くれば件の酒に燈火うつり。青み切つたる炎の丸かせ宛ら靈火の如くにて。烈々と燃上れば。そりや生靈の魂よと。○云ふに恟り助太郎。あつとばかりに周章狼狽き五躰わな〳〵顫ひ出す。生靈の魂より我が魂が拔作と フシ知らぬうつけぞ笑止なり。□怪顚顔にて六郎右衛門鍔元寛げ空擬勢。ア、胸苦しや堪難や。此甚六に一念が取付かうとは胴慾な。赦させ給へと走り寄り。色燃ゆる泡盛一息ぐつ〳〵と飲干せば。○扨こそ生靈取付いたりと助太郎は猶仰天。滅多に傍へ寄るまいと逃廻る。△髮切見だし甚六は。まへじやうもんに兩手を置き。エ、怨めしや腹立や。おてると吾が其中は。サハリ變るまいぞや變らじと誓の詞日に三度。夜は比翼の其睦言に交す枕の濃い中を。身請せうとは胴慾なサハリやりやしませぬぞ手に懸けて取殺さいで置かうか。サアてるを渡すか渡さぬか。返答に依つて目に物見せんと。座敷の疊ばた〳〵〳〵。○なう恐ろしや悲しやと爰彼處に逃屈む。□機轉利して六郎右衛門屛障子をぐわた〳〵ぐわた。板椽戸襖どろ〳〵〳〵。△其處よ爰よと逃迷ふ助太郎を取つて引敷き甚六が。天井に向つて吐く息は フシ酒臭うして胸惡し。○ア、赦して下され魂魄殿。俺が知りもせぬ事をこりや胴慾の元祖ぢや。たつた今おてるを渡さう。△てるを

渡せば言分なし生靈もはや立去ると。うんと御向に甚六が。武士に似合ぬ所作事はフシ仁躰損ねて見苦しゝ。□仕濟し顔に六郎右衛門正氣を付けよと抱起し。邊に水も幸ひと又どぶ〳〵と酒注懸け。草臥休めとぐつと干す喰ひ抜けやら尻抜の。

○助太郎は色蒼ざめてるを盗みに差足抜足フシ奥の一間へ走り行く。□二人は顔を見合せふつと吹出し扨甚六。○生靈の頓作にて日頃の願ひ今宵成就。おてるが首尾好う手に入るはほんの濡手で泡盛の。○旨い仕懸を旨々と助太郎は理不盡に。てるを引立てこれ〳〵兩人。親父が寢た間に盗み出した命代り。どろ〳〵殿にやつてたべと。○聞く程不審の晴れぬはおてる。私に合點もさせずに是はまあお二人様。□何にも云ふな六郎右衛門が呑込んだ。此方へ來れと引立て出でんとする所へ。○助太夫飛んで出で。○須藤六郎右衛彦坂甚六待て。殿のお寢間へ召さるゝ女奪うて退くかと聲懸けられ。□最早一生懸命と間近く來るを六郎右衛門。振返つて抜討に切付くれば。○心得たりと刀の鞘にて丁と請け。拂うて付込む後より。

△彦坂甚六是に在りと肩先より脊中まで。したゝかに切付けられ。老人の助太夫かつぱと轉ぶを起しも立てず切殺すを見ながらうろ〳〵助太郎 フシ顫ひ戰くばかりなり。□合圖を待つたる二人の中間音に驚き駈着け仔細聞くより。○爰は我等に御任せと助太郎が兩手を取る。△ヲ、出來した其奴も腰骨の立たぬ程踏みのめして跡から來いと。○顫ひ戰き逃屈むおてるを引立て兩人は フシ行方も知らずなりにける。○阿呆の癖に助太郎大聲上げ。コリヤヤイ大事の親を斷りなしに殺して。せめて葬禮になと出をらぬかと飛出づるを。□關内雁助息の根を止めぬかと取つて投げ。踏付け〳〵踏付けられ。○下地の抜けた其上に骨も手足も踏碎かれフシ腑抜になつて たわいなし。□主人の御用の金受取り立歸る若黨佐兵衛。かくと見るより飛びかゝり二人が首筋引掴み。何故に若旦那を手込にするぞと。左手右手へ蹴倒せば。ヲ合點とするりと抜き。兩方より切懸くるを飛退り抜合せ。雁助が物相天窓頤懸けて切下ぐる。こは敵はじと逃行く關内。袈裟にすつぱと切放せば。二人は敢なく息絶えたり。仔細は如何ぢや若旦那と立寄り見れば主人の死骸。ヤア南無三寶こは何者の所爲ぞと。立つたり居たり氣も狂亂。フウ扨は須藤六郎右衛門彦坂甚六が所爲よなと。○問へど答へず痛い〳〵と泣喚く。□エ、如何に愚鈍に生れたとて。現在親御の討たれさつしやるをよう見てはござつたぞ。中間小者もをり合さぬかせめ

て佐兵衛一人ゐば。地かく暗々とは討せまじ。國へ歸つて次郎右衛門様に何と言譯詮方なく。スヱテ泣く／＼死骸を取納め。詞おのれ兩人本望遂げいで置かうか。逃延びぬ其内に。地早う／＼と助太郎が手を取つて引立つれど足立たず。是究竟と竹縁を手頃に押折り杖柱と。ウすがれどよろ／＼たぢ／＼／＼かつぱと轉べば。口詞エ、腑甲斐ない御所存と。地佐兵衛が存中を馬乘物。コレ負れるに杖は要らぬと引奪れば。ウ詞杖をついたらちつとなりとも早かろがの。口ソレ其心故親を討たれ。のめ／＼と泣いてばかり居さしやると。地我も催す秋雨に。ばら／＼雛の告げわたれば。○夜もはや七ツ建仁寺の陀羅尼の音。口負うたる主人も鐘の音も。二人たらぬ／＼と突く杖に跡をし。た。うて 三重

中之巻

ギン幾八千代國富み。民も豐なる。入江殿のお城下侍町の弓小路。角屋敷須藤六郎右衛門隣は春藤助太夫。裏は互の奥座敷相の中垣隔てゝも。昔よりある境目の。相合井戸の相遣ひ他生の縁は深けれど。釣瓶要らずに汲む水の。柄杓のえにしぞ常ならね 地君もお國にましませ菊の御祝儀日。春藤助太夫御用について上京の跡。惣領次郎右衛門城より直に御家老以下。御禮廻りの留守の内。末子新七まだ部屋住の徒然や。小坊主に矢取させ楊弓に鬱を射はらす。隣は須藤六郎右衛門。其身は都國元は母に預けて置く霜と。いうて十五の妹の縹緻も好うて賢うて。知らぬは男の肌ばかり。縫針讀書琴も彈き姿は花の菊かさね。菊の節句の雛飾り召遣ひの女の童。出入の者の嫁娘寄集り。献いつ押へつ口菊酒の微醉紛れ。賄のおやなが頭取つて。詞何と皆様。此内裏上臈を乘物に乘せ。お霜様ぢやと嫁入事せまいか。是はよからう地お輿舁はお勝女郎おつや女郎。此方を媒人わしや宰領。這子も忘れずに乘せうぞや。詞サアよいわお輿參りやはい／＼／＼と。地お庭の内を幾廻り。めぐれやめぐる。菊の盃酒機嫌フシ女の遊び媚かし。地隣にかくと新七はいさ君しらずの矢づくろひ。一心不亂に狙ひを付け百手に心碎きしが。何とか射けん南無三寶をずつと外れて垣を越し。狙うてはよも中るまじ隣の菊の鉢植の。花をずつぱと射切つたり。驚く女中ちぎれた花をとり／＼口々こりや狼藉な。詞旦那様のお留守女ばかりと侮つてぢやの。假令花に中つたりやこそなれ。お霜様に矢が中つたら何とする。重ねての爲ぢや表から使を遣つて。地屹度付屆けした

がよいと喚く聲。新七迷惑氣の毒さ小坊主に吹込めば。庭に飛降りつる〳〵と豫て登りや習ひけん。フシ身輕に立木を這上り。詞是から申上げまする。此方の新七樣楊弓稽古の矢が逸れて。ひよんな無調法堪忍なされて下さりませとでござります。アレまだ踏付けた。堪忍せいなら袴着て。表から屹度詫言したがよい。垣越に內を見透して何ぢやの。地彌々聞く事ならぬ〳〵。ヲ、ならぬと フシ尤もながらはしたなさ。地ハテ騷がしう云やんなと氣の優しいも縹緻程。お霜靜に庭に下りコレ坊。詞今の逸矢は新七樣の業ぢやの。堪忍せいならしもせうが。詫言の言人が小さうて氣に入らぬ。お主樣が顔出して仰しやつたら。堪忍せまいものでもないとお霜が申したと降りて云や。地畏つたと飛降りる下に新七待受けて。聞いた〳〵直に詫言申さんと。地間の井筒の側踏へ。上るも足のうら若きまだ十八の角前髮。垣の屋根に手を支へ。詞手前定まらぬ稽古の矢先。大事の花を損ひ迷惑無調法。地申上げう詞がない眞平御勘忍。アレまだ人を踏付けた。粗相しながら高い所へ上つて。横柄らしい詫言爰へ來て。一口堪忍せいと云はれぬか。是は御尤も重々の不調法。然らば表へ廻つてお玄關から屹度お詫申上げう。詞アレまだ踏付けた。爰でなされた不調法玄關が知つた事かえ。地葉山繁山しげけれど思ひ入るには障ない。此笹垣をつい破つてつい潜る事は叶はぬか。參るに手間隙入らねども。夫も踏付けたにはなるまいか。兎角お氣を宥むる爲然らば左樣仕らんと。人は何とかいひなはを押しくつろげ。是も詫するうきふしや笹の中垣ぐつ〳〵と。引分け掻分けぬつと潜れば手を取つて。詞コレ申しお前はよう私が。大事の花を射切らしやんしたの。夫程憎うござんすか。憎くば花よりも私を射殺して下さんせ。地是は術ない何しに憎う存じませう。詞そんなら可愛うござんすか。あいまあいで御座ります。地其段は追つての事差當つた不調法。堪忍すると仰有つて下さりませ。詞イエ〳〵眞實可愛いと仰有らねば。何時迄も堪忍せぬ。地夫は迷惑そんなら可愛うござります。詞其可愛い者が每度々々遣る文の。返事は何故さしやんせぬ。サア返事は落散つて見る人の遠慮。イエ〳〵おしやんすな落散つても大事ない。地此方の母樣お前の母御樣へ文を以て。詞私を新七樣へ進ぜたい。貰うて下されば內證極め。御家老用人衆まで伺うて。誰ぞ仲人賴んで表向から。本式の緣が組みたいとの其お返事。兄次郎右衛門に申聞かせ。惡うお返事は申すまいと。內證大方濟んであるげな。ナウ皆の

衆さうかや。地さうとも／＼こんな好い首尾又とない。ソレ昔の忍びの段今此粹な世の中に。コレお霜樣コレ／＼と仕方で數へりや合點して。どうもならぬとフシ抱き着く。地それは此方も同然と互に緊めつ緊められつ。菊の下露打潤ひ。サア嫁入事仕當てたと。大勢中に取卷いてオクリ娘の。部屋へぞ押遣りける。地禮を了うて立歸る春藤次郎右衛門。お目出た酒のちよびちよびも。積りて我が身の醉となり。座敷へ來るもフシ千鳥足。詞奥覺悟しやもう堪らぬ。地とは何となされたと驚けば。詞醉うた／＼。盛殺された覺悟しや／＼。何をとつけもない事を。今日は九月の節句祝日。取分けて氣に懸る忌々しい事御意遊ばすな。地どれ社袴も脱がせましよ。お煙草も上つて醉をお醒しなされ。豫て深うも上らぬ酒。何方がお盛なされたぞ心もない。詞ハテ何方といふ敵はない。お城の御祝儀申上げ。直に御家老白山四郎右衛門樣へ參つたれば。よくこそ早々の禮至極忝い。サア通れと四疊半の小座敷にて。お盃を下されお强ひなさるゝ。ま一獻喫べますれば四獻ぢや御免あれ。四獻ならば四獻にせい是非も一つ。夫では死にまする。死ぬる面白い殺す／＼と御意なさるゝ。死んで退けうと四獻下され。直に篠崎四五右衛門殿で又强ひられ。澁谷志津馬殿で暫く休み。柴田支伯でとゞめを刺されて了うたわ。ア、氣の毒な地日頃お主も。四の字いふ事嫌ひながら。今日に限つて厭がる程繰返し御意なさるゝ。もう拜みます／＼仰しやつて下さんすな。詞ヲ誤つた物申すまい死んだやうにして居よう。地アレまだいのと氣に懸けて。厭がる程いふ深ざれもフシ日頃仲好き。餘りかや地兄の歸りを新七が白地ぞましの戀衣。長地染めてくやしききぬ／＼や又の逢瀨を何時／＼と。歸り濟る笹垣の。影をちらりと見る兄嫁。コレ戻るまい惡い／＼折が惡いと頓狂聲。聞取る弟知らぬ兄。詞コレ女房ども折が惡いとは何の折。いやそれはいやそれはとは。サアそれは母樣奥にお轉寢。お料理も未だお風呂も沸かず。お戻りの折が惡いと。心で思うたをひよつと申した事。けうとげなお咎めなされやう。地さまでのお醉でもなささうな。お留守の內に執成して申せと。お前への願ひ事お聞遊ばせ。詞別の品でもない隣屋敷のお袋樣。お霜御寮を新七樣へ進ぜたいと豫ての戀聟。此方の父樣母樣も幸ひと思召され。新七樣もお厭でなささうなれど。お前の心を量りかねて片付かぬ。地尤も次郎右衛門の堅い氣では助太郎を差置き。新七に先へ女房持せては。道が立たぬなどと云はれうとも。其段は此母が呑込んで云ふからは。

些とも苦うないと此譯をよう云聞かせ。兄の得心召さつたら嫁に貰ひたい。今日是を云出すは。詞幸ひ父様御用について。京都に御逗留の内云うて遣り。心用意もさせましたいと母様の思召。外に障る事さへなくば。地得心なされて進ぜられたら可かりさうなもののやうに。私も存ぜられますと語れば新七我が身の上。是は是は兄嫁御いかい御苦勞。したが餘程恥かしいものではあると。垣にひつしと身を寄せて フシ小うなつてぞ忍びける。地次郎右衛門機嫌好く。詞ハ、、何事の願ひかとこそ思ふたれ。娶る時は必ず父母に申すといふ。御兩親が御得心共身も厭と云はぬ事。次郎右衛門否と申さぬ。隣にさへ別心なくくれる所存に極らば。地願うてもない聟舅。次郎右衛門も殊の外悦びまするど申上げ。詞心の儘に御用意させましや。ハア醉醒で頭が重たい些寝よう。地母のお目が醒めたら起しや。お目に懸つて物語らんと オクリ 常の。居間へぞ入りにける。地女房嬉しさ飛立つばかり。サア新七様此間にちやつと戻つた戻つたと。呼ばれておづ〱這潜る箍の葉分の胎内潜り。何時の間に潜り習うてあの巧者な事わいの。よいや〱新七様。詞ハテわけもない面目もない 地御沙汰なしに賴みます。賴む事も何も要らぬ。互の思召す儘に埒が明いた。よう聟様ぢやと フシ戯れの。地折もこそあれ若黨伊兵衛申し奥様。詞只今京都より佐兵衛がお供仕り。助太郎様御歸りと云傳ふ。地それは嬉しや次郎右衛門様 お袋様も起しましよ。新七様はお迎ひにと。悦び勇み誰々も フシ疾しや遲しと出迎ふ。地助太郎お歸りと我でに喚いて。内入のよいほやほや笑ひ新七腰屈め。詞兄者人お歸りなされました。エイ弟者人健康で好かつたの。母者人よう戻つたなと何故いうて下されぬ。ちと持たせ振ぢやの。ホ、、、次郎右衛門あれ聞きや。京の水でいよ〱阿呆の垢が取れた。コリヤ助太郎親父様も一緒にお歸りなされ。直にお城へでもお上りなされたか。但しはまだ御逗留で其方ばかり戻つたか。親父様とは御親父の事か。サア其御親父に就いてなあ佐兵衛。たつた俺一人それは〱危い所へ。よう戻つてくれたな。母者人悦んで下されお神酒でも上げさつしやれ。地ヲ悦べなら悦ばう。お神酒も供へう。詞親父様は跡に殘つて其方一人戻りやつたの。京に變る事もないか。ア、變る事ござらぬ。京の女子は違うたものぢやと豫て聞いたが矢張女子ぢや。扇開いて舞ひますの謠ひますの。奴が尻は寒曝し。お婆の顏は皺だらけ。と云うたら引込んだ。それは面白い事であつたな佐兵衛。ア、

助太郎よ疎ましい年にも恥ぢよ京に變る事もないかと云ふは。親父様の事ぢやわやい。それにこそ曰く段々有馬山。どうで二七日程湯治せずば此痛は治るまいと。地片言やら口合やら次郎右衛門むくりを起し。詞エ、助太郎餘程に盡せ。ヤイ佐兵衛。何で俯向いて押黙つてばかりゐる。親父様は如何ぢややい。ハア申上ぐるも面目ない。今度殿様の御用御注文の趣に叶ひ。召抱へらるゝに極りしてると申す女は。豫て須藤六郎右衛門馴染を懸けし藝妓。殿の御手に入る事を憤り。彦坂甚六に心を合せ彼の女を奪取らんと。親旦那を騙し討にヲ、それ／＼。御親父は切られてぢやそれは／＼酷たらしい。地と云ふ助太郎を押退け引退け。佐兵衛を中に取卷いて。詞シ、シテド、如何ぢや／＼。其節拙者呉服所へお使に參り。立歸つて見れば須藤彦坂が仲間小者。助太郎様を手込にし散々に踏打擲。何は存ぜず彼の家來二人共眞二つに打放し。サ、さあそれは聞かいでも可い。スス須藤ヒヒ彦坂はナナ何としたやい。イヤ兩人は彼の女を連れ。直に逐電仕り。地在所知れずと聞きも敢ず兄弟思はず目を見合せ。詞ハア是非もない新七。せめてお身か我か一人附いて居たらばな。サア地來い弟用意せんと疊を蹴立て奥に入る。地母も途方に暮れながらコレおはる氣の付かぬ。用があらう奥へ往きやいの何をおろ／＼しやるぞと。云ひつゝ我もフシおろ／＼涙。地堪りかねて伊兵衛佐兵衛が髻引摑んでぐつと捻伏せ。地ヤイどう腰抜め。家來五人十人切つたとて何になる。何故雲の上海の底までもぼつかけて。須藤彦坂を討たぬやい。地何面目に生面下げてよう戻つたな。おのれが女房は身が妹縁を組んで悔しい。俺が面まで汚れたわい。大腰抜めと抜打に。恥知らずめとはたと打ち卑怯者めと丁ど打つ。地ヲ、さう思ふ筈道理道理。サア打て／＼。せめて次郎右衛門様か新七様か。お一人附いてござらば云ふにや及ぶ。直にぼつ懸けて討に往けども。何を云うても心愚かな助太郎様。打叩れて足腰は立たず。片息になつてござるを見す／＼見ながら捨てゝも往かれず。アアまゝよ。腰抜になつて助太郎様を國へ連れまし。此段を申上げ其座でどん腹かつさばいて。死なうものと分別は据ゑてゐる。其方今聞いてさへそれ程口惜がるもの。地其座に居ての其無念。伊兵衛思ひ遣つてくれとスヱテ大聲。上げて泣きければ。詞ム、まだしもの事よく云つた。生きてはゐられまいサア腹々。地伊兵衛介錯頼み入ると押肌脱げば。母は驚きやれ狼狽者。子供が一生の大事人の家來も我家來にしたい時。犬死して主に手をつかする

か。倶して力にならうとは思はぬかと。縫ひ止め給ふ所へ。次郎右衛門新七股引に脚絆引締め。はんちや合羽の旅扮裝兵糧の器腰に引付け。助太郎が旅の具提げ立出づれば。妻は三方熨斗土器敵をうちくりよろ昆布。腰元に酌取らせ　フシ給仕の座に控ゆれば。地次郎右衛門助太郎が手を取り。上座に直し飛退り。詞兄助太郎殿へ申上ぐる。父の仇は倶に天を戴かず一日遅なはれば一日の不孝。須藤彦坂が所在を尋ね。早速討取り父亡魂に手向くる爲。只今お供致し打立つ所存旅裝束更められ母人にもお暇乞。地目出度く門出のお盃御頂戴なされ。御尤もに存じますると手をつけば。詞ハ、ア母者人あれ見さつしやれ。俺を兄者人というて兄貴が芝居事をやらるゝ。さらば返答仕らうか。いかにも弟が申す通り父の仇にはちんぷんかんぷん。やい／＼ぬくめ默れ。扨も

扨も情ない。あれが汝が目には芝居事と見ゆるか。どんな藥呑ませたら治ろぞい。コレ次郎右衛門。助太夫殿のお指圖で。色幾年か其方を兄にし。あれを弟に仕替へて内外濟んで來た事を。何と思うて今日改みやる。詞ム、聞えた。扨は其方と新七は妾腹で。其方ほんの兄弟助太郎は此母が産んで。さればこそ親衆とは種一ツ。腹異りの兄。其方は次男の次の頭字を取つて助太郎。次郎右衛門なれ共。入替へて其方を兄にして置かつしやれたは。配偶の深い御所存。地其父御がお果てなされたれば。母が心にいしふしの繼母根性も出來ようかと。思うての遠慮ぢやの。詞それは難面い。尤も腹は貸さねども。此方も新七も忌の内から我手で育て。地助太郎同然に最愛さ大切さ。隔てる心は微塵もない。遠慮せずとも矢張此方兄になつて。阿房が行

末を賴むぞや。地殊に大事の敵討あんな者連れて往て。まさかの時の足手纏ひ邪魔になるは見えてある。捨てゝ置いて往て下され。詞コリヤ助太郎慮外な奴の。いつもの通り兄の次へ地直りをろうとありければ。詞母人それは惡い御合點。腹異りの背異りのといふ些細の穿鑿所ではござらぬ。親父樣が存生なればいかにも今までの通りで濟めども。お果てなされた跡。新七も私も親と敬ひ尊ぶ人は。助太郎殿除けて外にはござらぬ。地此事に於ては甲が舍利になつても。改めねば我々が天罰身の冥加が恐ろしい。是ばかりは母人幾度でも御意を背き。御惣領にてまする。詞弟出來た天晴の侍ぢやな。有るなら何ぞやりたい。サア今日から此助太郎は御惣領ぢや。ヤア惣領ぢや／＼京から戻つた惣領ぢや。錢はもどり／＼。ヤイ／＼地まだあだ口叩くか默つてはゐを

らぬか。すりや如何あつても兄を兄にするぢやまで。ハア是非もないそんならそれは兎も角も。其方の望の通りにしようが。敵討に付けてやる事はいかな〳〵ならぬぞや。それはどうした悪い御所存。兄を兄に改むるも助太郎殿に初太刀を討たせ。ア、コレ云やんな。初太刀を討つとは人らしい者の事。情なや佐兵衛が話を聞けば。彦坂須藤が家來といふは仲間小者。町人同然の一本指それにさへ踏叩かれ。指いた刀に手も得懸けぬは。阿房ばかりぢやない生れ付いた臆病者。須藤彦坂に出逢はゞ。嘸や未練卑怯な恥さらし業さらし。一人でもある事か二人の敵討たうとしたり。兄を助け庇護はうとしたり。兄弟の衆の其時の足手纏ひ。口で云ふやうな事であらうと思やるか。親ひは申納め兄めに心引かれて。萬一其方衆に不慮の事もあつたらば。其時の悔み悲しみは如何ばかり。爰をよう合點して阿房が事は構はずとも。其方衆ばかり土を穿ち草を分け。所在を捜し首尾好う敵を討つてたも。親に離れた悲しみさへあるものを又其上に重ね〳〵。苦勞をしやるいとしやとかつぱと伏して泣き居たる。次郎右衛門涙ながらお心遣ひお慈悲の詞。身を紛に碎いても報じ難き母の御恩。さりながら又其上を御合點なされ。助太郎殿を跡に殘し我々ばかり。假令敵を討果せてもあれ見よ。春藤助太夫が三人の子供。二人は健氣に敵を討ち一人は跡に殘りし。臆病者大腰抜と世の嘲り。助太郎殿一生人中の交りならぬのみか。末代までの家名の恥辱。冥途の父の魂魄まで恥面かゝせまするは。如何にしても口惜しい。我々ばかり參つては孝行却つて不孝となる。御同道申して敵にお出會なされても。働きも何も要らぬ。春藤助太夫が惣領助太郎。親の敵遁さぬ是ばかりで日本一の大手柄。跡は我々受取り些とも足手纏ひにならぬ。是非御同道仕ると事を分けてぞ意地張りする。もう此上は力なしいかにも供をさせうぞと。旅の裝束取持つて。立寄る振に助太郎が指添ずはと抜く手も見せず。左手の脇腹ぐつと突く。あいたゝ〳〵やれ人殺し〳〵。佐兵衛藤の丸買うて來いと。わめきながら手足をあがく。是はといたはる嫁新七伊兵衛佐兵衛も仰天すれば。次郎右衛門詰懸け。餘り呆れて物が云はれぬ母者人。こりや如何でござる。ハテ供をさするわいの。供とは。サアサア〳〵其方衆とは道が違うて。是は父御の冥途のお供さすわいの。さぞや次郎右衛門の心に。面當な事をすると思やらうが。願うた後生も徒になれ更々さうでない。段々と事を分けてくゝめるやうに

云うてたもる。地此中でさへきよろ〳〵わんと手悪戯ばかりして。時々虫腹の發るやうにつくしをる。 思ひ廻せば廻す程。大事の〳〵敵討に附けてはやられぬ。やらねば家を大事に。尤も至極な詞に背くやられはせず。所詮此奴がある故と思ひ諦めて突殺す。母が心が眞の心であらうと思ふか。地他人の子の利口なより。阿房の我が子の可愛いは親の習ひ。心は氣違ひになつてゐるわい。詞今母に殺さるゝ此死を京で父御と一緒に死んだら。何ぼ程嬉しからうと思ふぞ。地死んで冥途へ往たりともよもや父御が好う來た。出來しをつたとは仰有るまい。ひよつと勘當でも受けたらば。極樂へも地獄へも得行かいで。三途の闇に迷ひをらう。夫が可哀い〳〵と。初めてわつと泣口說き。スヱ掻口說く。地母の誠を引く血筋臨終の膽にや徹へけん。詞すりや俺は親父樣の。

冥途の供をするのぢやの。ア、冥途の供といふものはいかう痛いものぢや。術ない〳〵。とても往く供ならば。追着くやうに地早よ往かうと フシきりゝ〳〵と引廻す。詞アレ〳〵誰も聞いてか立派な事を云うたわいの。もう物いふな取亂すな。其一詞が釋迦如來の。地一代說法のお經より貴うて。成佛するぞ南無阿彌陀佛〳〵。南無阿彌陀佛と引廻す。劔は則ち彌陀の利劔日頃の阿房を斷切つて。最期に利根を現せし。フシ武士の胤こそ恥かしき。地各々はつと縋り泣き中にお春が繰言の。思へば先刻の四つ字盡し滅多に心に懸りしは。父樣や助太郎樣のこんな前兆であつたかと。泣けども〳〵 フシ果しなく涙に。限りなかりけり。地母は氣るゝ氣を取り直し。詞サア〳〵兄弟の衆。助太郎が此世に居ぬからは。世上の誹も遠慮もない。お春には母が附いてゐる。母

にはお春の附いて居やる跡に案じる事はない。地うちにつこりと笑うて門出目出たう歸りを待ちまする。詞ア追付け吉左右申上げんいさおさらば新七來いと立出づる。地何時の間に伊兵衛佐兵衛袴はせ折つて身輕に拵へ。御供と引添うたり。詞供とは誰が供。扨々倅等は物に狂ふか。身に附いて來て留守の內。母の介抱は誰が申す一人も供叶はぬぞ。夫は近頃お情ない。お主も相傳家來も相傳。譜代重恩のお主の敵を。討ちにお出なさるゝ主のお供に外れて。我々が一分立つべきか。地跡の御用御介抱は我々が女房どもが承る。是非に御供と聞入れねば。詞コリヤ兩人目の前の事に氣が付かぬか。彼の曾我の十郎五郎。親の敵祐經を討たんと御狩の假屋へ忍び行く。鬼王團三郎といふ二人の家來御供と望む。老母の介抱賴み入ると一人も召連れず。地兄弟假屋へ忍び入り思ひ

の佳に敵を討ち。名を千歳に耀かす曾我殿原には及ばずとも。我々も兄弟家來も二人。召連れざるは昔の吉例。但しは供をして吉例を背くか。サア返答せいと一句の理窟に遣込められ。然らばせめて國境まで。ヲ夫は勝手にせいサア來いと。立出でんとせし所に申し〳〵御兄弟。先づ暫く隣屋敷の垣越に女の聲。今日此方へも京都から家來が歸つて承る。申したい事もあれど故と申さぬ。悲しみは妹のお霜。親の敵の妹なれば新七樣が。よもや女房に持つては下されまい。今生では添はれぬと。たつた今自害して絶え〴〵の息の内にも。新七樣の顏が見たいと死にかねて。苦痛するいぢらしさに爰まで連れて參つた。仇は仇是は是。武士の情一目見せて下されまいかと。云へども心おき合ひて　兎角の應へ云ふ人なし。コリヤ弟此期に臨んで何の遠慮。情知らぬは匹夫の勇面見せて往生させい。南無阿彌陀〳〵と口に稱名目は涙。御免の上はと立寄れど姿隔つる笹垣の。爰に〳〵と云ひつゝ井筒に取付かせ介抱し。互の顏を水鏡。見せたらば新七のいた〳〵。母人おさらばもう往きやるか。女房さらばあいさらば。サア來いと韋駄天走り隣は娘の臨命終。此方は門出の愛別離苦兎にも角にも世の中は物思へ。とのならはしや。春藤次郎右衛門が母女房。兄弟敵を討たんとて出し跡屋敷を差上げ御城下の町端れ。海道筋の藁屋の軒。世を忍ぶには惡けれど。若しや往來の話にも。子供の噂聞く便り伊兵衛佐兵衛を便りにて。去年と暮して春も來ぬ子供が上に咲く花を何時と待つ間のとけしなき。伊兵衛は庭に藁仕事。草鞋草履の作り賣。主從女夫六人が藁に露命を繫ぎける。是は扨奧に又お泣聲。エ、氣の毒と塵打拂ひ。次の間に打咳き。其樣に引籠つてばかりござる故心の晴るゝ事もなう。御兄弟の上に親旦那助太郎樣の事まで取集め。兎角お歎きの媒となる。御兩所ながら先づ是へ。ちと人通りも御覽なされ。此間も佐兵衛一緒に繰返し〳〵。申上げても聞入ない。萬一御兄弟御武運盡き。返り討にお逢ひなされうとも其取沙汰もある筈。まして御本意を遂げられたらば。日本國が動いて是沙汰有る筈。兩方共に何の風説風聞なきは。まだ敵にお出會なされぬと見えて大事の所。泣いてばかり御座なさるゝは近頃以て不吉至極。お袋樣の仰出なされてか奧樣が。扨々御未練千萬と。辱しめて氣を慰むればいやなう嫁御は年若な故嗜んでも泣きやらねど。堪へ性のない此年寄がふと思ひ出し。嫁御に問へば兄弟が旅立の折柄は節

季の明くる日。拂餘りの金も少々不足な路銀と云やる故。地さぞあらう國を立つて七月餘り。最早それも遣ひ了うて不自由なめをしては居ぬか。小い時から日を半日何一ツ不自由な目。手痛い目に逢はぬ者。今頃はさぞ心遣ひに身も疲れ煩うては居ぬか。可愛やと思ふたりやはや涙。詞あの人も泣きやる叱る其方もそれ泣きやる。地何時立歸つて此涙泣止ませてくれるぞと。スヱテ云ふも涙の種となる。物思ふ身の明暮はフシ其身に。ならではよも知らじ。詞御尤もの御喞ち。我我も其心付いたる故大方才覺仕寄申す。行方を尋ね御手に渡し些とも御不自由させますまい。お心苦しう思召すな。ぬいめもみよめも追付け歸らうお供に連れられ。地幸ひ一の宮の太々神樂。見物ながら御參詣。首尾好う御本意遂げられ追付け御歸宅あるやうに。氏神へ御祈誓。詞與

樣お勸めなされませう。ほんにそれいの地評判のある太々神樂。母樣お參り遊ばさぬか。詞ホ、、、、面白い事ぢやげなれど手前の悲しさに打忘れた。みよもぬいも連れるに及ばぬ。つい此形で參ろかいなう嫁御。ア、みよもぬいも人に雇はれ毎日の草臥。私お供申しませう。地お笠よ帽子と世話焼けば。詞ハテ何も要らぬわいの。此方も着の儘サアござれ。エエ折惡い佐兵衛が留守。どうもお供が申されぬ。詞したが今までのお乘物に勝つて。取り敢ぬ其御參詣を神も結局御滿足。ヲそれ／＼地神は見通しと。參る姿は輕けれど。願ひは重き氏神のフシ宮居に打連れ詣でらる。地扨々好い首尾よい時にお泣きなされ世話なしに先づお二人は片付いた。此佐兵衛何故遲いぬいもみよも何してゐる。此間にちやつと戻れかしとぶつつき／＼仕事片付け。さらば一服仕ら

うと煙管相手に胸算用。詞先づみよが金は一錢も疵付けずと旦那へ渡し。ぬいめがのでは其內を跡へかうして又其殘りをかう／＼して。其跡が是程ある。それと是と一ツにすれば都合是程。それでは月にかうお使ひなされても一年程はゆつくりある。地忝いと心の算盤高合せて見る所へ。人に雇はれ賴まれてオクリ外と。內とを千鳥懸ギン襷前垂。引締めて。佐兵衛に連れてフシ立歸る。詞ヤおみよおぬい地なら兄樣伊兵衛殿。佐兵衛樣戻りがけにお寄りなされ。彼の方の首尾好う迎ひの人を連れて來たとお知らせ故。斷り云うて連立つて歸りました。悅んで下されといついつよりも內入よさ。それ待ちかねし珍重々々。詞佐兵衛戻つてか大儀々々。して其迎ひにわせた仁は。イヤ是に居りまする。エ、是は／＼遠い所をいかい御苦勞。何が扨手前の商賣。儲ける筋なりや

唐天竺へも參ります。扨爰元のお內儀。昨日見えまして二年切つて五百匁か强て五百廿匁といへども佐兵衞殿が今日わせて。是非六百匁なければと段々の斷り。五百五十匁に極め。駕籠も持せて連れに來ました。地手形の文言は近松が書いて置いた。傾城奉公請狀の通り違ひはない。サア御兩人判なされ金渡そと。フシ財布の口を解きかくる。詞夫は段々の御了簡忝い。コリヤおみよおぬい。此間に髮も取上げて洗濯物でも着換やいの。イヤ〳〵髮を結はしやつても町の風は此方へ向かぬ。どうで敎へて結直さす御無用〳〵。かう證文を取つて金渡すからは。もう此方衆の內儀ちやないぞや。此方の奉公人。必ず必ず甘へた面して逢ひになどござりや一度は赦す。二度目からは見知越により棒を振舞ひます。まつこと逢ひたくば一夜が廿八匁。鴫尻にさへ下さるりや何方でもござれ〳〵駕籠の衆。サアおみよ駕籠に乘りや。地もう去にませうと立上れば。詞ハもう往くやうになつたか。佐兵衞樣おぬい樣。今まではいかいお世話になりまし忝う存じます。慮外ながらお袋樣へ好いやうに。お執成仰しやつて下さりませ。伊兵衞殿もう往きます。隨分達者で次郎右衞門樣新七樣のお役に立つて下され。コレもう往くわいの。むつかしながら仰向いて顏見せて下され。エ、鈍な何やら云ひたい事どもが胸にたんとあるけれど。地一ツも口へ出ぬわいのとわつと叫んで伏轉べど。夫を始め誰々も。何と挨拶泣入つてフシいたはり。起す者もなし。詞コレ今までとは違ふぞや。大金にせにや成らぬ大事の身を其樣に酷う持つて貰ふまい。地サア乘りやと駕舁くるめ助け乘せて舁出づる。おぬい驚きコレ傾城屋殿待つて下され。詞私が身の代ももう渡るか。定めて一緒に連れてこそと先刻にから待つてゐるに。おみよ樣ばかり連れまし私は如何して下さるゝ。地勸めするなら一所で一緒にせうといひ約束。詞サア金渡して私も一緒に連れて往て下され。ムウ、茂陞々々。其許の儀は又外に大分望人があつて。もう爰へ見えませう。賣物には花飾れちや髮も結うて美しう。身拵へして待つてござれ。エ、口惜い金が足らいで。大事の代物を外の手へ渡すかい。地殘念な事ではあるわいと。鑁鋸娑らぬ口先でフシ滿足させて立歸る。地一合取つても武士は武士互に心耻合ひて。もう往くかともさらばとも云はぬ男に又耻ぢて。女房は猶物云はず兩方詞泣別れ。心の內の悲しさをオクリ云はぬは。へ云ふに勝りけり。地佐兵衞涙を押隱し。詞サアサア女房。今でも迎ひが見えたらば。つい往くやうに身拵へ。兎角女は髮形。其取上

髪結直せろさ。あいと縁へ立寄りて。棚の隅から取下し取散したる玉櫛笥。向ふ鏡の塵取つて見れども見えぬ胸の内心の内の悲しさを。誰にかつげのくし〳〵と。涙を直に鬢水やすけど。解けど髪よりも。むすぼれ解けぬ我が心。見と夫は其傍に。見て見ぬ振のさぞ。やさぞ。むせでしぼる身の油。梅花の花の露よりも。いつそ露とも。消えなば消えね。ア浮世ではあるわいと。胸にと息をつくも髪。かゝれとてやは烏羽玉の明暮。千筋百筋と引伸ばされし。親の恩。其教にも一筋に。其大事と撫附し夕の。床の名残まで。取集めたる大髷。心の細き元結に引緊め〳〵結んでも。顔見交せばしやらどけの。わつと我が身を投島田。一度に平伏し泣沈む。佐兵衛殿内にかと。財布かたげて内に入るむさ親爺。腰打掛けて高趺座。なんと先刻の直段でやらしやるか。夫でも飛付くやうにはなけれど。是非とある故錢持つて迎ひには來ましたが。此方に山家出の後帶がいうてきてある。同じくは夫にしたい心。あながち強ひはしませぬと。弱みを見込んできします る。ハテ扨此廣い世界後帶の尼も婆もなうてかいの。何と此方のもあれ見さしやれさつぱりと髪も結うて。昨日とは格別違ふがや。見直してまあ五百増されぬかい。サアさう思うてちやに依つて商ひが出來ぬ。此方の商賣は。小い舟に雨が降らいでも苫葺いて。とんぎやろ〳〵と湊々を漕いで廻る水商賣。室や鞆の女郎屋とは違ふわいの。何ぼ楽しう髪結うても。立居に肩で擦れてつい亂ける。亂れた髪で目利せねば大きに當が違ひます。五百は愚か三文も成らぬ〳〵か。ハテ是非もない。負けてやろぞ打つて置きやしやん。さらば賓を渡さうか。此證文に判なされと。投出す鳥目一貫文。時の相場は十二文どうしかけして遣うても。十五文綿ぎる物着て。定めぬ浪の契り賣る。船惣嫁とは知られける。おぬいはわつと泣出し。扨も〳〵恥かしや。とても女子に生れうなら好い縹緻になりたいもの。おみよ様も女子私も女子。縹緻の好いと惡いとで。五百五十匁銀出して悦んで連れて去ぬるもあるに。錢なら僅た一貫を海山ほど恩着せて。厭な顔して買はるゝとは白い黒いの違ひの段か。面々女房の身の代でさへ恁う違ふもの。嘸や夫の忠義も違うて。面目なからう佐兵衛殿。それが悲しい〳〵と。かつぱと伏して泣叫ぶ。佐兵衛不便さいや増しに共に心は亂るれど。エヽ未練なり女房。其方と伊兵衛は血を分けし兄妹。惡うても大事ない伊兵衛は縹緻好し。彼方此方へ

取替ゆれば可けれども其處が天命。生れ付いた不縹緻が泣いても悔みても今更 地美しうフシなるべきかイロと云うて產付けた親も恨みられず。おみよが五百五十匁も汝がた働た一貫も。現在女房に勤めさせ。其價を主のお役に立てる。忠義に輕み重みはない。悔むな泣くな。なう伊兵衛さうぢやおぢやらぬか。いかにも〳〵。一貫の錢の價は十二匁。世間通用の秤で懸けたらば十二匁あるべきが。今日此世界を照さつしやる天道の秤では。此みよが身の代も。其一貫の十二匁も些とも輕みはあるまいぞ。よしない事を悔まずとも。地にっこりと打笑うて。往てくれたら詞なう佐兵衛。それ〳〵。兄も夫も 地何ぼう過分に存ぜうと。云ふ聲共に咽び入りフシ前後。不覺に見えにける。詞是はかゝらぬ。それ程悲しか賣らぬがよい。忌々しい奉公人こちや要らぬ。どれ錢返しや廢しにしよう。地なう泣きやしませぬ是見さしやれ。ほや〳〵笑うてゐるわいの。そんなら兄様佐兵衛様もう參りますと。地思ひ切つてはなか〳〵に。二度と泣言云はゞこそ。フシ先に進んで立出づる。地所へ戻りかけの二人のお主。詞アレ〳〵見知らぬむさい男が。泣いてゐるおぬいを何處へやら連れて往くわいの。地伊兵衛佐兵衛あれ留めぬか。ハアはつと敗亡し譯は云はれずぐどつけば。エまだるいと駈出す。二人の主を二人が引留め動かせず。詞こりや何故留めるこゝ放せ。地イヤ其段はと狼狽ゆる。そんなら放せイヤ御無用と。引留めながら見ぬ顔ながら伸上り見れども辻を横切に影も。隠れて 三重

道行對の花鰔

ハルフシ振出すや。詞とつかけべい。さきのけろ。○お鍋が粥餅練れたら持て來い合點だ。昨夜も三百張込んだ。裸で道中なるものかコリヤ。ムコリヤ。二人ハア してこいな。どつこい振れ〳〵振りこめさ。地我が身世にふる。花の雨 フシ涙の。雨の果てしなき。伊兵衛佐兵衛が忠義より女房々を故里の。緣によるべの苦界させ他人ならざる聟小舅。一文奴と様を變へ。スヱテ敵を狙ふ御主人に。何とぞ巡りあひの宿。フシ泊り〳〵を。袖奉加。紺の奴服作り髭。ギン油けもなき備後の國。フシオクリはや立へ出でて。フシ行く先は。當處も波の吉井川。泳ぎかねたる其日過。江戸木賃泊りの糧盡きて。五文に命繫ぎ錢。○詞くれずは通ろ。ムくれたら振るべい。二人ハルフシなげる足取。拍子取。鳥毛とり〳〵振もよき。合歌今度殿様のお登りよ見れば。柿の頭巾に尻をでつかいからげて。ヤツシツ〳〵。挟箱持ちなヤヨ。生中に。ナホス生中似たる俤を。もしは尋ぬるお主か

と。鳥毛ふりさし走り着き。見れどもさうでない〳〵〳〵。あれでもないか。ないく〳〵〳〵。是でもないか。ない〳〵〳〵〳〵。似ぬこそ道理と奴と奴が顔見合せ。汝は汝で。俺は俺だ。逢うた〳〵逢はぬ物は奴服と互の忠義は一對の。挾箱持ちなヤヨ。なまなかに。急げばまはる車坂。急がぬ顔でぶら〳〵と登る兄坂弟坂。親の敵を持ちし身は倶に天を戴かぬ。古き例もあるなれば。空を翔り地を潜り出逢ふ所は優曇華の。華々しくも切卷くり。念なう本望遂げ給ふ。お旦那達の御武運を。祈る心の底。筒男兎原の宮居伏拜み。里とばなれて濱傳ひ寄藻掻く子の聲聲に。つらい〳〵と逢ふ度におしやるのエチヤエ。辛か。引かしましよ憂き勤め。勤めのこんたんでのエチヤエ。替る。枕は。數々とおしやるのエチヤエ。替る。中にも只一人。忘られぬ。こんたんでのエチヤエ。歌ふ一節川竹の。うき事聞けば可愛やと。思ひ出したる妻の事互に。口に得云はねど云合せたる如くにて。目に洩る涙はらはらと。髭は流れてまだら顔。浪々の身を悔み泣き。空つ腹ぢやにがいにしやくるな。お身ほえな。悔むな。歎くな肌身には。女房代りの此銀を妻と思へばいそ〳〵と。急げば早く。難波津の町々小路船着を。もし其人やおはせんかと爰の。人立彼處の辻。宿入下馬先押立てろ。踵踏んつけ手先を揃へ。頤突出ししてこめさ。とん〳〵蕃椒かつかぢり。冱寒の冬でもかじけない。ふるや。ふる〳〵。故郷をお立ありしは去年の秋。世上は春と知りながら。我が身の花はまだ咲かで。心を盡し身をづくし。主人に尋ね。大坂の町に。暫くへ休らひぬ。

下之巻

大和路や。こゝにも立てる御社は郡山の町端れ。弓矢神とて武士の歩みを運ぶ鳥居の馬場。家中の面々入代り。馬の庭乘遠乘の稽古數々ある中に。其名も高市武右衛門が馬藝勝れし身の譽れ。夫に日傚ふ庄之助。親に勝りし器量よし衣紋もよしや大振袖。袴の着こなし凛々しげに年はいざよふ月毛の駒。うち八寸の手綱の習ひ。寄らず眛かずかい繰り〳〵。しと〳〵〳〵白泡嚙ませ歩まする。轡の音はりん〳〵〳〵。りんと坐りし腰付に。色と情を懸聲の。はいはいはた〳〵松虫の。鳴音と優しくしぼらしく乘戻し引廻し。めぐる輪乘にくる〳〵〳〵かつし〳〵。かし〳〵〳〵。さら〳〵さつと。乘飛び〳〵乘飛ばす。蹄

に蹴立つる砂煙風新柳の前髪ざかり。駒もなづみて肝つよく。鬣振つてナホス嘶ゆる聲フシゆゝしくも亦潔し。詞武右衛門打笑み此間の稽古に勝れ。腰のかたまり手綱の心得大方に極る。併しいつも云ふ如く習うた手に執着せず。及ばぬ所は工夫をしめされ。ハア、いかにも心得ました。今日は殊の外鞍心も好うござれば。今一馬場せめませう。アイヤ〳〵。進む者は退き易し。古來より一藝に能ある者は。人の譏り嘲りをも厭はず。只心長う調練せし故其名を上ぐる。隙のいるは苦しうない。絶えず心懸けるが肝要。地今日は稽古も是ぎり神主方で休息し追付け歸らう皆參れ。ない〳〵〳〵と下部ども。フシ馬引連れて入りにけり。ギン戀ならぬフシ義理と情に。繋がれて。地人目忍べばおのつから麗かならぬ日影の身。長地おてるは派手の振袖をとめて目立たぬ町模樣目深に着なす綿帽子。雪も耻らふ手にひや〳〵野風厭はぬ神詣で。フシ鳥居の元に差懸り。地向ふ並木の馬場先へ頰被りせし旅扮裝。二人連にてフシ來りしが互に見合す顏と顏。詞ヤア傳八樣か。是は叔おてる殿。エヽ胴慾な人ではあるわい。此方衆の爲思ふ此傳八を皮にして。身ばかり抜けりや濟むかいの。跡のもやくり大抵の事か。と滅相な人をばらして。ア、コレそれを。おつと切つた事は云はぬは。二百兩の身の代を此熊手が横取もしたやうに立ていと親達が突張つて催促。口ついだ悲しさ。待つて下され尋ね出して埒せうと。手摺退歩で草鞋がけ方々と尋ね廻るは。正眞の盗人におひ。路銀も脚もたまるものか。サア六郎右衛門は何處にぢや。連れて往て會はさつしやれ。早う〳〵とフシせり立つる。地おてるも難儀を推量し成程お道理さりながら。私が方から思はぬ男無理無體に連れて退き。厭と云へば殺すの切るのと夫も厭ひはしませねど。詞厭がる者を命に代へて。思うてくれるはよく〳〵と。ひよつと義理に氣が付いて。馴染めば憎うも思はれず。まあ繋がつては居やんすが。サア其居やんす所へ早う行きたい。サア其處が氣の毒。知らしやんす通りの身の上。連立つて往んでは。ハテ其遠慮は人が違ふ。此熊手が物欲しがらぬ法もあれ　所を見ても人にや云はぬ。サア私こそさう思へ。ひよつと知らせてどうあらうか。エ、埒の明かぬ人もうえい〳〵。コリヤ與六。かうせうわい。所詮かの和郎に逢うてから。二百兩が何として。出ぬものに世話燒かうより。こちとが骨折損にして。おてる殿を親達へ渡せば言譯立つでないか。いかにもさうぢや。歩まつしやれ連れて歸るとフシ引立つる。地後へ來かゝる侍が棒鞘

の刀を提げ。此躰を見て待つたく〳〵。詞扨は其方は京の肝煎傳八といふ者な。先達て樣子は聞く。身は加村宇田右衛門といふて。六郎右衛門とは懇意の仲。おてる殿の身の代いかにも〳〵呑込んだ。いはゞ纏の金子。手前が取替へ渡さうが。途中といひ些と急用あれば今は成らぬ。近日身が屋敷へ來て受取れさ。ア、イヤ纏でござりませぬ。これは二百兩の身の代。見ますれば御仁躰と申し。お侍の仰しやる事定めて違ひはあるまいが。其屋敷も存じませず。近日の明日のと延引致すも氣の毒。とてもの儀に今お金を遣はさるゝか。六郎右衛門樣にお目に懸るか。おてる殿を連れて歸るか。三ツに一ツ只今埒が致したい。なう情なや何の因果に口ついで是までの難行苦行。今日見付けたは天の與へもう此上はいかな〳〵。一寸も待つ事はどうもイヤサ成らぬと云うて今金は持合さぬ。身が請合つて渡さうと云ふからは違ひはないさ。イヤ違ひがなうても隙の入るが迷惑。矢張連れて歸りませう。ハテ扨事を分け云聞かすに愚痴な奴かな。えいは途中の事なり。此宇田右衛門初對面なれば覺束なう思ふも尤も。然らば金を渡すまでおてる殿をわい等に預ける。ハア、それでさつぱり埒明いた。私宿は此郡山の町端れ酒屋から三軒目。丸に井の字の印が出してござります。何時でもお金と引替サアござれおてる殿。そんならわたしや參ります宇田右衛門樣いかいお世話。ア、何の〳〵。コリヤ傳八追付け金を持たせて遣る。夫まで預けた大事に懸けい。ア、大事にかけいでは。地直に小判のおてる殿。うか〳〵して鳶。引つかけられては熊手が立たぬ。與六ぬかるな來い〳〵とフシ引立て旅宿へ歸りける。フシ跡見送つて。地宇田右衛門一寸逃れの請合も。心當處は隱匿ひし六郎右衛門か所持の刀。實代なして埒明けんと急ぐ向ふへ立歸るは。高市武右衛門庄之助。詞これは〳〵御親子共に稽古おしまひはやお歸りか。只今御宿所へ參つたれば此所へお出と聞き。直に參るも些と急用。貴殿御存じの通り此度殿鎌倉御參覲につき。幸ひ此刀をお求めなされ御献上になさるゝ筈。中々御意に入つたれども。念の爲貴殿にお目に懸くるやうにと仰せられ。夫故持參仕つた。ちよと御覽下されいと差出せば。いかにも〳〵。御發足は近日なれども刀をお求めなさるゝ儀は。此武右衛門曾て存ぜぬ。して其刀は何者が所持致しました。されば手前が懇意に致す浪人。重代でござれども尾羽打枯して賣りまする。正眞の寶は身の指合せとやら。備前長光ぢやと申す。尤も無銘ではござれどもなか〳〵出來の好い物

さ。イヤ申し父様備前長光ならば銘がある筈。無銘とは合點が參らぬ。ヲ、そりや其方達が知らぬ事。其鍛冶の時の氣に隨つて銘を切るもあり切らぬもある。どれどれ殿の御献上とあれば。大切の儀先づ拜見致さうと。地拔放して燒刃鉄色切先物打鎺元。中心を改め眉を顰め。詞イヤ何宇田右殿。此刀の直段は何程と申すな されば直段は半金三拾枚。殘念な事は。憾に本阿彌より取置きし折紙紛失致したと申す。ハアいや紛失迄もなく折紙はござるまい。宇田右殿此刀御挨拶は御無用。とは何故な。ハテこりや正眞とは見えませぬ。卒爾な物を御前へ上げられ。後日に何の彼のがあればお爲にならぬ兎角御無用になされい。ム、卒爾な物と仰しやるからは。扨は此刀ハテ長光ではござらぬ。殊更殿の御献上。鎌倉にて備前長光と御披露あり。目利者に拜見させ長光でないとあらば差當つて殿の不調法。其許は御自分遠慮致すは事に依る。贋物と知りながら見遁しには成りませぬ。ム、すりや此刀は贋物でござるな。されば燒刃中心の鑢目共よく似せたれど。平たう申さば鈍物切れまいと存ずる。イヤコレ武右衛門殿。贋物なれば切れまいとは御了簡が偏る。例へば宗近正宗が鍛つたる刀も。切味鈍きは用ゐるに足らず。この如く無銘の刀も切れる時は干將莫耶が劒に勝る重寶。もし此刀試し見て。よく切れたりとも御献上にはなるまいかな。そりや此武右衛門が不調法目利違ひと申すもの。ム、殿がお求めなされうとある儀を早く賣主へ申したれば。此儘にも返されず。ハア、何と致さうなと。地金の入用差詰る。刀の吟味に當惑し只棒鞘を瞻りゐる。地側にさかしき庄之助。詞イヤ申し宇田衛門様。其刀の切味御覽あるは易い事。死罪に極まる科人あらば引出して檢し者。此儀は如何と云はせも立てず。コリヤ／＼悴何を差出る。死罪の科人あればとて俄の事なり。我儘にはなるまいと。地云ふに氣の付く宇田右衛門それよ／＼。好い事思ひ出したり。詞昨日春日へ參詣の歸るさ。大安寺の堤に小屋をしつらひをる非人め。小兵なれども中々骨組逞しき奴。檢し者には是究竟。地今宵ひそかに立越えん貴殿も誘引仕り。刀の切味お目に懸くれば利きと鈍きは明白たらん。御苦勞ながらと勸むるにぞ。退引ならぬ證人も。主君のお爲と打頷き。ヲヲいかさま左様ござらずばお疑ひは晴れますまい。父子共に是より直御同道致さんと。馬取小者を先へ歸し。いざ此方へと行く空の。夕日も西に入相の鐘に。連立ち 三重 へ急ぎ行く。地春藤次郎右衛門兄弟は首尾よう殿のお暇賜り。須藤彦坂を

尋ねかね。國々廻る年月もはや二歳。貯へに事缺かねども故と非人に奈良坂や。寒風に身も郡山大安寺の三昧に。藁の假屋の假初に二月餘り忍び居て。大和一國端端まで心を盡し身を碎き。フシ敵を狙ふぞ健氣なる。ハルフシ宵月に。稍離れてうたゝ啼く。浮れ鴉のフシ音につれて。地立歸る新七小屋の藁戸に打咳き。詞申し／＼兄者人申し。ムウ、、ムウ誰ぢや。新七でござります歸りました。是は宵から御寢なりましたの。ホ戻つてか。日は暮れるたつた一人淋しさに。つい横になると思うたがもう何時ぞ。イヤまだ五つ半四つにはなりませぬ。それでも一時半の上寐た。どりや其處へ出て茶を沸いておませうぞ。イヤ私が焚付けませう。ハテ一日歩いてさぞ草臥。釜も竈も知らぬ所へ直して置いた。地身が焚付けると立出づる髪はおどろに延び亂れ。顔は髭むく身は苔むし。

思ひに窶るゝ兄弟がフシ身の有樣ぞ哀れなる。ダヽキ石の竈に土のかま。落葉枯枝をさし燻べる。江戸竹の火箸の火ぜゝりして。今詞何と新七。今日は何方を尋ねてぞ。今日は木津の方から新在家を心がけ。それ故思はず日が暮れました。もう爰の逗留も二月餘り今日まで所在も知らず。其内に萬一敵が病死せば。地誰を敵と本意を遂げん。思ひ過しがせらるゝとスヱテ涙に聲を曇らせば。詞ハテ氣の細い若い者。是程兄弟が心を碎いて此敵を討果せねば。世界に神も佛もないわい追付け討たする。地それでも所在が知れぬもの。詞知れたれば云ふ事はない。かきたくるやうに氣短う思うても。是ばかりは力業にはいかぬ／＼。といへばいかにも討たする。ヲ此次郎右衛門が討たする泣くな。あい。泣くな虫鎭みや。コレ茶を飲みやれ。まあお上りなされませ。したが茶よりも是

を燗して上りませぬか。是とは諸白か。ヲ、氣が付きました。お初穂を荒神樣へアイタ、タ。後程寐酒に仕らう。申し痛い／＼と御意なさるゝがお怪我でもしやなされぬか。イヤ怪我はせぬ。兩足共に腰より下が痛んで。身を動かせばアイタタ、。擦りませうか。いや／＼手が觸ると猶痛む。こりや二年以來の風邪の滯りアイタ、タ。申し風邪でも其樣に身内の痛むものかいな。さればいの。風邪ひいても早速追出せばかうならねども。上へはひき上へはひき古い風邪と新し風邪が。五體の内で上を下へ。かう／＼揉合ふに依つてアイタ、タ。そんな事ならさうならぬ内仰しやつては下されいで。地大事のお身を持ちながら。若し重つたら何と致しましよ。サア云へば苦に病んで其樣に泣く故に。詞でも隱すも事に依るアお藥が上げたいな。ハテ氣遣ひな病ぢやない。

明日でも町へ往たらば敗毒散四五服買うてたも。立かけて呑んだらつい治らう。イヤ今買うて参りませう。何處へ往て。郡山の町へ参つて。ハレ途方もない百丁に餘つた道。夜の内に物騒な河原を越え。わけもない事云やんな明日の事〳〵。イヤイヤ敗毒散で治る事なら一時も早う上げたい。ハテ明日の事にしやいの。イヤ〳〵氣遣ひで明日までが待れませぬ。言ふと其様に〳〵是非とも往きやるか。ア、太儀ぢやなア。そんなら序に小い藥鑵。生姜も買うて來てたもれ金やらうか。イヤまだござります。石高な道ぢや怪我せまいぞ。ア願はくは明日の事にしてくれいで。もう往たか必ず急いで怪我すなと。地影見ゆるまで見送り〳〵。伸上つてはアイタ、タ。立上つてはどうど坐し。詞アア兄弟は持つべいもの兄は弟を力にし。弟は兄を力と思ふ其俺が此痛み。氣遣ふは理ながら。地行戻り五里餘りの道。此暗いに何者が身にひつかけて往てくれう。常住一緒に寄添うて居る兄弟でさへ此通り。國にござる母人女房ども。今日は本意を遂げて戻るか。明日は敵の首提げてお歸りかと。待つ精力も盡果てゝ。此様に便りのないは返り討にも討たれたかと。尼法師にも姿を變へ。出た日を命日と弔うて居るか。泣いて居るか。フシ不便やと漫に。涙ぐみけるが。詞ハアハ、ハ、、ハレヤレ愚痴な事を思ひ出して。假令新七が聞かにやこそ。これ聞いたら兄貴の愚痴な事を云はるゝと笑ひをらう。ハ、、、、。戻るまで起きても居られまい。色家主が叱らぬやうに火の用心ようしてさらば臥せらうか。詞どりや火を消さうアイタ、タ。是ではまさかの時役に立つまい。新七が苦に病むも地尤もかいと獨り言。薬引結ぶ夢結ぶ露も結べば置く霜の。嵐を防ぐ筵引懸けオクリ臥屋に。こそは入りにける。地士の心を志と訓ませ。士の口を吉と訓むそれには背く宇田右衞門。高市武右衞門一子庄之助諸共。大安寺の堤傳ひフシ三昧近く立止り。詞コレコレ庄之助殿。最前も申す如く拙者わ袈裟を試したらば。非人めが暖まりの冷めない内。おけずへを打放し試みなされ。仰の通り遊ばした跡。腕なりとも股なりとも御意にかけられ腕ためしが致したい。ヲヲ流石々々。好いお心掛ヤイ家來ども。非人めが臥つてをるか見て参れ。地畏つて駈出す待て家來ども。詞藁ごみを打放す足音して目を覺さすな。色承ると我が身の陰に提灯伏せ。渚の鷺の小鮎を狙ふ。差足して小屋近く窺ひ寄り。フシとつくと見屆け立歸り。詞高鼾かきちらしど臥つてけつかりまする。それ珍重。なう武右衞門殿。すつぱりと参るか参らぬかお目

に懸けう。（地）お出でなされと刀押取り先に立つ。（詞）なう宇田右殿。貴殿我等が詞の論諍する所非人めが不仕合。寐ごみを切るは如何にしても本意ならず。引起し得心させ經陀羅尼の一卷。念佛の一遍も御芳志あれ。是は尤も。武右衛門殿の家來も一緒に往て。非人めを爰へ（地）引摺出せとツシ聲より早く立かゝり。（詞）非人め御用がある彼處へ出ませい。（地）出をらうらうせいと首筋引立て引出す。荒立てんも仔細は知らず。只はつ／＼と引摺られ目通りに畏る。（詞）御用がある罷出ませいとござる故罷出ましたが。シテ召しまする各各樣方は。尋ねて儕が何にする用があるツ、つつと出をらうさ。ハイ。それへ出ませい。ハイ。いやさ出をらぬか。ハイ早う出をらう／＼。ヤイ／＼こりややい口々に喚いて狼狽さするな。非人用がある其處へ出よさ。ハイ。呼出すは別儀でない。無心があるが聞いてくれうか。ハア、見ますればお歴々樣非人めに無心とは。先づ如何樣な儀でござりまする。聞いてくれうか。身に叶ひました儀でござらば。聞いてくれうな。夜中に我々參つたは。其方が躰軀を貰ひにさ。エイ。驚きは尤も／＼。今日此御方と論じ合ひ檢さねばならぬ刀がある。寐ごみを切るは易けれども。得心させての上と思ひ呼出いた。非人躰軀が貰ひたいわい。是は思ひがけもないさりとは思掛けもない。非人の儀なれば野倒死にもする躰軀と思召さうが。私腹からの非人でもござりませぬ。一家一門は皆歷々なれども。私不所存故勘當受け到頭。非人に成下つてござれども。今一度本の人間に立歸りたいと。朝夕神佛天道を祈りまするも命の惜しさ。大切なお道具で非人をお檢しなされては。穢れにこそならうずれ道具の譽れにはなりますまい。のめり死に逢ふまでも死なうと思ふ氣はいかな／＼。只命が惜しうござりますお助けなされて下はりませと。（地）土に平伏し手を合せスヱテ涙と共に詫びにける。（地）幼心に庄之助いぢらしゝとや思ひけん。（詞）段々申すを承れば不便な儀。お檢しなされいで叶はずば。（地）近々處刑者もありと聞く。非人が命はお助けと詫ぶるも聞かず宇田右衛門。（詞）何さ／＼氣の弱い。一家一門見限られ勘當受ける。高がろくな奴でない。念佛の一遍も唱へさせんと。慈悲を垂るれば付上るどう乞食め。家來どもあれ引出せ。（地）取つたと蒐る身を躱し左手へ擔いて右手へ投げ。右手へ擔いて左手へ投げ。筋斗打たせ投付けられ。赤面抱へて下部どもフシ面目砂にまぶしける。（地）宇田右衛門反打ちかけ。（詞）ヤア慮外者抵抗ひか。眞二ツに打放す。ア、いや暫く／＼たつた一

言申したい。何の一言聞く事ないと。地退れば圖に乗る宇田右衛門武右衛門しばしと押止め。詞ヤイ非人汝吞込の惡い奴。かく大勢が押取巻き逃ぐるとて逃がさうか。今の如く抵抗ひすれば。つく了簡もつかぬになる不調法な慮外者。誤つたな。とても助けぬ命なれども一言申したいといふ。其内に卒爾はない何の一言。サア吐せ何と〳〵。成程命差上げませう。さりながら私は大切な望みある身分。其望みだけ叶うてござらば此躰軀。お檢しなされと此方から差上げませう。御了簡なされ暫く御延べ下されば。地生々世々の御厚恩とスヱテ低頭。土に平伏せば。詞其大切な望みといふは敵討であらうがな。エイ。いやさ隱し召さるゝな。非人に似合はぬ武士も及ばぬ今の働き。願ひを叶へうまでの非人と睨んだ眼は違ふまい敵討ちやな。ハアお目立ますする上からは有やうに申上ぐる。他言は御無用。成程親の敵を狙ひまする者でござる。地扨こそと武右衛門。感心すれば宇田右衛門えせ笑ひ。詞ハ、、、、大盜人め大騙め。敵討とさへ云へば陣の虎口も通るゝ習ひと。僞りに擬ひない其證據は見れば刄物帶した物は勿論小刀一本持ちもせず。地敵に出逢つて何で本意を達するぞ。僞り者めと睥付くる。詞御不審御尤も。非人に樣を變へたれば人の目立を憚りて。此竹杖に刀を仕込み置きましてござる。サ定ならばそれ拔いて見せい。イヤ御覽じまするに及ばぬ。地見せぬはいよ〳〵僞り者。檢して了はう家來共それに引出せ。承つて懲もせずはつと立寄る鼻の先。ずはと拔いたる刄の光わつと戰き膽潰し。フシ跡退りして片寄りける。青江下坂二ツ胴に敷腕。ハ、、、、親重代でござります。地どれ拜見と宇田右衛門近々と立寄れば。詞いやそれから御覽じませう。敵に逢ふ事いつ何時も知れぬ故豫て寐刃を合せ置き。よつく切れますずんと切れます。是非金味を心許なう思召さば。御家來の內何方なりとも何奴なりともなハ、、、ハ。敵討に僞りござらぬ。了簡して侍早くお歸りやれ。地宇田右衛門猶根を押して。詞其敵とある生國はと地云はせも立てず武右衛門押止め。詞イヤ〳〵其儀はお尋ね御無用。非人となつて身を忍び狙ふ程の志。お尋ねなればとて國所有樣に申さうか。僞りを聞いて扨はさうかと思召すも何とやら馬鹿々々しい。ヱ、扨々〳〵御大望ある方とも存ぜず。慮外の段眞平御免先づ刀をお納めなされと。地挨拶すれば次郎右衛門フシ刀を鞘に納めける。詞御知行頂戴仕り帶刀致せば。我人侍ちやと存ずれども。武士の中にも御自分のやうながあればある。近頃侮りがましけれ

ども。(地)少々是に持合せ寸志の御用に立てたしと。取出せば押戴き。(詞)御親切淺からねども國を罷出づる時。形の如く用意仕り今に事は缺きませず。(地)お志は受けたる同然フシ忝しと押戻す。(地)宇田右衛門もかつつくばひ何ぞ挨拶云ひたげに。(詞)其お狙ひなさるゝ敵當地に在りとお聞きなされ。それ故爰に御座なさるゝか。されば當國に影を隱してをる樣子。風の便りに承り先々月罷越し。尋ぬれども知れざる故。明日は又丹州へ立越え申す覺悟と云へば。(地)庄之助おとなしく。(詞)明日丹州へお越しならば當地の名殘も今宵ばかり。是にござつては風烈しう。大事のお身の痛みも氣の毒。(地)手前の屋敷に一夜を明し。此方よりお立ちなされて下されと。慇懃に述べければ。(詞)ハテ御發明。其許の御子息な栴檀の二葉頻伽の卵。御成人の後思ひやる。なか／＼此身に馴染みて寒風素雪も苦にならず。首尾好う敵を討ち果せ。今晩の御芳志はゆるりと御禮申すべし。ハテ扨々おやさしや殊勝しやと。(地)子を褒めらるゝ親心武右衛門悦び手をつかへ。(詞)故と御家名は承らねども。御本意を遂げ給はゞ其噂日本に隱れござるまい。其時は蔭ながら親子悦び申すべし。(地)今日の襤褸は明日の錦必ず／＼身を大事に。追付け御本意遂げ給へとフシ世にしみぐ＼と述べければ。(地)宇田右衛門も默つてゐられず我人武士は相互。(詞)追付け御本意遂げらるやう



明和七年九月興行番附

に神佛を祈りませう。お暇申しござらうか。お二人共地さらば／＼と禮儀を述べ。別るゝ武士の附合は淀まず濁らぬ川水のオクリ堤。へ傳ひに歸りける。地次郎右衛門跡見送り初めて吐息ほつと吐き。詞ホ、危險い命助かつたも。此刀の陰エ、忝い忝い。是は扨結句跡で。地胸が踊ると撫摩りフシ撫下し。詞ヤア爰でこそ新七が。地土産の諸白仕らうと。肴ばかりが缺德利に。餘る弟の志フシ引受け／＼。詞此新七は何故遲い。地と思ふも無理か五里餘り。天狗でもまだ戻らぬ筈。詞ハア氣が上つて頭痛がする。寐て心を休めうかと云うて我は寐もするが。かはいや新七が晝は一日飛廻り。さらば夜とても休む事かさぞ草臥れんかはいやと地云ふを心の樂しみに。思ひもみやも果てしなき。オクリ藥屋のへ内へぞ入りにける。地人の身のこゝこそ終の寄邊なれ。世主知らず人骨朽ち。髑髏名沒して秋の草皆萎へし。數數の石塔は誰が涙の種やらん。法界無緣七墓を毎夜さ廻る修行者の。嵐に冴る鐘の聲詞なまいだ／＼／＼／＼なまいだぶなまいだ／＼／＼フシ回向をなして。過ぐる夜のフシ曉。近く更けにける。地月なき夜半の夫よりも後暗き宇田右衛門。隱匿置きし須藤彦坂二人を引具し。頰被りに顏隱させ。火繩の火を打振り／＼道を覗ひ立寄つて。三人藥屋を押取卷き鼻息もせず覗ひ見て。詞それだは成程サア地來いと。フシ悅び堤を飛んで降り。詞サア／＼次郎右衛門に極まつた須藤殿。シイ高い高い物音なせそ靜にと。地深田の粘土面にべつたり擂付け／＼。顏見られじと身拵へ。足音もせず藥屋に立寄り欺し討。所は知らず二人が切先したゝかに切付けたり。心得たりと起上るを起しも立てず滅多切り。次郎右衛門が身は紅堤を逆に轉び落ち。刀を杖に突立上り。詞何奴なれば寐ごみへ踏込み。此如く傷を負せた。扨は最前の侍ちやな。エ、武士に似合はぬ道理を聞分け歸りながら。又引返して此仕方。侍でも杭でもない。それとも斯様に申すがお腹立たば。幾重にも御堪忍なされて下され。右申上ぐる通り大切な命でござる。お助けなされて下されと。地詫ぶる聲を知邊にて物をも云はず六郎右衛門。振上げて拜み打ち次郎右衛門が肩先を。切先下りにずつぱと切る。切られながら切る刀に須藤彦坂手は負うつ。互に眼に血は入つたり。堤をころころ落重つては立別れ。這上つては轉び落ち命限りと三重へ踠み合ふフシ既に其夜も。地明方の風が連れくる鐘の聲。宇田右衛門南無三寶と心急き。詞コレ／＼兩人夜明けては後日の難儀。非人めもはやくたばつた。地サア歸られよと引立つれど

腰抜けて他愛なし。何と詮方やる屑に。二人を引懸け介抱しはふ〳〵。連れて歸りける。地次郎右衛門は正躰なき寢に浸込む朝風に。はつと心や付きたりけん。むつくと起きて刀に縋り。詞ヤア汝等何處までも遁さじと。地よろぼひ〳〵振上げて丁と切つたる一念力。落つるを透さず取つて抑へ。詞ハア是は松の枝。エ、地口惜しやと氣も弛みうんと仰向に反返り。前後を分かぬ其有様 フシ いぢらしなんども愚かなり。地夜と共寐ねば新七はかくと夢にも知らばこそ。薬や色々買調へて立歸り。見れば其邊朱に染み。砂に足跡算を亂し小屋は崩れて主はなし。はつと驚き尋ね廻る堤の陰。詞伏したる人はヤア兄者人。なう次郎右衛門殿こは如何に。地何者の所爲ぞと駈出しては駈戻り。死骸にわつと抱き着き。まだ息もあり溫味もあり。詞コレ新七でござります。物云うて下されと。地云ふを力に聲も立ず。詞新七か何故遲かつた。宵に侍二人來て檢す刀がある。賄をくれよと云懸けしを。色々と詫言聞入れて歸りしが。其後寐ごみへ踏込んで此通りと。地云うたばかりが精一ぱい又がつくりと他愛なし。エ、今小し早く歸らば闇々とはさすまいもの。しなしたり口惜や立つて見ゐて見拳を握り。スヱテ泣叫ぶこそ道理なれ。地斯る所へ高市武右衛門庄之助誘ひ。下人に提重取持せ出で來れば。新七扨はと出向ひ。詞其方は宵に來た侍か。地いかにもと云はせも立てず。兄の敵覺えかあらう侍やらぬ。待て詞卒爾すなわりや何者。何者聞いて何とする。此小屋にゐた非人の弟。地兄の敵遁さぬと反打つて詰懸くる。大小からりと投出しコレ此通り抵抗ひせぬ。我が云ふ詞をとつくと聞け。詞朋輩と詞の論に依つて。非人が躰軀を檢さんと成程最前參つたれども。大望ある仔細を聞き。武士は互と感心し罷歸る。明日は早早丹州へ行くとある。是は拙者が一人の悴御舍兄の盃頂戴させ武士の魂にあやからせたく手づから切割。一種一瓶を調へ參る所に思ひも寄らぬ遁さぬとは。扨は御舍兄は切られさつしやれたか。ハア地はつと呆るゝ詞の端々。苦しき耳に聞取つて。詞ヤア新七卒爾いふな聊爾すな。危き命助かつたは。其お侍の情お禮申せ〳〵。地是は〳〵夫とも存ぜず心急き卒爾な事。詞何が〳〵御尤も卒爾とは存ぜぬ。身も今少し早く參らば 地斯樣にはさせまいもの。殘り多やと立寄つて。コレ〳〵疵は多けれども。急所を外れた療治にかかる氣遣ひない。此上は數ならずとも拙者共々力となり。敵を聞出して參らせん。詞して當地へは何をあて何を知邊に此間。御逗留はなされた夫聞きたい。されば狙

ひまする敵は兩人。當所郡山の御家中。加村宇田右衞門と申す方に隱匿はれありと。武右衞門聞いてもうよい〳〵。扨は貴殿の敵といふは。須藤六郎右衞門彦坂甚六とは申さぬか。なか〳〵。扨は最前敵討の次第を聞き。兩人の奴ばらに返討させんとエヽ卑怯者め人外め。コレコレ御兄弟。其宇田右衞門近々殿の御供して。關東へ罷立つ。其内に其疵養生させ。屹度本意を遂げさせませう。先づ我方へ同道せん些とも氣遣ひし給ふなと。力を付くれば新七は天にも登る心地にて。コレ兄者人お聞きなされたかと。云へども兎角の詞なく世に賴みなき其風情。武右衞門新七家來にも呼き合ひ。手負の耳に口差寄せて大音上げ。ヤア それに迯ぐるは須藤六郎右衞門彦坂甚六な。待てやらぬ待たう〳〵と云ふ聲に。次郎右衞門むつ〳〵と起き。須藤六郎右衞門彦坂甚六。卑怯者かへ〳〵〳〵と呼ばはり〳〵二足三足逶迤ひ往てはかつぱと伏す。武右衞門透さず聲張上げ。それへ迯ぐるは須藤六郎右衞門彦坂な待て〳〵。卑怯者と呼ばはれば又むつ〳〵と起き。須藤六郎右衞門彦坂甚六。卑怯者返せ返して勝負せいと。聲を力に五足六足。轉べば呼ばはり呼ばはれば又むつ〳〵と起き。逶迤ふ道も一筋の討ちたいばかりを力にて。足と姿は亂れ燒き傍から力を付燒刄。かんじんせつぱを武右衞門が屋敷へ打連れ立つ月日旅立よしは知らねども。國主の參覲御供と仰に加村宇田右衞門。用意も忙しき家内の混雑奥口ざわめき持運ぶ。衣類手道具挾箱跡付しとむ駄荷造る。重蒲團の色品も取散したる折柄に。高市武右衞門お見舞と案内乞うて入來れば。宇田右衞門出迎ひ。是は〳〵武右衞門殿。今お暇乞に參らうとは存じたれども。未だ用意もそこ〳〵故取紛れて延引致した。さこそ〳〵遠路の御供御苦勞千萬。もし御用等もござらばお心おかれず仰せられい。是は御懇意忝い。留守の間は萬事貴殿を賴み入る。ヤちよつと暇乞のお盃も致したいが。爰は端近いざ先づ奥へ ソレ家來ども煙草盆お茶持て參れと座を立たせ。豫ての工面隱し置く床の下巨燵の炭櫃引上ぐれば。六郎右衞門甚六諸共這出でて。宇田右衞門が耳に口囁けば打頷き。長持に忍ばせて蓋をしつかと錠卸す。音もひそひそ姿は馬の高嘶き。伊兵衞佐兵衞は馬方と姿を變へて頰被り。立ちはだかつてコレ親方。荷拵へが出來ましたが一服せうと吸付けて。家内に氣を付け見廻す中。武右衞門立出で。コレ〳〵宇田右殿。お取込の中お盃にも及ばぬ。道中お怪我のないやう御無事でお供なされい。

最早お暇申しませう。イヤ〳〵夫は殘念用事も了へば拙者も一ツたべて參らう。イヤもう夫には及ばぬ事。地罷歸ると上りロ。下りる拍子にひよろ〳〵〳〵。長持に倒懸りうつ伏にどうと伏す。是はと驚く宇田右衛門藥よ水よと立騷ぐ。詞ア、お騷ぎなさるゝな。是は拙者が持病の眩暈此間はけしからず。せつ〳〵發つて迷惑致す。ハテ夫は御難儀千萬。併し爰は冷えますれば。地御病氣も募る道理。奥へござつてお休みなされドレお手を引きませう。詞ア、いや〳〵面妖な病で人の手が觸るは勿論。少しでも身を動かせば忽ち息が絶えまする。ハテ扨困つた病。地アア氣の毒や氣遣ひやと。やられぬ長持屈託の。天窓を掻きつ立ちつ居つフシ心わくせく身をもがく。地武右衛門やう〳〵頭を上げ。詞コリヤ〳〵身が家來いつもの醫者へ參つて云はうは。今日は殊外惱みも強く難儀致す。常の鍼では參るまい鐵鍼を御用意なされ。地只今是へお出といへ早く〳〵と走らする。指違うて家中の使息もすた〳〵かつつくまひ。詞只今殿のお立ち故お供殘らず附添ふ所。何として御遲參ある。急いでお出と告ぐるにぞ。地ハツと驚く宇田右衛門刀ぼつ込み駈出でしが。振返つて小者を招き。詞此長持は取分け大切迂濶に渡すな氣を付けよ。地随分早うと云渡し武右衛門殿はや立ちまするさらば〳〵と云捨てゝ。フシ家來引連れ急ぎ行く。地武右衛門むつくと起上り四邊を見廻し二人の馬子を近く招き。詞其方達は聞及ぶ伊兵衛佐兵衛といふ者な。忠衛の段次郎右殿の話に聞いて驚き入る。ハア、扨はお前が武右衛門様。段々のお心遣ひお禮は詞に盡されず。我我も四五日以前やうやく主人に廻り逢ひ。今日是へ參りしも宇田右衛門發足と聞き。地敵の所在知らん爲と語る半へはい〳〵〳〵。舁込む駕籠より立出づるは醫者にはあらで次郎右衛門。供に附いたる弟新七。敵は何處にと目をくばり面に見えし逸り氣を。武右衛門鎭めて急くまい〳〵。詞敵二人は網の鳥此長持に隱せしを。とつくと見屆け病氣と僞り止めしが。此儘討たば死人を切るも同然引出して勝負あれと。地云ふに隨ひ伊兵衛佐兵衛立寄つて錠捻切り蓋を開けば六郎右衛門甚六諸共飛んで出で。逃げんとするをどこへ〳〵。詞非道を以て親助太夫を討つて立退き剩へ。大安寺の堤にて此次郎右衛門が寐ごみへ踏込み。害せんとせし卑怯者。此場に及んで逃ぐるとて逃がさうか。遁れぬ所勝負々々。ヤア勝負とは傍痛し。汝等兄弟何程に働くとも。地此六郎右衛門が片腕にも足らぬ奴打放して了はんとはや切懸けん面魂。武右衛門押

止め待つた〳〵。討手も二人敵も二人討ち討たるゝは互の運づく。双方共に聲を懸け尋常に勝負あれ。コリヤ〳〵伊兵衛佐兵衛汝等は側から滅多にぎしむが助太刀は叶はぬ。ア、イヤ主人次郎右衛門は未だ手疵養生の間もなく。對手向ひの働き心許なう存じます。ヤイ此次郎右衛門何程弱り疲るゝとも。彼等二人を討ちかねうか馬鹿盡すなと睨付くる。ヲ、さうぢや兄者人。大切な敵討助太刀させては武士が立たぬ。兩人共に差いた刀に微塵でも手を懸くると。直に勘當屹度申渡した。サア〳〵勝負と双方身構へ目釘を濕し。春藤助太夫が忰次郎右衛門同苗新七親の敵いざ參ると。抜合せて二打三打戰ふ中に。甚六が左手の肩先新七に切込まれ。敵はじとや思ひけん奥を指して逃入るを遁さじやらじと追うて行く。家内の者ども驚き騒ぎ刀抜連れ駈寄るを。伊兵衛佐兵衛が馬の鞭打立て追立て寄付けず。六郎右衛門は先を取り只一討と切付くるを心得たりと次郎右衛門。疊をはねてのめらすれば。起上つて打懸くるを丁ど受留め直に疊に引敷いたり。奥より駈出る甚六が振返つて切付くる。機みに新七刀を落し。早速の機轉巨燵の蒲團を取つて投付け。刀をからまき我が身と共に仰向にどうど捻付け乗懸り。親の敵覺えたかと双方一度に止めの刀さすが兄弟念力の。本望一時に恨みも晴れ悦び勇む歸國の門出武士の鑑と移り行く。年月古き言の葉に。大和の非人敵討と聞傳へ書傳へ。語り傳へて今の世も其名を。高く殘しける。

七條河原 釜淵双級巴

作者　並木宗輔

地唐土にフシやさしき名をばゝ付きたるは。緑の林白波とオクリ和言。唐音變れども變らぬ國のあれ鼠。石川の五右衛門とてもとは岩木の惣領なれども。河内の土民に育てられ農作きらひ大小を。好む鐺のフシつまりより。好まぬ事に旅姿オクリ笠で。日の目をふせげども防ぎかねたる口の端に。フシ所離れて何國へかギンオクリ生駒の。山の山つゞき。鬼取よりも恐ろしき。掴む心のフシ鷲の峯。地麓は小川いがみ川。地曲り／＼て身の上をそれと沙汰せじ佐太の森フシ牧方近く着きにける。地色五右衛門暫く立休らひ。詞ハア、美豆野御牧に。鹿狩があるかして多くの勢子の聲。美しやなあ。地我も武門の家に生れながら。如何なる事にや三つの時より捨てられ。百姓の家にて人となり。鋤鍬よりも大小と心は一騎當千でも。詞人の物を我が物に。すれば所を追出す。地都で別れし妻や子に逢はうと思ひ是迄は出ごとは出たが。詞先づ北國へ行て働かうか。東國方がよからうかと。地取つつ置いつの心は那智黑。磨きかねたる性根なり。地色かゝる所へ何國とも逸矢一筋飛び來り。小松の枝にはつしと立つ。はつと五右衛門打驚き。此藪垣のあなたに鹿狩。さては逸矢か長居はならずと。行過ぎしが立留り。何か暫く思案して立歸りて彼の矢をば。引抜き取つて足早に。フシ來た道後へ駈け戻る。地色狩場の方より髭奴息を切つて馳せ來り。逸矢尋ぬるうろ／＼眼。其處よ此處よと草叢を捜し廻るフシ跡よりも。地色友傍輩が息やすめ。煙管くはへて。コレサ是非內。詞何をきよろ／＼しめぐる。お仕着せの襴はもはや蹴込んだか。コレサ／＼。はてこな者何落して何尋ねる。イヤ何も落しはせぬ。若殿のお矢が知れぬ。汝も共共尋ねてくれ。それが尋ねに及ぶ事か。若殿のおやは都三位中將樣。手前のお屋敷へ御養子にお出でなされ。今の親なら我々が旦那。ハレ狼狽者め何馬鹿つくす。見えぬは鏑のお矢さ。かぶらの親なら大根の事かと。地どんな聞人と口下手がフシ爭ふ所へ。ハルフシ國の世繼の。若綠。地まだ十六の角丸／＼跡に付添ふ諸侍。御傅役の當馬を始め。御休息の其間風景御覽と床几を直し。フシ傅き申せば。地若殿は逸矢の見えぬに御心を痛め給ひ。詞いかに方々。昔義經八島にて。弓を浪間に取

落し。小兵を敵に知らせじと海へ飛入り取返し。恥辱をかくし給ふとや。地我も其矢は惜しからねど。里の農人拾ひなば腕倒らすと笑はれん。面目なやと年よりも恥を知つたる御一言フシいづれも。感じゐる所へ。地石川五右衛門老母と見えし手負をいたはり。物哀れに打萎れ。ちとお願ひと間近く寄り。手をつかへ頭を下げ。詞某めは隣國和州浪人。身貧に迫り一人の母を伴ひ。都方へ助力を頼みに参る此道。何者の業にや。遠矢を射かけ。母が肩先を射抜く。早速抜き取り保養致し候へども。地次第に弱る老の急所。せめて息ある中に敵を取つて見せ申したく。心は彌猛にはやれどもいかなる者のわざとも知れず。詞御弱年なれども。此國の大守と見受け御訴訟申す。あはれ御威光を以て御詮索乞ひ願ひ奉る。地色則ち證據は此一矢と。差出す矢こそ最前の。射損じ給ひし白羽ぞと近習外様も打驚き。若君はつと思せども。さすが一國一城を治むる器量備つて。其矢是へとお手に取り。詞敵を顯し母の怨を報ぜんとは。ヲヽ天晴の志。最前逃げ行く鹿を射損じて。過せしは某よ。地イザ立寄つて遺恨をはらせ。相手になりて取らせんと。さも潔く宣ふにぞ。人々手に汗握るばかり。フシ事こそあらんと身構す。地色五右衛門御顔つく〲詠め。詞栴檀は二葉と申すが。ハアア御威勢といひ御器量備はる御一言。見る影もなき素浪人が詞を立て。地色相手に成つて下されんとは分も立ち心もはれ。お恨申さんやうもなし。詞コレ母人。今のをお聞きなされたか。敵といふは此國の城守。我々しきが相手とは勿體なく恐れあり地言ひがひなき悴を持ち。貧苦に迫る其上に。あへない最期とさぞや無念に思されん。詞せめてこなたの心晴しに。冥途黄泉のお供を致し。死出三途を負ひ奉らんそれで腹をゐてたべと。地座を占め覺悟と見えければ。若君驚きアレ留めよと宣ふに任せ。御傅役の當馬之丞つかつかと立寄り。詞ヤレ逸り給ふな御浪人。御心底尤もなれども。見れば僅かな淺疵。保養を加へ給ひなば。よも命に別儀ぁるまじ。生死も知れぬに追腹とは近頃麁忽と。地言はれて暫く差扣へ。面目なや其保養致す方便があれば。相果てうとは申さぬ。詞今日を立てかね。母を他門へ預けに参る程の儀。何とて介抱フシなるべきや。地色さあればとて現在親の今はの手疵。他所に見なしてゐられうか。心底の程御推量と涙にふるふフシ聲音に泥み。地色御用金一包挾箱より取出し。詞近頃侮りがましいが。貧苦に迫るお物語お笑止に存じ。母御の手疵養生代。地些少ながらと差出す。詞ヤレ情なき御差配。身不肖

なれども以前は懸鞍にも腰を掛け。錆鑓もつかした菜。金銀を貪れば斯様に身貧は仕らぬ。お眼識が違ひました。地近頃仁體に似合ずと。立派な詞に猶押返し。詞そりや一概の御了簡。一國の掟にも。過料を以て誤をゆるす。是則ち若殿の。誤をふせぐ過料金。申さば僅か五十兩なれども。若殿は堂上方より此國へ御養子。某親の名代としてつき來り。まさかの時の御用にもと貯へ持ちしお餞金。則ち金役の名判かけ屋の極印。地さもしき金も出所は一天の君の御座所。堂上方より出でたる金。御拜領も同然。詞一つは若殿のお心も休めるため。御受納あつて給はれと。地事を納むる詞を幸ひおつ取つて押戴き。詞拜領とあれば身の面目。有難しと受納致そか。ハテそこに御遠慮無用。但し些少なかな。コハ勿體ない。左様なれば大悦。地色只此上は老母の介抱專要と。

立別るれば若君もコリヤ〳〵浪人。詞我が誤を償ひしは事穏便の爲なるぞ。汝が力と思ふなと。地仰かしこき道草やフシ露踏み分けて出で給へば。地色當馬之丞も心得ぬ浪人者と見ながらも。殿の御名を大垣の。内に籠めたるいかじ輪オクリ目かどをへ付けてフシ立歸る。フシ後見送りて。地色五右衛門は金懐に取納め。あたりを見廻し手負の傍。立寄つてコリヤ婆。詞首尾はよいぞ早起きろと。地言ふよりむつくと蚤取眼。目を光らして。詞お侍様味ようしやました。どれ分口。地下はりませと手を出せば。ヲ、大儀代取らせんと。鳥目貳百投げ出し。必ず外へ沙汰すなと言ひ捨て行くを引きとゞめ。詞コリヤ何でえすぞ。五十兩の割前を。どてまたとはヲけうこつ。お目出たいを聞うても是程は跛る。心よう寢てゐるを矢の根で肩先突き破り。目の眩ふ所を金々と。

地金で性根をつけさせ。俺がするやうにせいなれと。成つてゐたので五十兩。茄子わけでも有りやうは。痛い目しただけお負でえんす。詞これなしの目くさり錢地いらぬでごんすとフシ蹴返せば五右衛門むつとし。詞ヤイ乞食婆め。菰を脱して下著を着せ。酒くらはして血走せ。腹ほてさしたが大きな賃。まだ其上に五十兩の扱ひ金半分取ろとは。テモ横着な老耄め。イヤ人に疵付け其賃を。一人して飲まうとはテモ恐しいお侍。我が。こなたが。おのれがと。地詞あらして割り打ちを。やらじ取らんとフシいどみあふ。地色婆は初手より物だくみ。一味を拵へ置きたるか。小屋の者共皆來いと。呼る聲に五右衛門も南無三寶と飛びかゝり。取つて引寄せ心もと。ぐつと突込みフシ一えぐり。ヤレ人殺しと最期の大聲。餘さじ遣らじと乞食仲間。てん手に棒杖釘打竹。騙り

ひろいだ侍を。叩き萎せぶち殺せと。喚いてかゝれば八方微塵に及ばず切りなぐる。一方樂げば一方から。群りかゝるを立割。梨割唐竹の。斜に殺がれて逃ぐるもあり。村の番太も役人も。加勢をすれど叶はゞこそ。秋の木の葉。と散り失せて。殘るは石川鐵石フシ五右衛門地騙り取つたる五十兩。小判の耳より人の口。萬萬兩とも言ひ囃す。千が萬とり百が千とり。五十歩逃げて百歩をば。飛ぶも一飛び一息に船場をキホヒ指。してぞ三重へいそぎ行く。二上り歌里は名高き。キン都の富士と筋向ひ。色をたてぬき嶋原三筋。よみのこんだるナホスフシ遊女町。地変に流るゝ瀧川が今日浮草の根引とて。常より早き揚屋入。おくる遣手の鼻さへもフシ燕尾屋にぞ入りにける。地色主の傳六忙しげに。詞エイ瀧川様が待ちかねます。夜前人を上げます通り身請の埒をなされんとて。平様はお國より昨日大坂迄お着き。お藏屋敷の御用をしまひ。すぐに夜舟で上らんとのお飛脚。それ故お前の親御の方へも。今朝早々から人走らせ。是もやんがてお客も追付。すりや肝腎のお前の方へ。使業では心元なく。ちきにお馬と出かける所。お顏を見たで。先づ落着く。サアサア奥へイザ奥へと。たくしかくればヲ忙し。詞今朝から早うとお使なれど。昨夕閙いて今日の事。地色親方への附屆傍輩衆との暇乞。何かに隙入り遲なはつたら免してと。ねぢられてイエ〳〵〳〵。詞遲い事はござりませぬ。呼びましておけとの御狀所をひよつと間違うては私が無念と。お目玉を貰ふがいやさ。堅苦しい田舍侍。地町の粹とは違ひますと。言へば遣手がヲそれ〳〵。詞廻りがようても揚錢の外。一文散らさぬ吝ん坊。後の登に前垂の染賃いうて見たれども。いつかな事すつとこなでお歸り。地あんな吝い侍は。嶋原へ出かけずとも。皺腹切つて死んだがよいと。譏れば亭主がコリヤお杉。詞あの氣でも見ん事身請今日まんざら無手でもあるまい。なんぼ吝くとびん水入の。そこらは鼻が口車。地廻しかけるぞあてにしや。ヲツトそんなら川さまと圍の間で飲みかけう。執成いうてくれなされ必ずや傳六さん。忘れまいぞと念押して。奥へ入ればヲ、いかにも。萬は我等呑み獻立。しまうて取らんと傳六は臺所のフシ板本に。ヤアえいとこ鱠冷し物。何から正銘房信の。薄刃追取りちよき〳〵〳〵ちよつきりきり〳〵切り刻み。フシ人の氣をとる料理かた。地色酸いも甘いもくた者が知つて付込む瀧川が。親の惡者三二五郎兵衛。娘の身請をあてにして伴ひ來る負せ方。置土の九郎次とて低みを埋めて歩をわせる。日廻し金の忙しなうコリヤ

五郎兵衛。金を濟す當があると。嶋原三界此樣に。引きずり廻つてどうするのぢや。見ん事われ濟すかよ。ハテ濟さいでよいものか。豫て咄した娘が身請。今日埒する筈。廿兩や卅兩は祝儀というても取り易い。利足揃へて急度返辨。氣遣ひのきんの字に。長點かけて貰ひましよと。慥な詞に九郎次もにつこり。ヲヲさうなうては叶はぬ筈。胴金の根城損かけうとは思はぬ。間違ひのないやうと。念に念おす詞を返し。ハテ高の知れた貳拾兩。穴一倍はつても濟めかねぬ。どんどと仰しやる事はない。不承ながらちつとの間。爰に待つてと燕尾屋の。中戸口に九郎次を待せ。つつと通つてエ傳六樣それにござりますか。今朝程はお使。姉めが身の上段々お世話。首尾なりまして私も。金の緒に取付きます。サレバ〳〵。娘御が出世の片付。其許に

もよい入前。瀧川樣も今來てなり。お客も追付見えませう。見ればお連もありさうな小座敷が明いてある。酒でも參つて待たしやませ。申し表の。此方へ入つてお休みなされ。然らば御免と内に入る。五郎兵衛も落着顏。娘に逢うて待合せお客にもお目にかゝり。ちよつと咄す用事もあり。其事に付きこの連衆。臺所にゐりや結句お邪魔。片脇の小座敷をそんならいつそ御無心と。九郎次を伴ひ煙草盆。提げて一間に入りにけり。色はたゞ心の外や。瀧川に戀ぞ積りてふちかたを。金に束ねて身請する。平の平平常ならぬ連に危き石川五右衛門。跡に引添ひ入來る。亭主は矢庭に飛んで下り。そりや平樣の御登り。御出の御筋。先づ川さまへ知らして呼出せ。ヤレ目出たい〳〵と。鳴りまはれば瀧川も遣手 引連れ立出づる これ〳〵御

亭主。イヤサあまり其樣に仰山さりとは迷惑。馳走になりには參らぬ。瀧川殿を請出すばかりの上京。扨此お連は牧方より同船の御浪人。夜がな宵とお咄相手。殊に船中の間船上りより是までイヤハヤ仰山御懇意。お心遣ひの返禮旁々。ひらにとお供して罷越した。御酒一つ上げておくりやれと。挨拶すれば五右衛門も。態々詞をやはらめて。こりや御亭主初對面でござるよ。拙者は此近鄕にそといたした浪人者。見らるゝ通り長髮。養生の爲大坂へ罷越し。夜前歸る乘合にて四方山の咄がしみ。連があれば三里とやら。お誘ひに任せ立寄り申した。承る樣子がお傾城を請出さるゝ由。何とやら羨しい。歷々の御身上に肖り。珍しい廓酒。病中の憂さばらし一つ食べて歸ろかい。コレハ〳〵有難いお詞。ガ此廓始つての燕尾屋。初對面とはちとお恨。御長髮で

はござれども。お達者さうなお産付。盗人に見せても御病人とは申すまい。地先づ平様と奥座敷へ御同道。それお盃御膳の用意と。騒げば平平ア、是さく〵。詞其心遣ひ仰山困り申す。から參る道。かの藤の森にて一膳蕎麥。あなたも拙者も仕度は仰山よくおぢやる。夜食がほしくば乞ひ申さう。例の豆腐のぐつ煮に冷飯。イヤモそれが仰山御馳走。御浪人も病中とあれば食養生が肝腎。最前も言つた通り。料理食べにはるく〵とは參らぬ。今日は君が身請の一卷。外の事は費へ費へ。先づ契約の金渡すべい。地小判といふ物見せうかと。猫に鰹の五右衛門が。鼻のさきにて二百兩取出して封押切り。詞先達て渡した手附が四十兩。今百十兩都合百五十兩。是で身の代買懸りの借金ぐるめ。地何かの作界皆濟とよみならべ。殘りの金に又封しつかり肌に付け。詞何さこれ川殿や。拙者は御覧ある通り。大切の金仰山出しての心中。其許にも金の冥利。我等を隨分大切に。可愛がつてくれめせと。地いふも笑止さ瀧川は。フシいとゞ轉さ。增りけり。地色傳六は金受取り。詞いかにも是にてさらりと落着。お金をわたしは親方へ。すぐに持參し證文取つてお渡し申さん。地こゝは端近お座敷へ。お連様にも御退屈。コリヤ女子ども。お銚子く〵其てうしに。乘つて身請の埒せんとハズミフシ勇み進みて出でて行く。地平平も機嫌よく何さま奥にてゆつくりと。打寛いで御酒飲べん。御浪人いざござれ。皆款待せと先に立て。跡に殘りて仲居を招き。詞お身にちと頼み事あり餘の儀でもない。是の亭主が仰山馳走ぶるが肝にこたへる。肴には梅干生姜味噌がよいぞや。そなたが氣轉でついさつとと。地いふに頷く惡じやれ女子。詞アイく〵く〵それ座頭と仰しやる。次手に舞子といひ捨てゝ。地呼びに走ればア、是々と。留めるかひなき當惑の。フシ折へ出かける三二五郎兵衛。揉手して小腰をかゞめ。詞私めは瀧川が親。三二五郎兵衛と申す者。此度娘が身請をなされ。國へ連れてござる由。末頼みにいたす一人のかゝり子。一緒に引越し同道せんと存ずれども。急な事故跡より發足。それに就き方々の算用差引き委細は追つて。先づ當分入用の金三十兩。地御合力下されよとフシつまんだやうにいひ出せば。地色平平ぎよつとし。詞何ぢや小判三十兩。アノ只くれいか。瀧川こそ請出しに來れ。お身がやうな白髪親仁。請出しには參らぬ。それに何ぢや親だ。親が定なら樽肴で。歷きと禮もいふべき筈さ。無心いふ親いやだぞ。牛やら馬やらこちや知らない。アラ勿體ない。いやだぞ。く〵く〵と。地七里結界跳ね

飛ばされて。こなたも睚みの性根をあらはし。コレお侍。嫌がられても瀧川が親。娘を請出し女房にさはれば親の高家。國へいて大きな顔してかゝらにやならぬ。ア養うて貰はにやならぬ。イヤぞんざいなる棒手振め。あはれ國へ來て見らう。ヲヽ、行て見せうと爭ふ所へ。勇みにいさんで主の傳六門口よりかさ高に。サア〳〵埒が明いて來た。コレ〳〵平さま。是が則ち川樣の年季證文。右の外に一錢の掛り合毛頭無いと申す一札。出口への斷りも濟んだれば。御勝手次第何時でも。手を引合うて大門をお出なされと手形を渡せば。平平受取りコリヤ見たか。外に一錢も掛り合ひ無いと潔白の證文。是でも三十兩よこせか。イヤ養へか。一粒一錢鐚半文も罷りならぬ。言分あらば親方へ行て言へ。國へ來せたら枝骨切つて切折るぞと。切刃廻せば亭主は呆れ。マア〳〵お待ちなされ。思ひの外な御機嫌。エヽこりや親仁殿が。初對面から御無心をいはれたと見えた。早いぞや。〳〵コレ親仁。通路も便りも並んでなし。跡からも言はるゝ事。旦那の御腹立御道理な御筋。御馬は我等がつないだ〳〵。機嫌なほしは奥の間で。騷ごぞや。〳〵コレハイノお腹立てられずと酒事にして。人の羨やむ。しなだれ姿で痴話。事ならば。こちや。〳〵〳〵見ぬ顏えワイ〳〵押立てゝ奥に入りにけり。跡に五郎兵衛胸算用九三がさんでぐわらりと違ひ。五ざん上つてゐる所へ。見一むはうにせがむ九郎次。のつさ〳〵とのさばり出で。サア約束の金いたそ。受取ろ渡せとせがみ寄る。又間違の詫言を。言ひだせばコリヤ言ふな。あてとは今の侍か。あの筋では明かぬぞよ。べん〳〵だらりとつられてか。弱みを食ては九郎次が立たぬ。てんがう仲間へ見せしめ。金が濟まぬと眞裸體。菰被らすがせめての腹癒せ。きさつたわんぼ拔け親仁と。素首取りて引寄すれば。借手も惡者持つたる腕捥ぎ放し。何とすりやこりや剝ぐのか。汝腕先で金取るか。五郎兵衛も男。取られうなら取つて見よと。睚みかゝれば堪へぬ一腰。すらりと拔いて刀背打と。振上げかゝるを引外し。又打つ腕先しつかと執り。させぬ〳〵と互の力み。柄一本に腕四本。捩合ひ揉合ひ張合ふに。三二は脇差捥取る拍子。九郎次が眉間へ切先の。ちよいと觸ればばつと血煙。サア泥棒めもう聞かれぬ。金も濟まさず切つたぞよ。代官所へ斷つて汝をどうする覺えてゐよと。喚りながらに駈出すを。それ斷らしてよいものかと。飛びかゝつて後袈裟。切られてのつけに反返るを。

[illegible]てさすと[illegible]みかけ[illegible]切りさいなまれ血みどろ[illegible]んが[illegible]のたくり[illegible]つて[illegible]息絶えたり。瀧川は座敷の隙何心なく來かゝりて。かくと見るより走り寄り。ヤア父様こりや何事。討果して死ぬる氣か。ナウ悲しやと取付いて歎くを聞いてヤイ／＼娘聲立てな。討果すのでなんのあろ。高は先刻に叩した金。通なはるが曲事と。是を拔いて刀背打に。かゝるを拗取る怪我のはずみ。俺や切りはせぬ己がでに。切れをつたに紛ひはない。後日の言譯汝してくれ小さい時から養うて。育つて置いたもまさかの役。こんな所が親孝行。怪我ぢや／＼と色蹈[illegible]ず見た者は私ばかり。このまゝ捨てゝお歸りなされ[illegible]人が知つては叶はない早う／＼[illegible]

[illegible]へいはねば[illegible]は影をかくし。追付國へ行て逢はう。其時必ず孝行に養はれねばならぬぞよ。侍にとつくりと呑込ましておけ合點かと。まだ身の慾をいひ捨てにすたり跡をもへ見ずして逃げて行く。ハルカン影見送りて。瀧川が親引寄せ獨言。見す／＼人[illegible]理と思へどさながらに娘の口から恥しめて殺しもならず。ノシ落せしが。詮議かからば忽ちに憂目にや逢ひ給はん。ヤンとても我身は請出されあんな男に一生を。[illegible]のため。我が手に掛けしと書置し自害するより外なしと。思ひ極めて涙ながら硯の海に筆濡す。心細さ[illegible]みたる[illegible]忍び泣き道理。ノシせめて哀れな[illegible]

かと。驚かけずつと立出づれば。ハツト思へどせかぬ顔サア私も今日より武士の妻。不義いひかけし相手を殺し。我が身の自害は夫へ言譯。見のがし死なせて給はれと捨てたる拔身取る手を押へ。[illegible]ぢや。俺や最前からあれにゐて。こなたの親仁が手にかけて。斷落したのも知つてゐる。エヽ。イヤサ騒く事はない。親に孝行なこなたを。死なすが惜しさに助けに出た。身請の客に直買を立てる氣でもなささうな。すりや死ないでも濟みさうなもの。其仕様は平平に俺が逢うて死骸を見せ。ころりと騙す思案がある。俺に任してつい裏へ呼出して逃さつしやれ。氣遣ひなしに濟してやろ。ナニあの平平をお前に逢はせば。さらりと事が濟むかへ。サアそこには深い仕様がある[illegible]

もの。もとこの原因もあの客があた客い
から出來た事。騙してなりと賺してな
りと。ならば縁も切つてほしい。呼出し
て濟む事ならおつとまかせとかい立つ
て。女心に何の氣も。なくと笑ふとふりか
はり、勇んで奥へ走り行く。地合五右衛
門は手を叉へ立ちはだかつてゐる所へ。
平作は千鳥足。ちろ／＼めかどは暗き闇
どれ。詞コリヤ御浪人様め。手のわるい。
言を吞摘てに嗅敷を叫いて何御果案。地
者を爰へ引擦り出いてなんでえす。三二
とやらさり荷とやらが。御挨拶なら嫌で
えすと。地ひよろつく足元死骸に躓き。こ
りや何ぢやと吃驚するを拔打ちに。胸板
かけて切付くれば。コハ狼藉とすらりと
拔く。右の腕を肘口より打落されてうん
とばかり。倒れ伏すをずた／＼に斬れば
そこらに流るゝ血汐。瀧川駈出でヤア是
はと。いふ聲も出ずわな／＼と。フシ顫ひ

戰くばかりなり。地五右衛門眺めてコレ
コレ。詞かうしてしまへば誰が見ても喧
嘩。相手向ひの討果し。外へ難儀は少し
もかゝらぬ。。地合點かと吞込ませば。い
かさまさうと胸落着き。ハツア有難や。
忝や。命の親と手を合せ。後々迄も此
事を沙汰遊ばして下さるなと。頼む詞
に。詞合點がいたか。そなたも俺も見ず
知らず。いはゞ他人のふりがかり。よそ
の事でも切人は某。互に大事はいはぬづ
くとばかりでは氣も休るまい。爰が談合
なんと氣遣げのない様にいつそ二人が女
夫になろぢやあるまいか。すりや女房の
親の様。夫が言なら管がない。地[illegible]が体
つてよかろがのと。嬉諾は耳より傍に寄
り。詞どうやら談合のなりさうな事。した
がお前にお内儀さんはないかへと。地金
を押されてイヤ／＼／＼。詞女房子もあ
つたれども。ちとした事で七年以前生別

れ。今は裸の一人住。地そんなら持つて
下さんすか。ハテ持たいではと戯れて忙
しき中にもひつたりぺつたり。抱き締め
たる縁結び。フシ深き妹脊と成りにけり。
地五右衛門やがて平作が。死骸の肌へ手
を差入れコレ。詞是がそなたの年季證文
地金は俺がと小判を引出し。押戴いたる
目つき顔付。不審はれねば是申し。詞此
手形は聞えたが。其金お前は取る氣かえ。
取るとも／＼。此金故に付きまとひ二百
兩を取る首尾なく。九十兩ではあはぬ仕
事。ヤアすりやお前は。コリヤ男の惡事
を女房の口から。言ふな黙れと肌につけ。
ヤレ喧嘩よといふ聲に。家内が騒げば近
所となり。どさくさまぎれ夕まぐれ。ぐ
れの來ぬうちサア來いと。走り女夫お手
を引いて出口へ。こそは 三重 へ駈けりゆ
く

中之巻

地武士は人日に高楊枝柳の馬場に浪人の。表美々しく內證は。女房と見えて下女ぶんの。連れ子をすぐに丁稚ぶん去年生んだる子のあひが靑田に變る夫婦仲。フシ世に睦じく暮しける。地色主は近所夜咄しに出行く月も四つ過。妻のおりつは乳のみ子の宵寢の膝を休めんと。表間近く立出で。詞コリヤ五郎市よ。坊が枕を持つて來い。腕が抜けるヲしんど。地ころりさそうと下におく。兄は十一年だけに申し母樣。詞旦那樣もお留守。表は締めてござるかや。ヲ宵から錠をおろして置いた。昨夕もお客で夜通し。地今夜轉けたら他愛はあるまい。何時お歸りあらうも知れぬ。それ迄おれは爰に假寢。詞そなたは奥にお寢間もして。煙草盆に火もいけ。裾に物置き轉けてゐや。地ろくに寢る時起そぞと。いひつけやつて乳のみ子の寐んねの伽のとろ／＼も。二夜越しの草臥に。オクリ思はずへ深くフシ寐入りける。地色時は亥も過ぎ子にうつり牛より黑き夜盜の一族。石川五右衛門三上の百助。足柄金藏。片田の小雀。小鮒の源五郎引手して。此家をめがけ門の戸を。しやくれど堅めし錠鏁。五右衛門制してさなせそ／＼。詞强きを破るは變のもと。戶尻の壁を切破り。自由をさせんと兩刃の刄。地ぐつと突込み引廻せば。練磨を得たる手の內の。きしつく音もあらばこそ。コハリ三尺四方に切破り。內を覗ふ竹瓢箪。がらつかすれどフシ寐入りばな。地色とつくと見すまし小聲になり。詞首尾は上々さりながら。心にくきは見かけと違ひ。見込のなき內の樣態。殊に女が枕元。守り刀を置いたるは。浪人者と覺ゆるぞ。フシ油斷して先とられな。地小鮒の源五郎先にたて手に合ふ物を持出せ。あながち重きを德とすな。輕きといへども錠前の。ギンおりたる物にはこうみあり。寅の刻より一陽崩す陽は顯はれ陰は隱る。今は丑三つ時分はよし。時刻うつすな急げ／＼。詞それ／＼疊の縁を踏み。上敷につまづくな地ヘズミ鷺の。足どりそれよ／＼と透し詠めて下知をなし。我は女が枕元目を。さまさば一討と。鍔元くつろげ待ちかけしは危くも又恐ろしゝ。ハルフシ教に從ひ。徒黨の面々。江戸着替の半櫃挾箱。金引出よと私語いて持出づれば。ヲ、出來いた／＼。跡は。某見廻つて引包めて立歸らん。お身達先へと追歸し。一人殘つて奥の間へオクリ不敵にへも又忍び行く。ギン正直はハルフシ子供にたとへ。目にたと、。地寢足ればいつと時知らず。目をさましたる稚子は。本フシ添乳の肌を這ひ出でて。機嫌遊びのフシ折からに。地色五右衛門葛籠背

に負ひ。出づる姿が氣に入りしか。手招き足ずりにこ〳〵と。フシわらふ笑顔の愛らしさ。地色人を剥ぎ取る邪慳にも。ハテしをらしやいたいけやと。思はずも立留り。我七年以前都追放にあひし節。離別せし女房に預け置いたる稚子の。面ざしにさも似たりと。子を持ちし身はよその子の。愛に引かれて愛しかゝり。ヲドリ拍子何がお氣參つて。てうち〳〵しやる。ヲ、ようしやる。笑ひ佛に笑はしましよと。地我を忘れて餘念なく。背負ひし葛籠振廻し。ヲドリ拍子つゞら負うたが可笑しいか。こはい伯父が嬉しいかと。地踊る疊の足音で。添乳の母は飛んで起き。詞ヤ汝や何者ぢや。何處から來た。地盗人さうなと我子を一間へ押遣つて。守り刀を搔込めば。不敵の五右衛門胴をすゑ。詞俺や何處からも來ぬ。外から來た盗人ぢや。聲立つると捻ぢ殺す。ヲ、殺さるゝとて

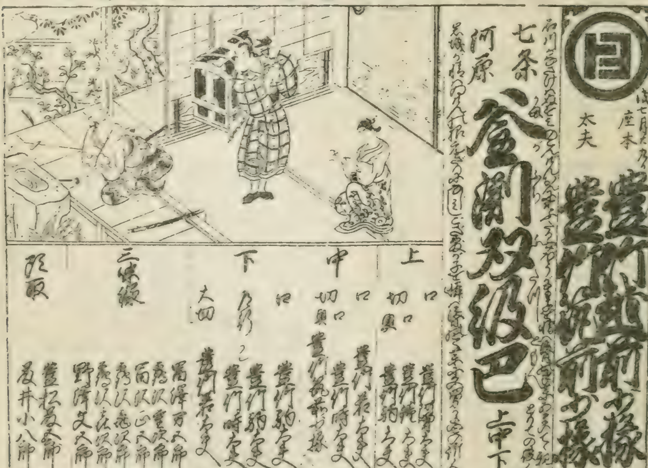
主の留守。白紙一枚盗られても言譯たゝぬ。背負うたつゞら置いて行け。イヤならぬ。地ならぬと是ぢやと突つかくる。利腕苦もなく引掴み。詞おかさま。盗人にはひり。子を愛してゐるど性骨。こなたの手には合ひ難いと。地刃物捥取り顔見合せ。詞ヤ汝や女房のおりつでないかと。地頭巾を取れば以前の夫。詞五右衛門殿か。ホイ。地はつとばかりに胸迫りフシ心も空に詞なし。地色五右衛門も面目なさ。うち〳〵そろ〳〵片傍へ。背負ひし葛籠おろす内。主の浪人夜咄より歸る表の間の壁切つたは如何にと差覗き。樣子ありげな内の體。そつと這ひ入り庭陰に忍びて樣子を窺ひゐる。地色五右衛門詞も差足に。詞久しう逢はぬにまあ壯健で。そうして爰にはどうしてぞ。あぢな所で逢うたのと。地問はれて女房詮方なく。あぢな所であぢな出合ひ。顔見て私も胸がふく

れた。詞ソレ覺えがござらう。都御追放の節。自らには暇の狀。五郎市は預けると。くれ〴〵のお詞。地大事と思ひ四五年も辛抱はフシしたれども。地色何するすべも女の手業。爲ん方盡きて此家の奉公。詞五郎市は丁稚ぶん。私はアノ子を生んでから。マア下女ぶんのがてら奉公。地それはさうぢやがお前は以前の氣なほらずひよんな商賣。そうして今は何處にぢやえ。詞どこは久しう故鄉へ歸つてゐたれども。物が見えぬと五右衛門と又してもどやをもむ。兄めが顔も見がてらと上りごとは上つても。都の内へは足踏ならず。やう〳〵大津に足を留め。知らぬ呉服商賣より知つた小糠商と。まあ手なれた事をしてゐる。是といふも子の無い故浮世壹分五リンの暮し。そなたに逢ふたら兄めを取戻し。外の商してみる氣。勿體ない事ぢやが此商賣にもほつと飽い

た。五郎市を戻してたも。ヲ、戻しませうさりながら。今は此家の旦那殿。親やら主やら義理ある中。其留守の間へ家後切。盗人殿が入られて。それが卽ち父親で。五郎市を戻したと。私が口からどうもいはれぬ。表向から畫中に。迎ひにごんせ戻しましよ。ハテこな人は。畫中に京へ來ると又むらへかまれる。旦那殿へは駈落したというて。今夜幸ひぢや連れて去の。イヤさうはなりませぬ。ならざいつそ盗んで去のか。盗ます事は。サならすとどうぞ。インヤ。はて。なりませぬ。エ、面倒な女め。地五右衛門が連れ歸るに誰が點を打つ。引連れて立歸ると フシ奥を目がけ駈入るを。地色主庭より飛んで出で。素首取つて引戻し。立塞ればおりつは吃驚ひよんな出合と フシ氣をもがく。地色五右衛門苛つて。詞ヤア汝は此家の主よな。俺が子を俺がでに。連れ歸るを地邪魔するかと。摑みかゝるを確と止め。有無をいはず引擔き。投げんとすれども此方も曲者。身を躱して振解き。取手柔道の早業も互に外し潜りあふ。傍ではおりつはあぶ〳〵と。いづれを押へいづれをば制し止めん樣もなく フシうろつくばかり急くばかり。地色後は互に髻髮摑み合うてどつかと坐し。息も切るれば主は聲かけ。詞それ女房水一つと。いふに此方もコレおか樣。慮外ながら俺にもと 地こはれて胸は氷水フシ解けぬ思ひぞ切なけれ。地色主は怒の聲あらゝげ。詞汝盗賊今宵ばかりと思ふかや。いつぞや美豆野御牧にて。騙り取つたる五十兩。多くの人を切殺し立退いたる重罪人。地繩掛けずにおかうかと。思ひもよらぬ一言に。五右衛門ぎよつとし持つたる髻捥ぎ放し。詞ムウ。其譯知つた貴殿は何人。ヤ何人とはと拔き放すマ、マ、〳〵待つた〳〵。其金は扱ひ金。騙のわけを知つたは如何に。ヤア吐かすまい。割内やらぬ腹立に。一味の非人が訴へ。某こそ其時取扱ひし侍當馬之丞。見忘れたか愚人め。騙り取られし越度により。知行に放れ此所に逼塞。地汝が首取り再び歸參の願ひをする。フシ覺悟ひろげと詰寄すれば。詞ヤレ逸るまい。尤も〳〵。何と其金五十兩。お戻し申そが御了簡はあるまいか。ヤア狼狽者め。其金は若殿のお遣ひ金。則ちお里の金役人。岩木兵部の名判をする。かけ屋の極印明白。外の金で事すめば。其時調へ返納する。今更拵へ首代とは。卑怯者めと言はせも立てず。イヤ今更ならず。其時の金。返辨申すと懷中より。地取出し投げ出す五十兩。包の封印其儘に嗜み持ちしは フシ不思議なり。詞ムウ合點のいかぬ。扨は汝は榮耀にひろぐ盗賊な。貧苦に逼り盗みせば。今迄此金持ち貯よ

う筈はなし。地重々の科人と。極付けられて眼を瞬き。詞栄耀にするとはお情なし。地心ある御方と見こんで恥を明し申す。詞必ず他言御無用。もと某は。腹からの盗賊にもあらず。則ち其金の上包に。金役岩木兵部と。判形するたは某が實の親。ヒヤア。ヲ、おりつも此儀は知るまじ。いかなる事にや三つの時。此一腰を相添へ。伏見の野はづれに捨てられ。河州石川の百性に育てられ。人と成つて都へ上り。心悪黨ゆゑ邪人仲間へ入込み。意に所を追拂はれ。又故郷へ歸れども足も留らず。御自分を騙りしも。何とぞ其金にて武士にもと思うた時は本心。騙り了せ上包をよく見れば。岩木兵部と父の名銘字。封じ目にしつかりと魂の判形。地いかに盗賊すればとて。現在親の魂を。切裂く事も勿體なく。幾度か手は掛くれども。ギン名判に恐れ只今迄。フシ推へ〳〵て貯へし。

地色佛體受けし人間の本心實は變らねど。貪慾邪智の上曇り。はれるは臨終今はの時。それ迄待たず當馬殿。本知にかへる種ならば首とり給へ惜しからずと。近付き寄りて差付くる。侍勝の根性にフシ盗賊さするは惜しかりし。地色始終を聞いて當馬之丞。詞ムウ岩木兵部殿の御子息。稚き時は友市とはいはざりしか。ハテよく御存じ。ヲ、存じた筈。拙者は江州より兵部殿方へ養子に参り。若殿に付き美豆野お館へ奉公。ム、すりや親々はひとごか。いうて見れば行



寶暦四年七月興行の番附

合ひ兄弟。アノ御自分と。ヲイノ。地是はとばかり手を打つて フシ呆れ果てしが。地色當馬之丞何思ひけんすつくと立ち。刀すらりと抜放し。手水鉢に打ちつけ〳〵。打ち折つてからりと捨て。詞誠に鳩に三枝の禮あれば。烏に反哺の孝あり。盗みはすれど親の事。忘れぬ性根あつぱれ〳〵。其心に免じ當馬之丞武士を捨て今日より町人。ソリヤ何故な。なぜとは。武士を立つれば御自分の首取らいで先知へ歸られうか。親兵部殿にも。御存生にて折ふしな仰せ出され。此友市は何とした。太刀錆びになる相ありしが。佛神の加護あつて。人並に生立ちしかと。老體の病身は苦になされず。地御目の内に涙は幾度。詞何とぞ本心に立歸り。御健勝の内御對面あられよ。地性根の直らぬ内は某とても音信不通。お歸りあれこれ限りと立上れば五右衛門は。親の堅固の嬉しさと侍捨てゝの恵みと退つて三拜 フシおりつも嬉しく。地色永居は無用と引立つれば。小腰折り〳〵折あらば。此お禮をといふしほに。差詰めたりし門の戸を。開くるおりつは事なき内と フシ心急きたつ主は見ぬふり。詞コリヤ〳〵女房。盗みにはひりおめ〳〵と。手ぶりで去んでは本意なかろ。何によらず望の物やつて去なせよ。ア、申しそりやあんまりお情過ぎる。見れば諸色も餘程不足。ヤレそれは高の知れた浪人の貯へ。何惜しからん。まだ其外に。心のなほる絆足。二人が中の。ナ。子盗み 地さして去なせいと氣を付けられてハツトばかり。やがて五郎市呼出し フシ手渡しすれば。いとゞ尙嬉しさかぎり涙ぐみ。重々の御恩何として報ぜんと。手を合すれば其恩は此。子盗みを元手とし。商賣替へて見せられよと。深き情の教訓も。縁にひかるゝ友綱や来は。首枷首綱と。知らで伴ふ。キン子故の闇明け方。近く 三重へ別れける。キン針に引かるゝ。糸筋や。廓を。出でて五右衛門が妻と定まる瀧川が。素人の業を仕習うて。フシ洗濯物の縫くゝり。フシ忙しき中へ五郎市を連れて戻つて縫合す。親子の中のそぶ〳〵は。絹の表に晒裏。フシ肌つき惡く暮しゐる。地色來る人毎に惡者の。三上の百助堅田の小雀。遠慮もなくずつと入り。詞エお瀧さま縫仕事。御精が出ますの。コレハ二人づれでようこそ。主は晝寝。地何ぞ用ならいひ置いて。詞イヤ用というて商賣づく。コレ此小雀が在所。堅田の落鴈屋に嫁入があつて。しつかりと土産。躍りこむ相談に暮方から金藏所へ寄合ひます。扨と。雀よ。次手に今のをいはぬか。汝いへ。ハテ言ひに來たちやないか。そんなら餘の事でもごんせぬお瀧さん。昨日爰の五郎市殿が使に

來て。今の母様のあたりが戀にむごい。わび言してくれてゝ如才のない言ひ様。十一や二で思ふ様にはあるまいし。コレコレ雀殿。憎うてむごうしませうか。サアヽ〳〵そこもあるてや。あんまり可愛いと胴慾がまじつて繼子憎みになるもの。ハテ異な事の挨拶。繼子を憎むが天下の法度か。こなた衆の所へまで。地懺悔をいうて行く息子。あんまりかはゆうござらぬと。一蹴蹴られて道理々々。詞百よ。聞いて見ればおか様のが尤もさうな。繼子憎むは世界の大法。とかく息子が腹借らぬが誤。公事はさばけた來い去のと。地差別知らすが燃える火に。フシ焚附からうて立歸る。地つらき親をば親にして。猶も機嫌をとる端香。愛想に汲んで五郎市は。しとやかに立出で。詞申し母さま。お氣が盡きやうと思ひ茶を入れました。地出ばな一つと差出す。はや小雀がいひしを根に持ち。詞何ちや茶をいれたこりや誰が頼んで。そなたが飲んだ飲みあまり。口ふさげに持つて來たか。地アノ勿體ないなんの飲餘でござりましよ。初穗を汲んで參りました。詞ム、初穗を飲まして。此母を追出すのか。飲めなら飲まうドレおこしやと。地捥ぎとる拍子に情なや。仕立てし布子にざんぶりと。かゝりや繫がる親子とて。フシあひ見る茶とぞなりにける。地色我が誤も子に嫁する。まゝ母性根を顯して。詞ヤイこゝな麁相者。代りのない晴着。地よう此様にしたなあと。取つて引寄せ太股を。指先强く二つ三つ四つめの紋のつかみ染。ナウ悲しやと五郎市は逃げ廻り手を合せ。誤りました今度から。嗜みませう堪忍と。フシ詫びる目元もおろ〳〵涙。詞又泣くか。地吠えるかと。聲はしたなきフシ折からに。地色人の女房の上水を飲みに廻る小餅の源五郎。門口より差覗き。詞ハテこりや又親子喧嘩でえすか。性懲もない息子殿。地笑止な和郎と座を占めて。詞コレお瀧さん。繼子の世話をやかすとも。俺が言ふ様にならんせんかいの。地人にばつかり思はせて。フシ氣强いお人と當擦る。詞又小餅殿のじやら〳〵と。そんな機嫌ちやないぞや。地あつたら口にはお風〳〵。詞サア其風に實が入つて。傍へ寄ると震ひ付く。機嫌なほしにちよつと灸をと。地手を取つて無理に引込む太股ふつつり。詞アイタ、、。こりや繼子殿の相伴だ。地扨も手ひどい御馳走と。顏をしかめて擦りゐる。詞ヲ、よい氣味の。傍に告人のあるも構はず。地好んで痛いめなさるゝと上手ごかしを。コリヤなると。思うて何がな追從に。憎む繼子を取つて引立て。詞告人とは此和郎か。目離のないちよつぽり殿。地奥へ行て貰はうと。むごいを馳走

に。フシ蹴飛ばせば。地五郎市むつと目に角を。立てがひもない親の前。詮かた涙押隱し。オクリ泣く〳〵奥にフシ入りにける。地サア見る人もなし聞人もなし。主のあるこな樣に。いひかけるから命づく。首を先へ投げだそか。胴から下を受取る氣か。はずみ切つたお返事をと。フシしなだれかゝるを。そつと外し。詞夫五右衞門幸ひ宿にゐらるゝ。其通り申聞せ。地急度お返事致させんと。立上ればア、是と。詞それいうて堪るものか。よい〳〵さうあるからは此方も意地づく破れかぶれ。御大切に思召すお配合の芥藻屑。いふ所へ行て申すぢや迄。地お暇申すと强請りかけ立つをお瀧は引留め。詞ソリヤこなたも同じ仲間。サア其仲間がいふからは慥かな證據。首投出してと申すはこゝ。惚れかゝるとぞつこん火へ陷るも構はぬ氣。地色なんと一度か二度の事。ヲツトいふ氣はごんせぬか。詞そんなら一度で大事ないか。半分でも忝い。幸ひ傍に人はなし。表を鎖してつい爰でと。地抱き付くを氣疎。それ〳〵親仁の足音。詞アイ〳〵呼ばんすもうそこへ。地そりやこそ爰へ出て來るわと。威せばうろ〳〵狼狽へるを。無理に押遣り押出して。睨に〳〵と一寸のがれ。二寸延びたる鼻毛の小鮒。內儀の泥に醉はされて フシ跡をも見ずし逃げ歸る。地色五郎市樣子聞きながら。聞かぬ振にて奥より出で。詞申し母樣。父樣のお目が醒め。夕飯上ろと仰しやる。地わし据ゑましよかと問ふも恐々。詞ヲそりやおれがしませう。其代りに縫仕事取置いて跡掃いて。日暮れになつたら火を點し。門も閉め庭も掃き。地遣ひ水から風呂の水。いひつけずと汲んで置きや。子供遣ふもア、世話とオクリいひつゝ奥へ入る影を。打眺め〳〵スヱ恨み。涙にくれけるが。思ひまはせば我が身程。親に緣なきフシ者あらじ。地色眞の母樣ある時は父樣に氣兼する。今又父樣ほんのなら。母樣が隔りて善き事しても氣に入らず。そと町より來る者まで見侮つて足にかけ。蹴たり踏んだり何事ぞ。此家にうか〳〵暮すなら。まだ此上にどのやうな恐ろしい目に合ふも知れず。何國へなりとも迯げ行かんと。表をさして駈出でしが。ほんの母樣の所は覺えず。どこを先途と立戻り。又駈出しては行く先の。あてのないのに引かされて。行つては戻り戻りては。巷に迷ふ稚子の。フシ途方に。暮れてゐたりける。地色五右衞門は寄合の。時分ならんと立出でて。詞五郎市よ。何して地そこにと咎められ。イヤ何處いも行きやしませぬ。お前は何處へと問ひ返す。詞ヲヲ俺は寄合に。暇は入るまいつい戻ろと。地いひ捨て行く袂にすがり。詞モウ今夜

は何處いも。行かずと内にゐて下され。地さなくば私も連れて行てと。おろ〳〵涙の體を見て。思はずも打萎れ。詞何故さう言ふぞ仲間事。行かぬと何かと後の邪魔。地ちつとの間ぢや留守しやと。賺せど猶もしく〳〵と。フシ涙に聲もおど震ひ。詞とゝ様。私はほんのかゝ様に逢ひたい。地去して下され去にたいと。泣き萎るれば五右衛門も。胸は張裂く思ひにてしばし涙にくれけるが。詞ホヲ、道理ぢやさうあらう。常から女房めが仕方。いかに己が子でないとて。朝から晩まで責め遣ひ。ちつとの事も大仰に。叉しても打ち打擲。酷い奴憎い奴。もう引捉へ言はうかと。思へど胸を擦つてゐる。腑甲斐ないと思はうが父をよう聞け。父はな。悪い商賣してゐる。今止めたら思へども。仲間事ゆゑ止めさせぬ。それをあの嬶めがよう知つて。眶見ての我儘氣まゝ。地今追出したらやら腹立ち。どんな事を吐さうやら。殊に彼奴が親は悪者。忽ち其方や俺が身に。難儀のかゝるが悲しさに。何事も堪忍する。詞子心にも聞分けてゝ。了簡つけてゐてくれい。眞の母にも他人が添ひ。今さら戻すも戻されず。地色其うちに思案して憂い辛い目をさせまいぞと。いひ慰むれば五郎市は。涙を袖で押拭ひ。詞父様の苦になる事なら。打たれても抓られても。堪忍してゐませう。地其代りには何處へござろと。早う戻つて下されと。フシいひつゝ猶もしやくり泣く。詞ヲ、聞分がよいよ。惣別堪忍といふ事が人は肝腎。男と生れ堪忍のならぬは女房の間男。さては人中の面恥。拳一つ當てられてもそこは男づく。其外は皆内證。堪忍が即ち辛抱。地ちつとの間の留守。辛抱して待つてゐや。つい戻らうと懇た意見ながらの言聞せ。それが小耳にとまるとも。知らで五右衛門寄合の フシ時分遅しと出でて行く。地是非も涙に門をしめ。内の灯火庭廻り。いひ付けられた荒増を。フシ片付け廻る折柄に。地色お瀧が親の無頼者。三二五郎兵衛しらにせの。ごく髭親仁門の戸たゝいて。お瀧〳〵と呼ぶ聲す。五郎市扨は最前の。小謝が來たと心得て。わざと其場を知らぬふり。フシ聞かぬふりして奥に入る。地色猶も忙しく叩くにぞお瀧も心ならねども。誰ぢや〳〵と咎め出で。俺ぢや開けいは親の聲。叉用無心か氣の毒と。思へど是非なく内へ入れ。詞日も暮れたにうと〳〵と。地何しにおいでと尋ぬれば。詞何しにとはゝ。娘の所へ親の來るが不思議か。地あた面倒なと膝打捲り。詞いふまいと思へどいはぬが損。聞くうちぢや聞けお瀧。此中借つた二十兩。昨夕五三たでころりとしまひ。跡をつなぐ種が切れた。五右

衛門は宿にか。まあ十兩か廿兩。借る氣で來た言うてくれ。近年見たがはやり出て。ア、胴も合はぬぞいと 地 咄し出せば。詞 ア、もう其咄聞きとむない。地 小判の生る木もあるやうに。又しても無心。主の手前へ私も氣の毒。殊に今夜は留守。マア往んで下さんせ。詞 イヤ往ぬまい。汝こそさういふ五右衛門は。金の生る木があるげな。毎晩々々甘い商賣。元手入らずの摑取り。ようごろが來ぬなあ。今夜も働きの留守ならば戻る迄待たう。むすめ。けん／＼言ふなやい。何にも知つてゐるぞいと。地 底氣味わるき一言に。くわつと胸まで迫上し。詞 コレ親仁さん。人の事でも大事小事。あじやらにも言はぬもの。いうてよければお前もの。京の嶋原で置土の九郎次を殺し。雛儀に及ぶを五右衛門殿の。思案一つで事無うしまひ。親子共に恙なう。今日迄暮すは誰が蔭。地 其恩を知つてなら苦口いはんす筈はない。金借る度にいたかはなせ。さう胴慾にはいはぬものと恨み歎けば喧しい。詞 そりや有つて過ぎた事。今でも金を借せばよし。いやといふと此村の庄屋へ行て。夜の商賣いうて來る。地 それとも五右衛門が心底次第。戻る迄ぺん／＼とかうしてもゐられまい。寝所せい寝てゐよう 詞 そんならどうでも逢ふ氣かえ。逢はずといつて庄屋殿へ行こか。サアそれは。なんと。地色 ハテ寝て待つ氣なら此一間。寝所して上げましよと。暗いをふせぐ明り障子引開くれば。詞 ヲ、よい合點。汝も五つから俺が手じほ。いつ孝行な事もない。來てちと腰揉め足擦れ。嫌といふと庄屋殿と。地 威し立てられ是非なくも。ハテ撫で擦りで濟む事なら。致しませうと伴うて。入るも疵持つ足の裏。ヲクリ 篠原へならぬ フシ 藪垣の。フシ 隔つる思ひに。五郎市は。小鮒と心得奥の間の。親の差添そこ爰と。尋ね廻れど知れざれば。勝手の戸棚を心ざし。搜し當りし修羅の一腰。そつと拔取り小脇に掻込み。おのれ最前蹴た意趣と。父の眼を拔く不義者め。たゞ置かうかと忍び寄り窺ひ聞けばお瀧が聲。詞 申し。お前とわしとは因果な縁。切らうというても切られぬ。今にも夫が戻られては。意地づくでどうならうも知れず。私可愛いと思うてなら。まあ往んで下さんせ。イヤ往なぬ。小言いふと五右衛門を。逆磔にかけさする。殺そと活そと俺次第と。地 廣言吐くは憎さも憎し。往ぬる所を殺さうか。詞 寝てゐる所を突かうかと。脇差拔いて子心に取つつ置いつの一思案。地色 かくとも知らず五右衛門は。さぞ待ちかねんとつかはと。歸る表の足音を。人こそ來れと五郎市は。心急くまゝ障子越し。ぐつと突

いたはお瀧が胴腹。わつと魂切る聲に驚き。ヤレ人殺しと三二五郎兵衛フシ奥を指して迯げ入れば。五右衛門門の戸蹴破つて。見れば女房朱に染み。五郎市は人違へと。うろつくを取つて引寄せ。詞ヤイ悴。恨あるは道理ながら。母と名がつきや親殺し。辨別知らぬか痴呆者と。地叱りつくれば聲ふるひ。詞母様を小餅めが女房にしをる故。小餅を殺すと思うたら母様でござつた。地堪へて下され怪我であつたと。あどなき詞も問答め。詞何といふ。嗚と小餅が不義したとや。其又相手は。奥へ迯げて行きました。地扨はと目がけ駈行くを。ノウこれ待つてと手負は呼びとめ。詞其迯げたのは私が親。三二五郎兵衛殿。あの子がそれと知らぬも尤も。今日晝小餅が無體の戀慕。嫁といへば身を捨てゝ訴人に出ると阿房の一徹。地色もしやと思ひ宥めて歸し。今宵忍んで來る約束。思ひもよらず。親仁殿が見えまして。詞又金の無心。お歸り迄待つとて。一間にわしと差向ひ。小餅と思ひ違へたは。地あるまい事では無けれども。親と名のつく自らを。殺してあの子の身の科が。何とあらうとそれが悲しい。やつぱり不義で見付けられ。自害と沙汰して下されと。スヱテ思ひ過ぎする。心を疑ひ。詞ヤアしら〳〵しい。左程いたはる五郎市を。是まで酷く責め遣ひ。今さら悲しい不便なとは。地追從らしいおけ〳〵と。つつけりいひ出す詞の内。苦しき身體押直り。詞コレ五右衛門殿。今死ぬる身が何の追從。こなたは又五郎市に。何老舗の何商。何さす胸で連れて戻つた。地色女房にさへ暇の狀。まさかの時は他人向と。常からのいひ聞せ。男の子は夫に付き。どう言ひ抜けても。フシ遁れぬぞや。地色たとへ別儀ないとても。鬼でもならぬ恐しい商賣。こなたはそれを譲る氣か。可哀さうに美しう。生れついたあの顔を。撞木の上に曝さうかと。それが悲しさ愛しさに。追出す種の無得心。早う此家を逃げよかし。母御の方へ去ねかしと。打擲するもこなたこそ。一生その身で果つるとも。せめてあの子は。人にしたさにと。わつと泣入る眞實を。地聞いて五郎市泣き出し。かゝ様堪へて下さりませ。何にも知らいで恨みました。ひよんな事して切りましたと。悔み歎けば五右衛門も。至極の涙に咽びながら。詞一寸の虫にさへ五分の魂あるといへば。まして我とても悴を連れて歸りしより。たとへしつけぬ荷歩行持。人の竈を廻つても。ふつつりと止めうと善心に。もとづく甲斐も情なや。地色同類數多に絡まされ。止めうというても止めさせず。翅鳥にかゝる此骸。追付刀の錆屑と。なる身をせめて

そなたとなう。代つて死んだら果報ちやに。科なきそちは先へ立ち。罪ある我は引殘り。責め訶まれ死ぬるであろ。疊の上での臨終は。羨しいと搔口說き。ヘルフシ男。泣きにぞ泣き居たる。地色今はになりて五郎市を。引寄せて打眺め。詞愛しや是迄氣の苦勞。怪我でないとて殺すをば。無理とは更に。フシ思はぬぞや。地色其代りに佛壇に香花きらして下さるな。四十九日は家の內に。迷ひゐるとの事なれば。直に手向を受けませう。名殘惜しい我が夫。苦しいわいのといふ聲も。無常の嵐一吹に。吹き散らされて敢なくも。フシ此世の緣は切れにけり。地ナウこれ母樣母樣とすがる我が子の歎より。堪へかねたる五右衛門が。身を震はして噦り泣き取亂したるフシ折からに。地色一間の內より三二五郎兵衛。始終を見屆け飛んで出で。詞ヤア遁れぬところ五右衛門。餓鬼めは即ち親殺し。此旨上へ言上と。地いひ捨て既に駈出すを。南無三寶と飛びかかり。何の苦もなく引摑み。有無をいはず氷の刃ぐつと突込み一刳り。刳る間に向ふへ提燈。人こそ來れと死骸を投げ捨て。やがて我子を引立て。詞是からが身の大事。そちも親を殺すれば。我も身の命を取る。二人共に親殺し。地此場にゐられずサア來いと。肩にフシ引掛け出る所に。約束時分と小餅の源五郎。のろのろと小提燈。明りにそれと見るより五右衛門。此奴故と飛びかゝり。躍り上つて



眞二つすぐに立退く八聲の鶏。こつか高野をあてにして飛ぶがご。とくに 三重 へ出でて行く。

下之巻

ハルフシ身の科を。數へゆく身の果敢なくも。地翅鳥にかゝる五右衛門が子に引かされて遠近の。フシ人目を忍ぶ破れ笠。子にも小笠を拾ひきせ。三里夜の内明方に伏見の里の藤の森。フシ街道筋に着きけるが。地色貯へなければ五郎市に認めさする便りなく。途方に暮れてゐる折節。長袖武士と思しき乗物。八幡下向の朝戻り何恐れなき物詣と。見込んで五右衛門近く立寄り。詞麁忽ながらお乗物をお侍と見うけ。旅疲れの浪人がお願ひの筋あり。地色御開届けと餘儀なくも。言ひかけられて乗物を フシ傍におろす其内に。地色五郎市に指さしたる脇差取つて小腰をかゞめ。詞某一人の悴を連れ。長途の路銀遣ひきらし差當つての難儀。何とぞ此一腰。御求め下されなば御恩ならんと差出す。地色乗物開き出づるを見れば七十越した白髪の老人。悠々と。フシ挾箱に腰打掛け。地色目鏡を力に一見致さん。詞どれお腰の物と手にとつて。地ためつすがめつ。詞ム、鍔はかんとう身はせき打。地見れば見る程其昔我が子に付けて捨てたる一腰。ハット驚き。詞これ〱旅人。是は他所より求められしか。地もとの出所不審しと。詞の内より。詞イヤ御念に及ばず。即ち某悴の時分。



後の印と親共ょり。添へ置かれたる一腰と。地聞くより扨は我が子かと飛付く程に思へども。豫てよからぬ噂は聞く。今の風柔家來の見る目。かた〲愧ぢて心を鎮め。詞ハテノウ左樣かしてあつぱれのお道具。なれども持人の根性が刃物にうつり。あつたら事は落ち難い錆が出ましたよ。切先にこぼれ疵。疵ある性は直り難く一生が亂れ燒。鍔はねぬけ。古いをおもと賞翫すれど。友傍輩の附合が惡しく。地金をあらはすもめんずれ。地目貫の龍は後藤なれども。勢なきは雲霧の間に住むべき所なく。逃げ彷徨ふ有樣。詞自慢の鮫も出所はよけれども。親が放れて他人むき。地子は子と思へど傍あたりに。目利があれば初の生れといはれぬ〱。詞はてなうあつたら恰好で。見すぼらしい此脇差。地色老の見る目も情なしと。物に寄へし心と知らず。詞イヤ是まで幾人か手覺え。悴が僅かな小腕にさへ突留めたる業物。拵に構はずとも地切れを見込に御求めと。いはせも立てず。サア〱その幾人か手覺が尙氣遣ひ。殊に御子息の小腕。突留めたとはハア心許なし。御存じない興物語なれども。某もその昔男子一人儲け。仔細あつて捨て申した。地色もしその捨てられた悴。御自分のやうに流浪致し。親に捨てられずはかうあるまいと。恨うかと存じお咄申す。詞若き時分月も忘れず正月庚申の日。お館は庚申待。奥女中に戯れ。一夜の契に子胤をおろし。生れたは月足らず九月廿日。又是も庚申の日。庚申の夜盗をすれば縛はれ。其夜懷胎の子は必ず盗するとの俗說。地色信ずるに足らねども里にやれば突戾す。養子にやれば目遣ひが惡いと厭うて貰人なし。仕官の身の是非もなく此里の野はづれに捨て。河内の土民を賴み。拾ひ養ひ貰ひしが。人と成つて都へ上り俗說に違はず。事を仕出して都を追放。扨こそわがため敵ぞと。思ひ切つてはありながら。次第に寄る年くる日數。人懷しき折柄は思ひ出して我と我が。心に行方をとふばかり。もし其許の所緣の內心當りの人あらば。地傳へてたべと打つけに。いひ聞かされて五右衞門は。その捨子こそ某と。言はんとせしが。詞いや〱〱。地聰きお心脇差でそれと知つても他人むき。殊に我は重罪人。後の咎もいかゞぞと。心付きてよそ〱しく。詞ありし昔の物語我が身のやうに存ぜられ。思はず落涙致しました。定めてその後其子息氣も改り申さんが。情なきは是迄の罪滅せず。今にも繩目の恥を受け。親あるなどといはれては不孝の上の不孝と思ひ。地わざと見ぬふり聞かぬふり。よそにあしらひゐられましよ。と斷いへば。詞その心ならまだ

しも。地色せめて其許の子息を我が孫と思ひ。餞別を致さんと金一包取出し。詞黄金は朽ちても朽ちせぬまつ其ごとく。悪事も亦末代まで其名は朽ちぬと心得。親の性根を見習ふな。地色對面も是限り。後世菩提はいづれとも。弔ふべき者は。定らずと泣く〳〵立つて一腰も。共に渡して乗物へ。涙隠しに入り給へば。しばしと留むる甲斐もなくはや乗物を舁き上げて。フシ心もなげに急ぎ行く。地跡懐しく五右衛門は打萎れ。フシ涙ぐみ。地色現在親を親とせず子を子とさせぬは我がなす業。此罰にても極重の。罪科のがれず淺ましやと。先非を悔いてしやくり泣き。フシ詮方もなき折柄に。地色自業自滅の時來り追手と思しき捕手の役人。それ五右衛門よあますなと四方よりも追取巻く。コヽ叶はじと万馬市を崇道の宮へ押遣つて。其身は封彊を小楯にとり。力士のごとく踏跨り。段平刀抜いて待ちかけたり。捕地縄をかゝれと呼はつたり。地五右衛門手の小頭早野彌藤次捕縄手操つて詞ヤアハツト止の事。思ひ出して後悔も。かなヤア五右衛門。是迄なしたる悪事の段々はぬ所と胸をする。詞これ〳〵役人。男



残らず顯れ。其上舅を手にかけ。悴は母をは勿論女房も某が殺したり。悴が存じた殺したる様子。三ニ五郎兵衛に止を刺さ事にもあらず。後が命をお助けあらば尋ざるゆゑ委しく白状。遁れぬ所腕まはせ常に縄かゝらん。さもなくば死物狂ひ。

有無の返答承らんと身構す。ヤアいらさる悴を庇ひだて。はや先だつて上聞に達し。親子共同罪との仰せ。地かなはぬ事と聞くよりくわつと眼を見ひらき。詞さうお言やると片端切つてノヽ切抜ける。搦めとらば取つて見よと。地いふより飛付く捕手の人數。得たりと眞向後袈裟。三の胴の車切り。腰骨脊骨きらひなく爰を最期と三重へ切散らす。地さしもの捕手も手にあまり。加勢を入れんとひしめく所へヤレ暫くと聲かけて。親の兵部は老足の心も空に取つて返し。小頭に打向ひ。詞科人は石川五右衛門とな。仔細あつて彼めには重々遺恨あり。地色某に御渡しと。願へば彌藤次。貴殿は何誰。詞三位中將が家來岩木兵部。ムウ今御發向の諸太夫據は無けれども。中々老體の手に及ぶまじ。地お怪我あつては氣の毒と。聞入なければ押返し。詞もし捕り損じ候はゞ。老の皺腹致す迄。地武士は互の遺恨ばらし。是非にと餘儀なくフシ頼むにぞ。地色然らば加勢なされよと。指圖嬉しく向ふに進み。詞コリヤノヽ五右衛門。以前の意趣をはらさんため岩木兵部が向うたり。切抜けるなら抜けて見よ。老の手並を見せうぞと。地表は怒り落ちよかし。逃げよと知らす眼つき顏付。扨は助けて其代り腹召されんとのお心か。ハテ是非もなや此場こそ。我が絶體絶命と。思ひ定めて。詞コレノヽ兵部殿。成程恨をはらさせんが。心入あり貴殿の養子。當馬之丞を呼びにやられよ。地一言申す仔細ありと用ありげなる詞のはし。詞ヲヽ幸ひ某迎ひのため。稻荷まで來てゐつらん。地色それ呼び來れと早使。忙しき中に双方がフシ一息ついて待つ所に。地程なく來る當馬之丞。かくと見るより吃驚。詞隱す五右衛門かけ聲コレノヽ當馬。詞我が運命今日に極る。親父が遺恨をはらさんとて向はれたれども。捕り損じ切腹召されん事笑止に思ひ。手にたつ貴殿を呼びに遣はす。地親に代つて働かれよ。用捨はないと立向ふ。是ぞ以前の恩返しと。早くも悟つて當馬之丞。詞心ざし奇特なれども。今町人になりたる某。武士でなければ手柄望まず。切抜けなりとも。勝手次第と言ひ放す。ヤアその町人には誰がしたぞ。刀を折つたその恨み。今はらさいで何時はらす。一生氣樂に町人とは。養父へ對して大不孝。とても遁れぬ五右衛門が命。他門へ渡して心がよいか。地狼狽者とフシ氣をつけられ。地何さまもはや遁れぬ所。他へ渡しては本意ならず。せめては彼が志。無足になさじと身構へし。詞ホヲヽ盗賊はすれども流石は筋目。先知に代へし養父の家。相續させんとは祝着ノヽ。さりながら。得心の繩かけて

は役なし。滅切抜ける所存ならば。あつはれ手柄に捕つて見しよ。ヤア一旦は男づく。此上何故用捨せん。捕手數多の見る前。潔う我捕れよ。捕るぞよ。捕れよ。サア。サアと睨みあへども心は一致。こなたは首尾よく捕られんと目處を外して切付くる。逃がば逃げよと捕りかねる。親の兵部はあぶ／＼と養子が手柄も望めども。現在實子が虎口の命。助けたや逃したやと。老の思ひは千變萬化。捕手は四方に目を離さず遁れ難なき錣の口。程よく五右衛門切込む拍子。躓き伏すを取つて押へ。是非なく繩をかけるうち。役人社内に駈入つて五郎市を高手小手。親子を共に番ひ鳥。なく音は老の胸の内。共に悲しむ當馬之丞。凋れし聲も御法の呼はり。盗賊の張本。石川五右衛門親子の者。牢屋へ引けと引立てさせ。行くも涙の柵や繋がれ。つなぐ縁の綱。結びついたる行合兄弟。千筋の繩も跡につき。共に警護の。うし綱や是非なく。／＼も引かゆれく

道行街の手向草

つくりおく。罪が須彌ほどあるならば。閻魔の廳につけ所。なしと五道を踏み迷ふ。あさき石川五右衛門が身より出せる錆刀。なせし惡事の無量業。數は船にも車にも罪科。重き親と子を乗せたる駒の首綱や。かゝる憂目にあらけなく。絡み付いたる縛は。暗きへ冥途の鹿島立。二條大宮東へと引かるゝ。道に立集ふ群集をはらふ警護さへ。聲をひしぎの割竹はさながら訶責きらめきし抜身の槍も此世から。劍の山か焦熱の。油の小路沸らして小石。小川も諸共に同じ處刑に釜の座と。氣を空蝉の烏丸。かはい。／＼と人毎の聲を力に引かれゆく。子は父親の。成佛と後手に珠數くるまや町あと見返れば。五右衛門は我が子の姿見送りて。此身を先へ引かれなば見窄しげなうしろ影。見まじものをと胸迫り。聲も涙にかきくれて。御見物のいづれもへ。かく我々を見せしめと。生耻さらすも前世の業。本來一物なき時は。善惡。邪正の分隔。なしと思して一遍の。御回向。なされ。下さるべし。大木になる楠も二葉の時は。童に。摘みとらるれどおのがまゝ。繁れば後に石となる。われが盗みもその如く。始めに思ひ止らずし。一度はまゝよ。二度は大事か三惡道。今日といふ今日親と子が。釜煎の油責現世に報ふ阿鼻地獄。あると知らさるあさましやと。涙の限り聲限り。悔み叫べど共かひも。ないて歸らぬ身の越度國の掟を。堺町。親

の咲きの聲につれ。又思ひ出す五郎市が。涙の顔を振上げて。此多勢の中にさへ母様はなぜ見えぬ。わしは他人の御回向を。うけずとも母様に。逢うて死にたい顔見たい。逢ひたいわいのと身を悶え。差俯向けば黒髪のおくれを。傳ふつゆ涙。柳の馬場に。雨模樣空かき曇り日陰にも。嫌ひ憎まれ世の人の疎み。はてにし身の上も。たゞ往生は鉄屋町に。もしや佛の御幸町。心の闇をてら町と。さして行くみち法の道。逆縁ながら浮むべき。頼みは彌陀の誓願寺。一念發起。菩提心。子はまだ賽の河原町。菩薩の御手に招かれて。いざ松原と聞くならば五條の橋に取付いて救ひ給へと一心に。頼めとばかり教へられ。頷くばかり泣くばかり見交すばかり。恩愛の滿き契の哀れやと。涙片手に見る人も

見らるゝも夢世の中の。慾と惡とにこり木屋の町をはづれて野嵐に。嘶ゆる駒の足はやみ最期場近くなりければ。見物群集とり〴〵に宗旨々々の手向草。題目。眞言念佛の。聲は高瀬や六字づめ七條。河原へ着きにける

仕置の場所は七條河原。二町四方に垣結ひ廻し。内に立てたる拔身の鑓。鼎にするし大釜は地獄の。責を此世から。見に集りし。群集の中。先を拂うて早野彌藤次。岩木當馬も相役に。いひ付けられて是非もなく。床几にかゝる後よりも。親の兵部は心もそら。叶はぬながらも立向ひ。承れば五右衛門を。此所にて釜煎とや。是迄盗賊の仕置は討首。古來稀なる御制法といふを打消し。イヤ。それは彼が科のなす所。先づ立歸りの科二つには。去年嶋原にて平の平平を殺し金をとり。三つには此度舅を手にかけ。一味の輩を白狀せず。成程酷き罪に行ひ。同類をいはせよと用捨なき御上意。役人の私ならずといひ聞かされてハツトばかり。返す詞もなき中に。然らは悴五郎市とやらは。實の母があると申す。さすれば親殺しとも申されず。是は何故同罪ぞや。コハ改りしお尋ね。後の親を親とするが天下の掟。スリヤ是も遁れずか。いつかな〳〵。ハ。ハレ不便千萬と。よそにはいへど心は闇。老の奥歯を噛締めて。泣く音を隱すばかりなり。かくと聞くより母のおりつ。息を切つて駈着けしが。夫當馬が今日の役目思惑いかゞと垣の外。うろつく内に引出すよその〳〵見る目も哀れなれ。親にも子にも。首枷の。脊に細繩の菱の紋。締附けられし後手は。能にかゞみて鈎に折れ。血の通ひさへなつ草の。燒付けらるゝ身の上

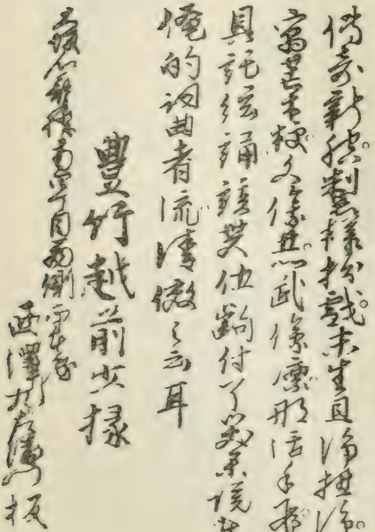
と。ナクリ思ふ。心の。はかなくもフシ打しを。れてぞ座になほる。地彌藤次いかゞ思ひけん親子の縛解かせて。詞なんと五右衛門。樣々の責苦に落ちされば。今日は釜の罪。悴五郎市を不便に思はゞ。一味の盜賊殘らず白狀せよ。地萬民の苦しむる賊徒。狩取らするがお上へ奉公。此理をよく辨へよとフシ柔を。以て問ひかくる。地五右衛門ちつとも惡びれず。詞御尤もの仰。殊にあれに御老體。相役當馬殿の思召にも。子は不便にないか。苦痛さするを思はぬかと。地御蔑みもあるべきが。たとへて申さば盜賊は國の鼠。取盡すに盡されうや。詞僅か手下の五十七十狩取らしたとて。さのみ天下の助にもならず。地萬民のためならば只用心に如くはなし。詞取らるゝ油斷あればこそ取る盜賊も出來申す。地五右衛門が最期の一句はかくばかり。詞石川や。濱の眞砂はつきるとも。地世に盜人の種はつきまじ。重ねてお尋ね御無用とフシ何の。にべなくいひなぐる。地色氣の毒あまり當馬之丞。詞コレサ五右衛門。其身は格別悴が苦痛。地又外々へどうつつて。誰が悲しみにならうやら。思ひはかつて白狀し。輕き罪にあはれよと。兵部や妻の心をば。フシ思ひやりつゝ制すれば。詞愚かの仰や。是迄妻子一家にも。語らぬ事をいひ合せ。大事を計りし一味の同類。地いづれをそれと名指しがならうか。よし白狀したりとて。悴が命助かるにもあらず。惡事をなさば惡事を立てぬき。釜に入らうが火に入らうが。未練な同類指すなどとは。思ひもよらず。詞ヤイ五郎市よ。苦痛というて半時か一時。死ぬるは切ないものと心得。父が子ぢや狼狽へな。熱いといふもちつとの間。地怖い夢ぢやと思うてゐよと。賺せば何にもえ言はずに。しく／＼泣いてゐる體に。強き心も弱りはてスヱテ共に涙に沈みしが。詞人目思うて泣顏隱し。詞そちは死ぬるが悲しいか。卑怯な父が子でないぞと。地覺悟させんと恥しむれば。五郎市涙の聲ふるひ。詞卑怯ではない父さま。道々もいふ通り。地私はま一度かゝ樣に會ひたい。會はして下され拜みまする。死んだらモウよう會はぬ。それが悲しうて泣きまするると。しやくり上げたる哀れさを。聞く親の身は身も世もあられず。わつと泣出す聲につれ。役人下僕も共泣にフシ袂を。搾るばかりなり。地色さすがに剛き五右衛門も。不覺の涙に沈みしが氣を取直し。詞それは何をいふ五郎市。母はそちが手にかけ。其科故この仕置。會ひたか冥途で會はしてやらう。イヤ／＼それは後のかゝ樣。地初の本の母さまに。會はして下され會ひたいと。泣くを消しかね

答へかね。詞會はしたうても會はされぬお上の掟。聞きわけよ五郎市。父に如才があるものかと。地すがるも涙見る涙。コハリはや鼎には煙立ち フシ時刻移ると迫り立つる。地色未練と人や笑はんと五右衞門突立ち。我が子を取つて脇挟み。時一寸を待つも惜むに似たり。とても遁れぬ今日只今。いづれも念佛頼むぞといひ捨て釜へ フシ飛込めば。地色兵部當馬ははつと氣も落ち。堪へかねたる母のおりつ。垣押破り走り入り。ヤレ五郎市よ母なるは。可愛の者やと駈寄るを。當馬之丞押隔て。詞眞の母にもせよ縁切つたれば今は他人。其理を以てお祟なきを有難いとは思はず。何面目に我が子呼はり。近寄る事は叶はぬと。地差留められて聲をあげ。ナウ情なや恥かしや。我が子といへば盗人の。妻と定る恥辱にも。かへて駈出る親心。推量して只一言。暇乞さして

たべ。恨めしいは五右衞門殿。こなたの心を直さうばかり。五郎市を戻したに。共に悪事を見ならはせ親殺しとは何事ぞ。仕置も多いに釜煎とは。あんまり酷い胴慾な。かうなる事と知つたらば。戻すまいもの悔しやと ノルフシ身を投げ。伏して泣きゐたる。地色釜の中より五郎市は。延上り／＼。詞母様よう來て下さつた。會ひたうて／＼。泣いてばつかりゐました。父様と一所にモウ爰で死にまする。死んだ後でも人殺し。親殺しといはれても。なした業なら是非ないが。盗人の子といはるゝが。地私や悲しい母様。人がいふなら言ひ消して。お前の子ぢやというて下され。詞御見物様いづれも樣。親殺しも人違へ。怪我であつたと了簡し。地御回向頼み上げますと。わつと泣出す心根を。思ひやりつゝ人々も。フシ哀れと共に袖しぼる。地色五右衞門悲歎の涙

ながら群集に向ひ聲を勵まし。詞この多勢の其中に。財寶を我に奪ひ取られ。よい氣味とも憎しとも。又仇なき其人は。不便とも思されんさりながら。めん／＼我身の手本ぞと。地思うて念佛頼むぞや。詞盗の元は僞より起り。僞の始は身持から。若いお人は取分けて。色狂ひ小博奕の。つばめを合はす筆のさき。地後に手先がはたらいて。主親の物他人の物。一人の方人二人の味方。三人五人と枝葉つき。止めうというて止められず。坂に車を轉すごとく。車は早く心はあと。悔んでかへらぬ釜の罪。我が身ばかりか倅まで。苦痛をさする悲しさを。推量あつて一遍の。御回向頼み上げまする。未練な最期も子故の闇。スヱテ面目なやとせき上ぐる。地心を思ひ諸見物。兵部おりつは正體も。ないて返らぬ親と子の。フシ別れはさぞと知られたり。コハリはや顚倒の時來

り。釜に油のいきり立ち。たまぎり上る其聲は。鳴神よりも フシ恐ろしく。フシ見る人ごとに。身の毛だつ。中に哀れは五右衛門が。我が子をかばふ其有様。親しき二人は氣も狂亂。さすがの當馬も顔そむけ。役目で責むる彌藤次も。白狀せよゆるめんと。フシいうたばかりに フシ目もやらず。地色性根亂るゝ五右衛門が。子を思ふ氣の遣る瀬なく。片手に掴んで五郎市を。目よりも高く差上げ。暫しなりとも苦しみをさせじとこそは。フシ身をもがく。コハリ油は次第に煮えあがり五體も。あからむ訶責の責阿鼻。焦熱を此世から。ナホス地見る親よりも見せる子に。迷ふ心の不便さを見かねて當馬聲をかけ。ハヤア／＼五右衛門。とても遁れぬ悴が命。庇ひだてする見苦しさ。後で苦痛をささうより。なぜ一思ひに先だてん。地血迷うたかと教へはげに。尤とは思へども現在親の手にかけて。何とせん彼とせんと。差上げたり下したり。見る苦しみは恩愛妹脊。叶はぬ時の今はの際。いなゝき響く大聲にて。詞五郎市父が先驅せよと。地ぐつと突込む釜の底。其身も共に打重り。狂ひ死せし石川が。釜煎の跡淵となり。七條河原に名を残す。釜が淵瀬の物語 ギン傳へ／＼て今こゝに。豊の竹の一ふしに御代萬。歳を書き殘す



逆櫓松 矢箙梅 ひらかな盛衰記

詞頃は元暦元年正月二十日。朝日將軍木曾義仲。惡逆日々に盛なる。都の騷動鎭めよと。鎌倉殿の下知を受け。詞大手の大將蒲冠者範賴。勢田を指して攻上らる。搦手の大將には九郎御曹司義經。伊勢路を越えて上洛有る。オロシへ心ぞ剛に。たくましゝ。地附從ふ輩には佐々木の四郎高綱。畠山の次郎重忠。和田の小太郎義盛。侍大將は梶原平三景時。其勢二萬五千餘騎。甲の星を戴きて小オクリ夜晝。分ぬ旅なれど勇む驛路の鈴鹿山。ホフシ去年のゆかりと消殘る。江戸雪の戸ざしの麓の闕。八十瀬に續く加太山。川を越えてはコヘリ山路にかゝり。山を越ゆれば川瀬にひたり。西へ〳〵となびく旗手に。東風が知らする風の森。ナホス地朱

の玉垣見えたるは如何なる神か白幣。敵追討を祈らんと。暫く床几立てさせてフシ皆々。休らひ給ひける。眺むれば。山より山の山道を。腰も二重の老の杣杖を便にとぼ〳〵と。岨を傳ひてフシ歩み來る。地大將見給ひあの杣召せと有りければ。和田の義盛承り。詞ヤア〳〵老人大將の召さるゝぞ。早々是へと招かれて。地はつとばかりに老人は御前間近く畏る。義經仰出さるゝは。詞山人なれば案内は知つつらん。是より宇治へ出んには。近道有りやと問給へば。ハア心安き事のお尋ねや。御覽遊ばせ西に見えたる平岡をば。あらた山と申しそれより先に。頸落の瀧といふ所を行かんには近道にて候と。言ひもあへぬにいやコリヤ

老人。戰場に向はんに頸落の瀧とは禁忌なり。又其外に道はなきか。さん候此御社を弓手へ廻り。笠置にかゝつて御通り地有れよき道の候と。申上ぐれば義經重ねて。此御社の御神體は如何なる神ぞ。老人知らずやと宣へば。詞ハア賤しき身なれば委しくは存ぜねども。此御神をいとゞの明神と申して。文字には射手と書き候へども。言ひ安きが慣はせとや。いとゞの明神と申すなりと語れば。地大將御悦喜有りいとゞの明神弓手へ廻り。かさにかゝつて攻めよとは面白し〳〵。それ老人に恩賞せよと仰も重き御惠み。御褒美數多賜りて。早御暇と老人は。宿所をさしてフシ歸りける。地梶原平三進み出で勇まし〳〵。詞武士の運に叶ひ。弓矢神の御前に暫くも休らふ事。偏に神の御加護なれば神前にて。的矢を射軍の勝負を試み申さん。地見物

あれ人々と鎧の引合より。陣扇取出し幕串にしつかと結付け。矢頃よき場に立てさすれば。在合ふ人々息をつめ勝負如何にと待つ所に。梶原一世の晴業と。滋籐の弓の眞中取り。廣言してぞ罵つたり。詞抑梶原が家に傳はる譽といつぱ。先祖鎌倉の權五郎景政。敵に左の眼を射られ。其矢も抜かず答の矢を射返し。唐日本に名を擧ぐる。地見給へ殿ばら扇に書きし日の丸は。取りも直さず朝日將軍木曾義仲。此景時が一矢にて。朝日の直中射通さんと。鷲の羽の鋒矢打番ひ。きり〳〵と引しぼり暫し堅めて切つて放せば。何とかしけん狙は外れて大將の。御白旗横に縫うて止つたり。南無三寶と弓投捨て。眞面目になれば。地すはや味方の大事ぞと。スエテ眉を顰めぬ者ぞなき。地大將義經聲高くやをれ梶原。詞義經が下知をも受けず。鎌倉殿の出頭を鼻にかけ。出來し顔の采配立試の的を射損じ。味方に氣おくれさせつるは言語道斷の曲者。それ戰場に日の丸の扇を用ゆる事。淺々しくも思ふべからず。地日の丸は則ち日輪。日の神の御影を移す陣扇。詞敵間近く寄るならば。さつと開いて眞甲に指しかざし。神の威光を頭に戴き。此日に敵對ふ不覺の武士。神の御罰に亡す



道理。今度の敵木曾義仲。朝日將軍と名乘る事全く此理に相同じ。地扇の的には大諄の傳と言ふ事有り故實を知つたる武士は。日の丸を除けて地紙を射るか。要際を射る物よ。詞夫に何ぞや梶原が。朝日の直中射通さんと神に弓引く冥罰にて。却つて味方の旗を敗るかた〴〵以て不吉の相。地よし此上は義經が故實を正し一矢射て。軍の勝負を試さんと。フシ思ひためたる弓の末弭。神の御告を白羽の矢取つて突立上り。アレ見よ扇は西に在り。朝日は東に在る物を西に入日を追詰め〳〵。詞木曾が胸板射通して。地八本の肋骨ばら〳〵にしてくれんと。弦打ち番ひし拳のかたまりよつぴきひやうと放つ手答あやまたず。要射切れば骨ばら〳〵。扇碎けて飛散るにぞ。今に初めぬ義經の凡人ならぬ弓勢を。フシ恐れぬ者こそなかりけれ。地大將の御弓

矢島山の重忠受取り。恭しく神前に捧げ奉り。敵に打勝つ柏手も味方の勝利疑なしと。フシ御悦びは限りなし。詞ヤア恥を恥と思はぬ梶原。味方の旗を射通したるも弓矢の故實か二心か。返答聞かんときめつけられ。地面目なげに頭を上げ。詞義經公への申譯只今切腹仕る。何れもさらば佐々木殿介錯頼み存ずると。地鎧の上帶引ほどけば四郎聲かけ。詞ア丶麁忽々々。かゝる大事を抱へながら。腹切らんとは同士打も同じ事。但し大將への面當か。今度の軍に高名あらば。申譯は自然と立つ聊爾有るなと押鎮め。地感儀を正して御前に向ひ。詞梶原が切腹某申し預らん。又御籏を射貫いたるは凶事にあらず。却つて吉相君の御軍德圖を外さず。敵にはたと當るといふ。瑞相めでたし〳〵と秀句に寄せて壽けば。義經御感斜ならず高綱いしくも申したり。詞ヤア

梶原過つて改むるに憚らず。地以來を急度愼むべしと物にさはらぬ御詞。あつとはいへど義經に。意趣を含みし其根ざしフシ此時よりと知られける。地斯くて時刻も過行けば大將采配押取つて。ヤア時移りなば敵の要害惡しかりなんと。先に進んで打立ち給ふ。寛仁大度の御粧ひ。悠々として勇有り義有り。巍々たる岩石踏みしだき。宇治川さして和泉川。威勢は輝く光明山。平等院の北の邊富家の渡りへ著き給ふ。源氏の御代の末長く榮え。さかゆる三重へ時なれや。地九重のフシ空も閑けき。春の色。地霞こめたる檜皮葺フシ美麗を盡し手を盡す。地木曾殿の御館には。御長男駒若君三つの生先麗しく。わけて母君山吹御前。御寵愛淺からず附添ふ女中も御機嫌を。フシとり〳〵賑はふ其中に。地お傍離れぬお氣に入りお筆というて才發者しとやかに手をつかへ。詞

此春は珍らしう。お國に變つて都で年をお重ね遊ばし。御祝儀申すもやう〳〵と昨日今日。馬鞍休める隙もなく。又軍の戰のと心よからぬ世の騷ぎ。地お案じも尤もながら。四天王と呼ばれたる一騎當千の人々に。巴樣も向はせ給へば十が九つ味方の勝ちお氣づかひ遊ばすな。詞したが何ぼ大力でも殿のお胤を身に持つて。切つつ掛つつはあぶな物。出物腫物處嫌はずひよつと其場で氣が付いたら。サア自らもそれが氣遣ひ。殊更左孕みとあれば疑ひもない御男子。何事なう平産あらば此駒若の弟御。今迄此子を可愛ゆがつて貰うた代り。自らも心一倍いとしぼかつたい。早う抱いて見たいわいの。ホヽそりや知れた事。地常さへどちらもお中が好うて。お互に抱合ごくらお精次第根次第。中に立つた殿樣も フシお嬉しからうと打笑ふ。地折から告ぐる先走り。只今殿樣御歸館と。呼ばはる聲に家中の面々 フシ地に鼻付けて畏る。地叢蘭茂せんと欲すれども秋風是を破るとかや。朝日將軍木曾義仲。照輝ける物の具も龍に翼を得る如き。威勢勇美の御粧ひ フシしづ〳〵と入り給へば。地山吹御前出向ひ。詞是は〳〵思ひの外早いお歸り。そして如何やら御顏持も勝れず。早う樣子が聞きましたい。されば〳〵。豫て御身も存じの通り鎌倉の討手。範頼義經夜を日についで攻上れば。宇治の手は楯の六郎根井の小彌太を差遣し。勢田の手は今井の四郎兼平に固めさせ。猶又巴も跡より打立つとはいへども。地折惡う樋口の次郎は多田藏人行家を攻めん爲。河内の國へ立越ゆれば。味方は小勢敵の多數に較ぶれば。詞十分が一なか〳〵輙く防ぐべきとも覺えねば。某も今出陣し。士卒の掛引軍配せんと思ふに付き。地御暇乞の爲院の御所へ參りしに。嚴く門戸をさし固め物音だに聞えざれば。是非なくすごすご歸つたり。詞エヽ口惜しや淺ましや。過ぎつる壽永二年礪並篠原兩度の戰ひ。平家の大敵を切靡けし勳功によつて。朝日將軍に補せられ高名譽を顯はせしに。今又平家に從つて朝敵謀叛と呼ばるゝも。地皆君の爲天下の爲心を碎く甲斐もなく。却つて隔て疎んぜられ剰へ鎌倉へ追討の宣旨を下し給はり。詞一門弓箭を合せ。同姓勝負を決する事。地偏に君の叡慮淺きに似たれども。普天の下率土の內。王土にあらざる所なければ是とても是非に及ばず。詞此上に片時も早く馳向ひ。腕限り攻戰ひ潔よく討死せんと。地思ひ切つたる御顏色見るに悲しき山吹御前。扨は今日の出陣は疾くより覺悟遊ばして。討死なされん爲なるか左程科なき御身の上。詞時節を待つて何故申開きはなされ

ぬぞ心やすう討死とお前ばつかり合點して。此駒若や巴様の胎内の。地お子はいとしう思されぬか。あんまり氣強い胴欲ぞや。どうぞお心ひるがへし。お命恙なきやうの御了簡は無い事かとスヱテ縋り付いて泣給へば。詞ア、愚か／＼。夫程の事辨へぬ義仲にはあらねども。御所には中納言兼雅修理太夫親信を初め。百官百司も大半平家に心を寄すれば。中々中開く時節はなし。分けて多田の藏人行家は。某に意趣有る中。義仲こそ木曾の山家に育ちたる不骨者。色に迷ひ酒に長じ奢の餘り朝家を亂す謀叛人と。地讒者の口にかけらるれば。とてもかくても遁れぬ運命。義仲が胸の鏡くもらぬ證據は天道ならで誰か知らん。泥中の蓮も汚れぬ花のフシ榮を見す。地我が惡名は後代に殘し。身は戰場の土と消え首は大路にさらされて。恥に恥を重ねん事返す／＼も口惜しさりながら。我こそ命を落すとも御身は片時も館を立退き。駒若を養育し。詞時至らば義仲が罪なき旨を奏聞し。再び家名を繼れよ。地不便や何の頑是なく。是今生の別れとも。知らずはからず我が顔を見て餘念なき笑ひ顔いぢらしさよとばかりにて。勇氣に撓まぬ大將も。恩愛父子の憂き別れ暫し。フシ涙にくれ給ふ。地山吹御前は今更にとゞむる方も泣きくづをれ。詞たつた今迄子の行末家の榮え御身の上。千萬年も添ふやうに思ひし事もあだし世の。夢か現か悲しやと。御身をもだえ伏沈み聲も惜まぬ叫び泣き。見るに身に染むお筆が思ひ。お道理様やとフシ諸共に袖を。しぼるぞ哀なる。地かゝる歎きの折こそ有れ。間近く聞ゆるコハリ轡の音。しやん／＼りん／＼さら／＼さつと吹きくる春風と。名におふ名馬に打乗つて。駈立て蹴立つる馬煙。生れ付いたる大力に馬上も勝れし巴御前。色をゆかりの紫縅。鐙輕げの女武者。長刀かい込み鞭打立て。馳着く門前ひらりと下り。詞ノリ扨も此度宇治の戰ひ。楯根井が計ひにて橋板を引き。岸には逆木。川には亂杭隙間なく。大綱小綱を流しかくれば。鴛鴨などの水禽も輙く通るべしとも見えざる所に。地血氣の大將義經が下知によつて。詞佐々木四郎高綱。梶原源太景季先陣二陣に川を渡せば。秩父足利三浦の一黨我も／＼と打渡つて攻戰ひ。味方敗軍剰へ。楯根井も討死し。地士卒もちりぢり無念ながら引かへし。詞直に追立て勢田の手へ向はんと存ぜし所既に宇治の手破れしかば。勝に乘つたる鎌倉勢。或は木幡醍醐深草月見の岡。思ひ／＼に打越え馳越え都へ亂れ入ると聞けば御身の上氣づかはしく立歸り候と。地言ひもあへぬに人々はあつと仰天呆れ果てスヱテ暫し。

詞もなかりける。地木曾殿少しも動じ給はず。詞ホヽウさこそ〳〵。胸にこたへし味方の敗軍死すべき時に死せざれば死にまさる恥多し。地今こそ木曾が最期の門出巴来れとの給へば。はつとはいへど伏沈む。山吹御前お筆が歎き。見れば心も打悄れ。君の先途を見届ける。死出のお供は一思ひ。跡に残りて便なき。御身の上はいか計り悲しうなうて何とせう。おいとしぼやとかきくどき。しやくり上げたる歎につれ。木曾殿もやゝせきくる涙とどめ。兼ねさせ給ひしが。地心弱くて叶はじと振切つて馬引寄せ。ゆらりと召せば巴御前も泣目をはらひ。片手にしつかと轡面取つて引立て勇みを付け。詞こレ〳〵申し山吹様。死を輕んずるは勇士の道軍の習ひ。今我が君戰場へ打立ち給ふと雖も。是亦決して討死とも定めがたきは時の運。此巴が附添ふからは。地敵何萬騎有るとても。我が命の續かんだけ片端撫切り拜打ち。蛛手輪違十文字。十方八方打立て。追立てまくり立て是非一方打破つて フシ駈通り。地何國如何成る奥山にも隱れ遁れて時節を待ち。御本意遂げさせ申すべし。先づそれ迄は若君諸共知るべの方へ御忍びと。勇むる詞にお筆も嬉しく。詞それはちつとも氣遣ひ有るな。わたしが故郷桂の里の爺親は。源氏譜代の侍鎌田兵衛が弟。同名隼人と申す者。年寄つたれども心は忘れぬ弓矢の家。御主人といひ親子の中。命にかけてかくまはん。ヲヽ夫こそ究竟偏に賴む。隨分御無事で山吹様若君様もうおさらば。お前も達者で。殿様さらば。さらば〳〵と行く名殘。殘る思ひは果てしなき涙と共に延上り。見送り見返る恩愛妹脊主從の。數になづみ行兼る駒の足取諸手綱引わかれ行く三重へ雲のあし。地吹雪交りの朝霞フシ比良の高根の。冴え返り。地春めきながら野も山も。雪にまがへて白簇の。地八重立つ敵の其中を心細くも巴御前。御最期の供は叶はじと。夫なり又主命の。我が身に重き唐錦。故郷へ歸る鎧の袖供をも具せず只一騎。名殘涙の玉櫛笥。手枕ふりし寐くたれ髮。本フシ昨夜の儘に振亂し。地烏帽子引立て眉深く見る目もくもる鏡山女とも見えつ又男とも 江戸いか物作りの太刀佩いて思切れども女氣の。跡へ〳〵と心引く。地琵琶の海面弓手に見なし。行先如何に白月毛駒に任せて行く道の手綱よ二世の。別れの鞭 フシ打つに。力ぞなかりける。地俄に來し方騷がしく。ヤア詞あの凱歌は敵か味方か。君はいかに。兄はいかにと。地覺束な。フシ人の便を。松かげに馬乘りとゞめ立つたる所へ。詞勝誇つたる鎌倉勢二三十。落武者返せと呼ばはつて追取卷く。何落武者とは舌

ながし。落ちぬか落ちるか是見よと駒の頭を立直し。地渦卷く我が名の巴の如く。右左に乘廻し蹴立て踏立て駈けさすれば。詞は主の恥しらず フシ跡をも見ずして逃散つたり。地躊躇ふ間もなく暫し暫しと呼ばはつて。歩武者一人軍兵に先だち大音上げ。詞木曾殿の御内に男勝りのさる者有りと音に聞く。巴御前と見しは僻目か。坂東一の勇者と呼ばれし秩父の重忠見參せんと。地言ふより早く鎧の草摺しつかと取り。引下さんとえいと引く。ノリ詞巴莞爾と打笑ひ男勝りと名を立てられ。強みを見するは恥かしけれど。秩父程の人柄で坂東一の勇者呼ばはり聞憎い。地鐙ならば手柄に引下して見さんせと。鳩胸踏反らし引くにちつとも動かばこそ。鞍強にこたへしは。フシ作り付けたる如くにて。地廣言放ちし重忠も大力の女持餘し。馬人ぐるめにこりや〱こり

や。詞雪間を分けて生出る。春に粟津の フシ草ぞ迷惑踏みちらし。江戸引戻しては引きづられ。引いつ引かれつ寄るべなき堅田の浦の釣小舟浪にもまるゝ。フシ如くにて。地こたへもこたへ引きも引く草摺三間引きちぎり。尻居にどうど伏したるはフシ苦々。しくも目覺しゝ。地跡に續きし佐々木の四郎手柄は仕勝ち御免候へ秩父殿。佐々木が組んで見せ申さんと駈寄ればなう〱ねつたい佐々木殿。こはざれなせられそと押隔て。詞宇治川の先陣はせられしが。巴女にはいかな〱秩父も敵はぬ。今の倒ざまを見られしかヤア女。秩父に尻餅つかせたを手柄にして。木曾へ成りとも何處へ成りとも勝手次第に早歸れ。アレ見られよ。歸れといふに耳へも入れず。鎧づきしてすはといはゞ。勝負せんと待つ大強者。勝つてからが女なり。秩父が樣に尻餅ついて物笑ひ仕出すか。

地先づ此陣は引いたがよい。合點か〱と目で知らせばヲヽそれ〱。詞勇者の尻餅と高名の首帳も。筆末ならば付かぬが好い。いかにも此陣引くが勝。なう秩父殿。地なう高綱殿と點頭き合ひ。よそにもてなし立歸るオクリ弓矢の。情ぞ類なき。後陣に扣へし内田の三郎。ヤア〱秩父殿佐々木殿。敵に逢うて勝負せぬは後を見するか二心か。地内田の三郎家吉參りざふと諸鐙かけ合せ。天晴御器量武者振や。詞烏帽子が下の亂髮。象ではなけれど此鼻が。地繋がれ申す一軍して。詞内田が手並を見せ申さん。鎧の上帶下紐も打解けよ。引手に離けとじやれ事し。隙を見て組留んと。フシ乘廻す。巴が乘つたる駿足は數戸の軍に逢坂の。フシ關吹き越えて名に高き。春風といふ名馬。内田が乘つたる韋駄天栗毛足疾鬼とて足早き。鬼に劣らぬ足どりは。コハリ兩方劣らぬ馬

上の達者。駒の足並飛鳥のかけり ナホス地行違ひ様内田の三郎鎧の袖を引違へ。巴にむづと引組んだり。ノリ詞シヤ大膽な。義仲といふ主有る女に抱付いてヲヽこそば。目顔を赤めて強い顔なされても。力の有る體でもなし。聞えた〳〵。女ぢや思うてふかじやれか。人にこそよれ此巴には。苧殼で撞く釣鐘ならぬ事〳〵。地未來の爲の折檻と。前輪にぐつと引付けてうんともぐつとも言はさばこそ。片手に素頭引掴み太首ちよいと引抜きしは。子供遊びの紙雛の首を フシ抜くより易かりける。詞和田義盛是に有り。聞きしに勝る女の働きさりながら。手柄も人による物と。地生ふる手比の並木の松ぐつと根ごしに引抜いて。馬人共に一打と口にはいへど心には。馬の諸脚薙倒し。あつぱれ手取にせん物と。詞追様向ふ横腹へ。薙立るを事ともせず。巴は馬を フシ乗飛ばし熊の子渡し燕のもじり獅子の。洞入なんどといふ コハリ手綱の祕密に聲そへて四足を土に着けばこそ。宙をかけらし地をくゞらし蹄にかけんと隙を待ち暫しあしらふ 三重へ折こそ有れ。フシ敵



の方に聲立てゝ。朝日將軍義仲を石田の次郎が討取つたり。今井四郎兼平も一所に最期と呼ばはる聲。地聞くに驚くたるみを見て義盛得たりやかしこしと。馬の前脚どうどながれて前脚折るよと

見えし。巴も馬上を眞逆樣落つるを其儘起しも立てず。家の子郎等折重りかくる千筋の縛も。妹脊を結ぶ緣の綱長き夫婦の初とはヲクリ後にぞ。思ひ知られける。地斯と注進してげれば御大將義經公。秩父佐々木を召具して障泥を土手に敷皮やフシ御座に。移らせ給ひける。地和田義盛罷出で詞女を生捕り手柄がましく申上ぐるも。をこがましく候へども。鎌倉の御前に御沙汰候ひし。木曾殿の妾巴と申す女召捕て候。如何計らひ申さんと申上ぐれば。ヲ、いしくもしたんなれ。直に問ふべき仔細有り。地早やいそふれと御諚にて。引出す繩取ども却つて宙に引立て。怯ず臆せず御大將の膝近く。振仰向いたる容顏に。スヱテはら／＼かゝる無念の淚。フシ雪に霰ぞ亂れける。地折しも梶原平三景時。武者一人召具し息を切つてかけ付け。詞當手の御敵は悉く討亡し。鬼神と呼ばれし朝日將軍義仲を。石田の爲久が討取り。首を御目にかけくれよと某を賴み。其身は後陣に罷在り。又召連し此男は。井上次郎と申す木曾の郎等。主の惡逆を疎み今井の四郎兼平が首取つて。鎌倉殿へ降參の手土產候と。地直垂の袖に包みたる甲首太刀に貫いたる今井が首。實檢に供ゆれば。地コハ我が殿か兄上かと。巴は繩取引立てゝ。變り果てたる御姿や覺悟の上とは言ひながら。思へば／＼曉の。鷄に互の泣別れ。永い別れに成つたかと。二つの首に身を寄せて。人目も恥ぢずどうど伏し聲も。惜まず泣居たる。地梶原怒つて。詞ヤアめろ／＼と今に成つて何の吠えざま。尾籠なりと引立てさせ。恐れながら首御實檢なされ。井上の次郎にも御褒美の御詞下さるべしと取持てば。地つく／＼と實檢有り。詞エ、淺ましや。同じ淸和の臺を出で。正しき源氏の累葉として。平家に勝つたる朝敵謀叛の族と成つて。地末代源氏の弓矢を汚す一門の面汚し。憎や／＼と持つたる扇振上げて丁々々と打給へば。詞巴怺へずヤア聞惜し義經殿。平家に勝る謀叛人とは。何が謀叛其譯聞かんと詰めかくれば。ヲ、言ふ迄もなし法住寺の御所を燒討し高位高官の人々を苦しめし。是が謀叛朝敵であるまいかと以ての外の御氣色。地巴淚をはら／＼と流し。されば夫こそ木曾殿の深き御思案。謀叛でない物語。並居る人々もフシ聞いてたべ。詞既に木曾殿礪並倶利迦羅篠原の合戰に打勝ち。都へ攻登り給ふと聞えしかば。平家一門の人々三種の神器を守奉り。西國へ落下る。木曾殿都に入代つて御所を守護し給へば。法皇御感斜ならず。雲の末海の果迄も追詰め。平家を討亡し三種の神器を事故なく。都へ遷し參らせよとの宣旨。畏つて

お請け申させ給へども安からぬ一大事。三種の神器を取返さんと直攻に攻るならば。身の置所ない儘に唐高麗へも迯渡らば。勿體なや神より傳はる三種の御寶。地永く異國の物とならんは日の本の國の恥。若し又海底に沈め失はゞ世は常闇。兎やせん斯くやと御思案有り。義仲朝敵謀叛人の名を取らば。平家心許して一致せんな必定。折を窺ひ三種の神器を奪取り。跡で平家は塵し。詞サア此上の分別なしと。心に工ぬ悪逆の謀。地夫とは知らで諸國の驕武士ども。我儘を働きしは。詞木曾殿のしろし召されぬ事ながら。まんまと上々の朝敵の名を取り給ひ。スハ鎌倉の討手向ふと聞えしかば。寄られては後手になる。地御身に誤りなき由を申譯させ給へといへば。詞いやとよ他人より一門は猶恥有り。宰我子貢が辯舌を以て言ひほどくとも。三種の神器を取返し平家を悉く討亡さねば。我が本心は顯はれず。卑怯氣に言譯はすまじいぞ。地かく成果つる我が武運寄手を引受け。潔く討死せんと御覺悟なされ。夫故にこそやみ〴〵と。フシ今度の敗軍。地申す詞に疑ひあらば仰置かれし詞の末。召されし甲に仔細ぞあらん御覧あれ。如何に思し諦めても。心の内の御口惜しさは如何計り。人こそ多けれ石田づれの。名もなき下郎の刄にかゝり。勿體なや御首に義經が扇を受け。一方ならぬ冥途の御無念。あはれ此身が儘ならば義經殿。飛びかゝつて恨み言はん物。エヽ口惜しや悲しやと立つて見居て見身もだえし。こぼるゝ涙を押へんとすれども縄の強ければ。頭を膝にすりあてゝフシ前後。不覺に泣居たる。地高綱仰を承り御首に立寄て。甲を取れば鉢受の絹に巻添へし一通有り。取出し捧ぐればつく〴〵御覧じ仰天あり。詞是見よ方々。巴が申すにちつとも違はず。三種の神器を取返さん爲の計略。思ひ設けぬ朝敵に成つたる悔の條々。神明佛陀を誓にかけ。逐一に書殘されたり。地扨は反逆にてはなかりしな。鎌倉殿こそ御心付かず共。討手を蒙る此義經。詞尾張三河の間に軍兵をとゞめ置き。一應も再應も使を以て事の品を問明らめ。反逆謀叛に極まらば其後こそ討つべきに。地其氣の付かざる我が無調法。扇を以て首を汚せし我が誤り御詫申す赦してたべと。座を立つて義仲の首取上げ。詞義經が名は遮那王丸。貴殿の名は駒王丸。鞍馬と木曾の住所は變れども。再び源氏の世になさんと。地恥を凌ぎ憂目を見し心遣ひは一つにて。平家を西海へぼつ下せし。源氏再興の軍初の大功は貴殿こそ立てられし。其功を空しく謀叛人の悪名を取つて果給ひし。最期の遺恨を霽し弓矢擁護の神と成

り。源氏の武運を添へ給へと。押戴き〳〵悲歎の。スヱテ涙に暮れ給へば。地何候の武士を初めとして。懸構なき下部迄フシ感涙催すばかりなり。地和田も哀にかきくれて居たりしが御前に向ひ。詞ハア、さすが源氏の御血筋とて。驚き入つたる木曾殿の御心底。然れば此女に掛るべき御疑も科もなし。殊に木曾殿の御胤を懐胎せしと傳へ聞く。義盛賜つて婦妻に具せんと申すは如何。合筵は踏まずとも御子誕生ある迄は。地我等に預け下さるべしと言せも立てず梶原平三。詞ヤア心得ぬ義盛の願ひ。如何書いて有らうが如何言はうが皆嘘々。謀叛人に極つた木曾義仲。其胤を孕んだ女を預り。子を産せて何にせらるゝ。但は其子を守立てゝ又謀叛起す氣か。夫は兎もかうも鎌倉殿の御計ひ。先づ差當る拙者が取次の井上の次郎兼平が首取たる莫大の高名。地御褒美の御詞下さるべしと遮つて言上すれば秩父の重忠。詞イヤ梶原殿。義經公は惣軍の御大將細かなる事はしろし召さず。今井の四郎兼平は目前。木曾殿討れ給ひぬと呼ばはる聲を聞きしより。太刀を啣へつゝ逆様に落ちて貫かれ死んだる事誰知らぬ者もなし。地夫を何ぞや井上の次郎が高名とは。死首取つたるが高名か頼まれての取持か。自分の最負かよし夫はともあれ。詞重恩の主の討死を。餘所に見捨て命惜しさの降參。僞を飾る表裏の武士。地取次の梶原殿迄。心底疑はし。返答あらば承らんとフシ一口にやり込むれば。地井上の次郎進み出で。詞ヤアあさ〳〵しき重忠の仰せ。主人の討死を見て降參する様な井上にては候はず。一兩年以前より梶原殿を賴み賴朝公へ心を寄せ。義仲の身の上嘘一つ爲られた迄。犬に成つて告知らせし某。是ばかりでも捨てゝも一ケ國や二ケ國が物は有る。其上に又兼平が首取つたる今日の手柄。地羨しうてのわんざんならば。此首御邊におまするぞ。勳功解狀に預られよと首取つて投出せば。事を破らぬ重忠も怺へるに怺へ兼ね。詞汝等如きを手にかくるは。大人氣なしと思へども。弓矢を汚す人非人。微塵になさんと飛びかかる義經暫しと制し給ひ。詞井上次郎が忠節は此度初めならず。梶原平三が取次を以て。豫て鎌倉殿へ歸伏せしと申す上は萬事鎌倉にて。鎌倉殿の御裁許有るべし。地夫迄互の論は無益心得たるか。義盛は願ひの儘巴を汝に預くるぞさりながら。平産の子男子ならば朝廷の畏れ。義仲の名を包み汝が子とし和田の家を相續すべし。巴が縛とく〳〵と搦めらるゝは義經の情の詞計りにて。縄も解かるゝ氣もとくる朝日將軍義仲の。名を象りて生れし子を朝比奈の三郎義秀と。古今に秀でし

兵は此フシ胎内の子なりけり。地いざや人々都に入りて勝軍の様奏聞せん。エヽ是非もなき浮世の習ひ。義仲の首今井が首。土中に埋み跡弔はゞやと思へども、院の御氣色測りがたし。檢非違使の手に渡さでは叶ふまじと。秩父佐々木に取持たせ。道を早めて走井の。軍の備九重のオクリ都に。跡を飛ばせらる。地梶原井上手持なく顔見合せ。詞ア、梶原殿。義經と言ひ秩父といひ。大抵では噛まれぬ相手。地鎌倉殿もあれなればいかう當の違ふ事とつぷつけば何さ／＼。詞義經が爰での我儘は鳥無い里の蝙蝠。追付け鎌倉殿の御前見せ付ける所で見せ付ける。地何奴等も覺えて居よと睨廻し。次郎を引具しフシ立出づれば。地巴すつくと立上り待つた待つた井上次郎。ノリ詞君御存命の内よりも鎌倉へ內通とはたつた今聞いた。いかいお世話で有つたの。夫は言うて詮ない恨み。差當る兄の敵主君の仇。最う臨終に間はない旦那寺へ人やらんせと。地出る詞も井上が頭の上に雷のフシ落ちかゝるかと悽まじく。地ナウ梶原殿弓矢取る身は相互。今の命をお助けと腰立たず身もわな／＼。賴む人より賴まるゝ梶原も底氣味惡く。詞人使ひがなくば旦那寺へは身が往かうと言捨てゝ駈出せば。地續いて逃ぐる井上が綿噛摑んで引戻され。扨は道が違うたさうな。どちらへ往ても大事ないと逃出す。先には和田が仁王立ち左義盛右巴。一つ巴にくる／＼とぢりおり舞する井上次郎。命お助け／＼と土に平伏し手を合せフシ泣くより外の事ぞなき。詞エヽ腑甲斐なき業晒し。主君の仇兄の敵には不足ながらと引寄せて。地首ねぢ切らんとせし所へ。井上が郎等共主の命を助けんと。一度に拔連れ切つてかゝる。詞ノリヲヽしをらしや。欲がる主を得させんと鎧の上帶搔摑み。落花微塵に投散らし群りかゝるを引寄せ／＼。地せめては是で色直し追付け和田と祝言の印。今打つ人礫。身がるき働き蝶花形。出合うた敵は三々九度むら／＼ぱつと逃散つたり。猶もフシ進むを引止めさのみ長追長柄の銚子。詞ノリ返せ戻せは無益ぞと。勇める駒に小角を入れ。時に近江の地斷盛や乘り。しづめたる義盛が二葉のひれに相生の。松の榮やえい。この。この／＼この。ギン此壽をよろ昆布。敵に勝栗のつし熨斗連れて。陣所へ歸りける

第二

地鷹は水に入つて藝なく。鵜は山に在つて能なし。筋目有る侍も世事には疎き町住居。削る楊枝さへ細資本。辛苦黑文字身すぎ楊枝商賣磨き楊枝の看板。猿もくはねど高楊枝。フシ浪人とこそ知られた

れ。地此家の家主門口から。詞暮れる迄精の出るは急な誂物でござるか。コリヤお家主樣。今日は何事が起つてやらちよこ〳〵お出で。ムウ聞えた。晦日前なりや家賃の催促。私も油斷は致さぬ。此楊枝仕立てゝ先へやれば。其價で家賃は野野山。地跡の月の殘りも受取次第上げませう。詞いや催促ばかりに來るでもおぢやらぬ。楊枝ばかり削つては埒の明かぬ身代。取付から知つて居る馴染の其方。地はかの行かぬ世話が笑止さに思付いた事も有り。咄して見たさ來ごとは來ても以前が侍。麁相な事は言出されぬ。詞是は是は御遠慮迷惑。御懇意の上お咄とはまづ耳寄早う聞きたう存じます。ムウ其氣なら咄しませう。浪人殿には好い娘持たれて。木曾殿へ奉公ぢやと聞いて居る。此間の騷動。木曾殿も死にめしたりやお娘は浪人。ならぬ身代に口が殖えては彌々いくまい。幸とおれが知つた大金持。器量の美いお妾を欲しがる。拵金の二十兩や三十兩は此家主が受合。危なげもなう家賃も取れる。地重一打出した仕合ときて見るも當が有る。詞昨夜八つ過ぎ。爰な表を頻に叩き。其跡は內へ入り話したは女の聲と。相借屋の者が知らしたで扨はお娘と來て見れば。地何時も替らぬ古長持と古親父。破屏風缺土竈。鍋洗うて待つて居るに戻らぬの。詞ヲヽ御存じの上は隱すに及ばぬ。成程奉公致させ置いた。木曾殿の沒落に就き。娘が事案じぬでもござらぬ。さりながら軍の法で。女子には指もさゝぬ由。又差す奴が有つてもさゝれて居る樣な鈍な奴でもござらぬ。親の內は知れて有る此桂の里。遲いか早いか戻りませう。昨夜門を叩いたは夜通參の愛宕の下向。又隣の兩換店と取違へ。此方の戶を破れる程叩く。何ぢやと表明けたれば錢が欲しいと言うた故。地おれも欲しいと言ひ返し フシ 笑うてしもたと言ひければ。詞ムウそれで聞えた。談合は娘の顏見てから。コレ手に取らぬ話當にして。仕事後れて家賃待つてと言ふまいぞ。地ヤ咄す內に日も暮れた。店の仕舞手傳はう。詞それはお慮外慮外ぢやおぢやらぬ。一人してぐわたぴしすりや。店が損ねて家主の迷惑。エヽ此猿めが守しをるで賣れぬ。楊枝も此奴も內へ取々。地上店下店上げて。そこで鐶門の戶しめて。家賃の夜業精出そぞや。詞合點でござります。お娘の事もサア合點。能うお出でなされました。家賃も娘も來次第に此方から御左右致しませう。お出には及ばぬと。地門送して家主が。內へはいるを能く見屆け。立歸つて締むる門の戶の。日破節穴釘穴より。若しも覗く人もやと莚立かけ古暖簾。店の道具で取繕ひ。サア是で覗

く氣遣ひない。嗚お氣詰り御窮屈と長持の蓋明くれば。いたはしや山吹御前。駒若君を抱き參らせお筆諸共出で給へば。引下つて頭を下げ。移り變る世の習ひとはフシ申しながら。地朝日將軍の御臺若君。かゝるあばら屋に隱れ忍び日影もささぬ櫃の中。若君の大人しう出たいとも仰しやれずむづかりもなされず。詞能う御堪忍遊ばした。お氣晴しにハア、何ぞお慰み。ヲ、それよ。店守の此猿。地まめなにあやかりおはしませ。まさる日出度い御壽命とフシ祝ひ申して指出せば。地いたいけ顏の莞爾に猿の頭をたゝいつ撫でつ。御機嫌よけに見えければ山吹御前の御悦び。何から禮を言はうやら譜代でもない主從。お筆に連れて親御迄いかい世話に成りまする。詞義仲樣御最期と聞くよりも同じ道にと思ひしが。地遺言も有り此業を捨ても死なれぬ身の辛さ。思ひやつてとばかりにて スヱテ跡はつきせぬ御涙。詞ア、勿體ない。私が父樣に何御禮。ヲ、娘能う言うた。もと某も源氏の譜代。野間の內海にて相果てし。鎌田兵衞政淸が弟。鎌田隼人淸次と申す者。仔細有つて兄政淸が不興を受け。義朝卿の御先途も見屆けず。地本意を失ふ瘦浪人。古主の源氏へ歸參の望。二人有る我が娘姉のお筆を御前へ指上げ。千鳥といふ妹を鎌倉へ遣はし。出頭の梶原家へ奉公さすも。歸參の便と存ぜし所に。詞思ひも寄らぬ源氏と源氏の御軍。差當る姉が御主人見捨てゝ出世の望は致さぬ。年こそ寄つたれ心一ぱいお力に成り申さん。ヤアそれに就き。木曾殿の御內に四天王の隨一と呼ばれし樋口の次郎兼光討死との沙汰もなし。存命で居るならば御臺若君引受けて。世話致すべき樋口が安否お聞及びなされずや。さればいの。樋口の次郎は多田の藏人を攻めんとて。河內の城へ向ひしが其後はいなせも聞かず。地世につれる人心賴みに思ひし樋口にさへ見捨てられたる親子の者。自らが身は厭はぬ何とぞ若を傳育て。再び世にもあらせて下され。賴むは隼人一人ぞと又泣き。しづむ御風情。地お筆親子も諸共に。フシしぼり兼ねたる袖袂。地實にや至つて悲しきには腸を斷つといふ。猿の楊枝屋曲者ぞと。梶原が郎等番場忠太家主に案內させ。聞耳立つる表はひそ〳〵。內には忍ぶないじやくり扱こそ知れたと打頷き。門の戶荒く打叩く。詞隼人驚きこれは又家主入らせては事やかましと。地欠伸交りの聲しはぶき。詞うまう寢てゐる所を誰ぢやいの。用が有るなら明朝ござれと地寢覺の體にもてなせば。詞いやおれぢや家主ぢや。ヲ、其家主合點ぢや。夜夜半迄家賃の催促。夜が明け次第誂への楊枝

先へ渡し。錢受取つて急度濟す。起きるのが大層な 地明日の事にと言ひつゝそつと指足して。戸口の隙間を窺ひ見れば。表に捕手の荒者どもすは打入らん氣相なり。 詞南無三寶あの大勢。 地外に落つる道もなし。兎やせん角やと胸も心も フシ碎くるばかり。門の戸猶も打叩く。 詞ヲヲそれよ〳〵よき思案と。 地娘が耳に口指寄せ。若君のお小袖をコリヤ。 詞斯うしてな。其跡は。斯う〳〵〳〵と。 地知らすれば打頷き。破れ屏風引立て。若君御臺諸共に フシ身拵へする其中に。 地隼人は戸を明けお家主。何事でござりますとぬつと出づればそれとかけ聲番場が家來。十手振上げおつ取卷く。 詞ア、これこれ〳〵聊爾なされな。ヤア聊爾とはのぶとい奴。木曾が女房小悴隱匿うたに紛れなく。主人梶原の下知を受け番場の忠太が捕に來た。尋常に渡せばよし。さなくば捩てぶちすゆる。コレ浪人殿もう敵はぬ。隱匿うた子を彼方へ渡せば御褒美を下さる。意地張らるゝと楊枝の樣な其腕が。背中へ廻つて青細引。家主の過怠に其方の飯を運ばにやならぬ。家賃取らぬ其上に。左樣成つては家主滅却。サア早う渡されいと。 地齒の根も合はぬ顫ひ聲。 詞いや家主の難儀より差當つて此身が可愛い。若君を渡しましよ。とてもの事斯うなされて下されぬか。イヤ斯うとは細



言。願ひあらば早まき出せ。アノ物でござります。假初にも娘が主人。取つて出しては此面が世間へ出されぬ。私も立ち何れもゝ立つ了簡は何かなしに爰には置かれぬ。出て行けと追出します。皆は表に隱れてござつて此内を出る所。彼若君を引たくつて。女子にはお構ひ有るまい。すりや娘も助かる。地何處も彼處も好い樣に御料簡頼入ると。手をつけば忠太領き。詞夫程の儀は宥免をしてくれう。かくまうた者ども早う出せ。地家來どもは提燈片寄せ物音すなと。フシ其身も小蔭に立忍ぶ。地隼人は悦び内に入り又呼いて親子が談合。わざと表へ聞かする大聲。ヤイ娘親を當に思うても吟味が強い。背中に腹はかへられぬ。主人の供してとつとゝうせうエヽ父樣そりや聞えぬ。他人でも義理は知る。娘の主人を出て行けとは 地胴慾な事ばかりと。聲には泣けど目に泣かぬ親子が狂言。表にはすは出をるかと待受くる。番場の忠太が腕まくり。フシ内には隼人が心付け笠取つてやり杖渡し。詞なんぼほえても叶はぬ〳〵。地出て往きをれと言うては旅の用意の油單。渡してはヤレうせいと言うては烟管烟草迄。殘る方なく取持せ。詞あれ〳〵しぶとい泣づらと。地二人を門へ突出せば待ちに待つたる番場忠太。山吹御前を引捕へ。詞ヤ此奴は手ぶり次の女郎が抱てをる。此倅めと搔摑む。地こは情なや渡さじと爭ふお筆が手をもぎ放し。若君を奪ひ取り汝も共にと言ふ聲に。なう恐ろしやお助けあれと。山吹御前の御手を取り フシ輾つ轉びつ落ちて行く。詞やれやれ嬉しや家主に難儀もかゝらず。お手に入つてお目出度い。小ぽけな形をして結構な物着て居ると。地いふに番場も心付き。詞此奴ごねたか。しやちばり返つて木ほぜの樣な小倅と 地提燈取寄せとつくと見。詞ヤア駒若ぢやないこりや猿松。見世晒しで耻さらした憎くい浪人踏ん込んで撲殺せと一度にどし込む門口の。小路に隼人は隱れ居て。捕手を遣り越し入代りすつと出て表の戶。外より引立て鎹手早く海老錠下す。內には手ん手に疊を上げ簀子の下から長持の。底迄叩けどこりや居らぬ。脫道なし。詞ムウ扨は門へと引返す。地表の戶口は外から立切り。忠太主從家主まじり。詞コリヤ如何ぢや〳〵と。地うろ〳〵狼狽へ。爰明けよと。內から叩く門の戶の外には隼人が心地よく。詞コレ家主。家賃せがむが面倒さに家を明けて今行くぞ。楊枝屋が猿智惠は汝等に置土產。若君は爰に抱て居ると。地內懐よりお顏を出し。御運强きにこやか顏見せたけれどもマアならぬ。ゆるりと其處にけつかれと。山吹御

前の御跡したひ逸散に落ちて行く。詞ヤア老耄め通すなと。地番場主従聲々に門の戸打破り店踏み砕き フシ何處迄もと追ひかくる。地跡には家主口あんごり。詞コリヤさゝほうさにしをつたな。家は砕かれ家賃は取らずエ、儘よ。百貫の抵當に猿一疋。此奴めに着物着せ。爰をさるとは秀句ぢやの。さるとては能うしをつた。地さるてんがうとは思はれぬ。汝楊枝屋め。力瘤楊枝出さば出せ。家賃を取らで置くべきかと。跡を慕うて 三重へ急ぎ行く。

フシげに武士の。習ひとて。地夫は都の軍場に。妻は東の留主住居。梶原平三景時が屋敷には。嫡子源太景季が誕生日の祝ひとて。上段の床に。兜鐵を飾立て。敵に搗餅の供へ物御神酒の三方熨斗昆布 フシとり〲運ぶ其中に。千鳥といふは鎌田の隼人清次が乙娘。親の出世の便にと望み有る身の宮仕へ。友傍輩にも憎まれぬ。顔容より フシ心迄愛敬有つて可愛らし。サア〱 地奥様の言付の通り。お供物も残らず揃うた。此障子を斯うしやんと立切ると最う仕舞。ア、嬉しやと言ひければ。詞ヲ、そなたは取分け嬉しい筈。何がな御用聞きたがりやる若旦那の誕生日。都の軍も勝ぢやげな。地如何か斯うかとお案じなされた母御様より。百増倍心がいそ〱千鳥殿ハテ 詞此お館に奉公する身嬉しいに變りはない。イヤ變りの有る證據言ひましよ。若旦那のお立の時。永い別れにならぬ様に日出度う凱陣遊ばし 地お顔見せて下さんせと。涙片手に抱付やつたを見てゐるに。隠すが憎い擽つて。フシ白状さしよと立ちかゝれば 地なう誤つた恪へて下され。詞心安い傍輩中隠したには譯が有る。よい事には寸善尺魔と。弟御の平次景高様。此千鳥に惚れたとて口説るゝ其辛さ。私は兄御の源太様にと左様も言はれぬ日比の氣質 地こんなけびらい聞かすが否やたまらぬ〱。構へて沙汰なしにと。咄の中の間の襖そつと押明け。病の床より立出づる梶原平次景高。一重帯に大脇差伊達紙子の大廣袖



を打ちかけ。ヤアあた姦しいめろさいめら。母人の伽はせないで何をほざく　奥へうせうときめ付けられあいと一度に立つて行く。コリヤ〳〵千鳥。其方ばかりは此處に居い。いや私もお袋様の傍へ。というて外さうでな。そりや成らぬ。願うてもない上首尾。サア來い寝間へと手を取れば振放し。お前には御病氣故。親御様のお供もなされず。お留守に殘つて御養生の最中。夫にマアお寝間へとは。お傍に居るさへ私は怖い。ヲヽ病人とは不粹な。藥呑むは假令の見せかけ。鼻も引かぬ達者な平次。ナニすりや煩ひはなされぬか。ヲヽ嘘ぢや。そりやなぜに何故にとは餘所々々しい。其方をおれが手に入れうで。邪魔な和郎達京へ登し。味い留守事せうでな。作兵衛と出かけた心中男。君よ憎うは有るまいがな。サイナ夫程迄わたしが事　思召して下さりますを忝いと言れぬは。京に居られます父様は。鎌田の隼人清次と申して。源氏譜代の家來筋。賴朝様へ歸參の望み。御出頭の此お家御奉公致しまするも　折もあらば右の願申上げたい下心。お袋様の赦しもないにお前の仰せに隨へば。いたづら者とお親の出るは定の物。さすれば親の望も叶はず妾を能う聞分けて。ヤア默れ千鳥。赦しが出ねば隨はれぬといふ者が兄源太とは何故寝た。いや私は。いやとはどこへ。たつた今汝が口から。好い事には寸善尺魔と。吐



かさぬ先から知つてはゐれど。言出しては物がない。ハテ汝さへ應と言や。兄の別でも頷く合點。（地）斯う底を打割るからは否とは言はさぬ。手も足も引くゝつてむりやりに抱いて寢る。サア應といふか否と言うて括らるゝか。如何ぢや／＼と肩口捉へ手詰に成つて動さねば。コレ無體な事なさるると平次樣の病は嘘。作病でござりますと大きな聲で言ひますぞえ（詞）夫いうてたまる物か。言ふなら此處放して。放しては戀が叶はぬ。（地）そんなりや言ひます。いや言はさぬとフシ口に手を當てせり合ふ所へ。都より急用有つて横須賀軍内。只今下着と打通れば。平次悔りエヽ、邪魔な所へと。うろ付く隙をそつと拔けフシ千鳥は奥へ逃けて行く。（地）景高居直り。ヤア軍内。急用とは氣遣はし樣子は如何にと尋ぬれば。さん候御惣領の源太殿。鎌倉へ御返しなさるゝ其儀に就いて。奥樣へ親旦那より御内意の此文箱。先へ參つてお渡し申せ（地）畏つたと急ぎの道中。川々の水に隙取つてやう／＼只今。源太殿にも追付けお着き。（詞）何ぢや兄貴が戻る。エヽ夫では此方の工面が違ふ（地）何角に就いて面倒い和郎。何の爲に歸さるゝ其方や知らぬか。（詞）成程知つてをりまする其樣子はお前の御果報。今度宇治川の先陣。佐々木四郎に高名せられ。源太殿は後れを取り京中の物笑ひ。何が手厳い親旦那御機嫌さん／＼。京で殺せば恥の上塗。鎌倉で腹切らせ汝をやるは検使同然必ず手ぬるく致すなときつと仰付けられた。惣領殿を仕舞うてやれば。御家督は指詰お前目出度うは思さぬか。（詞）目出度い目出度い結構な吉左右能う知らせた。（地）委い事は奥で聞かう。先づ其文箱を母人へとオクリ打連れてこそ入りにける。（地）時もあらせず表の方。若旦那の御歸國とざゝめく聲々。梶原源太景季鎌倉一の風流男。戰場より立歸る烏帽子の懸緒故實を正し。大紋の袖たぶやかにフシ座敷へ通れば。（地）母の延壽なに源太が歸りしか。いづらや／＼と立出給ひ。（詞）ナウ源太。賴朝卿の御運強く木曾殿を亡し給ふ。範賴義經兩大將を初め參らせ。誰々も恙なしと聞きつるが。顔を見て落着きました。仰の如く木曾の狼藉早速に切鎭め。押續いて西國表平家の大敵攻亡し。（地）法皇の宸襟を休め奉らんと。攻支度の評定とり／＼。父にも彌御勇健。先づは變らぬ母人の御有樣拜し申して祝着と謹んで述べければ。（詞）いやとよ源太。都は未だ軍中其方一人歸されしは心得ず。父御の仰は聞かざるか。いや何共承らず。鎌倉へ立歸り仔細は母に尋ねよと。（地）仰も默みがたければ是非に及ばず罷歸る。母人の御方へは如何申參りしやらん。

覺束なしと伺へば。詞ヲ、軍內が渡せし文箱。是見よ封もまだ切らず地心元なや披き見んと蓋押開くる。その隙に。千鳥は戀しい殿御の顏守りつめても親子の中。フシ包む戀路のやるせなさ。詞申し源太樣常さへ旅は憂き物に。地たんと御苦勞なされしやらお顏の細つた事わいな。お氣もじ惡うはござりませぬか。詞ホ、しをらしい。そちが問ふで氣が付いた。身が發足の時分には。弟平次病氣で有つたが本腹をしめされたか。アイヤ本腹やら立腹やら地達者過ぎて迷惑を致します。詞夫は一段何處にお居やる對面したい。イヤ兄者人。地平次是に罷有ると。一間の內よりのさばり出で。詞先づなにかと差置いて聞きたいは。宇治川の先陣。見事な高名遊ばしたでござらうの。ヲ、此源太が身に取つては過分なる今度の高名。何高名とはコリヤ珍らしいお咄しなされ承らう。ホヽ語つて聞かさん承れ。さる程に義經の御勢は。都合二萬五千餘騎。山城國宇治の郡に押寄する。頃は睦月の。末つ方四方の山々。雪解して水嵩增りし彼大河。宇治橋の中の間引放し。向ふの岸には亂杭逆茂木隙



間もなく。鎧うたる武者五六千。ヘズミ川を渡さば射落さんと。鏃を揃へて待ちかけたり。かゝる時節に渡さずば。江戸いつか譽を顯はさんと。我が君より賜つたる磨墨と云ふ名馬に。ナホス障泥はづしてゆ

らりと打乗り。名に橋の小島が崎より逸散に。駈出せば續いて跡に武者一騎。春の晨の川風に。誘ふ轡の音はりんりん。誰なるらんと。見返れば古歌の心に似たるぞや。おぼろ〳〵と白玉の霞の。隙より駈來るは。佐々木の四郎高綱。馬は劣らぬ生唼磨墨。二騎相並んでざんぶ。〳〵と打入るる。コレ兄ぢや人。是迄は咄しもならう。是から先が勝負の肝文。自身には言ひ憎くかろ。兄弟のよしみ平次が代つて咄さうと。言ふに千鳥が聞兼ねて。兄御様の高名咄。横合から腰折らずと默つて聞いて居さしやんせ。ヤアいやらしい肩持つな。われには構はぬ今の跡は斯うであろ。佐々木は聞ゆる剛の者。兄貴は知れたぬるま殿。遂に佐々木に乗負けて。いや〳〵〳〵何のあなたが負け給はん。知らぬながら千鳥が推量。

敵は川を渡さじと水底に。大綱小綱十文字に引渡し。駒の足を惱ませしに。頓智の源太景季様太刀を。するりと拔き給ひ。大綱小綱切流し〳〵。なされたでござんせう。ヲヽ千鳥がいふに違なく綱を殘らず切拂ひ佐々木が乗つたる生唼に。一段計り乗勝つたり。アレ聞き給へ負はなされぬ。アヽ嬉しやそれ聞いて痞が下りたと悦べば。平次頭を打振つて。某佐々木に成代り一問答仕らん。其時高綱大音上げ。コレ〳〵景季馬の腹帶が延び候。鞍返されて怪我あるなと聲をかけたであらうがの。ホヽ委しくも能く知つたり。某はつと心付き。弓の弦を口に啣へ馬の腹帶に諸手をかけ。引上げ搖上げしつかとしめる。コレ〳〵夫がうつかり延びぬ腹帶を延びたといふは。こなたの鼻毛を見ぬいた計略。うぢ〳〵めさるゝ其隙に。さつと佐々木が打渡つて。宇多の

天皇九代の後胤。近江源氏の嫡流佐々木の四郎高綱。宇治川の先陣なりと呼ばはりしは。天晴手柄こなたは大耻。微塵も違はあるまいがと。かさにかゝつて耻しむれば。源太は默して答なし。傍からハア〳〵〳〵とあせるばかりに女氣の。何と詮方泣く千鳥。平次景高せゝら笑ひ。彼奴も此奴も泣面。ハテ氣味の好い事の。コレ母じや人。總領の耻かき殿を。仕舞へと言うて來ませうがの。其狀おれにも見せさつしやれと。指出す腕を擲退け。コリヤ此文は母への名宛。何が書いて有らうと仕意そちには見せぬ。母を差置き出すぎるなと。呵る聲さへおろ〳〵淚又繰返す文體に。心を痛めおはします。エヽ子に甘いも事による。生けて置く程親兄弟の面汚し。コレ爰な腰拔殿。せめては親の催促待たず直に斯うと思ふ氣はないか。夫も成るま

い。地世間は切腹したにして其首刎ねて埒明けうと。ずばと抜いて切りかゝる刀の鍔際むずと取り。詞兄親に對し尾籠の振舞。地腰抜の手並腰骨に覺えよと。引擔いてどうど投付け。起しも立てず刀の背打。りう／＼はつしと撲倒せば。あいた／＼と顔しかめはふ／＼迯けてぞ入りにける。コリヤ／＼千鳥。源太が母へ申上る仔細有り。地カヽル次へ参れと人を除け。詞斯く申さば景季が命惜むに似たれども。ゆめ／＼助かる所存にあらず。此度宇治の合戦前。父にて候平三殿軍の勝負を試みんと御赦しもなき的を射損じ。其矢が圖らず大將の御白旗に中りしは。味方の不吉父の不運。申譯立ち難く切腹に極りしを。佐々木四郎が情によつて君の御前を言直し。地父の命を助けたり。其場に某在合さず跡にてかくと承り。佐々木に逢うて一禮をと。思ふ間もなく早や合戰。詞宇治川の先陣は我も人も望む所。あるが中にも川を渡すは佐々木と某。南無三寶父の爲には恩ある佐々木。此人に乘勝つては侍の道立たずと。心一つに了簡定め。地先陣を彼に讓り手柄させしは情の返禮。後れを取りし某は元より覺悟の上なれば。耻も命も些とも厭はず。先陣の高名におさ／＼劣らぬ孝行の。高名と存ずれど白地申されぬは。武士と武士との誠の情。父の爲に捨つる命。お暇申す母上と。指添に手をかくればやれ待て源太。詞それ程知れた身の言譯。父御へは何故言はぬ。いや言譯を仕れば。佐々木が手柄を無にする道理。據なく母人へ申上げしも本意ならず。地死後とても此事は御沙汰。なされて下さるな。いや／＼。それは若氣の了簡。詞今死んでは忠孝にならぬぞよ。こは仰とも覺えず。義を知つて相果つれば忠も立ち孝も立つ。いや立たぬ何故と言へ。梶原の家は坂東の八平氏。其氏を名に顯はす。平三殿の總領の其方なれば。名をば平太といふべきを。源太と付けしは忝くも征夷大將軍源の頼朝卿石橋山の伏木隠れ。危き御命助けられし。平三殿を命の親と宣ひて。地勿體なくも家來の子を兄弟分に思召され。源の氏を賜り源太と名乗らせ。源氏嫡流の御召ある。産衣といふ鎧迄下された烏帽子子。爰を能う合點しや。詞今命を捨てゝはな。産の親への孝行は立たうが。烏帽子親の我が君へは何の命で御恩を送る。地主なり親なり忠孝が立たぬとは。爰の事をいふわいの。詞イヤ其御恩を忘れは致さぬ。烏帽子親とは憚り有り。主従は三世の契り生き替り死に替り。君に仕へる侍の魂。ヤレ情ない三世の契りのお主には。未來でも逢はれうが。親子は一世此世ばかりで又逢はれぬ。地母を置いて死なうといふ

子ぢ胴慾。殺せと書いて送られし連合は猶胴慾。惡い子でさへ捨兼るは親の因果。まして健氣な子でないか。虫螻蠰の命でさへ。科ない者は殺されぬに。塵芥かなんぞの様に心やすそに捨てよとは。父御ばかりの子かいなう母が爲にも子ぢや物を。問ひ談合に及びもせず軍內を檢使にやると。逸徹短慮な此文體。見るも恨めし忌々しと。ずん〲に引裂き〲口に含んで嚙みしたき。夫を恨み子をかこち スヱテ わつと叫び入り給ふ。地 母の慈悲心膽に銘じ六根五臟をしぼり出す。涙もあつき恩愛の フシ 親子の歎きぞ道理なる。地 横須賀軍內憚なくつつと通り。詞 親旦那の御狀御覽の上は申すに及ばぬ。某は檢視の役。サア源大殿腹めされと苦り切つて言放せば。ヲヽ覺悟は豫て極めしと。地 身づくろひする所を母は立寄り取つて伏せ。詞 ヤアどこへ腹とはそりやならぬ。恥かいた人でなし大小もいで阿呆拂ひ。手ぬるい父御の指圖より。嚴しい母が仕置を見しよ。誰ぞ中間共が古布子持つて來い。地 早う〲と呼ぶ聲に。あつと答へて平次景高。古わんばう提げ出し。詞 申し母人。此布子如何なさるゝ。如何するとは知れた事。此奴めに着せかへて門前からぼつぱらへ。地 それこそ望む所よと無法の主從立ちかゝり。手ん手にもぎ取る太刀烏帽子。叩き落されおつぽろ髮。素袍袴の帶紐も引きしやなぐるやら引切るやら。上着中着の綾錦古わんばうに着換へさせ。腰に喰ひ入る繩帶しめ付け。詞 おれを先刻に投げをつた。禮は平次がお臑で言ふと。地 緣より下へ踏落し。さつても氣味の好いざまのと フシ 一度に哄と打笑ふ。地 源太は變りし我が姿の。恥も無念も忍び泣き。母は我が子を助けんため人前作る澁面顏。怒る擬勢も苦口も詞と心は裏表。命代りの勘當ぢやと思うて堪忍してくれと。言ひたさ辛さ泣きたさを胸に包めど包まれぬ。悲しい色目悟られじと。詞 ヤア皆の者が彼の態見て。をかしがるので母もをかしい。あんまり笑うて涙が出る。ハヽヽヽ 地 と高笑ひ フシ 泣くよりも猶あはれなり。地 千鳥はかくと聞くよりも有るにもあられず走り出で。變りし源太が憂姿。二目とも見も分かず。お胴慾な母御樣。勝つも負くるも軍の習ひ。誰しも斯うした不覺は有る物。父御樣から殺せと有るをお詫言はなされいで。阿呆拂ひの勘當のと是がほんの父打母打。二人の親御に憎まれて源太樣の御身が何處で立つ。あれ程慘うなされた上はもう。堪忍して上げまして下さりませいと計にて。スヱテ かつぱと伏して泣き詫ぶる。詞 ヤア此母が采配。小癪な其方が何知つて。コリヤよう聞け。源太めが彼のざまは第

一の見せしめ。あの耻を無念と思はゞ。西國へ攻下つて平家を亡し。手柄して我が君の御用に立たば。ナ勘當はせぬ。ナ平次ナ心得たか。必ず手柄を待つて居る。地母が詞を忘るゝなと弟が事に言ひなして。兄を勵ます詞の謎々とくより母の御慈悲とは。知る程重き源太が額 フシ土に摺付け泣き居たる。地平次景高したり顔。詞コリヤ千鳥。なんぼ吼えても叶はぬ。是からは分別仕換へ。泥坊めが事思ひ切りおれが言ふ事聞きさへすりや。母へ願うてコリヤ奥様ぢや。地嬉しいかと。脊中擦けばエヽ穢らはしい聞きともない。詞憎まれ子世に憚ると。何所迄はゞかりなされうがいやぢや〳〵わしやいやぢや。地ヤアしぶとい女郎めと摑みかゝるを母押しのけ。何ぢや千鳥と源太が狂うてゐる。エヽ年よりひねた淫奔者。此奴はおれが仕樣がある。地源太めを追ひまくれと フシ千鳥を引立て奥に入り。詞コリヤ軍内。下部どもに言付け彼奴を早うまくし出せ。イヤサおせきなさるゝな。母御の仰は兎も角も某が存ずるは。地コレ斯う〳〵と平次が耳に吹込めば。詞ヲヽ左樣ぢやよい分別と。地二人白洲に飛下り飛下り聲をもかけず拔打に。源太を目蒐け切付くる。さしつたりと引つぱづし。かいくゞる身の捻り軍内が兩膝かき。のめらす隙を叉切りかくる。平次が刀も閃りと外し。詞引摑んで筋斗うたせ。地二人を踏付け立つたるは フシ心地よくこそ見えにけれ。詞ヤア平次千鳥が事を根葉に持ち。兄に敵たふ畜生め。今踏殺すは易けれど。惡い子とても捨てられぬと。母のお詞聞捨てられず助けて置く。地源太に代つて孝行に仕れと。弓手に差上げくるくると振廻し。七八間打付くれば。辛き命を助かりて フシ跡をも見せず逃げて行く。詞ヤア軍内。親共からの使なれば汝も如何も殺されぬ。其處を源太が了簡して。殺して了ふ仕樣はりう〳〵これ見をれ。地うぬが刀でうぬが首。ころりと落すは自業自得果。源太は殺さぬ手計動くと。言ふより早く首と胴との生別れ。親子の別れ今一度母の御目にいや〳〵〳〵。仰に隨ひ平家の戰ひ。四國九國の果迄もぼつ詰め〳〵高名し。其時お顏を拜まんずと思ひ諦め立出づる。後の障子さつと開く音に驚き振返れば。母はすつくと立ちながら。源太が方へは目もやらず。詞四國九國の合戰も。素肌武者では手柄が成るまい。勘當した子に持つて行けと敎へはせぬが。賴朝卿より賜りし產衣の鎧兜。誕生日の祝儀とて飾らせて爰に有る。我が物を取つて行くに。誰がいやと言はうぞ但しは取らぬか。地主もない此鎧早や取りおけ腰元ども。女どもは何處に居る。

來いよ／＼と呼ばはり／＼入給ふ。ハ、ア重々深き御憐愍忝し／＼と。嵐上つて具足を取除くれば。思ひがけなき具足櫃よりずつと出でたる腰元千鳥。ヤア其方は爰に何として。サア是も母御様のお情。不義をした科で此櫃に入れ亂曝さす。其跡は親を守る。往きたい方へ連立つて往きやれと。お慈悲深い御了簡。何母人がハツアハ、、、。有難や冥加なや。あだに思はゞ逆罰受けん。恐ろし／＼是より直に。此源太が恥辱を雪ぐ合戰の首途。お暇申し奉ると母の方を伏拜み／＼。おまめでござつて下さりませと。言ふも盡きせぬ別れの涙しぼり兼ねたる袖の海深き御恩を蒙りしは。身一つならぬ友千鳥なく／＼出でしが又立ちどまり。見送りては親と子の。はてし名殘の憂き別れ浮世に。憂き身かこつらん。

第三

道行君後紐

捨つる身を。捨てぬ絆は子故の闇。空もあやなき曉の。霙も春な宵の螢。行の憂さ辛さ。悲しさを。いはぬ色なる山吹御前日さへ西に落人の。桂の里の騒儀より。スヱテ知邊の方に一夜二夜。明し暮せど忍ぶ身は都近くも物憂しと。今日思ひ立つ旅裝。人目を恥づる。取りなりは身に幅。もなき麻衣の。木曾路をへさして。行く道の歩み苦しく。眞砂地を。よむばかりなる桂川。お筆が背に大寒む小寒む。猿の衣服借つて着しよ。かつて召したる若君の。危き所を遁れしも。まさるめでたき御運の強さ。亡き我が夫の嵐よ形見よ。わすれ草。忘野の。雉子。夜の鶴。子を悲しまぬはなき物を。ましまして。況んや人として。親の。別れを。白絲の。血筋を分けし父君に。似たりや似たり　いたいけ盛り。あれ／＼あれを見や。二つ連れたる雲井の雁。故郷へ歸る我々も君の故郷へ歸れども。鴛鴦の片羽のとぼ／＼と。子に迷ひ行く小夜千鳥共も迷はん　三つ瀬川。四つ塚東寺九重の。都の中におのづから傾く笠の行方しをれ。今落人の身の上も。人に知られし白川の。水も淀みて栗田山。あはれ父なき稚子をすかせば肩にすやすやと。輿入の餘念なき寝こそ姥が懐と。所の名さへ有る物を。お乳も添乳もな泣きそ／＼。晝寐の夢は襁らねど。襁る姿のア、耻かしや。丸寐勝ちなる。我々に色も。有るかと。袖袂。引くな引かせじ日の岡の。戀の峠も越えわびて　いやといふのはな浮世の習ひよさいな。底の心は。ホンニ。え知

らいでさいな。それがじよいなまじよいな。逝に唄ふ ナホスフシ竪々は。松をしらぶる。春風かそれかあらぬか粥して オクリやう／＼へ跡を老の身の。道におくれて鎌田の隼人。娘が肩背休めんと。 フシ抱取つたる駒若丸。首せでお縺れ好い殿。ねん／＼ねんねこせい。いとしい殿に花やろ。花やろ／＼花一時と眺めても。君の命にくらべては ヘズミ盛久しく。若君も父御の武勇を受繼ぎて。生長榮えましませと。スヱテ諸羽の宮に人々は。フシ暫らく法施奉り。今辿り行く。道芝もさいつ頃木曾殿の。鞭打ち給ふ所ぞと聞けば草木も外ならず。浮世なりけり世なりけり。昨日めでたき人だにも フシ今日は漂ふ泡沫の。粟津が原の討死を フシ思ひやるさへ悲しやな。矢一つ來つて我が夫の内兜に射付けしは。天の咎か武運の盡きか。遂に其手で馬上よりをちこちの土となり給ふ。所はあれよあの雲の。下こそ君の最期場と。見るにつけ語るにつけ フシ袖は。涙の春雨に。しをれ侘びつゝ山吹も心地すぐれず見え給へば。立寄りいさめ慰めていざさせ給へと御手を引き。見渡せば。春の日あしも。走井や習はぬ旅に身も疲れ。世の憂き事を夕嵐さら／＼さつと吹きくれば。褄も裳もひら／＼／＼。ひらひら／＼と吹分くる。追分過ぎて大津の宿 詞サハリ今宵は爰にかり枕。袖を片敷く旅宿疲れを。晴させ 三重 へ給ひける 地

東路を フシ上り下りの。旅人も。地二つと三つに追分や大津に並ぶ旅籠屋の。棟門多き其中に名高き鬮の清水屋が。疾くより奥に客泊めて。料理拵へ俎板の。音もてき／＼亭主が氣配り。下女も男もそれそれに。茶運ぶ風呂焼く人泊める。フシ門賑はしき黄昏時。あら尊と。フシ導き給へ。サハリ觀世音。運ぶ歩みの。フシ順禮姿。地背に國名を笈摺の年は六十路に色黒き。達者作りの老人が。娘と孫を打連れて。スヱテ胸に懸けたる普陀落や。紀の路大和路打過ぎて。フシ今日も暮れぬる鐘の聲。地三井寺に札納め爰か其處かと指覗けば。亭主がかけ出でコレ親仁樣。お泊なら臨ひら見まい。名代の清水屋座敷が奇麗な木賃が安い。地フシサアお入りと引留むれば。詞アヽこれ／＼滅多に引張つて着物破つて貰ふまい。なんぼ泊めたがりやつても木賃を聞かにやぽか／＼と入らぬ親仁。サアいくらちやきり／＼言うた。ハテ定りは三十なれど好い樣にして泊めましよわいイヤ好い樣とは好い衆の事。俺はずんど貧乏な西國。道々も杓振つて。順禮に御報謝で。貰ひ溜の米も有れど。たつた今跡の石場で。蕎麥をしたゝかしてやつたりや。腹袋に足が入つて明日迄煮焚も何にも入らぬが。ナント廿宛で泊めぬ

かい。ハアそりや安けれど順禮衆の事ぢやもの。儘よ負けましよ。イヤ安うはないぞや。錢の高いが合點か。しかけてつかへば五分四五厘。利が有りすぎよ。サアそんならおよし草鞋解け。サア坊上ろヤアえい〳〵と。地襖隔てゝ次の間にフシ打寛いで。詞扨歩いたわ。今日は大道其方も草臥。おりや猶の事道下手で氣ばかりいらくら。船頭と籠は。陸で埒の明かぬ物。やれしんどや腰痛や。ドレ其枕取つてたも。ア、やい〳〵コリヤ槌松よ。其襖明けん物ぢや怖いぞ〳〵。コリヤ爰へ來いじゝかんでやろ。エ、穢い洟では有るぞ。ヲ、あれ〳〵又飯行李引出すわい。さりとは徒手のない奴。ヤほんに夫で思ひ出した。コレ〳〵宿の衆。どれぞ鳥渡賴んましよ早う〳〵。ヲ、これ父様。けたゝましい何ぞいの。イヤ此飯行李かさ〳〵と洗うて貰て。明日の出立

殘りを詰める。菜は茄子に大根を取交ぜ。香の物のこけら鮓。地賴んで置くと諂はぬ。巽上りのとんきよ聲夫といはねど紛れなきフシ舟乘とこそ知られたり。ヘルフシ同じ浮世に。憂き思ひ。地人忍ぶ身はおのづから。スエテ茅にも心奥座敷。山吹御前は先達て。爰に宿を假初も。ならはぬ旅につかれ果て御心地例ならねば。お傍離れぬ鎌田隼人娘のお筆諸共にフシ勞り介抱する中に。地何の頑是も泣出す。駒若君のやんちや聲。襖一重に聞くも氣の毒。詞アレおよし。あちらの旅人も子が有るさうながさつてもせがむわ。わやくいふなア。瞞しても賺してもおこりをると何處にも迷惑。ハア、なんぞ遣りたい物ぢやがヲ、夫よ。童賺しはこんな時。今跡で買うた大津繪地一枚やろと取出すを。槌松が掴んで放さばこそ。いやぢや〳〵と泣きわめく。詞ヲ、こりや〳〵破るなやい。エ

エ吝い坊主め。コリヤよう合點せい。此繪は座頭の坊が褌を。犬がくはへて引く所。こりや目が無うて面白ない。餘所の子に遣つてのけ。汝にやこれ〳〵衣着た。江戸鬼の念佛嚙みくだく。撞木を持つて叩き鉦。詞くわん〳〵〳〵。イヤくわらくわん〳〵と紛らす中におよしが襖押明けて。詞コレ申しお隣の。お小さいのがきつい泣きやう。地是進ぜましよと差出せば。お筆が取つて押戴き。詞是は〳〵忝い。お前にも子達が有るに。好い物進ぜて下さんした。これ〳〵あつかホ、好いのぢや。アレ餘所の嬰兒御覽じませおとなしい事わいの。ヲ、あのおつしやる事は能うおとなしかろぞ。其腕白さ意地わるで。如何も斯うも成るこつちやござりませぬ。お前のは色白に美しい好いお子やの。お幾歳でござります。サア此お子は三つなれど。年弱でござんすわい。

扨もいや〳〵。そんなりや是と同い年。同じ三つと言ひながら此坊主は。二月生れで年强。ホンニ夫でか大柄にも有り逞しい子でお仕合。見れば順禮さしやんすさうなが。奇特な事や所は何處ぞい。アイ所は是から大方十二三里も下。コリヤおよし。主の臍探る樣にエぐづ〳〵した物の言ひやう。たつた一口つい津の國の船頭ぢやと言うたが好いわい。アヽせはしない。ちつと人にも物言はせたがよいわいの。マヽ聞いて下さりませ。此樣に乳吞子を抱へ長旅を致しまするも。私が稚馴染。此子が爺は隨分達者な人で有つたが。ふと感冒の心地と病付いたが定業やら。地間もなう死なれて今年が丁度三年に當りますれど。何を供養施も內證の權は廻らず。西國は結構な事ぢやと聞けば。せめて足手を引いてなりと夫の菩提を弔ひたさに。思ひ立つての順禮と語るを聞いて山吹御前。あの子も三つ我子も三つ父親に別れたとは。果報拙なやいとしやなう。自らとても殿御に離れ便なき身の旅の空。世には似た事も有る物とフシ身につまさるゝ御淚。詞アレ聞いたかおよし。あなたも御亭樣が無いといやい。そりや悲しいは尤ぢやが。生身は死身合せ物は離れ物。何ぼ泣いても返らぬ事。さつぱりと諦めて早う男を持たしやりませ。ハテ左樣なけりや我も人も。肝心の商賣が成りませぬ。夫でこつちも近頃幸ひな者婿に取つたが。此およしが舵の取やうが好い故か。何時共なう帆柱立てゝ乘りまする抑しまする。舟一卷ならござれ〳〵。そこでおらは一助かり大船に乘つた心。外に望みは何にもないが。たつた一色サアいづくの浦でも。無い物は金と化物。有る物は質の札と借錢。こいつも根繼でござります。見りやお前方は好い衆さうなが。何處元から何方へござると。地問はれてお筆が取繕ひ。詞サアヽ我々は都を離れ。地片山里から信濃路へ志しエヽ聞えた。詞善光寺參りぢやな。ヲヲいかにもそれ〳〵。それに就いて難儀な事は。是にござるお主樣が俄の御病氣。アお道理でも有る。つひに是迄道一里とお拾ひなされた事なければ。お疲れの出るも尤も。わしらが足さへ草鞋にくはれて。ホヽまめが出來たでござりましよ。そりや針で突かしやりませ。總體まめといふ物は。突くとじく〳〵汁が出まする。アヽこれ父樣。ひよかすかと出放題な何ぞいの。イヤひよかすかぢやない。ようなる事を言うて進ぜる。地アレまだいのヲヽフシ笑止な人やと袖おほへば。詞イヤイヤちつとも苦しうない。地最前から手前も出て。挨拶するも合點なれど。却つて興もさめうかとわざと控へて居申した。

（詞）今娘が言ふ如く御主人の御病氣親子の者が御介抱も。旅宿なれば萬事心に任せす。何がなお慰みと思へども。口重たき我々では埒明かぬ。正眞の旅は道連。かう打寄るも他生の緣。サア〳〵遠慮なしに何成とも。お氣のはるゝ話を賴む。（ア）旦那殿こりや迷惑。おらは咄は何にも知らぬに。ヲヽ有るぞ〳〵たつた一つ話しましよ。昔々爺は山へ柴刈に。婆は川へ洗濯しに。アヽこれ〳〵そりやあんまり。子供も知つた昔噺古い〳〵。サア古いによつて洗濯しまする。洗うても磨いても。（地）新しうならぬ物は寄る年と此顏の。眞黑なは悉皆牛もう寢たとよござりましよと。蒲團手ん手に寐轉びて。咄牛へ亭主がにょつこり。（詞）ハヽアこりや皆まだお休みなされぬか。さらば行燈を取りましよかい。此儘置けば油代が十文出ますが。ヲヽそりや合點ぢややつぱり置いたり。爰で一つ談合が有る。兩方兼ねた此行燈。其方も此方も勘定づく何と。三文負けて貰をかい。ヘツ切も細い虱のかは。イヤおらが虱より此蒲團はどうやらうぢ〳〵。千手觀音、は居らぬかや。ハテ勿體ない順禮が觀音嫁うて好い物か。信ありや徳有る奇特には。道中怪我の無い様に。（地）乗り移つてござりましよと（オクリ）笑うて〵勝手へ入りにけり。（文弥詞）跡は互に旅草臥子供の添乳肘枕。（地）話



のあども轉寐にとろ〳〵。寐入る折こそ有れ。村中を駈廻る歩行がによつと門口から。御亭主内にかオット何ぢや。イヤ何ぢやはお尋ね者嚴しい御詮議。委しい事は來て聞かしやれ。サア〳〵今ぢやちやつと〳〵。ホイそりや往かざなるまい。遲くは庄屋のたくら者。又頭から嚙むぢやあろと。氣もわく雪駄片々に羽織引つかけ出でて行く。既に其夜も。更渡り。遠寺の鐘も幽なる。灯火細く影さして。四方に人音しづまりぬ。旅ぞとも知らぬ稚子。隣同士。宵寐まどひの目をぽつちり。乳房離れてそろそろと。這出で一人にた〳〵笑ひ。頭てん〳〵てうち〳〵あはゝ。間の襖を越え行けば。此方の子も出て這廻り。頷き合うて寄集り。おせ〳〵小坊師が同い年。互に愛するごとくにて。機嫌笑顔のしほの目細目。烟管ぐわた〳〵手ずさびや。菅笠取つて着たは松茸ほしがる顔で。摑めば遣らじと引張合ひ。餘念他愛もなかりしが。悦ぶ先にほつと欠伸も子供の常。又行燈に手をかけて。此方が引けば彼方も引き。突戻せば押返し。引合ふ拍子に土器搖り込み。燈火ばつたり眞暗闇。我と我が手に驚きてわつと泣出す子供の聲。寐耳に恂り目覺す人々。こりや何事とうろつく中。亭主が注進先に立ち。梶原が家來番場の忠太。大勢引連れ駈來り。それ遁すなと下知すれば。捕つた〳〵と亂れ入る。音に驚き家內の騷動顚ひ戰慄きあつたふた。危さ怖さも暗紛れ。行當るやらこけるやら上を下へと三重へ立騷ぐ。風も烈しき。夜半の空星さへ雲に覆はれて。道もあやなく物凄き裏は田畑を隔ての大藪。押分け搔分け。忠義一途にかひ〴〵しく。お筆は片手に若君抱き山吹御前の御手を引き。駈出でて息をつぎ。扨もひあいや危い事。父樣は多勢を防いで跡から追付く。早う逃げよと有りし故滅多無性に走つても。暗さは暗し勝手は知らず。どつちへ逃げてよからうとうろつく向ふへ數多の人聲。又むら〳〵とかけ來り。遁さぬやらぬと無二無三打つてかゝれば叶はじと。山吹御前に若君渡し。一腰拔いてはつし〳〵。てふ〳〵翼の早業早速。飛びちがへ切り開き弓手に薙り馬手に受け。怯まず去らず戰へば。さしもの大勢たまり兼ね逃げるをやらじと追うて行く。跡にはあ〳〵山吹御前。長追爲やんな戻つてたも。此隼人はどう仕やつた。アヽ氣づかひや危なやとあせる向ふへ打合ひ切合ひ切結び。追つつ捲つつ駈け來る番場を相手に鎌田隼人。忠義に冴えたる切先刄先。受けつ流しつ上段下段。秘術をつくし戰ひしが。忠太がい

らつて打つ刀。受けはづして弓手の肩先袈裟にずつぱと切下げられ。地心は鬼神とはやれども腕も弱り目も眩み。足を立て兼ねたぢ／＼／＼。よろ／＼／＼とよろめく所を。附入り附込みたゝみかけ留めの刀一刳り。はつと驚く山吹御前。逃しも立てず向ふへ突立ち。詞サア女其倅渡せ／＼。ヤア何者なれば此狼藉。様子が聞きたい合點がいかぬ。ヲヽ様子は其方に覺え有る筈。朝敵謀叛の義仲が倅。敵の末は根を斷つて葉を枯す。ハア是非もなや。此子一人助けたとてさまで仇にも妨にも成るまじ。地生きとし生ける物毎に物の哀は知る者ぞ。取りわけ武士は情を知る。自らは兎もかくも此子が命を助けたい。慈悲ぢや功徳ぢや後生ぢやと。スヱテ涙と共に詫び給ふ。詞ヤア甘ちこい成らぬ／＼。當歳兒でも男のがき生置いて後日の仇。繰言いはずとサア渡せと。地飛びかゝつて引取れば。わつと泣く子を放さじと取付き給ふを捥放し。突飛ばせば又縋り付く。反ねのくれば武者振り付きやらぬ／＼と泣給ふ。ヤア面倒な女めと肩先掴んで投付くれば。うんとばかりに息たえ／＼。其際に若君を。宙に提げ首はつしと打落し小脇に搔込みフシ飛ぶが如くに駈り行く。地山吹御前は夢心地。むつくと起きてハア悲しや。西も東も辨へぬ此子に科はなき物を。惨や辛や胴慾や。返せ戻せの聲も遙かにお筆が聞付け。息を切つて立歸りはつと驚き抱きかゝへ。詞コレお心は慥なか。若君様は何處にござる。様子を仰しやれサア如何ぢや。／＼とせき切つて。地問へば答もフシ苦しげに。詞ホヽお筆か遲かつた。情なやたつた今追手の者が爰へ來て。隼人も討たれ駒若も殺された。ソレ首切つて逃げたわいの。地エヽと仰天狂氣の如く。スヱテ呆れて詞も出でばこそ。地胸も裂張く悲しさの。涙はら／＼立つたり居たり。身をもがき齒を噛みしめ。詞エヽ口惜や今一足早くばなあ。女でこそ有れやみやみと討たしはせまいに。シテ其切つた奴は何方へ逃げた。顔見知つてござりますか。アヽ此暗さでは夫も知れまい名はお聞きなされぬか。イヤ／＼顔も名もしらねど。梶原が所業で有らう。可愛やわつと只た一聲。泣いたが此世の暇乞。地父御といひ子といひ双にかゝりはかなき最期。剰へ是迄付添ひ。忠義をつくす隼人迄爰で死ねとの約束か。こはそも如何なる前生の報いか罪か淺ましやと。御身も絶ゆる叫泣き。お筆も有るにあられぬ思ひ。父の最後はお主へ忠義。ギン悔む心はなけれども。詞おいとしや駒若様。今日の今迄愛らしう私を廻し。片時離さず抱かれて泣いつ笑うつ可愛氣な。地お顔をやつ

ばり見る様なと。口說き立て〳〵聲も。惜まず歎きしが。地涙の中に心付きせめて一目若君の。お死骸なりとも見ん物と。四邊見廻し尋ぬる心も空も闇。怪しや血にそむ稚き骸。手にさはるをかき抱き。スヱテ涙と共に撫廻し〳〵。詞ハア、此着物は如何やら手障も違ふ。そして何やらびら〳〵とこんな物は召さぬ筈。地合點がいかぬと能々すかし見。詞ヤア是は違うた。申し〳〵。こりや若君ではござんせぬ。ヤア何と言やる駒若でないとは。ハテ此死骸は笈摺かけて居るわいな。どれ〳〵ほんに代つたこりや如何ぢや。地是は是はと二度悔り。詞ム、扨は今の騒動に。相宿の子と駒若と取違へたか ハア悲しや。ア、これ〳〵そりや何おつしやる。悲しい事はござんせぬ。コレ取違へたのでな。若君のお命に氣遣ない。これ則ち天の惠み御運の强さ。アツア嬉しや〳〵有難や。コレお悅びなされませ。コレ申し〳〵。是はしたり。何故物をおつしやらぬ。ハア、又眩暈が來たさうな。これは〳〵エ、お氣の弱い。腑甲斐ない事では有るぞ。これ〳〵申しと。地言へども弱る身の上に。悲しさ辛さ氣を採上げ。又嬉しさにがつくりと引取る息も フシ敢なき最期。地お筆は周章うろ〳〵きよろ〳〵。こりや何とせう如何せうと。脈取つて見つ耳に口。詞これ〳〵申し山吹樣いなうと。地言ふ聲さへ人を憚り。思ひ切つて呼ばれぬか。エ、情ないエ、鈍なと。心は千々にくだけども。早色變り手足は氷と冷え切つて。抑動かせど其かひも。涙先立つ魂も共に消入る憂き思ひ。大地にかつぱと伏轉び。聲の限をフシ泣きつくす。理とこそ聞えけれ。地やゝ有つて顏を上げ。詞ハア、さうぢや〳〵返らぬ事。悔むまじ歎くまじ。地一先づ此場を立退きて妹千鳥と心を合せ。お主の仇父の敵。逃隱るゝとも天地の間。命限り根限りやはか助けて置くべきかと。駈出でしがイヤ〳〵〳〵。詞夫より大事の〳〵若君。片時も早く取返さうア、いや待て暫し。地死骸を此儘捨置かれず。無緣の此子父の骸諸共に。隱さんとは思へども前後に滿ちたる多勢の追手。隙どらば却つて妨げ。せめてお主の面影を。先づ先づ彼處へ葬らんと オクリ邊りに繁る竹切つて。ダ・キ舁上げ乘する笹の葉は。亡魂送る輿車。ナホス轅も細き千尋の竹。肩に打ちかけ引く足もしどろ。もどろに定めなき。淵瀨とかはる世の憂を身一つに降る涙の雨の。を止みもやらで道野邊の草葉も。地浸す袖袂泣く〳〵辿り 三重へ行く空の。難波潟蘆火焚く家の。片庇。地家居には似ぬ里の名や。福島の地はおしなべて世を海渡る舟長の。有るが中にも權四郎と

て年も六つを十返りの。松右衛門といふ通り名は養婿に譲りやる。門に目あての松一木所に蔓る親仁あり。志す日に邊近所の婆嚊達。お茶参れとて招かれて。詞ナウ權四郎様。今日は志の日ぢやお茶飲めと。およし様の直にお使から伴ひ忝い。地誘ひ合せて参つたとどや〳〵内に入りければ。詞能うこそ〳〵今日は娘が前の連合。此槌松めが本の父が三年の祥月命日に當つた故澁い茶を焚きました。飲んでゆつくりして下され。常なら箸でもとらせます筈なれど。知つての通り足弱な娘や孫を引連れて順禮の長道中。物入の跡何にも爲ませぬ。とはいへ娘何んぞ無いか。地何ぞと申したら人手はなし此子はせがむ。ほんの心ばかりをば上つて御回向頼みますと。霰交りの煎豆に端香持たせて汲出せば。詞もう三年に成りますか。アヽ月日に關守すゑざればぢやの。

今の松右衛門殿はござつて間もなく。しみ〴〵と付合はねば心入は知らぬが。死なしやつた此槌松の爺御は丁度此人参の太煮の様に。毒にならぬ人で有つたにいとしや〳〵。南無阿彌陀。皆回向してお茶参りませ。海鹿のお和物この蒲公英。茶請に話噛交ぜてあだ扨も旨しと舌鼓。口々のやかましさ。皆船頭の女房とてフシ乗合舟の如くなり。詞ヤアよい序ぢや權四郎様お尋ね申す事が有る。別の事でもない此わるさ殿。連れて順禮なさるゝ迄は色黒に肥え太りて。年より丈も大柄に。病氣なうて眞の赤松走かした様に。門を家と遊びやるを見ては。あやかり者ぢやと羨んだ子が。何として又此様に色白に痩せこけて。思ひなしか顔のすまひも變つて。背も低う弱々と外へとては一寸出でず。地あれが順禮の奇特か觀音様の御利生かと。打寄つては是沙汰面妖な事

やと尋ぬれば。詞されば其事。ありや前の槌松ぢやござらぬ違うた〳〵。違うた譯思ひ出すもなう恐ろしや。聞いて下され。娘よ。何日の夜やらで有つたな。ハテ二十八日のヲ、それ〳〵。又跡の月の二十八日三井寺の札を納めて。大津の八丁に泊る夜。何かは知らず御上意ぢや捕つた〳〵と大勢の侍が。コレ見さしやれ咄しするさへ身が顫ひます。地ほんの世話に言ふ狼狽ては子を逆様。如何負うたやら娘が手を引いたやら。走つたやら飛んだやらやう〳〵毒蛇の口を遁れ。逃げて行く先は又狼谷。谷の水音松吹く風も跡から追手の來る様に思はれ。扨も命は有る物かな眞黒の夜に四里足らずの山道を。息一つ吐かばこそ。水一口飲まばこそ。命から〴〵伏見へ出て。初めて背に負うた子の顔見れば南無三寶。詞相宿の襖越し。宵に話もした和郎が。連れた子

と取違へたに極つた。大儀ながら一走り往て。元々へ取換へて來てくれと娘はせがむ。ヲヽ尤も取戻して來うと思ふ程先の怖さ。いかな〳〵一足も行かれるこつちやない。今には限らぬ取返す折が有らう。先の和郎も子を取違へ。人の子ぢや迚どろく〳〵にはして置かぬ筈。此子さへ大事に育てゝ置いたら。三十三所の觀世音のお力。枯れたる木に花さへ咲くぢやないか。一先づ内へ戻つて。潰した肝を慰してからの上の事と。董舟に飛乗つて戻る中。乳飲まうと泣く。持合せたを幸ひに。娘が乳飲ませたら夫なりに月日も經ち。名も知らねば呼びつけた槌松々々と言や我が名と心得。祖父よ祖父よと馴れ馴染むいた〳〵しさ。今では眞の槌松めも同然に。可愛ゆござるといふ聲も咽に。つまらす老心。娘も共に涙ぐみ。時の災難とは言ひながら。緣有ればこそ此子が手しほにかゝり。他人がましうもする事か。母樣々々と此乳を。飲みもすりや飲ましもすれ。馴染めば我が子も同じ事。此子憎いでは夢いさゝかなけれども。今日の亡者の手前も有る成らう事なら手つ取早う。元々へ取戻したうござんすと語るを聞いて婆嚊達。夫で疑ひ今晴れた。大願立てゝの西國廻り現世未來の觀音樣の引合せ。あつちから槌松を連れて。やがて尋ねて見えましよぞいなう。必ずきな〳〵思はぬがよい。サア皆の衆あんまりお茶飲んで結句お腹も晝下り。いざござれお暇と打連れ出づる門の口。權の先に笠かつ付け。打ちかたげ立歸る婿の松右衛門。ホこりや皆お歸りか。今日は前の婿殿の三年忌。内に居て共々御馳走申す筈を。遁れぬ用事で罷出で近頃の亭主振。まそつと緩りとはなされいで。まそつとの段かいの。ゆるり鑵子の底たゝいて歸ります。餘り茶には福が有る飲んでお休みなされやと住家々々に立歸る。ハア親父樣今歸りました。茶事の間に合はう釜の下でも焚かうと。氣がせいても相手はせかぬ大名のゆつたり。遅なはつた嘸お草臥女房共大儀で有つたの。何の大儀な事はないお前こそ嘸おひもじかろ。ぽんよ。父樣お歸りなされたかと何故お傍へ往きやらぬ。どりや飯上げうと立上るコレコレ女房。まだ欲うない望みな時に此方から言はう。扨申し親父樣。大名の中に梶原殿は。取分の念者と申すが違ひはない。お召によつて船頭松右衛門參上と奥へ言つて行き。稍暫くして御家老の彼の番場忠太殿がお出でなされ。先達て差上げた逆櫓の事書。一つ〳〵尋ぬる程にける程に。問殺した共上で共通申上ぎよ。暫く待て。能う暫くで有らうぞ。なゝの

三時待せて置いて殿が直にお逢ひなさる。是へお出でなさるゝと其重々しさ。物言ひの堅くろしさ。船頭松右衛門とは汝よな。智謀軍術逞しき義經へ。此景時が能く存ぜしといふ逆櫓の大事。疎に聞受けがたし。汝舟に逆櫓を立てゝの軍。調練したる事や有る夫れ聞かんと問ひかけられ。此度親父様に習うて。逆櫓といふ事初めて知つた此松右衛門。返答に困るまいか。難儀せまいか。ほつとせしが分別致し。御意ではござれども賣船の船頭風情。軍といふ物は夢に見た事もござらぬ。逆櫓の事は我等が家に傳へ。能う存じて罷有りまするなどと申して間に合せを言うたれば。ムヽさも有りなん。然らば汝覺え有る船頭を語らひ。今宵密に逆櫓を立て。舟の掛引手練して其上に知らせよ。事成就せば御大將の召舟の船頭は汝たるべし。御褒美は此梶原が取持ち。永く船頭の司として。莫大の財寶を下さりよと有る直のお詞。其嬉しさに初めの術なさ打忘れ。あたふたと歸りがけ。日吉丸の船頭の又六灘吉の九郎作。明神丸の富蔵。こいらは梶原様のお舟の船頭。幸ひ三人を相手にして日暮から。逆櫓稽古に此方へ参る筈。御教へなされた手際を見せ付け立身出世はたつた今。是と申すも御指南のお蔭忝い。坊主よ悦べ。結構な衣服きせて玩弄に飽せうぞ。女房ども親父様悦んで下されと。語る婿より聞く嬉しさ。イヤサ不器用な奴は千年萬年教へても埒や明かぬ。まんざら素人のわり様が。入婿にわせられて一年も立つや立たず。天下様の弟御の召さるゝ御舟の船頭する様に成るといふは。おれが教へたばかりぢやない。其身の器用がする事でおぢやらしますよ目出たい〳〵。婿殿の草臥休め。娘十二文持つて走らぬかい。イヤ〳〵御酒も歸りがけに九郎作が所で下された。一生覺えぬ大名の付合。膝はめりつく氣骨は折れる。播磨灘で南風に逢うた様な目にあうて頭痛まじり。草臥たといふ段ではない。暮迄は未だ間も有らう。親父様御許さりませとろ〳〵と一寝入。およしコレ見や。坊主めが居眠るは幸ひ父が添乳せん。ねんねんころゝとかき抱き納戸の内にぞ入りにける。娘裾に何でも置いたか。出世する大事の體風ひかすな。祝うて舟玉様へ燈明もとぼせ。御神酒上げたい買うてくれぬかい。買ふ迄もない是をお供へなされませと。棚からおろす難波燒。ちろりと用意が有つたなと。老の洒落言輕口も神慮は重き。一對の。徳利に餘る親心。妻は火燧の石の火に夫の威光耀けと。油煙も細き燈明に。心をてらす正直の神や光を添へぬら

ん。フシ妻戀ふ鹿の。果ならで。色難儀硯の海山と。長地苦勞する墨憂き事を數書くお筆が身の行方。何時迄はてし難波潟。福島に來てこと問へば門に。印のそんじよ其處と。松を目當にフシ尋ね寄り。詞ハア御免なりましよ。松右衛門樣は此方かお名を知るべに遙々尋ね參つた者。地お逢ひなされて下さつたら忝うござんしよと。物ごしのしとやかさ。アレ詞父樣。地碌松右衛門殿に逢ひたいと女が來た。碌な事では有るまいと跡先知らで女氣の。フシ早や悋氣する詞の端。色興がる嗜め。松右衛門に逢うて姉ぢやというても悋氣するか。夫程氣遣なら呼込んで。逢はせぬ先に聞いたがよい。何方ぢや女中。何處からござつた。松右衛門内に居まする遠慮せずと入らしやれ。地夫はまあまあお嬉しやと。笠解捨て内に入り。お前が松右衛門樣かお近付でなければ。お顔見知らう樣はなけれども。詞なけれどもなりやなぜござつた。サア申し何が知るべにならうやら。攝州福島松右衛門子。槌松と書いた笈摺が緣に成つて。ヤアそんなら此方は大津の八丁で。又跡の月二十八日の夜の。アイお子樣を取違へた者でござんす。地道理で見た樣な顏ぢやと思うた事。是は夢か現かいなうおよし悦べ。槌松を取違へた人ぢやとやい。此方からも行方尋ねて元々へ取戻す筈なれども。何を證據に尋ねて行かう手掛もなく。泣いてばかり居りました。其代りには取違へた其方の子供衆。兎の毛で突いた程も怪我させず。虫腹一度痛ませず娘が乳が澤山な故。喰物はあしらひばかり乳一度餘させず。詞ヲヽ夫よ風一度引かさばこそ親子が大事にかけたに就いても。地此方の息子めも嘸御厄介御世話で有らう。能う連れて來て下さつた忝い〳〵。詞わるさよ我が内を忘れたか何故入らぬ。イヤ門にではござんせぬ。地エヽ連の衆が跡から連れてお出でなさるゝか。嘸御厄介忝い〳〵はて早う逢ひたいな。娘お禮を申しやいの。詞アヽ父樣せはしない。地此お禮がちやつきりちやつとつい言うて濟む事かいな。申し此槌松はなぜ遲い。お連の衆が門違はなせれぬか。此槌松なぜ遲い。我が子は如何に孫は如何にと立ち代り入り代り。門を覗いつ禮言ひつそぞろに悦ぶ親子の風情。お筆が胸に燒鐵さす今更何と返答も。ギン泣くもなかれず差俯き。フシ暫く詞もなかりしが。地お願ひ申さねば叶はぬ譯有つて。色恥を包み面目を凌いで尋ね參りしが。左樣お悦びなされては。氣が後れて物が申されぬ。まあ下に居て下さんせと。地涙ながらにフシ押鎭め。地改めて申すもおぢきなき其夜の騷ぎ。手ばしから逃げ隱れなされた

お前方は順禮の功德。此方は一人は病人なり。男とては有るに甲斐なき年寄。逃げるも隱れるも心に任せず。取違へた其お子は其夜に敢なく成り給ふと。聞いて悔りとは何故にとは如何にと。餘りの事に泣きもせずフシ仰天するこそ道理なれ。ハルフシ人の身の。仇なりとかねては聞けど其夜の悲しさ。能うも今日迄は存へし。言譯ながらの物語聞いて恨を晴れてたべ。詞高うは言はれぬ事ながら。連の女中と申すは私の御主人。騷に取違へしとは思ひも寄らぬ。若君は猶大切と私がかき抱き。御病人の女中は親が手を引き。一度は旅籠屋の憂目は遁れ出でたれども。地追懸くる武士の大勢氣は樊噲と防いでも。何を言ふも老人の言甲斐なく討死し。若君は奪取られ氣も狂亂の樣に成つて。女中もほつたらかし。大事の若君取返さんと駈廻る。月なき夜半の葉隱尋ね廻る笹垣の蔭。サア爰にこそ若君はあれと。取上げて見たれば悲しやお首が最う無かつた。よく〳〵見れば若君でない。證據は此笈摺。詞騷の紛れに取違へしな。扨は若君のお命に恙なかりけりと。一度は安堵せしが。代りを戻さねば取返されぬ若君。もと〳〵へ取戻す種になる。人の大事の子を殺し。地何を代りに若君を取戻さう。悲しい事を仕やつたとそれを苦に病み。主君の女中も其座ではかなく成り給ひ。悲しみやら苦しみやら。私一人が背たら負うた身の因果。此笈摺をしるべにて尋ね參りしは。お果てなされたお子の事は諦めて。此方の若君を戻して下さるゝ樣の御願ひ。大事にかけてお世話なされたと物語聞くに付け。地面目ないやら悲しいやらあぢきなき身の上を。思ひやつてたべ親子御樣とスヱテかつぱと伏して泣きければ。地祖父は聲こそ立てねども淚を老に嚙交ぜて。咽につまれば咽せ返り身を浮くやうに泣きければ。フシ娘は心も。亂るゝばかり空しき笈摺手に取つて。やれ槌松よ母なるわ昨夜の夢にまざ〳〵と。詞前の父樣に抱かれて天王寺參り仕やると見たは日こそ多けれ父御の三年の祥月なり。地命日の今日の日に便聞く告でこそ有りつらん。夫とは知らぬ凡夫の淺ましさ。今日は連れて來るか明日は戾りやるかと待つてばかり居た物を。大きな災難に逢うて笈摺に書いた詮もない。是が何の二世安樂順禮も當にはならぬ。觀音樣も腑甲斐ない恨めしや懷しや。あはれ此事が夢で有つてくれかしと。顏に當て抱締めて。聲をばかりにフシ身もだえし前後。不覺に泣きゐたる。詞娘ほえまい。泣けば槌松が戾るか。世迷言いや二度坊主めに逢はれるか。地かねて愚痴なと祖父が叱るを如何聞いてと。

言ふ詞に縋り付き。それ〳〵斯う申す私も女子ぢやが。愚痴では済まぬ祖父様の仰しやる通り。如何程お歎きなされたとて。槌松様のお歸りなされるといふではなし。再び逢はるゝといふではなし。さつぱりと思召し諦めて。此方の若君をお戻しなさつて下つたら。ア、有難い忝いと悦ぶ私が心が何處へ往かう。槌松様の未來の爲には佛千體寺千軒。千部萬部の經陀羅尼。千僧萬僧の供養なされたより。女子黙れ。何の面の皮でがやがや頤叩く。耻を知れやい我が子を我が育つるには。少々の怪我させても不調法が有つても。親だけで済めども人の子にはな。義理も有り情も有る。主君の若君のとおいやるからは。それ知らぬまんざらの賤しい人でもなささうな。此おれは親代々舵柄を取つて。其日暮しの身なれども。お天道様が正直。大事にかけて置いた其方の子見せうか。いや見せまい。見やつたら目玉がでんぐりかへらうぞ。人の子をいたはるは。此方の子をいたはつて貰はふ代り。大抵大事にかけたと思ふかい。コリヤそんなら又なぜ。尋ねて來ぬと減らず口ぬかさうが。尋ねて往かうにも何も知るべの手がかりはなし。其方には笈摺に所書が有る。今日は連れて來て取換へるか。明日は連れて來て下さるか。逢つたら何と禮いはうと明けても



暮れても待つてばかり。コレ詞此襖を見をれ。かはいや槌松が下向に買へといふたを聞分けず。無理に買うて三井寺三界。持つて歩いて嬉しがつた。鬼の念佛に餓鬼外法殿の天窓へ。梯子さいて月代剃る大津繪。藤の花のお山も買ひをらず。外法殿の繪を買つたは。あの様に髭の白髪に成る迄。長生しをる瑞相。鬼の様に逹者で金持つて世界の人を。餓鬼の様に這ひ屈しをらう吉相ぢや。目出度い戻りをつて見をつたら。地嘸悦ばうと貼つて置いて待つたに。思へば梯子は外法天窓の下り坂。鬼の傍に這ひつくばふ。餓鬼に成つてお念佛で助かる様に成りをつたか。思へば思ひ廻す程身も世もあられぬ。能う大それた目にあはせたなあ。詞それになんぢや思諦めて若君を戻して下され。地町人でこそあれ孫が敵。首にして戻さうぞと突立ち上る。なう悲しやと取付くお筆を押退け反退け。納戸の障子さつと明くればこは如何に。松右衛門若君を小脇にかい込み刀ぼつ込み力士立。お筆驚きヤア此方様は。詞彼の樋口のコリヤ〳〵女。ムウ聞えた。最前歸りがけ下の樋の口で。ちらと見た女中よな。若君は身が手に入つて氣遣なし。言うてよければ身が名乘る。ナ合點か。必ず樋の口を樋口などと麁相言ふまいぞと。地めまぜて知らせば打ち點頭き。しづまる女聽かぬ祖父。詞松右衛門出來したりな。先刻にからのもやくや寢られはせまい聞いたで有らう。其方が爲にも子の敵。地其小死人寸斷々々に切刻んで女子に渡せ。詞イヤ左様は致すまい。何故致すまい。サア夫は。サア夫はとは。エヽ水臭い言はいでも知れた。汝が胤を分けぬ槌松が敵ぢやによつて致さぬな。其根性では祖父が儘にもさしやせまい。最う破れかぶれちや。地おれが言ふ様にせぬからは親でも子でもない。娘其處ら駈廻つて。若い者大勢呼んで來いと氣をせいたり。詞ヤレ待て女房人を集むる迄もなし。親父様如何有つても。槌松が敵此子を存分になさるゝか。くどい〳〵。ハア是非もなし。地此上は我名も語り仔細を明した上の事と。若君をお筆に抱かせ上座に直し。詞權四郎頭が高い。天地に轟く鳴雷の如く。お姿は見ずとも定めて音にも聞きつらん。是こそ朝日將軍。義仲公の御公達駒若君。地斯く申す我は樋口の次郎兼光よと。言ふに親子は荒肝とられフシ呆れ果てたるばかりなり。地樋口お筆に打向ひ。扨々女のかひ〴〵敷へ。跡々迄御先途を見屆くる神妙さ。山吹御前も思ひ寄らぬ御最期。御身が父の隼人もあへなく討死したりとな。力落し思ひやる。夫に付けてもかくて有る。樋口が身の上嘸不

㽽。詞若君の爲には祖伯父ながら。多田藏人行家といふ。無道人を誅伐せよとの御意を受け。河内國へ出陣の跡。鎌倉勢を引受け粟津の一戰。誤なき御身をやみやみと御生害遂げ給ひし。地我が君の御最期の鬱憤直に駈け入り。一軍とは存ぜしかど。思へば重き主君の仇。術を以て範頼義經を討ち取り。亡君に手向け奉らんと此家に入聟し。逆艪を言立て早梶原に近付き。詞義經が乘船の船頭は松右衛門と事極る。追付け本意を遂ぐる樣に成るに付け。此若君の御在所は何國。如何ならせ給ふと心苦しき折も折。地最前よりの物語障子越に聞くにつけ。見れば見る程面窶れ給へども。紛もなき駒若君扨は思ひ設けず願はずして。所こそあれ日こそあれ其夜一所に泊合せ。取換へられて助り給ふ若君は御運強く。殺されし槌松は樋口が假の子と呼ばれ。詞御身代りに立つたるは二心なき某が忠臣の存念天とする槌松。恩も有り義理も有る。詞餘の冥慮に相叶ひ。地血を分けぬ子が子と所外の子と取違へての敵ならば。其許に成つて。忠義を立てし其嬉しさ。スエテ何に御堪忍なされうが女房がよしにと申すと



類の有るべきぞ。地是も誰が蔭親父樣子も。其敵安穩に置くべきか。地親父樣のならぬ我を子となされ。親ならぬ我を親御歎き我も不便さは身にせまれども。詞

相手に取られぬ主君の若君。弓矢取る身の上には願うてもなき御身代り。祖父親の名を揚げた樋松。其名を揚げた元はと問へば。私を子となされし親父様の御厚恩。地千尋の海蘇命路の山。夫さへ御恩にはなか〳〵比べがたけれど。まだ其上に大恩ある主君の若君。孫の敵とて祖父様に切らされうか。我が手にかけて主殺しの悪名が取られうか。花は三芳野人は武士。末世に残る名こそ耻かしけれ。地御立腹の数々御歎きの段々。申上げう様はなけれども。親となり子となり夫婦となる其縁に。繋がるゝ定り事と思召し諦めて。若君の御先途を見届けまだ此上に私が。武士道を立てさせて下されば。生々世々の御厚恩聞分けてたべ親父様と。身を謙り詞を崇め忠義に凝つたる樋口が風情。兼平巴が頭をふまへ木曾に仕へし四天王。其随一の武士とフシ世に名を取りしも理なり。地権四郎はたと手を打つて。さうぢや。侍を子に持てばおれも侍。我が子の主人はおれが為にも御主人。ハハ、、サア〳〵聟殿其手上げられい。船霊冥利再び丸額になつて。炊きする法もあれ。恨も残らぬ悔もせぬ泣きもせぬ。娘精出して早う又樋松を産んで見せをれ。扨は御得心参りしか。ハア、地忝や嬉しやと互の心ほどけ合ひ。千里の灘の漂舟湊見付けし如くにてフシ悦び合ふこ



そ道理なり。地お筆嬉しく若君を樋口の次郎に手渡しし。其許に斯くておはすれば此お子に氣遣なし。浮沈は世の習ひ私が妹此津の國に勤め奉公すると聞く。夫が行方も尋ねたし大津で討たれし親の敵。討つて亡者へ手向けたし何やらかやら事繁き。私が身の上フシ早御暇と立上れば。詞左様聞いて留むるも無調法。エ、殘念ながら我等の身分。力にならうとも得申さぬ。御勝手にお出でなされ。聟殿ハテもぎだうな。せめて二三日足休め。地それ〳〵父様のおつしやる通り。斯う心が解合へば。初め何のかのと申した程。結句名殘あり。平にと留めてもとまらぬ氣。涙にくれ〳〵若君を賴まるゝの賴むのといふ仲かいの。本意を遂げて又御出でさらば〳〵と門送り。見送る袂見返る袖フシお筆は別れ出でて行く。詞扨々武家に育つた女中は格別。娘今から彼れ見習へよ。こりや爰に七面倒な笈摺が有る。何處へなりととつとと捨てゝしまへ。親父様それは餘りな思召し切り。せめて佛前へ直し香花を取り。逆様な事ながら。御回向なさつて取らさつしやれましよ。



侍の親に成つて未練なと人が笑ひはせまいか。何の誰が笑ひましよ。ハア、嬉しや〳〵。有り様は先刻にから左様したかつた。娘納戸の持佛へ火をともせと。地手に取上ぐる笈摺の。千年も生かさうと思

うたに。たつた三つで南無阿彌陀〳〵。槌松聖靈頓生菩提。聟殿ござれ娘も來いと。見れば見かはす顔と顔。フシ共に涙に暮の鐘オクリかう〳〵。とこそ聞えけれフシ早約束の。黄昏時又六を先に立て。富藏九郎作三人連門口から用捨なく。松右殿内にか。約束の通り參つたと高呼ばはり。ヲヽ待つて罷りをりますと身輕に拵へ飛んで出で。御大儀〳〵入つて烟草でも參らぬか。いや〳〵大事の急を御用。一精出して跡での烟草。しつぽりと先やりませうぞや。ヲヽともかくもと皆川岸に下り立つて。繋ける手船の渡海造オクリ纜。解き捨てフシ飛乘り〳〵。ナウ松右殿舟で妻子を養ひながら。耻しいがついに逆艪といふ事は。ヲヽ知らぬ筈知らぬ筈。何事も己次第教へてやる。サア九郎作と又六は。面梶取梶の艫艪を立てた。富藏是へお出なされ。おれがする様に艪を立てた。コレ皆の衆。此様に舳から艫へ向けて艪を立つる。是を逆艪といふわいなう。惣じて陸の戰は敵も味方も馬上の働き。駈けんと思へば駈け退かんと思へば退く事も。自由氣に見ゆれども舟といふ物は又格別。知つての通り汐につれ風に誘はれ。艪拍子立てゝ押す時は。行く事も早けれど。乘戻さんと思ふ時は。面梶取梶のフシ風波を考へ。取梶柄の手の中舟をくるりと本の如く。押廻してコハリ漕戻す。それさへ滿潮退汐にもちかうて。舟に過ある時は八萬奈落のナホス憂目を見フシいとし可愛。妻子に再び逢はれぬぢやないか。いかにも左様ぢや。其憂目を見まい爲の此逆艪。サア其艫の艪を押した〳〵。おつと心得やツしツしししやツしツしフシ三段計り漕出す。サア斯う舟を漕寄せて。迫ひつ巻つつ戰ふ時。謀に乘せらるゝか敵に新手が加はるか。スハ負軍と見る時は。舟押廻す迄もなくコレ此逆艪押立てゝ。富藏合點か合點ぢや〳〵やツしツし。しゝやツしフシ元の所へ漕戻す。際を窺ひ富藏九郎作權押取り。松右衛門が諸膝薙いで。打倒さ



んと右左よりはつしと打つ。心得たりと躍越え陸へひらりと飛上れば。三人續いて駈け上り。ヤア卑怯なり松右衛門。汝木曾が郎等樋口次郎兼光といふ事。梶原殿よく御存知なされ。逆艪の稽古に事寄せて。搦捕り連來れと我々に仰付けられた。尋常に腕廻すか打ちのめして繩かけうか。腕を廻せと罵つたり。樋口から〳〵と打笑ひ。推量に違はぬ上は何をかつゝまん。朝日將軍義仲の御内に於て四天王の隨一と呼ばれたる樋口の次郎兼光。汝等風情が搦捕らんとは。眞物付けたる一番碇蟻の引くに異らず。ならば手柄に搦めて見よ。ヤアしやらくさい廣言跡で言へと櫂振上げ。なぐり立つるを事ともせず。掻潜つて引奪り。先に進みし富藏が頭微塵に打碎けば。一人では敵はぬぞ二人かゝつて手に餘らば。打殺せと立別れはつしと打つ。さしつたりと開く身に櫂と櫂とは相打に。互の眉間あいたしこ蹈踏ふ際に突と入り。櫂引奪つて捨てたりける。組んで捕らんと無理無三取付く二人を引寄せ〳〵。力に任せえいうんと踏碎く天窓の皿。微塵に碎け死してげり。サア安からぬ若者の一大事何とせん。我が身を如何にと蹈踏ふ胸にひつしと響く鐘太鼓。數百人の喚く聲。こは如何に〳〵と驚く中に心付き。屈竟の物見櫓ごさんなれと駈上る門の松。顔にべつたり蜘の巣や。松葉の針でこかしこ。目ざすばかり



に晴からぬ茂る梢の朧月。四方をきつと見渡せば。北は海老江長柄の地東は川崎天滿村。南は津村三つの濱西は源氏の陣所／＼。人ならぬ所もなく天の焦せる篝の光。扨は樋口を洩すまじ取逃さじとの手配よな。さもあれ如何にと飛んで下り。女房ども親父様／＼と呼立つる。イエ父様は納戸の壁を毀つて。何方へやら行かしやんしたヤア壁毀つてうせたとは。ムウ讀めた訴人にうせたな。財寶を貪つて訴人する。豫ての氣質ではなけれども。祖松が仇を忘れかね夫でうせたか。ハア。樋口程の武士か。船靈の誓言に氣を奪はれ心を緩し。飼犬に手をくはれたエヽ口惜しや無念やと。拳を握り齒を鳴ししをれぬ眼に泣く涙。磨き立てたる鏡の面水を灑ぐが如くなり。お腹立は理ながら。父様に限つてよもや左様ではあるまいと。言宥むる折こそあれ。組の捕手の腰明。武威輝す高提燈。畠山の庄司重忠。權四郎に案内させて見えければ。娘はそれと見。コレ父様恨めしいと言はせもあへず。訴人の恨か言ふな／＼。おれが訴人せいでも。松右衛門を樋口次郎と



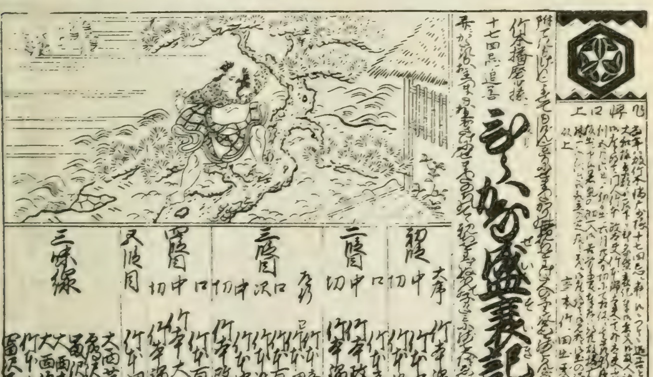
は。梶原殿がよく御存じなされて。富藏や九郎作に。搦捕らさうとなされたぢやないか。そればかりぢやない。四方八方取圍んで樋口が命は籠の鳥。なんぼ助けうと思うても助からぬ。おれが秩父様へ訴人

したは槌松めが事で。サア其槌松の事を言うて松右衛門殿が腹立てゝ。何の腹立てる事が有る。親子といふ名につながれて。地孫めが親と一所に。彼方者に成りをらうかと悲しさに。詞あれは樋口が子ではござりませぬ。死んだ前の入聟の。ナ松右衛門が子でナ合點がいたか。ほんの親子でござらぬからは。訴人致したかはり孫めが命。お助けなされ下されと願うたれば。段々聞し召し分けられ。天下晴れて孫めが命はヲヽ慮外ながら。此祖父が助けた。それに何ぢや樋口が腹立てた。ヤイ汝が子でもない主君でもない。若君でもない大事の〳〵。おれが孫を一所に殺して侍が立つか。若い其大きな眼にも。祖父が碎く心の數々は見えまいぞ。恨めしいと吐す汝等が。結句祖父は恨めしいと氣を急上げて曇り聲。よう訴人なされた有難しとも過分とも。言はぬ詞は言ふ百倍フシ嬉し涙にくれけるが。地ずつと立つて重忠の傍近く。天晴御邊が梶原ならば太刀の目釘の續かん程。切死に死なんずれども。粟津の軍妹巴が身の上迄。志ありしと聞く重忠殿。情に刄向ふ刄はなし。腹十文字に掻切つて首を御邊に參らすと。言はせも果てずヤア樋口。詞死首を取つて手柄にする重忠ならず。とても敵はぬと覺悟あらば。尋常に繩かゝられよ。いや〳〵〳〵運盡きて腹切るは勇士の習ひ。繩かゝれとは此樋口に。生恥かゝせん結構な。仁義ある重忠の詞とも覺えず。イヤこれ樋口。木曾殿の御内に四天王の隨一と呼ばれ。亡者の仇を報はん爲。地權四郎が聟と成つて弓矢に勝る艪權を取つて。大將の舟を覆し鏖にせんず謀。恐ろしし頼もしし。詞晋の豫讓は主の智伯が仇を報ぜんと。御邊が如く姿を窶し。敵襄子を狙ふ其志を深く感じ。着たる所の。服を脱いで豫讓に與へ。其衣を切らせて彼が忠義を立てさせしは。地敵ながらも襄子が情。木曾殿叛逆ならざる事は。書置に顯はれ御最期今更悔むに效なし。詞主人に科なき樋口次郎。全く恥を與ふるに非ず。忠臣武勇を惜み給ふ。大將義經の心を察し。地重忠が繩かくるとつつと寄つて。樋口が肘捻上ぐれば莞爾と笑ひ。詞關八州に隱れなき。勇力の重忠殿。力づくには劣らぬ樋口。取られし此腕もぎ放すは易けれど。智仁兼備の力には及びもない事相手にならず。地ともかくも計らはれよと弓手の腕を押廻せば。詞ヤア愚か〳〵忠義厚き樋口殿の力に重忠が及ばんや。大手の大將範賴公搦手の大將義經公。兩大將の御仁政。文武二つの力を以て縛む此繩ぞと。地かくるもかゝるも勇者と勇者。仁義にからむ高手小手繩付を引立てさせ。詞コリヤ女。樋口殿

の血こそ分けね。槌松とやらんは大切な子でないか。地暇乞をと有りければ。およしは泣く〳〵納戸に臥したる子を抱上け。コレなう暫し假初も親子と言ひし此世の別れ。コレ顔見せてと差寄すれば。詞ハツア槌松に暇乞とは。四相を悟る重忠の御情。祖父の願を聞分け給ひ助け置かるゝ忝なさ。誰彼の情も忘れぬ。コレ槌松。父と言はずに暇乞。地樋口々々樋口さらばと稚子の。誰敎へねど呼子鳥。我は名殘も鴛鴦の。番離るゝ憂き思ひ スヱテやらん〳〵と縋り付く。詞娘よ泣えな。何ぼやらん〳〵と商賣の舟唄で留めても留らぬア、悲しや。地假へ死んでも地獄へやらん。極樂へやる救世の舟唄。思切つて遣つて退けう。舟唄汐の滿干に此子が出來たとな。孫が身の上案じるな。祖父が。預りのんえい〳〵汝が。代りに大事に育てゝえいよほん。ほゝんほ 地眞に何たる因果ぞと正體もなくどうど伏し。地涙に咽ぶ腰折松餘所の千年は知らねども。我が身に辛き有爲無常。老は止り若きは逝く。世は倒の逆艪の松と朽ちぬ。其名を福島に枝葉を。今に殘しける。

第四

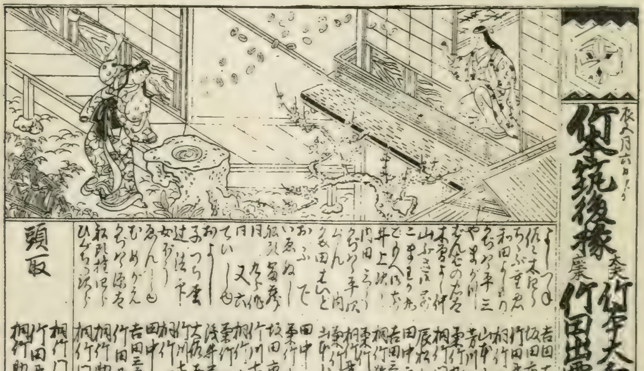
地山遠うして雲旅人の跡を埋む。爰も名に負ふ香島の里西國の往還とて。フシ賤が家居も賑へり。詞今日は天道大日如來。未申の年は一代の守本尊と。地錫杖振立て家々に立つ辻法印。詞謹上さんぐ再拜さいへいと敬つて白す伊勢に神明天照皇太



寶暦十年竹本

神宮と申し奉るは。御本地は大日如來御眞言にはおんあびりた。ていぜいから斯くの如く唱へ奉れば。ナホス詞ヲヽ手の隙がない通らしやれ。山伏の內へ齋料乞ふは。山伏の友喰と 地言ひつゝ女房表に出で。詞コレ嗜ましやれ此方の人。是は扨うかうか來たればつい內ぢや。地ぎえん直しに錫杖を振立て〱。歌詞今日の天道大日樣も聞えませぬ。餘り今日は儲がなさに固は未申の年。一代守るは大きな嘘。分限菩薩得大勢至の金持ばかりを守つて。我等が內には不動樣の火焔の樣な火が降り。福一萬とは名ばかり。下用櫃には虛空藏菩薩。米が無いとせがまれ。天窓の皿は八幡寶藏。破鍋にとぢ蓋の女夫が口を過ぎ兼ね。何と千手觀世音。文殊菩薩の智惠借つて少と小錢を儲けねば。なかなか身代たゝりん〱。たゞるをなすなよこちの女房敬つて白すと フシ喋りける。

詞コレ法印殿。今日は儲が有つたやら徒口をきかしやるの。草臥休に出端なとこよさうと。茶釜の下へ差燒べる。地其日の煙もかつかつの。フシ暮しを祈る術もなし。ヘルフシ世に憂き事の多き中。お筆は若君駒若殿を樋口次郎が手に渡し。妹千鳥に廻逢ひ親の敵を狙はんと。上福島より彼方此方と尋ね佗び。香島の里に着きにける。地妹が身の上聞く爲には幸ひの山伏殿。ちと御免なりませと內に入り。詞私は旅の者 占がお賴み申したい。ヲヽようこそと 地女房仕事押潰り。薄くと一服こしめせと。詞のしほ



座興行番附

に差出せば。地しかつべらしく法印。愚俗が占は秘傳の投算。或は失物走人。夢合せ夢判じ相場の高下。相性墨色薪の雜書釜の鳴り。犬の長鳴き鷄の宵鳴き鳥の行水。親父の夜歩。息子の看經する迄も。奇妙な見通し。錢次第とぞ勸めける。地アイ私はたつた一人の兄弟を尋ぬる者。つい廻り逢ふ手がかりをトつて下さりませ。詞フウ夫は餘程むづかしいが。地端的にトひませうと風呂敷より算木取出し。詞コレ信を取りませうぞ。ついぴりがけする樣に投げた分ではいかぬぞや。地成程々々お前の樣な見通しに。お目にかゝるは仕合と算木投ぐれば。詞ヲヽよしよしなに年は何歳ぢや。アイ十七八でもござりませうか。成程十七八と見える。此方の弟御ぢやの。いゑ〳〵妹。ムヽ成程算木の面に女と見える。何年程逢はしやれぬ。五六年も逢ひませぬ。成程五六年も逢はぬと見える。此方の尋ぬる心當は何所ぢや。アイ人の噂には神崎に勤奉公。ヲヽ勤とも〳〵コレ見やしやれ。占の面には籠の中の鳥の如しとあれば。廓の外へ地一足にても踏みも習はぬと。詞古い書物に記した上は。勤の身は籠の中の鳥。妹御は神崎に傾城奉公に疑ひない。何ときつい見通しか。イエ〳〵そりや私が口うつしを仰有るばかり。廓の中でも何處らに居ようと。方角さして下さりませ。ハテ滅相な。夫が見える程ならば山伏はしませぬ。相場事にかゝるわいの。ナア嚊左樣ぢやないか。此在はづれを眞直に行けば神崎。逗留して尋ねさつしやれ。ハア地夫なれば是非も內儀に包錢。たとへのふしに陰陽師と。辻風防ぐ笠傾け。フシお筆は彼所へ急ぎ行く。詞ヤ女房ども此お客は何所へぢや。イヤ何方へとの先も言はず今朝からお留守。コリヤ惡い病が付いたわい。錢なしの手てんごぢやの。ハテ麁相言はしやんな。神崎のお傾城梅が枝樣は得意旦那。其誼で誰あらう。地梶原樣の御惣領源太樣を預り。米薪味噌鹽迄梅か枝樣から仕送り。お歷々の彼方がそんな事何のいの。詞イヤさうでない。貧はしたしちやんは無し。惡氣の付くまい物でもないとフシ噂半へ。立歸る地梶原源太景季勘當の身の寄せ所。辻法印にかくまはれ見る影もなき素紙子一點。門口から笠取つてやれ〳〵方々駈歩き。存じの外草臥れた法印嘸待つたであらう。詞何の待ちましよ。急な事で金が入る才覺賴むと。人にばかり世話やかせ何所に入つてござました。されば〳〵其才覺に身も歩いた。急な用が出來て來て梅が枝に逢はねばならぬ。と言うてから紙子の風體。此形ではどうも行かれぬ。アノ此頃迄召しましたお小袖や羽織はえ。女房いふな夫は此法印

が頼まれて。七難即滅と曲げて仕舞うた。夫やりてに紙花の借錢なしなされたわいお前もいはれぬ贅張らずと傾城買には紙子が常跡。イヤさうでない今迄大夫が情にて。地見苦しい尾も見せず此形ではいかれぬ。明日へとも延されぬ其譯を聞いてたも。詞義經公には一の谷の平家を攻めんと。明日未明に御陣立源太も此度高名せでは。父に再び對面ならず發足と定めしが。彼の產衣の鎧兜。梅が枝に預置き夫が欲しさに右の譯したが思案も有れば有る物。今朝より尼が崎大物の浦を駈廻り。大將義經公一の谷へ御出陣。京都より來る兵糧米。馬の飼料遲なはれば。米麥大豆の差別なく今日中に香島の里。辻法印が方へ持參せよ。則ち武藏坊辨慶殿御判居りし證文と引換へる。軍終らば一倍增で御返濟と百姓どもをたらせしが。辨慶様のお目にかゝり其上で御用に立つと。

追付け爰へ皆來をる。爰が氣の毒。何とぞ急に辨慶を拵へずば成るまい差詰め頼むは天窓役法印辨慶に成つてたも。ハレやくたいもない。辨慶は兵愚僧は弱者。七尺豐の大の法師と。五尺に足らぬちつくり法印。似ても似付かぬお赦しなされ。イヤこれ足を爪立つれば。四寸や五寸はくろめらるゝ。其上をまだ繼足して高足駄で背はくろめる。辨慶が身の所作は仁王の形でして居りや好い。あれ〳〵向ふへ百姓ども隙取つては氣の毒と嫌がる法印むりやりにフシ連れて一間へ入りにける。地百姓どもはどや〳〵と叺藁畚引き擔げ。詞何と太郎兵。彼のお山伏は是かいの。地ヲ、聞及ぶ辻法印爰ぢや〳〵と內に入る。詞お方様これの內に辨慶様がござるげな。大物の百姓ども お馬の飼料持つて來たと。御家來衆に言うて下され。地成程々々辨慶様もお待兼ね。どりや其通

り　フシ申上げんと立つて行く。地景季は法印を辨慶に拵へ立て。一間を立出でヤア百姓ども。約束違へず大儀々々。詞先程も言聞かす通り。源氏の大將判官殿の御用に立つは汝等が身の大慶軍終らば一倍增にて返さるゝ。御判頂戴するは有難いか。ハア、有難うはござれども。只證文より手形より。辨慶様にお目見え致し。お直の詞下さるゝが御判よりも慥な。そりや百姓等が願に任せ。地只今是へと反古張の明障子。さつと開き立ち出づる辻法印。江戸往生ずくめの辨慶出立で。肩から裾迄束の熨斗の一枚形。白上に紺染の大夜着。詞女房が一張羅帶。引つしごいて蜻蛉結。地瘦せたる頰に鍋炭塗り。所斑の武藏坊。地長刀代りの金剛杖。竹簀子を踏轟かす木履の繼足。悽じう見られんとふんばたかつたる其有樣。更にフシ强うは見えざりける。地源太は態と兩手を

つき。詞大物の百姓どもお目見えと披露して。こりや〳〵汝等。只今下にお坐りなさる。其處ら邊へ地響せう心得て驚くな。ハア〳〵はつと恐れ敬ひためつすがめつ。地見られて術なき辻法印。フシ見せ物に出た心地なり。詞百姓ども口々に。何と聞及うだより手先なども青白らけ。尩弱な生付き。お脊はきよいと高けれど。體に似合ぬ頭が小い振賓の飯蛸で天窓に身の無い辨慶樣。地あれでも兵樣かいのと。目引き袖引き　フシ呟けば。詞扨は旦那のお顔の窶で。誠の辨慶樣でないと思ふか都から段々打續く戰場のお勞れ。殊に此間はお風を召しておしつらひ。氣むづかしさに態と物もおつしやれぬ。ア、御病氣でなくば旦那の力が見せたいな。アレ見よあの右の肘に百人力。左の肘に百人力。夫程力持つ者が辨慶樣で有るまいか。あはれやれ米一粒借すまいというて見よ。お腹が立つと惣身の力がぶつぶつと涌出で。千人でも萬人でも。風に木の葉鬼に煎餅。めり〳〵びしやり粉微塵と。地強い揃へを言立つれば山伏も圖に乘つて。強う見せんと拳を握り臂を張り。力めば額に黒汗流れ。腕白な手習子が　フシ晝上見る如くなり。地百姓どもは頭を下げ。詞其樣にお強い事を聞く上はなう皆の衆。何と思はしやる。ハテ辨慶樣に極つた。とてものことの念晴しに今のを問うて見さつしやれ。ヲ、それそれ。私共が在所の物識の話に。辨慶樣は書寫にござつて。御紋は輪鋒と聞きましたが。見れば御紋は束熨斗。如何した事と問ひかけられ。源太もほうど行詰り。イヤ何者ぢやわい。僅な兵粮米を其方達に無心おつしやる風體。世に連れて輪鋒の御紋も。貧乏に變つたと眞顏に　フシなつて取りかくれば。ア、お笑止や何ぼ力が強うても。錢金には楯づかれぬ。地内證聞いておいとしいと藁畚叺米俵。面々に持つて出でおらは白米一斗五升。大豆八升麥稗小豆。濡手で粟の掴み取り。源太は硯引寄せ手取早く證文認め。書判しつかと末の世に至りても。大物の浦に止りし武藏坊辨慶が。フシ借證文とは是とかや。地源太は名宛に引合せ一札渡せば受取つて。畢竟是には及ばねども面々の念の爲。軍終らば一倍增をお忘れなされて下さるな。御暇申すと打連立ち。川中ではがれた尼が崎　フシ大物さして立歸る　地女房は走り出で扨もひあいな瞞し樣。詞中程からほぐれが來てわしや危ぶ〳〵思うて居た。一向に此法印は始終夢中で遣つ付けたと。地夜着を脱捨て油汗押拭ひ。詞ア、仕畢せたと思うたればどつかりと氣草臥。ヲ、道理々々。首尾能くいたも其方が蔭。源太は此雜穀物金の代り

に向ふへ束ね。身の廻りを受戻し片時も廓へ急ぎたし。地貴に御尤もさりながら持ちも習はぬ肩仕事。詞凡そ是でも一石餘りお一人ではいかぬ〳〵時の用には法印も片端を仕らん。若しも是にて不足ならば辨慶が脱殼の。地夜着も序に曲けませうと。藥香臥指荷ひ。一足往つては肩を換へ二足往ては息をつぎ。香島の里に馬は有れど。君を思へば徒歩跣足。人は戀ともしらけのよねに浮身を。やつすぞ三重へ世なりけり。ヘルフシ爰も名高き。難波津に。戀の舟着數々の多かる中に取分けてオクリ酒酌みかはす神崎の里の色宿千年屋は。フシ客に絶間もなかりける地殊に今宵は喃のお客と書院座敷のはき掃除。亭主が袴中居が揃の紅も。園生に植ゑて隱なき。大名客御入と。表の方賑はしく人目を忍ぶ旅乘物。御供廻も輕々と地に鼻付けて主が答拜。御出を待ちや焦れしと追從輕薄切聲の。切戸口より直に舁込む奥座敷。梅が枝様へ人走らせそれお菓子煙草盆。釜をたぎらす音羽山。馳走フシ振とぞ見えにける。唄雪や霙や。花ちる嵐。可愛男に。僞りなくば。本の心で。淡路島千鳥も今は此里へ。身をば賣られてナホスフシやり梅の。地名も梅が枝の突出には名木並ぶ方もなく。フシ千年が許に入來り。地亭主立出で。詞エ、遲い〳〵梅が枝様。今日のお客は東國のさるお大名。初對面から身請の相談。地箱入の駿河小判ずつしりとしたお捌き。サア〳〵奥へと言ひければ。詞東國とおしやんす其客の年ばひ。二十ばかりででつくりと。色の黒い髭男かえ。けもない事〳〵。地夫で心が落付いた。わたしも爰に待合せ逢はねばならぬ人が有る。詞おつと合點そこは我等が請込み。禿衆で座敷をくろめん。地お前の御用は彼の深まの。源太様に間の襖を引立てこそ入りにける。地此姉様は何故遲い。杉を迎にやつたるに早う來はなされいで。心せかれやア、辛氣と フシ待つに程なく。姉お筆千鳥に逢ふが嬉しさに。足もいそ〳〵やりてが案内。梅が枝見るよりなう待ちかねた姉様。詞先に道で逢ひし時。言ひたい事の數々も人目を遠慮。ヲ、そりや姉も同じ事。何からかから言はうやら能う健で居てたもつた。お前も御無事で嬉しい。久々便も聞きませぬが父様もお健にあろ矢張桂の里にお住みなされてござるかえ。地御持病は起らぬかと。問掛けられてお筆は涙。詞また父様の事知らずか。知らぬかとは氣遣如何ぞいな。アノ父様はお果てなされたわいなう。地エ、はつとばかりに梅が枝は。暫し。フシ涙にくれけるが。地アア思へば私は不孝者。父様は息才な健で御座ると思ふから。我身の戀に跡先忘れ

末々面倒見居けうと。約束せしお人が不慮に勘當受け給ふ。男の爲に此勤め。身の淫奔に親の事思はなんだ罰が當つて。命日忌日が何時ぢややら知らずに暮した不孝の罪。姉様こらへて。父様のお位牌へ詫言をして下さんせとわつと叫べばヲヽ悔みは道理。其上にまだ悲しきは。お煩でも有る事か刄にかゝり果て給ふ。其様子は自らが木曾殿に宮仕へ。假初ならぬ御主人の御臺若君諸共父の方にかくまひしが。桂の里にも居る事叶はず。都を出でて大津の泊。追手の者が寐込へ切込み暗がり紛れうろたへて。相宿の順禮の子と若君を取違へた其麁相が御運の强さ。先の子は殺され。若君は恙なく慥な人に渡せしが。悲しいは母御様其場でお果て。隼人様もあへなき最期。親の敵が討ちたさに其方の行方。知邊の人に聞いて尋ねし此神崎。巡り逢うたは姉妹の

縁の深さ。女でこそ有らうずとも。姉妹が心を合せ本望遂げう。姉が力に成つてたも。頼むは妹ばかりぞと語るも聞くも涙なる。なう姉様。悲しい中にも敵を討つが梅が枝が父様への言譯。其マア敵は誰でござんすえ。アヽ聲が高い壁に耳。諸萬人の入込む色里敵に洩れては一大事と。話の半へ亭主駈け出で。サア梅が枝様早う／＼。お前の脊丈金積んで身請の相談。座敷は金で眩い。其處を不勤になさるゝは如何した心底。是非にお供と手を取れば。アヽもう其處へ行くと言ふに聞分ない。コレ姉様今は何も話されぬ。後に必ず來て下さんせ。成程々々今話した事是非に今宵は延されず。其用意して待つて居や。後に／＼と約束堅め　お筆は旅宿へ立歸る。サア太夫様のお出の様子。お座敷へ注進と　きほひかゝつて走り行く。しやほ

んに何ぢやの。此梅が枝が心も知らず。夫は身請々々と取持顔。いやらしい。さうと源太様暮方からお越しなされと。香島迄文やつたになぜ遲い事ぢや迄。早う逢ひたや顔見たや逢はゞ何うして斯うしてと烟草引寄せ薫らする　胸の。思ひは日に千度。夜毎々々に通ひ來る梶原源太景季。心を盡せし身の廻り大盡小袖長羽織。法祿頭巾紫の色に引かるゝ揚屋町。千年が奥を窺へば。おれを待つのか疊算丁度能い首尾幸ひと。ずつと通れば梅が枝は。炬燵にとんと身をそむけ。煙くらべん。淺間山と反らさぬ顔で吹く烟管。コレ歌どころぢやない來たわいの。何が機嫌に入らぬやらめつきりと持たせ振り。大名客の襟に付き御勿體でえすか。我等が様な浪人の黴た衿にはつかれまいと　ずんど立つを待たしやんせ。座敷ばかりを勤める筈で。

今日爰へ貰はれたは文で知らせて合點ぢやないかえ。地色も戀も打越して心底づくの二人が仲。口說所ぢやござんすまい。お前と一體斯う成つたは並大抵の事かいな。わしも言ふ事たんと有ると。袖から袖へ手を入れてじつと引寄せ引きしめて。遲う來ながら其いぶり。憎い男と目に睨き　フシ涙ぞ戀の習はしなり。詞もうよい泣きやんな疑ひ晴れた。扨其方に言ふ事有り。今夜七つの出汐に父を初め弟の平次景高一の谷へ出陣。某も能き時節。軍勢に紛れ下るに付け。其方に預けた產衣の鎧。請取りに來たわいのと。地聞くにはつと。當惑の。色目見て取る景季。詞いや〳〵氣遣ひ仕やるな長う別れる事でもなし。是非今度は行かねばならず。お事も豫て知る通り。もと某は賴朝卿の烏帽子子。それを功に勘當の詫せぬかと。父の思はく世の人口。此度平家と戰はゞ分捕高名譽を顯はし。地今の難儀を昔語悅んでたも梅が枝と。フシ何心なく語るにぞ。地思ひ設けし事ながら我にはつと胸痛み其鎧の事聞くと心の苦しみ。詞して其方が何とした。私が方には疾うからない。ヤア〳〵と地源太も聞くより狂氣の如く身を揉みあせり。詞樣子が有らう仔細を語れと氣をいらてば。ソレ其樣に浮世の事に疎いのが大名の懷子。浪人の中苦勞させまいと此神崎へ身を賣り。突出しの其日よりお前を客の名充にして。皆わたしが身揚。縱へ世に有る人でも廓の金にはつまるも習ひ。まして勤の身なれば金のなる木は有るまいし。生える土は　フシ持つまいし。色お主の勘當赦る迄といつもの揚屋に呑込ませ積り〳〵し揚代三百兩の金の代りに。其鎧はやつたわいな。詞扨は其金がなければ。鎧は源太が手に入らぬか。地ハアはつとばかりに當惑し。スヱテ暫し詞もなかりしが。詞元此鎧は賴朝卿に拜領。家にも身にも代へざるを地しなしたり殘念や。今は悔みて返らずと胸押寬げ刀を取れば。梅が枝あわて押しとゞめこりやまあどう狼狽てぢや。詞死ないでも大事ない。イヤイヤ今夜の出陣を外れ。一生埋木と成りのたれ死せんより。只今切腹そこ放せ。サアノ〵其鎧さへ手に入ればお前の望は叶ふでないか。シテ其金は。如何して調へると御不審も立たう。そこがお前と談合づく。奥の客に身を任せ騙しなば。二百兩や三百兩の金は自由。扨はおれ故身を汚すか。夫の難儀にや換へられぬ。地不便の者の心やな。たとへ死んでも忘れぬと涙ぐめば。詞ア、女房に何の禮お前が爰にござつては客をたらすに心が置かれる。ヲ、尤も〳〵後に來うぞや首尾よう仕や。が氣を揉んで持病の痞。借錢の代

りに。地癪おこらしてたもんなと。フシ別れてこそは歸りけれ。ヘルフシ後見送りて梅が枝はスヱテ暫し涙にくれけるが。詞必ず氣遣なさるゝな。エヽ。わたしが心當の有るというたは皆嘘。お前の命が助けたいばつかりぢやわいな。何の好もない奥の客が。三百兩の金くれうぞ。今宵中に調へねば鎧も戻らず。源太様の望も叶はず。金ならたつた三百兩で。可愛い男を殺すか。ア、金がほしいなア三下り歌二八十六で。ふみ。付けられて。合二九十八でつい。其心。ギン四五の二十なら。一期に一度。わしや帯とかぬ。エヽ詞なんぢやの。人の心も知らず面白さうに謡ひくつさる。あの歌を聞くに付けても。源太様に馴染め館を立退き。君傾城に成下つても一度客に帯解かず。一日なりと夫婦にならうと。思ひ思はれた女房を振捨て。此度の軍に誉を取り。勘當が赦されたいと思召す男の心はぶんな物ぢや。何かに付けて女子程思ひ切りのない物はない。男故なら勤するも厭はぬど。又何の様な悲しい目を見ようも知れぬ。夫も金故。何をいうても三百兩の金がほしい歌わしや帯解かぬ。合廿なら四五の。合四五の廿なら。一期に一度。わしや帯解かぬ。返らぬ昔。戀忍ぶ。詞ほんに夫よ。あの客殺して身請の金盗う。イヤ／＼。若し仕損じ殺されては父様の敵も討たれず。ア、どうせうな。最早日本國に梅が枝が祈る神も佛も無いかハア、ヲ、それよ夫故には石と成つたる女も有り。我は賤しき流の身なれど一念は誰に劣らん。巖となれる手水鉢。水掬び上げ口嗽ぎ。伏拜み／＼人に。知らせじ聞かせじと柄杓押取り。詞傳へ聞く無間の鐘を撞けば。有徳自在心の儘。江戸是より小夜の中山へ遙の道は隔たれど。思詰めたる我が念力。此手水鉢を鐘となぞらへ。ノリ詞石にもせよ。金にもせよ志す所は無間の鐘。此世は蛭に責められ未來永々無間墮獄の業を受くとも。だんない／＼大事ない。海川に廢れる金。一つ所へ寄せ給へ無間の鐘と觀念す下コヘリ面色忽ち紅梅の。花はちり／＼心も髪も逆立上り。柄杓持つ手も身も顫はれナホス既に打たんと振上ぐる。二階の障子の内よりも。詞其金爰にと三百兩地ばらり／＼と投出す。深山颪に山吹の花吹散す三重へ如くにて。地爰に三兩。かしこに五兩。是は夢か現かや。どなたか知らぬが此御恩死んでも忘れぬ忘れぬと。嬉しいやら怖いやら拾ひ集むるフシ心もそゞろ。袖引斷り三百兩。包むに餘る悦び涙。鎧代りの此金と。押戴き押戴き。勇みいさんで三重走り行く。地梶原源太景季首尾か不首尾の二筋を。只一筋に揚屋町奥は騒ぎの最中。禿がな出よ

かしと奥の吉左右聞く迄は。暫し待つ間も千年屋の。フシ首尾を窺ふ姉お筆。今宵の中姉妹一所に敵討たんと思込み小褄凛凛しく鉢巻しめ梅が枝に逢ふ迄はと。飛石傳ひ細路次の間の切戸に身を潜め。フシ今や出づると待居たる。地走り躓き梅が枝は產衣の鎧を持たせ。息を切つて駈戻り彼處にどつかと鎧櫃。おろせばとつかは立歸る景季見るより飛立つばかり。ヤレ出かしたいかい働き源太が武運に盡きざるも。弓矢神の御加護と押戴き。出陣の刻限七つには間も有るまじ。是より直に出陣目出たう歸り對面せう。無事で勤めやさらばやと　フシ立つを引留め。地奥の客の情にて金を調へ。鎧を取ると暇乞もそこ〳〵。せめて暫しが中なりと　フシ私にたんのうさせたがよい。地殊に又お前の耳へ入れねばならぬ事が有る。マア下に居て聞いて下んせ。詞今日久し振で姉様にお目にかゝり。話を聞けば父様は大津にて。切られてお果てなされたといな。其敵討相談に姉様も見える筈と。地聞いて源太もはつと驚き。詞シテ〳〵其敵の名は何と〳〵。ヲヽ其敵の假名實名わらはが言うて聞かさうと。地めつきり切戸引ぱづしつつと入る姉お筆。なう好い所へ姉様幸ひ彼方とお近付。詞妹だまりや。近付にならないでも名は能う聞いた其方の夫。サア〳〵梅が枝。源太殿に暇取つた。エヽえゝとは如何ぢや。親隼人殿を討つたる敵の子には添はれまい。そんなりや父様討つたのは。ハテ知れた事梶原平三。アノ景時様かえ。スエテハアはつとばかりに詞もなし。詞其又父景時殿を親の敵といふ慥な證跡言へ聞かう。ヲヽ有るとも〳〵木曾殿の御臺若君御供申し。大津の宿にて梶原が討たせしは姉妹の者が父。鎌田の隼人清次殿。イヤ驚くまい源太殿。知らぬ顔はしら〴〵しい後暗いさもしい。サア〳〵妹緣切つたと　フシいへど答もないじやくり。地扱は互の戀にからまれ親を夫に見かへるのか。イエさうではなけれども因果な緣を結び初め。今更何と成る物と　スエテかつぱと伏して泣居たる。地景季も突立上り。詞父を敵と狙ふ汝等。其方から望まいでも。こつちから暇くれた。出くはしたを幸ひ此場で返討にすべきを見遁すは今迄の誼。地女の業には討たれぬ敵と觀念し尼法師にも様を變へ親隼人が跡弔へと　フシ詞鋭に言放せば。地お筆はくわつとせき上げ。身不肖なれども鎌田が娘腰拔と思うてか。但し女童の刀で景時は切れまいかの。サア切れぬか切れるか臆悔見せう源太殿。イヤ相手にならぬは後れたかと。地詰寄せ〳〵打鳴す鍔音。七つの鐘の胸先に　フシ響渡れば。地南無三寶早や

出陣の刻限と。鎧提け立上るをどこへどこへ。我々が付狙ふをこなたに知られた上からは。輙うは討たれまじ。景時の代りに不足なれども親子一體。敵の片割一寸も動かさぬと詰寄れば梅が枝も一人は姉一人は夫。彼方此方を思ひやりうろ〳〵と立つたる所に。何處よりとも白羽の矢。狙ひのつぼはお筆が胸板。はつしと當ればかつぱと伏す。なう悲しやとあわて立寄る梅が枝が。腰の番を二の矢に射られはつとばかり驚きながら。姉妹互に顔見合せ。姉様に過ないか。そなたに怪我はなかつたか。是はと驚き取上げ見れば矢の根もなき二本の簳。何者の所爲ぞと奥を見入つて立つたる所に。其射人爰にと一間の障子さつと開き。滋籐の弓携へしづ〳〵と立出づるは。梶原平三景時が妻の延壽。源太見るよりヤア母人面目もなき御對面と疊に平伏し蹲る。母は我が子に目もかけず。珍らしい千鳥。以前は自らが召使の腰元。今は名も變つて梅が枝といふ流の身。そなたには此母が段々禮をいはねばならず。そも鎌倉を立退いてより傾城に身を沈め。源太を育む志を聞くより。嫁に勤はさせられず遙々と難波に上り。そなたを身請せんため此揚屋へ來て様子を聞けは。折しも源太は勘當の詫の綱にもと。一の谷へ出陣。思ひも寄らず産衣の鎧を揚錢の代りに取られ既に我が子も腹を切るべき。難儀と成るを身に引受け。世の雜談に言ひふらせし無間の鐘を撞いて成りとも。源太が望を叶へたいと我が身を捨てゝ勞る心底。母は障子のあちらにて。殘らず聞いて居たわいの。我が子に心を盡す梅が枝。何と無間に沈められう。蛭の地獄へ落されう最前金を三百兩やつたるも此延壽。勘當の子に貢ぐ金。母が面は合されず。顔も名も包みしが。心は殘らず打明かすと語りも敢ず泣居たる。扨は奥のお客といふも奥様お前で有つたかと。驚く妹を突退けお筆は傍へつつと寄り。夫程恩有る梅が枝に。何で矢を射さしやつた。察する所こなた衆親子が言合せ。返討にする所存で射留めたと思はしやろが。簳ばかりで射られしは姉妹が運の强さ。コレ天道様が明らかなによつて。非道の劍は身に立たぬ。何と非道で有るまいか。イヤ非道にもせよ道理にもせよ現在夫の景時殿を付狙ふ二人をば。即座に射留めしは自らが手柄。夫への忠節武士の妻に成つた役。鏃を拔いて簳ばかり射かけしは。梅が枝への恩返し。延壽が心底見られよと。胸押寛げ二本の鏃突立てんとする所を。源太駈寄り何故の御自害と御手にすがり押止

む。詞何故とはそちが可愛さ景時殿が大切さ。なうお筆姉妹の衆。妾が夫子を思ふに付け。親を討たれ無念に有らう口惜しからう。親の代に景季を討たうとは尤も。フシさりながら。地鎌田殿を討ちたるは。意趣切闇打の業でもなく。詞木曾の落人山吹親子が連れて退いたは。鎌田にもせよ。誰にもせよ。見付け次第に討取つたるは鎌倉殿への忠節。番場の忠太が手にかけしは。地景時殿へ又忠節。草葉の陰の隼人殿よも恨とも思すまじ。妾をよう聞分け延壽が自害で敵討を濟め。一刻も早う源太を出陣さして下されい。今度の軍に手柄をして。宇治川の恥辱を雪がねば最早一生景季は。勘當の身で朽果つる。夫が可愛い不便にござる。武士の夫に連添へば義によつて命を捨つる。夫はまだも惜しからう子故には此體。一分だめしにためされても命はちつ共惜しうない。サアとめずとも死なしてくれと。氣をもみ身をもみ聲を上げ。子はか程にも思ふまいと スヱテかつぱと伏して泣居たる地景季は一心不亂母の慈悲心肝にしみ。我故御心を苦しむる。不孝の罪は子に報い此身は武運に盡果てむと。悔むを聞いて梅が枝。私が心も推量して下さりませ敵を討たでは不孝と成り討てば夫婦の緣が切るゝ。所詮此身を姉と夫へ引分け。死なうと思ひ フシ定めしと歎けば。お筆も涙ぐみ。今のお詞を聞くにつけ父の古主は鎌倉殿。詞それに背く木曾殿の御臺若君。妾が緣にてかくまひそれ故に討たれ給ふは古主の罰。不忠させしも自ら故。殊に番場が所爲と有れば。親子御共に敵でない。道を立て誠をつくす延壽樣に過させて好い物か。地此上の願には今迄の通り此妹御不便賴む源太樣。詞ヲヽ、聞分けてさへ下さるれば。梅が枝は嬉しや嬉しや。是で夫も安穩源太が望も叶ふといふは。一筋ならず二筋の此幹。フシ夫を狙ふ姉妹を此矢で射とめ命を助け。夫婦中よう添遂げて。梶原の家を再び興す此矢なれば。疎略には成し難し。詞先祖鎌倉の權五郎景政より。家の紋は三つ大の字に定まれども。今よりは二筋の此幹。梶原が家の定紋譽を世上に顯はせと。地義を立通す詞の張弓。梶原が矢筈の紋 フシ此時よりと知られけり。地源太は悅び早やお暇賜らんと。突立ち上ればヲヽ、それ〳〵。詞片時も早う出陣の用意々々と。地皆立寄つて鎧櫃武運も開くる產衣の鎧。直垂小手脚當上帶引締め梅が枝が。結ぶ妹脊の忍の緒。兜打物夫々に箙かき負ひ裝扮つたる。フシ骨柄ゆゝしく見えにける。地名殘惜しげに梅が枝も延壽樣のお詞で。夫婦の固めはたつた今。假へ此身は別るゝとも我が名は夫の陰身に添ひ。出陣の御供と

筒に生けたる紅梅を。一枝手折り箙にさせば。元來若武者にあひあふ若木の梅が枝が。互に無事でと目で知らせ。うなづく度にちる梅の。匂は袖に フシのこりける。地あつぱれ武者振類なやと。母は悦び兩手を上げ今度の軍に花も源太も我魁けん〳〵と。勝色見せて父の勘氣を赦されい。冥加盡きなば討死せよ。生きて歸るは不孝ぞと涙ながら敎訓の。慈愛の詞忝く。我も平家と戰はんに。花箙こそ能き敵と多勢が中に取込めなば。太刀眞向にかざしの花の。ちり〳〵ぱつと追散し向ふ者を拜打ち又。廻りあはゞ車切。蛛手かくなは十文字。鶴翼飛行の秘術を盡し譽を取り。其時母のお笑ひ顔見せうぞいさうれ早やお暇と。勇み勇んで手束弓。矢筈の紋と景季が文武は古今に香しく。花有り實有る武士と。語り傳へて其名をば箙の。梅と末の代に譽を。永く留めける。

第五

地源平互に攻戰ふ生田の大手を打敗らんと。梶原平三景時次男平次景高。無二無三に切つて入り敵數多切散し。太刀のほめきをさまさんと攻口少し引退き。フシ一息ついて立つたる所に。地後陣の方より番場忠太逸散にかけ來り。詞搦手の大將義經。平家の本陣須磨の城を攻めんと有つて。鐵拐が嶽鵯越一の谷の逆落し。手ばしかき謀知らせ申すと言はせも果てず父景時。ホヽよく知らせたり。軍にすばやき義經に。地高名させては一分立たず今一度敵陣へ切つて入り。此大手を打破り義經に鼻明かせん。氣をたるますな者共やつと下知の半へ。詞ノリ梶原が物見の細作敵陣より駈戻り。只今平家の城中を窺ふ所に。梶原やらぬ遁さぬと戰の眞最中。御父子の外に梶原と名乘る者の候や不審なりと注進す。平次景高眉を顰め。敵にもせよ。味方にもせよ。梶原が名字を名乘るは。我々親子の外にはない筈。鬼神も恐るゝ梶原の名字を盜み。地敵を威さん爲なるべし。何にもせよ憎い仕方。景高實否を糺さんと駈行くを暫しと止め。詞梶原と名乘るは外ならず兄の源太と覺ゆるなり。宇治川の耻を雪がん爲。やさしくも先がけせしな。地よし誰にもせよ其圖に乘つて此城郭を打破らん。續けや續けと逸散に城中さして 三重へ生田の森。地梶原源太景季平家の多勢と打戰ひ。今を盛の梅の大木 フシ小楯に取つて控ゆれは。地平家の軍兵菊池の一黨遁さじやらじと追取卷く。詞ヤア物々しや我には合はぬ敵なれど。地菊池と聞けば名にめでて。花に緣有る草と木の。生田の梅も箙の花もちりかゝつて フシ面白や。地八騎を相手に早咲の梅も源太もさきがけに。

勝色爰に未開紅。飛鳥の飛梅秘術を盡し。今日の軍の好文木と。切つて廻れば白梅變じて紅梅の。血汐流れて敵もひるまぬ鑓梅に甲も打落されて。大童の姿と成つて引くな引かじと春風に花を散らして〽戦ひける。景季は事ともせず百術千慮の手を砕き。袈裟切竪割腰車。切伏せ〳〵塞し恐れて寄付く敵もなし。汀の方より四五十騎眞砂を蹴立て駈け來る。すはや敵よと太刀取直し近付くを能く〳〵見れば。父の平三景時なり。源太は見るより大地に平伏し恐れ入つたる風情なり。さすが義強き景時も。久し振の我が子の顔。見る目の中に涙を浮め。やをれ景季汝が所存も母延壽が物語にて聞きたるが。武士の身に取つては忠孝の二つ。何れに愚はなけれども尤も重きは君命。そこを辨へざるは武士の若氣。勘當したるも汝が心を勵ます爲の母の慈悲。合點がいたか景季。今こそ父が實の子と。手を取つて引立て物の具の塵打拂へば。扨は源太が御勘當御赦免とや。言ふにや及ぶ汝が今日此城中に踏みとゞまり平家の多勢を切靡け菊池が一黨討取つたるは。宇治川の先陣に勝つたる高名。此勢ひに乘つて落行く平家を討ちとゞめん。いざ來い源太跡に續けや者どもと。親子主從勇みに勇み汀をさして追つて行く。梶原が二度のかけとは今此時と知られける。搦手の大將軍九郎判官義經公。一の谷の大敵を逆落しの一戰に攻破り。平家の一門或は討れ或は四國に落行けば。鎧の袖に勝色見せ軍の勞れを晴さんと。花に屯の名大將下知に靡かぬ草もなし。かゝる所へ畠山の次郎重忠。樋口の次郎を高手に縛め御前間近く引据ゆれば。跡に續いて梅が枝姉妹。權四郎若君をかき抱き。道々も申上ぐる通り。樋口殿をお助けある樣にお取なし。秩父樣のお情と鎧の袖に取付縋るを目もやらず御前に向ひ。仰に隨ひ樋口が罪科法皇の叡聞に達し候へば。主の爲に仇を報ぜんと計る忠臣の心。強ち罪科とも言ひ難しさりながら。勇者は勇者の法に任せとも角も。義經が心の儘に計ふべしとの院宣故。重ねて召具し候と申上ぐればさればにこそ。恐れながら法皇の叡慮。我が思ふ所恰も符合を合せたる如し。今彼を罪科せば。此後主君の爲に仇を報ぜんと思ふ忠臣の道絶果て。弓矢の道を失ふ道理。樋口が命は助くべし。早や繩解けと宣へば。イヤなら義經殿。いはれぬ弓矢の道を言立て我を助け。豫て仲好からぬと聞く。梶原などが讒言に遵ひ鎌倉殿と仲違うて。後悔ばしし給ふな。よつく分別せられよと死を顧ぬ志。義經打笑はせ給ひ。天下の政は小鮮を

煮るが如し。梶原づれが讒言を聞入れ。義經と仲違ふ鎌倉殿ならば。夫こそ日本弓矢の破滅。地助けよといはぬばかりの法皇の院宣。殊更義仲内甲に残されし。謀叛ならぬ最期の一通明かなれば。詞汝にかゝる科はなしいよ／＼命助けるぞ。殊に汝が子ならぬ子の槌松十五歳に成る迄權四郎とやらん随分勞り守育てよ。地鎌倉表は此義經が動功に代へても宜しく事を計ふべしと。始め番ひし秩父の詞未然に察する名將の。恩義に繩も打解けてお筆姉妹樋口が悦び。權四郎有がた涙若君抱きいそ／＼とフシ福島さして立歸る。地梶原平三景時親子三人。番場の忠太を引具し後れ馳にかけ付け。詞扨こそ樋口が繩解かれしな。勇士は勇士の計ひにせよとの院宣。私に繩を解かれしは鎌倉殿を踏付ける仕方。但しは我が身を勇者と高ぶつての所業か。大将顔を振舞うての所業ならば。此景時も侍大將なぜ談合は召されぬ。地忠太よつて樋口次郎に繩かけよと言はせも立てず義經公大きに面色變らせ給ひ。詞樋口を助け誤りならば義經が腹切る迄の事。一度ならず二度ならず地過言の振舞赦されずと太刀に御手をかけ給へば。景時も膝立直し。詞御邊が首に景時が太刀は立たぬものか。サア抜れよ相手にならんと詰寄すれば。地秩父は君を押留ふ。父は源太が押隔て秩父殿御前のお執成し。詞言ふにや及ぶ大事を前に置きながら爭ひは善惡共に皆非なり。詞景時を引立てられよ。地承ると無二無三連れて フシ御前を立ちにける。地此體を見て平次景高。詞エヽなまぬるい兄の采配。親父の代りに相手に成る。サア義經殿と詰寄る所を。地樋口すかさず飛びかゝり。景時が衿かい摑み引つかついでどうど投付くれば。是はと立寄る番場の忠太首筋摑んで動かさず。詞コレ／＼姉妹父隼人を討つたるは此奴と聞く。親の敵今討てと力に任せ打付くれば。地兄弟嬉しさ飛立つばかり。親の敵覺えたか／＼と起しも立てず。寸々に切つたかでかした／＼。詞此奴はおれがさいなまんと胴骨踏へて首ふつつと捻切り。鎌倉殿の寵臣梶原が悴を我手にかけ。生害遂ぐる上からは我を助け賜ひし。義經の御身に後難もなく地誰々に難儀も懸らず。返す／＼血を分けぬ悴が事。義經公重忠の御憐愍頼み奉ると。言ふより早く太刀取直し我と我が首えい／＼と掻き落す フシ忠義の最期ぞ潔き。地各勇士の心を感じ諸卒を從へ御凱陣。平家の大敵悉く八島の外へ切靡け。目出たき春に咲榮え。勝色見する箙の梅。源氏は益逆榊の松。榮えは千年の若綠。竹の齢は萬々歳神と君との道直に治る御代こそ目出たけれ。

元文四己未歳

四月十一日

作者連名

文耕堂

三好松洛

深田可啓

竹田小出雲

千前軒

昭和二年十二月五日印刷
昭和二年十二月八日發行

日本名著全集
第一期出版
江戸文藝之部
第六卷
淨瑠璃名作集上
（非賣品）

編輯兼發行者
印刷者
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
代表者 石川寅吉

發行所
東京市日本橋區馬喰町二丁目一番地
日本名著全集刊行會
電話浪花一八四〇番一八四一番
振替東京一八四四四番

日本名著全集 第一期出版

「江戸文藝之部」全廿七巻及追加篇二巻 書目豫定一覧

（但し種々の事情により多少の變更あるべし。）

第一巻 第二巻 西鶴名作集 上 下

○好色一代男 ○好色二代男 ○好色三代男 ○好色一代女 ○好色五人女 ○男色大鑑 ○武道傳來記 ○武家義理物語 ○新可笑記 ○西鶴諸國咄 ○懐硯 ○近代艶隱者 ○日本永代藏 ○世間胸算用 ○織留 ○本朝二十不孝 ○本朝櫻陰比事 ○西鶴置土産 ○萬の文反古 ○名殘の友 ○俗つれづれ ○一目玉鉾

第三巻 芭蕉全集

正篇 ○蕉翁一代の句集 ○連句集 ○文集 ○句評 ○紀行 ○消息 ○遺語

外篇 ○冬の日 ○春の日 ○初懐紙 ○曠野 ○ひさご ○猿蓑 ○深川集 ○炭俵 ○別座敷 ○續猿蓑

附錄 ○枯尾花 ○芭蕉翁行狀記 ○芭蕉翁繪詞傳

第四巻 第五巻 近松名作集 上 下

○花山院后諍 ○世繼曾我 ○賢女手習并新暦 ○門出八島 ○凱陣八島 ○源氏烏帽子折 ○出世景淸 ○團扇曾我 ○蟬丸 ○最明寺殿百人上﨟 ○曾根崎心中 ○薩摩歌 ○雪女五枚羽子板 ○用明天皇職人鑑 ○心中二枚繪草紙 ○兼好法師物見車 ○碁盤太平記 ○卯月紅葉 ○堀河浪鼓 ○卯月の潤色 ○心中重井筒 ○傾城反魂香 ○心中萬年草 ○丹波與作待夜の小室節 ○淀鯉出世瀧德 ○五十年忌歌念佛 ○栬狩劍本地 ○今宮の心中 ○百合若大臣野守鏡 ○心中刃は氷の朔日 ○夕霧阿波鳴渡 ○吉野都女楠 ○嫗山姥 ○長町女腹切 ○冥途の飛脚 ○大經師昔暦 ○生玉心中 ○國性爺合戰 ○槍の權三重帷子 ○山崎與次兵衛壽の門松 ○曾我會稽山 ○傾城酒呑童子 ○博多小女郎波枕 ○雙生隅田川

○心中天網島 ○津國女夫池 ○女殺油地獄 ○信州川中島合戰 ○心中宵庚申 ○關八州繫馬

第六巻 第七巻 淨瑠璃名作集 上 下

○雪女 ○本海道虎石 ○心中涙の玉井 ○金屋金五郎浮名額 ○金屋金五郎後日雛形 ○椀久末松山 ○お染久松袂の白しぼり ○八百屋お七 ○笠屋三勝廿五年忌 ○心中二つ腹帶 ○傾城思升屋 ○愛護若塒箱 ○富仁親王嵯峨錦 ○鬼鹿毛無佐志鐙 ○大塔宮曦鎧 ○須磨都源平躑躅 ○壇浦兜軍記 ○蘆屋道滿大内鑑 ○苅萱桑門筑紫轢 ○敵討襤褸錦 ○御所櫻堀川夜討 ○釜淵雙級巴 ○ひらがな盛衰記 ○鶊山姫捨松 ○夏祭浪花鑑 ○菅原傳授手習鑑 ○義經千本櫻 ○假名手本忠臣藏 ○双蝶々曲輪日記 ○一谷嫩軍記 ○本朝廿四孝 ○奥州安達原 ○關取千兩幟 ○近江源氏先陣館 ○神靈矢口渡 ○妹背山婦女庭訓 ○攝州合邦辻 ○新版歌祭文 ○伊賀越道中雙六 ○近頃河原達引 ○絲櫻本町育 ○繪本太閤記

第八巻 歌舞伎脚本集

○參會名護屋 ○兵根元曾我 ○源平雷傳記 ○百夜小町 ○傾城淺間嶽 ○成田山分身不動 ○中將姫京雛 ○丹波與作手綱帶 ○傾城壬生大念佛 ○鳥邊山心中 ○嫗髮歌仙櫻 ○心中鬼門角 ○伊勢音頭戀寢刃 ○漢人漢文手管始 ○五大力戀緘 ○金門五三桐 ○四谷怪談 ○與話情浮名橫櫛

第九巻 浮世草子集

○傾城色三味線 ○傾城曲三味線 ○傾城歌三味線 ○世間息子氣質 ○浮世親仁氣質 ○世間娘氣質 ○咲分五人娘 ○傾城禁短氣 ○商人軍配團 ○棠大門屋敷 ○鎌倉諸藝袖日記 ○日本新永代藏 ○御前義經記 ○好色萬金丹

第十巻 怪談名作集

○伽婢子 ○狗張子 ○怪談全書 ○英草紙 ○繁野話 ○雨月物語 ○唐錦 ○莠句冊 ○垣根草 ○漫遊記

第十一巻 黃表紙廿五種

○金々先生榮花夢 ○親敵打腹鼓 ○長生見度記 ○啌多雁取帳 ○狂言好野暮大名 ○大悲千祿本 ○江戸生艶氣樺燒 ○莫切自根金生木 ○文武二道

万石通　○孔子縞于時藍染　○心學早染草　○卽席
耳學問　○廬生夢魂其前日　○馬鹿長命子氣物語
○世上酒落見繪圖　○桃太郎發端話說　○十四傾城
腹之内　○金々先生造化夢　○忠臣藏前世幕無　○
世諺口紺屋雛形　○稗史億說年代記　○御誂染長壽
小紋　○的中地本問屋　○人間萬事吹矢的　○人間
萬事吹矢的（草稿）

第十二巻　酒落本集

○傾城買四十八手　○契情買虎の巻　○嫖客三體誌
○娼妓絹篩　○遊子方言　○月花餘情　○百花評林
○大抵御覽　○異素六帖　○廓中奇譚　○辰巳の園
○和唐珍解　○通言總籬　○辰巳婦言　○令子洞房
○寸南破良意　○仕懸文庫　○猫射羅子　○道中酔
語録　○聖遊廓　○錦の裏　○三教色　○契國策
○眞女意題　○甲驛夜の錦　○田舍芝居　○婦美車紫
鹿子　○起承轉合　○粹町甲閨　○古契三娼　○滸都
酒美撰　○夜半の茶漬　○志羅川夜船　○穴學問
○狂訓彙軌本紀　○娼妃地理記　○遊僊窟煙の巻
○女郎買糟味噌汁　○美地の蠣殼

第十三巻　讀本集

○櫻姫全傳曙草紙　○昔話稲妻表紙　○本朝酔菩提
○三七全傳南柯夢　○占夢南柯後記　○天羽衣　○
飛騨匠物語

第十四巻　滑稽本集

○風流志道軒傳○古朽木○阿多福假面○指面草○人
遠茶懸物○無彈砂子○小紋雅話○奇妙圖彙○浮世風
呂○早變胸機關○客者評判記○浮世床○人間萬事虛
誕計○同上後篇○假名手本藏意抄○一盃綺言○古今
百馬鹿○八笑人○七偏人○柳巷訛言○市川評判圖會
室の梅○福來雀○一雅話三笑○言葉の花○鯛の味噌津

第十五巻　人情本集

○春色梅曆　○春色辰巳園　○春色惠之花　○英對
暖語　○梅見船　○閑情末摘花　○假名文章娘節用
○八萬鐘

第十六巻　第十七巻　第十八巻　南總里見八犬傳　上中下

第十九巻　狂文狂歌集

○古今夷曲集　○萬載狂歌集　○萬代狂歌集　○四
方のあか　○四方の留糟　○千紫萬紅　○萬紫千紅
○めでた百首　○かくれ里の記　○（石川雅望の作
では）狂文あづまなまり　○吉原十二時　○（風來山
人のものでは）風來山人六々部集（前篇）　○風來山
人六々部集（後篇）　○風流志道軒　○（手柄岡持の
ものでは）我おもしろ

第廿巻　第廿一巻　偐紫田舍源氏　上下

第廿二巻 第廿三巻 膝栗毛其他 上下

○東海道中膝栗毛 ○續膝栗毛 ○續々膝栗毛 ○南總記行旅眼石 ○江戸前噺鰻 ○落咄彌次郎口

第廿四巻 第廿五巻 和文和歌集 上下

○眞淵歌文集 ○蘆庵六帖詠草 ○桂園一枝（景樹） ○うけらが花（千蔭） ○琴後集（春海） ○宗武歌集 ○曙覽歌集 ○藤簍冊子（秋成） ○言道歌集 ○良寛歌集 ○女流歌文集

第廿六巻 川柳雜俳集

○武玉川十八篇 ○柳多留三十一篇 ○誹風柳多留拾遺十篇 ○川傍柳五篇

第廿七巻 俳文俳句集

○五元集（其角） ○五元集拾遺（同） ○五元集脫漏（同） ○雜談集（同） ○類柑子（同） ○玄峰集（嵐雪） ○其袋（同） ○去來丈草發句集 ○ひとりごと（鬼貫） ○鬼貫句選（鬼貫） ○七車（同） ○とくとくの句合（素堂） ○韻塞（許六） ○風俗文選（同） ○葛の松野（支考） ○笈日記（同） ○雅文消息（許六・野坡） ○蛙合（仙化） ○俳諧職人盡（蓼和） ○鶉衣（也有） ○蕪村句集（蕪村） ○蕪村文集（同） ○新花摘（蕪村） ○寫經社集（同） ○十番左右句合（同） ○明鴉（几董） ○續明鴉（同） ○新雜談集（同） ○井華集（同） ○太祇句集（太祇） ○春泥句集（春泥） ○三春日記（蓼太） ○芙蓉文集（耳得） ○白雄句集（白雄） ○骨書（樗良） ○俳ざんげ（大江丸） ○はいかい袋（同） ○曉臺句集（曉臺） ○佐渡日記（同） ○おらが春（一茶） ○一茶句集（同） ○鼠の道行（成美） ○成美家集（同） ○蔦眼集（道彥） ○鶴芝（士朗） ○斧の柄（乙二） ○續繪歌仙（宜麥） ○屠龍の技（抱一）

追加篇 第廿八巻 歌謠音曲集

○義太夫（近松名作集及淨瑠璃名作集と重複するものは之に採らず。）

○傾城阿波の鳴門（八つ目・順禮の段） ○艷容女舞衣（下の巻・酒屋の段） ○戀娘昔八丈（下の巻・鈴ケ森の段） ○桂川連理柵（下の巻・帶屋の段） ○廓文章（吉田屋の段） ○傾城戀飛脚（下の巻・新口村の段） ○碁太平記白石噺（七つ目・揚屋の段） ○花上野譽の石碑（四つ目・志渡寺の段） ○木下蔭狹間合戰（七つ目竹中陣屋の段） ○蝶花形名歌島臺（八の切・小坂部館の段） ○三十三間堂棟由來（平太郎住家の段） ○玉藻前曦袂（三の切・道春館の段） ○八陣守護城（八の切・正淸本城の段） ○生寫朝顏日記（宿屋の段） ○壺坂靈驗記（澤市内の段） ○近江源氏先陣館（八つ目切・小四郎切腹の段） ○

鎌倉三代記（七の切・三浦別れの段）○加々見山舊錦繪（六の切・草履打の段）○太平記忠臣講釋（七つ目・喜内住家の段）○祇園祭禮信仰記（四の切碁立の段）

○河東節

○松の内 ○神樂獅子 ○隅田川舟の内 ○禿萬歳 ○灸すゑ殿の疊夜着 ○酒中花 ○水調子 ○うかぶ瀬 ○ぬれ扇 ○亂髪夜編笠 ○助六所縁江戸櫻 ○常陸帶花桐 ○道成寺 ○浄瑠璃供養 ○邯鄲 ○熊野 ○泰平住吉踊 ○浮世傀儡師（外記物）○小鍛冶名劍卷（半大夫物）

○一中節

○辰巳の四季 ○松づくし ○泰平船づくし ○高砂松の段 ○神樂高砂 ○還繪の島臺 ○萬屋助六心中 ○自然居士過去物語 ○源氏妹が宿 ○夕霞淺間嶽 ○尾上雲賤機帶 ○源氏十二段 ○頼光大江山入 ○鉢の木 ○與作小萬夢路の駒 ○道行三度笠 ○鵜飼石和川 ○お夏笠物狂 ○競牡丹 ○源平妹脊の鷄合

○常磐津節

○老松 ○子寶三番叟 ○蜘蛛絲梓弦（仙臺浄瑠璃）○積戀雪關扉（關の戸）○四天王大江山入（古山姥）○雨顏月姿繪（葱賣）○戻駕色相肩（戻駕）○帶文桂川水（お半）○倭假名色七文字（源太）○壽靱猿 ○松色操高砂（太神樂）○再夕暮雨の鉢木（雨の鉢木）○寄罠娼釣髭（釣狐）○後之月酒宴島臺（角兵衛獅子）○恩愛瞳關守（宗清）○願絲縁苧環（おみわ）○忍寄戀曲者（將門）○花舞臺霞猿曳（新らつぼ）○新負雪間の市川（新山姥）○乘合船惠方萬歳（乘合船）○其扇屋浮名戀風（夕霧）○景清 勢獅子劇花籠（勢獅子）○釣女 ○戻り橋 ○三保の松 ○松の島 ○三世相錦繡文章（おその六三）○大森彦七

○富本節

○年朝嘉例壽（長生）○四十八手戀所譯（相撲をし島）○百夜菊色の世中（開寺）○夫婦酒替ぬ中仲（鞍馬獅子）○其俤淺間嶽（淺間）○道行戀飛脚（梅川忠兵衛）○[illegible]連理橋（蟲賣）○新曲高尾懺悔（高尾懺悔）○花川戸身替の段（身替お俊）○春夜障子梅（夕霧）○新曲かぐら獅子（神樂獅子）○徒髪戀曲物（松風）○茂懺悔睦言（扇賣高尾）○道行念玉蔓（長作）○幾菊蝶初音道行（忠信）○拙筆力七以呂波（乙姫）○草枕露の玉歌和（玉川）○奈須野 ○御代榮益穗富種（豐の前）○高砂女夫

○清元節

○梅の春 ○榮能春延壽（長生）○北州千歳壽（北州）○四季三葉草 ○其小唄夢廓（權八）○絲の五月雨（小菊半兵衛）○深山櫻及兼樹振（保名）○御名殘押繪交張（鳥羽繪）○月雪花名殘文臺（玉兎）○詠梅松濤元（茶筅賣）○色山解深川（待人）○大和い手向五字（子守）○色彩間刈豆（かさね）○法

花姿色同（山歸り）○月花妓友鳥（山姥）○筐花手向橋（吉原雀）○復新三組盞（大山參り）○道行浮堺鴎○道行旅路の嫁入（八段目・おかげ參り）○六歌仙容彩（文屋・喜撰）○彌生の花淺草祭（惡玉）○おどけ俄煮珠取（玉屋）○道行旅路の花聟（落人）○再春菘種蒔（舌出し三番）○初霞淺間嶽（淺間）○〆能色相圖（神田祭）○造鈍菊睦言（菊畑三菊）○菊嬉閨睦言（お岩）○倭假名色七文字（手古舞）○重褄閨の小夜衣（白絲）○明烏花濡衣（浦里）○梅柳中宵月（清心）○日月星晝夜の織分（夜這星）○初櫓噂高島（三人三吉）○貸浴衣汗雷（夕立）○忍逢春雪解（三千歳）○色増艶夕映（雁金）○花雲助相肩（雲助）○青海波○助六曲輪菊（助六）

○新　内　節

○二重衣戀占（花咲綱五郎）○若木仇名草（蘭蝶）○千日寺名殘鐘（三勝半七）○眞夢血染抱柏（花菖平三）○歸咲名殘の命毛（尾上伊太八）○傾城音羽瀧（おとは七郎兵衛）○膝栗毛「赤坂の段」○膝栗毛「市子の段」○明烏夢泡雪（浦里）○明烏後眞夢○累身賣の段

○薗　八　節

○道行相合巨燵（梅川）○桂川戀の柵（お半）○鳥邊山○花街の色糸（植木屋）○道行菜種の亂咲○江戸の繪姿（おひな吉三郎）○道行綠花房（お花半七）○口舌八景（小いな半兵衛）○小春治兵衛巨燵の段○夕霧

○江戸長唄（めりやす大薩摩を含む）

○矢の根五郎○無間の鐘○傾城道成寺○風流相生獅子（相生獅子）○二人椀久○英獅子亂曲（枕獅子）○百千鳥娘道成寺（さなきだ道成寺）○高尾さんげの段（高尾懺悔）○天人羽衣○京鹿子娘道成寺（娘道成寺）○英執着獅子（執着獅子）○風流妹脊の杜建（杜建）○門出京人形（水仙丹前）○亂菊枕慈童（菊慈童）○鐘入解脫衣（解說）○劍烏帽子照葉盞（劍烏帽子）○柳雛諸鳥囀（鷺娘うしろ面）○初咲法樂舞（法樂舞）○ねこのつま○乘掛情の夏小立（與作）○鞭櫻宇佐幣○百夜車○姿の鏡關寺小町（關寺）○春調娘七種（七種）○童子戯面被（めんかぶり）○衣かづき思破車（やれ車）○童獅子○致草吉原雀（吉原雀）○相生獅子○嫐染分紅葉（うはなり）○陞取安宅松（安宅）○御代松子日初戀（小松曳）○其容形七枚起請（こもそう○關東小六後雛形（淡島）○其面形二人椀久○黒かみ○女夫松高砂丹前（高砂丹前）○菊壽の草摺○勢五大力○吹雪の雛形（雛形狂亂）○三重霞嬉敷顔鳥（三重霞傀儡師）○舞扇薗生梅（舞扇）○濱松風戀歌（濱松風）○ゆかりの月○美面より○七枚續花の姿繪（汐汲・猿廻し・老女）○遲櫻手爾葉七字（花かり初め傾城・越後獅子・橋辨慶・相撲蜑）○戀男調松風（調松風）○再春菘種蒔（舌出し三番叟）○戀罠奇掛合（犬神）○四季詠寄三大字（門傾城・鹿島踊）○閏茲姿八景（節季候・心猿・晒女）○正札附根元草摺（正札附）○寄三津再十二支（小原女・乙姫・四つ竹）○其九繪彩四季櫻（丁稚・天下るの傾城）○

新獅子　○三升猿曲舞（猿舞）　○石橋（外記の石橋）　○老松　○不動　○七所御攝初鐵漿（西王母・藪入娘）　○大和い手向五字（官女・牛若）　○外記猿　○復新三組盞（初雁の傾城）　○廓三番叟（廓三番）　○歌へすぐ〳〵餘大津畫（藤娘・關三の座頭・關三の奴）　○月雪花蒔繪の巵（月の巻）　○拙筆力七以呂波（芝翫の傾城・供奴・浦島・瓢箪鯰）　○八重霞賤機帶（賤機）　○後の月酒宴島臺（角兵衛獅子）　○御歳玉海老手遊（とんび奴）　○吾妻八けい（八景）　○六歌仙容彩（業平小町）　○姿花後雛形（小鍛冶）　○初子日　○俄獅子　○外記の傀儡獅　○初しぐれ　○巽八景　○花翫暦色所八景（助六・景清・新鷺娘）　○勸進帳　○花兄弟十二月所作（若菜摘・鍾馗・雷）　○島臺　○軒端松　○士農工商　○秋色種　○雛鶴三番叟　○花見車　○手習子・　○織どの　○常磐庭　○鶴龜　○五色の絲　○今様小鍛冶　○柳糸引御攝（裸三番叟）　○壽　○鞍馬山　○翁千歳三番叟　○廓丹前　○菖蒲ゆかた　○喜三之庭　○紀州道成寺　○連獅子　○時雨西行

○歌　澤

寅派、芝派の歌詞を全部收める。

○小唄・端唄・雜曲集

江戸時代から唄はれて今日に尙唄はれてゐる雜曲三百餘を收む。

追加篇 第廿九巻 謠曲三百番集

○脇能物

○高砂　○弓八幡　○志賀　○淡路　○御裳濯　○代主　○佐保山　○松尾　○養老　○老松　○白樂天　○放生川　○鶴龜　○東方朔　○白髭　○大社　○寢覺　○源太夫　○道明寺　○難波　○鵜祭　○輪藏　○富士山　○江島　○賀茂　○嵐山　○氷室　○逆矛　○要石　○和布刈　○竹生島　○九世戸　○岩船　○金札　○吳服　○西王母　○右近　○繪馬　○鱗形　○玉井　○內外詣

○修羅物

○田村　○八島　○箙　○忠度　○俊成忠度　○經政　○通盛　○兼平　○賴政　○實盛　○巴　○清經　○朝長　○敦盛　○生田敦盛

○三番目物

○野宮　○井筒　○芭蕉　○采女　○東北　○梅　○佛原　○墨染櫻　○身延　○半蔀　○夕顏　○定家　○江口　○楊貴妃　○雪　○二人靜　○千手　○六浦　○藤　○杜若　○羽衣　○誓願寺　○小鹽　○雲林院　○遊行柳　○西行櫻　○陀羅尼落葉　○源氏供養　○大原御幸　○吉野靜　○住吉詣　○松風　○熊野　○草紙洗小町　○山姬　○祇王　○胡蝶　○吉野天人　○鷺　○葛城　○龍田　○三輪　○卷絹　○檜垣　○關寺小町　○鸚鵡小町　○姨捨

○四番目物

○三井寺　○櫻川　○柏崎　○百萬　○飛鳥川

○雲雀山○隅田川○蝉丸○花筐○班女○加茂物狂○水無月祓○籠太鼓○富士太鼓○梅枝○玉葛○浮舟○三山○卒都婆小町○碪(砧)○求塚○水無瀬○藍染川○竹雪○鳥追舟○籠祇王○室君○初雪○花車○女郎花○戀松原○善知鳥○阿漕○藤戶○松虫○錦木○船橋○綾鼓○戀重荷○雨月○鐵輪○葵上○道成寺○木賊○景清○弱法師○俊寬○攝待○鉢木○土車○高野物狂○芦刈○盛久○春榮○小督○七騎落○仲光○切兼曾我○安宅○木曾○元服曾我○小袖曾我○重盛○楠露○櫻井○正行○藤榮○放下僧○花月○自然居士○東岸居士○歌占○蟻通○三笑○唐船○邯鄲○枕士童○菊士童○天鼓○咸陽宮○大佛供養○夜討曾我○橋辨慶○湛海○忠信○錦戶○禪師曾我○關原與市○現在巴○正尊○草薙○泰山府君○現在七面○調伏曾我○望月

○五番目物

○鵜飼○野守○鍾馗○昭君○松山鏡○壇風○烏帽子折○熊坂○鞍馬天狗○車僧○善界○大會○第六天○葛城天狗○殺生石○小鍛冶○鵺○舍利○谷行○雷電○國栖○春日龍神○大蛇○龍虎○愛宕空也○飛雲○現在鵺○大江山○土蜘蛛○羅生門○安達原○紅葉狩○船辨慶○山姥○項羽○碇潜○一角仙人○張良○皇帝○融○須磨源氏○絃上○海士(人)○當麻○來殿○松山天狗

○石橋○合甫○猩々○大瓶猩々○翁○大典闕曲曲舞獨吟○護法○豐干○千引○常陸帶○空蝉○鶏龍田○阿古屋松○紫式部○鷺○松浦物狂○鵜羽○布留○丹後物狂○牽牛花○十番切○笠卒都婆○隱岐院○明智討○紫田○北條○吉野詣○高野詣○池貧○鞠○碁
其他

以上日本名著全集、第一期出版「江戶文藝之部」全廿七卷及追加篇二冊は、第十一卷黃表紙廿五種を第一回配本として毎月一冊乃至二冊宛を刊行するもので、豫約申込は、大正十五年六月十六日を以て一旦締切りましたが、會員數の增大に件ふ多量製產の利得を以て、益ゝいゝ本を作らんがため、その後も、また現在も、おそらく當分は將來も、會員の御紹介による新入會員の申込を歡迎致します。

○豫約會員外には頒たず、分賣の需めに應じ得ぬこと、また申すまでもなし。

○會費は一冊あて一圓六十錢。外に申込金一圓を申受ける。但しこれは豫約權ともいふべきもので毎月の會費とは別。從って一時拂の會員でも、二回拂の會員でも同樣に申受く。

○送本料は、會費の外に一冊あて金十二錢を要す。

(終)



